学部・研究科等の現況調査表

教　育

平成２８年６月

福井大学

目　　次

１．教育地域科学部	１－１
２．教育学研究科	２－１
３．教職開発専攻	３－１
４．医学部	４－１
５．医学系研究科	５－１
６．工学部	６－１
７．工学研究科	７－１

１．教育地域科学部

Ⅰ　教育地域科学部の教育目的と特徴　・・・１－２

Ⅱ　「教育の水準」の分析・判定　・・・・・１－４

分析項目Ⅰ　教育活動の状況　・・・・・１－４

分析項目Ⅱ　教育成果の状況　・・・・・１－78

Ⅲ　「質の向上度」の分析　・・・・・・・・・１－109

Ⅰ　教育地域科学部の教育目的と特徴

１.教育目的

（１）教育活動を実施する上での基本方針

教育地域科学部は学校教育課程と地域科学課程から成り，実践的力量のある学校教員の養成，地域の創造と発展に貢献できる人材の養成を目的とし，教育科学や地域科学の学際的総合的な研究成果によって広く社会の発展に寄与することを使命としている。

（２）達成しようとする基本的な成果

① 学校教育課程の目的は，「子供たちの探究心，思考力及び創造性を育み，地域と連携した教育環境を組織できる教員の養成」にある。この目的を達成するために，「教員養成スタンダード」を定めそれに基づく系統的な教育課程と指導体制のもとで教育活動を行う。学校教育課程では３つの「実践コア科目」として，教育実践研究 A（各教科・道徳の授業づくりに関わる実習科目），教育実践研究 B（総合学習・特別活動・組織学習に関わる実習科目），教育実践研究 C（生徒指導・教育相談に関わる実習科目）を設け，協働で実践する力の育成を図る。その上で，教科や学校種ごとに求められる専門的な知識・技能・指導力を，教職科目・教科専門科目によって涵養する。

② 地域科学課程の目的は，「地域社会の持続的な発展，地域文化の創造，共生と自治の実現に資する人材の養成」にある。これらの資質・能力を備えた人材を育成するために，地域政策領域に関わる専門領域（地域分析系・公共政策系・環境マネジメント系）と人間文化領域に関わる専門領域（生涯学習系・国際文化系・言語コミュニケーション系）を設けた。各領域・系では，コア科目の地域課題ワークショップ科目，スキルアップ科目を通して，地域社会のあらゆる分野で必要とされる協働による課題探究・解決能力，コミュニケーション能力，プレゼンテーション能力など実践的なスキルを涵養する。

（３）大学の基本的な目標との関連

① 福井大学の理念のうち，「地域，国及び国際社会に貢献し得る人材の育成と，独創的でかつ地域の特色に鑑みた教育科学研究」に関連している。

② 福井大学の長期目標のうち，長期目標１「21 世紀のグローバル社会において，高度専門職業人として活躍できる優れた人材を育成」，及び長期目標３「優れた教育，研究，医療を通して地域発展をリードし，豊かな社会づくりに貢献」に関連している。

（４）教育研究等の質の向上に関する目標との関連

①中期目標（教育の実施体制等に関する目標）の「質の高い教育を実現するため，教育内容・方法や成果を点検・評価するシステムを構築し，不断に改善を行う教育実施体制整備する。」と関連している。

②中期目標（学生への支援に関する目標）の「社会を主体的・能動的に担っていく人間の形成を目指して，学生の成長を積極的に促す学習支援，生活支援，就職支援を行う大学づくりを進める」と関連している。

２.組織の特徴や特色

教育地域科学部は，教員養成学部として，学校教育をめぐる今日的課題に対応した実践力や教科指導力を身に付け，子供の成長・発達を支えることのできる教員の養成を柱の一つとしている。また，実践的教師教育をはじめとして，福井の高い水準にある学校教育を支える役割を果たしている。県教育委員会との連携も密であり，「教員養成スタンダード」も教育委員会との協議を重ねて策定された。

一方地域科学課程では，地域文化の創造，多様な人々の共生，産業の活性化や自治体行政のレベルアップなど，これからの地域社会が抱える諸課題を分析し，解決の方向を見出すとともに，みずから地域の人たちと力をあわせて解決に取り組む能力と専門知識

を備えた人材の養成を目的とし，課題解決型の実践的教育を行ってきた。地域科学課程卒業者の就職率はほぼ100%であり，75%程度が福井県内の企業，団体，自治体に就職している。なお，平成 28 年度より地域科学課程をベースにした国際地域学部が設置され，よりグローバル化に対応した人材育成が行われる。

３.入学者の状況

入学者選抜方法は，一般選抜と特別選抜（AO，推薦，私費外国人留学生特別選抜）が実施されている。入学定員は学校教育課程 100 人，地域科学課程が 60 人である。平成 23 年度から平成 27 年度入試における教育地域科学部の志願倍率は 3.6～4.1 倍であり，入学定員充足率は 1.05～1.02 倍となっている。

入学者に占める福井県出身者の割合は 81%～88%であり，依然として地元志向の入学者が多い傾向にある。福井県外からの入学者は東海地区出身が主である。

[想定する関係者とその期待]

- **福井県**：若者の県外流出を防ぐために県内企業への就職を促進するよう期待している。
- **県内企業**：熱意・意欲を持ち，コミュニケーション能力と実行力をもつ人材の育成に期待している。
- **在学生・受験生及びその家族**：出身地域に就職し，優れた教員，公務員，企業人として活躍できる能力等を涵養してくれることを期待している。
- **学校関係者，教育委員会**：高い専門性と実践力を備えた教員を養成するとともに，教員研修機能を強化することを期待している。
- **卒業生**：大学が，学校・行政・企業と密接な連携・協力関係を維持することを期待している。

Ⅱ　「教育の水準」の分析・判定

分析項目Ⅰ　教育活動の状況

観点　教育実施体制

(観点に係る状況)

●教員組織編成や教育体制の工夫とその効果

【基本的組織の運営】

①　学校教育課程は各教科に対応した５コース（９サブコース）と発達科学系の３コースから成る。また，地域科学課程は地域政策領域と人間文化領域から成る。学生現員は入学定員の 1.05 倍であり，充足率は適切である（**資料 1-1-1**）。

資料 1-1-1　学生定員と充足率

課程・コース等			入学定員	実入学者数	直近５年間の平均入学定員充足率（平成 23～27 年度）
学校教育課程	言語教育コース		20	19	0.99
	理数教育コース		20	20	1.01
	芸術保健・体育教育コース	音楽教育サブコース	5	6	1.16
		美術教育サブコース	5	5	1.12
		保健体育サブコース	5	6	1.20
	生活科学教育コース		10	11	1.08
	社会系教育コース		10	11	1.08
	教育実践科学コース		7	8	1.14
	臨床教育科学コース		8	9	1.09
	障害児教育コース		10	11	1.10
地域科学課程 地域政策領域（地域分析系，公共政策系，環境マネジメント系）・人間文化領域（生涯学習系，国際文化系，言語コミュニケーション系）			60	60	1.03
計			160	166	1.05

（事務局資料）

②　教育目的の達成のため，学部の組織体制と人事計画は「学部及び研究科企画委員会」及び「運営組織専門委員会」において随時検討・整備されている（**資料 1-1-2，3**）。

資料 1-1-2　企画委員会要項（抜粋）

福井大学教育地域科学部及び大学院教育学研究科企画委員会要項

（設置）

第１条　教育地域科学部及び大学院教育学研究科に，福井大学教育地域科学部及び大学院教育学研究科企画委員会（以下「委員会」という。）を置く。

（目的）

第２条　委員会は，学部及び研究科の企画・運営に関し，次の各号に掲げる事項を審議する。

（１）大学及び学部の中期目標・中期計画及び年度計画の検討及びその運営方針に関する事項

（２）学部及び研究科の将来構想の検討及びその運営方針に関する事項

（３）学部の施設利用に関する事項

（４）その他学部及び大学院の企画・運営の基本に関する事項

（組織）

第３条　委員会は，次の各号に掲げる委員をもって組織する。

（１）学部長

（２）副学部長　　４名

（３）学部選出の評議員　　３名

（４）教育学研究科教職開発専攻長

（５）附属教育実践総合センター長
（６）教育地域科学部教務学生委員会委員長
（７）教育地域科学部学校教育課程委員会委員長
（８）教育地域科学部地域科学課程委員会委員長
（９）教授会選出の教授　２名
（10）教授会選出の准教授又は講師　２名
（11）前各号に掲げる者以外の教育地域科学部の教員　若干名
２　前項第 11 号の委員は，学部長が指名する。

※ 第２期中期目標期間（以下「第２期」という）中に企画委員会で新学部構想が検討され，平成 28 年度の国際地域学部の設置に繋がった。

（「福井大学教育地域科学部及び大学院教育学研究科企画委員会要項」より抜粋）

資料 1-1-3　運営組織専門委員会要項（抜粋）

福井大学教育地域科学部及び大学院教育学研究科運営組織専門委員会要項

（設置）
第１　福井大学教育地域科学部及び大学院教育学研究科企画委員会の下に，運営組織専門委員会を置く。
（所掌事項）
第２　委員会は，次に掲げる事項について審議する。
（１）教育地域科学部における人事計画に関する事項
（２）教育地域科学部の運営組織に関する事項
（３）その他学部長が諮問した事項
（組織）
第３　委員会は，次の各号に掲げる委員をもって組織する。
（１）学部選出の評議員　３名
（２）前号を除く企画委員会委員　３名
（３）その他学部長の指名する教員　若干名
（任期）
第４　委員の任期は２年とする。ただし，再任を妨げない。
２　委員に欠員が生じた場合の補欠委員の任期は，前任者の残任期間とする。
（委員長）
第５　委員会に委員長を置き，第３第１号の委員をもって充てる。

（「福井大学教育地域科学部及び大学院教育学研究科運営組織専門委員会要項」より抜粋）

③　専任教員は，設置基準に定められた数を上回っており，教育を遂行するために十分な教員が確保されている。主要科目は専任教員が担当する体制をとり，多様な分野の学習機会を担保するために適任の非常勤講師を採用している（**資料 1-1-4～6**）。

資料 1-1-4　教員組織　H27.5.1 現在

課程名		教員数					大学設置基準必要教員数		助手
		教授	准教授	講師	助教	計	専任教員数	内教授数	
学校教育課程	言語教育コース	4	3	2	0	9	52	15	0
	理数教育コース	9	3	1	0	13			3
	芸術・保健体育教育コース	(8)	(6)	(1)	(0)	(15)			(0)
	芸術保健・体育教育コース　音楽教育サブコース	2	3	0	0	5			0
	芸術保健・体育教育コース　美術教育サブコース	3	2	0	0	5			0
	芸術保健・体育教育コース　保健体育サブコース	3	1	1	0	5			0
	生活科学教育コース	6	3	0	0	9			0
	社会系教育コース	5	3	0	0	8			0
	教育実践科学コース	3	5	0	0	8			0
	臨床教育科学コース								0
	障害教育コース								0
小　計		35	23	4	0	62	52	15	3
地域科学課程		11	12	4	0	27	10	5	0
計		46	35	8	0	89	62	20	3

（事務局資料）

資料 1-1-5　教員の専門分野

課　程	講　座	専門分野・領域
学校教育課程	言語教育講座	国語学，国文学，漢文学，書道，国語科教育，英語学，英米文学，英語科教育
	理数教育講座	代数学，幾何学，解析学，応用数学，数学科教育，物理学，化学，生物学，地学，理科教育
	芸術・保健体育教育講座	器楽，声楽，作曲，音楽科教育，絵画，彫塑，構成，美術科教育，体育史，体育学，運動学，保健体育科教育
	生活科学教育講座	電気，機械，情報技術，技術科教育，食物学，被服学，保育学，家庭科教育
	社会系教育講座	歴史学，地理学，法律学，経済学，哲学，倫理学，社会科教育
	発達科学講座	教育学，教育方法学，教育社会学，教育心理学，発達心理学，障害児教育，障害児心理，障害児病理，学校経営学
地域科学課程	地域政策講座	法律学，政治学，社会学，経済政策，経営情報学，家庭管理，地理学，住居学，生物学，環境科学，統計学，情報技術
	人間文化講座	音楽学，美術理論・美術史，生涯学習，博物館学・地域文化マネジメント，生理学及び衛生学，教育心理学，スポーツ科学・生涯スポーツ論，中国語，言語学，英語学，英米文学，英語コミュニケーション，独語，仏語

（事務局資料）

資料 1-1-6　専任教員及び専任以外の教員の担当科目数（平成 26 年度）

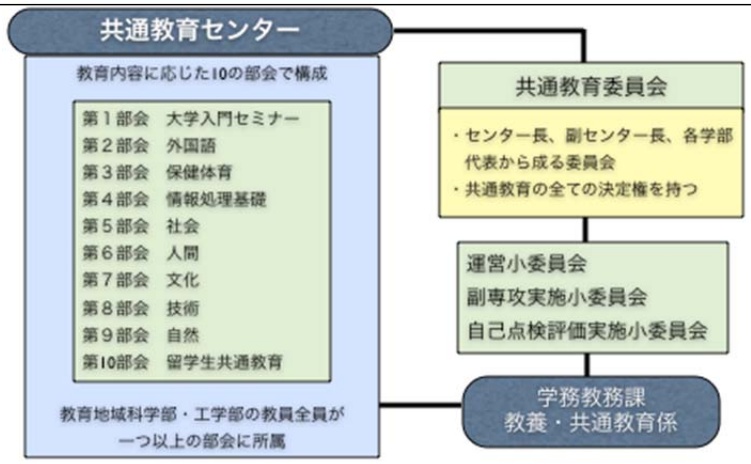
学科及び課程名	総科目数	必修科目					選択科目				
		科目数	専任教員担当の科目			専任教員以外が担当の科目	科目数	専任教員担当の科目			専任教員以外が担当の科目
学校教育課程	602	174	149	教授	86	25	428	359	教授	195	69
				准教授	60				准教授	140	
				講師	3				講師	24	
地域科学課程	242	38	38	教授	31	0	204	180	教授	87	24

（事務局資料）

【学内での他学部との連携】

教養教育は「共通教育センター」によって実施されている。共通教育委員会の下，全教員が教養教育に関わる体制が構築され，工学部と連携した教育活動が行われている（**資料 1-1-7，8**）。

資料 1-1-7　共通教育実施体制



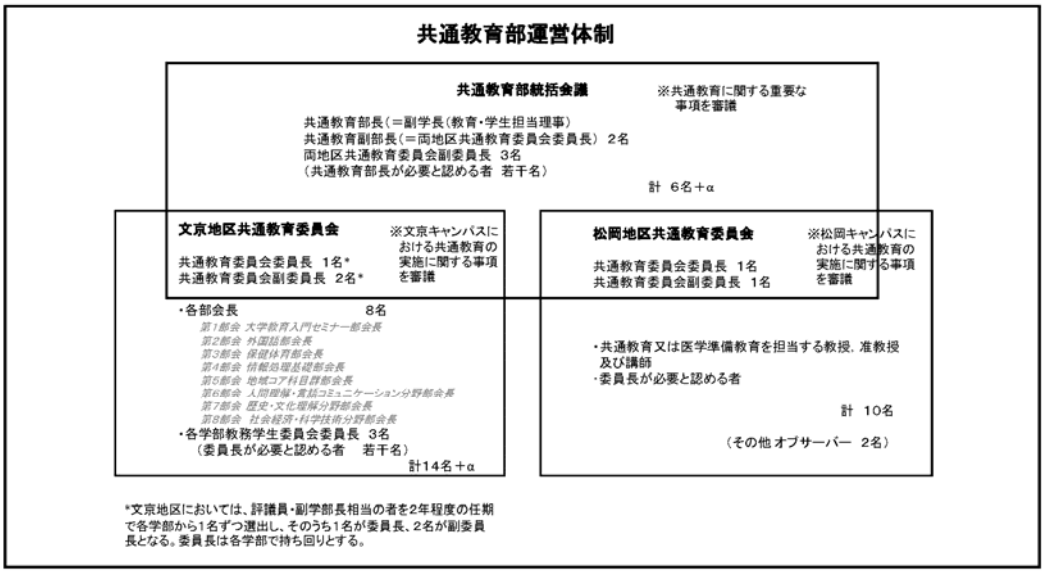
共通教育センター規程（抜粋）

（目的）
第２条　センターは，教育地域科学部及び工学部の共通教育を円滑に実施するとともに共通教育について調査・研究及び企画することを目的とする。
（組織）
第４条　センターは，文教地区すべての教授，准教授，講師・助教及び助手をもって組織する。

● **教養教育組織の改組**

第２期中期目標期間（以下「第２期」という。）中に共通教育改革が検討され，平成 28 年度より全学組織の共通教育部が設置された。また，文京地区の共通教育には COC 事業に関連して地域コア科目が設けられた。

（新運営体制図）



（事務局資料）

資料 1-1-8　共通教育委員会要項（抜粋）

福井大学共通教育委員会要項

（目的）
第１　この要項は，福井大学共通教育センター規程（平成 16 年福大規程第 51 号）第８条第２項の規定に基づき，福井大学共通教育委員会（以下「委員会」という。）について，必要な事項を定める。
（審議事項）
第２　委員会は，次の各号に掲げる共通教育に関する事項を審議する。
(1)　教育の基本理念，教育目標，教育方法等に関すること。
(2)　授業時間割，授業計画，履修登録等に関すること。
(3)　予算の配分に関すること。
(4)　非常勤講師の任用計画に関すること。
(5)　非常勤講師の選考及び任用に関すること。
(6)　副専攻制度の実施，改善及び副専攻の認定に関すること。
(7)　部会の編成に関すること。
(8)　自己点検・評価に関すること。
(9)　センターの管理運営に関すること。
(10)　中期目標・中期計画に関すること。
(11)　その他委員会が必要と認めたこと。
（組織）
第３　委員会は，次の各号に掲げる委員をもって組織する。
(1)　センター長
(2)　副センター長
(3)　各部会長
(4)　教育地域科学部及び工学部教務学生委員会委員長
(5)　教育地域科学部及び工学部選出の教員　各１名
２　前項第５号の委員は，所属の学部長の推薦に基づき，学長が委嘱する。
３　前項の委員の任期は，２年とし，再任を妨げない。ただし，欠員が生じた場合の後任者の任期は，前任者の残任期間とする。
（委員長）
第４　委員会に委員長を置き，センター長をもって充てる。
２　委員長は，委員会を招集し，その議長となる。
３　委員長に事故があるときは，副センター長がその職務を代行する。
（議事）
第５　委員会は，委員の３分の２以上の出席により成立し，議事は過半数をもって決する。
２　委員会は，委員がやむを得ない事情により欠席するときは，当該委員が指名した代理の者の出席を認め，前項の定足数に含めるとともに，議決に加わらせることができる。
３　委員会の決定事項は，原則として教育地域科学部及び工学部教授会に報告するものとする。

（「福井大学共通教育委員会要項」より抜粋）

【教員間の連携体制】

学校教育課程のコア科目ついては学校教育課程委員会が所掌し，教育実践研究実施委員会が実施する体制をとっている。以上の委員会は各コースの教員及び附属学校園教員が構成員となり教員の協働による指導が行われている（**資料 1-1-9**）。また，地域科学課程のカリキュラムの実施・改善，コア科目の地域課題ワークショップの実施については地域科学課程委員会が所掌し，多分野の教員の協働による指導が行われている（**資料 1-1-10**）。

資料 1-1-9　学校教育課程委員会要項・教育実践研究実施委員会要項（抜粋）

福井大学教育地域科学部学校教育課程委員会要項

（設置）
第１条　教育地域科学部に，福井大学教育地域科学部学校教育課程委員会（以下「委員会」という。）を置く。
（目的）
第２条　委員会は，学校教育課程に関する次の各号に掲げる事項について審議するとともに，その企画・運営に当たる。

（１）教育実習及び介護等体験を含む教育実践研究A-Ⅰ，A-Ⅱ，A-Ⅲ，A-Ⅳ，A-Vに関する事項
（２）生活科及び教職実践演習に関する事項
（３）幼稚園教諭免許科目に関する事項
（４）学校教育課程のカリキュラムの検討・改善に関する事項
（５）学校教育課程の履修方法に関する事項
（６）教育地域科学部長，教育地域科学部教務学生委員会及び教育地域科学部及び大学院教育学研究科教育推進委員会からの諮問事項

（組織）

第３条　委員会は，次の各号に掲げる委員をもって組織する。
（１）言語教育講座，理数教育講座，芸術・保健体育講座，生活科学教育講座，社会系教育講座，発達科学講座及び附属教育実践総合センターの所属教員の投票により選出された，上記講座所属の教授　　２名
（２）言語教育講座，理数教育講座，芸術・保健体育講座，生活科学教育講座及び社会系教育講座の教員　　各１名
（３）発達科学講座及び附属教育実践総合センターの教員　　２名
（４）附属学校園教員　　各１名
２　前項第１号の委員は毎年１名ずつ改選する。
３　第１項第２号及び３号の委員は，当該各講座等で互選する。ただし，第１項第１号で選出された委員の所属講座等は，その人数分を控除した定数を選出する。
４　第１項第４号の委員は，校園長，副校園長，教頭又は主幹教諭のいずれか１名を当該各校園長が推薦する。ただし，当該委員は，原則として第２条第１号の事項に関する審議のみに参加する。

（任期）

第４条　委員の任期は２年とし，再任を妨げない。
２　委員に欠員が生じた場合の補欠委員の任期は前任者の残任期間とする。

（委員長及び副委員長）

第５条　委員会に委員長及び副委員長を置き，第３条第１項第１号の委員のうち，任期２年目の委員を委員長に，任期１年目の委員を副委員長に充てる。

（会議）

第６条　委員長は，委員会を招集し，その議長となる。

（委員以外の者の出席）

第７条　委員会が必要と認めるときは，委員以外の者の出席を求め，意見を聴くことができる。

（実施委員会）

第８条　委員会に次の実施委員会及び担当者会議を置く。
（１）福井大学教育地域科学部教育実践研究実施委員会
（２）福井大学教育地域科学部介護等体験実施委員会
（３）教職実践演習担当者会議
２　前項の実施委員会について必要な事項は，委員会が別に定める。

福井大学教育地域科学部教育実践研究実施委員会要項

（趣旨）

第１　この要項は，福井大学教育地域科学部学校教育課程委員会要項第８条に規定する福井大学教育地域科学部教育実践研究実施委員会（以下「委員会」という。）に関し必要な事項を定める。

（任務）

第２　委員会は，教育実習等の円滑な実施を図るため，次の事項を行う。
一　教育実践研究A-Ⅰ，A-Ⅱのうち，附属学校等における研究集会への参加，教育実習に向けての機器利用，教育実習校の振り分けにかかる部分の実施計画，指導及び成績評価に関すること。
二　教育実践研究A-Ⅲ，A-Ⅳの実施計画，指導及び成績評価に関すること。
三　教育実践研究A-Vのうち，障害児教育実習，附属幼稚園教育実習にかかる部分の実施計画，指導及び成績評価に関すること。
四　教育実践研究Aの履修に関する特例申請について検討すること。

（組織）

第３　委員会は，次の各号に掲げる委員をもって組織する。
一　学校教育課程委員会から推薦された者　１名
二　言語教育講座，理数教育講座及び生活科学教育講座の教員　　各２名
三　芸術・保健体育教育講座教員　　３名
四　社会系教育講座教員　　１名
五　発達科学講座及び附属教育実践総合センターの教員　　２名
六　附属学校園教員　　各１名
２　前項第２号から第５号までの委員は，当該各講座等で互選する。
３　第１項第６号の委員は，当該各校園長が推薦するものとする。

（「福井大学教育地域科学部学校教育課程委員会要項」，「教育地域科学部教育実践研究実施委員会要項」より抜粋）

資料 1-1-10　地域科学課程委員会要項（抜粋）

福井大学教育地域科学部地域科学課程委員会要項

（設置）

第１条　教育地域科学部に，福井大学教育地域科学部地域科学課程委員会（以下「委員会」という。）を置く。

（目的）

第２条　委員会は，地域科学課程に関する次の各号に掲げる事項について審議するとともに，その企画・運営に当たる。

（１）地域科学課程のカリキュラムの実施・改善に関する事項
（２）地域科学課程の学生の系選択及び履修指導等に関する事項
（３）地域課題ワークショップ科目の実施に関する事項
（４）地域文化課程及び地域社会課程のカリキュラムの実施，学生の履修等に関する事項
（５）その他教育地域科学部教務学生委員会及び教育地域科学部及び大学院教育学研究科教育推進委員会からの諮問事項

（組織）

第３条　委員会は，次の各号に掲げる委員をもって組織する。

（１）地域政策講座及び人間文化講座の所属教員の投票により選出された，上記講座所属の教授　２名
（２）地域政策講座及び人間文化講座の教員　　各３名

２　前項第１号の委員は毎年１名ずつ改選する。
３　第１項第２号の委員は，当該各講座で互選する。

（「福井大学教育地域科学部地域科学課程委員会要項」より抜粋）

【学校・教育委員会等との連携】

①　教育実習を円滑かつ効果的に実施するため，学部教員，県及び市教育委員会関係者，教育実習校教員から構成される「教育実習等運営協議会」を設け，実施計画や教員養成に関する諸課題について協議し，連携の緊密化を図っており，関係者（卒業生）の期待に応えている（**資料 1-1-11，12**）。

資料 1-1-11　教育実習等運営協議会要項（抜粋）

福井大学教育地域科学部教育実習等運営協議会要項

（設置）

第１　福井大学教育地域科学部における教育実習を円滑かつ効果的に実施するため，本学部に関係の教育委員会及び協力校等との連絡協議機関として，福井大学教育地域科学部教育実習等運営協議会（以下「協議会」という。）を置く。

（任務）

第２　協議会は，教育実習等の実施計画等について協議し，連携の緊密化を図る。また，当該地域の教員養成に関する諸事情についても協議し，教員の資質の向上に努める。

２　福井大学教育地域科学部教育実習協力校教員感謝状贈呈基準に基づき，対象者の推薦を受ける。

（組織）

第３　協議会は，次の各号に掲げる委員をもって組織する。

一　学部長
二　学校教育課程委員会委員長
三　附属学校園関係者（校園長，副校園長，副教頭）
四　教育実習校担当教員
五　教育実習に協力する県及び市町村教育委員会関係者
六　教育実習協力校関係者（校長，教頭，教務主任等）
七　その他学識経験者

（会議）

第４　学部長は協議会を代表し，会務を総括する。
第５　協議会の運営に関し必要とする事項は，学部長が定める

（「福井大学教育地域科学部教育実習等運営協議会要項」より抜粋）

資料 1-1-12　教育実習等運営協議会開催状況（平成 27 年度）

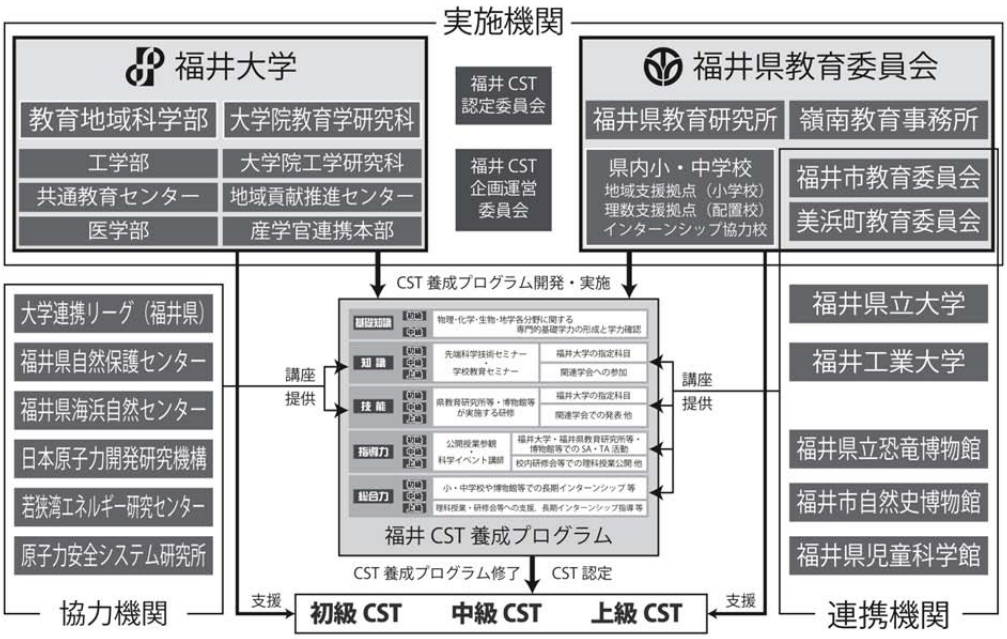
平成27年度福井大学教育地域科学部　教育実習等運営協議会（平成27年４月20日開催）	
教育委員会・教育実習協力校出席者	**福井大学教育実習関係者**
福井県教育庁義務教育課　参事 福井市教育委員会　指導主事 木田小学校教諭 湊小学校教諭 日之出小学校教諭 円山小学校教頭 東藤島小学校教頭 清水西小学校教頭 明倫中学校教諭 光陽中学校教諭 明道中学校教諭 灯明寺中学校教諭 森田中学校教諭 社中学校教頭 足羽第一中学校教諭 附属小学校長 附属小学校教頭 附属小学校主幹教諭 附属中学校長 附属中学校副校長 附属中学校主幹教諭 附属特別支援学校校長 附属特別支援学校副校長 附属特別支援学校教諭 附属幼稚園長 附属幼稚園副園長 附属幼稚園教諭	教育地域科学部学部長 学校教育課程委員会委員長 教育実践研究実施委員会委員長 学校教育課程委員会副委員長 ３年次教育実習校担当教員 （附属小）　担当教員１名 （附属中）　担当教員１名 ４年次教育実習校担当教員 （木田小）　担当教員１名 （湊小）　担当教員１名 （日之出小）　担当教員１名 （円山小）　担当教員１名 （東藤島小）　担当教員１名 （清水西小）　担当教員１名 （明倫中）　担当教員１名 （光陽中）　担当教員１名 （明道中）　担当教員１名 （灯明寺中）　担当教員１名 （森田中）　担当教員１名 （社中）　担当教員１名 （足羽第一中）担当教員１名 （附属幼稚園）担当教員１名 ３・４年次教育実習校担当教員（附属特別支援学校） 担当教員１名 教務部長 教務課長 教務課課長補佐，教務課専門職員（教育実習）
協議事項	**副免教育実習（協力校）の日程**
①平成２７年度教育実習計画について ②教育実習の手引の原稿について ③ｅ-ポートフォーリオの利用について ④教育実習成績評価票について ⑤使用教科書について ⑥実習校別事前指導について ⑦授業実習及び研究授業日程連絡について ⑧その他（事務連絡事項） ・複合機能プリンターの貸出について ・実習中の自動車通勤について	４月20日（月）　教育実習等運営協議会〔於::大学〕 ５月８日（金）　「教育実習手引」原稿の提出 締切日 ５月８日（金）　オリエンテーション〔於:大学〕 実習校別事前指導日程連絡票の送付 実習開始までに実習校別事前指導 ５月18日（月）～21日（木）　実習実施前の挨拶 出勤簿，実習日誌，プリンターなど持参 ６月　１日（月）　小学校教育実習開始　協力校訪問 研究授業日程連絡票の提出と参観者の連絡 ６月12日（金）　小学校教育実習終了　協力校訪問 ６月15日（月）　中学校教育実習開始　協力校訪問 研究授業日程連絡票の提出と参観者の連絡 ６月26日（金）　中学校教育実習終了協力校へ訪問 ７月　７日（火）　小学校へ実施後の挨拶 ７月21日（火）　中学校へ実施後の挨拶午後　（成績評価票，実習録，出勤簿，実習日誌受取り）

（事務局資料）

② 理数系教員養成拠点構築事業（以下「CST 事業」という。）を福井県教育委員会と共同で進め，学部生・大学院生のインターンシップを含む実践的な養成プログラムを実施し，好評を得る等，成果があがっている。理科教員としての高い専門性を涵養しており，教育関係者の期待に応えている。この取組は大学機関別認証評価（平成 27 年度受審）においても高く評価されている（**資料 1-1-13**）。

資料 1-1-13　CST（コア・サイエンスティーチャー）事業の概要

■　福井大学と福井県教育委員会は，科学技術振興機構（JST）の平成 21 年度「理数系教員（コア・サイエンス・ティーチャー：CST）養成拠点構築事業」に採択された。事業名は「地域・学校拠点を活用する自己啓発型 CST 養成・支援システムの構築」であり，地域の核となる優れた理科教員を養成することを目的としてプログラムの開発と実施が行われてきた。この事業は平成 25 年度以降 COC 事業の一環として実施されている。





●学部生の初級CSTプログラム受講者と認定者数

	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
新規受講者数	8	6	5	5	6	6
初級 CST 認定者数	－	3	4	5	5	6

※平成26年度認定者１名と平成27年度認定者５名を除く16名が正規教員として採用されている。

●プログラム受講者の感想（平成24年度CST業務成果報告書より抜粋）

・現職の先生方はとても時間に追われているように感じた。しかし，それを理由に教材研究や授業作りを怠ってはいけないと改めて感じた。現にお忙しいながらも日々努力している現職教員の姿を間近で拝見できた。教育実習では決して見ることのできなかったリアルな学校現場を知ることができた。
・先生方の授業を何度も見せていただいてたくさん学ばせていただいた。説明の仕方ひとつにしろ，ちょっとした問いかけなど，しゃべり方というものを見せていただいたと思う。また多彩な知識によって生徒たちの心をつかむという技も見ることが出来た。私もより多くの知識を蓄えておかなければならないと感じた。
・学級経営については，参観した学級それぞれに担任の先生の個性があり，実験の取り組み方，発表の仕方・話型などに違いが見られた。またそれらの違いに加えて，学級のルール，掲示物，学級図書などから，それぞれの先生が重視していることが感じられた。このことから自分が担任だとしたらどのようなルールづくりや，学級目標，学級図書などを用意するのかを考え，教師になることを改めて見つめ直させられた。

（事務局資料）

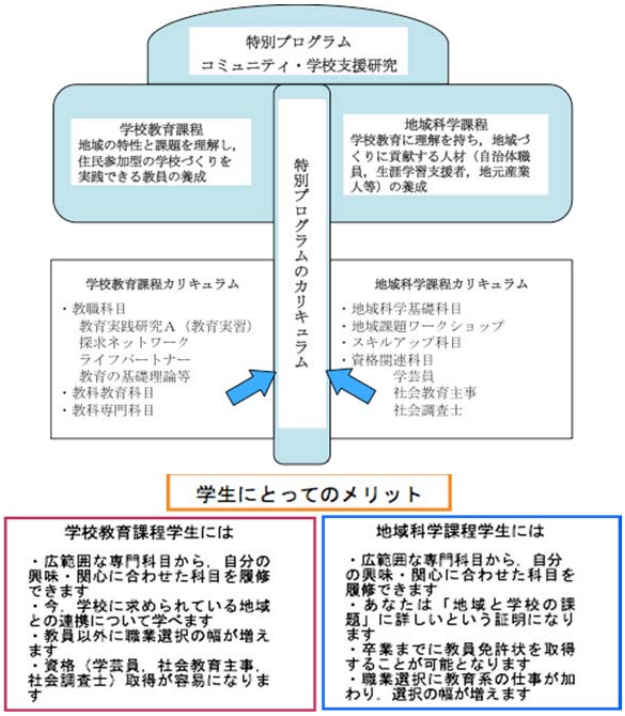
【教育プログラムとしての実施体制】

① 学生からの要望を受け，他課程の専門科目を系統的に履修できる特別プログラム「コミュニティ・学校支援研究」を平成 24 年度に開設した。このプログラムにより，他課程で得られる免許や資格の取得が容易になるなど，関係者（学生）の期待に応えた（**資料 1-1-14，15**）。

資料 1-1-14　特別プログラム「コミュニティ・学校支援研究」

1.「コミュニティ・学校支援研究」とは

学校教育課程と地域科学課程の学生が相互に交流できるような授業を増やして欲しいという学生からの要望を受けて，平成 24 年度から開始された新しい教育プログラムです。このプログラムは，両課程の良いところを合わせて，「学校と地域の課題」に専門性を持った学校教員と地域づくりに貢献できる社会人を増やしていくことを目的としています。特別プログラムへの参加募集は 1 年次後期に行い，2 年次からプログラムの履修を開始します。プログラム履修者には，次頁以下の修了認定条件や卒業要件等が適用されます。この手引きに記載された履修上の注意や履修表をよく読んで履修に臨んで下さい。



（特別プログラム「コミュニティ・学校支援研究」履修手引きより抜粋）

受講者の感想（地域科学課程学生）

特別プログラム「コミュニティ-学校支援研究」のカリキュラムを通して，地域と学校教育現場の両者の視点でコミュニティを見ることができた。地域を作り活性化させていくためには学校が拠点となって役割を果たすことが求められ，子どもがより深く学ぶことができる教育のためには地域の協力が欠かせないことから，両者は密接に関わり合っていることが分かった。そしてそれを繋ぐ役割を果たす公民館主事，教師などのコーディネーターの存在はとても大きい。私はこのプログラムで経験したことを活かし，少しでも両者を繋ぐ役割を果たしていきたいと思う。

（平成 26 年度修了生課題研究報告書より抜粋）

（事務局資料）

資料 1-1-15　特別プログラム「コミュニティ・学校支援研究」受講状況（平成 28 年３月現在）

開始年度	学　年	課　程	所　属	希望免許・資格	取得免許・資格
平成 24 年度	卒業生	学校教育課程	美術教育サブコース2系	学芸員	学芸員
	卒業生	学校教育課程	社会系教育コース2系	学芸員	学芸員
	卒業生	学校教育課程	臨床教育科学コース3系	社会教育主事	社会教育主事
	除籍	学校教育課程	障害児教育コース5系	学芸員	（プログラム辞退）
	卒業生	地域科学課程	地域分析系	中学校社会	中学校（社会）二種免許
	卒業生	地域科学課程	生涯学習系	中学校家庭	なし（修了のみ）
	卒業生	地域科学課程	地域分析系	中学校社会	中学校（社会）二種免許
平成 25 年度	4年	地域科学課程	言語ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ系	中学校英語	なし（修了のみ）
	4年	地域科学課程	生涯学習系	小学校	なし（修了のみ）
	4年	地域科学課程	公共政策系	中学校社会	中学校（社会）二種免許
	4年	地域科学課程	生涯学習系	中学校社会	中学校（社会）二種免許
平成 26 年度	3年	地域科学課程	地域分析系	中学校社会	-
	3年	地域科学課程	公共政策系	中学校英語	-
	3年	地域科学課程	国際文化系	中学校国語	-
	3年	地域科学課程	公共政策系	中学校社会	-
平成 27 年度	2年	学校教育課程	国語教育サブコース（1系）	社会調査士	-
	2年	地域科学課程	国際文化系	中学校英語	-
	2年	地域科学課程	生涯学習系	中学校社会	-
	2年	地域科学課程	生涯学習系	中学校社会	-

（事務局資料）

② 地域共生プロジェクトセンター（**資料 1-1-16**）を核として，地域参画型の実践教育と専門教育を結合させて就業力を高める教育プログラムを実施するとともに，企業・地域体験型プログラムを展開し成果があがった（**資料 1-1-17，P1-56 後掲資料 1-2-27，28**）。これらの授業支援システムとして就業力 e ポートフォーリオを活用している（**資料 1-1-18**）。

資料 1-1-16　地域共生プロジェクトセンターの概要

■ 地域科学課程では，平成22年度 就業力GP「世代間交流と地域参画活動が生み出す就業力」とそれに続く平成24年度 産業界ニーズGP「中部圏の地域・産業界との連携を通した教育力改革の強化事業」の採択を受けて「地域共生プロジェクトセンター」を設置した。

地域共生プロジェクトセンター

センターの目的

教育地域科学部における地域科学研究及び地域実践型学生教育に関わるさまざまな活動の支援を行うとともに，市民や自治体，市民社会組織等と連携して地域共生社会の形成に貢献する役割を果たします。

センターの活動内容

1. **地域実践型学生教育プログラムの推進**

現在行われている地域実践型学生教育プログラムをセンターの「プロジェクト」と位置づけ，支援します。

新しい地域実践型の授業プログラムの開発を行います。

2. **地域科学研究の推進**

・本学部教員と地域科学研究を行うための活動スペースを提供します。
・地域の研究・教育に対するニーズと学部教員の研究シーズとの橋渡しをします。
・地域の方々と共同研究プロジェクトの立ち上げを行います。

3. **地域活動団体等への活動支援と，これら団体と学部との交流促進**

・センター施設を限定的に開放します。
・交流機会を創出します。

4. **以上１～３に関わる，学部からの地域への情報発信を行います。**

平成22年度から始まったプロジェクト

1. **地域実践型教育プロジェクト**

・児童館における子どもの学習活動支援実習
・国際交流イベントを通じて多文化共生社会の実現を目指すプロジェクト
・福井市東郷地区まちづくりに学ぶプロジェクト
・地域史料・古文書の整理・活用プロジェクト
・社会調査で探る地域課題
・学生発信！駅前プロデュース　in FUKUI

2. **協働プロジェクト室利用プロジェクト**

・地域連携ネットワークによる子育て・発達障害者支援プロジェクト
・学生発信！駅前プロデュース　in FUKUI

施設（教育地域科学部３号館の一部を管轄）

（1F）交流スペース・作業室　（2・3F）会議室（4F）協働プロジェクト室　（学部内公募による貸与）
（音楽実習室B・C）利用用途・団体，利用時間限定

組織

附属地域共生プロジェクトセンター長　教育地域科学部教員の兼任で構成（地域科学課程教員およびプロジェクトに参加する教員）　庶務は教育地域科学部支援室総務係担当

（http://www.f-edu.u-fukui.ac.jp/edu1/outline/symbiotic.html）

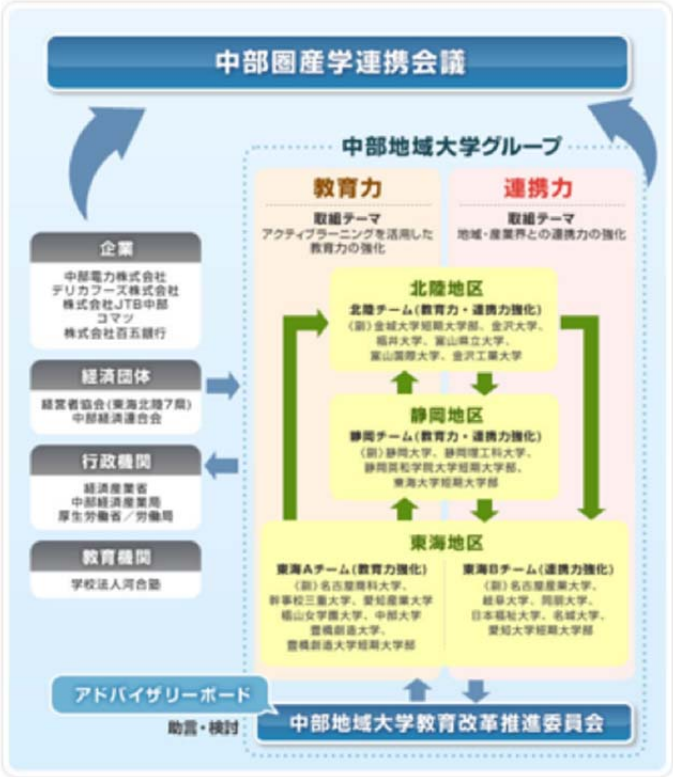
（福井大学教育地域科学部 HP より抜粋）

資料 1-1-17　産業界ニーズ GP の概要

産業界ニーズ GP「中部圏の地域・産業界との連携を通した教育力改革の強化事業」

産業界のニーズに対応した人材育成の取組を行う大学・短期大学が地域ごとに共同して地元の企業，経済団体，地域の団体や自治体等と産学協働のための連携会議を形成して取組を実施することにより，社会的・職業的に自立し，産業界のニーズに対応した人材の育成に向けた取組の充実が図られるよう，幅広い職業人養成に比重を置く大学の機能別分化に資することを目的としている。

選定された中部圏 23 大学では，所属する全大学が，①アクティブ・ラーニングを活用した教育力の強化，②地域・産業界との連携力の強化，という２つのテーマを遂行し，共に成果を生み出す過程で，前に踏み出し，考え抜き，チームで働く教育改革力の強化を図る。23 大学は，地理的近接性とテーマの近接性により４つのチームに分かれ，チームごとに連携 FD を行い成果を共有するとともに，中部圏産学連携会議の下で中部地域大学グループが一体となって２つのテーマについて連携や交流を進める。福井大学は，北陸（福井・石川・富山）地区の５大学とともに，北陸チームを構成し，交流と討議を通じて共に教育力・連携力の強化を図る。

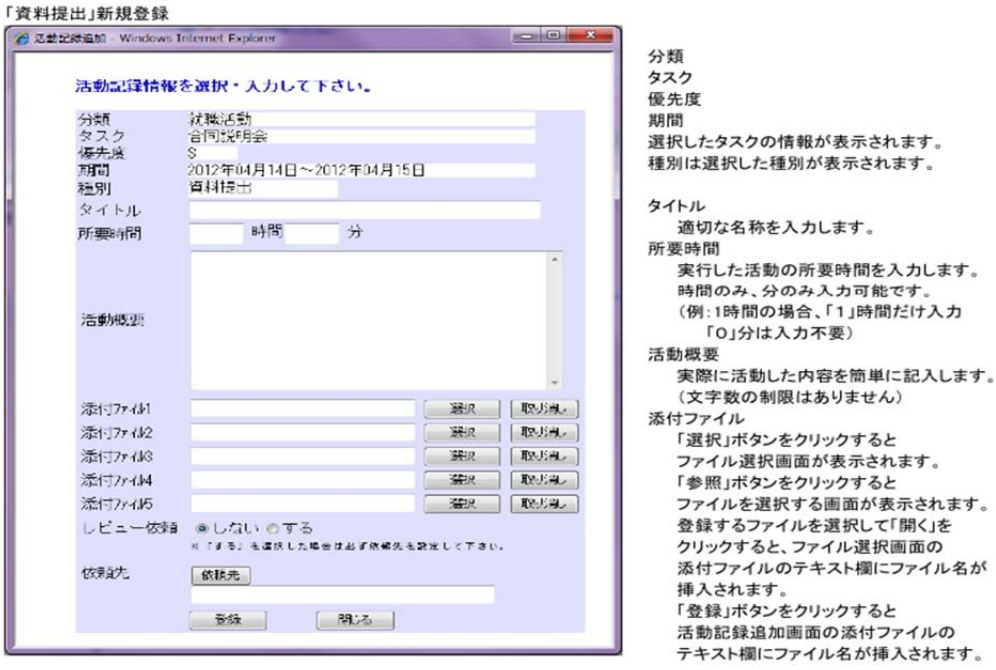


■　成果の例

・地域科学課程において，現場ヒアリングとグループワークを中心とした授業構築と教材等の作成により，初年次学生向け教育の改善を図り，後年次の課題探究型アクティブ・ラーニングのための準備作業が充実した。
・研修会や交流会等を通じた中部地区の GP 参加大学や中部地区以外のアクティブ・ラーニング先進大学との交流，情報交換により，新たなアクティブ・ラーニング手法や授業カリキュラムの考え方に接し，授業改善や新カリキュラム構想の参考となる知識を得ることができた。
・地元の経済界との意見交換を行う機会が設定され，経済界と連携したカリキュラムについて，考え方を共有することができた。

（事務局資料）

資料 1-1-18　就業力ｅポートフォーリオシステム（入力画面）



（「ｅポートフォーリオ学生操作マニュアル」より抜粋）

③　活力ある地域社会の形成に寄与する人材の育成を目的として社会教育主事認定プログラムを実施しており，毎年 10 名前後の資格取得者を輩出し，教育関係者等の期待に応えている（**資料 1-1-19**）。

資料 1-1-19　社会教育主事に関する科目の単位取得証明書発行者数　（人）

課程	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
学校教育課程	2	0	0	1	0
地域科学課程	12	8	9	16	11

（事務局資料）

【国際性】

語学センターを中心として，主に共通教育における英語のカリキュラム改革を推進している。「グローバル人材育成推進事業」に基づき，平成 25 年度からは，さらに高度な実践的英語教育を実施しており学生の満足度も高く，第１期中期目標期間（以下「第１期」という。）に比して，向上した（**資料 1-1-20，P1-85 後掲資料 2-1-10**）。また，「グローバル人材育成推進事業」の短期留学プログラムにより学部生の留学も増加している（**資料 1-1-21，22**）。

資料 1-1-20　語学センター概要

福井大学語学センター（平成23年度設置）

語学センターの業務概要は以下のとおりです。

1. 共通教育（教養教育）の一部として実施される必修の英語カリキュラムの改革と実施
2. 学生の一般的なコミュニケーション能力の上達を図るため，４技能を統合した基本的なコミュニカティブクラス（シラバスにオンライン学習を組み込み，それを活用することを含む）の担当
3. 福井大学における「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援（GGJ）」事業で示されているTOEICの目標スコア達成のためのサポート
4. 福井大学の３学部・３大学院研究科における，基礎的な英語教育及び各学部・研究科に合わせたESP（English for Specific Purposes）教育開発のサポート
5. 共通教育（教養教育）担当の教員が行っている英語授業のサポート及び強化支援
6. 地域の企業・住民の方々に対する英語カリキュラムの開発及び提供
7. 留学生と日本人学生が会話，レクリエーション，アカデミックな目的のために集い合うことのできる「グローバル・ハブ」の運営
8. 学生が自律的に学習できる言語開発センター（LDC）の運営
9. 近隣の高等教育機関における学生の英語能力向上への協力

（http://www.lc.u-fukui.ac.jp/ja/page/p3.html）

（語学センターウェブサイトより抜粋）

資料 1-1-21　留学制度の概要

将来，専門性を武器にグローバルな環境で活躍する「グローバル人材」を目指す上で最も効果的な手段の一つとして，「海外留学」という選択肢があります。留学を通して得る様々な衝撃体験により，視野を広げ，自らの価値観を見通し，何事にもチャレンジする精神等，グローバル社会を生き抜く力を身に付けることができます。社会人になってからでは時間の制約が多く実現が難しいといわれる海外留学，福井大学での在学中に，是非機会のある限りチャレンジしてください。

⌘ 福井大学の海外留学プログラム

福井大学では，大きく分けて以下の２タイプの留学機会を提供しています。

短期海外研修プログラム

- 数日～３ヶ月程度
- 長期休暇中に実施することがほとんど

  例）語学研修，文化体験・交流，インターンシップ，研究・発表など

学術交流協定校への交換留学

- 半年～１年
- 学期中に留学
- 海外大学の学部・研究科授業を履修（＋語学研修）

個人で計画，手配する留学と比べ，福井大学が提供する留学プログラムに参加する場合，以下のような様々なメリットがあります。

短期海外研修プログラム類型

分類型			主な研修内容・目的	対象学年(目安)	語学レベル(目安)	重点的強化スキル※
0	語学研修型		語学力の向上を目的とした研修	全学年	全レベル	基礎的知識・教養（初・中級） コミュニケーション能力（初・中級）
1	文化体験・交流型	文化体験・交流型	文化歴史遺産の訪問、文化体験・交流などを通し、グローバルな環境に慣れ理解を深める	学部1、2年	全レベル	基礎的知識・教養（初級）、コミュニケーション能力（初級）、異文化に対する理解・自己アイデンティティの確立（初級）
2	教養・専門型	グローバル教養型	特定地域の社会文化に関する講義やフィールドワーク等への参加を通して、グローバル人材としての教養を養う	学部2～4年	TOEIC ４００点	基礎的知識・教養（中・上級）、自己学習力・問題解決能力、コミュニケーション能力（中・上級）、異文化に対する理解・自己アイデンティティの確立（中・上級）
3		専門分野型	専門分野の講義や実験への参加、関連企業への訪問等を通して専門分野への理解を深める			専門的知識・能力（初級）、自己学習力・問題解決能力、コミュニケーション能力（中・上級）
4	実践・研究型	実践・インターンシップ型	就業体験などの実践を通して、高度専門職業人としての専門性や創造性を高める	学部4年～博士前期2年	TOEIC ６００点	専門的知識・能力（中・上級） 創造力、社会的責任・使命感
5		研究・発表型	学会への参加や共同研究、発表などを通して高度専門職業人としての専門性や創造性を高める			専門的知識・能力（中・上級） 創造力、社会的責任・使命感

※福井大学が育成を目指すグローバル人材の必須要素
- 基礎的知識・教養，専門的知識・能力
- 創造力，自己学習力・問題解決能力，コミュニケーション能力
- 社会的責任・使命感
- 異文化に対する理解・自己アイデンティティの確立

(http://www.u-fukui.ac.jp/international/study_abroad/short/outline/)

（福井大学国際交流・留学ウェブサイトより抜粋）

資料 1-1-22　学生の海外派遣状況（学部生）

学生の海外派遣状況(平成 22 年度～平成 27 年度)						
年度	国　名	派遣先大学名	目的	期間	人数	合計
平成22年度	アメリカ合衆国	クレムソン大学	交換留学	9 月	1	22
	アメリカ合衆国	フィンドレー大学	交換留学	9 月	1	
	アメリカ合衆国	フィンドレー大学	留学生用プログラム	9 月	1	
	韓国	東亜大学校	語学研修	1 月	4	
	ドイツ	ハンブルク大学	語学研修	1 月	1	
	中国	西安外国語大学	留学生用プログラム	10 月	1	
	カナダ	オカナガン大学	語学研修	1 月	11	
	オーストラリア	（語学学校）	語学研修	2 月	1	
	カナダ	（語学学校）	語学研修	6 月	1	
平成23年度	アメリカ合衆国	クレムソン大学	交換留学	9 月	2	34
	アメリカ合衆国	フィンドレー大学	交換留学	9 月	2	
	アメリカ合衆国	フィンドレー大学	留学生用プログラム履修	9 月	1	
	中国	浙江理工大学	語学研修	1 月	14	
	ドイツ	ハンブルク大学	語学研修	1 月	2	
	カナダ	オカナガン大学	語学研修	1 月	11	
	カナダ	（語学学校）	語学研修	9 月	2	
平成24年度	アメリカ合衆国	クレムソン大学	交換留学	10 月	1	52
	アメリカ合衆国	フィンドレー大学	交換留学	10 月	1	
	アメリカ合衆国	クレムソン大学	留学生用プログラム履修	2 月	1	
	アメリカ合衆国	フィンドレー大学	留学生用プログラム履修	10 月	1	
	韓国	東亜大学校	語学研修	1 月	3	
	ドイツ	ハンブルク大学	語学研修	1 月	1	
	中国	上海師範大学	その他	1 月	7	
	中国	浙江理工大学	語学研修	1 月	2	
	アメリカ合衆国	その他	語学研修	2 月	1	
	アメリカ合衆国	ポートランド州立大学	語学研修	2 月	1	
	オーストラリア	モナシュ大学	語学研修	2 月	1	
	カナダ	トロント大学	語学研修	2 月	2	
	カナダ	オカナガン大学	語学研修	2 月	14	

	カナダ	ロイヤルロード大学	語学研修	1月	3	
	タイ	キングモントク大学	留学生用プログラム履修	1月	2	
	タイ	スィーパトゥム大学	語学研修	1月	2	
	タイ	タマサート大学	留学生用プログラム履修	2月	4	
	アメリカ合衆国	その他	その他	10月	1	
	その他	その他	その他	8月	1	
	その他	その他	その他	4月	1	
	カナダ	（語学学校）	語学研修	9月	2	
平成25年度	アメリカ合衆国	クレムソン大学	交換留学	9月	1	43
	アメリカ合衆国	フィンドレー大学	交換留学	9月	2	
	アメリカ合衆国	ポートランド州立大学	語学研修	22日	3	
	アメリカ合衆国	ピッツバーグ大学	KAKEHASHI Project	12日	7	
	韓国	東亜大学校	文化体験・交流	14日	2	
	ニュージーランド	オークランド大学	語学研修	22日	4	
	タイ	スィーパトゥム大学	語学研修	15日	3	
	タイ	タマサート大学	グローバル教養	15日	4	
	カナダ	トロント大学	語学研修	29日	1	
	カナダ	オカナカン大学	語学研修	42日	14	
	アラブ首長国連邦	RAKカラ―ン農場	研究室派遣に動向	21日	1	
	ベトナム	キングモントク大学	留学生用プログラム履修	1月	1	
平成26年度	ドイツ	ハンブルク大学	語学研修	33日	2	38
	ドイツ	ハンブルク大学	交換留学	5月	1	
	タイ	キングモンクト工科大学	グローバル教養	14日	1	
	タイ	タマサート大学	グローバル教養	15日	1	
	タイ	チャンカセム・ラチャパット大学	グローバル教養	14日	4	
	アメリカ合衆国	フィンドレー大学	交換留学	9月	1	
	アメリカ合衆国	ポートランド州立大学	語学研修	25日	1	
	ニュージーランド	ワイカト大学	語学研修	23日	2	
	中国	浙江理工大学	文化体験・交流	14日	3	
	カナダ	トロント大学	語学研修	29日	1	
	カナダ	オカナカン大学	専門分野	44日	19	
	オーストラリア	ディーキン大学	語学研修	23日	1	
平成27年度	カナダ・ウガンダ	PGIC, KGIBC, UPA	ﾄﾋﾞﾀﾃ！留学JAPAN	9月	1	32
	韓国	東亜大学校	文化体験・交流	14日	1	
	韓国	東亜大学校	交換留学	12月	1	
	アメリカ合衆国	フィンドレー大学	交換留学	9月	1	
	アメリカ合衆国	クレムソン大学	交換留学	9月	1	
	アメリカ合衆国	ポートランド州立大学	語学研修	25日	10	
	ニュージーランド	ワイカト大学	語学研修	23日	3	
	ドイツ	ハンブルク音楽院	ﾄﾋﾞﾀﾃ！留学JAPAN	26月	1	
	タイ	スィーパトゥム大学	語学研修	15日	3	
	タイ	タマサート大学	グローバル教養	15日	5	
	タイ	チャンカセム・ラチャパット大学	グローバル教養	14日	3	
	オーストラリア	ディーキン大学	語学研修	26日	2	

（事務局資料）

●多様な教員の確保の状況とその効果

【教育目的を実現するための教員構成】

① 教科教育担当教員の２名のうち１名は実務家教員を採用することを学部の方針としている。平成 27 年度時点で，教員養成に関わる教員 88 人（特命を含む）のうち 24 人が教職，教育行政の経験を有し（平成 21 年度は 80 人中 13 人），うち２人は県教育委員会との交流人事によるものである。また，三位一体改革の一環として，附属学校教諭のうち４名が教職大学院の准教授を併任し理論と実践の融合による新たな教師教育を推進している（**資料 1-1-23**）。

資料 1-1-23　附属学校の研究科併任教員（准教授）

平成 25 年度文部科学省特別教育プロジェクト経費「グローバル社会に必要な教師教育の改革をスピーディーに実現する連携事業の推進」事業の採択を受け，第２期中に教員養成の新たな全国モデルとなる学部・大学院・附属学校を融合した，いわゆる「三位一体改革」を推進した。この取組の一環として，教員研修機能を強化するため実務家教員の採用と平成 26 年度から附属学校園教諭の教職大学院教員（准教授）併任が進められ，教職大学院と附属学校での協働の実践研究を実施，理論と実践の融合による新たな教師教育を推進した。附属学校園については平成 27 年度に機能的に統合し「附属学園」となった。

附属学校併任教員

年度	附属小学校		附属中学校	附属特別支援学校
平成 26 年度	青木美恵*	西村美貴穂**	森田史生	天方和也
平成 27 年度	同上	渡邉淳子***	同上	同上

※ 併任教員は教育実習指導及びインターンシップ指導において中核的な役割を果たしている。

※ *平成 28 年度に附属幼稚園に異動，**管理職資格保有・平成 27 年度公立校教頭として転出，***：福井県授業名人認定者

（事務局資料）

② 男女共同参画の推進を図るため平成 21 年度で 20.9%であった女性教員比率を平成 27 年度で 30.5%（専任教員）まで高めた。女子学生の比率が高い本学部の実情に対応した教育が可能である（**資料 1-1-24**）。

資料 1-1-24　女性教員の割合

年度	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
女性教員数（人）	20	22	25	25	25	25
女性教員比率（%）	22.2	24.4	27.8	27.5	29.1	30.5

※教育地域科学部の他，附属教育実践総合センター，附属地域共生プロジェクトセンター教員を含む

（事務局資料）

●入学者選抜方法の工夫とその効果

【入学者確保】

アドミッション・ポリシーを定めるとともに，募集要項にも選抜基本方針と評価の視点を明記している。入学者は求める学生像に概ね沿ったものであり，選抜の適切性が窺える。適切な入学希望者を確保するために，毎年広報活動を行っている（後述）（**資料 1-1-25～27**）。

資料 1-1-25　入学者選抜の基本方針

【一般入試（前期日程)】

学校教育課程	言語教育コース		必要な基礎学力を総合的に判定するために，大学入試センター試験を課します。さらに，募集するコースに応じた教科・科目の学力を重視した学力検査を実施し，専門分野の学習に必要な知識・能力を評価します。また，芸術・保健体育教育コースでは，実技検査及び面接（口述試験を含む）を実施し，専門分野の学習に必要な知識・技能及び意欲を評価します。
	理数教育コース		
	芸術・保健体育教育コース	音楽教育サブコース	
		美術教育サブコース	
		保健体育サブコース	
	生活科学教育コース		
	社会系教育コース		
	教育実践科学コース		
	臨床教育科学コース		
	障害児教育コース		
地域科学課程			幅広い基礎学力を総合的に判定するために，大学入試センター試験を課します。さらに，教科・科目の学力を重視した学力検査を実施し，専門分野の学習に必要な知識・能力を評価します。

【一般入試（後期日程)】

学校教育課程	言語教育コース	必要な基礎学力を総合的に判定するために，大学入試センター試験を課します。さらに，教育，文化，科学・技術，人間の発達に関わる課題を扱った小論文を課し，専門分野の学習に必要な論理的思考力や表現力を評価します。
	生活科学教育コース	
	社会系教育コース	
	教育実践科学コース	
	臨床教育科学コース	
	障害児教育コース	
地域科学課程		幅広い基礎学力を総合的に判定するために，大学入試センター試験を課します。さらに，小論文を課し，地域社会に関わる課題を提示して論述させ，思考力・分析力・表現力を総合的に評価します。

【推薦入試Ⅰ】（大学入試センター試験を課さない）

学校教育課程	芸術・保健体育教育コース	音楽教育サブコース	大学入試センター試験は免除し，面接と実技試験を課します。書類審査を含む面接では，音楽及び音楽教育に対する理解や意欲について判定を行います。実技試験では，基礎的な音楽能力を新曲視唱により，表現の技能及び音楽性を選択課題となるピアノ実技あるいはピアノと声楽の実技により行います。
		保健体育サブコース	大学入試センター試験は免除し，保健体育の学習指導の基礎となる学力および実技能力について判定します。論理的思考力や表現力等については集団面接と個人面接で評価します。また個人面接では，実技能力に関して提出書類の競技歴や調査書等の内容の確認を行うとともに目的意識と意欲の判定を行います。
	生活科学教育コース	技術科教育サブコース	大学入試センター試験は免除し，書類審査，小論文，面接(口述試験を含む)により，当サブコースで学ぶための基礎的学力と技術教育への興味・関心，及び適性を評価します。

【推薦入試Ⅱ】（大学入試センター試験を課す）

学校教育課程	言語教育コース		大学入試センター試験での得点に加えて，調査書等に基づいて面接し，目的意識や意欲，思考力，表現力等を判定します。また，これまでの言語文化活動，芸術活動についても評価します。
	理数教育コース		必要な基礎学力を総合的に判定するために，大学入試センター試験を課します。さらに，理数教育コースの学生に求められる意欲・資質・適性などをみるために面接を課し，学習に必要な能力を評価します。
	生活科学教育コース	家庭科教育サブコース	大学入試センター試験により基礎的学力を総合的に判定し，調査書，推薦書，志願理由書及び面接によって，当サブコースの専門分野の学習に必要な論理的思考力や適性を評価します。
	社会系教育コース		必要な基礎学力を総合的に判定するために，大学入試センター試験を課します。さらに，社会系教育コースで学ぶために必要な意欲，資質，適性等を重視した内容の面接（面接用資料作成を課すことがある）を実施し，専門分野の学習に必要な能力を評価します。
	教育実践科学コース		大学入試センター試験によって，学校教育課程で学ぶために必要な基礎学力を総合的に把握するとともに，面接により，教育の現代的課題に関する問題意識，論理的な思考力・表現力，そして資質・意欲等を把握し，総合的に判定を行います。
地域科学課程			幅広い基礎学力を総合的に判定するために，大学入試センター試験を課します。さらに，面接を実施し，地域の諸課題に取り組む意欲・資質・適性等を評価します。

【AO入試Ⅰ】（大学入試センター試験を課さない）

学校教育課程	芸術・保健体育教育コース	美術教育サブコース	大学入試センター試験は免除し，第１次選考では，基礎的な学力と実技の能力を，提出書類，及びデッサンによって判定します。最終選考では，造形感覚考査，提出作品，課題レポート，面接により，専門領域における実技能力，表現力，文章力，学ぶことに対する意欲，協調性等を中心に第１次選考の結果と併せて判定を行います。
	臨床教育科学コース		大学入試センター試験は免除し，第１次選考では，書類審査，小論文，面接により，また最終選考ではプレゼンテーション試験により，当コースで学ぶための基礎的学力と臨床教育に対する興味・関心，適性を評価します。
	障害児教育コース		大学入試センター試験は免除し，第１次選考では，書類審査，小論文，面接により，また最終選考ではプレゼンテーション試験により，当コースで学ぶための基礎的学力と障害児教育に対する興味・関心，適性を評価します。

（事務局資料）

資料 1-1-26　アドミッション・ポリシー

■　求める学生像

１．教育への情熱や地域社会への探求心を持ち，チャレンジ精神にあふれる人

２．子どもたちに共感し，個性的・創造的な活動に積極的な人

学校教育課程	言語教育コース	国語教育サブコース	**「は」と「が」の違いが説明できますか** １．　国語教育・書写書道教育に関心があり，教師を志す人 ２．　国語学，国文学，漢文学，書道，国語教育などの専門分野を学びたい人 ３．　言語に興味を持ち，言語文化の理解や創造に意欲的な人
		英語教育サブコース	**Open the door to the world with English ！** １．　英語教育に関心があり，真剣に教師をめざす人 ２．　英語学，英米文学，英語教育などの専門分野を学びたい人 ３．　英語が大好きで，英語コミュニケーション能力を身につけたい人

	理数教育コース	理科教育 サブコース	**理科の教育に深い理解と情熱をもつ教師をめざして** 1．　理科教育に関心があり，小学校，中学校，高等学校の教師をめざす人 2．　自然科学に関する基礎知識を持ち，さらに深く学ぼうとする人 3．　理科の面白さを子どもたちに伝えるために努力を惜しまない人
		数学教育 サブコース	**数学の教育に深い理解と情熱をもつ教師をめざして** 1．　数学教育に関心があり，小学校，中学校，高等学校の教師をめざす人 2．　数学に関する興味と知識を持ち，さらに広く深く学ぼうとする人 3．　子どもたちに数学の面白さと考える楽しさを伝える努力を惜しまない人
	芸術・保健体育教育コース	音楽教育 サブコース	**音楽で子どもの未来と世界を明るく変えよう** 1．　音楽活動が大好きで，音楽の仕組みや背景にも強い関心をもつ人 2．　音楽教育を通した子どもたちの成長と社会の発展に貢献できる人 3．　柔らかな感性を持ち，目的達成に向けて粘り強く努力できる人
		美術教育 サブコース	**思いをつなぐ，心をつなぐ，それを支えるのが美術の力です** 1．　美しいものに気づく感性と，旺盛な好奇心を持っている人 2．　制作に対する熱意を継続的に発揮出来る人 3．　常に外の世界に目を向け，そこから様々なことを学ぶ心を持っている人
		保健体育 サブコース	**スポーツの感動を子どもたちへ伝えるのは君だ！** 1．　豊かな運動経験と優れた運動技能を有する人 2．　保健体育・スポーツ事象について学び，深く考えたい人 3．　子どもたちと一緒に運動の楽しさや喜びを味わえる人
	生活科学教育コース	技術科教育 サブコース	**生活や産業の諸課題を科学的に探求できる力量ある教師を目指して！** 1．　中学校「技術」，高等学校「工業」の免許取得を目指し，教師を志す人 2．　科学技術とその発展に強い関心があり，常に創意工夫を心がけている人 3．　電気・電子，機械，栽培，材料加工，情報などに興味・関心のある人
		家庭科教育 サブコース	**生活を科学的に探究できる人間性豊かな教師を目指して！** 1．　家庭科教育に関心があり，小学校，中学校，高等学校の教師を志す人 2．　21 世紀の個人・家族をとりまく問題に興味・関心のある人 3．　衣食住や消費・環境について深く学び考えたい人
	社会系教育 コース		**社会に対する好奇心を大切にしつつ，自ら学ぶ楽しみを持ち続ける人であれ** 1．　社会の仕組みや成り立ちとともに，その多様性や変化に関心を持てる人 2．　社会の様々な問題に目を向け，論理的に物事を考えられる人 3．　学校の内外を問わず積極的に人々と交流し，主体的に行動できる人
	教育実践科学 コース		**冷静な頭と温かな心で広い視野から教育実践について探究していこう！** 1．　教育学，心理学，社会学等の観点から，教育について学びたい人 2．　教育現場で起こっている諸問題について科学的に探究したい人 3．　自分自身や他者の経験を大切にしそこから学びを得ようとする人
	臨床教育科学 コース		**気がかりな子どものかたわらにそっと寄り添える教師を！** 1．　人間や社会に対して強い関心を持ち，コミュニケーションを大事にする人 2．　教育現場で起きている諸課題に強い関心を持ち，積極的に考え行動できる人 3．　気がかりな子どもとその親に対して優しく接し，自らは厳しく律することができる人
	障害児教育 コース		**障害を有する人たちに共感と科学を！** 1．　障害者と健常者の，人としての共通性について深く探求できる人 2．　障害者の視点に立って物事を考え，彼らとじっくり，丁寧に係われる人 3．　障害者のライフスパンを見すえた支援に取り組める人
地域科学課程			**地域に関する多様な研究と魅力的な地域づくりに取り組もう！** 1．　地域の特性と諸問題について，自ら進んで調査・分析を行う意欲のある人 2．　職業や世代，言語を異にする人々と積極的に協力し合うことができる人 3．　地域のさまざまな活動の企画や運営に率先して取り組む意欲のある人

※アドミッション・ポリシーには選抜基本方針と評価の視点（P22～23 **前掲資料 1-1-25**）も明記してある。

（事務局資料）

資料 1-1-27　入学者受入方法の適切性

設問：１年生（入学生）はアドミッション・ポリシーに明記された“求める能力，資質”を有している，あるいはアドミッション・ポリシーにおいて求める学生像に適していると思いますか



（平成 26 年度教育地域科学部助言学生面談結果より抜粋）

【入学者選抜】

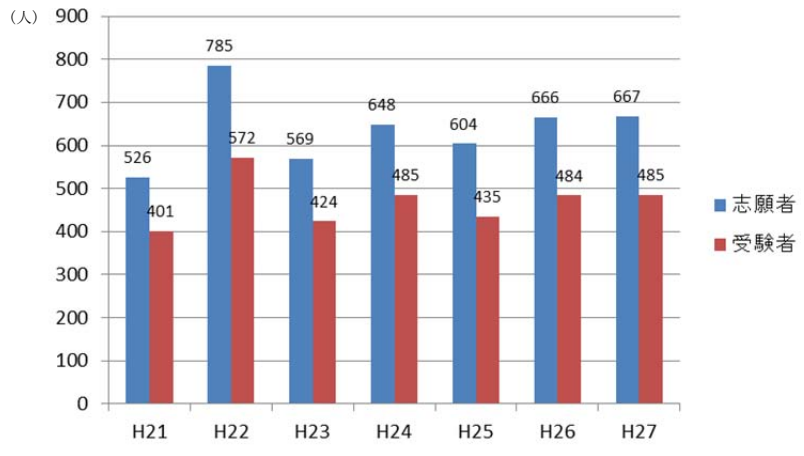
多様な入学者選抜を実施しており，それぞれの選抜は求める学生像に対応したものとなっている。志願者及び受験者数も，少子化による総進学者数が減少する中概ね増加した（**資料 1-1-28，29**）。

資料 1-1-28　学士課程の入学者選抜（平成 27 年度）

選抜の種類，方法等	募集人員	志願者数	受験者数
○一般入試・前期日程：センター試験と個別学力試験，実技検査，面接	86 名	244 名	209 名
・後期日程：センター試験と小論文，実技検査	32 名	348 名	166 名
○ 推薦入試Ⅰ：調査書，推薦書，志願理由書，実技検査，小論文及び面接の結果を総合判定（学校教育課程の一部コース）	6 名	27 名	27 名
○ 推薦入試Ⅱ：センター試験の成績，調査書，推薦書，志願理由書，面接の結果を総合判定	27 名	66 名	66 名
○ AO 入試Ⅰ：調査書，自己推薦書，志望理由書，実技試験，小論文，面接等を総合判定（学校教育課程の一部コース）	9 名	27 名	20 名
○ 私費外国人留学生特別選抜：個別学力検査等，日本留学試験，TOEFL の結果を総合判定	若干名	1 名	1 名

（事務局資料）

資料 1-1-29　志願者数と受験者数の年次推移（一般選抜+特別選抜）



（事務局資料）

●教員の教育力向上のための体制整備とその効果

【FD】

全学FDに加え学部独自のFD活動も展開している。教育力向上に資するものとしては，教育内容・教材開発研究会，ラウンドテーブル等に加え，平成25年度からは授業実践を省察する年度末学部FD研修会を実施しており，専門教育に対する学生の満足度も第1期に比べて向上している（**資料1-1-30～32，P1-89 後掲資料2-1-19**）。

資料1-1-30　ファカルティ・ディベロップメント委員会要項（抜粋）

福井大学教育地域科学部及び大学院教育学研究科ファカルティ・ディベロップメント委員会要項

（設置）

第1　教育地域科学部及び大学院教育学研究科に，本学部及び研究科教員のファカルティ・ディベロップメント（教育内容及び授業方法の改善を図るための組織的な取組をいう。以下「FD」という。）を推進するため，福井大学教育地域科学部及び大学院教育学研究科ファカルティ・ディベロップメント委員会（以下「委員会」という。）を置く。

（所掌事項）

第2　委員会は，次に掲げる事項を審議し，その実施に当たる。

（1）FDの企画及び実施に関すること。

（2）FDに関する情報を収集し，本学部及び研究科教員に提供すること。

（3）FDに関する講演会及び研修会等を企画し，実施すること。

（4）FDの自己点検・評価に関すること。

（5）その他FDに関すること。

（組織）

第3　委員会は，次の各号に掲げる委員をもって組織する。

（1）教授会選出の教員　2名

（2）以下の各講座グループから各1名ずつ選出された教員　6名

①　言語教育講座及び理数教育講座

②　芸術・保健体育教育講座及び生活科学教育講座

③　社会系教育講座及び発達科学講座（附属教育実践総合センターを含む。）

④　地域政策講座

⑤　人間文化講座

⑥　教育学研究科教職開発専攻

（「福井大学教育地域科学部及び大学院教育学研究科ファカルティ・ディベロップメント委員会要項」より抜粋）

資料 1-1-31　FD 活動の例

■　全学 FD の例



■　教科専門教員による教材開発セミナー及びワークショップ



■　教員どうしで授業実践の報告と検討をおこなう学部 FD 研修会

教育地域科学部・教育学研究科 平成 27 年度末 FD 研修会（参加者 58 人）

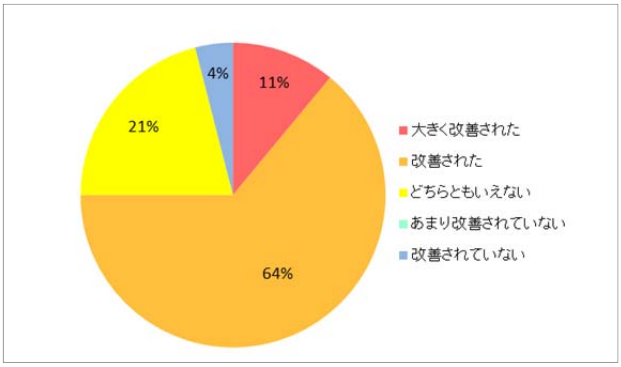
開催日時：　平成 28 年 2 月 19 日（金）9:00～12:00
開催場所：（全体会・分科会）総合研究棟Ⅰ・13 階大会議室

・プログラム
（1）全体会（会場：総合研究棟Ⅰ・13階大会議室）9:00～10:15　　司会　FD委員会委員長
9:00～9:05　開会行事挨拶（学部長）
9:05～10:15　両新学部のコンセプトの説明・共有
・改組に伴い次年度から動き出す教育学部と国際地域学部について，コンセプト及び特色ある取り組みを参加者全員で理解し共有を図ることを目的とする。
①9:05～9:40　教育学部
・全体コンセプト（学部長）・新科目関係（学校教育課程教員）
②9:40～10:15　国際地域学部
・全体コンセプト（月原教員）・国際及び地域関係（教育地域科学部教員）
10:15～10:20　事務連絡
（2）分科会（会場：総合研究棟Ⅰ　13階大会議室）10:30～12:00
10:30～11:50　グループ・セッション
・コース・課程をまたいだ教員メンバーで小グループに分かれ，「今年の授業実践の振り返り」あるいは「次年度担当予定の新科目（目標等）」について語り聴き合い，４月以降の授業に反映できる事項について探る。
５～７名でグループ構成（FD委員は司会と記録も兼ねる。時間があれば自身の報告）。
● 教員自身の実践での取り組み・成果・挑戦等をA4紙１枚程度のメモに記し，グループメンバー数コピーしてFD研修会会場に持参。
●一人あたり10～15分程度で取り組み報告＋質疑応答。
11:50～12:00　アンケート記入

■　参加者の意見・感想等
・５名の先生方から興味深い授業紹介がなされ非常に盛り上がった。もっと説明を聞きたい，意見交換をしたい雰囲気であったが時間が足りないくらいであった。一人 10 分程度の発表に続き，意見・感想や質疑応答に移った。各教員の専門分野が異なるため質問が多くなってしまったが，（発表教員の授業内容・方法だけでなく，その教員の人柄や教育に対する熱意も）。反面「いかに学生に主体的な学習をするべきか」「どの程度教員が関わるべきかという」という２点に関して自然とかみ合った議論ができた。

・学生からのコメントにどう応答するかも共通する論点となった。学生からリアクションペーパーを集め，それに一つひとつ返答している例も報告されたが，大人数授業を幾つも抱えている場合，これを継続するのは難しい。学生の声に応えているという感覚を学生に持ってもらえるための様々な工夫が出された。学生が切実感をもって学べない内容を扱うときの工夫も共通する話題となった。これは一つの授業内で解決できる問題でないこともあるため，科目を跨いだカリキュラム全体としてどう調整を図るかという点が課題である。
・今回の議論で，アクティブ・ラーニングを成功させるためには，特に教員の意識的な関わり方が重要であり，そのためには教員のスキルアップや教員同士の連携を密にする，といった教員全体の資質を高めることの必要性について認識することができた。また学習領域や所属を越えた教員同士でも連携を行うことで，アクティブ・ラーニングをより学術的なものに発展させられるのではないかと感じた。（平成 26 年度 FD 活動報告書より抜粋）

【教員アンケート】これまでの FD 活動によって自らの授業改善が行われたか

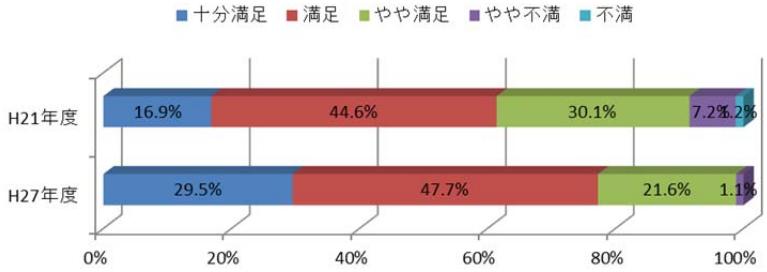


（平成 27 年度 FD 活動報告書より抜粋）

（事務局資料）

資料 1-1-32　学部教育に対する学生の評価

設問：専門の教育全般について，あなたはどの程度満足していますか。



※第１期末と比較して第２期末では学生の満足度（十分満足～やや満足と回答した割合）は 7.3%向上している。特に，十分満足～満足と回答した割合は 15.8%向上している。

（平成 21 年度および平成 27 年度「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」結果より抜粋）

【教員評価】

３年毎に教育，研究等を評価領域として教員個人評価を実施している。学部の評価基準に則り各領域の取組状況・実績について学部長評価・学長評価を行い，結果を処遇改善に反映させている。教員の評価点は概ね高く，これは教員が十分な教育活動を実施していることの証左である（**資料 1-1-33，34**）。

資料 1-1-33　教員評価に係わる基本方針（抜粋）

教育地域科学部及び教育学研究科教員評価に関わる基本方針

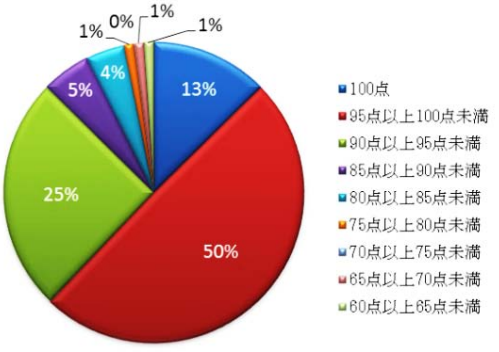
第１　個人評価の目的については，国立大学法人福井大学教員評価規程第２条の「評価の目的」に従う。
第２　個人の評価結果案は，被評価教員のみに通知される。ただし，学部長・研究科長及び福井大学教育地域科学部及び大学院教育学研究科評価委員会（以下「学部及び研究科評価委員会」という。）委員は，各教員の評価結果案を知ることができる。
第３　収集されたデータについて，新たに別目的に使用しようとする場合には，その都度，可否を教授会・研究科委員会に諮る。
第４　評価対象者は，教授，准教授，講師，助教及び助手であって，評価対象期間中に１年以上在籍している者とする。ただし，助教及び助手の評価項目等については別に定める。
第５　評価は，３年毎に実施し，評価を実施する年度の前年度以前の３年間（本学における在職期間が３年未満の場合は，当該期間）を対象とする。
第６　教員の活動実績等の総合データベースへの個人データ入力は，各教員自身で行うこととし，毎年，前年４月から３月までのデータを９月末までに入力する。
第７　評価の領域は，①教育活動，②研究活動（芸術領域を含む），③社会貢献・国際交流活動，④管理運営活動の４領域とする。
第８　４評価領域の評価点の合計は 100 点とする。４領域とも上限は 20 点として，残りの 20 点分については以下のとおり個別の領域に加配することで処理するものとする。
イ）加配は，４評価領域のうち評価対象教員が選択した２領域について，それぞれ点数を 1.5 倍することにより行う。
ロ）加配の選択にあたっては，４評価領域のうち①教育活動と②研究活動（芸術領域を含む）のいずれか一つを，必ず選択するものとする。この２領域を共に加配領域とすることは構わない。
第９　本学部及び本研究科における教員の個人評価の基本は，自己評価に基づく同僚評価であり，その実施は福井大学教育地域科学部及び教育学研究科教員評価実施委員会（以下「学部及び研究科教員評価実施委員会」という。）が行う。
第 10　学部及び研究科教員評価実施委員会は，各教員の自己評価及び必要な評価資料に基づき，各評価領域の活動状況の評価を行い，評価原案を作成する。
２　学部及び研究科教員評価実施委員会は，前項の各教員の評価原案を学部長・研究科長に提出する。
第 11　学部長・研究科長は，第 10 で提出された評価原案に基づき，学部及び研究科評価委員会の議を経て，評価結果案を作成する。
２　学部長・研究科長は，各教員の評価結果案を，当該教員に通知する。
３　学部長・研究科長は，全学の評価委員会に対し，評価実施年度の２月末日までに評価結果案を提出する。
第 12　評価基準，評価項目その他教員評価実施のための具体的な方法については，学部及び研究科評価委員会が定める。

（事務局資料）

資料 1-1-34　教員評価の評点分布（４領域）

■　平成 26 年度教員評価分布

点　数	人数
100点	12
95点以上100点未満	47
90点以上95点未満	24
85点以上90点未満	5
80点以上85点未満	4
75点以上80点未満	1
70点以上75点未満	0
65点以上70点未満	1
60点以上65点未満	1
計	95



（事務局資料）

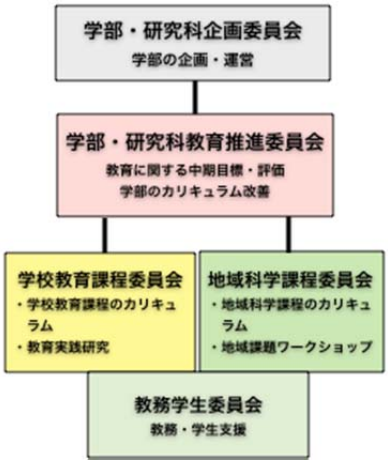
●教育プログラムの質保証・質向上のための工夫とその効果

【教学マネジメント体制】

教学マネジメントについては教育推進委員会が両課程委員会，教務学生委員会を所掌し，教育プログラム改善のための体制とPDCAサイクルを確立している(**資料1-1-35,36**)。

資料1-1-35　教学マネジメント組織

学部・研究科教育推進委員会が中心となって，カリキュラム・ポリシー，ディプロマ・ポリシー，教員養成スタンダードの策定，カリキュラム評価，授業評価の実施と教員へのフィードバックなどを実施している。



（事務局資料）

資料1-1-36　学部・研究科教育推進委員会要項（抜粋）

福井大学教育地域科学部及び大学院教育学研究科教育推進委員会要項

（設置）

第１　教育地域科学部及び大学院教育学研究科に，福井大学教育地域科学部及び大学院教育学研究科教育推進委員会（以下「委員会」という。）を置く。

（目的）

第２　委員会は，学部及び大学院の教育活動に関し，次の各号に掲げる事項を審議する。

（１）教育活動に関する中期目標の設定と評価に関する事項
（２）教育関連GPの申請に関わる事項
（３）カリキュラム改善に関する事項
（４）学部卒業生及び大学院修了生のフォローアップに関する事項
（５）競争的配分経費に関わる教育プロジェクトの審査に関する事項
（６）その他学部・大学院の教育活動に関する学部長からの諮問事項

（組織）

第３　委員会は，次の各号に掲げる委員をもって組織する。

（１）教育担当の副学部長
（２）教育学研究科専攻・領域主任会副委員長　　１名
（３）教育学研究科教職開発専攻専任教員　　１名
（４）教育地域科学部教務学生委員会委員長
（５）教育地域科学部学校教育課程委員会委員長
（６）教育地域科学部地域科学課程委員会委員長
（７）教育地域科学部及び大学院教育学研究科就職委員会委員長
（８）教授会選出の教員　　４名
（９）前各号に掲げる者以外の教育地域科学部の教員　　若干名

２　前項第３号の委員は，選出母体の委員の互選による。

（任期）

第４　第３第１項第８号及び第９号の委員の任期は２年とし，再任を妨げない。

２　委員に欠員が生じた場合の補欠委員の任期は前任者の残任期間とする。

（委員長）

第５　委員会に委員長を置く。

２　委員長は，第３第１項第１号の委員をもって充てる。

（「福井大学教育地域科学部及び大学院教育学研究科教育推進委員会要項」より抜粋）

【外部評価・第三者評価】

学部・研究科評価委員会が中心となって５年毎に外部評価を実施している。第２期では平成 25 年度に外部評価を実施し，本学部の取組について評価委員から高い評価を得た（**資料 1-1-37，38**）。

資料 1-1-37　外部評価実施委員会要項

福井大学教育地域科学部・教育学研究科外部評価実施要項

（趣旨）

第１　この要項は，本学部及び研究科を対象として実施する外部評価（以下「外部評価」という。）に関し必要な事項を定める。

（外部評価委員会）

第２　本学部及び研究科に福井大学教育地域科学部・教育学研究科外部評価委員会（以下「外部評価委員会」という。）を置く。

２　外部評価委員会は，学外有識者若干名をもって組織する。

３　委員は，教授会の議に基づき，学部長が委嘱する。

４　委員の任期は，当該年度の末日までとする。

５　外部評価委員会に委員長を置く。

６　委員長は，委員の互選による。

（外部評価準備委員会）

第３　本学部及び研究科に，外部評価の実施に関する必要な事項を検討するため，福井大学教育地域科学部・教育学研究科外部評価準備委員会（以下「準備委員会」という。）を置く。

２　準備委員会は，次の各号に掲げる委員をもって組織する。

（１）学部選出の評議員　　１名

（２）附属学校担当の副学部長

（３）福井大学教育地域科学部及び大学院教育学研究科評価委員会（以下「評価委員会」という。）委員（ただし，学部長及び前各号の委員以外の評議員，副学部長を除く。）

（４）本学部及び研究科の教員　５名

３　前項第１号及び第４号の委員は，学部長が指名する。

４　第２項第４号の委員の任期は，１年とし，再任を妨げない。

５　準備委員会に委員長を置き，第２項第１号の委員をもって充てる。

６　準備委員会に副委員長を置き，委員の中から学部長が指名する。

（外部評価実行委員会）

第４　本学部及び研究科に，準備委員会が検討した事項に基づき外部評価を円滑に実施するため，福井大学教育地域科学部・教育学研究科外部評価実行委員会（以下「実行委員会」という。）を置く。

２　実行委員会は，次の各号に掲げる委員をもって組織する。

（１）評価委員会委員及び第３第２項第４号の委員

（２）前号の委員が所属する講座（発達科学講座には附属教育実践総合センターを含む）以外の講座から推薦された教員　各１名

（３）前各号に掲げる者以外の教育地域科学部の教職員　　若干名

３　前項第３号の委員は，学部長が指名する。

４　第２項第２号及び第３号の委員の任期は，１年とし，再任を妨げない。

５　実行委員会に委員長を置き，学部長をもって充てる。

（「福井大学教育地域科学部・教育学研究科外部評価実施要項」より抜粋）

資料 1-1-38　平成 25 年度外部評価結果

●外部評価委員会開催日：平成 25 年 12 月 26 日
●外部評価委員：松田 正久（愛知教育大学学長，日本教育大学協会会長）：委員長
岩田 康之（東京学芸大学教授）
小和田 和義（福井県教育庁企画幹-学校教育）
西川 満（福井県高等学校長協会長-武生高等学校長）
青山 庸（福応会会長：同窓会組織）
山下 裕己（福井新聞社論説主幹）

●福井大学教育地域科学部・教育学研究科外部評価結果【委員長総括】

教育地域科学部・教育学研究科（教職大学院含む）のいずれの教育組織も，単位教育組織ごとに，アドミッション・カリキュラム・ディプロマの各ポリシーを定め，それにふさわしい学生を確保，教育し，社会に送り出していることは，福井大学の就職率が全国一であることからも高く評価できる。

教育地域科学部の学校教育課程においては，「地域と連携した教育環境を組織できる教員の養成」，地域科学課程では「地域社会の持続的な発展，地域文化の創造，共生と自治の実現に資する人材の養成」を目的に，それぞれの課程委員会を中心に，学生第一のきめ細かい運営がなされている。

特に学校教育課程における 2011 年度から試行，2012 年度から本格運用が始まった「教員養成スタンダード」は，「教師になるにあたって目指すべき目標」と「目標に向かって行われた学習の成果を評価するための基準」を明確化したもので，「地域の視点からの学校教育」「実践科目群をコアに協働的な実践を促すカリキュラム構成」「世代継承サイクルによる学びの継承」などを特徴に共通スタンダードとコース別スタンダードから構成され，注目に値する。

（中略：研究科の評価）

学部入学者は，県内出身者が約 85%程度と地域依存性が高く，また卒業生の多くが教員だけでなく地域科学課程を中心に様々な職業を通じて県内に就職している現状がある。これは，まさに，多くの教員養成系大学・学部の特徴ともいえるもので，地域人材の育成に果たしている役割は極めて大きいと判断できる。

また，学部・大学院担当教員 102 人のうち女性教員が 28 人と，その割合は 27.5%となっており，男女共同参画の点から高く評価できる。

（外部評価報告書（平成 26 年 3 月）より抜粋）

【関係者の意見聴取】

① 全学的取組以外に，学部独自に関係者の意見聴取を定期的に実施している。また平成 26 年度より卒業生アンケートを実施し，それらの結果に基づいて教育の改善・向上を図っている（**資料 1-1-39**）。

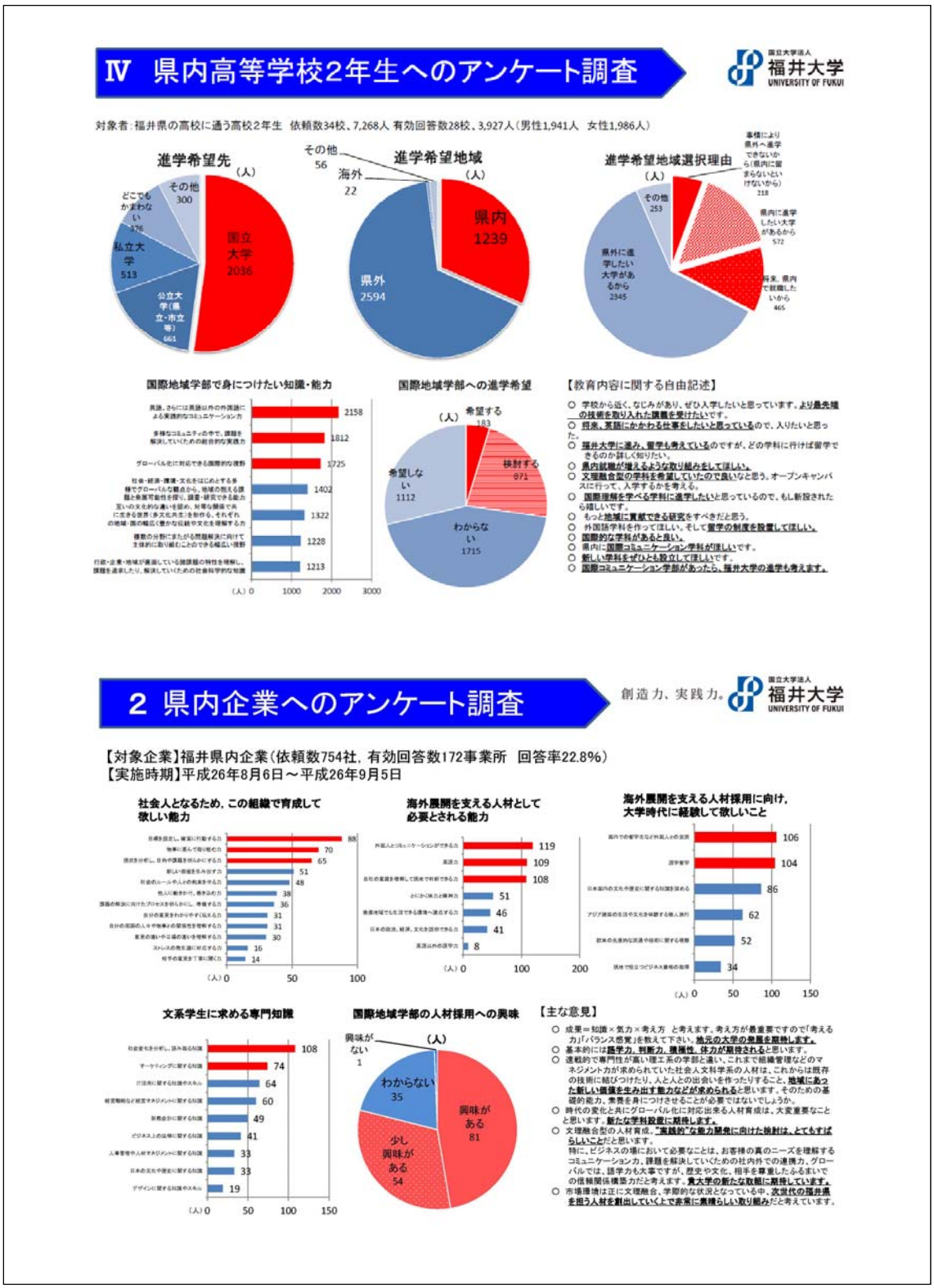
資料 1-1-39　関係者の意見聴取例

・学生生活実態調査（平成 22 年度，平成 25 年度：高等教育推進センター）
・カリキュラム評価アンケート（平成 24 年度～：高等教育推進センター）
・福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査（平成 22，26，27 年度）
・授業評価アンケート（学部・研究科教育推進委員会）
「講義」に関するアンケート：平成 22 年度後期・平成 23 年度前期，
平成 25 年度後期・平成 26 年度前期
「演習・実験・実習および実技」に関するアンケート：平成 23 年度後期・平成 24 年度前期，
平成 26 年度後期・平成 27 年度前期
・学部卒業生アンケート（平成 26 年度：学部教務学生委員会）
・卒業生に関する企業訪問調査（平成 20 年度～：学部就職委員会）
・学部長と学生との懇談会（平成 21 年度～：学部長，副学部長，教務学生委員会）
・学校教育課程・地域科学課程学生アンケート（平成 22 年度）→両課程学生アンケートの結果を受けて特別プログラム「コミュニティ・学校支援研究」を平成 24 年度に開設した（**P1-13 前掲資料 1-1-14**）。

（事務局資料）

② 関係者ニーズを調査する目的で県内高等学校２年生，県内企業及び自治体に対して意見聴取を実施した。その結果は新学部「国際地域学部」の平成 28 年度設置に繋がった（**資料 1-1-40，41**）。なお，平成 28 年度の新学部設置に伴い，地域科学課程は廃止され，教育地域科学部は教員養成に特化した学部として「教育学部」（学校教育課程）と改称し，組織も再編して新たな一歩を踏み出すこととなった。

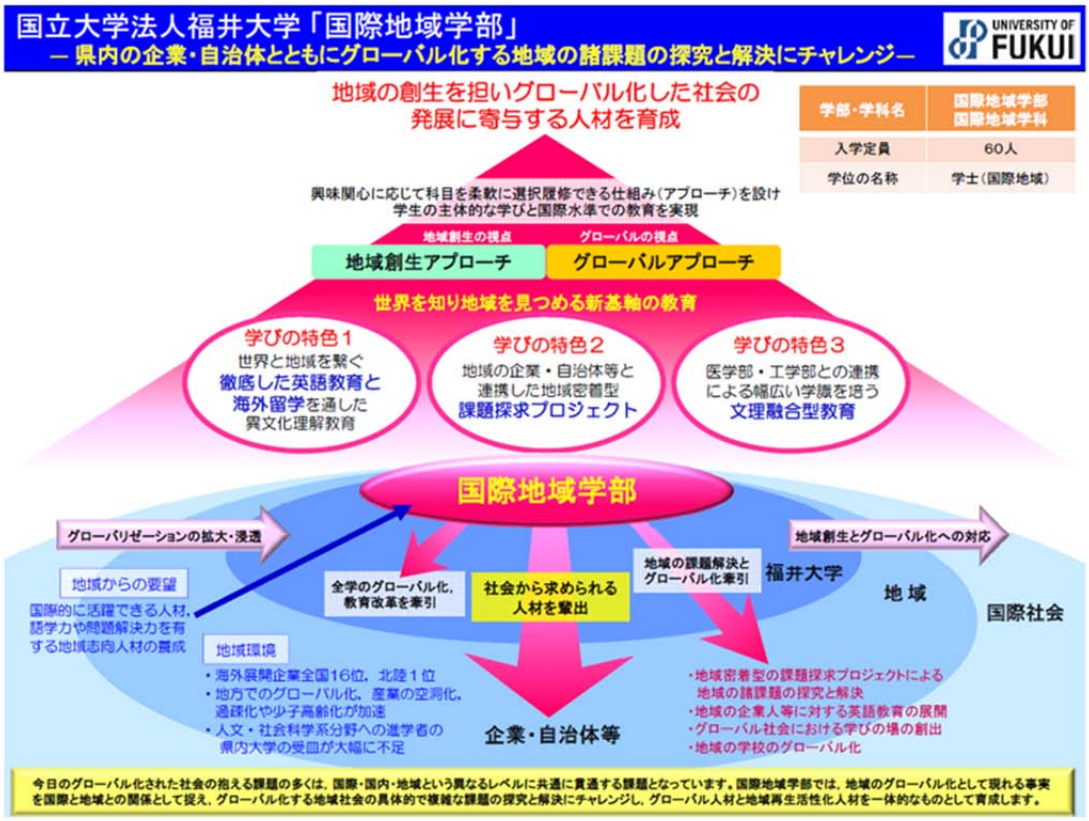
資料 1-1-40　国際地域学部の設置に繋がった関係者意見（平成 26 年度）



（事務局資料）

資料 1-1-41　「国際地域学部」および「教育学部」の概要

■　国際地域学部



■　教育学部



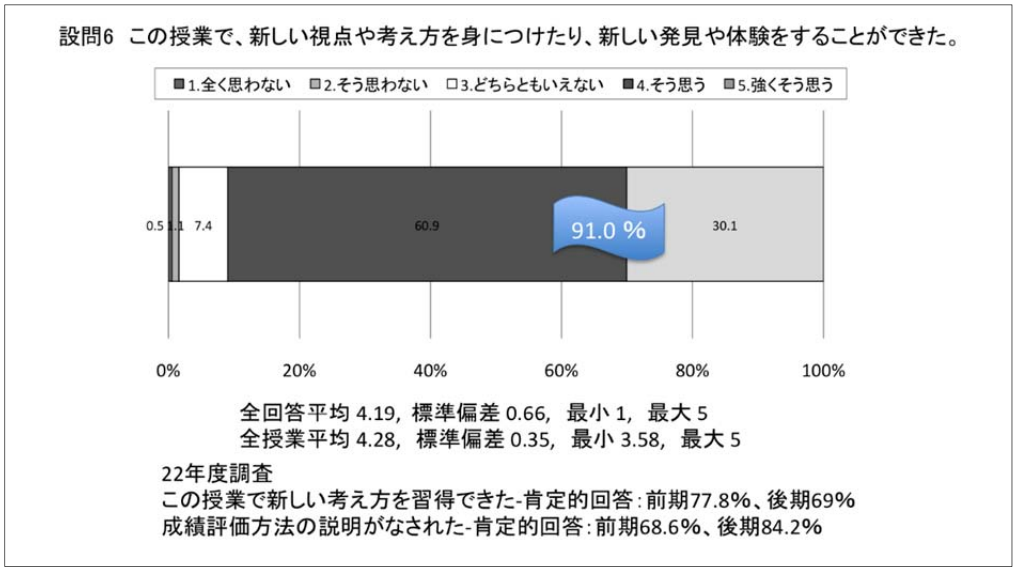
（事務局資料）

【教育改善の取組】

講義と演習・実験・実習および実技に関する授業アンケートを毎年交互に実施しており，平成 25 年度からは学生の評価を基に授業改善のための教員自己評価アンケートも実施している（**資料 1-1-42**）。また，年度末 FD 研修会では，教員同士で「授業実践の省察」を行い授業改善に結びつけている（**P1-27 前掲資料 1-1-31**）。

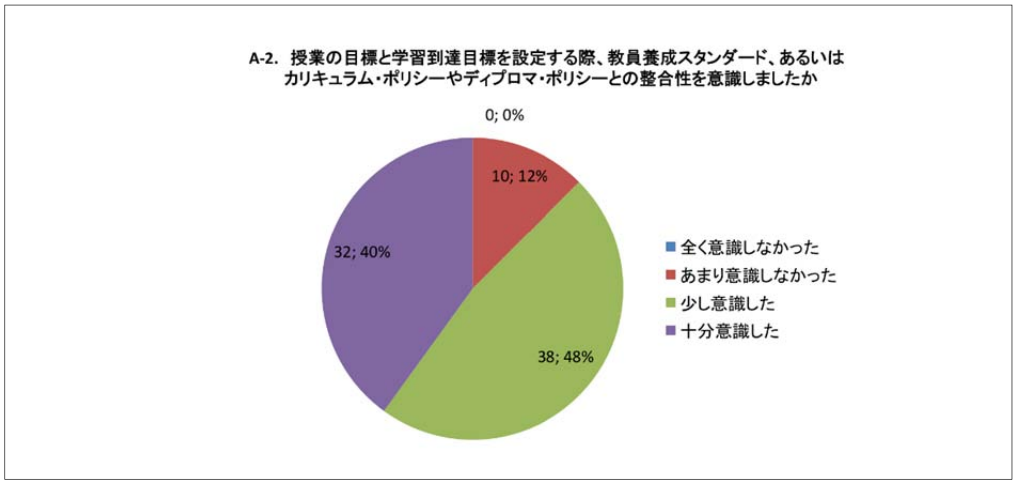
資料 1-1-42　授業アンケート及び教員自己評価アンケートの例

①学生の授業アンケート例



（平成 25 年度後期授業アンケート「授業評価実施報告書-講義に関する評価結果」より抜粋）

②教員自己評価アンケートの例



（平成 25 年度後期授業アンケート「授業評価実施報告書-講義に関する評価結果」より抜粋）

（事務局資料）

【教育情報の発信】

大学説明会，高校訪問説明会，出前授業等の活動を通して学部の教育内容等についての情報を関係者に提供するとともに，HP 上で学部教育と入試に関する情報を随時公開している（**資料 1-1-43，P1-74 後掲資料 1-2-53**）。

資料 1-1-43　高校訪問説明会実施状況（平成 27 年度）

実施日	高校名	教育地域科学部教員	帯同学生	参加者数(高校生)
6.27	丹南高校	学校教育1，地域科学1	美術３年	13
7.2	金津高校	学校教育1，地域科学1	障害児３年	37
7.7	武生高校	学校教育1，地域科学1	社会系３年	65
7.7	若狭高校	学校教育1，地域科学1	―	24
7.8	羽水高校	学校教育1，地域科学1	理数４年	30
7.8	美方高校	学校教育1，地域科学1	言語３年	21
7.9	丸岡高校	学校教育1，地域科学1	体育４年	14
7.9	武生東高校	学校教育1，地域科学1	理数３年	31
7.11	敦賀気比高校	学校教育1，地域科学1	障害児３年	14
7.14	三国高校	学校教育1，地域科学1	実践３年	5
7.14	藤島高校	学校教育1，地域科学1	生活３年	14
7.15	大野高校	学校教育1，地域科学1	言語３年	19
7.22	北陸高校	学校教育1，地域科学1	技術４年	12
7.23	仁愛女子高校	学校教育1，地域科学1	音楽４年	56
7.23	鯖江高校	学校教育1，地域科学1	生活１年	15
7.28	高志高校	学校教育1，地域科学1	理数４年	33
7.30	福井高校	学校教育1，地域科学1	理数３年	24
8.1	勝山高校	学校教育1，地域科学1	臨床４年	13
10.17	敦賀高校	学校教育1，地域科学1	保体４年	23

（事務局資料）

（水準）　期待される水準を上回る

（判断理由）

①　教育体制及び教員組織編成の工夫

教育目的の達成のため，適切な教員構成[1)]に加えて，実務経験のある教員の配置が進められている。教員養成に関わる教員のうち，教職や教育行政の経験を有する教員の割合が増加した（平成21年度16%から平成27年度27%)。三位一体改革により，附属学校園と連携した運営が行われており，平成26年度より附属学校教員の４名が教職大学院准教授を併任し，実習指導や教員研修等において中核的な役割を果たしている[2)]。また男女共同参画の推進を図るため，第２期中に女性教員の比率を高めた（平成21年度20.9%から平成27年度30.5%）[3)]。

[1)] 資料1-1-4　：教員組織　P1-5
[2)] 資料1-1-23　：附属学校の研究科併任教員（准教授）　P1-21
[3)] 資料1-1-24　：女性教員の割合　P1-21

②　教育委員会等との連携

「教育実習等運営協議会」を設け，県及び市教育委員会，教育実習協力校との連携の緊密化を図っている[3)]。また，県教育委員会と連携した福井大学コア・サイエンス・ティーチャー（CST）養成プログラムを実施しており[4)]，教育関係者の期待に応えている。この取組は大学機関別認証評価で高く評価された。

[3)] 資料1-1-11　：教育実習等運営協議会要項（抜粋）　P1-10
資料1-1-12　：教育実習等運営協議会開催状況（平成27年度）　P1-11
[4)] 資料1-1-13　：CST（コア・サイエンスティーチャー）事業の概要　P1-12

③　教育プログラムとしての実勢体制

就業力GP，産業界ニーズGPの採択を受けて地域共生プロジェクトセンターを設置し，地域参画型の実践教育と専門教育を繋ぎ就業力を高める教育プログラムを展開し成果を上げており[5)]，特に企業等関係者の期待に応えている。

学生の要望を基に両課程にまたがる特別プログラムを開始し，学校教育課程の学生は学芸員等の資格，地域科学課程の学生は教員免許の取得が容易になり学生の期待に応えている[6)]。また，県内高校生および自治体のニーズを調査し，地域科学課程をベースとする新学部「国際地域学部」の設置（平成28年度）に繋がった[7)]。

[5)] 資料1-1-16　：地域共生プロジェクトセンターの概要　P1-15
資料1-1-17　：産業界ニーズGP概要　P1-16
[6)] 資料1-1-14　：特別プログラム「コミュニティ・学校支援研究」　P1-13
資料1-1-15　：特別プログラム「コミュニティ・学校支援研究」受講状況（平成28年３月現在）　P1-14
[7)] 資料1-1-40　：国際地域学部の設置に繋がった関係者意見（平成26年度）　P1-33

④　教員の教育力向上のための体制整備

FDや評価関連委員会を中心に学部を挙げて教育改善に継続的に取り組む体制が構築されており８)，平成25年度からは教員の授業実践を省察する「年度末FD研修会」を実施している９)。専門教育に対する学部生の評価も向上している10)。

[8)] 資料1-1-30　：ファカルティ・ディベロップメント委員会要項（抜粋）　P1-26
[9)] 資料1-1-31　：FD活動の例　P1-27
[10] 資料1-1-32　：学部教育に対する学生の評価　P1-28

観点　教育内容・方法

(観点に係る状況)

●体系的な教育課程の編成状況

【養成する能力等の明示】

学部規程に基づき課程ごとにディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシーを定め複数の媒体で学生に周知している（**資料 1-2-1～4**）。教員養成については県教委と協議の上「教員養成スタンダード」を策定した。スタンダードには教師に求められる能力等が示され教育関係者の期待に応える内容となっており，平成 25 年度に実施された外部評価において，高い評価を得ている（**資料 1-2-5**）。

資料 1-2-1　学部規程（抜粋）

福井大学教育地域科学部規程

第１章　教育課程

第１条　福井大学教育地域科学部（以下「本学部」という。）に学校教育課程，地域科学課程を置く。

２　福井大学学則第２条３項に規定する，本学部における人材の養成に関する目的その他の教育研究上の目的は，次のとおりである。

（１）学部

本学部は，実践的力量のある学校教員の養成，地域の創造と発展に貢献できる人材の養成を目的とし，教育科学や地域科学の学際的総合的な研究成果によって広く社会の発展に寄与することを使命とする。

（２）課程

学校教育課程　子どもたちの探求心，思考力及び創造性を育み，地域と連携した教育環境を組織できる教員の養成を目的とする。

地域科学課程　地域社会の持続可能な発展，地域文化の創造，共生と自治の実現に資する人材の養成を目的とし，地域の諸課題について実践的な教育研究を行う。

（「福井大学教育地域科学部規程」より抜粋）

資料 1-2-2　ディプロマ・ポリシー

学部全体	教育地域科学部は，子どもへの深い理解と子どもの主体的な学びを組織する専門的・実践的な力量を備えた学校教員の養成，ならびに，地域の特性と課題に対する関心と意欲をもち，地域や国際社会の発展に貢献できる人材の養成を目的としている。この目的を達成するために策定された教育課程の方針と編成のもとで，修業年限以上在籍し，所定の単位を修得した者に対して，学位を授与する。 http://www.u-fukui.ac.jp/wp-content/uploads/diploma-curriculum-course.pdf
学校教育課程	修業年限以上在学し，かつ教育課程編成の方針に基づいて編成された科目を共通教育規程及び教育地域科学部規程において定められた所定の単位数を修得することにより，教科や教職の専門的・実践的力量ならびに公教育の担い手としての自覚と責任感を備え，以下のような能力を身につけたと認められる者に対して学位を授与する。 1. 生涯にわたって学び続ける基盤 地域や学校における実践コミュニティの一員として，また学びの専門職として，グローバルな視点から地域に参画し，他者と協働し，生涯にわたって学び続ける基盤を有する。 2. 協働的な学習や問題解決的な学習の指導と評価 子どもたちが活動的で協働的な学習，また教科の特性に応じた問題解決的な学習を行うことができるように，教育の目的・目標・内容，及び子どもの発達や地域社会に関する知識に基づいて指導と評価の計画を立てることができる。 3. 教科における重要な概念と探究の方法に関する理解 子どもたちの知的・社会的・個性的な発達を支援するために，各教科・領域における重要な概念と固有の探究方法，及びそれらを子どもたちが学習していくプロセスに関して深い理解を有する。 4. 民主的な集団活動の運営方法と道徳的な指導 子どもたちが平和で民主的な社会のあり方と人間らしい生き方について理解を深められるように，集団活動の運営方法や道徳的な指導を行うことができる。

学校教育課程	5．子どもたちの個性に応じた成長と発達の支援 子どもたち一人ひとりの個性に応じた成長と発達を支援することができる。 6．学識形成の足跡を示す学習成果の公開 上記１から５の能力を裏付けるために，学識が形成された足跡を示す学習成果をまとめて，公開することができる。 http://www.u-fukui.ac.jp/wp-content/uploads/diploma-curriculum-course.pdf
地域科学課程	修業年限以上在学し，かつ，教育課程編成の方針に基づいて編成された科目を共通教育規程及び教育地域科学部規程において定められた所定の単位数修得することによって，以下のような関心，意欲，知識及び能力を身につけた者に対して，学位を授与する。 １．国内外の地域の特性と課題に対する関心と意欲 一定の地理的空間において教育，文化，政治，経済，環境等の様々な要素が絡み合った複合的システムとして捉えられる「地域」について，その国内外の具体例が持っている特性と課題を解明し，実践的な活動を通して地域社会の発展や文化の創造に貢献することに高い関心を持ち，そのような貢献に向けて積極的に取り組む意欲を有する。 ２．実践的課題解決力 外国語，調査・データ分析，行政運営等に関する基礎的実践的なスキルを有し，適切な情報収集・分析能力，コミュニケーション能力，プレゼンテーション能力を用いてチームワークの中でリーダーシップを発揮しつつ課題の解決に取り組むことができる。 ３．多角的・学際的基礎知識と個別専門知識の修得 地域の特性と課題を多角的・学際的な視点から探求するための幅広い基礎的知識を有するとともに，各系で目標とされている次のような専門的知識と能力を有する。 【地域分析系】 地理学，社会学，生活経営学，情報技術，統計学等の専門知識を有し，社会調査法や統計分析を活用して地域社会や住民生活の諸課題を解明できる。 【公共政策系】 法学・政治学，経済学・経営学等の専門知識を有し，地域政策の立案・遂行や地域社会あるいは企業組織等の合理的・効果的運営に寄与できる基礎的能力を有する。 【環境マネジメント系】 環境マネジメント，生物学，環境科学等の専門知識を有し，様々な環境問題を理解する能力を持つ。 【生涯学習系】 社会教育学，博物館学，芸術学，心理学，生理学，運動学等の専門知識を有し，市民の生涯学習の企画・運営および支援に寄与することができる。 【国際文化系】 英米文化，ドイツ文化，フランス文化，中国文化等の専門知識を有し，複眼的視座から多様な価値観に根差した地域の文化的特性を理解することができる。 【言語コミュニケーション系】 英語，中国語を中心に言語やコミュニケーション等の専門知識を有し，英語，中国語の実践的運用能力を用いて，各地域の特性の解明や多文化共生社会に寄与することができる。 ４．変化が激しい時代状況に即した柔軟な思考力と課題対応力 多様な地域社会や文化のあり方について理解し，答えの得難い課題にも専門的知識・能力を生かして取り組むことができる。また，それを通じて地域間・文化間の共生や自治の実現等に貢献できる。 http://www.u-fukui.ac.jp/wp-content/uploads/diploma-curriculum-course.pdf

（事務局資料）

資料 1-2-3　カリキュラム・ポリシー

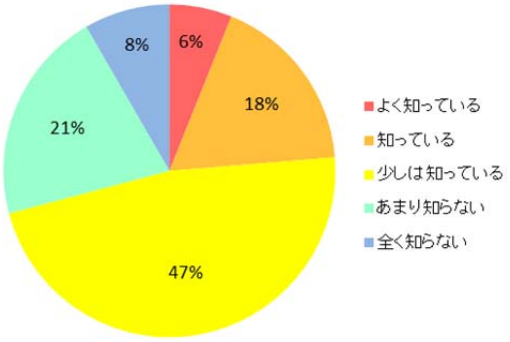
学部全体	教育地域科学部は，学校教員の養成を目指す学校教育課程，ならびに，地域づくりの担い手の育成を目指す地域科学課程の二つの教育課程から構成される。学校教育課程にあっては，子どもの探究心，思考力および創造性を育み，地域と連携した教育環境を組織するための専門的能力を育成する。また，地域科学課程にあっては，地域社会の発展，地域文化の創造，ならびに，共生と自治の実現に貢献できる能力を身につけさせ，地域の諸課題を実践的に解決できる能力を育成する。 以上を実現するため，次のような両課程共通の特徴をもった教育課程を編成する。 １．専門性と総合性を高めるためのバランスのとれた科目構成 ２．各専門領域における課題を探究する力および問題解決能力の修得 ３．各専門領域における実践的な能力の修得 ４．協働的な活動，学習を通して民主的に合意を形成する力の修得 ５．学習成果の共有による世代継承サイクルの構築 さらに，２つの課程別のカリキュラムに加えて，両課程をつなげた教育プログラムを編成し，地域の特性と課題を理解して住民参加型の学校づくりを実践できる教員，ならびに学校教育に理解をもち，地域づくりに貢献する人材の養成をめざす。 http://www.u-fukui.ac.jp/wp-content/uploads/diploma-curriculum-course.pdf

学校教育課程	学校教育課程では，公教育の担い手として多様な人々と協働しながら，学識に支えられた指導力により子どもたちの学習・発達を支援し，生涯にわたって学び続ける教師を育てるために，以下のような特徴を有する教育課程を編成し，実施する。 １．幅広い専門領域を担う教員組織と新しいカリキュラム開発 多様な教科内容，教科教育，教育学を専門とするスタッフが協働し，近年の重要課題を視野に入れた授業やカリキュラムを開発する。また，地域での実践を土台にグローバルな視点から学校教育のあり方について考えることを支援する。 ２．実践と省察をコアに持つ協働的な学習 子どもたちの成長と発達を促す実践への参加と省察を繰り返す,専門職的な学習経験をコアに据えて，各科目の学習内容を理解させる。初年次より教師に求められる専門職的な学習を積み重ね，１年生から４年生までの学生が協働して学習することにより，その学習が深められるよう支援する。 ３．教科の専門性を高めるバランスある科目配置 教科固有の内容と探究方法を，講義・演習・実験・実習・実技・卒業研究等を通して，バランスよく学習させる。また，教科が成立する根拠や意義，歴史的背景について理解を深め，教科の目的・目標・内容について考えさせる。各科目においては，カリキュラム・単元・授業・教材・活動の開発と提案・実践や，様々な記録に基づいた事例研究を行い，科目における学習内容を統合的に理解させる。 ４．学習成果に支えられた世代継承サイクル 学識形成の足跡を示す学びの履歴・成果をまとめることにより，先行の世代の経験から学び，後の世代に自身の経験を伝えるサイクルを組み込んだ学習コミュニティを育成する。 ５．専門職としての力量形成に資する評価 専門職としての教師の能力を多面的に評価するために，協働的な探究のプロセスやそこで育まれた能力を把握し，目標と学習そのものを問い直す学習個人誌を作成し，公開させる。 http://www.u-fukui.ac.jp/wp-content/uploads/diploma-curriculum-course.pdf
地域科学課程	実践的力量のある学校教員及び地域の創造と発展に貢献できる人材を養成するとともに，教育科学や地域科学の学際的総合的な研究成果によって広く社会の発展に寄与するという本学部の教育研究上の目的・理念に基づき，地域の特性と課題について実践的な教育を行う。この基本方針の下に，以下のような特徴を有する教育課程を編成する。 １．総合的専門性と個別専門知識獲得のためのバランスある科目配置 多岐にわたる地域の特性と課題を理解することにより，個別の研究テーマをより深く分析できる能力を身につけさせるため，地域課題ワークショップ科目，スキルアップ科目，地域科学基礎科目，専門科目のバランスある配置に留意したカリキュラム編成を行い，総合的専門性と個別専門知識の連動的・複合的な修得を可能にする。 ２．関心分野・課題の明確化 地域の特性と課題への問題意識と実践的な問題解決能力の基礎を培うため，１，２年次に，地域科学基礎科目，地域課題ワークショップ Ⅰ 及び II を履修させることにより，学生の関心分野・探求課題を明確にさせる。 ３．実践的スキルの修得 スキルアップ科目（英語コミュニケーション科目，調査・データ分析科目，行政運営基礎科目）を１，２年次において履修させることにより，高学年次における専門的な課題探求に欠かせない知的ツールを身につけさせるとともに，卒業後に様々な職場で必要とされる基礎的・実践的なスキルの修得を可能にする。 ４．ワークショップ科目による課題探求・解決力の獲得 課題探求・解決のためのグループ・ワークと参加者全体での省察を行う「地域課題ワークショップ科目 I～IV を各学年に段階的に配置し，専門科目の履修と連動させることにより，地域社会における様々な活動分野で求められる協働での課題探求・問題解決能力，情報収集・分析能力，プレゼンテーション能力，コミュニケーション能力の修得を可能にする。 ５．多面的履修と研究テーマの深化 ２年次後期以降は６つの専門分野（系）のいずれかに所属させる。それと同時に，個々の学生の探求課題に即して他の系の専門科目も併せて履修することを可能にし，そのような多面的履修を含む各系における学習の成果を卒業研究へと結実させる。 ６．グローバルな視野を有する高度専門職業人として備えるべき能力の育成 地域社会の発展，地域文化の創造，ならびに，共生と自治の実現に貢献できる能力を身につけさせるという教育課程の中で，国際的な交流を視野にいれた高度専門職業人として，地域社会の発展や地域文化の創造をグローバルな視野により捉え得るように配慮する。特に，人間としての自らの責務を果たし，他者に配慮しながらチームワークやリーダーシップを発揮して社会的責任を担いうる倫理的，社会的能力の修得を可能にする。 http://www.u-fukui.ac.jp/wp-content/uploads/diploma-curriculum-course.pdf

（事務局資料）

資料 1-2-4　カリキュラム・ポリシー，ディプロマ・ポリシーの周知状況

設問：カリキュラム・ポリシー（教育課程の編成・実施の方針）とディプロマ・ポリシー（学位授与の方針）は，それぞれカリキュラムの目的・内容・編成方針と卒業までに皆さんが達成すべき学修目標を明示したものです。これらはホームページ，シラバス，学生便覧などに掲載されています。あなたはカリキュラム・ポリシーやディプロマ・ポリシーを知っていますか？



教育地域科学部　回答数：443

（平成 27 年度「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」結果より抜粋）

資料 1-2-5　教員養成スタンダード

■教員養成スタンダード

平成 24 年度 福井大学教育地域科学部 教員養成スタンダード 共通

【A】本学部の教員が共有すべき使命

1. 公教育の担い手としての自覚を持った教師を育てる。
2. 子どもが社会の一員として主体的に生きていけるよう，子どもの学習・発達を支援する教師を育てる。
3. 多様な人々と協働し，社会と教育の受け手に対する応答責任を果たす教師を育てる。
4. 生涯にわたって省察的に学び続ける教師を育てる。
5. 学識に支えられた指導力を発揮する教師を育てる。

↓↑

【B】本学部の学生が目指すべき目標

1. 学習の専門職として生涯にわたって学び続ける土台を築く。
2. 実践コミュニティの一員として，他者と協働し，他者の実践事例や自身の実践から学ぶ。
3. 活動的で協働的な学習を子どもたちが行うことができるよう，適切な学習環境・生活環境をつくりだす。
4. 教科の特性に応じた問題解決的な学習を子どもたちが行うことができるよう，教科固有の様々な方略を理解し用いる。
5. 担当する教科における重要な概念と探究の方法を子どもたちが学習していくプロセスを理解しており，子どもたちがそれらを学ぶことで知的・社会的・個性的に発達するよう支援する。
6. 担当する教科における重要な概念と探究の方法を理解しており，子どもたちがそれらを意味あるものとして学ぶことができるような経験をつくりだす。
7. 教育目的・教育内容・子ども・地域社会に関する知識に基づいて，教科と教科外活動における長期に渡る探究的な学習を支える指導と評価の計画を立てる。
8. 子どもたちが民主的に集団活動を運営する実践的能力を発達させるよう，様々な文化的活動や集団活動をつくりだす。
9. 子どもたちが生き方を模索するプロセスを理解しており，平和で民主的な社会のあり方と人間らしい生き方について理解を深め，個性的に発達するよう支援する。

↓↑

【C】上記の目標を実現するために学生に保障すべき学習経験

1. 子どもたちの成長と発達を促す実践に参加する。
2. 実践と省察を繰り返す専門職的な学習のプロセスを経験する。
3. 教科が成立する根拠や意義，歴史的背景について理解を深め，教科の目的・目標・内容について考えさせる。
4. 教育内容と方法，および人間の学習・発達や教育の理念・歴史・制度に関する理解を統合的に発達させるために，総合的事例に基づいた事例研究を行う。

5. カリキュラム・単元・授業・学級集団の運営方法に関して実践的に理解を深めるために，カリキュラム・単元・授業・教材・活動の開発と提案を行う。
6. 学識を形成し発達の足跡を残していくために，学習個人誌を作成する。
7. 後の世代を育てることを通して発達し，また自身の発達を後の世代に伝えるために，世代継承サイクルを組み込んだ学習コミュニティを実現する。
8. 民主的な集団活動の運営が求められる協働的実践を行う。
9. 子どもの個別的なニーズを把握し受容的に関わる実践を行う。

↓↑

【D】証拠となる学習成果物

方向性	内容
1. 自身の実践・学習を組織化する。 2. 物語（ナラティブ・ストーリー）として構成する。 3. 時間軸を意識し，過去・現在・未来の時間の流れに自己を位置付ける。 4. 専門職的実践のビジョンを意識する。	1. 過去の自身の学習個人誌 2. 教育実習の記録，各教科および道徳の指導案・教材・子どもの作品 3. 介護等体験の記録 4. 探求ネットワークの報告書 5. ライフパートナーの報告書 6. 学生からの評価，コメントに関するもの 7. 教職員からの評価，コメントに関するもの 8. 文献・論文リスト

↓↑

【E】学習成果物の評価規準

1. 追究の継続性	専門職としての目標の達成のために，実践研究に十分に継続して従事してきている。
2. 追究の協働性	他者の追究を跡付け，理解し，援助してきている。
3. 追究するテーマの質	重要なテーマを追究し，深い分析を行い，学術的根拠に基づいた説得的な議論を展開できている。
4. 視野の広がり	広い視野のもとに自身の追究のテーマを位置付けている。
5. 追究の遂行性	実践と省察をデザインし，実行し，報告している。
6. 追究の重層性	１年時から積み重ねてきた報告群が証拠として含まれ，それらに随時言及しながら，自身の学習をストーリーとして描いている。
7. 専門職的実践のビジョン	自身の生涯に渡るライフコースを展望し，個性的な発達を遂げようとしていることがわかる内容になっている。

※共通スタンダードの他にコース別スタンダードもある。

■　教員養成スタンダード策定の経緯

このスタンダードの策定に向けては，まず平成 21 年度に，教員養成スタンダードとして示す能力の定義・選択とその記述・評価の方法に関する研究が行われた。ここで先行事例の検討が行われる中で，能力概念の再定義とスタンダードの記述方法の提案が行われた（八田幸恵・遠藤貴広「福井大学教育地域科学部『教員養成スタンダード』の策定に向けて」八田幸恵〔研究代表〕『教師に必要な能力の定義・選択とその記述・評価の方法に関する研究―福井大学「教員養成スタンダード」の策定に向けて―』実践的な教師教育研究拠点の基盤形成 平成 21 年度福井大学教育地域科学部重点研究 研究成果報告書，2010 年，1-11 頁）。

実際の教員養成スタンダードの策定にあたっては，まず平成 21 年 7 月 24 日開催の教授会において，「『教員養成スタンダード』策定の基本方針」として次の３点が了承された。

① 細分化された行動目標の列記は避ける。
　⇒スタンダードをコンピテンシーの形で記述する。
② 態度に直接的に働きかけることを避ける。
　⇒使命感・倫理観等を講義で教え込むようなことはしない。
③ 現行のカリキュラムを活かす。
　⇒現行の「教育実践研究」の延長線上に「教職実践演習」を位置づける。

その後，この方針のもとに教員養成スタンダード策定作業が進められた。そして，平成 22 年 3 月 5 日開催の教授会において，カリキュラム改革検討 WG 作業部会から提案された「福井大学『教員養成スタンダード』の策定方針（案）について」が「教員養成スタンダード 共通」の素案とともに了承された。さらに，この策定方針に基づき，平成 22 年度１年間かけて「教員養成スタンダード 共通」と「教員養成スタンダード 領域別」（各コース・サブコース別）を策定する作業が行われ，平成 23 年 3 月 4 日開催の教授会において「平成 23 年度版 教員養成スタンダード」が承認された。このスタンダードに基づいて平成 23 年度新設の「教職実践演習」の授業が行われた。

ただし「平成 23 年度版 教員養成スタンダード」は本学部内で策定した試行的なものだった。そこで平成 23 年度には，「教職実践演習」の試行実施と並行して，平成 23 年９月 14 日と平成 24 年２月 8 日に「福井県教育委員会と福井大学との教員養成スタンダード合同協議会」が行われた。この協議を経て平成 24 年度から本格運用されたのが，「福井大学教育地域科学部 教員養成スタンダード」である。

なお，この合同協議会では，教員養成スタンダードについての協議のみならず，これから教師に求められる能

力，その能力形成を支える教員養成カリキュラムと教員研修の在り方，それを実現するための教育委員会と大学との連携の在り方について，活発な議論が行われた。

これに加えて平成23年度末から，本学部の教員養成課程のカリキュラム評価に資する資料として，4年生作成の個人最終報告書「教職学習個人誌」を載せた冊子『学びの専門職をめざして―教職課程の意味を問い直す学生たち―（教職実践演習実施報告書）』を公刊している。「教員養成を担う大学の教職員が学生に何を提供したのか」ではなく，「教職課程で学生は何を学んだのか」「その意味を学生はどう把握しているのか」を学生自身の言葉で示した同書は，「学びの履歴」「学習経験の総体」としてのカリキュラムの具体的な中身を示す証拠資料となる。それは，採用試験合格率や授業評価アンケート集計結果といった形で示される数値では把握できない質のものである。その意味で同書は，教員養成カリキュラムの「真正の評価（authentic assessment）」に向けた取り組みに資する基礎資料となる。

（外部評価報告書（平成26年3月）より抜粋）

■　教員養成スタンダードに対する外部評価

福井大学教育地域科学部・教育学研究科の外部評価結果について（抜粋）
松田正久委員長

学校教育課程における2011年度から試行，2012年度から本格運用が始まった「教員養成スタンダード」は，「教師になるにあたって目指すべき目標」と「目標に向かって行われた学習の成果を評価するための基準」を明確化したもので，「地域の視点からの学校教育」「実践科目群をコアに協同的な実践を促すカリキュラム構成」「世代継承サイクルによる学びの継承」などを特徴に共通スタンダードとコース別スタンダードから構成され，注目に値する。

（外部評価報告書（平成26年3月）より抜粋）

（事務局資料）

【カリキュラムの体系性】

教育課程はカリキュラム・ポリシーに基づいて編成され，ディプロマ・ポリシーに示した資質・能力を涵養するために必要な授業科目を適切に配置している。教育課程は共通教育科目と専門科目から編成され，専門科目についてはカリキュラム・マップを作成公表し教育課程の体系性を明確にしている（**資料1-2-6，7**）。

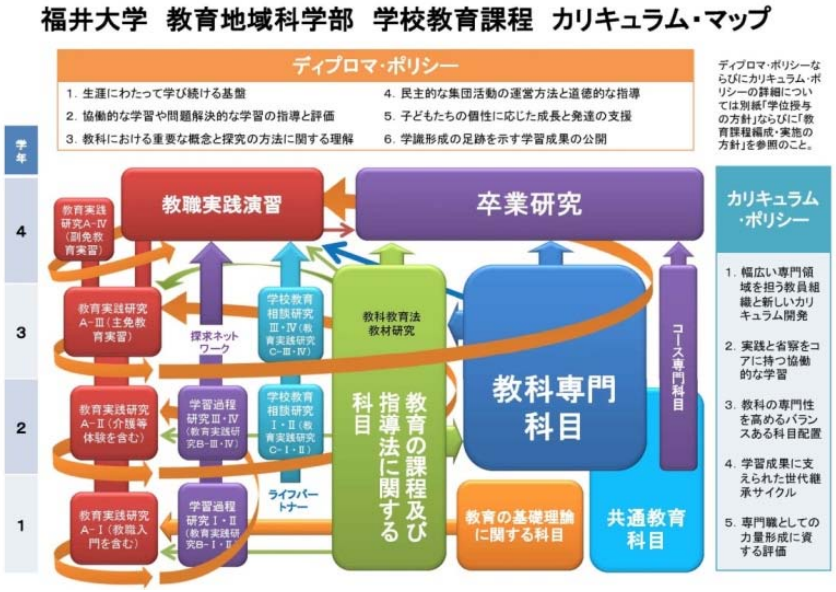
資料1-2-6　教育課程の体系性と特徴

教育課程の体系性と特徴
学校教育課程では，小学校・中学校の教員を区別なく包括的に養成。教科に関わる「言語教育」「理数教育」「芸術・保健体育教育」「生活科学教育」「社会系教育」の５コース，さらに子どもたちの発達と教育に直接関わる「教育実践科学」「臨床教育科学」「障害児教育」の３コースの計８コースからなる。これらいずれかのコースに属し，専門教科の学習に加え，小中学校９年間を見通したカリキュラム編成能力，「いじめ」，「不登校」，「科学技術離れ」など，今日の教育の抱えるさまざまな課題に対処する教員養成をめざしている。 実践教育の一つとして，学生による不登校児童援助活動（ライフパートナー事業）や教育実習の前後を通したきめこまかな指導（放課後チューター事業），子どもたちの共同探求のコミュニティを支える探求ネットワーク事業など，教師としての実践的力量形成をめざしたプロジェクトにも取り組んでいる。 地域科学課程では，「地域分析系」「公共政策系」「環境マネジメント系」「生涯学習系」「国際文化系」「言語コミュニケーション系」の６つの系のいずれかに所属し，それぞれの系で開講される専門分野の授業科と学生の問題意識の醸成と課題探求・解決能力，コミュニケーション能力等の育成を目指す「地域課題ワークショップ科目」の「応用」「総合」を中心に履修し，快適な生活環境の形成，地域文化の創造，多様な人々の共生，産業の活性化や自治体行政のレベルアップなど，これからの地域社会が抱える諸課題を的確に分析し，解決の方向を見出すとともに，みずから地域の人たちと力をあわせた解決に取り組む能力と専門知識を備えた人材養成を目指している。

（事務局資料）

資料 1-2-7　カリキュラム・マップ

■　学校教育課程



■　地域科学課程



（事務局資料）

【専門教育と教養教育の関わり】

幅広い教養を涵養するための「共通教育科目」の履修が卒業要件となっている。専門教育では各専門分野における知識・技能を習得するために必要な科目を適切に配置している。共通教育，専門教育ともに学生の満足度は高く，第１期に比べて向上している（**資料 1-2-8～12，P1-28 前掲資料 1-1-32**）。

資料 1-2-8　共通教育と専門教育の関係



●共通教育科目は，新入生の大学生活への円滑な移行を目的とした**「大学入門セミナー」**，グローバル化・情報化社会に対応するための**「基礎教育科目」**（外国語，保健体育，情報処理）と**「教養教育・副専攻科目」**から編成される。教養教育・副専攻科目は多様な学問分野に関心を持ち視野を広げることを目的とした「共通教育・副専攻科目」と工学部と教育地域科学部の専門科目の中の基礎的科目を抽出して構成される「専門教育・副専攻科目」があり，後者の履修により専門教育への円滑な接続が行われている。

●平成 28 年度の新学部設置と学部改組に合わせて共通教育の教育課程の再編が検討されてきた。平成 26 年度より COC 事業の一環として共通教育・副専門科目の中で開講されていた科目を中心に，**地域コア科目群**（ものづくり・産業振興・技術経営分野，持続可能な社会・環境づくり分野，原子力・エネルギー分野）に再編され，平成 28 年度入学生より選択必修科目となった。改組とともに共通教育の再編も第２期の成果である。

（事務局資料）

資料 1-2-9　共通教育の授業内容の例

科目区分名	授業科目名	授業内容の概要等
大学教育入門セミナー	大学教育入門セミナー	高校から大学への勉学方法の転換を助け，大学生活を健康かつ有意義に過ごすことのできるよう，学生諸君が自ら考え行動するためのヒントを与えると共に，大学生活の初期の段階で，所属する学部の課程・学科などの担当教員による指導を受け，自らの専門分野を自覚し，また，より広い視野をもって大学での勉学ができるようになることを目的とする。
基礎教育科目	情報処理基礎	情報処理に関する基礎的知識と技術を習得することを目的とする。受講生はネットワークに接続されたパーソナルコンピュータに実際に触れながら，メールやウェブサイト閲覧，文書作成，描画，表計算などのアプリケーションソフトの利用を学ぶ。また，Web による受講登録・図書館蔵書検索・就職情報閲覧など学内外で必要な基礎技術の習得も目指す。
教養教育・副専攻科目	批判的思考を伸ばす	現在およびこれからの社会では，自分で考え自分で問題を解決していく能力が強く求められている。試験などの場面だけでなく，生活の中で実際に行動し，実際の問題場面で問題が解決できる実践的な能力が求められているのである。このような能力の中核は，問題を自分で見つけ出し，これに対する最善の解決方法を見つけ，実際に問題を解いていく力，すなわち批判的思考や問題解決能力である。この授業は，このような能力，とりわけ批判的思考を伸ばしていくことをねらいとしている。

（事務局資料）

資料 1-2-10　卒業に必要な共通教育科目と専門科目の単位数

（単位）

課程・コース・サブコース			共通教育科目	専門教育科目		卒業所要単位数
				必修科目	選択科目	
学校教育課程（教育学）	言語教育コース	国語教育サブコース１系	38	62	36	136
		国語教育サブコース２系		52	46	
		英語教育サブコース１系		64	34	
		英語教育サブコース２系		56	42	
	理数教育コース	理科教育サブコース１系		66	32	
		理科教育サブコース２系		56	42	
		数学教育サブコース１系		66	32	
		数学教育サブコース２系		54	44	
	芸術・保健体育教育コース	音楽教育サブコース１系		66	32	
		音楽教育サブコース２系		62	36	
		美術教育サブコース１系		68	30	
		美術教育サブコース２系		58	40	
		保健体育サブコース１系		58	40	
		保健体育サブコース２系		46	52	
	生活科学教育コース	家庭科教育サブコース１系		69	29	
		家庭科教育サブコース２系		59	39	
		技術科教育サブコース１系		66	32	
		技術科教育サブコース２系		56	42	
	社会系教育コース	社会系教育コース１系		54	44	
		社会系教育コース２系		42	56	
	教育実践科学コース	教育実践科学コース３系		46	52	
		教育実践科学コース４系		26	72	
	臨床教育科学コース	臨床教育科学コース３系		46	52	
		臨床教育科学コース４系		26	72	
	障害児教育科学コース	障害児教育コース５系		60	38	
地域科学課程（地域科学）	地域政策領域 人間文化領域			34	53	125

（事務局資料）

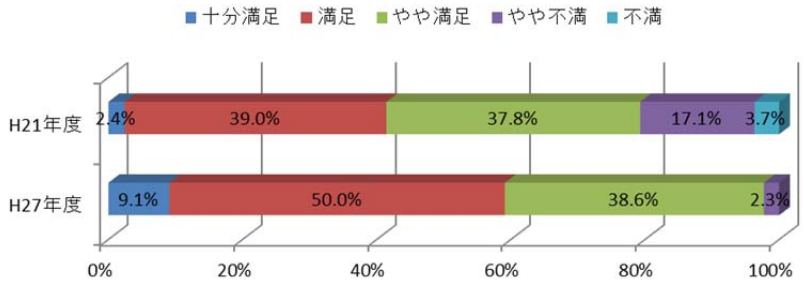
資料 1-2-11　主要専門科目の授業内容の例

科目区分名		授業科目名	授業内容の概要等
学校教育課程	教職科目	教育学研究	教育学の基本的な概念や思想，歴史等について理解する。今日の教育をめぐる論点を確認し，それぞれの論点について自身の考えを深めるかたちで，教育の思想や制度について歴史に裏付けられた理解を得る。
		教育方法研究	本授業では現在の教育実践の問題を主に教育方法学の視点から議論する。実践的なメニューをこなしつつも，実際の教育実践事例を理論的に検討する中で，受講生全員が教育の方法と技術について明確な根拠を持って議論できるようになることを目指す。
		教育制度・経営論	この授業では，将来どのような教師になりたいのか，あるいはなるべきなのかを考える前提として，まず，教育や学校組織を成り立たせている制度・法律的基盤があることを様々な事例を通して確認する。そして，そうした基盤が教師個々のライフワーク，かれらが抱きがちな価値観や信念に及ぼす影響について考察できるよう意図している。
		発達心理学	人間の生涯発達に応じた，こころの葛藤や成長について学ぶ。その際，実際にロールプレイをしたり，グループディスカッションをしたりしながら，自ら探索的に学ぶことに力点を置く。したがって，単に知識を習得するのみでなく，他者の考えに触発されつつ自分の考えを創造するという，主体的な学びの姿勢を体得することを目指す。
地域科学課程	地域科学基礎科目	地域と環境	私たちの生活の基礎となっている地域の自然のあり方・特徴について理解を深めるとともに，普段何気なく見ている身近な地域の環境・風景はどのように形成されてきたものなのか？，その過程や要因について説明できるリテラシーを身に付ける。
		福井地域の歴史	前半の授業（長谷川）では，中世から近世における福井の政治・社会状況について，越前を中心に概説する。特に越前を代表する戦国大名朝倉氏や柴田勝家，また福井藩越前松平家などを取り上げ，その領域支配の特質と人びとの生活について理解することを目的とする。後半（木村）では，幕末から現代までの福井の政治・社会，及び福井の主要産業であった絹人絹織物業の発展とそれをとりまく社会状況について概説する。
	地域課題ワークショップ科目	地域創成ワークショップ	地域創生をテーマとして，福井県内の行政機関や福井県内の中小企業をフィールドとして，調査・発表を行う。学内での学習だけではなく学外での調査・分析活動を複数の学生が協力しながら行うことによって，多岐にわたる地域創生に関する課題を理解するとともに，各学生の個別の研究テーマをより深く分析できる能力を身につけることを目標とする。
	スキルアップ科目	社会調査入門	社会調査に関する入門的授業として，社会調査の意義，歴史，社会調査の種類，主要な方法と活用法，調査倫理などについて，基本的な知識と理解を得る。その上で，「世論調査」を素材として，調査の実際上の問題，調査結果の読み方，調査の社会的役割などを具体的に理解する。

（事務局資料）

資料 1-2-12　教養・共通教育に対する満足度

設問：教養・共通教育の授業全般（学部学生のみ）について，あなたはどの程度満足していますか。



※第１期末と比較して第２期末では学生の満足度（十分～やや満足と回答した割合）は，18.5%向上している。

（平成 21 年度および平成 27 年度「福井大学の教育・研究に対する意識満足度調査」結果より抜粋）

【教育実践能力の育成】

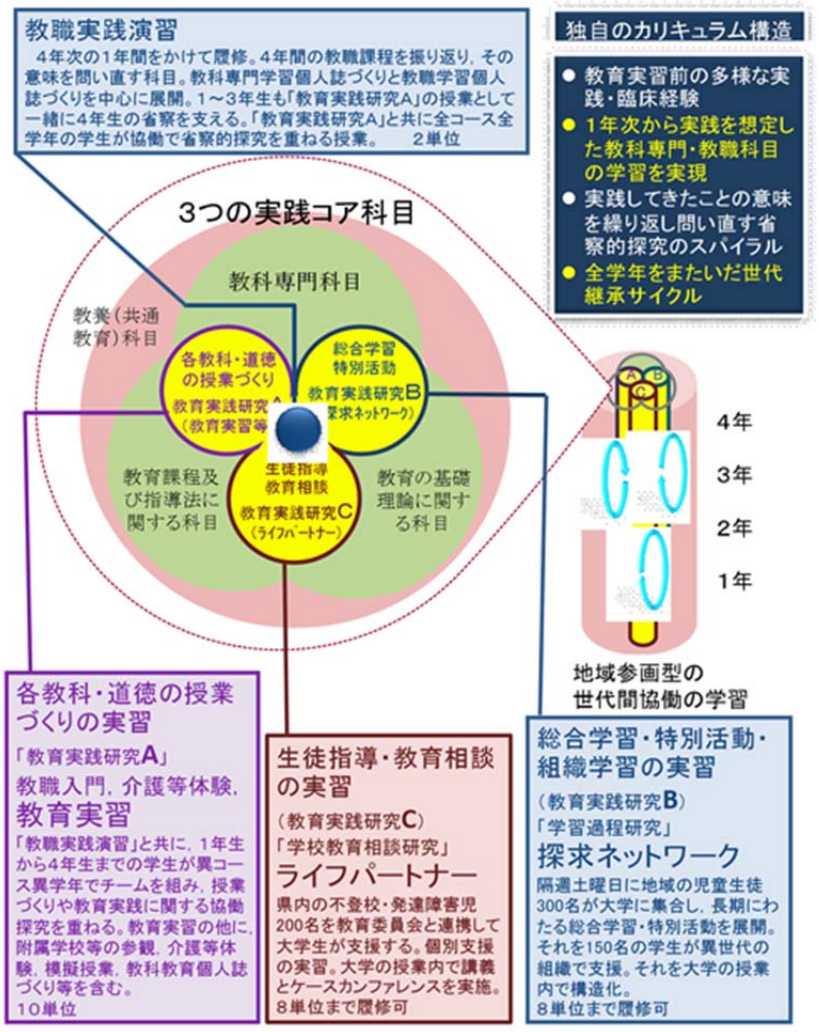
学校教育課程では実践的能力を涵養するために教育実践コア科目を設けている。コア科目の履修により，学生は児童生徒との関わりを多く持つとともに実践を省察する機会（教職実践演習）が担保されており，学生からも好評を得ている（**資料 1-2-13～16**）。

資料 1-2-13　教育実践コア科目の概要

実践的なコアカリキュラム

教員養成を目的とする学校教育課程では実践的な能力を涵養するために，実践コア科目として①「教育実践研究 A」（教職入門，介護等体験，教育実習），②「教育実践研究 B」（学習過程研究：探求ネットワーク），③「教育実践研究 C」（学校教育相談研究：ライフパートナー），④「教職実践演習」を設けている。

不登校児童を支援する「ライフパートナー」や子どもの学習活動を支援する「探究ネットワーク」，介護体験などを実施。１・２年次という早い段階から多様な実践が可能となっている。教職実践演習ではそれまでの実践を省察し，教職学習個人誌の作成と報告書の公刊を行う。



（事務局資料）

資料 1-2-14　「教育実践研究 A」年度計画



教育実践研究A ＆ 教職実践演習　2014(平成26)年度実施計画（異コース異学年型クラスター方式）

1年次	2年次	3年次	4年次	
教育実践研究A－Ⅰ（教職入門を含む）	教育実践研究A－Ⅱ（介護等体験を含む）	教育実践研究A－Ⅲ（教育実習事前・事後学習）	教職実践演習	教育実践研究A－Ⅳ・Ⅴ（副免教育実習）
（前半）学年別オリエンテーション【教職】				
（後半）クラスター別オリエンテーション【教職】			教科別オリエンテーション【教科専門】	
チーム協働探究テーマの設定―公教育の課題に関わる資料の検討を通して―【教職】			教員養成コース別スタンダードの確認【教科専門】	
実習校研究紀要の検討と前期チーム報告書の構想【教職】			教科専門学習個人誌づくり①【教科専門】	
大学生活1ヶ月を振り返って【教職】	介護等体験説明会【実施委員会】	附属学校での授業参観1【教科教育(中)＋教職(小)】	教科専門学習個人誌づくり②【教科専門】	
公教育の課題に関わる文献の検討と前期チーム報告書編集打ち合わせ【教職】			教科専門学習個人誌草稿検討【教科専門】	副免実習事前打合せ（昼休み）
★ 教科専門学習個人誌報告会【教科専門】				
前期チーム報告書の検討【教職】				(5/23 附属幼稚園事前指導①)
附属中学校教育研究集会【実施委員会】				副免教育実習（小学校：6/2-13）（中学校：6/16-27）【実施委員会】
附属中学校における教育実践研究の検討【教職】		模擬授業の準備【教科教育】		
模擬授業①【教科教育】			(7/5 附属幼稚園公開保育)	
模擬授業②【教科教育】				
e-ポートフォリオ説明会【e-ポート】	介護等体験オリエンテーション【実施委員会】	附属学校での授業参観2【教科教育(中)＋教職(小)】		
模擬授業③【教科教育】				
模擬授業と授業参観②の振り返り【教科教育】	介護等体験事前学習【実施委員会＋県社協】	模擬授業と授業参観②の振り返り【教科教育】	(教員採用試験期間)	(7/22 附属幼稚園事前指導②)
前項の振り返りと今後の課題の検討【教職】	介護等体験事前学習【実施委員会＋県社協】	e-ポートフォリオの活用と実習手引きの検討【e-ポート】		
	介護等体験【実施委員会】	教育実習事前指導（附属小学校：8/6,19）（附属中学校：8/6,25）（附属特別支援学校：8/27）		
				(8/21 附属幼稚園事前指導③)
		主免教育実習（附属小学校：8/25 -9/17）（附属中学校：8/26 -9/18 ）（附属特別支援学校：9/1 -9/30 ）【実施委員会】		副副免教育実習（附属幼稚園：9/1 -12）（附属特別支援学校：9/1 -12 , 9/16 -30 ）【実施委員会】
後期オリエンテーション：新チームで教育実習と介護等体験の経験を聴き合う【教職】				
実践者の成長を探る：長期実践研究報告の検討①（1・2年生報告）【教職】				
実践コミュニティの展開を探る：長期実践研究報告の検討②（3・4年生報告）【教職】				
生涯にわたる学習の展望【教職】		教員養成・領域別スタンダードの再検討【教科教育】	生涯にわたる学習の展望【教職】	
新たな協働探究の足場を確認する：課題図書の検討①（1年生報告）【教職】		教科教育学習個人誌づくり①【教科教育】	新たな協働探究の足場を発想する①【教職】	
新たな協働探究の足場を確認する：課題図書の検討②（2年生報告）【教職】		教科教育学習個人誌づくり②【教科教育】	新たな協働探究の足場を発想する②【教職】	
後期チームレポートの検討（1・2年生報告）【教職】		教科教育学習個人誌草稿検討【教科教育】	後期チームレポートの検討【教職】	
★ 教科教育学習個人誌（3年生）報告会【教科教育】				
附属特別支援学校教育研究集会				
附属小学校教育研究集会				
教育実践研究の展開を振り返る：チームでの協働探究の振り返りと公開クロスセッションの準備【教職】				
★ 公開クロスセッション①：教職学習個人誌報告（4年生）＆個人最終報告（1・2・3年生）（土曜午後集中）【教職】				
★ 公開クロスセッション②：教職学習個人誌報告（4年生）＆個人最終報告（1・2・3年生）（日曜午前or午後集中）【教職】				
今後の展望を探る：公開クロスセッションの振り返り【教職】				
			（卒業研究の省察）	

（事務局資料）

資料 1-2-15　学生の意見等（探求ネットワーク・ライフパートナー）と教職実践演習報告書

■　主な活動に係る学生の意見等

○学習過程研究（教育実践研究 B）　「探求ネットワーク」

（概要）テーマごとに９つのブロックに分かれ多彩なプロジェクトを練り上げます。子どもたちの興味を引き出す活動を行い，子どもたちとの関わり方を学びます。

・どんな活動をしましたか

私は「わくわくキャンプ工房」というブロックで，子どもたちと一緒に木や竹など自然素材を使った工作に取り組みました。キャンプでは子どもたち自ら森で素材収集をし，チームでの工作にも挑戦しました。活動を通して，子どもたちは自然に親しむ楽しさを実感し，自主性や協調性をのばせたと思います。

・活動を通して身につけたこと

子どもはいろんな面を持っているもの。時には叱られるようなこともしますが，そこだけを見るのではなく，個性と向き合うことの大切さを学びました。活動の後に，ある子どもから「厳しく叱ってくれたのは，私たちを思ってくれるからだよね」という手紙をもらい，真摯な思いは伝わることを実感しました。

○学校教育相談研究（教育実践研究 C）　「ライフパートナー」

（概要）学校教育課程の学生が２年次から４年次に受講できます。学校になじめない子どもの学習支援や心理的支援を行い，子どもの心に寄り添う力を身につけます。

・どんな活動をしましたか

２年次から１年間，授業に集中できない小学１年の児童を担当しました。その子との接し方で工夫したのは，小さな目標を立てること。例えば「問題を解く」という目標では，問題をノートに書くところまでは私がやるなど役割分担を行うことで目標に集中してもらいました。子どもの立場になり，寄り添うことで，その子の活動を支援しました。

・活動を通して身につけたこと

ライフパートナーは長い期間取り組むため，時間をかけて活動の記録をとり，それを振り返ることで子どもとの関わり方で良かったこと，悪かったことを考察できます。また，子どもを叱れるようになったことも大きな成果。感情的に怒るのではなく，なぜ叱られるのかを理解してもらうようにしました。

（事務局資料）

■　教職実践演習報告書



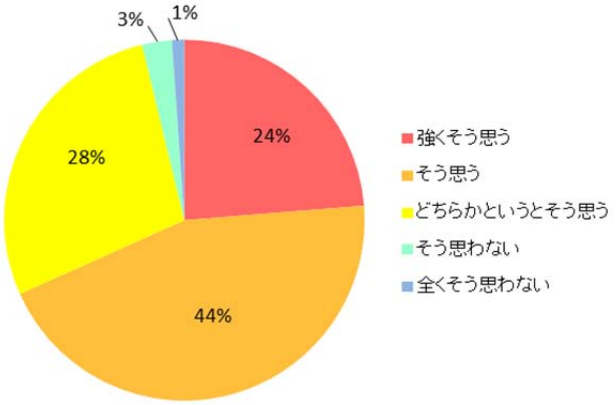
学生の報告内容を一部抜粋

第Ⅰ部
1. 軌跡　５年間の歩みをたどって
2. 教育における他者との関わり-今後の教師としての展望
3. 教師としての専門性を高める実践の在り方に関する一考察-中等教育の国語科を中心として
4. ４年間の学びと成長-ゼロから始まった教職への道
5. 学び続ける教師を目指して-成長させる教師，成長する教師
6. 仲間の力と考える力-４年間の学びを経て
7. 子ども主体の授業-子ども理解の大切さ
8. 教職への歩み-４年間の学びを活かす
9. 私のパンドラの箱-理論不足が招いた悲劇・届かぬ学生の思い
10. 話し合いの場をつくる-ファシリテーターという観点から

※報告書の公刊は平成 23 年度より開始（平成 26 年度版は全 368 頁）　（事務局資料）

資料 1-2-16　コアカリキュラムの評価

設問：「教育実践研究 A～C」（学校教育課程）あるいは「地域課題ワークショップⅠ～Ⅳ」（地域科学課程）によって，人間関係の構築力やコミュニケーション能力などが修得でき，自分自身の成長に役立ったと思いますか？



教育地域科学部　回答数：451

（平成 27 年度「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」より抜粋）

●社会のニーズに対応した教育課程の編成と実施上の工夫

【教育改革課題への対応】

① 教育実践研究Ｃは，生徒指導・教育相談実習として位置づけられ，県内の不登校や発達障害などの気がかりな子を教育委員会と連携して学生が学校等で支援しており，子供の心に寄り添う力を涵養するとともに，教育関係者の期待に応えている（P1-49 前掲資料 1-2-15）。

② ３年次の教育実習は附属学校で実施される。附属小中学校には ICT 機器が整備されており，実習生はこれらの機器を活用して授業実践を行っている（資料 1-2-17，18）。

資料 1-2-17　附属小中学校 ICT 機器の整備状況（平成 26 年度）

ICT機器等	電子黒板	タブレット端末	デジタル教科書
附属小学校	16台	162台	国語・算数：１～６年生, 理科・社会：４～６年生
附属中学校	３台	170台	－

（事務局資料）

資料1-2-18　教育実習におけるICT機器の活用（平成27年度附属小学校主免実習）



（事務局資料）

【社会人向けプログラム】履修証明プログラム

市民の学習・自治活動を支える学習支援コーディネーターの実践力形成を目的とした履修証明プログラム「学び合うコミュニティを培う」を実施しており，受講者の評価も高い（資料 1-2-19～21）。

資料 1-2-19　履修証明プログラム開講科目（平成 25 年度より）

開講科目	授業時間数
cycle A　生涯学習・社会教育の理念と構成　生涯学習論	45
cycle B　社会教育の計画・展開・評価　社会教育計画	45
cycle C　コミュニティ学習支援事例研究　社会教育特講	55
cycle D　コミュニティ学習支援実践研究　社会教育演習	45

（事務局資料）

資料 1-2-20　履修証明プログラム履修状況

		H25	H26	H27
履修者数	１年目(cycle A,B)	5	9	9
	２年目(cycle C,D)		5	7
	合計	5	14	16
修了者数			5	6

※履修証明プログラムは２年で１サイクルのため，各年度の受講者数は，１年目と２年目の受講生の和となる。

（事務局資料）

資料 1-2-21　履修証明プログラム受講者の感想と評価

「公民館が教育事業を行う意義」福井大学履修証明プログラム「学び合うコミュニティを培う」
【受講者】福井市社西公民館主事

この福井大学の講座での体験から得た思いは，まさに学びへの扉だった。学ぶために受講したのだが，最初の頃は実践記録を書くことも含め，正直言って少し苦痛だった。しかし，この場へ来て，仲間たちとそれぞれの実践や仕事上の苦労や悩み，または喜び，時には愚痴もあり，いろいろな話を聴き合っているうちに，違う感覚が芽生えてきた。日常業務や実務では得ることのできないこの空間が，少しずつ楽しく感じてくるようになった。「学ぶ」「楽しむ」「支え合う仲間」これらがこの講座には存在していた。共感してくれる仲間がいることは何よりの支えであり，この記録を書き上げる原動力になったように思う。私ひとりでは書き上げることはできなかった。

「広報誌づくりの取り組み-公民館だよりから地区広報誌へ」【受講者】越前市吉野公民館主事

公民館主事となって６年，平成 25 年度より福井大学履修証明プログラムに参加させていただき，初めて「自分の実践を時系列に沿って記録する」事に取り組みましたが，初めての経験でもあり，どのように書けばよいのか非常に迷いました。６年間勤務した岡本公民館から市教委生涯学習課に異動したばかりでしたし，現場から切り離された職場の中で，「実践」という言葉にとても悩みました。事務仕事に追われる毎日の中，自分の実践と言える事柄が何もなかったからです。その結果，履修証明プログラムの最初の 10 ヶ月は実践記録の主題を絞りきれず五里霧中の状態でした。

それでも，何とか実践記録を書き進めていくうちに，わずか数年前の事が思い出せず過去の書類や広報誌などを読み返し確認したり，反対に完全に忘れていた事を思い出すこともあり，書くことが自分自身の良い振り返りになると気付かされました。この頃，すでに履修証明プログラムの１年が修了しようとしていましたが，ようやく“実践を記録”することの意味を少し理解できるようになりました。その結果，「公民館について何も分からなかった私が，地域の方々と共同作業を通じてワクワクした時間を過ごし，主事として少しは成長できたかなと思える“地域広報誌づくり”の実践こそ，自分自身にとって今残したい実践記録だと思えるようになりました。しかもすでに忘れかけていて，今しか残せない記録だと気付いたのです。

（福井大学履修証明プログラム「学び合うコミュニティを培う」第４年次（平成 27 年度）報告書より抜粋）

受講者の評価

「社会人の大学等における学び直しの実態把握に関するアンケート調査」（平成 27 年 12 月，文部科学省高等教育局専門教育課・大学振興課）に履修証明プログラム受講者 16 人中 14 人が回答

設問：現時点において大学等で学び直しをして良かったですか（主なもの１つ選択）

1. とても良い　　８人
2. まあまあ良い　　５人
3. あまり良くない　　０人
4. 良くない　　０人
5. 受講を開始したばかりで判断できない　１人

（第３年次（平成 26 年度）報告書　67-74 頁より抜粋）

●国際通用性のある教育課程の編成・実施上の工夫

【グローバル人材養成】

①　短期留学推進制度を利用する学生と私費で留学する学生が一定数いる。グローバル人材育成事業による経済的支援により第１期に比べ短期留学が増加しており，留学先で取得した単位については一部正規の単位として認定している（**資料 1-2-22，23，P1-18～20 前掲資料 1-1-21，22**）。

資料 1-2-22　他大学で習得した単位の認定

他の大学等において修得した単位，大学以外の教育施設等における学修，入学前の既修得単位等に対する教育地域科学部における単位の認定手続に関する申合せ（抜粋）

（趣旨）

１．この申合せは，福井大学学則（平成 16 年福大学則第１号。以下「学則」という。）第 49 条，第 50 条及び第 51 条の規定に基づき，「他の大学等において修得した単位，大学以外の教育施設等における学修及び入学前の既修得単位の認定（以下「単位の認定」という。）」に関し，専門教育科目の単位の認定に必要な事項を定めるものとする。

（単位の認定の対象とする他大学等における修得単位等）

２．学則第 49 条，第 50 条及び第 51 条の規定に基づく，他大学等で修得した単位又は大学以外の教育施設等における学修は，次の各号に掲げるとおりとする。

（１）大学又は短期大学において修得した単位

・在学中のものにあっては，協議に基づき当該大学等で修得した単位（単位互換協定により取得した単位を含む。）

・外国留学によるものにあっては，外国の大学又は短期大学等で修得した単位

・休学期間中に外国の大学又は短期大学等で修得した単位（短期語学研修により修得したものを除く。）

・入学前のものにあっては，大学又は短期大学（外国の大学及び短期大学を含む。）において修得した単位（科目等履修生として修得した単位を含む。）

（２）大学，短期大学又は高等専門学校の専攻科における学修

（３）その他文部科学大臣が別に認める学修

（単位認定の申請）

３．単位認定の申請は，次により行うものとする。

（１）学則第 49 条又は第 50 条による単位の認定を受けようとする者（以下「申請者」という。）は，「他大学等における修得単位認定願」（別紙様式１）に成績証明書，講義概要等を添えて，学部長に願い出る。

（２）学則第 51 条による単位の認定を希望する者（以下「申請者」という。）は，「入学前の既修得単位認定願」（別紙様式２）に成績証明書，講義概要等を添えて，原則として入学した学期の始めに，学部長に願い出る。

（単位認定の審査）

４．単位認定の申請を受けた学部長は，教育上有益と認めるときは，次の手順によって，本学部において修得した単位又は科目とみなして単位の認定を行う。

イ．学部長は，申請者の所属コースを担当する講座主任に単位認定について依頼する。

ロ．学部長より依頼を受けた講座主任は，当該授業科目の関係教員に対し，当該科目について審査を求め，その審査結果を講座でとりまとめのうえ，学部長に報告するものとする。

ハ．学部長は，当該科目の認定について，その審査結果に基づき，教育地域科学部教務学生委員会の議を経て，教授会に報告し，決定する。

ニ．学部長は，認定した授業科目及び単位の結果を「単位認定通知書」（別紙様式３）により申請者に通知する。

（単位認定に伴う指導等）

５．前３項により単位の認定を願い出るには，所属コースを担当する講座主任と事前に相談し，その承認を必要とする。単位の認定を受けた学生には，その後の履修計画について，助言教員をはじめ各講座において適切な指導を行うものとする。

（事務局資料）

資料 1-2-23　留学に伴う単位の付与（平成 25 年度～平成 27 年度）

単位付与区分	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
交換留学単位認定者数（卒業所要単位として）（人）	3	2	5
短期海外研修プログラム単位付与者数（卒業所要単位外）（人）	31	36	27

（事務局資料）

② グローバル人材育成の一環として，４技能育成を重視した実践的英語教育科目を体系的に教養教育課程に配置し，習熟度別クラスにより一定の成果をあげている（**資料 1-2-24, 25，P1-85 後掲資料 2-1-10**）。

資料 1-2-24　共通教育における英語教育

［英語教育科目］

英語の履修課程は次のとおりです。

学部	１年		２年	
	前期	後期	前期	後期
教育地域科学部	英語１	英語３	英語５	英語７
工学部	英語２	英語４	英語６	英語８

教育地域科学部７クラス，工学部 24 クラスに分けて授業を行います。
クラス編成表を別途掲示しますので，そこに指定されたクラスで履修してください。
また，両学部の再履修生のためのクラスを別途開講します。

留意事項：

（１）英語は，指定されたクラスで英語１～８まで履修してください。

（２）英語１～８の授業は習熟度別クラス編成で行います。英語１～４はリスニングとスピーキングを中心としたコミュニカティブな授業を行います。英語５～８はリスニングとスピークングも行いますが，焦点はリーディングとライティングに移し，適宜 ESP も導入します。クラスワークだけでなく，授業外で行う e-learning 学習又は多読も取り入れます。

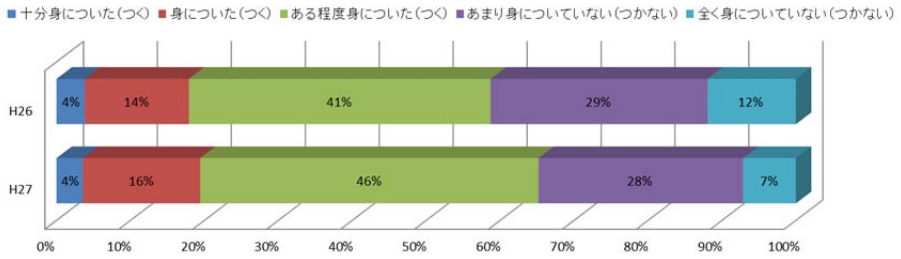
（３）単位を修得できなかった者は，再履修によりそれを補わなければなりません。再履修者は，再履修クラス（SR，FR のクラス）で履修してください。再履修の必要がある者は，学期始めに教務課で，再履修を申請し許可を得て，これらのクラスで履修して必要な単位に振り返ることができます。

（４）さらに英語を学習しようとする者は，共通教養・副専攻科目第２分野「人間」のスピーキングⅠ，Ⅱ，リスニングⅠ，Ⅱ，ライティングⅠ，Ⅱ，リーディング，英語コミュニケーション総合演習Ⅰ，Ⅱ等を履修することができます。

（共通教育科目履修の手引き（文京キャンパス）より抜粋）

資料 1-2-25　英語力の自己評価

設問：本学では，皆さんが“グローバルな視野を持った高度専門職業人”となることを教育の大きな目標としています。福井大学での学修をとおして使える英語力（語学力）がどの程度身についた，あるいは卒業・修了時までに身につくと思いますか？



※平成 26 年度と比較して平成 27 年度では十分身についた（つく）～ある程度身につく（ついた）と回答した学生の割合は，6.5%向上している。

（平成 26 年度および平成 27 年度「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」結果より抜粋）

●養成しようとする人材像に応じた効果的な教育方法の工夫

【教育方法の組み合わせ】

多様な授業形態を組み合わせた科目を配置している。実践コア科目及び地域課題ワークショップ科目を１年次から段階的に履修させており，実習・探究的活動を有機的に結びつけた実践的な授業を展開している。これらの教育方法の効果について学生から肯定的な回答を得ている（**資料 1-2-26，27**）。

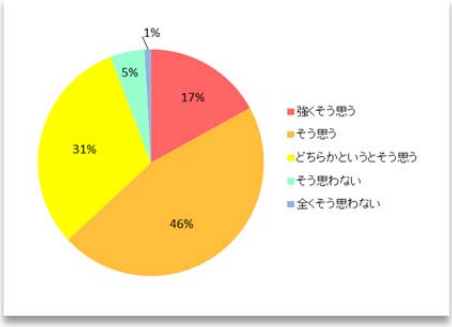
資料 1-2-26　授業形態の状況（平成 26 年度開講科目）

課程及びコース名		授業区分										合計（総科目数）
		講義		演習		実験・実習（実技を含む）		講義と演習		講義と実習		
		科目数	割合	科目数	割合	科目数	割合	科目数	割合	科目数	割合	
学校教育課程	教職科目等	52	59%	4	5%	21	24%	11	13%	0	0%	88
	言語教育	41	58%	17	24%	13	18%	0	0%	0	0%	71
	理数教育	57	64%	20	22%	11	12%	0	0%	1	1%	89
	芸術･保健体育	30	22%	14	10%	94	68%	0	0%	0	0%	138
	生活科学	39	59%	12	18%	11	17%	0	0%	4	6%	66
	社会系	63	76%	17	20%	3	4%	0	0%	0	0%	83
	教育実践	7	47%	8	53%	0	0%	0	0%	0	0%	15
	臨床教育	11	61%	7	39%	0	0%	0	0%	0	0%	18
	障害児教育	23	68%	11	32%	0	0%	0	0%	0	0%	34
地域科学課程		157	65%	41	17%	0	0%	38	16%	0	0%	242

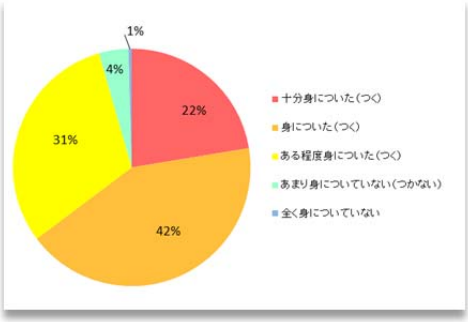
※「割合」は総科目数に占めるそれぞれの授業区分の割合を示している。　（事務局資料）

資料 1-2-27　多様な教育方法・履修形態の導入に対する学生の評価

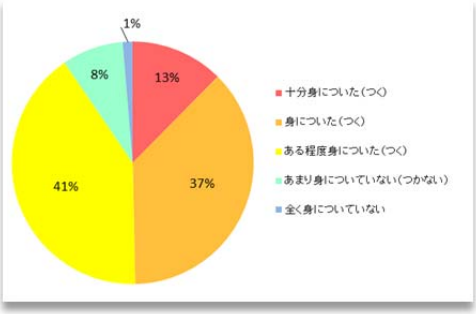
●教育地域科学部では，さまざまな教育方法・履修形態（アクティブラーニング型授業，少人数教育，統合型講習，実習など）を取り入れていますが，これらは教師あるいは地域で活躍人材として備えるべき能力を育成するうえで役立ったと思いますか？（回答数 447）



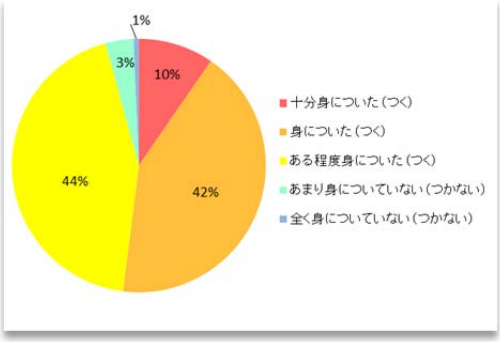
●日常的にコミュニケーションをする力がどの程度身についた（あるいは身につく）と思いますか？（回答数 451）



●プレゼンテーションをする力がどの程度身についた（あるいは身につく）と思いますか？（回答数 455）



●本学では，皆さんが“グローバルな視野を持った高度専門職業人”となることを教育の大きな目標としています。福井大学での学修をとおして，課題探究・問題解決能力，自己学習力がどの程度身についた，あるいは卒業・修了時までに身につくと思いますか？（回答数 448）



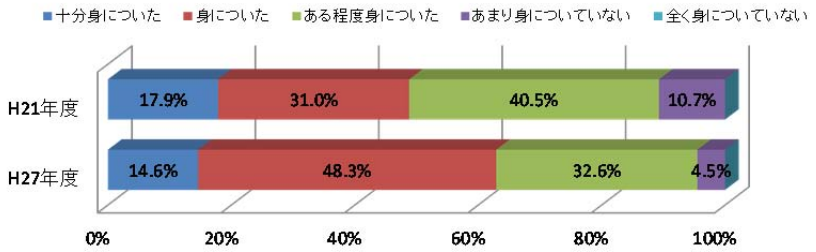
（平成 27 年度「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」結果より抜粋）

【実践的能力を育成する教育方法】

実践コア科目はいずれも体験・実践・探究を伴う授業であり，それらの活動を総括する報告書の作成と公表を課している。教育実践研究 A は全学年が異学年チームを組み実践に関して協働研究を重ねる授業である。教職実践演習ではそれまでの取組を省察し，１～３年次生と共有するという工夫を行っており学生の実践的能力を涵養している（**資料 1-2-28，29，P1-48～50 前掲資料 1-2-13，14，16**）。

資料 1-2-28　実践的能力の自己評価

設問：あなたは福井大学で学習や研究をすることによって実践的な能力がどの程度身についたと思いますか？



※第１期末と比較して第２期末では十分身についた～ある程度身についたと回答した割合）は，6.2%向上している。特に，十分身についた～身についたと回答した割合は 14.1%向上している。

（平成 21 年度および平成 27 年度「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」結果より抜粋）

資料 1-2-29　教職実践演習報告書に記述された実践の省察

・教師としての専門性を高める実践のあり方に関する一考察（※言語教育コース４年）

…当然ながら，国語教師には国語教師には教材に対する深い専門的知見がなくてはならない。それは教材研究で，学習者を「発見」し，有り得べき授業の在り方を模索するためのものなのである。これはすなわち授業計画（大まかな骨子）となるべき部分であり，授業構想の第一歩にあたる部分である。ということは，これが国語教師としてのスキルの礎になってくる。その上で，実際に授業を展開していく中で，タイミングを逃さず学習者に対する効果的なインターベンションを行ったり，元来の授業計画を変更する必要が生じた場合に，その場で授業を再構成したりすることで，回り道をしつつも，しっかりと縦糸に貫かれた学習活動が展開できるような「即応力」とでもいうべき力を涵養していく必要がある。それは通常，自らの授業実践をしていく中で，あるいはそれを基にした本来的な「省察」を行っていく中で身につけていくものである。しかし，トレーニングとして有効に働くであろうと考えられるのが，実際の授業現場に出向き，それを検討・分析する中で「代理的」に経験値を高めていくことだ。

・４年間の学びと成長（理数教育コース４年※）

…「教師のプロフェッショナルたる所以は授業力にある」と一般的に言われているように，なにより授業力を高めるために多くの時間を割いた。子どもたちに分かりやすく説明するにはまずそれなりの知識を持ち合わせていることは当然だが，イメージをつかませるために教具を使ったり，分かりやすい言葉を選んで教えたりしなければならず，そのためにはやはり教材研究が重要になってくることが改めて分かった。私はリアリティーとインパクトのある授業づくりに拘った。学習が生活の中の事象と結びついたとき，達成感や更に学びたいという意欲に繋がると考えるからである。

実際に私は昆虫の授業を行った。昆虫嫌いな子もいるとは思ったのだが，思い切って週末に自分で昆虫を捕まえて，授業で児童に観察させる活動を行った。実物を目の前にした子どもたちの目はとても輝いていたのが印象的だった。現場に入っても，時間が少ないながらも子どもたちの感性を刺激できるような「リアリティーとインパクト」を重視した授業づくりを行っていきたい。

※福井県教員採用試験に現役で合格

（教職実践演習 平成 26 年度実施報告書「学びの専門職をめざして」より一部抜粋）

【附属学校の活用】

附属学校の教育研究集会に３回参加することを教育実習の着手条件とし，実習の事前指導の段階で，児童・生徒との交流を行っている（P1-48 **前掲資料 1-2-13**）。また，附属小中学校は CST 事業拠点校として毎年数名の CST インターンシップ生を受け入れるとともに（P1-12 **前掲資料 1-1-13**），学部生の卒業研究にも附属学校園が活用されている（**資料 1-2-30**）。

資料 1-2-30　附属学校園を活用した卒業研究

卒業年度	所属コース	対象学校園	卒業研究テーマ
平成 24 年度	生活科学教育	附属幼稚園	遊びにおける学びの姿　～幼小連携の視点から～
平成 25 年度	生活科学教育	附属幼稚園	幼稚園における読みきかせ絵本選択に関する研究
平成 26 年度	生活科学教育	附属幼稚園	幼児教育における絵本の読みきかせについて
平成 27 年度	生活科学教育	附属幼稚園	３歳児クラスにおける遊びの中のいざこざに関する研究
	生活科学教育	附属幼稚園	３歳児における子ども同士のかかわりに関する研究
	臨床教育科学	附属小学校	幼児期及び児童期における入り混じった感情の理解の発達
	臨床教育科学	附属小学校	児童期及び青年期における性役割態度の柔軟性の発達とその関連要因 ―子どもとその両親への質問紙調査に基づく分析―
	教育実践科学	附属小学校	授業における教師の認識に関する研究 ―長期的な「見取り」を持つ教師の介入の分析から―

（事務局資料）

【多様な学修・研修機会】

初級 CST 受講生は 10 日間の学校インターンシップを行い，上級 CST の指導の下教材研究や授業実践を行っている。さらに博物館等でのインターンシップも行い，地域の科学啓発活動にも参加している（**資料 1-2-31，32**）。また，合同研修会・シンポジウムにおいて，初級受講生が報告し現職教員から指導を受ける機会を設けている（**資料 1-2-33**）。

資料 1-2-31　初級 CST 学校インターンシップ参加者数

学校インターンシップ	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
小学校インターンシップ	4	1	2	2	2	4
中学校インターンシップ	4	5	3	3	4	2
合計	8	6	5	5	6	6

■　受入れ側の評価コメント（管理職）

当初，時期的なことや担当者の学年を考えると，負担が大きいかと心配したが，大変意欲のある受講者だったので，安心して見守ることができた。短期間だったが，児童・教職員の中にもすぐに溶け込み，授業ばかりでなく，担当者の日常業務の中からも多くのことを学んだ実習になったと思う。

（平成 24 年度 CST 事業業務成果報告書より抜粋）

（事務局資料）

資料 1-2-32　初級 CST 博物館等インターンシップ参加者数

受入博物館等	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
福井市立自然史博物館	1	2	1	1	1	0
福井県立児童科学館	0	3	2	2	3	4
福井県立恐竜博物館	0	1	0	2	1	2
合計	1	6	3	5	6	6

■　実施機関担当者の評価コメント

子どもや科学実験に関心が高く，教員にふさわしい学生がインターンシップに訪れたことを大変うれしく思っています。このような学生達に児童館職員も刺激を受けております。若い受講者達の考え方も参考にしながら，当館における科学教育，科学普及の在り方を考えていきたいと思っているところです。

（平成 24 年度 CST 事業業務成果報告書より抜粋）

（事務局資料）

資料 1-2-33　CST シンポジウム（初級 CST 受講者の発表例）


福井大学大学院教育学研究科　教育内容・教材開発研究会
シンポジウム＆ワークショップ

第３回 福井 CST シンポジウム

科学を伝える

プログラム・要旨集

福井大学 文京キャンパス　総合研究棟Ⅰ 13 階

2014 年 11 月 29 日（土）13:20 ～ 18:00

主催　福井大学　福井県教育委員会
共催　福井大学大学院教育学研究科教育内容・教材開発研究会
後援　福井県小学校教育研究会理科部会
福井県中学校教育研究会理科部会


プログラム

総合司会　福井大学 教育地域科学部　西沢 徹

13:00 ～ 13:20　受付

13:20 ～ 13:30　開会のごあいさつ
福井大学　理事（研究・国際担当）副学長　岩井 善郎

13:30 ～ 13:50　事業報告
福井大学 教育地域科学部 教授　（実施主担当者）浅原 雅浩

13:50 ～ 14:50　基調講演
「科学を伝える ～ノーベル賞授賞式に同行して～」
読売新聞大阪本社　宇治学研支局長　今津 博文

14:50 ～ 15:00　休憩

15:00 ～ 15:40　ショートプレゼンテーション　座長　福井大学 教育地域科学部　山田 吉英

15:40 ～ 16:40　ポスター・ワークショップ

福井 CST

P-01　川原の石が丸くなることが実感できる実験 ～吸水スポンジを使ってのモデル実験～（上級 CST 養成プログラム受講者）
南越前町立河野小学校　吉水 豊治

P-02　CST 活動報告：光教材開発 視覚的に印象を与える実験道具（初級 CST 養成プログラム受講者）
福井大学教育地域科学部
○松本 拓也，奥出 朱里，竹内 一馬，圖 知代，栗原 一嘉

P-03　電気概念に対する理解度の評価法の紹介 抵抗電気回路における概念評価テスト "DIRECT" の導入を中心として（初級 CST 養成プログラム受講者）
[a]福井大学教育地域科学部学校教育課程 [b]福井大学大学院教育学研究科 [c]玉川大学教育学部
○西行 大志[a]，山田 吉英[b]，小林 和雄[b]，石井 恭子[c]

P-04　煮干しによる解剖とその効果（上級 CST 養成プログラム受講者）
あわら市立金津小学校　平田 幸憲

P-05　電気化学的手法を用いた金属銅の酸化状態に関する検討 －「中学校理科：化学変化」酸化銅の実験への適用－（初級 CST 養成プログラム受講者）
福井大学教育地域科学部
○岩佐 章弘，笠川 裕史，青山 絹代，中田 隆二

P-06　中学校教員が行う教員研修 ～教材開発の手法を伝える教員研修～（上級 CST）
坂井市立三国中学校　月僧 秀弥

※CST 合同研修会またはシンポジウムは年２回開催され，初級 CST 受講者も研究・実践報告を行う。

（事務局資料）

【教育現場と連携したプロジェクトへの学生の参加】

① 福井大学 EMP 実行委員会は，福井の街づくりと市街地の活性化を推進することを目的として活動している。公民館や社会教育施設とも連携し，毎年プロジェクトやワークショップ等を企画実施しており，学生が主体的に関わる学修機会となっている（**資料 1-2-34**）。

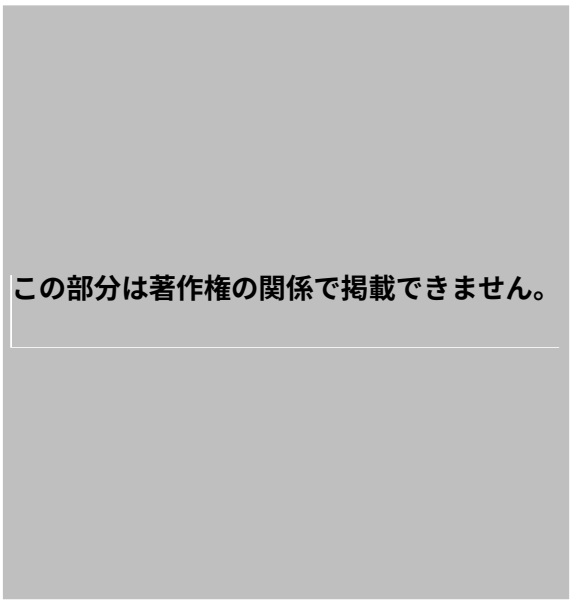
資料 1-2-34　EMP 実行委員会活動実績（平成 22～26 年度）と報告書の例

■　EMP 実行委員会の概要

EMP（Enjoy My town Project）実行委員会は，大学生の若い感性で福井駅周辺の課題について考え，「歩きたくなる駅前」を創造し，自分たちのまちを活気づけることを目的として，平成 22 年度に地域科学課程の学生を中心に発足し，中心市街地の活性化プランを発表するワークショップの開催やフリーペーパーの制作等を行っている。これらの活動は，学部附属地域共生プロジェクトセンターの事業「地域に魅せよう学生のチ・カ・ラ」の支援を受けて実施されている。

■　EMP 実行委員会活動実績

年度	月	事業名	実施場所	参加者数
平成 22 年度	4	委員会発足，活動開始	福井大学	
	10	「学生発信！駅前プロデュース in FUKUI」開催	AOSSA	73
	11	「私たちで再開発！女性が提案するふくい駅前プロデュース」にて，駅前活性化プランを発表	響のホール	約 50
	2	『学生発信！駅前プロデュース in FUKUI 提言書』発行		
平成 23 年度	4	ブログ開設		
	7	第 1 回福井駅周辺まちあるき WS「乙女ツアー」「芸術ツアー」開催	福井市街地	8
	8	フリーペーパー『Enjoy My town Paper』vol.1 発刊		
	11	第 2 回福井駅周辺まちあるき WS「浜町ツアー」「駅前ぶらり旅」開催	福井市街地	8
		フリーペーパーvol.2 発刊		
	12	フリーペーパーvol.3 発刊		
	3	フリーペーパー増刊号『Enjoy My town Personal Note』発刊		
		『2011 年度 Enjoy My town Project 報告書』発行		

平成24年度	5	福井県「ふくい“夢チャレンジプラン”」支援事業（地域活性化型）応募，採択	県国際交流会館	
	7	福井大学「地域に魅せよう学生のチ・カ・ラ」支援事業採択	福井大学	
		連続WS第1回「まちあるき交流会」,第2回「発見しよう！駅前の魅力！」開催	順化公民館	10
	8	フリーペーパーvol.4発刊		
	10	連続WS第3回・第4回「伝え合おう！駅前の魅力！」開催	順化公民館ほか	10
		『中心市街地活性化全国リレーシンポジウム　まちづくりフォーラム2012』パネリスト参加	響のホール	
	12	フリーペーパーvol.5発刊		
	1	『2012年度Enjoy My town Project報告書』発行		
	3	企画者向けパンフレット『子ども発信！ふるさとプロデュース　魅力発見まちあるきツアー』発行		
平成25年度	3	福井大学「地域貢献事業支援金」採択		
	7	連続WS第1回「まちあるき交流会」，第2回「まちあるきツアー」，第3回「模型作り」開催	順化公民館ほか	10
	8	連続WS第4回「子どもたちが考える理想の駅前」発表会・展示	福井市まちづくりセンター	
		フリーペーパーvol.6，vol.7発刊		
		2013年度報告書発行		
平成26年度	6	福井「夢チャレンジプラン」応募プレゼン大会（福井駅前歴史ミュージアムプロジェクトが事業に採択：福井市助成金20万円） ワークショップⅠ　子ども達と顔合わせ	順化公民館	15
	7	ワークショップⅡ　まちあるき1回目（足羽山コース） ワークショップⅢ　まちあるき2回目（西口・中央公園コース） ワークショップⅣ　ミュージアム展示物の制作1回目 順化公民館主催「お堀の灯り」に参加 福井の偉人調べ学習	順化公民館 こども歴史文化館	15
	8	ワークショップⅣ　ミュージアム展示物の制作2回目 福井駅前歴史ミュージアムプロジェクト開催	順化公民館 駅前ふく+	15
	9	福井夢アート展示（新栄商店街） 福井夢アート展示（アオッサ）	新栄商店街 アオッサ	
	12	フリーペーパー「Enjoy My town Paper」vol.8発行		
	2	福井市NPOパネル展でEMP活動内容の展示	福井市NPO支援センター	
	3	2014年度EMP活動報告書発行		
	 福井新聞 平成26年8月29日			

■　事業報告書の例

平成 24 年度 福井大学教育地域科学部附属地域共生プロジェクトセンター
「地域に魅せよう学生のチ・カ・ラ」支援事業報告書

企画事業名：「福井の未来を担う子どもの育成プロジェクト」

申請代表者の所属・氏名：福井大学教育地域科学部地域科学課程生涯学習系 3 年　松浦○○
所属団体名：　福井大学 EMP 実行委員会
事業実施期間：　平成 24 年４月～平成 25 年３月

企画事業の目的

本事業の目的は，福井駅前のまちづくり活動を通して，将来，福井の魅力を自ら見出し，その魅力を身の回りの人，さらには県外の人にまで伝えることができる子どもを育成することである。福井の魅力を知り，地元に愛着を持つことで，一度県外に出ても最終的には福井に帰ってくる人々が増え，県外で福井の魅力を発信できる人々が増えると考える。このような未来の福井を思い描く私たちは，まずは身近にある魅力を見出し，その魅力を伝えることを学ぶ第一歩として，順化地区の子どもたちに，まちあるきを通して身近すぎるため気付きにくい駅前の魅力に改めて気付いてもらうきっかけを提供しようと考えた。

事業実施内容

順化地区公民館と連携し，連続ワークショップ形式で行った。メインとなるワークショップは４回に分けて行い，各ワークショップは福井駅前周辺のまちあるきを中心とし，順化地区住民の方々，順化小学校，駅前周辺商店街の方々，まちづくり福井株式会社の協力のもと実施した。また各ワークショップのまとめ・情報発信として，ニューズレターの発行を２回行った。ニューズレターは順化地区以外にも配布した。事業終了後は，今年度の活動報告書と提言書を発行する

実施内容順化地区公民館と連携し，連続ワークショップ形式で行った。メインとなるワークショップは４回に分けて行い，各ワークショップは福井駅前周辺のまちあるきを中心とし，順化地区住民の方々，順化小学校，駅前周辺商店街の方々，まちづくり福井株式会社の協力のもと実施した。また各ワークショップのまとめ・情報発信として，ニューズレターの発行を２回行った。ニューズレターは順化地区以外にも配布した。事業終了後は，今年度の活動報告書と提言書を発行する

実施スケジュール

7 月 19 日　ワークショップ①「ホットケーキ作り交流会」（イントロダクション）
・今回の事業を一緒に活動する順化地の子どもたちとのホットケーキ作り交流会を開催

7 月 31 日　**ワークショップ②「発見しよう！駅前の魅力！」**
・順化地区のおんちゃん・おばちゃんガイドのもと，子どもたちと駅前を歩き，子どもたちが福井駅周辺の魅力をまとめ発表

8 月 24 日　ニューズレター①発刊
・探検隊の様子を写真や子どもたちや EMP メンバーの感想などで紹介，ワークショップ④の紹介も記載

10 月１日　ワークショップ③「WSⅣ事前レクリエーション」
・まちあるきガイド練習など順化地区の子どもたちと一緒にワークショップ④に向けての準備

10 月６日　**ワークショップ④「伝え合おう！駅前の魅力！」**
・福井県内の子どもたちを対象とした，（1）順化地区の子どもたちがガイドをするまちあるきツアー（2）地域の魅力を伝え合う交流ゾーンの２企画を実施

12 月３日　ニューズレター②発刊・ワークショップ③④の様子・感想を記載，駅前のお店紹介

３月 11 日　活動報告書発行・今年度の活動の概要，反省点などを記載

３月 22 日　事業モデル提言書発行・地域の公民館との連携事業モデルを紹介

事業の成果

本事業は，福井の子どもたちを，まちの魅力を見出し，その魅力を自らの言葉にして語る福井人に育てることを目的としていた。そのために，身近な魅力を知り，その魅力を発信することを学んでもらおうと，順化地区公民館の子どもたちに，駅前周辺のまちあるきをする機会を提供し，最後に，子供達自身がガイドを務めてそのまちあるきで学んだことを他地区の子供たちに伝えるまちあるきも行った。これらの活動によって，順化公民館の子どもたちは，改めて福井の魅力を知り，その魅力をほかの人たちに伝える能力をつけたと考えられる。実際に，まちあるき後のインタビューで「今日のまちあるきで知った福井の町のことを，県外の人に案内しながら詳しく話すことが夢です。」と語ってくれた子どももいた。これらのことから，本事業は当初の目的を達成したと言える。しかし，今回の活動では順化公民館の子どもたちを主な対象としていたため，福井のほんの一部しか魅力を発信していくようには育てることができなかった。今後は対象の子供たちを増やしていくことが必要であろう。

（事務局資料）

② E&C ギャラリーを利用して，文化芸術を創造し支える人材養成システムを立ち上げ，学生スタッフも参画して展覧会の企画・運営等に取り組んでいる（**資料 1-2-35**）。

資料 1-2-35　E&C ギャラリー主催企画展（平成 24～27 年度）

■ E&C (Edge & Center) ギャラリーは平成 21 年度より教育地域科学部美術担当教員らが主体となって運営しており，①地域社会の芸術文化振興，②展覧会企画（ワークショップ，ギャラリートーク等関連イベント含む)，③芸術家の活動支援，④アート情報拠点の構築が主なミッションである。E&C ギャラリーでは学生も含めたスタッフが展覧会の企画運営，広報等の活動を中心とした実践的な取組を続けている。

2012/05/09～06/03　小野忠弘展 vol.2 ドローイング作品を中心に―線の力―
2012/06/20～07/01　人物博覧会Ⅰ：ルドンから舟越まで A 氏コレクションより
2012/07/07～07/22　松村忠祀を見つけたいくつかのモノ達／松村コレクション展
2012/09/01～09/30　丸山直文展 ―風をあつめて―／人気作家による大型絵画展
2012/10/06～10/21　佐藤華連展「cage」／写真展
2012/10/24～11/04　高橋ひとみ展「蔓」／写真展
2012/11/10～12/09　中村滝雄展「鉄・表出 -CIRCLE-」／鉄のインスタレーション
2012/12/12～12/24　クリスマス小品展　小さな幸せをあなたに届けます-Merry Christmas-
2013/01/09～01/20　セッション展 ll - Part1／
岩本宇司のドローイング，反保千佳子の立体，間所節夫のドローイング
2013/01/23～02/03　セッション展 ll - Part2／牧野浩之の油絵，松本和子の彫刻作品
2013/02/06～02/17　セッション展 ll - Part3／伊藤裕貴のドローイング，山田幸代のオブジェ
2013/02/20～03/03　福井大学教育地域科学部附属特別支援学校 児童生徒造形展 2013
みんなみてみて！ぼくらのアート
2013/03/30～04/14　濱口由美展／染め作品を用いたインスタレーション
2013/05/01～05/12　カレル・ファンリットフェルド展／色彩豊かなコラージュ
2013/05/29～06/09　人物博覧会Ⅱ／版画作品とテンペラ作品
2013/06/27～07/07　アートデリバリープロジェクト内覧会／レンタル可能な作品のお披露目
2013/08/07～09/01　五十嵐彰雄展／ミニマルな抽象油彩画
2013/09/14～09/29　湊七雄版画展「重なる風景」／和紙を使った版画作品
2013/10/02～10/20　橿尾正次展／和紙を使った立体造形
2013/10/26～11/17　小林孝亘展「Dream, dreaming us ― 私たちを夢みる夢」／絵画展
2013/11/23～12/08　山本一樹展　風の記憶／金属造形の作品展
2013/12/14～12/22　クリスマス小品展　掌の上の心
2014/01/11～01/26　藤村克裕展／立体と絵画作品。ミニマルでコンセプチュアルな造形
2014/01/29～02/16　熊野海展 bifrost／地元福井出身の若手作家。絵画の大作展
2014/02/19～03/02　萬未来子展／地元福井の若手作家。ドローイングインスタレーション
2014/03/08～03/30　深堀隆介展-越の水と金魚-／学生スタッフが企画を担当。3000 人の来場者
2014/04/19～50/11　池内晶子展／絹糸を使ったインスタレーション
2014/05/28～06/08　恩地孝四郎と「月映」展／恩地孝四郎，藤森静雄，田中恭吉の詩と版画
2014/07/05～07/27　市川平展／造形インスタレーション。福井市美術館でのサテライト展示も
2014/10/04～10/26　角文平展 -HOUSING-／立体作品・インスタレーション
2014/10/29～11/09　ナ・ヒュン展／フィールドワークを基にしたドローイングと映像作品
2014/12/13～12/26　クリスマス小品展
2015/06/13～07/12　現代美術への誘い-丸山コレクション展／移転リニュアル後初の記念展
2015/07/18～08/02　AD AND ART-アートディレクター３人展
2015/09/05～09/26　残ル身体／小林雅子と松永亨子の造形作品
2015/10/04～10/25　WArtist-越前和紙を拓く-／アートマネジメント講座受講生の成果発表展
2015/09/5～09/26　残ル身体
2015/10/04～10/25　WArtist-越前和紙を拓く-
2015/11/12～12/06　佐々木愛展「もうひとつの場所」
2015/12/13～12/26　クリスマス小品展 2015
2016/01/09～01/31　岡村桂三郎展
2016/02/07～02/28　ORIGIN-はじまりの鼓動

※平成 21 年度から平成 27 年度までに 74 件の主催・共催美術展と 28 件のレンタル共催展を企画・実施

（事務局資料）

●学生の主体的な学修を促すための取組

【アクティブ・ラーニング】

①　実践コア科目・地域課題ワークショップⅠ～Ⅳ・地域創生ワークショップでは能動的学習が取り入れられ，学生間での学び合いや自主的な学びにつながっており，アクティブ・ラーニング型教育プログラムを実施し，企業・地域体験型学習プログラムを展開していることは認証評価でも評価されている。地域科学課程では「グループワーク・ガイド」を作成し授業等で活用している（**資料 1-2-36～39**）。

資料 1-2-36　実践コア科目における能動的学習

① 学校教育課程

学校教育課程においては，「子どもたちの探究心，思考力及び創造性を育み，地域と連携した教育環境を組織できる教員の養成」という課程の目的を実現するために，課程内のすべてのコース・サブコース共通に，学部の早い段階から，子どもたちの成長と発達を促す協働的な実践に参加させるべく，「教育実践研究 A～C」の３つの「実践コア科目」を軸にしたコア・カリキュラムを１年次から４年次まで段階的に履修させる体制をとっている。これらの科目は，学校教育課程に所属する全学生が異なったコース・学年でチームを組み，介護等体験，教育実習，不登校・発達障害児支援，児童生徒の総合学習・特別活動支援等の実践的活動を行い，その成果に関する分析と省察を繰り返すという内容になっている。さらに，それらの授業の延長線上に４年次において履修する科目として「教職実践演習」を開講している。この科目は，４年生が教職課程における学習全体を振り返り，教科専門学習個人誌及び教職学習個人誌を作成することを内容としている。この学習個人誌は，個々の学生の４年間を通じた学習成果のエビデンスの役割を果たすとともに，その一部を毎年公刊することによって，４年次生の学びの履歴を残し，協働探求の成果や経験を後輩に伝えていくという世代継承サイクルを実現している。

② 地域科学課程

地域科学課程は，地域社会における諸課題を解決できる能力を養うことを主目的としており，そのための中心的なワークショップ型科目として「地域課題ワークショップⅠ～Ⅳ」を開講している。これらの科目は，１年次で履修する「ワークショップⅠ」（グループによる課題探求体験）１～２年次で履修する「ワークショップⅡ」（諸課題への問題発見的アプローチ），２～３年次で履修する「ワークショップⅢ」（諸課題への実践的・分析的アプローチ），３～４年次で履修する「ワークショップⅢ」という段階的・発展的な内容となっている。これらの科目は，各学生がグループワークの中で自ら企画立案し，課題について情報収集や調査・分析を行い，得られた情報や探求成果を分かりやすい表現で発信できるようになることによって，社会人として求められる課題探求力，コミュニケーション能力，プレゼンテーション能力等の汎用的能力を獲得することを目標としている。そのため，基本的に複数の教員が独自に作成したテキスト等を用いて学生グループの指導にあたるとともに，課程全体及び各コース等において毎年地域課題ワークショップ各科目に関する報告書を作成している。さらに，ワークショップⅢに関しては課程全体で報告会を実施し，受講生がその成果を公開の場で発表するとともに，翌年度の受講予定の学生が参考にできるよう配慮している。

（事務局資料）

資料 1-2-37　「地域課題ワークショップⅠ」の概要

■　スケジュール例（平成 26 年度）

	開催日時	教室振り分け	授業内容　＊GW=グループワーク
ガイダンス	4月11日（金） 10:30-12:00 （2限）	1教室に集合	①ガイダンス（授業の目的・進め方・成績評価等） ②2つの大テーマ（「地域の活性化」「地域生活の課題」）に受講生を分ける（約5名×6班×2グループ）
テーマを決め学ぶ			
1回目	4月18日（金） 13:00-16:15 （3・4限）	最初は1教室に集合。 ③以降は2教室に分かれる。	①進め方の確認 ②【GW手法の解説と体験】GWの役割分担、基本的なルール、アイスブレーク ③【テーマ解説】大テーマ背景説明（「地域活性化」、「地域生活の課題」） ④【紹介】レクチャーフィールド（ヒアリング先）の紹介 ⑤フィールドの決定 ⑥【GW】自己紹介、フィールドについて事前学習しておく内容を相談する ★宿題：フィールドについての事前学習を次回までに行う
フィールドの基礎知識を学び地域課題を自分なりに想定する			
2回目	5月2日（木） 13:00-16:15 （3・4限）	最初は1教室に集合。 ③以降は2教室に分かれる。	①進行確認とGWの手順説明 ②【GW】質問項目のカテゴリーをつくる ③整理した大・小カテゴリー、質問項目について全体報告し、質疑を受ける（各教室毎） ④次回のアナウンスと班の確認作業 ★宿題：ヒアリングシート案を作成、フィールド・テーマの学習の継続
3回目	5月16日（金） 13:00-16:15 （3・4限）	最初は1教室に集合。 ③以降は2教室に分かれる。	①進め方の確認 ②【手法の解説と体験】質問紙の作り方とヒアリング手法のレクチャー ③【GW】事前学習内容の共有と、項目別に聞くべき具体的内容の検討 ④ヒアリングの具体的内容を全体報告し、質疑を受ける（各教室毎） ★宿題：ヒアリングシートの完成 →アポイント（授業終了後速やかに）→一次ヒアリング調査の実施（6/6までに）
フィールドにとっての地域課題にふれ、問いを深めて課題を構造化する			
4回目	6月6日（金） 13:00-16:15 （3・4限）	最初は1教室に集合。 ③以降は2教室に分かれる。	①進め方の確認 最終プレゼンに向けての中間とりまとめ ②【手法の解説と体験】ヒアリングの内容分析と課題（自己・地域）の構造化と深い問いへの気づき プレゼンテーションのポイント（書いてある文章を読むのではない！） ③【GW】②を踏まえて、他のグループに向けて、ヒアリング内容のプレゼンテーション（フィールドにとって何が地域課題であったか。更に聞くべきポイントはなにか。）の準備（ボード、黒板を利用） ④プレゼンテーション（各教室毎） ⑤【GW】今後の取り組み方について ★宿題：深い問いを聞くための地域課題学習・二次ヒアリングの実施（7/11までに）
5回目	6月20 日（金） 13:00-14:30 （3限）	2教室毎	①経過の確認・個別相談
地域課題を実感を持って理解し、自分（自分たち）ができることを考える			
6回目	7月4日（金） 13:00-16:15 （3・4限）	2教室毎	①【手法の解説と体験】プレゼンテーションの内容・つくり方・伝え方 ②グループ内ラウンドテーブル（個人として何を感じたか[1人15分]→グループとして感じたことの議論） ③【GW】ラウンドテーブルを踏まえたヒアリング内容の整理、報告会の準備 ★宿題：報告会で用いるPPTや配布資料等の完成
7回目	7月18日（金） 13:00-16:15 （3・4限）	2教室毎	①【手法の解説と体験】報告する意味・意義、他者へコメントする意味・意義 ②報告会（「①自分たちの活動内容」、「②課題の背景・原因」、「③地域の解決策や取組」、「④個人にとっての発見・驚き・共感したこと・できること」、「⑤グループとしての結論、できること」）
8回目	8月1日（金） 13:00-14:30 （3限）	最初は1教室に集合。 ③以降は2教室に分かれる。	①【手法の解説と体験】学習・課題意識の定着と更なる学習と地域貢献への動機づけ ②ラウンドテーブル（各教室6グループをシャッフル） ③授業振り返りと評価アンケート

（産業界ニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業　平成 26 年度福井大学事業報告書より抜粋）

■　「地域課題テーマと各フィールド」（平成 26 年度）

大テーマ	フィールドテーマ	受入先
地域の活性化	①まちなか A（商業者の視点）	駅前商業者
	②まちなか B（まちづくり活動の視点）	宮永不動産，商工会青年部，きちづくり福井
	③郊外 A（新興住宅地）	社南公民館
	④郊外 B（伝統的住宅地）	田原町デザイン会議
	⑤里山 A（元気な過疎自治体）	池田町
	⑥里山 B（獣害と集落のコミュニティ）	福井県奥越農林総合事務所
地域生活の諸課題	①まちに暮らす外国人との共生	インターナショナル・クラブ
	②高齢者・障がい者の生活と医療	オレンジホームケアクリニック
	③地域・家族と医療をつなぐ	林病院
	④子どもの居場所と遊び	特定非営利活動法人福井県子どもNPOセンター
	⑤子育てをめぐる諸問題	福井市市民生活部男女共同参画・子ども家庭センター
	⑥市民による文化・芸術活動推進	福井芸術・文化フォーラム

（事務局資料）

資料 1-2-38　「地域創生ワークショップ（地域科学課程）」の概要

「地域創生ワークショップ」

地域創生ワークショップは，平成 25 年度から開講された新しいワークショップです。この授業は「地域創生」をテーマとして，福井県内の行政木かんっや福井県内の中小企業をフィールドとして，調査・発表を行うものです。学内での学習だけでなく学外での調査・分析活動を複数の学生が協力しながら行うことによって，多岐にわたる地域創生に関する課題を理解するとともに，各学生の個別の研究テーマをより深く分析できる能力を身につけることを目標としています。

本年度は，福井県の「観光」を取り上げることにしました。提携の相手は，公益財団法人福井観光コンベンションビューローです。同法人の山北氏及び木村氏と相談の上，コンベンションビューローが今年行う予定であった福井県内観光地の外国人モニター調査を，創生 WG の参加学生とともに行うことになりました。これはえちぜん鉄道沿線の６市町村庁の観光担当者でつくる「ふくきたエリア WG」のメンバーとともに，外国から福井に来る観光客にお勧めの観光プランを提案し，そのプランをもとに実際の学生のの案内のもとに外国人のモニターが福井県の観光地を回り，その感想等についてアンケートに回答してもらい，外国人からみた福井県の観光地の評価・問題点の指摘を行うという取組です。また今回，福井大学の創生ＷＧとのコラボレーションによって，創生ＷＧの参加学生が最初の旅行プランを提案することで，大学生（女子学生）が勧める福井県観光地の魅力を紹介するということも取組の一つとなりました。

スケジュール

事前調査：①福井観光コンベンションビューローとの打合せ　②福井県の観光地の学習
旅行プランの作成：①福井市内プラン　②大野市プラン　③三国・あわらプラン１
④三国・あわらプラン２　⑤勝山プラン　⑥永平寺プラン
旅行モニタリング（３月）
アンケート集計・分析と報告書作成

（産業界ニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業　平成 26 年度福井大学事業報告書より抜粋）

資料 1-2-39　グループワーク・ガイド









（教員・学生のためのグループワーク・ガイド～チームで養う学ぶ力：全 32 頁，2014 年 9 月発行より抜粋）

②　コア科目以外においても，ワークショップ型科目の占める割合が高く，少人数教育・対話討論型授業など多様な教育方法がとられ，学生の評価も高い（**資料 1-2-40，41，P1-56 前掲資料 1-2-27**）。

資料 1-2-40　主体的学習を意識した授業形態と指導方法の工夫

■　主体的学習を意識した授業形態（平成 26 年度開講科目）

課程	科目数	ワークショップ型科目		テュートリアル教育科目		グループ学習を導入した卒業研究		その他	
		科目数	割合	科目数	割合	有	無	科目数	割合
学校教育課程	544	157	28.9%	41	7.5%	40%	7.4%	0	0.0%
地域科学課程	210	70	33.3%	11	5.2%	20%	9.5%	0	0.0%

※平成 26 年度開講科目を対照に調査し教員から解答のあった科目の総数である。割合はその科目数に対する％で示す。

※※地域課題ワークショップ，地域創生ワークショップ，教職実践演習，特別プログラム「コミュニティ・学校支援研究」の実践科目（学校-コミュニティ共生）などの主要なワークショップ型科目は全て第２期に導入されたものであり，学生の主体的な学習が促進されている。

■　授業における学習指導方法の工夫（平成 26 年度開講科目）

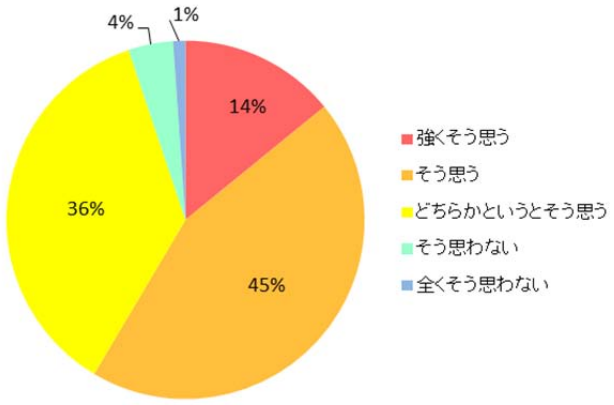
課程	授業区分	科目数	学習指導法上の工夫									
			少人数教育		対話・討論型		フィールド型		メディア活用		ＴＡ活用	
			科目数	割合	科目数	割合	科目数	割合	科目数	割合	科目数	割合
学校教育課程	講義	293	135	46%	127	43%	41	14%	183	62%	14	5%
	演習	111	82	74%	75	68%	35	32%	45	41%	16	14%
	実験・実習	140	123	88%	80	57%	34	24%	44	31%	22	16%
地域科学課程	講義	130	51	39%	42	32%	17	13%	83	64%	4	3%
	演習	72	54	75%	43	60%	33	46%	20	28%	2	3%
	実験・実習	6	5	83%	1	17%	6	100%	0	0%	0	0%

※平成 26 年度開講科目を対照に調査し教員から解答のあった科目の総数である。割合はその科目数に対する％で示す。

（事務局資料）

資料 1-2-41　学生のカリキュラム評価

設問：教育地域科学部のカリキュラムは，教師あるいは地域で活躍する人材として備えるべき能力を修得するうえで役立つと思いますか？（回答数 446）



（平成 27 年度「福井大学の教育・研究に対する意識満足度調査」結果より抜粋）

【単位の実質化】

各学年とも各学期に履修できる専門教育科目は30単位以内としている(**資料1-2-42**)。様々な方策によって授業時間外の自主的学習を奨励しており，授業時間外の学習時間の確保を図っている（**資料 1-2-43**）。本学部生の１週間あたりの授業外学習時間の平均は3.7時間（平成22年度）から6.1時間（平成25年度）と1.65倍に増加しており，全国の文系学部平均を上回っている（**資料1-2-44**)。

資料1-2-42　教育地域科学部学生の各学期における履修単位数の制限に関する取扱（抜粋）

教育地域科学部学生の各学期における履修単位数の制限に関する取扱いについて

教育地域科学部規程第４条第３項に定める履修単位数の制限に関する取扱いについては，次のとおりとする。

（１）各学期において履修する授業科目の単位数の制限は，専門教育科目を対象とする。
（２）各学年とも，各学期に履修できる専門教育科目は，30単位以内とする。
（３）特別な理由により，上記（２）の単位数を超えて履修を希望する者は，助言教員の承認を得るものとする。

（事務局資料）

資料1-2-43　授業時間外学習を促す工夫

課程	科目数	レポート		ミニテスト		中間テスト		授業外の学習指示		その他	
		科目数	割合	科目数	割合	科目数	割合	科目数	割合	科目数	割合
学校教育課程	544	281	51.7%	68	12.5%	32	5.9%	341	62.7%	41	7.0%
地域科学課程	208	92	44.2%	18	8.7%	12	5.8%	114	54.8%	30	14.4%

※平成26年度開講科目を対照に調査し教員から解答のあった科目の総数である。割合はその科目数に対する%で示す。

（取組の実例）

・受講学生に英語で書かれた教科書の担当箇所についてオーラルレポートを課している。授業時間外で１時間程度内容についての質問時間を設けている。
・毎回，質問や要望事項を提出させ，次回授業の冒頭で回答とミニ討論を開催している。
・個人レポートの作成以外に，グループでの研究計画，中間発表，最終発表とその際のレジュメ，パワーポイント等の作成を指示している。
・TOEIC受験を促している。
・関係する学外催事への参加を促している。
・半期に何回か，レポーター，コメンターを務めさせ，その際レジュメ作成を指示している。

（事務局資料）

資料1-2-44　授業時間外学習時間

	教育地域科学部	医学部	工学部
本学学生（時間）	6.1	9.7	5.8
全国平均※（時間）	3.31[1)]	6.08[2)]	5.63[3)]

※全国大学生活協同組合連合会による全国の国立及び私立大学の学部学生調査（2012年10月～11月，回収数8,609）
１）文系の平均　　２）医歯薬の平均　　３）理系の平均

（平成25年度学生生活実態調査より抜粋）

【教室外学修プログラム等の提供】

職業的意識の喚起や実社会体験の機会拡大を図るため福井県インターンシップ制度を活用した企業等インターンシップを実施しており，学生からの評価も概ね高い（**資料 1-2-45，46**）。

資料 1-2-45　福井県経営者協会を通してのインターンシップ参加状況

■　福井県インターンシップの参加状況

平成 24 年度		平成 25 年度		平成 26 年度		平成 27 年度	
（長期）	（一般）	（長期）	（一般）	（長期）	（一般）	（長期）	（一般）
0	18	0	29	1	28	0	33

※平成 24 年度に福井県インターンシップ制度が変更（長期インターンシップが追加）されたため
平成 24 年度以降の状況を掲載

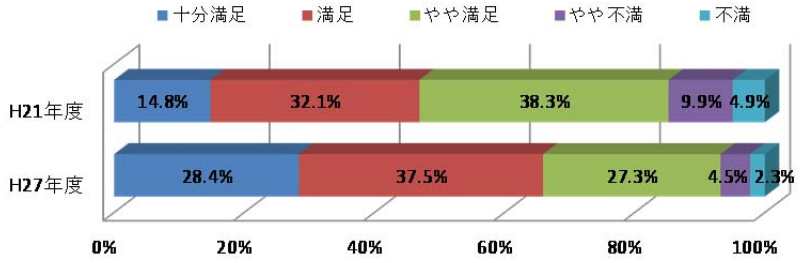
■　学生のコメント

年度	学生	派遣先	派遣学生の感想
平成25年度	A	民間企業	社会人の経験ができてとてもよかった。自分の無知さを改めて実感し，将来について深く考える良い機会となった。
	B	官公庁	園芸センターというインターンシップ以外では体験できない施設に行けて非常にいい経験になった。実際に体験してみて園芸センターで働きたいとかんがえるようになった。園芸センターに就職体験できている学生は県外含めても私一人で少し心細かったので，次回からはできれば複数人を受け入れてもらって互いに交流したり協力したりできると良いと思った。
平成26年度	C	官公庁	今回のインターンシップの参加を通じて，社会で実際に働くことの大変さや，やりがいを学ぶことができました。社会にでたら，複数の人と協力して，人との関わりの中で仕事をする環境がほとんどだと思うので，学生のうちに複数の人と協力して一つのことを達成する経験を数多く積んでおく必要があると実感しました。そのため，ボランティア活動などに積極的に参加していこうと思います。また，自分の興味関心のある分野に就職することが大切だということを教えていただいたので，これからの学生生活を通して自分の興味関心はどの分野にあるのかということを考え，見つけていきたいと思います。そのために，様々な経験を積んで，見識を広げて選択肢を幅広いものにしていきたいです。これから先の学生生活でたくさんの本を読んで，幅広い教養を身につけられるようになりたいです。今回のインターン体験はとても刺激になり，私の当初の動機である「就職について深く考える機会を得たい」という願いは達成され，今後の人生設計をより深めることができました。今回のインターン体験で学んだことを無駄にすることなく，今後の学生生活を有意義なものとし，今後の人生をより実り深きものにしていきたいと思っています。
	D	官公庁	インターンシップに参加して，自分が将来何をしたいかや働く大変さを学び，自分自身と向き合うとても良い経験になった。イメージだけでは分からない役場の仕事内容や雰囲気を肌で感じることができたし，実際に働いている人の話を聞けたりして大変良かった。職員の方が「今の学生は就活の準備は面接の受け答えや，ESもとても完璧にできているが，実際に社会人としての準備ができていないかな」と言っており，コミュニケーションや，分からない事は躊躇せずに分からないと伝えることが大切だと学んだ。また今回のインターンシップに参加して，一日中パソコンに向かうより，現場に出たりするような仕事に就きたいなと感じた。このことは参加しなかったら分からなかった事なので，インターンシップに参加して将来の職業選択のヒントを得ることができ，とても良い経験になった。
	E	官公庁	今回のインターンシップで学んだことは，私は公務員を就職の第一志望にしているが，一概に役所にいってもどのような仕事をするのかは分からないし，福井ではジョブローテーションによって配属された課でも3～4年で異動となってしまうので様々な知識が必要になってくるということである。インターンシップを通じ公務員の仕事に実際に触れ，どのような業務を行っているのか，どういう仕組みで成り立っているのか，さらに実際に働いている人たちはどのような気持ちで仕事をしているのかを知ることができた。また基本的なことだが，大学では学べない，上司への挨拶やお世話になった方々へのお礼など社会人としてのマナーを身につけることができた。今回の体験を通じて明確に自分の目標を公務員に定めることができた。目標を達成するためにも今回の体験を将来に活かすためにも，公務員試験に向けてこれからの勉強を頑張っていきたい。
平成27年度	F	官公庁	今回のインターンシップを通して，健康福祉センターでは，人前に出て講演をするような目立つことから，事務作業のような地味な仕事までこなしていることを知りました。健康福祉センターの方々はどのような仕事でもきっちりとこなしていました。きっと他の会社でも同じであると思うので，社会に出たとき仕事の大小や内容に関わらず，何事においても真摯に取り組めるようにしたいと思いました。今回のインターンシップで，今まで知らなかった保健所の仕事内容や雰囲気について学ぶことができ，とても良い機会であったと思います。今回は官公庁へのインターンシップだったので，次のインターンシップでは民間の企業で経験したいと考えています。
	G	官公庁	今回のインターンシップ研修を通して学んだことは，市役所の業務内容などでは無く，市職員の人柄や業務に対する思いなどを聞けたことが重要だったと思います。研修中にも職員と接する機会が多く，右も左も分からない私に優しく接してくれました。また，市民の少々理不尽な問い合わせに対しても一から丁寧に説明していました。このような人柄の良さや，業務に対する強い思いが市職員を務める上で必要なことなのだと感じました。私の周りにも公務員を目指す仲間がいます。その人たちになぜ公務員を目指すのか？と問いかけるとほとんどの人が安定しているからと答えます。私も以前はその中の一人でした。しかし今回の研修を終えて，公務員は決して安定しているからという理由で務まる職業ではないことを痛感しました。市民のために，市のために，将来を担う子ども達のために働きたいという強い思いを持つことが必要だと分かりました。これからの学校生活，公務員試験の対策で時間を追われる日々が続きますが，その中でも自分の町のために働きたいという思いをどんどん伸ばしていきたいです。

（事務局資料）

資料 1-2-46　インターンシップ等実地体験についての満足度（教育地域科学部）

設問：インターンシップ等実地体験（大学院長期インターンシップを含む）について，あなたはどの程度満足していますか。



※第１期末と比較して第２期末では学生の満足度（十分～やや満足と回答した割合）は8.0%向上している。特に，十分満足～満足と回答した割合は，19.0%向上している。

（平成 21 年度及び平成 27 年度「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」結果より抜粋）

【学習意欲向上方策】

学業，学内外での諸活動，社会貢献について優れた業績を残した学生を卒業時に学長表彰または学部長表彰する制度を設けている（**資料 1-2-47**）。その他，意欲の低下した学生に対して助言教員，教務課，学生総合相談室と連携した対応を行っており，学生支援に対する学生の満足度は高い（**資料 1-2-48，49**）。

資料 1-2-47　教育地域科学部における表彰学生の選考に関する申合せ

教育地域科学部における表彰学生の選考に関する申合せ

教育地域科学部長表彰学生の選考及び「福井大学学生表彰要項」及び「福井大学学生表彰に関する申合せ」に基づく学長表彰学生の選考について次のとおり申し合わせる。

１．優秀学生の選考方法

優秀学生の選考について，次のとおり取扱う。

（１）講座主任等は，各コース（サブコース）の当該年度卒業予定学生から，優秀学生１名を選考し，別紙様式の推薦書を添えて教務学生委員会に推薦するものとする。なお，推薦にあたっては，学業成績のみならず人物並びに学内外での諸活動，社会貢献等にも留意するものとする。

（２）学部長は，（１）により推薦のあった優秀学生を表彰するものとする。ただし，（３）の学長表彰学生は除く。

（３）教務学生委員会は，各講座等から推薦のあった優秀学生の中から，次の方法により学長表彰学生（成績優秀学生）１名を選考するものとする。

①４年次前期までの成績について「優」，「良」，「可」を「３点」，「２点」，「１点」として読み替え，それぞれ単位数を乗じたうえで集計し，合計点を総取得単位数で除した数値が最も高い者。

②同点の場合は，（１）の推薦理由を考慮して選考する。

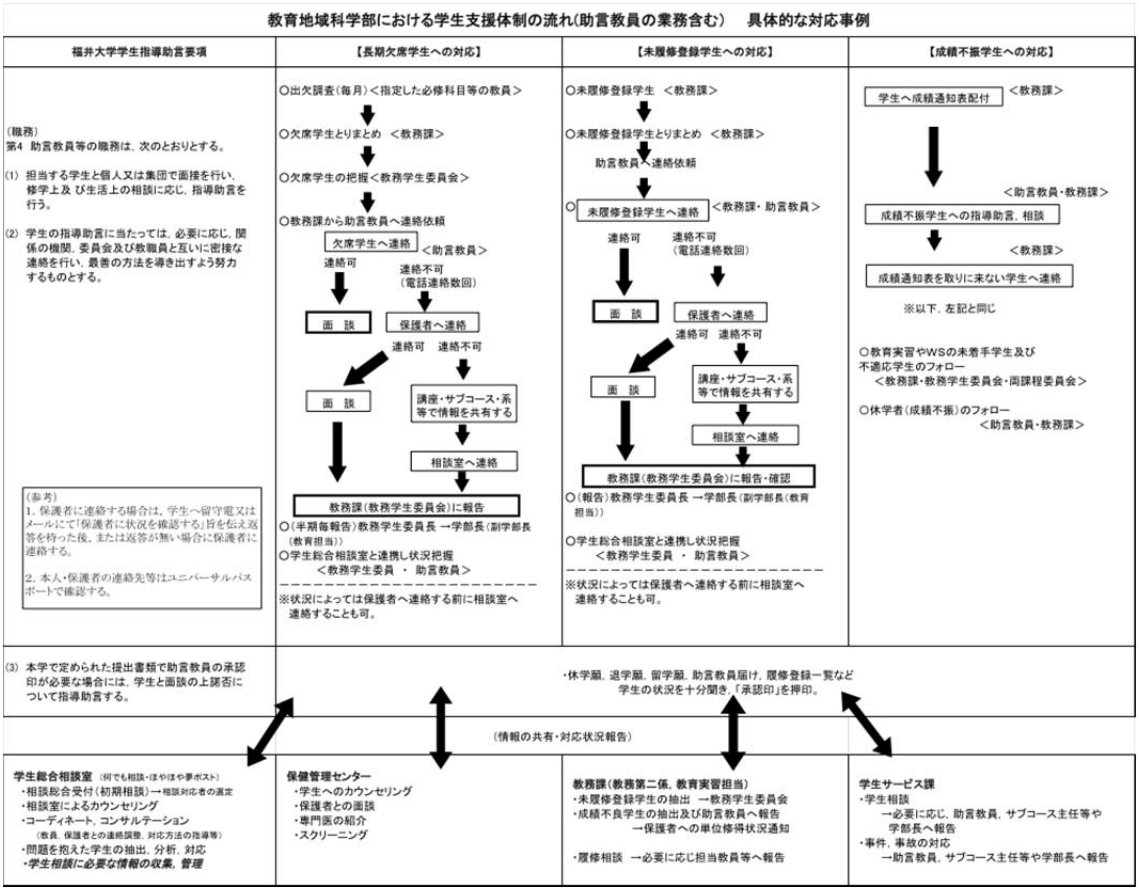
（４）教務学生委員会は，選考した学長表彰学生１名を「推薦書」を添えて，学部長に推薦するものとする。

（５）教務学生委員会は，各コース（サブコース）の優秀学生名及び選考の経緯を教授会に報告するものとする。

（事務局資料）

資料 1-2-48　教育地域科学部の学生支援体制

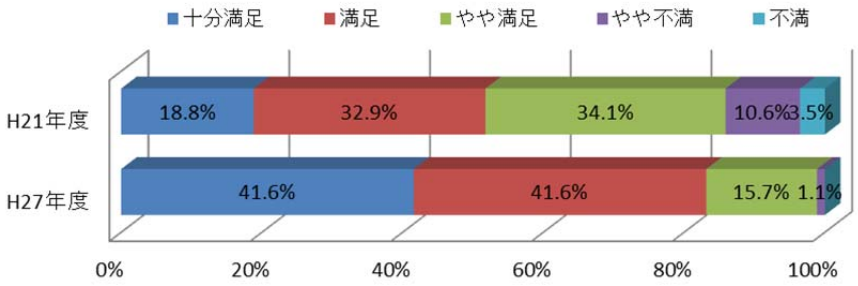
■　平成 23 年度より各学期開始１～２ヶ月の時期に必修科目の出席率調査を行い，欠席の多い学生については助言教員に通知して指導を行っている。さらに，毎学期毎に成績を教員に通知するとともに保護者とも連携して指導している。



(事務局資料)

資料 1-2-49　学生支援体制の満足度

設問：教育（学修）支援（指導・助言教員，教務職員等）について，あなたはどの程度満足していますか。



※第１期末と比較して第２期末では学生の満足度（十分満足～やや満足と回答した割合）は13.0%向上している。特に，十分満足～満足と回答した割合は，31.4%向上している。

（平成 21 年度および平成 27 年度「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」結果より抜粋）

【学習環境の整備】

図書館利用時間拡大や，自習にも活用できる少人数用教室や語学学習のための e-ラーニングシステムの整備等，授業時間外学習・自主的な学習の場を積極的に提供している。修学環境についての学生の満足度も概ね高く，第１期に比して，向上した（**資料 1-2-50, 51**）。

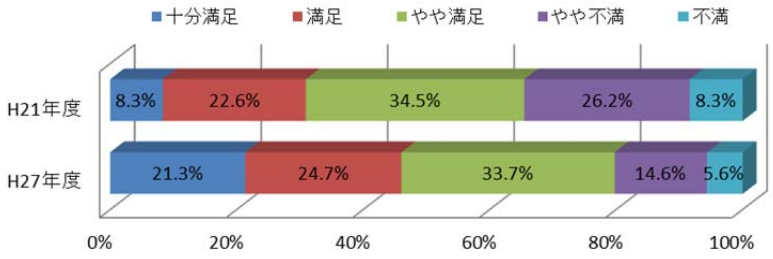
資料 1-2-50　自主的学習環境の整備状況

学部等	施設名		設置数	利用時間	備考
総合情報基盤センター	総合情報基盤センター（第１端末室）		１室（パソコン 62 台等）	平日 8:30～20:00	
	総合情報基盤センター（第２端末室）		１室（パソコン 10 台等）		
総合図書館	第一閲覧室		１室（パソコン 8 台等）	平日 6:00～22:00 土日休日 9:00～16:00（試験期間中の土日休日は 18:00 まで）	
	第二閲覧室		１室（パソコン 4 台等）		蔵書検索用パソコン１台含む
	グループ学習室		3 室（ホワイトボード）		
	展示ホール		１室（ホワイトボード）		グループ学習室の補助的役割として，展示ホールの一部を学習の場として提供
	マルチメディアコーナー		1 箇所（パソコン 15 台等）		
	ラウンジ		1 箇所（パソコン 5 台等）		蔵書検索用パソコン１台含む
	カウンター		1 箇所（パソコン 20 台，iPad9 台等）	平日 9:00～22:00 土日休日 13:00～16:00（試験期間中の土日休日は 18:00 まで）	パソコン及び iPad は貸出用 ホワイトボードも貸出可
語学センター	言語開発センター	DVD ステーション	1 箇所，12 席（DVD 視聴 TV12 台等）	平日　11:00 ～ 20:00 夏期・春期休業中 11:00～17:00	文京キャンパス（総合図書館内）
		リーディング・ラウンジ	1 箇所，15 席		
		個人語学演習室	24 室（e-learning システム等）		
		多目的演習室	4 室		
	Global Hub		1 室	平日　9:00 ～ 17:00	SA 貸出用パソコン１台 テレビ（英語ニュース放映） 英字新聞，留学情報誌配置
大学会館	談話室		１室	平日 8:30～20:00	学生が憩いの場として随時利用。留学情報誌配置
教育地域科学部	学生研究室		26 室	24 時間	
	総合情報処理演習室		１室（パソコン 101 台等）	平日 8:30～19:30	
	コンピュータ演習室		１室（パソコン 25 台等）	24 時間	
	講義室		29 室	－	講義が行われていない場合に利用可能

（事務局資料）

資料 1-2-51　学習スペースについての満足度

設問：大学で自由に使える学習スペース（研究室の個人スペースを含む）について，あなたはどの程度満足していますか。



※第１期末と比較して第２期末では学生の満足度（十分満足～やや満足と回答した割合）は，14.3%向上している。特に，十分満足と回答した割合は，13.0%向上している。

（平成 21 年度および平成 27 年度「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」結果より抜粋）

●その他，教育内容・方法に関する例

【インクルーシブな教育環境】

学生支援，メンタルヘルス等に関する FD を定期的に実施するとともに（P1-27 前掲資料 1-1-31），特別な支援が必要と考えられる留学生については国際交流センター，発達障害など気がかりな学生に対しては学生総合相談室が中心となって，個別的な支援を行う体制が整備されている（資料 1-2-52）。

資料 1-2-52　特別な支援を行うことが必要と考えられる学生への支援の実施例

実施組織	対象者	実　施　事　項
教育地域科学部	留学生	・国際交流センターによる，日本語教育や修学上及び生活上の指導助言の実施 ・学生チューター（日本人学生，先輩留学生）の配置 ・日本語補講による学習支援
	障害のある学生	・施設設備のバリアフリー化（スロープ，多目的トイレなど）
	発達障害	・発達障害学生（診断書有）に対し，助言教員，保健管理センター，教務課及び学生総合相談室で支援チームを組み，支援方法を協議及び個別の支援計画を作成し，定期的（学期の始まる前）にサポート会議を実施

障害のある学生数（平成 26 年度）

学部	人数	区分	障　害　の　種　類
教育地域科学部	4	発達障害 その他	高機能自閉症等３ 病弱・虚弱１

（事務局資料）

【高大連携】

高校からの依頼を受けて大学教員が高校に出向き専門分野の講義を行う「訪問講義」を実施している（資料 1-2-53）ほか，平成 25 年度より高校生と大学生が交流する授業「教職実践研究公開クロスセッション」を実施しており，県内の高校生の参加者は増加している（資料 1-2-54）。

資料 1-2-53　高校での訪問講義（平成 25～27 年度分のみ掲載）

（平成 25 年度）

訪問先	内容	学年	大学教員数
足羽高校	専門講義	2・3 年	教育 1 名
美方高校	専門講義	2 年	教育 1，工 1 名
美方高校	専門講義(10/30)	1 年	教育 1，工 1 名
高志高校	専門講義	2・3 年	教育 1，医 1，工 1 名
武生高校	専門講義	2 年	教育 1，医 1，工 1 名
羽水高校	専門講義	2 年	教育 3，医 1，工 5 名
三国高校	専門講義	2・3 年	教育 1，医 1，工 2 名
武生東高校	専門講義	3 年	教育 2，医 1，工 1 名
敦賀高校	専門講義	2 年	教育 2，工 3 名
鯖江高校	専門講義	2・3 年	教育 1，工 1 名
丸岡高校	専門講義	2 年	教育 1，工 1 名
藤島高校	専門講義	2 年	教育 1，医 2 名
大野高校	専門講義	2 年	教育 1，医 2，工 1 名
仁愛女子高校	専門講義	1・2 年	教育 1，医 1，工 1 名
若狭高校	専門講義	1 年	教育 2，医 1，工 1 名
金津高校	専門講義	2 年	教育 2，工 3 名
丹南高校	専門講義	1・2 年	教育 1 名
丹生高校	専門講義	2 年	教育 1，工 1 名

（平成 26 年度）

訪問先	内容	学年	大学教員数
美方高校	専門講義	2 年	教育 1，工 1 名
羽水高校	専門講義	2 年	教育 3，医 1，工 5 名
三国高校	専門講義	2・3 年	教育 1，医 1，工 1 名
高志高校	専門講義	2・3 年	教育 1，医 1，工 1 名
勝山高校	専門講義	2 年	教育 1，医 1，工 1 名
武生東高校	専門講義	2 年	教育 3，医 1，工 5 名
三国高校	専門講義	2・3 年	教育 1，医 1，工 2 名
武生東高校	専門講義	3 年	教育 2，医 1，工 1 名
敦賀高校	専門講義	2 年	教育 2，工 2 名
若狭高校	専門講義	1 年	教育 2，医 2 名
美方高校	専門講義	1 年	教育 1，工 1 名
鯖江高校	専門講義	2・3 年	教育 1，工 1 名
丸岡高校	専門講義	2 年	教育 1，工 1 名
大野高校	専門講義	2 年	教育 1，医 2，工 1 名
藤島高校	専門講義	2 年	教育 1，医 2 名
仁愛女子高校	専門講義	1・2 年	教育 1，医 1 名
金津高校	専門講義	2 年	教育 2，工 3 名
丹生高校	専門講義	2 年	教育 1，工 1 名
丹南高校	専門講義	1・2 年	教育 1 名

（平成 27 年度）

訪問先	内容	学年	大学教員数
武生高校	専門講義	2 年	教育 1，医 1，工 1 名
美方高校	専門講義	2 年	教育 1，工 1 名
羽水高校	専門講義	2 年	教育 3，医 1，工 5 名
三国高校	専門講義	2・3 年	教育 1，医 1，工 2 名
高志高校	専門講義	2 年	教育 1，医 1，工 1 名
武生東高校	専門講義	3 年	医 1，工 1 名
若狭高校	専門講義	1 年	教育 2，工 1 名
敦賀高校	専門講義	2 年	教育 1，医 1，工 2 名
金津高校	専門講義	2 年	教育 3，工 2 名
美方高校	専門講義	1 年	教育 1，工 1 名
鯖江高校	専門講義	2・3 年	教育 1，工 1 名
丸岡高校	専門講義	2 年	教育 1，工 1 名
武生東高校	専門講義	2 年	工 1 名
大野高校	専門講義	1・2 年	教育 1，医 2，工 1 名
藤島高校	専門講義	1・2 年	教育 1，医 2 名
仁愛女子高校	専門講義	2 年	教育 1 名
丹生高校	専門講義	1～3 年	教育 1，工 1 名
丹南高校	専門講義	1～3 年	教育 1 名

（事務局資料）

資料 1-2-54　教育実践研究公開クロスセッション

この部分は著作権の関係で掲載できません。

（平成 25 年 12 月 22 日　日刊県民福井）

クロスセッション参加者数

【平成25年度】
高校生22校から117名（県内66名，県外51名）
その他21名（学校教員，他大学教員）
本学学生296名（授業受講者）
本学教員22名
本学院生20名

【平成26年度】
高校生13校から77名（県内）
その他８名（学校教員，他大学教員，他大学院生，研究者）
本学学生439名（授業受講者）
本学教員23名
本学院生18名

【平成27年度】
高校生17校から98名（県内）
その他６名（学校教員，他大学生，県教育委員）
本学学生424名（授業受講者）
本学教員38名
本学院生５名

（事務局資料）

（水準）　期待される水準を上回る

（判断理由）

①　体系的な教育課程の編成

教養教育と専門教育のバランスの取れたカリキュラムを構築するとともに，学習指導方法も工夫され，ディプロマ・ポリシーに沿った人材養成が行われており[1)]学生の評価も第１期より向上している[2)]。教員養成については県教育委員会と協議の上教員養成スタンダードを策定して修得すべき能力を明示しており，教育関係者の期待に応えている[3)]。

1)	資料 1-2-2　：ディプロマ・ポリシー　P1-38
	資料 1-2-3　：カリキュラム・ポリシー　P1-39
	資料 1-2-7　：カリキュラム・マップ　P1-44
	資料 1-2-8　：共通教育と専門教育の関係　P1-45
	資料 1-2-12　：教養・共通教育に対する満足度　P1-47
	資料 1-2-41　：学生のカリキュラム評価　P1-67
2)	資料 1-1-32　：学部教育に対する学生の評価　P1-28
3)	資料 1-2-5　：教員養成スタンダード　P41

②　実践能力の育成

教育実践研究や地域課題ワークショップ等のコア科目を中心に多様な教育方法や履修形態が取り入れられ[4)]，協働して課題を解決する能動的学習を通して実践力が涵養され，第１期と比して学生の評価も高い[5)]。

4)	資料 1-2-13　：教育実践コア科目の概要　P1-48
	資料 1-2-15　：学生の意見等（探求ネットワーク・ライフパートナー）と教職実践演習報告書　P1-49～50
	資料 1-2-36　：実践コア科目における能動的学習　P1-63
	資料 1-2-39　：グループワーク・ガイド　P1-66
5)	資料 1-2-16　：コアカリキュラムの評価　P1-50
	資料 1-2-27　：多様な教育方法・履修形態の導入に対する学生の評価　P1-56
	資料 1-2-28　：実践的能力の自己評価　P1-57
	資料 1-2-29　：教職実践演習報告書に記述された実践の省察　P1-57

③　多様な学修・研修機会

大学だけでなく地域や教育委員会等と連携した実践的教育プログラムが第２期から増加し，多様な学修機会の提供により社会が求める実践力の育成に役立っている[6)]。

6)	資料 1-1-13　：CST（コア・サイエンスティーチャー）事業の概要　P1-12
	資料 1-2-31　：初級 CST 学校インターンシップ参加者数　P1-58
	資料 1-2-32　：初級 CST 博物館等インターンシップ参加者数　P1-58
	資料 1-2-34　：EMP 実行委員会活動実績（平成 22～26 年度）と報告書の例　P1-59
	資料 1-2-35　：E&C ギャラリー主催企画展（平成 24～27 年度）　P1-62
	資料 1-2-37　：「地域課題ワークショップⅠ」の概要　P1-64
	資料 1-2-38　：「地域創生ワークショップ（地域科学課程）」の概要　P1-65
	資料 1-2-45　：福井県経営者協会を通してのインターンシップ参加状況　P1-69
	資料 1-2-46　：インターンシップ等実地体験についての満足度（教育地域科学部）　P1-70

④　自主的学習を促す取組

様々な方策によって自主的学習を促し[7]，授業時間外学習時間が第１期に比べ増加している[8]。

[7] 資料 1-2-43　：授業時間外学習を促す工夫　P1-68
[8] 資料 1-2-44　：授業時間外学習時間　P1-68

⑤　高大連携・附属学校との連携

第１期に比べ，高大連携の取組が拡充するとともに[9]，附属学校園と連携した教育活動も増加している[10]。

[9] 資料 1-2-54　：教育実践研究公開クロスセッション　P1-75
[10] 資料 1-2-30　：附属学校園を活用した卒業研究　P1-58

⑥　学修環境と学生支援体制の改善

第１期に比べ学修環境及び学生支援体制が改善され[11]，学生の満足度も向上している[12]。

[11] 資料 1-2-48　：教育地域科学部の学生支援体制　P1-71
[12] 資料 1-2-49　：学生支援体制の満足度　P1-71
資料 1-2-51　：学習スペースについての満足度　P1-73

分析項目Ⅱ　教育成果の状況

観点　学業の成果

（観点に係る状況）

●履修状況から判断される学習成果の状況

【学習成果の評価方法】

① 学校教育課程では，第２期中に策定した独自の教員養成スタンダード（P1-41 **前掲資料 1-2-5**）において，新しい評価方法への転換を図った（**資料 2-1-1**）。これは，「高い専門性と実践力を備えた教員を養成する」という学校関係者の期待や，そのための能力の涵養に対する学生の期待に応える取組である。

資料 2-1-1　教員養成スタンダードにおける新しい評価方法への転換

●新しい評価へ

福井大学教育地域科学部の教員養成カリキュラムにおいて育まれている能力は,従来の標準化されたペーパーテストに見られるような,個別的な知識や技能の有無をチェックするという方法では評価することができません。そもそも，専門職としての教師の能力は，そのような方法で評価すべきではありません。

私たちは人間の能力を，複数の知識や技能や態度が組み合わされて状況に応じて発揮されるもの，新しい状況の中で何度も使い直されることによって全体的に習熟されていくもの,そして個人に宿るだけでなく集団の人間関係の中で発揮されるものと捉えています。そして，このような能力は，一人では解決できないような難しい課題を協働で探究するような学習の中で育まれるものであると考えています。

したがって，教師に必要となる能力の評価は，第一に，探究を支援する機能を持っている必要があります。一人では解決できないような課題に向かっていく協働的な探究は，試行錯誤し，時には失敗しながら進んでいくものです。しかし，試行錯誤だけでは探究は進んでいきません。大切なことは，要所で自身の学習の過程を振り返り，学び直し，まとめ直し，そしてその意味を問い直すことを通して，次の新たな探究をデザインすることです。評価は探究や学習を促進するための道具であるのはもちろん，評価自体も探究や学習の重要な柱なのです。

このような評価は，第二に，能力が育まれた状況を豊かに表現するものである必要があります。どのような目標を目指した学習なのか。また，どのような状況において，どのような課題に向かい，どのように解決したのか。さらに，どのような環境や集団の中で学習を進めてきたのか。これらの情報が豊かに残された記録は,厳密な体制のもとで行われたテストよりもはるかに能力の育ちを読み手に伝えてくれます。また，能力が育まれた状況そのものを吟味することにもなります。つまり評価は，目標と学習そのものを問い直す道具でもあるのです。私たちは，先に述べた学習個人誌が，まさにこれら評価の二つの機能を担うものであると考えています。

以上のような考えに基づいて,私たちは教員養成を担う学部として共通スタンダードとコース別スタンダードという二種類の教員養成スタンダードを策定しました。いずれのスタンダードも，これからの時代の教師に求められる能力を目標として掲げ，その目標に向かって行われるべき学習経験を保障し，その証拠となる学習成果物を組織するという理念に貫かれています。

（「平成 27 年度教育地域科学部教員養成スタンダード」より抜粋）

② このような評価方法を導入した実践コア科目（P1-48 **前掲資料 1-2-13，14**）においては，前年度までの学生の成果を蓄積し，学習の前提を高度化したうえで学習成果を報告書等にまとめさせ，それらの成果物による成績評価を行っている（**資料 2-1-2，**P1-49 **前掲資料 1-2-15**）。

資料 2-1-2　探求ネットワーク（教育実践研究 B）とライフパートナー（教育実践研究 C）報告書


組織編

福井大学教育地域科学部　探求ネットワーク

共同探求者を育むプロセス 15

～子どもたちと長期にわたる活動から見えてくる探求的学び～

探求ネットワーク　Since1995

福井大学　教育地域科学部　探求ネットワーク

2015 年度活動報告書

2016 年 3 月


個人編

福井大学教育地域科学部　探求ネットワーク

共同探求者を育むプロセス 15

～子どもたちと長期にわたる活動から見えてくる探求的学び～

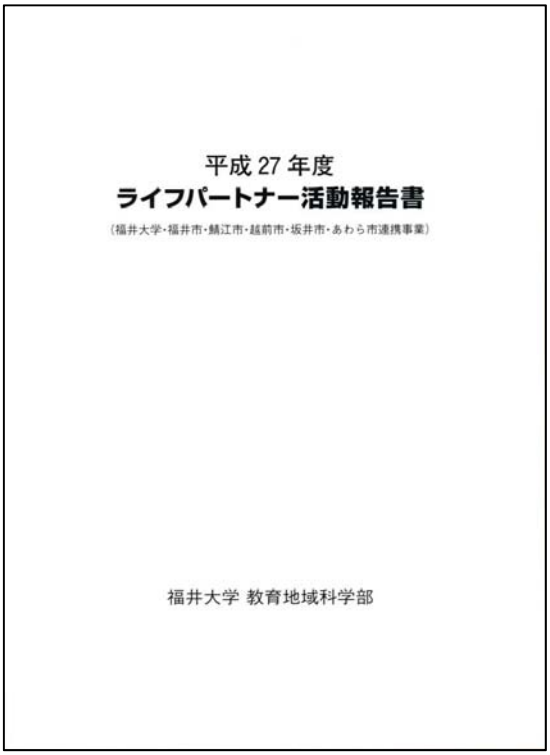
探求ネットワーク　Since1995

福井大学　教育地域科学部　探求ネットワーク

2015 年度活動報告書

2016 年 3 月

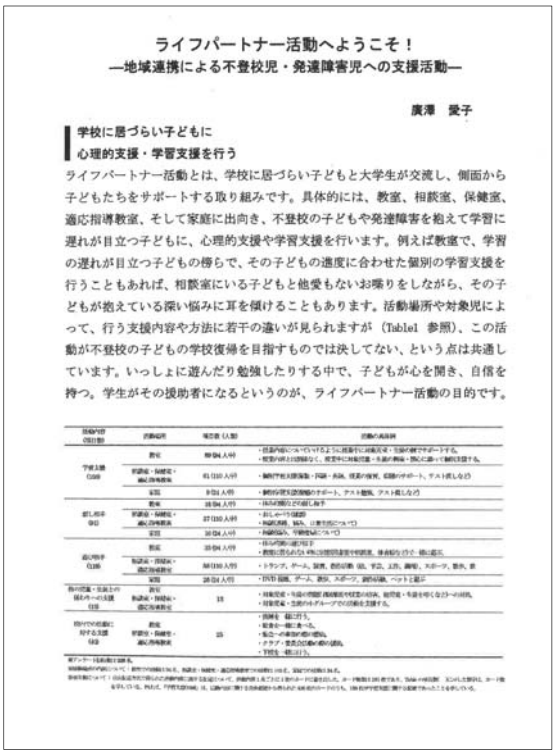
（探求ネットワーク（教育実践研究 B）報告書より抜粋）


平成 27 年度

ライフパートナー活動報告書

（福井大学・福井市・鯖江市・越前市・坂井市・あわら市連携事業）

福井大学 教育地域科学部


ライフパートナー活動へようこそ！
―地域連携による不登校児・発達障害児への支援活動―

廣澤　愛子

学校に居づらい子どもに
心理的支援・学習支援を行う

ライフパートナー活動とは、学校に居づらい子どもと大学生が交流し、側面から子どもたちをサポートする取り組みです。具体的には、教室、相談室、保健室、適応指導教室、そして家庭に出向き、不登校の子どもや発達障害を抱えて学習に遅れが目立つ子どもに、心理的支援や学習支援を行います。例えば教室で、学習の遅れが目立つ子どもの傍らで、その子どもの進度に合わせた個別の学習支援を行うこともあれば、相談室にいる子どもと他愛もないお喋りをしながら、その子どもが抱えている深い悩みに耳を傾けることもあります。活動場所や対象児によって、行う支援内容や方法に若干の違いが見られますが（Table1 参照）、この活動が不登校の子どもの学校復帰を目指すものでは決してない、という点は共通しています。いっしょに遊んだり勉強したりする中で、子どもが心を開き、自信を持つ。学生がその援助者になるというのが、ライフパートナー活動の目的です。

（ライフパートナー（教育実践研究 C）より抜粋）

（事務局資料）

③　このような学習成果とその評価方法は，学生からも好評価を得ている（**資料 2-1-3**）。

資料 2-1-3　教育実践研究 A と教職実践演習に対する学生の評価例

学年	コメント
１年次生	チームワークで協議探究していくことのよって他のメンバーからいろいろな意見を聞くことができ，教育についての考えが大学入学前よりも深まったため，本当に良かったと思った。ただ授業で知識を教えるだけではないことを知ることができた。また先輩たちの実習の話を聞いて，私もそれらに向けて準備をしていかないといけないと思った。また２年生からは文献をもっと真剣に読みたいと思う。
	他の学年に知り合いができ，レポートのアドバイスなどを聞くことができた。他の人の考えを知れて，自分もこのままではダメだと思うようになった。もっと深く考えなきゃと思った。レポートは大変だけど，とても楽しい授業でした。レポートの評価や添削があったらもっとやる気が出ると思います。
	異なる学年やコースの人と同じテーマについて議論することで，さまざまな意見が取り入れられて面白かったです。
	先輩方からいろいろな意見や話を聞くことができ，１年生にとってはそういった学校生活の導入をいう点では良かったと思う。
	４年生，３年生，２年生と話す機会がもてたので，福井大学の取り組みを知ることや，教育についての知識をつけること，このような先輩になりたいという意欲をつけることができた。話し合う時間が非常によかった。チームテーマについて話すことも深くでき，他にも様々な取り組みについても知ることができた。改善すべき点はとくにありません。
	上学年の先輩方の経験談をリアルに聞ける。教育実習や介護等体験への意気込みが強くなった。
２年次生	学年をこえたつながりができたこと。３年生や４年生の実習の内容をきいて，来年へのイメージができた。
	他学年，他コースの人と話すことで，コミュニケーション能力がつき，視野も大きくなった。
	先輩の実践について知ることができたり，自分の実践に対していろいとな視点からコメントをもらえたり，これまで学んできたことを振り返ることができてよかったです。
	資料や文献を読みとってレポートを書く（まとめる）能力が向上したと思う。この能力はこれから先も大変重要であるため，この授業を受けて良かった。
	自分の考えや思いを持ち，授業に臨み，他者と共有し，自分がやってきたことがそれでよかっと思う場合と，もっと改善していかないといけない点を見つける良い機会になったと感じる。毎年私の中の確かな学びの場として培われていると思う。
	１～４年までが集まって話すので，それぞれの学年の視点から考えが出てきてよかったし参考になった。
３年次生	毎回の授業でたくさんの気づきを得ることができた。ありがとうございました。公開授業をふやしてほしい。著名な教育学者（ex.秋田さん・荒瀬さん）のお話をきく機会がほしい!!
	個人誌づくりで専門教科に分かれて学べたことはよかったと思います。
	色々な話が聞け，話ができ，すごく良い時間だったと思う。ただレポートを「読む」だけでなく「話す」時間をたくさんとってもらえると，さらに学べると思うし，新しい発見があると思う。
	３年生になってやっとこの授業の大切さに気付くことができた。自ら学ぼうとする姿勢が大切だということを，実際に経験できた。
	１年間話し合う機会をいただき，ありがとうございました。メンバーに恵まれて，また先生方の新チャレンジや工夫のおかげで，楽しく，学びが多い時間を過ごすことができました。他の子も指摘していますが，卒論とこの授業のまとめが被ると厳しいので，課題の量や時期の調整をよろしくお願いします。
	様々な視点からの意見が聴けて，自分の考えが深まったと思う。
４年次生	いろんな人のそれぞれの経験を聞くことができてよかったです。
	今後，4年生も参加していくことに対して，意義があると思います。教職大学院性との関わりはおもしろかったです。
	教育に関して向き合う時間になり，とても良かった。反省・考察等，しっかり行うことができた。
	学年を超えて話し合いをする機会はこの授業しかないので，素晴らしいと思います！
	多くの人とコミュニケーションをとることができ，視野を広げることができました。実践の機会がもっと多くあるとよかったです。
	公開クロスセッションがたのしかったです。チームテーマについての話し合いはちょっと難しいと思いました。

（平成 26 年度及び平成 27 年度学部授業評価アンケートより抜粋）

④　地域科学課程では，中核的科目である「地域課題ワークショップ」科目において，平成 25 年度から「育成する能力」を設定し，学生に自己評価を行わせている。その結果，すべての項目で能力獲得について肯定的な評価を得られた（**資料 2-1-4**）。また，これらの科目に対しては，学生から高評価を得ている（**資料 2-1-5**）。

資料 2-1-4　「育成する能力」に関する学生の自己評価例（平成 27 年度前期）

集計方法：身につかなかった（−2），あまり身につかなかった（−1），ある程度身についた（＋1），かなり身についた（＋2），わからない（±0）で評価し，質問項目の評定値の平均を科目ごとに出す。

科目名　地域課題ワークショップⅠ（回答者数59名）	平均点
①前に踏み出す力	
プレゼンテーション能力	0.97
リーダーシップ	0.37
②考え抜く力	
情報を収集する能力	0.98
情報を分析する能力	0.86
③チームで働く力	
コミュニケーション能力	1.22
④社会人基礎力以外の資質	
民主的に合意形成できる資質	0.95
全体平均点	0.89

科目名　地域課題ワークショップⅡ（地域分析系）（回答者数7名）	平均点
①前に踏み出す力	
プレゼンテーション能力	1.14
リーダーシップ	0.71
②考え抜く力	
情報を収集する能力	1.71
情報を分析する能力	1.29
③チームで働く力	
コミュニケーション能力	1
④社会人基礎力以外の資質	
民主的に合意形成できる資質	1
⑤その他の能力	
調査計画を立てる能力	1.29
フィールドワークを含む調査を行える能力	1.43
調査結果に基づき提案できる能力	1.43
全体平均点	1.22

科目名　地域課題ワークショップⅡ（公共政策系）（回答者数６名）	平均点
①前に踏み出す力	
プレゼンテーション能力	1.17
②考え抜く力	
情報を収集する能力	1.67
情報を分析する能力	0.83
③チームで働く力	
コミュニケーション能力	1.17
④社会人基礎力以外の資質	
民主的に合意形成できる資質	1.67
全体平均点	1.30

科目名　地域課題ワークショップⅡ（環境マネジメント系）（回答者数８名）	平均点
①前に踏み出す力	
プレゼンテーション能力	1.13
リーダーシップ	0.25
②考え抜く力	
情報を収集する能力	1.63
情報を分析する能力	1.25
③チームで働く力	
コミュニケーション能力	1.25
④社会人基礎力以外の資質	
民主的に合意形成できる資質	1.38
⑤その他の能力	
科学的視点と客観的な態度	1.25
主体的・自律的な暮らしができる能力	1.5
全体平均点	1.21

科目名　地域課題ワークショップⅡ（生涯学習系）（回答者数17名）	平均点
①前に踏み出す力	
プレゼンテーション能力	1
リーダーシップ	0.71
②考え抜く力	
情報を収集する能力	1.18
情報を分析する能力	1.18
③チームで働く力	
コミュニケーション能力	1
④社会人基礎力以外の資質	
民主的に合意形成できる資質	1.35
全体平均点	1.07

科目名　地域課題ワークショップⅡ（言語コミュニケーション系）（回答者数６名）	平均点
①前に踏み出す力	
プレゼンテーション能力	0.67
リーダーシップ	0.5
②考え抜く力	
情報を収集する能力	1.5
情報を分析する能力	1.33
③チームで働く力	
コミュニケーション能力	1.67
⑤その他の能力	
地域，言葉，言語，外国語，コミュニケーションなどをキーワードに，現在どのようなことが問題となっているのかということについて，自ら問題意識を持って課題設定できる能力	0.67
設定した課題について，それを解決するためには，何をどうやって調べればよいのか，ということについて，基本的なリサーチスキル	0.83
全体平均点	1.02

科目名　地域課題ワークショップⅡ （国際文化系） （回答者数17名）	平均点
①前に踏み出す力	
プレゼンテーション能力	0.29
②考え抜く力	
情報を収集する能力	0.71
③チームで働く力	
コミュニケーション能力	0.59
④社会人基礎力以外の資質	
民主的に合意形成できる資質	1.18
全体平均点	0.69

（平成 27 年度前期「育成する能力」アンケートより抜粋）

資料 2-1-5　地域課題ワークショップ科目に対する学生の評価例

科目名	コメント
地域課題ワークショップⅠ	あまり面識のない人達と協調性を高めて課題に対して研究していくことができたのは良い経験となった。
	KJ法やブレインストーミング法をGWで用いることで，意見を言いやすい雰囲気ができたと思うので，今後も活用してほしい。
	初対面の同級生と全く知らなかったテーマについて学ぶことができて，とても楽しかった。今回学んだことを今後全てに活かしていきたい。
	人によって考えや意見は全く違うことを改めて知ることができ，他者の意見尊重が大事だと学んだ。１人だけではうまくいかないこともたくさんあり，協力は必要不可欠であることが分かった。通常の講義では学べないので良かった。
	新しい体験ができたし，いろいろな視点から考えることが大切である，ということを学ぶことができた。
	グループワークを通して，以前よりも積極性やコミュニケーション能力が上がったので良かった。
	この授業を受けて，コニュニケーション能力や，内容を端的にまとめる力がついたので良かったです。
	今後，社会に出ていくときに必要な多くの力が身につけることができ良かった。
	自分たちがこれからどのようなスキルをつけていかないといけないのかを学ぶことができた。
	様々な視点からの意見を知ることができた。認知する課題も多く，発見することも多かった。地域の課題に興味を持てた。以上が良かったこと。
地域課題ワークショップⅡ	たのしかったです！前期とは充実感がちがいました。大変だったけど，その分，身になるものが多かった。
	発表の中でも言いましたが，形に残るものをつくれてよかったです。芸術班なので，今回のような形がこれからもできるといいと思います。
	作品を残せて嬉しかった。先生からたくさんの助言を頂けたからだと感じています。ありがとうございました。
	研究の中で，つまづくことが前期のワークショップと比べて多かったが，つまづいたことをもとにして，得ることができる情報をくみとれたことが良かった。
	論理的に結論を出したり提案を出せるようになった。
	ふれたことのないデータにふれて，考察する機会が多くあり，関心が深まった。
	担当の先生がワークショップの活動で適切にアドバイスをくれてうれしかったです。
	この授業は，4年生の先輩の卒業研究に関わっており，先輩が最初，授業をして下さった。先輩の授業は分かりやすく，資料もみやすいと感じた。また，その分野に対する興味関心も高まったと思う。
	自分がやるべき役割や課題が明確だったので。それを1つ1つやることで少しは皆の役に立てたと思う。
	研究として，初めて触れた分野のテーマなので，行き詰ることは多々ありましたが，それでも進む力は身についたように感じました。
	情報公開制度を理解できるきっかけになったことがよかったと思う。中間発表を多く行ったので，発表する力は前期よりも向上できたのではと思えた。
地域課題ワークショップⅢ	企画書→指摘をうける→企画書改→の流れをくりかえし，実習ごとに企画のクオリティも上がっており（慣れてきて？）いいサイクルだと思った。
	子どもと接する際に気をつけることなど，普段の生活では気がつけないことを学べて良かったです。
	時間外に用意を行うことの重要性を考える機会になった。仕事を分担する等のバランスの取り方等など，他人とチームを組んで作業・計画を進めていくことの演習として有益であった。
	計画的に物事を進めていくことの必要性を強く感じた。
	普段関わることのない人達と一緒に活動をすることで自分にはない考え方や発想を知ることができて勉強になっています。
	主体的に考え，企画実行していく力をつけることができ，有意義な時間になった。
	自分の力で企画立案，運営を行っていくことの難しさ楽しさを学べました。
	インタビュー内容が興味深く，楽しかった。
	自分の研究した分野への興味が増した。
	自分達で興味・関心のあるテーマを選んで論文を書くということが，自分の卒業論文を書くための準備として最適なものでした。今回の授業で学んだこと，論文の書き方や考察の仕方などを活かして，卒業論文執筆に取りかかりたいと思います。
	共同論文を皆で各自分担をしながら，やってきたことが私にとって非常に役に立ったと思いました。
地域課題ワークショップⅣ	物事を深く考える，多方面から考える力がついた。また，テーマは違うものの，ゼミで同じように頑張る仲間とはげましあいながら課題ができ，充実感があった。
	自分の研究テーマに対する理解が深まった。
	卒業研究で，自分の興味のあることを調べるのが楽しくもあり，新しい発見につながっています。
	地域分析系の専門分野や調査研究について学び，自分で地域の諸課題を卒論に向けて分析できて良かったです。
	論文の発表を通して，自身の卒業研究の参考になるものがたくさんあって，有意義なものだった。
	自分の探究力が特に向上したと感じた。
	自分達だけでなく，地域もまき込んで，活動ができて良かった。
	地域の方との関わりがもててよかった。
	先輩の卒論の発表を見て，とても参考になった。
	担当の教員が非常に親身になって様々な相談を聴いて下さった。参考にすべき文献も的確に教えていただけた。
	自分の興味のある事を深く掘り下げて，研究を進めることができたので良かった。

（平成 26 年度及び平成 27 年度学部授業評価アンケートより抜粋）

⑤　「地域課題ワークショップ科目」単位修得者の評価点（秀４，優３，良２，可１に換算）平均値も３前後の高い値を示している（**資料 2-1-6**）。

資料 2-1-6　地域課題ワークショップ科目単位修得者の評価点平均値

	（単位数：取得者数×単位数）					（評価点換算：取得者数×評価点）					
平成25年度	秀	優	良	可	単位数計(A)	秀(4)	優(3)	良(2)	可(1)	換算値計(B)	評価点平均値(B/A)
地域課題ワークショップⅠ	24	94	6	0	124	96	282	12	0	390	3.15
地域課題ワークショップⅡ	46	290	26	12	374	184	870	52	8	1114	2.98
地域課題ワークショップⅢ	0	248	6	0	254	0	744	12	8	764	3.01
地域課題ワークショップⅣ	0	208	36	0	244	0	624	72	4	700	2.87

平成26年度	秀	優	良	可	単位数計(A)	秀(4)	優(3)	良(2)	可(1)	換算値計(B)	評価点平均値(B/A)
地域課題ワークショップⅠ	20	94	12	0	126	80	282	24	0	386	3.06
地域課題ワークショップⅡ	34	288	44	32	398	136	864	88	8	1096	2.75
地域課題ワークショップⅢ	6	244	4	12	266	24	732	8	8	772	2.90
地域課題ワークショップⅣ	2	194	10	2	208	8	582	20	4	614	2.95

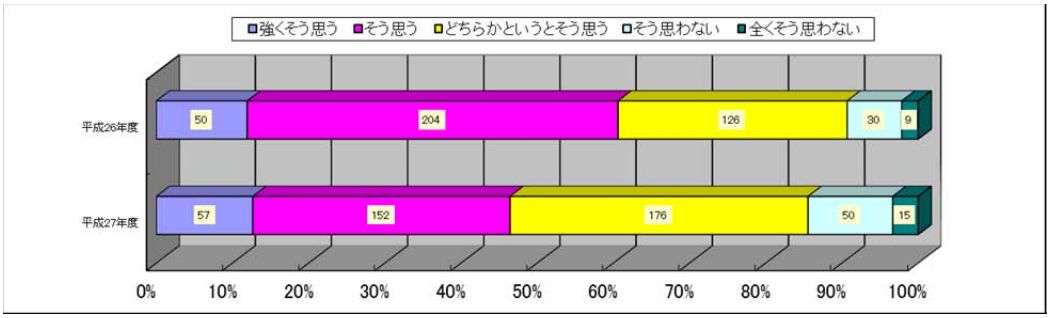
平成27年度	秀	優	良	可	単位数計(A)	秀(4)	優(3)	良(2)	可(1)	換算値計(B)	評価点平均値(B/A)
地域課題ワークショップⅠ	22	100	0	0	122	88	300	0	0	388	3.18
地域課題ワークショップⅡ	16	294	52	8	370	64	882	104	8	1058	2.86
地域課題ワークショップⅢ	30	192	12	8	242	120	576	24	8	728	3.01
地域課題ワークショップⅣ	10	250	14	4	278	40	750	28	4	822	2.96

（事務局資料）

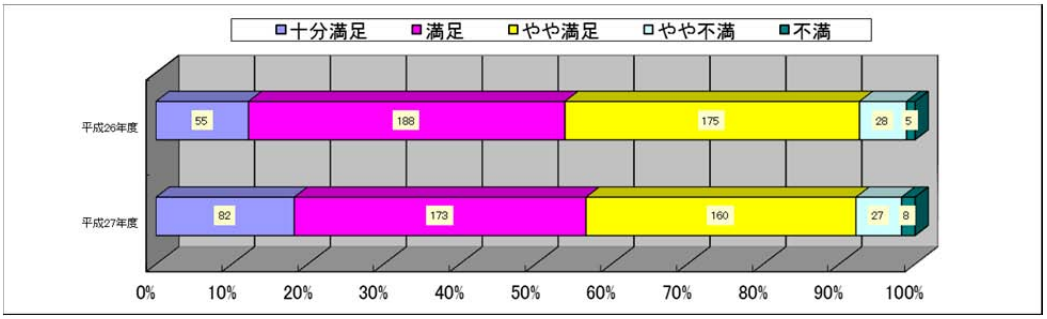
⑥　このような成績評価基準に対する学生の認知度や評価方法の適切性に対する肯定的評価は 80～90%台と高い値を示した（**資料 2-1-7**）。また，これらの科目の効果や履修意欲に関する肯定的な回答は，この質問項目を導入した平成 26 年度と平成 27 年度を比較した場合，明確に上昇した（**資料 2-1-8**）。これらの結果は，学生の能力形成に対する期待に応えた証左と言える。

資料 2-1-7　成績評価基準・成績評価方法に関する学生の評価

設問：学生便覧やシラバスに成績評価基準や評価方法等が記載されています。あなたはこれらの成績評価基準や評価方法等を知っていますか？



設問：成績の評価方法の適切性について，あなたはどの程度満足していますか。

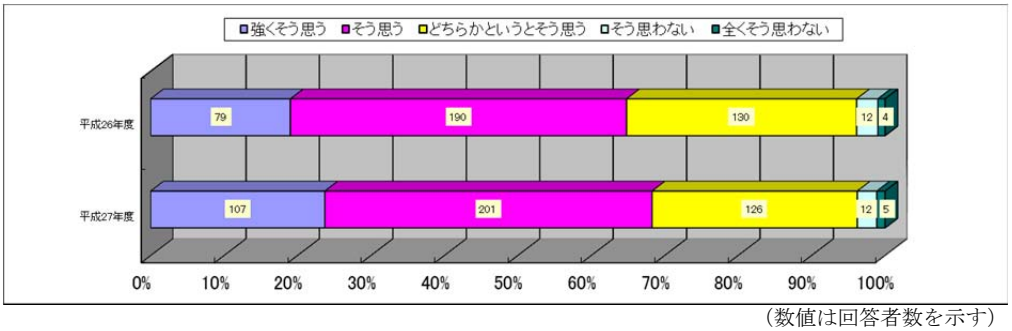


（数値は回答者数を示す）

（平成 26 年度及び平成 27 年度「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」結果より抜粋）

資料 2-1-8　実践コア科目及び地域課題ワークショップ科目に対する学生の評価

設問：「教育実践研究 A～C」（学校教育課程）あるいは「地域課題ワークショップⅠ～Ⅳ」（地域科学課程）によって，人間関係の構築力やコミュニケーション能力などが修得でき，自分自身の成長に役立ったと思いますか？

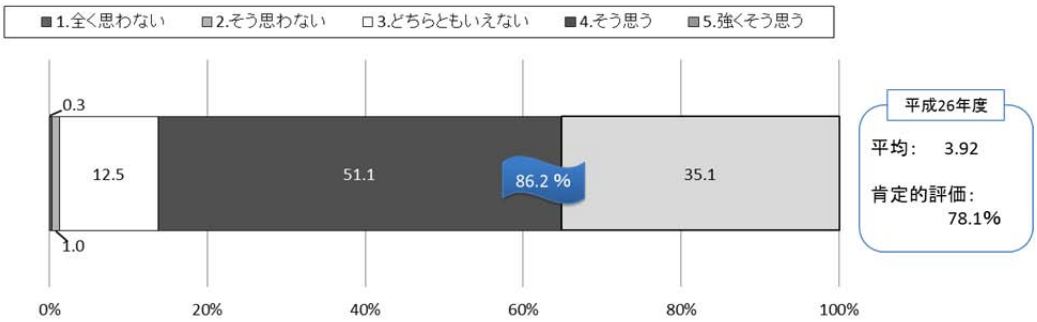


（数値は回答者数を示す）

（平成 26 年度および平成 27 年度「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」結果より抜粋）

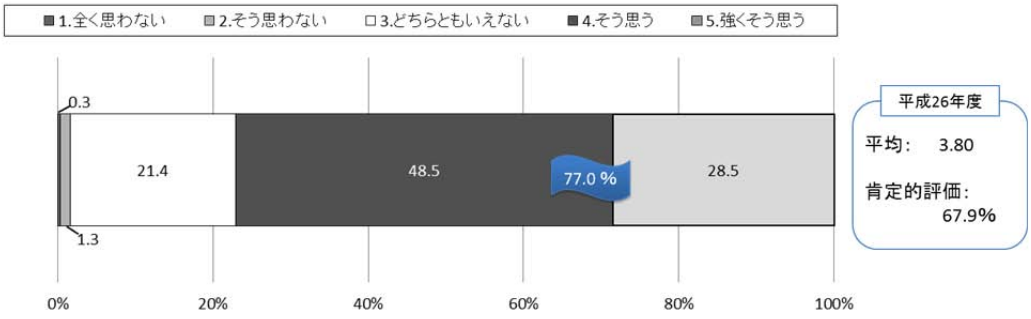
設問：この授業は課題探求力あるいは問題解決能力の修得に役立った。

（スコア平均：4.20）



設問：この授業を通じて，学校教育あるいは地域の諸課題に対する興味や履修意欲が増した。

（スコア平均：4.04）



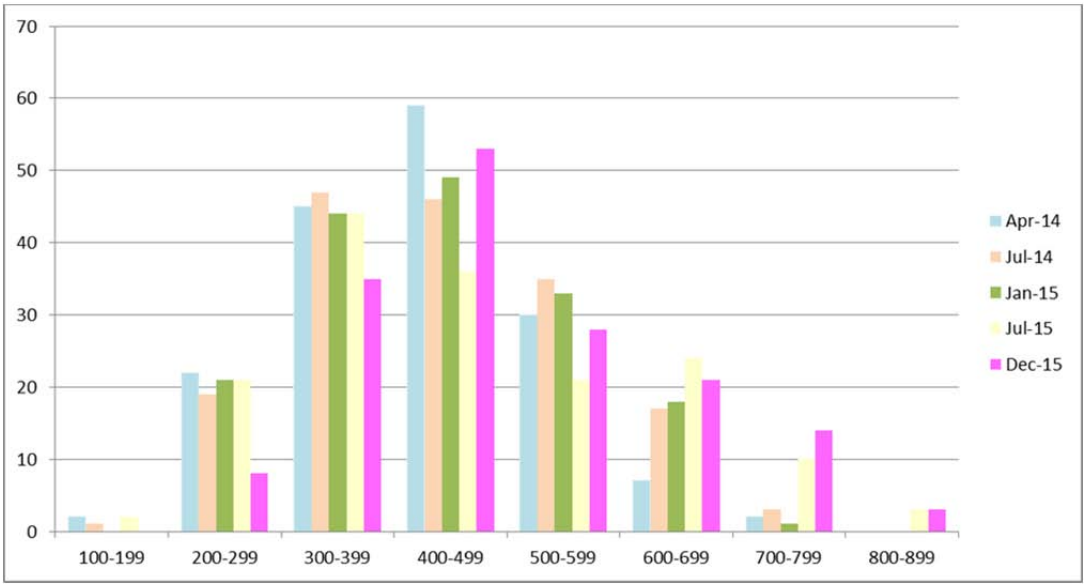
（「平成 27 年度学部授業評価アンケート」より抜粋）

（事務局資料）

⑦　平成 26 年度入学生より，共通教育の英語科目の強化改善を図り（P1-18 **前掲資料 1-1-20**，P1-54 **前掲資料 1-2-24**），TOEIC の定期受験を義務付けたところ，着実な成績の上昇が見られた（**資料 2-1-9**）。また，語学系科目に対する学生の満足度も第１期と比べて明確に向上した（**資料 2-1-10**）。

資料 2-1-9　平成 26 年度入学生の TOEIC 結果の推移

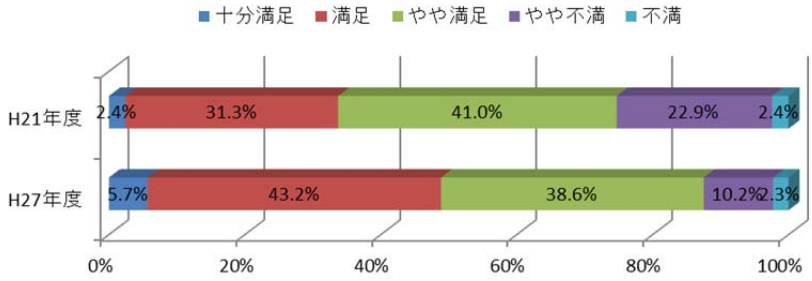
教育地域科学部 Education（約168名）	26年4月	26年7月	27年1月	27年7月	27年12月
全体平均 Average	421点	441点	438点	459点	494点
リスニング平均 Listening ave.	227点	253点	253点	256点	282点
リーディング平均 Reading ave.	194点	188点	185点	203点	211点
最高点　Highest	715点	710点	730点	830点	870点
最低点　Lowest	165点	195点	200点	160点	265点



（事務局資料）

資料 2-1-10　教養・共通教育（語学系）に関する学生の満足度

設問：教養・共通教育の語学系授業について，あなたはどの程度満足していますか。



※第１期末と比較して第２期末では学生の満足度（十分～やや満足と回答した割合）は，12.8%向上している。

（平成 21 年度および平成 27 年度「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」結果より抜粋）

【単位取得・成績・学位授与状況】

① 第２期中の単位修得率は，教科・専門科目で 90%前後，教職科目で 90%弱と，第１期とほぼ同程度の高い比率で安定的に推移した。また，ほぼすべての年度において，単位を修得した学生の 90%以上が「秀」,「優」または「良」と判定された（第１期は 83～90%）（**資料 2-1-11**）。これらのデータから，大部分の学生は第１期と同程度あるいはそれ以上に４年間で単位を着実に修得し，卒業時に十分な資質・能力を身につけていると判断できる。

資料 2-1-11　第２期中の単位の修得状況

年度	課程	専門教育科目																				
		教科・専門科目											教職科目									
		授業科目数	履修学生数	単位修得者数	成績							単位修得率	授業科目数	履修学生数	単位修得者数	成績						単位修得率
					秀	優	良	可	不可	保留	不受					秀	優	良	可	不可	保留	不受	
平成22年度	学校教育課程	389	3939	3628	0	2447	855	326	147	0	164	92.1%	139	3634	3235	0	2399	554	282	236	0	163	89.0%
	地域科学課程	270	3062	2713	0	2095	434	184	88	0	261	88.6%											
	合計	659	7001	6341	0	4542	1289	510	235	0	425	90.6%	139	3634	3235	0	2399	554	282	236	0	163	89.0%
平成23年度	学校教育課程	384	3984	3514	0	2284	918	312	225	0	245	88.2%	116	3749	3338	0	2464	550	324	265	1	145	89.0%
	地域科学課程	252	2923	2609	0	2097	356	156	93	0	221	89.3%											
	合計	636	6907	6123	0	4381	1274	468	318	0	466	88.6%	116	3749	3338	0	2464	550	324	265	1	145	89.0%
平成24年度	学校教育課程	393	4030	3592	229	2206	830	327	163	0	275	89.1%	115	3566	3150	123	2084	632	311	256	0	160	88.3%
	地域科学課程	216	2926	2582	273	1616	465	228	99	1	244	88.2%											
	合計	609	6956	6174	502	3822	1295	555	262	1	519	88.8%	115	3566	3150	123	2084	632	311	256	0	160	88.3%
平成25年度	学校教育課程	397	3975	3583	430	1986	892	275	185	7	200	90.1%	110	3594	3147	544	1772	557	274	235	5	207	87.6%
	地域科学課程	203	2872	2591	409	1452	472	258	109	0	172	90.2%											
	合計	600	6847	6174	839	3438	1364	533	294	7	372	90.2%	110	3594	3147	544	1772	557	274	235	5	207	87.6%
平成26年度	学校教育課程	364	3666	3403	662	1581	812	348	116	16	131	92.8%	109	3428	3083	698	1456	618	311	218	29	98	89.9%
	地域科学課程	213	2993	2721	523	1437	487	274	109	0	163	90.9%											
	合計	577	6659	6124	1185	3018	1299	622	225	16	294	92.0%	109	3428	3083	698	1456	618	311	218	29	98	89.9%
平成27年度	学校教育課程	381	3737	3419	765	1518	836	300	137	77	104	91.5%	103	3255	2889	632	1372	586	299	166	122	78	88.8%
	地域科学課程	204	2883	2614	568	1313	486	247	90	14	165	90.7%											
	合計	585	6620	6033	1333	2831	1322	547	227	91	269	91.1%	103	3255	2889	632	1372	586	299	166	122	78	88.8%

（事務局資料）

② 第２期中には平均 84.2%の学生が標準修業年限（４年）内で所定の単位を修得して卒業し，標準修業年限×1.5 年での卒業した学生は 90%近くに達した（**資料 2-1-12，13**）。

資料 2-1-12　標準修業年限（４年）内の卒業率及び標準修業年限×1.5 年内卒業率の状況

入学年度	入学者数 (a)	標準修業年限内卒業者数(b)	(b)の卒業率 (b/a)	標準修業年限×1.5年内卒業者数(c)	(c)の卒業率 (c/a)
平成 19 年度	177	153	86.4%	167	94.4%
平成 20 年度	172	143	82.6%	158	91.9%
平成 21 年度	172	137	79.7%	158	91.9%
平成 22 年度	161	138	85.7%	154	95.7%
平成 23 年度	172	145	84.3%	155	90.1%
平成 24 年度	172	148	86.0%	－	－
平均	171	144	84.2%	158	92.4%

（事務局資料）

資料 2-1-13　第２期中の卒業認定者数の課程別内訳

	卒業認定者数				未定者数			
	学校教育課程	地域科学課程	地域文化課程	地域社会課程	学校教育課程	地域科学課程	地域文化課程	地域社会課程
平成 22 年度	95		25	33	12		7	1
平成 23 年度	91	52			19	7		
平成 24 年度	83	54			24	6		
平成 25 年度	82	56			17	3		
平成 26 年度	90	55			19	7		
平成 27 年度	91	57			14	7		

（事務局資料）

③　学士課程の在学生数に対する留年，退学，および休学率は，それぞれ５％，１％，３％程度であり，ごく少数に留まっている（**資料 2-1-14**）。

資料 2-1-14　留年・退学・休学の状況

■ 留年率

平成 22 年度			平成 23 年度			平成 24 年度			平成 25 年度			平成 26 年度			平成 27 年度			6 年間平均
学生数	留年者	留年率	学生数	留年者	学生数	学生数	学生数	留年率	学生数	留年者	留年率	学生数	留年者	留年率	学生数	留年者	留年率	留年率
693	29	4.2%	697	36	5.2%	705	42	6.0%	712	35	4.9%	710	33	4.6%	704	36	5.1%	5.0%

■ 退学率

平成 22 年度			平成 23 年度			平成 24 年度			平成 25 年度			平成 26 年度			平成 27 年度			6 年間平均
学生数	退学者	退学率	学生数	退学者	退学率	学生数	退学者	退学率	学生数	退学者	退学率	学生数	退学者	退学率	学生数	退学者	退学率	退学率
693	5	0.7%	697	4	0.6%	705	5	0.7%	712	8	1.1%	710	11	1.5%	704	11	1.6%	1.0%

■ 休学率

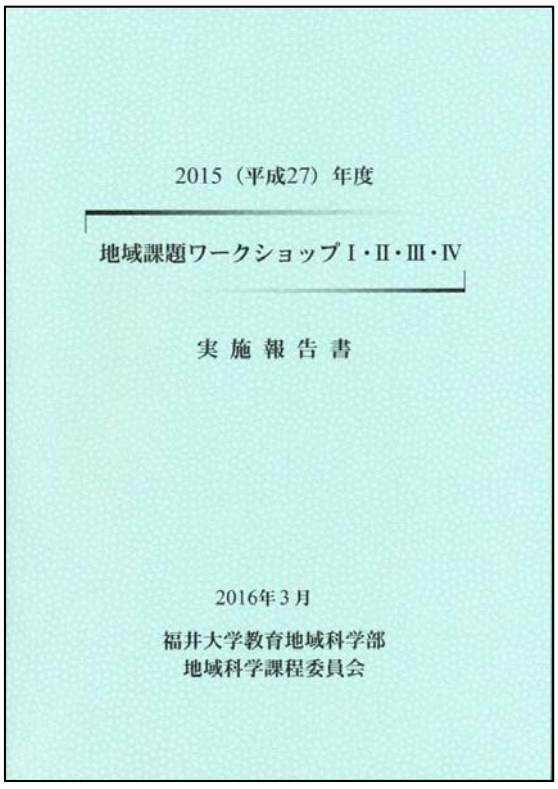
平成 22 年度			平成 23 年度			平成 24 年度			平成 25 年度			平成 26 年度			平成 27 年度			6 年間平均
学生数	休学者	休学率	学生数	休学者	休学率	学生数	休学者	休学率	学生数	休学者	休学率	学生数	休学者	休学率	学生数	休学者	休学率	休学率
693	12	1.7%	697	22	3.2%	705	15	2.1%	712	28	3.9%	710	22	3.1%	704	19	2.7%	2.8%

（事務局資料）

【実践研究】

実践コア科目及び地域課題ワークショップ科目の学習成果を毎年報告書の形で公表しており（**資料 2-1-15, P1-49 前掲資料 1-2-15, P1-79 前掲資料 2-1-2**），後者に関しては，毎年度末に発表会を実施している（**資料 2-1-16**）。

資料 2-1-15　地域課題ワークショップ実施報告書

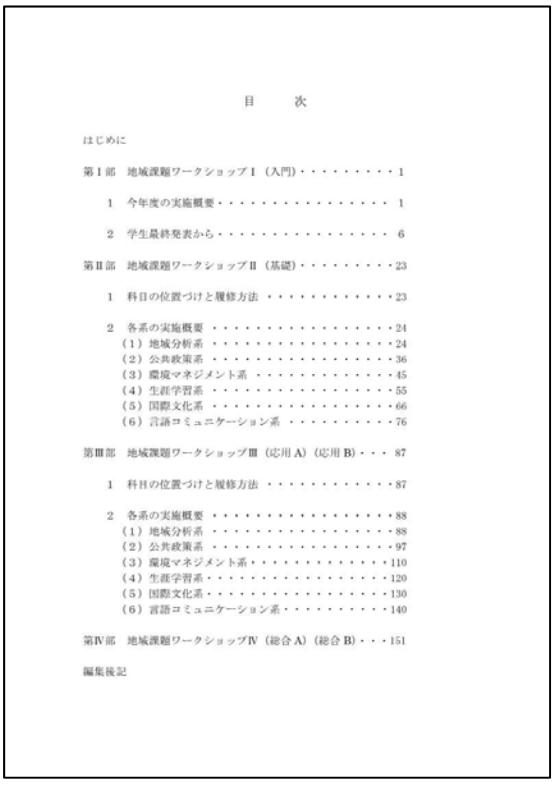

2015（平成27）年度

地域課題ワークショップⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ

実 施 報 告 書

2016年3月

福井大学教育地域科学部
地域科学課程委員会


目　次

はじめに

第Ⅰ部　地域課題ワークショップⅠ（入門）・・・・・・・・・1

1　今年度の実施概要・・・・・・・・・・・・・・・・・1

2　学生最終発表から・・・・・・・・・・・・・・・・・6

第Ⅱ部　地域課題ワークショップⅡ（基礎）・・・・・・・・・23

1　科目の位置づけと履修方法・・・・・・・・・・・・23

2　各系の実施概要・・・・・・・・・・・・・・・・・24
（1）地域分析系・・・・・・・・・・・・・・・・・24
（2）公共政策系・・・・・・・・・・・・・・・・・36
（3）環境マネジメント系・・・・・・・・・・・・・45
（4）生涯学習系・・・・・・・・・・・・・・・・・55
（5）国際文化系・・・・・・・・・・・・・・・・・66
（6）言語コミュニケーション系・・・・・・・・・・76

第Ⅲ部　地域課題ワークショップⅢ（応用A）（応用B）・・・87

1　科目の位置づけと履修方法・・・・・・・・・・・・87

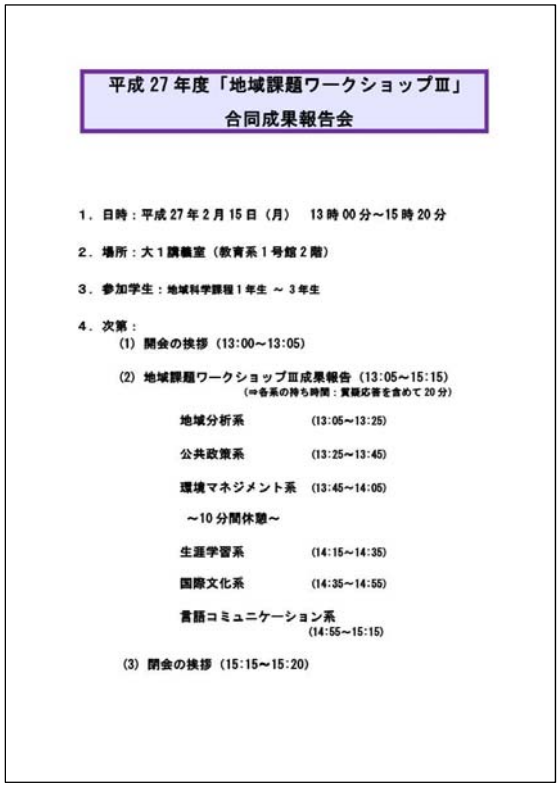
2　各系の実施概要・・・・・・・・・・・・・・・・・88
（1）地域分析系・・・・・・・・・・・・・・・・・88
（2）公共政策系・・・・・・・・・・・・・・・・・97
（3）環境マネジメント系・・・・・・・・・・・・・110
（4）生涯学習系・・・・・・・・・・・・・・・・・120
（5）国際文化系・・・・・・・・・・・・・・・・・130
（6）言語コミュニケーション系・・・・・・・・・・140

第Ⅳ部　地域課題ワークショップⅣ（総合A）（総合B）・・・151

編集後記

（事務局資料）

資料 2-1-16　地域課題ワークショップⅢ発表会の例



平成 27 年度「地域課題ワークショップⅢ」
合同成果報告会

1．日時：平成 27 年 2 月 15 日（月）　13 時 00 分～15 時 20 分

2．場所：大 1 講義室（教育系 1 号館 2 階）

3．参加学生：地域科学課程 1 年生 ～ 3 年生

4．次第：
(1) 開会の挨拶（13:00～13:05）

(2) 地域課題ワークショップⅢ成果報告（13:05～15:15）
（⇒各系の持ち時間：質疑応答を含めて 20 分）

地域分析系　(13:05～13:25)

公共政策系　(13:25～13:45)

環境マネジメント系　(13:45～14:05)

～10 分間休憩～

生涯学習系　(14:15～14:35)

国際文化系　(14:35～14:55)

言語コミュニケーション系
(14:55～15:15)

(3) 閉会の挨拶（15:15～15:20）

（事務局資料）

●資格取得状況

【資格取得】

第２期中の教員免許取得者数の年平均は 468.7 名であり，第１期の 342.5 名より大幅に増加した（**資料 2-1-17**）。また，第１期と比較可能な学芸員及び社会教育主事の年平均資格取得者は，16.7 名から 20.8 名へと増加した（**資料 2-1-18**）。これらのことから，学生の資格取得に対する意欲及び実績は明確に高まっており，学生及び社会からの期待に応えたと言える。

資料 2-1-17　卒業時の教員免許取得状況

（人）

区分	幼稚園			小学校			中学校			高等学校			特別支援学校（18 年度までは養護学校）		
	計	専修	1 種・2 種	計	専修	1 種・2 種	計	専修	1 種・2 種	計	専修※	1 種※※	計	専修	1 種・2 種
平成 22 年度	22	4	18	133	31	102	133	39	94	158	50	92	30	4	26
平成 23 年度	16	5	11	128	35	93	142	45	97	153	45	91	19	5	14
平成 24 年度	13	2	11	120	28	92	123	37	86	143	43	76	29	7	22
平成 25 年度	16	3	13	135	37	98	147	55	92	190	59	89	25	5	20
平成 26 年度	14	0	14	132	39	93	148	51	97	173	51	90	25	6	19
平成 27 年度	15	0	15	123	29	74	132	40	86	155	44	89	20	2	18

（事務局資料）

資料 2-1-18　卒業時の各種資格取得状況

（人）

区分	学芸員	社会教育主事	社会調査士
平成 22 年度	9	11	3
平成 23 年度	16	14	4
平成 24 年度	5	8	3
平成 25 年度	9	9	4
平成 26 年度	12	17	8
平成 27 年度	4	11	3
合計	55	70	25

（事務局資料）

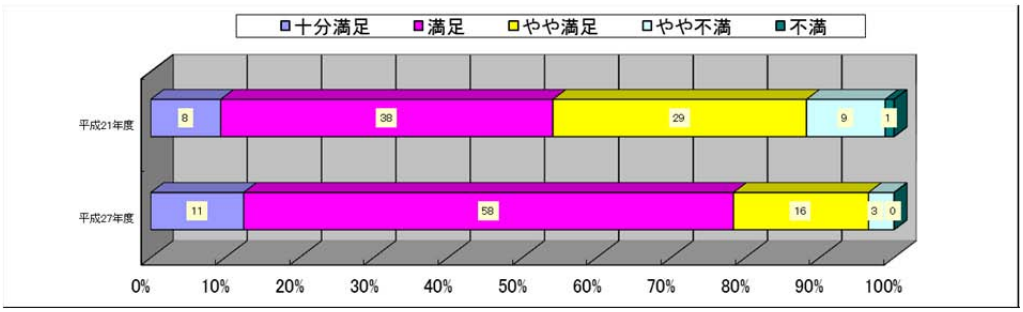
●学業の成果の達成度・満足度に関する学生アンケート等の結果と分析

【学生アンケートの内容】

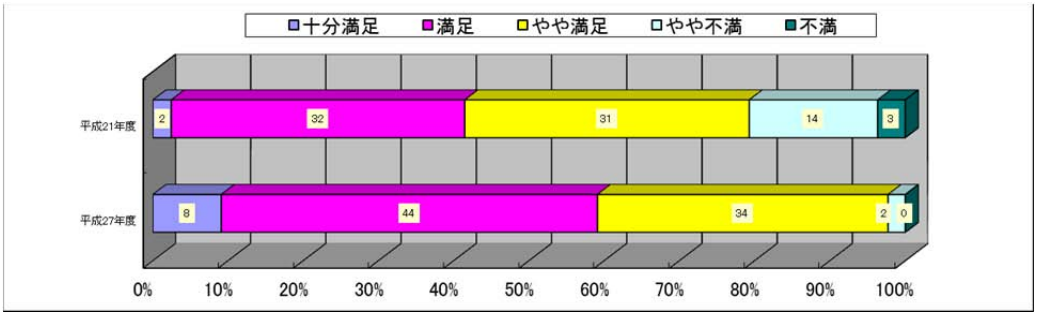
① 学生アンケートの回答結果では，本学の教育や授業，卒業研究指導，教育支援等に対する満足度がいずれも第１期よりも上昇し，80～90%台の高い値となった（**資料 2-1-19**）。これらの結果は，第２期において，本学部の教育が学生の要望に応えて改善されてきたことを示すものである。

資料 2-1-19　本学の教育に対する学生の満足度

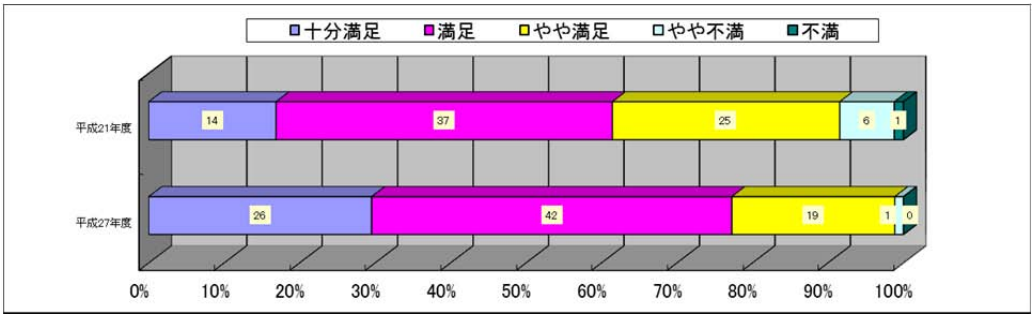
設問：本学における教育全般について，あなたはどの程度満足していますか。



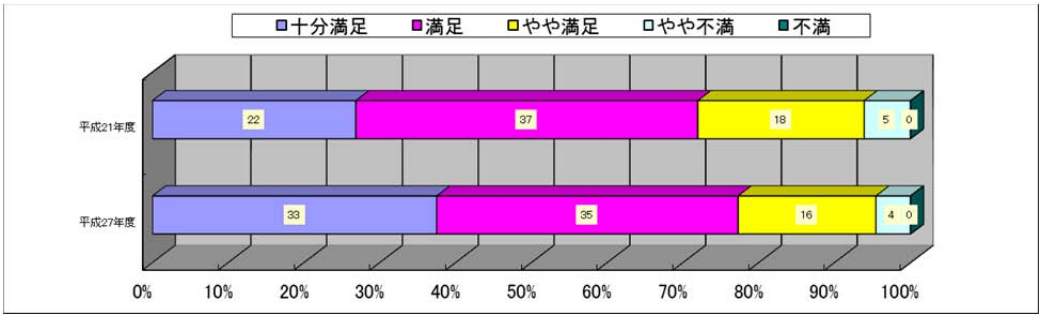
設問：教養・共通教育の授業全般について，あなたはどの程度満足していますか。



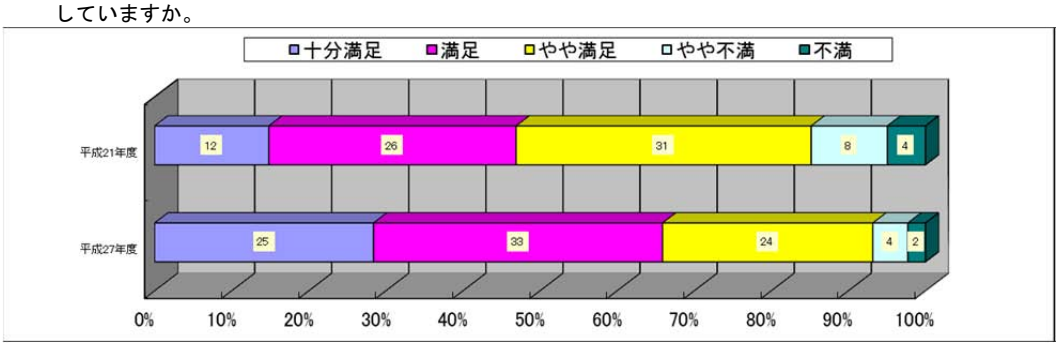
設問：専門の教育全般について，あなたはどの程度満足していますか。



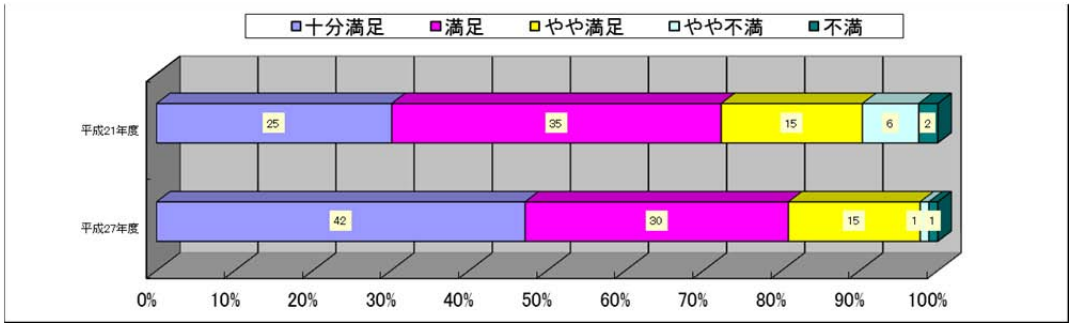
設問：ゼミやワークショップなどの少人数課題探求型の授業について，あなたはどの程度満足していますか。



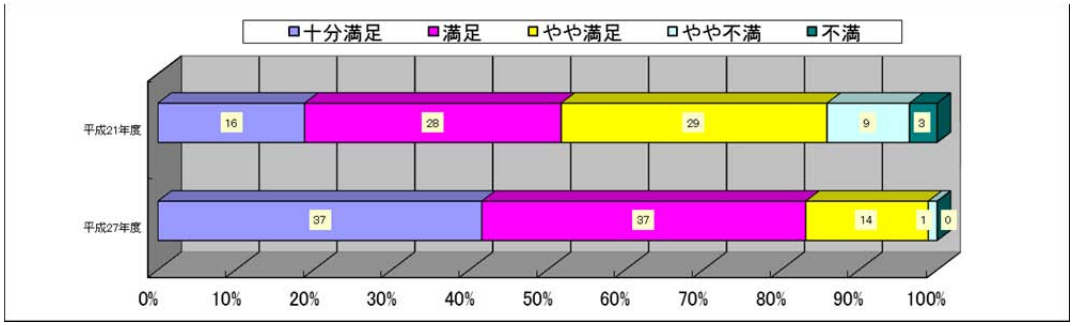
設問：インターンシップ等の実地体験（教育実習や拠点校等での実践を含む）について，あなたはどの程度満足していますか。



設問：卒業研究指導について，あなたはどの程度満足していますか。



設問：教育（学修）支援（指導・助言教員，教務職員等）について，あなたはどの程度満足していますか。



（数値は回答者数を示す）

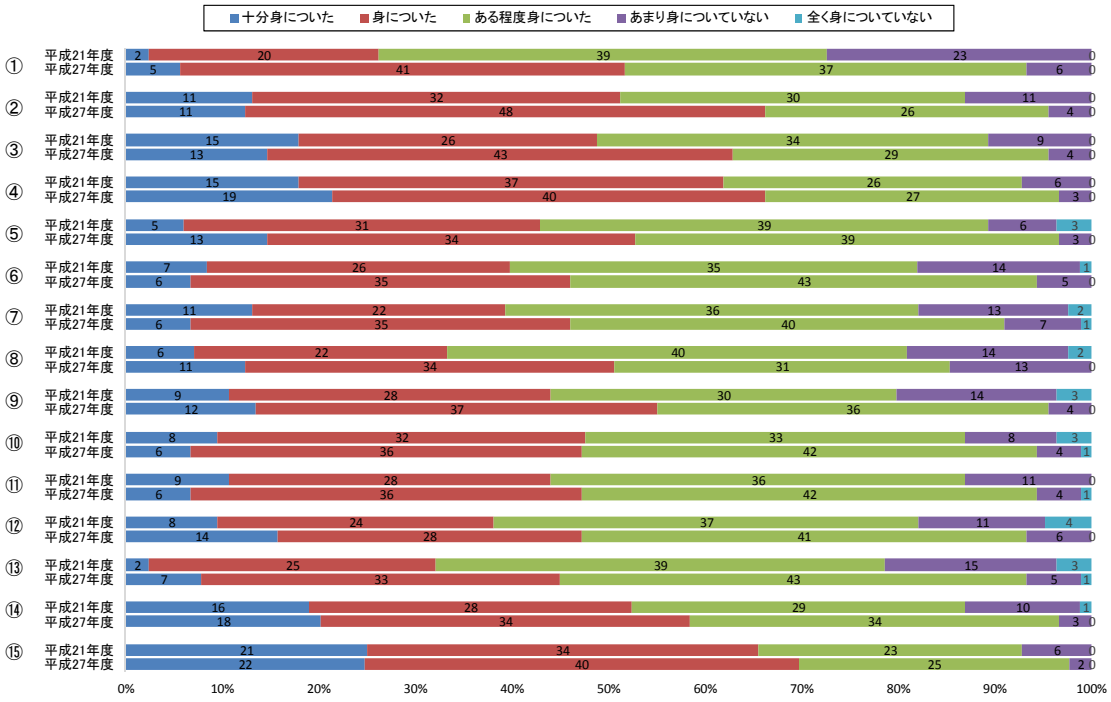
（平成 21 年度及び平成 27 年度「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」結果より抜粋）

②　本学部における学習・研究による各種能力の獲得状況に関する自己評価に関しても，ほとんどの項目で第１期と比較して評価が向上し，高い値となった（**資料 2-1-20**）。

資料 2-1-20　各種能力の獲得状況に関する学生の自己評価

設問：あなたは福井大学で学修や研究をすることによって以下に示す力がどの程度身についた（あるいは身につく）と思いますか。

①基礎学力　②専門知識や技能　③実践的な能力　④広い視野で物事を多面的に考える力　⑤論理や証拠を重視し，それらに基づいて考える力　⑥問題のポイントを押さえ，まとめる力　⑦豊かな想像力，新しいアイデアや発想を生み出す力　⑧プレゼンテーションをする力　⑨ディスカッションやディベートをする力　⑩文章作成や文章表現の力　⑪情報を収集して適切に利用する力　⑫情報機器を活用する力　⑬社会や技術の変化に対応する力　⑭ねばり強く仕事に取組む力　⑮他の学生と協調する力



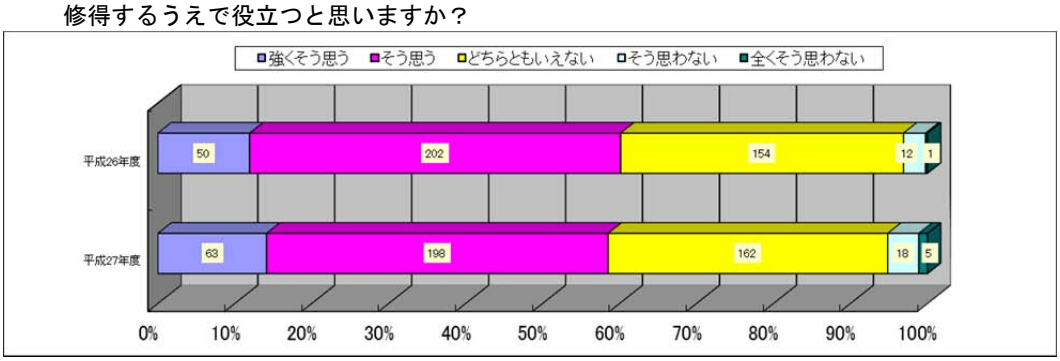
（数値は回答者数を示す）

（平成 21 年度及び平成 27 年度「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」結果より抜粋）

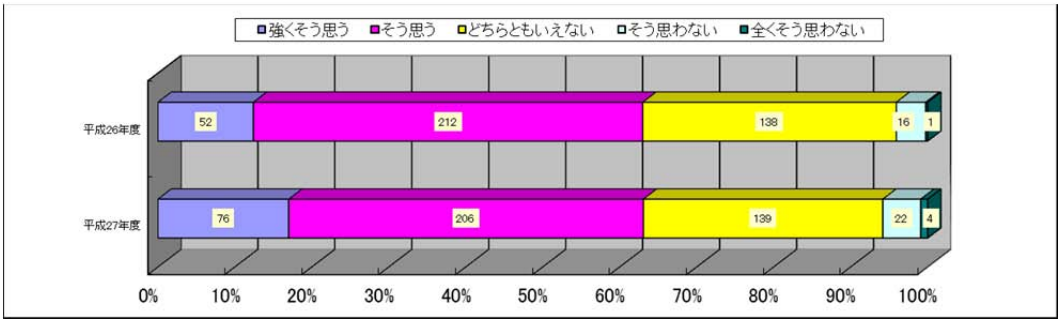
③　カリキュラムの有効性や効果，それによる学習意欲向上に関する質問項目においても，好評を得た（**資料 2-1-21，22**）。

資料 2-1-21　カリキュラムの有効性・効果に対する学生の評価

設問：教育地域科学部のカリキュラムは，教師あるいは地域で活躍する人材として備えるべき能力を修得するうえで役立つと思いますか？



設問：教育地域科学部では，さまざまな教育方法・履修形態（アクティブラーニング型授業，少人数教育，統合型講習，実習など）を取り入れていますが，これらは教師あるいは地域で活躍人材として備えるべき能力を育成するうえで役立ったと思いますか？

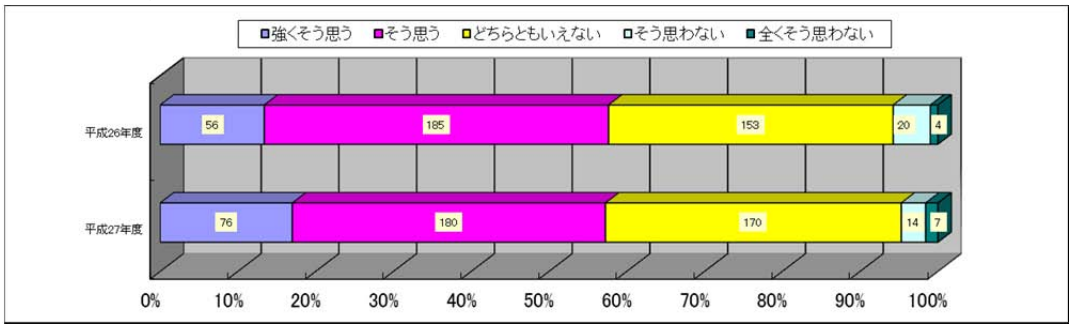


（数値は回答者数を示す）

（平成 26 年度及び平成 27 年度「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」結果より抜粋）

資料 2-1-22　学習意欲の向上に関する学生の自己評価

設問：これまでの授業を通して，学校教育あるいは地域の諸課題に対する興味や履修意欲が増したと思いますか？



（数値は回答者数を示す）

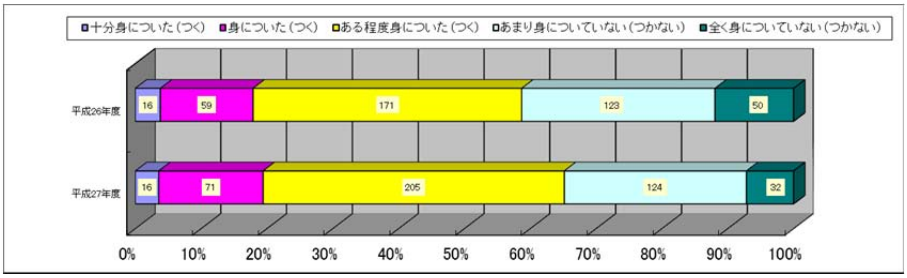
（平成 26 年度及び平成 27 年度「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」結果より抜粋）

④　第２期における本学の目標である「グローバルな視野を有する高度職業専門人」の養成に関する学生の自己評価に関しては，平成 26 年度と平成 27 年度を比較した場合，すべての項目において自己評価が向上し，特に「コミュニケーション能力」と「グローバル化社会での活躍を志向する態度」について，大幅な向上が見られた（**資料 2-1-23**）。

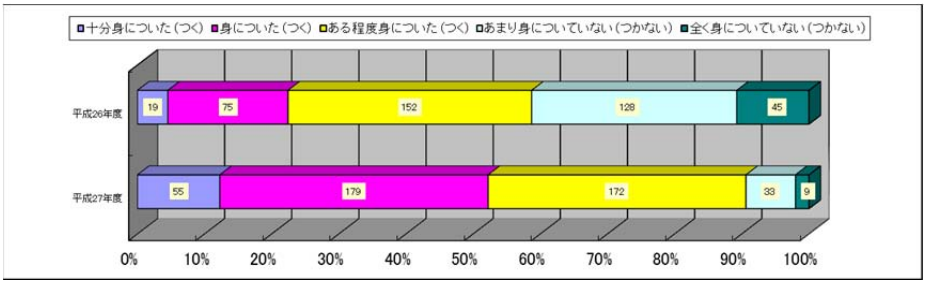
資料 2-1-23　「グローバルな視野を有する高度職業専門人」の養成に関する学生の自己評価

設問：本学では，みなさんが“グローバルな視野を持った高度専門職業人”となることを教育の大きな目標としています。福井大学での学修をとおして，以下の力などがどの程度身についた，あるいは卒業・修了時までに身につくと思いますか？

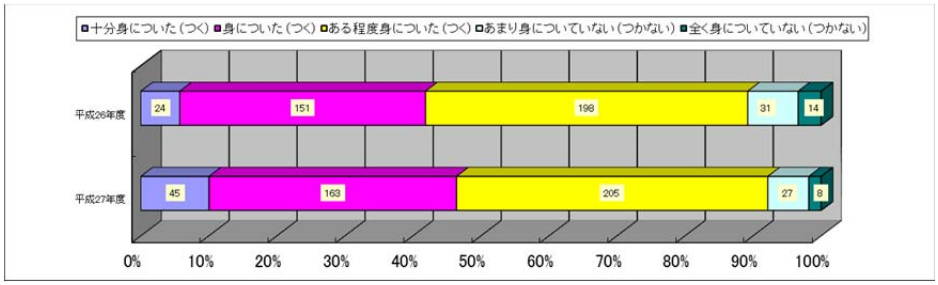
①使える英語力（語学力）



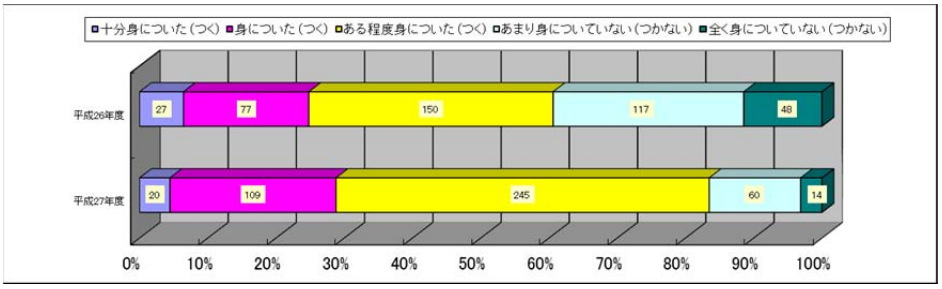
②コミュニケーション能力



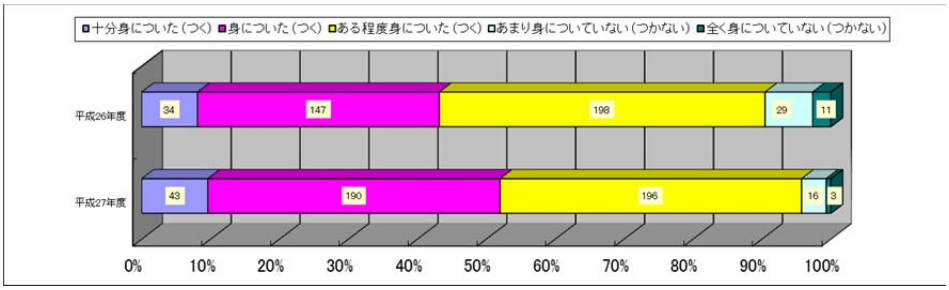
③社会人として備えるべき社会的責任感



④グローバル化社会での活躍を志向する態度



⑤課題探究・問題解決能力，自己学習力



（数値は回答者数を示す）

（平成 26 年度及び平成 27 年度「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」結果より抜粋）

（水準）　期待される水準を上回る

（判断理由）

①　学校教育課程においては，第２期中に策定した教員養成スタンダードにおいて新しい評価方法への転換を図り[1)]，地域科学課程においてもアクティブ・ラーニング科目に「育成する能力」指標を導入した[2)]。これらの新しい評価方法や，それを適用した科目に対しては，学生からも高い評価を得ており[3)]，関係者からの期待に応えた。

[1)] 資料 2-1-1	：教員養成スタンダードにおける新しい評価方法への転換　P1-78
[2)] 資料 2-1-4	：「育成する能力」に関する学生の自己評価例（平成 27 年度前期）P1-81
[3)] 資料 2-1-3	：教育実践研究 A と教職実践演習に対する学生の評価例　P1-80
資料 2-1-5	：地域課題ワークショップ科目に対する学生の評価例　P1-82
資料 2-1-7	：成績評価基準・成績評価方法に関する学生の評価　P1-83

②　グローバル人材育成事業の一環として共通教育の英語科目の強化を図った結果[4)]，TOEIC 試験における平均点の着実な上昇を達成し[5)]，語学授業に対する学生の満足度も第１期と比べて明確に上昇した[6)]。本学の目標である「グローバルな視野を有する高度職業専門人」の養成に関しても，学生の自己評価の着実な上昇が見られた[7)]。

[4)] 資料 1-1-20	：語学センター概要　P1-18
[5)] 資料 2-1-9	：平成 26 年度入学生の TOEIC 結果の推移　P1-85
[6)] 資料 2-1-10	：教養・共通教育（語学系）に関する学生の満足度　P1-85
[7)] 資料 2-1-23	：「グローバルな視野を有する高度職業専門人」の養成に関する学生の自己評価　P1-93

③　第２期中の学生の単位修得率及び成績は第１期と同程度あるいはそれ以上の水準で安定的に推移し[8)]，留年，退学及び休学率はわずかにとどまった[9)]。また，教員免許をはじめとした学生の資格取得に対する意欲及び実績は第１期と比較して明確に高まった[10)]。

[8)] 資料 2-1-11	：第２期中の単位の修得状況　P1-86
資料 2-1-12	：標準修業年限（４年）内の卒業率及び標準修業年限×1.5 年内卒業率の状況　P1-86
[9)] 資料 2-1-14	：留年・退学・休学の状況　P1-87
[10)] 資料 2-1-17	：卒業時の教員免許取得状況　P1-88
資料 2-1-18	：卒業時の各種資格取得状況　P1-89

④　本学部の教育に対する学生の満足度及び能力獲得に関する自己評価の結果は，第１期と比較して上昇し，高い値となった[11)]。また，カリキュラムの有効性やそれによる学習意欲の向上に関しても，学生から好評価を得た[12)]。

[11)] 資料 2-1-19	：本学の教育に対する学生の満足度　P1-89～90
資料 2-1-20	：各種能力の獲得状況に関する学生の自己評価　P1-91
[12)] 資料 2-1-21	：カリキュラムの有効性・効果に対する学生の評価　P1-91
資料 2-1-22	：学習意欲の向上に関する学生の自己評価　P1-92
資料 2-1-23	：「グローバルな視野を有する高度職業専門人」の養成に関する学生の自己評価　P1-93

観点　進路・就職の状況

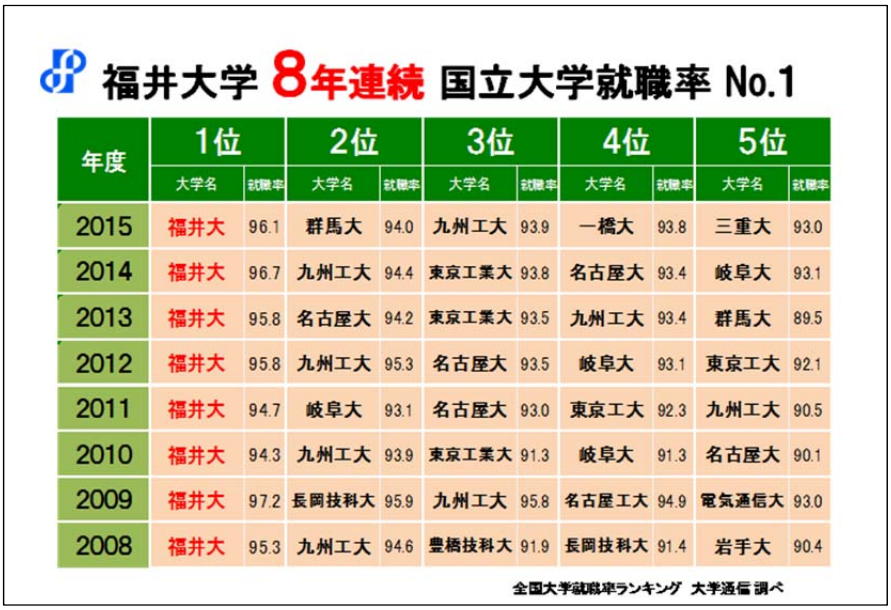
（観点に係る状況）

●進路・就職状況等から判断される在学中の学業の成果の状況

【キャリア支援の取組】

①　全国的にも高く評価されている本学の就職支援体制のもとで（**資料 2-2-1, 2**），本学部においても就職委員会が就職支援室と密接に連携しつつ，年間を通じて多岐にわたる就職支援活動を行っている（**資料 2-2-3**）。

資料 2-2-1　高い就職率の維持



福井大学 8年連続 国立大学就職率 No.1

年度	1位		2位		3位		4位		5位	
	大学名	就職率	大学名	就職率	大学名	就職率	大学名	就職率	大学名	就職率
2015	福井大	96.1	群馬大	94.0	九州工大	93.9	一橋大	93.8	三重大	93.0
2014	福井大	96.7	九州工大	94.4	東京工業大	93.8	名古屋大	93.4	岐阜大	93.1
2013	福井大	95.8	名古屋大	94.2	東京工業大	93.5	九州工大	93.4	群馬大	89.5
2012	福井大	95.8	九州工大	95.3	名古屋大	93.5	岐阜大	93.1	東京工大	92.1
2011	福井大	94.7	岐阜大	93.1	名古屋大	93.0	東京工大	92.3	九州工大	90.5
2010	福井大	94.3	九州工大	93.9	東京工業大	91.3	岐阜大	91.3	名古屋大	90.1
2009	福井大	97.2	長岡技科大	95.9	九州工大	95.8	名古屋工大	94.9	電気通信大	93.0
2008	福井大	95.3	九州工大	94.6	豊橋技科大	91.9	長岡技科大	91.4	岩手大	90.4

全国大学就職率ランキング　大学通信 調べ

（事務局資料）

資料 2-2-2　福井大学における就職支援活動に対するメディアからの反響



（事務局資料）

資料 2-2-3　平成 27 年度就職支援活動状況

月	日	ガイダンス名	各講演名
4月	10日（金）	教職ガイダンスキックオフセミナー	教員採用試験の出願について
5月	1日（金）	県外教員採用試験についての説明会	京都府教員採用試験説明会
			京都市教員採用試験説明会
			名古屋市教員採用試験説明会
			石川県教員採用試験説明会
	8日(金)	インターンシップ説明会	インターンシップの意義とマナー 自己分析と業界企業研究について
			インターンシップの極意 ～参加メリットと心構えについて～
			福井県インターンシップ制度について
			県外でインターンシップをする場合
	22日（金）	教職ガイダンス	教員採用試験の最新動向について
6月	5日（金）	インターンシップ事前講座	就活が優勢になる決め手 ～知らないと出遅れる!?就活のスケジュール～
	14日（日）	学内合同企業説明会	
	15日（日）	学内合同企業説明会	
7月	2日（木）	SPI３模擬試験	SPIとは？+模擬試験に挑戦!!
	17日（金）	SPI３模擬試験	SPIとは？+模擬試験に挑戦!!
8月	21日（金）	就職活動再スタート講座＆相談会①※	これからの就職活動について
			相談会
9月	2日（水）	企業訪問	企業訪問in福井(福井銀行)
	8日（火）	企業訪問	企業訪問in福井（福井県庁）
	11日（金）	就職活動再スタート講座＆相談会②※	これからの就職活動について
			相談会
	14日（月）	企業訪問	企業訪問in愛知(住友電装&アイシン・エィ・ダブリュ)
	17日（木）	企業訪問	企業訪問in愛知
	18日（金）	SPI３模擬試験（全学対象）	SPIとは？+模擬試験に挑戦!!
	28日（月）	企業訪問	企業訪問in福井(フクビ)
		合同企業説明会	
	29日（火）	企業訪問	企業訪問in福井(前田工繊)
	30日（水）	企業訪問	企業訪問in福井(松浦)
	30日（水）	進路選択スタートアップ講座	就職活動の概要・今後のスケジュール
10月	1日（木）	進路選択スタートアップ講座	就職活動の概要・今後のスケジュール
	3日（土）	進路選択スタートアップ講座	就職活動の概要・今後のスケジュール
	13日（火）	(材料対象)WEB筆記試験対策講座	(材料対象)WEB筆記試験対策講座
	16日（金）	教職ガイダンス	教採試験の最新動向と学習対策
		業界・企業研究講座	業界・企業研究の意義と方法について
		輝く女性の未来予想講座	働く女性のための講座・マナー等
	23日（金）	自己分析講座	自己分析って何？
		内定者による就職活動体験報告会①	内定者が教える就職活動のイロハ
	29日（木）	エントリーシート作成講座 第1弾	エントリーシート作成講座～基礎編～
	30日（金）	エントリーシート作成講座 第2弾	エントリーシート作成講座～実践編～
		内定者による就職活動体験報告会②	内定者が教える就職活動のイロハ

11月	6日（金）	就活マナー・身だしなみ講座	就活マナー講座
			スーツの着こなし講座
		メイクアップ講座	女子学生のためのメイクアップ講座
	11日（水）	(材料対象)WEB筆記試験対策講座	(材料対象)WEB筆記試験対策講座
	13日（金）	筆記試験対策講座	筆記試験対策講座
		ブラック企業の傾向と対策	ブラック企業の傾向と対策
	16日（月）	(物理対象)WEB筆記試験対策講座	(物理対象)WEB筆記試験対策講座
	16日（月）	(生物対象)WEB筆記試験対策講座	(生物対象)WEB筆記試験対策講座
	18日（水）	SPI３模擬試験	SPIとは？+模擬試験に挑戦!!
	19日（木）	SPI３模擬試験	SPIとは？+模擬試験に挑戦!!
	20日（金）	面接対策講座 第1弾	面接対策講座～基礎編～
		新聞の読み方講座	新聞の読み方について
	27日（金）	面接対策講座 第2弾	面接対策講座～実践編～
		OB・OGとの座談会	地元で活躍するOGとの座談会
12月	1日（火）	キャリアカフェ	キャリアカフェ
	4日（金）	集団グループディスカッション体験講座	集団グループディスカッション体験講座
	10日（木）	(材料対象)WEB筆記試験対策講座	(材料対象)WEB筆記試験対策講座
	11日（金）	人事担当者による業界・企業研究会	人事担当者が本音を語る～人事のぶっちゃけトーク～
	18日（金）	産学官連携本部主催 キャリアアップセミナー	キャリアアップセミナー
1月	8日（金）	企業内定者による就職相談会	企業内定者による就職相談会
	12日（火）	(材料・電電)WEB筆記試験対策講座	WEB筆記試験対策講座
	13日（水）	(生物・建築)WEB筆記試験対策講座	WEB筆記試験対策講座
	14日（木）	(情報・知能)WEB筆記試験対策講座	WEB筆記試験対策講座
	18日（月）	(物理・機械)WEB筆記試験対策講座	WEB筆記試験対策講座
	22日（金）	公務員合格者による就職相談会	公務員合格者による就職相談会
2月	12日（金）	就職活動のためのマナー講座	就職準備セミナー
	26日（金）	合説直前！就活総まとめ講座	合説直前！就活総まとめ講座
	27日（土）	合説直前！就活総まとめ講座	合説直前！就活総まとめ講座
3月	14(月)～18(金)	学内合同企業説明会	

（事務局資料）

② 学部独自の取組として，教員志望者に対する教員採用試験対策講座を行っている（**資料 2-2-4**）。

資料 2-2-4　教員採用試対策講座参加者数　（人）

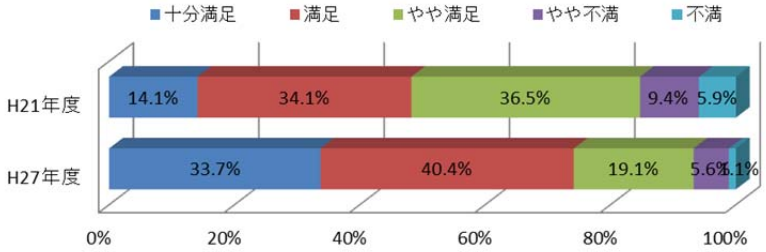
年度	年間延べ参加者数
平成 23 年度	280
平成 24 年度	296
平成 25 年度	232
平成 26 年度	230
平成 27 年度	338

（事務局資料）

③　卒業年次の本学部学生の 90%以上は，これらの就職支援に対して肯定的な評価を寄せており，第１期と比較しても，学生の満足度は明確に向上した（**資料 2-2-5**）。これらのことは，就職支援に対する学生からの期待に応えた証左である。

資料 2-2-5　進学・就職支援に対する学生の満足度

設問：進学・就職支援（指導教員，就職支援室等）について，あなたはどの程度満足していますか。



※第１期末と比較して第２期末では学生の満足度（十分満足～やや満足と回答した割合）は，8.6%向上している。特に，十分満足と回答した割合は，19.6%向上している。

（平成 21 年度および平成 27 年度「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」結果より抜粋）

【就職・進学率】

卒業者に対する進路決定率は93%台から99%台と第1期中に続いて高い比率を維持しており，本学の高い就職率に対する学生と保護者の期待に応えている（**資料 2-2-6**）。

資料 2-2-6　教育地域科学部卒業者進路状況

年度	進路／課程等	卒業・修了者数	大学院進学者数	他大学・専門学校等	就職者数	その他・帰国者数	講師待ち	未定者数	就職者内訳								卒業者に対する進路決定率
									企業					施設団体	教員	公務員	
									製造業	卸・小売業	金融・保険業	情報関連業	その他				
平成22年度	学校教育課程	101	23		77		1		2	1	2	2	6	9 (2)	51 (39)	4	
	地域文化課程	25			24			1	4	5	7		5	3 (1)			
	地域社会課程	33	2	2	25			4	2		6		6	4		7 (1)	
	合　計	159	25	2	126		1	5	8	6	15	2	17	16 (3)	51 (39)	11 (1)	96.2%
平成23年度	学校教育課程	103	27	1	69	1		5	1	1	2	1	5	3	51 (35)	5 (1)	
	地域文化課程	4			4				3			1					
	地域科学課程	52	2	1	47			2	4	5	6	2	20	2 (1)		8	
	合　計	159	29	2	120	1		7	8	6	8	4	25	5 (1)	51 (35)	13 (1)	95.6%
平成24年度	学校教育課程	95	24		66	1	2	2	3	3			6	4 (2)	47 (33)	3	
	地域文化課程	2						2									
	地域科学課程	58		2	52			4	7	13	5	1	20			6	
	合　計	155	24	2	118	1	2	8	10	16	5	1	26	4 (2)	47 (33)	9	93.5%
平成25年度	学校教育課程	100	23		76			1	1	1	1	2	3	4	60 (49)	4 (1)	
	地域科学課程	58		1	57				6	12	6	2	5	5		21 (2)	
	合　計	158	23	1	133			1	7	13	7	4	8	9	60 (49)	25 (3)	99.4%
平成26年度	学校教育課程	102	19	2	75	1	2	3	3	2	2		4	4	52 (35)	8	
	地域科学課程	59	1		55	1		2	7	5	9	4	6	8		16	
	合　計	161	20	2	130	2	2	5	10	7	11	4	10	12	52 (35)	24	95.7%
平成27年度	学校教育課程	104	17		79			8	1	2	5	3	2	3	55 (33)	8	
	地域科学課程	60	2		54	1		3	7	5	14	1	7	4		16	
	合　計	164	19		133	1		11	8	7	19	4	9	7	55 (33)	24	93.3%

※卒業後の就職と進学の状況については，学校教育課程からの大学院の進学率は20%～30%弱，進学者を除く教員就職者（非常勤を含む）の比率は65%～75%程度で推移している。また，大学院進学者も修了後には教職に就くことを希望する傾向が強い。地域科学課程からの大学院の進学率は，2%～6%付近で推移しており，就職者のうち公務員（非常勤を含む）が12%～35%程度，一般企業等が70%～90%程度であり，年度により多少の傾向の違いが生じている。

（事務局資料）

【就職先の特徴】

① 福井県公立学校教員採用に占める福井大学出身者の平均比率は，第１期中には 35.6%であったが，第２期中のそれは 38.7%へと上昇しており，この結果は，福井県内の公立学校への採用を望む多くの学生やその家族の期待に応えたものであると言える（**資料 2-2-7**）。

資料 2-2-7　福井県公立学校教員採用状況

採用年度	福井県全体 (A)	福井大学出身者 (B)	福井大学出身者 内訳 新卒計	福井大学出身者 内訳 既卒者	福井大学出身者採用率 (B/A＊100)
平成 27 年度	190 〈12〉	72 〈1〉	26	46	37.9%
平成 26 年度	180 〈11〉	56 〈0〉	15	41	31.1%
平成 25 年度	180 〈11〉	67 〈0〉	15	52	37.2%
平成 24 年度	180 〈9〉	81 〈1〉	20	61	45.0%
平成 23 年度	155 〈8〉	65 〈1〉	13	52	41.9%
平成 22 年度	143 〈9〉	57 〈2〉	11	46	39.9%

※〈 〉は養護教諭採用数で外数

※※卒業後数年間は非常勤講師として経験を積み，その後，正規に採用されるのが近年の傾向となっている。

（事務局資料）

② 卒業生の就職先は県内が多数を占めており，第２期中の平均では 80%弱となっている（**資料 2-2-8**）。この結果は，若者の県外流出を防ぐという地域の期待に応えるものであると言える。

資料 2-2-8　課程別県内・県外の就職状況推移

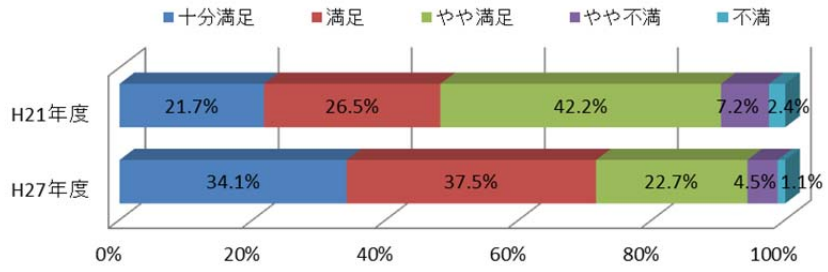
	平成22年度		平成23年度		平成24年度		平成25年度		平成26年度		平成27年度		平成22～27年度	
	福井県	県外	福井県	県外	福井県	県外	福井県	県外	福井県	県外	福井県	県外	福井県	県外
学校教育課程	65	12	57	12	55	11	68	8	53	22	67	12		
	84.4%	15.6%	82.6%	17.4%	83.3%	16.7%	89.5%	10.5%	70.7%	29.3%	84.8%	15.2%		
地域社会課程	22	3												
	88.0%	12.0%												
地域文化課程	19	5	3	1										
	79.2%	20.8%	75.0%	25.0%										
地域科学課程			36	11	38	14	47	10	40	15	33	21		
			76.6%	23.4%	73.1%	26.9%	82.5%	17.5%	72.7%	27.3%	61.1%	38.9%		
就職者合計	106	20	96	24	93	25	115	18	93	37	100	33	603	157
県内外比率	84.1%	15.9%	80.0%	20.0%	78.8%	21.2%	86.5%	13.5%	71.5%	28.5%	75.2%	24.8%	79.3%	20.7%

（事務局資料）

③　学生の就職先に関する満足度に関しては，肯定的な回答が 94.3%を占めており，就職先に関するミスマッチの問題はごく少数に留まっている。第１期との比較でも満足度は向上しており，本学部の就職支援体制が良好に機能していることを示している（**資料 2-2-9**）。

資料 2-2-9　進学・就職先についての学生の満足度

設問：自分の進学・就職先について，あなたはどの程度満足していますか。



※第１期末と比較して第２期末では学生の満足度（十分満足～やや満足と回答した割合）は，4.0%向上している。特に，十分満足～満足と回答した割合は，23.4%向上している。

（平成 21 年度および平成 27 年度「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」結果より抜粋）

●在学中の学業の成果に関する卒業・修了生及び就職先等の関係者への意見聴取の結果及び分析

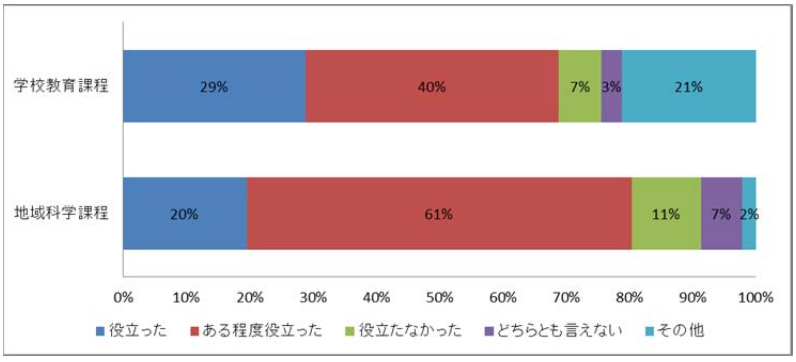
【卒業生調査内容】

本学部卒業生（平成 22～25 年度卒業）に対して平成 26 年度末に実施したアンケート結果では，在学中に受けた教育が本学部の人材養成に関する目的に照らして適切なものであり，社会人基礎力の形成に役立ったかとの質問に対して，回答者の多数から肯定的な評価を得られた（**資料 2-2-10，11**）。また，自由記述欄の回答には，本学部の教育内容に関して，多くの肯定的意見が寄せられた（**資料 2-2-12**）。これらの結果は，本学部の教育が人材養成に関する目的に沿ったものであることの証左である。

資料 2-2-10　教育地域科学部卒業生の在学中の授業の有効性に対する評価

●学校教育課程卒業生に対する質問：「学校教育課程では，子どもへの深い理解と子どもの主体的な学びを組織する専門的・実践的な力量を備えた学校教員の養成を目的としています。大学の授業はこのような目的のための基礎として役立ちましたか。(教員以外の職業の場合，業務にとって役立ったか否かご回答下さい。)」

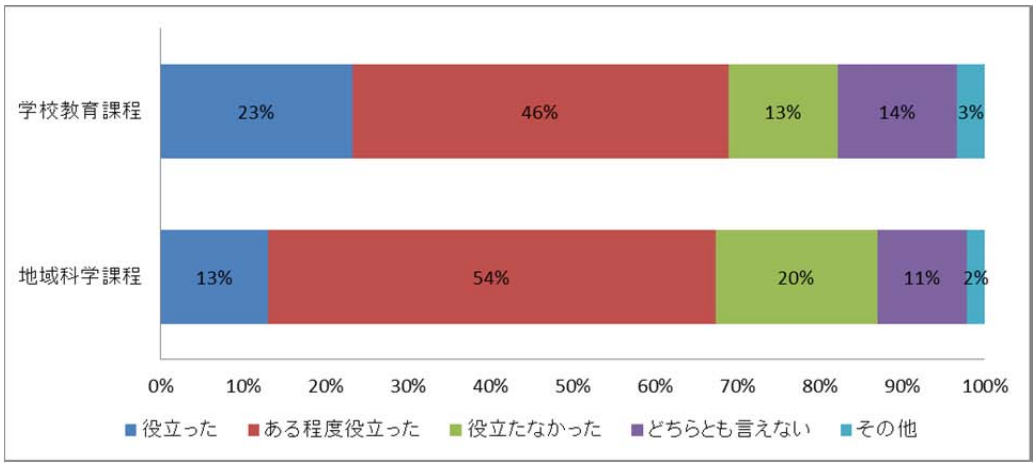
●地域科学課程卒業生に対する質問：地域科学課程では，地域の特性と課題に対する関心と意欲をもち，地域や国際社会の発展に貢献できる人材の養成を目的としています。大学の授業はこのような目的のための基礎として役立ちましたか。」



（「平成 26 年度教育地域科学部卒業生アンケート」結果より抜粋）

資料 2-2-11　社会人基礎力の形成に対する評価

設問内容：「社会人基礎力（「前に踏み出す力」,「考え抜く力」,「チームで働く力」の３つの能力から構成される）」の形成に関して大学で受けた教育は役立ちましたか。



（「平成 26 年度教育地域科学部卒業生アンケート」結果より抜粋）

資料 2-2-12　教育地域科学部卒業生アンケート自由記述欄の回答

学校教育課程卒業生	教育課程での授業で、グループで授業内容を検討して、自分たちで授業をしたこと。実践的でとても勉強になった。やはり、実践的に勉強しないと、現場では役立たない。
	探究ネットワーク活動はとても役立ったと思います。ぜひ続けていってほしいです。
	教育実習だけでなく、探究ネットワークやライフパートナー事業など実際の子どもに触れる機会が多いのがよかった。医療の現場で、発達障害のある子どもと接することもあるので大変役立った実感がある。
	直接学校現場に入れる機会が多かったのは、非常に良かった。
	〈よかったこと〉先生方や学友たちと、公私にわたって様々な関わりをもてたことで、人間的に成長できた。教育課程の中で、自分が主体的になることで様々な分野に触れることができ、見識を広げることができた。 〈後悔していること〉自分の主体性が足りず、卒業研究に向けてテーマを見つけていくことが上手くできなかった。
	地域密着型の実習や卒業論文を行ったことで、就職した後もその話題を口にすることも多く、非常に有意義な大学教育であったと感じる。
	探究ネットワークやライフパートナー事業、模擬授業、教育実習など、体験的に学ぶことができたのが今の仕事に役立っています。
	たくさんの仲間と出会い、同じ目的に向かって共にがんばることができたこと。
	・野外実習で実物に触れ、見た経験はかけがえのない物だと思う。 ・教育実践研究の講義は、学生時代には課題の多さを負担に感じていたが、社会人となってから振り返ると、実力に結びついたと感じられた。 ・一般教養の中でも、憲法の講義は知識のみならず論理的思考力や文章を書く能力も鍛えられ、社会人となってからも役立った。 ・教育実践研究のグループワークは、構成メンバーにより議論の質の差が大きく、雑談をして終わってしまうグループもあった。議論が形式のみにならないよう学生の意識としても反省すべき点があった。 ・教員として働く上で、心理学等の理論の重要性は教職に就いて初めて実感したが、学生時代は軽視していた為、もっと興味をもって学ぶべきであったと思う。
	グループ活動やグループ討論などは、コミュニケーション能力や自分の意見を発する力を養うことに関して役立ったと思います。
	探究ネットワークやライフパートナー、教育実習など実際の子どもと関われる機会が豊富にあり、教師として具体的なイメージを持って実戦経験を積むことができた。
	教育実習だけでなくライフパートナーなど、いろんな視点から教育現場を体験する事ができてよかったです。ゼミでも自分の興味のあった臨床心理に触れることができました。ただ専門科目の中で開講されなかった授業があり、結局そのまま卒業してしまったのが心残りでした。現在、大学院にて臨床心理学を学んでいます。大学時代とは異なる視点をもって大学教育を振り返ることで、4年間の経験は確かな力になっていると感じることができています。
	少人数の講義が多かったため、教官との距離が近く、多くのことを教えていただけた。卒業後もその関係は変わっていない。大学のときに多くの先生に出会えたことが今の生活にも役立っている。
	研究室の先生方がとても熱心に、かつ親身になり、教えてくださったことが、本当によかったです。
	・大学で恩師と出会い、教員の道にいます。障害児教育の先生方に大変お世話になりました。 ・探究ネットワークやライフパートナーは、実習よりも現場でやっていく基礎だと感じています。 ・私は教職大学院にも行きました。本当に学び多き、良いところでした。
	私は正直、大学に入学するまで、教育関係の職業に就くとは思いもしていませんでした。英語が好き、という理由で言語教育コースを志望しましたが、大学生活を通して教育の魅力を肌で感じるようになり、将来の職業として「教員になる」という具体的な目標を持つようになりました。これも福井大学での充実した学び・経験のおかげです。4月から福井県の教員として採用され、人生の新たな一歩を踏み出します。私の将来を形づくって下さった大学でのご支援に心から感謝いたします。本当にありがとうございます！
	学びの面で言うと、自身の専門においては概ね満足だった。今の職において非常に役立っており、「もっと真面目に取り組んでおくべきだった」という思いもある。課外活動においても、非常に有意義な経験だったように思う。「他の人との生活・活動が面倒だ」という理由でサークルや部活動に参加しない人も数多くいたが、私の大学で過した時間の中で最も大きく成長できたと実感したのが部活動で過ごした時間だったと思っている。仲間とぶつかったり、1つの目標に向かって一緒に頑張った時間は、かけがえのないものだったと感じている。寮生活に関しても同じことが言えると思う。多数の人々と共に過ごす時間は、決して楽しいことばかりではない。だが、大きな自治組織を運営していくという、一般的な一人暮らしでは経験できないことに携わることができたのは、とても幸運だった。一つお願いがあるとすれば、大学生活の中で、もっと学生たちに「自主的な運営・活動」をできる場を与えてほしい。部活動・寮生活とも、学生の自主的な活動でなりたっているものである。学問的な学びも大切だが、社会に出る前にこのような経験をしていて良かったな、と私は常々感じている。在学中の福大生にも、大学生の間にしかできないことをたくさん経験してほしい。
	探究ネットワークやライフパートナーなど、実践的な学びができたことはよかった。もっと実践的な、学生自身が主体となって学べる、探究できる大学教育の学びの場や機会ができるといいと思う。
地域科学課程卒業生	卒業研究やゼミの授業でまちづくりや、ある地域に密着したが、福井で仕事をしたこともあり、そのような内容は有意義で福井のことについて知れてよかったと思う。地域科学課程は2年生ぐらいまでは、コースに分かれず色々な分野を広く学べるものだったけれど、入った時から進みたいコースは決まっていたためあまり広く学ぶというより、深く1つのことを学びたかった。
	やる気・意欲があれば、自分の専攻している分野以外のことも学べる環境があったことが良かったと思います。大学で学んだ内容が現在の仕事に直結しているとは言えませんが、学んだ全てのことが間接的にでも、社会人となった今の自分に活きていると感じています。
	話し合う授業が多かったので、相手の意見を尊重し合いながらも自分の考えを訴えて、ひとつの答を導き出そうと努めることができた。
	地域課題ワークショップは、チーム内で協力し合って活動することが中心だったので、コミュニケーション能力の向上に役立ったと感じた。
	地域科学課程のワークショップは自身の成長に大きくつながった。専門的に深く調べることで、その題材に興味をもてるし、自分の進路を決めるきっかけにもなった。
	地域密着型の実習や卒業論文を行ったことで、就職した後もその話題を口にすることも多く、非常に有意義な大学教育であったと感じる。
	やる気・意欲があれば、自分の専攻している分野以外のことも学べる環境があったことが良かったと思います。大学で学んだ内容が現在の仕事に直結しているとは言えませんが、学んだ全てのことが間接的にでも、社会人となった今の自分に活きていると感じています。
	話し合う授業が多かったので、相手の意見を尊重し合いながらも自分の考えを訴えて、ひとつの答を導き出そうと努めることができた。
	地域課題ワークショップは、チーム内で協力し合って活動することが中心だったので、コミュニケーション能力の向上に役立ったと感じた。
	地域科学課程のワークショップは自身の成長に大きくつながった。専門的に深く調べることで、その題材に興味をもてるし、自分の進路を決めるきっかけにもなった。

（「平成 26 年度教育地域科学部卒業生アンケート」より抜粋）

【就職先調査内容】

① 本学部卒業生が勤務する学校園の管理職者を対象に行った記述式アンケートの結果では，卒業生の教員としての勤務遂行状況について，全般的に良好な評価を得られた（**資料 2-2-13**）。

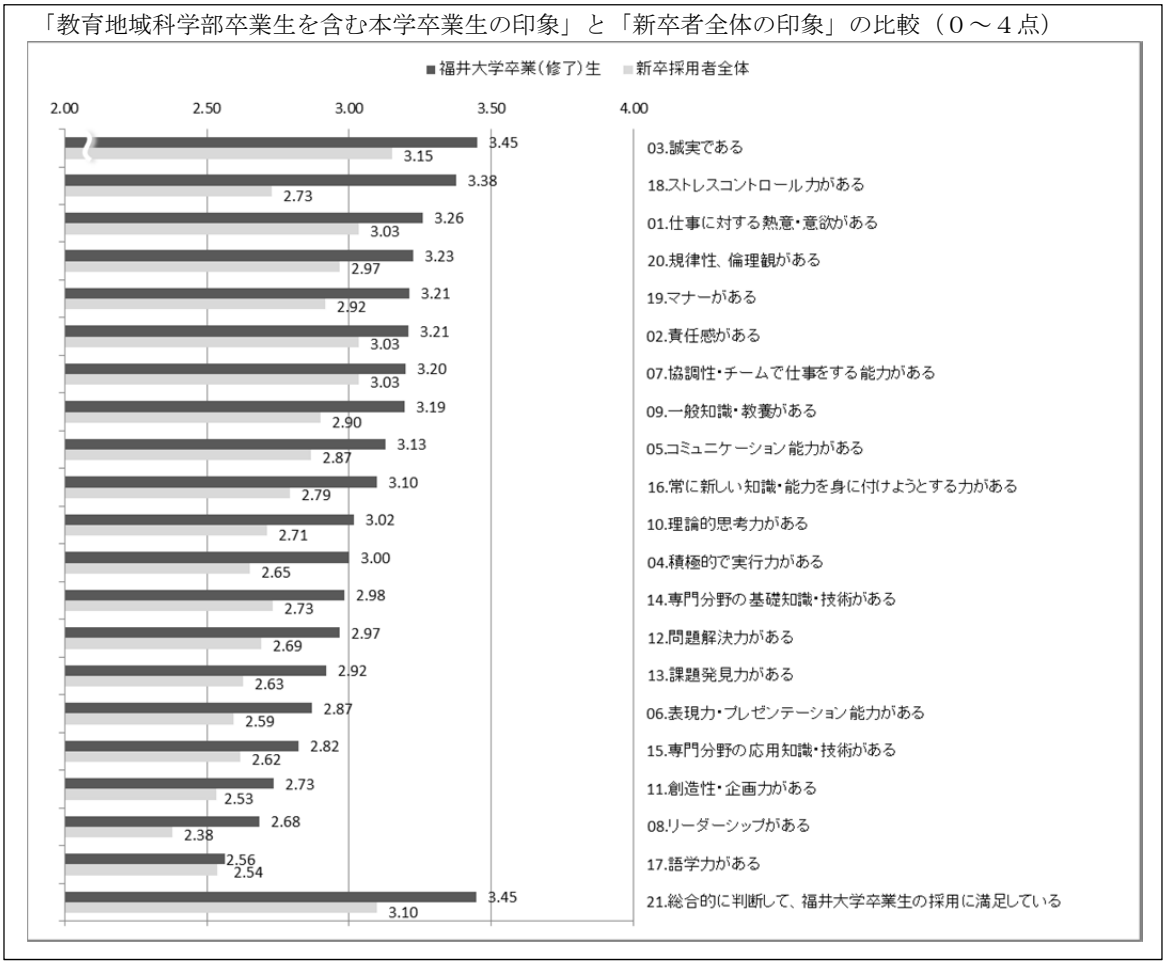
資料 2-2-13　本学部卒業生の勤務校管理職者に対するアンケート結果の例

卒業生A（平成24年度卒業）の勤務校	福井市P幼稚園
回答者（卒業生の上司）	副園長
Aの勤務遂行状況に対する評価	(1)保育 これまで3歳児を中心に担当し、今年度で本園勤務4年目を迎え、毎日いきいきと職務を遂行している。入園期の個人差が大きい3歳児に対して、一人一人の特性を丁寧に見取り、スキンシップをとりながら、受容・共感を大切にして援助を行っている。そして、見守るという姿勢で保育に当たっている。そのことが、幼児の心の安定につながり、主体性や自分らしさを発揮して十分遊び込める幼児に育つ原動力となっている。本園では、豊かな幼児教育の推進を掲げており、玉村特命教諭は、日々、研究実践を積み重ね、毎年開催の研究集会等においても実績を残してきた。 (2)園務 園務分掌では、親子運動会やクリスマス会の企画運営をはじめ、図書主任として絵本の管理を行なった。特に、園児一人一人が絵本に親しみ、豊かな言葉をはぐくめるよう、絵本を選定したり、図書の環境を整えたりなど、その仕事ぶりは高く評価できる。また、長期的な見通しを持ち、保護者や関係機関との連携を図りながら計画的に進めることができ、行事等の推進に努めた。3歳児用の園庭を活用して開催している未就園児とその保護者対象の「子育て広場」においては、未就園児のお子さんと温かな関係を築きながら遊んだり、保護者の子育ての相談に乗ったりなど、地域の子育て支援にも取り組んできた。 同僚を慮る温かな心遣いができ、チーム幼稚園の一員として、お互いに協力し合い、助け合いながら職責を果たしていく姿勢がよく身についている。 (3)保護者対応 毎日の生活の様子や成長の過程をつぶさに見つめ肯定的に捉える目を持ち、家庭と園がともに協力しながら幼児の成長を見守り支えていく保育を積み重ねてきた。また、その誠実な姿勢は、保護者からの厚い信頼を得ており、常に、きめ細かな対応ができている。
卒業生B（平成25年度卒業）の勤務校	名古屋市Q小学校
回答者（卒業生の上司）	教務主任
Bの勤務遂行状況に対する評価	特別支援学級の担任として，2年目（本校では1年目）になる。4月に赴任して，慣れない環境の中で緊張していたようだが，特別支援学級の主任や年齢の近い教員との会話が増えるにつれ，職場の雰囲気にも少しずつ慣れてきたようだ。 本校の特別支援学級は10名の児童が在籍し，二人の学級担任で指導している。多くの支援を必要とする児童が多い中，学級の児童と積極的に関わり，児童一人一人の個性を的確に捉えて指導にあたることを心掛けている。また，一つ一つの事柄に対して自分の考えを明確にし，前向きな姿勢で仕事に取り組んでいることは評価できる。今後も，こうした姿勢を忘れず，職務に邁進することで確実に力を付けていってほしい。 学部で学んだ知識や，体験的・実践的に身に付けた技能を，実際の仕事の中で生かそうとする場面が多く見られる。また，大学での専門的な学びが仕事をする上での支えにもなっている。大学で学んだことと学校現場での指導とでは，大きな隔たりがあることも多いだろうが，新たな知識や経験を多く積むことができる機会でもある。大学で学んだ知識を学校現場での経験と結び付けることで，教師としてより確かな力を育んでいってほしい。
卒業生C（平成26年度卒業）の勤務校	あわら市R小学校
回答者（卒業生の上司）	校長
Cの勤務遂行状況に対する評価	(1)学習指導 学力の基礎となる音読活動や作文活動、算数の計算学習等を積極的に行うことができた。学校全体で進めている算数科の研究では、自身の研究授業に向け、熱心に取り組んでいた。学年末には、受け持ちのクラスのほとんどの児童が「算数が好き」と答えられるようになり、本人もかなり自信がついたようである。また、自ら校長に何度も授業観察を依頼するなど、授業改善への意欲は極めて高い。 (2)学級経営 個人懇談を通して児童の悩みを早期に発見し、適切に対応することができた。「ほめる」「しかる」のメリハリがある指導ができ、大学を出たばかりの若い教師としては、珍しく安定した学級経営を行うことができた。児童や保護者との信頼関係も良好である。 (3)学校運営 校務分掌は、専門の理科主任ではなく体育主任を担当しており、今年が2年目である。体育主任は、運動会や球技大会など学校全体を動かす事が多く、新採用教員がその任に当たることはなるべく避けるのが学校の常識である。しかし、男性のクラス担任が彼しかいないという本校の事情から、困難は承知で彼に担当してもらうことになった。全体指導の機会も多く、初めの頃はかなり指導に戸惑ったようである。しかし、休日出勤や夜遅くまで残って頑張ることに加えて、周りの先生方の協力やアドバイスを素直に受け、体育的行事をスムーズにこなすことができた。 (4)総合評価 社会人としての態度、授業力や学級経営力に関して、採用からの一年間の成長ぶりは著しいものがある。その一因として、自分が納得するまで頑張る熱意、周囲の同僚から多くのことを吸収しようとする態度・素直さ、与えられた仕事だけでなく学校全体のために貢献しようとする態度等が挙げられる。今後の更なる成長・活躍が楽しみである。

（「平成 27 年度学部卒業生勤務先校関係者アンケート」より抜粋）

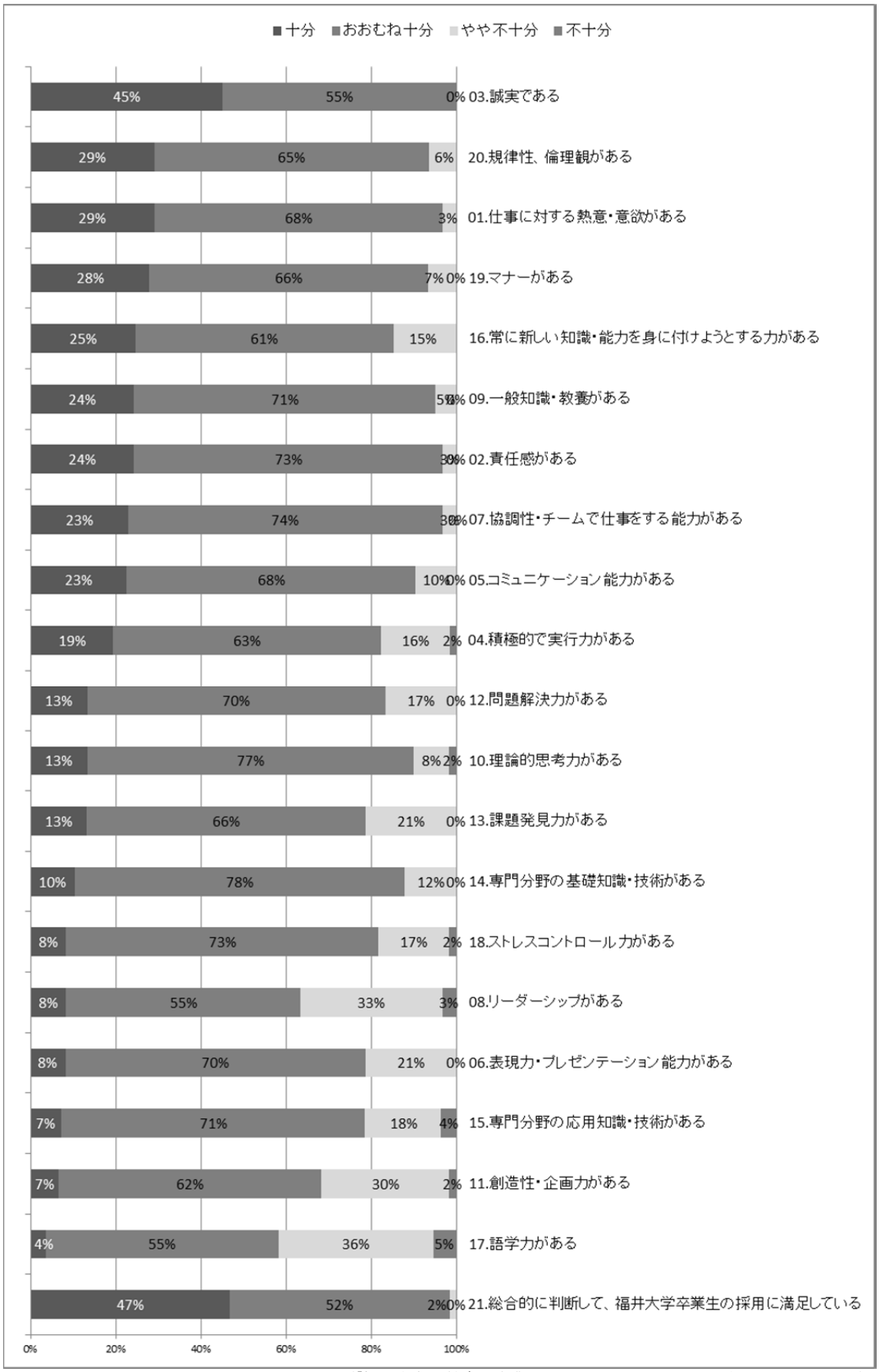
②　本学卒業生を採用した企業等を対象に行われたアンケートの結果でも，教育地域科学部卒業生を含む本学卒業生を採用した企業の卒業生に対する評価は多くの項目で新卒採用者全体のそれを上回っており，ほとんどの企業が総合的に見て満足している（**資料2-2-14～16**)。これらの結果は，人材育成に関する企業等からの期待に応えた証左であると言える。

資料 2-2-14　企業による本学部卒業生と新卒者全体の比較評価



（「福井大学の教育と卒業生についてのアンケート調査 2013」より抜粋）

資料 2-2-15　教育地域科学部卒業生を含む本学卒業生を採用した企業の卒業生に対する評価（百分率）



（「福井大学の教育と卒業生についてのアンケート調査 2013」より抜粋）

資料 2-2-16　自由記述欄における卒業生に対する企業の評価

	学生に対する評価
A 社	個性や能力の発揮をより前面に出してほしい。
B 社	勤勉な学生が多いと感じますが，やや消極的でおとなしい印象を受けます。
C 社	★頭の回転が良くて，頑張っておられます。また，良い方をご紹介ください。
D 社	★福井大の学生は総じてレベルが高く，将来幹部候補になる人物もおりますので，これからも質の高い学生を輩出して頂ければと思っております。
E 社	多様な人材を求めておりますので，大学教育を通じて学生一人ひとりの個性を発揮させて頂ければと思います。
F 社	★今後も学内の企業説明会にはぜひ参加させて頂きたいと考えております。よろしくお願いします。
G 社	恐縮ながら，御校の学生は平均的な学生が多く，個性に乏しいと感じております。もっと，個性を伸ばすカリキュラム（例：ディベート等，価値観を養うカリキュラム）があるとよいかと存じます。引き続きよろしくお願いいたします
H 社	★明るく，積極性があり採用させて頂き，大変満足した状態で活躍頂いています。
I 社	地元志向が強い学生が多い印象がありますので，もっと幅広い視野で就活をしてほしいと思います
J 社	真面目で地頭が良い。ただし人を押しのけて前に出る力は弱い（特に男性，引っ込み思案タイプ）
K 社	★能力の高い学生さんだなという印象です。引き続きよろしくお願いいたします
L 社	意欲的かつまじめに仕事に取り組む姿勢があり好感が持てます。また理論的にきちんと話をすることができます

＊教育地域科学部学生を含む本学学生を採用し，自由記述欄で学生に対する評価を記述した 12 社の回答。そのうち，★は教育地域科学部学生のみを採用した企業による評価。

（「福井大学の教育と卒業生についてのアンケート調査 2013」より抜粋）

③　教育地域科学部就職委員会が学部卒業生の県内就職先企業に対して行った聞き取り調査でも，卒業生について具体的な回答をした企業の評価は，概ね良好であった（**資料 2-2-17**）。

資料 2-2-17　教育地域科学部卒業生を採用した県内企業に対する聞き取り調査結果

年度	企業	内容
平成 25 年度	A 社	今年の内定者で言えば，英語が得意でグローバルな視点を持っている。周りに流されず，きちんと主張できる。
	B 社	最近採用した女性で言えば，積極性と明るさで評価が高い。
	C 社	教育地域科学部学生は，数年に１名であるが，経理に２年前入社した女性は英語ができ，スキルが高い。
	D 社	熱心である印象。
	E 社	まじめに取り組んでいる。一本気過ぎるぐらい。
	F 社	近年退職者はなく，入社していただいた学生について不満はない。
平成 26 年度	A 社	仕事に対する熱意が高い人を採用しているので満足している。 福大生は真面目でおおむね評価は高い。 組織を運営するスタッフとしての能力は十分満足している。 今後も，幅広い知識を持つ人を採用していきたい。
	B 社	受身の若者が多い中で，主体的に行動できる人材が多い。
	C 社	基礎学力は十分あるが，主体性をさらに身につけてほしい。 学生時代にアルバイトを経験していた人は社会性が身についている様に見える。
	D 社	福井大学学生の評価は高い。 安定性はあり，真面目で素直である。 学生のうちにコミュニケーション力を身につけておいてほしい。
	E 社	真面目で誠実であり安心して仕事を任せることができる。 資格取得についてもポテンシャルは高い。 社会性もあり，マナーもしっかりできている。 自分カラーが出せればもっと良い。
	F 社	コミュニケーションがとれ，明るい性格が多い。

（事務局資料）

（水準）　期待される水準を上回る

（判断理由）

①　全学体制のもとで年間を通じてきめ細かい就職支援の取組を行っており[1)]，これらの就職支援に対する学生の満足度も第１期と比べて明確に上昇し，高い水準に達した[2)]。

[1)] 資料 2-2-3　：平成 27 年度就職支援活動状況　P1-96
[2)] 資料 2-2-5　：進学・就職支援に対する学生の満足度　P1-98

②　卒業者に対する進路決定率は第１期に続いて極めて高い比率を維持し[3)]，本学全体として第２期を通じて全国有数の高い就職率[4)]を達成することに寄与した。また，学生の就職先に関する満足度は高く，第１期との比較でも向上し[5)]，本学部を含む全学の就職支援体制が有効に機能していることを示した。

[3)] 資料 2-2-6　：教育地域科学部卒業者進路状況　P1-99
[4)] 資料 2-2-1　：高い就職率の維持　P1-95
資料 2-2-2　：福井大学における就職支援活動に対するメディアからの反響　P1-95
[5)] 資料 2-2-9　：進学・就職先についての学生の満足度　P1-101

③　県内公立学校教員の採用において本学部卒業生は平均４割近くを占め[6)]，学部卒業生の約 80%は県内に就職しており[7)]，地域の期待に応え，若者の県外流出を防ぐという本学部の目標に沿った結果を達成した。

[6)] 資料 2-2-7　：福井県公立学校教員採用状況　P1-100
[7)] 資料 2-2-8　：課程別県内・県外の就職状況推移　P1-100

④　本学部卒業生に対するアンケートにおいて，在学中の教育内容が卒業後の業務の基礎として役立ったとする肯定的回答が多数寄せられたこと[8)]は，能力の涵養に関する学生・卒業生の期待に応えた証左と言える。

[8)] 資料 2-2-10　：教育地域科学部卒業生の在学中の授業の有効性に対する評価　P1-101
資料 2-2-11　：社会人基礎力の形成に対する評価　P1-102
資料 2-2-12　：教育地域科学部卒業生アンケート自由記述欄の回答　P1-103

⑤　卒業生の就職先関係者に対するアンケートでは，新卒者全体と比較しても本学部卒業生に対する評価は全般に高く[9)]，個別的聞き取り調査においても概ね良好な評価を得ており[10)]，高い能力を持つ人材の育成に対する関係者の期待に応えたと言える。

[9)] 資料 2-2-14　：企業による本学部卒業生と新卒者全体の比較評価　P1-105
[10)] 資料 2-2-13　：本学部卒業生の勤務校管理職者に対するアンケート結果の例　P1-104
資料 2-2-15　：教育地域科学部卒業生を含む本学卒業生を採用した企業の卒業生に対する評価　P1-106
資料 2-2-16　：自由記述欄における卒業生に対する企業の評価　P1-107
資料 2-2-17　：教育地域科学部卒業生を採用した県内企業に対する聞き取り調査結果　P1-107

Ⅲ　「質の向上度」の分析

（１）分析項目Ⅰ　教育活動の状況

① 教科指導に関して地域と連携した実践的な教育活動を目指し，教育委員会と共同して申請した，平成 21 年度科学技術振興機構「理数系教員(CST)養成拠点構築事業」に採択された CST 養成・支援システムの構築を第２期中に進め，平成 25 年度からは文部科学省 COC 事業の一環としてさらに継続・推進した[1)]。この取組は認証評価においても高く評価されており，教育活動に関する質の大きな向上を達成していると判断できる。

[1)] 資料 1-1-13　：CST（コア・サイエンスティーチャー）事業の概要　P1-12
資料 1-2-31　：初級 CST 学校インターンシップ参加者数　P1-58
資料 1-2-32　：初級 CST 博物館等インターンシップ参加者数　P1-58
資料 1-2-33　：CST シンポジウム（初級 CST 受講者の発表例）　P1-59

② カリキュラム改善の一環として，平成 22 年度文部科学省「大学生の就業力育成支援事業（就業力 GP)」及び平成 24 年度文部科学省「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」に申請・採択された取組において，就業力を高めることを目的とした教育プログラムを展開し，成果があがった[2)]。これら取組が GP に採択され，外部評価や認証評価においても高く評価されたことは，教育プログラムの実施体制に関する質の向上を示すものと判断できる。

なお，更なる教育の改善と，より高度な専門職業人育成を目指し，県内の高等学校，企業及び自治体に対して，人材需要や関係者ニーズに関する意見聴取を実施し[3)]，その結果も参考に地域科学課程の発展型として構想された，国際地域学部の平成 28 年度設置[4)]が認められたことは，第２期中の教育活動の質の高さが認められたものと判断できる。

[2)] 資料 1-1-16　：地域共生プロジェクトセンターの概要　P1-15
資料 1-1-17　：産業界ニーズ GP の概要　P1-16
[3)] 資料 1-1-40　：国際地域学部の設置に繋がった関係者意見（平成 26 年度）　P1-33
[4)] 資料 1-1-41　：「国際地域学部」および「教育学部」の概要　P1-34

（２）分析項目Ⅱ　教育成果の状況

① 第２期中に，学校教育課程においては「教員養成スタンダード」を策定し，学業成績の新たな評価方法への転換を図った[1)]。また，地域科学課程のアクティブ・ラーニング型科目においても「育成したい能力」指標を導入した[2)]。その結果，これらの科目に対する学生の評価が向上し，学業成績も良好であったこと[3)]は，中核的科目における評価方法・授業内容の改善に関する質の向上を実現したものと判断できる。

[1)] 資料 1-2-5　：教員養成スタンダード　P1-41
資料 2-1-1　：教員養成スタンダードにおける新しい評価方法への転換　P1-78
[2)] 資料 2-1-4　：「育成する能力」に関する学生の自己評価例（平成 27 年度前期）　P1-81
[3)] 資料 2-1-6　：地域課題ワークショップ科目単位修得者の評価点平均値　P1-83
資料 2-1-7　：成績評価基準・成績評価方法に関する学生の評価　P1-83

② 共通教育の英語科目の内容につき４技能をバランスよく育成するものへと改善するとともに，科目数を倍増させた[4)]。その結果，TOEIC の平均点の着実な上昇を実現し，学生からの評価も向上したこと[5)]は，本学の長期目標に沿って，英語教育の内容・方法を質的に向上させたものと判断できる。

[4] 資料 1-2-24　：共通教育における英語教育　P1-54
[5] 資料 1-2-25　：英語力の自己評価　P1-54
資料 2-1-9　：平成 26 年度入学生の TOEIC 結果の推移　P1-85
資料 2-1-10　：教養・共通教育（語学系）に関する学生の満足度　P1-85

２．教育学研究科

Ⅰ　教育学研究科の教育目的と特徴　・・・・２－２

Ⅱ　「教育の水準」の分析・判定　・・・・・２－４

分析項目Ⅰ　教育活動の状況　・・・・・２－４

分析項目Ⅱ　教育成果の状況　・・・・・２－51

Ⅲ　「質の向上度」の分析　・・・・・・・・２－71

Ⅰ　教育学研究科の教育目的と特徴

１．教育目的

（１）教育活動を実施する上での基本方針

本研究科は修士課程および教職大学院の課程（教職開発専攻）から構成される。

修士課程は学校教育専攻および教科教育専攻から構成され，教育に係る諸学問の課題について高度な見識と実践力を持ち，教育の今日的課題の解決に寄与し，21 世紀を担う子どもたちの育成に貢献できる，専門的力量を備えた人材の養成を目的とする。

教職大学院の課程（教職開発専攻）は，知識社会に生きる子どもたちの力を培う教師の専門性開発と学校の改革を支援するために，学校・大学院・教育委員会の連携による「学校拠点方式」を教育活動実施上の基本方針と定め，現職教員と教職志望の若い世代の学びを支えながら学校の実践の発展を支え，国際的な教育改革をリードすることを目的とする。

（２）達成しようとする基本的な成果

修士課程学校教育専攻では，21 世紀の学校教育改革を進めるために学校とそれを支える地域・社会のコミュニティの専門家を養成することを目的とし（研究科規程），以下の力量を備えた人材養成を達成すべき基本的な成果としている。

①新たな学校教育の課題に対応する教職専門の資質と能力
②多様なニーズに応える学習支援を行う資質と能力
③学校とそれを支える地域コミュニティづくりを推進する資質と能力

修士課程教科教育専攻では，21 世紀の社会に生きる学力を培うための授業づくり・教科内容開発・カリキュラム研究を担う教師の力量形成を図ることを目的とし（研究科規程），以下の知識・力量を身につけた教員養成を達成すべき基本的な成果としている。

①専門教科に関する学問上並びに教育実践上の専門的知識
②教育実践に関わる理論に基づいた確かな教科教育実践力
③専門的知識と実践力を基盤とする探究的研究能力
④学校での協働的な探究を具現するための社会性と教育開発力

教職開発専攻においては，実践的指導力，実践的知識，高度な専門性を兼ね備えた教員を養成すべく，以下４つの力を現職教員と教職志望の若い世代に涵養することを，達成すべき基本的な成果としている。

①学習と成長を支えるファシリテーター・コーディネーターとしての実践力
②学習の協働組織とその改革のマネジメント力
③実践の質を不断に高め発展させていく省察・研究能力
④公教育としての学校を担う専門職として教員の理念と責任

（３）大学の基本的な目標との関連

本研究科の教育目標・基本方針は，本学が理念として掲げる「人々が健やかに暮らせるための科学と技術に関する世界的水準での教育・研究を推進し，地域，国及び国際社会に貢献し得る人材の育成」および「独創的でかつ地域の特色に鑑みた教育科学研究の実践」と関連している。

（４）教育研究等の質の向上に関する目標との関連

本研究科の教育目標・基本方針は，本学の長期目標１「21 世紀のグローバル社会において，高度専門職業人として活躍できる優れた人材を育成する」，長期目標３「優れた教育，研究を通して地域発展をリードし，豊かな社会づくりに貢献する」，および第２期中期目標Ⅰ-1-(1)-②「21 世紀のグローバル社会において高度専門職業人として活躍できる人材の育成を目指して，国際的にも通用する質の高い教育を実施する」と関連している。

２．組織の特徴や特色

平成４年に設置された大学院教育学研究科は，「教育における理論と実践の総合化」を掲げ，教育実践研究と教科教育学を柱とする大学院として構想された。平成 20 年４月に，17 年間にわたる取組と実績を踏まえ，教職開発専攻を設置するとともに，既存の３専攻を学校教育専攻と教科教育専攻の２専攻に再編する大学院改組を実施し，第２期中期目標期間（以下「第２期」という。）に入った。第２期末には，第３期中の修士課程と教職大学院の一本化を見据え，修士課程を学校教育１専攻へ統合する改革構想を立て，第３期からの新しい教育体制の実現に向け取組んだ。

第２期中の修士課程では，教員と大学院生が２年間の協働研究を通じて，児童・生徒のリテラシー形成と人間力育成を支援するための教科横断的なカリキュラム開発や，学校と地域の連携における諸課題に関する実践研究をおこなうプロジェクト型の必修科目「協働実践研究プロジェクト」を教育課程の特色としている。教職開発専攻は，「学校拠点方式」による教員養成と教師教育を推進するとともに，他大学との協働機構「教師教育改革コラボレーション」の創設・運営等を通して，国内外の教育改革・学校改革・授業改革を支援することを特色とする。

３．入学者の状況

修士課程の入学者数（括弧内は志願者数）は平成 22 年度 39 名（48 名），平成 23 年度 28 名（46 名），平成 24 年度 37 名（55 名），平成 25 年度 31 名（41 名），平成 26 年度 27 名（36 名），平成 27 年度 30 名（37 名）という状況である。全入学者の過半は学部新卒者が占めるが，学校教育専攻，教科教育専攻それぞれに留学生や小中高等学校教員，専門学校教員，保育士等の多様な分野の専門職に就いているものも多く入学しており，地域における教育改革実現のための拠点としての機能を果たしている。

教職開発専攻の入学者数（括弧内は志願者数）は平成 22 年度 29 名（転専攻１名を含む）（28 名），平成 23 年度 32 名（35 名），平成 24 年度 30 名（33 名），平成 25 年度 33 名（35 名），平成 26 年度 27 名（29 名），平成 27 年度 34 名（35 名）という状況である。

［想定する関係者とその期待］

- **地域・教育委員会**：専門的・実践的力量を備え，学校教育の活性化を担うことのできる教員の養成とそれにこたえる大学院の教育内容・教育方法の改善への強い期待がある。また，本研究科を活用した多様な学習機会の保障（働きながら学べる大学院，長期履修制度，教員免許取得プログラム等）への期待もある。
- **学校関係者**：本研究科での学修が教育現場に充全に活かされることを通して，教育内容の充実や学校改革に貢献することへの期待がある。また，「学校拠点方式」による学校の課題解決の推進や教職員全体の専門性開発の推進への期待がある。
- **大学院生**：教科の専門性を高める学修，「学び続ける教員」としての資質能力を高める経験，インターンシップなどを利用した学校での十分な実践経験への期待がある。とくに教職開発専攻においては，同僚との協働や他校との連携を通して学校および地域の中核リーダーとなるための実践的な学びへの期待がある。

本研究科の２課程３専攻は，各々の目的に沿って特徴的な教育課程を編成し，それに対応する教員組織・運営体制・教育内容等を有している。以下研究科全体の現況について記述するが，教職開発専攻については別途詳述するため概略とする。

Ⅱ　「教育の水準」の分析・判定

分析項目Ⅰ　教育活動の状況

観点　教育実施体制

(観点に係る状況)

●教員組織編成や教育体制の工夫とその効果

【基本的組織とその運営】

①　本研究科は修士課程と教職大学院の２課程を有し，修士課程は学校教育専攻と教科教育専攻から構成され，さらに教科教育専攻は教科等に対応した８領域から成る（**資料 1-1-1**）。教員組織はこれら教育組織に対応して設置され，各専攻・領域に専任教員が配置されている（**資料 1-1-2**）。

資料 1-1-1　教育学研究科の教育・教員組織

課　程	専　攻	領　域
修士課程	学校教育専攻	
	教科教育専攻	国語教育領域，社会科教育領域，数学教育領域，理科教育領域，芸術教育領域，保健体育教育領域，生活科学教育領域，英語教育領域
教職大学院	教職開発専攻	

（事務局資料）

資料 1-1-2　教育学研究科の専任教員配置表(H27.5.1.現在)

課程・専攻等			教員数				大学院設置基準 必要教員数			
			研究指導教員	うち教授数	補助教員	計	研究指導教員	うち教授数	補助教員	計
修士課程	学校教育専攻		13	6	2	15	6	4	4	10
	教科教育専攻	国語教育領域	6	3	3	9	4	3	3	7
		社会科教育領域	10	7	2	12	6	4	6	12
		数学教育領域	5	3	2	7	4	3	3	10
		理科教育領域	7	5	5	12	6	4	6	12
		芸術教育領域	9	5	3	12	8	6	6	14
		保健体育教育領域	7	4	0	7	4	3	3	7
		生活科学教育領域	9	6	3	12	7	5	5	12
		英語教育領域	4	4	5	9	3	2	2	5
		小計	57	37	23	80	42	30	34	76
教職大学院の課程	教職開発専攻		26	10	－	26	13	7	－	13
計			96	53	25	121	61	41	38	99

（事務局資料）

②　専任教員総数は設置基準を上回っており，大学院課程における教育活動を遂行するために十分な研究指導教育が確保されている。補助教員の不足分は研究指導教員が担っている。若干の領域では教員数が従来の基準を下回っているが，特命教員等の雇用により研究指導体制を確保している。またこれは教科の大括り化等，今後の組織変更等への対応も念頭に置いた措置である（**資料 1-1-3，前掲資料 1-1-2**）。

資料 1-1-3　教科教育専攻における教科大括り化の動きと研究指導教員数

修士課程教科教育専攻の各領域においては「専攻」に準じる形で教育研究を行っており，現在の大学院設置基準の教科に係る「専攻」において必要とされる教員数が準用される。現時点では複数の領域において「専攻」の基準を下回るという状況が生じている。しかしながら，専任教員数の基準については，第２期中に大枠の変更が提示されており，設置基準として教科の大括り化の方針が示された。このような大括り化の動きに関しては，修士課程ではすでに，平成 20 年度改組時以来，新たな取組として教員が領域の枠を超えて協働して取り組む「協働実践研究プロジェクト」（８単位）といったアクティブラーニングを指向した授業も実施してきた。また，平成 28 年度の教育学部への改組および国際地域科学部の新設という不確定な要素を抱えると同時に，本研究科の運営方針として第３期中期目標期間中に修士課程と教職大学院の課程の統合を計画している。

このような状況下において， 第２期中，とくに後半においては，本研究科としては教員退職後の後任補充を留保したうえで，教科の大括り化にも対応する将来的な人事計画の構想を検討することが，第３期中期目標期間に向けた研究科運営に必要と判断した。平成 28 年度以降は，これらの状況を鑑みつつ，大学の機能強化に向けて，組織教科の改編を図り，専門的職業人の育成に必要な教育組織の構築を行っていく。

（事務局資料）

③　学生充足率は，教科教育専攻および教職開発専攻においてほぼ適切であるが学校教育専攻は低い傾向にあり，第２期後半には，平成 28 年度の組織変更計画等，適正化を図る取組を進めた。教職開発専攻では，主に現職教員を対象とするスクールリーダー養成コースが常に定員以上の入学者数を確保している状況を踏まえ，適正化を図ると同時に，学校中核リーダーの養成に対する地域・学校の期待に応えるよう，平成 28 年度コース再編に取り組んだ（**資料 1-1-4**）。

資料 1-1-4　教育学研究科における充足率適正化に向けた取組

年　度	取　組
平成 25 年度	・福井県外からの入学志願者確保のため，東京，名古屋，大阪，京都での大学院説明会を年２回開催するようにした。
平成 26～27 年度	・平成 28 年度の教育学研究科組織変更に合わせ，入学定員の見直しを行うため，文部科学省等関係者との交渉を行い，概算要求を行う。 ・平成 28 年度に教科教育専攻と合わせた新たな学校教育専攻に統合し，その中で現学校教育専攻は小学校教育コースに縮小再編し，新しく統合した専攻全体の定員も７名減とすることで，適正化を図ることとしている。 ・教職開発専攻では，スクールリーダー養成コースを平成 28 年度から管理職養成のための学校改革マネジメントコースへ再編し，新たにミドルリーダー養成コースを新設，専攻全体の定員を７名増やすことで適正化を図ることとしている。

（事務局資料）

④　修士課程では，ほとんどの主要科目は専任教員が担当し，全ての研究指導は各領域で定められた担当基準を満たした専任教員が担当しており，大学院生の専門的力量形成のための教育研究指導体制が確保されている(**資料 1-1-5**)。教職開発専攻では，「学校拠点方式」による教育課程に対応するため，全教員で学校・授業担当チームを組み，学校・機関と院生の学習研究の支援を連動推進している。また，教育委員会等との人事交流に加え，平成 26 年度から附属学園併任教員を研究実践者教員として配置する等，実践的な学修を担保している（**資料 1-1-6**）。

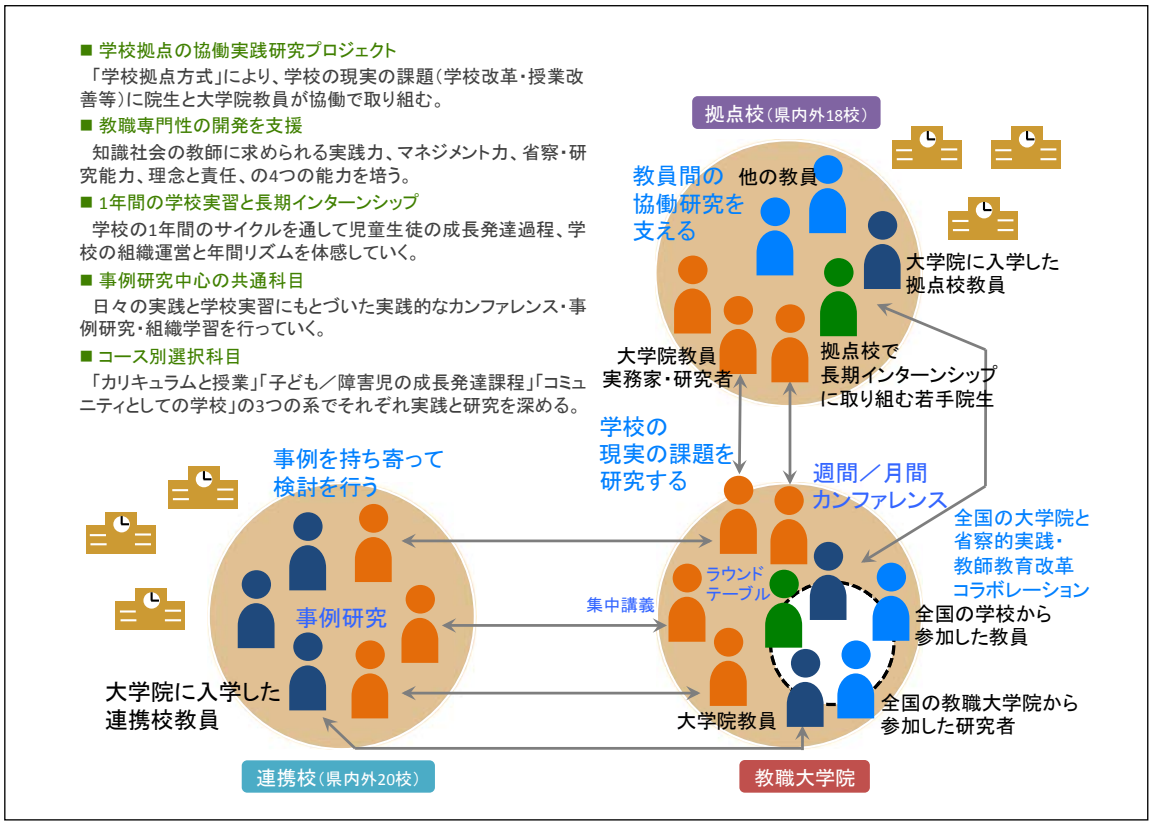
資料 1-1-5　修士課程における授業科目の専任教員による担当状況

研究科		授業数	担当教員と時間数															
			教授			准教授			講師			助教			非常勤				
			人数	時間数	総時間数に対する割合	人数	時間数	総時間数に対する割合	人数	時間数	総時間数に対する割合	人数	時間数	総時間数に対する割合	人数	時間数	総時間数に対する割合
教育学研究科	修士課程	206 (8,160)	43	3,960	48.5%	33	3,450	42.3%	7	480	5.9%	0	0	0.0%	8	270	3.3%

※授業数は，平成 26 年度に開講した科目の数。
※※担当教員は，開講科目の担当教員数（複数教員で担当している場合は，代表教員でカウント）。
※※※特命は常勤に含める。
※※※※時間数は，課程表の「毎週授業時間×15（週）」として，計算した。毎週授業時間が書かれていないものは，単位数をもとに学生便覧の【４．履修上の制度　「単位制・時間制」（2014 年度 p. 13）】を参考に算出した。

（事務局資料）

資料 1-1-6　教職開発専攻における「学校拠点方式」による教員養成・教師教育の概要



（事務局資料）

⑤　本研究科の教員組織編成および人事計画については，役員等の審議に先立ち「教育地域科学部及び大学院教育学研究科企画委員会」（**資料 1-1-7**）及び「運営組織専門委員会」（**資料 1-1-8**）において，各専攻・領域等の要望も考慮しつつ，地域や学校からの期待，研究科全体の将来構想に照らして方針決定を行っている。前述の入学定員の適正化に向けた取組，教科の大括り化を見据えた人事計画，平成 28 年度に向けた組織変更計画等は，これら委員会の主導により実現した。

資料 1-1-7　福井大学教育地域科学部及び大学院教育学研究科企画委員会要項

（設置）
第１条　教育地域科学部及び大学院教育学研究科に，福井大学教育地域科学部及び大学院教育学研究科企画委員会（以下「委員会」という。）を置く。
（目的）
第２条　委員会は，学部及び研究科の企画・運営に関し，次の各号に掲げる事項を審議する。
（１）大学及び学部の中期目標・中期計画及び年度計画の検討及びその運営方針に関する事項
（２）学部及び研究科の将来構想の検討及びその運営方針に関する事項
（３）学部の施設利用に関する事項
（４）その他学部及び大学院の企画・運営の基本に関する事項
（組織）
第３条　委員会は，次の各号に掲げる委員をもって組織する。
（１）学部長
（２）副学部長　４名
（３）学部選出の評議員　３名
（４）教育学研究科教職開発専攻長
（５）附属教育実践総合センター長
（６）教育地域科学部教務学生委員会委員長
（７）教育地域科学部学校教育課程委員会委員長
（８）教育地域科学部地域科学課程委員会委員長
（９）教授会選出の教授　２名
（10）教授会選出の准教授又は講師　２名
（11）前各号に掲げる者以外の教育地域科学部の教員　若干名
２　前項第 11 号の委員は，学部長が指名する。
（任期）
第４条　前条第１項第９号から第 11 号の委員の任期は２年とし，再任を妨げない。
２　委員に欠員が生じた場合の補欠委員の任期は前任者の残任期間とする。
（委員長）
第５条　委員会に委員長と副委員長を置く。
２　委員長は，学部長をもって充てる。
３　副委員長は，第３条第１項２号の委員のうち，総務担当の副学部長をもって充てる。
（会議）
第６条　委員長は，委員会を招集し，その議長となる。
２　委員長に事故あるときには，副委員長がその職務を代行する。
（委員以外の者の出席）
第７条　委員会が必要と認めるときは，委員以外の者の出席を求め，意見を聴くことができる。
（専門委員会）
第８条　委員会は，必要に応じ，専門委員会を置くことができる。
２　専門委員会について必要な事項は，委員会が定める。
（庶務）
第９条　委員会の庶務は，教育地域科学部支援室において処理する。

附　則
１　この要項は，平成 17 年４月５日から施行する。
２　この要項の施行後，最初に任命される第３条第１項第６号及び第７号の委員の任期は，第４条第１項の規定にかかわらず，平成 19 年３月 31 日までとする。
３　福井大学教育地域科学部・教育学研究科構想検討委員会要項（平成 16 年４月 16 日教授会・研究科委員会決定），福井大学教育地域科学部教育研究組織特別委員会要項（平成 16 年６月 11 日教授会決定）及び福井大学教育地域科学部施設等検討委員会要項（平成 15 年 11 月７日教授会決定）は，

廃止する。
4　廃止前の福井大学教育地域科学部教育研究組織特別委員会の下に置かれた専門職大学院等検討ワーキングは，第８条の規定に基づく専門委員会として存続するものとする。
附　則（平成 19 年２月 16 日改正）
この要項は，平成 19 年４月１日から施行する。
附　則（平成 20 年３月７日改正）
この要項は，平成 20 年４月１日から施行する。
附　則（平成 22 年６月 11 日改正）
この要項は，平成 22 年６月 11 日から施行する。
附　則（平成 23 年３月４日改正）
この要項は，平成 23 年４月１日から施行する。

（事務局資料）

資料 1-1-8　運営組織専門委員会要項

（設置）
第１　福井大学教育地域科学部及び大学院教育学研究科企画委員会の下に，運営組織専門委員会を置く。
（所掌事項）
第２　委員会は，次に掲げる事項について審議する。
（１）教育地域科学部における人事計画に関する事項
（２）教育地域科学部の運営組織に関する事項
（３）その他学部長が諮問した事項
（組織）
第３　委員会は，次の各号に掲げる委員をもって組織する。
（１）学部選出の評議員　　３名
（２）前号を除く企画委員会委員　　３名
（３）その他学部長の指名する教員　　若干名
（任期）
第４　委員の任期は２年とする。ただし，再任を妨げない。
２　委員に欠員が生じた場合の補欠委員の任期は，前任者の残任期間とする。
（委員長）
第５　委員会に委員長を置き，第３第１号の委員をもって充てる。
２　委員長に事故があるときは，あらかじめ委員長が指名した委員がその職務を代行する。
（会議）
第６　委員長は，委員会を招集し，その議長となる。
２　委員長は，必要と認めたときは，委員以外の者の出席を求め，その意見を聴くことができる。
（専門部会）
第７　委員会は，必要に応じて専門部会を置くことができる。
２　専門部会について必要な事項は，委員会が定める。
（庶務）
第８　委員会の庶務は，総務部教育地域科学部支援室において処理する。
（雑則）
第９　この要項に定めるもののほか，委員会の運営に関し必要な事項は，委員会が定める。

附　則
この要項は，平成 20 年４月１日から施行する。

（事務局資料）

【特徴的な教育プログラムの実施体制】

① 修士課程では特徴的な教育プログラムとして，共通科目「協働実践研究プロジェクト（８単位必修)」を設定し，大学院生と教員が協働して実践的な研究を進めている。(**資料 1-1-9，10**）その実施体制を確保するため，平成 24 年度に「協働実践研究プロジェクト実施委員会」を新たに組織し運営を行っている（**資料 1-1-11**)。履修者からの評価も高く，教科の専門性の向上と実践的な学修への期待に応えている（**資料 1-1-12**)。その成果として公表される学術論文は第２期において増加している（**資料 1-1-13，P2-55～56 後掲資料 2-1-8，P2-59 後掲資料 2-1-13**)。また，平成 25 年度外部評価において，優れた取組として評価された（**P2-34 後掲資料 1-1-43**)。

資料 1-1-9　協働実践研究プロジェクトの概要

(1)平成 20 年度より，学校教育専攻と教科教育専攻の教育課程の中に，大学院生と教員が協働して実践的な研究を進める「協働実践研究プロジェクト（８単位必修）」が設けられました。このプロジェクトは，大学院で学ぶ高度な専門的知識を基盤として，さらに実践的な力を身につけることを目的としています。

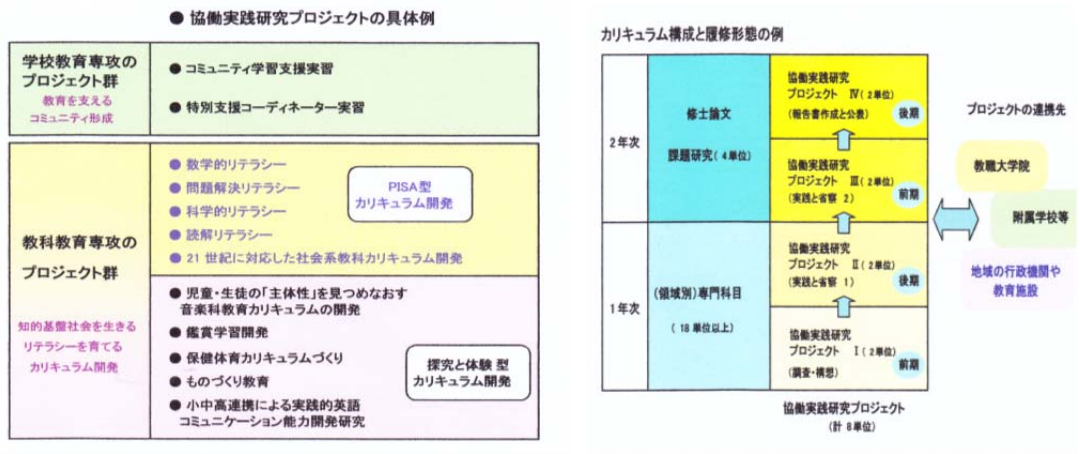
(2)プロジェクトには，主に学校教育専攻が取り組むプロジェクト群と，教科教育専攻が取り組むカリキュラム開発プロジェクト群（PISA 型および探究と体験型）があります。

(3) 学校教育専攻の協働実践研究プロジェクト：
学校を支えるコミュニティの再生と人間力を形成するために，子どもたちや家族の多様なニーズに応える見識と専門的力量，そして生涯学習，地域の文化振興，健康教育，環境教育，国際教育など，学校と地域の連携なくしては実現できない諸課題を体験的に実践研究します。

(4)教科教育専攻の協働実践研究プロジェクト： PISA 型，探究と体験型カリキュラム開発では，児童・生徒のリテラシー形成と人間力育成を支援するための教科横断的なカリキュラム開発と授業プランの検討を行います。

(5)大学院生は，基本的に自分の専門に近い領域のプロジェクトを履修し，教員と協働してプロジェクトを推進します。プロジェクトの調査や実践にかかわる部分については，教職大学院や附属学校等および地域の機関等と連携して行う場合もあります。最終的に豊富な実践事例を組み込んだ包括的なカリキュラムまたは政策等の提案をまとめ，報告書(冊子)を作成して公表します。

(6)修士課程２年に進学した時（４月）に，一年間のまとめとして中間発表会を行います。また，修士課程修了を目前にして，２年目の２月には最終発表会を行います。



（事務局資料）

資料 1-1-10　協働実践研究プロジェクト履修者数一覧（過去６年間）

◆協働実践研究プロジェクト履修者数一覧

授業科目名	2015(H27)	2014(H26)	2013(H25)	2012(H24)	2011(H23)	2010(H22)
コミュニティ学習支援実習Ⅰ	0	3	8	4	1	4
コミュニティ学習支援実習Ⅱ	0	3	8	4	1	4
コミュニティ学習支援実習Ⅲ	1	8	4	3	4	9
コミュニティ学習支援実習Ⅳ	2	7	4	1	4	9
特別支援教育コーディネーター実習Ⅰ	0	4	2	3	5	8
特別支援教育コーディネーター実習Ⅱ	0	4	2	3	5	8
特別支援教育コーディネーター実習Ⅲ	3	2	3	5	8	3
特別支援教育コーディネーター実習Ⅳ	2	2	3	6	8	3
数学的リテラシーⅠ（調査・構想）	4	4	2	3	1	0
数学的リテラシーⅡ（カリキュラム開発）	4	4	2	3	1	0
数学的リテラシーⅢ（実践と省察）	4	2	3	1	0	2
数学的リテラシーⅣ（再構成と報告書作成）	3	2	3	1	0	2
問題解決リテラシーⅠ（調査・構想）	0	1	0	11	2	2
問題解決リテラシーⅡ（カリキュラム開発）	0	1	0	11	2	2
問題解決リテラシーⅢ（実践と省察）	1	0	11	2	2	6
問題解決リテラシーⅣ（カリキュラムの再構成と報告書の作成）	1	0	11	2	2	6
科学的リテラシーⅠ（調査・構想）	5	3	2	1	0	2
科学的リテラシーⅡ（カリキュラム開発）	5	3	2	1	0	2
科学的リテラシーⅢ（実践と省察）	3	2	1	0	2	2
科学的リテラシーⅣ（報告書作成と公表）	3	2	1	0	2	2
読解リテラシーⅠ（研究・分析）	5	2	5	5	2	3
読解リテラシーⅡ（リテラシーの形成とテキスト分析）	5	2	5	5	2	3
読解リテラシーⅢ（カリキュラム・教材の研究）	2	5	5	2	3	1
読解リテラシーⅣ（学習プランおよび教材集の作成と公表）	2	5	6	1	3	1
21世紀に対応した社会系教科カリキュラムの開発Ⅰ（基礎研究）	3	4	5	0	0	1
21世紀に対応した社会系教科カリキュラムの開発Ⅱ（カリキュラム単元の構想）	3	4	5	0	0	1
21世紀に対応した社会系教科カリキュラムの開発Ⅲ（カリキュラム単元の作成と実践基礎研究）	4	3	0	0	1	1
21世紀に対応した社会系教科カリキュラムの開発Ⅳ（カリキュラム単元の再構成と報告書の作成）	4	3	0	0	1	1
音楽科教育カリキュラムの開発Ⅰ（調査と分析）	2	3	0	0	1	4
音楽科教育カリキュラムの開発Ⅱ（題材構成）	2	3	0	0	1	3
音楽科教育カリキュラムの開発Ⅲ（実践と考察）	3	0	0	1	3	0
音楽科教育カリキュラムの開発Ⅳ（報告書の作成）	1	0	0	1	3	0
鑑賞学習開発Ⅰ（鑑賞学習におけるツールとしての語彙力の育成）	3	1	2	3	5	4
鑑賞学習開発Ⅱ（認知発達・知能の個人差を考慮した鑑賞学習）	3	1	2	3	5	4
鑑賞学習開発Ⅲ（記号学的手法を用いた作品分析）	2	2	3	5	4	3
鑑賞学習開発Ⅳ（生活環境と美意識，弾力性を持たせる鑑賞）	2	1	3	5	4	3
保健体育カリキュラムづくりⅠ（保健体育カリキュラムの分析と課題）	3	2	1	2	0	2
保健体育カリキュラムづくりⅡ（健康・安全に留意した実践とカリキュラムづくり）	3	2	1	2	0	2
保健体育カリキュラムづくりⅢ（体育の向上を目指した実践とカリキュラムづくり）	2	0	3	0	2	1
保健体育カリキュラムづくりⅣ（運動技能を高める実践とカリキュラムづくり）	2	1	2	0	2	1
ものづくり教育Ⅰ（ものづくり教育と材料加工）	1	0	1	3	0	2
ものづくり教育Ⅱ（ものづくり教育と機械）	1	0	1	3	0	2
ものづくり教育Ⅲ（ものづくり教育と電気電子）	0	2	2	0	2	3
ものづくり教育Ⅳ（ものづくり教育と情報）	0	2	2	0	2	3
小中高連携による実践的英語コミュニケーション能力開発研究Ⅰ	0	1	1	3	4	6
小中高連携による実践的英語コミュニケーション能力開発研究Ⅱ	0	1	1	3	4	6
小中高連携による実践的英語コミュニケーション能力開発研究Ⅲ	1	1	3	4	6	2
小中高連携による実践的英語コミュニケーション能力開発研究Ⅳ	1	1	3	5	5	3

（事務局資料）

資料 1-1-11　福井大学大学院教育学研究科協働実践研究プロジェクト実施委員会要項

（趣旨）

第１　この要項は，福井大学大学院教育学研究科専攻・領域主任会の下に設置された，福井大学大学院教育学研究科協働実践研究プロジェクト実施委員会（以下「委員会」という。）に関し必要な事項を定める。

（任務）

第２　委員会は，協働実践研究プロジェクトの円滑な実施を図るため，次の事項を行う。

一　協働実践研究プロジェクトの授業実施計画及び成果報告に関すること。

二　協働実践研究プロジェクトの履修に関する特例申請について検討すること。

三　その他必要と認める事項。

（組織）
第３　委員会は，次の各号に掲げる委員をもって組織する。
　一　専攻・領域主任会副委員長　２名
　二　各プロジェクト代表教員　１名
２　前項第２号の委員は，当該各プロジェクトで互選する。
（任期）
第４　第３項第１項第１号の委員の任期は，専攻領域主任会副委員長の任期に準ずる。
２　各プロジェクトの代表教員の任期は１年とし，再任を妨げない。
３　委員に欠員が生じた場合の後任者の任期は，前任者の残任期間とする。
（委員長及び副委員長）
第５　委員会に委員長及び副委員長を置く。
２　委員長及び副委員長は，第３第１項第１号の委員の中から研究科長が指名する。
第６　委員長は，委員会を招集し，その議長となる。
２　副委員長は，委員長を補佐し，委員長に事故があるときは，その職務を代行する。
（庶務）
第７　委員会の庶務は，学務部教務課において処理する。

　附則
　この要項は，平成 24 年４月１日から施行する。

（事務局資料）

資料 1-1-12　協働実践研究プロジェクトを受講した大学院生の感想

○理科教育領域大学院生（平成 26 年度入学）

科学的リテラシーでは，中学理科の「動物」と「堆積岩」を遊びながら学ぶことが出来るカードゲーム教材の開発を行ってきた。開発にあたっては，週１回科学的リテラシーの時間に大学院生，大学教員でカードに盛り込む内容や形式を話し合いながら決定していった。話し合いでは，専門分野な知見はもちろん，教育的な知見や他の専門分野の知見から意見交換がなされ，非常に幅広い考え方を得ることが出来た。また，それぞれの知見がカードゲーム教材に反映されることで，非常に質の高い教材となったと考えられる。カードに使用する写真の撮影では，大学教員と共に水族館や動物園等に出かけ，その過程においても教育・教科の専門的な学びを得ることが出来た。

科学的リテラシーの活動全体において，他の大学院生や大学教員との意見交換，協働しての活動が行えたことにより，自身の知見や考え方の広がりが生まれ，非常に有意義なものであった。この経験は，今後教員となった後にも活かしていけるものであると考えられる。

○国語教育領域大学院生（平成 26 年度入学）

本年度の協働実践プロジェクト，読解リテラシーでは「言語活動の充実を図るために教師はどのような授業を計画，運用し，どのような学習環境を構築していく必要があるのか」という観点でいくつかの小学校の授業実践に関わりました。永平寺町志比小学校では参加する院生を二つのグループに分け，低学年，高学年の二つの学年を対象に，授業計画の段階から実際の授業，そして事後の研究会と参加し，小学校の先生方との議論を重ねました。また，学習者のデータを持ち帰り，教師の意図性と学習者の主体性の関係を観点に分析を重ねました。こうした実践的な取り組みと研究的な取り組みの両方が経験できるため，教育現場に出てからも高度な授業研究を自分の力で進めていくことができると実感します。また，ほかの仲間と協力して現場での授業研究を進めていく基盤になると思いました。

（平成 27 年度協働実践研究プロジェクト履修者アンケート結果より抜粋）

資料 1-1-13　協働実践研究プロジェクトの研究成果をまとめた『福井大学教育実践研究』に掲載された論文の例

○松友一雄，福井大学大学院協働実践プロジェクトにおける実践的力量形成の取り組み－理科学習における言語力育成のための語彙集作成を通して－（第 35 号，pp. 21-30, 平成 23 年）
○橋本康弘他，「教科横断型授業」の開発研究（Ⅰ）－2008・2009 年度協働実践研究プロジェクトでの取り組みから－（第 35 号，pp. 67-78, 平成 23 年）
○松田淑子他，「教科横断型授業」の開発研究（Ⅱ）－2009・20120 年度協働実践研究プロジェクトでの取り組みから－（第 36 号，pp. 35-42, 平成 24 年）
○濱口由美他，鑑賞学習教材としてのアートカードの意義と可能性（第 36 号，pp. 43-54, 平成 24 年）
○内平圭祐他，社会科・地理歴史科における教材開発の成果と作成過程－協働による地域教材作成を題材にして－（第 36 号，pp. 99-110, 平成 24 年）
○小玉健太他，「社会参加・問題解決型授業」を通した市民性育成に関する研究－2011・2012 年度協働実践研究プロジェクトでの取り組みから－（第 37 号，pp. 31－42，平成 25 年）

（事務局資料）

②　教職開発専攻では，拠点校との継続的・発展的な関係を構築できるよう，担当教員チームが，大学院生の長期インターンシップ指導と拠点校での教員間の協働研究支援にあたる体制をとっている（**資料 1-1-14**）。

資料 1-1-14　教職開発専攻の平成 27 年度拠点校・連携校と教員担当一覧

種別	番号	学校名	院生名						大学担当者名								
拠点校	1	附属幼稚園							青木	岸野	稲井						
	2	附属小学校	宮本	飯田	大橋	長谷川	池田	串		渡邉	岸野	三田村	小林真	木村	（小林真）永谷	森（小林真）	松木
	3	附属中学校	幸坂	佐藤恵	ポリン	田中	田村佳		森田	柳澤	木村	宮下					
	4	附属特別支援学校							天方	小嵐	松井					（笹原）	
	5	中藤小学校	高橋	吉田	山田芳	増谷	藤田		小林真	岸野	倉見	小嵐	加藤			（永谷）（風間）	
	6	至民中学校	堀	高田	松山				木村	二宮	杉山	半原	松木			（小林真）	
	7	丸岡南中学校	藤井芳	大黒	北川	山田晃			森	三田村	隼瀬	杉山	柳澤	小林和	（小林真）	（加藤）（藤井）	
	8	美浜中学校	山口						杉山	二宮	稲井					（稲垣）	
	9-1	福井東特別支援学校	吉川輝						小嵐	綾城						（松井）（松木）	
	9-2	福井東特別支援学校月東分校							小嵐	松井						（廣澤）（笹原）	
	10	啓新高等学校	墨谷	田村朋	藤井真				森	半原	宮下	小林和	西川			（松田通）	
	11	教育研究所	荒木						小林真	三田村	二宮	柳澤	風間			（宮下）（冨永）	
	12	嶺南教育事務所	藤本						森	山崎	松田通					（岸野）	
	13	特別支援教育センター							小嵐	綾城	風間					（松木）（笹原）	
	14-1	板橋区立中台中学校	星野						半原	森	綾城					（木村）（小林和）	
	14-2	板橋区立赤塚第二中学校							木村	半原						（石井恭）	
	14-3	板橋区教育支援センター	中野						宮下	山崎	倉見					（木村）	
	15	カリタス学園（小・中）	小野	黒瀬					森	松木	山崎	稲井				（石井恭）	
	16	奈良女子大学附属中等教育学校	佐藤大	塩川					杉山	岸野	小林真					（木村）（隼瀬）	
連携校	1	福井県幼児教育支援センター	觀						岸野	松木	山崎	稲井					
	2	安居中学校	高松						小林真	倉見	山崎	中川				（木村）（藤井）	
	3	足羽中学校	柘植	神部					半原	宮下	稲井						
	4	明倫中学校	大村						小林真	隼瀬	風間						
	5	春江小学校	山田俊						二宮	杉山	宮下	永谷					
	6	高椋小学校	名倉						綾城	小林真	倉見	永谷					
	7	鯖江・豊小学校	上島						森	半原	中川					（永谷）（宮下）	
	8	鯖江中学校	茨田						倉見	宮下	稲井						
	9	岡本小学校	小林						森	風間	稲井						
	10	勝山・野向小学校	山田啓						小嵐	綾城	小林和					（笹原）（岸野）	
	11	勝山・鹿谷小学校	平林						岸野	二宮	小林和					（加藤）（石井恭）	
	12	気比中学校	浜上						三田村	杉山	山崎						
	13	口名田小学校	正木						三田村	杉山	山崎	小林和					
	14	高浜中学校	北村						二宮	半原	綾城					（木村）	
	15	青郷小学校	砂原						二宮	半原	綾城					（木村）	
	16	嶺南東特別支援学校	河端						倉見	小林真	綾城					（小嵐）（笹原）	
	17	高志高等学校	西						三田村	杉山	西川	冨永				（松田淑）（木村）	
	18	勝山高等学校	吉川						二宮	松田通	小林和	隼瀬				（中川）	
	19	新座高等学校	金子						木村	小林真	三田村					（笹原）（中川）	
	20	富士市立高等学校	眺野						二宮	山崎	隼瀬	松田淑				（篠原）	

注　1　教職専門性開発コースM1　教職専門性開発コースM2　連絡担当スタッフ
スクールリーダー養成コースM1　スクールリーダー養成コースM2　（　）副担当スタッフ

（事務局資料）

【教員間の連携体制】

修士課程の「協働実践研究プロジェクト」では，複数分野の教員の連携・協働による指導体制を組み（**資料 1-1-15**），そこから共著による学術論文等の成果も生んでいる（**資料 1-1-16**）。教職開発専攻では，研究者教員と実務家教員，教職と教科担当の教員の連携・協働によるチーム・ティーチングを基本としている（**前掲資料 1-1-14**）。両課程とも，新しい学力の育成に対応出来る教員養成に対する地域・学校・大学院生からの期待に応える体制となっている。

資料 1-1-15　協働実践研究プロジェクトにおける教育科学・教科専門・教科教育教員の連携例（平成 27 年度）

プロジェクト名	担当教員名（専門領域）
数学的リテラシー	西村保三（位相幾何学），櫻本篤司（関数解析学），風間寛司（数学教育，教師教育）
読解リテラシー	松友一雄（国語教育学），大和真希子（教師教育，学校経営）
音楽科教育カリキュラムの開発	澁谷政子（音楽学），星谷丈生（作曲），高木裕美（器楽・ピアノ），梅村憲子（声楽），吉村治広（音楽教育学），八代健志（音楽教育学）
ものづくり教育	塚本充（情報技術），奥野信一（技術科教育），石川和彦（技術教育）

（事務局資料）

資料 1-1-16　『福井大学教育実践研究』における教育科学・教科専門・教科教育教員の協働研究による論文例

○松田淑子（家庭科教育学），荒井紀子（家庭科教育学），伊禮三之（数学教育学），山本博文（地学），橋本康弘（社会科教育学），池島将司（理科・院生），行寿浩司（社会科・院生），二丹田雄一（社会科・院生），山田志穂（家庭科・院生），吉村祐美（家庭科・院生）「「教科横断型授業」の開発研究Ⅱ」，第 36 号，pp. 35-42.

○松友一雄（国語科教育学），大和真希子（教師教育，学校経営）「言語活動の質を向上させるための教師のインターベンションに関する研究－言語・非言語コミュニケーションの観点から－」，第 37 号，pp. 1-10.

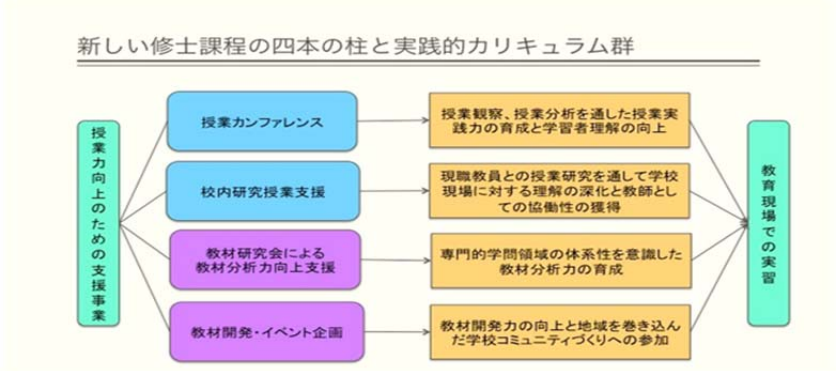
（事務局資料）

【学校・教育委員会等との連携】

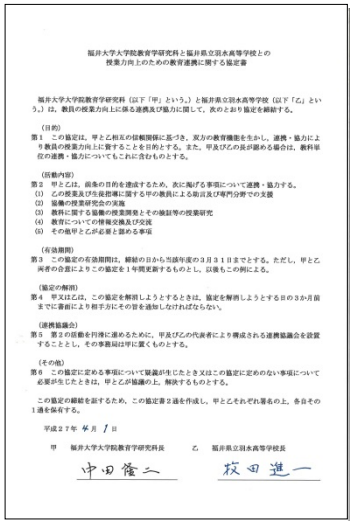
① 修士課程では，平成 25 年度に「授業力向上支援事業」を立ち上げ，平成 26 年度から教育委員会等との連携のもと本格的な実施体制に入った（**資料 1-1-17**）。同事業は「授業力向上のための支援事業」運営委員会が運営を行っている（**資料 1-1-18**）。年間 20 校程度に向けて研究授業等の支援を行っている（**資料 1-1-19～21**）。同事業は，大学院生に対して実践的な学修の機会を担保すると同時に，教育委員会関係者や学校教諭からも高い評価を受けており，地域の学校関係者からの教育内容の充実や学校改革への貢献の期待に十分応えている（**資料 1-1-22**）。平成 26 年度には文部科学省委託事業「総合的な教師力向上のための調査研究事業」として選定された。

資料 1-1-17　授業力向上支援事業の概要

■地域の学校との連携強化および修士課程学生の実践的な学修強化を目的とした「授業力向上支援事業」は，「授業カンファランス」「校内研究授業支援」「教材研究会による教材分析力向上支援」「教材開発・イベント企画」の４本柱から成り立つ。これらの支援事業は，国語や数学，理科といった教科に限らず，特別支援学校への支援も含まれており，また，小学校から高等学校まで幅広い学校段階で行われている。



■平成 26 年度に永平寺教育委員会，平成 27 年度に福井県羽水高等学校と「授業力向上のための教育連携に関する事業協定書」を締結した。



福井大学大学院教育学研究科と福井県立羽水高等学校との
授業力向上のための教育連携に関する協定書

福井大学大学院教育学研究科（以下「甲」という。）と福井県立羽水高等学校（以下「乙」という。）は，教員の授業力向上に係る連携及び協力に関して，次のとおり協定を締結する。

（目的）
第１　この協定は，甲と乙相互の信頼関係に基づき，双方の教育機能を生かし，連携・協力により教員の授業力向上に資することを目的とする。また，甲及び乙の長が認める場合は，教科単位の連携・協力についてもこれに含むものとする。

（活動内容）
第２　甲と乙は，前条の目的を達成するため，次に掲げる事項について連携・協力する。
(1)　乙が所管する学校の授業及び生徒指導に関する甲の教員による助言及び専門分野での支援
(2)　協働の授業研究会の実施
(3)　教科に関する協働の授業開発とその検証等の授業研究
(4)　教育についての情報交換及び交流
(5)　その他甲と乙が必要と認める事項

（有効期間）
第３　この協定の有効期間は，締結の日から当該年度の３月３１日までとする。ただし，甲と乙両者の合意によりこの協定を１年間更新するものとし，以後もこの例による。

（協定の解消）
第４　甲又は乙は，この協定を解消しようとするときは，協定を解消しようとする日の３か月前までに書面により相手方にその旨を通知しなければならない。

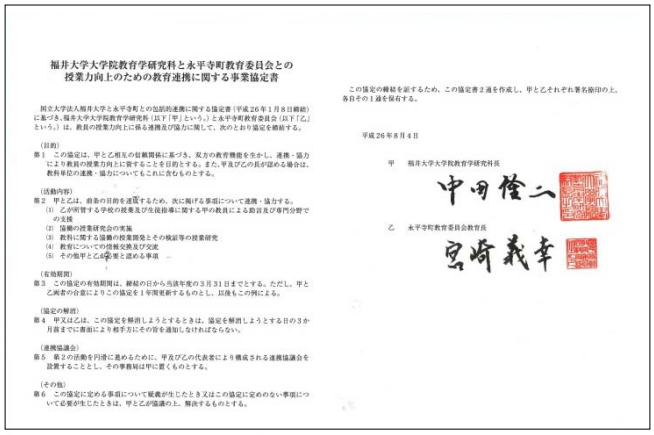
（連携協議会）
第５　第２の活動を円滑に進めるために，甲及び乙の代表者により構成される連携協議会を設置することとし，その事務局は甲に置くものとする。

（その他）
第６　この協定に定める事項について疑義が生じたとき又はこの協定に定めのない事項について必要が生じたときは，甲と乙が協議の上，解決するものとする。

この協定の締結を証するため，この協定書２通を作成し，甲と乙それぞれ署名の上，各自１通を保有する。

平成２７年 ４月 １日

甲　福井大学大学院教育学研究科長　中田隆二
乙　福井県立羽水高等学校長　荻田進一



福井大学大学院教育学研究科と永平寺町教育委員会との
授業力向上のための教育連携に関する事業協定書

国立大学法人福井大学と永平寺町との包括的連携に関する協定書（平成２６年１月８日締結）に基づき，福井大学大学院教育学研究科（以下「甲」という。）と永平寺町教育委員会（以下「乙」という。）は，教員の授業力向上に係る連携及び協力に関して，次のとおり協定を締結する。

（目的）
第１　この協定は，甲と乙相互の信頼関係に基づき，双方の教育機能を生かし，連携・協力により教員の授業力向上に資することを目的とする。また，甲及び乙の長が認める場合は，教科単位の連携・協力についてもこれに含むものとする。

（活動内容）
第２　甲と乙は，前条の目的を達成するため，次に掲げる事項について連携・協力する。
(1)　乙が所管する学校の授業及び生徒指導に関する甲の教員による助言及び専門分野での支援
(2)　協働の授業研究会の実施
(3)　教科に関する協働の授業開発とその検証等の授業研究
(4)　教育についての情報交換及び交流
(5)　その他甲と乙が必要と認める事項　…

（有効期間）
第３　この協定の有効期間は，締結の日から当該年度の３月３１日までとする。ただし，甲と乙両者の合意によりこの協定を１年間更新するものとし，以後もこの例による。

（協定の解消）
第４　甲又は乙は，この協定を解消しようとするときは，協定を解消しようとする日の３か月前までに書面により相手方にその旨を通知しなければならない。

（連携協議会）
第５　第２の活動を円滑に進めるために，甲及び乙の代表者により構成される連携協議会を設置することとし，その事務局は甲に置くものとする。

（その他）
第６　この協定に定める事項について疑義が生じたとき又はこの協定に定めのない事項について必要が生じたときは，甲と乙が協議の上，解決するものとする。

この協定の締結を証するため，この協定書２通を作成し，甲と乙それぞれ署名捺印の上，各自その１通を保有する。

平成２６年８月４日

甲　福井大学大学院教育学研究科長　中田隆二
乙　永平寺町教育委員会教育長　宮崎義幸

（事務局資料）

資料 1-1-18　福井大学教育地域科学部及び大学院教育学研究科「授業力向上のための支援事業」運営委員会要項

福井大学教育地域科学部及び大学院教育学研究科「授業力向上のための支援事業」
運営委員会要項

平成 25 年６月 28 日教授会決定

（設置）
第１　福井大学教育地域科学部及び大学院教育学研究科に，福井大学教育地域科学部及び大学院教育学研究科「授業力向上のための支援事業」運営委員会（以下「委員会」という。）を置く。
（目的）
第２　委員会は，「授業力向上のための支援事業」（以下「支援事業」という。）に関する次の各号に掲げる事項について審議するとともに，その企画・運営に当たる。
（１）支援事業の企画，事業計画及び予算に関する事項
（２）支援事業の実施及び改善に関する事項
（３）委員会が公開する Web ページの管理運用等に関する事項
（４）その他必要と認める事項
２　支援事業に関する取扱いは，別に定める。
（組織）
第３　委員会は，次の各号に掲げる委員をもって組織する。
（１）評議員又は副学部長　１名
（２）教科教育専攻教科教育担当教員　４名
（３）教科教育専攻教科専門担当教員　２名
（４）学校教育専攻担当教員　１名
（５）附属教育実践総合センター教員　１名
（６）学部長が推薦する者　若干名
２　前項第１号から第５号の委員は学部長が指名するものとする。ただし，第５号の委員は附属教育実践総合センター長の推薦による。
（任務）
第４　委員の任期は１年とし，再任を妨げない。
２　委員に欠員が生じた場合の補欠委員の任期は，前任者の残任期間とする。
（委員長）
第５　委員会に委員長を置く。
２　委員長は，第３第１項第１号の委員をもって充てる。

３　委員長は，委員会を招集し，その議長となる。
４　委員長に事故あるときは，あらかじめ委員長が指名する委員がその職務を代行する。
（委員以外の者の出席）
第６　委員会が必要と認めるときは，委員以外の者の出席を求め，その意見を聴くことができる。
（専門部会）
第７　委員会は，必要に応じて専門部会を置くことができる。
２　専門部会について必要な事項は，委員会が別に定める。
（庶務）
第８　委員会の庶務は，総務部教育地域科学部支援室において処理する。

附　則
１　この要項は，平成 25 年 7 月 1 日から施行する。
２　この要項の施行後，最初に選出される委員の任期は，第４第１項の規定にかかわらず，平成 26 年３月 31 日までとする。

（事務局資料）

資料 1-1-19　授業力向上のための支援事業の実施実績（平成 25 年度）

支援内容	学校名
授業カンファランス	福井市東藤島小学校，福井市川西中学校，福井市国見小学校，福井市殿下小学校，福井市長橋小学校，敦賀市西浦小・中学校，永平寺町松岡小学校，永平寺町志比北小学校，越前町萩野小学校
校内研究授業等支援	福井市美山中学校，福井県立若狭高等学校，福井県立大野高等学校，福井市立明道中学校，鯖江市神明小学校，福井県立高志高等学校，福井県立勝山高等学校，福井県立敦賀高等学校，福井県立武生東高等学校，福井県立丹生高等学校
教材開発・イベント企画	福井ジュニアロースクール，親子で挑戦～サイエンスクイズ＆ショー等

（事務局資料）

資料 1-1-20　授業力向上のための支援事業の実施状況（平成 26 年度）

月日	対象校	支援内容	教科	学生・院生の引率の有無
4 月 14 日	越前町荻野小学校	教員研修	国語	
4 月 28 日	福井県立羽水高等学校	研究計画	全教科	
4 月 30 日	永平寺町志比小学校	研究授業・研究協議会	国語	
5 月 12 日	越前市吉野小学校	研究授業・研究協議会	数学	
5 月 14 日	福井県立羽水高等学校	授業参観・研究協議会	国語	有
5 月 15 日	越前町荻野小学校	授業カンファレンス	国語	
5 月 27 日	福井市進明中学校	授業見学	理科	有
5 月 28 日	永平寺町志比小学校	研究授業・研究協議会	国語	有
5 月 30 日	福井県立羽水高等学校	授業見学・研究協議会	英語	有
5 月 30 日	福井市森田中学校	授業見学	理科	有
6 月 2 日	福井県立羽水高等学校		数学	
6 月 2 日	越前市吉野小学校	研究授業・研究協議会	数学	
6 月 4 日	福井県立羽水高等学校	授業見学・研究協議会	社会	有
6 月 9 日	福井県立勝山高等学校	授業見学・研究協議会	英語	
6 月 9 日	越前市吉野小学校	研究授業・研究協議会	数学	
6 月 12 日	永平寺町松岡小学校	研究授業・研究協議会	国語	有
6 月 16 日	永平寺町志比北小学校	研究授業・研究協議会	数学	
6 月 17 日	福井県立勝山高等学校	授業見学・研究協議会	英語	

6月19日	越前町朝日中学校	授業見学・研究協議会	英語	有
6月19日	越前町荻野小学校	研究授業・研究協議会	国語	
6月20日	福井県立敦賀高等学校	研究授業・研究協議会	国語	有
6月24日	越前市吉野小学校	研究授業・研究協議会	数学	
7月 7日	永平寺町志比北小学校	研究授業・研究協議会	数学	
7月 9日	福井県立羽水高等学校	授業参観・研究協議会	国語	有
7月14日	福井県立羽水高等学校	授業見学・研究協議会	英語	
7月15日	福井市進明中学校	授業見学	理科	有
7月22日	坂井市立大関小学校	教員研修	国語	
7月29日	福井市東藤島小学校	教員研修	国語	
7月31日	永平寺町志比小学校	研究授業・研究協議会	国語	有
8月 5日	福井市明新小学校	教員研修	国語	
8月22日	越前町荻野小学校	教員研修	国語	
9月25日	永平寺町志比小学校	研究授業・研究協議会	国語	有
9月26日	永平寺町松岡中学校	指導案検討	数学	
9月26日	永平寺町志比北小学校	研究授業・研究協議会	数学	
10月 6日	越前町荻野小学校	研究授業・研究協議会	国語	
10月 6日	越前市吉野小学校	研究授業・研究協議会	数学	
10月10日	福井市東藤島小学校	研究授業・研究協議会	国語	有
10月10日	越前市吉野小学校	研究授業・研究協議会	数学	
10月14日	敦賀市立敦賀南小学校	授業カンファレンス	国語	
10月16日～17日	福井・吉田ブロック小学校特別支援学級合同宿泊学習会	発達障害や肢体不自由のある児童への支援学習	特別支援	
10月20日	福井市進明中学校	授業見学	理科	有
10月20日	永平寺町志比北小学校	研究授業・研究協議会	数学	
10月20日～21日	福井・吉田ブロック小学校特別支援学級合同宿泊学習会	発達障害や肢体不自由のある児童への支援学習	特別支援	
10月21日	福井県立羽水高等学校	研究授業・研究協議会	国語	有
10月21日	越前市吉野小学校	研究授業・研究協議会	数学	
10月21日	永平寺町松岡小学校	研究授業・研究協議会	理科	
10月27日	永平寺町松岡中学校	研究授業・研究協議会	数学	
10月28日	福井県立羽水高等学校	授業見学・研究協議会	数学	
10月28日	永平寺町志比小学校	研究授業・研究協議会	国語	有
10月28日～29日	福井・吉田ブロック小学校特別支援学級合同宿泊学習会	発達障害や肢体不自由のある児童への支援学習	特別支援	
10月29日	越前町朝日中学校	授業見学・研究協議会	英語	
10月30日	永平寺町永平寺中学校	授業見学・研究協議会	数学	
10月30日	永平寺町松岡小学校	研究授業・研究協議会	国語	有
11月 4日	福井市東藤島小学校	研究授業・研究協議会	国語	有
11月 5日	福井県立羽水高等学校	授業見学	数学	
11月 7日	福井県立敦賀高等学校	研究授業・研究協議会	国語	有
11月10日	越前市吉野小学校	研究授業・研究協議会	数学	
11月11日	福井県立羽水高等学校	授業見学・研究協議会	社会	有
11月11日	福井県立大野高等学校	授業見学・研究協議会	英語	
11月11日	坂井市立春江中学校	授業見学	理科	有
11月11日	永平寺町志比北小学校	研究授業・研究協議会	数学	
11月12日	福井県立羽水高等学校	授業見学・研究協議会	国語	有
11月12日	福井県立羽水高等学校	授業見学・研究協議会	理科	有
11月12日	永平寺町松岡小学校	研究授業・研究協議会	理科	

11月12日	永平寺町松岡小学校	研究授業・研究協議会	国語	有
11月12日	福井県立羽水高等学校	授業見学	数学	
11月13日	福井県立大野高等学校	授業見学・研究協議会	国語	有
11月14日	福井県立羽水高等学校	授業見学・研究協議会	英語	
11月14日	敦賀市敦賀南小学校	授業カンファレンス	国語	
11月14日	福井県立敦賀高等学校	授業見学・研究協議会	数学	
11月18日	福井市森田中学校	授業見学	理科	有
11月18日	大野市陽明中学校	授業見学・研究協議会	数学	
11月19日	福井県立武生東高等学校	授業見学・研究協議会	数学	
11月20日	永平寺町志比北小学校	研究授業・研究協議会	数学	
11月26日	福井市東藤島小学校	授業見学・研究協議会	国語	有
11月27日	越前市吉野小学校	研究授業・研究協議会	数学	
12月 1日	福井市明新小学校	授業見学	理科	有
12月 1日	永平寺町志比小学校	研究授業・研究協議会	国語	有
12月 1日	永平寺町志比北小学校	研究授業・研究協議会	数学	
12月 8日	福井市明倫中学校	授業見学	理科	有
12月 9日	福井市東藤島小学校	授業見学・研究協議会	国語	有
12月 4日	福井市麻生津小学校	授業見学	理科	有
12月 9日	永平寺町松岡中学校	授業見学	理科	有
12月15日	福井市明道中学校	授業見学	理科	有
1月19日	福井市森田中学校	授業見学・研究協議会	理科	有
1月19日	越前町荻野小学校	授業見学・研究協議会	国語	
1月22日	福井市麻生津小学校	授業見学・研究協議会	理科	有
1月26日	福井県立大野高等学校	授業見学・研究協議会	国語	有
1月28日	福井市明道中学校	授業見学・研究協議会	理科	有
1月29日	福井市進明中学校	授業見学・研究協議会	理科	有
1月29日	福井県立大野高等学校	授業見学・研究協議会	英語	
2月 2日	福井県立勝山高等学校	授業見学・研究協議会	英語	
2月 2日	越前町荻野小学校	授業見学・研究協議会	国語	有
2月 4日	永平寺町松岡小学校	研究授業・研究協議会	国語	有
2月 5日	永平寺町志比小学校	研究授業・研究協議会	国語	有
2月 9日	福井市明倫中学校	授業見学・研究協議会	理科	有
2月 9日	福井市明新小学校	授業見学・研究協議会	理科	有
2月 9日	永平寺町松岡中学校	授業見学・研究協議会	理科	有
2月 9日	福井県立勝山高等学校	授業見学・研究協議会	英語	
2月18日	永平寺町松岡小学校	研究授業・研究協議会	国語	有

（「平成26年度総合的な教師力向上のための調査研究事業実施報告書」より抜粋）

資料 1-1-21　「授業力向上のための支援事業」平成 26 年度成果報告会プログラム

授業力向上のための支援事業平成 26 年度成果報告会

プログラム

12:40～　受付

総合司会　教育地域科学部　松友一雄

13:00～　開会挨拶

岩井　善郎　研究・国際・COC 担当理事・副学長

13:05～　趣旨説明

事業実施委員長（教育地域科学部　教授　伊禮三之）

13:15～14:15　成果発表

1　サービスラーニングの実践とその学習効果について

① 明倫中学校におけるサービスラーニングの実際と学生への学習効果

数学教育領域　伊禮　三之

② 小学校の特別支援学級を対象とした支援学習―学部の専門授業における試み―

特別支援教育領域　石井バークマン麻子

2　CST（コア・サイエンス・ティーチャー）養成・支援事業の実際と成果

理科教育領域　淺原　雅浩

14:15～14:30　（休　憩）

14:30～15:50　成果発表

3　授業カンファレンスの実際と授業力向上支援の方法

国語教育領域　松友　一雄

学校教育専攻　大和　真希子

4　大学院協働実践プロジェクトとの連携について

① 協働実践研究プロジェクトの概要について

② 美術科における授業力向上のための支援活動と大学院教育の連携

芸術教育領域（美術）　湊　七雄

③ 家庭科における授業力向上支援活動と大学院・学部授業との連携

生活科学領域（家政）　荒井　紀子

5　学校連携・地域連携について

社会科における学校支援・地域支援の実際と学生・院生に対する学習効果

社会科教育領域　橋本　康弘

15:50～16:00　（休　憩）

16:00～16:25　意見交換・コメント

16:25～16:30　閉会の挨拶

教育学研究科長　中田　隆二

16:30　閉会

（事務局資料）

資料 1-1-22　「授業力向上支援事業」における教育委員会関係者等による評価（抜粋）

福井県教育庁高校教育課主任

学校現場の教員は，毎日の授業をこなし明日の授業の教材研究，そして生徒指導にととても忙しい日々を送っています。

指導主事の重要な業務としまして，学校訪問を実施していますが，現場の先生方は経験年数の長短に関わらず熱心に授業研究に取り組み授業実践を行っています。授業者の教員が一生懸命過ぎて，授業者が設定する目標と生徒の学習活動にずれがあるなと感じる授業に出会うこともあります。授業の後，指導方法や評価方法，学習の構成と成果等，生徒の様子を踏まえて研究協議を実施していますが，授業実践力の向上と生徒の理解力向上を目指そうとする真摯な姿勢を感じます。外部者に自分の授業を公開することは，何かと大変な部分もあるかとは思いますが，逆にいうと，自分の日々の授業に向き合う貴重な時間となり，その後の授業改善に役立つはずです。日々刻々とめまぐるしく変化する現代社会において，教育の重要性はますます高まりを見せています。時代の変化に対応する教育を目指

すためにも，本日，ご報告のあった学校のニーズに合った大学からの専門性の高い支援事業や，大学と学校との共同的な取組はとても重要だと改めて感じました。

福井県立羽水高等学校教諭

羽水高校は進学校なので，そういう観点で福井大学さんと昨年度から，協働して授業力向上を取り組んでおります。今日のたくさんの発表を聞いて，とりとめもない話なんですけど，かいつまんでお話します。まず一つなのですが，生徒の躓きというところで，生徒の躓き以上に高校の教員も躓いています。本当に躓いています。

そこで，教科教員が，公開授業，カンファランス等を通して悩みを，やっぱりオープンにしていく必要があります。僕の悩みは，みんなの悩みとして，組織で取り組んでいかないとなかなか解決しません。学校の文化としての継続性を持たせるためにも是非，カンファレンスをしていただきたいのです。ざっくばらんと話をさせていただければ非常にありがたいです。

それから，外部の人材を学校の中に入れるという総合的な学習の時間には，頻繁にやられていると思うのですが，教科のほうでは割と珍しいと思います。実際はわかりませんが，高校の文化と大学の文化って結構違います。そういうところで，相当すりあわせとか相互理解を勧めないと，ただやりっぱなしになりかねません。そういうところでの意思疎通とかルール作りをお互いに，特に高校の場合は事例は少ないので，進めていかなければいけないなと思います。

永平寺町教育委員会指導主事

指導主事として，各学校を訪問し，現場の若い先生方の授業を参観し，指導・助言をしているのですが，恥ずかしながら自分たちが大学を出てきたころより遙かに実践力をもっているなあと感じます。さて，永平寺町では「教師の指導力向上支援事業」を立ち上げました。本年度，福井大学と提携を結びまして，町内 10 校の小中学校中，６校が大学・大学院の先生方に学校に訪問いただき，ご指導を仰ぎました。

この事業で一番感謝を申し上げないといけないのは，指導主事の立場である私自身かなと思います。私の専門教科は社会科ですが，学校訪問時にはすべての教科の参観授業に対して指導・助言が求められます。指導主事として指導・助言のポイント等を書籍や研修などから学んでいるつもりですが，より的確な助言となるとなかなか難しいものです。

この点において，学校訪問時に同席させていただいた際には，大学の先生方から授業者の先生への指導・助言の観点・内容をメモしながら，次回の学校訪問時に活用させていただいています。指導主事の力量アップにも非常にありがたいものだと感謝申し上げます。

また，永平寺町は小規模校が多く，中学校では教科会，小学校では学年会ができないという現状の中で，多くの教員が教科指導等において悩みを抱えています。

この現状の中で，大学の先生方には，「授業作りの支援」を受けたり，授業改善に向けての「授業カンファレンス支援」を受けてきました。

昨年度，小中異校種間異動をした元同僚の先生から授業づくりについて悩み相談を受けました。しかし，本年度の学校訪問時には，自信をもって授業をされている姿が印象的でした。

これも大学の先生方による支援によって，教師の授業力が向上した成果ではないでしょうか。個人的な意見ですが，町内の教職員の約５割が 50 歳以上という現状です。若いフレッシュな学生さんの参観授業に関する意見を聞きたいと思います。できれば，大学の先生が来られるときだけでなく，学生の方が定期的に研究をかねて訪問していただけたらなあと思います。

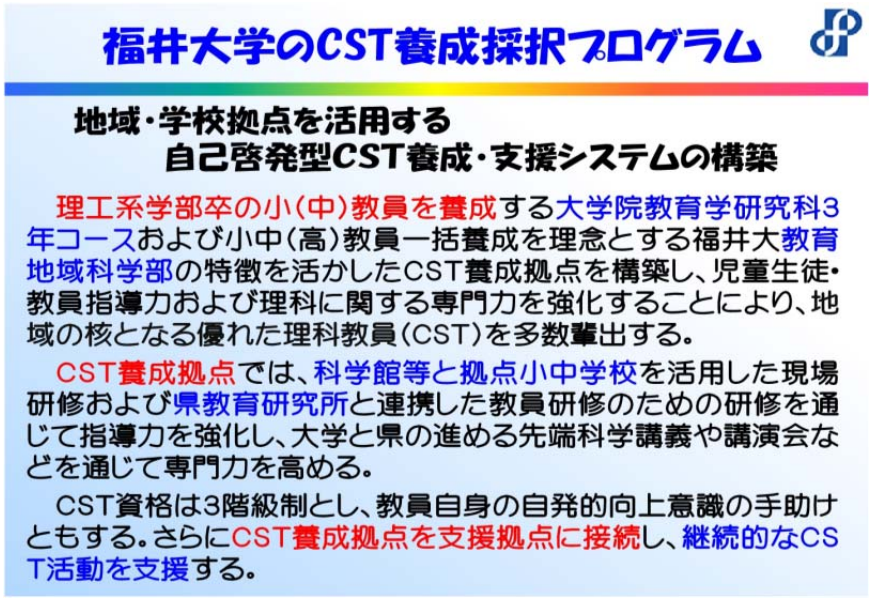
サービスラーニングについてですが，永平寺町内の特別支援教育支援員は，９校に 21 名派遣しております。教員免許を保有している若手支援員には T・T 講師の辞令も兼ねて発令しています。この事業は，学校側は学習支援を受けるメリットがありますし，大学院生は研究に関して，現場での実践であったり，現状把握ができるメリットがある素晴らしい事業だと思います。

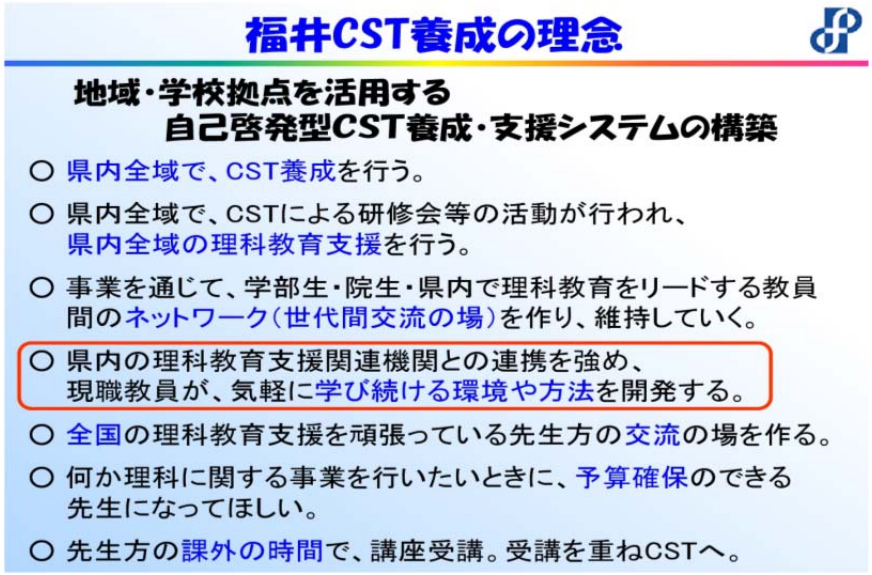
（「平成 26 年度総合的な教師力向上のための調査研究事業実施報告書」より抜粋）

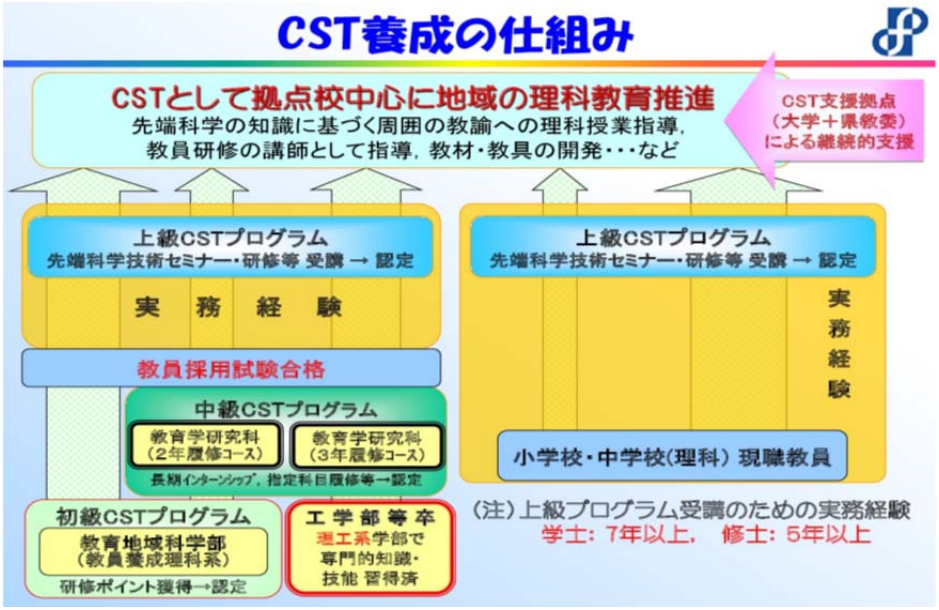
② 教育地域科学部及び教育学研究科修士課程においては，平成 21 年度から独立行政法人科学技術振興機構「理数系教員（コア・サイエンス・ティーチャー）養成拠点構築事業」に採択され，福井県教育委員会等と連携して事業を展開している（**資料 1-1-23**）。同事業を通じて，大学院生の実践的な学修への期待に応えるとともに（**資料 1-1-24**），科学館等，拠点小中学校，県教育研究所との連携により教員研修の場を提供し，地域と学校関係者からの期待に応え現職教員の教育力向上に貢献している（**資料 1-1-25**）。本取組は，大学機関別認証評価（平成 27 年度受審）において，福井大学の「主な優れた点」として評価された（**資料 1-1-26**）。

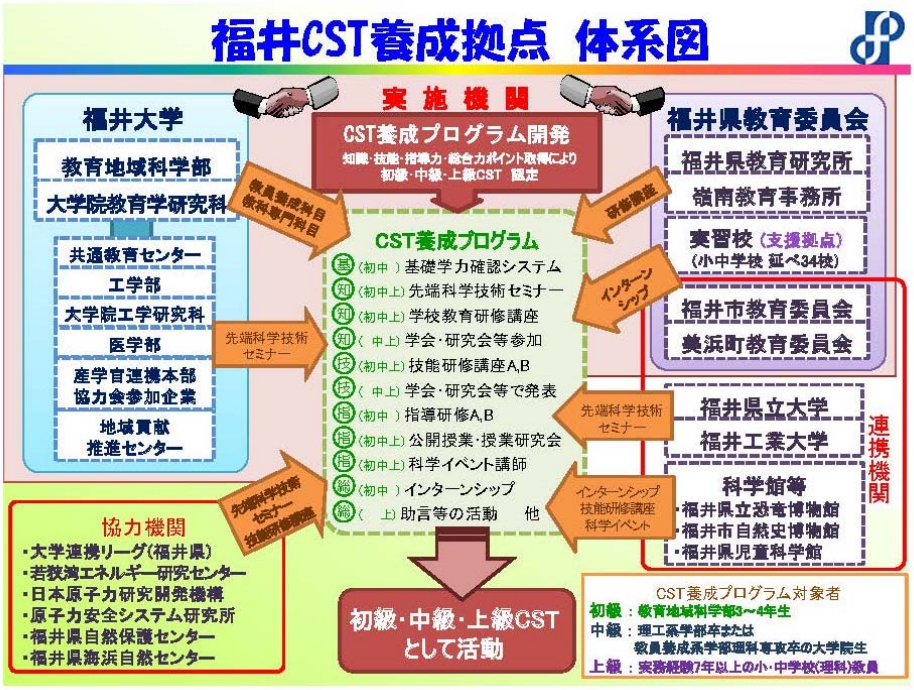
資料 1-1-23　コア・サイエンス・ティーチャー（CST）事業の概要

■平成 28 年 3 月までに上級 CST（実務経験 7 年以上の現職小中（理科）教員）22 名，中級 CST（大学院修了者）10 名，初級 CST（学部卒業者）23 名を輩出してきた。

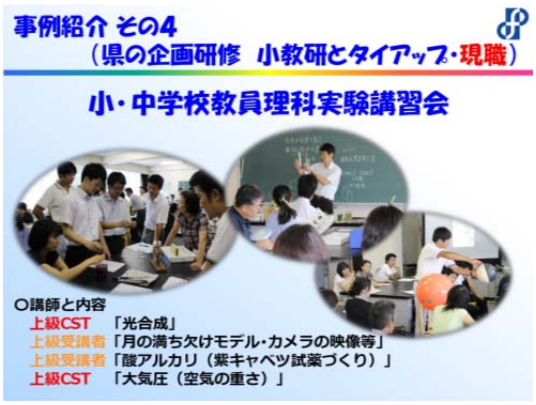


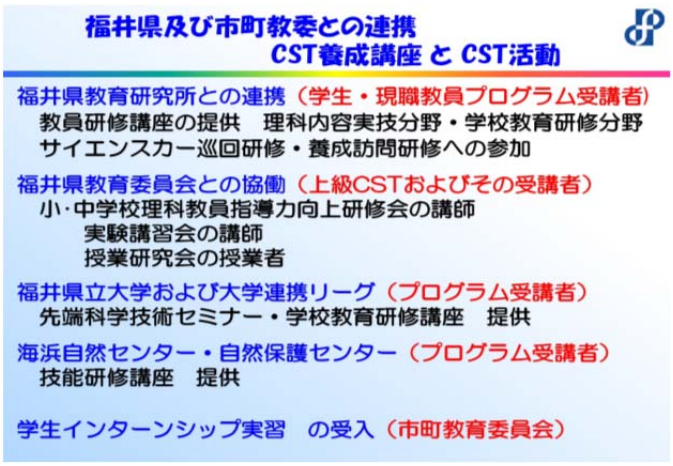



CST養成の仕組み
CSTとして拠点校中心に地域の理科教育推進
先端科学の知識に基づく周囲の教諭への理科授業指導，
教員研修の講師として指導，教材・教具の開発・・・など
CST支援拠点
（大学＋県教委）
による継続的支援
上級CSTプログラム
先端科学技術セミナー・研修等 受講 → 認定
実　務　経　験
教員採用試験合格
中級CSTプログラム
教育学研究科
（2年履修コース）
教育学研究科
（3年履修コース）
長期インターンシップ，指定科目履修等→認定
初級CSTプログラム
教育地域科学部
（教員養成理科系）
研修ポイント獲得→認定
工 学 部 等 卒
理工系学部で
専門的知識・
技能 習得済
上級CSTプログラム
先端科学技術セミナー・研修等 受講 → 認定
実務経験
小学校・中学校(理科) 現職教員
(注) 上級プログラム受講のための実務経験
学士：7年以上，　修士：5年以上


福井CST養成拠点 体系図
実施機関
福井大学
教育地域科学部
大学院教育学研究科
共通教育センター
工学部
大学院工学研究科
医学部
産学官連携本部
協力金参加企業
地域貢献
推進センター
CST養成プログラム開発
知識・技能・指導力・総合力ポイント取得により
初級・中級・上級CST 認定
教員養成科目
教科・専門科目
研修講座
CST養成プログラム
基 (初中) 基礎学力確認システム
知 (初中上) 先端科学技術セミナー
知 (初中上) 学校教育研修講座
知 (中上) 学会・研究会等参加
技 (初中上) 技能研修講座A,B
技 (中上) 学会・研究会等で発表
指 (初中) 指導研修A,B
指 (初中上) 公開授業・授業研究会
指 (初中上) 科学イベント講師
総 (初中) インターンシップ
総 (上) 助言等の活動　他
先端科学技術セミナー
インターンシップ
技能研修講座
科学イベント
福井県教育委員会
福井県教育研究所
嶺南教育事務所
実習校（支援拠点）
（小中学校 延べ34校）
福井市教育委員会
美浜町教育委員会
福井県立大学
福井工業大学
科学館等
・福井県立恐竜博物館
・福井市自然史博物館
・福井県児童科学館
連携機関
協力機関
・大学連携リーグ(福井県)
・若狭湾エネルギー研究センター
・日本原子力研究開発機構
・原子力安全システム研究所
・福井県自然保護センター
・福井県海浜自然センター
初級・中級・上級CST
として活動
CST養成プログラム対象者
初級：教育地域科学部3～4年生
中級：理工系学部卒または
教員養成系学部理科専攻卒の大学院生
上級：実務経験7年以上の小・中学校(理科)教員


事例紹介 その3 （拠点校・配置校の活動・現職）
授業公開・研究会
小学校6年
中学校1年
今回は、
放射線（能）の基礎知識・用語解説
霧箱・はかるくんによる実習
放射線の人体影響と身を守る方法
高レベル放射性廃棄物など


事例紹介 その4
（県の企画研修　小教研とタイアップ・現職）
小・中学校教員理科実験講習会
○講師と内容
上級CST　「光合成」
上級受講者「月の満ち欠けモデル・カメラの映像等」
上級受講者「酸アルカリ（紫キャベツ試薬づくり）」
上級CST　「大気圧（空気の重さ）」



（事務局資料）

資料 1-1-24　中級 CST 養成プログラムを受講した大学院生の感想（抜粋）

○大学院生 A（平成 27 年度修了認定）

セミナーでは水月湖やコウノトリなど福井で話題になっている事柄について詳しく知ることができた。技能研修では，主に自然を中心としたフィールドワークに関する技術を学び，福井の自然を活かした授業づくりを行えると感じた。また，学校インターンシップでは主に理科室の管理に関することや教材を用意する上での心得を習得した。理科室管理については，実験器具などは使いやすいように整理し実験準備が円滑に行えるように工夫すること，様々な掲示物や模型を理科室に置くようにすることで子どもたちの関心を理科に向けさせることなどを学んだ。

○大学院生 B（平成 25 年度修了認定）

昨今，理科嫌い・理科離れが指摘される中，それぞれの活動に参加した子供達は目の前で起こった現象に驚き，疑問を持ち，楽しそうな姿を見せていた。こういった反応を受けて，自身もその楽しさを再認識し，「楽しさ」を理科に興味を持つ，あるいは嫌いから好きに変わるきっかけにしていけるのではないかと考えることができた。

また，公立の小学校と中学校でのインターンシップを通して，教壇に立ち授業を行うことと，授業外の教師の役割を経験し，教職に就くということに対する考えを見つめ直した。インターンシップに臨むにあたり，さまざまな児童との一対一の対応と学級経営について課題を持った。加えて，インターンシップ，チームでの共同研究を通して，CST の先生方と関わることができた。多忙と言われる中で，勤務時間後に大学に集まり教材開発や研究を行う姿を見て，自己研鑽することの大切さと教師としての在り方を感じた。それと同時に理科が好きで，子供達によりよく，わかりやすく教えたいという意欲を感じた。

（平成 25 年度及び 27 年度中級 CST 養成プログラム修了認定申請書より抜粋）

資料 1-1-25　上級 CST 養成プログラムを受講した現場教員の感想（抜粋）

○越前市 P 中学校教諭（平成 27 年度修了認定）

福井大学で行われるセミナーなどで，大学の先生方や大学生の方々から様々なアドバイスをいただいたり，教材を紹介していただいたりしたことは，自分自身にとって大きな財産となった。私は教育関係でない学部を卒業したため，大学で理科教育について深く学ぶという経験に乏しかったこともあり，大学での学び直しのような経験をさせていただいたと感じている。

また，CST 受講をきっかけにして，「青少年のための科学の祭典」福井大会への出展や研究費の申請への応募，教職大学院のラウンドテーブルへの参加など，初めての経験をたくさんさせていただいた。これまでは興味はあったもののなかなか挑戦できずにいたが，大学の先生方や他の CST の方々にサポートしていただいたことで，足を踏み出すことができた。今後も継続的に挑戦していきたいと考えている。

○福井市Q中学校教諭（平成26年度修了認定）

上級CST養成プログラムを通して学んだことは数多くあるが，そのひとつが理科の専門的な知識や実験技能の修得である。大学の先生方をはじめ，さまざまな講師の方から専門の知識や最先端の科学を教えていただいたことはたいへん勉強になった。また，上級CSTの先生方からは，実験方法のコツや教材，指導法など，その先生の経験を交えた実践を学べたことは非常にありがたいことであった。このプログラムを通して，生徒に還元できる様々な内容を学ぶことができ，自分のスキルを向上させることができたと思う。このようにCST養成プログラムは自己研鑽の場であったことはいうまでもないが，私がこのプログラムを通してさらに得たものは，大学，教育研究所，博物館など多くの機関との連携やつながりであると思う。講座の講師の先生方や運営に携わっている方々，県の研究機関の方など，このプログラムを通して多くの人とのつながりをもつことができたことは，非常に意義のある大きなことであった。

○越前市R小学校教諭（平成24年度修了認定）

普段の教員生活の中で，「理科教育について研究していこう」とか「研究発表しよう」という意識は薄れてしまうが，自分のテーマを持ち，その内容を発表するまで研究を続けてきたのは，CST養成プログラムがあったためである。指導要領の改正にともなって，子どもたちの発表する能力や考える能力を高めていく大切さが強調されるようになった。我々教員も，時々は発表する場を持ち，自分の考えや行ってきたことを公の場で伝えようとすることで，子ども達に発表の大切さをより伝えることができるのではないかと思える。また，研究する喜びを伝えるためにも，時には我々教員が研究する姿勢を持つことも必要だと感じた。

そして，時々同じCST受講者や認定された先生方と交流する場を持つことで，研究について深めていったり，修正したりすることができ，しっかり受講しているモチベーションを絶やすことなく続けていけそうな気がした。これからも，他のCSTの方々と連携をして，地域の理科教育をリードしていけるとよいなと感じた。

○坂井市S小学校教諭（平成23年度修了認定）

CST養成プログラムでは，一般の研修では得ることができない専門的な知識や教養，技能を身につけたり多様な教育観を知ったりすることができた。また，実際に児童・生徒が興味をもつ素材や苦手としている内容を中心に作成された講座や研修などが含まれており，受講するなかで指導上の問題点や工夫点を見出すことができた。

CST同士の交流会では，小・中学校の理科の内容のつながりや指導方法，各学校の児童生徒の様子など多くの情報をえることができた。そうした情報を基に実際に教材を作成したり授業を行ったりするなど，このような交流会も効果的な実践に結びついた。

CSTプログラムには，若い大学生から現場で活躍する中核教員まで多くのメンバーが参加しているため，互いの知識や経験，理科教育に関する考え方などを気軽に意見交換する機会が多く，特に，若い世代の教育観や理科教育に関する熱い思いには大変刺激になり，自分自身の意識向上や授業改善にもつながっている。

（平成23～27年度上級CST養成プログラム修了認定申請書より抜粋）

資料1-1-26　「大学機関別認証評価」（平成27年度受審）評価報告書（抜粋）

Ⅰ．認証評価結果

福井大学は，大学設置基準をはじめ関係法令に適合し，大学評価・学位授与機構が定める大学評価基準を満たしている。

主な優れた点として，次のことが挙げられる。

（中略）

○教育地域科学部では，平成21年度科学技術振興機構「理数系教員（コア・サイエンス・ティーチャー（CST））養成拠点事業」に採択され，地域・学校拠点を活用する自己啓発型CST養成・支援システムの構築を図り，平成25年からは文部科学省大学COC事業の一貫としてさらに継続・推進している。

（「平成27年度実施大学機関別認証評価評価報告書」より抜粋）

③　教職開発専攻では，福井県教育委員会，福井県教育研究所，市町村教育委員会の担当者，拠点校・連携校の管理職で組織する「運営協議会」を設け，全関係者による院生の学修支援の充実，教育課程の点検・工夫・改善が実施されている（**資料 1-1-27**）。

資料 1-1-27　福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻運営協議会要項

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻運営協議会要項

平成 20 年 3 月 7 日　研究科委員会決定
直近改正　平成 21 年 3 月 6 日

（趣旨）

第１　この要項は，福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻運営協議会（以下「運営協議会」という。）について，必要な事項を定める。

（審議事項）

第２　運営協議会は，次の各号に掲げる事項を審議する。

(1)　教職開発専攻の運営に関する事項
(2)　教職開発専攻の事業計画に関する事項
(3)　その他必要な事項

（組織）

第３　運営協議会は，次の各号に掲げる委員をもって組織する。

(1)　教育学研究科長
(2)　教育担当の副学部長
(3)　附属学校園担当の副学部長
(4)　教職開発専攻長
(5)　教職開発専攻の専任教員（客員教員を含む。）
(6)　福井県教育委員会関係者　　若干名
(7)　福井県教育研究所長
(8)　福井県教育庁嶺南教育事務所長
(9)　福井県特別支援教育センター所長
(10)　関係市町教育委員会教育長
(11)　拠点校・連携校の校園長

（委員長）

第４　運営協議会に委員長を置き，教育学研究科長をもって充てる。

２　委員長に事故のあるときは，あらかじめ委員長が指名した委員がその職務を代行する。

（会議）

第５　委員長は，運営協議会を招集し，その議長となる。

２　運営協議会は，委員の 3 分の 2 以上の出席がなければ会議を開くことができない。

（委員以外の出席）

第６　委員長は，必要と認めるときは，運営協議会に委員以外の者の出席を求めることができる。

（庶務）

第７　協議会の庶務は，総務部教育地域科学部支援室において処理する。

附　則

この要項は，平成 20 年 4 月 1 日から施行する。

附　則

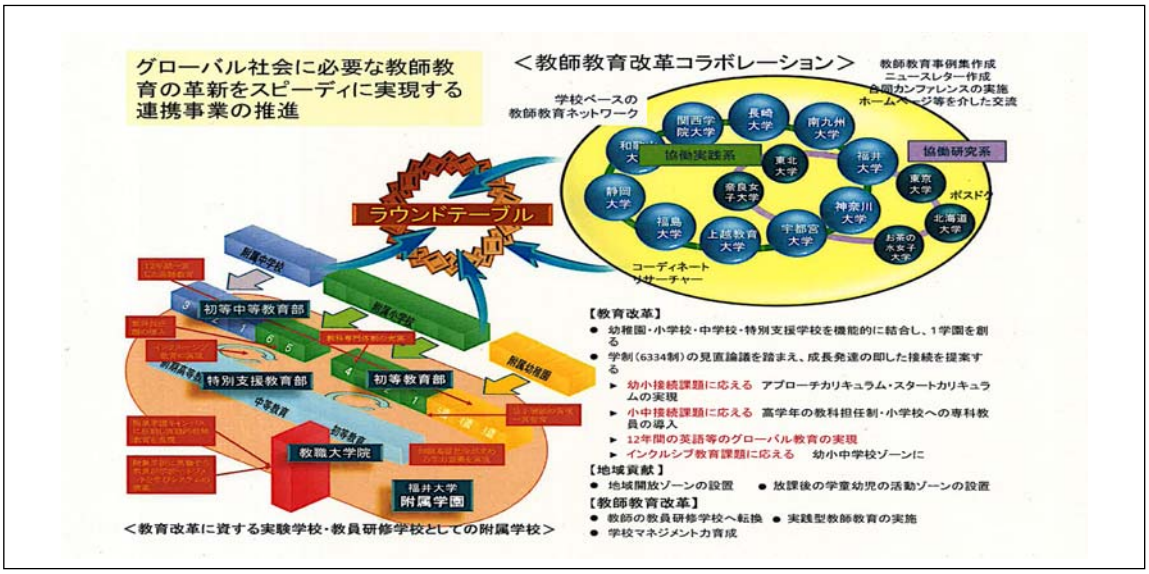
この要項は，平成 21 年 3 月 6 日から施行する。

（事務局資料）

【他大学等との協働連携体制】

教職開発専攻においては，平成 25 年度に全国 14 大学との連携協働機構「教師教育改革コラボレーション」を組織した（**資料 1-1-28**）。この取組は平成 25 年度特別経費に採択され，平成 26 年度からは特別経費：国立大学機能強化に引き継がれ，教育改革の実践として極めて高い評価を得ている。また，平成 23 年度から海外大学等とのベンチマーキングと研究交流を推進し，本専攻の教員養成と教師教育の国際化を進めている（**資料 1-1-29**）。

資料 1-1-28 「教師教育改革コラボレーション」の概要



（事務局資料）

資料 1-1-29　教職開発専攻海外ベンチマーキング・調査

時期	訪問先	訪問者数	目的
平成 23 年 2 月	フィンランド ヘルシンキ大学	教員６人	ヘルシンキ大学及び関連施設でのフィンランドにおける修士課程レベルの教員養成制度調査と本学教職大学院の実践・研究報告
平成 24 年 9 月	米国 ワシントン大学	教員４人 事務職員１人	ワシントン大学教育学研究科におけるベンチマーキング（教育課程調査，研究交流），ワシントン大学パートナースクール訪問
平成 25 年 3 月	中国 上海師範大学	教員５人 院生７人	上海師範大学の教員養成訪問視察と教員・院生の交流
平成 25 年 10 月	中国 上海師範大学	教員２人	上海師範大学並びに附属学校との教師教育改革並びに小中学校等での学力向上の取組についての交流と視察
平成 26 年 3 月	中国 上海師範大学	教員５人	上海師範大学との交流協定を踏まえ，訪問調査及び教師教育の研究交流，上海師範大学附属学校と公立学校及び教育委員会への訪問調査
平成 26 年 9 月	米国 ボストン・カレッジ ハーバード大学 コロンビア大学	教員５人	Ed. D. 及び Ed. L. D. の教育課程及び学位論文研究に関する調査
平成 26 年 12 月	中国 上海師範大学	教員４人 学校教員１人 学部生５人	上海師範大学との学術交流のための打ち合わせ，及び附属第一小学校における学生による美術の授業実践
平成 27 年 9 月	シンガポール 国立教育研究所	教員７人 院生１人	福井大学教職大学院とシンガポール国立教育研究所との研究交流及び NIE パートナースクールの視察，NIE 現職教育及び教員養成の演習視察

（事務局資料）

●多様な教員の確保の状況とその効果

本研究科は男女共同参画の実現に努めており，修士課程の女性教員数の割合は，平成22年度の22.3%に対して，平成27年度は26.3%に増加した（**資料 1-1-30**）。教職開発専攻においては，専攻の理念に則った課程担当教員資格基準を策定し，実践研究を推進可能な教員を確保するとともに，次代の実践的研究者の育成も果たしている（**資料 1-1-31**）。

資料 1-1-30　修士課程を担当する女性教員の数と割合の推移

年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度
教員数（人）	21	21	22	21	23	25
大学院（修士課程）を担当する全教員に占める割合（%）	22.3	22.3	23.9	22.8	25.0	26.3

※各年度に示す数は，４月１日現在の数である
※※教職大学院との兼担の者や特任教員も含む

（事務局資料）

資料 1-1-31　教職大学院の課程担当教員資格基準

福井大学大学院教育学研究科教職大学院の課程担当教員資格

１．実務家教員

(1)授業担当教員

1) 実務経験歴
教育関連機関や専門職養成機関等における実務経験(概ね15年以上)を有すること。

2) 教育実践の経験・実績等
次の各号のうち２つ以上の要件に該当すること。
イ 教職修士もしくは修士を修了していること。
ロ 優れた教育実践の実績を有すること。
ハ 学校での協働研究の運営等の実績を有すること。
ニ 教員研修等の企画運営に携わった経験を有すること。
ホ 教育委員会の指導主事等の経験を有すること。

3) 教育実践の記録・実践研究等
教育実践や学校での協働研究等の取り組みについての報告書・実践記録・実践研究等の業績を有すること。

(2)授業協働担当教員

1) 実務経験歴
教育関連機関や専門職養成機関等における実務経験を有すること。

2) 教育実践の経験・実績等
次の各号のうち２つ以上の要件に該当すること。
イ 教職修士もしくは修士を修了していること。
ロ 優れた教育実践の実績を有すること。
ハ 学校での協働研究の運営等の実績を有すること。
ニ 教員研修等の企画運営に携わった経験を有すること。
ホ 教育委員会の指導主事等の経験を有すること。

3) 教育実践の記録・実践研究等
教育実践や学校での協働研究等の取り組みについての報告書・実践記録・実践研究等の業績を有することが望ましい。

２．研究者教員

(1)授業担当教員

1) 教育・研究歴

大学・研究機関における教育・研究歴，もしくは教育関連機関における実務経験を有すること。

2) 教育・研究業績等

イ 大学院において博士課程を修了，もしくは相当の教育・研究業績を有すること。

ロ 担当する専門分野に関する研究業績を相当数有すること。

ハ 上記の研究業績のうち１編以上は最近５年間の間に公表されたものであること。

なお，その中に関係する学会の査読付き論文を含むこと，あるいは，博士の学位を有することが望ましい。

3) 教育実践の事例研究・学校との協働研究

イ 教育実践・教師教育等に関する事例研究の業績を有すること。

ロ 学校との協働研究の実績を有すること。

(2)授業協働担当教員

1) 教育・研究歴

大学・研究機関における教育・研究歴，もしくは教育関連機関における実務経験を有すること。

2) 教育・研究業績等

次の各号のうち２つ以上の要件に該当すること。

イ 大学院において博士課程を修了，もしくは相当の教育・研究業績を有すること。

ロ 担当する専門分野に関する研究業績を相当数有すること。

ハ 教育実践・教師教育等に関する研究の業績を有すること。

ニ 学校との協働研究の実績を有すること。

（事務局資料）

●入学者選抜方法の工夫とその効果

本研究科の学生定員と入学者数は下記の通りである（**資料 1-1-32**）。修士課程では，充足率の適正化および多様な学生の確保を図るため，平成 25 年度には学校教育専攻で教育職員免許状の取得を予定しない者は専門科目 A で「地域科学」を選択できるよう変更した。また，社会人を積極的に受入れるために３年以上の教職経験を有する志願者に対しては学力検査科目の一部代替措置を認めている。西安外国語大学と大学間協定を締結し，教科教育専攻国語教育領域では特定大学推薦外国人留学生特別選抜制度を実施し，毎年コンスタントに受験者を確保し，入学している（**資料 1-1-33**）。

また，修士課程で実施していた３年履修による「教員免許取得プログラム」（**P2-42 後掲資料 1-2-9**）を，受験者のニーズに応え，平成 27 年度からは教職開発専攻にも拡大した（**資料 1-1-34**）。教職開発専攻ではさらに，独自の新たな奨学金制度を創設し，入学に際しての経済的障壁を緩和した（**資料 1-1-35**）。

資料 1-1-32　学生定員と入学者数

（人）

専攻名	入学定員	入学者数						
		平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度	計
学校教育専攻	12	10	6	7	10	7	1	41
教科教育専攻	25	29	22	30	21	20	29	151
教職開発専攻	30	29	32	30	33	27	34	185

※教育学研究科学校教育専攻においては定員未充足の状態が続いているが，平成 28 年度からは，教科教育専攻を学校教育専攻に一元化すると共に，学校教育専攻の一部の領域と定員を教職大学院に移行するなどの改組を実施しており，魅力ある進学先となり，定員を充足できるよう，学内の学生はもちろん，県内他大学にも訪問説明するなど，広報に努めているところである。

（事務局資料）

資料 1-1-33　特定大学推薦外国人留学生特別選抜を利用した平成 22 年以降の受験者数と入学者数

（人）

年度	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
受験者数	1	2	2	2	2	2
入学者数	1	2	2	2	2	2

（事務局資料）

資料 1-1-34　教職開発専攻に導入した小学校教員免許取得プログラム

明日の小学校の先生をめざすみなさんに

小学校での実地経験を重ねながら、教師としての実践力を培う新しいプログラム

福井大学教職大学院
小学校教員免許取得プログラム

学校制度の改革が進む中で、新しい時代の小学校を担う、若い実践力ある先生が求められています。
福井大学教職大学院では、学校での１年間のインターンシップと実践研究のサイクルを中心するカリキュラムによって、教職大学院の実践力形成モデルを実現してきました。新たに、このインターンシップを活かし、専門職免許（修士）と合わせて小学校教諭一種免許を取得することができる免許取得プログラムを平成 27 年度より開始することになりました。複数年にわたる実地経験・実地研究を軸に実践研究を重ね、小学校教員としての総合的な実践力を培う、新しいプログラムです。

特色

○実地経験・実地研究
毎週３日、小学校における学習に立ち会いながら、教師としての仕事の総体を学びます。

○経験の振り返り・省察
経験したこと、取り組んだことを毎週、大学院でのカンファレンスで振り返り、問い進めます。

○実践経験ゆたかなメンバーのコミュニティ
教職大学院で学ぶ現職の先生、豊かな実践経験を持つ実践教員、研究者教員とともに学びます。

○実践と理論の往還
教科・生徒指導、学校運営をはじめ、教師の仕事の総体を、実践と理論の往還を通して学びます。

○このプログラムは学部段階において中学校等の教育職員免許を取得していることを前提としています。（既免許の条件については、あらかじめお問い合わせ下さい。）

○2 年間の授業料で３年かけてゆっくり研究できる長期履修制度、教職大学院独自の奨学金制度等によって、大学院での教師への学びを支援します。

（事務局資料）

資料 1-1-35　「次世代教育創生資金」案内



（事務局資料）

●教員の教育力の向上のための体制の整備とその効果

教育学研究科においては，FD 活動として学生支援やアクティブラーニング等についての研修会を年間 15 回程度開催している（**資料 1-1-36**）。また，「教育内容・教材開発研究会」を継続的に実施することで，教員の教育力の向上のための体制を整備している（**資料 1-1-37～39**）。

資料 1-1-36　FD 活動の年間実施回数とテーマ例

年度	回数	テーマ例
平成 22 年度	15	「心理相談から見える問題点と対応」 「福井大学教育地域科学部の地域参画型授業・教育プログラム～今日までそして明日から～」
平成 23 年度	16	「大学におけるリメディアル教育の取り組み」 「メンタルヘルス研修会－2010 年度集計を中心に－」 「情報セキュリティ講習会」
平成 24 年度	19	「大学生への支援について（対応のヒント）－メンタルヘルス（気分障害）編－」 「学生の能動的な学びの支援～学部学生・教員全員に授業科目について語り合い，学生に養う力について考える～」
平成 25 年度	15	「発達障害（傾向）の大学生への支援について－気づきとヒント－」
平成 26 年度	14	「文京キャンパスの学生支援の現状と課題」
平成 27 年度	13	「大学における合理的配慮」

※回数は全学 FD を除く　　（事務局資料）

資料 1-1-37　教育学研究科「教育内容・教材開発研究会」のテーマと年度毎の実施回数

年度	回数	研究会のテーマ
平成 22 年度	7	「教育を支える学校建築とは？－福井市至民中学校の学校づくりから考える，教材としての学校建築－」 「初等教育における電磁気学」 「数学と数学教育」 「環境保全のための木炭の利用」 「教員と学芸員のスクラム研究会『シーがｅるたアートスクール』－」 「スタンダードと評価のパラダイム」 「学生の戦争知識」
平成 23 年度	7	「大学におけるリメディアル教育の取り組み」 「自然水での『泳ぎ』を起点とする教材開発」 「子どもの空間人認知と集団形成の特性に関する調査研究－遊び環境と保育環境の建築計画に関する基礎的研究－」 「無菌術からの展開－寒天で考える－」 「授業実践における教師のフロー体験に内在する実践的意義の探求」 「ソフトコンピューティングと地域・環境データの分析」 「歌唱教育の意義，そして教師に求められる技術と心－声楽教育，不遇と苦難の中で－」
平成 24 年度	7	「子どもの造形作品の見方」 「身近なものを使ってマグマを作る」 「以前，学生の就職状況は良かった－数学教師の回想－」 「『社会参加・問題解決型授業』を通した市民性育成に関する研究－2011・2012 年度協働実践研究プロジェクトでの取り組みから」 「音楽の創作現場について考える」 「マイノリティの歴史から見る『アメリカ』」 「自閉症とは？コミュニケーションとは？日本語とは？-それらをつなぐもの-」

平成 25 年度	7	「菜の花の自然史」 「『生存』を軸に読み解く日本中・近世史」 「ひらめきで作る Art レシピ」 「スウェーデンにおける消費者市民（コンシューマー・シティズンシップ）を育む教育」 「医療的ケア場面における重度・重複障碍者への教育的対応に関する実践研究」 「発達障害の教育・心理・医療・福祉」 「福沢諭吉を批判的に見ることへの私のこだわり」
平成 26 年度	7	「生涯現役のスゝメ」 「授業実践の測定と記述」 「教材としてのポピュラー音楽－『異質な他者』から学ぶもの－」 「『歌う力』をつけよう」 「省略現象からみる英語の仕組み」 「教師の主体性や優しさって何だろう」 「ストレス再考：若干の昔話とともに」
平成 27 年度	6	「学習者を支える教師のコミュニケーション－授業における『インターベンション』の効果について」 「パブリック・アーケオロジーと博物館」 「ディープ・アクティブラーニングについて考える－深い理解を目指した理科授業作りを中心に－」 「二つの『ドイツ帝国』とその文化背景」 「言語学（英語学）と教育との接点」 「近代日本の教育の歩みと窓ぎわのトットちゃん」

（事務局資料）

資料 1-1-38　教育学研究科教育内容・教材開発研究会主催シンポジウム・フォーラムのテーマ

年度	シンポジウムのテーマ
平成 22 年度	言語活動の充実にどのように取り組むか
平成 23 年度	外部専門家との連携による授業・教材開発の在り方と課題－「法教育」を事例にして－
平成 24 年度	小学校での外国語活動における効果的で魅力的なインプットとは
平成 25 年度	数学的リテラシーと日本の数学教育
平成 26 年度	科学を伝える
平成 27 年度	これからの学びのカタチ～ICT を活用した教育実践の可能性～

（事務局資料）

資料 1-1-39　教育内容・教材開発研究会の参加者の感想

「学習者を支える教師のコミュニケーションー授業における『インターベンション』の効果について」に参加しての感想（平成 27 年度）

普段は，中・高等学校教員を対象とした社会科（地歴科・公民科）授業設計の在り方について研究しているが，中等教育における社会科（地歴科・公民科）の授業設計では，まず第１に，１（複数）時間の授業に関して，社会科（地歴科・公民科）の目標に照らして，どのような授業設計をするのか（「概念習得型」「合理的意思決定型」「合意形成型」・・・）が問われる。その際，考慮しなければならないのは，そのテーマに係わる教育内容をどう選択・整理していくのか，構造図で示す場合もあるし，教育内容の「質」も問われる。今回の研究会で取り上げられたのは，教師による授業場面での「働きかけ」であり，教師はどのように児童・生徒に「インターベンション」すれば良いのか，といった内容であった。授業に入る前の「手立て」への着眼もそうだが，この間，社会科教育学研究では，ほとんど注目されてこなかった研究領域であり，新鮮に感じた。この研究領域は，どうしても「how to」モノになりやすく，「通教科的」になりやすい。内容固有性の高い社会科教育学研究では，「研究になりにくい」と考えられていた領域であるが，団塊の世代の退職が急ピッチに進んでおり，学校現場の教員の「若年化」が進む中で，「how to」モノの（教育）研究も必要なのかもしれないと感じた。また，社会科の目標に照らした「インターベンション」の在り方も検討していく必要があると感じた。普段の講義の改善への示唆も与えて頂いた気がしている。

（教育内容・教材開発研究会参加者へのインタビューより抜粋）

●教育プログラムの質的保証・質的向上のための工夫とその効果

【カリキュラム・ポリシー，ディプロマ・ポリシー】

本研究科のカリキュラム・ポリシーおよびディプロマ・ポリシーを第２期中に策定・周知し，教育プログラムの質的保証・質的向上を図った(**資料 1-1-40，41**)

資料 1-1-40　教育学研究科のカリキュラム・ポリシー

専　攻	カリキュラム・ポリシー
学校教育専攻	１．教育諸科学を学ぶことを通して，自らの教育実践の意味を理解する理論的な枠組みを獲得し，新たな実践を創造する力量を形成させる。 ２．複合科学領域としての特別支援教育を学ぶことを通して，特別なニーズのある児童・生徒の適切な理解，および包括的な教育的支援の力量を形成させる。 ３．地域科学を学ぶことにより，直面する課題を適切に把握する方法論を習得し，コミュニティの学習や活動を学ぶことを通して，コーディネートする力量を形成させる。 ４．「協働実践研究プロジェクト」においては，学校内外の人々と協力・連携しながら，学校と地域の諸課題を実践的に研究し，複数の専門領域の視点を統合することによって，課題に適切に対応する資質と能力を向上させる。 ５．修士論文および課題研究を通して，共通科目および専門科目等で学習したことを統合し，生涯にわたって専門性を深めるための土台を築かせる。
教科教育専攻	１．領域別専門科目（教科に関する科目）の履修を通して，高い教科専門性を身につけさせる。 ２．教科教育研究の履修を通して，理論に基づいた確かな教育実践力を身につけさせる。 ３．「協働実践研究プロジェクト」を通して，学校や地域社会と連携しながら課題に適切に対応する能力と教育開発力を向上させる。 ４．課題研究の履修並びに修士論文等の作成を通して，探究的な研究態度と柔軟な思考力を身につけさせる。
教職開発専攻	１．「理論と実践の融合」を実現するために，学校を拠点とする「協働実践研究プロジェクト」を中心に教育課程を編成し実施する。 ２．教職専門性開発を生涯にわたって支えるために，世代継承生成サイクルの視点から，教職専門性の４つの資質能力を培う教育課程を編成し実施する。 ３．学び合うコミュニティに公教育改革の支援システムを融合させた教育課程を編成し実施する。

（事務局資料）

資料 1-1-41　教育学研究科のディプロマ・ポリシー

専　攻	ディプロマ・ポリシー
学校教育専攻	１．本専攻の目的に沿って設定された授業科目を履修し，基準となる単位数を修得することおよび修士論文を作成・提出することが，修士の学位授与における必要要件である。 ２．学校とそれを取り巻く地域についての深い理解をベースに，以下の力量を培うことを求める。 ①新たな学校教育の課題に対応する教職専門の資質と能力 ②多様なニーズに応える学習支援を行う資質と能力 ③学校とそれを支える地域コミュニティづくりを推進する資質と能力
教科教育専攻	１．本専攻の目的に沿って設定された授業科目を履修し，基準となる単位数を修得し，修士論文等を作成・提出することが，修士の学位授与の必要要件である。 ２．本専攻の目的に沿って，修了までに以下の知識・力量を身につけることを求める。 ①専門教科に関する学問上並びに教育実践上の専門的知識 ②教育実践に関わる理論に基づいた確かな教科教育実践力 ③専門的知識と実践力を基盤とする探究的研究能力 ④学校での協働的な探究を実現するための社会性と教育開発力
教職開発専攻	１．本専攻が求める教職専門性の４つの資質能力を身につけ，基準となる単位数を修得し，「長期実践研究報告」を作成してラウンドテーブルにおいて公表し評価を受けることが，教職修士（専門職）の学位授与の必要要件である。 ２．本専攻の目的に沿って，修了までに以下の資質能力を身につけることを求める。 ① 子どもと教師の学習と成長を支えるファシリテーター・コーディネーターとしての実践力 ② 学び合う教師の協働組織とその改革のマネジメント力 ③ 教育実践の質を不断に高め発展させていく省察・研究能力 ④ 公教育を担う専門職としての使命感と責任感

（事務局資料）

【外部評価】

修士課程では平成 19 年度外部評価結果を改善に活かし，第２期には「協働実践研究プロジェクト」の充実や「授業力向上支援事業」の発足等に取組み，平成 25 年度外部評価で高く評価された（**資料 1-1-42，43**）。教職開発専攻においては，平成 27 年度に教職大学院等認証評価を受審し，長所として特記すべき評価ポイントとともに，一般財団法人教員養成評価機構の定める教職大学院評価基準に適合していると認定された（**資料 1-1-44**）。

資料 1-1-42　福井大学教育地域科学部・教育学研究科外部評価実施要項

福井大学教育地域科学部・教育学研究科外部評価実施要項

平成 19 年 4 月 4 日教授会決定
直近改正　平成 24 年 12 月 21 日

（趣旨）

第１　この要項は，本学部及び研究科を対照として実施する外部評価（以下「外部評価」という。）に関し必要な事項を定める。

（外部評価委員会）

第２　本学部及び研究科に福井大学教育地域科学部・教育学研究か外部評価委員会（以下「外部氷塊委員会」という）を置く。

２　外部評価委員会は，学外有識者若干名をもって組織する。

３　委員は，教授会の議に基づき，学部長が委嘱する。

４　委員の任期は，当該年度の末日までとする。

５　外部評価委員会に委員長を置く。

６　委員長は，委員の互選による。

（外部評価準備委員会）

第３　本学部及び研究科に，外部評価の実施に関する必要な事項を検討するため，福井大学教育地域科学部・教育学研究科外部評価準備委員会（以下「準備委員会」という。）を置く。

２　準備委員会は，次の各号に掲げる委員をもって組織する。

⑴学部選出の評議員　１名

⑵附属学校担当の副学部長

⑶福井大学教育地域科学部及び大学院教育学研究科評価委員会（以下「評価委員会」という。）委員（ただし，学部長及び前各号の委員以外の評議員，副学部長を除く。）

⑷本学部及び研究科の教員　５名

３　前項第１号及び第４号の委員は，学部長が指名する。

４　第２項第４号の委員の任期は，１年とし，再任を妨げない。

５　準備委員会に委員長を置き，第２項第１号の委員をもって充てる。

６　準備委員会に副委員長を置き，委員の中から学部長が指名する。

（外部評価実行委員会）

第４　本学部及び研究会に，準備委員会が検討した事項に基づき外部評価を円滑に実施するため，福井大学教育地域科学部・教育学研究科外部評価実行委員会（以下，「実行委員会」という。）を置く。

２　実行委員会は，次の各号に掲げる委員をもって組織する。

⑴評価委員会委員及び第３第２項第４号の委員

⑵前号の委員が所属する講座（発達科学講座には附属教育実践総合センターを含む）以外の講座から推薦された教員　各１名

⑶前各号に科かが得る者以外の教育地域科学部の教職員　若干名

３　前項第３号の委員は，学部長が指名する。

４　第２項第２号及び第３号の委員の任期は，１年とし，再任を妨げない。

５　実行委員会に委員長を置き，学部長をもって充てる。

附則（平成 19 年 4 月 4 日改正）

１　この要項は，平成 19 年 4 月 4 日から施行する。

２　この要項の施行後，最初に指名される第３第２項第３号の委員の任期は，第３第４項の規定にかかわらず，平成 20 年 3 月 31 日までとする。

３　この要項の施行後，最初に指名される第４第２項第２号の委員の任期は，第４第３項の規定にかかわらず，平成 20 年 3 月 31 日までとする。

附則（平成 24 年 12 月 21 日改正）

この要項は，平成 25 年 4 月 1 日から施行する。

（事務局資料）

資料 1-1-43　外部評価委員の教育学研究科（修士課程）に関する意見（抜粋）

（平成 19 年度受審）

■上野委員

○本学部は，大学院教育学研究科の設置が比較的遅かったこともあり，当初より「教育における理論と実践の総合化」をめざしたことが，今日の社会的要請に応える態勢を構築しやすくしている。

○「教育の今日的諸問題の解決に寄与できる」「専門職としての教員の養成」，特に「現職教員等の再教育」といった社会的要請に応えることを明確に掲げるとともに，「教育に係わる学問・芸術の諸分野について高度な識見と実践力」を持つという教育学研究科の基本を押さえた目的規定は妥当である。

○その場合，「専門諸分野の成果と，教育科学と連携した教科教育の実践研究とを有機的に結合させた教育課程を編成」の具体化が重要である。

○教育課程を含んで「教師の専門性を育てる実践と研究の融合」を理念として掲げたこと，また，教育学・心理学・教科教育学が共同して進める「教育実践研究」を明示したことの意味は大きい。

（外部評価報告書（平成 20 年６月）より抜粋）

（平成 25 年度受審）

■松田委員

教育学研究科全体の理念として，21 世紀の学校教育改革を担うことを基本に，学校教育専攻では，「学校と地域を結ぶ実践者」の養成を掲げ，教科教育専攻では，「カリキュラム・授業を開発する教師」の養成を掲げて，両専攻の特徴に基づく実践的教育がなされているのが特徴である。両専攻においてカリキュラム及びディプロマの各ポリシーが明確に定められ，育成すべき能力の達成が教育課程として体系化されており，評価できる。さらに「協働実践研究プロジェクト」が両専攻に共通な必修科目（８単位）として配置されているのも興味深い。また，このプロジェクトを基盤に科学研究費補助金を獲得するなど，研究の成果も顕著である

■小和田委員

修士課程の２つの専攻（学校教育専攻と教科教育専攻）に「協働実践研究プロジェクト」を設け，学校と地域・関係機関の連携で解決していくべき諸課題や PISA 型探究と体験型カリキュラム開発に取り組んでいることは，将来のリーダー養成の観点からもよい取り組みである。また，教員が地域産業界のことをよく知ることも生徒の進路指導等に必要なことなので，そういう観点から２つの専攻の利点を互いに活用して欲しい。

（外部評価報告書（平成 26 年３月）より抜粋）

（事務局資料）

資料 1-1-44　平成 27 年度教職大学院等認証評価の評価結果

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻

認証評価結果

福井大学教職大学院の評価ポイント

・「学校拠点方式」による協働な実践研究及び実習が行われ、教職大学院と学校等現場双方が成長する仕組み（学びのコミュニティ）がつくられている。

・「協働実践研究プロジェクト」を中核に据え、実践と理論を融合した教育課程を実現している。

・実習科目は、大学院と学校が綿密に連携し、学生は１年間を通じ学校現場で実践・省察・記録化に取り組む。大学院に場所を移しての定期的なカンファレンスにより省察・検討・理論的研究を積み重ね、「長期実践研究報告」に結実させている。

・入学試験は、教職大学院の学びそのものと連動するような配慮がされている。審査基準が明確で特定の校種の受験者が有利にならないような配慮がなされている。

・協働的・実践的な学びと省察・実践の改善や展開を可能にする設備・備品が整備され、学生の豊かな学びにつながっている。

・従来からの奨学金に加え新たな奨学金制度の創設により、学生への経済的支援が手厚くなされている。

・幅広い世代の多彩なマンパワーが確保され、若手とベテラン、研究者教員と実務家教員が互いに刺激し合い学び合うとともに、教員の授業負担等に関して配慮されている。

・毎月発行の「教職大学院ニュースレター」で在学生、修了生の実践の発表、省察・成果の共有・発信が積極的に行われている。

・「運営協議会」で協議し教育委員会等と情報交換が行われ、年２回開催される実践研究交流集会、追跡調査などの方法により修了生の教育界での活躍、修了後の学校等への還元実績などを把握、検証しており、地元あるいはさらに広域の学校、教育委員会等から高い評価を得ていることが十分に確認できる。

平成２８年３月２８日

一般財団法人教員養成評価機構

Ⅰ　認証評価結果
福井大学教職大学院（教育学研究科教職開発専攻）は、教員養成評価機構の教職大学院評価基準に適合していると認定する。
認定の期間は、平成 33 年３月 31 日までとする。

（「福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻認証評価結果」より抜粋）

（水準）　期待される水準を上回る

（判断理由）

①「協働実践研究プロジェクト」において，教科間の協働や学校等での実践的教育研究をより充実させ，大学院生の確かな教育実践力を育成した[1)]。その成果として公表された学術論文等は第２期において増加している[2)]。外部評価において高い評価を受けている[3)]。

[1)] 資料 1-1-9	：協働実践研究プロジェクトの概要　P2-9
資料 1-1-12	：協働実践研究プロジェクトを受講した大学院生の感想　P2-11
資料 1-1-15	：協働実践研究プロジェクトにおける教育科学・教科専門・教科教育教員の連携例（平成 27 年度）　P2-13
[2)] 資料 1-1-13	：協働実践研究プロジェクトの研究成果をまとめた『福井大学教育実践研究』に掲載された論文の例　P2-12
資料 2-1-13	：大学院生の論文の掲載先と数　P2-59
[3)] 資料 1-1-43	：外部評価委員の教育学研究科（修士課程）に関する意見（抜粋）　P2-34

②　平成 25 年度に新たに立ち上げた「授業力向上支援事業」により，授業支援等を通じた地域の学校との協働と大学院生の実践的学修を推進し[4)]，教育委員会関係者や現場教諭から高い支持を得ている[5)]。平成 26 年度には文部科学省委託事業「総合的な教師力向上のための調査研究事業」に選定された。

[4)] 資料 1-1-17	：授業力向上支援事業の概要　P2-13
資料 1-1-19	：授業力向上のための支援事業の実施実績（平成 25 年度）　P2-15
資料 1-1-20	：授業力向上のための支援事業の実施状況（平成 26 年度）　P2-15～17
[5)] 資料 1-1-22	：「授業力向上支援事業」における教育委員会関係者等による評価（抜粋）P2-18～19

③　福井県教育委員会等と連携して実施する「コア・サイエンス・ティーチャー事業」では，大学院生のみならず現場教員の教育力向上に貢献し[6)]，教育委員会・学校関係者からの期待に応えている。「大学機関別認証評価（平成 27 年度受審）」において福井大学の「主な優れた点」として評価された[7)]。

[6)] 資料 1-1-23	：コア・サイエンス・ティーチャー（CST）事業の概要　P2-20～22
資料 1-1-24	：中級 CST 養成プログラムを受講した大学院生の感想（抜粋）　P2-22
資料 1-1-25	：上級 CST 養成プログラムを受講した現場教員の感想（抜粋）　P2-22～23
[7)] 資料 1-1-26	：「大学機関別認証評価」（平成 27 年度受審）評価報告書（抜粋）　P2-23

④　教職開発専攻における「学校拠点方式」による教育は教育委員会・学校関係者はもとより，特別経費に採択されるなど全国的に高い評価を得ている[8)]。第２期には，実践的な学びを保障する多様な教員の確保，入学者確保のための工夫を行い[9)]，加えて他大学・海外大学等との連携協働を充実させ[10)]，グローバル社会における教師教育を実現している。

[8)] 資料 1-1-6	：教職開発専攻における「学校拠点方式」による教員養成・教師教育の概要　P2-6
資料 1-1-28	：「教師教育改革コラボレーション」の概要　P2-25
資料 1-1-44	：平成 27 年度教職大学院等認証評価の評価結果　P2-35
[9)] 資料 1-1-34	：教職開発専攻に導入した小学校教員免許取得プログラム　P2-28
[10)]資料 1-1-29	：教職開発専攻海外ベンチマーキング・調査　P2-25

観点　教育内容・方法

(観点に係る状況)

●体系的な教育課程の編成状況

【養成する能力等の明示】【カリキュラムの体系性】

本研究科では，第２期にカリキュラム・ポリシーおよびディプロマ・ポリシーを策定し（P2-31～32 **前掲資料 1-1-40, 41**）ホームページ等により周知を図った。修士課程では，高度な専門的な知識の獲得と実践的な力の育成を目的として，共通科目「協働実践研究プロジェクト」の必修，「教科教育研究」および「教科に関する科目」の体系的履修と「自由選択科目」の履修を課し，これらを総合して「課題研究」に取り組めるよう教育課程を編成している（**資料 1-2-1**）。教職開発専攻においては，カリキュラム・ポリシーに掲げる「実践と理論の融合」を実現するために，「学校における実習」と各系のプロジェクトを核に共通科目とコース別選択科目が連動するコア・カリキュラムを編成している（**資料 1-2-2**）。

資料 1-2-1　修士課程における教育課程の体系性

１．研究科の目的及び専攻の設置

① 福井大学大学院教育学研究科は，教育改革の一環としての大学の活性化と専門職としての教員の養成，特に現職教員等の再教育という社会の要請に応えることを踏まえて，教員養成を主たる目的とする学部を中核とし，その基礎に立って，教育に係わる学問・芸術の諸問題について高度な見識と実践力を持ち，教育の今日的諸問題の解決に寄与するとともに，21 世紀を担うこどもたちの育成に貢献できる，専門的力量を備えた人材を養成することを目的とします。

② 上記の目的を達成するため，学校教育専攻，教科教育専攻及び教職開発専攻の３専攻を置いている。教科教育専攻には国語教育領域，社会科教育領域，数学教育領域，理科教育領域，芸術教育領域，保健体育教育領域，生活科学教育領域，英語教育領域の８領域を設置し，教職開発専攻には教職専門性開発コース及びスクールリーダー養成コースの２コースを設置している。

③ 掲載 URL http://www.f-edu.u-fukui.ac.jp/graduate/index.html

２．教育の体系性

研究科の修了に必要な単位数（「福井大学大学院教育学研究科履修要項」）

学校教育専攻

専攻	領域	コース	協働実践研究プロジェクト		コミュニティと人間	学校コミュニティ			コミュニティ学習支援	自由選択科目	課題研究	合計
			コミュニティ学習支援	特別支援教育コーディネーター		学校と社会	発達と学習の支援	特別支援教育	地域教育学			
学校教育			いずれか8単位を選択・集中履修		12単位					6単位	4単位	30単位

自身の研究題目に沿って，いずれかの協働実践研究プロジェクト（８単位分）を選択し，教員との協働研究を通して実践的に研究する。また，教育・心理・地域科学や特別支援教育の諸課題について体系的に履修し専門性を高めた上で，「自由選択科目」を履修し，「課題研究」に取り組む。

こうした体系的かつ実践的な履修を通して，目的とする学校とそれを支える地域・社会のコミュニティの専門家の育成を行っている。

教科教育専攻

専攻	領域	コース	協働実践研究プロジェクト										教科教育研究	教科に関する科目	自由選択科目
			PISA型カリキュラム開発群Ⅰ	PISA型カリキュラム開発群Ⅱ	PISA型カリキュラム開発群Ⅲ	PISA型カリキュラム開発群Ⅳ	PISA型カリキュラム開発群Ⅴ	探求と体験型カリキュラム開発群Ⅰ	探求と体験型カリキュラム開発群Ⅱ	探求と体験型カリキュラム開発群Ⅲ	探求と体験型カリキュラム開発群Ⅳ	探求と体験型カリキュラム開発群Ⅴ			
教科教育	国語教育		いずれか1つの開発群から8単位を選択・集中履修										2単位	10単位	6単位
	社会科教育		いずれか1つの開発群から8単位を選択・集中履修										2単位	10単位	6単位
	数学教育		いずれか1つの開発群から8単位を選択・集中履修										2単位	10単位	6単位
	理科教育		いずれか1つの開発群から8単位を選択・集中履修										2単位	10単位	6単位
	芸術教育（音楽）		いずれか1つの開発群から8単位を選択・集中履修										2単位	10単位	6単位
	芸術教育（美術）		いずれか1つの開発群から8単位を選択・集中履修										2単位	10単位	6単位
	保健体育教育		いずれか1つの開発群から8単位を選択・集中履修										2単位	10単位	6単位
	生活科学教育（技術科）		いずれか1つの開発群から8単位を選択・集中履修										2単位	10単位	6単位
	生活科学教育（家庭科）		いずれか1つの開発群から8単位を選択・集中履修										2単位	10単位	6単位
	英語教育		いずれか1つの開発群から8単位を選択・集中履修										2単位	10単位	6単位

自身の研究題目に沿って 10 のカリキュラム開発群から１つ（８単位分）を選択し，児童・生徒のリテラシー形成と人間力育成を支援するためのカリキュラム開発と授業プランの検討を，教員との協働研究を通して行う。また，「教科教育研究」及び「教科に関する科目」を体系的に履修し専門性を高めた上で，「自由選択科目」を履修し，「課題研究」に取り組む。

こうした体系的かつ実践的な履修を通して，21 世紀社会に対応した新しい教育内容や授業づくりを行える力量ある教員の育成を行っている。

●修了要件

修士課程の修了要件は，当該課程に２年以上在学し，研究科の定めるところにより 30 単位以上を修得し，かつ，必要な研究指導を受けた上，当該課程の目的に応じ，当該課程の行う修士論文又は特定の課題についての研究の成果の審査及び最終試験に合格することとする。ただし，在学期間に関しては，優れた業績を上げたものについては，当該課程に１年以上在学すれば足りるものとする。

（事務局資料）

資料 1-2-2　教職開発専攻の教育課程表

教職開発専攻

（平成27年度）

区分		授業科目	単位数 必修	単位数 選択	毎週授業時間 前期	毎週授業時間 後期
学校における実習		長期インターンシップ	10		5	5
		スクールリーダー実習Ⅰ	7		3.5	3.5
		スクールリーダー実習Ⅱ	1		1	(1)
		スクールリーダー実習Ⅲ	2		1	1
共通科目	領域ⅰ	カリキュラムのデザインの実践事例研究		2	2	
		カリキュラムマネジメント実践事例研究		2	2	
	領域ⅱ	授業づくりの長期実践事例研究Ⅰ		2	2	
		授業づくりの長期実践事例研究Ⅱ		2		2
		特別支援学校における授業づくりの長期実践事例研究Ⅰ		2	2	
		特別支援学校における授業づくりの長期実践事例研究Ⅱ		2		2
	領域ⅲ	児童生徒の成長・発達支援の長期実践事例研究Ⅰ		2	2	
		児童生徒の成長・発達支援の長期実践事例研究Ⅱ		2		2
		障害児童生徒の成長・発達支援の長期実践事例研究Ⅰ		2	2	
		障害児童生徒の成長・発達支援の長期実践事例研究Ⅱ		2		2
	領域ⅳ	学習コミュニティマネジメント実践事例研究		2	2	
		学校協働組織のマネジメント		2	2	
	領域ⅴ	公教育改革の課題と実践		1		1
		教師の実践的力量形成の課題と実践		2		2
		学校と社会		1		1
		特別支援学校における教師の実践的力量形成の課題と実践		2		2
コース別選択科目	1系	カリキュラム・授業改革マネジメント学校拠点長期協働実践プロジェクト		8	4	4
		カリキュラム改革事例研究とその理論		2	2	
		授業改革事例研究とその理論		2	2	
		長期実践報告の作成と発表		3		3
	2系	児童生徒の成長・発達支援学校拠点長期協働実践プロジェクト		8	4	4
		成長と発達の実践研究		2	2	
		成長発達支援の事例研究		2	2	
		長期実践報告の作成と発表		3		3
	2系 特別支援	児童生徒の成長・発達支援学校拠点特別支援教育長期協働実践プロジェクト		8	4	4
		障害児の成長と発達の実践研究		2	2	
		障害児の成長発達支援の事例研究		2	2	
		特別支援教育長期実践報告の作成と発表		3		3
	3系	コミュニティとしての学校と教師の力量形成学校拠点長期協働実践プロジェクト		8	4	4
		学習コミュニティマネジメント事例研究		2	2	
		教師の力量形成のための組織学習事例研究		2	2	
		長期実践報告の作成と発表		3		3

履修方法及びその他注意事項

① 学校における実習１０単位
（教職専門性開発コースの学生は長期インターンシップ１０単位，
スクールリーダー養成コースの学生はスクールリーダー実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ 計１０単位を履修）
② 共通科目２０単位
③ コース別選択科目１５単位（いずれかの系を選択・集中履修）

計４５単位以上を修得すること。

なお，特別支援学校教諭専修免許状を取得しようとする者は，次の科目の中から２４単位以上修得しなければならない。
（共通科目）
○ 領域ⅱ　・特別支援学校における授業づくりの長期実践事例研究Ⅰ
　　・特別支援学校における授業づくりの長期実践事例研究Ⅱ
○ 領域ⅲ　・障害児童生徒の成長・発達支援の長期実践事例研究Ⅰ
　　・障害児童生徒の成長・発達支援の長期実践事例研究Ⅱ
○ 領域ⅴ　・特別支援学校における教師の実践的力量形成の課題と実践
（コース別選択科目）
○ ２系特別支援の全科目

※ 学校教育専攻及び教科教育専攻の科目を履修することができる。
ただし，修得した単位は，修了要件の単位には算入されない。

（大学院学生便覧 2015 より抜粋）

●社会のニーズに対応した教育課程の編成・実施上の工夫

【教育改革課題への対応】

修士課程においては，第２期には「協働実践研究プロジェクト」において最新の教育改革課題に対応するテーマを設定しており，履修学生の満足度も高い（**資料 1-2-3, P2-11 前掲資料 1-1-12**）。これらの実践研究を様々な機会を利用して社会へ還元しており，新聞報道等もされている（**資料 1-2-4, 5**）。教職開発専攻においては，全院生が協働で学ぶ月間カンファレンスにおいて，近年の教育改革の方向定位を示す答申を吟味したうえで，各課題意識に応じた議論を展開し，新しい教育改革課題へ対応している。

資料 1-2-3　協働実践研究プロジェクトにおける教育改革課題への対応例

授業科目名	授業内容の概要等
読解リテラシーⅠ	OECD の学力調査問題や従来の読解力との関係を検討することで「PISA 型読解力」の内実を理解し，それに基づき，各教科において求められる「PISA 型読解力」を具体的に把握することを目的とする。また，「連続テキスト」及び「非連続テキスト」，それぞれの表現性を理解し，それらを理解するために必要と考えられる読みの観点や方法を読解ストラテジーの形で把握する。さらに，各教科において扱われる教科群を吟味検討することによって，教科を超えて複合的に学習することが可能となる学習内容を考察する。
21 世紀に対応した社会系教科カリキュラムの開発Ⅰ	今後の 21 世紀社会を生きていく子どもに必要な，社会のあり様を科学的に理解する力や，変化する社会の中で問題の解決に向けて情報を主体的に読み解く力，批判的思考力，意思決定力，問題解決能力などの学力の全体像と構造を明らかにするとともに，このような学力を活動や行動を通して子どもが主体的，総合的に発展させていくための，社会的問題の解決をテーマとした社会系教科カリキュラムを開発する。 そのため，今年度は，NIE と法教育（主権者教育）をそのテーマとして取り上げる。
小中高連携による実践的コミュニケーション能力開発研究Ⅱ	英語学並びに英米文学の立場から，英語コミュニケーション能力の養成に必要な基礎知識を学習する。また，小学校における外国語活動の実施を受け，小学校での英語教育に必要な理論について学習する。具体的には，外国語学習における母語使用に関する文献のカバーとディスカッション，また，ストーリーと活動を中心に小学校英語に関する文献のカバーとディスカッションを行っている。
特別支援教育コーディネーター実習Ⅰ～Ⅳ	インクルーシブ教育の推進と障害者への合理的配慮を念頭に，「知的障害者の就労」の実情と課題を，院生と協働して質的研究方法により実践研究論文にまとめるなどの学習を行っている。

（事務局資料）

資料 1-2-4　協働実践研究プロジェクトの実践研究を社会に還元した例

○第１・２回親子で理科が好きになる語彙検定（平成 24 年度福井大学公開講座）

「読解リテラシー」での実践研究を基に企画。理科に関する語彙検定に親子でチャレンジし，解説とあわせて，生活の中にある言葉の意味の再発見をめざす。福井県大野市との相互友好協定に基づき，大野市内の小学校を会場に実施した。

○みんなで楽しむ「自然とことば」のかるた大会（平成 24 年度福井大学きてみてフェア講座）

「読解リテラシー」での実践研究を基に企画。生活のなかで目にしている「自然」「季節」などを表すことばを題材にして作成したかるたをチームで対戦して楽しむ企画。

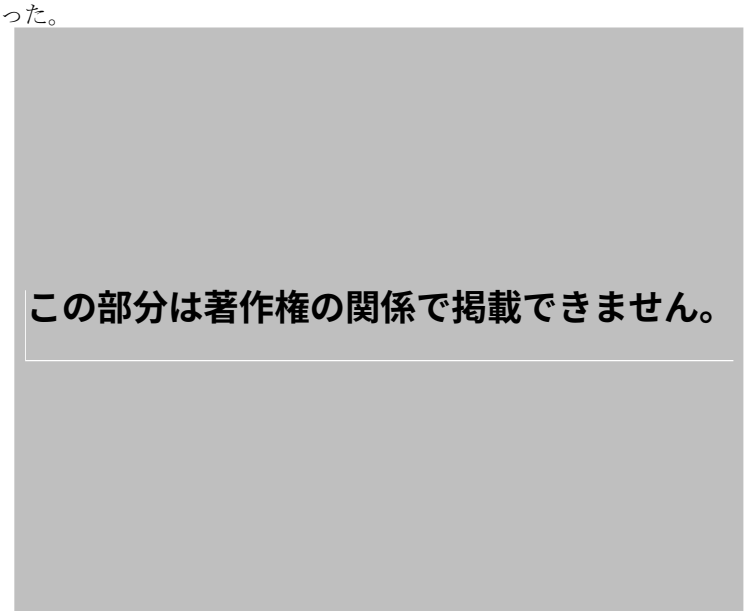
○数学と理科の活用力を育成するサイエンスキャンプ（平成 25 年度ひらめき☆ときめきサイエンス KAKENHI ようこそ大学の研究室へ事業（研究成果の社会還元・普及事業に関するプログラム））

数学，化学，科学的語彙活用の３分野に関する研究を，講義，実習，施設見学等をとおして高校生等に体験してもらい，グループによる探究活動の成果を発表する。協働実践研究プロジェクトの「科学的リテラシー」の実践研究を活用。合宿方式により，大学教員や大学生・院生と自由に語る機会も十分設け，キャリア教育的意義ももつ。

（事務局資料）

資料 1-2-5　主権者教育に対応したカリキュラム開発に関する新聞報道

■平成 27 年度実施の「21 世紀に対応した社会系教科カリキュラムの開発Ⅰ・Ⅱ」において開発した，メディアを扱った主権者教育に関わる指導案を踏まえて，福井新聞記者と協働して大学院生が授業実践を行った。



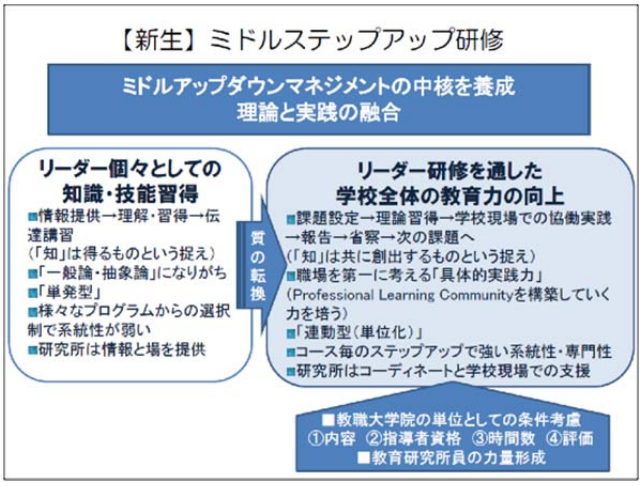
（福井新聞　平成 28 年 1 月 31 日）

（事務局資料）

【社会人向けプログラム】

修士課程では，現職教員や社会人等を対象に，一定の条件のもと夜間や休暇期間等を利用した学修ができる制度を設け，働きながら学びたいという地域からの要望に応える体制を整備している。教職開発専攻では，現職教員研修プログラムとして，福井県教育研究所との連携で「ミドルステップアップ研修」（**資料 1-2-6**）を，福井県特別支援教育センターとの連携で「特別支援教育コーディネーター専門研修・授業研究リーダー実習」を協働開発し，それぞれにおいて教員の資質能力向上を促進し，受講者の満足度も高い（**資料 1-2-7，8**）。

資料 1-2-6　教職開発専攻のミドルステップアップ研修の概要



（事務局資料）

資料 1-2-7　平成 25 年度のミドルステップアップ研修の受講者の感想（抜粋）

・自分がいかにマンネリ化しているかがわかった。主任として新しい境地を開きたい。
・今の教員に「工夫」が必要であること，中教審や教育再生実行会議の内容にも目を通すことの重要性を認識できた。
・授業を見るときの視点について，目を開かれた思いがした。
・他校種の新しい世界を知る事ができ，視野が広がったような気がする。
実践の共有が大変勉強になった。これからの自分の実践のバリエーションが増えたように感じる。

（平成 25 年度ミドルステップアップ研修実践記録集より抜粋）

資料 1-2-8　平成 26 年度の特別支援教育コーディネーター専門研修・授業研究リーダー実習の受講者の感想（抜粋）

・授業研究とコーディネーターの活動は，一見違うように感じていましたが，校内の先生方が意見交流を活発にし，児童生徒の理解を深め，よりよい方向に向かうよう取り組み続けていくという部分は同じであると感じました。
・本研修を受け始めた頃は，研究授業に対する先生方の負担感から出る雰囲気，授業参観者の人数が気になり，授業参観していても子どもに注目できなかった。しかし，研修を通して「子どものどういうところを観て，どうとらえるのか。そして，どのように支援を考えるのか」という具体的な見方を知り，子どもから目を離さずに参観できるようになった。そのような自分の変化を考えると，抵抗感や負担感を減らすというよりも，授業実践する中で，悩みが解決したり，新たな視点を得たりすることが，実践への意欲へとつながり，満足感や達成感を得られるのではないかと思った。

（平成 26 年度 特別支援教育コーディネーター専門研修・授業研究リーダー実習実践研究報告より抜粋）

【長期履修生の受入れ】

修士課程においては，３年履修による教育職員免許取得プログラムを設け，大学院において新たな教員免許を取得する学生が修学しやすい環境を整え，多様な学習機会の保障への期待に応えている（**資料 1-2-9, 10**）。同プログラムは平成 27 年度より教職大学院にも拡充した（**P2-28 前掲資料 1-1-34**）。

資料 1-2-9　教育学研究科における教育職員免許取得プログラム

教育職員免許取得プログラムに基づく学部の教員養成
カリキュラムの履修に関する申合せ

平成 19 年 7 月 6 日研究科委員会決定
直近改正　平成 26 年 11 月 21 日

１．取得できる教員免許状の数

修士課程の学生が教育職員免許取得プログラム（以下「本プログラム」という。）に基づき，学部の教員養成カリキュラムを履修し取得することができる教員免許状は，原則として１校種かつ１教科とする。ただし，中学校又は高等学校のいずれかの学校の１教科に係る教員免許状の取得を許可された者が，必要な単位を修得した結果，もう一方の学校の同一教科に係る教員免許状の取得要件を満たすこととなった場合は，この限りでない。また，教員免許状を持たない学校教育専攻学生が特別支援学校教員免許状の取得を希望する場合に限り，基礎免許として小学校又は中学校のいずれかの二種免許状と合わせた取得を認める。

また，教職大学院の課程の学生が本プログラムに基づき学部の教員養成カリキュラムを履修し取得することができる教員免許状は，小学校教諭一種免許状とする。

２．他大学等における既修得単位の認定

本研究科入学前に課程認定以外の大学の課程等で修得した単位で，本プログラムに基づき取得する教員免許状の教科に関する科目の単位として適当であると認めるときは，教育職員免許法（昭和 24 年法律第 147 号）別表第１備考第５号ロの規定に基づき，「他の大学等において修得した単位，大学以外の教育施設等における学修，入学前の既修得単位等に対する教育地域科学部における単位の認定手続に関する申合せ（平成 12 年２月４日教授会決定）」を準用し，学部教務学生委員会及び研究科委員会の議を経て，本プログラムに基づき学部の教員養成カリキュラムを履修し修得したものとみなし，単位を認定することができるものとする。

３．科目の学籍簿登載

本プログラムに基づき，教員免許状を取得するために学部の教員養成カリキュラムを履修し単位を修得した科目（上記２により単位を認定された科目を含む。）は，学籍簿に登載する。

４．学部科目等履修生としての出願承認

本プログラムに基づき，取得することを許可された教員免許状に加え，さらに別の種類又は教科の教員免許状の取得を希望する者があるときは，本研究科入学前に他の大学・学部等で当該教員免許状取得に必要な単位を相当程度修得している等の理由により，本プログラムに基づく大学院の教育課程の履修及び学部の教員養成カリキュラムの履修に特段の支障がないと認められる場合に限り，「大学院教育学研究科学生及び入学予定者の科目等履修生及び聴講生出願の承認に関する申合せ（平成 24 年３月 16 日研究科委員会決定）」に基づき，研究科委員会の議を経て，学部科目等履修生としての出願を認めることができるものとする。

５．登録単位数の上限

本プログラムに基づき，一学期に履修登録ができる大学院授業科目と学部教員養成カリキュラムの授業科目及び科目等履修による授業科目の合計単位数（集中講義を含む）は，「教育地域科学部学生の各学期における履修単位数の制限に関する取扱いについて」に定める単位数を超えないものとする。

６．教育実習

修士課程の学生が本プログラムに基づき，取得することを許可された教員免許状に加え，さらに別の校種又は教科の教員免許状の取得を希望する場合は，以下のことを原則とする。

（１）許可された免許（特別支援学校教員免許状取得のための基礎免許を含む）については，本学部附属学校で行う。

（２）本プログラムで許可された免許以外の希望する免許については，母校で行う。

また，教職大学院の課程の学生が本プログラムに基づき，取得することを許可された教員免許状の教育実習を行う場合は，拠点校で行う。

附　則

この申合せは，平成 19 年７月６日から施行する。

附　則

この申合せは，平成 22 年６月 11 日から施行する。

附　則

この申合せは，平成 24 年３月 16 日から施行する。

附　則

この申合せは，平成 25 年４月１日から施行し，平成 25 年度入学生から適用する。

附　則

この申合せは，平成 27 年４月１日から施行し，平成 27 年度入学生から適用する。

（事務局資料）

資料 1-2-10　教育職員免許取得プログラム履修者数の推移

	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27
免許プログラム	4	9	4	7	7	5	2	7
（内訳）学校教育専攻	0	1	0	1	1	3	0	0
教科教育専攻	4	8	4	6	6	2	2	4
国語教育領域	0	0	1	1	0	0	0	0
社会科教育領域	0	3	1	0	0	1	0	1
数学教育領域	1	2	0	0	3	0	0	1
理科教育領域	1	2	0	4	0	1	0	1
芸術教育領域（音楽）	0	0	0	0	0	0	2	0
芸術教育領域（美術）	1	1	0	1	1	0	0	0
保健体育教育領域	0	0	0	0	2	0	0	1
生活科学教育領域（技術）	0	0	0	0	0	0	0	0
生活科学教育領域（家政）	0	0	0	0	0	0	0	0
英語教育領域	1	0	2	0	0	0	0	0

（事務局資料）

●国際通用性のある教育課程の編成・実施上の工夫

【グローバル人材養成】

平成 24 年度に採択されたグローバル人材育成推進事業に係る取組として全学で短期留学プログラムを設置したことに伴い，修士課程においては，卒業要件外の「大学院海外短期研修」を開講し，在学する院生に適用した（**資料 1-2-11**）。教職大学院においては，海外大学との研究交流の一環として院生も視察に参加し現地の教員・学生との交流を行っている（**P2-25 前掲資料 1-1-29**）。

資料 1-2-11　修士課程の「大学院海外短期研究」を履修した大学院生数

年度	科目名・単位修得者数
平成 25 年度	大学院海外短期研修Ⅰ：２名 大学院海外短期研修Ⅱ：２名
平成 27 年度	大学院海外短期研修Ⅱ：１名

（事務局資料）

●養成しようとする人材像に応じた効果的な教育方法の工夫

【実践的能力を育成する教育方法，教育現場と連携したプロジェクトへの学生の参加】

① 修士課程においては，「協働実践研究プロジェクト」等の複数の特色ある教育プログラムによって，学校現場と連携し専門性と実践的力量を養成するよう工夫を行っている（**資料 1-2-12**）。理科教育領域では，「コア・サイエンス・ティーチャー事業」において，研修やインターンシップ，現職教諭との交流を通して，実践的な能力の育成を図っており，CST 受講者の中から教員採用者も出ている（**資料 1-2-13**）。また，「授業力向上のための支援事業」では大学院生も授業研究会等へ帯同し，授業力育成を図っている（**資料 1-2-14, 15**）。これらの取組により大学院生の専門的・実践的力量を高める学修への期待に十分応えている。これらの教育プログラムの研究成果は，第２期には４件の科学研究費補助金の採択（第１期は未獲得）にも結びついている（**資料 1-2-16**）。

資料 1-2-12　修士課程における学習指導法の工夫例

1．修士課程では，研究能力を高めるため，特定の課題について研究する「課題研究」（４単位）を課しており，その研究成果については，修士論文や卒業制作物等にまとめ，審査し，公聴会や発表会を通して最終試験も行っている。
2．修士課程においては，大学院で学ぶ高度な専門的な知識を基盤として，さらに実践的な力を身につけることを目的として，共通科目「協働実践研究プロジェクト（８単位必修）」を設定し，大学院生と教員が協働して実践的な研究を進めている。最終的には，豊富な実践事例を組み込んだ包括的な授業案やカリキュラム等の提案をまとめ，報告書を作成し，報告会で発表している。
3．各教科教育領域においては，専門力と実践力を融合させるために，授業以外にも様々な活動を進めている。例えば理科教育領域においては，福井県教育委員会と共同してコア・サイエンス・ティーチャー（CST：理科教員養成）事業を平成 21 年度より継続して実施しており，希望する学部卒院生については中級 CST 候補としての研修やインターンシップを行わせるとともに，上級 CST を目指す現職教諭との交流を通じて，実践的能力の育成を図っている。
4．教科教育・教科専門の教員が共同して教育現場に出向き，教員達を支援する，「授業力向上のための支援事業」に，授業科目「教科教育研究」や「協働実践研究プロジェクト」の一環として，学部卒院生も帯同させ，授業研究会等への参加を通して，授業実践力の育成を図っている。

（事務局資料）

資料 1-2-13　CST を受講した修士課程在籍の院生の数と教員採用状況

（人）

年度	新規受講者数	在籍受講者数	修了者	教員採用者数
平成 22 年度	3	3	0	0
平成 23 年度	3	6	3	3
平成 24 年度	2	5	3	1
平成 25 年度	1	3	1	1
平成 26 年度	3	4	0	0
平成 27 年度	4	7	3	3

（事務局資料）

資料 1-2-14　授業力向上のための支援事業の取組の一例（院生を帯同したもの）（平成 26 年度）

（人）

月日	領域	支援内容
5 月 30 日	英語教育領域	福井県立羽水高等学校　授業見学・研究協議
6 月 4 日	社会科教育領域	福井県羽水高等学校　授業見学・研究協議
6 月 20 日	国語教育領域	福井県立敦賀高等学校　授業見学・研究協議
11 月 12 日	理科教育領域	福井県立羽水高等学校　授業見学・研究協議
11 月 13 日	国語教育領域	福井県立大野高等学校　授業見学・研究協議

（事務局資料）

資料 1-2-15　授業力向上支援事業に参加した院生の感想

社会科教育領域大学院生

全体を通してパワーポイントをスクリーンに映して授業が進められ，ただ黒板に板書をしていくよりも，生徒の視線を集めることで，より理解しやすくなるような授業展開になっていたように感じる。授業の展開では，前時の復習を軽く行った上で導入へと進んでいたが，導入で用いた資料 1，2 の内容が生徒にとっては難解であったように感じた。あまりにも生徒に掴ませたい内容を強調してしまうことは良くないが，生徒にとっては，各資料から教師が掴み取らせたい内容を抽出するのが困難であったようである。導入で時間がかかりすぎてしまった原因であろう。生徒のペアトークの状況を見ていても，ペアでの言語活動は行うものの，分からない，難しいという声が多く聞かれた。しかしながら，授業にペアトークを取り入れていることは非常に意欲的な取り組みであると感じた。

高校の授業，特に進学校の授業では，膨大な学習内容のために，どうしても教師が一方的に教授したい内容をしゃべり続けるような授業になってしまうことが多い。そうであるからといって，生徒らの主体的な学びの機会を設けることをないがしろにしてよいわけではない。

川畑先生のような授業形態は，高校の授業，特に進学校の授業で，生徒の主体的な学びを保障していくためのよい端緒となるであろう授業であり，その内容・方法を十分に学ぶことができた。

（平成 27 年度授業力向上支援事業参加学生アンケート結果より抜粋）

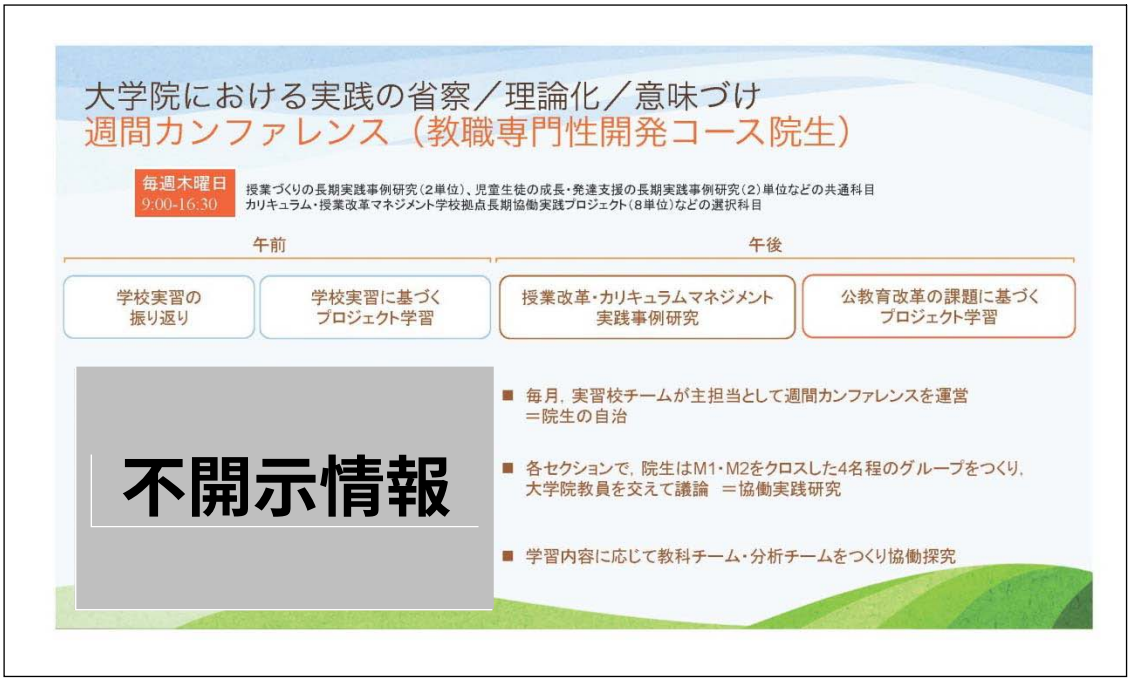
資料 1-2-16　協働実践研究プロジェクトを基盤に科学研究費補助金を獲得した研究課題

○松友一雄研究代表，小・中学生の「言語力」を育成・評価する方法の実証的・実践的研究（基盤研究(C)，平成 23 年～平成 25 年）
○淺原雅浩研究代表，実験観察を支える理科学習語彙の習得と活用に関する実証的・実態的研究（基盤研究(C)，平成 24 年～平成 26 年）
○荒井紀子研究代表，批判的リテラシーを育む問題解決学習におけるプロセス評価方法の開発（基盤研究(C)，平成 24 年～平成 26 年）
○大山利夫研究代表，中学校理科学習における言語活動充実に資する語彙習得のための実証的・実践的研究(基盤研究(C)，平成 25 年～平成 27 年)

（事務局資料）

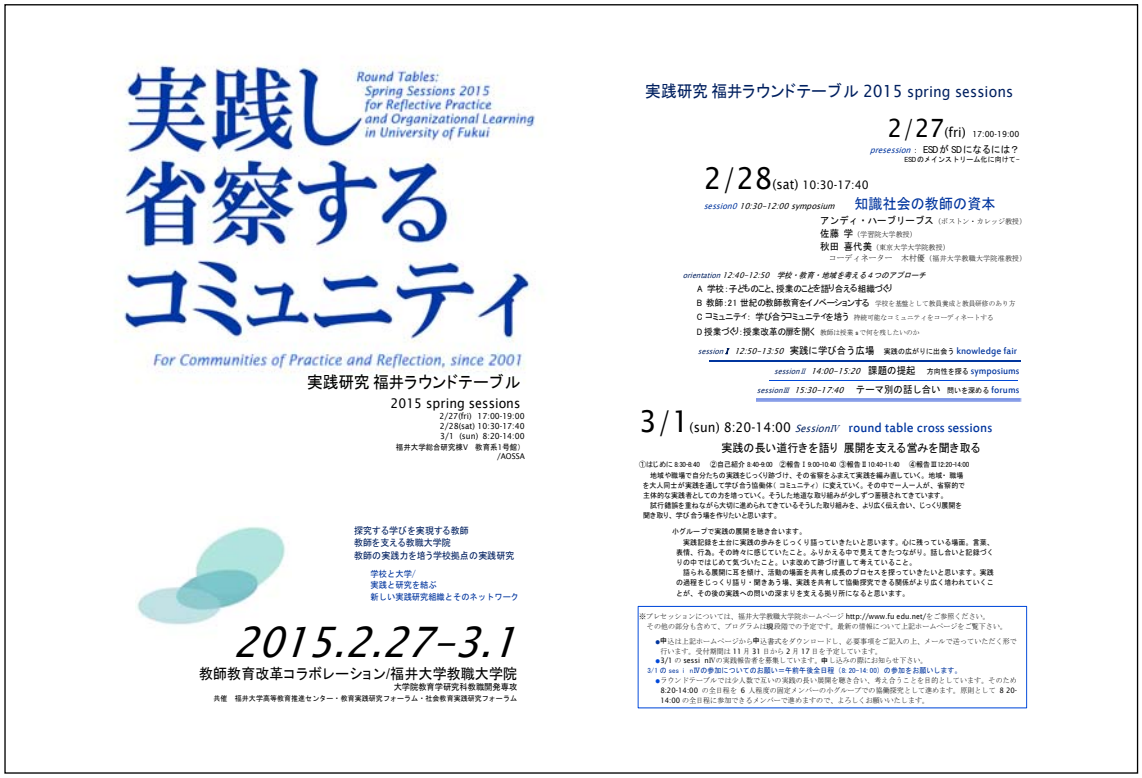
② 教職開発専攻においては，長期インターンシップや全院生が協働する月間カンファレンス等を通じて，実践-省察-再構成のサイクルを展開している。学部卒院生は教員との協働企画・運営によるプロジェクト学習に取組み，自発的・協働的な学習を進める（**資料 1-2-17**）。また，公開実践研究交流集会「実践し省察するコミュニティ」を開催し，学外からの多数の参加者との交流を通して学修機会の多様化を図っている（**資料 1-2-18**）。

資料 1-2-17　教職開発専攻の週間カンファレンスの概要



（事務局資料）

資料 1-2-18　平成 26 年２月・３月 公開実践研究交流集会一次案内



（事務局資料）

●学生の主体的な学習を促すための取組

【アクティブラーニング，単位の実質化】

本研究科の授業形態は，演習や実習形態の授業が多くを占める（**資料 1-2-19**）。指導法の工夫として，3 専攻の平均は「少人数指導」が 85.1%,「対話・討論型」が 80.2%,「フィールド型」が 35.9%である（**資料 1-2-20**）。85%以上の科目において「自主学習の指示」を行い，授業時間外学習を促している（**資料 1-2-21**）。これらの工夫により，学生の能動的な学習を促している。また，過剰履修とならないよう，CAP 制を導入している。

教職開発専攻においては，各授業において，大学院生の能動的な学習を小グループでの議論を主とした教育方法により組織している。実習・プロジェクトとカンファレンスの事前事後学習を促す記録作成と毎月のレポートを課し単位の実質化を担保している。

資料 1-2-19　教育学研究科における授業形態の状況（平成 26 年度）

専攻名等		授業区分				
		講義	演習	実験	実習	計
学校教育専攻		21	24	0	10	55
教科教育専攻	国語教育	2	52	1	9	64
	社会科教育	13	51	1	9	74
	数学教育	9	42	1	9	61
	理科教育	11	45	1	12	69
	芸術教育（音楽）	1	37	1	18	57
	芸術教育（美術）	5	40	1	15	61
	保健体育教育	7	39	2	9	57
	生活科学教育（技術）	9	36	3	9	57
	生活科学教育（家政）	6	44	1	9	60
	英語教育	4	42	1	9	56
教職開発専攻		0	17	0	19	36

（事務局資料）

資料 1-2-20　教育学研究科における学習指導法の工夫状況（平成 26 年度）

専攻名	科目数	学習指導法上の工夫							
		少人数指導		対話・討論型		フィールド型		メディア活用	
		科目数	割合（%）	科目数	割合（%）	科目数	割合（%）	科目数	割合（%）
学校教育専攻	52	38	73.1	45	86.5	20	38.5	35	67.3
教科教育専攻	222	207	93.2	145	65.3	49	22.1	103	46.4
教職開発専攻	36	32	88.9	32	88.9	17	47.2	30	83.3

※科目数は，平成 26 年度開講科目を対象に調査し教員から回答のあった科目の総数である。割合はその科目数に対する%で示す。（事務局資料）

資料 1-2-21　教育学研究科における授業時間外学習を促す工夫（平成 26 年度）

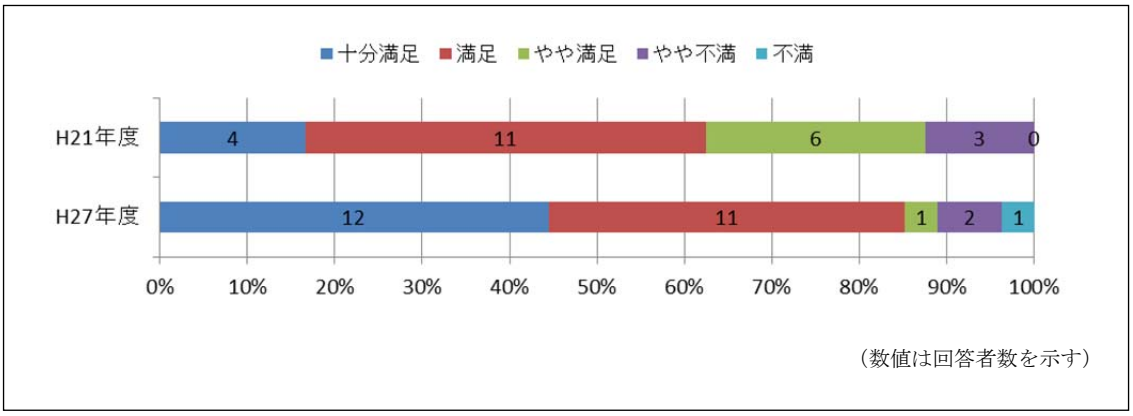
専攻名	科目数	レポート		中間テスト		最終試験		自主学習の指示	
		科目数	割合（%）	科目数	割合（%）	科目数	割合（%）	科目数	割合（%）
学校教育専攻	52	35	67.3	9	17.3	5	9.6	46	88.5
教科教育専攻	222	146	65.8	13	5.9	35	15.8	192	86.5
教職開発専攻	36	36	100.0	0	0.0	33	91.7	36	100.0

※科目数は，平成 26 年度開講科目を対象に調査し教員から回答のあった科目の総数である。割合はその科目数に対する%で示す。（事務局資料）

【学習環境の整備】

学習・研究環境に関する学生からの満足度について，第１期の最終年度では十分満足～満足と回答した学生の割合が 62%であったのに対し，平成 27 年度には 85%に増加しており，本研究科における教育・研究環境の向上が示されている（**資料 1-2-22**）。

資料 1-2-22　学習・研究環境における学生の満足度



（平成 21 年度および平成 27 年度「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」結果より抜粋）

（水準）　期待される水準を上回る

（判断理由）

①　「協働実践研究プロジェクト」において，第２期からは最新の教育課題に対応するテーマを導入している[1)]。学生の能動的な学びを促すよう，個別の科目全般においても授業形態や指導上の工夫がなされている[2)]。教職開発専攻では学外の参加者との学びの検証と交流の機会としての「公開実践研究交流集会」を第１期より広範囲の参加校と参加者を得て開催している[3)]。これらの取組により，新たな学校教育の課題に対応する資質と能力を高める学修への学生・学校関係者からの期待に応えている。

[1)] 資料 1-2-3	：協働実践研究プロジェクトにおける教育改革課題への対応例　P2-40
資料 1-2-5	：主権者教育に対応したカリキュラム開発に関する新聞報道　P2-41
[2)] 資料 1-2-20	：教育学研究科における学習指導法の工夫状況（平成 26 年度）　P2-48
資料 1-2-21	：教育学研究科における授業時間外学習を促す工夫（平成 26 年度）　P2-48
[3)] 資料 1-2-18	：平成 26 年２月・３月　公開実践研究交流集会一次案内　P2-47

②　修士課程では，「協働実践研究プロジェクト」「コア・サイエンス・ティーチャー事業」や，新たに立ち上げた「授業力向上支援事業」の組織的な実施により，教科の専門性を高める学修とともに，現場での十分な実践経験への学生の期待に十分に応え，教員採用にも結びついている[4)]。これらの実践研究を基盤とした研究課題により第２期に４件の科学研究費補助金の獲得に至っており[5)]，質の高い実践研究の証左となっている。

[4)] 資料 1-2-12	：修士課程における学習指導法の工夫例　P2-45
資料 1-2-13	：CST を受講した修士課程在籍の院生の数と教員採用状況　P2-45
資料 1-2-15	：授業力向上支援事業に参加した院生の感想　P2-46
[5)] 資料 1-2-16	：協働実践研究プロジェクトを基盤に科学研究費補助金を獲得した研究課題　P2-46

③　教職開発専攻においては，大学院生の実践的能力の育成を図るだけでなく，第２期には教員研修機関と連携し，「学校拠点方式」を援用した学校・実践ベースの研修プログラムを協働開発するとともに，現職教員の資質能力の向上に寄与し，受講者から高い評価を得ている[6)]。

[6)] 資料 1-2-6　：教職開発専攻のミドルステップアップ研修の概要　P2-41
資料 1-2-7　：平成 25 年度のミドルステップアップ研修の受講者の感想（抜粋）P2-42
資料 1-2-8　：平成 26 年度の特別支援教育コーディネーター専門研修・授業研究リーダー実習の受講者の感想（抜粋）P2-42

分析項目Ⅱ　教育成果の状況

観点　学業の成果

（観点に係る状況）

●履修・修了状況から判断される学習成果の状況に関する例

【学習成果の評価方法】

修士課程では，教育に係る諸学問についての高度な見識および実践的力量を共に身につけさせることを目的に教育課程を編成している（**資料 2-1-1**）。成績評価は教育学研究科規程に則って４段階で行われる（**資料 2-1-2**）。実践的力量の養成のため「協働実践研究プロジェクト」を必修とし，年２回，その成果報告の発表を課し，教育学研究科協働実践研究プロジェクト実施委員会がその発表を基に評価を行っている（**別添資料 1**）。

資料 2-1-1　教育学研究科修士課程のカリキュラム



（事務局資料）

資料 2-1-2　教育学研究科の成績評定基準

○福井大学大学院教育学研究科規程

（前略）

（成績評価）

第 20 条　各授業科目の試験または研究報告等の成績は，優・良・可および不可の４級で表示し，優・良・可を合格とし，不可を不合格とする。

２．前項の成績評価は別表に掲げる基準により行う。

別表

評価	評価点	評価基準
優	100点～80点	目標を十分に達成している。
良	79点～70点	目標を概ね達成している。
可	69点～60点	目標を最低限達成している。
不可	59点～０点	目標を達成していない。

（福井大学大学院教育学研究科規程より抜粋）

【単位取得・成果・学位授与状況】

修士課程では，大学院在籍者のほとんどが修学期間内に修了要件の 30 単位以上を修得し，高度な専門知識が要求される修士論文の審査に合格し，教育学修士の学位を取得している（**資料 2-1-3，4，別添資料 2**）。成績状況は概ね 90%以上は優の評価である（**資料 2-1-5**）。教職開発専攻では，授業科目と単位認定の評価方法を明確に定め，長期の実践・省察・記録化のサイクルにもとづく学修を「長期実践研究報告」の作成と発表に結実させ，ほぼすべての在籍者が所定の単位を修得し，教職修士の学位を取得している（**資料 2-1-6**）。

資料 2-1-3　修士課程大学院生の修了状況　（人）

年度	専攻	２年在籍者数	修了者数
平成 22 年度	学校教育専攻	15	11
	障害児教育専攻	1	0
	教科教育専攻	33	24
	計	49(2)	35
平成 23 年度	学校教育専攻	14	9
	障害児教育専攻	1	0
	教科教育専攻	38	31
	計	53(4)	40
平成 24 年度	学校教育専攻	11	8
	教科教育専攻	28	19
	計	39(2)	27
平成 25 年度	学校教育専攻	10	8
	教科教育専攻	41	33
	計	51(0)	41
平成 26 年度	学校教育専攻	12	6
	教科教育専攻	29	26
	計	41(1)	32
平成 27 年度	学校教育専攻	13	9
	教科教育専攻	24	16
	計	37(3)	25

※（ ）内は，長期履修生数を示す（内数）　（事務局資料）

資料 2-1-4　単位取得状況（修了生の修了時平均取得単位数）　（単位）

	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
学校教育専攻	40	36	40	42	40	46
教科教育専攻	36	34	36	37	35	36
平均	38	35	38	39	38	41

（事務局資料）

資料 2-1-5　修士課程大学院生の成績状況

年度	専攻	優の割合	良の割合	可の割合
平成 22 年度	学校教育専攻	92.24%	7.31%	0.46%
	教科教育専攻	91.71%	6.63%	1.66%
平成 23 年度	学校教育専攻	93.26%	6.20%	0.54%
	教科教育専攻	90.30%	7.13%	2.57%
平成 24 年度	学校教育専攻	95.00%	5.00%	0.00%
	教科教育専攻	86.83%	9.57%	3.60%
平成 25 年度	学校教育専攻	96.25%	3.75%	0.00%
	教科教育専攻	91.60%	6.72%	1.68%
平成 26 年度	学校教育専攻	94.24%	5.76%	0.00%
	教科教育専攻	84.06%	10.90%	5.04%
平成 27 年度	学校教育専攻	86.39%	10.66%	2.95%
	教科教育専攻	97.20%	2.80%	0.00%

（事務局資料）

資料 2-1-6　教職開発専攻の修了状況・学位授与率と修得単位数

平成27年度教育学研究科教職開発専攻の課程修了認定について

専攻名	コース名	修了者数	学位授与率	修得単位数			
				学校における実習	共通科目（領域i～領域v）	コース別選択科目（1系～3系）	合計
教職開発専攻	教職専門性開発コース	8	100%	10	20	15	45

専攻名	コース名	修了者数	学位授与率	修得単位数			
				学校における実習	共通科目（領域i～領域v）	コース別選択科目（1系～3系）	合計
教職開発専攻	スクールリーダー養成コース	19	100%	10	20	15	45

平成26年度教育学研究科教職開発専攻の課程修了認定について

専攻名	コース名	修了者数	学位授与率	修得単位数			
				学校における実習	共通科目（領域i～領域v）	コース別選択科目（1系～3系）	合計
教職開発専攻	教職専門性開発コース	15	100%	10	20	15	45

専攻名	コース名	修了者数	学位授与率	修得単位数			
				学校における実習	共通科目（領域i～領域v）	コース別選択科目（1系～3系）	合計
教職開発専攻	スクールリーダー養成コース	20	100%	10	20	15	45

平成25年度教育学研究科教職開発専攻の課程修了認定について

専攻名	コース名	修了者数	学位授与率	修得単位数			
				学校における実習	共通科目（領域i～領域v）	コース別選択科目（1系～3系）	合計
教職開発専攻	教職専門性開発コース	14	100%	10	20	15	45

専攻名	コース名	修了者数	学位授与率	修得単位数			
				学校における実習	共通科目（領域i～領域v）	コース別選択科目（1系～3系）	合計
教職開発専攻	スクールリーダー養成コース	15	100%	10	20	15	45

平成24年度教育学研究科教職開発専攻の課程修了認定について

専攻名	コース名	修了者数	学位授与率	修得単位数			
				学校における実習	共通科目（領域i～領域v）	コース別選択科目（1系～3系）	合計
教職開発専攻	教職専門性開発コース	10	100%	10	20	15	45

専攻名	コース名	修了者数	学位授与率	修得単位数			
				学校における実習	共通科目（領域i～領域v）	コース別選択科目（1系～3系）	合計
教職開発専攻	スクールリーダー養成コース	20	100%	10	20	15	45

平成23年度教育学研究科教職開発専攻の課程修了認定について

専攻名	コース名	修了者数	学位授与率	修得単位数			
				学校における実習	共通科目（領域i～領域v）	コース別選択科目（1系～3系）	合計
教職開発専攻	教職専門性開発コース	9	100%	10	20	15	45

専攻名	コース名	修了者数	学位授与率	修得単位数			
				学校における実習	共通科目（領域i～領域v）	コース別選択科目（1系～3系）	合計
教職開発専攻	スクールリーダー養成コース	18	100%	10	20	15	45

平成22年度教育学研究科教職開発専攻の課程修了認定について

専攻名	コース名	修了者数	学位授与率	修得単位数			
				学校における実習	共通科目（領域i～領域v）	コース別選択科目（1系～3系）	合計
教職開発専攻	教職専門性開発コース	5	100%	10	20	15	45

専攻名	コース名	修了者数	学位授与率	修得単位数			
				学校における実習	共通科目（領域i～領域v）	コース別選択科目（1系～3系）	合計
教職開発専攻	スクールリーダー養成コース	21	100%	10	20	15	45

（事務局資料）

【学位論文・実践研究】

①　修士論文の審査は，１名の主査および２名以上の副査により，論文審査，公開発表会等において厳格・公平に行われており，大学院生が各分野の専門的見識を十分に身につけて修了することを担保している（**資料 2-1-7**）。また，修士論文等に係る優れた実践研究成果は，教育地域科学部附属教育実践総合センター紀要『福井大学教育実践研究』や『福井大学教育地域科学部紀要』等において，積極的に公表されている（**資料 2-1-8**）。

資料 2-1-7　福井大学大学院教育学研究科修士課程修了認定に関する取扱要領

１ 趣旨

福井大学大学院教育学研究科（修士課程）修了認定に関する修士論文又は特定の課題についての研究の成果（以下「修士論文等」という。）の審査及び最終試験の方法については，福井大学大学院学則，福井大学学位規程，福井大学大学院教育学研究科規程及び福井大学大学院教育学研究科履修要項に定めるもののほか，この要領の定めるところによる。

２ 修士論文等の作成

(1) 修士論文の表紙は所定のもの（A4 版）を使用する。
(2) 特定の課題についての研究の成果は，作品及びその関連論文とする。

３ 修士論文等の提出

(1) 修士の学位を受けようとする者(以下「申請者」という。）は，修士論文審査申請書（様式１）に修士論文等を添えて，１月 31 日までに研究科長に提出するものとする。なお，研究内容（特定の課題についての研究の成果の場合は，その旨附記すること。）については，２年次の４月末日までに届け出るものとする。
(2) 修士論文は，１編１通とする。ただし，参考として他の論文，特定の課題についての研究の成果を添付することができる。

４ 審査委員会

(1) 審査委員会は，申請者ごとに設置し，主査１名，副査２名以上で構成する。
(2) 主査は，本研究科修士課程の研究指導担当教員をもって充てる。
(3) 副査は，本研究科修士課程担当の専任教員をもって充てる。ただし，有益と認められるときは，本研究科教職大学院の課程，他の研究科又は他の大学の大学院等の教員等を加えることができる。
(4) コース主任又は副主任は，当該修士論文等の提出後すみやかに修士論文審査・最終試験委員候補者名簿（様式２）により，審査委員候補者を研究科長に推薦する。この場合において，前号の規定により，本研究科修士課程担当の専任教員及び教職大学院の課程担当の専任教員以外の者を推薦するときは，当該審査委員候補者の略歴書を添えるものとする。
(5) 研究科委員会は，すみやかに審査委員を決定する。

５ 審査基準

修士論文等は，次の各号に掲げた基準のいずれかを満たす必要がある。

(1) 研究目的や意義が明確であり，問題設定から結論にいたる過程が論理的に記述されていること。
(2) 技術面において高い熟練度を示し，表現及び解釈において独創性や斬新さがあり，表現様式への深い理解が示されていること。

６ 修士論文等の公開発表会

審査委員会は，修士論文等についての公開発表会を開催するものとする。

７ 修士論文等の審査及び最終試験

(1) 修士論文等の審査及び最終試験は，３月１日までに行われることを原則とする。
(2) 判定は，合格又は不合格とする。
(3) 審査委員会主査は，審査の結果を修士論文審査・最終試験結果報告書（様式３）及び修士論文審査の要旨（様式４）により，３月２日までに研究科長に報告する。
(4) 研究科長は，直ちに修士論文審査の要旨を複写し，コース主任又は副主任に当該コース等に関する分を各１通ずつ配布する。コース主任又は副主任は，すみやかにこれを当該コース等の研究科委員会委員に回覧する。なお，修士論文審査の要旨全コース分については，供閲に処する。

８ 修士課程修了の認定及び結果の報告

(1) 研究科委員会は，３月 15 日までに合否を決定する。
(2) 研究科長は，すみやかに審査結果を学長に報告する。

（事務局資料）

資料 2-1-8　福井大学紀要等に掲載された大学院生の論文

○「福井大学教育実践研究」に掲載された大学院生の論文（単著および筆頭執筆者）

第 35 号（平成 22 年）

土成　永侑　　能力発達を支える実践研究の方法論 - DeSeCo のコンピテンス概念と日本の教育実践記録を手がかりに－

岡本　理生　　RSA 暗号の教材化についての一考察

辻　千秋　　内包量概念の形成に関する調査研究

第 36 号（平成 23 年）

内平　圭祐　　社会科・地理歴史科における教材開発の成果と作成過程－協働による地域教材作成を題材にして－

第 37 号（平成 24 年）

小玉　健太　　「社会参加・問題解決型授業」を通した市民性育成に関する研究　-2011･2012 年度協働実践研究プロジェクトでの取り組みから-

第 38 号（平成 25 年）

鳩野　憲志朗　金属加工に関する教材研究－異種金属間の鍛接について－

山本　一海　　PISA 数学的リテラシーを育む教材開発

第 40 号（平成 27 年）

月僧　秀弥　　福井県におけるコア・サイエンス・ティーチャーを中心とした理科教育支援に関する質問紙調査とその一考察

前川　友樹　　数学的リテラシーを育む教材開発　－数学教育の現状と課題を捉え直して－″

前川　友樹　　福井県の算額を題材とした高等学校数学科授業づくり－中野神社の算額を原問題とした RLA の試行－″

小林　暉　　扇状地形成実験の教材開発と授業実践

堀　　裕樹　　和算を題材とした RLA　　-中間発表会までの活動を振り返って-″

奥屋　倫太朗　マイクロスケール実験によるプラスチックの区別－高校化学および中学校理科の教材開発と実践およびその評価－

○「福井大学教育地域科学部紀要」に掲載された大学院生の論文

第 1 号（平成 22 年）

塚本　充，櫻木裕丈，荒川真臣　　一般教室での情報機器利用授業に関する一考察　235-252

西村保三，山本一海　　折り紙による正 37 角形の作図　63-70

佐々木由希・高城啓一・石川和彦・前田桝夫　　自動車内ディスプレイとしてのインビトロ植物の可能性に関する研究　253-262

第 2 号（平成 23 年）

西村保三，山本一海　折り紙による５次方程式の解法－３重折りによる５乗根，角の５等分，正 11 角形の作図－　59-66

第 4 号（平成 25 年）

塚本　充，櫻木裕丈，川端美智代　　一般教室における ICT の活用に関する実践と一考察　233-248

西村保三，桑原佑輔　　素な３ボールジャグリング数列の最大周期について　99-108

第 5 号（平成 26 年）

石井バークマン麻子，笠羽涼子，島田拓也，林美夏　　大学における知的障害者雇用の現状と課題－当事者へのインタビュー調査を中心に－　177-196

塚本充，豊田高之，櫻木裕丈　　一般教室における ICT 機器と電子教材の活用に関する一考察　291-304

川端美智代，平岡まりな，塚本充　教員養成系大学の技術科教育における教材開発に関する研究－「でんきの教科書」制作の試み－　277-289

平岡まりな，川端美智代，塚本充　　電気分野を対象とした電子教材作成の試み　305-313
西村保三，桑原佑輔　　素な３ボール多重ジャグリング数列の最大周期　115-124
西村保三，坂口一成　　ペントミノの辺々接着で折る多面体について　125-137
奥野信一・佐々木由希・石川和彦・高城啓一・前田桝夫
無菌野菜ディスプレイの作製とその評価　263-276

第６号（平成 27 年）

奥野信一・畑田耕佑・岳野公人　　雑木・間伐材を用いた幼児用玩具の製作と評価　303-312

○その他大学関連紀要

石川和彦・藤原天・奥野信一　2016　幼稚園・小学校教諭の電動糸鋸盤による鋸断技能－実習後の鋸断技能の向上について－　福井大学初等教育学研究　1　in printing
向川洋子　2011　文学教材における「読み」と「対話」の融合―『大人になれなかった弟たちに……』（中学１年）のディベカッションの試みを通して―　国語国文学（福井大学言語文化学会）　50　73-84
蔣云斗　2014　『伽婢子』における漢詩摂取の方法　国語国文学（福井大学言語文化学会）53 1-13

（事務局資料）

② 教職開発専攻においては，長期の実践・省察・記録を「長期実践研究報告」に結実させ，厳格な評価・審査体制を通じて教職修士（専門職）にふさわしいと判定されたものが『学校改革実践研究報告』として刊行されている（**資料 2-1-9**）。

資料 2-1-9　長期実践研究報告の評価について

「長期実践研究報告」による教職大学院における学修の総合的評価について

長期実践事例研究・長期協働実践プロジェクトをはじめとする実践研究・実践プロジェクトの一連の展開と，それに関わる省察・検討・理論的研究の積み重ねを，「長期実践研究報告」としてまとめ，この「長期実践研究報告」によって，教職大学院における学修の展開と到達点を総合的・最終的に確認し，評価する。

基本方針

＜実践と省察の長期にわたる記録の集積にもとづく総合的な評価システムの実現＞

○ 専門職としての教師の力量の評価については，教師としての実践の展開と成果およびそれを通しての教師としての成長過程に関わる専門的な精査と検討が必要となる。長期にわたる実践の積み重ねとそれを通しての成長過程を検証するためには，記録の長期にわたる集積・蓄積とその検討という手続きが不可欠となる。

○ 本専攻では長期実践事例研究・長期協働実践プロジェクトをはじめとする実践研究・実践プロジェクトの一連の展開と，それに関わる省察・検討・理論的研究の積み重ねを，「長期実践研究報告」としてまとめ，この「長期実践研究報告」によって，教職大学院における学修の展開と到達点を総合的・最終的に確認し，評価する。

○ 評価・判定については，当該の学生の「長期実践研究報告の作成と発表」を支援する教員の他，２名の教員による判定会議における評価・判定を踏まえ，専攻会議および研究科委員会においてこれを承認する。

○ またこの報告書に関わる内容を公開実践交流集会（ラウンドテーブル）において公表し，大学外の研究者や実践者による検討評価の場を設ける。さらにこの報告書を刊行物として刊行し，より広く取り組みを伝えるとともに，今後の実践と研究の拠り所として蓄積していく。

長期実践研究報告の作成とその内容

ア） それまでの自分自身の教師としての実践の積み重ねを振り返るレポートの作成

大学院の入学にあたってそれまでの自身の実践の積み重ねを振り返り，大学院における課題を明確にする報告をまとめる。（学部新卒者の場合，学部における学習や実践に関わる取り組みについてまとめる。）

イ） 単元ごと・半期ごとの記録作りとその検討の積み重ね

長期実践事例研究・長期協働実践プロジェクトの中で単元ごと半期ごとの実践を記録化し省察し次の課題を導き出していくサイクルを重ねていく。

ウ） ２年間の展開を跡づける長期実践記録の作成

２年間の実践と自身の力量形成の過程を跡づけ検討する「長期実践研究報告」を作成する。

①２年間における授業づくりの検討と展開過程の吟味・評価。

②２年間における学習・生活支援の取り組みの展開過程の吟味・評価。

③２年間を中心とし，その前の取り組みも視野に入れながら，自分自身の実践者としての成長過程についての省察

④上記３つの報告と省察を踏まえ今後の実践者としての課題を明確とする。

エ） 「長期実践記録」の検討と評価（外部にも開かれた検討と評価）

外部の教師や研究者も参加した実践研究会において2時間程度の報告と検討の場を持つ。

オ） 「長期実践記録」の刊行

こうした研究協議を踏まえ3月までに最終的な報告書をまとめる。この報告書は「学校改革実践研究報告」として刊行する。この報告書は今後の自己の実践と評価の重要な拠り所となるとともに，今後教職大学院で学ぶ教師にとっても実践と研究の手がかりを与えるものとなる。また教職大学院の組織的な評価の基盤となるとともに，広く実践と教師としての力量形成過程の研究にとっても重要な貢献となる。

（集中講座 Cycles2015-16Winter 要項より抜粋）

【資格取得】

修士課程修了者のほとんどが複数の教員免許を取得し修了している（**資料 2-1-10**）。教職開発専攻では，ほぼすべての院生が教育職員免許状・専修免許状を取得している（**資料 2-1-11**）。

資料 2-1-10　修士課程における専修免許状取得状況　（人）

年度	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
修了者数	35	40	27	41	32	25
幼稚園教諭専修免許状	2	3	1	1	0	0
小学校教諭専修免許状	13	13	9	16	17	13
中学校教諭専修免許状	20	22	12	29	22	19
高等学校教諭専修免許状	23	23	13	30	234	21
特別支援学校教諭専修免許状	1	3	4	1	0	22
計	59	64	39	77	62	55

（事務局資料）

資料 2-1-11　教職開発専攻における教育職員免許状と専修免許状の取得者数

年度	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
修了者数（人）	26	27	30	29	35	27
専修免許状取得者数（人）	25	25	28	28	34	26
専修免許状取得率（%）	96%	93%	93%	97%	97%	96%

（事務局資料）

【学生の研究実績】

第２期においては，前述の『紀要』に加え，学会誌等に掲載される水準の実践・研究が４編あり，さらには学会賞（論文賞）を受賞したものが１編ある。これらの成果は大学院教育で培われた教育実践力を示す証左である（**資料 2-1-12**）。また，『紀要』等への掲載論文と併せると，第１期に比して論文総数は 1.3 倍に増えている（**資料 2-1-13**）。

資料 2-1-12　学術雑誌に掲載された大学院生の論文

○学術論文誌

西村保三，坂口一成　2013　リンケージによる平面曲線の作図
日本数学教育学会高専・大学部会論文誌　20　1-8

内平圭祐　2014　熊野古道における場所の雰囲気　自然と社会　80　27-49

＊鳩野憲志朗・石川和彦・鷲田一夫・奥野信一　2014　新しい鍛接法と木炭炉を用いた打刃物製作に関する教材研究　日本産業技術教育学会誌　56　59-66

山口誠人　2015　小学校社会科における地図教材の変遷　自然と社会　81　26-38

稲垣良介・野坂祐介・浦井龍法　2015　未熟練教師による着衣泳の事後指導が児童のリスク認識と対策実行認識に及ぼす影響　北陸体育学会紀要　51　11-21

＊の論文は 2015.8 に学会賞（論文賞）を受賞

（事務局資料）

資料 2-1-13　大学院生の論文の掲載先と数

論文の掲載先	H22	H23	H24	H25	H26	H27	第２期	第１期
学会誌・学術論文誌	－	－	－	1	1	2	4	0
『福井大学教育地域科学部紀要』	3	1	－	2	7	1	14	8
『福井大学教育実践研究』	3	1	1	2	－	6	13	15
合　計	6	2	1	5	8	9	31	23

（事務局資料）

●学業の成果の達成度や満足度に関する学生アンケート等の調査結果とその分析結果

【学生アンケートの内容】

① 全院生を対象とした平成 26 年度「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」（以下,「意識・満足度調査」）において，教育の熱心さ，教員の質及び教育力，教育支援サービスに関して入学時よりも大学院教育を受けた後の方が評価が高くなっており，入学生の期待に応えている（**資料 2-1-14**）。

資料 2-1-14　大学院入学前後における大学院イメージ

（回答者 115 人）		高い	やや高い	どちらともいえない	やや低い	低い	無記入
教育に熱心	入学時	28	37	46	4	0	0
	現在	54	44	13	2	1	1
教員の質及び教育力	入学時	27	39	45	3	1	0
	現在	47	50	17	0	0	1
教育支援サービス	入学時	14	27	69	4	1	0
	現在	25	37	45	5	2	1

（平成 26 年度「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」結果より抜粋）

② 平成 27 年度「意識・満足度調査」において，本研究科の教育全般に関して,「十分満足」「満足」の値がほぼ 70%以上であり，教育内容に概ね満足している（**資料 2-1-15**）。第１期最終年度の平成 21 年度と比較すると，教育全般，インターンシップ等実地体験についての２項目において,「十分満足」の割合が高くなっている。

資料 2-1-15　教育学研究科教育全般に関しての満足度

設問：下記に関してどの程度満足していますか	年度	十分満足	満足	やや満足	やや不満	不満
教育全般について	H21	23.1%	69.2%	0.0%	0.0%	7.7%
	H27	40.7%	44.4%	14.8%	0.0%	0.0%
インターンシップ等実地体験について	H21	52.6%	15.8%	21.1%	5.3%	5.3%
	H27	58.8%	11.8%	29.4%	0.0%	0.0%

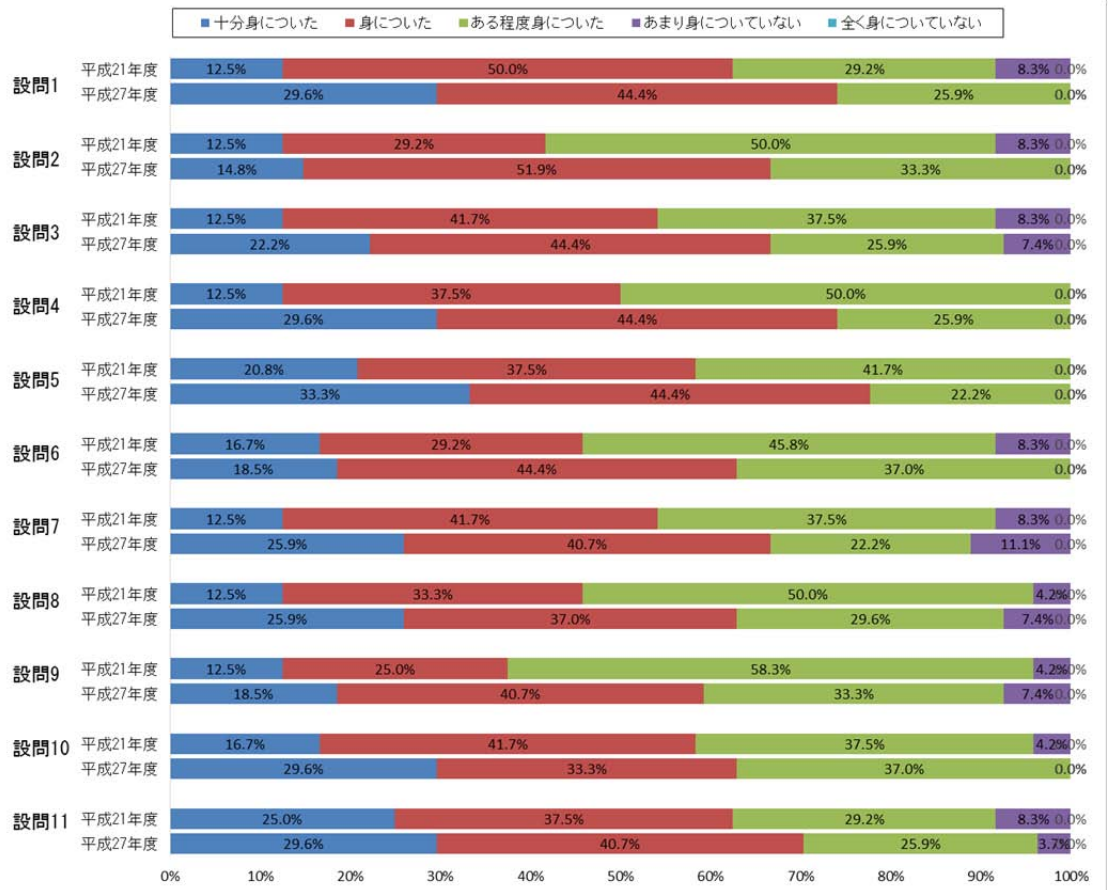
（平成 21 年度および平成 27 年度「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」結果より抜粋）

③　平成 27 年度「意識・満足度調査」において，学生は，大学院の学びによって実践的な能力，広い視野でものごとを多面的に考える力，論理や証拠を重視しそれらに基づいて考える力等の知識・能力がしっかりと身に付いたと認識している。11 項目すべてで 50%以上の学生が「十分身についた」「身についた」と回答しており，学業の成果に対して高い満足感を持っており，本課程の教育が学生の期待に十分応えていることを示している。また，第１期最終年度と比較すると「身についた」「十分身についた」の割合がすべての項目で上がっている（**資料 2-1-16**）。

資料 2-1-16　教育学研究科の教育成果に対する学生の自己評価

あなたは福井大学で学修や研究を行うことによって以下に示す力がどの程度身についたと思いますか。

設問１：論理や証拠を重視し，それらに基づいて考える力
設問２：問題のポイントを素早く押さえ，まとめる力
設問３：想像が豊かで，新しいアイデアや発想を生み出す力
設問４：事実や他者に対する誠実さ
設問５：日常的にコミュニケーションをする力
設問６：ディスカッションやディベートをする力
設問７：文章作成や文章表現の力
設問８：情報を収集して適切に利用する力
設問９：社会や技術の変化に対応する力
設問 10：ねばり強く仕事に取組む力
設問 11：他の学生と協調する力



（平成 21 年度および平成 27 年度「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」結果より抜粋）

④　「協働実践研究プロジェクト」に関しては平成 25 年度よりアンケートを行い，その結果において，プロジェクトへの主体的な参加や教科や領域の専門性の深まりに対して，70%以上の履修生が肯定的評価をしている。教科等の専門性の深化や教師としての実践的力量の涵養に関して，５段階評定で４前後の値であり，概ねこの科目を有意義な取組であると認識していることがわかる（**資料 2-1-17**）。

資料 2-1-17　協働実践研究プロジェクトアンケート

協働実践研究プロジェクトアンケート

設問１　この授業は一つのプロジェクトを２年間（４学期）通して受講していきます。他の授業や修士論文作成などとの関係から考えて適切な長さであると思いますか。

設問２　この授業では「学生と教員とが協働して」プロジェクトに関わるとされています。あなた自身は主体的にこの授業に参加できたと思いますか。

設問３　プロジェクトは，(1)PISA 型カリキュラム開発群　(2)探求と体験型カリキュラム開発群　(3)コミュニティ学習支援　(4)特別支援教育コーディネーター実習の四つに分類されていますが，自分が希望するプロジェクトに参加出来ましたか。

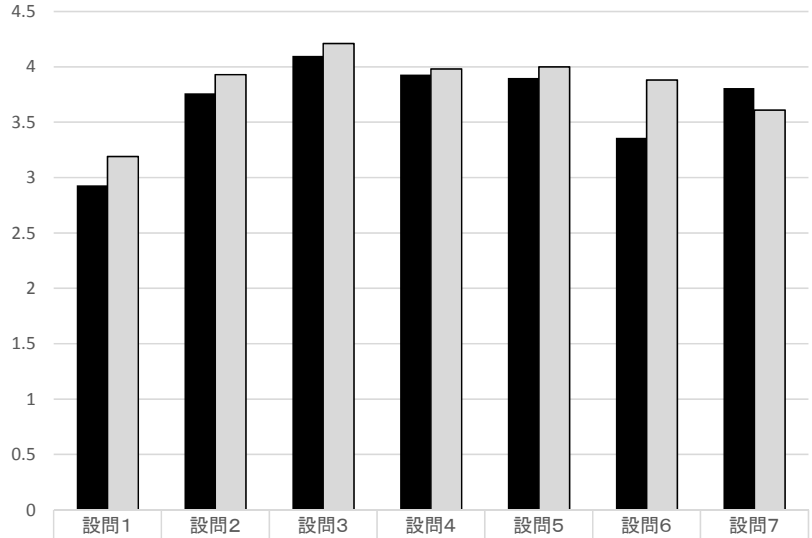
設問４　自分がこれまで取り組んできた活動は，そのプロジェクト名(上記の四分類)にふさわしい取り組みでしたか。

設問５　協働実践研究プロジェクトを受講して，教科や領域の専門性が深まりましたか。

設問６　協働実践研究プロジェクトを受講して，教師として必要な実践的力量が身につけられましたか。

設問７　現在，各プロジェクトの最終報告会を年度の終わりに開催しています。他のプロジェクトの取り組みを知り，自分の理解の広がりや深まりを実感する機会となっていますか。

５段階評定　１．全くそう思わない　２．そう思わない　３．どちらとも言えない　４．そう思う　５．強くそう思う



	設問1	設問2	設問3	設問4	設問5	設問6	設問7
■H25年度	2 93	3.76	4.1	3.93	3.9	3.36	3.81
□H26年度	3.19	3.93	4.21	3.98	4	3.88	3.61

（平成 25 年度および平成 26 年度協働実践研究プロジェクトアンケート結果より抜粋）

（水準）　期待される水準を上回る

（判断理由）

①　ほとんどの大学院生が修了要件以上の単位を「優」の評価で修得し，修士論文等の審査に合格して修了しており[1)]，このことは修了生が教科の専門性を高め実践力を向上させる学修を十分おこなったことを示している。その成果は本学紀要や学術論文誌に研究論文等としても公表されており[2)]，第１期と比較して論文数が1.3倍に増加しただけでなく，学会賞を受賞するなど質においても向上を示している[3)]。

[1)] 資料 2-1-3	：修士課程大学院生の修了状況　P2-52
資料 2-1-4	：単位取得状況（修了生の修了時平均取得単位数）　P2-52
資料 2-1-5	：修士課程院生の成績状況　P2-52
[2)] 資料 2-1-8	：福井大学紀要等に掲載された大学院生の論文　P2-55
資料 2-1-12	：学術雑誌に掲載された大学院生の論文　P2-58
[3)] 資料 2-1-13	：大学院生の論文の掲載先と数　P2-59

②　修士課程大学院生の多くが各分野の専門的見識を高め，複数の専修免許を取得して修了しており[4)]，これは福井県の教育現場において，修了生が教育内容の充実や学校改革に貢献することへの期待に応えている。

[4)] 資料 2-1-10	：修士課程における専修免許状取得状況　P2-58

③　「協働実践研究プロジェクト」の教育内容に対する大学院生からの評価は高い[5)]。さらに，「意識・満足度調査」において，第１期最終年度と比較して，ほぼすべての項目において満足度が向上している[6)]。ここから，複数の特徴的な教育プログラムを有する本研究科の教育課程における教育が，教科の専門性を高め，教員としての資質能力を高める経験等を含む学修への大学院生の期待に十分応えていることを示している。

[5)] 資料 2-1-17	：協働実践プロジェクトアンケート　P2-61
[6)] 資料 2-1-15	：教育学研究科教育全般に関しての満足度　P2-59
資料 2-1-16	：教育学研究科の教育成果に対する学生の自己評価　P2-60

観点　進路・就職の状況

（観点に係る状況）

●進路・就職状況，その他の状況から判断される在学中の学業の状況

【キャリア支援への取組】

平成 27 年度「意識・満足度調査」において，進学・就職支援および自らの就職先に関して，「十分満足」「満足」と答えた学生は 70%を超えている。第１期最終年度である平成 21 年度は 54%であり，満足度は大きく向上している（**資料 2-2-1**）。

資料 2-2-1　就職支援および就職先への満足度

設問１：進学・就職支援（指導教員，就職支援室等）について，あなたはどの程度満足していますか。
設問２：自分の進学・就職先について，あなたはどの程度満足していますか。

	年度	十分満足	満足	やや満足	やや不満	不満
設問１	平成 21 年度	29.2%	25.0%	37.5%	8.3%	0.0%
	平成 27 年度	31.6%	42.1%	15.8%	5.3%	5.3%
設問２	平成 21 年度	37.5%	16.7%	33.3%	8.3%	4.2%
	平成 27 年度	50.0%	25.0%	12.5%	6.3%	6.3%

（平成 21 年度及び平成 27 年度「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」結果より抜粋）

【進学・就職の状況】

修了者のうち８割以上が就職を決めており，就職希望者の就職率は９割を超えている。博士後期課程等への進学や留学生の帰国も含めた進路決定率も９割以上である（**資料 2-2-2**）。

資料 2-2-2　教育学研究科　修了生の進学率・就職率・就職希望者就職率

入学年度	修了者 (a)	進学者 (b)	進学率 (b/a)	就職希望者 (c)	就職者 (D)	帰国等 (E)	修了者に対する就職率 (D/A)	就職希望者に対する就職率 (D/C)	修了者に対する進路決定率 (B+D+E/A)
H22	61	1	1.6%	54	52	5	85.2%	96.3%	95.1%
H23	66	1	1.5%	65	63	0	95.5%	96.9%	97%
H24	57	0	0%	57	53	0	93%	93%	93%
H25	70	0	0%	70	69	1	98.6%	98.6%	100%
H26	67	1	1.5%	66	62	0	92.5%	93.9%	94%
H27	52	0	0%	52	50	2	96.2%	96.2%	100%

（事務局資料）

【就職先の特徴】

① 修士課程修了者の過半数以上が教員として就職し，２割～３割は企業等や公務員に就職している（**資料 2-2-3**）。教職開発専攻では，すべての学部卒院生が教員として就職し，正規採用 47 名（約 77%），臨時任用 12 名（約 23%）と高い就職率を維持している（**資料 2-2-4**）。

資料 2-2-3　修士課程の修了生　進路先内訳　（人）

	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
教員	23	15	29	22	17
進学	1	0	0	1	0
企業，施設団体	12	7	10	5	7
公務員	2	2	1	1	1
未定	2	3	1	3	0
修了生　計	40	27	41	32	25

（事務局資料）

資料 2-2-4　教職専門性開発コース修了者の就職状況

（人）

修了年月	修了者数	教員採用(内定)状況							企業等採用(内定)状況		
			正規採用（修了時）	臨時任用（修了時）	正規採用	臨時任用	福井県内	福井県外		福井県内	福井県外
H23.3	5	5	3	2	5	0	5	0	0	0	0
H24.3	9	9	6	3	8	1	9	0	0	0	0
H25.3	10	10	7	3	9	1	8	2	0	0	0
H26.3	14	13	8	5	12	1	7	6	1	1	0
H27.3	15	15	6	9	7	8	11	3	0	0	0
H28.3	8	7	6	1	4	3	4	3	1	1	0
計	61	59	36	23	45	14	44	14	2	2	0

（事務局資料）

② 教員志望者のほとんどは福井県内において教職（非常勤講師を含む）に就いている（**資料 2-2-5**）。

資料 2-2-5　修士課程の修了生　教職者内訳　（人）

	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
正教員・福井県	5	2	7	13	9
正教員・県外	1	0	1	0	1
臨時的任用教員	13	7	17	7	6
現職	4	6	4	2	1
教員就職者　計	23	15	29	22	17

（事務局資料）

③ 企業・団体・公務員等への就職も毎年度一定数いる。大部分は県内の企業に就職しているが，毎年１～２名は県外の企業や公務員職に採用されている（**資料 2-2-6**）。

資料 2-2-6　修士課程の修了生　進路先内訳　（人）

	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
県内企業	11	5	6	3	1
県外企業	1	2	0	1	4
帰国就職	0	0	4	1	2
県内公務員	2	1	0	0	1
県外公務員	0	1	1	1	0
企業等就職者　計	14	9	11	6	8

（事務局資料）

●在学中の学業の成果に関する修了生及び進路先・就職先等の関係者への意見聴取等の結果とその分析結果

【修了生調査内容】

就職後の修了生への意見聴取の結果から，修士課程における教育内容が，確かな専門性および実践力の向上，学校教育の課題へ対応できる資質・能力の育成，多様なニーズに応える学習支援を行う能力や学校での協働的な探究を具現する力の育成等，本修士課程がめざす基本的な成果に結実しており，大学院生の自らの資質・能力の向上への期待に着実に応えていると判断できる（**資料 2-2-7**）。

資料 2-2-7　修士課程での学修の成果についての修了生の意見の例

質問項目

１．大学院での学びについて
２．協働実践研究プロジェクトを受講して学んだこと
３．修了研究を通しての学びについて
４．大学院での学びが今の仕事にどのような影響を及ぼしているか

○修了生 A（平成 23 年度修了・小学校教諭）

１．教科を超えて，授業やラウンドテーブルで知り合った仲間とは，今もつながっており，授業や学校について，学び合える環境になっています。そういった意味でも，大学院での時間は，非常に有意義な物でした。
２．ＣＳＴプログラムを受講することで，小学校の枠，中学校の枠を超えた学び合いがそこにはありました。小学校の先生ならではの視点，中学校の先生ならではの視点それぞれを学ぶことで，今の自分の授業スタイルがあるようにも思います。また，いろいろな学習会に参加させて頂けた事で，さらなる専門性の向上にもつながりました。
３．大学院では，物理化学の側面からみた有機化学の研究を行えたことが私にとっては，とても大きな経験でした。ホスホールを用いた蛍光物質の生成。そして分析。その研究の考え方は，理科を教える側になった今でも児童の思考の中で生かされていると思っています。
４．大学院では，自由に研究をする時間を与えて頂きました。その甲斐あって，小学校の授業のスタイルも課題を与え，それを解決するというアクティブラーニング型の授業を行っています。それは，大学院で学んだ研究の方法が根底にあります。また，小学校，中学校の授業を多くみせて頂けたこと。理科の補助員として中学校に長く行けたこと。今の教育観や自分の仕事の礎になっていると感じています。

○修了生 B（平成 26 年度修了・小学校教諭）

１．大学院での学びは，学部での学びが基礎であるとすると本当に，応用という感じでした。学部の授業では教育や教科についての基本的事項や重要な事項を教員がいろいろと教えてくれます。それに対して，大学院では，いろんな資料を自分で探してきてそれを発表する，いろいろな事象の中から問題を自分で見つけ，その解決策を考える，という感じで，自分でいろんな問題を考えていくところから始まるんだなと思いました。その経験は，教職に就いた今でもとても役立っています。学部時代のように，先生方がある程度道筋を立ててくれた中だけで学習していたら，たぶん，個性のない指導案をたくさん書いていたと思います。でも今は，大学院での学びの経験を生かして，一つ一つの単元ごとに自分なりの問題を見つけて，それを中心に指導案を立てています。
２．大学院の授業の中で，協働実践プロジェクトが自分の中ではとても大きなものでした。最初は２年間も何をやるのだろうかと思っていましたが，学校での授業を想定した授業案の立案，それも自分の専門ではない分野の縦断的な内容のカリキュラムの立案，やっているときには本当に大変でしたが，これを経験したことで，いろいろな分野の内容を連携させた授業案の作成ということが，何となくわかるようになったと思います。そういう意味で，実践力という点では，私は非常に向上したと思います。

○修了生Ｃ（平成 24 年度修了・高等学校教諭）

１．特に教科の専門性が高まったと感じている。公民的資質の育成に対し，教科としてどのような作りになっているのか，どのように分析すればよいのかを各講座で教授し，附属小中や至民中での研究授業の参観することで，実際の現場で社会科という教科がどのように扱われているかを学んだ。

２．実在する社会問題を教科としての枠組みを超えて解決していこうという取り組みは，現代に求められる公民的資質の育成に関し，有効的な教育であると感じた。従来の教科としての系統性を重んじる教授法とは異なり，物事を多面的に考え，教科間のつながりを意識しそれぞれの研究領域を活かした問題解決アプローチは，私自身の実際の授業においても変化をもたらすようになった。自身の専攻する公民という教科において，家庭科ではどこまで学習するのか，数学で学ぶ数式を用いることはできないか，言語活動を取り入れることはできないか，など他教科を意識した授業づくりを行うようになった。

３．修士論文作成のため，文献を学び問題を研究する手法，図式化して自身の理解と他者への理解を図る手法などを学んだが，その手法は実際に教育現場に立った今も教材研究でも役に立っている。内容面でも技術面でも修論を作成した経験は自身の大きな財産になったと考えている。

４．大学院での学びを通し，現代社会の問題に対し多面的な見方で問題を分析できるようになった。また，教育教授の方法に対するさまざまな手法が身についたと感じている。

○修了生Ｄ（平成 25 年度修了・特別支援学校講師）

１．少人数の仲間と取り組む大学院の授業は，自分の考えを一から作り上げたり，見つめ直したり，相手の意見に対して意見を言ったり，まとめたり，常に自分の考えを巡らして院生同士が互いに刺激しあえる場であった印象が強い。みんなが集まる院生室では，たわいもない話から授業で取り上げられた内容に発展して，また本音で話し合いができる環境に恵まれていた。

２．障害者は，適応能力の低さや体力面の問題，障害特性からくる困難などにより，離職率が高く，就職率が低いという現状を学び，この現状を少しでもなくすためにはどうしたら良いかを身近な福井大学就労支援室に着目して，就労支援の実態や課題について考えた。周囲に認識してもらえること，認めてもらえること，感謝してもらえることが，彼らのやりがいにとてもつながっていることに気付き，雇用側の理解，周囲の理解で働く環境が変わり，障害者にとっての居場所をつくることができるということを学んだ。就労支援という大きなテーマから始まったプロジェクトであったが，まず自分たちにできることが何かについて考え，実践していくことで少しずつでも変えられることがあることを知った。小さな事でも，積極的にいろんな人たちとかかわっていきたいと思えたプロジェクトであった。

３．私の修士論文のテーマは，社会的コミュニケーションスキルの弱い人に対する支援に向けた表情認知及び表情表出に関する研究であった。他者の感情を理解することは円滑な対人関係を築いていくために必要なことであり，他者の感情を理解する表情認知能力と自分の感情を他者に理解してもらおうとする表情表出能力の両方が重要となってくる（双方向のコミュニケーション）と考え，表情認知及び表出の能力が，表情を構成する顔の部位や表情筋に着目したフィードバック訓練によって向上するか検討し，ASD など社会的コミュニケーションに困難を抱える人達の支援方法開発の一助とすることを目的として研究を進めた。修士論文を進めていく中では，１日に何本もの文献を読み，研究結果や考察について自分なりに検討することで，「表情」という分野においてのプロフェッショナルとして自信を持って研究に向かう姿勢や，研究の妥当性や信頼性を考慮し研究を多面的に分析し検討する姿勢，常に研究の目的や意義について立ち返り見つめ直すこと等の研究の基本的な姿勢や自分のやりたい研究の押し進め方を学んだように思う。

４．協働実践プロジェクトでの経験は，高等部所属時代の進路指導を含め，子どもとのかかわり方や見方に影響を及ぼしていると思う。院生時代に実際に障害のある方とかかわりながら思いや意見を伺うことができたこと，かかわりの中で変化が生じ，かかわりの輪が広がっていくのを感じることができた経験はとても貴重で，積極的に自分ができることから，まず子どもたちや周りに働きかけてみることを今の仕事でも心がけている。実りある３年間だったが，正直なところ研究や課題に追われて苦しい思いもたくさんした。今，憧れであった教職の現場で子どもたちとともにいろいろなことを実践できることが本当に幸せで，日々の中で大変なことや悩むこともあるが，周りの先生にフォローしてもらいながら，大学院時代の経験をもとに乗り越えられていると感じている。

〇修了生Ｅ（平成 26 年度修了・福祉施設長）

１．とても有意義な２年間であった。特に，特別支援教育と障害児者心理，発達心理等の学びを深め，学校教育で現在，実施されている支援を必要としている子どもらへの取組みを勉強することができ，それらは現業務に大変，役立っている。また，在学中に臨床発達心理士の資格を取得することができ，資格取得のプロセスで学んだことは，現場で障害児者のアセスメントやインテークを実施する際に活きている。

２．私は「特別支援教育コーディネーター実習」を受講したが，実際に特別支援学校の活動や障害者就労支援の現場に参加させて頂き，交流を持ちながら，「福祉」の立場からだけでは見えてこない「教育」を主眼とした障害児者の生涯における支援に関しての知識の幅が拡がった。また教育との連携が，なぜ，今まで上手くいかなかったのか等の問題点を考えるよいきっかけとなった。特別支援教育コーディネーター実習担当教員のご指導で，メンバーが力を合わせて大学紀要に論文を投稿することが出来，修論とは異なる研究を形にできたのは，大きな喜びであり，有意義な学びであった。

３．自閉症スペクトラム障害支援に繋げる為の基礎研究をテーマに修論を仕上げた。科学的証拠に基づく障害児者支援の理解を社会に伝えられる研究を目指していたが，修論を完成させるまでに，様々な角度からのテーマにまつわる学びを得られ，知見が拡がった。大学院修了後も，目指していた研究を何かしら形にできるまでは，研究活動に携わっていきたいと考え，今年度から，博士課程（連合小児発達学研究科）に進学した。そのような考えに至ったのは，修論を仕上げたプロセスでの学びがとても大きい。

４．【「教育」「医療」「福祉」の連携】といわれているが，実際，同じ会議に出ていても，共通認識を持っていないような現状であったが，少なくとも教育分野との連携がスムースに実施できるようになった。またそのようにするために，職員に対して的確な指示を出せるようになった。障害児者教育，障害児者心理等の学術的な学びは，障害児者支援や療育において，技術や質の向上や，業務に携わる他の職員教育に良い影響を及ぼしている。切れ目のない障害児者の生涯発達を支援する具体的な方策を構築できるようにしていきたいと考えている。

（福井大学大学院教育学研究科修了生アンケート結果より抜粋）

【就職先調査内容】

本修士課程修了生が勤務する学校等の管理職・上司を対象に行ったアンケートでは，修了生の教員としての仕事の遂行状況について概ね高い評価を得ている。大学院での学修が良好な評価に結びついていることが推察できるとともに，地域や学校関係者からの教育内容の充実や学校改革へ貢献することへの期待に十分応えていると判断できる（**資料 2-2-8**）。

資料 2-2-8　修士課程修了生の就職先上司に対するアンケート結果の例

質問項目

１．本人の仕事の遂行状況について

２．大学院の学びを経験することが仕事にどのような影響を及ぼしているか

〇P 高等学校教諭

１．授業のみならず，裁判の傍聴や 18 歳選挙関連のイベントへの生徒勧誘・参加など，多岐にわたって活動された。また，生徒のリクエストに応え，センター試験の受験指導や小論文の指導もおこなっていただいた。授業でも映像を利用するものや，新聞記事を読ませるなどの多くの工夫を加え，毎年反省を生かして常に新たなチャレンジを組み込んで授業内容の再編成をされていた。生徒や周囲の教員からの評価も非常に高く，学校現場の様々な局面で活躍された。

２．異なる学類から修士へ進まれ，教育現場にとっても社会においても実践的な分野・テーマを選び，調査方法やプレゼンテーションのスキルを磨かれている。充電と深化の両面での研鑽を積んだことと思われる。本校勤務時も，他校での実践例や教科を横断しての授業構成，外部機関の行事に関する情報などを積極的に取り入れていた。このような多角的な面から業務を構成しようとする彼の姿勢は特筆すべきものである。学校内，特に１箇所に長期間いると「ベテランの教員・仕事」が成立する一方でセクト化・タコツボ化しやすいものであるが，経験が浅くとも彼のようにササラ型の仕事ができ，生徒や教員からの高い評価をみる限り，その仕事の質はベテランのそれに遜色はない。あくまでも学部生との比較になるが，修士の２年間の活動で手に入れた多角的視野，手法やスキル，そしてその前提となる学問への興味やおもしろさは，現場での実践的な活動に多く寄与するものと思われる。それは授業の内容だけに限らず，課外活動や外部機関との連携においても大きな力になるだろう。

〇Q 小学校校長

１．新採用から４年間，本校で体育主任・生徒指導主事を経験し，児童の特性を見極め個に応じたきめ細かな指導や鍛える指導にも力を発揮した。特に学習面においては過去の問題分析に留まらず，児童の実態に応じた指導法を継続し多大な成果を収めることができた。本校の核と言ってもおかしくない活躍である。学級経営の面においても，個人を生かしつつ集団のあるべき姿を機会あるごとに指導しまとまりのある学級へと導いていった。児童の心を理解する能力や意欲に長け，先入観や固定観念で判断，指導することがない。更に，保護者の悩みや相談に真摯に対応し，信頼関係を築く努力を惜しまない人物である。

２．小学校の枠を超えて更に高度の実験を行うことで，理科好きな児童を育成している。今年から始まった理数グランプリ（県の政策）に早速応募し，毎週放課後理科好きの児童を残し，様々な実験・観察を行っている。学校だけで行えない実験等は，地元のエネルギー科学教室（日本原電主催）に赴き，理科グランプリに向けた学習に力を入れている。

〇R 福祉施設理事

１．当該職員は，大学院終了後，弊法人内の障害者支援部門の責任者となり，障害者の入所および通所支援，障害児発達（通所）支援，相談支援事業等の管理運営を行っている。「教育」「医療」「福祉」の連携が必要とされている障害児者支援において，「教育学」の立場からの障害児者の学びは，「福祉」分野においても，知識拡大や職員教育にも役立っていると見受けられる。

２．大学院で培った障害児者教育や支援の知識は，職場で必要とされる専門性の高い支援の構築，起こりうる問題への制御，業務へのマネージメント遂行に役立っている。また実際に特別支援教育の現場に入れたことも，視野を拡げ，障害のある方の生涯発達を理解，支援を構築する為にとても役に立つよい経験になっていると思われる。

○S 特別支援学校教諭

１．生徒に直接関わる学習指導や進路指導では，生徒の障害特性を理解した対応，生徒が興味を抱く教材開発（研究）等で適切に業務を遂行した。そのことによって，保護者の信頼も得ることができていた。また，現職教育や研修会への参加によって，特別支援教育全般における知識や情勢等研鑽を深めることができた。

２．本人の力量が元々あったのであろうが，教員免許取得のために大学院に進んだことによって，幅広く，しかも深い知見や対応が必要とされる特別支援教育現場で通常の教員と同等に業務を遂行したと考えられる。特に，協働実践プロジェクトでは，障害者就労支援室の実態や課題について考える機会となった。周囲の理解が得られることで，障害者の働く意欲が高まることを実感できた。また，修士論文を書くことによって，研究の妥当性や信頼性を常に考えることができ，研究の過程や結果についても多面的に分析・検討することができた。これら大学院での学びによって，教育現場での即戦力につながったと確信する。

○T 小学校教頭

２．特別，学部卒か大学院卒かを意識したことはありませんが，授業や特別活動などを何度か拝見すると，自分で考えて子どもたちと向き合っているんだなっていうのは伝わってきます。どうしても採用１年目の教員や講師は，借り物の指導案だったり考えだったりっていうのが結構，多く見られるんですよね。今まで，習ってきたものをそのまま出すっていう感じですかね。それが，彼女の場合は，大学院の期間の学習成果なんですかね，しっかり自分の言葉で子どもたちと接しているっていうように思えます。これからの教員は自分の言葉で教育を語れないといけませんから，そういう意味では，今後の福井県の教育を担っていってくれる人材だと強く思います。

○U 高等学校校長

１．若手の英語科教員として，熱心に指導。授業においては，一方的な講義形式に陥ることなく，生徒との活発なやりとりを通して，学習内容の理解促進を図っている。明るく，おおらかな本人の性格もあって，授業は楽しく活発な雰囲気に包まれている。また，生徒の学力に応じたリテリング活動に積極的に取り組んでいるほか，ICT 利用にも関心を示す。研修会等への参加を通じて，自己研鑽にも取り組むなど，今後の教員としての成長を大いに期待している。進路指導については，初めての担任経験のため，クラス経営や進路指導には未熟な点も多い。しかし，積極的に学んでいこうとする姿勢が他の教員から好感を集めている。職場での人間関係も良好で，教師集団による組織的・系統的な指導を弁え，心がけている。フットワークも軽く，煩瑣な業務にも快く対応している。快活で素直な性格。生徒との年齢差も小さいこともあり，生徒と共に教師としても成長しているように感ずる。今後の更なる成長を期待できる人材である。

（福井大学大学院教育学研究科就職先調査結果より抜粋）

（水準）　期待される水準を上回る

（判断理由）

①　本研究科修了者の進路決定率は９割以上，地域社会の教育の担い手として教職等の専門職に就く者は，研究科全体では約７割となっている[1)]。また，多くの大学院生が本研究科における就職支援について満足と答えている[2)]。ここから，本研究科における教育課程が大学院生の就職への期待に応えると当時に，専門職としての能力・資質の育成等の基本的な成果を達成していると判断できる。

[1)] 資料 2-2-2　：教育学研究科　修了生の進学率・就職率・就職希望者就職率　P2-63 資料 2-2-3　：修士課程の修了生　進路先内訳　P2-64 資料 2-2-4　：教職専門性開発コース修了者の就職状況　P2-64 [2)] 資料 2-2-1　：就職支援および就職先への満足度　P2-63

②　就職した修了生への意見聴取において，研究科での専門的な学びの深まりや実践的学習による力量形成，仲間との協働による学習等が，学校現場において十分に役立っているという回答が得られている[3)]。ここから,「学び続ける教員」としての資質能力を高め，学校現場で専門性を活かすことへの期待に応える教育を本研究科が実施していると判断できる。

[3)] 資料 2-2-7　：修士課程での学修の成果についての修了生の意見の例　P2-65～67

③　大部分の修了生は福井県内において教職等の専門職として就職しており[4)]，就職先への意見聴取において，専門職としての資質能力について良好な評価が得られている[5)]。ここから，地域，教育委員会，学校関係者からの，高い資質能力を備え学校教育の活性化を担うことのできる教員養成への期待に十分応えていると判断できる。

[4)] 資料 2-2-4　：教職専門性開発コース修了者の就職状況　P2-64 資料 2-2-5　：修士課程の修了生　教職者内訳　P2-64 [5)] 資料 2-2-8　：修士課程修了生の就職先上司に対するアンケート結果の例　P2-68～69

Ⅲ　「質の向上度」の分析

（１）分析項目Ⅰ　教育活動の状況

① 修士課程では,「協働実践研究プロジェクト」「コア・サイエンス・ティーチャー事業」が外部評価および認証評価で高い評価を受けた[1)]。また，平成 25 年度より新規に「授業力向上のための支援事業」を立ち上げ，大学院生がより実践的な授業開発力を修得できる体制を構築した[2)]。本事業は教育現場から高い期待と評価を得ており[3)]，平成 26 年度文部科学省委託事業「総合的な教師力向上のための調査研究事業」に選定された。ここから，修士課程全体として総合的な教育活動の質の大きな向上を示していると判断できる。

1)	資料 1-1-9　：協働実践研究プロジェクトの概要　P2-9
	資料 1-1-12　：協働実践研究プロジェクトを受講した大学院生の感想　P2-11
	資料 1-1-23　：コア・サイエンス・ティーチャー（CST）事業の概要　P2-20～22
	資料 1-1-25　：上級 CST 養成プログラムを受講した現場教員の感想（抜粋）　P2-22～23
	資料 1-1-26　：「大学機関別認証評価」（平成 27 年度受審）評価報告書（抜粋）　P2-23
	資料 1-1-43　：外部評価委員の教育学研究科（修士課程）に関する意見（抜粋）　P2-34
2)	資料 1-1-17　：授業力向上支援事業の概要　P2-13～14
	資料 1-1-20　：授業力向上のための支援事業の実施状況（平成 26 年度）　P2-15～17
3)	資料 1-1-22　：「授業力向上支援事業」における教育委員会関係者等による評価（抜粋）P2-18～19

② 教職開発専攻では，特別経費：国立大学機能強化等の採択を受けて，多様な教員の採用[4)]，「教師教育改革コラボレーション」による他大学との連携[5)]，海外教育機関によるベンチマーキングと研究交流等[6)]，多方面に活動を拡充することにより，「学校拠点方式」による教員養成と教師教育を改革・展開している。これらの実績から，その教育方法・内容の質が大きく向上したと判断できる。

4)	資料 1-1-31　：教職大学院の課程担当教員資格基準　P2-26～27
5)	資料 1-1-28　：「教師教育改革コラボレーション」の概要　P2-25
6)	資料 1-1-29　：教職開発専攻海外ベンチマーキング・調査　P2-25

（２）分析項目Ⅱ　教育成果の状況

① 「協働実践研究プロジェクト」における院生との協働研究の成果は，広く社会に還元されるとともに[1)]，学術雑誌や本学紀要等へ論文として公表され，学会賞を獲得するものもあり，第１期と比較して，論文数および質において明らかな向上が見られる[2)]。また，こうした専門性を身につけた修了生の就職先からの評価も高い[3)]。ここから教育成果の質の向上を達成していると判断できる。

1)	資料 1-2-4　：協働実践研究プロジェクトの実践研究を社会に還元した例　P2-40
	資料 1-2-5　：主権者教育に対応したカリキュラム開発に関する新聞報道　P2-41
	資料 1-2-16　：協働実践研究プロジェクトを基盤に科学研究費補助金を獲得した研究課題　P2-46
2)	資料 2-1-8　：福井大学紀要等に掲載された大学院生の論文　P2-55～56
	資料 2-1-12　：学術雑誌に掲載された大学院生の論文　P2-58
	資料 2-1-13　：大学院生の論文の掲載先と数　P2-59
3)	資料 2-2-8　：修士課程修了生の就職先上司に対するアンケート結果の例　P2-68～69

② 教職開発専攻では実践研究交流集会での大学院生の実践報告を推進するとともに [4]，「教師教育改革コラボレーション」の設立により [5]学修成果の公表機会を学外・他都府県に開き，より高い水準の検証を実施している。また，関係機関との連携により現職教員研修プログラムの開発もおこなった [6]。ここから教育成果の質の向上を達成していると判断できる。

[4] 資料 1-2-18 ：平成 26 年２月・３月 公開実践研究交流集会一次案内 P2-47
[5] 資料 1-1-28 :「教師教育改革コラボレーション」の概要 P2-25
[6] 資料 1-2-6 ：教職開発専攻のミドルステップアップ研修の概要 P2-41

３．教職開発専攻

Ⅰ　教職開発専攻の教育目的と特徴・・・・・・３－２

Ⅱ　「教育の水準」の分析・判定　・・・・・・３－４

分析項目Ⅰ　教育活動の状況　・・・・・・３－４

分析項目Ⅱ　教育成果の状況　・・・・・・３－39

Ⅲ　「質の向上度」の分析　・・・・・・・・・３－48

Ⅰ　教職開発専攻の教育目的と特徴

１．教育目的

（１） 教育活動を実施する上での基本方針

本専攻の理念は，知識社会に生きる子どもたちの力を培う教師の専門性開発と学校の改革を支援することにある。そのために，学校・教育委員会・大学院の連携による「学校拠点方式」を教育活動実施上の基本方針と定め，現職教員院生と学部卒院生の学びを支えながら学校の実践の発展を支え，国際的な教育改革をリードすることを目的としている。

（２） 達成しようとする基本的な成果

本専攻では，以下４つの力を現職教員院生と学部卒院生に涵養することを達成しようとする基本的な成果と位置づけている。

(A) 学習と成長を支えるファシリテーター・コーディネーターとしての実践力
(B) 学習の協働組織とその改革のマネジメント力
(C) 実践の質を不断に高め発展させていく省察・研究能力
(D) 公教育としての学校を担う専門職としての教員の理念と責任

これらの力を院生に涵養するために，福井県内外及び国内外の教育機関との協働連携ネットワークを構築することをめざしている。

（３） 大学の基本的な目標との関連

本専攻の基本方針は本学の中期目標における教育に関する基本的な理念である「人々が健やかに暮らせるための科学と技術に関する世界的水準での教育・研究を推進し，地域，国及び国際社会に貢献し得る人材を育成する」に関連する。

（４） 教育研究等の質の向上に関する目標との関連

本専攻の教育目的は中期目標の「基本目標『21 世紀のグローバル社会において高度専門職業人として活躍できる人材の育成』を目指して，国際的にも通用する質の高い教育を実施する」及び「質の高い教育を実現するため，教育内容・方法や成果を点検・評価するシステムを構築し，不断に改善を行う教育実施体制を整備する」に関連する。

２．組織の特徴や特色

本専攻は学部卒院生の「教職専門性開発コース」，現職教員院生の「スクールリーダー養成コース」の２コースを設置し，「学校拠点方式」による教員養成と教師教育を推進するために，学校改革・授業改革に協働で取り組む学校・機関を「拠点校」に位置づけることに組織の特徴があり，現在，拠点校は附属学園（４校園），県内公立学校５校・私立学校１校，教育機関３所，東京都板橋区学校２校及び教育機関１所，奈良県国立大学附属学校１校，神奈川県私立学校１校がある。組織の特色として，各拠点校の担当・運営業務・授業をすべて複数教員で担当し，院生との協働実践研究を多角的に支援可能な体制を編成している。また，他大学との協働機構「教師教育改革コラボレーション」を創設して福井県外の教師教育を支援し，全国的な教育改革を推進している。本取組は平成 25 年度特別経費に採択され，平成 26 年度から特別経費：国立大学機能強化に引き継がれ，教育改革の革新的実践として極めて高い評価を得ている。さらに，平成 27 年度には OECD や JICA といった国外教育機関と連携し国際的な教育実践研究を展開しており，「学校拠点方式」による教員養成と，教師教育をグローバル社会の中で実現する教員組織の再編成及び教育内容の国際化を推進している。

３．入学者の状況

本専攻の入学定員は 30 名で，平成 22 年度～平成 27 年度の実入学者数は以下の通りである。

平成 22 年度 29 名（教職専門性開発コース９名，スクールリーダー養成コース 20 名）
平成 23 年度 32 名（教職専門性開発コース 13 名，スクールリーダー養成コース 19 名）
平成 24 年度 30 名（教職専門性開発コース 13 名，スクールリーダー養成コース 17 名）
平成 25 年度 33 名（教職専門性開発コース 15 名，スクールリーダー養成コース 18 名）
平成 26 年度 27 名（教職専門性開発コース８名，　スクールリーダー養成コース 19 名）
平成 27 年度 34 名（教職専門性開発コース８名，　スクールリーダー養成コース 26 名）

［想定する関係者とその期待］

- **教育委員会（以下「教委」という。）**：「学校拠点方式」による教師教育の取組を通して，自治体における学校教育全体の活性化及び教育の質の向上を期待している。
- **学校**：本専攻との協働実践研究を通して，学校の課題解決の推進，入学現職教員を中核とした教職員全体の専門性開発の推進を期待している。
- **現職教員院生**：本専攻での学修を通して，学校の中核となって同僚との協働を実現し，他校との連携を図り，学校及び地域の中核リーダーになっていくことを期待している。
- **学部卒院生**：本専攻での学修を通して，21 世紀の「新たな学び」を実現可能な資質能力，「学び続ける教員」としての素養を身につけ，将来の学校教育のリーダーとして成長発達していくことを期待している。

Ⅱ　「教育の水準」の分析・判定

分析項目Ⅰ　教育活動の状況

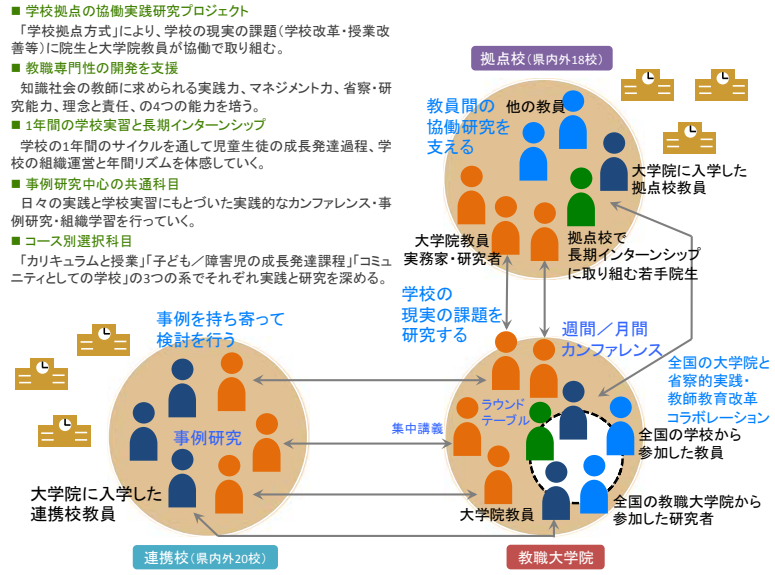
観点　教育実施体制

（観点に係る状況）

【「学校拠点方式」に基づく教員組織編成・教育体制の工夫とその効果】

①　本専攻は「学校拠点方式」による教員養成と教師教育を推進する教育課程を編成し（**資料 1-1-1**），それに基づく協働組織体制を採る。全教員で学校・授業担当チームを組み（**資料 1-1-2, 3**），学校・機関と院生の学修研究の支援を連動推進している。この特徴的な教員組織編成・体制により，学校・機関は本専攻教員と協働で実践と教師教育の取組を不断に発展させ，学校・機関の課題に即した実践研究が可能となっており，教委・学校関係者から極めて高い評価を得ている（**資料 1-1-4**）。

資料 1-1-1　「学校拠点方式」による教員養成・教師教育の概要



（事務局資料）

資料 1-1-2　平成 27 年度拠点校・連携校と教員担当一覧

種別	番号	学校名	院生名						大学担当者名								
拠点校	1	附属幼稚園							青木	岸野	稲井				（小林真）	森	松木
	2	附属小学校	宮本	飯田	大橋	長谷川	池田	串		渡邉	岸野	三田村	小林真	木村	永谷		
	3	附属中学校	幸坂	佐藤恵	ボリン	田中	田村佳		森田	柳澤	木村	宮下				（小林真）	
	4	附属特別支援学校							天方	小嵐	松井					（笹原）	
	5	中藤小学校	高橋	吉田	山田芳	増谷	藤田		小林真	岸野	倉見	小嵐	加藤			（永谷）	（風間）
	6	至民中学校	堀	高田	松山				木村	二宮	杉山	半原	松木			（小林真）	
	7	丸岡南中学校	藤井芳	大黒	北川	山田晃			森	三田村	隼瀬	杉山	柳澤	小林和	（小林真）	（加藤）	（藤井）
	8	美浜中学校	山口						杉山	二宮	稲井					（稲垣）	
	9-1	福井東特別支援学校	吉川綿						小嵐	綾城						（松井）	（松木）
	9-2	福井東特別支援学校片見分校							小嵐	松井						（廣澤）	（笹原）
	10	啓新高等学校	墨谷	田村朋	藤井真				森	半原	宮下	小林和	西川			（松田通）	
	11	教育研究所	荒木						小林真	三田村	二宮	柳澤	風間			（宮下）	（冨永）
	12	嶺南教育事務所	藤本						森	山崎	松田通					（岸野）	
	13	特別支援教育センター							小嵐	綾城	風間					（松木）	（笹原）
	14-1	坂井区立中央中学校	星野						半原	森	綾城					（木村）	（小林和）
	14-2	坂井区立赤塚第二中学校							木村	半原						（石井恭）	
	14-3	坂井区教育支援センター	中野						宮下	山崎	倉見					（木村）	
	15	カリタス学園（小・中）	小野	黒瀬					森	松木	山崎	稲井				（石井恭）	
	16	福井県立大学附属中等教育学校	佐藤大	塩川					杉山	岸野	小林真					（木村）	（隼瀬）
連携校	1	福井県幼児教育支援センター	親						岸野	松木	山崎	稲井					
	2	安居中学校	高松						小林真	倉見	山崎	中川				（木村）	（藤井）
	3	足羽中学校	柘植	神部					半原	宮下	稲井						
	4	明倫中学校	大村						小林真	隼瀬	風間						
	5	春江小学校	山田俊						二宮	杉山	宮下	永谷					
	6	高椋小学校	名倉						綾城	小林真	倉見	永谷					
	7	鯖江・豊小学校	上島						森	半原	中川					（永谷）	（宮下）
	8	鯖江中学校	茨田						倉見	宮下	稲井						
	9	岡本小学校	小林						森	風間	稲井						
	10	勝山・野向小学校	山田啓						小嵐	綾城	小林和					（笹原）	（岸野）
	11	勝山・鹿谷小学校	平林						岸野	二宮	小林和					（加藤）	（石井恭）
	12	気比中学校	浜上						三田村	杉山	山崎						
	13	口名田小学校	正木						三田村	杉山	山崎	小林和					
	14	高浜中学校	北村						二宮	半原	綾城					（木村）	
	15	青郷小学校	砂原						二宮	半原	綾城					（木村）	
	16	嶺南東特別支援学校	河端						倉見	小林真	綾城					（小嵐）	（笹原）
	17	高志高等学校	西						三田村	杉山	西川	冨永				（松田湖）	（木村）
	18	勝山高等学校	吉川						二宮	松田通	小林和	隼瀬				（中川）	
	19	新座高等学校	金子						木村	小林真	三田村					（笹原）	（中川）
	20	富士市立高等学校	眺野						二宮	山崎	隼瀬	松田淑				（篠原）	

注 1　教職専門性開発コースM1　教職専門性開発コースM2　連絡担当スタッフ
スクールリーダー養成コースM1　スクールリーダー養成コースM2　（ ）副担当スタッフ

（事務局資料）

資料 1-1-3　３つの系と教員配置

系	専任教員（みなし客員・特命教員含む）			客員教員・非常勤講師・コーディネートリサーチャー		
第１系	木村　優	研	教育学	石井　恭子	実（コ）	理科教育
	小林　真由美	実（交流：福井）	カリキュラム・授業改革	藤井　佑介	研（コ）	教育方法学
	宮下　哲	実（交流：長野）	カリキュラム・授業改革	加藤　正弘	実（コ）	カリキュラム･授業改革
	隼瀬　悠里	研	比較教育学	永谷　彰啓	実（コ）	カリキュラム･授業改革
	風間　寛司	実	数学教育	西浦　民子	実（コ）	カリキュラム･授業改革
	小林　和雄	実	理科教育	皆川　純男	実（コ）	カリキュラム･授業改革
	青木　美恵	実（併任：附属）	理科教育	田中　奈津子	実（コ）	カリキュラム･授業改革
	渡邉　淳子	実（併任：附属）	造形教育	楊 欣	実（コ）	カリキュラム･授業改革
	森田　史生	実（併任：附属）	社会科教育	盧 珠 妍	実（コ）	カリキュラム･授業改革
第２系	森　透	研	教育実践史	松井　富美恵	実（非）	特別支援・障害児教育
	松木　健一	研	教育臨床心理学			
	岸野　麻衣	研	幼児教育			
	笹原　未来	研	特別支援・障害児教育			
	天方　和也	実（併任：附属）	特別支援・障害児教育			
	小嵐　恵子	実（特命）	特別支援・障害児教育			
	半原　芳子	研（特命）	言語教育学			
	綾城　初穂	研（特命）	臨床心理学			
	稲井　智義	研（特命）	幼児教育史			
第３系	柳澤　昌一	研	社会教育学	荒瀬　克己	実（客員）	教育行政マネジメント
	三田村　彰	実	教育行政マネジメント	鈴木　寛	実（客員）	教育行政マネジメント
	二宮　秀夫	実（交流：福井）	コミュニティとしての学校	冨永　良史	実（非）	コミュニティとしての学校
	倉見　昇一	実（交流：文科）	教育行政マネジメント	中川　美津恵	実（非）	コミュニティとしての学校
	山﨑　智子	研	高等教育	篠原　岳司	研（コ）	教育行政学
	玉木　洋	実（みなし客員）	コミュニティとしての学校	田中　治	実（コ）	教育行政マネジメント
	松田　通彦	実（みなし客員）	教育行政マネジメント			
	西川　満	実（みなし客員）				
	杉山　晋平	研（特命）	多文化共生教育			

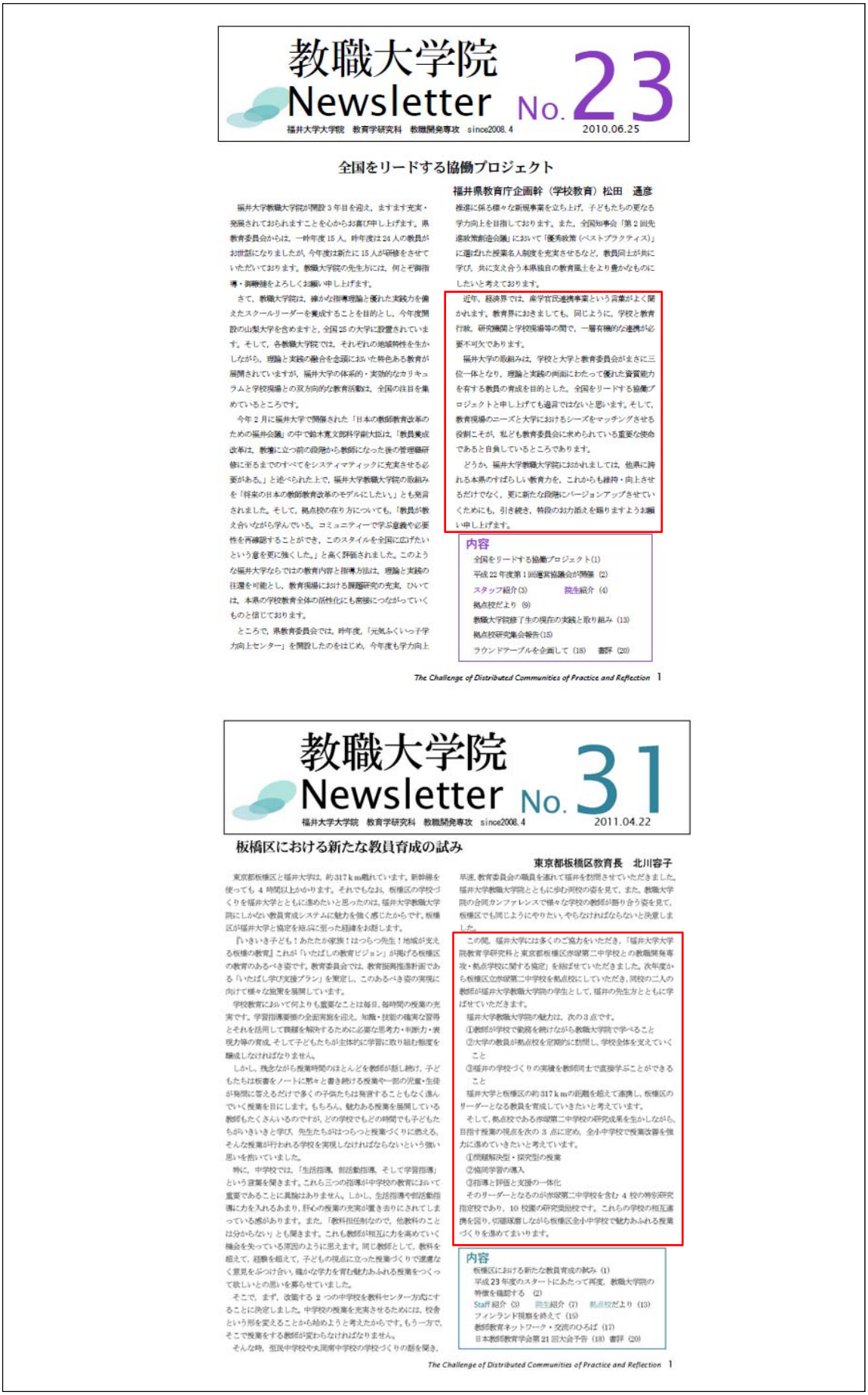
※第１系：カリキュラムと授業 ／ 第２系：子どもの成長発達 ／ 第３系：コミュニティとしての学校

※※表中の「研」は研究者教員，「実」は実務家教員，「交流」は自治体及び文部科学省との交流教員（任期３年交代制），「併任」は附属学園併任教員，「みなし客員」はみなし客員教員，「客員」は非みなし客員教員，「特命」は特命教員，「非」は非常勤教員，「コ」はコーディネートリサーチャー教員を示す。

※※※系ごとの固定的な教員編成は採らず，教育課程に即した二重の教員編成を採る。１つは学校等の協働担当支援チームで，もう１つは選択科目の実践研究のアプローチごとの研究支援チームである。

（事務局資料）

資料 1-1-4　教委・学校関係者からの高い評価



教職大学院 Newsletter No.23
福井大学大学院　教育学研究科　教職開発専攻　since2008.4　2010.06.25

全国をリードする協働プロジェクト

福井県教育庁企画幹（学校教育）松田　通彦

福井大学教職大学院が開設３年目を迎え，ますます充実・発展されておられますことを心からお喜び申し上げます。県教育委員会からは，一昨年度 15 人，昨年度は 24 人の教員がお世話になりましたが，今年度は新たに 15 人が研修をさせていただいております。教職大学院の先生方には，何とぞ御指導・御鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

さて，教職大学院は，確かな指導理論と優れた実践力を備えたスクールリーダーを養成することを目的とし，今年度開設の山梨大学を含めますと，全国 25 の大学に設置されています。そして，各教職大学院では，それぞれの地域特性を生かしながら，理論と実践の融合を念頭においた特色ある教育が展開されていますが，福井大学の体系的・実効的なカリキュラムと学校現場との双方向的な教育活動は，全国の注目を集めているところです。

今年２月に福井大学で開催された「日本の教師教育改革のための福井会議」の中で鈴木寛文部科学副大臣は，「教員養成改革は，教壇に立つ前の段階から教師になった後の管理職研修に至るまでのすべてをシスティマティックに充実させる必要がある。」と述べられた上で，福井大学教職大学院の取組みを「将来の日本の教師教育改革のモデルにしたい。」とも発言されました。そして，拠点校の在り方についても，「教員が教え合いながら学んでいる。コミュニティーで学ぶ意義や必要性を再確認することができ，このスタイルを全国に広げたいという意を更に強くした。」と高く評価されました。このような福井大学ならではの教育内容と指導方法は，理論と実践の往還を可能とし，教育現場における課題研究の充実，ひいては，本県の学校教育全体の活性化にも密接につながっていくものと信じております。

ところで，県教育委員会では，昨年度，「元気ふくいっ子学力向上センター」を開設したのをはじめ，今年度も学力向上推進に係る様々な新規事業を立ち上げ，子どもたちの更なる学力向上を目指しております。また，全国知事会「第２回先進政策創造会議」において「優秀政策（ベストプラクティス）」に選ばれた授業名人制度を充実させるなど，教員同士が共に学び，共に支え合う本県独自の教育風土をより豊かなものにしたいと考えております。

近年，経済界では，産学官民連携事業という言葉がよく聞かれます。教育界におきましても，同じように，学校と教育行政，研究機関と学校現場等の間で，一層有機的な連携が必要不可欠であります。

福井大学の取組みは，学校と大学と教育委員会がまさに三位一体となり，理論と実践の両面にわたって優れた資質能力を有する教員の育成を目的とした，全国をリードする協働プロジェクトと申し上げても過言ではないと思います。そして，教育現場のニーズと大学におけるシーズをマッチングさせる役割こそが，私ども教育委員会に求められている重要な使命であると自負しているところであります。

どうか，福井大学教職大学院におかれましては，他県に誇れる本県のすばらしい教育力を，これからも維持・向上させるだけでなく，更に新たな段階にバージョンアップさせていくためにも，引き続き，特段のお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

内容

全国をリードする協働プロジェクト(1)
平成 22 年度第１回運営協議会が開催 (2)
スタッフ紹介(3)　院生紹介 (4)
拠点校だより (9)
教職大学院修了生の現在の実践と取り組み (13)
拠点校研究集会報告(15)
ラウンドテーブルを企画して (18)　書評 (20)

教職大学院 Newsletter No.31
福井大学大学院　教育学研究科　教職開発専攻　since2008.4　2011.04.22

板橋区における新たな教員育成の試み

東京都板橋区教育長　北川容子

東京都板橋区と福井大学は，約 317ｋｍ離れています。新幹線を使っても４時間以上かかります。それでもなお，板橋区の学校づくりを福井大学とともに進めたいと思ったのは，福井大学教職大学院にしかない教員育成システムに魅力を強く感じたからです。板橋区が福井大学と協定を結ぶに至った経緯をお話します。

『いきいき子ども！あたたか家族！はつらつ先生！地域が支える板橋の教育』これが「いたばしの教育ビジョン」が掲げる板橋区の教育のあるべき姿です。教育委員会では，教育振興推進計画である「いたばし学び支援プラン」を策定し，このあるべき姿の実現に向けて様々な施策を展開しています。

学校教育において何よりも重要なことは毎日，毎時間の授業の充実です。学習指導要領の全面実施を迎え，知識・技能の確実な習得とそれを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成，そして子どもたちが主体的に学習に取り組む態度を醸成しなければなりません。

しかし，残念ながら授業時間のほとんどを教師が話し続け，子どもたちは板書をノートに黙々と書き続ける授業や一部の児童・生徒が発問に答えるだけで多くの子供たちは発言することもなく進んでいく授業を目にします。もちろん，魅力ある授業を展開している教師もたくさんいるのですが，どの学校でもどの時間でも子どもたちがいきいきと学び，先生たちがはつらつと授業づくりに燃える，そんな授業が行われる学校を実現しなければならないという強い思いを抱いていました。

特に，中学校では，「生活指導，部活動指導，そして学習指導」という言葉を聞きます。これら三つの指導が中学校の教育において重要であることに異論はありません。しかし，生活指導や部活動指導に力を入れるあまり，肝心の授業の充実が置き去りにされてしまっている感があります。また，「教科担任制なので，他教科のことは分からない」とも聞きます。これも教師が相互に力を高めていく機会を失っている原因のように思えます。同じ教師として，教科を超えて，経験を超えて，子どもの視点に立った授業づくりで遠慮なく意見をぶつけ合い，確かな学力を育む魅力あふれる授業をつくって欲しいとの思いを募らせていました。

そこで，まず，改築する２つの中学校を教科センター方式にすることに決定しました。中学校の授業を充実させるためには，校舎という形を変えることから始めようと考えたからです。もう一方で，そこで授業をする教師が変わらなければなりません。

そんな時，至民中学校や丸岡南中学校の学校づくりの話を聞き，早速，教育委員会の職員を連れて福井を訪問させていただきました。福井大学教職大学院とともに歩む両校の姿を見て，また，教職大学院の合同カンファレンスで様々な学校の教師が語り合う姿を見て，板橋区でも同じようにやりたい，やらなければならないと決意しました。

この間，福井大学には多くのご協力をいただき，「福井大学大学院教育学研究科と東京都板橋区赤塚第二中学校との教職開発専攻・拠点学校に関する協定」を結ばせていただきました。次年度から板橋区立赤塚第二中学校を拠点校にしていただき，同校の二人の教師が福井大学教職大学院の学生として，福井の先生方とともに学ばせていただきます。

福井大学教職大学院の魅力は，次の３点です。

①教師が学校で勤務を続けながら教職大学院で学べること
②大学の教員が拠点校を定期的に訪問し，学校全体を支えていくこと
③福井の学校づくりの実績を教師同士で直接学ぶことができること

福井大学と板橋区の約 317ｋｍの距離を超えて連携し，板橋区のリーダーとなる教員を育成していきたいと考えています。

そして，拠点校である赤塚第二中学校の研究成果を生かしながら，目指す授業の視点を次の３点に定め，全小中学校で授業改善を強力に進めていきたいと考えています。

①問題解決型・探究型の授業
②協同学習の導入
③指導と評価と支援の一体化

そのリーダーとなるのが赤塚第二中学校を含む４校の特別研究指定校であり，10 校園の研究奨励校です。これらの学校の相互連携を図り，切磋琢磨しながら板橋区全小中学校で魅力あふれる授業づくりを進めてまいります。

内容

板橋区における新たな教員育成の試み (1)
平成 23 年度のスタートにあたって再度，教職大学院の特徴を確認する (2)
Staff 紹介 (3)　院生紹介 (7)　拠点校だより (13)
フィンランド視察を終えて (15)
教師教育ネットワーク・交流のひろば (17)
日本教師教育学会第 21 回大会予告 (18)　書評 (20)

教職大学院 Newsletter No. 78
福井大学大学院　教育学研究科　教職開発専攻　since2008.4
2015.11.14

「絶えざる刷新を目指す」教師教育への期待

カリタス学園・理事長　　河端　秀朗

カリタス学園は東京都と神奈川県の境を流れる多摩川が徒歩5分のところにあり周囲を梨畑が点在する長閑な環境の下で幼稚園から高等学校まで2,000名余りの子ども達が学んでいるカトリックミッションスクールです。また横浜市のあざみ野というところには英仏2言語の教育を特色とする短期大学が設置されています。

昨年度，福井大学教職大学院とカリタス学園との間で院生の派遣に関する協定を締結し，2015年度より教職大学院に学園の教員2名（小学校，中学高等学校）を派遣しています。

元々教職大学院教授の松木健一先生には長年に渡って小学校の研究指導講師としてご指導いただいてきました。そして現在では年に一度，学園の全教職員が集まって行っている学園研修会へも継続的に来園いただき，全体会で講話をしていただいています。そのご縁で，カリタス学園の一貫教育を展望するための指針を築くために，院生を派遣するとともに，教職大学院の先生方に各校種の授業研究や研修のご指導をいただくことになりました。

本学園の課題は，建学の精神＝教育理念によって目指す人間像は示されているが，どのような教育のプロセスを経て，そのような人間の土台を築いていくのかというビジョンが見えていない点にあります。子どもの視点に立つ，つまり子ども達を2本のレールの上を走る列車に例えて本学園の教育を見据えていくと，このような問題点のあることが分かります。「建学の精神」というレールは幼稚園から高等学校までつながっていますが，各校種の「教育の特色」というレールは途中で分断されていると子ども達自身が感じているのではないか。肝心なことは，教育を受ける子ども達の眼から見て，学園の教育が一貫教育と呼ぶにふさわしいレールとして見えるかどうかであると思います。ある保護者が上部の学校へ進んだ際に「まるで違う学校に進学したようだ」とつぶやいていた。恐らく子ども達も同じように受け止めていると考えられます。つまり子ども達にとって上部の学校に進むには異なるレールの上に列車を置き換えなければならないと受け止めているということになります。

私達は一貫教育を受ける子どもの眼から学園の教育を俯瞰することが出来なくなってしまっているのではないだろうかと思います。子ども達自身が上部の学校へ進学した際に一筋のレールを上っているという学びの実感を持てるとき，初めてカリタス学園は「一人ひとりを大切にする」教育を実現していると胸を張って言えるのではないだろうかと考えています。

そこで，改めて本学園の各学校の教育の特色，つまり幼稚園の「モンテッソリ教育」，小学校の「総合教育活動」，中高の「教科センター方式」を俯瞰すると，いずれの教育も「子ども一人ひとりの自律」を育む教育という共通項で結びついていることが分かります。つまり，「自律」を核とするレールでつながっているはずなのです。しかし，それが子ども達にとって実感を伴うものになっていないのであれば，そのようなレールを敷くために学園の教員は必死になって敷設工事をしなければならないと思います。このような敷設工事をするために「絶えざる刷新を目指す」志を持った教員を福井大学の教職大学院へ派遣すること，そして福井大学の先生方に来園いただき学園の各学校の授業研究のご指導をいただくことを通して「目的意識を持って自律的に学ぼうとする人間の土台を育む学園づくり」に寄与して欲しいと心より願っています。

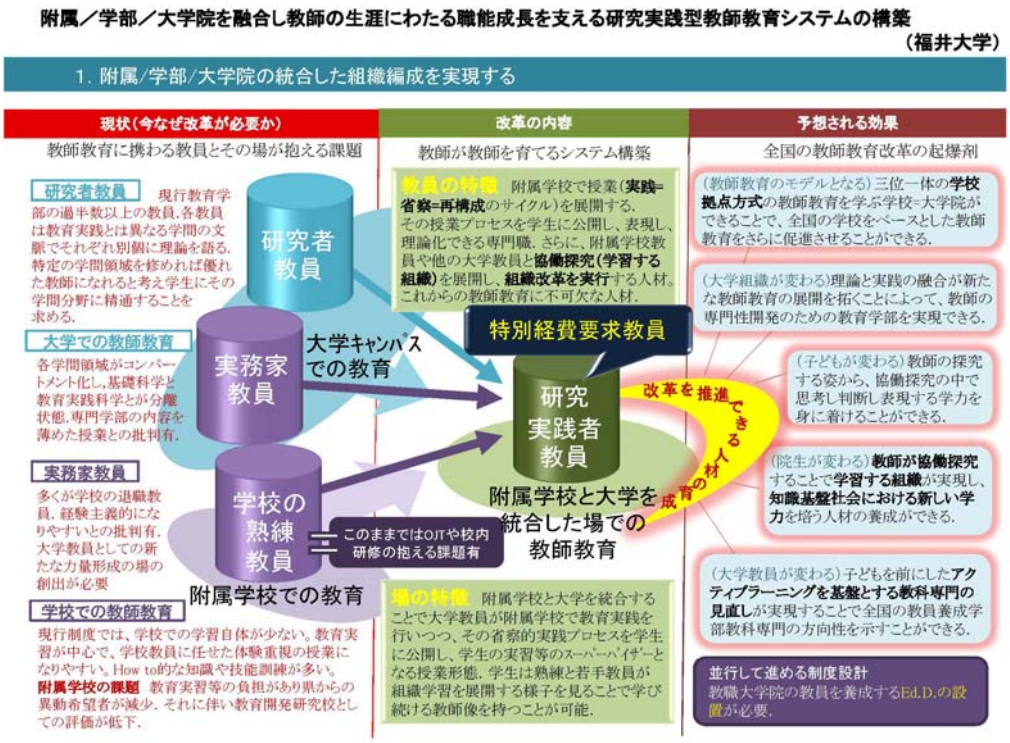
この「自律」を核とした学園の一貫教育について学園の教職員一人ひとりが明確に意識し，建学の精神と共に2本のレールを幼稚園から中学高等学校まで敷くことによって子ども達一人ひとりが将来「開花」するために地中に深く根を張れるよう導いていかねばならないと思います。

（教職大学院 News Letter No.23，31，78 より抜粋）

② 専任教員の中に特命教員，教委等との人事交流教員を配置し（P3-5 **前掲資料 1-1-3**），教員の専門分野及び実践経験の多様性を高め，院生の学修研究を多角的に支援している。特に，平成 26 年度から附属学園併任教員を研究実践者教員として配置し，院生への授業公開を含めた協働探究を展開している（**資料 1-1-5**）。さらに，教育行政に携わる客員教員，元学校管理職等の非常勤講師，福井県内及び連携大学で学校と大学を結ぶコーディネートリサーチャーを採用し，地域の特色に根ざした実践的な学修を担保している。

資料 1-1-5　附属学園併任教員の位置づけ

■専門職養成において，理論と実践の融合が中心課題となるが，本学ではこれを具現化する教員となる，附属学園の教員と大学教員を併任する「研究実践者教員」の採用を進めており，平成 26 年度に４名の教員を採用した。このような職種の採用は全国初の試みである。



※平成 26 年度特別経費：国立大学機能強化において「特別経費要求教員」として申請した。

（事務局資料）

③　教員採用にあたり，本専攻の理念に則った課程担当教員資格基準（**資料 1-1-6**）を策定することで実践研究を推進可能な教員を確保している。また，女性教員の積極的登用に努めており，女性教員は専任教員 27 名中９名で３割を占め（平成 27 年５月１日現在），第１期末の割合（教員 17 名中６名，３割）を維持し，３名増となっている。

資料 1-1-6　教職大学院の課程担当教員資格基準

福井大学大学院教育学研究科教職大学院の課程担当教員資格

１．実務家教員

(1) 授業担当教員
1) 実務経験歴
教育関連機関や専門職養成機関等における実務経験(概ね 15 年以上)を有すること。
2) 教育実践の経験・実績等
次の各号のうち２つ以上の要件に該当すること。
イ 教職修士もしくは修士を修了していること。
ロ 優れた教育実践の実績を有すること。
ハ 学校での協働研究の運営等の実績を有すること。
ニ 教員研修等の企画運営に携わった経験を有すること。
ホ 教育委員会の指導主事等の経験を有すること。
3) 教育実践の記録・実践研究等
教育実践や学校での協働研究等の取り組みについての報告書・実践記録・実践研究等の業績を有すること。

(2) 授業協働担当教員
1) 実務経験歴
教育関連機関や専門職養成機関等における実務経験を有すること。
2) 教育実践の経験・実績等
次の各号のうち２つ以上の要件に該当すること。
イ 教職修士もしくは修士を修了していること。
ロ 優れた教育実践の実績を有すること。
ハ 学校での協働研究の運営等の実績を有すること。
ニ 教員研修等の企画運営に携わった経験を有すること。
ホ 教育委員会の指導主事等の経験を有すること。
3) 教育実践の記録・実践研究等
教育実践や学校での協働研究等の取り組みについての報告書・実践記録・実践研究等の業績を有することが望ましい。

２．研究者教員

(1) 授業担当教員
1) 教育・研究歴
大学・研究機関における教育・研究歴，もしくは教育関連機関における実務経験を有すること。
2) 教育・研究業績等
イ 大学院において博士課程を修了，もしくは相当の教育・研究業績を有すること。
ロ 担当する専門分野に関する研究業績を相当数有すること。
ハ 上記の研究業績のうち１編以上は最近５年間の間に公表されたものであること。
なお，その中に関係する学会の査読付き論文を含むこと，あるいは，博士の学位を有することが望ましい。
3) 教育実践の事例研究・学校との協働研究
イ 教育実践・教師教育等に関する事例研究の業績を有すること。
ロ 学校との協働研究の実績を有すること。

(2) 授業協働担当教員
1) 教育・研究歴
大学・研究機関における教育・研究歴，もしくは教育関連機関における実務経験を有すること。
2) 教育・研究業績等
次の各号のうち２つ以上の要件に該当すること。
イ 大学院において博士課程を修了，もしくは相当の教育・研究業績を有すること。
ロ 担当する専門分野に関する研究業績を相当数有すること。
ハ 教育実践・教師教育等に関する研究の業績を有すること。
ニ 学校との協働研究の実績を有すること。

（事務局資料）

④　本専攻の教育課程から，継続的に発展・変化する学校及び教員の職務に即応可能な担当教員の資質能力向上が不可欠であるため，毎週の専攻会議で学校・機関の取組状況及び院生の学修状況を共有するとともに，全教員の教育力・専門性向上を担保するために，院生のレポート等の報告，各自の実践研究の展開報告を行い，互いの教育研究活動を検討・評価・修正する FD 研究会（**資料 1-1-7**）を実施している。教員各自は実践研究論文

を執筆し，年度末に教育研究報告の年報『教師教育研究』論文（**資料 1-1-8**）として公表する。また，全学での教員個人評価（**資料 1-1-9**）を行い，その結果を個々人の日々の教育研究活動等の改善に結びつけている。

資料 1-1-7　FD 研究会（平成 27 年度前期）の計画

日程	検討１（30 分～60 分）	検討２（30 分～60 分）
4/14	自己紹介	長期実践研究報告の検討①
4/21	長期実践研究報告の検討②	ラウンドテーブル構想
4/28	長期実践研究報告の検討③	ラウンドテーブル構想
5/12	紀要を読む①	ラウンドテーブル構想
5/19	紀要を読む②	
5/26	院生の取組の現状報告①	ラウンドテーブル構想
6/2	院生の取組の現状報告②	ラウンドテーブル構想
6/9	教師教育改革の動向①	ラウンドテーブル構想
6/16	教師教育改革の動向②	『教師教育研究』の構想①
6/23	ラウンドテーブル打ち合わせ	
7/7	ラウンドテーブルの振り返り	
7/14	『教師教育研究』の構想②	

（事務局資料）

資料 1-1-8　年報『教師教育研究』



（事務局資料）

資料 1-1-9　福井大学教育地域科学部及び教育学研究科における教員評価実施に関する申合せ

福井大学教育地域科学部及び教育学研究科における教員評価実施に関する申合せ

平成 19 年３月 16 日　教授会裁定
直近改正　平成 26 年 10 月 17 日

本学部及び本研究科における教員の個人評価に関する原則を定めた「教育地域科学部及び教育学研究科教員評価に関わる基本方針」（以下「基本方針」という。）に従って，４評価領域での教員の個人評価の実施に関して以下のとおり申し合わせる。

第１　評価を行うにあたっては，②研究活動（芸術領域を含む），③社会貢献・国際交流活動は，過去３年間を評価単位として行い，①教育活動，④管理運営活動については，各年度ごとを評価単位とし，各年度の評価点の平均で行う。
第２　各教員が行う４領域の自己評価点の合計は 100 点とし，その算出にあたっては「基本方針」第８に規定する加配方法に基づいて処理するものとする。
２　前項の評価と併せて，各教員は，各評価領域の活動状況の質的評価の観点から，評価基準特記事項確認表（別紙１）に基づき，特に優れていると判断する項目及び活動状況に問題があり大幅な改善を要すると判断する項目に関して，その内容を記述する。
第３　評価対象教員の評価原案（別紙２）の作成については，当該教員の所属基礎講座(教職開発専攻を含む)から選出された実施委員１名と他講座(専攻・領域)からの実施委員１名との２名で行い，それを基に学部及び研究科教員評価実施委員会が検討し，決定する。
第４　学部長・研究科長は,評価対象教員の評価結果案について，個人評価表(別紙３)をもって，評価の実施された年度の 12 月末までに当該教員に通知する。
第５　評価結果案に異議のある評価対象教員は，通知を受領してから 10 日以内に異議申立書（別紙４)により学部長・研究科長に申立てをすることができる。
第６　異議申立てがあった場合には，学部及び研究科評価委員会と学部及び研究科教員評価実施委員会の合同会議で検討し，異議申立てを受理してから原則として 10 日以内に再審査結果を申立人に文書で回答する。
第７　学部及び研究科評価委員会委員と学部及び研究科教員評価実施委員会委員は個人情報を他に漏らしてはならない。
第８　資料，データの保管は総務部教育地域科学部支援室が行う。

附　則
１　この申合せは，平成 26 年 10 月 17 日から施行する。
２　この申合せの施行後初めて行う教員評価の評価単位は，第１の規定にかかわらず，評価を実施する年度の前年度以前の４年間とする。

※平成 26 年度に実施された教員評価において，教職開発専攻所属対象教員 10 名中　SS：１名，A：９名
（SS：活動状況が極めて優れている，S：活動状況が優れている，A：活動状況が良好である，B：活動状況が適切である，C:活動状況に一部改善を要する，D：活動状況に問題があり大幅な改善を要する。）

（事務局資料）

【学校・教育委員会・他大学等との協働連携体制の確立とその成果】

① 本専攻では，福井県教委，福井県教育研究所，市町村教委の担当者，拠点校・連携校の管理職が年２回一堂に会して協議する「運営協議会」（**資料 1-1-10**）を設けている。そこで本専攻と学校・教委の取組との調整を行い，全関係者による院生の学修支援の充実，教育課程の点検・工夫・改善が実施される。その成果は③−１で後述する入学者選抜に係る諸工夫，観点「教育内容・方法」に示した学校・実践ベースの教育課程の推進に結実している。

資料 1-1-10　教職開発専攻運営協議会要項

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻運営協議会要項

平成 20 年 3 月 7 日　研究科委員会決定
直近改正　平成 21 年 3 月 6 日

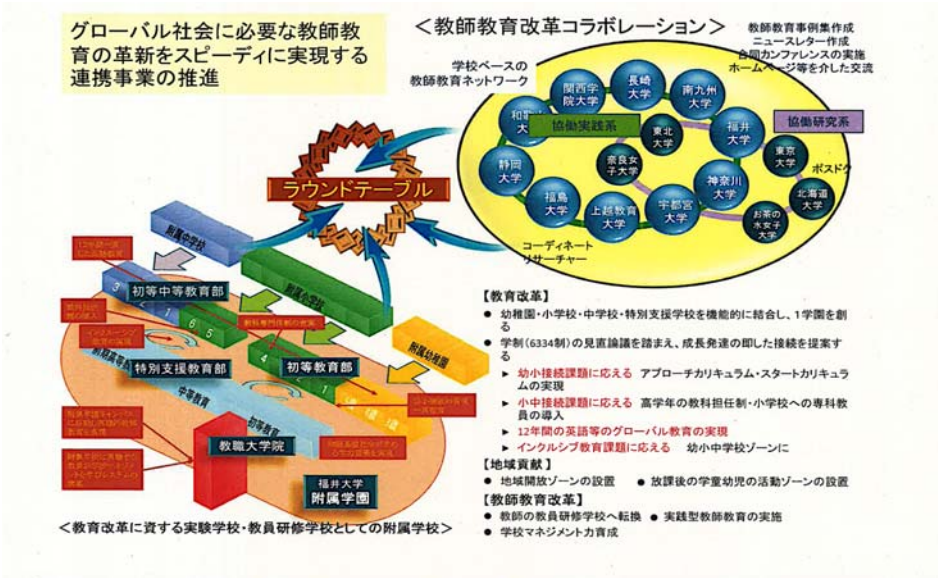
（趣旨）
第１　この要項は，福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻運営協議会（以下「運営協議会」という。）について，必要な事項を定める。
（審議事項）
第２　運営協議会は，次の各号に掲げる事項を審議する。
(1)　教職開発専攻の運営に関する事項
(2)　教職開発専攻の事業計画に関する事項
(3)　その他必要な事項
（組織）
第３　運営協議会は，次の各号に掲げる委員をもって組織する。
(1)　教育学研究科長
(2)　教育担当の副学部長
(3)　附属学校園担当の副学部長
(4)　教職開発専攻長
(5)　教職開発専攻の専任教員（客員教員を含む。）
(6)　福井県教育委員会関係者　　若干名
(7)　福井県教育研究所長
(8)　福井県教育庁嶺南教育事務所長
(9)　福井県特別支援教育センター所長
(10)　関係市町教育委員会教育長
(11)　拠点校・連携校の校園長
（委員長）
第４　運営協議会に委員長を置き，教育学研究科長をもって充てる。
２　委員長に事故のあるときは，あらかじめ委員長が指名した委員がその職務を代行する。
（会議）
第５　委員長は，運営協議会を招集し，その議長となる。
２　運営協議会は，委員の 3 分の 2 以上の出席がなければ会議を開くことができない。
（委員以外の出席）
第６　委員長は，必要と認めるときは，運営協議会に委員以外の者の出席を求めることができる。
（庶務）
第７　協議会の庶務は，総務部教育地域科学部支援室において処理する。

附　則
この要項は，平成 20 年 4 月 1 日から施行する。
附　則
この要項は，平成 21 年 3 月 6 日から施行する。

（事務局資料）

② 学校を基盤とする教員養成と教師教育を全国展開すべく，平成 25 年度特別経費(プロジェクト分)により機構「教師教育改革コラボレーション」（**資料 1-1-11**）を組織し，全国 14 大学との連携協働による教育実践研究を実現し，本専攻の教員養成と教師教育の取組を機軸とした教師教育改革が全国展開するに至った。

資料 1-1-11　教師教育改革コラボレーション



大学院レベルの教師教育の改革推進のための大学間連携，教師教育改革コラボレーションが組織され，福井大学・福島大学・宇都宮大学・静岡大学・長崎大学・奈良女子大学・信州大学をはじめとする諸大学による実践研究交流が重ねられている。福井大学で行われる年２回の「実践研究福井ラウンドテーブル」，および宇都宮・静岡・奈良・長崎・東京で年１度行われるラウンドテーブルで，研究交流が重ねられてきている。

（事務局資料）

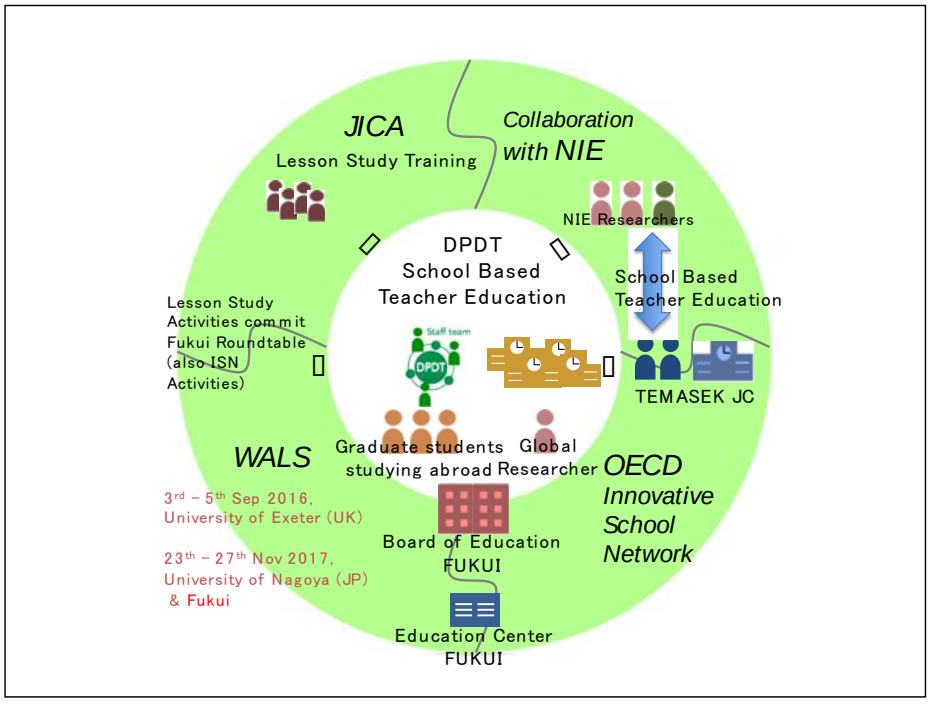
③　国際的な教師教育ネットワークを形成するために海外大学等とのベンチマーキングと研究交流を推進し（**資料 1-1-12**），その成果として，平成 27 年度には OECD や JICA との連携を開始し，NIE（National Institute of Education）や WALS（The World Association of Lesson Studies）との協働のもと，「学校拠点方式」による教員養成と教師教育をグローバル社会の中で実現（**資料 1-1-13**）するとともに，留学生が英語を主に学習可能な受入体制を整え，国際的な教育交流学修を教育課程で実現している（**資料 1-1-14**）。

資料 1-1-12　海外ベンチマーキング・調査

時期	訪問先	訪問者数	目的
平成 23 年 2 月	フィンランド ヘルシンキ大学	教員 6 人	ヘルシンキ大学及び関連施設でのフィンランドにおける修士課程レベルの教員養成制度調査と本学教職大学院の実践・研究報告
平成 24 年 9 月	米国 ワシントン大学	教員 4 人 事務職員 1 人	ワシントン大学教育学研究科におけるベンチマーキング（教育課程調査，研究交流），ワシントン大学パートナースクール訪問
平成 25 年 3 月	中国 上海師範大学	教員 5 人 院生 7 人	上海師範大学の教員養成訪問視察と教員・院生の交流
平成 25 年 10 月	中国 上海師範大学	教員 2 人	上海師範大学並びに附属学校との教師教育改革並びに小中学校等での学力向上の取組についての交流と視察
平成 26 年 3 月	中国 上海師範大学	教員 5 人	上海師範大学との交流協定を踏まえ，訪問調査及び教師教育の研究交流，上海師範大学附属学校と公立学校及び教育委員会への訪問調査
平成 26 年 9 月	米国 ボストン・カレッジ ハーバード大学 コロンビア大学	教員 5 人	Ed. D. 及び Ed. L. D. の教育課程及び学位論文研究に関する調査
平成 26 年 12 月	中国 上海師範大学	教員 4 人 学校教員 1 人 学部生 5 人	上海師範大学との学術交流のための打ち合わせ，及び附属第一小学校における学生による美術の授業実践
平成 27 年 9 月	シンガポール 国立教育研究所	教員 7 人 院生 1 人	福井大学教職大学院とシンガポール国立教育研究所との研究交流及び NIE パートナースクールの視察，NIE 現職教育及び教員養成の演習視察

（事務局資料）

資料 1-1-13　教職開発専攻（DPDT）のグローバルマップ



（事務局資料）

資料 1-1-14　留学生の受入れと国際的な教育交流学修

留学生と共に学ぶ

福井大学教職大学院　宮下 哲・半原 芳子

１　はじめに

先日，本教職大学院を訪問された他大学の先生が「日本語のできない留学生も他の院生と同様に，拠点校において実践・省察・再構成のサイクルで学んでいること」「英語での特別なプログラムではなく，互いの実践について英語と日本語の両方を駆使しながら語り合い聴き合って，省察を深めること」等に触れて,「そんなことが出来るのですね」と驚いておられた。

修士 1 年目を終えようとしている Pauline さん（フィリピン）も，教員研修留学生として 1 年半の研修を行っている Samaha さん(エジプト),Mara さん（インドネシア），Andrew さん（リトアニア）も，ほとんど日本語を習得していない状態で福井での学修を始めたのだが，言語の違いを超えた学びを得ておられるように思う。その要件はいくつかあるのだろうが，最も大きいのは「具体的な実践を共有した上で行われる省察の積み重ね」ではないかと思う。

洋の東西を問わず，目の前で学ぶ子どもの姿とそれを支える教師の生の姿に接すると，各自が前提としている物事を問い直さずにはいられなくなる。あるいは，目の前の実践に触発されると，自国の現状を鑑みながら，帰国後に取り組む展望や可能性を探らざるを得なくなる。また，その挑戦的な取組を実現するための覚悟をもたざるを得なくなる。さらに，そのような取組を継続する内に，語られる内容には言葉や習慣などの差を超えた共通項が多いことに気付くようになると，困難に立ち向かうための勇気が湧いてくるからだと思う。

こうしたことは，留学生のみならず彼らの実践を支える私たち自身にとっても同様である。同じ実践に対して，少しずつ異なる視点や経験をもとに光を当て合うことで，その実態をより立体的に捉えることができ，私たち自身の思い込みがほぐされ，新たな展望を拓く勇気が湧いてくる。

ここでは，留学生やそれを支えている（支える機会をいただいている）者が，どのような実感をもってどのように学習を進めているのか，その一端を紹介したい。

２　言語や習慣，教科や領域を超えて相互に学び合う

Exchange Meeting

昨年度の秋，来日した Pauline さんを教職大学院のスタッフみんなで支えることになった。その取組の 1 つとして，小林真由美先生と私の 2 人（Pauline さんが算数･数学教育の実践をお持ちであったことから，算数・数学教育に携わってきた者として）が定期的な勉強会を開催することになった。勉強会は，福井県内外の算数・数学の教育実践を共有して授業研究会を行ったり具体的な教材研究を行ったりするところからスタートしたが，現在は教科や領域に関わらずに，毎週金曜日の朝の附属小・中学校の様々な教科・領域の授業を参観した後，1～1.5 時間程度の授業研究を行う会として位置づいている。当初は，同教科や領域であれば共有のためのハードルが下がるだろうと思っていたが，回を重ねる内に「具体的な実践があれば教科や領域の違いは問題にならない」と実感したからだ。メンバーも，Samaha さん Mara さん Andrew さんをはじめ本学の留学生数名の参加を得て，さらに国際色豊かに行われている。用いる言語は英語を主体としながら日本語も交えて行われているが，相互に理解していると思われる。授業参観後の Meeting では，授業についての所感を語り合うとともに，その所感や問いそのものについての熱い議論が展開される。例えば，グループワークを取り入れることと本時のねらいとのかかわりが議論された際は，具体的な授業場面や子どもの姿に基づいて，

・グループワークやペアでの語り合いという手段が目的化していないか
・いわゆる How-to が幅を利かせ，目的や子どもの必要感に基づいていないのではないか
・遅れがちな生徒がペアやグループで教えられることで伸びる場合もあるが，確かな力の定着が阻害されることもある，その見極めと形性的な評価をどうするのか

など，私たちが日本の教育の中で議論していることと同様の課題に焦点が当てられ熱く語られた。その改善に向けたアイディアを語り合う場面でも，多様な手順や方法が提案されつつ，それが学校の中で実践されるために必要なことは何かとか，管理職・行政の一員・大学教員としてどのような取組ができそうなのかが語られていた。

言語や文化，互いの思考や判断など様々な物事が交流するこの勉強会の後は，それぞれの所感をレポートにまとめることになっている。今日の授業をどうとらえたのかだけでなく，研究会での議論をどのように受止めたのかが記される。3 月の勉強会では，これまでに記録した各自のレポートを資料として，この間の取組を通して，参加者の思考がどのように変容したのか，見出した共通点は何か，今後さらに検討すべきことは何か･･･について振り返ることになっている。英語も日本語も混ざった資料群をもとにした省察の中から，きっと今後の展開の方向性や勇気の芽が見えてくるに違いないと予感している。

（教職大学院 News Letter No.80 より抜粋）

【学校・実践ベースの教師教育を推進する入学者選抜方法の工夫と効果】

① アドミッション・ポリシー（**資料 1-1-15**）に明記された入学者選抜の基本方針に基づき，平成 27 年度より小学校教員免許取得プログラム（**資料 1-1-16**）を開設し，現在，院生３名が当プログラムを履修している。さらに，独自基金の奨学金「次世代教育創生資金」（**資料 1-1-17**）を創設し，教委や学校による院生支援の実現も進め，志願者が直面する経済的障壁を緩和している（**資料 1-1-18**）。

資料 1-1-15　教職開発専攻のアドミッション・ポリシー

概要・特色

ネットワークを通じて世界的な規模で知識・技術の交流と共有が進み，政治・経済・文化をはじめとするあらゆる領域で，質の高い知的な協働活動がより多くの人々に求められる社会が現実のものとなりつつあります。そうした21世紀の知識基盤社会に生きる力を培うために，子どもたち自身が探究し，コミュニケーションし，協働する力を養う学校教育の実現が求められています。そして，その実現は学校を担う教員の専門的力量と協働の努力に懸かっています。

福井大学大学院教育学研究科は，21世紀の学校教育を担う中核的な教員の専門的力量の開発を目的として，教職開発専攻（教職大学院）を設置しました。

求める学生像

教職専門性開発コース

・ 学校での長期の実習を通して，実践的に学び専門性を培っていこうとする者
・ 授業づくり・児童生徒の成長発達支援について実践に即して研究し，実践力を培おうとする者

スクールリーダー養成コース

・ 新しい学校づくりや学校組織のマネジメントの責務を担っている教員
・ 学校での協働研究の運営・推進に取り組んでいる教員
・ 授業づくり・授業改革・授業研究を積極的に進めている教員
・ 児童生徒の発達支援について実践と研究を進めている教員

入学者選抜方法の基本方針

専門科目 A「学校改革実践研究の基礎」では，教育改革・学校改革に関わる資料を検討し，小論文にまとめます。これにより，教育改革の展開について理解し判断する力を評価します。

専門科目 B「教育実践の分析」では授業の記録を吟味検討し小論文にまとめます。これにより，学習の展開を分析し表現する力を評価します。

専門科目A・Bの筆記試験のほかに入学後の実践と研究の進め方についての口述試験を行い，総合的に評価します。

（事務局資料）

資料 1-1-16　小学校教員免許取得プログラム案内

明日の小学校の先生をめざすみなさんに

小学校での実地経験を重ねながら、教師としての実践力を培う新しいプログラム

福井大学教職大学院
小学校教員免許取得プログラム

学校制度の改革が進む中で、新しい時代の小学校を担う、若い実践力ある先生が求められています。
福井大学教職大学院では、学校での１年間のインターンシップと実践研究のサイクルを中心するカリキュラムによって、教職大学院の実践力形成モデルを実現してきました。新たに、このインターンシップを活かし、専門職免許（修士）と合わせて小学校教諭一種免許を取得することができる免許取得プログラムを平成 27 年度より開始することになりました。複数年にわたる実地経験・実地研究を軸に実践研究を重ね、小学校教員としての総合的な実践力を培う、新しいプログラムです。

特色

○実地経験・実地研究
毎週３日、小学校における学習に立ち会いながら、教師としての仕事の総体を学びます。

○経験の振り返り・省察
経験したこと、取り組んだことを毎週、大学院でのカンファレンスで振り返り、問い進めます。

○実践経験ゆたかなメンバーのコミュニティ
教職大学院で学ぶ現職の先生、豊かな実践経験を持つ実践教員、研究者教員とともに学びます。

○実践と理論の往還
教科・生徒指導、学校運営をはじめ、教師の仕事の総体を、実践と理論の往還を通して学びます。

○このプログラムは学部段階において中学校等の教育職員免許を取得していることを前提としています。（既免許の条件については、あらかじめお問い合わせ下さい。）

○2 年間の授業料で３年かけてゆっくり研究できる長期履修制度、教職大学院独自の奨学金制度等によって、大学院での教師への学びを支援します。

（事務局資料）

資料 1-1-17　「次世代教育創生資金」案内



（事務局資料）

資料 1-1-18　入学金・授業料等の財政支援

福井大学教職大学院における入学金及び授業料に関する財政支援について

2015.10.16

1　大学からの財政支援
①スクールリーダーに対する授業料半額補助は成績優秀者 15 名対象。
②15 名枠に入らなかった者に対しては「基金」から半額補助。
③附属学校園からの入学者（１年履修）の入学金及び授業料は基本全額補助。授業料は①の対象者の場合は半額補助。残りの半額は「基金」から補助。

2　福井県からの入学金半額補助
県が派遣する 15 名は入学金の半額補助。

3　市町の補助について
①福井市は２年目の授業料の半額補助。
②坂井市は入学金の半額補助。
③美浜町と高浜町は入学金・授業料とも全額補助。

4　各学校における財政支援について
①福井市の私立啓新高校は入学金・授業料とも全額補助。
②板橋区の中台中学校及び教育支援センターは入学金・授業料とも板橋区が全額補助。
③川崎市の私立カリタス学園は入学金・授業料とも全額補助。

（事務局資料）

② 大学本部等と連携して広報を推進し（**資料 1-1-19**），名古屋・大阪など県外会場も含めて学生募集事前説明会を実施する等，入学定員の充足に努め（**資料 1-1-20**），第２期中期目標期間（以下「第２期」という。）の平均入学定員充足率は 103%であり効果を上げている（**資料 1-1-21**）。また，本専攻の教育課程への極めて高い評価（**P3-6 前掲資料 1-1-4**）が福井県外拠点校・連携校の拡大に結びつき，それに伴い当学校からの現職教員の入学者数が増加した。

資料 1-1-19　入学案内の学内掲示ポスター



（事務局資料）

資料 1-1-20　平成 27 年度学生募集に係る事前説明会要項

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻（教職大学院）
平成 27 年度学生募集に係る事前説明会

1　日時　平成 27 年１月 31 日（土）9:30～10:00

2　会場　福井大学文京キャンパス総合研究棟Ｖ６階
コラボレーションホール
＊開始までプロモーションビデオを流します。

3　日程　　司会　（宮下）
9:30～9:50　福井大学教職大学院の概要について
（木村）
9:50～10:00　質疑応答

4　配布資料
レジュメ
『教職開発専攻のカリキュラムについて』
教職大学院パンフレット
Newsletter No.67

（事務局資料）

資料 1-1-21　第２期中の志願者・入学者・合格者の推移

	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度	平均入学定員充足率
志願者	28 人	35 人	33 人	35 人	29 人	35 人	195 人
合格者	28 人	33 人	31 人	35 人	29 人	35 人	191 人
入学者(うち現職教員学生)	29 (1) 人	32 (20) 人	30 (17) 人	33 (18) 人	27 (21) 人	34 (26) 人	185 (103) 人
入学定員	30 人	30 人	30 人	30 人	30 人	30 人	180 人
入学定員充足率	96.7 %	106.7 %	100 %	110 %	90.0 %	113.3 %	103 %

※平成 22 年度の入学者は，学校教育専攻からの転専攻した学生が含まれているため，合格者数より１名多くなっている。

（事務局資料）

③　学力検査は志願者の実情に応じ，年３回実施し，検査科目は教育改革と教育実践に関する答申や記録を資料とした問題を出題し，受験者の学習にも結びつくよう配慮している（**P3-15 前掲資料 1-1-15**）。口述試験では学校の課題認識の確認も行う。学力検査前に事前ガイダンスを実施し，教育課程の特徴や学力検査の概要を入念に説明している（**資料 1-1-22**）。これらの工夫により，学力検査内容を本専攻の学修内容に結びつけることで，院生による円滑な初年度学修を促進している（**資料 1-1-23**）。

資料 1-1-22　平成 27 年度入試事前ガイダンス要項

平成 27 年度　福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻（教職大学院）
入学試験　事前ガイダンス

1　日時　平成 27 年１月 31 日（土）10:00～12:00
2　会場　福井大学文京キャンパス総合研究棟Ｖ６階　コラボレーションホール
3　日程　司会（宮下）
10:00～10:10　① あいさつ（松田）
10:10～10:30　② 教職大学院のカリキュラムと入学試験について（岸野）
10:30～11:30　③ 質疑応答
11:30～　④ 個別相談

（事務局資料）

資料 1-1-23　教職開発専攻の学力検査内容と学修内容の連関による院生の初年度学修の円滑な推進例

教職専門性開発コース１年／中藤小学校
吉田　智保

入学して初めての合同カンファレンスが終了した。教職開発性専門コースで毎週行われる木曜カンファレンスとは異なり，スクールリーダーの先生方を交えての初のカンファレンスである。経験のない未熟な自分に語れることはあるのだろうか，大学で学んだ理論だけの固定概念でしか返答出来ないかもしれない，ただ恥をかくだけなのではないか…。たくさんの不安が頭をよぎり，開始前から気疲れをしてしまったというのが本音である。そんなことを考えていた初日ではあったが，終えてみると，たった２日間とは思えない程の新たな学びを構築することができた。感想を率直に申し上げると，「本当に勉強になった。」この一言に尽きる。

１日目前半は，「３つの種」を切り口とした実践的な自己紹介を行った。現職の先生方やＭ２の先輩の教育現場でのこれまでの経験を伺うことで，自分が知らなかった世界にただ感心するとともに，完全に委縮してしまった自分がいた。後半は教育改革の資料を吟味し，内容・感想を語り合う活動を行った。前半であまり言葉を発せられなかった自分に対し，このままではいけないと思い，自分が話し易い内容である「教員研修の在り方検討会報告書（県教委）」を選択し，吟味した。本当は他に興味のある資料もたくさん存在したが，しっかり話すことに囚われ過ぎていたため，大学在学時に行っていた研究題材を選択した。この選択は，一見「逃げ」に思われるかもしれない。しかし，じっくりと資料を読み，それをグループで語り合う活動を行うことで，私の独りよがりな意見を打ち破ってくれるような新たな発想や視点を発見することができ，自分の研究と照らし合わせ，より深く掘り下げるきっかけとなった。また，それぞれ異なった資料を紹介するため，様々な教育問題や答申など，教育改革の視野も広げることができた。

２日目はまず，長期実践報告書を通じて展開や実践者の成長，それを支えた要因を読み解いた。また昨日とは一変し，新しいグループで語り合った。私は高間恵美先生の「教師の協働による学校づくり」を選び，教師協働の必要性について考察した。その際，スクールリーダーの先生方から，教師協働が謳われているが，小学校では学級王国，高校においては教科王国となりがちであるといった現状も耳にした。現状を打破しなければ学校は変わらない。そのためにはどうしたら良いかについても実践報告書をもとに討議した。私はまだ数週間のインターンでしか学校に関わっていないが，教師協働をより実感していくためにも，インターン生として先生方に積極的に関わっていこうと強く思った。

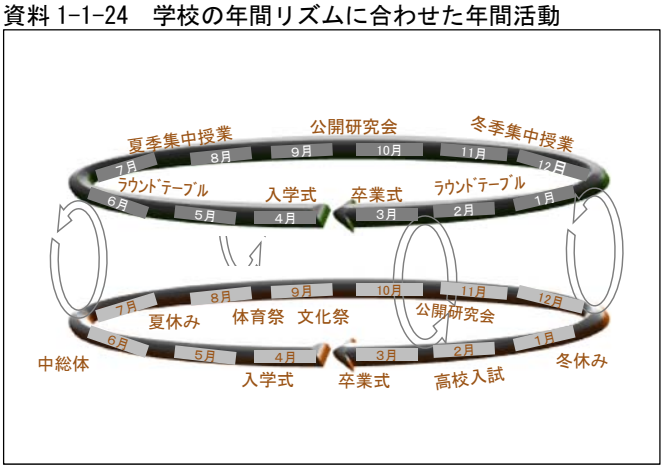
そして最後に，教科別に自分のこれまでの実践を紹介した。英語科のグループでは，メンバーそれぞれ小・中・高と校種が異なっていたのだが，話し合いを進めていく中で，どの話題も一貫性を持っているものであることに気づかされた。特に，いかにして児童・生徒の英語に対する意欲を高めるかという課題では，中学・高校に限らず，必修化となった小学校の外国語活動でも重要な討議となった。英語教育の早期化が進められている中で，その目的は英語に慣れ親しませ，コミュニケーション能力の素地を養うことであるが，必ずしもプラスの方向に向かうとは限らない。小学校段階で英語を苦手と感じ，中学校に進む際には英語が嫌いになってしまい，英語に対する意欲の低下に繋がってしまうことも予測される。中高での授業の工夫や教材研究による生徒の英語への意欲向上策はもちろん大切である。
しかし、今後教科化にも向かう小学校の英語教育において、英語を好きにさせるというよりも、いかにして嫌いにさせないかの努力が必要になってくると今回この討議の中で再確認した。今後の授業実践で課題にしたいと考えている。

初めての合同カンファレンスは自分の中の不安から始まったが、未熟な私でも発言をすれば耳を傾けてくれるという温かい環境の中で、意見を共有し、課題解決に向けての貴重な学びを得ることができた。合同カンファレンスを通じて、スクールリーダーの先生方と私たちストレートマスターに共通して感じたのは、学校を、自分を、教育を、そして児童・生徒を改善していこう、良くしていきたいという気持ちである。そのためにも、経験や校種、教科の垣根を越えて意見を持ち合い語り合うという場は、自分の実践を独りよがりにせず、更に高めていくという点で必要不可欠なのではないだろうか。私は学生でありながらも、教える立場にもいる。そんな立場だからこそ言える意見があると思う。未熟で現場知らずな発言もあるかもしれないが、次回は今回以上に自分の考えも発信していきたい。私たちストレートマスターを含め、それぞれフィールドは異なるが、同じ福井大学教職大学院の学生としてこれを機に更に学びを深めていきたいと強く感じた。

（教職大学院 News Letter No.63 より抜粋）

④　また，大学院の年間活動を学校の年間リズムに合わせ設定している（**資料 1-1-24**）。実習科目は各学校・機関で実施可能な指導体制を採り，現職院生の履修可能な時間割を設定し（**資料 1-1-25**），授業日は，現職教員院生が各勤務校・機関での職務を完遂しながら効果的に学修可能なように選択日程（A 日程・B 日程）を準備している（**資料 1-1-26**）。またテレビ会議により年２回，嶺南地区と東京をつなぎ遠隔授業を実現する等，現職教員の修学支援を充実している（**資料 1-1-27**）。

資料 1-1-24　学校の年間リズムに合わせた年間活動



（事務局資料）

資料 1-1-25　教職開発専攻の「学校における実習」科目の概要

実習単位、主な内容、実施施設、時期、学生の配置等

	教職専門性開発コース	スクールリーダー養成コース		
ねらい	１年間の学校における教師の仕事の総体を学ぶ（教科指導・生徒指導・特別活動・学級づくり・学校運営）	スクールリーダーに求められる実践力を実践と省察を通して培う（協働実践研究の企画運営・支援協力・メンターシップ）		
授業科目の名称	長期インターンシップ	スクールリーダー実習Ⅰ	スクールリーダー実習Ⅱ	スクールリーダー実習Ⅲ
期間	１年間	１年間		
単位	10 単位	７単位	１単位	２単位
内容	教科指導のみならず、生徒指導、１年間の学級づくり・学級経営、学校運営をはじめとする学校における教師の仕事の総体を１年にわたって実習	学校における協働実践研究の企画運営に関する実習	他校の協働実践研究・校内研修への支援協力にかかわる実習	若い世代の教師を支えるメンターシップに関する実習
場所	拠点校・連携校	自校 拠点校・連携校	他校 拠点校・連携校	自校・他校 拠点校・連携校

（「長期インターンシップの手引き」より抜粋）

資料 1-1-26　平成 27 年度教職大学院年間計画

2016/2/4

平成27(2015)年度 福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻 年間計画 2015.5.20

4

1 水
2 木
3 金
4 土 開講式（1・2年ともに出席）
5 日
6 月
7 火
8 水
9 木
10 金
11 土
12 日
13 月
14 火
15 水
16 木
17 金
18 土 月間合同カンファレンスA(9:30-17:00)
19 日
20 月
21 火
22 水
23 木
24 金
25 土 月間合同カンファレンスB(9:30-17:00)
26 日
27 月
28 火
29 水
30 木

5

1 金
2 土
3 日
4 月
5 火
6 水
7 木
8 金
9 土
10 日
11 月
12 火
13 水
14 木
15 金
16 土 月間合同カンファレンス(9:30-14:20)
OC・大学院説明会（文京 13:00-14:30）
17 日
18 月
19 火
20 水
21 木
22 金
23 土 月間合同カンファレンスB(9:30-14:20)
大学院説明会（東館（予定））
24 日
25 月
26 火
27 水
28 木
29 金
30 土
31 日

6

1 月
2 火
3 水
4 木
5 金 附属中学校 教育研究集会
6 土 大学院説明会（文京 13:00-14:00）
7 日
8 月
9 火
10 水
11 木
12 金
13 土
14 日
15 月
16 火
17 水
18 木
19 金
20 土
21 日
22 月
23 火
24 水
25 木
26 金 プレセッション(17:00-19:00)
27 土 シンポジウム(12:40-17:20)
28 日 ラウンドテーブル(8:20-14:00)
29 月
30 火

7

1 水
2 木
3 金
4 土 月間合同カンファレンスA(9:30-14:20)
大学院説明会(15:00-17:00)
5 日
6 月
7 火
8 水
9 木
10 金
11 土 月間合同カンファレンスB(9:30-14:20)
12 日
13 月
14 火
15 水
16 木
17 金
18 土 ※1aか1bいずれか一方に
19 日 出席してください。
20 月 集中講座 1a ※ (9:30-17:00)
21 火
22 水
23 木 集中講座 1b ※ 教員免許更新講習必修①
24 金
25 土
26 日
27 月 集中講座 2a＊ (9:30-17:00)
28 火
29 水 教員免許更新講習必修②
30 木 集中講座 2b＊
31 金

8

1 土
2 日 ※2aか2bいずれか一方に
3 月 出席してください。
4 火
5 水 教員免許更新講習必修選択①
6 木
7 金
8 土
9 日
10 月
11 火
12 水
13 木
14 金
15 土 ※3aか3bいずれか一方に
16 日 出席してください。
17 月 集中講座 3a＊＊ (9:30-17:00)
18 火
19 水 教員免許更新講習必修③
20 木 集中講座 3b＊＊
21 金
22 土 OC・大学院説明会（文京（予定））
23 日
24 月
25 火
26 水
27 木
28 金
29 土
30 日
31 月

9

1 火
2 水
3 木
4 金
5 土
6 日
7 月
8 火
9 水
10 木
11 金
12 土
13 日
14 月
15 火
16 水
17 木
18 金
19 土
20 日
21 月
22 火
23 水
24 木
25 金
26 土
27 日
28 月
29 火
30 水

10

1 木
2 金
3 土
4 日
5 月
6 火
7 水
8 木
9 金
10 土
11 日
12 月
13 火
14 水
15 木
16 金
17 土 月間合同カンファレンスA(9:30-14:20※)
(※長期実践報告作成のためのガイダンス(14:30-))
OC・大学院説明会（文京 13:00-14:30）
18 日
19 月
20 火
21 水
22 木
23 金
24 土 月間合同カンファレンスB(9:30-14:20※)
(※長期実践報告作成のためのガイダンス(14:30-))
25 日
26 月
27 火
28 水
29 木
30 金
31 土

11

1 日
2 月
3 火
4 水
5 木
6 金
7 土 附属幼稚園 教育研究集会
8 日
9 月
10 火
11 水
12 木
13 金
14 土 月間合同カンファレンスA(9:30-14:20※)
(※長期実践報告作成のためのガイダンス(14:30-))
15 日
16 月
17 火
18 水
19 木
20 金
21 土 月間合同カンファレンスB(9:30-14:20※)
(※長期実践報告作成のためのガイダンス(14:30-))
22 日
23 月
24 火
25 水
26 木
27 金
28 土
29 日
30 月

12

1 火
2 水
3 木
4 金 附属小学校 教育研究集会
5 土
6 日
7 月
8 火
9 水
10 木
11 金
12 土
13 日
14 月
15 火
16 水
17 木
18 金
19 土 大学院説明会（文京 15:00-17:00）
20 日
21 月
22 火
23 水 集中講座 (9:30-17:00) 教員免許更新講習必修④
24 木
25 金
26 土
27 日
28 月
29 火
30 水
31 木

1

1 金
2 土
3 日
4 月 集中講座 長期実践研究報告作成 (9:30-17:00)
5 火
6 水
7 木
8 金
9 土
10 日
11 月
12 火
13 水
14 木
15 金
16 土 長期実践研究報告作成　予備日
17 日
18 月
19 火
20 水
21 木
22 金
23 土
24 日
25 月
26 火
27 水
28 木
29 金
30 土
31 日 長期実践研究報告締め切り

2

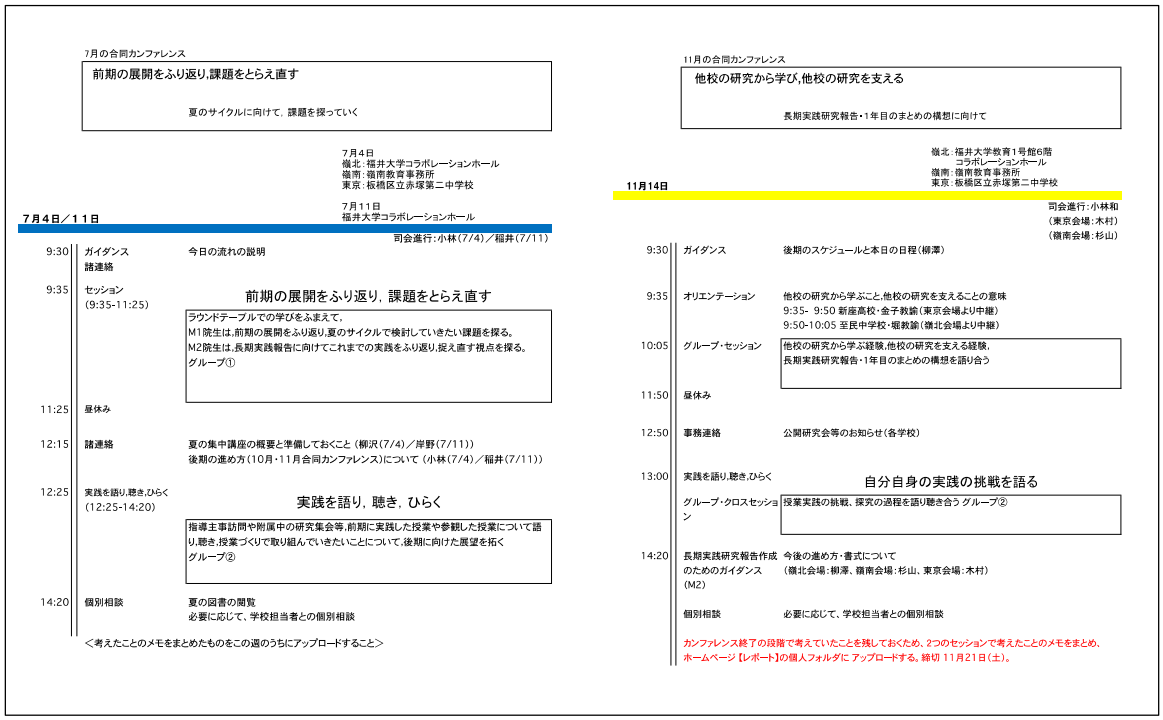
1 月
2 火
3 水
4 木
5 金
6 土
7 日
8 月
9 火
10 水
11 木
12 金
13 土 長期実践研究報告会 (9:30-12:30)
14 日
15 月
16 火
17 水
18 木
19 金
20 土
21 日
22 月
23 火
24 水
25 木
26 金 プレセッション(17:30-18:40)
27 土 シンポジウム(10:00-17:20)
28 日 ラウンドテーブル (8:20-14:00)
29 月

3

1 火
2 水
3 木
4 金
5 土
6 日
7 月
8 火
9 水
10 木
11 金
12 土
13 日
14 月
15 火
16 水
17 木
18 金
19 土
20 日
21 月
22 火
23 水 学位記伝達式(10:00-)
24 木 インターンシップ説明会(14:00-16:00)
25 金
26 土
27 日
28 月
29 火
30 水
31 木

（事務局資料）

資料 1-1-27　平成 27 年 7 月・11 月月間カンファレンス要項



（事務局資料）

（水準）　期待される水準を上回る

（判断理由）

①「学校拠点方式」による本専攻の教育は，教委・学校関係者から極めて高い評価を受け，それを推進する教員組織を平成 26 年度特別経費：国立大学機能強化の獲得に基づき編成し，全教員による授業実施と組織運営を実現 [1] している。また，第 1 期に比して多様な教員を確保 [2] するとともに，院生の学修研究を多角的に支援し，FD 研究会と年報論文執筆を推進することで，教員の教育力向上を不断に成し遂げている [3]。

[1] 資料 1-1-1　：「学校拠点方式」による教員養成・教師教育の概要　P3-4
資料 1-1-2　：平成 27 年度拠点校・連携校と教員担当一覧　P3-4
資料 1-1-3　：３つの系と教員配置　P3-5
資料 1-1-4　：教委・学校関係者からの高い評価　P3-6，7
資料 1-1-5　：附属学園併任教員の位置づけ　P3-8
[2] 資料 1-1-6　：教職大学院の課程担当教員資格基準　P3-9
資料 1-1-9　：福井大学教育地域科学部及び教育学研究科における教員評価実施に関する申合せ　P3-10
[3] 資料 1-1-7　：FD 研究会（平成 27 年度前期）の計画　P3-10
資料 1-1-8　：年報『教師教育研究』　P3-10

②　第 1 期に比して学校・教委・他大学・海外大学等との連携協働 [4] を平成 25 年度特別経費及びその後継事業である平成 26 年度特別経費：国立大学機能強化の獲得により充実させ [5]，教師教育の質の向上と改善，教育課程の充実を成し遂げ，グローバル社会の教師教育を実現している [6]。

[4] 資料 1-1-10　：教職開発専攻運営協議会要項　P3-11
[5] 資料 1-1-11　：教師教育改革コラボレーション　P3-12
[6] 資料 1-1-12　：海外ベンチマーキング・調査　P3-13
資料 1-1-13　：教職開発専攻（DPDT）のグローバルマップ　P3-13
資料 1-1-14　：留学生の受入れと国際的な教育交流学修　P3-14

③ 「学校拠点方式」による教員養成と教師教育を明記したアドミッション・ポリシー[7] に即した入学者を広く受け入れ，県外拠点校・連携校を拡充するとともに，第１期に比して入学者確保の多様な工夫を講じ[8]，国内外の教育改革の動向に即した入試選抜方法を実施[9] する等，現職教員の修学支援を充実させている[10]。

[7] 資料 1-1-15　：教職開発専攻のアドミッション・ポリシー　P3-15
[8] 資料 1-1-16　：小学校教員免許取得プログラム案内　P3-15
資料 1-1-17　：「次世代教育創生資金」案内　P3-15
資料 1-1-18　：入学金・授業料等の財政支援　P3-16
資料 1-1-19　：入学案内の学内掲示ポスター　P3-16
資料 1-1-20　：平成 27 年度学生募集に係る事前説明会要項　P3-16
[9] 資料 1-1-21　：第２期中の志願者・入学者・合格者の推移　P3-17
資料 1-1-22　：平成 27 年度入試事前ガイダンス要項　P3-17
資料 1-1-23　：教職開発専攻の学力検査内容と学修内容の連関による院生の初年度学修な円滑な推進例　P3-18
[10] 資料 1-1-24　：学校の年間リズムに合わせた年間活動　P3-19
資料 1-1-25　：教職開発専攻の「学校における実習」科目の概要　P3-19
資料 1-1-26　：平成 27 年度教職大学院年間計画　P3-20
資料 1-1-27　：平成 27 年７月・11 月月間カンファレンス要項　P3-21

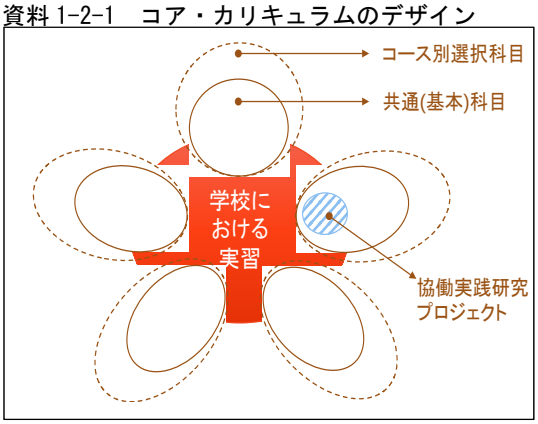
観点　教育内容・方法

（観点に係る状況）

【学校実習と協働実践研究プロジェクトを核とした教育課程編成】

「学校における実習」と各系の「協働実践研究プロジェクト」を核に共通科目とコース別選択科目が連動するコア・カリキュラムを編成している（**資料 1-2-1**）。この編成はディプロマ/カリキュラム・ポリシーに反映され（**資料 1-2-2**），「実践と理論の融合」を実現し，実践的能力を涵養する本教育課程（**資料 1-2-3**）のもとで院生は実践的な学修を進めていく（**資料 1-2-4，5，P3-19 前掲資料 1-1-25**）。本教育課程は教委・学校関係者のみならず，文部科学省からも極めて高い評価を得ている（**資料 1-2-6**）。

資料 1-2-1　コア・カリキュラムのデザイン



（事務局資料）

資料 1-2-2　ディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシー

ディプロマ・ポリシー(学位授与の方針)

1. 本専攻が求める教職専門性の４つの資質能力を身につけ，基準となる単位数を修得し，「長期実践研究報告」を作成してラウンドテーブルにおいて公表し評価を受けることが，教職修士　(専門職)の学位授与の必要要件である。
2. 本専攻の目的に沿って，修了までに以下の資質能力を身につけることを求める。
   1　子どもと教師の学習と成長を支えるファシリテーター・コーディネーターとしての実践力
   2　学び合う教師の協働組織とその改革のマネジメント力
   3　教育実践の質を不断に高め発展させていく省察・研究能力
   4　公教育を担う専門職としての使命感と責任感

カリキュラム・ポリシー(教育課程編成・実施方針)

1. 「理論と実践の融合」を実現するために，学校を拠点とする「協働実践研究プロジェクト」 を中心に教育課程を編成し実施する。
2. 教職専門性開発を生涯にわたって支えるために，世代継承生成サイクルの視点から，教職専 門性の４つの資質能力を培う教育課程を編成し実施する。
3. 学び合うコミュニティに公教育改革の支援システムを融合させた教育課程を編成し実施する。

（事務局資料）

資料 1-2-3　教職開発専攻の教育課程表

教職開発専攻

区分		授業科目	単位数 必修	単位数 選択	毎週授業時間 前期	毎週授業時間 後期
学校における実習		長期インターンシップ	10		5	5
		スクールリーダー実習Ⅰ	7		3.5	3.5
		スクールリーダー実習Ⅱ	1		1	(1)
		スクールリーダー実習Ⅲ	2		1	1
共通科目	領域ⅰ	カリキュラムのデザインの実践事例研究		2	2	
		カリキュラムマネジメント実践事例研究		2	2	
	領域ⅱ	授業づくりの長期実践事例研究Ⅰ		2	2	
		授業づくりの長期実践事例研究Ⅱ		2		2
		特別支援学校における授業づくりの長期実践事例研究Ⅰ		2	2	
		特別支援学校における授業づくりの長期実践事例研究Ⅱ		2		2
	領域ⅲ	児童生徒の成長・発達支援の長期実践事例研究Ⅰ		2	2	
		児童生徒の成長・発達支援の長期実践事例研究Ⅱ		2		2
		障害児童生徒の成長・発達支援の長期実践事例研究Ⅰ		2	2	
		障害児童生徒の成長・発達支援の長期実践事例研究Ⅱ		2		2
	領域ⅳ	学習コミュニティマネジメント実践事例研究		2	2	
		学校協働組織のマネジメント		2	2	
	領域ⅴ	公教育改革の課題と実践		1		1
		教師の実践的力量形成の課題と実践		2		2
		学校と社会		1		1
		特別支援学校における教師の実践的力量形成の課題と実践		2		2
コース別選択科目	1系	カリキュラム・授業改革マネジメント学校拠点長期協働実践プロジェクト		8	4	4
		カリキュラム改革事例研究とその理論		2	2	
		授業改革事例研究とその理論		2	2	
		長期実践報告の作成と発表		3		3
	2系	児童生徒の成長・発達支援学校拠点長期協働実践プロジェクト		8	4	4
		成長と発達の実践研究		2	2	
		成長発達支援の事例研究		2	2	
		長期実践報告の作成と発表		3		3
	2系 特別支援	児童生徒の成長・発達支援学校拠点特別支援教育長期協働実践プロジェクト		8	4	4
		障害児の成長と発達の実践研究		2	2	
		障害児の成長発達支援の事例研究		2	2	
		特別支援教育長期実践報告の作成と発表		3		3
	3系	コミュニティとしての学校と教師の力量形成学校拠点長期協働実践プロジェクト		8	4	4
		学習コミュニティマネジメント事例研究		2	2	
		教師の力量形成のための組織学習事例研究		2	2	
		長期実践報告の作成と発表		3		3

履修方法及びその他注意事項

① 学校における実習１０単位
（教職専門性開発コースの学生は長期インターンシップ１０単位，
スクールリーダー養成コースの学生はスクールリーダー実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ 計１０単位を履修）
② 共通科目２０単位
③ コース別選択科目１５単位（いずれかの系を選択・集中履修）

計４５単位以上を修得すること。

なお，特別支援学校教諭専修免許状を取得しようとする者は，次の科目の中から２４単位以上修得しなければならない。
（共通科目）
○ 領域ⅱ　・ 特別支援学校における授業づくりの長期実践事例研究Ⅰ
・ 特別支援学校における授業づくりの長期実践事例研究Ⅱ
○ 領域ⅲ　・ 障害児童生徒の成長・発達支援の長期実践事例研究Ⅰ
・ 障害児童生徒の成長・発達支援の長期実践事例研究Ⅱ
○ 領域ⅴ　・ 特別支援学校における教師の実践的力量形成の課題と実践
（コース別選択科目）
○ ２系特別支援の全科目

※ 学校教育専攻及び教科教育専攻の科目を履修することができる。
ただし，修得した単位は，修了要件の単位には算入されない。

（事務局資料）

資料 1-2-4　長期インターンシップのねらい

(1) 長期インターンシップの特徴

従来の教育実習では，わずか４週間と期間も短く，内容も研究授業案の作成と実施に重きが置かれがちで，長期にわたる学級づくりや生徒指導，学校での様々な教師の協働活動については学ぶことは難しい。修了生も，「学部時代の教育実習では『一つの教材から，どのように子どもたちが楽しく学べるか』を重視していて『子どもの学びの姿を見取り，そこから授業を考える』ことはできなかった」と述べている。また，非常勤講師の場合，不安定な状況のまま重い責任を担うという問題があり，特に，新任としていきなり学級や教科の重責を担う場合，学校の現実に適応していくことに精一杯にならざるを得ず，ようやく確保した安定を守ろうとすることが授業改革・学校改革の大きな壁となりがちである。

これらに対して，長期インターンシップでは，１年間にわたって教員集団に加わりながら実習に取り組んでいく。それにより，１年間の学級づくりの過程や生徒指導，教師として学校を支える協働の仕事について実践的に学ぶことができる。共に学び合う教師たちの一人として学校にかかわることは，教師として授業づくり学校づくりへの長い実践の展望を得ることにつながっていく。大学院がこれらの支えとなり，インターンシップでの経験や悩みを，授業を通して大学の教師や仲間と語り合いながら進めていく。

(2) 長期インターンシップの目標

長期インターンシップにおいては，教科指導のみならず，生徒指導，学級づくり・学級経営，学校運営をはじめとする学校における教師の仕事の総体を一年にわたって経験し，そこで直面する様々な課題について，指導教員等の支援を得ながら取り組む。

（「長期インターンシップの手引き」より抜粋）

資料 1-2-5　協働実践研究プロジェクト

長期の協働実践研究プロジェクト群の特質は次の３つにまとめることができます。

①　学校で現に課題としテーマとして取り組んでいることを中心に据える

研究のためのテーマは，研究者のコミュニティの共有している方法や理論，論文としての表現様式に多かれ少なかれ規定されています。それにマッチしたテーマや方法が，実践研究の方法やテーマとしてふさわしいとはかぎりません。そこには大きなギャップがあるというのが現実です。

このコースの主軸である長期実践研究プロジェクト群では，学校で現に取り組んでいるテーマをそのまま主題に据えます。学校でいま協働で取り組むべき課題を学校で熟慮して見定めていく。その課題をどう掘り下げていくか，どう実践として実現していくか。そのための協働の探究を学校と大学の研究者が協力して進めていく。このコースの基本的な考え方はここにあります。

②　テーマに関わって学校で展開される実践を中心に据える

軸となるのは，実践をつくりあげ，展開し，省察し（記録を通して検討し），それをふまえてさら に実践を展開していくサイクルです。 実践者としての私たちはいつも時々の仕事に追われています。じっくり構想を練る時間，そして，展開した活動について，じっくり検討し，課題を明らかにし，それを次の実践に生かしていくことが十分できていないのが実状です。ひとつの仕事を終えるとふりかえるまもなく，別な仕事に追われ，またもどってくるころには，その仕事の到達点や課題について記憶はおぼろげになっており，また同じパターンから出発して，展開したころ，また同問題に直面し記憶がよみがえるなどいうことを繰り返してもいます。

実践の中で，省察が深められず，後から検討し直せる記録が組織されていないことは，研究が実践から離れている原因にもなっています。実践に関わる研究を進めようとしても，手がかりとなる記録が乏しく，報告をまとめるために，文章になっている，論のための論に手がかりをもとめ，その切り張りのような文章をまとめるようなことに陥ってしまう。

実践と研究が別の仕事のようになってしまっている現状では，研究は，むしろ実践の時間をうばう邪魔者になっていきます。実践には生かされない，そうした研究のための研究に対して否定的な意見が多いのは当然でしょう。

しかし，自分たちの現状をふまえ，それをよりよくしていく方向を見定め，そのための実践を構想し，実現するために，これまでの実践の検討，現状の検討，方向に関わる検討，実践の構想のための熟慮・研究は欠かすことができません。ましてや，社会全体が大きく変化し，教育の改革が求められる時期にはその重要性はさらに大きくなってきているといえるでしょう。実践を発展させるための探究，そのための検討・熟慮・研究に時間をとり，それをより確かなものにしていくことこそが実践研究の課題です。そして，学校自身がこうした実践研究の拠点となり，教師がそうした実践研究の主体としての専門性を高めていくことこそが，教育改革実現の鍵であるというのがこのコースを生み出した基本的な視点です。実践を組織的に省察し，その省察をふまえて実践を組み立て直していく。より深く熟慮され構想され省察された実践づくりはそのまま，もっとも深く実践に根ざした実践研究そのものでもある。わたしたちが主軸に置きたいのは，そうした「省察的実践=実践的研究」の実現です。実践は学校で展開しているのですから，まずその実践を裏打ちするための探究・研究の拠点は学校です。実践について考え，実践の中で考え，実践について考える。そうした探究を，実践の場である学校で展開していくことがこの「長期実践研究プロジェクト群」の基本的な考え方です。

③　実践の展開について考えること，省察し構想していくことを軸にする

より具体的には，実践の構想，展開過程の跡づけ，そしてその展開の結果の検討などについて方法の工夫が必要となります。基本的には，実践の構想，展開，事後の検討をそれぞれで話し合いながら進め，そのサイクルを積み重ねていきます。要所要所で，考えをまとめ，実践を共有しまた後からも検討できる形に記録化していくことも重要なサイクルです。お互いに実践とそれを通して深めている探究を紹介しあい，共有していく機会を半期に一度ずつ設定していきたいと思います。

また，自分たちの実践を現状を越えて発展させていくために，広く手がかりになる実践を求めていくことも必要です。県内外の取り組み，国内外の改革の展開から学んでいくために，さまざまな機会を作っていきます。実際に，他の地域の学校を訪ねる。他の地域や国の実践記録，実践研究の展開を検討する。政策動向を把握する。そうした探究も並行して進めていきます。

（「学校改革実践研究入門」より抜粋）

資料 1-2-6　本学の教育課程に対する文部科学省の高い評価



教職大学院 Newsletter No. 75

福井大学大学院　教育学研究科　教職開発専攻　since2008.4　2015.7.4

アクティブ・ラーニングを支える教員養成
～高大接続システム改革が目指すものとその実装のために～

文部科学大臣補佐官　鈴木　寛

平成27年2月より文部科学大臣補佐官を拝命し，文部科学省に復帰することとなりました。

文部科学副大臣時代に福井大学教職大学院に視察にお邪魔し，その時以来，お付き合いを続けさせていただいており，本年の2月のラウンドテーブルにおいて開催されたシンポジウムに登壇させていただくなど，強い御縁を感じております。引き続き何卒よろしくお願い申し上げます。

私は現在，文部科学大臣補佐官として「高大接続システム改革」について特に中心的にお手伝いをさせていただいております。「高大接続システム改革」とは，高等学校教育の質の確保・向上を図るとともに，高等教育への円滑かつ有益な移行について現状の課題を明確にし，解決策を提示しようとする試みです。

さらに，各大学におけるディプロマポリシー（学位授与に係る考え方）及びそれに基づくカリキュラムポリシー（カリキュラムの編成及び教育活動の実施方針に係る考え方），アドミッションポリシー（大学入学時点で求める学力の水準及び評価方針）を明確にし，大学入試の在り方を見直すことまで射程に入れております。

私は，高校生活とは「書を読み，友や師と語り，仲間と何かを為す」ものであるべきと考えております。それは，高校時代にこそ，人生の基盤となる浩瀚な書物に触れることにより，人生の基盤となる先人の知恵をたくわえ，また，友や師と語らうことによって自らの人生の指針を見つけ，あわせて困難な課題に立ち向かい何かを成し遂げる体験を積むべきではないかと考えているからです。

それでは，現在の高校生が私が理想とする生活を送れているかというと，必ずしもそうではありません。国立教育政策研究所の調査によれば，高校生のうち，1か月間の平均読書冊数は1.6冊，毎月1冊も本を読まないと回答した生徒が約半数に上るというのですから驚きです。

この原因は，スマートフォンの普及による活字離れなど様々な要因があるのだろうと思われますが，あわせて現在の大学入学試験の在り方にも原因があるのではないかと推測されます。

特に，一部の大学入試において，過度に知識を偏重し，丸暗記を推奨するかのような問題が出題され，そうした大学を目指す高校生に対して，有益とは思われない受験勉強を強いてしまっていることも大きな原因ではないかと考えています。

こうした状況を打開するためには，脱マークシート型試験，脱マルチプル・チョイスにより深い思考力・表現力・判断力を問う出題や論述式を増加させるとともに，AOや推薦等の高校時代の活動を評価することが重要です。

現状を改革することは容易ではありません。しかし，10年後，100年後の我が国の姿を見据えた時に，大志を抱く若者が些末な暗記にその高校生活を費やすことなく，主体性をもって多様な人々と協働して問題を発見し解を見出していく能動的学習（アクティブ・ラーニング）に費やすという変革は極めて重要であり，そのために高大接続システムを改革することが必要不可欠であると考えています。

これからは変化に富む時代であり，折々の知識は5年も経てば陳腐化します。だからこそ臨機応変に対応する力，非定型の課題を乗り切る力を養わねばなりません。これからの人づくりは，パッシブラーナー（受動的学習者）からアクティブラーナー（能動的学習者）をどう育てていくかが，もっとも重要なのではないでしょうか。

私は，文部科学大臣補佐官として次期学習指導要領の改訂にも携わっており，中央教育審議会における議論にも参加していますが，その場でもアクティブ・ラーニングの重要性が繰り返し訴えられています。

児童・生徒のアクティブ・ラーニングを支えるのは，言うまでもなく教員であり，アクティブ・ラーナーを養成するためには，教員自らが現場のニーズの多様化や複雑化を積極的に把握し，そうした状況に対応するための解決策を自ら見つけ出す能力を有することが不可欠です。

そのためには，積極的な実習や実践の経験が重要であると考えられ，福井大学教職大学院では，学校を拠点とした教職大学院においてこうしたニーズに応えるべく先進的な教員養成が行われております。

福井大学のこうした取組に賛同の意を示すとともに，今後とも，変化をいち早くとらえ，新たな時代にふさわしい新たな教育法の研究・開発・実践を普及していく役割を果たされることを期待いたします。

The Challenge for Distributed Communities of Practice and Reflection　1

（教職大学院 News Letter No.75 より抜粋）

【実践的かつ教育改革の動向に即した教育内容と教育方法】

① 院生は実践的な学修を通じて実践-省察-再構成のサイクルを展開し，大学院での各系の学修を深め実践の中の理論の生成を図る。特に学部卒院生は毎週のカンファレンスで教員との協働企画・運営によるプロジェクト学習を実施し，自発的・自律的・協働的・自治的な学修を進める（**資料 1-2-7，8**）。

資料 1-2-7　週間カンファレンスの概要



（事務局資料）

資料 1-2-8　平成 27 年度週間カンファレンス午前②学校実習に基づくプロジェクト学習のテーマ

	テーマ	内容（テーマ主旨）	週毎の活動	企画主担当チーム
4月	New Stage!	桜前線も通過し，新年度が始まり，これからの期待や不安で胸が一杯かと思います。M1は教職大学院に入学し，M2は各々の課題を持ち，新たな段階 " New Stage"に進むタイミングです。そのため、自分のことを捉え直して振り返り、語り合うことで自分でも気付くことが出来なかった視点を得ることが出来るのではないかと思います。今月は、自分のことを振り返り、今年一年の活動の指針を明確にしてインターンシップ、課題別実習に臨みたいと思います。	第一週　自己マッピング 第二週　自己分析 第三週　まとめ 第四週　目標を語り合う	M2全員
5月	授業記録	インターンシップが始まり早1ヶ月が経ちました。それぞれの実習先で様々な授業・活動にかかわって来たことと思います。それらを省察し、次の実践に繋げるために重要な役割を果たす"記録"。今月は、その記録のなかでも「授業参観記録」に焦点を当てます。あなたは授業参観する際、どんなことに気を付けて書いていますか。自分が大切にしている点を考え、また他者が大切にしていることを聞きながら、授業参観並びに授業記録を捉え直していきましょう。そして今後の記録、そして学びに活かしていきたいと思います。	第一週　休講 第二週　自分の視点を語り合う 第三週　授業参観（附属小） 第四週　Reflection	高田、田村朋、 藤井、吉田
6月	道徳	来る2018年度、道徳が『特別の教科 道徳』として教科化されます。より一層注目が集まっている道徳ですが、なかなかじっくりと考える機会はなかったのではないでしょうか。道徳観を語り、授業づくり・模擬授業・授業実践・授業検討を通して、今回は道徳について考えを深めていきましょう！	第一週　道徳観を語り合おう！ 第二週　"授業者の想い"をこめた授業づくり 第三週　模擬授業 第四週　"生徒の学びの姿"を通して授業検討会をしよう！	北川、高橋、 田中、田村佳
7月	INTERVAL:フカメル	早くも一学期が過ぎようとしています。インターン毎、多くの記録を書いてきたと思います。その記録は宝となって、今の貴方の中に息づいていることでしょう。しかし、記録を読み返していましたか。きっとそんな余裕は無かったのではないでしょうか。ここで一度読み返すことで、宝の価値を認め、九月以降に活かすための糧にしましょう。	第一週　道徳科の「種」探し 第二週　前期の振り返り	高橋、吉田、 藤田、増谷、 山田芳
10月	それでも教師になりたいの？	現在、教員を取り囲む問題がしばしばメディアで挙げられています。いじめへの対応、問題児への対処、虐待児童の救済、労働時間の過多、薄給など。そこでこれまでの自分たちの経験に加え、社会人経験者の意見も交えながら、それらの問題について考えていきます。そこから自分の目指す方向性を再確認していきましょう。	第一週　教員の幸福度について 第二週　企業から見た教員① 第三週　子どもに関する問題の多様化 第四週　企業から見た教員②	附属小学校・院生 附属中学校・院生
11月	授業参観	多くの学校で公開研究会が実施される季節となりました。私達院生も、先生方の授業を参観し、自らの学びに生かしていきたい所ではありますが皆様は今までどのように参観をして来たでしょうか？今月の主担企画ではその授業参観に焦点を当て、どのような視点で、どのような学びをして来たか。そして今後どのように参観をしていくか捉え直す月としましょう。	第一週　参観視点・参観者編 第二週　参観視点・授業者編 第三週　安居中学校公開研 第四週　振り返り	啓新高校・院生 至民中学校・院生 丸岡南中学校・院生
12月	特別支援	これまで多くの児童生徒と関わってきたと思われます。その中でも気がかりな子どもや特別な支援を要する子どもに出会った経験が少なからずあるのではないでしょうか。これまで道徳の授業づくりや授業参観など全体的なとらえが中心でした。そこで今月は「個」に焦点をあてて気になる子への特別支援について考えてみたいと思います。現在のインターン、また将来教員として働く場面で避けては通れないテーマについて、今一度立ち止まってそれぞれの考えを深めていきましょう。	第一週　いるいる！気がかりな子！ 第二週　教えて！先生！ 第三週　報告！追ってみたらこうだった！	池田、長谷川、 藤田、増谷
1月	長期的な実践を振り返るⅠ	拠点校でのインターンシップと各カンファレンスを通して、実践と振り返りを繰り返してきました。年度の終わりが近いこの時期だからこそ、自分たちの実践を1年、2年という長いスパンで振り返ることが出来るようになったのではないでしょうか。そこで1月は自分たちの実践が、どのように現在の自分に繋がっているのかを改めて考える時間にしましょう。	第一週　長期的実践の振り返り① 第二週　長期的実践の振り返り② 第三週　1年間の振り返り	串、松山、 山田芳、増谷
2月	長期的な実践を振り返るⅡ	拠点校でのインターンシップと各カンファレンスを通して、実践と振り返りを繰り返してきました。年度の終わりが近いこの時期だからこそ、自分たちの実践を1年、2年という長いスパンで振り返ることが出来るようになったのではないでしょうか。そこで1月は自分たちの実践が、どのように現在の自分に繋がっているのかを改めて考える時間にしましょう。	第一週　長期的実践の振り返り① 第二週　長期的実践の振り返り② 第三週　1年間の振り返り	全院生

（事務局資料）

② 両コース院生が協働で学ぶ月間のカンファレンスでは毎回の学修テーマが設定され（**資料 1-2-9**），異校種・異世代が混ざる小グループでの議論を主とした教育方法を採り，院生各自が近年の教育改革課題の方向定位を示す文書を吟味し（**資料 1-2-10**），各課題意識に応じた能動的な学修（アクティブ・ラーニング）を行っている（**資料 1-2-11**）。なお，授業は実践を基盤として学びの必然性を保証し，少人数による対話・討議を主形式としている。集中講義では，架橋理論の検証，公教育改革の課題の検討，小グループでの議論等，幅広く教育方法を組み合わせ院生の実践的能力の涵養を図っている（**資料 1-2-12**）。院生には実習・プロジェクトとカンファレンスの事前事後学習を促す記録作成と毎月のレポートを課し単位の実質化を担保している（**資料 1-2-13**）。

資料 1-2-9　月間カンファレンスのテーマ

	4月	5月	7月	10月	11月
午前のテーマ 学校の協働研究	教育改革の展開を踏まえ，長期的な実践の展望を拓く	学校での協働研究の現状を踏まえ，これからの展望を拓く	前期の展開を振り返り課題をとらえ直す	新しい世代を支え学び合う	他校の研究から学ぶ
午後のテーマ 授業改革・カリキュラムマネジメント	現在の実践や教科の学びを語る	専門領域にかかわる実践研究紀要を読む	専門領域にかかわる実践を語り聴き抱負を定める	自分自身の実践の挑戦を語るⅠ	自分自身の実践の挑戦を語るⅡ

（事務局資料）

資料 1-2-10　平成 27 年 4 月 月間カンファレンス教育改革資料

検討を要する教育改革に関する文書 2015 年 4 月

☆：推奨資料

教育改革の全体像にむけて

01 中央教育審議会　☆☆☆
子供の発達や学習者の意欲・能力等に応じた柔軟かつ効果的な教育システムの構築について（答申）
平成 26 年 12 月 22 日

02 中央教育審議会　☆☆☆
これからの学校教育を担う教職員やチームとしての学校の在り方について（諮問）平成 26 年 7 月 29 日

03 中央教育審議会教育振興計画部会　☆☆ 教育振興基本計画 平成 25 年 6 月 14 日

04 内閣府教育再生実行会議
04-06　☆☆☆
「学び続ける」社会，全員参加型社会，地方創生を実現する教育の在り方について（第六次提言）
平成 27 年 3 月 4 日
04-05　☆
今後の学制等の在り方について（第五次提言）　平成 26 年 7 月 3 日
04-04　☆
高等学校教育と大学教育との接続・大学入学者選抜の在り方について（第四次提言）　平成 25 年 10 月 31 日
04-03　☆
これからの大学教育等の在り方について（第三次提言）　平成 25 年 5 月 28 日
04-02　☆☆
教育委員会制度等の在り方について（第二次提言）　平成 25 年 4 月 15 日
04-01　☆☆
いじめの問題等への対応について（第一次提言）　平成 25 年 2 月 26 日

教育課程における学習の転換

05 中央教育審議会　☆☆☆
初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について（諮問）　平成 26 年 11 月 20 日

06 中央教育審議会　☆☆☆
道徳に係る教育課程の改善等について（答申）　平成 26 年 10 月 21 日

07 中央教育審議会　☆
第 6 期中央教育審議会生涯学習分科会における議論の整理 平成 25 年 1 月

08 中央教育審議会　☆☆
幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）
平成 20 年 1 月 17 日

09 中央教育審議会　☆
今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）　平成 23 年 1 月 31 日

コミュニケーション・言語活動の充実

10 文部科学省　コミュニケーション教育推進会議　☆
子どもたちのコミュニケーション能力を育むために ～「話し合う・創る・表現する」ワークショップへの取組～（審議経過とりまとめ）平成 23 年 8 月 29 日

11 文部科学省初等中等教育課程科教育課程企画室　☆☆ 言語活動の充実に関する指導事例集 平成 23 年 10 月

教育目標・評価の在り方

12 文部科学省　調査研究協力者会議等（初等中等教育）☆☆ 育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会−論点整理−について 平成 26 年 3 月 31 日

子どもたちの成長・発達を支える

13 中央教育審議会　☆ 今後の青少年の体験活動の推進について（答申）　平成 25 年 1 月 21 日

14 中央教育審議会 初等中等教育分科会　特別支援教育の在り方に関する特別委員会　☆☆ 共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）平成 24 年 7 月 23 日

15 文部科学省　暴力行為のない学校づくり研究会　☆ 暴力行為のない学校づくりについて（報告書）
平成 23 年 7 月

16 文部科学省　生徒指導に関する教員研修の在り方研究会　☆ 生徒指導に関する教員研修の在り方について（報告書）　**平成 23 年 6 月**

17 文部科学省　☆☆☆生徒指導提要 平成 22 年 教育図書（2011）¥298

教師の力量形成

18 文部科学省　初等中等教育局教職員課・高等教育局大学振興課教員養成企画室　☆ 大学院段階の教員養成の改革と充実等について（報告）　平成 25 年 10 月 15 日

19 中央教育審議会　☆☆☆ 教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（答申）
平成 24 年 8 月 28 日

20 福井県教育委員会　教員研修の在り方検討会　☆☆ 教員研修の在り方検討会報告書 平成 24 年 3 月

高大接続・入試改革・高校改革・大学改革

21 中央教育審議会　☆☆☆ 新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育，大学教育，大学入学者選抜の一体改革について　～すべての若者が夢や目標を芽吹かせ，未来に花開かせるために～ 平成 26 年 12 月 22 日

22 中央教育審議会　☆ 初等中等教育分科会高等学校教育部会審議まとめ～高校教育の質の確保・向上に向けて～
平成 26 年 6 月 30 日

23 国立教育政策研究所☆ AHELO*調査結果の分析に関する研究会（研究成果報告書）　*高等教育における学習成果調査 平成 26 年 3 月

24 中央教育審議会　☆☆ 新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け，主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）　**平成 24 年 8 月 28 日**

（事務局資料）

資料 1-2-11　平成 27 年度４月 月間カンファレンスグループ表

平成27年度　4月合同カンファレンスA日程(4/18, 19)　グループ①

1	小嵐	10	森	5			（至民中）	3			板橋区教育支援センター			埼玉・新座高	0			有終南小（茨城県）	0
2	半原	7	加藤	6			（啓新高）	7			気比中	11		春江小				丸岡南中（茨城県）	0
3	隼瀬	2	永谷	4			（附属中）	1			高志高	7		野向小	10			武生西小（奈良県）	0
4	杉山	9	小林和	7			（附属中）	1			福井東特支	10		勝山高	13			鳥羽小（滋賀県）	0
5	柳澤	1					（啓新高）	7			丸岡南中	2		青郷小	11			光陽中（高知県）	0
6	宮下	8					（丸岡南中）	2			（中藤小）	6		高椋小	10			同志社中	0
7	小林真	3	稲井	8			（中藤小）	6			嶺南教育事務所	11		足羽中	12			金津中（高知県）	0
8	笹原	10	三田村	5			（中藤小）	6			教育研究所	8		岡本小	12			永平寺中（高知県）	0
9	中川	3	山崎	11			（附属小）	4			高浜中	13		附属中	1			同志社中	0
10	天方	4					（至民中）	3			嶺南東特支	10		鯖江・豊小	12			気比中（高知県）	0
11	松井	10					（丸岡南中）	2			福井県幼児教育センター	8		美浜中	13			雲浜小（熊本県）	0
12	倉見	8	石井	0			（附属小）	4			安居中	3		板橋・中台中	0			義務教育課（鳥取県）	0

※緑はリーダーM2，濃い青はリーダー1年履修，水色はリーダーM1，黄色はストレートM2，橙はストレートM1を示す。
※数字は，開講式グループ番号を示す。
院生出欠情報
スタッフ参加情報
笹原　4/18のみ参加

（事務局資料）

資料 1-2-12　集中講座 Cycles 2014 Summer 要項

集中講座 Cycle2014 Summer 要項 2014.08.18

Cycle1 長期にわたる学習の展開とそれを支える教師の実践　＜実践記録を読む＞

カリキュラムのデザインの実践事例研究（共通 1 年次）
実践記録の分析を通してカリキュラムのデザインを検討する。
カリキュラムマネジメント実践事例研究（共通 2 年次）
実践記録の分析を通して学校におけるカリキュラムづくりの取り組みについて検討する。

Cycle2 実践のコミュニティ/学習する組織　＜実践の架橋理論の検討＞

学習コミュニティマネジメント実践事例研究（共通 1 年次）
学習コミュニティと学習者の成長に関わる実践研究の検討を進める。
学校協働組織のマネジメント（共通 2 年次）
学習コミュニティと組織学習に関わる実践研究の検討を進める。

Cycle3 実践の展開・実践者の力量形成・コミュニティのプロセスをとらえ直す
＜実践の事例研究とその方法＞

授業改革事例研究とその理論（1 系 1 年次）
授業づくりについて自身の実践を記録化するとともに、その理論的背景を学ぶ。
成長発達支援の事例研究（2 系 1 年次）
成長発達支援について自身の実践を記録化するとともに、その理論的背景を学ぶ。
障害児の成長発達支援の事例研究（特別支援系 1 年次）
障害児の成長発達支援について自身の実践を記録化するとともに、その理論的背景を学ぶ。
学習コミュニティマネジメント事例研究（3 系 1 年次）
学習コミュニティマネジメントについて自身の実践を記録化するとともに、その理論的背景を学ぶ。
カリキュラム改革事例研究とその理論（1 系 2 年次）
カリキュラム改革について自身の実践を記録化するとともに、その理論的背景を学ぶ。
成長と発達の実践研究（2 系 2 年次）
成長発達支援について自身の実践を記録化するとともに、その理論的背景を学ぶ。
障害児の成長と発達の実践研究（特別支援系 2 年次）
障害児の成長発達支援について自身の実践を記録化するとともに、その理論的背景を学ぶ。
教師の力量形成のための組織学習事例研究（3 系 2 年次）
学校における教師の力量形成のための組織学習について自身の実践を記録化するとともに、その理論的背景を学ぶ。

（集中講座 Cycles 2014 Summer 要項より抜粋）

資料 1-2-13　インターンシップの記録

インターンシップの記録
・毎日の記録として，授業参観や支援補助等の過程で起きた出来事や気づいたことは，適宜メモを取っておく。
・週ごとにメモを見返して振り返り，特に印象的な場面や学びにつながった出来事をまとめ直し，考えたことを記録しておく。
・月に一度の合同カンファレンスにおいて，インターンシップの取り組みとそこでの省察について紹介する。
・夏期集中講座のサイクルの中で，前期のインターンシップの展開とそこでの省察について報告し，レポートとしてまとめる。
・冬期集中講座のサイクルの中で，12 月までのインターンシップの展開とそこでの省察について報告し，レポートとしてまとめる。
・２月末のラウンドテーブルにおいて，１年間のインターンにおける実践の展開とそこでの省察について１時間 20 分程度の報告を行う。
・２年次の５月上旬までに，長期インターンシップ報告書をまとめ刊行する。
・６月末のラウンドテーブルにおいて，長期インターンシップ報告書に基づいて報告を行う。

（「インターンシップの手引き」より抜粋）

③　附属学園を教員研修機関と位置づけ「長期インターンシップ」を実施するとともに，学園所属教員が本専攻で学修している（P3-4 **前掲資料 1-1-2**）。また，附属学園の教育研究集会と連携し，院生が最新の教育実践を学修している（**資料 1-2-14**）。これらの学修を通して，院生は長期の実践・省察・記録化の事例研究サイクルを「長期実践研究報告」に結実させていく。本報告執筆は教員チームによる支援のもとで進められ（**資料 1-2-15, 16**），「長期実践研究報告会」でのピア・レビューの結果に基づき審査される（**資料 1-2-17**）。さらに，院生が実践の中の理論の検証を行う実践研究交流集会を開催する。なお，本集会は国内外参加者が 800 名規模に発展し，院生の学修機会の多様化に寄与している（**資料 1-2-18，19**）。以上に示した実践的で能動的な教育内容・方法は教委・学校関係者も含めて院生からも極めて高い評価を得ている（**資料 1-2-20，P3-6，7 前掲資料 1-1-4**）。

また，院生が主体的・協働的に学修し，議論や実習準備等を行うコラボレーションホールと院生室を整備し，備品等も確保している（**資料 1-2-21，22**）。

資料 1-2-14　平成 27 年度附属小学校教育研究集会要項



（事務局資料）

資料 1-2-15　長期実践研究報告執筆支援

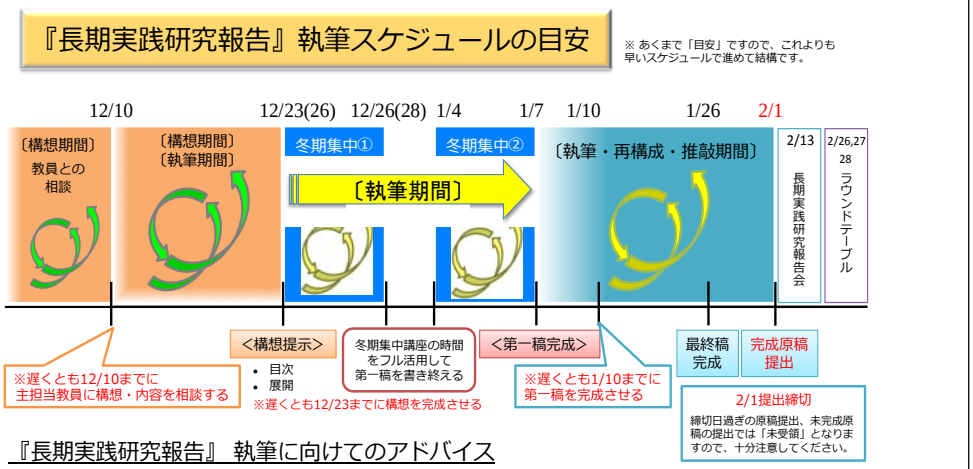
平成27年度
長期実践研究報告執筆支援　大学院教員の主な読み手表

No	氏名	読み手（正）	読み手（副）
		二宮	松木
		岸野	倉見
3		森	半原
4		小林真	木村
5		宮下	半原
6		倉見	小嵐
7		隼瀬	杉山
8		柳澤	宮下
		森	稲井
10		木村	小林真
11		岸野	小林和
12		杉山	稲井
13		二宮	松田通
14		木村	半原
15		山崎	二宮
16		綾城	森
17		稲井	風間
18		森	半原
19		二宮	杉山
20		半原	宮下
21		小林真	隼瀬
22		小嵐	綾城
23		木村	小林真
24		三田村	岸野
25		岸野	三田村
26		柳澤	宮下
27		木村	柳澤

※遅くとも12/10までに読み手（正）の教員と構想・内容を相談してください。
※読み手（正）（副）の教員と随時、進捗状況を確認しながら執筆を進めてください。
※読み手（正）（副）の教員以外の教員にも気軽にご相談ください。

（事務局資料）

資料 1-2-16　長期実践研究報告執筆スケジュールの目安



『長期実践研究報告』 執筆に向けてのアドバイス

- 〔構想期間〕に、『長期実践研究報告』の目次や展開図をあらかじめ作成しておくと執筆の助けになります。
- <構想提示> までに、執筆に必要な記録・資料等を確認し、整理しておきましょう。
- 構想が完成したらすぐに執筆を始めましょう。
- 「実践中だから・・・」、「忙しいから・・・」といって、相談・構想・執筆を後回しにしないようにしましょう。
- 報告タイトルは<第一稿完成>まで「仮」とし、〔執筆・再構成・推敲期間〕に主担当教員等と相談して決定しましょう。

- 報告内容、執筆スケジュールに不安を覚える方は、早めに主担当教員と相談して自己管理しましょう。
- 執筆にかかわって特別な支援を要する方は、木村・岸野・綾城に相談してください。

（事務局資料）

資料 1-2-17　平成 26 年度長期実践研究報告会要項

長期実践研究報告会

長期にわたる実践の営みを語る／聴く

語り手／聴き手の省察に向けて

福井大学教育１号館6階
コラボレーションホール

2月14日

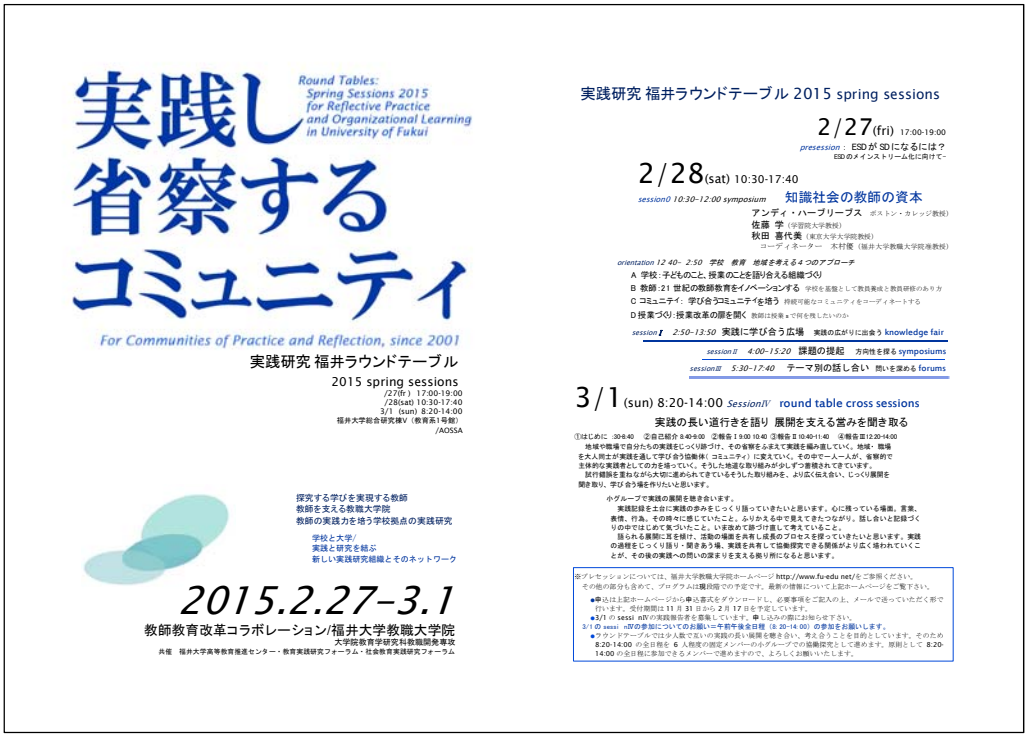
司会進行：風間

9:30	あいさつ	長期実践報告会にあたって（柳澤）
	諸連絡	本日の日程確認（岸野）
9:40	長期実践報告会	9:40-11:00 1つ目の報告（質疑議論含む）
		11:00-12:20 2つ目の報告（質疑議論含む）
12:20	事務連絡	○報告書最終版の提出について（岸野） ・長期実践報告書 印刷最終版の提出等について ・M1の報告書提出について ○今後の日程の確認（宮下） ・ラウンドテーブルについて ・年度末・来年度初めの日程について（学位記授与式,開講式等）
12:30	ラウンドテーブル内容説明・打ち合わせ　個別相談	ラウンドテーブル内容説明及び打ち合わせ　必要に応じて,学校担当者との個別相談
	意識満足度調査	未実施の院生へ配布,記入

＜報告会での議論を踏まえて,M2は報告書の最終的な修正をすること。M1は報告を聴いて考えたことを自分の実践報告に入れ込むこと＞

（事務局資料）

資料 1-2-18　平成 26 年２月・３月 公開実践研究交流集会一次案内



（事務局資料）

資料 1-2-19　実践研究福井ラウンドテーブルの歩み

実践研究福井ラウンドテーブルの歩み

2001.3.17-18　春のシンポジウム ラウンドテーブル　教師の実践的力量形成をめざして
　木岡一明・寺岡英男（この回は教師教育をめぐる 20 人程度の研究会であり，実践を聴き合う会ではなかった。）
2001.11.10-11　実践研究：福井ラウンドテーブル　省察的実践を支える協働（第 1 回）
　For Reflective Practice, Professional Development, and Organizational Learning.
　第 1 回目の実践研究福井ラウンドテーブルが開催される。（参加者 20 数名）京都ユースホステル協会 福井市公民館主事　つむぎの会　ゆきんこ共同保育園　福井大学附属小学校　福井大学教育地域科学部　児童館プロジェクト　福井大学探求ネットワーク
2002.3.16-17　実践研究・事例研究ラウンドテーブル(第２回)　高木展郎・大田邦朗・藤原文雄・石川英志
　フレンドシップ事業福井ラウンドテーブル　同日開催 探求ネットワークのラウンドテーブル　～現在に至る。
2002.7.13-14　実践研究：福井ラウンドテーブル（省察的実践を生み出す　学び合う組織を編む）（第３回）
2003.3.15-16　実践研究・事例研究ラウンドテーブル（第４回）
　シンポジウム　教師教育における専門職大学院の可能性を探る　辻野昭・葉養正明
2003.7.12-13　実践し省察するコミュニティ　実践研究：福井ラウンドテーブル（第５回）
2004.3.13-14　学校改革実践研究福井ラウンドテーブル（第６回）　秋田喜代美ほか
2004.7.3-4　実践し省察するコミュニティ」実践研究福井ラウンドテーブル 2004　（第７回）
　2004.8　教育のアクションリサーチ研究会が始まる（於熱海～2009）
　2005.1　実践研究東京ラウンドテーブル始まる（於早稲田大学）　～現在に至る。
2005.3.5-6　学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2005（第８回　参加者 100 名超）
　国際シンポジウム Ann Liebermann 横須賀薫　佐藤学　於国際交流会館
2005.7.9-10　実践研究福井ラウンドテーブル 2005　（第９回）
2006.3.4-5　学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2006　フェニックス・プラザ　（第 10 回）
　田中孝彦・石川英志・新田正樹・上野ひろ美・白益民・松木健一・牧田秀昭
2006.7.1-2　実践研究福井ラウンドテーブル 2006　（第 11 回）三輪建二・倉持伸江・松木健一・水野篤夫
　兼日本社会教育学会東海北陸研究集会
2007.3.3-4　学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2007（第 12 回）渡邉満・無藤隆・松木健一・新田正樹
　2007.4　福井大学教職大学院の準備期間が始まる。
2007.6.30-7.1　実践研究福井ラウンドテーブル 2007　（第 13 回）藤本 寛巳・淵本幸嗣・寺岡英男
2008.3.1-2　学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2008　（第 14 回）横須賀薫・新田正樹・松木健一・Jae-Hoon Yu
2008.6.28-29　実践研究福井ラウンドテーブル 2008 総合研究棟Ⅰ　（第 15 回）
　人見久城・筒井潤子・寺岡英男・岸野麻衣・向当誠隆
2009.2.28-3.1　学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2009　（第 16 回）稲垣忠彦
2009.6.27.28　実践研究福井ラウンドテーブル 2009　（第 17 回）
　5 つの領域：専門職として学び合うコミュニティ（分野ごとのセッション始まる）
2010.2.27-28　学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2010　（第 18 回参加者 300 名前後）鈴木寛　Catherine Lewis
2010.6.26-27　実践研究福井ラウンドテーブル 2010（第 19 回）：学校・コミュニティ・特別支援・医療看護
2011.2.26-27　学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2011　（第 20 回　参加者 300 名を超える。）門脇厚司・森透
2011.6.25-26　実践研究福井ラウンドテーブル 2011　（第 21 回）松本謙一・勝野 正章・木原俊行・三輪建二
2012.3.3-4　実践研究福井ラウンドテーブル 2012 spring sessions　（第 22 回）(名称を変更する)
2012.6.23-24　実践研究福井ラウンドテーブル 2012 summer sessions（第 23 回)参加者 450 名を越える。
　兼日本社会教育学会東海北陸研究集会
2013.3.2-3　実践研究福井ラウンドテーブル 2013 spring sessions　（第 24 回）教師教育改革コラボレーションとの共催
2013.6.29-30　実践研究福井ラウンドテーブル 2013 summer sessions（第 25 回）
　2013 11 30-12 1　実践研究東京ラウンドテーブル 2013winter sessions（明治大学）
　2013 12 14/21　教育実践研究公開クロスセッション（福井大学）
　2014 2 8　宇都宮大学学校活性化フォーラム（宇都宮大学）
　2014 1 25　実践研究ラウンドテーブル in 静岡（静岡大学）
2014.3.1-2　実践研究福井ラウンドテーブル 2014 spring sessions　（第 26 回）参加者 550 名を超える。
2014.6.21-22　実践研究福井ラウンドテーブル 2014 summer sessions（第 27 回）
2015.2.27-3.1　実践研究福井ラウンドテーブル 2015 spring sessions（第 28 回）参加者 700 名を超える。
2015.6.26-28　実践研究福井ラウンドテーブル 2015 summer sessions（第 29 回）
2016.2.26-28　実践研究福井ラウンドテーブル 2016 spring sessions（第 30 回）参加者 800 名を超える。

（事務局資料）

資料 1-2-20　院生からの評価

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻

大学院修了を前にして

坂井市立春江小学校　山田　俊行

大した思いをもたず入学して，はや 2 年。入学とともに課せられた研究推進。やればやるほど分からなくなり，山積みされた資料や課題に追いまくられる日々。それでも，毎月の合同カンファレンスで，いろいろな先生方と語り合い，悩みを共有し，疑問が解消された時に感じた心地よさ。同じ勤務校ではないのに感じた連帯感。この感覚を，勤務校の先生たちに感じてもらえたら協働に近付くかも・・・!?

それまで耳にしたことはあれども，真剣に考えなかった「協働」の二文字。大学院に入学して初めて考え，この 2 年間いつでも私の頭の片隅に居座っている「協働とは何？」・「学校文化とは何？」という疑問。それを追究するため，勤務校では，指定を受けた道徳教育の研究推進に邁進してきた。次々と沸き起こる疑問や不安と格闘した 2 年であった。しかし，あわてずにじっくりと，間違った自信を見つめ直し，「子どもにとっても教師にとっても楽しい学校づくり」をめざしてきたつもりである。「道徳教育」を研究の中核にすえ，道徳の授業については，「子どもの思いを引き出す表現活動の工夫」を研究の柱として，「話合い」「書く活動」「役割演技」などの工夫に取り組んできた。また，道徳の授業を充実させるためには，授業研究会の充実が必要と考え，授業研究の流れ，授業研究会のもち方について模索してきた。協働して研究を進めるためには，組織体制の整備以外に，意欲や熱意といったモチベーションが継続しなければ，その内容は充実しないと考え，授業者の思いを大切にした授業研究会，関係者全員が“満足感”を得られる研究会をねらいとした。

正直なところ，入学当初の疑問に対する答えは見つかっていない。おぼろげな形は見えてきてはいるものの，未だ実感できていない自分がいる。

「学習する組織」の前書きに『組織づくりの課題は大きな問題である。とりわけ，なぜ理念を掲げながら，組織の多くの行動や現実が理念から離れているのかに目を向けなければならない。これは簡単な課題ではなく，一朝一夕には解決しない。「学習する組織」づくりは長い年月に及ぶ実践の積み重ねが必要であり，しばしば職業人生をかけることになる。』とある。「協働する組織づくり」も同じである。長い年月が必要である。たかが 2 年間追い求めたくらいで手に入る協働ならば，学校文化ならば，疾うに手に入っているはずである。

しかし，追い求めなければ近づけはしまい。たかが 2 年間，されど 2 年間である。この 2 年間で手に入れたものは，私にとって，とてつもなく大きなものだと感じている。それを生かすか，つぶすかは今後の自分次第である。正直なところ，私にとって，大学院という存在が研究推進の原動力になっていたところは否めない。修了後，その原動力を自ら奮い起こせるか，不安はある。しかし，子どもにとって何が大切か，そのために，自分には何ができるのかを考えながら，歩みを続けたい。「私の学校は協働しています。」と胸を張って言い切れるような組織づくりを目指していきたい。

大学院生としての学びは終わるが，私の協働への道は，まだまだ続く。

教職大学院 Newsletter No.80　2016.2.13

冬期集中講座に参加して

福井大学教育地域科学部附属中学校　田中　紗衣里

12 月 23 日～25 日，1 月 5 日～7 日の 6 日間，冬期集中講座に参加した。この冬期集中講座では，M2 は修士論文にあたる長期実践報告書を書き進めていく。冬期集中講座が始まるまでに，長期実践報告書の柱やおおまかな構成は担当教員と相談していた。しかし，それを文章にしていこうとすると，なかなか書くことができずにいた。思いはあるのにそれが文章にならない。そんな不安と焦りを抱きながら，ほとんどゼロの状態でこの集中講座を迎えてしまった。

6 日間とも，進行状況とともに気づいたことや考えたことを語り合う時間が設けられていた。このカンファレンスの時間は，私にとって重要な時間だったと今振り返ってみて思う。あまり書き進めることができなかったときは，「何を話したらいいのか…」と悩み，気が進まないこともあった。しかしグループの席に着き，話してみると，一日考えていただけあって，語ることはできるのである。自分が今どこまで書くことができて，これからどのようなことを書きたいと思っているのか，何が書けなくてパソコンを打つ手が止まっているのかを語りながら自分の中で整理し，改めて自分のことを振り返ることができた。また，聞いてもらうことで「この部分はもっと知りたい」「この部分が気になったんだけど」と客観的なアドバイスがもらえたことは書き進めるにあたって非常に参考になった。

私は，「家庭科って何だろう？」を考えつづけた 2 年間として，長期実践報告書にまとめようと考えていた。そこで，前半（12 月）の集中講座では，自分が家庭科について考えていたことを話させてもらった。私は家庭科を「どのような自分になりたいか」を考え，その目標に向かって生活していく姿勢を身につける教科であると考えていた。その話を聞いて下さった同じグループの先生が「どんな自分になりたいかっていうのは，生徒はどんな理想をもったらいいんだろう？って思って。」と話を聞いていて気になったことを教えて下さった。その言葉を聞いたことで私は，この家庭科を学ぶ意義は自分のとってのものであって，生徒にとっての家庭科を学ぶ意義はもしかしたら違うところにあるのかもしれないと考えるようになった。自分の文脈の中でしか考えられていなかったことが，話を聞いてもらったことで新たな視点で考え直すことができた。私にとってカンファレンスの時間は書き進める原動力となっていた。

6 日間の冬期集中講座で，これまで逃げてきた書くという一歩を踏み出せたことは非常に大きかった。苦しみながらも書き，語り，聴くというプロセスを繰り返しながら今までの自分と向き合うことで，自分が考えていることや思いの根底にあるものが少しずつ明確になっていったような気がする。最初の構想段階よりも何倍も考えを深めることができた，価値ある時間であった。

（教職大学院 News Letter No.80 より抜粋）

資料 1-2-21　コラボレーションホール利用状況

コラボレーションホール利用状況

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日	土曜日
1 時限目		大学院授業		週間カンファレンス		月間カンファレンス
2 時限目		総務会議			学部演習	
昼休み		正副専攻長会議				
3 時限目		教務会議				
4 時限目		専攻会議				
5 時限目		FD				
6 時限目						
7 時限目						

※授業や会議等がない時限は，院生は自由に利用することができる。

（事務局資料）

資料 1-2-22　備品等の購入状況

備品等の購入状況

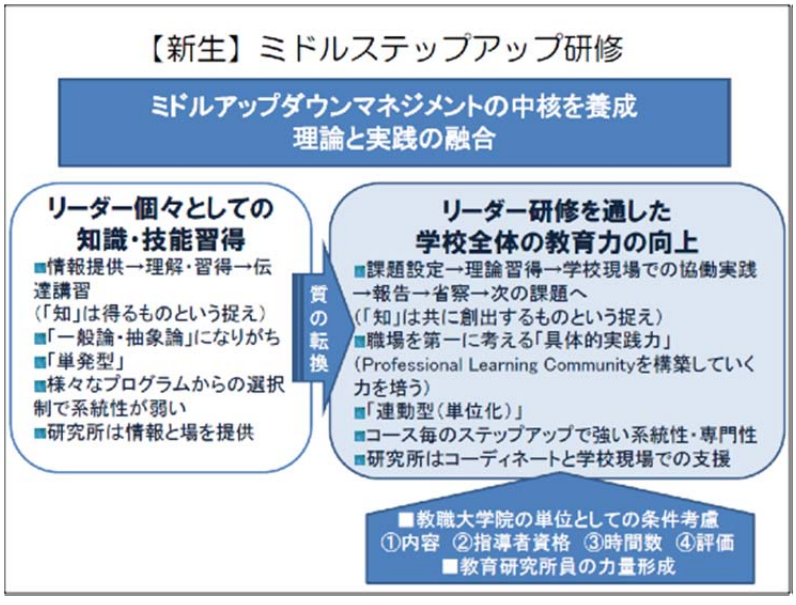
日付	品名	金額	日付	品名	金額
H24.5.17	ノートパソコン	120,303	H26.1.24	三脚	13,950
H24.5.17	ソフトウェア	53,100	H26.3.3	電子キーボード	346,500
H24.5.17	ソフトウェア	2,923	H25.6.27	レーザーポインター	111,664
H24.5.17	マウス	3,084	H26.4.3	別注テーブル<A>長方形	1,779,228
H25.3.21	ノートパソコン	255,150	H26.4.3	別注1/4丸テーブル	1,215,288
H25.3.21	ソフトウェア	123,900	H26.4.24	別注テーブル<A>長方形	879,429
H25.3.21	ソフトウェア	47,956	H26.4.24	別注1/4丸テーブル	1,201,372
H25.3.27	パーソナルコンピュータ	144,800	H26.4.24	組立費　運搬設置微調整費	108,000
H25.3.28	パンフレットスタンド	61,290	H27.1.7	液晶プロジェクター	820,800
H25.3.29	回転ホワイトボード	56,169	H27.1.7	天吊スクリーン	142,560
H24.6.8	プリンタ	49,980	H26.6.17	ノートパソコン	298,080
H24.6.13	両面印刷ユニット	20,475	H26.6.17	マウス	3,240
H24.6.13	A3カラーレーザープリンタ	49,980	H26.6.20	ウェブカメラ+ヘッドセット	11,340
H24.6.13	両面印刷ユニット	20,475	H26.7.9	会議用マイクスピーカ	194,400
H25.5.7	ヘッドホン	17,400	H26.10.31	会議用マイクスピーカ	129,600
H25.4.11	VHS一体型DVDレコーダー	24,150	H26.10.31	HDウェブカム	11,340
H25.5.7	電子キーボード	132,300	H26.10.31	DIS Mobileパッケージ	79,830
H25.5.7	ヘッドホン	11,600	H26.10.31	モバイルルータ	7,776
H26.1.21	プリンタ	118,864	H26.10.31	ノートパソコン	298,080
H26.1.21	両面印刷ユニット	16,380	H26.10.31	光学式マウス	3,240
H26.1.21	ノートパソコン	356,160	H27.1.14	イス	2,400,840
H26.1.21	ソフトウェア	70,800	H27.1.14	チェアポーター	142,924
H26.1.24	デジタルハイビジョンビデオカメラ	135,200	H27.3.6	高速フルカラー印刷機	4321944
H26.1.24	デジタルハイビジョンビデオカメラ	33,800		合計	1,926,239

（事務局資料）

【教員研修機関との現職研修プログラムの協働開発】

教員研修機関を拠点校とし（P3-4 **前掲資料 1-1-2**），福井県教育研究所とは「ミドルステップアップ研修」（**資料 1-2-23, 24**）を，福井県特別支援教育センターとは「特別支援教育コーディネーター専門研修・授業研究リーダー実習」（**資料 1-2-25**）を協働開発した。それぞれ「学校拠点方式」による現職教員研修として教員の資質能力向上を促進しており，各感想に明示されたように受講者から各自の専門性開発に資する研修として高く評価されていることは，各関係者の期待に十分に応えていることを示している。また，教育研究所との連携の下，教員免許状更新講習（必修領域）に新任教頭研修を提携し，新任教頭の能力育成を図っている（**資料 1-2-26**）。

資料 1-2-23　ミドルステップアップ研修概要



（事務局資料）

資料 1-2-24　平成 25 年度のミドルステップアップ研修の受講者数・受講者の感想（抜粋）

受講者数：31 名
感想
- 自分がいかにマンネリ化しているかがわかった。主任として新しい境地を開きたい。
- 今の教員に「工夫」が必要であること，中教審や教育再生実行会議の内容にも目を通すことの重要性を認識できた。
- 授業を見るときの視点について，目を開かれた思いがした。
- 他校種の新しい世界を知る事ができ，視野が広がったような気がする。
- 実践の共有が大変勉強になった。これからの自分の実践のバリエーションが増えたように感じる。

（平成 25 年度ミドルステップアップ研修実践記録集より抜粋）

資料 1-2-25　特別支援教育コーディネーター専門研修・授業研究リーダー実習概要と受講者数・受講者の感想（抜粋）

Ⅰ 研修のねらい
受講者が，多様な子どもたちの学びと育ちを支えるための実践を，同僚と協働し進めていくことを通して，学校全体が特別支援教育の力量を高める。

Ⅱ 研修の特徴
- **年間を通した研修プログラムで学びを深める**
  「課題設定→学校での実践，同僚との協働→振り返り，再構成→次の課題設定」というサイクルで，実践と省察を積み重ねていく。
- **学校での実践そのものを研修とする**
  知識獲得のための研修から脱却し，校内体制の改善や授業改善を目指した実践そのものを研修として位置づける。
- **福井大学教職大学院，県教育委員会と連携する**
  研修会には教職大学院スタッフや県教委の主任が助言者として参加し，受講者の実践の振り返りと再構成を支える。訪問による研修では，教職大学院スタッフや県教委の主任，センター所員が学校を訪問し，校内の研究会等を支援する。
- **担当のセンター所員が受講者の実践に伴走する**
  各受講者の研修を，センター所員が担当者としてサポートし，課題解決に向けて共に考える。

受講者数：８名

感想
- 授業研究とコーディネーターの活動は，一見違うように感じていましたが，校内の先生方が意見交流を活発にし，児童生徒の理解を深め，よりよい方向に向かうよう取り組み続けていくという部分は同じであると感じました。
- 本研修を受け始めた頃は，研究授業に対する先生方の負担感から出る雰囲気，授業参観者の人数が気になり，授業参観していても子どもに注目できなかった。しかし，研修を通して「子どものどういうところを観て，どうとらえるのか。そして，どのように支援を考えるのか」という具体的な見方を知り，子どもから目を離さずに参観できるようになった。そのような自分の変化を考えると，抵抗感や負担感を減らすというよりも，授業実践する中で，悩みが解決したり，新たな視点を得たりすることが，実践への意欲へとつながり，満足感や達成感を得られるのではないかと思った。

（平成 26 年度 特別支援教育コーディネーター専門研修・授業研究リーダー実習実践研究報告より抜粋）

資料 1-2-26　平成 25 年度教員免許状更新講習(必修領域)実施状況報告

実践的指導力の更なる向上を目指して ―平成25年度教員免許状更新講習(必修領域)実施状況報告―

福井大学教職大学院 教授 松田 通彦

今年度の福井大学教員免許状更新講習(必修領域)は年間5回の開催を計画し,8月末までに4回分を終了した。例年通り,**福井県教育研究所主催の「新任教頭研修講座」と連携・協働**し,実践・省察 型の講習を実施した。以下はその概要報告である。

1. はじめに

平成25年度の同講習の計画・立案は前年度9月から取り組んできた。県の教育庁義務教育課及び総務部大学・私学振興課に受講対象者の調査・集計を依頼したところ,本年度の受講者は830人程度との結果が得られたので,これを基に計画を立て申 請・募集を開始した。

今年度4月に一応受講申込みは締め切ったのであるが,必修領域の受講希望者は291名(平成25年 5月31日現在)であり,昨年度の377名(平成24 年6月15日現在)を大きく下回ったため,開催回数や少人数グループの編成等に工夫を要した。

2. 本年度講習の変更・改善点

本年度講習に係る主な変更点や改善点は以下の通りである。

① 開催回数を6回から5回に縮減
② レジュメ「新しい時代をひらく教師の実践コミュニティ」の「1構成」の各講習に係る表記方法を整理
③ 実践レポートの作成・提出方法の変更
④ 新任教頭研修の充実

この中で,①については受講者減少に伴うやむを得ない措置であり,②については一日の講習内容の流れを受講者によりわかりやすくするため,開始時 刻の統一化や全体会と分科会の明示化など表記上の工夫を試みたものである。一方,③,④については,関係者からの改善要望に直接応える内容でもあるので少し説明を加えたい。

まず,③についてであるが,毎年,受講者から出 されるレポート提出に関する要望の中に,レジュメに記載されている「本講習のまとめ:第2日(第3 日)の午前中に大部分を作成しますが,講習後,感想や振り返りもあわせて完成原稿とし,提出します。」の表現に見直しを求める声が少なくなかった。つまり,2日間(選択領域を含めれば3日間) の講習が,評価も含め2日間(3日間) で完結しないことを前提としていることに対する疑問と不満があったのである。当初,大学側のねらいとしては, 実践の省察や講習の振り返りにも十分時間をかけて ほしいという思いがあったためであろうが,今回,レポート作成を講習後の宿題にしてほしくないとの 受講者の要望に出来る限り沿う形で改善することとし,レジュメを「本講習のまとめ:第2日(第3 日)の午前中に完成できない場合には,講習後,感 想や振り返りもあわせて完成原稿とし,提出します。」のように変更した。これにより,講習終了と 同時にレポートを提出する受講者が出てくることに なったが該当者は全体の約1割弱であった。また, 当然のことながら,このことによって,受講者のレポートの評価に悪影響が出ないようスタッフ内で申し合わせを行った。④については教育研究所からの改善案であった。本講習における新任教頭の大きな役割は,少人数グループ内での受講者のファシリテーターを務めることであったが,研究所の提案は,2日目の午前中, 受講者が他者の優れた実践記録を書きまとめている 間は,新任教頭が直接ファシリテートする場面が少 ないため,その時間を教頭研修の一環としてより有 効に活用したいというものであった。

具体的には,教頭を全員一か所に集めて,講習の 途中で独自にファシリテーションの振り返りをさせたいというものであり,そのことはその後の実践の 一助になるはずであるというものであった。実際, 自らの実践を踏まえた意見交換の後は傾聴技術の更 なる向上が見られ,教頭自身の自信にも繋がって いった。今回の改善策は新任教頭からの評価が高く,次年度以降も継続すべきとの思いを強くした。

3. 本年度講習の概要

福井大学教員免許状更新講習の必修領域として位置付けられている「教育実践と教育改革I:12時間」と選択領域である「教育実践と教育改革II:6 時間」のカリキュラム構築には,教職大学院が大きく関わっている。特徴的なこととして次のような点 が挙げられる。

① 必修12時間(2日間)に選択6時間を加えた合 計18時間(3日間)で完結する教育実践・省察プログラム
② 少人数グループによる実践の語り合い・傾聴を基本にした省察型講習
③ 校種,年齢,教科,地域等の壁を超えたグループ編成

①については,3日間連続の受講者の割合は, 31.6%昨年度の実績37.7%と比較すると下降している。3日間受講者は他者の優れた実践を踏まえながら自身の実践を省察する意義や必要性を十分理解し 研修成果に満足しているが,3日目を受講しない傾向は毎年の課題であり,カリキュラム構成や中身の 効率化等々も含め,今後,慎重に検討を継続したい。

また,②,③にも関連する受講者からの評価については,「講習の内容・方法」「知識・技能の習得 の成果」「運営面」の3項目のアンケートに回答をいただいているが,夏の講習4回分の「教育実践と 教育改革I」(必修領域)の結果は,「良い」が全体 の55.6%(42.7%),「だいたい良い」が42.4% (50.6%),「あまり十分でない」が2.0%(5.9%), 「不十分」が0%(0.8%)であった。「良い」と「だいたい良い」の合計が98.0%,「不十分」との回答が0%であるなど,過年度に比し,受講者から極めて高い評価を得られたことは特筆に値する。今後も, 現状に満足することなく,受講者の声を尊重しながら更なる充実を図ってまいりたい(括弧内は昨年度実績)。

4. 終わりに

今回でこの更新講習も5年目に入っており,受講者の間には導入当初の不安や動揺もなく制度として定着してきた雰囲気が色濃く感じられ,全てのプログラムを円滑に実施することができた。 3.にも記したように,受講者の満足度も極めて高く受講態度も申し分なかった。特に,自身の実践 を様々な校種や年齢等の同僚と語り,聴き,書き記すという体験の意義や価値を評価していただけたのが大変心強かったように感じる。これは,ファシリテーターとして参画いただいた76名の新任教頭の地道な支援や助言があったからでもあり,関係各位に改めて感謝の意を表したい。しかしながら,受講者数の回復と併せて,優れた 実践記録の収集,ミニ講義や講義内容の一層の精選等,より充実した講習にするために解決すべき課題も少なくない。福井大学方式を更に徹底・定着させるための不断の努力を今後も怠らないよう,気持ちを新たにしているところである。

(教職大学院 News Letter No.56 より抜粋)

（水準）　期待される水準を上回る

（判断理由）

①　「学校拠点方式」による学校・実践ベースの教員養成・教師教育を，特色ある実践的な科目を中核としたコア・カリキュラムにより実現した[1)]。また，院生の実践的能力の育成を図る教育課程を編成し[2)]，本教育課程は文部科学省から極めて高い評価を受けている[3)]。

[1)] 資料 1-2-1	：コア・カリキュラムのデザイン　P3-23
[2)] 資料 1-2-2	：ディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシー　P3-23
資料 1-2-3	：教職開発専攻の教育課程表　P3-24
資料 1-2-4	：長期インターンシップのねらい　P3-24
資料 1-2-5	：協働実践研究プロジェクト　P3-25
資料 1-1-25	：教職開発専攻の「学校における実習」科目の概要　P3-19
[3)] 資料 1-2-6	：本学の教育課程に対する文部科学省の高い評価　P3-26

②　第１期に比してプロジェクト型学修等の多種多様な教育方法を教育内容に応じて編み込みながら[4)]，附属学園を教員研修機関として位置づけ，実践研究交流集会の組織・運営により公教育を担う教師の育成を多層多角に推進[5)]しており，教委・学校関係者のみならず院生からも極めて高い評価[6)]を得ている。

[4)] 資料 1-2-7	：週間カンファレンスの概要　P3-26
資料 1-2-8	：平成 27 年度週間カンファレンス午前②学校実習に基づくプロジェクト学習のテーマ　P3-27
資料 1-2-9	：月間カンファレンスのテーマ　P3-27
資料 1-2-10	：平成 27 年４月 月間カンファレンス教育改革資料　P3-28
資料 1-2-11	：平成 27 年度４月 月間カンファレンスグループ表　P3-29
資料 1-2-12	：集中講座 Cycles 2014 Summer 要項　P3-29
資料 1-2-13	：インターンシップの記録　P3-30
[5)] 資料 1-2-14	：平成 27 年度附属小学校教育研究集会要項　P3-30
資料 1-2-15	：長期実践研究報告執筆支援　P3-31
資料 1-2-16	：長期実践研究報告執筆スケジュールの目安　P3-31
資料 1-2-17	：平成 26 年度長期実践研究報告会要項　P3-32
資料 1-2-18	：平成 26 年２月・３月 公開実践研究交流集会一次案内　P3-32
資料 1-2-19	：実践研究福井ラウンドテーブルの歩み　P3-33
資料 1-1-2	：平成 27 年度拠点校・連携校と教員担当一覧　P3-4
[6)] 資料 1-2-20	：院生からの評価　P3-34

③　教員研修機関と連携し，「学校拠点方式」を援用した学校・実践ベースの研修プログラムを協働開発し[7)]，現職教員の資質能力の向上に寄与するとともに，受講者から極めて高い評価を得ている[8)]。

[7)] 資料 1-2-23	：ミドルステップアップ研修概要　P3-35
資料 1-1- 2	：平成 27 年度拠点校・連携校と教員担当一覧　P3-4
[8)] 資料 1-2-24	：平成 25 年度のミドルステップアップ研修の受講者数・受講者の感想（抜粋）P3-36
資料 1-2-25	：特別支援教育コーディネーター専門研修・授業研究リーダー実習概要と受講者数・受講者の感想（抜粋）　P3-36
資料 1-2-26	：平成 25 年度教員免許状更新講習(必修領域)実施状況報告　P3-37

分析項目Ⅱ　教育成果の状況

観点　学業の成果

（観点に係る状況）

【学業の成果としての『長期実践研究報告』】

院生の学業は，長期の実践・省察・記録化から「実践の中の理論」を生成する『長期実践研究報告』に結実し（**資料2-1-1**），厳格な評価・審査体制を通じて教職修士（専門職）にふさわしい専門的・実践的な力量形成が図られたと判定されたものが『学校改革実践研究報告』として刊行される（**資料2-1-2，別添資料 1**）。本成果は県内外で実施される実践研究交流集会で報告され，修了予定者が報告を改めて吟味し直して再構成するサイクルを保証し，第１期に引き続き質を維持している（**P3-32 前掲資料 1-2-17，18**）。

資料 2-1-1　『長期実践研究報告』の作成と発表のサイクル



（事務局資料）

資料 2-1-2　『長期実践研究報告』の評価について

「長期実践研究報告」による教職大学院における学修の総合的評価について

長期実践事例研究・長期協働実践プロジェクトをはじめとする実践研究・実践プロジェクトの一連の展開と，それに関わる省察・検討・理論的研究の積み重ねを，「長期実践研究報告」としてまとめ，この「長期実践研究報告」によって，教職大学院における学修の展開と到達点を総合的・最終的に確認し，評価する。

基本方針

＜実践と省察の長期にわたる記録の集積にもとづく総合的な評価システムの実現＞

○　専門職としての教師の力量の評価については，教師としての実践の展開と成果およびそれを通しての教師としての成長過程に関わる専門的な精査と検討が必要となる。長期にわたる実践の積み重ねとそれを通しての成長過程を検証するためには，記録の長期にわたる集積・蓄積とその検討という手続きが不可欠となる。

○　本専攻では長期実践事例研究・長期協働実践プロジェクトをはじめとする実践研究・実践プロジェクトの一連の展開と，それに関わる省察・検討・理論的研究の積み重ねを，「長期実践研究報告」としてまとめ，この「長期実践研究報告」によって，教職大学院における学修の展開と到達点を総合的・最終的に確認し，評価する。

○　評価・判定については，当該の学生の「長期実践研究報告の作成と発表」を支援する教員の他，2名の教員による判定会議における評価・判定を踏まえ，専攻会議および研究科委員会においてこれを承認する。

○　またこの報告書に関わる内容を公開実践交流集会（ラウンドテーブル）において公表し，大学外の研究者や実践者による検討評価の場を設ける。さらにこの報告書を刊行物として刊行し，より広く取り組みを伝えるとともに，今後の実践と研究の拠り所として蓄積していく。

長期実践研究報告の作成とその内容

ア）　それまでの自分自身の教師としての実践の積み重ねを振り返るレポートの作成

大学院の入学にあたってそれまでの自身の実践の積み重ねを振り返り，大学院における課題を明確にする報告をまとめる。（学部新卒者の場合，学部における学習や実践に関わる取り組みについてまとめる。）

イ）　単元ごと・半期ごとの記録作りとその検討の積み重ね

長期実践事例研究・長期協働実践プロジェクトの中で単元ごと半期ごとの実践を記録化し省察し次の課題を導き出していくサイクルを重ねていく。

ウ）　2年間の展開を跡づける長期実践記録の作成

2年間の実践と自身の力量形成の過程を跡づけ検討する「長期実践研究報告」を作成する。

①　2年間における授業づくりの検討と展開過程の吟味・評価。
②　2年間における学習・生活支援の取り組みの展開過程の吟味・評価。
③　2年間を中心とし，その前の取り組みも視野に入れながら，自分自身の実践者としての成長過程についての省察
④　上記3つの報告と省察を踏まえ今後の実践者としての課題を明確とする。

エ）　「長期実践記録」の検討と評価（外部にも開かれた検討と評価）

外部の教師や研究者も参加した実践研究会において2時間程度の報告と検討の場を持つ。

オ）　「長期実践記録」の刊行

こうした研究協議を踏まえ3月までに最終的な報告書をまとめる。この報告書は「学校改革実践研究報告」として刊行する。この報告書は今後の自己の実践と評価の重要な拠り所となるとともに，今後教職大学院で学ぶ教師にとっても実践と研究の手がかりを与えるものとなる。また教職大学院の組織的な評価の基盤となるとともに，広く実践と教師としての力量形成過程の研究にとっても重要な貢献となる。

（集中講座 Cycles 2015-16 Winter 要項）

【学業の評価と履修・修了状況等から判断される院生の学修成果の状況】

本専攻では，授業科目と単位認定等の評価方法を明確に設定し（**資料 2-1-3，4**），院生の学修を『長期実践研究報告』の作成と発表に結実させ，ほぼすべての在籍者が所定の単位を修得し学位を取得している（**資料 2-1-5**）。なお，第２期の中途退学者は計４名でいずれも一身上の都合による（**資料 2-1-6**）。また，ほぼすべての院生が教育職員免許状・専修免許状を取得し（**資料 2-1-7**），実践研究成果を実践研究交流集会で発表し高度化するとともに，その発表機会を教師教育改革コラボレーションに基づき全国展開することで他地域の実践者との検討を可能としている（**P3-12 前掲資料 1-1-11，P3-32 前掲資料 1-2-18**）。

資料 2-1-3　授業科目の評価の方法に関する内規

１．長期の協働実践研究プロジェクトに関する科目の成績評価

長期の協働実践研究プロジェクトの一連の展開と，それに関わる省察・検討・理論的研究の積み重ねを，「長期実践研究報告」としてまとめ，これによって，教職大学院における学修の展開と到達点を総合的・最終的に確認し，評価する。

各科目の成績評価においては，①学校で進めている協働研究の取組，②毎月のカンファレンスでの報告と記録，③長期休業期間の集中講座での半期ごと・年間での記録と省察，④２年間の長期実践研究報告，を基に判断する。

評価の観点は，初発のプロジェクト展開のレベル，省察を踏まえた展開のレベル，再構成のレベルで，それぞれ①企画，②調査・構想，③実践，④省察 - 記録 - 表明，⑤評価と展望，の５局面とする。

評価の方法は，前期・後期それぞれ，各学校の担当者が合議で評価を行う。

２．集中講座で行われる科目の成績評価

集中講座で行われる科目についてはそれぞれ，①授業において検討した実践事例や研究論文についての中間レポート報告（教員も含めた小グループで報告会を行う），②グループでの検討を経て再構成した最終レポート報告（教員も含めた異なるメンバーの小グループで報告会を行う），③報告後に再構成して提出された最終個人レポート，という３つのレポートを基に成績を行う。

評価の観点は，①実践事例や研究論文についての理解，②自分の実践との関連についての考察，③これらを踏まえた自分の実践の展望，という点とする。

評価の方法は，①中間レポートをグループで報告した際の教員の評価，②最終レポートをグループで報告した際の教員の評価，③最終的に提出されたレポートの指導教員による評価を合わせ，合議により最終評価を決定する。

３．実習科目の成績評価

（１）スクールリーダー実習の評価

評価は，月ごとの記録とカンファレンスを踏まえ，最終報告書とその検討会によって行う。最終報告書には「実習のテーマについて」「実習の経過を示す記録」「半年・一年の活動展開の跡づけ」「テーマを踏まえた展開の省察と今後の展望」を含むものとする。評価の基準は，企画運営・協働関係の維持と発展・省察と記録という項目で設定されている到達水準に基づき，総合的に判断する。

（２）長期インターンシップの評価

評価は，毎週・毎月の記録とカンファレンスを踏まえ，８月の中間報告，１年間の最終報告をもとに行う。評価の基準は，授業づくり・１年間のクラス作り・生徒指導・特別活動等・省察と記録という項目で設定されている到達水準に基づき，総合的に判断する。

評価はいずれも担当教員の合議で行う。

（事務局資料）

資料 2-1-4　単位認定等評価方法

毎回のカンファレンス，半期実践報告，年間実践報告をもとに，フィールド・インストラクター，カンファレンス担当者，拠点学校担当大学院教員，拠点学校教員による協議のもとで評価を行い，単位認定を行う。評価の視点と方法は以下の通りである。

Ⅰ 学校と学級の一年間のサイクルを総体として学ぶ

一年次の４月から３月，週三日間をインターンシップとして，学校の一年間の授業と行事と生活に教師 集団の一員として参加し，授業づくりに止まらず，クラスづくり・生徒指導，そして教師としての組織的な活動や協働研究にも関わって教師としての仕事を総体として把握し役割を果たしていく。

この年間サイクルを経験し，その展開を記録化し，省察し，今後の課題を自覚することができることが評価の前提条件となる。その上で下記の点について評価を行う。

Ⅱ 初発のプロジェクト展開

個々の単元について改革の主題と子どもたちの成長に即した授業を開発・実践・省察する。下記の５局面について活動の実際と記録から評価する。１企画 ２調査・構想 ３実践 ４省察-記録-表明 ５評価と展望（現状の把握のサイクル）

Ⅲ 実践の省察を踏まえた展開のレベル

初発の単元の実践と省察を踏まえて，改革の主題と子どもたちの成長に即した授業を開発・実践・省察する。下記の５局面について活動の実際と記録から評価する。とりわけIの現状からの発展を重視する。１企画２調査・構想３実践４省察-記録-表明5評価と展望（展開の把握）

Ⅳ 一年間のクラスづくりの展開

一年間のクラスのあゆみについて，記録にもとづいて省察し，その展開をとらえ直すことができる。

Ⅴ 生徒指導

特定の生徒，生徒集団に状況とその一年間のあゆみについて省察し，その展開をとらえ直すことができる。

Ⅵ 学校運営と学校組織

学校を支える学校運営と学校組織について一年間の経験を通してその働きについてとらえることができる。

（事務局資料）

資料 2-1-5　第２期中の修了状況・学位授与率と修得単位数

平成27年度教育学研究科教職開発専攻の課程修了認定について

専攻名	コース名	修了者数	学位授与率	修得単位数			
				学校における実習	共通科目（領域i～領域v）	コース別選択科目（1系～3系）	合計
教職開発専攻	教職専門性開発コース	8	100%	10	20	15	45

専攻名	コース名	修了者数	学位授与率	修得単位数			
				学校における実習	共通科目（領域i～領域v）	コース別選択科目（1系～3系）	合計
教職開発専攻	スクールリーダー養成コース	19	100%	10	20	15	45

平成26年度教育学研究科教職開発専攻の課程修了認定について

専攻名	コース名	修了者数	学位授与率	修得単位数			
				学校における実習	共通科目（領域i～領域v）	コース別選択科目（1系～3系）	合計
教職開発専攻	教職専門性開発コース	15	100%	10	20	15	45

専攻名	コース名	修了者数	学位授与率	修得単位数			
				学校における実習	共通科目（領域i～領域v）	コース別選択科目（1系～3系）	合計
教職開発専攻	スクールリーダー養成コース	20	100%	10	20	15	45

平成25年度教育学研究科教職開発専攻の課程修了認定について

専攻名	コース名	修了者数	学位授与率	修得単位数			
				学校における実習	共通科目（領域i～領域v）	コース別選択科目（1系～3系）	合計
教職開発専攻	教職専門性開発コース	14	100%	10	20	15	45

専攻名	コース名	修了者数	学位授与率	修得単位数			
				学校における実習	共通科目（領域i～領域v）	コース別選択科目（1系～3系）	合計
教職開発専攻	スクールリーダー養成コース	15	100%	10	20	15	45

平成24年度教育学研究科教職開発専攻の課程修了認定について

専攻名	コース名	修了者数	学位授与率	修得単位数			
				学校における実習	共通科目（領域i～領域v）	コース別選択科目（1系～3系）	合計
教職開発専攻	教職専門性開発コース	10	100%	10	20	15	45

専攻名	コース名	修了者数	学位授与率	修得単位数			
				学校における実習	共通科目（領域i～領域v）	コース別選択科目（1系～3系）	合計
教職開発専攻	スクールリーダー養成コース	20	100%	10	20	15	45

平成23年度教育学研究科教職開発専攻の課程修了認定について

専攻名	コース名	修了者数	学位授与率	修得単位数			
				学校における実習	共通科目（領域i～領域v）	コース別選択科目（1系～3系）	合計
教職開発専攻	教職専門性開発コース	9	100%	10	20	15	45

専攻名	コース名	修了者数	学位授与率	修得単位数			
				学校における実習	共通科目（領域i～領域v）	コース別選択科目（1系～3系）	合計
教職開発専攻	スクールリーダー養成コース	18	100%	10	20	15	45

平成22年度教育学研究科教職開発専攻の課程修了認定について

専攻名	コース名	修了者数	学位授与率	修得単位数			
				学校における実習	共通科目（領域i～領域v）	コース別選択科目（1系～3系）	合計
教職開発専攻	教職専門性開発コース	5	100%	10	20	15	45

専攻名	コース名	修了者数	学位授与率	修得単位数			
				学校における実習	共通科目（領域i～領域v）	コース別選択科目（1系～3系）	合計
教職開発専攻	スクールリーダー養成コース	21	100%	10	20	15	45

（事務局資料）

資料 2-1-6　第２期中の中途退学者の推移　（人）

平成　22　年度			平成　23　年度			平成　24　年度			平成　25　年度			平成　26　年度			平成　27　年度		
1年次	2年次	計	1年次	2年次	計	1年次	2年次	計	1年次	2年次	計	1年次	2年次	計	1年次	2年次	計
0	0	0	0	0	0	0	2	2	0	0	0	1	1	2	0	0	0

（事務局資料）

資料 2-1-7　第２期中の教育職員免許状：専修免許状の取得者数

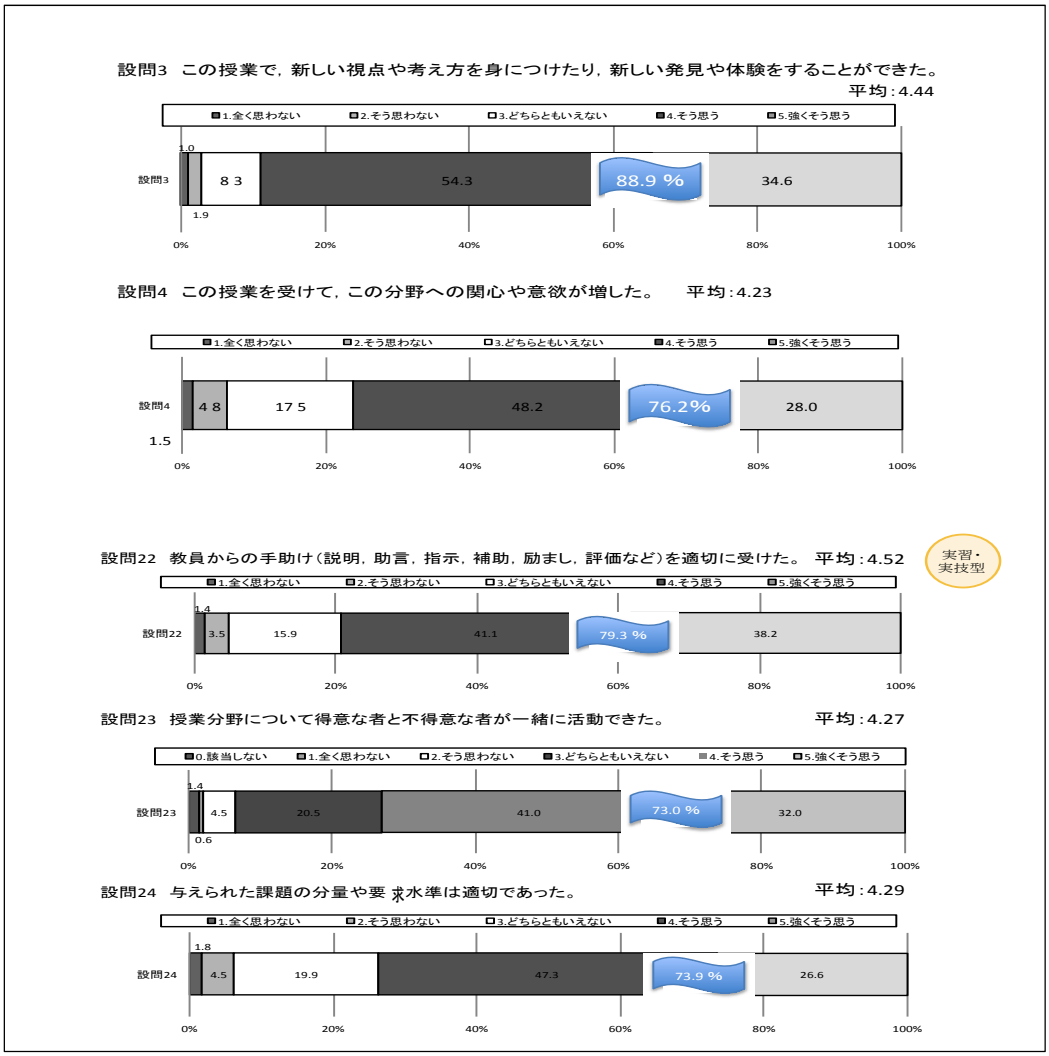
	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
修了者数（人）	26	27	30	29	35	27
専修免許状取得者数（人）	25	25	28	28	34	26
専修免許状取得率（%）	96%	93%	93%	97%	97%	96%

（事務局資料）

【院生アンケートの調査結果とその分析結果】

院生の授業評価アンケートと満足度調査を実施し，授業内容・教育方法，学修支援等で高い評価を得ている（**資料 2-1-8, 9**）。本結果を踏まえ，教育課程や教育方法を点検し，観点「教育内容・方法」で示したようにそれらを不断に改善し続けている。

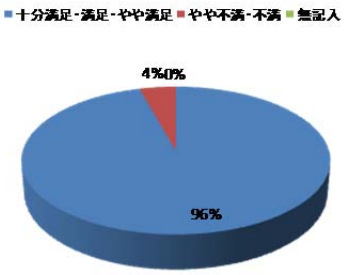
資料 2-1-8　平成 27 年度前期授業評価アンケート結果（一部抜粋）



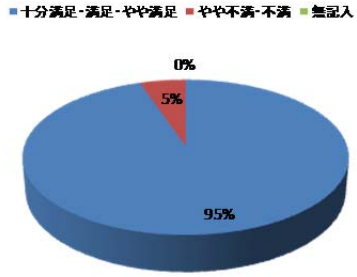
（事務局資料）

資料 2-1-9　平成 26 年度満足度調査結果（一部抜粋）

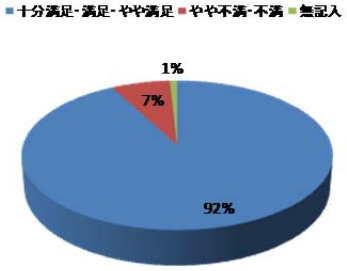
設問：教育全般について，あなたはどの程度満足していますか。



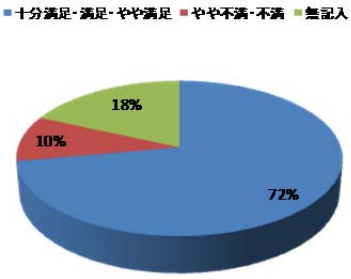
設問：研究水準について，あなたはどの程度満足していますか。



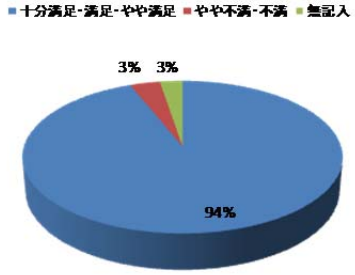
設問：学習・研究環境について，あなたはどの程度満足していますか。



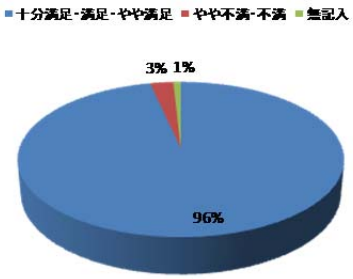
設問：インターンシップ等実地体験（大学院長期インターンシップを含む）について，あなたはどの程度満足していますか。



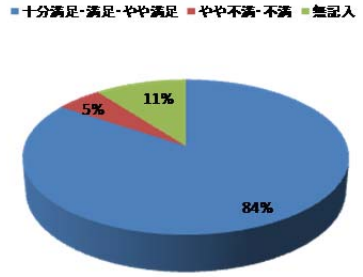
設問：卒業研究指導（大学院における研究指導を含む）について，あなたはどの程度満足していますか。



設問：教育支援（指導・助言教員，オフィスアワー等）について，あなたはどの程度満足していますか。



設問：進学・就職支援（指導教員，就職支援室等）について，あなたはどの程度満足していますか。



（平成 26 年度「福井大学の教育・研究に対する意識満足度調査」結果より抜粋）

（水準）　期待される水準を上回る

（判断理由）

① 院生の学業の成果は『長期実践研究報告』とその刊行物である『学校改革実践研究報告』に結実され[1)]，その評価方法を明確に規定し[2)]，学業成果としての質を維持するとともに，機構「教師改革コラボレーション」[3)]により，その報告・公表機会を全国規模で実施可能とすることで，学業成果の質の向上を促進している。

[1)]	資料 2-1-1	:『長期実践研究報告』の作成と発表のサイクル　P3-39
	資料 2-1-2	:『長期実践研究報告』の評価について　P3-39
	資料 1-1-11	: 教師教育改革コラボレーション　P3-12
	資料 1-2-18	: 平成 26 年２月・３月 公開実践研究交流集会一次案内　P3-32
	別添資料 1	:「学校改革実践研究報告」目録（平成 22～27 年度）　P3-2～6

② ほぼすべての院生が所定の単位を修得し，学位授与を成し遂げ，専修免許状を取得していることは[4)]，院生の専門性向上への期待に応えているとともに，高度専門職業人としての素養を涵養していると判断できる。

[4)]	資料 2-1-3	: 授業科目の評価の方法に関する内規　P3-40
	資料 2-1-4	: 単位認定等評価方法　P3-40
	資料 2-1-5	: 第２期中の修了状況・学位授与率と修得単位数　P3-41
	資料 2-1-6	: 第２期中の中途退学者の推移　P3-41
	資料 2-1-7	: 第２期中の教育職員免許状：専修免許状の取得者数　P3-42

③ 授業評価アンケートや満足度調査において，院生から教育課程・授業・学業に関する極めて良好な評価が示されるとともに，その結果を教育課程等の改善に活かしている[5)]。

[5)]	資料 2-1-8	: 平成 27 年度前期授業評価アンケート結果（一部抜粋）　P3-42
	資料 2-1-9	: 平成 26 年度満足度調査結果（一部抜粋）　P3-43

観点　進路・就職の状況

（観点に係る状況）

【院生の教員採用状況と支援の取組】

① すべての学部卒院生が教員として就職し，正規採用 47 名（約 77%），臨時任用 12 名（約 23%）と高い就職率を維持している。多くが福井県内で教職に就くが，平成 25 年度以降は一定数が福井県外で教職に就いている（**資料 2-2-1**）。

資料 2-2-1　第２期中の教職専門性開発コース修了者の就職状況　（人）

修了年月	修了者数	教員採用（内定）状況							企業等採用（内定）状況		
			正規採用（修了時）	臨時任用（修了時）	正規採用（H28.3現在）	臨時任用（H28.3現在）	福井県内	福井県外		福井県内	福井県外
H23.3	5	5	3	2	5	0	5	0	0	0	0
H24.3	9	9	6	3	8	1	9	0	0	0	0
H25.3	10	10	7	3	9	1	8	2	0	0	0
H26.3	14	13	8	5	12	1	7	6	1	1	0
H27.3	15	15	6	9	7	8	11	3	0	0	0
H28.3	8	7	6	1	6	1	4	3	1	1	0
計	61	59	36	23	47	12	44	14	2	2	0

※H28.3 のデータは見込　（事務局資料）

② 学部卒院生の高い教員採用率の維持は，「学校拠点方式」に基づく実践的な学修の成果とともに，学部卒院生の教員採用試験に向けた筆記試験の指導，特に面接試験に向けた支援による（**資料 2-2-2, 3**）。一方，現職教員院生は各学校・機関でリーダーシップやマネジメントの中核業務を担い，「学校拠点方式」による教師教育の実践基盤を形成する本専攻の取組を多用多層に支援している（**別添資料 2**）。

資料 2-2-2　平成 28 年度教員採用試験対策面接指導要項

平成 28 年度教員採用試験対策面接指導について

H27.6.30　就職担当

1　期　日

7 月下旬～8 月上旬　　7/18,19 の福井県教員採用試験 1 次試験修了後

（2 次選考は 8/8～8/12）

2　対象

教員採用試験を受ける院生の中で希望する者

3　内容

個人面接２～３回　（集団面接３回）

模擬面接（２５分程度）および指導（２０分程度）

集団面接

課題検討 15 分（個々）→集団討論（１分間スピーチ＋集団討論（20 分））

→指導（全体で気付いたことや個々への指導等適当な時間）

4　指導者

全教員（実務家教員、客員教授、コーディネートリサーチャーの先生、研究者教員）

5　実施日調査



教員調査・・・７月８日（水）までに下記のような配信メールで回答（二宮へ）

院生と日程を調整し７月１４日（火）専攻会議・ＦＤまでにメールでお知らせ

（事務局資料）

資料 2-2-3　平成 28 年度教員採用試験面接対策割当て表

H28年度教員採用試験対策模擬面接指導

H27.7.14

※　集中兼ねず　集中のとき　※集中の時はその時間抜けて対応　個人面接　集団面接

	7月21日(火)集中2日目		7月22日(水)集中3日目		7月23日(木)集中1日目		7月24日(金)集中2日目	
	10:00～11:30	13:00～15:10	10:00～11:30	13:00～15:10	10:00～11:30	13:00～15:10	10:00～11:30	13:00～15:10
院生	高田	吉田 田村佳	田中 吉田	北川 高田	増谷 田村佳	田中・高田・吉田・高橋・田村 増谷	藤田 増谷	吉田 高田
教員	○松田	○永谷	○松田	○小林真	○加藤	○宮下	○宮下	○宮下
	○玉木	○中川	○玉木	○中川	○西川	○加藤	○森	○稲井
						○西川		
						○綾城		
						集団面接		

	7月27日(月)集中1日目		7月28日(火)集中2日目		7月29日(水)集中3日目		7月30日 木)集中1日目		7月31日(金)集中2日目	
	10:00～11:30	13:00～15:10	10:00～11:30	13:00～15:10	10:00～11:30	13:00～15:10	10:00～11:30	13:00～15:10	10:00～11:30	13:00～15:10
院生	吉田 田村佳	北川 田村佳	高橋 藤田	吉田	高田 吉田	北川 田村朋	増谷 高田	高橋 串	田中 田村朋	高田・田中・吉田・高橋・田村 増谷
教員	○永谷	○玉木	○永谷	○玉木	○玉木	○中川	○中川	○中川	○小林真	○小林真
	○西川	○中川	○西川	○中川	○綾城	○綾城	○風間	○稲井	○天方	○風間
								○綾城		○天方
										○稲井
										集団面接

	8月3日(月)		8月4日(火)		8月5日(水)		8月6日(木)	
	9:00～11:30	13:00～15:10	9:00～11:30	13:00～15:10	9:00～11:30	13:00～15:10	9:00～11:30	13:00～15:10
院生	増谷	高田・田中・吉田・高橋・田村 増谷・藤田・串	高田 田中	北川 増谷	田中 藤田	高橋 田村朋	高田 田中	北川 吉田
教員	○小林真	○小林真	○松田	○松田	○松田	○松田	○松田	○松田
	○西川	○西川	○永谷	○永谷	○加藤	○加藤	○加藤	○加藤
		○加藤						
		○風間						
		集団面接						

会場　共用講義棟　K２３０(少し離れていますが東隣のビル２階です)
内線電話がないため、コラボレーションホールとの連絡はダイクスさんの執務室に。ダイヤルイン:27－9872
準備　7／21　時から会場づくり
7／23　12:30より集団討論会場づくり。集団討論後個人面接の形に戻す。
7／31　12:30より集団討論会場づくり。集団討論後個人面接の形に戻す。
8月2日は一般の方が使用するため7／31日の集団面接修了後はスクール形式(現在)の形に
8／3　8:30より個人面接会場づくり。12:30より集団討論会場づくり。集団討論後個人面接の形に戻す。
8／6の面接修了後は院生が原状復帰(3列×3列)します。 院生の吉田さん責任者)

(事務局資料)

【修了生への支援と学業成果の追跡】

修了生には年２回の実践研究交流集会での実践発表機会を提供し，そこで各自の力量形成を支えつつ活動状況を把握している（**P3-32 前掲資料 1-2-18**）。また修了生の追跡調査研究も実施し，本専攻の教員養成の成果が顕著であることが示されている（**別添資料 3**）。さらに，修了生の活動を広報誌等への執筆を通じて確認，検証するとともに，「運営協議会」にて学校等の関係者からの聴き取りを実施している。これらの分析に基づき教育課程の点検，授業資料や教育方法を改善し，在学生及び修了生の学修支援・成長発達支援を高度化している（**資料 2-2-4，5**）。以上に示した本専攻の教育活動とそれに基づく教育成果は，想定する関係者の期待に大きく応えている。

資料 2-2-4　広報誌リングリング記事「修了生の声」



（広報誌「リングリンク」No. ２より抜粋）

資料 2-2-5　修了生の活動状況に関する関係者への聴き取り結果

・修了生が学校の中核として研究推進や協働的な組織づくりに貢献している。
・修了生による校内の組織的な授業改善により，児童・生徒の学習満足度が向上している。
・高等学校においても修了生が中心となり教科会や，教科の枠を外した授業研究会を進めるなど，現場における教師の意識改革に好影響を与えている。
・修了生同士が協働で学び合う新しいコミュニティづくりを行うなど，教職大学院のおかげで市の研究組織は活性化している。

（平成 27 年 3 月 20 日（金）運営協議会記録より抜粋）

（水準）　期待される水準を上回る

（判断理由）

① 「学校拠点方式」を基盤とした学校・実践ベースの教育課程とともに，院生の教員採用試験に向けた手厚い支援を実施[1)]することで，学部卒院生の高い教員採用率を維持[2)]している。また，現職教員院生は修了後に各学校・機関等で活躍し，学校・実践ベースの教師教育の担い手となっている[3)]。

[1)] 資料 2-2-2　：平成 28 年度教員採用試験対策面接指導要項　P3-45
資料 2-2-3　：平成 28 年度教員採用試験面接対策割当て表　P3-46
[2)] 資料 2-2-1　：第２期中の教職専門性開発コース修了者の就職状況　P3-45
[3)] 別添資料 2　：スクールリーダー養成コース修了生の現在の所属校等　P3-7，8

② 関係諸機関から修了生に対する極めて高い評価を得ているとともに，各種調査結果に基づき在籍生及び修了生の学業成果を点検し，教育課程等の改善を不断に継続している[4)]。

[4)] 資料 2-2-4　：広報誌リングリング記事「修了生の声」　P3-46
資料 2-2-5　：修了生の活動状況に関する関係者への聴き取り結果　P3-47
別添資料 3　：修了生の追跡調査研究　P3-9

Ⅲ　「質の向上度」の分析

（１）分析項目Ⅰ　教育活動の状況

① 第１期末に比して，特別経費：国立大学機能強化等の採択により，（１）交流教員の増加，特命教員・併任教員・コーディネートリサーチャーの新設[1)]，（２）課程担当教員資格基準の策定[2)]，（３）FD の組織的展開と高度化[3)] を第２期末までに実現したことで，教員の多様性と専門性が向上し，院生の学修を多層多重に支援する教育実施体制の質が向上した。

[1)] 資料 1-1-3　：３つの系と教員配置　P3-5
資料 1-1-5　：附属学園併任教員の位置づけ　P3-8
[2)] 資料 1-1-6　：教職大学院の課程担当教員資格基準　P3-9
[3)] 資料 1-1-7　：FD 研究会（平成 27 年度前期）の計画　P3-10

② さらに，（４）機構「教師教育改革コラボレーション」による他大学との協働連携[4)]，（５）海外教育機関との研究交流の推進[5)] を実現したことで，全国的・国際的な「学校拠点方式」による教員養成と教師教育が推進され[6)]，院生の地域・国を越えた学校・実践ベースの学修・研究を可能とする教育環境の質が向上した。

[4)] 資料 1-1-11　：教師教育改革コラボレーション　P3-12
[5)] 資料 1-1-12　：海外ベンチマーキング・調査　P3-13
[6)] 資料 1-1-13　：教職開発専攻（DPDT）のグローバルマップ　P3-13

③ また，第２期末までに学校教員免許取得プログラムと独自の奨学金制度を新設[7)] したことにより，入学定員の充足が維持され，院生の学修環境の質が改善した。この改善に基づきながら，第１期末に比して，教育課程において実践科目が核となる特徴を明確化[8)] し，（１）実践省察カンファレンス等の学習内容の高度化，（２）プロジェクト型学修の拡充 を実現[9)] したことで，院生の能動的な学修が推進され，教育内容・方法の質が向上した。

[7)] 資料 1-1-16　：小学校教員免許取得プログラム案内　P3-15
資料 1-1-17　：「次世代教育創生資金」案内　P3-15
[8)] 資料 1-2-1　：コア・カリキュラムのデザイン　P3-23
[9)] 資料 1-2-7　：週間カンファレンスの概要　P3-26
資料 1-2-8　：平成 27 年度週間カンファレンス午前②学校実習に基づくプロジェクト学習のテーマ　P3-27
資料 1-2-9　：月間カンファレンスのテーマ　P3-27

④ 加えて，第１期末に着手した教員研修機関との連携を第２期末までに推進したことで，新規の教員研修プログラムが協働開発され，現職教員の専門性開発を促進する教育内容の質が向上した[10)]。

[10)] 資料 1-2-23　：ミドルステップアップ研修概要　P3-35
資料 1-2-24　：平成 25 年度のミドルステップアップ研修の受講者数・受講者の感想（抜粋）P3-36
資料 1-2-25　：特別支援教育コーディネーター専門研修・授業研究リーダー実習概要と受講者数・受講者の感想（抜粋）　P3-36
資料 1-2-26　：平成 25 年度教員免許状更新講習(必修領域)実施状況報告　P3-37

（２）分析項目Ⅱ　教育成果の状況

① 教育活動の状況の質の向上を受け，院生の学修支援・内容が高度化し，学業成果物の『学校改革実践研究報告』が第１期末：88 本から第２期末：263 本（第２期中：175 本，刊行号では 263 号）に達し[1)]，学業成果の質が向上した。また，機構「教師教育改革コラボレーション」[2)] を第２期末までに設立したことで，他都府県の実践研究交流集会での院生による実践報告が推進され，学業成果の公表・検証の質が向上した。

[1)] 資料 2-1-1	:『長期実践研究報告』の作成と発表のサイクル　P3-39
別添資料１	:「学校改革実践研究報告」目録（平成 22～27 年度分）　P3-2～6
[2)] 資料 1-1-11	: 教師教育改革コラボレーション　P3-12

② さらに，第１期末に比して，学部卒院生の教員採用試験への支援を充実させた[3)] ことで，継続して高い教員採用率を維持するとともに，県外教員採用数が第１期末：５名から第２期末：14 名に拡充[4)] したように，院生の進路の質が向上し，加えて，修了生への支援を多角的に実施しながら追跡調査も実施[5)] することで，院生の教員採用後の支援の質が向上した。

[3)] 資料 2-2-2	：平成 28 年度教員採用試験対策面接指導要項　P3-45
資料 2-2-3	：平成 28 年度教員採用試験面接対策割当て表　P3-46
[4)] 資料 2-2-1	：第２期中の教職専門性開発コース修了者の就職状況　P3-45
[5)] 別添資料３	：修了生の追跡調査研究　P3-9

４．医学部

Ⅰ　医学部の教育目的と特徴　・・・・・・・・４－２

Ⅱ　「教育の水準」の分析・判定　・・・・・・４－４

分析項目Ⅰ　教育活動の状況　・・・・・・４－４

分析項目Ⅱ　教育成果の状況　・・・・・・４－145

Ⅲ　「質の向上度」の分析　・・・・・・・・・４－181

Ⅰ　医学部の教育目的と特徴

１．教育目的

（１）教育活動を実施する上での基本方針

本学部の教育理念は，①人間形成を基盤に，生命尊重を第一義とした医の倫理を体得させ，②高度な医学・看護学知識を修得した信頼し得る医療人及び研究者を育成し，もって③医学・看護学の進展並びに地域医療の向上に寄与すること，である。この教育理念に沿って教育活動を実施することが基本方針である。

（２）達成しようとする基本的な成果

教育活動の基本方針に従い，医学部医学科では，①幅広い医学知識を持ち質の高い臨床能力を身につけ，②コミュニケーション能力に優れ，高い倫理観を持って患者中心の医療が実践でき，③日々進歩する医学知識・医療技術を生涯にわたり学ぶ習慣を身につけ，根拠に立脚した医療を実践できる医療人，④世界をリードする生命科学研究者や医学教育者となりうる人，⑤個人と地域・国際社会の健康増進と疾病の予防・根絶に寄与し，国際的な視野でまたは地域に根ざした活動ができる人を育成することを基本的な成果とする。

また医学部看護学科では，①看護の対象となる人間を総合的に理解でき，②高い倫理観を持ち，看護の対象となる人間の権利を守り，③健康に関わる諸問題の解決に必要な知識・技術を主体的に学び，創造する能力，④関連領域の専門家と協力し，必要に応じて調整的な役割を果たす能力，及び⑤看護を批判的に吟味し，建設的・創造的に発展させる能力を持つ医療人を育成することを基本的な成果とする。

このような基本的な成果は教育に関する本学の基本的な理念である「人々が健やかに暮らせるための科学と技術に関する世界的水準での教育・研究を推進し，地域，国及び国際社会に貢献し得る人材を育成する」ことに合致するものである。

（３）教育研究等の質の向上に関する目標との関連

中期目標を踏まえ，①質の高い教育を実施するための体制および②全学生に対するきめ細かな支援体制を整え，③ディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシーに基づいた特徴ある教育を実施し，④単位の実質化を図り，⑤関係者からの期待に応える医療人を育成することにより教育の質的向上を図る。

２．組織の特徴や特色

● 組織の特徴

医学部の前身は「医の倫理に徹した優秀な医療人を育成する」ことを教育の理念として昭和 55 年４月に開講した旧福井医科大学であり，平成９年に看護学科が設置され，平成 15 年に旧福井大学と統合し現在の医学部が発足した。医学部は医学科，看護学科，附属病院及び教育支援センター，附属先進イメージング教育研究センターから構成され，昭和 61 年に第１期生が卒業して以来， 3,771 名（平成 26 年３月現在）におよぶ優れた医療人を育成し福井県はもとより全国各地に送り出し，広く社会に貢献してきた。福井県内をみると，医師として 567 名の医学科卒業生（県内医師の約 30%，平成 26 年末），看護師，保健師，助産師として 267 名の看護学科卒業生（平成 26 年末）が従事しており，地域医療に高く貢献している。

● 組織の特色

医学部の位置する松岡キャンパスには 28 診療科等からなる附属病院が設置され，福井県内唯一の大学病院及び特定機能病院として地域医療の中核を担っている。教育地域科学部及び工学部との教育交流，高エネルギー医学研究センターや子どものこころの発達研究センターによる教育支援，臨床教員制度に代表される地域教育力の活用等，教育目

的を達成するための支援体制は整備されている。

医学部では，医学部教授会の下，医学部教育委員会，医学科及び看護学科カリキュラム委員会等によって学生教育･修学指導が統括されている。また，医学部副学部長をセンター長とした医学部教育支援センターによって教育目標等の達成を考慮した教育体制の検討・改善がなされている。

３．入学者の状況

平成 27 年度現在，医学科では前期(定員 55 名)，後期(25 名)及び推薦(30 名)，看護学科では前期(30 名)，後期(10 名)及び推薦(20 名)によって入学者を選抜している。平成 22～27 年度では，推薦枠入学者を中心として県内高校出身者は医学科では約 30%，看護学科では約 70%を占める。多様な人材を受け入れるため，医学科では２年次後期編入学生(５名)を選抜している。

[想定する関係者とその期待]

優れた医療人の育成は本邦に対する医学部の使命であることは言うに及ばないが，直接の関係者とその期待として想定したものは以下のようである；

・学生及びその保護者

高度な医学・看護学知識や高い臨床能力等，医療人として備えるべき学力や資質・能力の涵養

・医療機関

高度な医学・看護学知識や高い臨床能力等，医療人として備えるべき学力や資質・能力を有した人材の育成

・地域社会

福井県地域医療の向上に寄与する医療人の育成

Ⅱ　「教育水準」の分析・判定

分析項目Ⅰ　　教育活動の状況

観点　教育実施体制

（観点に係る状況）

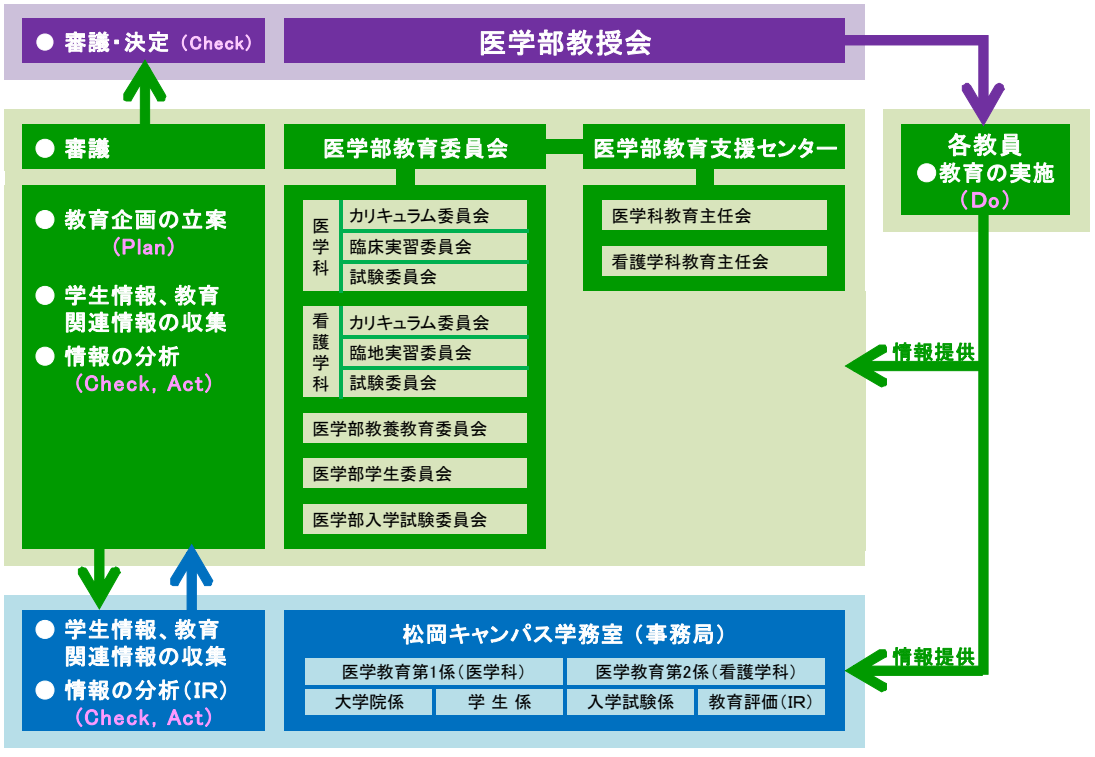
●教員組織編成の工夫とその効果

【教育プログラムとしての実施体制】

①　教育実施体制（**資料 1-1-1-1**）は平成 27 年度改革より医学教育分野別評価に対応すべく医学部長のもと医学部教育全体の実施運営を行う「医学部教育委員会」（**資料 1-1-1-2～3**）及び教育担当副学部長のもと教育全体の点検・評価・改善を行う「医学部教育支援センター」（**資料 1-1-1-4**）が設置され，両者の統括のもと綿密な教育実施体制を構築した。加えて，医学部教育を支援する部局として松岡キャンパス学務室は医学部に関する入学から卒業，生活や就職活動等の支援を包括的かつ一元的に行っている（**資料 1-1-1-1**）。

資料 1-1-1-1　医学部教育実施体制

教育実施体制を平成 27 年度より大きく改変し，教育全体の実施運営の中心となる「教育委員会」（委員長：医学部長）（**資料 1-1-1-2**）と教育全体の点検・評価・改善を行う「教育支援センター」（センター長：教育担当副学部長）（**資料 1-1-1-4**）の役割を明確化した。特に「教育支援センター」は医学部附属施設として明確に位置づけた。教育委員会のもとには，医学科・看護学科それぞれに対応する各種委員会及び医学部全体の教育に係る委員会を設置している（**資料 1-1-1-3**）。



（事務局資料）

資料 1-1-1-2　医学部教育委員会

福井大学医学部教育委員会規程

平成 27 年 2 月 19 日
福大医規程第 1 号

（設置）
第１条　福井大学医学部に医学部教育委員会（以下「委員会」という。）を置く。
（目的）
第２条　委員会は，教育に関する医学部（大学院を含む）の委員会等を統括し，医学部教育の円滑な実施を図るとともに，教育改革を推進することを目的とする。
（協議事項）
第３条　委員会は，次の各号に掲げる事項について協議する。
(1)　医学部（大学院を含む）における医学・看護学教育全般の統括，管理運営及び教育改革に関する事項
(2)　教育に係る中期目標・中期計画に関する事項
(3)　教育課程の編成に関する事項
(4)　非常勤講師の招へい計画に関する事項
(5)　学生の退学，進級及び卒業，賞罰等その身分に関する事項
(6)　その他医学部の教育に関する重要事項
（組織）
第４条　委員会は，医学部教授会の承認を得た次の各号に掲げる委員を持って組織する。
(1)　医学部長
(2)　副学部長（教育担当）
(3)　医学科長又は医学系研究科博士課程小委員会委員長
(4)　看護学科長又は医学系研究科修士課程小委員会委員長
(5)　医学部選出の教務学生委員会委員（医学科１名，看護学科１名）
(6)　第８条に規定する個別問題委員会並びに専門委員会の委員長
(7)　松岡地区共通教育委員会委員長
(8)　教育支援センター長
(9)　その他，外部委員を含め委員長が必要と認める者
２　委員会に教育支援センター副センター長をオブザーバーとして置く。
（委員長）
第５条　委員会に委員長を置き，医学部長をもって充てる。
２　委員長は，委員会を招集し，その議長となる。
３　委員長に事故があるときは，委員長があらかじめ指名した委員がその職務を代行する。
（議事）
第６条　委員会は，委員の３分の２以上の出席をもって成立し，議事は，出席委員の過半数をもって決し，可否同数のときは，議長の決するところによる。
（委員以外の者の出席）
第７条　委員長は，必要があると認めたときは，委員会に委員以外の者の出席を求め，説明又は意見を聴くことができる。
（個別問題委員会等）
第８条　委員会に，第３条に規定する協議事項のうち医学部における教務・学生支援・入学試験に関する事項及びその他必要事項を協議するために次の個別問題委員会等を置く。
(1)　医学部学生委員会
(2)　医学部入学試験委員会
２　前項の個別問題委員会等に関し必要な事項は，別に定める。
３　第１項に定める個別問題委員会の他に，次の専門委員会を置く。
(1)　医学科カリキュラム委員会
(2)　医学科臨床実習委員会
(3)　医学科試験委員会
(4)　看護学科カリキュラム委員会
(5)　看護学科臨地実習委員会
(6)　看護学科試験委員会
４　前項の委員会の協議事項及び委員会構成等は別表のとおりとする。
（事務）
第９条　委員会の事務は，学務部松岡キャンパス学務室において処理する。
（雑則）
第 10 条　この規程に定めるもののほか，委員会の運営に関し必要な事項は，委員会が定める。

（事務局資料）

資料 1-1-1-3　医学部教育委員会各委員会所轄事項一覧（医学部教育委員会規定別表）

専門委員会名称	主な協議事項	委員構成
医学科カリキュラム委員会 (委員長：医学部長が指名)	(1) 医学科のカリキュラム編成に関する事項 (2) 医学科のカリキュラムの実施に関する事項 (3) 医学科のテュートリアル教育に関する事項 (4) その他医学科のカリキュラムに関する事項	(1) 医学科の基礎系領域の教授又は准教授　4名 (2) 医学科の臨床系領域の教授又は准教授　4名 (3) 医学部教育支援センター副センター長（医学科担当2名） (4) その他委員長が必要と認める者 オブザーバーとして学生代表者を置く　6名
医学科臨床実習委員会 (委員長：医学部長が指名)	(1) 医学科臨床実習の編成に関する事項 (2) 医学科臨床実習の実施に関する事項 (3) 医学科臨床実習における電子カルテ等の取扱いに関する事項 (4) 医学科臨床実習における医療事故の対応に関する事項 (5) その他医学科の臨床実習に関する事項	(1) 医学科の臨床系領域の教授又は准教授　8名 (2) 医学部教育支援センター副センター長（医学科臨床担当） (3) その他委員長が必要と認める者
医学科試験委員会 (委員長：医学部長が指名)	(1) 医学科のアドバンストオスキー及び学科試験の計画，実施に関する事項 (2) OSCE及びCBTの実施に関する事項 (3) 医学科学生の卒業試験の作成などに関する事項 (4) 国家試験対策に関する事項 (5) その他医学科の試験に関する事項	(1) 医学科の基礎系領域の教授又は准教授　3名 (2) 医学科の臨床系領域の教授又は准教授　5名 (3) 医学部教育支援センター副センター長（医学科担当2名） (4) その他委員長が必要と認める者
看護学科カリキュラム委員会 (委員長：医学部長が指名)	(1) 看護学科のカリキュラム編成に関する事項 (2) 看護学科のカリキュラムの実施に関する事項 (3) その他看護学科のカリキュラムに関する事項	(1) 看護学科基礎看護学の教授，准教授又は講師1名 (2) 看護学科臨床看護学の教授，准教授又は講師3名 (3) 看護学科地域看護学の教授，准教授又は講師1名 (4) 医学部教育支援センター副センター長（看護学科担当） (5) その他委員長が必要と認める者 オブザーバーとして学生代表者を置く　4名
看護学科臨地実習委員会 (委員長：医学部長が指名)	(1) 看護学科臨地実習の編成に関する事項 (2) 看護学科臨地実習の実施に関する事項 (3) 看護学科臨地実習における電子カルテ等の取扱いに関する事項 (4) 看護学科臨地実習における医療事故の対応に関する事項 (5) その他看護学科の臨地実習に関する事項	(1) 看護学科基礎看護学の教授，准教授又は講師1名 (2) 看護学科臨床看護学の教授，准教授又は講師3名 (3) 看護学科地域看護学の教授，准教授又は講師1名 (4) 医学部教育支援センター副センター長（看護学科担当） (5) その他委員長が必要と認める者
看護学科試験委員会 (委員長：医学部長が指名)	(1) 看護学科の試験の計画，実施に関する事項 (2) 看護学科学生の卒業試験の作成及び進級試験に関する事項 (3) 国家試験対策に関する事項 (4) その他看護学科の試験に関する事項	(1) 看護学科基礎看護学の教授，准教授又は講師1名 (2) 看護学科臨床看護学の教授，准教授又は講師2名 (3) 看護学科地域看護学の教授，准教授又は講師1名 (4) 医学部教育支援センター副センター長（看護学科担当） (5) その他委員長が必要と認める者

医学部教養教育委員会 (委員長：医学部長が指名)	(1) 福井大学共通教養部統括会議から負託された事項 (2) その他委員会が必要と認めた事項	(1) 医学科及び看護学科専任教員のうち，共通教育又は医学準備教育を主として担当する教授，准教授及び講師 (2) その他委員長が必要と認めた者
医学部学生委員会 (委員長：医学部長が指名)	(1) 学生の修学支援及び厚生補導に関する事項 (2) 医学部学生支援システムに関する事項 (3) 奨学金，授業料免除に関する事項 (4) 学生の課外授業に関する事項 (5) 学生団体に関する事項 (6) 学生の福利厚生に関する事項 (7) その他学生の支援に関する事項	(1) 医学科長 (2) 看護学科長 (3) 医学部教育支援センター副センター長 (4) 医学部選出の教務学生委員会委員（医学科 1名，看護学科 1名） (5) 松岡キャンパス学務室長 (6) その他，委員長が必要と認める者
医学部入学試験委員会 (委員長：医学部長が指名)	(1) 募集要項及び入学者選抜方法に関する事項 (2) 入学試験の計画及び実施に関する事項 (3) 合格者の判定に関する事項 (4) 大学入試センター試験の実施に関する事項 (5) その他委員長が必要と認めた事項	(1) 医学部長 (2) 医学部選出の入試委員会委員（医学科教授 1名，看護学科教授 1名） (3) 医学科教授 5名 (4) 看護学科教授 1名 (5) その他委員長が必要と認める者

（事務局資料）

資料 1-1-1-4　医学部教育支援センターの概要

医学部教育支援センターは，医学部（大学院を含む）における医学・看護学教育の点検・評価を行い，情報を提供することにより，医学部における教育改善に資することを目的として設置された。

センターでは医学部教育委員会並びに関連する委員会，教育研究施設等と連携をとりつつ，主に以下の業務を行うとともに，学生・教職員に医学部の教育に関する情報を発信している。

センターには，センター長（教育担当副学部長）及び医学科・看護学科専任教員が兼任するとともに，専任特命准教授を配し各種業務を所轄している。

1．医学部・大学院医学系研究科に係る教育全般の点検・評価・改善に関する事項
2．医学・看護学教育における新たな教育方法の開発・導入に関する事項
3．FD 活動に関する事項
4．教育に係るデータベースの構築・管理・情報の提供に関する事項
5．医学・看護学教育に係る研究活動に関する事項
6．その他，医学部における教育に係る諸問題への対応に関する事項

■ ホームページ（http://mesc.med.lab.u-fukui.ac.jp/ja）



（事務局資料）

② 各領域・診療科グループの教育に関する情報収集・実施等を主導する教育主任・教育副主任を設け，医学科・看護学科それぞれの教育主任会を設置した（**資料 1-1-1-5**）。

資料 1-1-1-5　教育主任と主任会

福井大学医学部医学科教育主任会・看護学科教育主任会要項（抜粋）

（所掌事項）
第２条　主任会は，センターと連携をとり，次の各号に掲げる業務を行う。
(1) 当該学科教育に関する情報収集を行う。
(2) その他，当該学科教育の点検・評価・改善に関すること。
（組織）
第３条　医学科主任会は，次の各号に掲げる者をもって組織する。
(1) センター長
(2) 副センター長（医学科教員）
(3) 専任教員
(4) 教育主任（医学科教員）
(5) 松岡キャンパス学務室医学教育第一係長
2 医学科主任会に，議長を置き，前項１号に定める者をもって充てる。
3 看護学科主任会は，次の各号に掲げる者をもって組織する。
(1) 副センター長（看護学科教員）
(2) 教育主任（看護学科教員）
(3) 松岡キャンパス学務室医学教育第二係長
（中略）
（教育主任）
第６条　医学科教育主任は，別表１に定める領域・診療科等の各グループに１名置くこととする。
2 看護学科教育主任は，別表２に定める領域の各グループに１名置くこととする。
3 教育主任は，次の各号に掲げる業務を行う。
(1) 各領域・診療科グループの教育に関する情報収集を行う。
(2) 各領域・診療科グループの教育をとりまとめ，当該学科における教育の実施を主導する。
(3) センターと協力し主任会を運営する。
(4) その他，センター及び主任会が依頼すること。

別表１（一部抜粋）

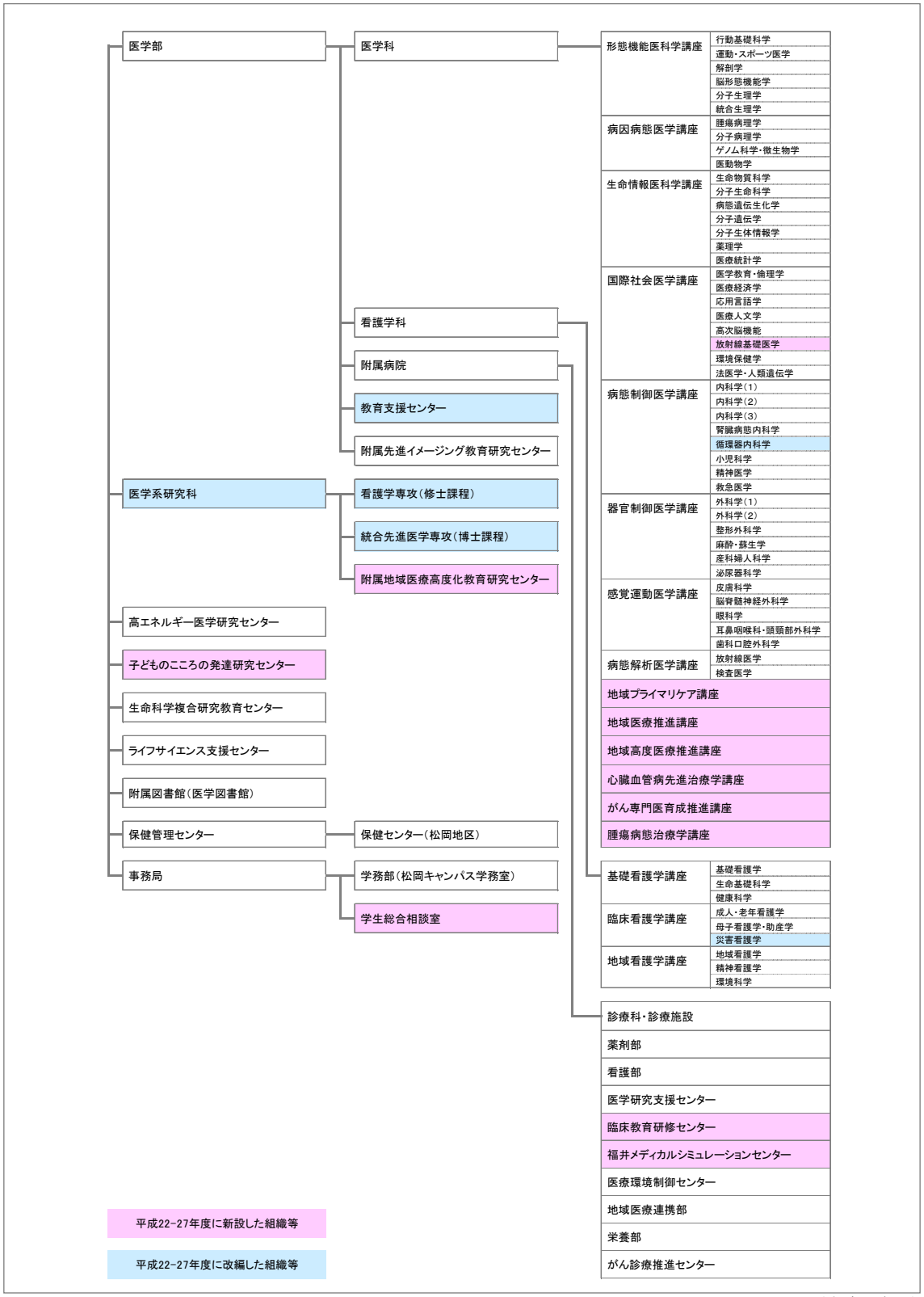
講座等	領域・診療科	旧学科目・旧講座	人数
形態機能医科学	行動基礎科学	心理学	1
	運動・スポーツ医学	保健体育	
国際社会医学	医学教育・倫理学	倫理学	
	医療経済学	経済学	
	応用言語学（医学英語）	英語	
	医療人文学	ドイツ語	
生命情報医科学	生命物質科学	物理学	1
	分子生命化学	化学	
	病態遺伝生化学	生物学	
	医療統計学	数学	
形態機能医科学	人体解剖学・神経科学	解剖学(1)	1
	組織細胞形態学・神経科学	解剖学(2)	
形態機能医科学	分子生理学	生理学(1)	1
	統合生理学	生理学(2)	
病態遺伝医学	腫瘍病理学	病理学(1)	1
	分子病理学	病理学(2)	
⋮	⋮	⋮	⋮

（事務局資料）

【組織体制】

① 教育プログラム全体は医学部教育委員会の統括のもと，各種委員会と教育担当講座や各種センターが一体となった運営がなされている。講座・センター組織は新設や改組により常に適切に維持されている（**資料 1-1-1-6**）。

資料 1-1-1-6　医学部関連組織図



（事務局資料）

② 福井県内の地域医療の充実や地域医療に貢献する人材育成を目指す寄附講座として「地域プライマリケア講座」（福井県高浜町），「地域医療推進講座」（福井県），「地域高度医療推進講座」（公立小浜病院）等を開設し（**資料 1-1-1-7**），地域医療人育成プログラム（**P4-96 後掲資料 1-2-2-2**）を初めとする教育を推進し，地域社会からの期待に応えている。中でも医師不足が顕著である高浜町による「地域プライマリケア講座」は全国初の市町村による医学部寄附講座として特筆される。

資料 1-1-1-7　医学部寄附講座

寄附講座名	寄附者	設置目的	具体的な内容	設置年
地域プライマリケア講座	高浜町 （全国初となる市町村による医学部寄附講座）	地域のニーズに即したプライマリケアに関する教育・研究及び診療を行うとともに，その研究成果の普及を行い，プライマリケア研究の推進に寄与する。	・診療所と地域病院の連携に関する教育 ・地域のニーズに合ったプライマリケアプログラムの研究 ・医師不足地域における効果的な医療支援システムの研究 ・老年医学及び老年救急の研究 ・在宅医療におけるプライマリケアチームの介入効果についての疫学的調査	平成 21 年度
地域医療推進講座	福井県	福井県内の地域医療の充実を図るため，魅力ある研修システム及び医師派遣システム等に関する研究・構築を行うとともに，その研究成果の普及を行い，地域に必要な医師の確保等，福井県の地域医療に寄与することを目的とする。	・地域医療についての臨床教育・研修システムの研究及び構築 ・医師派遣システムの研究及び構築 ・県内の医師，臨床医の確保に関する研究及び取り組み ・その他，地域医療の推進に関すること	平成 22 年度
地域高度医療推進講座	公立小浜病院組合 （小浜市）	地域医療を再生するための教育拠点として設置し，地域医療を担う医師に対する教育，育成，研究及び診療を行うとともに，その研究成果の普及を行い，地域医療の組織的な確立を図ることに寄与する。	・地域医療の教育・支援 ・臨床研修医の臨床能力向上を図るための教育及びプログラムの研究 ・医師不足地域における効果的な医療支援システムの研究 ・地域医療における医師派遣システムを構築するための研究 ・地域に関連した臨床的研究の推進	平成 25 年度
心臓血管病先進治療学講座	㈱ディーブイエックス ㈱バイオトロニックジャパン ㈱ジョンソン・エンド・ジョンソン	最先端心臓血管治療の研究（臨床・実験・研修）により先進的な心臓血管病の治療方法・技術と診断方法を研究開発することで広く医療に貢献することを目的とする。	・心不全治療を中心とした次世代不整脈治療デバイスの研究と心房細動治療・心室頻拍治療を中心とした心臓カテーテル治療の研究 ・不整脈疾患，心不全，急性冠症候群，閉塞性動脈硬化症における早期診断バイオマーカーの開発・研究 ・虚血性心臓病，閉塞性動脈硬化症，弁膜症，心筋症における先進的な治療とその臨床応用	平成 26 年度
がん専門医育成推進講座	福井県	福井県内のがん医療の充実を図るため，がんの診療に必要な病理専門医，がん薬物療法専門医及び放射線治療専門医（以下「がん専門医」という）を育成・確保するための研修体制，研修プログラム及び派遣体制についての研究・構築を行い，県内のがん医療の推進に寄与することを目的とする。	・がん専門医を育成・確保するための研修体制の研究及び構築 ・がん専門医を育成・確保するための研修プログラムの研究及び構築 ・がん専門医を育成・確保するための派遣体制の研究及び構築 ・その他，がん医療の推進・教育に関すること	平成 27 年度

（事務局資料）

③　高エネルギー医学研究センターや附属先進イメージング教育研究センター等が設置され，専任又は兼任教員が連携して医学教育にあたっている（**資料 1-1-1-8**）。

資料 1-1-1-8　医学教育を支援する施設等

■ **高エネルギー医学研究センター**（http://www.med.u-fukui.ac.jp/birc/）



放射線など高エネルギー電磁波の医学利用に関する研究を推進し，サイクロトロン及びポジトロン断層撮影（PET）装置を用いて生体の機能や病態を画像化し，疾患の診断と予防に関する基礎的，臨床的研究の発展を目指している。学部教育において講義「生体と放射線・電磁波・超音波」「画像・放射線を用いた診断と治療－基礎　応用編－」，研究室配属，臨床実習などを担当している（**P4-129 後掲資料 1-2-3-18**）。

■ **子どものこころの発達研究センター**（http://www.med.u-fukui.ac.jp/cdrc/）



子どもの「こころ」の問題を解明，さらには，治療・支援するための研究・活動を行っている。学部教育においては講義「人体解剖学２」や研究室配属などを担当している。

■ **生命科学複合研究教育センター**（http://www.med.u-fukui.ac.jp/life/seimei/）



生命科学及び関連分野に関与する教員が学内で集結し，「先端的生命科学研究の遂行」「生命科学を知る複合的なバックグラウンドをもつ人材の育成」「生命科学の生物・理科教育への還元（社会貢献，地域での人材育成）」を目指した活動を行っている。特に高校生対象の講座を幅広く展開している（**P4-102 後掲資料 1-2-2-8**）。

■ **ライフサイエンス支援センター**（http://www.med.u-fukui.ac.jp/cars/）



福井大学において，大学の重点研究領域である「生命科学」をさらに発展させることを目的として設置されたセンターの１つであり，アドバンストコースⅣ「先端医学生物工学実習コース」などを担当し，最新研究機器や手法を用いた実習を行っている（**P4-89 後掲資料 1-2-1-22**）。

■ **医学部附属先進イメージング教育研究センター**（http://ai.labos.ac/）



先進的機能画像技術を駆使し，医学部における形態学・画像医学教育の円滑な実施を図り，先進画像医学教育システムの開発・普及，オートプシー・イメージングの実用化研究を推進している。画像医学教育の中心として放射線科画像，組織学病理学組織画像，御遺体 CT/MRI 画像などの本邦随一の教育コンテンツ 6,000 以上を有し，画像教育システムによる学生教育に活用されている（**P4-129 後掲資料 1-2-3-18**）。

■ **医学系研究科附属地域医療高度化教育研究センター**（http://kango-career.med.u-fukui.ac.jp/）



少子高齢化における今後の 21 世紀型地域医療の在り方の研究，地域医療機関・県内大学・行政機関等との連携を基盤とした，地域包括医療の先進的高度化に関する総合的な教育研究を行うとともに，併せてそれを担う高度専門的な人材育成，関連する医学・看護学の課題に係る研究を発展させることをもって地域医療への貢献を図ることを目的としている。メディカルシミュレーションセンターを活用した医学生・看護学生スキルアップ，多職種連携による在宅ケアのレベルアップのための教育活動などを行っている。

（事務局資料）

【外部組織との連携】

福井県内外の医療機関との連携を進め，医学科では臨床実習委員会の統括のもと 39 施設において臨床実習等を，看護学科では臨地実習委員会の統括のもと 34 施設において臨地実習等を行い，これら施設数は第１期中期目標期間（以下「第１期」という。）より増加した。学外医療機関における実習の評価は学生及び実施施設共に高く，特に学生からの高評価の割合は第１期よりも増加した（**資料 1-1-1-9，10**）。

資料 1-1-1-9　平成 27 年度臨床・臨地実習先一覧（学外）

【医学科】

No	施設名	所在県	平成21年度	平成27年度
1	池端病院	福井県		◎
2	今庄診療所	福井県		◎
3	大滝病院	福井県	○	◎
4	オレンジホームケアクリニック	福井県		◎
5	笠原病院	福井県	○	
6	きむら耳鼻咽喉科	福井県		◎
7	きむら小児科	福井県	○	◎
8	木村病院（あわら市）	福井県	○	◎
9	木村病院（鯖江市）	福井県	○	
10	公立小浜病院	福井県	○	◎
11	公立丹南病院	福井県	○	◎
12	国民健康保険池田診療所	福井県	○	◎
13	国民健康保険織田病院	福井県	○	◎
14	国立病院機構あわら病院	福井県	○	◎
15	国立病院機構福井病院	福井県	○	◎
16	嶋田病院	福井県	○	◎
17	社会保険高浜病院（高浜町和田診療所）	福井県	○	◎
18	市立敦賀病院	福井県	○	◎
19	市立三国病院	福井県	○	◎
20	つちだ小児科	福井県	○	◎
21	中村病院	福井県	○	◎
22	はしもと小児科クリニック	福井県	○	
23	林小児科クリニック	福井県	○	◎
24	林病院	福井県	○	◎
25	春江病院	福井県	○	◎
26	平谷こども発達クリニック	福井県	○	◎
27	広瀬病院	福井県	○	
28	福井愛育病院	福井県	○	◎
29	福井勝山総合病院（旧：福井社会保険病院）	福井県	○	◎
30	福井県済生会病院	福井県	○	◎
31	福井県立病院	福井県	○	◎
32	福井厚生病院	福井県	○	◎
33	福井循環器病院	福井県	○	◎
34	福井赤十字病院	福井県	○	◎
35	福井総合病院	福井県	○	◎
36	ふじさわ小児科医院	福井県	○	◎
37	藤田記念病院	福井県	○	
38	舟橋内科クリニック	福井県		◎
39	松原病院	福井県	○	◎
40	市立島田市民病院	静岡県	○	◎
41	木沢記念病院	岐阜県	○	◎
42	松波総合病院	岐阜県	○	◎
43	舞鶴共済病院	京都府	○	◎
44	彦根市立病院	滋賀県		◎
（計）			38施設	39施設

【看護学科】

No	施設名	所在県	平成21年度	平成27年度
1	アットホーム仁愛	福井県		◎
2	アニス松岡	福井県	○	◎
3	あわら市市民福祉部健康長寿課	福井県	○	◎
4	永平寺町福祉保健課	福井県		◎
5	越前市福祉保健部健康増進課	福井県	○	◎
6	大滝病院	福井県	○	◎
7	大野市民生環境部健康長寿課（旧：市民福祉部）	福井県	○	◎
8	奥越健康福祉センター	福井県		◎
9	勝山市健康福祉部健康長寿課	福井県	○	◎
10	坂井健康福祉センター	福井県	○	◎
11	坂井市福祉保健部健康増進課	福井県	○	◎
12	坂井地区医師会訪問看護ステーション	福井県	○	◎
13	ささした助産所	福井県		◎
14	鯖江市健康福祉部健康課（旧：福祉環境部）	福井県	○	◎
15	仁愛ケアサポート	福井県		◎
16	仁愛訪問看護センター	福井県	○	◎
17	シンシア訪問看護ステーション	福井県		◎
18	丹南健康福祉センター（鯖江庁舎）	福井県	○	◎
19	丹南健康福祉センター（武生庁舎）	福井県	○	◎
20	ディーパあかね	福井県	○	◎
21	ひなた訪問看護ステーション	福井県		◎
22	福井県済生会病院	福井県		◎
23	福井県済生会訪問看護ステーション	福井県	○	◎
24	福井県立病院	福井県		◎
25	福井健康福祉センター	福井県	○	◎
26	福井市福祉保健部保健センター	福井県	○	◎
27	福井赤十字病院	福井県	○	◎
28	福井赤十字訪問看護ステーション	福井県	○	◎
29	藤島園	福井県	○	
30	訪問看護ステーションさばえ	福井県	○	◎
31	訪問看護ひまわりステーション	福井県	○	◎
32	ほっとリハビリ訪問看護ステーション	福井県	○	◎
33	本多レディースクリニック	福井県		◎
34	みどりの森訪問看護ステーション	福井県	○	◎
35	ゆうあい訪問看護ステーション	福井県	○	◎
（計）			25施設	34施設

医学科では福井県内を始めとする 39 施設と臨床実習を行うための「卒前臨床医学教育（臨床実習）に関する覚書」に基づき，医学科臨床実習委員会の統括のもと「卒前臨床医学研修手引」（**P4-148 後掲資料 2-1-1-4**）を作成し臨床実習を進めている。

看護学科では，看護学科臨地実習委員会の統括のもと「看護学実習要項」に従い，福井県内の 34 施設において臨地実習（老年看護学実習，母性看護学実習，在宅看護学実習，公衆衛生看護学実習，助産学実習）を行っている（**P4-120 後掲資料 1-2-3-8**）。

医学科学生は学外医療機関での実習に対し約 90%の学生が適切であるとし，その割合は第 1 期末より増加している（**P4-117 後掲資料 1-2-3-5**）。加えて医学科及び看護学科の実習担当機関によると実習により学生の理解が増したとする回答が過半である（**P4-117 後掲資料 1-2-3-5, P4-121 後掲資料 1-2-3-9**）。

（事務局資料）

資料 1-1-1-10　学外病院の実習概要（福井県立病院）

福井県立病院の実習概要

1．病院の概要　　（ホームページ http:// info.pref.fukui.jp/imu/fph/index.html）

福井県立病院は，昭和 25 年 4 月に 9 診療科 100 床で発足し，以来つねに地域基幹病院としての役割を担いつつ，人間ドック(昭和 34 年 12 月)，未熟児センター(昭和 43 年 7 月)，交通災害救急医療センター(昭和 45 年 12 月)，成人病センター(昭和 49 年 4 月)，第三次救命救急センター(昭和 58 年 4 月)を開設する等の発展，拡充を行っている。

さらに，平成 12 年 4 月には県立精神病院を組織統合し，平成 16 年 5 月に新病院本棟，平成 19 年 3 月にはこころの医療センター新病棟が完成し，現在は 1,082 床を有している。また，本県におけるがんの高度な診断治療・臨床研究の拠点として，平成 21 年 2 月からがん医療センターを開設している。

診療業務は第一線医療から高度医療，救急医療，予防活動および健診業務と幅広く，患者層も感冒，ヘルニアから悪性腫瘍，難治性疾患，生活習慣病等の患者，さらには ICU･CCU などの重症患者と極めて多様性に富んでいる。

◇ 創立年月日　　昭和 25 年 4 月 1 日
◇ 診療科目　　内科，神経内科，循環器内科，小児科，外科，整形外科，脳神経外科，心臓血管外科，皮膚科，形成外科，泌尿器科，産科，婦人科，眼科，耳鼻いんこう科，麻酔科，歯科口腔外科，放射線科，リハビリテーション科，精神科
◇ 許可病床数　　一般 668 床，結核 10 床，感染症 4 床，精神 279 床　　合計 961 床(H25.4 現在)

2．住所
〒910-8526　福井市四ッ井 2 丁目 8－1　　Tel　0776-54-5151

3．実習概要および受入人数
各科の受入人数は表記のとおりであるが，総受入数は 15 名までとする。

受入科	人数		第 1 週	第 2 週	第 3 週	第 4 週	第 5 週
消化器内科	1		消化器内科				救命救急
呼吸器内科	1		呼吸器内科			救命救急	緩和ケア
循環器内科	2		救命救急	循環器内科			
腎臓内科	1		腎臓内科		救命救急	腎臓内科	
内分泌代謝科	1		内分泌代謝科	救命救急	内分泌代謝科		
血液・腫瘍内科	1		救命救急	血液・腫瘍内科			
外科	5		外科				
心臓血管外科	1		心臓血管外科				放射線科
小児科	2		小児科	救命救急	小児科		
眼科	1		眼科				
ローテーション 1	2	A	神経内科		脳神経外科		リハビリ科
		B	脳神経外科		神経内科		リハビリ科
ローテーション 2	2	A	形成外科		整形外科		麻酔科
		B	整形外科		麻酔科	形成外科	
ローテーション 3	2	A	麻酔科	耳鼻咽喉科		泌尿器科	
		B	救命救急	泌尿器科		耳鼻咽喉科	
ローテーション 4	2	A	皮膚科		放射線科		救命救急
		B	放射線科		救命救急	皮膚科	

（平成 27 年度卒前臨床医学研修手引より一部抜粋）

【学生支援】

① 全学生への支援活動を積極的に実施し（**資料 1-1-1-11**），平成 23 年度に医学部学生支援委員会（現医学部学生委員会）を設置し，学生の学習・精神・生活面でのサポートを教員・学務室・保健センター（松岡地区）で協力して行う学生支援体制を医学科と看護学科それぞれに構築し活動した。併せて学生総合相談室を開設し，学生支援体制を強化した（**資料 1-1-1-12～15**）。一連の学生支援活動に対する学生の満足度は良好で，第１期より向上した（**資料 1-1-1-16**）。

資料 1-1-1-11　学生支援活動一覧

学科	対象者	内容	実施組織	時期	参加状況
医学科	新入生	オリエンテーション	医学部教務担当職員	入学時（４月）	全新入生
		履修指導	医学科教員		
		面談	アドバイザー教員	入学時（４月）および 10 月	
		新入生合宿研修	医学科教員・学生担当職員	入学時（５月）	
	編入生	オリエンテーション	医学部教務担当職員	入学時（10 月）	全編入生
		履修指導	医学科教員		
		面談	アドバイザー教員		
	１～４年次生	履修指導ガイダンス	学年主任教員	各学期始め	全学生
	２～３年次生	面談	アドバイザー教員	４月および 10 月	
	留年生	面談	学年主任教員・アドバイザー教員	随時	全留年生
看護学科	新入生	オリエンテーション	医学部教務担当職員	入学時（４月）	全新入生
		履修指導	看護学科教員		
		初年次学習グループ	看護学科教員・２年次生	入学時（４～７月）	
		新入生合宿研修	看護学科教員・学生担当職員	入学時（５月）	
	１～４年次生	履修指導ガイダンス	学年主任教員	各学期始め	全学生
	１～４年次生	ミーティング	アドバイザー教員	年４回	
	留年生	面談	学年主任教員	随時	全留年生

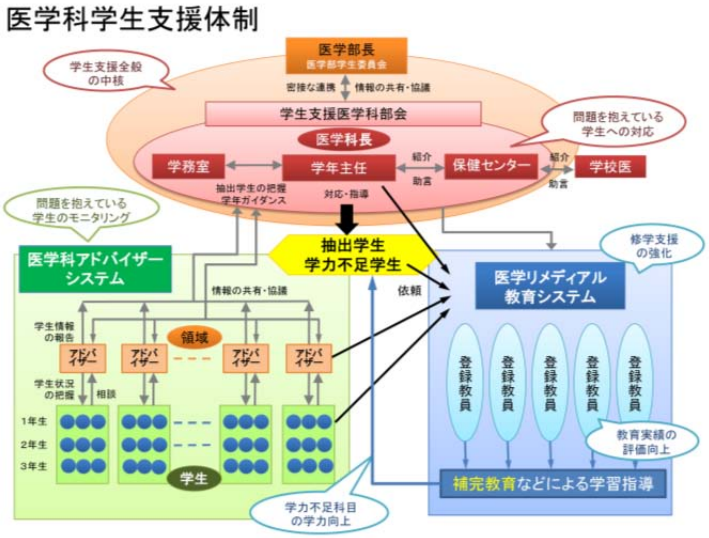
（事務局資料）

資料 1-1-1-12　学習支援を含めた学生支援体制

平成 23 年度に整備した“学生支援体制”のもと，学生ごとに配置されたアドバイザー教員が担当する学生について年に数回の面談を行い，何らかの“気づき”があった場合に早急に関係者に学生を橋渡しするゲートキーパー（相談の窓口）役を担っている。事前に問題を早期発見し，早い段階で，学習指導などの問題を解決する体制を整えることを含め，問題学生の把握に努めている。

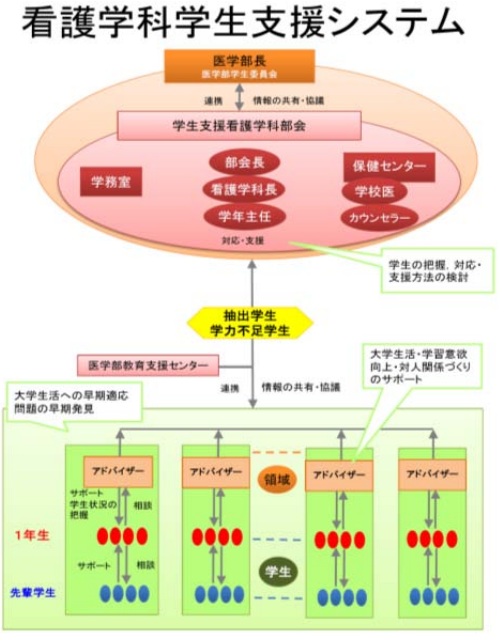
【医学科】

医学科では１～３年次学生を３～４人の小グループに分け，各グループをアドバイザー教員が担当するアドバイザー制度による学生支援システムを構築した。さらに各学年の学年主任と助言教員による学年全体の支援体制の強化を行い，教員・学務室・保健センターと学生総合相談室（平成 23 年度開設，カウンセラー１人，事務補助１人）が連携して，きめ細かい学生支援を行っている。



【看護学科】

看護学科では新入学生を小グループに分け，各グループで先輩学生が相談に応じ，全体としてアドバイザー教員と年４回の定期的ミーティングを行うことにより大学生活への早期適応と問題の早期発見に努めている。新入学生の 98%，アドバイザー教員の 100%が役に立ったと回答しており，高い評価を得ている（**P4-21 後掲資料 1-1-1-19**）。

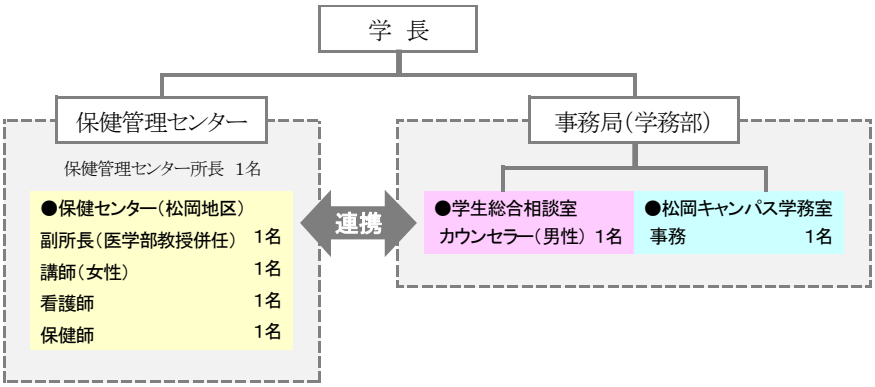


（事務局資料）

資料 1-1-1-13　保健センターおよび学生総合相談室

平成 23 年 7 月に，障害のある学生への対応に加えて，軽微な相談も行える相談窓口として学生総合相談室を設置した。学習やメンタルヘルス等に問題を抱える学生対応を松岡地区保健センターと連携して行っている。また，保健センターには女性教員，学生総合相談室には男性カウンセラーを配し，学生にパンフレットを配布する等の工夫により，より相談に訪れやすい環境作りも進めた。

■ 組織図



■ 学生総合相談室

学生相談室は専任のカウンセラーが常駐し，常時相談を受け付けるとともに，講義棟における出張相談を行い，学生が気軽に相談しやすい環境を作っている。





（事務局資料）

資料 1-1-1-14　保健センターおよび学生総合相談室の相談件数

保健センター及び学生総合相談室では，１年生の新入生合宿研修時に行う「大学生精神健康調査（UPI）」，定期健康診断受診カードによる問診や，平成 26 年度から導入の「困りごとに関するセルフチェックリスト（発達障害のスクリーニングテスト）」等の結果に基づき，学生の呼び出し面談，障害学生支援も視野に入れた支援の取組等を行っている。

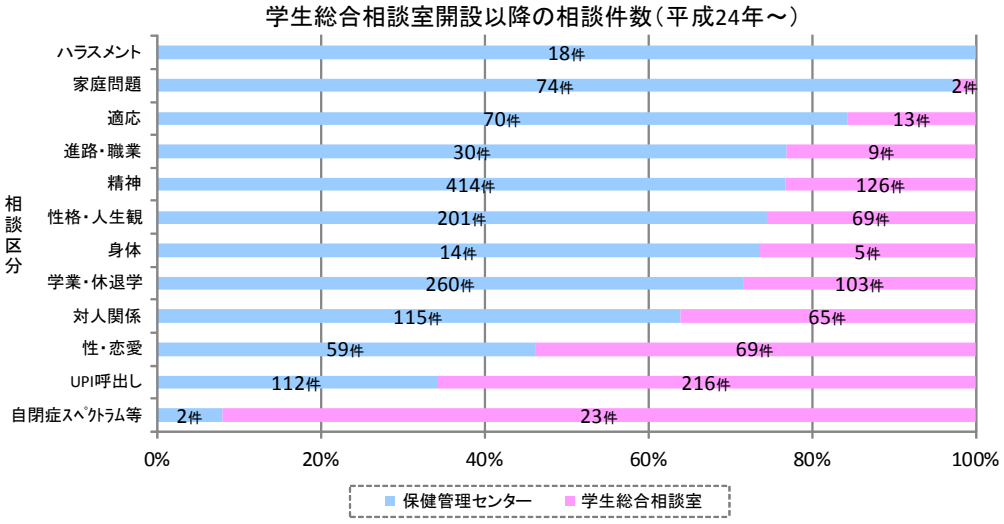
保健センターは学長直下の独立した組織であるため，ハラスメントの窓口としても機能しているが，これに加えて学生総合相談室を設置したことで，恋愛相談など軽微な相談が増加傾向にある。この「性・恋愛」相談の内訳は保健センターと学生総合相談室で半々となっており，保健センターの女性講師と学生総合相談室の男性カウンセラーにより相談者への対応を分けている。

また，学生総合相談室は上記「困りごとに関するセルフチェックリスト」の導入以降，呼出し・面談を増加させており，必要に応じて松岡キャンパス学務室（教務・学生支援等を行う事務局組織）と連携することで，大学への適応に困難を抱える学生の早期発見に繋げている。

相談区分		H22年度 保健管理センター	H22年度 学生総合相談室	H22年度 (計)	H23年度 保健管理センター	H23年度 学生総合相談室	H23年度 (計)	H24年度 保健管理センター	H24年度 学生総合相談室	H24年度 (計)	H25年度 保健管理センター	H25年度 学生総合相談室	H25年度 (計)	H26年度 保健管理センター	H26年度 学生総合相談室	H26年度 (計)	H27年度 保健管理センター	H27年度 学生総合相談室	H27年度 (計)	H22-27年度合計
修学	学業・休退学	153件		(153件)	150件		(150件)	114件	9件	(123件)	70件	11件	(81件)	20件	23件	(43件)	56件	60件	(116件)	666件 (21.0%)
	ハラスメント	7件		(7件)	18件		(18件)	0件	0件	(0件)	0件	0件	(0件)	18件	0件	(18件)	0件	0件	(0件)	43件 (1.4%)
	進路・職業	5件		(5件)	0件		(0件)	0件	0件	(0件)	7件	0件	(7件)	8件	2件	(10件)	15件	7件	(22件)	44件 (1.4%)
適応	性格・人生観	26件		(26件)	35件		(35件)	56件	11件	(67件)	55件	2件	(57件)	52件	16件	(68件)	38件	40件	(78件)	331件 (10.4%)
	対人関係	19件		(19件)	43件		(43件)	71件	28件	(99件)	22件	24件	(46件)	16件	5件	(21件)	6件	8件	(14件)	242件 (7.6%)
	性・恋愛	0件		(0件)	4件		(4件)	17件	0件	(17件)	13件	3件	(16件)	1件	45件	(46件)	28件	21件	(49件)	132件 (4.2%)
	家庭問題	20件		(20件)	18件		(18件)	20件	0件	(20件)	39件	0件	(39件)	10件	0件	(10件)	5件	2件	(7件)	114件 (3.6%)
	適応	20件		(20件)	53件		(53件)	18件	5件	(23件)	24件	6件	(30件)	25件	1件	(26件)	3件	1件	(4件)	156件 (4.9%)
発達	自閉症スペクトラム等	31件		(31件)	60件		(60件)	1件	20件	(21件)	1件	3件	(4件)	0件	0件	(0件)	0件	0件	(0件)	116件 (3.7%)
健康	身体	1件		(1件)	3件		(3件)	3件	0件	(3件)	5件	0件	(5件)	2件	4件	(6件)	4件	1件	(5件)	23件 (0.7%)
	精神	209件		(209件)	128件		(128件)	111件	28件	(139件)	78件	3件	(81件)	159件	18件	(177件)	66件	77件	(143件)	877件 (27.6%)
教育	スーパーバイジー	0件		(0件)	0件		(0件)	0件	0件	(0件)	0件	0件	(0件)	0件	0件	(0件)	0件	0件	(0件)	0件 (0.0%)
	UPI呼出し	36件		(36件)	69件		(69件)	14件	43件	(57件)	53件	13件	(66件)	36件	73件	(109件)	9件	87件	(96件)	433件 (13.6%)
（計）		527件		(527件)	581件		(581件)	425件	144件	(569件)	367件	65件	(432件)	347件	187件	(534件)	230件	304件	(534件)	3,177件

※ 延相談件数を記載

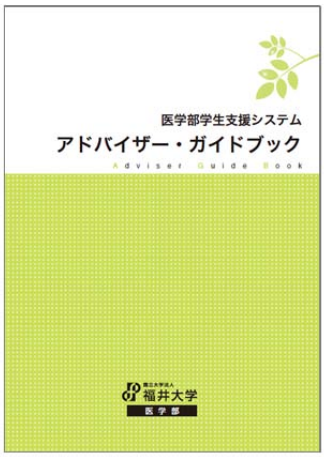
※ 学生総合相談室開設年（平成 23 年度）は窓口分類しなかったため，相談件数計 60 件を保健管理センターに含めて記載



（事務局資料）

資料 1-1-1-15　学生支援システムの充実

「医学部における包括的学生支援システムの構築」として，平成 23～27 年度には福井大学「競争的配分経費（教育評価に基づく競争的経費）」の配分を受け，アドバイザー・ガイドブック作製（平成 26 年度）など制度の充実を図った。「アドバイザー・ガイドブック」は学生支援システムの説明とともに学生と面談を行う際に必要な方法や手順等を示している。



■ 教員からのコメント

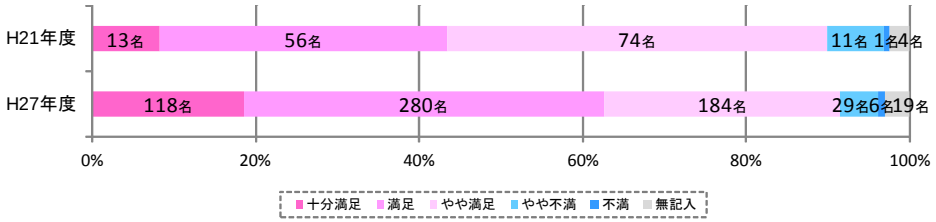
「学生から個人的な相談を受けることがあるが，カウンセリングなどに精通しておらず対応に苦慮する場合がある。この“アドバイザー・ガイドブック”はその際の良き指針を示してくれるものであり，貴重なものと思われる。」

（事務局資料）

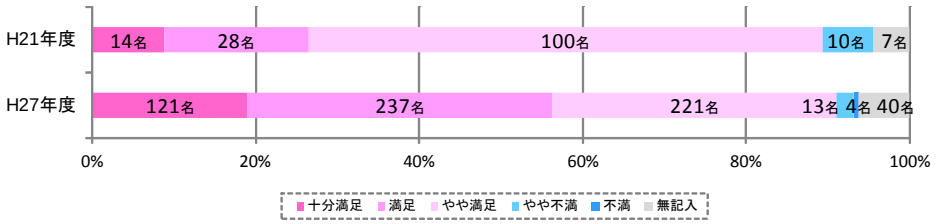
資料 1-1-1-16　学生支援活動に対する学生の評価

学生支援活動に対して学生への意見聴取の結果，第１期末と比較して，第２期末では学生の高評価（十分満足～満足とした割合）は，教育支援で 19.2%，学生相談・ハラスメント対策で 29.9%，心身の健康対策で 19.8%向上している。

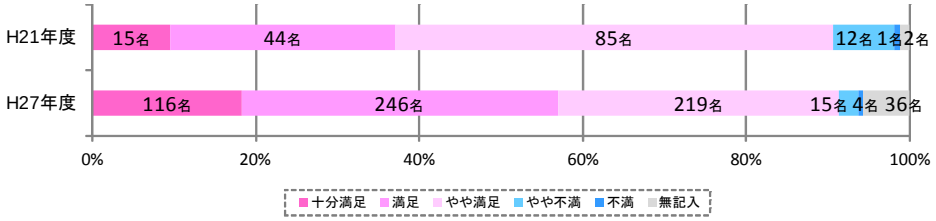
設問_教育支援（指導・助言教員，オフィスアワー等）について，あなたはどの程度満足していますか。



設問_学生相談・ハラスメント対策（センター，相談室等の支援含む）について，あなたはどの程度満足していますか。



設問_心身の健康対策（センター，相談室等の支援含む）について，あなたはどの程度満足していますか。



（平成 21 年度および平成 27 年度「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」結果より抜粋）

②　新入生へは入学時オリエンテーション（P4-15 **前掲資料 1-1-1-11**）や合宿研修（**資料 1-1-1-17**）を始めとした学生支援を積極的に行い，学生から好評を得る等，大学教育への円滑な移行につながっている（**資料 1-1-1-18，19**）。

資料 1-1-1-17　新入生合宿研修（医学部）

■ 平成 27 年度プログラム

時間	5月8日（金）	時間	5月9日（土）
		8:50	起床、朝食等
			全体討議（班別討議報告・まとめ）
			閉講式
		10:40	休暇村　越前三国　出発
			（バス移動、観光）
		12:30	医学部到着・解散
	開講式（福井大学医学部講義棟）		
13:30	講演①「心と体の健康について 保健センターから」 講師：保健センター　片山　寛次副所長、梅澤　有美子特命講師 講師：学生総合相談室カウンセラー　前川　伸晃		
14:30	休憩		
14:45	講演②「忍び寄る病原体 −その身近な感染対策−」 講師：岩崎　博道 教授（感染制御部）		
15:45	「防災サポーターについて」 講師：永平寺町消防本部		
16:00			
16:20	医学部出発		
	（バス移動）		
17:00	宿泊施設（休暇村越前三国）到着		
17:30	先輩からのメッセージ		
18:30	夕食		
19:30	班別討議 1. 海外旅行に出かけるときの心構えを話し合おう。 2. ワクチンは必要か、不必要か。両者の意見を出し合いディベートし、結論をまとめよう。 3. 先進国中、日本だけがHIV患者が増加しているのはなぜだろうか？ 4. 性的マイノリティ（性同一障害やゲイなどLGBT）で悩んでいる人に対するアドバイスを考えよう。		
21:00	自由時間、就寝		

【講演】



【班別討議】

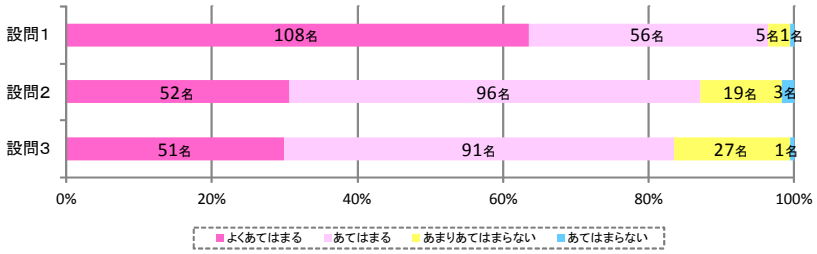


（事務局資料）

資料 1-1-1-18　新入生合宿研修に対する学生の評価

新入生合宿では，学生同士による討論や発表会，教員や先輩からの話題提供による研修等を通して，同級生との親睦が深まり大学生活・学修へ対応に自信がついたとするものが多い。

設問１_同級生との親睦が深まった
設問２_研修内容が役に立った
設問３_大学生活や，大学での学修に対応していく自信がついた



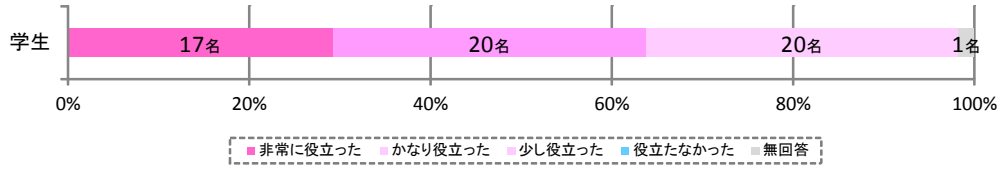
（平成 27 年度福井大学医学部新入生合宿アンケート結果より抜粋）

資料 1-1-1-19　看護学科学生支援活動（初年次学生グループ）に対する評価

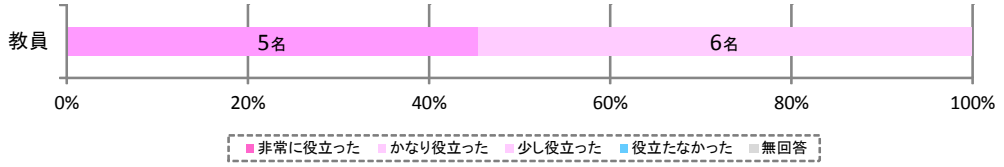
看護学科では，新入生４～６人で１つのグループ（初年次学生グループ）を作り，アドバイザー教員と先輩学生（２年次生）を交えて勉強法や試験対策から，部活やアルバイト，人間関係も含めた一人では解決できない悩み等をグループで共有し，大学生活にスムーズに適応できるよう支援を行っている。

支援活動に対して，学生の 98.3%，教員の全員が役に立ったと評価している。

設問_看護学科学生支援活動は，全体的に役立ったと思いますか？



設問_学生にとって看護学科学生支援活動は，全体的に役立ったと思いますか？



（平成 27 年度看護学科学生支援活動に関するアンケート結果より抜粋）

③　平成 24 年度に開設したリメディアル教育制度による補完授業等の学力不足対策に加え（**資料 1-1-1-20**），留年等の成績不振学生へは学年主任やアドバイザー教員による指導を行っている（**P4-16 前掲資料 1-1-1-12**）。

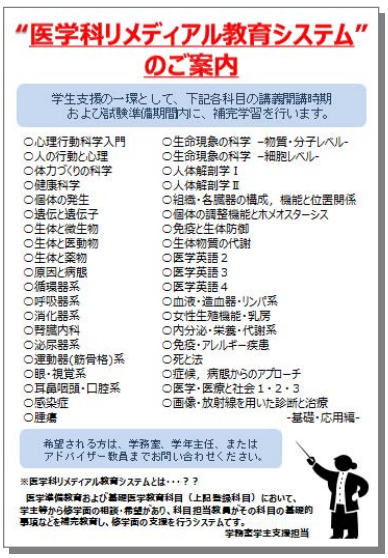
資料 1-1-1-20　リメディアル教育実施状況

平成 24 年度より開始したリメディアル教育制度は，実施科目数と担当教員数が年ごとに増加し，受講学生数も大きく増加しており（平成 27 年度は延べ 439 名の受講），本制度は学生の期待に応えている。

■ リメディアル教育実施内容

実施年度	対象学年	リメディアル実施科目名	担当教員	実施回数	受講学生数	実施内容
H24年度	2年次生	生体物質の代謝	宮本　薫	4回	15名	グループ講義
		生体と微生物	定　清直	1回	2名	その他
			千原　一泰	1回		
			竹内　健司	1回		
		免疫と生体防御	伊保　澄子	3回	30名	グループ講義
	（計）		（5名）	（10回）	（47名）	
H25年度	1年次生	人の行動と心理	安倍　博	1回	25名	グループ講義
		生命現象の科学	藤井　豊	2回	49名	グループ講義
		情報の科学2	三上　俊介	1回	7名	グループ講義
	2年次生	細胞の基本構造と機能	老木　成稔	1回	30名	グループ講義
		個体の調節機構とホメオスターシス				
	4年次生	画像・放射線を用いた診断と治療	坂井　豊彦	2回	24名	グループ講義
	（計）		（5名）	（7回）	（135名）	
H26年度	1年次生	生命現象の科学	藤井　豊	1回	15名	個人講義
			安田　年博	1回	10名	個人講義
			飯田　礼子	1回	2名	個人講義
	2年次生	細胞の基本構造と機能	老木　成稔	1回	60名	グループ講義
		組織・各臓器の構成，機能と位置関係	深澤　有吾	1回	32名	グループ講義
			黒田　一樹	1回	32名	グループ講義
			謝　敏カク	1回	32名	グループ講義
		個体の調節機構とホメオスターシス	松岡　達	1回	45名	グループ講義
			村田　拓也	1回	45名	グループ講義
	3年次生	消化器系	小林　基弘	1回	15名	個人講義
		泌尿器系	法木　左近	1回	2名	個人講義
	4年次生	基本的診療知識	重見　研司	1回	5名	個人講義
	（計）		（12名）	（12回）	（295名）	
H27年度	1年次生	生命現象の科学	藤井　豊	1回	20名	グループ講義
			安田　年博	1回	20名	個人講義
			飯田　礼子	1回	2名	個人講義
	2年次生	細胞の基本構造と機能	老木　成稔	1回	100名	グループ講義
		組織・各臓器の構成，機能と位置関係	深澤　有吾	1回	13名	グループ講義
			黒田　一樹	1回	13名	グループ講義
			謝　敏カク	1回	13名	グループ講義
		個体の発生	飯野　哲	1回	24名	グループ講義
		生体物質の代謝	水谷　哲也	1回	24名	グループ講義
			宮本　薫	1回	21名	グループ講義
		個体の調節機構とホメオスターシス	松岡　達	1回	24名	グループ講義
			村田　拓也	1回	24名	グループ講義
		人体解剖学1	飯野　哲　他2名	1回	30名	グループ講義
	3年次生	生体と薬物	青木　耕史	2回	10名	グループ講義、個人講義
		消化器系	小林　基弘	1回	100名	グループ講義
	4年次生	医学・医療と社会1	金山　ひとみ	2回	1名	個人講義
		医学・医療と社会2				
	6年次生	医学・医療と社会3				
	（計）		（16名）	（18回）	（439名）	

■ 平成 27 年度医学科リメディアル教育ポスター



（事務局資料）

④　教員による国家試験支援等を実施し，学生からの評価が高い（**資料 1-1-1-21～22**）。

資料 1-1-1-21　医学科国家試験への支援

医学科では医学部教員による「医学統合講義（12 月）」（希望者が参加）や外部講師による「医師国家試験対策に係る講演会（５月）」（６年次生全員）が開催されている。

医学総合講義の内容に関し，参加した学生の 75.7%が非常に適切であったと回答している。

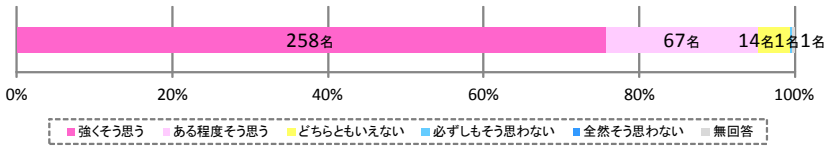
■ 医学統合講義実施状況・参加者数

		H22年度	H23年度	H24年度	H25年度	H26年度	H27年度	（計）
臨床系	小児科学	46名	31名	50名	35名	29名	52名	243名
	産科婦人科学	33名	61名	43名	17名	40名	33名	227名
	腎臓病態内科学，検査医学	41名	31名	35名	24名	31名	45名	207名
	耳鼻咽喉科・頭頸部外科学	31名	43名	36名	51名	23名	17名	201名
	内科学(1)	15名	68名	45名	14名	20名	29名	191名
	内科学(3)	21名	60名	35名	0名	37名	36名	189名
	救急部・総合診療部	26名	17名	48名	29名	32名	31名	183名
	皮膚科学	23名	38名	33名	21名	29名	33名	177名
	整形外科学	25名	35名	36名	32名	20名	23名	171名
	放射線医学	28名	36名	37名	14名	22名	22名	159名
	眼科学	13名	53名	27名	31名	29名	0名	153名
	循環器内科学			45名	22名	17名	34名	118名
	内科学(2)	18名	11名	30名	10名	20名	16名	105名
	外科学(1)	30名	14名	22名	0名	20名	19名	105名
	泌尿器科学	38名	20名	32名	13名	0名	0名	103名
	精神医学	0名	52名	28名	0名	0名	0名	80名
	麻酔・蘇生学	20名	9名	17名	12名	15名	0名	73名
	外科学(2)	38名	0名	0名	0名	0名	0名	38名
基礎系	環境保健学	0名	14名	6名	5名	7名	4名	36名
（延参加者数）		(446名)	(593名)	(605名)	(330名)	(391名)	(394名)	(2,759名)

●平成 29 年度から卒業試験を統一試験形式とし２日間で実施することにより，国家試験に向けた学修時間を確保し，「医学総合講義」等の国家試験対策により多くの学生が参加できる日程的配慮を行うこととしている。

■ 医学総合講義に対する学生の評価

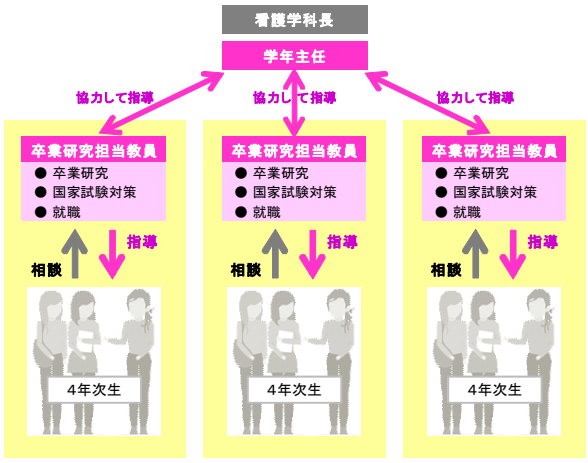
設問_講義内容は適切でしたか



（事務局資料）

資料 1-1-1-22　看護学科国家試験対策システム

看護学科では，４年次生の卒業研究担当教員が学年主任と連携し，担当学生の就職や国家試験対策に対して相談指導を継続的に行う個別体制を取っている。



（事務局資料）

⑤　医学部独自の奨学金制度を整え（**資料 1-1-1-23～24**），加えて授業料免除（**資料 1-1-1-25**）や入学料免除，外部奨学金への申請補助等を積極的に行い，第１期に比べ経済的支援数が大幅に増加するとともに，学生の満足度も向上した（**資料 1-1-1-26**）。

資料 1-1-1-23　医学部学生対象の奨学金一覧

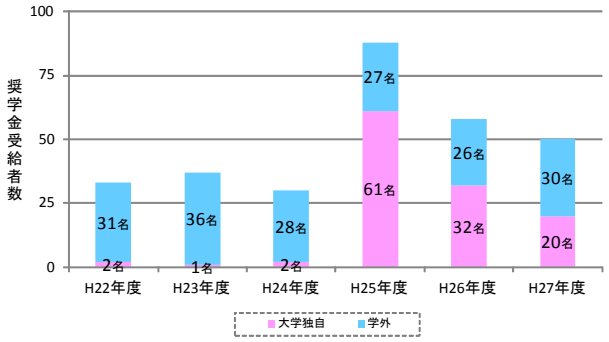
	福井大学			嶺南医療振興財団	福井県
	学生修学支援奨学金	生協奨学金	看護学科奨学金	医学生奨学金	医師確保修学資金
対象学部・学科	全学	全学	医学部看護学科	医学部医学科	医学部医学科
貸与者	・学部学生及び大学院生の授業料免除申請者（外国人留学生除く）のうち，審査の結果半額免除となった者	・学部学生及び大学院生の授業料免除申請者（外国人留学生除く）のうち，審査の結果半額免除となった者	・本学医学部看護学科３年時に在学する学生で，看護師の資格を取得後，直ちに福井大学医学部附属病院で就業を希望する学生	・福井県内の高校を卒業した医学部医学科１年生 ・将来，福井県嶺南地域の公的な病院及び診療所に医師として勤務しようとする者	・福井大学の推薦入試（福井健康推進枠）に合格し，入学した医学部医学科１年生 ・将来，福井県全域の公的な医療機関及び診療所に医師として勤務しようとする者
定員	全学で前期５名，後期５名	全学で前期５名，後期５名	若干名	０～５名程度	10 名程度
貸与(給付)額	100,000 円	100,000 円	720,000 円	10,796,800 円	10,796,800 円
返済免除	返還を要しない	返還を要しない	福井大学を卒業後，直ちに本院の看護師として採用され，引き続き奨学金貸与期間の２倍の期間業務に従事した場合	卒後４年間（卒後臨床研修期間を除く）を福井県嶺南地域の指定医療機関で勤務した場合	卒後臨床研修期間を含む９年間を福井県内の指定医療機関で勤務した場合

（事務局資料）

資料 1-1-1-24　奨学金の年度別受給者

学外奨学金に加え，大学独自の奨学金を充実させたことにより，多くの学生が奨学金を受給している。特に，平成 25 年度以降は看護学科奨学金を設けたことにより受給者数が増加している。

	福井大学独自奨学金				学外奨学金				合計
	学生修学支援奨学金	生協奨学金	看護学科奨学金	（計）	嶺南医療振興財団医学生奨学金	福井県医師確保修学資金	その他奨学団体	（計）	
H22年度	―	2名	―	(2名)	5名	9名	17名	(31名)	33名
H23年度	―	1名	―	(1名)	5名	10名	21名	(36名)	37名
H24年度	―	2名	―	(2名)	4名	10名	14名	(28名)	30名
H25年度	―	3名	58名	(61名)	2名	10名	15名	(27名)	88名
H26年度	2名	3名	27名	(32名)	0名	10名	16名	(26名)	58名
H27年度	0名	4名	16名	(20名)	2名	10名	18名	(30名)	50名
合計	2名	15名	101名	(118名)	18名	59名	101名	(178名)	296名



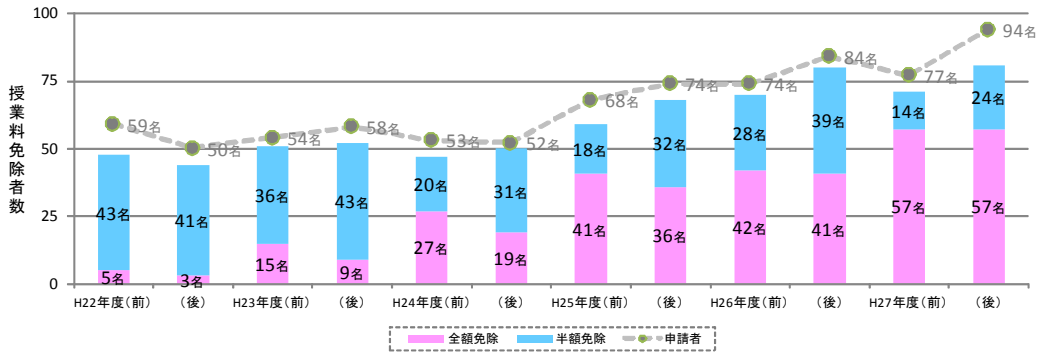
（事務局資料）

資料 1-1-1-25　授業料免除状況

授業料免除申請について，個別に学生の経済状況を細やかに分析し対応を行っており，免除（全額または半額）者数は年ごとに増加している。特に全額免除者が増加している。

		全額免除							半額免除							合計
		1年次生	2年次生	3年次生	4年次生	5年次生	6年次生	（計）	1年次生	2年次生	3年次生	4年次生	5年次生	6年次生	（計）	
H22年度	前期	1名	0名	3名	1名	0名	0名	（5名）	11名	4名	10名	9名	4名	5名	（43名）	48名
	後期	0名	0名	2名	1名	0名	0名	（3名）	9名	5名	11名	9名	3名	4名	（41名）	44名
H23年度	前期	2名	2名	3名	5名	2名	1名	（15名）	7名	9名	6名	8名	5名	1名	（36名）	51名
	後期	1名	2名	1名	5名	0名	0名	（9名）	9名	8名	7名	8名	9名	2名	（43名）	52名
H24年度	前期	2名	6名	6名	7名	2名	4名	（27名）	0名	6名	4名	3名	4名	3名	（20名）	47名
	後期	1名	4名	4名	4名	3名	3名	（19名）	1名	7名	7名	7名	4名	5名	（31名）	50名
H25年度	前期	8名	3名	11名	8名	5名	6名	（41名）	5名	0名	7名	4名	1名	1名	（18名）	59名
	後期	8名	4名	9名	7名	5名	3名	（36名）	8名	5名	7名	8名	1名	3名	（32名）	68名
H26年度	前期	10名	11名	6名	10名	3名	2名	（42名）	3名	6名	2名	10名	4名	3名	（28名）	70名
	後期	8名	11名	7名	9名	3名	3名	（41名）	7名	10名	4名	13名	3名	2名	（39名）	80名
H27年度	前期	9名	8名	16名	13名	4名	7名	（57名）	2名	4名	4名	2名	1名	1名	（14名）	71名
	後期	9名	11名	14名	9名	7名	7名	（57名）	4名	5名	9名	4名	1名	1名	（24名）	81名

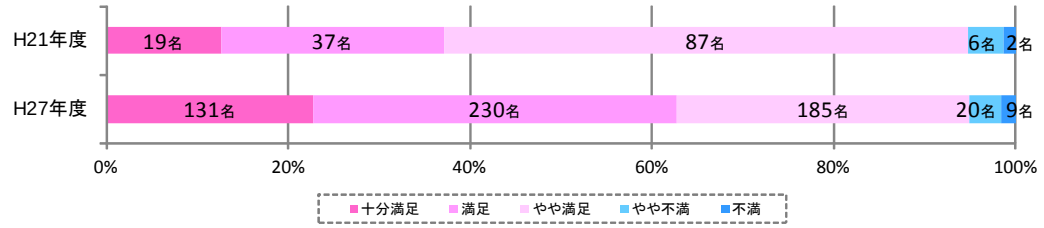
※ 5，6 年次生は医学科のみ



（事務局資料）

資料 1-1-1-26　経済的支援に対する学生の満足度

設問_奨学金・授業料免除等経済的支援について，あなたはどの程度満足していますか



＊第１期末と比較して，第２期末では学生の高い評価（十分満足～満足とした割合）は，25.7%向上している。

■ 奨学金受給・授業料免除学生の声

・ これらの制度を活用させていただかなかった場合，アルバイトなどで勉強の時間を確保できなくなると思うのですが，今はおかげさまで十分に勉強や部活動に励むことができています。精神面でも国や大学に助けていただいているおかげで学ぶことができていると思えるので，一層勉学に身が入っています。

・ 奨学金を使うことで，高い医学書を買うことができ，勉強しやすくなる。

（平成 21 年度および平成 27 年度「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」結果より抜粋）

【国際性】

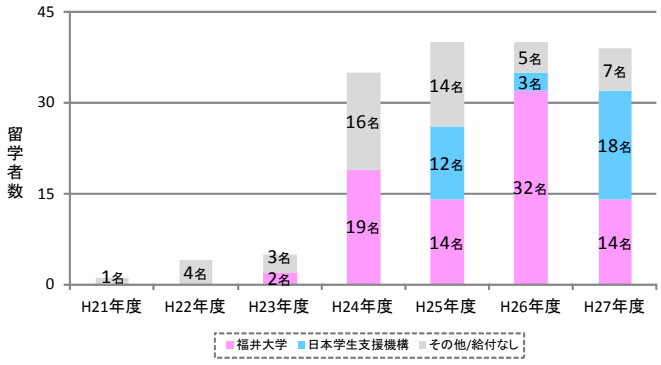
「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」事業（以下「GGJ 事業」という。）による海外留学を推進し（**資料 1-1-1-27**），福井大学学生海外派遣支援金（**資料 1-1-1-28**）および単位認定制度（**資料 1-1-1-29**）を新たに設け，留学者数が大幅に増加した。

資料 1-1-1-27　海外留学する学生数の大幅な増加

本学は，平成 24 年度に GGJ 事業に採択された。その全学的展開として医学部でも海外留学推進を進め，年間留学者数は採択前（平成 21～23 年度）の 1 ～ 5 人/年程度に比べ，38.5 人/年（平成 24～27 年度）に増加した。海外留学は医学科研究室配属や臨床実習，看護学科キャリアアップ実習や語学研修などであり，留学者への経済的支援と単位認定制度適用している。

■ **経済的支援制度**

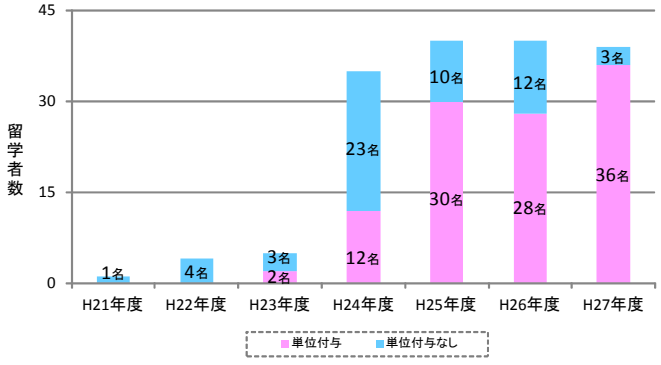
	GGJ採択前			GGJ採択後				合計
	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	
日本学生支援機構海外留学支援制度奨学金	0名	0名	0名	0名	12名	3名	18名	33名
福井大学学生海外派遣支援金	0名	0名	2名	19名	14名	32名	14名	81名
その他	1名	1名	2名	2名	10名	4名	2名	22名
給付なし	0名	3名	1名	14名	4名	1名	5名	28名
（計）	1名	4名	5名	35名	40名	40名	39名	164名



＊福井大学学生海外派遣支援金は留学者の 49.3%，日本学生支援機構海外留学支援制度奨学金は 20.1%が受給した。

■ **単位認定制度**

			GGJ採択前			GGJ採択後				合計
			平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	
医学科	単位付与	研究室配属	0名	0名	2名	10名	12名	12名	5名	41名
		語学研修、異文化交流	0名	0名	0名	1名	9名	7名	10名	27名
		卒前臨床実習	0名	0名	0名	1名	0名	2名	2名	5名
		不明／その他	0名	0名	0名	0名	2名	1名	10名	13名
	単位付与なし		1名	4名	3名	11名	10名	12名	3名	44名
	（計）		(1名)	(4名)	(5名)	(23名)	(33名)	(34名)	(30名)	(130名)
看護学科	単位付与	キャリアアップ実習	0名	0名	0名	0名	6名	3名	8名	17名
		語学研修、異文化交流	0名	0名	0名	0名	1名	2名	1名	4名
		不明／その他	0名	0名	0名	0名	0名	1名	0名	1名
	単位付与なし		0名	0名	0名	12名	0名	0名	0名	12名
	（計）		(0名)	(0名)	(0名)	(12名)	(7名)	(6名)	(9名)	(34名)
合計			1名	4名	5名	35名	40名	40名	39名	164名



＊単位認定者（**資料 1-1-1-29**）は，平成 25 年度に 30 名，平成 26 年度に 28 名，平成 27 年度に 36 名，を数える

（事務局資料）

資料 1-1-1-28　留学補助制度

平成 27 年度グローバル人材育成推進事業　海外研修プログラムに係る
経費支援及び単位付与について

◆ 経費支援（奨学金等）

受給要件を満たす学生については，Ⅰ又はⅡの経済支援を受けることができます。Ⅰ，Ⅱともに返還義務はありませんが，プログラム参加後に報告書提出，アンケート回答等に必ずご協力いただきます。

Ⅰ．日本学生支援機構海外留学支援制度奨学金

支援金額　派遣先国・地域により金額は異なる。（指定都市 10 万，甲地域 8 万，乙地域 7 万，丙地域 6 万円）

受給条件　◎ 日本国籍を有する者又は日本への永住者
◎ 前年度の成績評価係数（総登録単位数）2.3/3.0 以上
◎ 語学力（英語を使用するプログラムの場合，原則 TOEIC400 点以上，前年度の英語の成績が 2.3/3.0 以上など）
◎ 家計基準（原則，日本学生支援機構第一種奨学金支給基準に準じる）
（中略）

応募方法　プログラムへの参加申込みと同時に受給希望者とみなしますので，特別な申請は必要ありません。応募時に提出いただく成績（不可・不受験を含む学業成績通知書）により，成績評価係数を確認し，成績や語学力を満たす学生については，家計基準確認のための書類を別途求めます。

Ⅱ．福井大学学生海外派遣支援金

支給金額　派遣先国・地域により金額は異なる。（指定都市 9 万，甲地域 7 万，乙地域 6 万，丙地域 5 万円）
※ 地域については，上記日本学生支援機構と同様

受給条件　◎ 前年度の成績評価係数（総取得単位数）2.0/3.0 以上
◎ 推薦書及び語学能力を示す書類の提出　など

応募方法　5，11 月に発表される募集要項を確認の上，各自が申請すること。

（事務局資料）

資料 1-1-1-29　海外派遣プログラムの単位認定制度

医学部学生海外派遣プログラムに係る単位認定について

医学部では，平成 25 年度以降，両学科における自由科目（選択）として，下表に挙げる４科目を新たに設け，在学する全学生に適用する。

平成 25 年度以降に，医学部教務学生委員会で承認を受け実施される海外派遣プログラムに参加し，所定の日程を終了した者に対しては，参加したプログラムの時間数や内容に応じて，下表４科目のいずれかを受講したものとし，単位認定に係る成績評価を行う。

ただし，修得した単位を卒業要件に含めることはできない。

なお，これらの科目については，単位の累積を認めることとする。

授業科目	単位数
海外短期研修Ⅰ	１単位
海外短期研修Ⅱ	２単位
海外医療研修Ⅰ	１単位
海外医療研修Ⅱ	２単位

（事務局資料）

●多様な教員の確保の状況とその効果

【教育目的を実現するための教員構成】

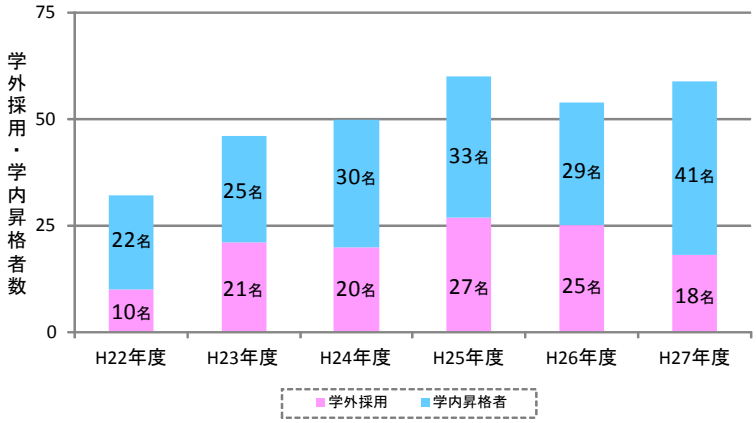
① 医学部を構成する医学科及び看護学科の教員組織の構成及び専任教員の配置は大学設置基準第７条及び第 13 条に基づき教育研究に係る責任の所在が明確になるように教員組織を編成している。教育業績に優れた人材を学内外問わず積極的に採用するため，教授及び准教授に加え，平成 27 年からは講師，助教も公募制としている（**資料 1-1-2-1～2**）。

資料 1-1-2-1　医学部教員の学外採用・学内昇格者数推移

医学部所属教員は，平成 21 年度末の 289 名から，平成 27 年度末の 315 名と増加しており，毎年約 30～60 名の教員の採用，昇格を行っている。全ての専任教員は公募制とし，学内外から積極的に教育業績に優れた人材の採用を行っている。

		教授	特命教授	准教授	講師	助教	特命准教授	特命講師	特命助教	合計
平成22年度	学外	1名	0名	0名	2名	6名	0名	0名	1名	10名
	学内	2名	0名	2名	8名	9名	0名	0名	1名	22名
	（計）	(3名)	(0名)	(2名)	(10名)	(15名)	(0名)	(0名)	(2名)	(32名)
平成23年度	学外	4名	0名	2名	1名	8名	1名	0名	5名	21名
	学内	2名	0名	4名	6名	12名	0名	1名	0名	25名
	（計）	(6名)	(0名)	(6名)	(7名)	(20名)	(1名)	(1名)	(5名)	(46名)
平成24年度	学外	2名	0名	2名	1名	13名	0名	0名	2名	20名
	学内	2名	0名	2名	8名	13名	0名	1名	4名	30名
	（計）	(4名)	(0名)	(4名)	(9名)	(26名)	(0名)	(1名)	(6名)	(50名)
平成25年度	学外	3名	1名	1名	1名	14名	1名	0名	6名	27名
	学内	1名	0名	4名	5名	18名	1名	1名	3名	33名
	（計）	(4名)	(1名)	(5名)	(6名)	(32名)	(2名)	(1名)	(9名)	(60名)
平成26年度	学外	2名	0名	1名	0名	12名	1名	0名	9名	25名
	学内	0名	0名	5名	4名	15名	0名	0名	5名	29名
	（計）	(2名)	(0名)	(6名)	(4名)	(27名)	(1名)	(0名)	(14名)	(54名)
平成27年度	学外	0名	0名	2名	2名	9名	0名	0名	5名	18名
	学内	6名	0名	5名	12名	8名	0名	0名	10名	41名
	（計）	(6名)	(0名)	(7名)	(14名)	(17名)	(0名)	(0名)	(15名)	(59名)

・医学部所属のみ（高エネルギー医学研究センター，子どものこころの発達研究センター，ライフサイエンス支援センターを除く）
・大学院医学系研究科，附属病院所属の教員を含む
・特命教員は毎年度雇用更新のため，新規採用者のみを計上



（事務局資料）

資料 1-1-2-2　教員の公募案内文

医学部医学科 分子生体情報学領域教員の公募案内

1 職名・人員　　教授　１名

2 所　　属　　医学部医学科 生命情報医科学講座 分子生体情報学領域

3 職務内容

本学部では，生命情報医科学講座 分子生体情報学領域（旧・生化学(2)講座）宮本　薫教授の平成 28 年 3 月 31 日付け定年退職に伴い，後任の教授候補者を公募することとなりました。

当該領域の教授候補者には，生化学関連の分野で優れた研究能力を有するとともに，学生教育にも経験と熱意をもって当たられる方を求めています。

また，生命情報医科学講座 分子遺伝学領域（旧・生化学(1)講座）菅井　学教授との緊密な連携のもと，生化学・分子生物学関連の教育及び実習をご担当いただく予定です。

つきましては，貴学（学部・機関）並びに関係機関に適任者がおられましたら，下記により御推薦下さるようお願い申し上げます。

なお，自薦につきましても受け付けております。

4 採用年月日　　平成28年４月1日以降

5 必要書類

(1) 推薦書　（別記様式1）（自薦の場合には省略可）
(2) 履歴書　（別記様式2）　１通
(3) 業績目録（別記様式3）　１通
(4) 論文別刷　原著論文　　主要なもの１０編以内　　各２部（コピー可）
(5) 科学研究費等の取得状況（別記様式4）　１通
(6) 研究と教育の概要と抱負　２０００字以内
(7) 候補者について，推薦者以外の照会可能な２名の氏名と連絡先（様式適宜）

6 応募締切日　　平成27年９月30日（水）（必着）

7 問い合わせ・書類提出先

〒 910-1193 福井県吉田郡永平寺町松岡下合月２３－３
福井大学医学部長　山　口　明　夫

郵送の場合は，封筒に「分子生体情報学領域 応募書類在中」と朱書し，書留でお願いします。

事務担当　松岡キャンパス総務室運営係　高橋
TEL：0776-61-8214
e-mail：smunei-k@ad.u-fukui.ac.jp

8 その他

選考の過程で御来学の上，ご講演いただく場合がありますので，あらかじめご承知おき下さい。

（付記）・ 応募書類は，原則として返却いたしません。
・ 応募において提出いただきました個人情報は，本学個人情報の保護に関する規則に準じて適正に管理し，今回の採用選考以外の目的には使用いたしません。
・ 本学は男女共同参画を推進しており，業績（研究業績，教育業績，社会的貢献，人物を含む）の評価において同等と認められた場合には，女性を積極的に採用します。

（事務局資料）

②　専任教員により専門科目構成や成績判定等が統括され，学習指導の責任体制は十分整備されている（**資料 1-1-2-3**）。

資料 1-1-2-3　主要科目の専任教員担当状況（平成 26 年度）

学科	総科目数	必修科目					選択科目				
		科目数	専任教員担当の科目数			専任教員以外が担当の科目数（非常勤含む）	科目数	専任教員担当の科目数			専任教員以外が担当の科目数（非常勤含む）
医学科	71科目	62科目	60科目	教授	55科目	2科目	9科目	9科目	教授	8科目	0科目
				准教授	5科目				准教授	1科目	
				講師	0科目				講師	0科目	
看護学科	77科目	44科目	38科目	教授	26科目	6科目	33科目	25科目	教授	18科目	8科目
				准教授	7科目				准教授	5科目	
				講師	5科目				講師	2科目	

（事務局資料）

③　教員組織の活性化に努め，任期制を適用されている教員は約半数であり（**資料 1-1-2-4**），また女性研究者研究活動支援事業による女性教員の確保に努め約 1／5 を占めるに至り（**資料 1-1-2-5**），これらの数値は近年上昇している。

資料 1-1-2-4　任期制適用教員数

若手を中心に任期制を適用した教員数の増加に努め，半数近くとなっている。

	平成22年度末	平成23年度末	平成24年度末	平成25年度末	平成26年度末	平成27年度末
教員数(松岡キャンパス)	285名	291名	299名	304名	307名	315名
うち任期制適用教員数	126名	130名	129名	141名	150名	148名
任期制適用教員比率	44.2%	44.7%	43.1%	46.4%	48.9%	47.0%

・医学部所属のみ（高エネルギー医学研究センター，子どものこころの発達研究センター，ライフサイエンス支援センターを除く）
・大学院医学系研究科，附属病院所属の教員を含む

（事務局資料）

資料 1-1-2-5　女性教員数

女性研究者研究活動支援事業（平成 24～26 年度）の支援を受け女性教員の増加に努め，平成 22 年度末に比べ平成 27 年度末では，女性教員数は 40%以上増加した。教員の公募案内には女性教員の積極的な採用について明記している（**P4-29 前掲資料 1-1-2-2**）。

	平成22年度末	平成23年度末	平成24年度末	平成25年度末	平成26年度末	平成27年度末
教員数(松岡キャンパス)	285名	291名	299名	304名	307名	315名
うち女性教員数	48名	52名	48名	53名	60名	68名
女性教員比率	16.8%	17.9%	16.1%	17.4%	19.5%	21.6%

・医学部所属のみ（高エネルギー医学研究センター，子どものこころの発達研究センター，ライフサイエンス支援センターを除く）
・大学院医学系研究科，附属病院所属の教員を含む

■ 女性研究者研究活動支援事業（福井大学男女共同参画推進センター）（平成 24～26 年度）

女性研究者がその能力を最大限発揮できるよう，出産，子育て又は介護（以下「ライフイベント」）と研究を両立するための環境整備を行う取組を支援するものです。本学では，現在の男女共同参画推進室を男女共同参画推進センターに改組し，全学的な女性研究者支援活動の企画・実施を担います。女性支援ルームの設置，相談体制の構築，交流ネットワークの全学組織化，シンポジウムやセミナーによる意識啓発等を行います。また，ライフイベント中の女性研究者等への研究支援員や技術補佐員，RA・研究補助員の配置による研究活動支援を行います。

（事務局資料）

④　テニュアトラック教員，特命教員の制度により多様な教員を採用し，寄附講座では地域医療教育に特化した教員を採用している（**資料 1-1-2-6**）。

資料 1-1-2-6　特命教員・寄附講座教員・テニュアトラック教員数

■ **特命教員**

本学に，教育（学生への研究指導を含む），研究及び診療活動の充実並び に教育研究診療プロジェクト等の推進のため，特定の任務を遂行することにより，本学の教育研究診療活動の一層の発展に寄与することを目的として，特命教員を置くことができる（国立大学法人福井大学特命教員規程）。

	平成22年度末	平成23年度末	平成24年度末	平成25年度末	平成26年度末	平成27年度末
教員数（松岡キャンパス）	285名	291名	299名	304名	307名	315名
うち特命教員数	5名	13名	14名	21名	28名	34名
特命教員比率	1.8%	4.5%	4.7%	6.9%	9.1%	10.8%

・医学部所属のみ（高エネルギー医学研究センター，子どものこころの発達研究センター，ライフサイエンス支援センターを除く）
・大学院医学系研究科，附属病院所属の教員を含む

＊特命教授（坂野仁）は平成 26 年春の褒賞において紫綬褒章を受賞した。

■ **寄附講座教員**

地域プライマリケア講座・地域医療推進講座・地域高度医療推進講座・心臓血管病先進治療学講座・がん専門医育成推進講座に所属する教員

	平成22年度末	平成23年度末	平成24年度末	平成25年度末	平成26年度末	平成27年度末
教員数（松岡キャンパス）	285名	291名	299名	304名	307名	315名
うち寄附講座教員数	5名	4名	5名	6名	6名	8名
寄附講座教員比率	1.8%	1.4%	1.7%	2.0%	2.0%	2.5%

・医学部所属のみ（高エネルギー医学研究センター，子どものこころの発達研究センター，ライフサイエンス支援センターを除く）
・大学院医学系研究科，附属病院所属の教員を含む

■ **テニュアトラック教員**

平成 23 年度テニュアトラック普及・定着事業（文科省）によるテニュアトラック制の教員

	平成22年度末	平成23年度末	平成24年度末	平成25年度末	平成26年度末	平成27年度末
テニュアトラック教員数（松岡）	0名	1名	4名	3名	3名	3名

・テニュアトラック推進本部所属

テニュアトラック教員は平成 25 年度に医学部教授（1 名），平成 28 年度に医学部助教（1 名）医学部特命助教（1 名）として採用されている。

＊テニュアトラック教員（助教・本田信治）は平成 26 年度文部科学大臣表彰若手科学者賞を受賞した。

（事務局資料）

⑤　先端的内容等の教育に適した非常勤講師の積極的登用（**資料 1-1-2-7**），臨床教育の充実を図るため臨床教員制度（**資料 1-1-2-8**）による地域教育力の積極的な活用等，基本的教育組織を補完する適切な教員体制が整備されている。

資料 1-1-2-7　科目別非常勤講師数

専門教育に関わる先端的内容や地域に関連する特色ある教育等を実践するために，両学科とも非常勤講師を積極的に登用している。

（延人数）

学科	講義区分	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度
医学科	総合教育科目等	4名	7名	7名	7名	13名	13名
	専門教育科目	143名	150名	159名	160名	155名	143名
看護学科	基礎科目	1名	3名	4名	3名	5名	6名
	専門基礎科目	4名	4名	4名	6名	6名	3名
	専門科目	26名	28名	31名	30名	33名	35名
両学科共通科目		12名	12名	11名	16名	16名	15名
（計）		190名	204名	216名	222名	228名	215名

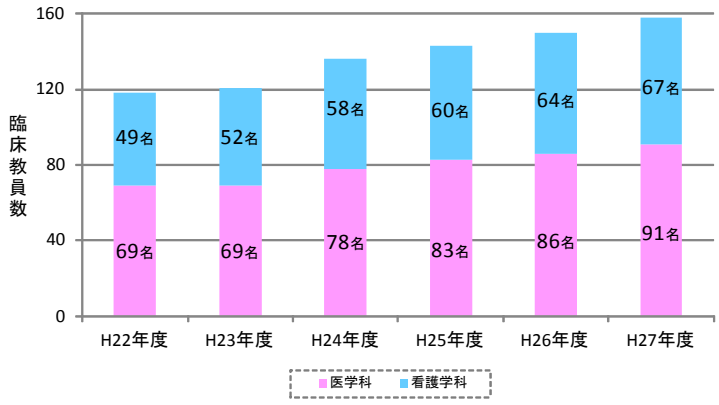
（事務局資料）

資料 1-1-2-8　臨床教員制度による臨床教授等付与状況

医学科，看護学科とも臨床教員制度による教員数は年ごとに増加し，地域医療人教育プログラムの展開等，地域の教育力を活かした教育を行っている。

		平成22年度			平成23年度			平成24年度			平成25年度			平成26年度			平成27年度		
		臨床教授	臨床准教授	臨床講師	臨床教授	臨床准教授	臨床講師	臨床教授	臨床准教授	臨床講師	臨床教授	臨床准教授	臨床講師	臨床教授	臨床准教授	臨床講師	臨床教授	臨床准教授	臨床講師
医学科	病院	53名	5名	3名	53名	5名	3名	57名	8名	5名	62名	7名	9名	60名	14名	6名	62名	13名	10名
	診療所	3名	2名	0名	3名	2名	0名	3名	2名	0名	1名	2名	0名	2名	2名	1名	2名	2名	1名
	その他	3名	0名	0名	3名	0名	0名	3名	0名	0名	2名	0名	0名	1名	0名	0名	1名	0名	0名
	（計）	(59名)	(7名)	(3名)	(59名)	(7名)	(3名)	(63名)	(10名)	(5名)	(65名)	(9名)	(9名)	(63名)	(16名)	(7名)	(65名)	(15名)	(11名)
看護学科	病院	5名	1名	42名	5名	1名	45名	5名	1名	51名	5名	1名	52名	5名	1名	56名	5名	1名	59名
	診療所	0名	0名	1名	0名	0名	1名	0名	0名	1名	0名	0名	2名	0名	0名	2名	0名	0名	2名
	その他	0名	0名	0名	0名	0名	0名	0名	0名	0名	0名	0名	0名	0名	0名	0名	0名	0名	0名
	（計）	(5名)	(1名)	(43名)	(5名)	(1名)	(46名)	(5名)	(1名)	(52名)	(5名)	(1名)	(54名)	(5名)	(1名)	(58名)	(5名)	(1名)	(61名)
合計		64名	8名	46名	64名	8名	49名	68名	11名	57名	70名	10名	63名	68名	17名	65名	70名	16名	72名

※ 臨床教員…臨床実習生・臨床研修医を受入れ，その指導に協力する医療機関等に所属する医療人に対し，選考基準に基づき，教授会の議を経て付与する称号。



（事務局資料）

●入学者選抜方法の工夫とその効果

【入学者募集方針】

①　両学科ともアドミッション・ポリシー（AP）を策定し，平成 22 年度より「教育理念・目標」「特色」「入学者選抜の基本方針」を明示している（**資料 1-1-3-1**）。

資料 1-1-3-1　医学部アドミッション・ポリシー

アドミッション・ポリシー

１．教育理念・目標

福井大学医学部では，

①　人間形成を基盤に，生命尊重を第一義とする医の倫理を体得する，

②　高度な医学・看護学知識を修得した，信頼し得る医療人および研究者を育成する，

③　医学・看護学の進展，ならびに地域医療の向上に寄与する，

ことを教育理念とし，これまでに多くの優れた医療人および教育・研究者を福井県はもとより全国に輩出し，広く社会に貢献しています。

医学科	①　幅広い医学知識を持ち質の高い臨床能力を身につけ， ②　コミュニケーション能力に優れ，高い倫理観を持って患者中心の医療を実践でき， ③　日々進歩する医学知識・医療技術を生涯にわたり学ぶ習慣を身につけ，根拠に立脚した医療を実践できる医療人を育成します。 そして， ④　世界をリードする生命科学研究者や医学教育者となりうる人や， ⑤　個人と地域・国際社会の健康増進と疾病の予防・根絶に寄与し，国際的な視野でまたは地域に根ざした活動ができる人を育成します。
看護学科	①　看護の対象となる人間を総合的に理解でき， ②　高い倫理観を持ち，看護の対象となる人間の権利を守ることのできる医療人を育成します。 加えて， ③　健康に関わる諸問題の解決に必要な知識・技術を主体的に学び，創造する能力， ④　関連領域の専門家と協力し，必要に応じて調整的な役割を果たす能力，および ⑤　看護を批判的に吟味し，建設的・創造的に発展させる能力を育成します。

２．特色

医学科	医学の円滑な学修を行うため，基礎医学と臨床医学とを有機的に関連付けた「統合型カリキュラム」を導入しています。また，課題探求・問題解決能力や，生涯にわたり学ぶ習慣を育てる「テュートリアル教育」も導入するなど，教育の質の向上に常に取り組んでいます。
看護学科	将来の職業選択に生かせるよう，選択科目の多い，ゆとりある教育を実施しています。また，医学部附属病院が主な実習病院であることから，最新の医療現場で充実した看護を学べます。

３．求める学生像

理念・目標を達成するために，

医学科	①　医師となるにふさわしい豊かな人間性，周囲との協調性，奉仕の精神を持ち， ②　医学教育内容を十分理解するために必要な幅広い基礎学力と応用能力に富み， ③　医学・医療を通じて広く社会に貢献しようとする強い情熱と意欲を持った人を求めます。 そして， ④　先端的生命科学に強い関心をもち医学研究者になることを希望する人や， ⑤　医師として地域医療に貢献したいという人も求めています。
看護学科	①　人間存在に関心を持ち，感性が豊かであり， ②　人との関わりを通して，相互に成長することができ， ③　基礎学力があり， ④　向上心と探究心があり，自律的に行動できる人を求めています。

４．入学者選抜の基本方針

医学科	様々な資質・背景を持つ多様な人に広く門戸を開くため，次のような選抜方法を行っています。全ての試験に面接試験を課し，医師としての資質・適性・将来性を判断することにより，「求める学生像」に相応しい人の選抜に努めています。 ①　一般入試（前期日程・後期日程） 高等学校卒業者及びそれに準ずる学力を持った者に対し，大学入試センター試験，個別学力検査及び面接の成績によって選抜を行います。大学入試センター試験に加え，個別学力検査を課し，医学を学び生かす基礎学力や科学的，論理的思考力を評価します。 ②　特別入試Ⅱ（推薦入試：全国枠） 学習成績や人格に優れた者とした高等学校長の推薦する高等学校卒業見込み者に対し，書類審査，大学入試センター試験及び面接の成績によって選抜を行います。大学入試センター試験の成績で医学を学び生かす基礎学力や科学的，論理的思考力を評価すると共に，面接と書類審査によって「求める学生像」に相応しい人の選抜を行います。 ③　特別入試Ⅱ（推薦入試：地域枠） 学習成績や人格に優れ，福井県内において医療に従事する強い意思を有し，かつ高等学校長の推薦する福井県内の高等学校卒業見込み者及び１年前に高等学校を卒業した者等に対し，書類審査，大学入試センター試験及び面接の成績によって選抜を行います。大学入試センター試験の成績では医学を学び生かす基礎学力や科学的，論理的思考力を評価すると共に，面接と書類審査では福井県内の医療に従事する強い意思を評価します。 ④　特別入試Ⅱ（推薦入試：福井健康推進枠） 学習成績や人格に優れ，福井県内において医療に従事する強い意思を有し，かつ高等学校長の推薦する高等学校卒業見込み者及び１年前に高等学校を卒業した者に対し，書類審査，大学入試センター試験及び面接の成績によって選抜を行います。大学入試センター試験の成績では医学を学び生かす基礎学力や科学的，論理的思考力を評価すると共に，面接と書類審査では福井県内の医療に従事する強い意思を評価します。 ⑤　学士編入学 大学卒業者及びそれに準ずる学力を持った者に対し，書類審査，個別学力検査及び面接の成績によって選抜を行います。個別学力検査では理系大学教養課程修了に相当する基礎学力（生命科学関連，英語等）を評価します。面接では学士としての見識と経験，医学を学ぶ目的と強い意欲を判断します。合格者は２年次後期（10 月）に編入します。
看護学科	「求める学生像」にふさわしい者を選抜するため，多様な観点から受験者の学力や資質を評価します。また，全ての試験に面接を課し，看護を学ぶ意欲・積極性・表現力・協調性・一般的態度を評価することにより，アドミッション・ポリシーに沿った入学者選抜に努めています。 ①　一般入試（前期日程・後期日程） 高等学校卒業者及び同等以上の学力があると認めた者に対し，大学入試センター試験，個別学力検査及び面接並びに調査書の内容を総合して選抜します。 大学入試センター試験では高等学校等での教科面における学習達成度を評価します。個別学力検査及び面接では，看護を学ぶための適性を総合的に評価するとともに，調査書により受験者の資質を評価します。 ②　特別入試Ⅰ（推薦入試） 人物，学力ともに優秀で健康であると高等学校長から推薦された高等学校卒業見込者に対し，個別学力検査及び面接並びに調査書等の内容を総合して選抜します。個別学力検査及び面接では，看護を学ぶための適性を総合的に評価するとともに，調査書により受験者の資質を評価します。

（事務局資料）

②　医学科・看護学科入学希望者それぞれへ AP 及び入試情報の提供を積極的に行い（**資料 1-1-3-2～4**），オープンキャンパス等への参加者は増加している（**資料 1-1-3-5～8**）。入試情報に関して新入生の多くが参考とし，かつ内容への評価は高い。

資料 1-1-3-2　入試情報公表一覧

		対象	回数・部数等
ウェブサイト	医学部ホームページ	受験者・保護者・高校教諭・本学学生・教職員等	常時
冊子 ※3学部合冊のため，推定	大学案内（※）	受験者・保護者・高校教諭等	約 1,800 部/年
	学生募集要項（一般入試）（※）		約 1,900 部/年
	〃　（推薦入試）		約 600 部/年
	〃　（学士編入学試験）		約 400 部/年
	入学志願者資料集（※）		約 1,100 部/年
イベント	医学部オープンキャンパス		1 回（8 月）/年
	医学部ミニ・オープンキャンパス		1 回（10 月）/年
	看護学科高校訪問説明会		約 20 校（7 月）/年

（事務局資料）

資料 1-1-3-3　ホームページによる入試情報の提供

入試に関する必要な情報をホームページにて公開し，その掲載内容に対する入学生の評価は高い。

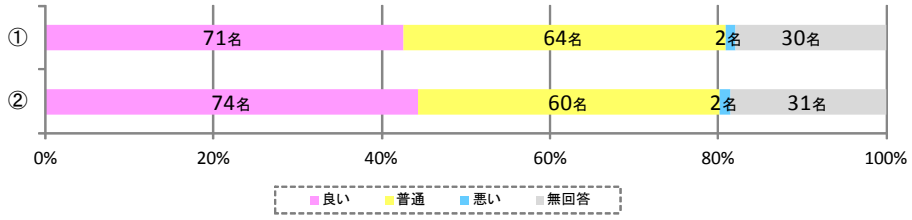
■ **本学ホームページ**



（http://www.med.u-fukui.ac.jp/home/ufms/）

■ **入学者によるホームページ掲載内容の評価（平成 27 年度入学生対象アンケート医・看護学科計）**

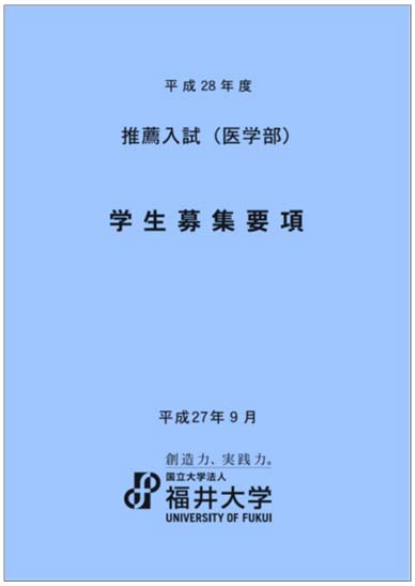
設問_本学の「ホームページ」を見たことのある方は，感想を教えてください
① 内容のわかりやすさ
② 必要な情報の掲載について

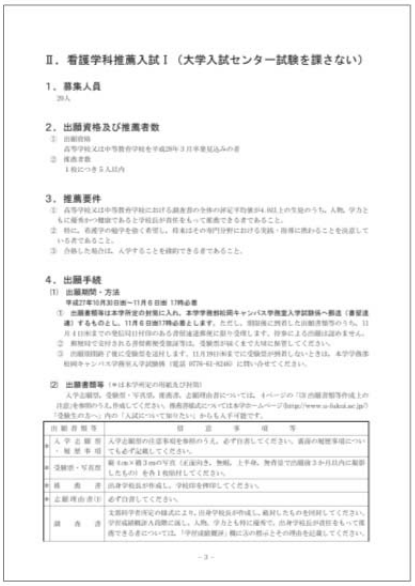


（事務局資料）

資料 1-1-3-4　冊子による入試情報の提供

■ 推薦入試（医学部）募集要項




Ⅱ．看護学科推薦入試Ⅰ（大学入試センター試験を課さない）

1．募集人員

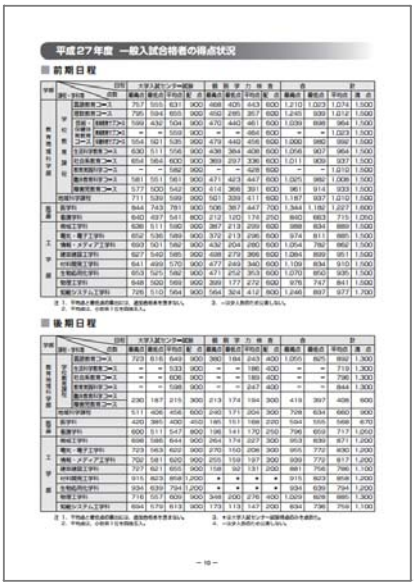
2．出願資格及び推薦者数

3．推薦要件

4．出願手続

■ 入学志願者資料集



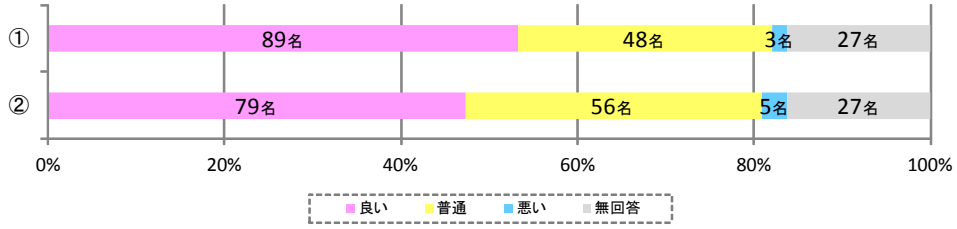

平成27年度　一般入試合格者の得点状況

■ 入学者による冊子掲載内容の評価（平成 27 年度入学生対象アンケート医・看護学科計）

設問_「大学案内（冊子）」を見たことのある方は，感想を教えてください

① 内容のわかりやすさ

② 必要な情報の掲載について

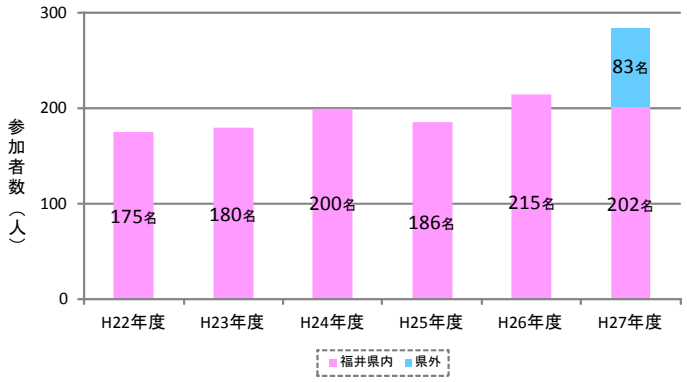


（事務局資料）

資料 1-1-3-5　オープンキャンパスの実施状況

オープンキャンパス及びミニ・オープンキャンパスへの参加者は近年増加し，説明者として教員のみだけでなく学生（スチューデントアシスタント…SA）も加わることで志願者の希望に応えている。

	医学部オープンキャンパス			医学部ミニ・オープンキャンパス			（計）		
	参加者数	大学側の説明者		参加者数	大学側の説明者		参加者数	大学側の説明者	
		教員	学生（SA）		教員	学生（SA）		教員	学生（SA）
H22年度	347名	17名	5名	―	―	―	347名	17名	5名
H23年度	426名	17名	5名	―	―	―	426名	17名	5名
H24年度	459名	16名	15名	―	―	―	459名	16名	15名
H25年度	527名	17名	22名	146名	4名	2名	673名	21名	24名
H26年度	602名	16名	22名	122名	3名	8名	724名	19名	30名
H27年度	629名	17名	39名	80名	3名	8名	709名	20名	47名
（計）	2,990名	100名	108名	348名	10名	18名	3,338名	110名	126名

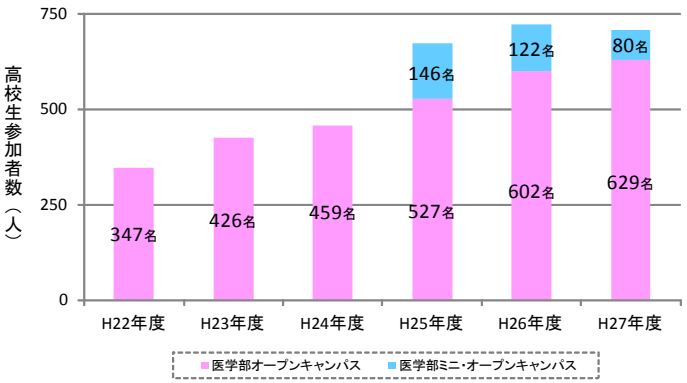


（事務局資料）

資料 1-1-3-6　看護学科高校訪問説明会の実施状況

学生をスチューデントアシスタント(SA)として雇用し，出身高校に帯同する等の工夫により，高校訪問の場での説明会参加者は近年増加し，加えて平成 27 年度は県外高校３校でも説明を行った。

年度	訪問高校数	参加者数				大学側の説明者		
		高校生	高校教諭	保護者	（計）	教員	学生（SA）	（計）
H22年度	福井県内　16校	175名	24名	3名	202名	15名	15名	30名
H23年度	福井県内　14校	180名	25名	4名	209名	11名	8名	19名
H24年度	福井県内　16校	200名	23名	0名	223名	15名	19名	34名
H25年度	福井県内　15校	186名	26名	6名	218名	13名	24名	37名
H26年度	福井県内　15校	215名	22名	1名	238名	12名	22名	34名
H27年度	福井県内　17校	202名	21名	0名	223名	16名	22名	38名
	県外　3校	83名	11名	0名	94名			
（計）		1,241名	152名	14名	1,407名	82名	110名	192名



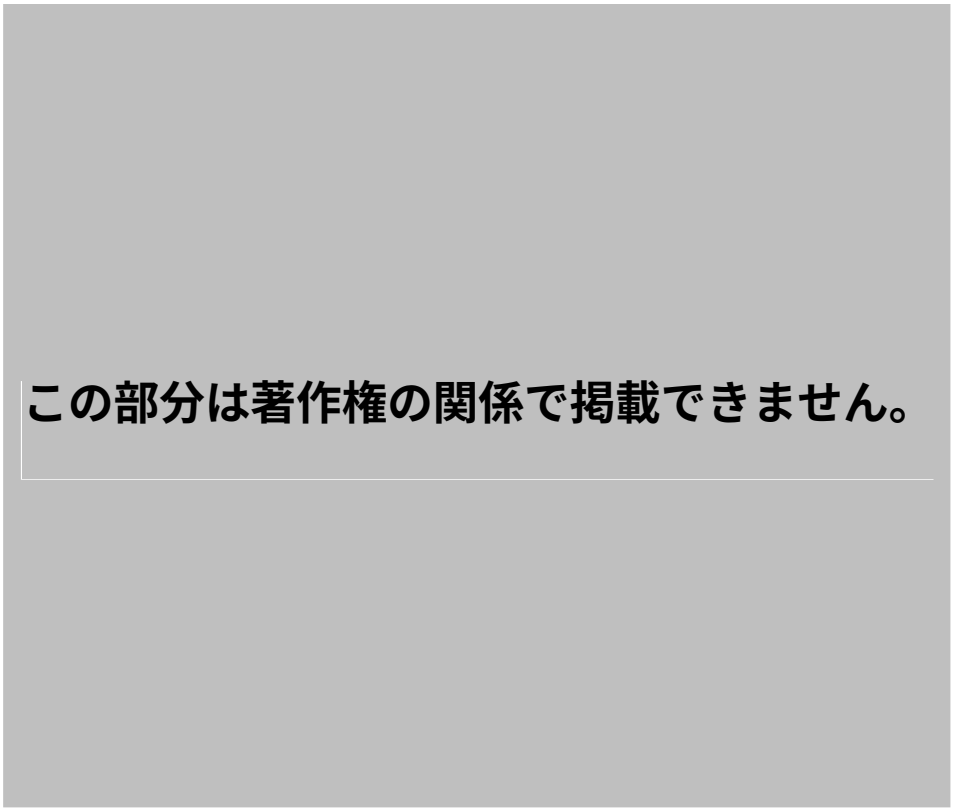
（事務局資料）

資料 1-1-3-7　医学部ミニ・オープンキャンパス

医学部では，従来から行っていた８月のオープンキャンパスに加え，入学後の医学に対する理想と現実のミスマッチを防ぐ目的で，参加者を福井大学志願者に限定せず，広く医学科・看護学科志願者を対象としたミニ・オープンキャンパスを平成 25 年度から実施している。

このオープンキャンパスは，医学部大学祭（10 月）の社会貢献関連企画として学生主導による「医学部体験ツアー」として行っており，医学部の雰囲気をより身近に感じられることからも好評を博している。

■ ミニ・オープンキャンパス　福井新聞記事（H25.10.14）



■ 学生（医学科３年・大学祭実行委員）から県内高校への案内文（一部抜粋）

第 35 回福井大学大学祭（暁祭）「医学部体験ツアー」のご案内

高校生の皆様へ

福井大学では毎年 8 月にオープンキャンパスを開催していますが，今年度は 10 月 11 日(日)の大学祭に合わせ，「医学部体験ツアー」という医学科・看護学科限定のオープンキャンパスを追加開催することと致しました。つまり，今年度 2 回目のオープンキャンパスのご案内です。

皆様は大学受験をどのように考えているでしょうか？多くの方は自分の人生を決めるとても大切な選択だと前向きに捉えているでしょう。しかし，受験への不安があり，そして入学後の勉強にも漠然と不安を感じているのではないかと想像します。我々医学部の学生も，かつてはそんな受験生でした。そこで我々は自身の経験を踏まえ，高校生の皆様により医学科・看護学科を身近に考えて貰えるイベントとして「医学部体験ツアー」を企画しました。

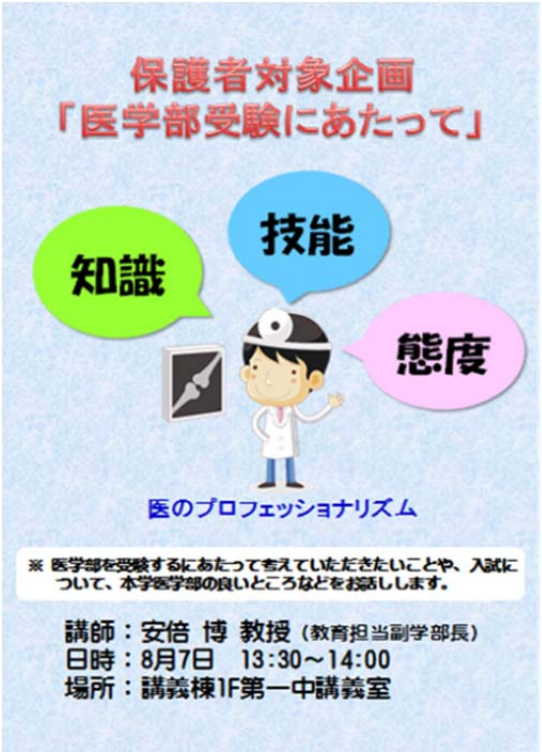
主なプログラムは医学部生から人気の高い先生方による「体験授業」です。これを医学科・看護学科とも 2 コマずつ実施します。その他，「在学生の学生生活紹介」，血圧測定や注射を体験できる「医学展」の見学などの企画も用意しています。

受験情報は数多く出回っていますが，医学・看護学の学びについて踏み込んだものは少なく，自分の適性に合った大学・学科を見つけることはとても大変だと思います。福井大学医学部は，福井大学の受験者に限定せず，医療人を志すすべての高校生に役立ちたいと考えていますので，今回の「医学部体験ツアー」が参加者すべての進路選択の一助となれば幸いです。（以下省略）

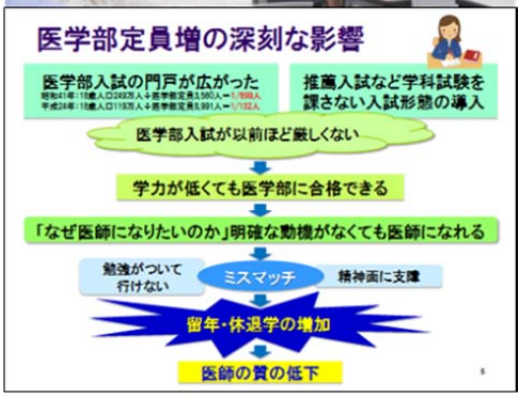
（事務局資料）

資料 1-1-3-8　医学部オープンキャンパスにおける保護者向け説明会

医学部入学者対象アンケートにより，平成 25 年度医学科入学者の約 10%が，家族及び先生に勧められて医師を志望していた。この結果から，志望動機とアドミッション・ポリシーのミスマッチを解消するには，受験者本人だけでなく，受験者に影響を与える周囲の人々が医師・医学部について知る必要があると考え，オープンキャンパスにおいて平成 26 年度より「保護者対象企画」を実施している。





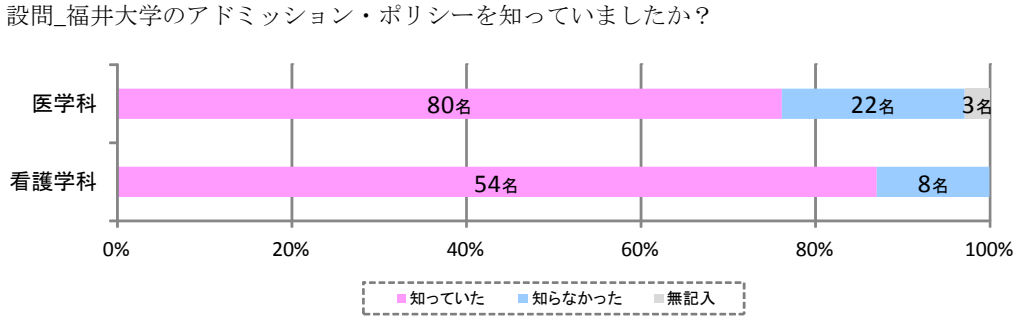


（事務局資料）

③　広報活動により，AP の周知状況は良好である（**資料 1-1-3-9**）。

資料 1-1-3-9　入学者のアドミッション・ポリシー周知状況

新入生へのアンケート調査により，医学科新入生の 76.2%，看護学科新入生の 87.1%が AP を知っていたと回答している。



（平成 27 年度入学生対象アンケート結果より抜粋）

【入学者確保と選抜】

① 入試情報等の積極的な発信により，志願状況は両学科とも良好であり，概ね第１期を上回り，定員充足率も適正である（**資料 1-1-3-10**）。

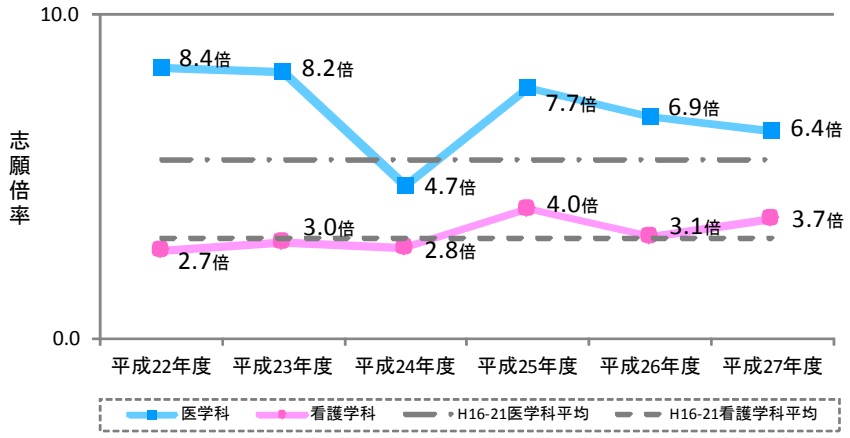
資料 1-1-3-10　医学部入学試験志願状況

入学試験の平均志願倍率は，医学科では前期 5.2 倍（第１期は 3.7 倍）後期 14.8 倍（同 12.3 倍）推薦 4.1 倍（同 3.4 倍），看護学科では前期 2.0 倍（同 2.0 倍）後期 7.7 倍（同 6.4 倍）推薦 2.9 倍（同 2.4 倍）と第１期を上回る状況である。なお定員充足率は医学科 100.0%，看護学科 101.4%と適正である。

■ 志願倍率・定員充足率の推移

実施年度	学科	前期			後期			推薦			（計）			
		志願者数	入学者数	志願倍率	志願者数	入学者数	志願倍率	志願者数	入学者数	志願倍率	志願者数	入学者数	志願倍率	定員充足率
H22年度（H23年度入試）	医学科	373名	55名	6.8倍	442名	25名	17.7倍	104名	30名	3.5倍	919名	110名	8.4倍	100.0%
	看護学科	64名	30名	2.1倍	61名	10名	6.1倍	38名	20名	1.9倍	163名	60名	2.7倍	100.0%
H23年度（H24年度入試）	医学科	425名	55名	7.7倍	384名	25名	15.4倍	98名	30名	3.3倍	907名	110名	8.2倍	100.0%
	看護学科	48名	30名	1.6倍	90名	10名	9.0倍	40名	20名	2.0倍	178名	60名	3.0倍	100.0%
H24年度（H25年度入試）	医学科	151名	55名	2.7倍	239名	25名	9.6倍	127名	30名	4.2倍	517名	110名	4.7倍	100.0%
	看護学科	45名	30名	1.5倍	57名	10名	5.7倍	67名	20名	3.4倍	169名	60名	2.8倍	100.0%
H25年度（H26年度入試）	医学科	316名	55名	5.7倍	408名	25名	16.3倍	126名	30名	4.2倍	850名	110名	7.7倍	100.0%
	看護学科	79名	30名	2.6倍	95名	10名	9.5倍	67名	20名	3.4倍	241名	60名	4.0倍	100.0%
H26年度（H27年度入試）	医学科	218名	55名	4.0倍	389名	25名	15.6倍	147名	30名	4.9倍	754名	110名	6.9倍	100.0%
	看護学科	52名	30名	1.7倍	57名	10名	5.7倍	79名	22名	4.0倍	188名	62名	3.1倍	103.3%
H27年度（H28年度入試）	医学科	218名	55名	4.0倍	351名	25名	14.0倍	138名	30名	4.6倍	707名	110名	6.4倍	100.0%
	看護学科	63名	30名	2.1倍	100名	10名	10.0倍	60名	23名	3.0倍	223名	63名	3.7倍	105.0%
（H22-27平均）	医学科	(283.5名)	(55.0名)	(5.2倍)	(368.8名)	(25.0名)	(14.8倍)	(123.3名)	(30.0名)	(4.1倍)	(775.7名)	(110.0名)	(7.1倍)	100.0%
	看護学科	(58.5名)	(30.0名)	(2.0倍)	(76.7名)	(10.0名)	(7.7倍)	(58.5名)	(20.8名)	(2.9倍)	(193.7名)	(60.8名)	(3.2倍)	101.4%
（H16-21平均）	医学科	(208.5名)	(55.8名)	(3.7倍)	(265.8名)	(21.7名)	(12.3倍)	(74.2名)	(21.7名)	(3.4倍)	(548.5名)	(99.2名)	(5.5倍)	100.0%
	看護学科	(61.0名)	(29.8名)	(2.0倍)	(85.3名)	(13.3名)	(6.4倍)	(40.7名)	(16.8名)	(2.4倍)	(187.0名)	(60.0名)	(3.1倍)	100.0%

志願倍率の推移（平成 22-27 年度実施入試）



（事務局資料）

② 福井県内の地域医療に従事する意志を持つ入学生を募集する医学科入学者選抜（推薦）や奨学金給付制度により，志願者は増加している（**資料 1-1-3-11**）。

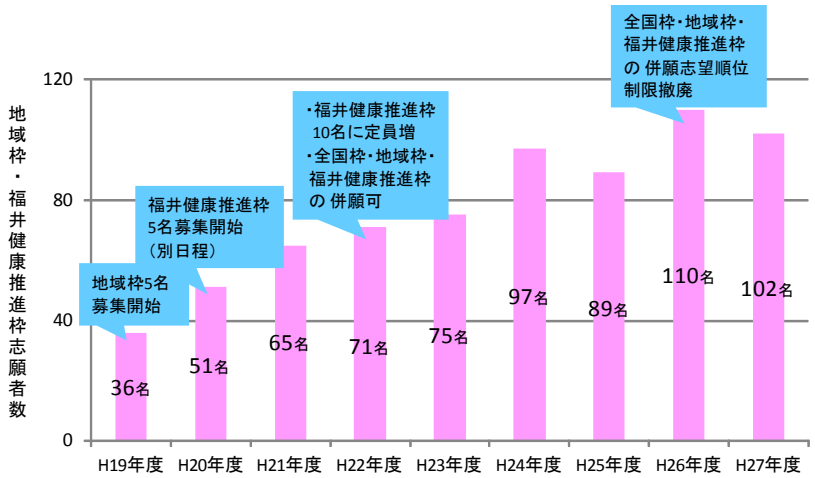
資料 1-1-3-11　地域枠を設けた入学者志願状況（医学科推薦入試Ⅱ）

地域医療に従事する意志を持つ志願者募集として「地域枠」と「福井健康推進枠」による推薦入試を設け，平成22年度より現行定員としている。以降志願者の増加が見られ近年は100名程度となっている。推薦入試においては平成 22 年度入試から個別面接実施（集団面接からの変更），平成 26 年度入試から「全国枠」「地域枠」「福井健康推進枠」の併願志望順位撤廃などの変更を行い（**P4-44 後掲資料 1-1-3-15**），これらも一助となり志願者数増加につながっている。

「福井健康推進枠」で合格した全学生には「福井県医師確保修学資金」，「地域枠」を含む入学者のうち希望するものには「嶺南医療振興財団医学生奨学金」の給付制度がある（**P4-24 前掲資料 1-1-1-23**）。

■ 推薦入試Ⅱ志願者数の推移

	専願			併願				計
	全国枠	地域枠	福井健康推進枠	全国枠／地域枠	全国枠／福井健康推進枠	地域枠／福井健康推進枠	全国枠／地域枠／福井健康推進枠	（うち地域枠／福井健康推進枠関連の受験者）
H22年度（H23.4入学）	33名	2名	5名	2名	12名	10名	40名	104名　（71名）
H23年度（H24.4入学）	23名	0名	8名	4名	19名	11名	33名	98名　（75名）
H24年度（H25.4入学）	30名	0名	12名	6名	14名	11名	54名	127名　（97名）
H25年度（H26.4入学）	37名	0名	12名	4名	13名	24名	36名	126名　（89名）
H26年度（H27.4入学）	37名	1名	16名	8名	18名	15名	52名	147名　（110名）
H27年度（H28.4入学）	36名	2名	15名	7名	15名	15名	48名	138名　（102名）
（計）	196名	5名	68名	31名	91名	86名	263名	740名　（544名）



（事務局資料）

③　医学科・看護学科ともにすべての入試形態において，AP に明示した能力を評価する工夫を行っている（**資料 1-1-3-12～14**）。特に志願者全員に課す面接試験では，専任教員が面接を行い，AP 及び本学医学部の求める学生像に準じた評価票による評価を行っている。

資料 1-1-3-12　医学部入学者選抜方法とその工夫

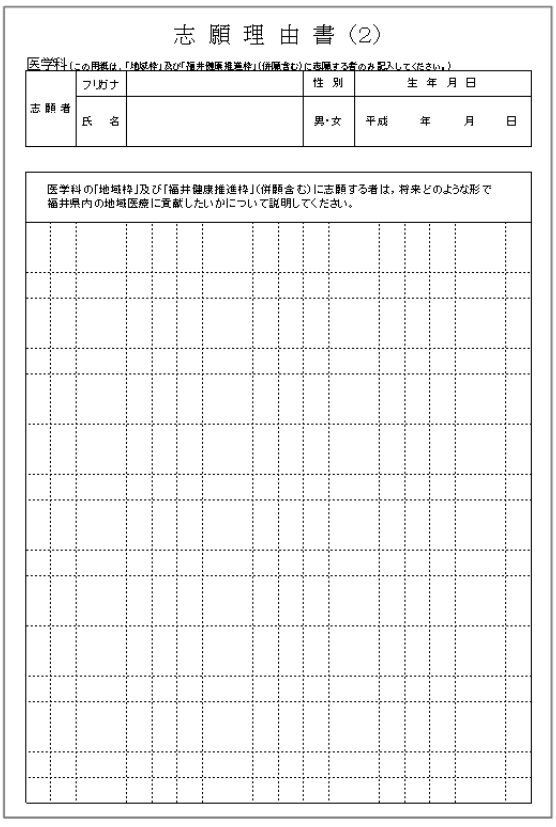
学科	入試区分1	入試区分2	2段階選抜	選抜の方法			参考資料			
医学科	一般入試	前期日程	有	センター試験	個別学力試験	面接	調査書			
		後期日程	有	センター試験	小論文	面接	調査書			
	推薦入試Ⅱ	全国枠	有	センター試験		面接	調査書	推薦書	志願理由書(1)	
		地域枠	有	センター試験		面接	調査書	推薦書	志願理由書(1)	志願理由書(2)
		福井健康推進枠	有	センター試験		面接	調査書	推薦書	志願理由書(1)	志願理由書(2)
	学士編入学		有	個別学力試験	志望理由書	面接	成績証明書			
看護学科	一般入試	前期日程	無	センター試験	小論文	面接	調査書			
		後期日程	無	センター試験	小論文	面接	調査書			
	推薦入試Ⅰ		無		小論文	面接	調査書	推薦書	志願理由書(1)	

両学科とも，全ての試験区分において志願者全員に個別面接を行っており，AP に従った面接評価をするための評価票を使用している。

推薦入試においては，出身高校等からの推薦書に加え，志願者自筆による志願理由書（**資料 1-1-3-13**）を選抜の参考としている。

（事務局資料）

資料 1-1-3-13　志願理由書



志 願 理 由 書（2）

医学科（この用紙は，「地域枠」及び「福井健康推進枠」（併願含む）に志願する者のみ記入してください。）

志願者	フリガナ		性 別	生 年 月 日
	氏 名		男・女	平成　年　月　日

医学科の「地域枠」及び「福井健康推進枠」（併願含む）に志願する者は，将来どのような形で福井県内の地域医療に貢献したいかについて説明してください。

■ 志望理由書（１）

医学科推薦入試Ⅱおよび看護学科推薦入試Ⅰの志願者全員が自筆にて作成提出。志願する学科で学びたい理由，将来，医学・医療や看護に携わる自らの適性について記載する。

■ 志望理由書（２）

医学科推薦入試Ⅱ「地域枠」「福井健康推進枠」に出願するもの全員が自筆にて作成提出。将来どのような形で福井県内の地域医療に貢献したいかについて説明する。

（事務局資料）

資料 1-1-3-14　アドミッション・ポリシーの主要事項と入学者選抜方法の対応

両学科の入学者選抜において，定めたアドミッション・ポリシーに従い，それぞれに応じた選抜を実施している。

【医学科】

① 医師となるにふさわしい豊かな人間性，周囲との協調性，奉仕の精神を持った人
② 医学教育内容を十分理解するために必要な幅広い基礎学力と応用力の富む人
③ 医学・医療を通じて広く社会に貢献しようとする強い情熱と意欲を持った人
④ 先端的生命科学に強い関心をもち医学研究者になることを希望する人
⑤ 医師として地域医療に貢献したい人

入試区分1	入試区分2	アドミッションポリシーの主要事項番号				
		①	②	③	④	⑤
一般入試	前期日程	○	◎	○	○	○
	後期日程	◎	○	○	○	○
推薦入試Ⅱ	全国枠	○	○	◎	○	○
	地域枠	○	○	◎	○	◎
	福井健康推進枠	○	○	○	－	◎
学士編入学		○	◎	○	◎	－

◎…特に重視する項目　○…重視する項目　－…必ずしも重視しない項目

【看護学科】

① 人間存在に関心を持ち，感性が豊かな人
② 人との関わりを通して，相互に成長することができる人
③ 基礎学力がある人
④ 向上心と探究心があり，自律的に行動できる人

入試区分1	入試区分2	アドミッションポリシーの主要事項番号			
		①	②	③	④
一般入試	前期日程	○	○	◎	○
	後期日程	○	○	◎	○
推薦入試Ⅰ		○	○	○	◎

◎…特に重視する項目　○…重視する項目

（事務局資料）

④　入試結果等に基づき，入学者選抜法の改善に努めている（**資料 1-1-3-15**）。特に地域ニーズから，医学科では地域医療を指向する学生を対象とする「福井健康推進枠」を拡大し，看護学科では地域貢献を目指す高度専門職業人育成（卒後教育強化）のため編入学制度廃止（**資料 1-1-3-16**）を行った。

資料 1-1-3-15　医学部入学試験における選抜方法の改善と定員変更

医学科は，学力のみならず，アドミッション・ポリシーにふさわしい学生が入学するよう，平成 25 年度から人物の総合評価（面接）の強化を行った。

(1)　面接委員毎の評価傾向の分析（バラツキの調査）（**P4-48 後掲資料 1-1-3-20**）
(2)　面接委員対象の面接 FD の実施（**P4-47 後掲資料 1-1-3-19**）及び受講者を中心とした面接委員の選定
(3)　すべての面接試験を集団から個別に変更（平成 25 年度の一般（前期）より），および２次面接の導入
(4)　推薦入試の併願志望順位の制限撤廃

看護学科は，面接を中心とした人物評価を強化し，また推薦入試出願要件の緩和や一般入試の選択科目の拡大を行った。

(1)　推薦入試出願要件の「調査書概評」を A（4.3 以上）から 4.0 以上に緩和
(2)　センター試験の選択科目を，拡大し，基礎科目の選択も可能となるよう緩和
(3)　面接委員対象の面接 FD の実施（**P4-47 後掲資料 1-1-3-19**）及び受講者を中心とした面接委員の選定
(4)　アドミッション・ポリシーにふさわしい受験者のいない３年次編入学試験を廃止（**資料 1-1-3-16**）

■　選抜方法の改善

実施年度（入学年度）	医学科	看護学科
平成 22 年度 （平成 23 年度）	**【一般入試（前期，後期）】** ・２段階選抜の第１段階選抜を緩和（点数制限の廃止） ・面接評価の厳格化（著しく低い場合の措置追加） **【推薦入試】** ・「全国枠」「地域枠」「福井健康推進枠」の併願可（志望順位の制限あり） ・面接評価の厳格化（集団から個別面接に変更）	**【一般入試（前期，後期）】** ・面接評価の厳格化（著しく低い場合の措置を追加）
平成 23 年度 （平成 24 年度）	**【一般入試（後期）】** ・小論文課題の厳格化（医学科専用に作成し，英文課題も追加）	**【一般入試（後期）】** ・小論文課題の厳格化（看護学科専用に作成）
平成 24 年度 （平成 25 年度）	**【一般入試（前期）】** ・２段階選抜の第２段階選抜を厳格化「募集人員の７倍」から「５倍」に変更	
平成 25 年度 （平成 26 年度）	**【一般入試，推薦入試】** ・面接委員の評価傾向分析 ・面接 FD の実施 **【一般入試（前期）】** ・面接評価の厳格化（集団から個別面接に変更）	**【一般入試，推薦入試】** ・面接 FD の実施 **【推薦入試】** ・出願要件の緩和（評定平均を A（4.3）以上から 4.0 以上に変更）
平成 26 年度 （平成 27 年度）	**【推薦入試】** ・「全国枠」「地域枠」「福井健康推進枠」併願志望順位の制限撤廃	**【一般入試（前期，後期）】** ・センター試験の選択科目を緩和し，「基礎科目」まで拡大

■　定員変更

実施年度（入学年度）	医学科	看護学科
平成 22 年度 （平成 23 年度）	**【推薦入試】** ・「福井健康推進枠」の募集人員を５名増員（前期の５名を振替え）	
平成 26 年度 （平成 27 年度）		**【３年次編入】** ・試験（募集定員 10 名）を廃止

（事務局資料）

資料 1-1-3-16　地域ニーズ調査による看護学科編入廃止

医学部看護学科では，以下の動向・調査・要望から，更なる高度な看護実践能力を有する人材育成が急務であると判断し，看護学科・大学院の将来を見据えた構想を策定したことに伴い，看護学科の３年次編入学制度を平成 27 年度から廃止した。

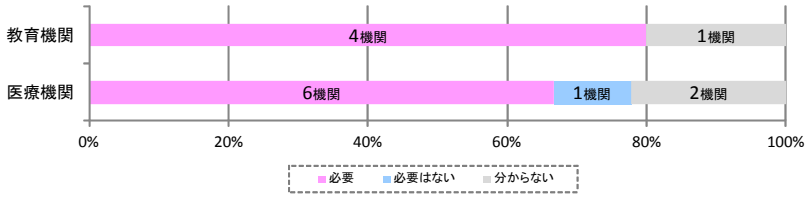
■ 世界および日本国内における看護教育の動向と地域社会からのニーズ

・看護基礎教育の世界および日本の動向として，職業教育から専門職教育へとシフトしている。また，卒後教育におけるスペシャリスト教育が急速に進んでいる。
・保健医療福祉のニーズとサービスのグローバル化が進んでいる。
・看護の専門分化が進んでいる。例えば，卒後継続教育を通して，認定看護師・臨床指導者・看護管理者・看護教育者の教育，大学院教育を通して，専門看護師・Nurse Practitioner（特定領域の高度実践看護師，臨床医と看護師の中間職）の教育が増加している。
・福井県においては，進行する少子高齢化・過疎化に対して，地域住民の健康ニーズが高まっており，地域医療の向上と専門的な教育課程による人材育成が期待されている。
・本学は，原子力発電所の約３割が集中する福井県に設置されているため，平成 26 年度に被ばく医療に強い災害看護専門看護師教育課程を開設した。県内外からの入学希望が多く，大学院生の半数以上を占めている。
・本学大学院医学系研究科附属地域医療高度化教育研究センターでは，平成 23 年度に看護キャリアアップセンターを設置し，慢性呼吸器疾患看護課程を開設，平成 26 年度に手術看護認定看護師課程を開設した。全国から継続教育を求めて定員を大幅に上回る入学希望がある。

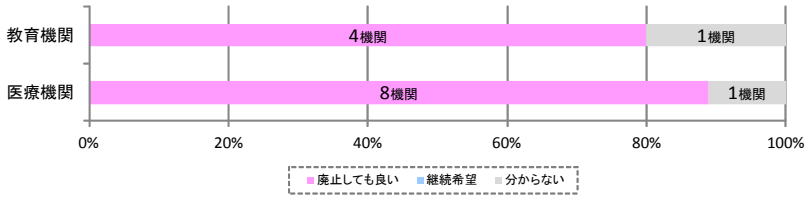
■ 地域社会のニーズ調査（福井県内の教育機関・医療機関）

平成 25 年度に，福井県内の医療に関係する教育機関・医療機関へアンケート調査を行い，本学における編入制度の見直し・廃止を過半の機関が認め，かつ大学院・認定看護師課程・専門看護師課程による継続教育を望むことが判明した（これらの要望には医学部附属地域医療高度化教育研究センター等が対応している）。

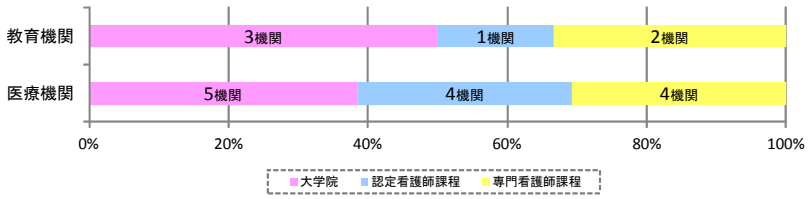
設問_編入学制度の見直しについてどのようにお考えですか



設問_編入学制度の今後の方向性についてどのようにお考えですか



設問_編入学制度が廃止された場合，どのような継続教育の方向性を選びますか（複数回答可）



（平成 26 年度看護基礎教育の充実に向けた県内アンケート結果より抜粋）

⑤　入学生は，その能力が第 1 期より向上し，教員から AP に即した学生であると評価された（**資料 1-1-3-17～18**）。

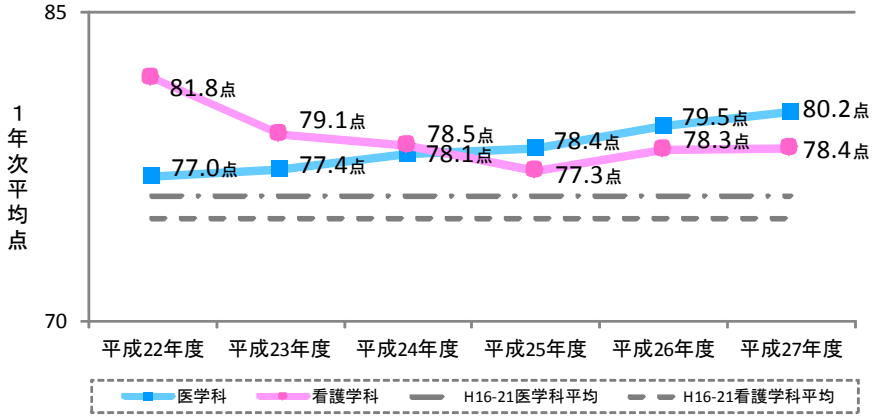
資料 1-1-3-17　適切な入学者の獲得（成績分析）

■ **学年別平均点の推移（入学年度別）**

平成 22 年度（第２期）以降の入学者の１年次平均点を，平成 16～21 年度（第１期）学生（留年・休学がなく，かつ医師・看護師国家試験を初回受験で合格したもの）の１年次平均点と比較すると常に上回っており，第２期中の入学者選抜は，十分な基礎学力を有する学生を選抜していると評価できる。

必修科目　※1	医学科				看護学科			
	1年次	2年次	3年次	4年次	1年次	2年次	3年次	4年次
H16-21年度入学者平均　※2、※3	76.1	73.5	76.7	78.8	75.0	77.9	80.9	85.1
H22年度入学者　※3	77.0	70.5	77.8	77.4	81.8	79.6	80.7	84.1
H23年度入学者　※3	77.4	71.4	76.1	77.7	79.1	77.4	79.7	82.5
H24年度入学者　※3	78.1	73.8	77.4	77.8	78.5	75.9	79.1	79.5
H25年度入学者　※3	78.4	72.7	75.4	―	77.3	78.8	79.0	―
H26年度入学者　※3	79.5	73.7	―	―	78.3	77.1	―	―
H27年度入学者　※3	80.2	―	―	―	78.4	78.3	―	―

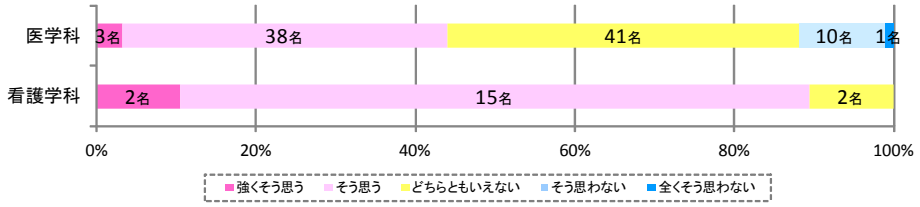
※1 点数評価している科目のみ
※2 留年・休学がなく，かつ医師（看護師）国家試験を初回受験で合格した学生のみ
※3 編入学者（医…２年後期，看護…３年次前期）を除く



（事務局資料）

資料 1-1-3-18　適切な入学者の獲得（教員の評価）

設問_学部の入学生はアドミッション・ポリシーに明記された“求める能力，資質を有している”あるいは，“アドミッション・ポリシーにおいて求める学生像に適している”と思われますか？



（平成 26 年度教員による医学教育についてのアンケート調査結果より抜粋）

⑥　教員の入試面接における能力向上のための FD（**資料 1-1-3-19**）や各教員の面接点分布等の情報フィードバック（**資料 1-1-3-20**）により，厳正かつ適切な面接が可能になるよう努めている。

資料 1-1-3-19　入試面接 FD

■ **入試面接員面接力養成セミナー・ポスター**





※ 講演内容を録画し，新しく面接を担当する教員にも情報提供している。

■ **実施後アンケートによる参加教員の声（抜粋）**

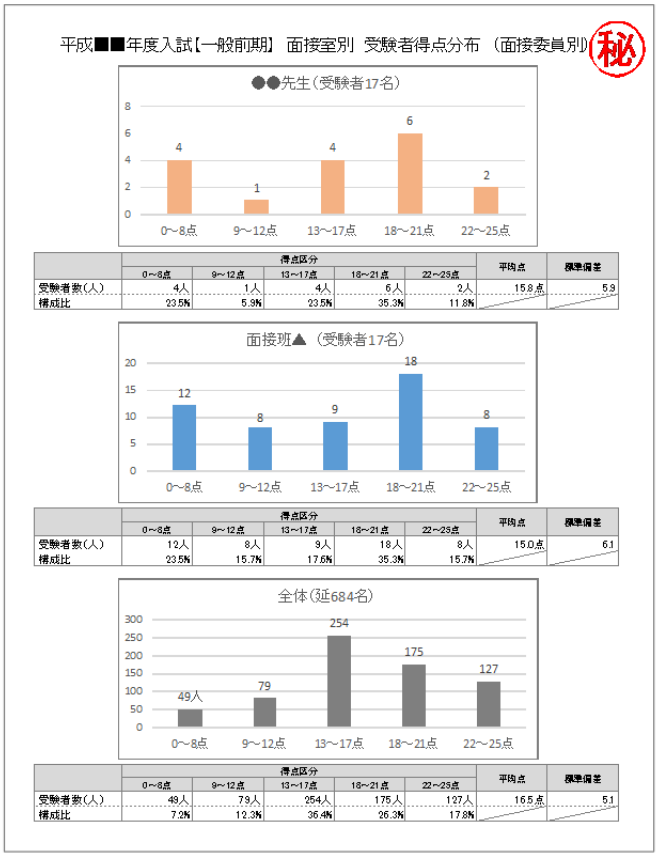
・面接員が学生の能力・人間性を引き出すための配慮（聞き方，雰囲気）を大切にしなければならないと改めて思いました。その点は注意していたつもりですが，どこかで「あなたの力でアピールしてみなさい」と突き放した立場も持っていたようにも感じました。話やすい雰囲気で引き出す，インタビューするというスタンスを大切にしたいと思います。
・面接は「営業」，質問ではなく「インタビュー」という考えはなかったので，大変おもしろいと思った。人物評価をするのだから終始ハードでも良いと思っていたが，今日の話を聞いたので，今後は良い面接ができると思う。
・面接は人と人とのコミュニケーションであり，それがスムーズにできるようにする事が大切であることがわかった。患者さんとの接し方にも使える知識であり，聞いて反省する点もありました。
・中央化傾向の解消法は興味深かった。
・面接の質問は，事前に考えることが必要であることをよく理解した。
・面接において，非言語情報の占める割合は大きく，面接官側の笑顔だけで雰囲気が大きく変わることが実感できた。非言語情報をうまく使うことによって，言語情報を得ることができるということが分かった。

（事務局資料）

資料 1-1-3-20　過去の面接情報のフィードバック

面接委員を担当する教員に対し，毎年学内の入試面接説明会を行うとともに，教員毎に過去の面接採点情報（個人別，面接班別，全体）の提供を行っている。同じ面接班であった他の面接委員，および全体の評価傾向を参考にし，振り返ることで適正な評価や面接技術の向上に繋げている。

■ 面接委員への結果報告（サンプル）



（事務局資料）

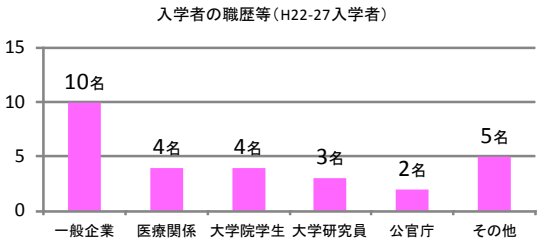
【社会人・留学生の入学促進】

医学科学士編入学制度（定員５名）への入学志願者倍率は非常に高く，多様な背景を持つ学生が入学している（**資料 1-1-3-21**）。

資料 1-1-3-21　医学科学士編入学入試状況

学士編入の志願倍率は常に 30 倍以上と高く，わずかながら第１期より志願者数は多い。学士編入による入学者は一般企業を中心に医療関係企業出身者や大学院学生など多様である。

	志願者数	入学者数	志願倍率
平成22年度（平成22.10月入学）	173名	5名	34.6名
平成23年度（平成23.10月入学）	221名	4名	55.3名
平成24年度（平成24.10月入学）	224名	5名	44.8名
平成25年度（平成25.10月入学）	172名	5名	34.4名
平成26年度（平成26.10月入学）	179名	4名	44.8名
平成27年度（平成27.10月入学）	186名	5名	37.2名
平成22-27年度平均　(A)	192.5名	4.7名	38.5名
平成16-21年度平均　(B)	188.0名	4.8名	37.6名
増減　(A)-(B)	＋4.5名	－0.2名	＋0.9名



（事務局資料）

●教員の教育力向上や職員の専門性向上のための体制の整備とその効果

【FD・教員評価】

①　医学部教育支援センターを中心としてFD講演会を実施し，延べ1,212名の教員参加と高い効果を現し，教員は授業改善等に努めている（**資料1-1-4-1，3**）。加えて「学生による授業評価アンケート」評価上位教員による公開授業にも多くの教員が参加した（**資料1-1-4-2**）。

資料1-1-4-1　医学部FD講演会等の活動一覧

年度	内容	実施日	参加人数
平成22年度	医学部テューター養成ワークショップ	H22.4.14	27名
	授業評価アンケート上位教員による「公開授業」　※	前・後期	18名
	学生相談から見える課題	H22.8.19	21名
	ココロに響く♪♪プレゼンテーション技法	H23.1.26	42名
	ＰＢＬ教育ワークショップ（福井－ハワイ）	H22.10.2-3	50名
	兵庫医科大学における医学教育の現状	H23.1.28	35名
	（計）		(193名)
平成23年度	医学部テューター養成ワークショップ	H23.4.13	25名
	授業評価アンケート上位教員による「公開授業」　※	前・後期	29名
	学生理解と関わり方の技術向上にむけて	H23.9.21	29名
	医学教育の国際基準	H23.10.13	45名
	こころの問題を抱える学生への支援　－発達障害と自殺関連行動を中心に－	H24.2.2	27名
	東日本大震災の災害救護	H23.7.4	84名
	（計）		(239名)
平成24年度	医学部テューター養成ワークショップ	H24.4.11	31名
	授業評価アンケート上位教員による「公開授業」　※	前・後期	29名
	学生支援とカウンセリング的かかわり　～カウンセリングとの接点を手がかりに考える～	H24.9.5	26名
	医学教育の質保証と国際認証　～求められる臨床実習の充実～	H24.10.4	39名
	大学生のためのスタディ・スキル教育　～『知へのステップ』の活用～	H25.1.31	24名
	滋賀医科大学における医学教育	H25.3.15	39名
	（計）		(188名)
平成25年度	医学部テューター養成ワークショップ	H25.4.10	31名
	授業評価アンケート上位教員による「公開授業」　※	前・後期	18名
	入学試験面接委員セミナー	H25.10.9	74名
	医学教育認証評価に向けた東京医科大学のカリキュラム改編の現状と課題	H25.11.28	46名
	看護界初　ＰＮＳの誕生と特徴　－パートナーシップ・マインドー	H25.12.13	23名
	青年期の心のクライシス	H26.1.17	35名
	臨床と教育の連携　－看護臨床教育センターの取り組みー	H26.2.7	17名
	（計）		(244名)
平成26年度	医学部テューター養成ワークショップ	H26.4.9	27名
	授業評価アンケート上位教員による「公開授業」　※	前・後期	20名
	変化を恐れず，変化の最先端に立つ！　～組織の壁を乗り越えて，連携するために～	H26.9.30	34名
	発達障害の特性と理解、そして支援　－大学での取り組みに学ぶー	H26.12.19	28名
	ライフサイエンスイノベーション推進機構セミナー（ヒーリングタッチと看護について）	H27.2.2	24名
	医学部国際認証問題　－福井大学の対応は？－	H27.3.20	36名
	（計）		(169名)
平成27年度	医学部テューター養成ワークショップ	H27.4.8	34名
	授業評価アンケート上位教員による「公開授業」　※	前・後期	30名
	学習支援システム説明会	H27.7.10	47名
	教育システム活用セミナー	H27.9.25	37名
	専門領域を超えて専門領域を深める －育ちあい、響きあう学習環境を目指して－	H28.3.8	31名
	（計）		(179名)
平成22-27年度　計			1,212名
うち、「公開授業」計　…※			144名

平成22年度には福井大学「競争的配分経費（**教育評価に基づく競争的経費**）」として「医学部教育の国際化に向けた基盤的FD活動の推進」に配分を受けFD体制の構築を行い，以降のFD活動の運営が円滑になされている。

医学部教育支援センターを中心に，FD活動について年間計画のもと，全教員参加を目指した取組を平成28年度より行うこととしている。

（事務局資料）

資料 1-1-4-2　「学生による授業アンケート」評価上位教員による公開授業（一部抜粋）

■ 平成 27 年度「公開授業」ポスター

2015. 9. 8

公開授業

「学生による授業評価アンケート」(平成26年度)評価上位教員による 公開授業 について

既記のことについて、ご協力いただける授業の公開は下記のとおりです。是非、多数の先生方の参観をお待ちしております。参観ご希望の方は、学務室までご連絡お申し込みください。
（※学生の通常授業の参観となりますので、教室の関係上人数に制限があります。また、複製の準備もありますので、必ず事前に学務室までご連絡ください。）

	教員名	授業科目・講義室	日程	コメント
共通系	安倍　博 (行動基礎科学)	①心理行動科学入門 （第1中講義室） ②人の行動と心理 （第1中講義室） ③心理学 （看護第1講義室）	①6月9日（火） 2限目	医学科1年対象 ①「ストレス学説とストレス緩和法、患者のストレス」 　指定日以外でもOK（前期毎週火曜2限） ②「学習の脳内メカニズム・記憶と忘却」 　指定日以外でもOK（前期毎週水曜2限） 看護学科1年対象 ③「動機と感動」 　指定日以外でもOK（前期毎週火曜2限） ★「医のプロフェッショナリズム」教育の一環として、「共感」をテーマに「患者の気持ちを理解する」ことの意味を、脳科学を含めた「行動科学」として科学的に理解させるように志しています。
	山次　俊介 (運動・ スポーツ医学)	①～③健康・スポーツ科学 （看護第1講義室）	①11月5日（木） 2限目	看護学科1年対象 ①「我が国の健康問題」 ②「世界に広がる肥満」 ③「正しいダイエット方法」
基礎系	黒田　一樹 (組織細胞形態学・ 神経科学)	①②組織・各種器の構成、機能と位置関係 （第2中講義室）	①5月11日（月） 4．5限目	医学科2年対象 ①4限目「軟骨・骨組織」 ①5限目「筋組織」 ②「内分泌組織」
	小林　基弘 (種痘病理学)	①②消化器系 （第3中講義室）	①11月10日（火） 3限目	医学科3年対象 ①「食道疾患・胃疾患」 ★小学生にも理解できるように噛み砕いて説明する。重要な点は何度も繰り返す。
	謝　敏珏 (組織細胞形態学・ 神経科学)	①②組織・各種器の構成、機能と位置関係 （第2中講義室）	①6月15日（月） 4．5限目	医学科2年対象 4限目「腺・口腔の組織・機能」 5限目「食道・胃の組織・機能」
	定　清直 (ゲノム科学・ 衛生物学)	①生命基礎科学（生命科学） （多目的講義室） ②生体と微生物 （第2中講義室） ③免疫と生体防御 （第2中講義室）	①7月7日（火） 2限目	看護学科1年対象 ①専門基礎科目「生体反応論Ⅰ」に入る前に、高校で習った基礎知識のオーバービューを行います。オリジナルワークブックの理論に答え、体を動かすなど、アクティブラーニングを試験的に取り入れています。 医学科2年対象 ②「細胞学の基礎」 ③「自然免疫の概要」 ★私の声は小さいうえに単調なので聞いと評判ですので、学生を顕著に当てています。専門的内容ですので、寝ている学生は起こします。
	竹内　徳司 (ゲノム科学・ 衛生物学)	①生体反応論Ⅰ （看護第1講義室）	①11月19日（木） 3限目	看護学科1年対象 ①「細胞の構造」「細胞学実習の準備」 ②「ワクチンで予防できる病気」 ★勉強してもらいたい所をかなり絞って残学した「ワークブック」を配布し、予習・教習・試験前勉強のためのガイドにしています。「教科書」は辞典的に使うことになります。講義時間の多くをワークブックで残学した理論の解説に当てています。主に板書ですが、パワーポイントを使う日もあります。また、実習をしてもらうことによって座学の退屈さを紛らわせてもいます。
	成田　和巳 (統合生理学)	①②形態機能論Ⅱ （看護第1講義室）	①11月27日（金） 1．2限目	看護学科1年対象 ①「消化・吸収の生理学」
	村田　拓也 (統合生理学)	①②形態機能論Ⅱ （看護第1講義室）	①12月18日（金） 1．2限目	看護学科1年対象 ①1限目「ホルモンの定義・受容体」 ①2限目「視床下部・下垂体」
臨床系	岩野　正之 (腎臓病態内科学)	①症候、病態からのアプローチ （合併講義室）	①11月10日（火） 1限目	医学科4年対象 ①　症候、病態10「蛋白尿・血尿・尿量異常の病態とアップデートな診断を解説」
	大嶋　勇成 (小児科学)	①②免疫・アレルギー疾患 （合併講義室）	①10月1日（木） 2限目	医学科4年対象 ①「免疫不全症総論・原発性免疫不全症」 ②「小児膠原病・血管炎」
	折坂　誠 (産科婦人科)	①女性生殖機能・乳房 （第3中講義室）	①1月13日（水） 2．3．4限目	医学科4年対象 1限目「排卵障害と月経異常」 2限目「不妊と避妊」 3限目「生殖腺の分化と発達・子宮内膜症」
	木村　秀樹 (検査部)	①需要内科 （第3中講義室）	①11月12日（木） 1．2限目	医学科3年対象 ①1限目「ネフローゼ症候群」 ①2限目「糖尿病性腎症の現状・診療診断・病理診断・治療」 ★臨床所見、技法と病理組織の対応を具体的に説明する。病理組織が多いため、できるだけ見やすいスライドとプリントを準備する。
	五井　孝憲 (外科学(1))	①②消化器系 (第3中講義室)	①11月11日（水） 1．2限目	医学科3年対象 ①1限目「腸閉塞、小腸腫瘍」 ①2限目「大腸、虫垂、直門の良性疾患」 ②「大腸癌」 ★実際に手術に使用していた器械を手にしてもらったり、ビデオで手術手技を見てもらい、興味を引くように行う。
	此下　忠志 (内科学(3))	①実践臨床病態学 （臨床大講義室）	①7月21日（火） 3限目	医学科6年対象 ①「糖尿病性腎症」
	鈴木　仁弥 (内科学(3))	①加齢と老化 （合併講義室） ②症候、病態からのアプローチ （合併講義室） ③内分泌・栄養・代謝系 （第3中講義室）	①10月22日（木） 4限目	医学科4年対象 ①「高齢者に認められる内分泌代謝異常」 ②症候、病態7「肥満、やせ、動悸、月経異常」 医学科3年対象 ③「肥満症」 ★臨床症が多いので、ポイントを絞って説明する。
	濱野　忠則 (内科学(2))	①神経系 （合併講義室） ②症候、病態からのアプローチ （合併講義室） ③人体解剖学2 （第2中講義室）	①5月1日（金） 3限目	医学科4年対象 ①「神経内科、アルツハイマー病の最新知見について概説」 ②「頭痛、めまい、意識障害、麻痺の成因について概説」 医学科2年対象 ③「臨床神経学の面から神経解剖学について概説」 ★曖昧な点をできるだけ少なくする。
	廣野　靖夫 (外科学(1))	①実践臨床病態学 （臨床大講義室） ②消化器系 （第3中講義室）	①5月21日（木） 3限目	医学科6年対象 ①「食道癌」 医学科3年対象 ②「食道癌」

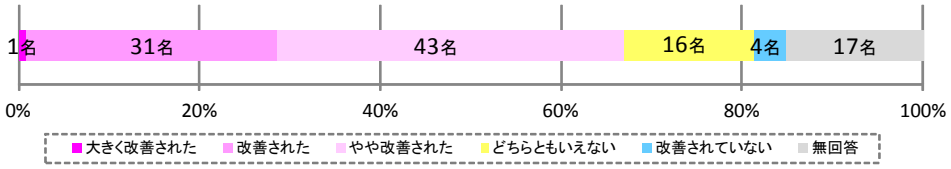
公開授業は前年度「学生による授業評価アンケート」結果が上位の教員を中心に，授業公開に許諾を得た教員の授業（３回程度）を参観できる制度であり，新任教員を中心に FD 活動の一環として実施されている。公開授業担当教員は，公開する授業の日程内容とともに授業実施のポイントを挙げ，参観教員の参考となるよう工夫している。

（事務局資料）

資料 1-1-4-3　FD 講演会の評価

■ FD に対する教員の評価（平成 26 年度教員による医学教育についてのアンケート調査）

設問_本学では，教授方法の改善に取り組む全学・全学部的な活動（FD 活動）をこれまで行ってきました。そこで，以下の事項につきまして，回答願います。
これまで参加した FD 活動によって，自らの教授方法は改善されましたか？



■「公開授業」

学生による授業評価アンケートを行い，その結果，高評価であった教員を「優秀教員」として年間を通して「公開授業」を実施している。共通系，基礎系，臨床系，看護学科それぞれの分野で選出された「優秀教員」の授業に参加することが可能である。この教員による授業参観の取組により，優秀教員の優れた教育スキルを教員間で共有することができている。新任教員には「公開授業」による FD 参加を積極的に呼びかけている。

参加教員の感想（抜粋）

・話すスピードや大きさが適度で聞き取りやすく，聞きながらでも理解しやすい。また，初学者の学生には分かり難いことやイメージしにくいことでも，身近な例を挙げながら説明していくこと。最も基本的なことだが，聴講を通して重要性を改めて実感できた。
・発問しながら学生の近くまで足を運ぶこと。学生は少々緊張感を持ちながらも，授業を単に受け身ではなく参加している意識を持つことができるのではないかと考える。
・今回は，学生の発表が主な内容であったが，ディベートする学生に対し，全員で評価をするという点が，学生が授業に主体的に全員参加することに繋がっていた。一方的に話を聞くだけでなく，テーマも学生自身が決めているため，学生にとっては興味を引く内容となっていたことも講義を面白くしていた要因であったと思われる。学生が講義に参加できる方法を用いることが講義方法として重要であると感じる内容であった。

1）講義の進行法について参考となった点
・本日の学習目標を学生にしっかり説明していた点
・学生が講義内容とケアの必要性についてイメージしやすいよう，学生の普段の生活や今までの実習での体験を学生に話してもらいながら授業を進めていた点
・学生の集中力を継続させるために，単調に一方的に講義するのではなく，学生に発言させたり，教科書を確認させたりするなどの行動をさせていた点
・常に，学生の間をラウンドしながら授業を進めていた点

2）授業資料について参考となった点
・対応する教科書のページを項目ごとに記載していた点
・国家試験問題を合間に入れていた点
・文章だけでなく，表や図での説明もあり理解しやすくされていた点

（事務局資料）

② 医学教育学会を始めとする教育関連学会等に教職員を派遣し，常に最新の情報収集と情報の共有化を図りFDに反映させている（**資料 1-1-4-4**）。

資料 1-1-4-4　教員・職員を派遣した教育関連学会等

職員が参加し収集した情報は教育支援センター定例会議での報告や資料回覧等により共有化を図るとともに，専門的な内容については学外講師を依頼し，FD講演会等を開催することで，多くの教職員への情報発信を行っている。

年度	目 的	派遣者数				
		教員			職員等	（計）
		教授	准教授	講師・助教等		
H22年度	第48回全国大学保健管理協会東海・北陸地方部会研究集会				1名	1名
	共用試験医学系OSCE実施に関する説明会				1名	1名
	学士課程における看護学教育の卒業時到達目標改訂版の展開	1名				1名
	（計）	（1名）	（0名）	（0名）	（2名）	（3名）
H23年度	第2回心理職自殺予防研修			1名		1名
	第49回全国大学保健管理協会東海・北陸地方部会研究集会			1名		1名
	第23回医学教育指導者フォーラム・平成23年度医学歯学教育者のためのワークショップ	1名				1名
	教員の教育力、実践力、研究力、協働力を組織的に高める		1名			1名
	医学系OSCE医療面接模擬患者標準化に関するワークショップ				1名	1名
	第49回全国大学保健管理研究集会			1名		1名
	第35回北陸地区保健管理担当職研究会				1名	1名
	共用試験医学系CBT問題作成に関する説明会	1名				1名
	（計）	（2名）	（1名）	（3名）	（2名）	（8名）
H24年度	平成24年度共用試験医学系CBT全国説明会		1名			1名
	第24回医学教育指導者フォーラム　平成24年度医学私学教育指導者のためのワークショップ	1名				1名
	第44回日本医学教育学会	2名			1名	3名
	国際的な教育評価に向けた海外先進大学及び医療施設の視察	2名		2名	1名	5名
	共用試験医学系OSCE実施に関する説明会				1名	1名
	第50回全国大学保健管理研究集会			1名		1名
	看護実践と教育の有機的連携に向けた看護系大学の取り組み —教育機能に焦点をあてて—		1名			1名
	第36回北陸地区保健管理担当職研究会				1名	1名
	平成24年度文部科学省大学改革推進事業（基礎・臨床を両輪とした医学教育改革によるグローバルな医師養成）公開シンポジウム	1名				1名
	国際基準に対応した医学教育認証制度の確立シンポジウム	3名			2名	5名
	共用試験医学系CBT問題作成に関する説明会	1名			1名	2名
	（計）	（10名）	（2名）	（3名）	（7名）	（22名）
H25年度	日本心理研修センター2013年度夏季研修			1名		1名
	第40回全国大学保健管理協会東海・北陸地方部会保健管理担当職研究会				1名	1名
	第45回日本医学教育学会		1名	2名	2名	5名
	共用試験医学系OSCE実施に関する説明会				1名	1名
	日英共同開発「考え込み防止」認知行動療法による折れない心を育てるWeb研修サービス			1名		1名
	【続】看護実践と教育の有機的連携に向けた看護系大学の取組			1名		1名
	国際基準に対応した医学教育認証制度の確立シンポジウム		1名	1名	2名	4名
	共用試験医学系CBT問題作成に関する説明会	1名			1名	2名
	（計）	（1名）	（2名）	（6名）	（7名）	（16名）
H26年度	第26回医学教育指導者フォーラム・平成26年度医学歯学教育者のためのワークショップ	1名				1名
	第46回日本医学教育学会	1名	1名		2名	4名
	第52回全国大学保健管理協会東海・北陸地方部会研究集会および第41回全国大学保健管理協会東海・北陸地方部会保健管理担当職研究会				1名	1名
	第52回全国大学保健管理研究集会			1名		1名
	第34回国内医科大学視察と討論の会	1名				1名
	共用試験医学系OSCE実施に関する説明会				2名	2名
	第54回医学教育セミナーとワークショップ	1名				1名
	看護系大学教員の職能開発とキャリア支援 ～FDマザーマップの活用を通して～	1名				1名
	平成26年度日本臨床心理士会定例研修会Ⅰ（第1回自死予防専門研修会）			1名		1名
	第3回全国シンポジウム「日本の国情・2次医療圏の実情を考慮して、理想的医師・医療者育成教育の展開を考える2014」	1名				1名
	第38回北陸地区保健管理担当職研究会				1名	1名
	平成26年度文部科学省大学改革推進事業（基礎・臨床を両輪とした医学教育改革によるグローバルな医師養成）公開シンポジウム	1名				1名
	国際基準に対応した医学教育認証制度の確立シンポジウム	2名			1名	3名
	共用試験医学系CBT問題作成に関する説明会	1名			2名	3名
	（計）	（10名）	（1名）	（2名）	（9名）	（22名）
H27年度	第27回医学教育指導者フォーラム	1名				1名
	第47回日本医学教育学会	2名		4名	2名	8名
	共用試験医学系OSCE実施に関する説明会				1名	1名
	10年後を見据えた看護学教育の質改善の取組　～隣地実習の質保障に焦点をあてて～		1名			1名
	第39回北陸地区保健管理担当職研究会				1名	1名
	平成27年度文部科学省大学改革推進事業（基礎・臨床を両輪とした医学教育改革によるグローバルな医師養成）公開シンポジウム	5名	2名		2名	9名
	障害学生支援カンファレンス北陸			1名		1名
	共用試験医学系CBT問題作成に関する説明会	1名			1名	2名
	（計）	（9名）	（3名）	（5名）	（7名）	（24名）

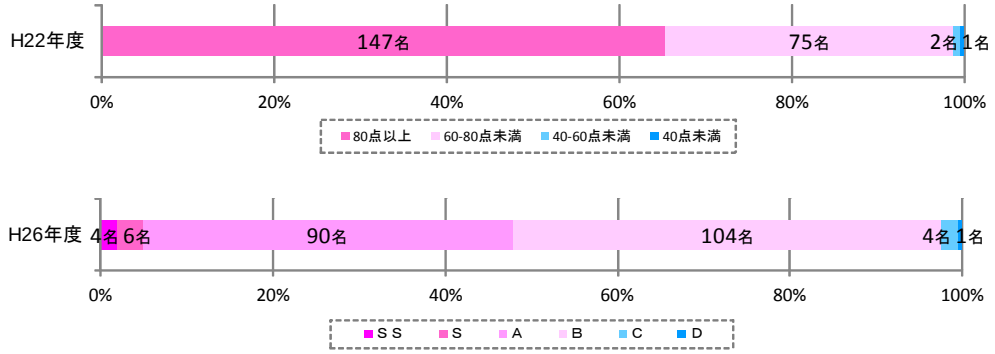
（事務局資料）

③　教員評価として全学的教員評価を評価委員会，医学部の教員評価を医学部評価委員会において各教員の自己評価をもとに医学部長及び学長が行い，平成 26 年度評価では医学部教員の教育活動に関しては平均 3.766（５点満点）の高い評価となっている（**資料 1-1-4-5**）。教員評価は人事評価にも活用され，昇給あるいは号給の調整など教員の処遇に反映した。

資料 1-1-4-5　教員個人評価

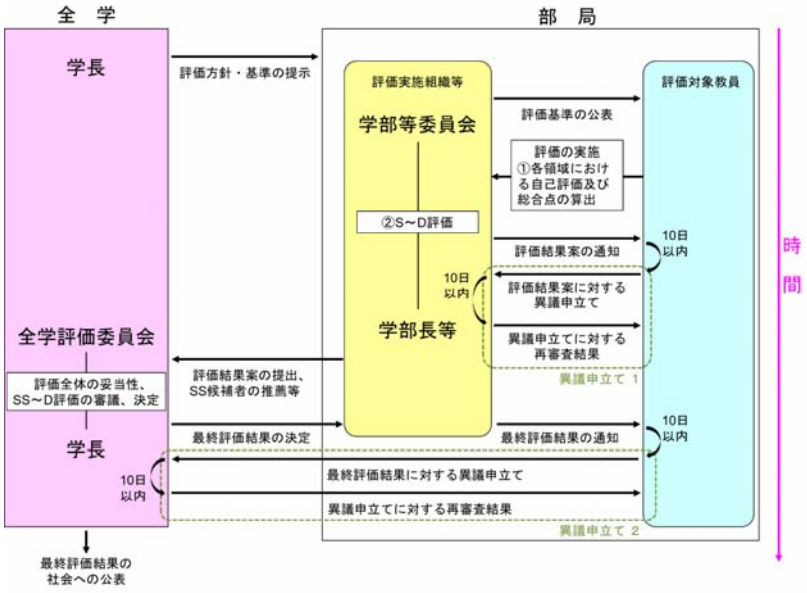
平成 22 年度及び平成 26 年度に全教員の個人評価を実施した。平成 22 年度に実施した医学部教員の教育における評価結果は，98.7%の教員が 60 点以上であり，平成 26 年度の評価結果は 97.6%の教員が SS～B 評価（平均 3.776；５点満点）とほとんどの教員が高い評価を得ている。

■ 医学部教員個人評価（教育）の実施結果



■ 福井大学教員個人評価の実施状況

国立大学改革プラン等に対応するため，平成 26 年度に，規定の改正など，従来の教員個人評価を全面的に改正した。このため，平成 26 年度実施分については，前４年間を対象とした。また，学長は，中期目標達成への大きな貢献や卓越した教育研究等をなした教員を「SS」および「S」として高く評価し，該当する者の合計数は，評価対象者の５％を超えないものとして実施，特に，「SS」と評価された教員の氏名を理由とともに公表し，評価の透明性確保にも努めている。他方，活動状況に問題があり改善を要する者は「D」と評価することとした。



（事務局資料）

④　「学生による授業評価アンケート」評価上位教員や Best Teacher Award 及び全学における「優れた教育成果を挙げた者に対する表彰」等の優秀教員評価制度により教員の意欲向上に努めている（**資料 1-1-4-6**）。

資料 1-1-4-6　「学生による授業評価アンケート」による教員評価

■ 福井大学医学部「学生による授業評価アンケート」評価上位教員数および Best Teacher Award（BTA）受賞者数

選考対象（規定数）		H22年度	H23年度	H24年度	H25年度	H26年度	H27年度	H22-27年度計		
								延教員数	（実教員数）	（うちBTA ※）
医学科	共通教育　（約2-3名/年 ※）	3名	3名	3名	2名	2名	2名	15名	（4名）	（3名）
	基礎医学　（約5名/年）	5名	5名	5名	5名	5名	5名	30名	（16名）	（3名）
	臨床医学　（約15名/年）	16名	15名	15名	15名	15名	15名	91名	（50名）	（8名）
看護学科　（約 5名/年）		7名	5名	5名	5名	5名	5名	32名	（15名）	（3名）
計		31名	28名	28名	27名	27名	27名	168名	（85名）	（17名）

※ 共通教育は平成 26 年度まで約３名/年，平成 27 年度から約２名/年の選出規定

※ Best Teacher Award …評価上位教員に通算５回以上選考された教員を「Best Teacher Award」として表彰

■ 福井大学医学部「学生による授業評価アンケート」評価上位教員選考に関する申合せ（抜粋）

顕彰制度	制度の概要
「学生による授業評価アンケート」評価上位教員選考・Best Teacher Award	（目的）　第1　この申合せは，福井大学医学部「学生による授業評価アンケート」評価上位教員（以下「評価上位教員という。」）選考について，必要な事項を定める。 （選考基準）　第2　選考の対象は，講義・演習とする。 2　講義は，複数コマを担当している科目とする。ただし，臨床系の科目については，1コマのみの担当であっても対象とする。 3　履修登録者が，10名以上の科目とする。 4　履修登録者に対する「学生による授業評価アンケート」の回収率が50%以上の科目とする。 5　非常勤講師は，対象外とする。 （選考）　第3　学生による授業評価アンケートを実施した翌年度の4月1日に在籍している教員について，次の区分ごとに評価上位教員を評価点上位の者から選考する。 (1) 共通系　約　2名 (2) 基礎系　約　5名 (3) 臨床系　約 15名 (4) 看護学科　約　5名 （選考方法）　第4　評価上位教員候補者の選考は，医学部教育支援センターが行い，医学部長に推薦する。評価上位教員は，医学部教務学生委員会において決定し，医学部教授会に報告する。 （公表）　第5　医学部長は，評価上位教員を学内に公表する。 （表彰）　第6　医学部長は，評価上位教員に通算5回選考された教員を「Best Teacher Award」として表彰する。 2　表彰は，学部長が表彰状を授与することにより行う。 3　表彰は，原則として年度当初に行う。 4　被表彰者の人事記録に当該記録を記載する。 5　表彰後に評価上位教員に選考された場合の回数は，1回目とする。

■ Best Teacher Award 受賞教員のコメント

医療者に必要な「共感」の理解を，できる限り患者さんの目線で捉えられるような授業を心がけています。「授業は学生が主役」がモットー。主役を置いてきぼりにしないよう，これからも学生をコミュニケーションのとれる授業を行っていきたいと思っています。

（事務局資料）

●教育プログラムの質保証・質向上のための工夫とその効果

【教学マネジメント体制】

①　教育の質保証及びその改善のため，教育支援センターを中心として，各種アンケートなど様々な意見聴取（**P4-58 後掲資料 1-1-5-4**）を含め教育の状況を示すデータの収集・蓄積・分析を継続的に実施し，その結果に基づき，適宜教育の点検・改善・充実を図る取組を行っており，全学部的な PDCA 体制が整備されている（**P4-4 前掲資料 1-1-1-1**）。医学科では，「医学教育分野別評価」への対応を質保証の一環とすることとしている。

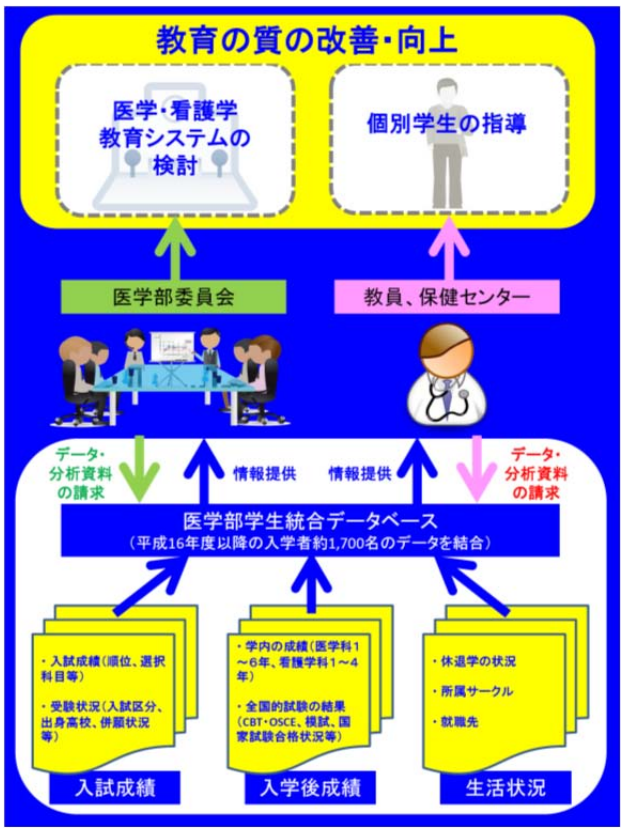
②　学生の入試から卒業までの成績・奨学金・共用試験，模試等を「学生統合データベース」として構築し，データの収集分析を行う教学 IR 体制を整備している（**資料 1-1-5-1, 2**）。

資料 1-1-5-1　医学部学生統合データベース

平成 25 年度に医学部では，平成 16 年度以降入学者の入試から卒業までの成績，さらに休退学や所属サークル等の状況を，学籍番号をキーに任意に連結できるようデータを整備した。これにより，各委員会等の要求に応じて「入試区分毎の成績の状況」，「各学年間のカリキュラム相関」等の分析が容易に行える体制が整えられている。

また，各年度末の進級判定時に最新のデータを追加しており，学生単位で入学以降の成績を並べて表示する，もしくはカリキュラム区分毎に表示することで，成績の急激な落ち込みや不得意分野等をタイムリーに把握できる。この情報をアドバイザー教員，保健センター，事務局で共有することで，学生への早期指導を行っている。

データの分析にあたっては個人情報の保護に十分注意することとし，内容によっては福井大学医学系研究倫理審査委員会による「倫理審査」の受審を経ることとしている。



（事務局資料）

資料 1-1-5-2　医学部学生統合データベースの活用例

全ての学生について入試情報，学部成績，生活情報などを一覧化し，特に成績変化や分野別成績，再試験状況などをもとに，学生委員会・医学科及び看護学科学生支援部会において積極的に学生支援を行うこととしている。

■ 平成 27 年度学生支援委員会看護学科部会資料（ダミーデータ）

㊙ コピー不可

顔写真

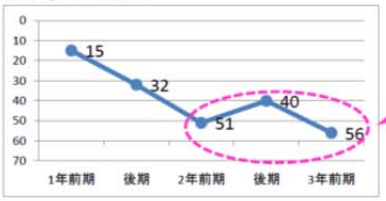
学籍番号：12345678
名前：●● ●●
カナ：○○ ○○
電話番号：090−×××−×××

入学年度：25
入試区分：一般（前期）
高卒後経年：0

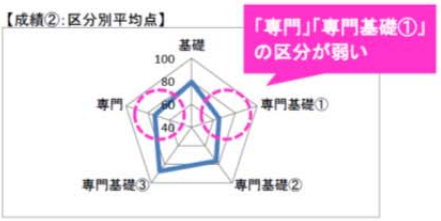
出身地：▲▲県
出身高校：■■高校
高校成績概評：@

サークル1：科学部
サークル2：ボート部
サークル3：−
サークル4：−
サークル5：−

【成績①：学年別順位】



【成績②：区分別平均点】



【成績③：科目別明細】

	1年前期		1年後期		2年前期		2年後期		3年前期	
基礎	哲学Ⅰ	98	文化人類学	−	統計学	61			英語Ⅴ	−
	生命倫理学	87	社会学	−	教育学	78				
	芸術学	73	教養特別講義Ⅰ	−						
	日本国憲法	70	教養特別講義Ⅲ	−						
	法学	−	心理学	81						
	教養特別講義Ⅱ	82	英語Ⅲ	77						
	情報科学	80	英語Ⅳ	75						
	英語Ⅰ	87	ドイツ語Ⅱ	−						
	英語Ⅱ	70	フランス語Ⅱ	−						
	ドイツ語Ⅰ	−	中国語Ⅱ	−						
	フランス語Ⅰ	−								
	中国語Ⅰ	92								
	健康・スポーツ科学	82								
専門基礎①	化学	66								
	化学（実験）	−								
	生命科学	69								
	生物学入門	合								
	物理学	60	物理学（実験）	−						
専門基礎②	形態機能論Ⅰ	70	形態機能論Ⅱ	72	薬理作用論	91	疾病論Ⅱ	63		
	健康科学論	88	形態機能論実習	90	疾病論Ⅰ	70				
			生体反応論Ⅰ	69	成長発達論	68				
			生体反応論Ⅱ	79						
			生体反応論実習	80						
専基③	生活科学論	82			健康管理論	84	人間行動論	90	心理測定論	90
	環境科学論	89					疫学	100	保健医療福祉論Ⅰ	92
							保健統計論	70	保健医療福祉論Ⅱ	89
専門	看護学入門	87	日常生活援助論	89	看護過程論	74	母子看護学概論	75	発達障害看護論	75
	看護学概論	94			療養生活援助論	76	精神看護学概論	80	育児援助論	70
	基礎看護学実習Ⅰ	91			成人看護学概論	77	急性期看護活動論	66	母性看護活動論	60
					老年看護学概論	68	慢性期看護活動論	64	小児看護活動論	60
					公衆衛生看護学概論	71	リハビリ看護活動論	72	精神看護活動論	60
					看護コミュニケーション論	77	老年看護活動論	72	看護倫理	71
							在宅看護論	78	災害看護論	80
							ヘルスアセスメント論	75	がん看護論	66
							基礎看護学実習Ⅱ	77	ターミナル看護論	78
									感染予防看護論	69
									公衆衛生展開論Ⅰ	60
									公衆衛生展開論Ⅱ	60
									公衆衛生看護管理論	70
									リスクマネージメント論	84
	1年前期平均	80.9	1年後期平均	79.1	2年前期平均	74.6	3年後期平均	75.5	3年前期平均	72.6
	学年順位	15	学年順位	32	学年順位	51	学年順位	40	学年順位	56

【成績④：再試験科目】

					公衆衛生展開論Ⅰ
					公衆衛生展開論Ⅱ
					母性看護活動論
					小児看護活動論

3年前期の「専門」科目区分のうち、4科目が再試となっている

（事務局資料）

【外部評価・第三者評価】

山梨大学との相互評価を平成 26 年度に本学において実施し，設備面の充実度，教育関連委員会の整備状況，入試への取り組みなどに高い評価を得た。看護学科では欧米の優れた大学・病院等のベンチマーキングを行った（**資料 1-1-5-3**）。

資料 1-1-5-3　外部評価への取り組み

■ 山梨大学との相互評価

平成 23 年度より，本学と同程度の規模である山梨大学との間で，両大学の現状及び優れた点等を相互に確認評価し，その結果を今後の教育改善等に役立てることを目的とした相互評価を継続的に実施している。平成 26 年度は，医学部を対象として実施した。

【全体を通しての福井大学における特徴等】（山梨大学側からの評価）

・施設面：新病棟はもとより，講義棟の改修における学習意欲がわくような空間づくりや学生の意見を取り入れた椅子等の設置，シミュレーションセンター建設及び充実した設備の導入，言語教育センターの建設など，建物や設備等のハード面において優れている。

・国際基準におけるカリキュラム及び関連の委員会について，整備が進んでいる。

・入試改革に関する検討を始めるなど，改革に前向きに取り組んでいる。なお，入試における面接試験に関しては，面接基準についての社会的説明をいかに行うか，について問題意識をもち検討を行っている。

・看護学科新卒者５５人中，３２人が附属病院に就職するなど，安定的に看護師を供給できる体制が整っている。

・看護学科３年次編入を廃止する取組を早くから始め，修士課程における専門看護師の養成コースを設置するなど，課題を見つけて改革に結びつけている。

平成 27 年３月　山梨大学医学部

■ 看護学科におけるベンチマークの実施

国際通用性をもつ教育体制の構築を図るため，看護学科では平成 24 年度に英国の先進大学，病院，ホスピス等のベンチマークを実施した。これらの経験から，平成 24 年度改正のカリキュラムでは専門分野で高度実践看護師として活躍するための「キャリアアップ実習」科目を新設し，国外における高度実践看護体験実習の場として，ベンチマークした大学・病院での実習を行っている。また，バーミンガム市立大学とは学部間国際交流協定を結んでいる。

学部	時期	視察メンバー	視察先
医学部 （看護系）	平成 24 年９月	基礎看護学教授　長谷川智子 臨床看護学助教　嶋雅代 応用言語学教授　藤原哲也 松岡キャンパス学務室長補佐　窪田真由美 学生　27 名（医学部，認定看護師課程）	英国 バーミンガム市立大学，レスター大学グレンフィールド病院，キングスカレッジ，ロイヤルマーズデンホスピタル，セントクリストファーホスピス

「第３回福井大学 FD・SD シンポジウム 2013 専門職業人養成のためのグローバル人材育成」として全学 FD による報告と討論を行った。



（事務局資料）

【関係者の意見聴取】

① 学生や社会からの要請に柔軟に対応できる体制を整備し，各種評価や懇談会を通して学内外の関係者からの意見聴取や協議を定期的に実施し，改善につなげている（**資料 1-1-5-4～5**）。

資料 1-1-5-4　教育評価アンケート一覧

医学科，看護学科ともに学内関係者及び学外関係者・関係機関への定期的アンケートを行い，教育に対する関係者の意見聴取，その分析を教育支援センターと学務室が協力して行っている。回収率は概ね高く，適切に意見聴取ができている。中でも全科目に対する「授業評価アンケート」，教育課程の区切りで行う「カリキュラム評価アンケート」，実習やテュートリアル科目等の評価を行う各種アンケートを毎年実施し，教育支援センターを始め，担当教員へのフィードバックを密に行っている。

これらの学生の成果について調査するため，福井大学「競争的配分経費（教育評価に基づく競争的経費）」（**P4-62 後掲資料 1-1-5-9**）として平成 25 年度「国際基準に準拠した医学教育カリキュラムへの改革に係る対応及びその基盤となる教育評価」等への配分を受けて実施している。

■ 学内関係者による教育評価アンケート一覧

対象学科	評価者1	評価者2	アンケート名称・内容	H27回収率	実施年	実施月	主な結果の周知・共有方法
医学科	学生	全学年	授業評価アンケート （1-6年次の全授業に対する個別評価）	61.3～93.2% （形態による）	毎年	随時	教員個別、医学部教育支援センター運営委員会、教授会等
		1年次生	カリキュラム評価アンケート（1年次） （教養教育カリキュラム評価）	92.7%	毎年	2月	医学科カリキュラム委員会、医学部教育委員会、教授会、学年代表者（学生）との懇談会等
			入門テュートリアル「課題1」「課題2」 （1年次テュートリアル教育の評価）	98.1～98.2% （課題による）	毎年	随時	医学科カリキュラム委員会
		3年次生	カリキュラム評価アンケート（3年次） （2年次前期-3年次前期の基礎医学教育カリキュラム評価）	93.5%	毎年	12月	医学科カリキュラム委員会、医学部教育委員会、教授会、学年代表者（学生）との懇談会等
		4年次生	カリキュラム評価アンケート（4年次） （3年次後期-4年次後期の基礎医学教育カリキュラム評価）	99.2%	毎年	2月	医学科カリキュラム委員会、医学部教育委員会、教授会、学年代表者（学生）との懇談会等
			テュートリアル「神経系」「「循環器系」「消化器系」 （4年次テュートリアル教育の評価）	78.3～95.8% （領域による）	毎年	随時	医学科カリキュラム委員会
		5年次生	福井大学臨床実習後アンケート （5年次の臨床実習評価）	76.7%	毎年	5月	医学部教育支援センター運営委員会
		6年次生	卒前臨床医学研修アンケート（学内） （6年次の臨床実習評価（学内実習））	84.3%	毎年	7月	医学科臨床実習委員会
			卒前臨床医学研修アンケート（学外） （6年次の臨床実習評価（学外実習））	84.3%	毎年	7月	医学科臨床実習委員会
			カリキュラム評価アンケート（6年次） （1-6年次全体のカリキュラム評価）	92.1%	毎年	1月	医学科カリキュラム委員会、医学部教育委員会、教授会、学年代表者（学生）との懇談会等
	教員	テューター	入門テュートリアル「課題1」「課題2」テューターアンケート （医学科1年次テュートリアルの評価）	84.6～92.3% （課題による）	毎年	随時	医学科カリキュラム委員会
			テュートリアル「神経系」「「循環器系」「消化器系」テューターアンケート （医学科4年次テュートリアルの評価）	84.6%	毎年	随時	医学科カリキュラム委員会
		実習担当	卒前臨床医学研修アンケート（学内2週間） （6年次の臨床実習評価（学内実習））	100%	毎年	5月	医学科臨床実習委員会
		全教員	教員による医学教育についてのアンケート調査（医学科） （学生評価、教育法改善の状況等）	57.1%	H26	3月	医学部副学部長、松岡キャンパス学務室回覧
看護学科	学生	全学年	授業評価アンケート （1-4年次の全授業に対する個別評価）	96.0～96.9% （形態による）	毎年	随時	教員個別、医学部教育支援センター運営委員会、教授会等
		1年次生	カリキュラム評価アンケート（1年次生） （1年次カリキュラムの評価）	100%	毎年	12月	看護学科各教員、看護学科カリキュラム委員会、医学部教育委員会、学年代表者（学生）との懇談会等
		2年次生	カリキュラム評価アンケート（2年次生） （2年次カリキュラムの評価）	100%	毎年	12月	看護学科各教員、看護学科カリキュラム委員会、医学部教育委員会、学年代表者（学生）との懇談会等
		3年次生	カリキュラム評価アンケート（3年次生） （3年次カリキュラムの評価）	94.9%	毎年	2月	看護学科各教員、看護学科カリキュラム委員会、医学部教育委員会、学年代表者（学生）との懇談会等
		4年次生	卒業研究についてのアンケート集計 （4年次卒業研究の評価）	100%	毎年	12月	看護学科各教員、看護学科カリキュラム委員会、医学部教育委員会等
			カリキュラム評価アンケート （1-4年次全体のカリキュラム評価）	100%	毎年	12月	看護学科各教員、看護学科カリキュラム委員会、医学部教育委員会、学年代表者（学生）との懇談会等
	教員	全教員	教員による医学教育についてのアンケート調査（看護学科） （学生評価、教育法改善の状況等）	82.6%	H26	3月	医学部副学部長、松岡キャンパス学務室回覧
医学科・看護学科共通	学生	対象者のみ	留学者対象アンケート （短期留学学生の自己評価）	87.1%	H27	随時	医学部副学部長、松岡キャンパス学務室回覧
	教員	全教員	授業評価アンケートのフィードバックアンケート （授業評価アンケートの結果に対する授業改善プラン等の調査）	52.6%	毎年	随時	学生掲示板への掲示

■ 学外関係者・関係機関による教育評価アンケート一覧

対象学科	評価者	アンケート名称・内容	H27回収率	実施年	実施月	主な結果の周知・共有方法
医学科	卒業生	卒業生に対する大学教育の成果調査 （医学科卒業者（H20-22年度卒）による大学教育評価）	27.7%	H27	2月	医学部副学部長、松岡キャンパス学務室回覧
	実習先機関	卒前臨床医学研修教育関連病院用アンケート （6年次生に対する学外臨床実習評価）	100%	毎年	7月	医学科臨床実習委員会
	就職先機関	医学科卒業生の就職先へのアンケート （就職先による医学科卒業者（H21-23年度卒）評価）	95.0%	H27	1月	医学部副学部長、松岡キャンパス学務室回覧
看護学科	卒業生	卒業生に対する大学教育の成果調査 （看護学科卒業者（H20-22年度卒）による大学教育評価）	31.3%	H27	2月	医学部副学部長、松岡キャンパス学務室回覧
	実習先機関	臨地実習受け入れ先機関に対するアンケート調査 （3-4年次生に対する学外臨地実習評価）	80.0%	H26	12月	医学部副学部長、松岡キャンパス学務室回覧
	就職先機関	看護学科卒業生の就職先へのアンケート （就職先による看護学科卒業者（H23-25年度卒）評価）	88.9%	H27	1月	医学部副学部長、松岡キャンパス学務室回覧
医・看護学科共通	留学先機関	留学先受入れ機関アンケート （短期留学受入れ機関による学生評価）	69.0%	H27	随時	医学部副学部長、松岡キャンパス学務室回覧

（事務局資料）

資料 1-1-5-5　学生からの意見聴取

学生の生の声を様々な視点から聴取する目的で，各種の会談の場を設けている。学生が取りまとめた意見や要望の聴取，カリキュラムについての意見交換などを実施し，そのうち一部は施設整備の際に取り入れられている（**P4-63 後掲資料 1-1-5-11**）

実施状況		実施形態	内容例
学年代表連絡会 （毎月開催）		各学年の代表学生２～４名（医学科計 16 名，看護学科計８名）と，事務局職員（松岡キャンパス学務室）との連絡会	定期的に学生生活や大学行事等に対する懸案事項について連絡調整を行う。 また，学生生活プロジェクトで学生が取り纏めたアンケートの要望に対して審議を行う。
カリキュラムに関する学生との懇談会 （毎年開催）		各学年の学生カリキュラム委員（医学科計 12 名，看護学科８名）と，医学科・看護学科のカリキュラム担当教員との懇談会	学生による全学生対象のカリキュラムアンケートの結果まとめられた要望書を受け，各学科のカリキュラム担当教員と懇談会を行う。 また，学習支援に対する要望も聴取する。
医学部長との懇談会 （毎年開催）		各学年の代表学生（医学科 16 名，看護学科８名）と医学部長および事務局職員（松岡キャンパス学務室）との懇談会	食事をとりながら，代表学生が学生生活全般について医学部長と気軽な雰囲気で意見交換を行い，様々な要望の聴取を行う。

（事務局資料）

② 全科目に対する「学生による授業評価アンケート」の定期的実施により教員の教育方法等を随時点検し，教員へのフィードバックにより改善を促している（**資料 1-1-5-6～7**）。授業評価アンケートでは平均が４点以上（５点満点）と高く，学生の授業への満足度は高い（**資料 1-1-5-8**）。

資料 1-1-5-6　授業評価アンケート

学生による全科目の授業アンケート（平成 27 年度）は担当教員個別の講義・演習（医学科 296 件，看護学科 88 件），実習・実験（医学科 46 件），試験（医学科 43 件）それぞれに行い，各年度の前後期における各講義形態での平均点は全てで 4.0 点以上（５点満点）と高い評価である。アンケート結果は教育支援センターにおいて協議すると共に各教員やコーディネーターへフィードバックしている。

アンケートの回収率は年々向上し，全ての項目において 50%以上であり，特に看護学科ではほぼ 90%以上の回収率となっており，学生の意見聴取が十分行われている。

■ 授業評価アンケート実施状況一覧

学科	講義形態		平成22年度		平成23年度		平成24年度		平成25年度		平成26年度		平成27年度	
			前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
医学科	講義・演習	平均点(5点満点)	4.30点	4.43点	4.51点	4.46点	4.41点	4.38点	4.56点	4.46点	4.46点	4.42点	4.40点	4.38点
		実施講義数	190件	164件	184件	192件	158件	187件	172件	171件	157件	164件	146件	150件
		回収率	40 17%	48 79%	49 87%	52 20%	48 86%	49 55%	53 14%	52 42%	52 03%	67 78%	61 46%	58 01%
	実習・実験	平均点(5点満点)	4 55点	4 56点	4 75点	4 70点	4 56点	4 60点	4 67点	4 74点	4 53点	4 60点	4 43点	4 58点
		実施講義数	27件	13件	23件	11件	29件	12件	19件	11件	15件	8件	18件	8件
		回収率	54.90%	71.25%	69.94%	71.59%	67.97%	74.30%	71.87%	71.69%	70.85%	82.46%	61.33%	75.33%
	BST(臨床実習等)	平均点(5点満点)		4.42点		4.59点		4.58点		4.79点		4.63点		4.77点
		実施講義数		11件		11件		16件		18件		18件		20件
		回収率		53.04%		78.36%		84.06%		85.88%		75.96%		91.52%
	講座・試験	平均点(5点満点)	4.50点	4.41点	4.59点	4.49点	4.46点	4.50点	4.55点	4.68点	4.43点	4.56点	4.24点	4.55点
		実施講義数	11件	25件	12件	24件	10件	27件	9件	29件	10件	33件	11件	32件
		回収率	72.73%	67.43%	82.37%	80.18%	88.55%	86.29%	90.70%	86.37%	88.38%	83.21%	93.22%	89.44%
看護学科	講義・演習	平均点(5点満点)	4.41点	4.46点	4.40点	4.56点	4.58点	4.70点	4.56点	4.60点	4.64点	4.74点	4.59点	4.82点
		実施講義数	45件	34件	47件	31件	52件	40件	48件	35件	53件	39件	44件	36件
		回収率	88.55%	91.64%	94.68%	92.65%	96.59%	92.69%	96.88%	93.98%	96.60%	96.37%	96.00%	95.50%
	講義・演習B	平均点(5点満点)		5.00点	4.84点	4.89点	4.70点	4.85点	4.86点	4.91点	4.92点	4.98点	4.68点	4.88点
		実施講義数		1件	6件	5件	2件	2件	7件	1件	4件	2件	4件	4件
		回収率		50.00%	96.03%	95.08%	66.00%	91.67%	95.71%	96.67%	94.58%	100.00%	96.87%	95.16%
	実習・実験	平均点(5点満点)	4.73点											
		実施講義数	8件											
		回収率	76.69%											

※看護学科では「実習・実験」とした区分のアンケートを実施していたが，平成 22 年度後期より実習・実験が主体となる講義・演習を「講義・演習Ｂ」として区分している。

■ 授業評価アンケート（例）

学生による授業評価アンケート（講義・演習用）

学籍番号　　名前

このアンケートは，学生の皆さんが各教員の授業をどのように評価しているかを把握し，その結果を踏まえてそれぞれの授業をさらに充実させる目的で実施されます。当該の授業をよく振り返ってみて率直に答えてください。
なお，このアンケートは統計的に処理され，その結果の一部が皆さんにもフィードバックされます。この回答が皆さんに対する成績評価に影響することは一切ありませんので，思ったとおりに答えてください。
それでは，以下の問１～問９について，皆さんの評価を，Ｃ（どちらともいえない）を基準として，次の６段階の記号（Ａ～Ｆ）で示してください。適切に回答できない場合は，Ｆ（回答できない）にしてください。

1　機械で読み取り集計するので，枠からはみださないように記入して下さい。
2　評価マークを黒でぬりつぶして下さい。
3　アンケート用紙は講義室等に設置してある専用ポストに入れて下さい。

◎ 評価方法　基準＝
A　そう思う
B　どちらかというとそう思う
C　どちらともいえない（普通である）
D　どちらかというとそう思わない
E　そう思わない
F　回答できない

平成　　年度　　期

－　　授業科目：　　担当教員：

	A	B	C	D	E	F
問1 授業に意欲的に取り組みましたか。	0	0	0	0	0	0
問2 授業に関して時間外学習をしましたか。	0	0	0	0	0	0
問3 授業内容に興味は持てましたか。	0	0	0	0	0	0
問4 授業内容は理解できたと思いますか。	0	0	0	0	0	0
問5 教員の説明は明瞭でわかりやすかったですか。	0	0	0	0	0	0
問6 教材(教科書，プリント，板書，視聴覚機器等)は適切でしたか。	0	0	0	0	0	0
問7 教員は学生の質問・発言等に適切に対応しましたか。	0	0	0	0	0	0
問8 授業はシラバスに沿って進められましたか。	0	0	0	0	0	0
問9 総合的に判断してこの授業はよかったですか。	0	0	0	0	0	0

上記の各項目に関して，あるいはさらに別の点について，御意見などがある場合には，下の記入欄に自由に記述して下さい。また，記入欄が不足する場合は，回答用紙の裏面に記述して下さい。

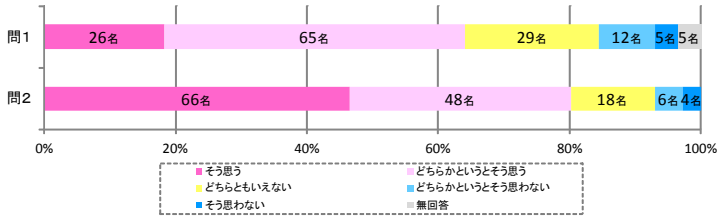
授業終了後にアンケートを記入し，講義室内に設置されているアンケート回収BOXに入れて退出してください。

（事務局資料）

資料 1-1-5-7　教員の授業改善

「学生による授業評価アンケート」の結果を受け，64.1%の教員は授業改善を試み，80.3%は改善を行う予定としている。

設問１_前年の評価アンケートを参考に，授業方法の改善を試み，学生へのフィードバックができた
設問２_今回の評価結果を受け，次の講義を改善する予定である



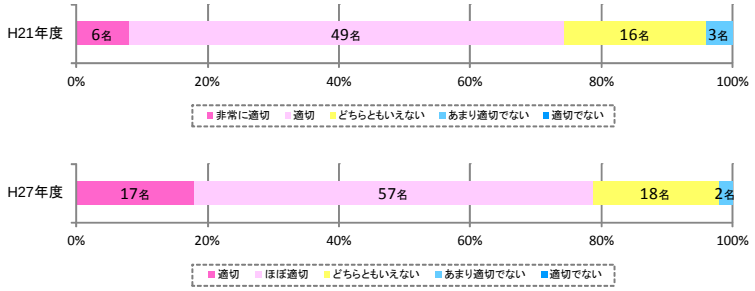
（平成 27 年度前期および後期「学生による授業評価」のフィードバックに係るアンケート結果より抜粋）

③　学生による教員の教育内容・方法等に対する評価結果は概ね向上または高い水準で維持されており（**資料 1-1-5-8，P4-60 前掲資料 1-1-5-6**），これは教員の教育内容・方法等が常時改善･向上していることの証左である。

資料 1-1-5-8　教員の教育内容・方法等に対する学生の評価

設問_臨床実習の前提となる基礎的な診療技術・知識を修得する上で，教員の指導・助言は全般的に適切でしたか？

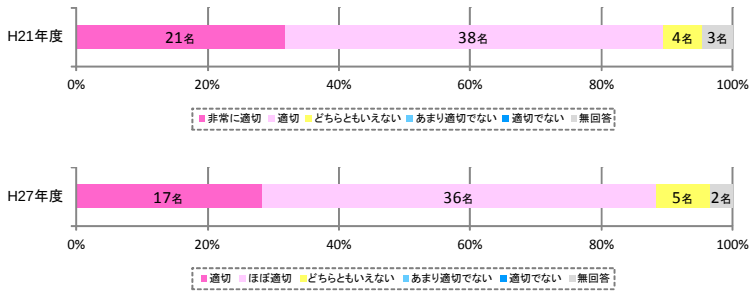
■ 医学科６年



＊ 第１期末と比較して，第２期末では学生の適切とした評価の割合は，4.4%向上している。

設問_臨地実習の前提となる基礎的な技術・知識を修得する上で，教員の指導・助言は全般的に適切でしたか？

■ 看護学科４年



＊ 第１期末と比較して，第２期末では学生の適切とした評価の割合は，1.1%減少しているが，わずかであり，全体としては概ね適切であるとしている。

（平成 21 年度および平成 27 年度「カリキュラム評価アンケート」結果より抜粋）

【教育改善の取組】

① 学内における「教育評価に基づく競争的経費」へ積極的に申請し，教育評価，FD，学生支援等に関わる予算を取得し医学教育改革を推進している（**資料 1-1-5-9**）。

資料 1-1-5-9　学内競争的経費による教育の取組

■ 「教育評価に基づく競争的経費」

福井大学において競争的環境の創出・推進を図ることを目的とした競争的経費は，教育に係る中期目標・計画に沿ったプロジェクト等であることを前提として６分野（教育改革推進経費等）で公募し，その取組・成果が全学的な教育改革に寄与するものに交付する。

■ 「教育評価に基づく競争的経費」に基づいて実施された教育

教育評価，FD，テュートリアル教育，学生支援，クリニカルクラークシップ，英語教育，生命倫理教育，看護学生キャリアアップ，看護学生海外留学等に関わる予算を得て様々な取組を実施している。

年度	テーマの名称	要求部局名等
H22年度	医学部教育の国際化に向けた基盤的FD活動の推進	医学部教育開発推進センター長
	福井大学における探求的課題解決型テュートリアル教育手法の医学教育への実践	医学部テュートリアル教育専門委員会委員長
	様々な臨床場面に対応できる実践的英語運用能力の育成	医学英語教育推進会議
	看護学生の職業的自立と自己研鑽能力を育成するためのキャリアアップ支援	看護学科長
	医学科定員増に対応した新しい化学実習システムに関する研究	医学部
H23年度	カリキュラム・ディプロマポリシーに係るポリシーアセスメント体制の構築	医学部教育開発推進センター長
	福井大学における探求的課題解決型テュートリアル教育手法の医学教育への実践	医学部テュートリアル教育専門委員会委員長
	医学部における包括的学生支援システムの構築	学生支援システム・ワーキンググループ委員長
	様々な臨床場面に対応できる実践的英語運用能力の育成	医学英語教育推進会議
	先進画像教育イメージングシステムの拡充とその利用促進	医学部附属先進イメージング教育研究センター・教育システム部門
	クリニカルクラークシップの充実・推進のための体制整備	医学部OSCEワーキンググループ委員長
	看護学生看護実践能力向上と自己研鑽能力を育成するための学生参加型授業の展開とキャリアアップ支援	看護学科教務委員会委員長
	（生命ー環境）倫理教育の拡充と包括的QOL意識の涵養に向けたNIE基盤整備	医学部
	DNAアレイ実験を行うための実習および実験受託システムの構築	ライフサイエンスセンターバイオ実験機器部門
	新開発ソケット方式分子模型教材を用いた、医学部化学系教育の改善と地域理科化学教育力の育成	医学部
H24年度	カリキュラム・ディプロマポリシーに係るアセスメントおよび教育国際化への対応	医学部教育開発推進センター長
	福井大学における探求的課題解決型テュートリアル教育手法の医学教育への実践	医学部テュートリアル教育専門委員会委員長
	医学部における包括的学生支援システムの構築	医学部学生支援委員会委員長
	様々な臨床場面に対応できる実践的英語運用能力の育成	医学英語教育推進会議
	クリニカルクラークシップの充実・推進のための体制整備	医学部OSCEワーキンググループ委員長
	看護理論と実践を結びつけ理解する能力育成のための教育・実習の充実	看護学科長
	看護スペシャリスト養成におけるキャリアアップ実習のためのイギリス・レスター大学との教育連携推進	看護学科教務委員会委員長
	物語論的方法に基づく生命倫理教育の拡充に向けた基盤整備	医学部
H25年度	国際基準に準拠した医学教育カリキュラムへの改革に係る対応及びその基盤となる教育評価	医学部医学教育支援センター長
	福井大学における探求的課題解決型テュートリアル教育手法の医学教育への実践	医学部テュートリアル教育専門委員会委員長
	包括的学生支援システムの構築	医学部学生支援委員会委員長
	様々な臨床場面に対応できる実践的英語運用能力の育成	医学英語教育推進会議
	クリニカルクラークシップの充実・推進のための体制整備	医学部OSCEワーキンググループ委員長
	現場に対応できる高度実践看護師育成のための新たな大学院教育と人材育成の拠点化	看護学科長
	看護実践能力育成のための教育・実習の新たな取り組みとキャリアアップ教育	看護学科教務委員会委員長
	視覚教材の更新による生命倫理教育の高度化　ー科学研究の倫理を見据えて	医学部医療人文学領域准教授
H26年度	包括的学生支援システムの構築	医学部学生支援委員会委員長
	法人・認証・外部評価対応の基盤整備　ー国際基準に向けた教育改革および教育評価	医学部評価対策室・医学科FD委員長
	福井大学における探求的課題解決型テュートリアル教育手法の医学教育への実践	医学部テュートリアル教育専門委員会委員長
	様々な臨床場面に対応できる実践的英語運用能力の育成	医学英語教育推進会議
	クリニカルクラークシップの充実・推進のための体制整備	医学部共用試験OSCE総括責任者
	現場に対応できる高度実践看護師育成にむけた新たな大学院教育環境の整備	看護学科長
	キャリア教育と看護実践能力育成のための教育・実習の強化	看護学科教務委員会委員長
	看護基礎教育における看護実践能力修得のための教育・実習環境の充実	看護学科カリキュラム専門委員会委員長
H27年度	包括的学生支援システムの構築	医学部学生委員会委員長
	法人・国際認証・外部評価への組織的な対応 ー適切な教育評価及びその結果に基づく医学教育国際化に向けた基盤整備	教育評価に係る副学長補佐 医学部評価対策室

（事務局資料）

② 講義棟や医学図書館の改築改修，附属病院や福井メディカルシミュレーションセンターの新営などを積極的に行い，さらに学生からの要望をもとにした改修を継続的に進め（**資料 1-1-5-10～11**），学習環境等への満足度は第１期に比べ高い（**資料 1-1-5-12**）。

資料 1-1-5-10　施設整備の状況

年度	施設・設備区分	改善内容
平成 22 年度	講義・実習施設	組織病理実習室拡張
	福利施設	学生食堂改修
平成 23 年度	講義・実習施設	実習棟実習室を実習室と多目的講義室に改修
		看護学科講義室・実習室の視覚装置更新
	自習施設	医学図書館に情報工房（グループ学習室 14 室）新設
	福利施設	売店拡充
	安全設備	外灯の増設
平成 24 年度	講義・実習施設	総合研究棟（講義棟）改修（**P4-138 後掲資料 1-2-4-8**） ・第１中講義室，第２中講義室の拡張と机入替え ・２階にマルチラーニングスペース，ミーティングスペース設置 ・１階に TBL（Team-Based Learning）講義室，コミュニケーションスペース設置
	情報設備	学生の学内ネットワーク（Wi-Fi 回線）自由アクセス化改修
	福利施設	ステューデント・アクティビティ・プラザ（トレーニング器具等設置）新設
		野球場防球ネット設置
		軟式テニスコート改修
平成 25 年度	講義・実習施設	福井メディカルシミュレーションセンター新設
		実習棟トイレ改修
	自習施設	言語開発センター（LDC）新設
	福利施設	学生食堂横売店新設
		国際交流会館テラス改修
		課外活動室改修
平成 26 年度	講義・実習施設	医学部附属病院病棟（488 床）新設
		看護学科形態機能実験室改修
	自習施設	医学図書館参考図書室を自習スペース（個人机）に改修
	福利施設	講義棟玄関に学生時間外利用のためのカードキーシステム設置
		グラウンドに製氷機設置
		福利施設から武道場・体育館への渡り廊下設置
		福利棟トイレ改修
平成 27 年度	講義・実習施設	看護学科棟トイレ改修・増設
	福利施設	学生食堂改修
		学生食堂横売店の拡張

（事務局資料）

資料 1-1-5-11　学生の要望に対する対応例

（要望例１）・学生の情報端末（ノート PC，スマートフォン，タブレット等）から，医療データベースや電子ジャーナルに自由にアクセスできるよう，学内ネットワークシステムを改善して欲しい。

（対応策１）・学生からの要望を受け，総合情報基盤センターで学内ネットワークの改善を行い，学内 Wi-Fi 回線を経由した医療データベースへの自由アクセスが可能となった。（**P4-140 後掲資料 1-2-4-11**）

（要望例２）・講義室が狭いので，拡大して欲しい。
・講義室の椅子・机が狭く，椅子は座り心地が悪いので，もっと大きく座り心地の良いものにして欲しい。
・自習室，テュートリアル室を増やしてほしい。

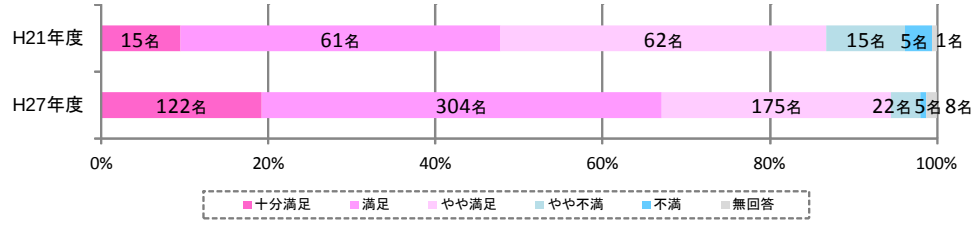
（対応策２）・医学部講義棟改修工事の実施に際し，学生からの要望を参考に，以下の改善を行った。（**P4-137 後掲資料 1-2-4-7，P4-138 後掲資料 1-2-4-8**）
…合併講義室，第１中講義室の個人スペースの拡張（９人掛け⇒３人掛け）
…第２中講義室，第３中講義室の拡張
…多目的室（コミュニケーションスペース）及び自習室（マルチラーニングスペース）の設置

（事務局資料）

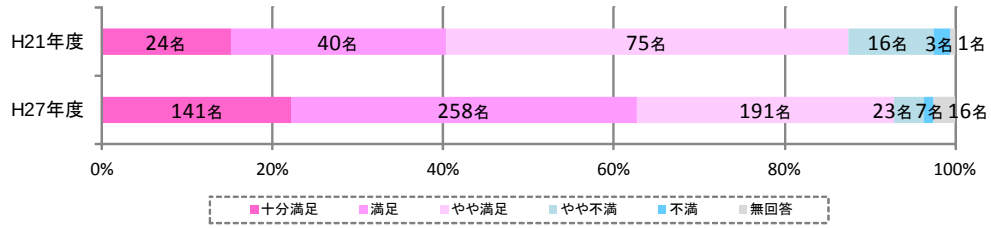
資料 1-1-5-12　学習環境に対する学生の満足度

第１期末と比較して，第２期末では学生の評価（十分満足～満足と回答した割合）は，学習・研究環境で 19.2%，実験室などの広さや設備で 22.4%，講義室の設備で 19.8%，講義室の広さで 29.1%，校舎で 20.1%向上している。

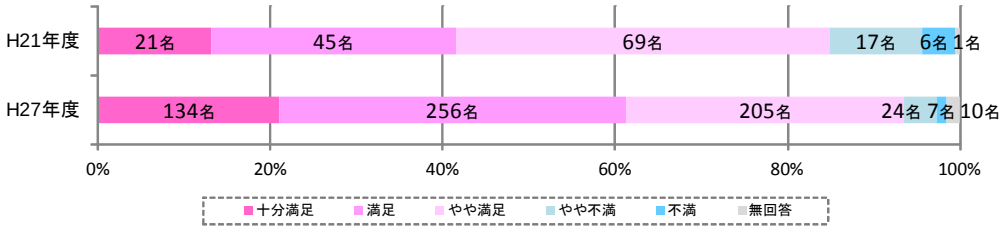
設問_学習・研究環境について，あなたはどの程度満足していますか



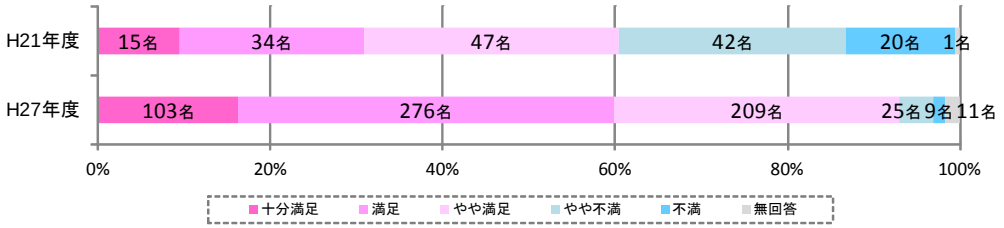
設問_実験室・実習室・演習室などの広さや設備について，あなたはどの程度満足していますか



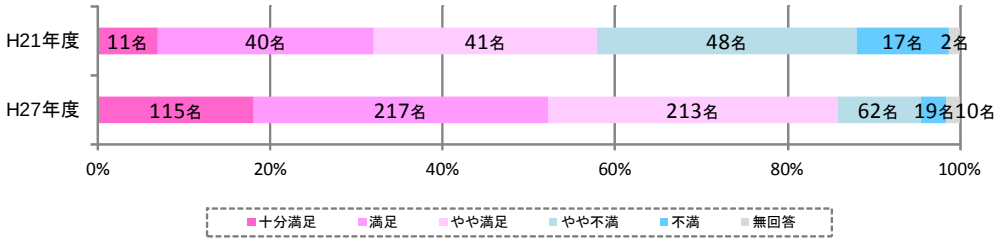
設問_講義室の設備（AV，プロジェクタ等）について，あなたはどの程度満足していますか



設問_講義室（平成 21 年度…教室）の広さについて，あなたはどの程度満足していますか



設問_校舎について，あなたはどの程度満足していますか



（平成 21 年度および平成 27 年度「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」結果より抜粋）

【教育情報の発信】

① 入学者・在学生に向けてホームページにより教務関係，各種手続き，進路・就職等の情報を一覧できるものとしている（**資料 1-1-5-13**）。

資料 1-1-5-13　在学生向け大学ホームページと掲載情報一覧

■ 在学生向けホームページ（学生生活・就職）



（http://www.u-fukui.ac.jp/cont_life/）

■ 掲載内容一覧

掲載情報区分		内容等
教務関係	学年歴	大学全体の行事・イベント等
	授業日程	松岡キャンパス（医学部）の授業日程、試験、休業、イベント等
	授業・履修・シラバス等	シラバス検索システムへの接続（リンク）、履修登録
	共通履修制度等	単位互換制度、他学部授業科目履修・単位認定制度
	取得可能な免許・資格	卒業時に得られる資格
授業料・奨学金	授業料・入学料納入方法	入学料・授業料および納入方法、申請期限等
	授業料・入学料免除	授業料・入学料免除の申請方法、申請期限、規定、選考要領等
	奨学金制度	奨学金の種類、申請方法、提出書類、申請期限等
各種証明書・手続き	学割証	学割証の利用案内、諸注意
	通学証明書	通学証明書の取得方法等
	入講許可申請書	自動車通学に対する入講許可の申請、審査、申請期限等
	紛失・盗難届	紛失・盗難があった場合の届け出等
福利厚生施設	福井大学生活共同組合	福井大学生協ホームページへの接続（リンク）
	国際交流学生宿舎	寄宿舎の概要、入居の問合せ窓口等

（事務局資料）

②　学部卒業後の大学院進学及び研究者としてのキャリアパス情報は大学院案内（**資料 1-1-5-14**），リサーチマッチング（**資料 1-1-5-15**）や看護学科進路懇談会で発信している。

資料 1-1-5-14　医学系研究科パンフレット

医学系研究科博士課程では平成 25 年度から，修士課程では平成 26 年度から，大学院志願者に向けたパンフレットを作成しており，博士課程では全領域の主任教員，修士課程では講師以上の研究テーマや業績を掲載することで研究者を志す者に対して正確な情報を発信している。また，夜間開講や長期履修制度，奨学金や授業料免除制度などのサポート情報も併せて掲載している。

これらは冊子で配布するとともに，デジタルパンフレットとしてホームページでも公開している。

■ 博士課程パンフレット





(http://www.med.u-fukui.ac.jp/home/ufms/digitalbook/2015/FLASH/index.html)

■ 修士課程パンフレット





(http://www.med.u-fukui.ac.jp/dptkango/digitalbook/2015/FLASH/index.html)

（事務局資料）

資料 1-1-5-15 リサーチマッチングによる研究者のキャリアパス説明

学生の基礎医学に対するモチベーション向上，研究者としての大学院進学とキャリアパス，臨床系大学院からの基礎系研究室配属を促進するため「リサーチマッチング（研究者勧誘説明会）」を平成21年度から実施している。参加者の多くは説明内容および基礎医学研究への興味を喚起されている。

■ 実施状況

【参加者数】

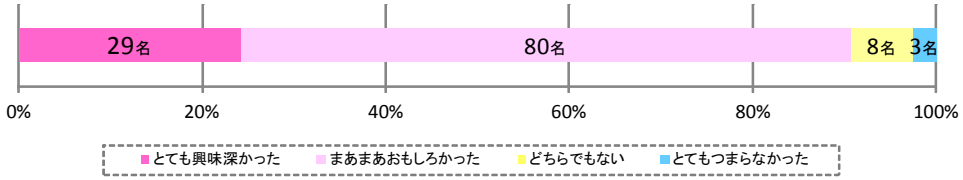
実施年度	参加者数
平成21年度	25名
平成22年度	20名
平成23年度	25名
平成24年度	30名
平成25年度	100名
平成26年度	125名
平成27年度	120名

【プログラム（平成27年度）】

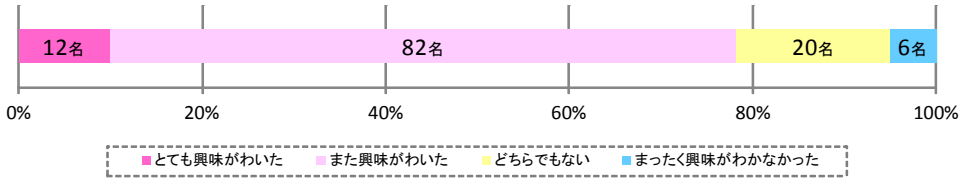
内容	担当領域等	説明者
挨拶	医学部	医学部長
大学院博士課程の概要説明	博士課程小委員会	委員長
4大学コンソーシアムリトリートについて	医学部教務委員会	委員
研究者ライフ	ゲノム科学・微生物学領域	教授
糖鎖病理学　－自分の仕事を歴史に刻む－	腫瘍病理学	教授・特命助教

■ アンケート（平成27年度）

設問_出席した感想は？



設問_説明会を聞いて，基礎医学研究への興味がわきましたか？



設問_特に興味深かったことや，ご意見があれば記入してください。

・先生方の個々の事例を聞くことで，研究者の実際がより身近に感じられた。
・どの先生のお話もとても印象に残りました。おもしろかったです。
・論文データの視点が変わった。
・大学院に進学した時のライフスタイル，その後の進路についていろいろな例を聞いてみたいと思った。もし可能なら研究はしてみたいと思う。
・基礎をしながら，臨床系にも在籍できることが分かった。自分の興味のあるラボを紹介していただけるのは良いと思った。
・創造する楽しさを味わえるのは，臨床医でなく研究者であることがよく伝わってきた。もし研究したくなった時のために今日が役立った。

（事務局資料）

（水準）　期待される水準を上回る

（判断理由）

① 医学部長が統括する教育委員会等による教育の実施と教育担当副医学部長が統括する教育支援センターによる点検・評価・改善の実施が密接に連携した，国際基準に則った教育実施体制を新たに構築した[1)]。

[1)] 資料 1-1-1-1　：医学部教育実施体制　P4-4
資料 1-1-1-2　：医学部教育委員会　P4-5
資料 1-1-1-3　：医学部教育委員会各委員会所轄事項一覧（医学部教育委員会規定別表）　P4-6
資料 1-1-1-4　：医学部教育支援センターの概要　P4-7

② 地域医療人育成プログラム[2)]推進のための寄附講座[3)]，連携する地域外部病院等[4)]，臨床教員数[5)]等は第１期より増加しており，地域医療人の育成について期待に応えている。

[2)] 資料 1-2-2-2　：地域医療人育成プログラムの概要（医学科）　P4-96
資料 1-2-2-7　：看護学科における地域医療教育　P4-101
[3)] 資料 1-1-1-7　：医学部寄附講座　P4-10
[4)] 資料 1-1-1-9　：平成 27 年度臨床・臨地実習先一覧（学外）　P4-13
[5)] 資料 1-1-2-8　：臨床教員制度による臨床教授等付与状況　P4-32

③ 入学から卒業・国家試験まで一貫した学生支援体制として，アドバイザー教員制度等を整備し[6)]，また独自の奨学金等による経済的支援[7)]も実施している。これら学生支援に対する学生の評価は第１期より向上し[8)]，学生の期待に応えている。

[6)] 資料 1-1-1-11　：学生支援活動一覧　P4-15
資料 1-1-1-12　：学習支援を含めた学生支援体制　P4-16
資料 1-1-1-13　：保健センターおよび学生総合相談室　P4-17
資料 1-1-1-20　：リメディアル教育実施状況　P4-22
資料 1-1-1-21　：医学科国家試験への支援　P4-23
資料 1-1-1-22　：看護学科国家試験対策システム　P4-23
[7)] 資料 1-1-1-23　：医学部学生対象の奨学金一覧　P4-24
資料 1-1-1-24　：奨学金の年度別受給者　P4-24
資料 1-1-1-25　：授業料免除状況　P4-25
[8)] 資料 1-1-1-16　：学生支援活動に対する学生の評価　P4-19
資料 1-1-1-19　：看護学科学生支援活動（初年次学生グループ）に対する評価　P4-21
資料 1-1-1-26　：経済的支援に対する学生の満足度　P4-25

④ アドミッション･ポリシーに沿った入学者の募集に係る広報活動を積極的に実施し[9)]，全ての選抜方法において第１期を上回る高い志願倍率となった[10)]。推薦入試「福井健康推進枠」の拡大や福井県内で就職を希望する学生対象の奨学金制度等により，地域医療を指向する入学志願者が増加している[11)]ことは特筆できる。入学者選抜は多様な入試形態に合わせた専任教員により実施し[12)]，入学者は第１期より良好な学力を有し[13)]，これらは関係者の期待に応えている。

[9] 資料 1-1-3-1　：医学部アドミッション・ポリシー　P4-33
資料 1-1-3-2　：入試情報公表一覧　P4-35
資料 1-1-3-5　：オープンキャンパスの実施状況　P4-37
資料 1-1-3-6　：看護学科高校訪問説明会の実施状況　P4-37
資料 1-1-3-9　：入学者のアドミッション・ポリシー周知状況　P4-39
[10] 資料 1-1-3-10　：医学部入学試験志願状況　P4-40
資料 1-1-3-21　：医学科学士編入学入試状況　P4-48
[11] 資料 1-1-3-11　：地域枠を設けた入学者志願状況（医学科推薦入試Ⅱ）　P4-41
[12] 資料 1-1-3-12　：医学部入学者選抜方法とその工夫　P4-42
資料 1-1-3-14　：アドミッション・ポリシーの主要事項と入学者選抜方法の対応　P4-43
[13] 資料 1-1-3-17　：適切な入学者の獲得（成績分析）　P4-46
資料 1-1-3-18　：適切な入学者の獲得（教員の評価）　P4-46

⑤ 教育支援センターを中心とした教育の質保証・質向上のための体制を構築し[14]，関係者からの意見聴取等[15]により点検と改善を常時行っている。中でも 400 件以上の全科目・全教員に対する授業評価アンケートの組織的実施とそのフィードバックを実施し，教員は高い評価を得ている[16]。これは教員の教育力が学生の期待に応えていることの証左である。

[14] 資料 1-1-1-1　：医学部教育実施体制　P4-4
資料 1-1-1-4　：医学部教育支援センターの概要　P4-7
資料 1-1-5-1　：医学部学生統合データベース　P4-55
[15] 資料 1-1-5-4　：教育評価アンケート一覧　P4-58
[16] 資料 1-1-4-5　：教員個人評価　P4-53
資料 1-1-5-6　：授業評価アンケート　P4-60
資料 1-1-5-7　：教員の授業改善　P4-61
資料 1-1-5-8　：教員の教育内容・方法等に対する学生の評価　P4-61

⑥ 学生の声も取り入れた学習環境改善に取り組み[17]，図書館や講義室の全面的な改修整備[18]，メディカルシミュレーションセンター[19]や病棟新設等，学生からの要望への対応[20]を含め，学習環境改善を進めた。学生の満足度は高く，かつ概ね第１期より向上しており[21]，学生の期待に応えている。

[17] 資料 1-1-5-5　：学生からの意見聴取　P4-59
資料 1-1-5-10　：施設整備の状況　P4-63
[18] 資料 1-2-4-7　：学生の自習スペース　P4-137
資料 1-2-4-8　：総合研究棟（講義棟）改修　P4-138
資料 1-2-4-9　：医学図書館改修　P4-139
資料 1-2-4-11　：ICT 環境の整備　P4-140
[19] 資料 1-2-3-6　：福井メディカルシミュレーションセンターの概要　P4-118
[20] 資料 1-1-5-11　：学生の要望に対する対応例　P4-63
[21] 資料 1-1-5-12　：学習環境に対する学生の満足度　P4-64

以上のように，教育実施体制の整備・改善が適切になされており，さらに学生や社会からの期待にも極めてよく対応しており，期待される水準を上回ると判断した。

観点　教育内容・方法

(観点に係る状況)

●体系的な教育課程の編成状況

【養成する能力等の明示】

①　両学科ともディプロマ・ポリシー(DP)を平成23年度に作成し**(資料1-2-1-1, 2)**，これらをホームページやシラバスにより周知している。

資料1-2-1-1　医学科ディプロマ・ポリシー

● 学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

医学部医学科では，教育理念・目標に基づき，「①幅広い医学知識を持ち質の高い臨床能力を身につけ，②コミュニケーション能力に優れ，高い倫理観を持って患者中心の医療を実践でき，③日々進歩する医学知識・医療技術を生涯にわたり学ぶ習慣を身につけ，根拠に立脚した医療を実践できる」医療人にふさわしい医学能力・技能等を修得した者に学位を授与します。

所定の期間在学し，カリキュラム・ポリシーに沿って設定した授業科目を履修し，履修規程で定められた卒業に必要な単位・時間数を修得し，クリニカルアセスメントに合格することが学位授与の要件です。

卒業時までに修得すべき具体的な能力・技能等は以下のようです。

１．医療人としての知識・技能

① 医師国家試験の合格に必要な医学知識を修得している。
② 基本的な医療行為を安全に実施できる医療技能を修得している。

２．医療人としての態度・姿勢

① 患者中心の医療を実践できる医療人にふさわしい高い倫理観や良識を備えている。
② チーム医療の一員として，患者・家族やチーム構成員と良好な関係を構築できるコミュニケーション能力を備えている。
③ 都市部から辺地までを包含する地域医療における医療の担い手としての自覚を備えている。

３．医療人としての総合的能力

① 患者の有する身体的・精神的・社会的問題点の的確な把握と問題解決のための適切な処置・指導の選択に基づく，根拠に立脚した医療を行える基本的な実践能力を備えている。
② 医療現場や研究活動で活用できる基本的な英語運用能力を備えている。

４．医師としての向上する意欲

① 医学・医療の進歩や社会的ニーズの変遷に的確に対応し自らを常に高めるよう，生涯にわたり学習する意欲・態度を備えている。

● 学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）の周知方法

・医学部ホームページ　http://www.med.u-fukui.ac.jp/home/ufms/cont_faculty/policy.html
・医学科授業要項
・大学案内
・学生募集要項

(事務局資料)

資料 1-2-1-2 看護学科ディプロマ・ポリシー

● 学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

看護学科では，教育理念・目標に基づき，①看護の対象となる人間を総合的に理解でき，②高い倫理観を持ち看護の対象となる人間の権利を守ることができ，③健康に関わる諸問題の解決に必要な知識・技術を主体的に学び創造する能力をもち，④関連領域の専門家と協力し必要に応じて調整的な役割を果たす能力，および⑤看護を批判的に吟味し建設的・創造的に発展させる能力をもつ看護職者にふさわしい能力・技能等を修得した者に学位を授与します。

所定の期間在学し，カリキュラム・ポリシーに沿って設定した授業科目を履修し，履修規程で定められた卒業に必要な単位を修得することが学位授与の要件です。

卒業時までに修得すべき具体的な能力・技能等は以下の様です。

１．看護職者としての知識・技術

① 看護師国家試験の合格に必要な医学・看護学の知識を修得している。

② 対象者と自らの安全を守り，対象者の状況に合った看護を実践するための看護基本技術を修得している。

③ 対象者の身体的・精神的・社会的問題について的確に判断し，問題解決のための計画・実施を行い，自らの看護ケアについて評価する能力を有している。

２．看護職者としての態度・姿勢

① 看護職者にふさわしい倫理観と良識を備えており，対象者の代弁者となり得る責任感を持っている。

② 対象者に対し共感できる感性を持ち，対象者を思いやるケアリングの精神を備えている。

③ チーム医療の一員として，協働できる協調性と，対象者，家族，チーム構成員と良好な関係を構築できる対人関係能力を備えている。

３．看護職者として自己研鑽する意欲

① 医学・看護学の進歩や社会的ニーズの変遷に対応すべく，常に知識と技術を磨く自己研鑽する意欲を備えている。

② 常に新しい情報に敏感で，よりよい医療・看護を追求し開発していく向上心と探求心を有している。

③ 自らの特性と興味を自覚し，高度実践看護師等，将来歩むべきキャリアラダーについて考え計画する能力を有している。

④ 将来，災害看護や国際看護など，専門性の高い領域で活躍する看護師としての素養を有している。

４．保健師・助産師としての専門的知識・技能

① 健師課程を選択した者は，保健師国家試験の合格に必要な公衆衛生看護における知識を修得し，公衆衛生向上に向けた保健活動を展開する技術を修得している。

② 助産師課程を選択した者は，助産師国家試験の合格に必要な助産学における知識を修得しており，周産期医療の向上のための助産活動を展開する技術を修得している。

● 学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）の周知方法

・医学部ホームページ　http://www.med.u-fukui.ac.jp/home/ufms/cont_faculty/policy.html
・看護学科授業要項
・大学案内
・学生募集要項

（事務局資料）

② 学生が修得すべき知識・能力等に関して，シラバスにより科目別に学修目標，授業の内容，形式，到達目標，準備学修，総合評価割合，評価方法，教科書等を明記している（**資料 1-2-1-3**）。

資料 1-2-1-3　シラバスによる学生が修得すべき知識・能力等の明示

人の行動と心理

科　　目　　名		単位数又はコマ数	開　　講　　時　　期
人の行動と心理 （必　修）		１５コマ	１年次生後期
担当教員名	職名／所属	Ｅメールアドレス	オフィスアワー
安倍　博	教授／行動基礎科学	hiroabe@u-fukui.ac.jp	いつでも歓迎

1　学修目標

人や動物の心理的機能は，行動を指標としてそのメカニズムを知ることができます．その多くが中枢神経系とくに脳によって制御されています．近年，学習や記憶，情動やコミュニケーションなど，心理学でとりあげられていたさまざまな心理・行動機能の脳内メカニズムが，神経科学や脳科学において明らかにされつつあります．本講義では，心理・行動科学を「心と脳の科学」としてとらえ，心理・行動機能を脳神経系と関連づけながら学ぶことにより，人の行動と心理の理解をさらに深め，医師を志す者としてのプロフェッショナル意識の向上を目指すとともに，２年次からの基礎医学教育へのモチベーション（動機づけ）をさらに高めることを学修の目標とします．

2　授業の内容

回	項目	内容
1	心と脳	心はどこにある？：心と脳の研究史
2	脳の構造	脳の構造の解剖学的基礎
⋮	⋮	（中略）

3　授業の形式

講義を中心に行う．

4　到達目標

１．心のありかをみつける研究の歴史的背景を説明できる．
２．脳の基本的な構造と神経系における方角を説明できる．
（中略）

5　準備学修（予習・復習）等の内容と分量

・ 予習：参考図書の該当する章を予習してくること（１時間程度）。
・ 復習：授業内容を復習し，疑問点を整理すること（１時間程度）。

6　総合評価割合

定期試験８０％，修学態度２０％　計１００％

7　評価方法

① 定期試験（筆記試験）は，到達目標の達成状況をみるために，客観式及び論述式の問題とする．
② 再試験は１回のみ行う．
③ 修学態度は，授業出席状況，授業中の態度および毎回のミニッツ・ペーパー（授業内容のまとめや感想・質問などのミニ・レポート）の内容により評価する．

8　教科書及び参考書

教科書は使用せず，講義プリントを配布する．主な参考図書として以下のものを紹介しておく．

バイオサイコロジー　脳–心と行動の神経科学　　ピネル　　西村書店
神経科学テキスト　　脳と行動　　カールソン　丸善
神経科学　–脳の探求–　　ベアー，コノーズ，パラディーソ　西村書店

9　その他履修上の注意点等

この講義と関連するので，前期に選択科目「心理行動科学入門」を履修しておくことが望ましい．

■ シラバスは冊子体として学生に配布するとともに全学的に新しくなった電子シラバス（https://syllabus1.sao.u-fukui.ac.jp/）により随時検索・参照することができる。

（2015 年度医学科授業要項より抜粋）

【カリキュラムの体系性】

① 医学科ではカリキュラム・ポリシー（CP）（**資料 1-2-1-4**）をもとに「医学教育モデル・コア・カリキュラム―教育内容ガイドライン」に準拠した教育課程を実施し，平成 22 年度コア・カリキュラム改訂に合わせ地域医療学の新設等を行った（**資料 1-2-1-5, 6**）。更に，カリキュラムマップ及びカリキュラムツリーを作成し，体系性を明確化した（**資料 1-2-1-7, 8**）。

資料 1-2-1-4　医学科カリキュラム・ポリシー

● 教育課程の編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）

医学科では，教育理念・目標に基づき，①幅広い医学知識を持ち質の高い臨床能力を身につけ，②コミュニケーション能力に優れ，高い倫理観を持って患者中心の医療を実践でき，③日々進歩する医学知識・医療技術を生涯にわたり学ぶ習慣を身につけ，根拠に立脚した医療を実践できる，医療人の育成を主な目的とした教育課程を編成・実施します。さらに，④世界をリードする生命科学研究者・医学教育者となりうる，⑤個人と地域・国際社会の健康増進と疾病の予防・根絶に寄与し，国際的な視野でまたは地域に根ざした活動ができる，人材の育成を目的とした教育課程を編成・実施します。

具体的な教育課程の編成・実施は以下のようです。

1．本邦における医学教育の指針である「医学教育モデル・コア・カリキュラム―教育内容ガイドライン」に準拠し，ガイドラインの項目ごとに設定した授業科目で精選された基本的内容を重点的に履修させる教育課程を編成することを基本方針とする。
2．教養・準教育（１年次）は，医学部における教養教育（導入，準備教育を含む）の目標・理念に基づき，医療人としてふさわしい倫理観，良識などを養うための「総合教育科目」，「基礎教育科目」，「医学導入教育科目」から編成する。さらに，医学専門教育の準備という視点から基礎科学系科目を統合し，「準備教育モデル・コア・カリキュラム―教育内容ガイドライン」に準拠した「医学準備教育科目」を編成する。
3．医療人として求められる，高い倫理観，コミュニケーション能力，安全管理能力，課題探求・問題解決能力などを涵養するための授業科目を６年一貫カリキュラムの中（１～６年次）に編成する。
4．臨床前教育（２～４年次）では，修得すべき基本的学習内容を教授する，基礎医学および臨床医学を関連づけて学習できる有機的連携のとれた「統合型科目」を必修科目として編成する。これと併設し，より専門的あるいは広範囲な関連する学習内容を教授する，「アドバンストコース」を編成する。さらに，「研究室配属」を含め，これら臨床前教育科目では医学・医療の基盤として医学研究があることを理解し，研究マインドの涵養を図る学習内容も教授する。
5．臨床実習前に身につけておくべき医師としての態度・診察技能，診断と治療の基本的内容を教授する，「診療の基本」等を４年次に開講する。なお，臨床前教育における達成状況は共用試験（CBT，OSCE）によって検証する。
6．臨床実習（クリニカルクラークシップ）は，「実際の患者に当たって，患者の有する身体的・精神的・社会的問題点を的確に把握し，その各々について患者に適切な処置および指導を与えることができるようになるための基本的な医学知識・技能および医師として患者に接する態度を身につける」ことを基本的目標とし，この目標に沿って診療参加型臨床実習や関連地域医療機関での実習などを導入した「臨床実習」（５年次）および「卒前臨床医学研修」（6 年次）から編成する。また，臨床実習で修得した基本的な医学知識・技能を基盤として実践的な臨床能力がさらに向上するよう，疾患別の系統的な学習のための「実践臨床病態学」（6 年次）を開講する。なお，実践的な臨床能力等の修得状況は全臨床系科目について実施されるクリニカルアセスメント（最終試験）によって検証する。
7．医療・医学究の場で活用できる英語力を涵養する「医学英語科目」（１～４年次）を教養・準備教育科目，臨床前教育科目に併設し，開講する。
8．地域医療への意欲を涵養し，地域に根ざした活動に資する知識・技能を教授する，地域医療に係る科目を６年一貫カリキュラムの中に編成する。

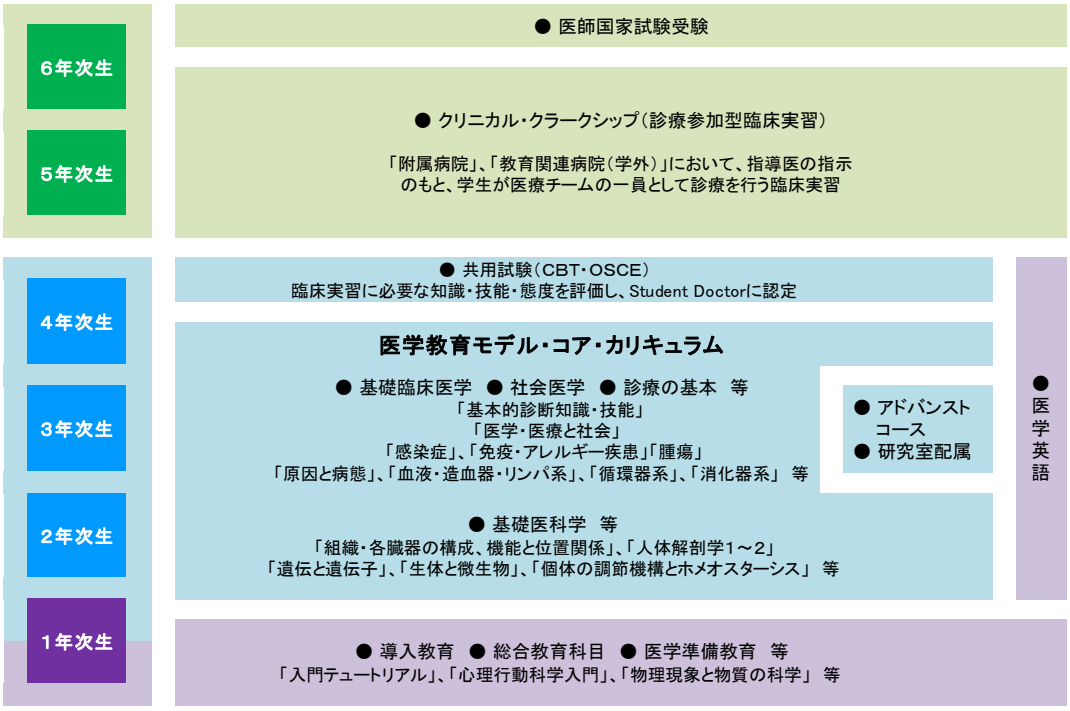
● 教育課程の編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）の周知方法

・医学部ホームページ　http://www.med.u-fukui.ac.jp/home/ufms/cont_faculty/policy.html
・医学科授業要項　・大学案内　・学生募集要項

（事務局資料）

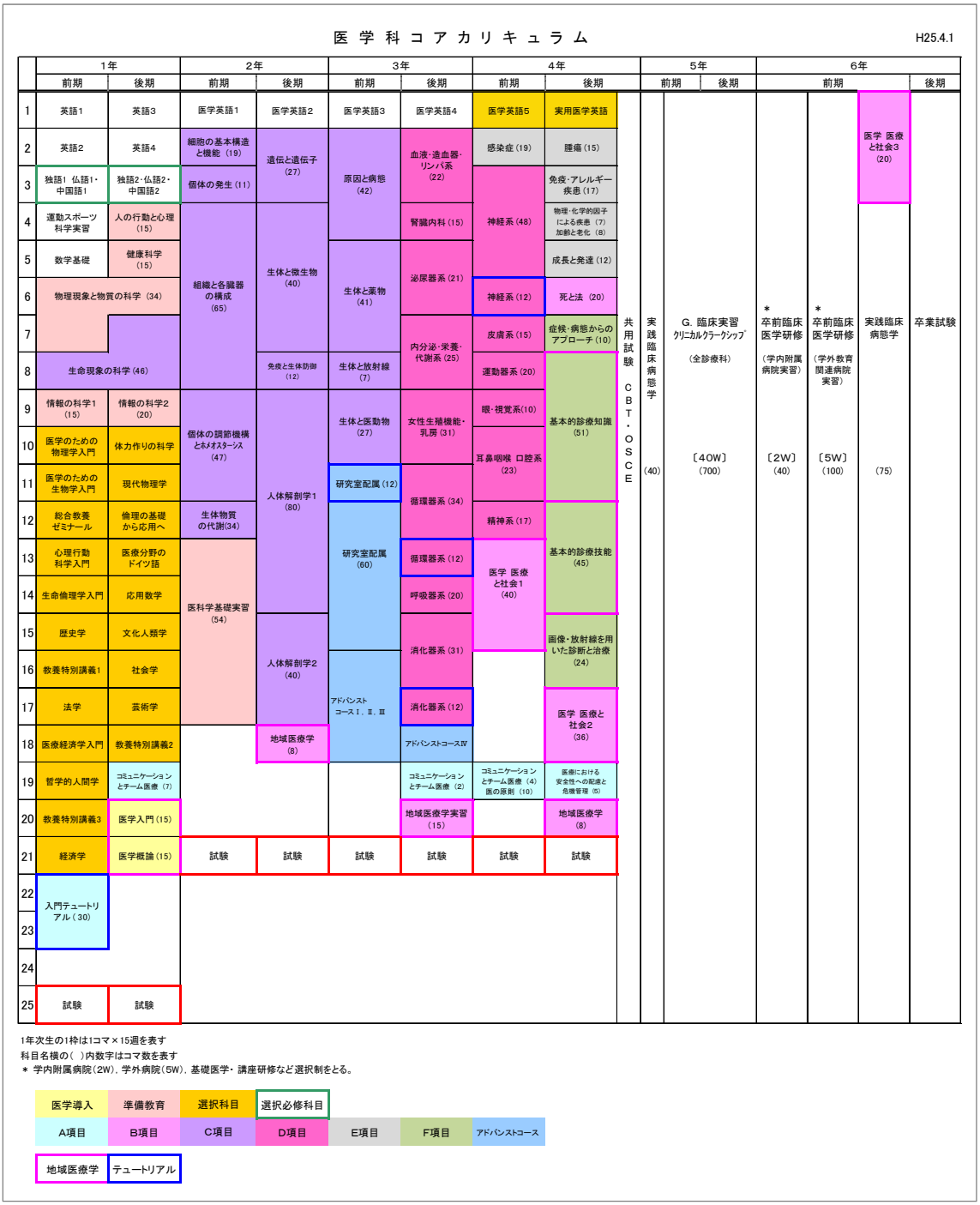
資料 1-2-1-5　医学科における教育の特徴

	特　徴
概要	医学科では，①幅広い医学知識を持ち質の高い臨床能力を身につけるための「医学教育モデル・コア・カリキュラム」に準拠した科目，②コミュニケーション能力や高い倫理観を涵養する「教養教育」，③医学を生涯にわたり学ぶ習慣を身につけ，根拠に立脚した医療を実践する能力を養う「テュートリアル教育」，④世界をリードする生命科学研究者や医学教育者への始まりとなる最新で高度な医学，医学知識を学ぶ「アドバンストコース」や「研究室配属」，⑤医師あるいは医学研究者として国際的な視野でまたは地域に根ざした活動の基礎となる「医学英語」「地域医療学」等が配置され，４年次おける共用試験（CBT・OSCE）を合格した学生がステューデントドクターとして臨床実習を行い，医師国家試験で求める専門技能の修得に必要な専門科目や臨床実習科目等が体系的に構成されている。
語学教育	グローバル社会で活躍できる実践的英語能力を備えた医療人を育成するため，現代 GP「医学英語と医学・看護学の統合的一貫教育」事業を基に，英語学教員と医学部教員が共働した医学英語科目を教養及び専門教育課程で展開している。
課題探究・解決能力	課題探究・解決能力涵養のためテュートリアル教育等の自己主導型教育が積極的に導入されている。
臨床能力	基礎医学と臨床医学とを有機的に関連づけた「統合型カリキュラム」と疾患別講義の「実践臨床病態学」により学び，臨床能力の向上をはかるため「診療参加型臨床実習」などの臨床実習を実施し，臨床能力涵養に工夫がなされている。
特色ある教育	６年間にわたり地域医療の課題や実際を講義と実習で学ぶ「地域医療人育成プログラム」が開講されている。 基礎科目及び臨床科目の中で人体構造を画像で学ぶ「画像医学」が取り入れられている。



（事務局資料）

資料 1-2-1-6　医学科カリキュラム



（事務局資料）

資料 1-2-1-7　医学科カリキュラムマップ

福井大学医学科カリキュラムマップ

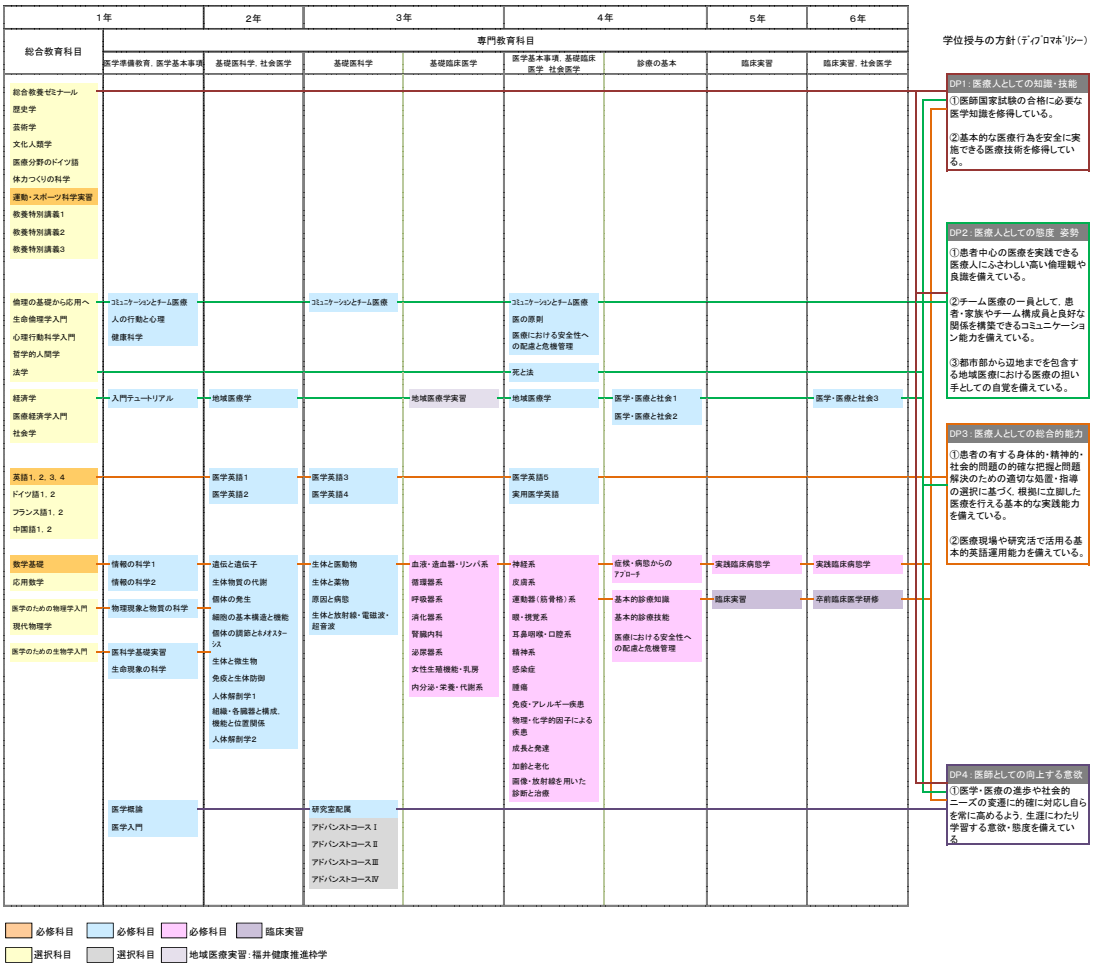
2015/3/1

区　分	科　目　名	DP1 医療人としての知識・技能	DP2 医療人としての態度・姿勢	DP3 医療人としての総合的能力	DP4 医師としての向上する意欲
総合教育科目	総合教養ゼミナール	○	○		○
	倫理の基礎から応用へ	○	○	○	○
	生命倫理学入門	○	○	○	○
	心理行動科学入門	○	○	○	○
	経済学	○	○	○	○
	医療経済学入門	○	○	○	○
	歴史学	○	○		○
	哲学的人間学	○	○	○	○
	芸術学	○	○		○
	法学	○	○	○	○
	社会学	○	○	○	○
	文化人類学	○	○		○
	医療分野のドイツ語	○	○		○
	体力作りの科学	○	○		○
	応用数学（医学などに関連して）	○	○		○
	現代物理学	○	○		○
	教養特別講義１	○	○		○
	教養特別講義２	○	○		○
	教養特別講義３	○	○		○
基礎教育科目	数学基礎	○		○	○
	医学のための物理学入門	○		○	○
	医学のための生物学入門	○		○	○
	運動・スポーツ科学実習	○	○		○
	英語１	○		○	○
	英語２	○		○	○
	英語３	○		○	○
	英語４	○		○	○
	ドイツ語１	○		○	○
	ドイツ語２	○		○	○
	フランス語１	○		○	○
	フランス語２	○		○	○
	中国語１	○		○	○
	中国語２	○		○	○
医学準備教育	医学概論				○
	医学入門				○
	人の行動と心理	○	○	○	○
	物理現象と物質の科学	○		○	○
	医科学基礎実習	○		○	○
	情報の科学１	○		○	○
	情報の科学２	○		○	○
	健康科学	○	○	○	○
医学外国語	医学英語１	○		○	○
	医学英語２	○		○	○
	医学英語３	○		○	○
	医学英語４	○		○	○
	医学英語５	○		○	○
	実用医学英語	○		○	○
医学基本事項	医の原則	○	○	○	○
	医療における安全性への配慮と危機管理	○	○	○	○
	コミュニケーションとチーム医療	○	○	○	○
	入門チュートリアル	○	○	○	○
社会医学	地域医療学	○	○	○	○
	医学・医療と社会１	○	○	○	○
	医学・医療と社会２	○	○	○	○
	医学・医療と社会３	○	○	○	○
	死と法	○	○	○	○
基礎医科学	生命現象の科学	○		○	○
	細胞の基本構造と機能	○		○	○
	組織・各臓器の構成，機能と位置関係	○		○	○
	個体の調節機構とホメオスターシス	○		○	○
	個体の発生	○		○	○
	生体物質の代謝	○		○	○
	遺伝と遺伝子	○		○	○
	生体と微生物	○		○	○
	生体と医動物	○		○	○
	免疫と生体防御	○		○	○
	生体と放射線・電磁波・超音波	○		○	○
	生体と薬物	○		○	○
	原因と病態	○		○	○
	人体解剖学１	○		○	○
	人体解剖学２	○		○	○
基礎臨床医学１	血液・造血器・リンパ系	○		○	○
	神経系	○		○	○
	皮膚系	○		○	○
	運動器（筋骨格）系	○		○	○
	循環器系	○		○	○
	呼吸器系	○		○	○
	消化器系	○		○	○
	腎臓内科	○		○	○
	泌尿器系	○		○	○
	女性生殖機能・乳房	○		○	○
	内分泌・栄養・代謝系	○		○	○
	眼・視覚系	○		○	○
	耳鼻咽喉・口腔系	○		○	○
	精神系	○		○	○
基礎臨床医学２	感染症	○		○	○
	腫瘍	○		○	○
	免疫・アレルギー疾患	○		○	○
	物理・化学的因子による疾患	○		○	○
	成長と発達	○		○	○
	加齢と老化	○		○	○
診療の基本	症候・病態からのアプローチ	○		○	○
	基本的診療知識	○		○	○
	基本的診療技能	○		○	○
	画像・放射線を用いた診断と治療	○		○	○
臨床研修	地域医療学実習	○	○	○	○
	臨床実習	○		○	○
	卒前臨床医学研修	○		○	○
その他	実践臨床病態学	○		○	○
	アドバンストコースⅠ				○
	アドバンストコースⅡ				○
	アドバンストコースⅢ				○
	アドバンストコースⅣ				○
	研究室配属				○

(http://www.cahe.u-fukui.ac.jp/file/069cc1e6-082a-11e5-bba6-4f38c6cefb29/)

（事務局資料）

資料 1-2-1-8　医学科カリキュラムツリー



（http://www.cahe.u-fukui.ac.jp/file/a54d388e-082a-11e5-90fc-4f38c6cefb29/）

（事務局資料）

② 看護学科ではCPにもとづき（**資料 1-2-1-9**），看護学教育指導指針に準拠した教育課程による「より高い看護実践能力の涵養」を行うカリキュラムを編成している（**資料 1-2-1-10～11**）。これらは保健師助産師看護師養成所指定規則改正（平成 23 年）に対応し平成 24 年度入学生より保健師教育課程を選択制としている。また，県内唯一の助産師教育課程を有している。カリキュラムマップ及びカリキュラムツリーを作成し，これらの体系性を明確化した（**資料 1-2-1-12～13**）。

資料 1-2-1-9　看護学科カリキュラム・ポリシー

●教育課程の編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）

看護学科では，教育理念・目標に基づき，①看護の対象となる人間を総合的に理解でき，②高い倫理観を持ち看護の対象となる人間の権利を守ることができ，③健康に関わる諸問題の解決に必要な知識・技術を主体的に学び創造する能力をもち，④関連領域の専門家と協力し必要に応じて調整的な役割を果たす能力，および⑤看護を批判的に吟味し建設的・創造的に発展させる能力をもち自己啓発のできる看護職者の育成を主な目的とした教育課程を編成・実施します。

カリキュラムの特徴として，将来の職業選択に生かせるよう，選択科目を多くした多様性のある教育を行っています。特に実習では，保健師課程の公衆衛生看護学実習，助産師課程の助産学実習の他，将来，キャリアアップに役立つ看護の専門分野での実習や，看護に役立つスキルを身につける実習などが選べます。また，医学部附属病院を主な実習病院としていることから，充実した最新の医療における看護が学べます。なお看護学科を修了した者は，看護師の他に保健師，助産師になるための国家試験受験資格を得ることができます。加えて，所定の単位を取得し保健師国家試験に合格したものは，養護教諭２種を取得することができます。

〈教養教育〉

入学初年次より，幅広い人間性と感性を養うための知識体系としての基礎科目を学びます。また，看護の対象となる「人間」をより深く理解するためのコミュニケーション能力や，医療をめぐる諸問題等について学び，看護職者としてふさわしい倫理観と幅広い教養と心身を豊かにするための素養を身につけます。

〈入学初期から２年次における基礎医学教育の導入および基礎看護学〉

専門基礎科目では，専門教育に必要な基礎学力と，生命基礎科学，健康科学，環境科学を学び，看護職者として必須な生命の基礎に関する学力を身につけます。また，将来の看護のリーダーとして自ら学び研鑽する力を養うための看護学入門や，「看護とは何か」について常に考え行動する能力と技術を学ぶ基礎看護学の科目を履修することで，自己啓発能力と創造的思考力を備えた専門職者としての看護のあり方について学びます。

〈２年次からの看護学専門領域の講義・演習〉

２年次から３年次にかけて，将来看護師として人々とかかわるために必要な専門的知識・技術を講義ならびに演習を通して学びます。特に，乳児期から青年期，成人期，壮年期，老年期における，さまざまな急性的・慢性的健康問題に対し，適切な看護ケアを提供する能力と技術を学びます。また，複雑化・重症化する健康問題に対処するため，災害看護学やがん看護学，ターミナル看護学など専門的な看護の領域における知識と技術を修得します。加えて将来高度実践看護師等の専門性の高い看護師になるための素養を身につけます。最終学年次である４年次には，自らのテーマを決め研究を実施し，卒業研究をまとめることで研究的視点を養います。

〈臨地実習〉

臨地実習は，１年次の基礎看護学実習に始まり，４年次までに，病院や地域の施設で実習を行います。実習場所は，福井大学に隣接する医学部附属病院，学外の医療施設 及び介護老人保健施設など多岐にわたります。臨地実習の目的は看護実践能力の向上にあります。看護技術の到達度を確認しながら，創造的に看護技術を提供し，あらゆる健康レベルに対応した看護を展開します。また，看護実践のあらゆる場面で，看護の理論と実践を結びつけて理解する能力やチームの一員としての連携・協働する能力を学びます。

〈保健師課程（選択）〉

保健師課程では，性別，年齢，そして病気や障がいの有無に関わらず，地域で生活するすべての人々がより健康に安心して暮らせる支援ができるよう，看護の知識・技術はもちろん，健康と深くかかわる環境，医療，福祉の視点からも学びを深めます。講義・演習・実習（健康福祉センター（県の保健所），市町村保健センター等）を通じて，“地域”で“地域”を支援できる保健師の育成を目指します。

〈助産師課程（選択）〉

助産師は，出産する人が安心して分娩できるよう，病院や産院・助産所で妊産婦への指導や分娩時の介助，新生児のケアや育児相談などを行い，さらに，女性や家族の一生を通した性と生殖をめぐる健康問題に関わる専門職です。

助産師課程では，妊産褥婦および胎児・新生児の健康状態を診断し，自然で安全な妊娠・出産・産後の経過を見守り，育児がスムーズに行なえるよう援助できる能力について修得します。また，女性や家族の一生における性と生殖をめぐる健康問題についても，相談や教育，援助活動ができる知識やスキルを修得します。さらに，女性や家族が安心して子どもを産み育てるため，個人や社会にとって必要な地域の社会資源の活用や調整を行なえる能力を修得します。

● 教育課程の編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）の周知方法

・医学部ホームページ　http://www.med.u-fukui.ac.jp/home/ufms/cont_faculty/policy.html
・看護学科授業要項　・大学案内　・学生募集要項

（事務局資料）

資料 1-2-1-10　看護学科における教育の特徴

	特　徴
概要	看護学科では，①看護の対象となる人間を総合的に理解し②高い倫理観を持ち，看護の対象となる人間の権利を守る能力を養う「基礎科目」，③健康に関わる諸問題の解決に必要な知識・技術を主体的に学び創造する能力を養う「専門基礎科目」と「専門科目」，④関連領域の専門家と協力し必要に応じて調整的な役割を果たす能力を養う「臨地実習」，⑤看護を批判的に吟味し建設的・創造的に発展させる能力を養う「基礎専門科目」「専門科目」，を１年次から順に配置した「看護学教育指導指針」に準拠した教育課程が編成され，看護師国家試験で求める専門技能の修得に必要な専門科目や臨床実習科目等が体系的に構成されている。また，保健師及び助産師の国家試験受験要件となる科目を選択科目として配置している。
語学教育	グローバル社会で活躍できる実践的英語能力を備えた医療人を育成するため，現代 GP「医学英語と医学・看護学の統合的一貫教育」事業を基に，英語学教員と医学部教員が共働した医学英語科目を教養及び専門教育課程で展開している。
課題探究・解決能力	課題探究・解決能力涵養のため卒業研究等の自己主導型教育の実施と共に，各専門科目の講義において学生参加型授業・演習等が導入されている。
臨地実習等	臨床能力を養う実習を１年次から開始し，能力向上を図る「看護技術実習」「看護キャリアアップ実習」等臨床実習科目に工夫がなされている。
特徴的な教育	多職種チーム医療の基礎を学ぶ医学科学生との「医看合同講義・実習」を本邦初の正式カリキュラムとして実施している。

（事務局資料）

資料 1-2-1-11　看護学科カリキュラム

看護学科 教育課程計画表（H24.4～）

区分		1年次 前期	1年次 後期	2年次 前期	2年次 後期	3年次 前期	3年次 後期	4年次 前期	4年次 後期	
基礎科目	人間理解	教養特別講義Ⅲ（選） 日本国憲法（選） 法学（選） 教養特別講義Ⅱ（選）	哲学Ⅰ 生命倫理学 芸術学（選） 教養特別講義Ⅰ（選） 文化人類学（選） 社会学（選） 心理学	教育学					哲学Ⅱ（選）	保健師・助産師・看護師 国家試験
	情報処理	情報科学		統計学						
	語学	英語Ⅰ ドイツ語Ⅰ（選） フランス語Ⅰ（選） 中国語Ⅰ（選）	英語Ⅱ ドイツ語Ⅱ（選） フランス語Ⅱ（選） 中国語Ⅱ（選）	英語Ⅲ	英語Ⅳ	英語Ⅴ（選）			英語Ⅵ（選）	
	体育	健康・スポーツ科学								
専門基礎科目	生命基礎科学	生命基礎科学（化学） 看護学のための生命基礎科学実験（化学）（選） 生命基礎科学（生命科学） 看護学のための生物学入門（選）	生命基礎科学（物理学）（選） 看護学のための生命基礎科学実験（物理学）（選）							
	健康科学	健康科学論 形態機能論Ⅰ	形態機能論Ⅱ 形態機能論実習（選） 生体反応論Ⅰ 生体反応論Ⅱ 生体反応論実習（選）	疾病論Ⅰ 薬理作用論 健康管理論 □成長発達論（選）	疾病論Ⅱ 人間行動論（選）	心理測定論（選）				
	環境科学	生活科学論（選） ○環境科学論（選）			○疫　　学（選） ○保健統計論（選）	保健医療福祉論Ⅰ ○保健医療福祉論Ⅱ（選）				
専門科目	基礎看護	看護学入門（選） 看護学概論	日常生活援助論	看護過程論 看護ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ論 療養生活援助論	ﾍﾙｽｱｾｽﾒﾝﾄ論（選）	看護倫理 ﾘｽｸﾏﾈｰｼﾞﾒﾝﾄ論			看護管理	
	健康時の看護			公衆衛生看護学概論		○公衆衛生看護展開論Ⅰ（選） ○公衆衛生看護展開論Ⅱ（選） ○公衆衛生看護管理論（選） □育児援助論（選）		○学校保健論（選） ○産業保健論（選） ○国際保健論（選） □助産学概論（選） □助産論Ⅰ（選） □助産論Ⅱ（選）		
	健康障害時の看護			成人看護学概論 老年看護学概論	急性期看護活動論 慢性期看護活動論 ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ看護活動論 老年看護活動論 母子看護学概論 精神看護学概論 在宅看護論	災害看護論 がん看護論（選） ﾀｰﾐﾅﾙ看護論（選） 小児看護活動論 母性看護活動論 精神看護活動論 感染予防看護論（選） □発達障害看護論（選）				
	臨地実習	基礎看護学実習Ⅰ			基礎看護学実習Ⅱ		○公衆衛生看護学実習（選） 成人看護学実習Ⅰ 成人看護学実習Ⅱ 老年看護学実習 小児看護学実習 母性看護学実習 精神看護学実習 在宅看護学実習 看護技術実習 キャリアアップ実習（選）	□助産学実習 選	
	卒業研究							卒業研究方法論 卒業研究		

○保健師国家試験受験資格取得に必要な選択授業科目，□印は助産師国家試験受験資格取得に必要な選択授業科目
（赤字）H23年度までのカリキュラムから新設・名称変更等のあった授業科目
（選）選択科目

◆養護教諭2種免許取得のための科目の開講
（学生のニーズに対応した科目）
日本国憲法（１年次）
◆看護職に社会から求められている科目の開講
（より高い看護実践能力の向上のための科目）
看護技術実習（３～４年次），キャリアアップ実習（３～４年次）
◆保健師助産師看護師学校養成所指定規則改正に伴い単位数の増加
（保健師の国民のニーズに対応した科目）
公衆衛生看護学実習（３～４年次）

（事務局資料）

資料 1-2-1-12　看護学科カリキュラムマップ

医学部看護学科カリキュラム・マップ

◎＝CP DP達成のために特に重要な事項、○＝CP DP達成のために重要な事項、△＝CP・DP達成のために望ましい事項

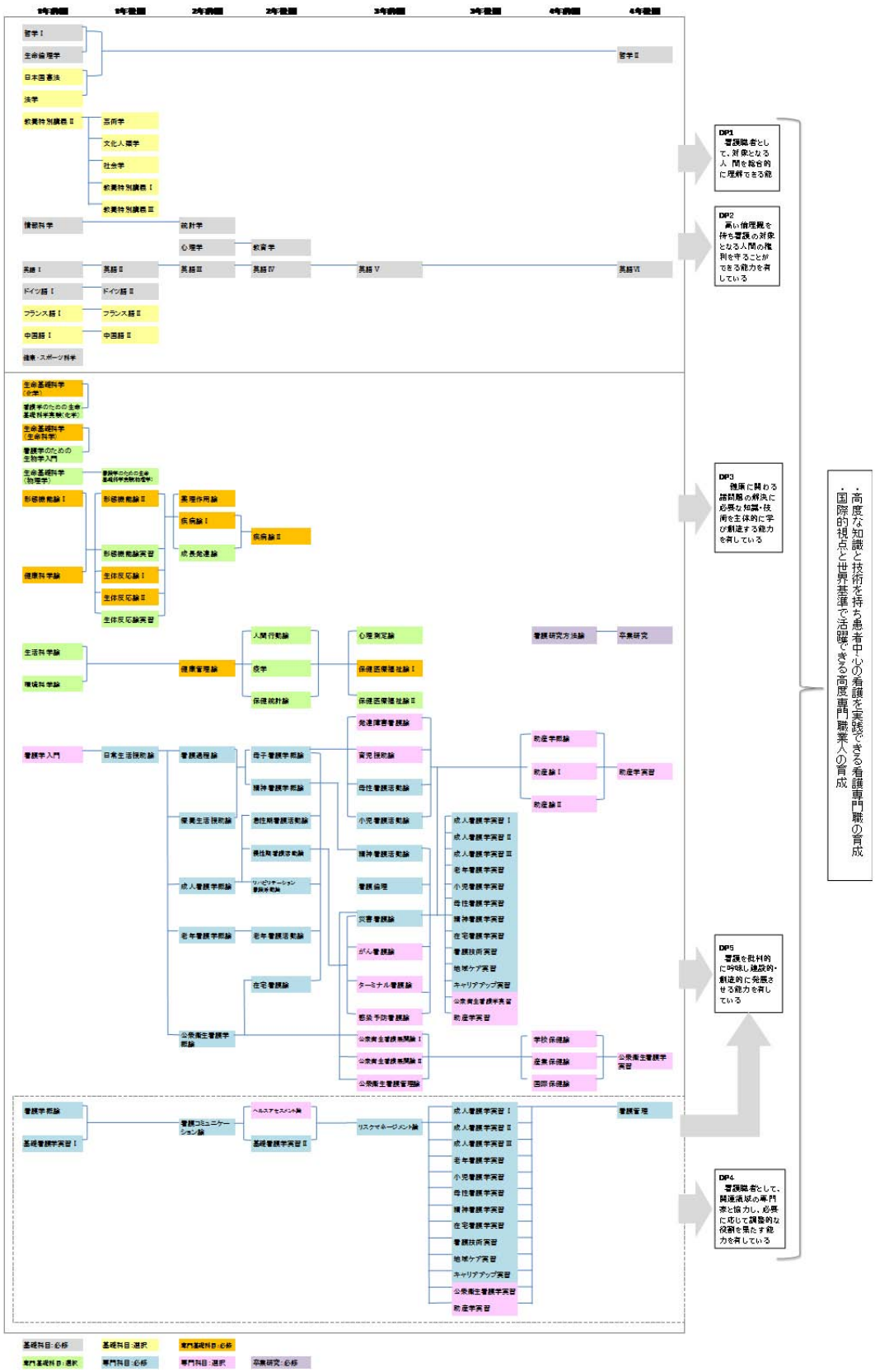
区分（基礎科目・専門科目など）		NO	DP	DP1 看護職者として、対象となる人間を総合的に理解できる能力を有している	DP2 高い倫理観を持ち看護の対象となる人間の権利を守ることができる能力を有している	DP3 健康に関わる諸問題の解決に必要な知識・技術を主体的に学び創造する能力を有している		DP4 看護職者として、関連領域の専門家と協力し、必要に応じて調整的な役割を果たす能力を有している	DP5 看護を批判的に吟味し建設的・創造的に発展させる能力を有している		
			授業科目名	CP1 幅広い人間性と感性を養うための知識を修得させ、看護職者としてふさわしい倫理観と幅広い教養と心身を豊かにするための能力を育成する	CP1 幅広い人間性と感性を養うための知識を修得させ、看護職者としてふさわしい倫理観と幅広い教養と心身を豊かにするための能力を育成する	CP2 看護職者として必須な生命の基礎に関する知識を修得させると共に、自ら学び研鑽する能力を育成する	CP3 看護職者として、人々とかかわるために必要な専門的知識・技術を修得させると共に、健康レベルに対応した看護を展開できる実践能力を育成する	CP4 創造的に看護技術を提供し、看護実践のあらゆる場面で、看護の理論と実践を結びつけて理解する能力、チームの一員としての連携・協働する能力を育成する	CP2 看護職者として必須な生命の基礎に関する知識を修得させると共に、自ら学び研鑽する能力を育成する	CP3 看護職者として、人々とかかわるために必要な専門的知識・技術を修得させると共に、健康レベルに対応した看護を展開できる実践能力を育成する	CP4 創造的に看護技術を提供し、看護実践のあらゆる場面で、看護の理論と実践を結びつけて理解する能力、チームの一員としての連携・協働する能力を育成する
基礎科目	人間理解		哲学Ⅰ	◎	◎						
			哲学Ⅱ	◎	◎						
			生命倫理学	◎	◎						
			芸術学	◎	◎						
			教養特別講義Ⅰ	◎	◎						
			教養特別講義Ⅲ	◎	◎						
			日本国憲法	◎	◎						
			法学	◎	◎						
			文化人類学	◎	◎						
			社会学	◎	◎						
			教養特別講義Ⅱ	◎	◎						
			心理学	◎	◎	○			○		
			教育学	◎	◎	○			○		
	情報処理		統計学	◎	◎	○			○		
			情報科学	◎	◎						
	語学		英語Ⅰ	◎	◎						
			英語Ⅱ	◎	◎						
			英語Ⅲ	◎	◎						
			英語Ⅳ	◎	◎						
			英語Ⅴ	◎	◎						
			英語Ⅵ	◎	◎						
			ドイツ語Ⅰ	◎	◎						
			ドイツ語Ⅱ	◎	◎						
			フランス語Ⅰ	◎	◎						
			フランス語Ⅱ	◎	◎						
			中国語Ⅰ	◎	◎						
			中国語Ⅱ	◎	◎						
	体育		健康・スポーツ科学	◎	◎						
専門基礎科目	生命基礎科学		生命基礎科学(化学)			◎			◎		
			看護学のための生命基礎科学実験（化学）			◎			◎		
			生命基礎科学(生命科学)			◎			◎		
			看護学のための生物学入門			◎			◎		
			生命基礎科学(物理学)			◎			◎		
			看護学のための生命基礎科学実験（物理学）			◎			◎		
	健康科学		健康科学論			◎			◎		
			形態機能論Ⅰ			◎			◎		
			形態機能論Ⅱ			◎			◎		
			形態機能論実習			◎			◎		
			生体反応論Ⅰ			◎			◎		
			生体反応論Ⅱ			◎			◎		
			生体反応論実習			◎			◎		
			薬理作用論			◎			◎		
			疾病論Ⅰ			◎			◎		
			疾病論Ⅱ			◎			◎		
			健康管理論			◎			◎		
			心理測定論			◎			◎		
			□成長発達論			◎			◎		
			人間行動論			◎			◎		
	環境科学		生活科学論			◎			◎		
			○環境科学論			◎			◎		
			保健医療福祉論Ⅰ			◎			◎		
			○保健医療福祉論Ⅱ			◎			◎		
			○疫学			◎			◎		
			○保健統計論			◎			◎		
専門科目	基礎看護		看護管理					◎			◎
			看護倫理				◎			◎	
			看護学入門				◎			◎	
			看護学概論				◎	○		◎	○
			看護過程論				◎			◎	
			看護ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ論				◎	○		◎	○
			日常生活援助論				◎			◎	
			療養生活援助論				◎			◎	
			ヘルスアセスメント論				◎	○		◎	○
			リスクマネージメント論				◎	○		◎	○
	健康時の看護		公衆衛生看護学概論				◎	○		◎	○
			○公衆衛生看護展開論Ⅰ				◎			◎	
			○公衆衛生看護展開論Ⅱ				◎			◎	
			○公衆衛生看護管理論				◎			◎	
			○学校保健論				◎			◎	
			○産業保健論				◎			◎	
			○国際保健論				◎			◎	
			□助産学概論				◎			◎	
			□助産論Ⅰ				◎			◎	
			□助産論Ⅱ				◎			◎	
			□育児援助論				◎			◎	
	健康障害時の看護		災害看護論				◎			◎	
			がん看護論				◎			◎	
			成人看護学概論				◎			◎	
			老年看護学概論				◎			◎	
			急性期看護活動論				◎			◎	
			慢性期看護活動論				◎			◎	
			ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ看護活動論				◎			◎	
			ターミナル看護論				◎			◎	
			老年看護活動論				◎			◎	
			母子看護学概論				◎			◎	
			小児看護活動論				◎			◎	
			母性看護活動論				◎			◎	
			精神看護学概論				◎			◎	
			精神看護活動論				◎			◎	
			感染予防看護論				◎			◎	
			□発達障害看護論				◎			◎	
			在宅看護論				◎			◎	
	臨地実習		基礎看護学実習Ⅰ				○	◎		○	◎
			基礎看護学実習Ⅱ				○	◎		○	◎
			○公衆衛生看護学実習				○	◎		○	◎
			成人看護学実習Ⅰ				○	◎		○	◎
			成人看護学実習Ⅱ				○	◎		○	◎
			成人看護学実習Ⅲ				○	◎		○	◎
			老年看護学実習				○	◎		○	◎
			小児看護学実習				○	◎		○	◎
			母性看護学実習				○	◎		○	◎
			精神看護学実習				○	◎		○	◎
			在宅看護学実習				○	◎		○	◎
			看護技術実習				○	◎		○	◎
			地域ケア実習				○	◎		○	◎
			キャリアアップ実習				○	◎		○	◎
			□助産学実習				○	◎		○	◎
卒業研究			看護研究方法論				◎	○		◎	○
			卒業研究				◎	○		◎	○

○印は保健師国家試験受験資格取得に必要な選択授業科目，□印は助産師国家試験受験資格取得に必要な選択授業科目

(http://www.cahe.u-fukui.ac.jp/file/2c17565c-082a-11e5-bba6-4f38c6cefb29/)

（事務局資料）

資料 1-2-1-13　看護学科カリキュラムツリー



（http://www.cahe.u-fukui.ac.jp/file/8274bbf8-0829-11e5-9d93-4f38c6cefb29/）

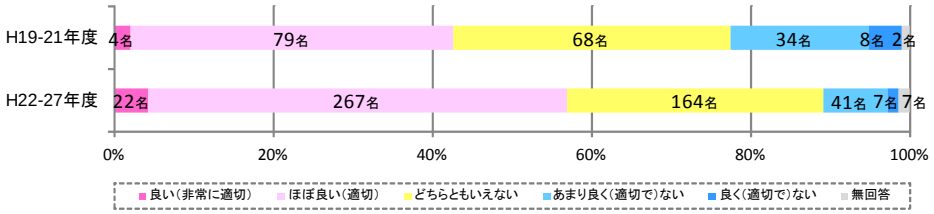
（事務局資料）

③　学生からの意見聴取を行い（**P4-58 前掲資料 1-1-5-4，P4-59 前掲資料 1-5-5-5**），より適切なカリキュラム編成となるよう改善を加えている。学生のカリキュラムに対する満足度は高く，かつ第１期より向上しており，関係者の期待に応えている（**資料 1-2-1-14～15**）。

資料 1-2-1-14　カリキュラムに対する学生の評価（医学科）

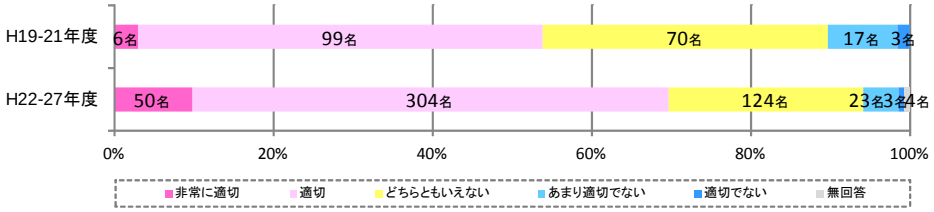
学生のカリキュラムに対する評価を第１期（平成 19～21 年度）と第２期（平成 22～27 年度）において比較した。過半の学生は医学教育カリキュラムが良好でありかつ臨床実習等が基礎的な技術・知識を修得する上で適切と捉え，カリキュラム全体の学習内容を消化できたとしており，全ての項目で第２期は第１期より良好である。

設問_医学教育カリキュラム全体の構成（科目構成，開講時期）などはいかがでしたか？



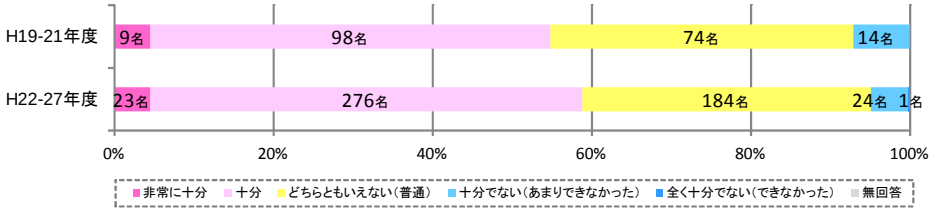
＊第１期と比較して，第２期では学生の評価（良い～ほぼ良いとした割合）は，14.3%向上している。

設問_臨床実習等の医学教育カリキュラムは基礎的な技術・知識を修得する上で適切なものでしたか？



＊第１期と比較して，第２期では学生の評価（非常に適切～適切とした割合）は，15.9%向上している。

設問_カリキュラム全体の学習内容を十分に消化できましたか？



＊第１期と比較して，第２期では学生の評価（非常に十分～十分とした割合）は，4.0%向上している。

■ カリキュラムの改善（例）

・医学科２年次生の講義実習スケジュール緩和のため，平成 25 年度より夏休みを 2 週間短縮し，「個体の調節機構とホメオスターシス」を開講することとした。

・医学科３年次４年次生でのアドバンストコースを改編し，平成 24 年度より３年次にアドバンストコース４コース（選択必修），４年次に必修として「腫瘍」，「画像・放射線を用いた診断と治療」を開講することとした。

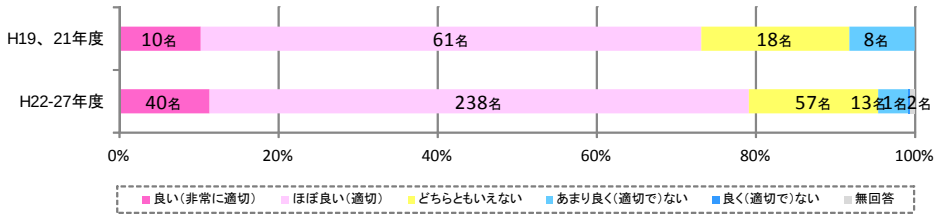
・医学科５年次生の臨床実習において，平成 25 年度より４週間実習時間を増加することとした。

（平成 19～27 年度「カリキュラム評価アンケート（６年次生用）」結果より抜粋）

資料 1-2-1-15　カリキュラムに対する学生の評価（看護学科）

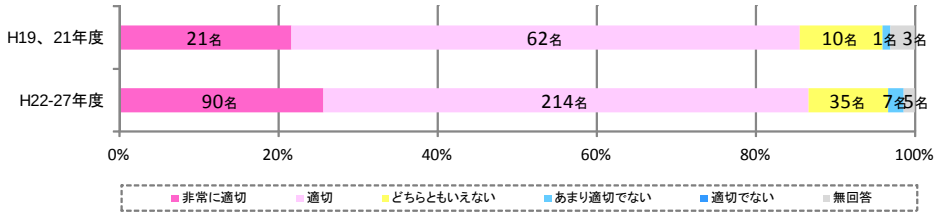
学生のカリキュラムに対する評価を第１期（平成 19～21 年度）と第２期（平成 22～27 年度）において比較した。過半の学生は看護学教育カリキュラムが良好でありかつ臨地実習等が基礎的な技術・知識を修得する上で適切と捉え，カリキュラム全体の学習内容を消化できたとしており，全ての項目で第２期は第１期より良好である。

設問_看護学科教育カリキュラム全体の構成（科目構成，開講時期）などはいかがでしたか？



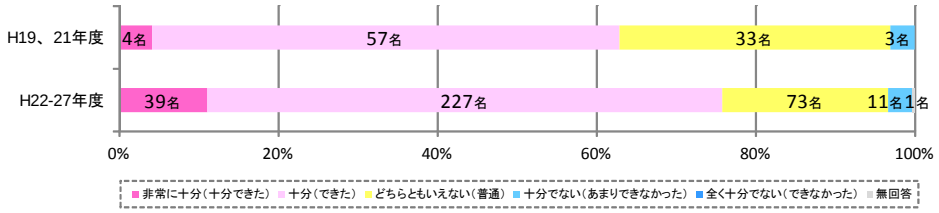
＊第１期と比較して，第２期では学生の評価（良い～ほぼ良いとした割合）は，6.0%向上している。

設問_臨地実習等の看護学教育カリキュラムは基礎的な技術・知識を修得する上で適切なものでしたか？



＊第１期と比較して，第２期では学生の評価（非常に適切～適切とした割合）は，1.0%向上している。

設問_カリキュラム全体の学習内容を十分に消化できましたか？



＊第１期と比較して，第２期では学生の評価（非常に十分～十分とした割合）は，13.0%向上している。

■ カリキュラムの改善（例）

・保健師課程では，平成 24 年度より公衆衛生看護実践力の強化のため保健師課程を選択制とした。
・国際的な看護活動や専門分野における看護実践力を養うキャリアアップ実習を平成 26 年度に新設した。

（平成 19～27 年度カリキュラム評価アンケート（４年次生用）結果より抜粋）

【教養教育の充実】

① 教養教育は共通・教養教育委員会により全学部的な視点から実施され，医学教育も，その一環として位置付けられている（**資料 1-2-1-16**）。これら教養教育に対する学生の満足度は良好であり，第１期より向上した（**資料 1-2-1-17**）。

資料 1-2-1-16　教養教育の概要

■ 医学教育（松岡キャンパス）の目的と編成

福井大学医学部では専門教育課程に先立って，あるいは並行して教養教育（導入，準備教育を含む）科目が開講されており，その目指すところは以下の通りです。

【教養教育の理念・目的】

将来の医療従事者にふさわしい倫理観，総合的判断能力や良識を養い，専門教育の履修に不可欠な基礎的な知識と技能や方法論を身につけた学生の育成を目的とする。

1．医学・看護学を学ぶことへの動機付けを行い，学ぶことへの主体的意欲を高める。
2．医学研究者・医療従事者としての倫理観を養う。
3．専門教育の履修に必要な基礎学力と基礎的技能を身につける。
4．医療・医学をめぐる人間や社会，思想等についての諸問題に関心を持つ。
5．人間理解とコミュニケーション能力を培い，将来の医療人としての幅広い教養と自己の心身を豊かにするための素養を身につける。

【編成の趣旨】

教養・準備教育は，医学部における教養教育（導入，準備教育を含む）の目標・理念に基づき，医療人としてふさわしい倫理観，良識などを養うための「総合教育科目」，「基礎教育科目」，「医学導入基礎科目」（以上，医学科），「基礎科目」（看護学科）から編成する。さらに，医学専門教育の準備という観点から基礎科学系科目を統合し，「準備教育モデル・コア・カリキュラム　－教育内容ガイドライン－」に準拠した「医学準備教育科目」を編成する。

【編成】

● 医学科　履修要件及び教養・準備教育科目一覧

区分	授業科目名						
総合教育科目（右記より14単位以上履修）	総合教養ゼミナール	倫理の基礎から応用へ	生命倫理学入門	心理行動科学入門	経済学	医療経済学入門	歴史学
	哲学的人間学	芸術学	法学	社会学	文化人類学	医療分野のドイツ語	体力作りの科学
	応用数学	現代物理学	教養特別講義1	教養特別講義2	教養特別講義3		
基礎教育科目（右記より15単位以上履修）	○数学基礎	医学のための物理学入門	医学のための生物学入門	○運動・スポーツ科学実習	○英語1	○英語2	○英語3
	○英語4	□独語1・仏語1・中国語1	□独語2・仏語2・中国語2				
医学導入教育科目（必修60時間）	○医学概論	○医学入門					
医学準備教育科目（必修306時間）	○人の行動と心理	○物理現象と物質の科学	○医学科基礎実習	○情報の科学1	○情報の科学2	○健康科学	

○は必修科目，□は選択必修科目

● 看護学科　履修要件及び基礎教育科目一覧

区分	授業科目名						
基礎科目（右記より18単位以上履修）	○哲学Ⅰ	□哲学Ⅱ	○生命倫理学	□芸術学	□教養特別講義Ⅰ	□教養特別講義Ⅲ	
	□日本国憲法	□法学	□文化人類学	□社会学	□教養特別講義Ⅱ		
	○心理学	○教育学	○統計学	○情報科学	○英語Ⅰ	○英語Ⅱ	○英語Ⅲ
	○英語Ⅳ	英語Ⅴ	英語Ⅵ	ドイツ語Ⅰ・Ⅱ	フランス語Ⅰ・Ⅱ	中国語Ⅰ・Ⅱ	○運動・スポーツ科学実習

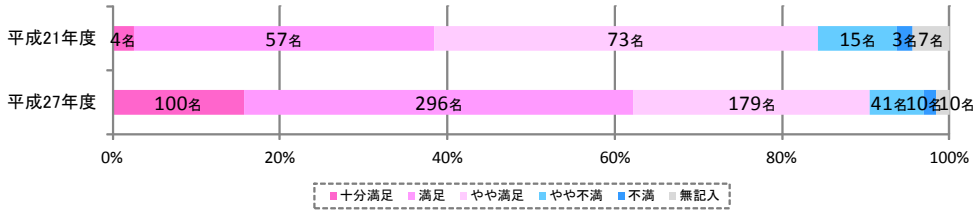
○は必修科目，□は選択必修科目

※ 平成 28 年度から科目構成，履修要件等を全学的に統一したものとすることとしている。

（事務局資料）

資料 1-2-1-17　教養教育に対する学生の評価

設問_教養・共通教育の授業全般について，あなたはどの程度満足していますか。（医学部学生）



＊第１期末と比較して，第２期末では学生の評価（十分満足～やや満足とした割合）は，6.1%向上している。

（平成 21 年度および平成 27 年度「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」結果より抜粋）

②　医療従事者に必要とされる教育カリキュラムとして，医療従事者に必要な教養，倫理観，知識思考力，コミュニケーション能力等を涵養する科目，また研究・生命倫理を教授する科目を配置し，学生の満足度は高い（**資料 1-2-1-18，19**）。

資料 1-2-1-18　医療従事者に必要とされる教養教育の編成

■ 医学科

教養教育として設定されている科目に加え，医療安全についての科目や医の倫理・生命倫理・研究倫理に関する科目を開講している。

区　分	授業科目名				
医療従事者に必要な教養	総合教養ゼミナール	歴史学	芸術学	社会学	文化人類学
	体力作りの科学	応用数学	現代物理学	医療分野のドイツ語	生命倫理学入門
	倫理の基礎から応用へ	心理行動科学入門	医療経済学入門	教養特別講義1～3	
高い倫理観を涵養する科目	倫理の基礎から応用へ	生命倫理学入門			
専門分野の枠を超えて共通に求められる知識思考力を涵養する科目	教養特別講義1～3	入門テュートリアル	医学入門	医学概論	
人間の生き方に関する洞察力を養う科目	哲学的人間学	心理行動科学入門			
コミュニケーション能力の向上を図るための科目	心理行動科学入門	人の行動と心理	コミュニケーションとチーム医療		
医の倫理・生命倫理・研究倫理に関する科目	倫理の基礎から応用へ	生命倫理学入門	医学入門	医学概論	医の原則
医療統計	情報の科学1	情報の科学2			
医療経済	医療経済学入門				研究倫理に関する科目
医療における安全管理能力を涵養するための科目	医療における安全性への配慮と危機管理				4年次履修科目

■ 看護学科

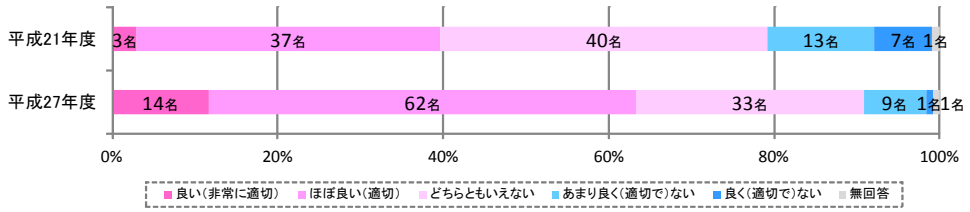
教養科目として設定されている科目に加え，研究倫理を含めた倫理観を涵養する科目を設定している。

区　分	授業科目名				
医療従事者として必要な教養科目	文化人類学	社会学	教育学	芸術学	法学
	日本国憲法	教養特別講義ⅠⅡⅢ	情報科学	健康・スポーツ科学	
看護実践能力を高めるため、看護実践場面における高い倫理観を涵養する科目	看護倫理	哲学Ⅱ			
人間の生き方に関する洞察力を養う科目	哲学	生命倫理学			
コミュニケーション能力の向上を図るための科目	心理学	看護コミュニケーション論			
医療統計	統計学				研究倫理に関する科目
研究倫理	看護研究方法論				2～4年次履修科目

（事務局資料）

資料 1-2-1-19　医療従事者に必要とされる教育に対する学生の評価

設問_今後の医療人に必須な倫理観を涵養するため「医の原則」や「医療における安全性への配慮と危機管理」を開講しましたが，開講時期や内容等はいかがでしたか？（医学科４年次生）



＊ 第１期末と比較して，第２期末では学生の評価（良い～ほぼ良いとした割合）は，23.7%向上している。

（平成 21 年度および平成 27 年度「カリキュラム評価アンケート」結果より抜粋）

【学部学生の研究マインド醸成】

① 医学科では最新の医学を学ぶ研究室配属(海外での研究実習を含む)(**資料 1-2-1-20**)やアドバンストコース（**資料 1-2-1-22**），大学院講義を受講するATMプログラム（**資料 1-2-1-23**），４大学コンソーシアムリトリート（**資料 1-2-1-24**）など医学研究への意欲を高める取組を行い，学生の研究マインド涵養状況は良好である（**資料 1-2-1-21**）。

資料 1-2-1-20　研究室配属（医学科３年次）

医学科では必須科目として研究に直結する研究室配属（平成 24 年度入学生より時間増）を行い，学生の研究への取組を行っている。なお研究を実施する研究室は本学医学部基礎系および臨床系研究室，本学附属の研究センターのみならず他大学（２校），海外大学等（16 施設）においても行っている。

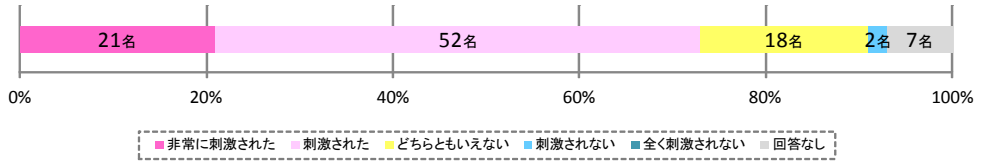
配属先等			平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	（計）
福井大学	医学部	人体解剖学・神経科学	6名	9名	4名	8名	5名	1名	33名
		組織細胞形態学・神経科学	2名	5名	4名	2名	1名	3名	17名
		分子生理学	5名	5名	2名	2名	5名	5名	24名
		統合生理学	4名	6名	3名	5名	2名	4名	24名
		分子遺伝学	2名	2名	3名	2名			9名
		分子生体情報学	2名	3名	1名	4名	2名	3名	15名
		腫瘍病理学	4名	4名	4名	1名	2名	2名	17名
		分子病理学	4名	2名	4名	3名	2名	2名	17名
		ゲノム科学・微生物学	4名	5名	5名	5名	8名	4名	31名
		薬理学	3名	4名			2名	4名	13名
		免疫学・寄生虫学	5名	6名	6名	6名	5名	4名	32名
		高次脳機能					1名	1名	2名
		放射線基礎医学			2名	2名			4名
		環境保健学		4名	2名		1名		7名
		法医学・人類遺伝学	8名	8名	8名	8名	5名	4名	41名
		テニュアトラック推進本部					5名	5名	10名
		内科学(1)	2名	3名	3名	1名			9名
		内科学(2)	3名	3名	2名	3名	6名	4名	21名
		内科学(3)	2名	1名	2名	2名		2名	9名
		循環器内科学					1名		1名
		小児科学	1名	1名	1名			1名	4名
		精神医学	1名		1名	3名	1名		6名
		皮膚科学	1名	2名	2名		1名	1名	7名
		放射線医学	4名	1名	2名	2名	4名	4名	17名
		外科学(1)	3名	3名	3名	4名	7名	5名	25名
		外科学(2)				2名			2名
		整形外科学	2名	3名	1名	3名	1名	3名	13名
		脳脊髄神経外科学	3名	3名	2名	3名	4名		15名
		麻酔・蘇生学			4名	3名	2名	2名	11名
		産科婦人科学	2名	2名	2名	1名	1名	2名	10名
		泌尿器科学	1名	1名		1名		1名	4名
		眼科学	4名	4名	2名				10名
		耳鼻咽喉科学・頭頸部外科学	2名	2名		1名			5名
		腎臓病態内科学	2名	2名	2名	3名			9名
		病理部	3名	3名	3名	3名	3名	3名	18名
		地域医療推進講座		5名	6名	6名	9名	10名	36名
	高エネルギー医学研究センター		3名	4名	4名	5名	10名	7名	33名
	ライフサイエンス支援センター			1名					1名
	子どものこころの発達研究センター					5名	9名	9名	23名
			(88名)	(107名)	(90名)	(99名)	(105名)	(96名)	(585名)
他大学等	兵庫医科大学				1名				1名
	川崎医科大学血液検査室				1名				1名
			(0名)	(0名)	(2名)	(0名)	(0名)	(0名)	(2名)
海外大学等	NCI分子薬理学研究室(アメリカ)				1名	1名			2名
	クリーブランドクリニック(アメリカ)						2名	1名	3名
	サンフォードバーナム研究所(アメリカ)						3名	1名	4名
	ジョンズホプキンス大学(アメリカ)				1名	2名	3名		6名
	ノースウエスタン大学(アメリカ)							2名	2名
	マイアミ大学バスコムパルマー眼科研究所(アメリカ)					2名			2名
	アイルランガ大学(インドネシア)			1名	1名	1名			3名
	マケレレ大学(ウガンダ)				2名	2名			4名
	グラーツ医科大学(オーストリア)			1名					1名
	オシエク大学(クロアチア)							1名	1名
	バルセロナ自治大学(スペイン)						1名		1名
	タイ厚生省労働保健局、タイ中央胸部研究所(タイ)				3名				3名
	ラヨーン産業保健・環境保健センター、タイ中央胸部研究所(タイ)					3名			3名
	ラヨーン産業衛生環境開発センター(タイ)						1名		1名
	高雄医科大学(台湾)					1名			1名
	イエディテペ大学(トルコ)						1名		1名
			(0名)	(2名)	(8名)	(12名)	(11名)	(5名)	(38名)
（計）			88名	109名	100名	111名	116名	101名	625名

（事務局資料）

資料 1-2-1-21　研究室配属の学生による評価

■ 研究室配属に対する学生の評価（医学科３年次生）

設問_研究室配属によって研究・学習内容に対する意欲が刺激されましたか



（平成 27 年度「カリキュラム評価アンケート」結果より抜粋）

資料 1-2-1-22　アドバンストコース

３年次に「アドバンストコース」（選択必修科目）を開講し，非常勤講師等による研究に直結する専門的医科学分野の講義と共にライフサイエンス支援センター（**P4-11 前掲資料 1-1-1-8**）における先端医学生物工学実習を実施いている。

■ アドバンストコースⅠ

「シグナルトランスダクションの諸相」と題して，細胞の情報伝達機構についての基礎と最新知見，ホルモンの個体及び疾病における意義について学ぶ。

■ アドバンストコースⅡ

「医科学特論」として，生命科学の研究成果と臨床医学への応用について，現状を正しく把握し，生命科学研究の進展を理解することを目指す。

■ アドバンストコースⅣ

「先端医学生物工学実習コース」として，最新のバイオ実験機器の特性と性能について実際の操作を踏まえて理解し，病態病因解析へのつながりを理解すると共に，実験モデル動物について発生工学的知見を理解することを目指す。

■ アドバンストコースⅡシラバス（一部抜粋）

アドバンストコースⅡ

科　目　名	単位数又はコマ数	開　講　時　期
アドバンストコースⅡ （医科学特論） （選　択）	１５コマ	３年次生前期

担当教員名	職名／所属	Ｅメールアドレス	オフィスアワー
宮本　薫	教授/分子生体情報学	kmiyamot@u-fukui.ac.jp	常時
定　清直	教授/ゲノム科学・微生物学	ksada@u-fukui.ac.jp	〃
深澤　有吾	教授/組織細胞形態学・神経科学	yugo@u-fukui.ac.jp	〃
	（中略）		

1　学修目標

分子生物学の発展により、生命現象の素過程に関わる因子が同定され、これらの因子の機能的上下関係や相互作用、さらに、各分子の機能制御機構の解明などを通して、極めて広範囲にわたる種々の生命現象や各種のヒト疾患の病態が分子レベルで理解できるようになりつつある。現在、診断技術であれ、治療法であれ、生命科学におけるこうした研究成果が臨床医学に急速に応用されつつあり、また、新たな医療を目指した様々な試みがなされている。本コースの学習目標は、こうした現状を正しく把握できるようになること、そして、幅広く多岐にわたる生命科学研究の進展を理解できるようになることにある。

2　授業の内容

コアカリキュラム「生体物質の代謝」「遺伝と遺伝子」及び「生体と微生物」で学んだことを基本としながら、コアカリキュラムでは言及しなかった発展的事項と近年生命科学で話題になっているトピックスを中心に、オムニバス形式で講義する。担当教員と講義内容は以下の通りであるが、講義の順序などは開講時に改めて通知する。

（中略）

4　到達目標

コアカリキュラム「生体物質の代謝」「遺伝と遺伝子」及び「生体と微生物」で理解した基本的な分子生物学と細胞生物学の知識をベースとして、より専門的な知識を習得する。生命科学あるいは先端医療において話題となっているトピックスについて、基本的な用語を理解し、概略を説明できることを目標とする。

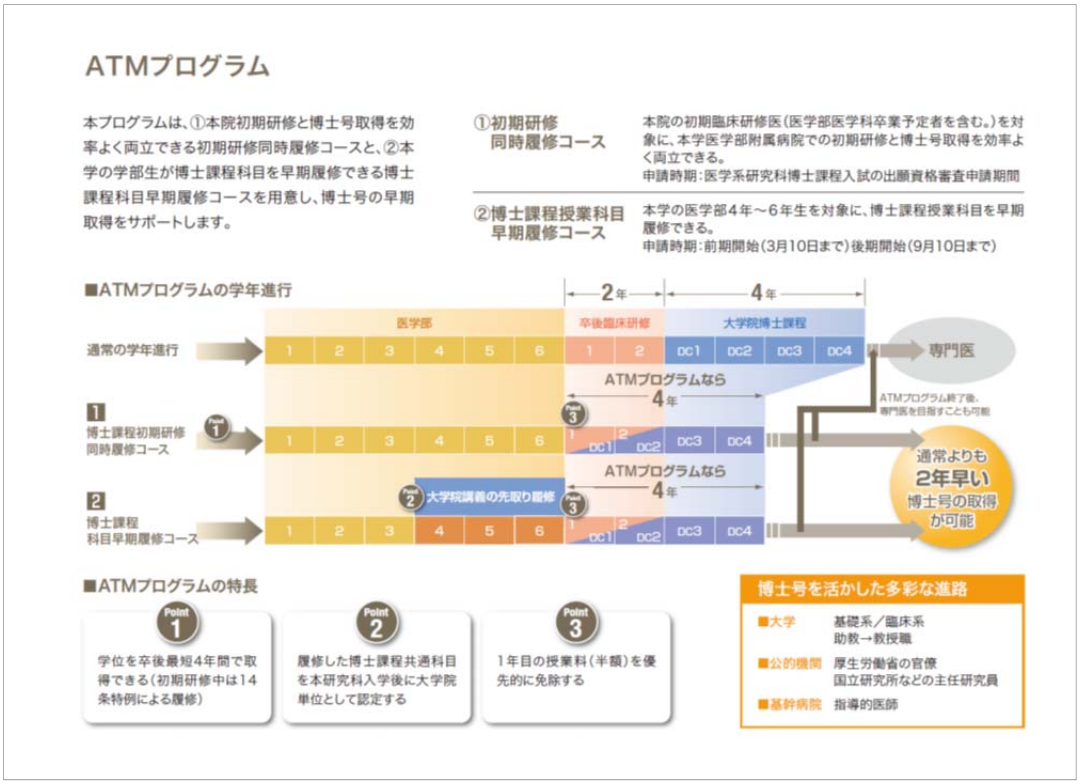
（以下省略）

（事務局資料）

資料 1-2-1-23　ATM プログラムによる早期大学院教育受講

■ ATM プログラム（Advanced Training of Medico-research プログラム）の概要

ATM プログラムとして，学部学生が大学院博士課程授業科目を履修可能な早期履修コースを設け，研究マインドを持つ学生の履修を可能としつつ，本学大学院進学後は授業単位の認定と学費免除の優先を図っている。



（医学系研究科博士課程パンフレット 2015）

■ ATM プログラム履修者等の推移（博士課程授業科目早期履修コース）

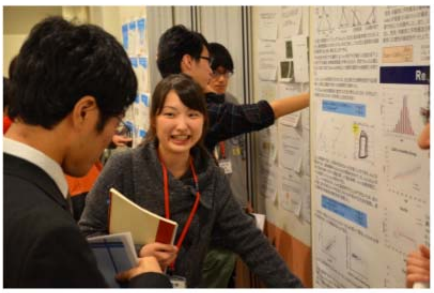
年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
ATM 履修者	2 名	5 名	11 名	5 名	3 名	2 名
ATM 利用の大学院入学者	－	－	－	－	1 名	3 名

平成 23 年度年度の履修者 2 名は 5 年生と 4 年生のため，最短での大学院入学はそれぞれ平成 27，28 年度（5 年生…平成 24 年度卒業 → 平成 25～26 年度卒後臨床研修 → 平成 27 年度大学院入学）であり，ATM 履修者の中から大学院に入学するものが現れている。

（事務局資料）

資料 1-2-1-24　４大学コンソーシアムリトリートにおける他大学学生との交流

研究に強い興味を持つ学生に対しては，平成 23 年度に開設された「MD 研究者養成コース四大学コンソーシアムリトリート」（京都大・滋賀医大・福井大・神戸大）への参加を呼びかけている。平成 26 年度は本学が主催し，本学学生 22 名が参加しており，口頭発表やポスター発表等により医学研究を通した交流を行うとともに研究意欲の向上を図った。





■ 参加学生の声

・ リトリートに参加してよかったことは，自分の将来を臨床ではなく基礎研究に照準を定めている他大学の学生たちと話ができたことです。その多くの学生たちは実際に研究室に通って研究し，そこで得た結果をリトリートの場で発表していました。その姿を見て，非常に刺激を受けました。自分の将来の一つの選択肢として，基礎研究を具体的に考える時間を得ることができました。

・ リトリートの一番良かったところは，他大学の学生との交流と思います。大学によって基礎配属などのカリキュラムやプログラムが異なることを知り，また自分の周りにはなかなかいない研究者志向の学生たちと話せたのは大きな出来事だったと思います。

・ 著名な先生方のご講演は最新の研究についてだけでなく，今後，研究者を目指す学生にとってのキャリアパスについてなど内容が多岐に渡っており，大変ためになりました。

・ リトリートで，たくさんの学生や先生方とお話する機会を頂き，発表する経験をさせてもらいました。私は計 3 回参加し，いい刺激と励みと出会いを頂き，ますます研究への興味が湧きました。

■ ポスター，プログラム





プログラム

1日目

11月29日	全体プログラム	参加者スケジュール	会場
12:00-12:45	受付	会場到着・ポスター貼付	
13:00-13:30	開会式 開会あいさつ 学生教員紹介 諸注意、伝達事項		BCDE室（終日）
13:30-13:45	休憩	ポスター貼付・口頭発表準備	
13:45-14:02	学生口頭発表1 [redacted]（京都大学2年）		
14:04-14:21	学生口頭発表2 [redacted]（滋賀医科大学2年）		
14:23-14:40	学生口頭発表3 [redacted]京都大学3年）		
14:42-14:59	学生口頭発表4 [redacted]福井大学3年）		
14:59-15:10	休憩	ポスター貼付	
15:10-16:25	招待講演1 坂野 仁 先生 福井大学医学部 高次脳機能		
16:25-17:00	休憩	鍵の受け取り・荷物の移動	
17:00-17:35	ポスターセッション1		
17:40-18:15	ポスターセッション2		
18:15-18:30	休憩		
18:30-20:00	夕食	立食	
20:00-22:30	懇親会（自由参加）		

（事務局資料）

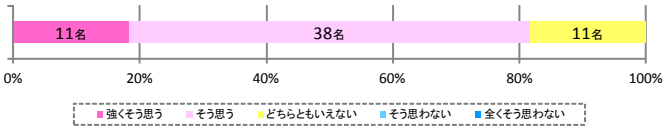
② 看護学科では研究に必要な知識・倫理等を学んだ上で卒業研究を実施し，研究への理解度が向上した（**資料 1-2-1-25，P4-86 前掲資料 1-2-1-18**）。

資料 1-2-1-25　研究に必要な知識・方法の修得（看護学科）

看護学科では研究に必要な基礎知識・方法の習得を強化するため，「看護研究方法論」を平成 23 年度から開講し，その能力を高めるとともに研究における倫理的配慮を学び，卒業研究を実施している。卒業研究において，附属病院入院患者等を対象に研究を行う場合は，原則として教職員対象に開催されている臨床研究講習会を受講し医学部倫理審査委員会の承認を得ることとしている。

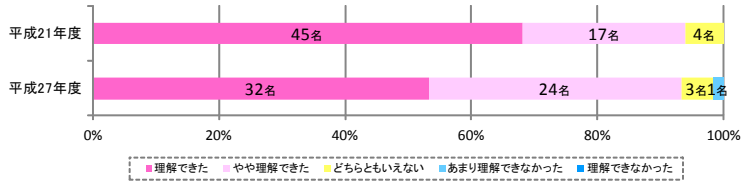
■ 「看護研究方法論」の学生による評価

設問_「看護研究方法論」の科目は，研究に必要な基礎知識・方法の修得を強化することを目的としています。そこで，あなたはこの能力を習得できたと思いますか？



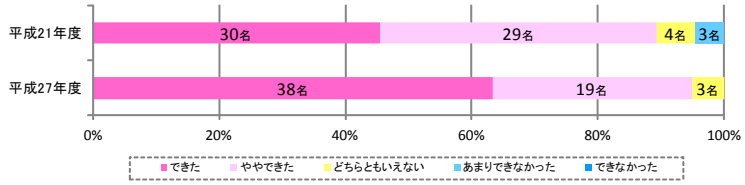
■ 「卒業研究」の学生による評価

設問_研究における倫理的配慮が理解できましたか



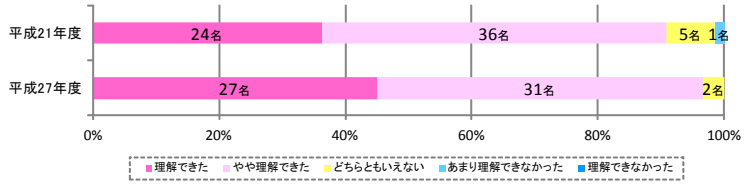
＊第２期末では学生の評価（できた～やや理解できたとした割合）は，93.3%と第１期末と同程度の，高い水準を維持している。

設問_卒業研究に主体的に取り組むことができましたか



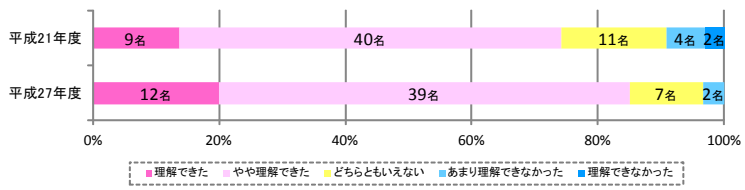
＊第１期末と比較して，第２期末では学生の評価（できた～ややできたとした割合）は，5.6%向上している。

設問_卒業研究法（研究計画書の作成～論文作成までの一連のプロセス）は理解できましたか



＊第１期末と比較して，第２期末では学生の評価（理解～やや理解できたとした割合）は，5.8%向上している。

設問_文献収集と批判的読解の方法が理解できましたか



＊第１期末と比較して，第２期末では学生の評価（理解～やや理解できたとした割合）は，10.8%向上している。

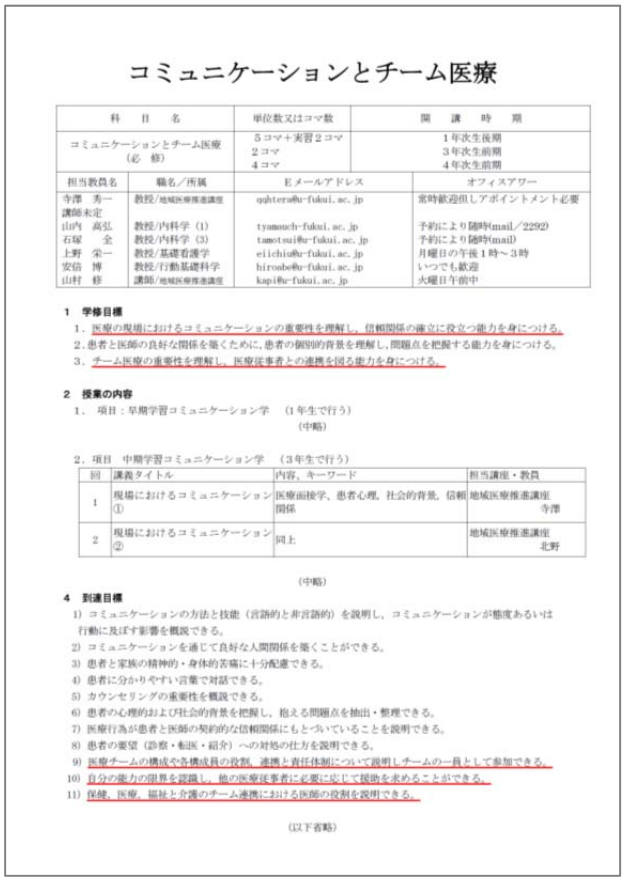
（平成 27 年度「カリキュラム評価アンケート」，平成 21 年度および平成 27 年度「卒業研究についてのアンケート」結果より抜粋）

【IPE】

チーム医療を実現する基盤教育及び多職種チームで支える在宅医療・ケア実現にむけた本邦初の正式カリキュラムとして医学科と看護学科の合同講義（平成 28 年度より実習も加わる）により（**資料 1-2-1-26**），チーム医療への理解が深まっている（**資料 1-2-1-27**）。

資料 1-2-1-26　医学科・看護学科合同講義

■ シラバス



コミュニケーションとチーム医療

科　目　名	単位数又はコマ数	開　講　時　期
コミュニケーションとチーム医療（必　修）	5コマ＋実習2コマ 2コマ 4コマ	1年次生後期 3年次生前期 4年次生前期

担当教員名	職名／所属	Eメールアドレス	オフィスアワー
寺澤　秀一	教授／地域医療推進講座	qqhtera@u-fukui.ac.jp	常時歓迎但しアポイントメント必要
講師未定			
山内　高弘	教授／内科学（1）	tyamauch-fukui.ac.jp	予約により随時(mail／2292)
石塚　　全	教授／内科学（3）	tamotsui@u-fukui.ac.jp	予約により随時(mail)
上野　栄一	教授／基礎看護学	eiichiu@u-fukui.ac.jp	月曜日の午後1時～3時
安信　博	教授／行動基礎科学	hiroabe@u-fukui.ac.jp	いつでも歓迎
山村　修	講師／地域医療推進講座	kapi@u-fukui.ac.jp	火曜日午前中

1　学修目標

1．医療の現場におけるコミュニケーションの重要性を理解し，信頼関係の確立に役立つ能力を身につける。
2．患者と医師の良好な関係を築くために，患者の個別的背景を理解し，問題点を把握する能力を身につける。
3．チーム医療の重要性を理解し，医療従事者との連携を図る能力を身につける。

2　授業の内容

1．　項目：早期学習コミュニケーション学　（1年生で行う）
（中略）

2．項目　中期学習コミュニケーション学　（3年生で行う）

回	講義タイトル	内容，キーワード	担当講座・教員
1	現場におけるコミュニケーション①	医療面接学，患者心理，社会的背景，信頼関係	地域医療推進講座　寺澤
2	現場におけるコミュニケーション②	同上	地域医療推進講座　北野

（中略）

4　到達目標

1) コミュニケーションの方法と技能（言語的と非言語的）を説明し，コミュニケーションが態度あるいは行動に及ぼす影響を概説できる。
2) コミュニケーションを通じて良好な人間関係を築くことができる。
3) 患者と家族の精神的・身体的苦痛に十分配慮できる。
4) 患者に分かりやすい言葉で対話できる。
5) カウンセリングの重要性を概説できる。
6) 患者の心理的および社会的背景を把握し，抱える問題点を抽出・整理できる。
7) 医療行為が患者と医師の契約的な信頼関係にもとづいていることを説明できる。
8) 患者の要望（診察・転医・紹介）への対処の仕方を説明できる。
9) 医療チームの構成や各構成員の役割，連携と責任体制について説明しチームの一員として参加できる。
10) 自分の能力の限界を認識し，他の医療従事者に必要に応じて援助を求めることができる。
11) 保健，医療，福祉と介護のチーム連携における医師の役割を説明できる。

（以下省略）

（2015 年度医学科授業要項）

平成 26 年度より，看護学科１年次生「看護学入門」と医学科３年次生「コミュニケーションとチーム医療」，および看護学科２年次生「公衆衛生看護学概論」と医学科２年次生「地域医療学」において医看合同授業を行っている。

平成 28 年度より本邦初となる一連のカリキュラムとしての“医看合同実習”を実施する。そこでは医学科と看護学科学生がペア・チームを作り，予防接種，健康診断，外来・訪問診療，カンファレンス等を行う「地域ケア実習」を実施する予定となっている。



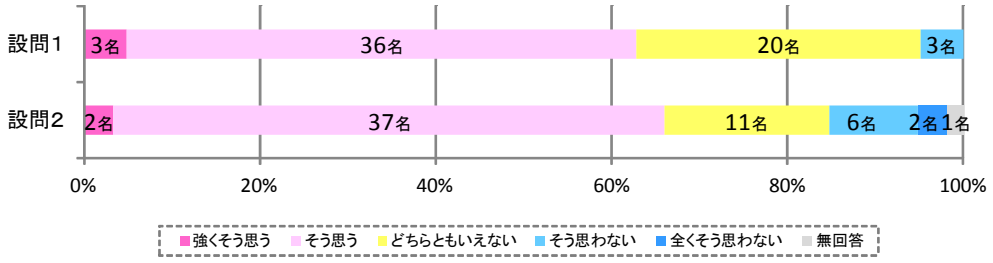


（事務局資料）

資料 1-2-1-27　医学科・看護学科合同講義に対する学生の評価

設問１_「看護学入門」での医学科の合同授業（２コマ）は卒業時に皆さんに備えて欲しいチーム医療の実践力を習得していただくために実施しています。そこで，これらの科目を履修してチーム医療への理解が深まったと思いますか？（看護学科１年次生）

設問２_「公衆衛生看護論」での医学科との合同授業は卒業時に皆さんに備えて欲しいチーム医療の実践力を習得していただくために実施しています。そこで，これらの科目を履修してチーム医療への理解が深まったと思いますか？（看護学科２年次生）



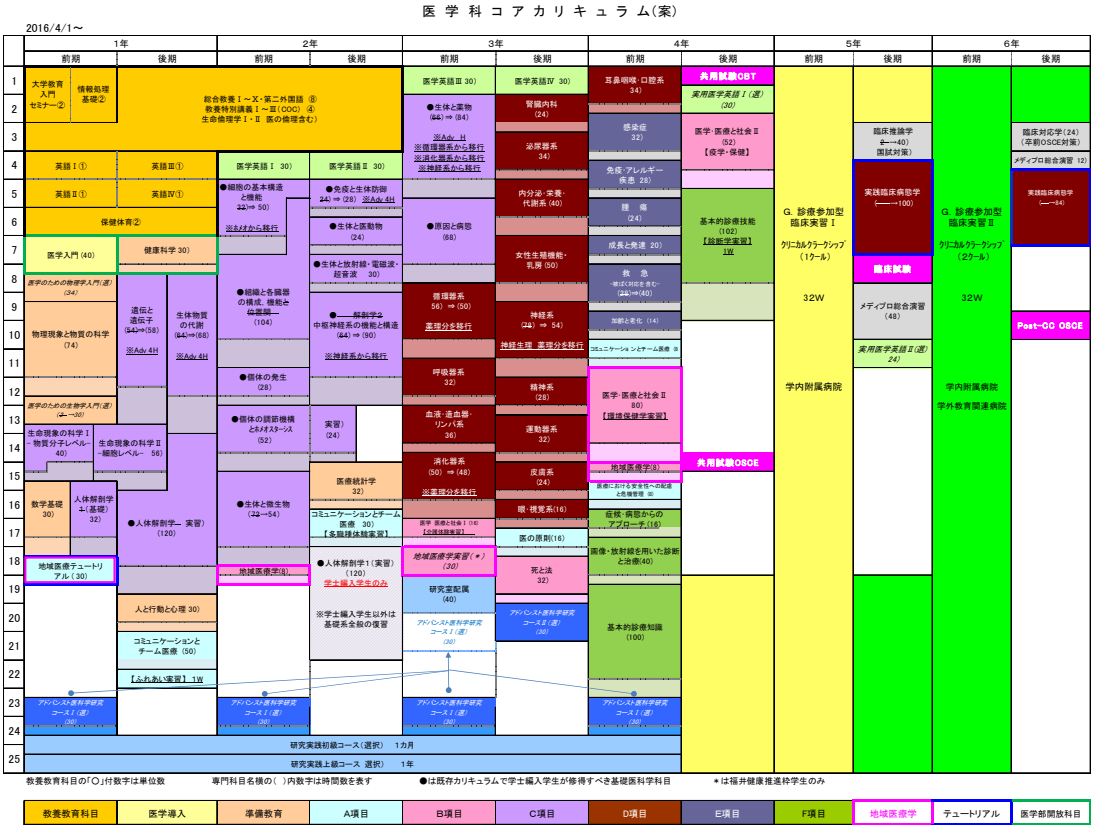
（平成 27 年度「カリキュラム評価アンケート」結果より抜粋）

●社会のニーズに対応した教育課程の編成と実施上の工夫

【社会ニーズを踏まえたプログラム等】

医学教育のグローバル化及び社会ニーズの変化に対応するため，医学科において教育実施体制（**P4-4 前掲資料 1-1-1-1**）を整備し医学教育分野別評価に対応したカリキュラムを新たに編成し，平成 28 年度より導入することとした（**資料 1-2-2-1**）。

資料 1-2-2-1　平成 28 年度医学科新カリキュラム



■医学科新カリキュラムの特徴

1．講義時間の削減による自学自修時間を確保する
2．診療参加型臨床実習の時間を延長する
3．共通教養教育を１～２年次にわたり受講可能とし，大学教育入門セミナーや地域コア科目（COC 関連科目）を新設する
4．メディカルプロフェッショナリズムをプログラム化する
5．基礎医科学を１年次からの開講し，早期より医学専門課程に触れ自学自修を習慣づける
6．医科学研究研修に１年次から参加可能とし，研究への興味ある学生の研究マインド涵養に努める
7．卒業試験の統合化と卒業時 OSCE（post CC OSCE）の実施により，卒業時能力の判定と医学教育の成果判定を行う

（事務局資料）

【地域医療の教育】

①　医学科において地域医療人育成プログラムを構築し（**資料 1-2-2-2**），地域医療講義・実習やテュートリアル課題（**資料 1-2-2-3，4**），福井県内診療施設での診療実習（**資料 1-2-2-5**）を実施している。これらにより学生は地域医療へ理解を深めている。

資料 1-2-2-2　地域医療人育成プログラムの概要（医学科）

■ 医学科

入学者の選抜

アドミッション・ポリシーに基づいた選抜
（教育理念・目標）
・医学・看護学の進展、ならびに地域医療の向上に寄与する
（求める学生像）
・医学・医療を通じて広く社会に貢献しようとする強い情熱と意欲を持った人／・医師として地域医療に貢献したい人

入学者に対する教育

カリキュラム・ポリシーに基づいた意欲・知識・技能等の育成
・個人と地域・国際社会との健康増進と疾病の予防・根絶に寄与し、国際的な視野でまたは地域に根ざした活動ができる人材の育成

学年	主な必修科目	主な選択科目	研修	主な地域医療への意欲ある学生に対する支援
1年次	入門テュートリアル（地域医療課題）	－	福井県学生地域夏季研修 福井県医師確保修学資金奨学生交流会	奨学金（嶺南医療振興財団医学生奨学金／福井県医師確保修学資金） ※ 推薦入試（地域枠・福井健康推進枠）入学者対象
2年次	地域医療学	－		
3年次	－	地域医療学実習		
4年次	地域医療学、医学医療と社会1～2	－		
5年次	臨床実習	－		
6年次	臨床実習	－		

・入門テュートリアル：地域医療に関する課題をもとにテュートリアル形式で自己学修およびグループ学修をすすめ，終了時に発表会を実施する。平成 23 年度より実施している。
・地域医療学：地域医療の在り方と現状および課題を理解し，地域医療に貢献するための能力を身につける講義とワークショップにより進められる。平成 22 年度より実施している。
・地域医療学実習：大学の総合診療部，地域中核病院，診療所におけるそれぞれの地域医療に果たす役割と連携，問題点を実習において学修する。
・医学医療と社会：医師やその他の公衆衛生従事者の働く地域の現場における課題を実習において学修する。
・臨床実習：福井県内を中心とした地域中核病院や診療所での実習と地域医療に関与する医師等による臨床講義において地域医療について学修する。

■「ふくい地域創生士」としての認定

平成 27 年度採択の地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC＋）において，地域医療科目を履修したものは「ふくい地域創生士」（地域を志向し，課題解決能力を身につけ，地域に貢献できる可能性のある人材）として申請できる。

■ 地域医療人としての卒業生輩出状況（P4-170 後掲資料 2-2-1-3）

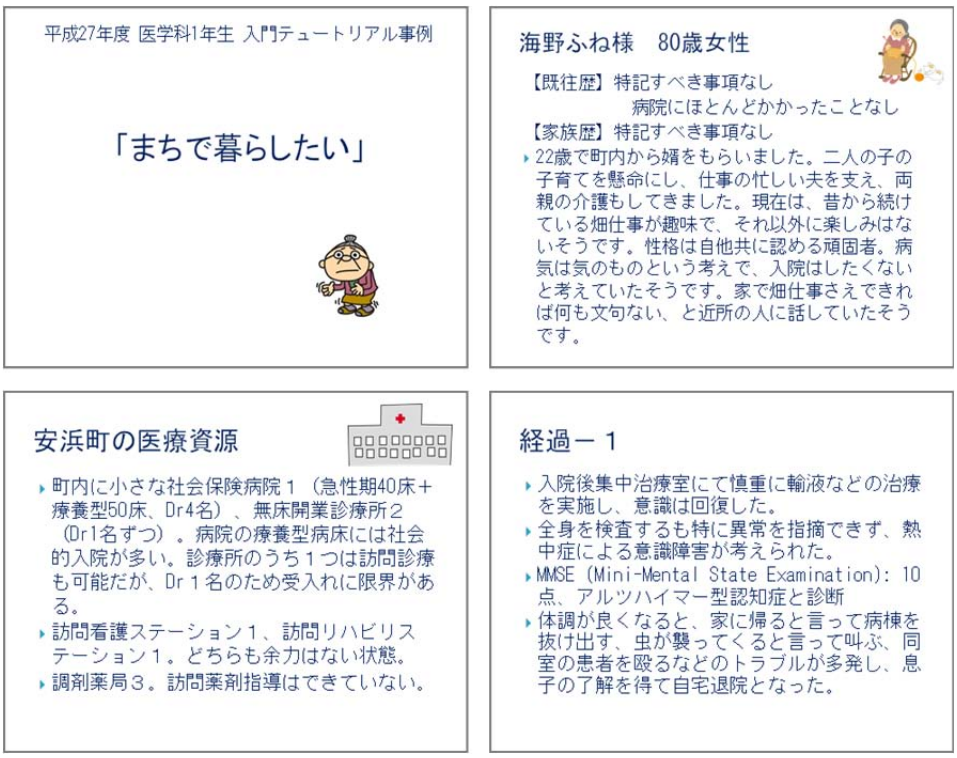
医学科卒業生の福井県内医療機関就職動向を見ると，県内就職率が向上（第１期平均 33.1%から第２期平均 35.1%）しており，第２期期間中の県内就職者数は 203 名（第１期期間中は 188 名）と増加しており，地域医療人育成プログラムの効果が現れている。

（事務局資料）

資料 1-2-2-3　入門テュートリアル「地域医療」（１年次）

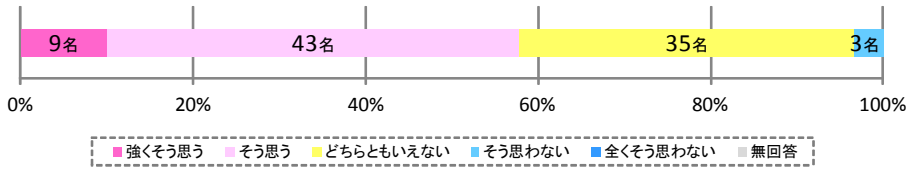
平成 23 年度より入門テュートリアル（１年次生）の１課題として地域医療に直結するテーマを地域医療推進講座の担当により実施している。地方小病院や診療所における医療の問題点や家族問題を含んだ課題に取り組むことにより，過半の学生は初年度において地域医療への理解を深めることができたと答えている。

■ テュートリアル課題例（地域医療推進講座担当：平成 27 年度テーマより一部抜粋）



■ 入門テュートリアルに対する学生の評価（１年次生・平成 27 年度カリキュラム評価アンケート）

設問_「入門テュートリアル」の課題は皆さんに備えてほしい地域医療の実践力を習得していただくために実施しています。そこで，この科目を履修して地域医療への理解が深まったと思いますか？



■ 学生の評価（平成 27 年度入門テュートリアル学生アンケートより一部抜粋）

・この課題があって嬉しかったです。この課題の発表により，少しでも福井で医療者として残る人が増えてほしいと思います。
・福井健康推進枠（注：医学科推薦入試）なので，課題としては取り組みやすかったし，医学的知識を学んでいく前に医療システムや概念について知ることができて良かった。
・どの方向へ学修を進めていくか難しかったが，将来深くかかわる重要な内容だったと思う。
・課題１とは異なり，ある１人の老人に焦点を当てた課題で，より医学的あるいは保健介護的なものだったと思います。
・地域医療について，全く興味がなかったけど調べてみるうちにちょっと興味を持てるようになりました。
・地域医療について考えるいい機会だった。これを機に福井の医療について調べてみたいと思った。

（事務局資料）

資料 1-2-2-4　地域医療学講義（２年次および４年次）

平成 22 年度より，地域医療学は２年次及び４年次において「地域医療の在り方と現状及び課題を理解し，地域医療に貢献するための能力を身につける」ことを目標に地域医療推進講座，地域プライマリケア講座および地域診療所医師の担当により開講している。過半の履修学生は地域医療への理解を深めたとしている。

■ 地域医療学シラバス（平成 27 年度）

地 域 医 療 学

科　目　名	単位数又はコマ数	開　講　時　期
地域医療学 （必　修）	８コマ	２年次生　前期（４コマ） ４年次生　後期（４コマ）

担当教員名	職名／所属	E メールアドレス	オフィスアワー
寺澤　秀一 許　智栄 井階　友貴 紅谷　浩之 山本　安奈	教授／地域医療推進講座 助教／総合診療部 講師／地域ﾌﾟﾗｲﾏﾘｹｱ講座 院長／ｵﾚﾝｼﾞﾎｰﾑｹｱｸﾘﾆｯｸ 医師／ｵﾚﾝｼﾞﾎｰﾑｹｱｸﾘﾆｯｸ	qqhtera@u-fukui.ac.jp ikai@u-fukui.ac.jp	いつでも歓迎。ただし、事前にアポイントメント必要。

1　学修目標

地域医療の在り方と現状および課題を理解し，地域医療に貢献するための能力を身に付ける。

2　授業の内容と到達目標

1．地域医療の現場で求められる能力

到達目標：

1) 総合医の診療範囲を説明できる。
2) 地域の医療現場で求められる臨床能力について理解する。
3) 地域の医療現場で求められる教育・啓発能力について理解する。
4) 家庭医療学の基礎を理解する。
5) 地域における在宅医療、学校保健の体制、保健・福祉との連携を理解する。

2．地域医療の現状と課題

到達目標：

1) 県内外の地域医療の現場を理解する。
2) 地域における医療の需要供給システムについて理解する。
3) 地域医療の問題点および解決への取り組みを理解する。

3．理想の地域医療

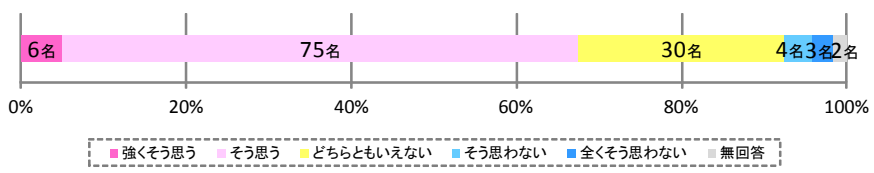
到達目標：

1) 地域における住民―行政―医療者の連携を説明できる。
2) 全国の住民運動や政策を理解する。
3) 持続可能な地域医療システムについて説明できる。

回	講義タイトル	内容、キーワード	担当講座・教官
1	総合医と地域医療	地域での総合内科医と家庭医の臨床	寺澤, 山本, 井階, 紅谷
2	地域医療システム学	地域での医師・医療者確保、地域医療教育	寺澤, 山本, 井階, 紅谷
3	家庭医療学入門	患者中心の医療、家族志向型・地域包括ケア	寺澤, 山本, 井階, 紅谷
4	在宅医療学入門	在宅療養の実際と医療福祉システム	寺澤, 山本, 井階, 紅谷
5	地域医療の現状と課題１	地域医療の具体例の紹介と全国の地域医療問題	寺澤, 許, 井階, 紅谷
6	地域医療の現状と課題２	地域医療の現状と課題を考えるワークショップ	寺澤, 許, 井階, 紅谷
7	理想の地域医療１	全国の住民運動、行政施策と地域医療	寺澤, 許, 井階, 紅谷
8	理想の地域医療２	住民―行政―医療者連携を考えるワークショップ	寺澤, 許, 井階, 紅谷

■ 地域医療学に対する学生の評価（４年次生・平成 27 年度カリキュラム評価アンケート）

設問_「地域医療学」は卒業時に皆さんに備えてほしい地域医療の実践力を習得していただくために実施しています。そこで，この科目を履修して地域医療への理解が深まったと思いますか？



（事務局資料）

資料 1-2-2-5　地域医療に関する臨床実習

臨床実習において，地域基幹病院および診療所での実習を実施している。５年次においては，総合診療部の実習の一環として，地域の診療施設で外来診療，予防接種や健康診断，介護・福祉に関わる多職種との実習などを福井県内９施設（平成 27 年度）において実施している。６年次においては県内外の病院診療所等（**P4-13 前掲資料 1-1-1-9**）での実習を行い，学生は概ね地域医療への理解を深めたとしている。

■ 臨床実習の手引き（総合診療部）（平成 27 年度）

総 合 診 療 部

1　集合時刻　(1) 次頁に記載（各施設ごと確認）

2　集合場所　(1) 各施設ごと確認して下さい

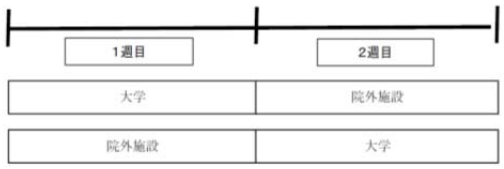
3　実習内容
(1) 大学の総合診療部と地域の診療施設で外来診療を行う
(2) 予防接種や健康診断，介護・福祉に関わる多職種の人と体験実習する
(3) 患者のプロブレムリストを上げてプレゼンテーションする

4　到達目標
(1) プライマリ・ケアの視点に立った患者へのアプローチによる患者情報の取得
(2) 得られた患者情報を医学・心理・社会的側面から整理しプロブレムリストをあげてプレゼンテーションを行う
(3) 患者の多種多様な問題点を理解し，その対応における他職種の役割を理解する
(4) プライマリ・ケアにおけるスクリーニング・予防接種を理解する

5　実習上の注意
(1) よりよい実習にするために事前に資料を勉強していただきます。事前学習のための資料を，実習開始１週間前までに医学教育第一係に取りに来てください。
(2) 研修先医療機関ごとに独自のプログラムを用意しています。指導医と協議の上内容・編成可能です。
(3) 月曜日が祝祭日である場合，火曜日から実習開始となります。実習開始時間の変更がある場合には前もって連絡が入りますので必ず確認して下さい。
(4) 臨床実習出席簿は「臨床実習の手引」とともに配布された指定用紙を各自コピーして使用，必ず印鑑をもらって実習終了後２週間以内に救急部・総合診療部医局（研究棟1階）に提出してください。
(5) 欠席・遅刻の際には各自で実習先ならびに医学教育第一係に連絡を入れてください。

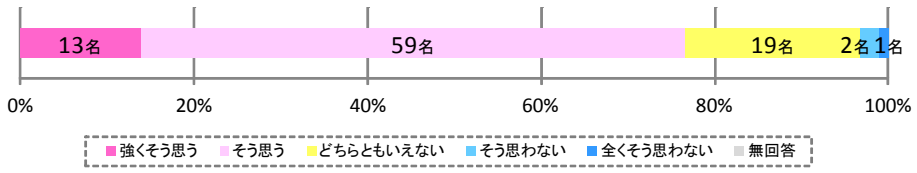
6　その他　移動時や実習時の事故などには十分注意すること，万が一事故が発生した場合は直ちに大学実習担当担当医学教育第一係に連絡を入れてください。
学外では‘学生さん’という扱いではなく，社会人としての対応を求められています。遅刻は厳禁です。指導医に礼儀正しくするのはもちろんのことですが，スタッフや患者さんにも礼儀正しく，積極的に参加するようにしましょう。服装もTPOをわきまえた格好にしてください。
撮影や録音，記録についてはまず教員や当事者の了解を得ましょう。

【総合診療部実習予定表】　事前に資料を学習していきましょう



■ 地域医療実習に対する学生の評価（６年次生・平成 27 年度カリキュラム評価アンケート）

設問_「臨床実習（地域医療実習）」は卒業時に皆さんに備えてほしい地域医療の実践力を習得していただくために実施しています。そこで，この科目等を履修して地域医療への理解が深まったと思いますか？



（事務局資料）

② 地域医療推進講座や福井県等による「福井県学生地域夏期研修」「福井県医師確保修学資金奨学生交流会」を開催し，参加学生の地域医療への意欲向上が見られる（**資料 1-2-2-6**）。

資料 1-2-2-6 地域医療へ参加を促す取組（医学科）

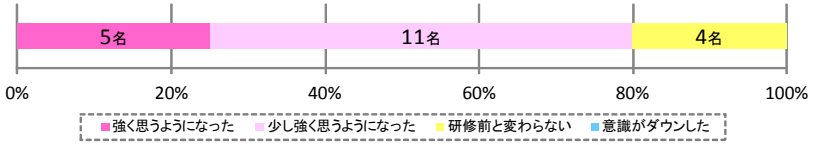
■ 福井県学生地域夏季研修

学生の段階から県内のへき地医療を体験し，相互の交流を深め，学生の地域医療に対する理解，モチベーションの向上を図る目的で，将来，福井県内の医療機関で勤務する可能性の高い本学学生（嶺南医療振興財団医学生奨学金受給者，福井県医師確保修学資金受給者）を中心に他大学学生も加わった一泊二日の研修会を毎年開催している。福井県の嶺南地区や丹南地区といった医療過疎地域の病院・診療所見学の他，２日目には地域医療を担う先輩医師との意見交換会などを行い，参加学生の多くが地域医療への従事意欲を高くしている。

年度	研修地域	学生所属大学	3年次生	4年次生	5年次生	（計）
H23年度（第1回）	福井県嶺南地区　5医療機関（和田診療所、名田庄診療所、丹生診療所、東部診療所、公立小浜病院）	福井大学	11名	4名	2名	17名
		自治医科大学	2名	2名	2名	6名
	（計）		（13名）	（6名）	（4名）	（23名）
H24年度（第2回）	福井県嶺南地区　7医療機関（和田診療所、名田庄診療所、丹生診療所、東部診療所、公立小浜病院、市立敦賀病院、国立福井病院）	福井大学	8名	8名	3名	19名
		自治医科大学	2名	2名	2名	6名
		金沢大学	1名	0名	0名	1名
	（計）		（11名）	（10名）	（5名）	（26名）
H25年度（第3回）	福井県敦賀・丹南地区　7医療機関（市立敦賀病院、国立福井病院、公立丹南病院、織田病院、池田診療所、今庄診療所、河野診療所）	福井大学	5名	9名	5名	19名
		自治医科大学	2名	0名	2名	4名
		金沢大学	1名	1名	0名	2名
		信州大学	1名	0名	0名	1名
	（計）		（9名）	（10名）	（7名）	（26名）
H26年度（第4回）	福井県嶺南地区　8医療機関（和田診療所、名田庄診療所、丹生診療所、東部診療所、公立小浜病院、市立敦賀病院、国立福井病院、なごみ診療所）	福井大学	8名	6名	8名	22名
		自治医科大学	2名	2名	2名	6名
		金沢大学	0名	1名	1名	2名
	（計）		（10名）	（9名）	（11名）	（30名）
H27年度（第5回）	福井県敦賀・丹南地区　7医療機関（市立敦賀病院、敦賀医療センター、公立丹南病院、織田病院、池田診療所、今庄診療所、河野診療所）	福井大学	9名	7名	0名	16名
		自治医科大学	0名	3名	0名	3名
		金沢大学	0名	0名	1名	1名
		信州大学	0名	0名	1名	1名
		東京女子医科大学	1名	0名	0名	1名
	（計）		（10名）	（10名）	（2名）	（22名）
	合計		53名	45名	29名	127名

■ 「福井県学生地域夏季研修」参加者アンケート（平成 27 年度）

設問_この研修に参加しての「地域医療に従事しようとする意思」の変化についてお聞きします。



■ 福井県医師確保修学資金学生交流会

卒後，福井県内で医師となることを目指す推薦入試入学者（福井健康推進枠）に対し，目標の同じ者同士が学年の枠を超えて交流を深めるとともに，卒業生との意見交換等によって修学や進路に関する諸問題の解消やモチベーションの向上を図ることを目的に，平成 25 年度より年２回の交流会を学内において開催し，毎回 40～50 名の学生が参加している。

■ 平成 27 年福井県医師確保修学資金学生交流会プログラム

	【春】平成27年4月27日（月）	【秋】平成27年10月27日（火）
場所	臨床教育研修センター	福井メディカルシミュレーションセンター
プログラム	● セミナー 「学生時代をどう過ごすか」 地域医療推進講座：教授　寺澤秀一 ● グループワーク 「医師不足とは何か？－ 有効な対処法はどのようなものがあるか － 」	● パネルディスカッション 「地域医療を目指して」 パネリスト：公立小浜病院：医師 新谷万智子（H26年度卒業生） 市立敦賀病院：医師 木村真規子（H24年度卒業生） 福井勝山総合病院：医師 結城智仁
参加者	本学学生 48名	本学学生 46名

（事務局資料）

③　看護学科では地域医療教育（**資料 1-2-2-7**）及び大学独自の奨学金制度（**P4-24 前掲資料 1-1-1-23**）により，地域医療に従事する卒業生が多数であり（**P4-170 後掲資料 2-2-1-3，P4-171 2-2-1-4**），関係者の期待に応えている。

資料 1-2-2-7　看護学科における地域医療教育

入学者の選抜

アドミッション・ポリシーに基づいた選抜
（教育理念・目標）
・医学・看護学の進展、ならびに地域医療の向上に寄与する

入学者に対する教育

学部教育の目的（カリキュラム・ポリシー）に基づいた意欲・知識・技能等の育成
・人間理解と倫理性を基盤とし、豊かな人間性と創造性を備え、高度な知識と技術をもち患者中心の看護を実践できる看護専門職および将来看護の分野で指導的役割を担うことができる人材を育成し、地域の保健医療の向上に貢献するとともに、看護学の発展につながる看護学研究を推進することを目的とする。

学年	主な必修科目	主な選択科目	研修	主な地域医療への意欲ある学生に対する支援
1年次	―	環境科学論	―	―
2年次	公衆衛生看護学概論、在宅看護論、健康管理論	―		―
3年次	災害看護論、臨地実習	公衆衛生看護展開論Ⅰ・Ⅱ、公衆衛生看護管理論		奨学金（福井大学看護学科奨学金）
4年次	臨地実習、卒業研究	―		

■ アドバンスト実習（単位外）

平成 26 年度より卒業研究の中で地域看護学領域配属学生が，福井健康推進枠の医学科学生と福井県内の今庄診療所とオレンジホームケアクリニックにて医看合同実習を行っている。大学病院と地域の診療所・クリニックとの役割の違い，地域医療の必要性，課題，看護職の役割等を学生が学び，好評を得ている。

○ アドバンスト実習学生の声
・大学病院と地域の診療所，それぞれの役割・機能の違いが理解できた。
・地域の診療所はサロンのような憩いの場であり，患者の生活をより深く考えた上で対応できる。
・医師と看護師，それぞれの専門性を発揮し補うことで連携ができること，また連携できる関係性の必要性について理解できた。

■「ふくい地域創生士」としての認定

平成 27 年度採択の地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC＋）において，地域医療科目を履修したものは「ふくい地域創生士」（地域を志向し，課題解決能力を身につけ，地域に貢献できる可能性のある人材）として申請できる。

■ 地域医療人としての卒業生輩出状況（**P4-170 後掲資料 2-2-1-3**）

看護学科卒業生の福井県内医療機関就職動向を見ると，県内就職率が向上（第 1 期平均 57.2%から第 2 期平均 65.2%）しており，県内就職者数は増加（第 1 期期間中の 218 名から第 2 期期間中の 251 名）しており，地域医療人としての教育効果が現れている。

（事務局資料）

【地域への教育サービス】

高大連携事業として医学をテーマとした開放講義や生命医科学分野での人材育成プログラムを実施し，多くの高校生の学びへのニーズに応え，好評を得た（**資料 1-2-2-8～10**）。

資料 1-2-2-8　医学部の行う高大連携事業（１）

医学部教員が中心となり，生命科学研究教育複合センター（**P4-11 前掲資料 1-1-1-8**）主催により，高校生の生命医科学能力向上や理系人材育成を目指して様々なプログラム申請を経て予算獲得を行い，「ひらめき☆ときめきサイエンス」（日本学術振興会），「サイエンスパートナーシップ」（JST），「未来の科学者養成講座プログラム」（JST），「次世代科学者養成プログラム」（JST），「福井大学生命科学クラブ」（大学独自），「福井大学グローバルサイエンスキャンパス」（JST）**（資料 1-2-2-9）**を実施している。それぞれのプログラムには福井県内の高校生はもとより，北陸や近畿地区の高校からも参加者が見られ，非常に多くの高校生の生命医科学に対する興味関心・学びへのニーズに対応している。

■ **実施状況**

講座・プログラム名	開催年度	担当領域	講師名	テーマ	参加者数
ひらめき☆ときめきサイエンス	平成 22 年度	分子生理学	老木 成稔	「心臓の動き」から「動く分子」へ	79 名
		組織細胞形態学・神経科学	八木 秀司	実際に脳をみてみよう	
		微生物学	定 清直	微生物の世界をのぞいてみよう！ ～細菌とウイルスの顕微鏡観察～	
	平成 23 年度	薬理学	村松 郁延	心臓と血圧はどのように調節されているのか?	77 名
		統合生理学	樋口 隆	①心臓機能 ②感覚について学ぼう ③汗の働きを学んでみよう	
		人体解剖学・神経科学	飯野 哲	消化管の基本構造と働き	
	平成 25 年度	人体解剖学・神経科学	飯野 哲	医学研究の最前線の扉を開こう！ -生命医科学への招待- 消化管機能コース	48 名
		Ai センター	内木 宏延 他	医学研究の最前線の扉を開こう！ -生命医科学への招待- 画像解剖コース	
	平成 26 年度	ゲノム科学・微生物学	定 清直	医学研究の最前線の扉を開こう！ -ミクロの世界への招待-	77 名
	平成 27 年度	統合生理学	松岡 達	医学研究の最前線の扉を開こう！ -「ドキドキする心臓」人体の神秘への招待-	67 名
サイエンスパートナーシップ（ＳＰＰ）	平成 22 年度	ﾗｲﾌｻｲｴﾝｽ支援ｾﾝﾀｰ	小泉 勤	遺伝子異常，生活習慣と病気	69 名
		腫瘍病理学	伊藤 浩史	肝臓とその病気 ～顕微鏡で病変を見てみよう～	43 名
		ﾗｲﾌｻｲｴﾝｽ支援ｾﾝﾀｰ	柄谷 和宏	Alexander Fleming	39 名
	平成 23 年度	組織細胞形態学・神経科学	佐藤 真	知能を支える生物学：人の脳はどのように作られ働くのか	74 名
		ﾗｲﾌｻｲｴﾝｽ支援ｾﾝﾀｰ	松川 茂	ストレス応答の生物学	21 名
	平成 24 年度	組織細胞形態学・神経科学	佐藤 真	腎臓の構造・機能と病気	99 名
	平成 25 年度	生命科学複合研究教育ｾﾝﾀｰ	前田 桝夫	細胞学の基礎技術・顕微鏡標本を作製し，病理診断に則したその発展と展開を学ぶ	20 名
	平成 26 年度	人体解剖学・神経科学	飯野 哲	体の軸となる脊椎と脊髄 -脊中の大切な構造をヒトと動物で理解する-	40 名
未来の科学者養成講座プログラム	平成 21～23 年度	生命科学複合研究教育ｾﾝﾀｰ	佐藤 真 他	福井大学フューチャーサイエンティスト育成プログラム	58 名
次世代科学者養成プログラム	平成 24～25 年度	生命科学複合研究教育ｾﾝﾀｰ	佐藤 真 他	生命医科学フューチャーサイエンティスト育成プログラム	15 名
福井大学生命科学クラブ	平成 24 年度	組織細胞形態学・神経科学	佐藤 真	脳科学に関する解剖実習	51 名
		ゲノム科学・微生物学	定 清直	細菌の世界をのぞいてみよう！	
	平成 25 年度	組織細胞形態学・神経科学	佐藤 真	医学研究の最前線の扉を開こう！ -生命医科学への招待-	71 名
福井大学グローバルサイエンスキャンパス	平成 27～31 年度	生命科学複合研究教育ｾﾝﾀｰ	飯野 哲 他	生命医科学フューチャーグローバルサイエンティスト養成プログラム（平成 27 年度）	75 名

（事務局資料）

資料 1-2-2-9　福井大学グローバルサイエンスキャンパス

福井大学グローバルサイエンスキャンパス（JST，平成 27～31 年度）「生命医科学フューチャーグローバルサイエンティスト育成プログラム」は，生命医科学分野において将来大学進学や研究者，医師等を目指す高校生を対象に，その科学的能力を育成することを目的としたプログラムであり，本学は平成 27 年度，中部地方で唯一の実施校として選定された。

医学部と生命科学複合研究教育センターを中心として，“Fukui Medical High School”と銘打つバーチャルスクールにおいて生命医科学分野を指向する人材育成を進め，平成 27 年度は高校生 75 名（福井県，石川県，富山県）が参加したインテンシブコースにおいて 28 回の生命医科学講義（本学理事や研究担当副医学部長または大学院生が講師），８回の実習（本学教員に加え学生が TA として参加）や大阪大学及び理化学研究所への訪問実習を行った。さらに同年冬からは医学部等の研究室において大学教員や大学院生と共に研究活動を行うアドバンストコースを開始し，平成 28 年３月には中間報告会（学内）にて口頭発表がなされた。今後は研究を進め全国発表会（JST）での発表や論文発表を目指すと共に米国カンザス大学において研修を行う予定となっている。







理系研究者や医師を目指す、北陸三県の高校生75名がFMHSに入学しました。開講式では、FMHS名誉校長の眞弓光文・福井大学学長から、「生命科学に対する好奇心を持ち、多彩な講義・実習を楽しむことが大事です。グローバル社会での活躍をモチベーションに頑張ってください。大学全体でサポートします。」との挨拶がありました。

1限目の授業では、FMHS校長の上田孝典副学長が「臨床医から観たヒト」と題した基礎講義で、若き研究者が発見した偉大な業績を紹介し、「研究に重要なのは年齢でも経験でもなく、熱き心と好奇心である。」と話しました。



８つのラボにアドバンストコース受講生が配属され、活動が開始しました。これから1年半の活動を通して、国際学会での発表と英語論文の作成を目指します。

初回はテーマについて、目標について話し合いました。活動の様子は次回以降ニュースレターでお伝えしていきます。

（福井大学グローバルサイエンスキャンパス FMHS ニュースレターNo. １，No. ２より抜粋）

資料 1-2-2-10　医学部が行う高大連携事業（２）

県内高等学校からの依頼により，高校生の「学び」への啓発と，興味関心にそった大学・学部選択を目的とした講座を県内の大学で分担して開講しており，本学は県内唯一の医師養成機関，および看護師・保健師・助産師の養成機関として高等学校に出向いて講義を行っている。医学科・看護学科それぞれの志望に応じた大学ならではの専門的講義を高校生が理解できる難易度に調整しつつ行うことによって，高校生の学びの意欲を高める結果を得られており，地域貢献の役割を果たしている。

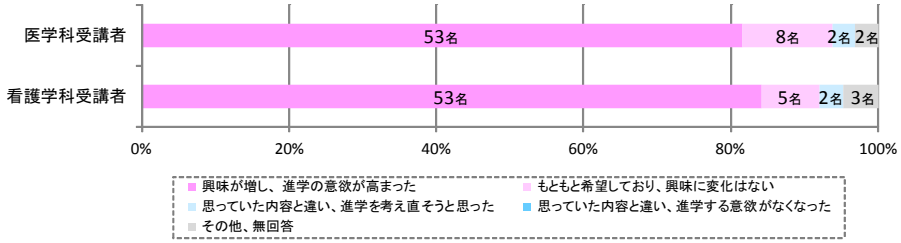
開放講義のアンケートからは，参加高校生の 80%以上で志望する進路それぞれへの興味が増し進学意欲が向上し，高校での学習意欲の向上が見られた。

■ 開放講義実施状況（平成 27 年度）

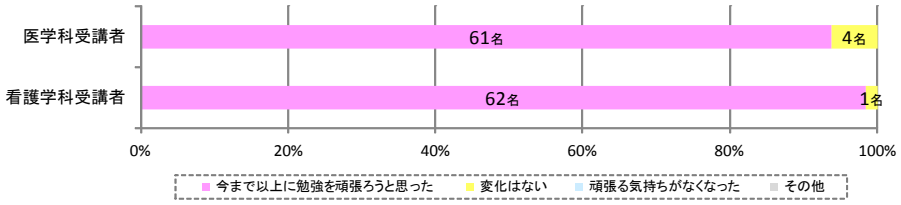
担当領域・講師		テーマ	派遣高校名・参加者数
外科学(2)	佐々木 正人	医者の素質・資質、医学部の一般的内容、医者になってからの具体的な話	武生高校　2年生　約30名
泌尿器科学	松田 陽介	医学部を志望する皆さんへ	大野高校　2年生　約15名
救急医学	木村 哲也	ザ・救急医療　～TVドラマより面白い現場の救急～	藤島高校　2年生　30～40名
内科学(3)	鈴木 仁弥	糖尿病専門医が大学で行っていること	藤島高校　2年生　30～40名
母子看護学・助産学	森川 浩子	赤ちゃんの伝えたいことわかるかな？	羽水高校　2年生　約20名
基礎看護学	長谷川 智子	心臓はなぜ動く？	三国高校　2～3年生　約15名
地域看護学	米澤 洋美	公衆衛生看護学（病院の外で働く看護）	高志高校　2～3年生　約30名
成人・老年看護学	繁田 里美	緩和ケア	武生東高校　3年生　約10名
基礎看護学	上原 佳子	バイタルサイン	大野高校　2年生　約15名

■ 開放講義参加者に対するアンケート（平成 27 年度）

設問_今回の講義を体験して，希望する進路（学部・学科）への興味・意欲は変わりましたか？



設問_今回の講義を体験して，高校の勉強や受験勉強に取り組む気持ちに変化はありましたか？



（事務局資料）

●国際通用性のある教育課程の編成実施

【グローバル人材養成】

① 全学で策定した「卒業時にグローバルな視野を有する人材として備えるべき能力等」の涵養を進めた（**資料 1-2-2-11**）。

資料 1-2-2-11 「卒業時にグローバルな視野を有する人材として備えるべき能力等」の設定

「卒業時にグローバルな視野を有する人材として備えるべき能力等」を全学（高等教育推進センター運営委員会）において定め，第２期中期目標期間において，医学部ではそれらを涵養する教育課程・方法等の整備・充実を図ることとした。

１．使える「英語力」（語学力）

２．（異文化での）コミュニケーション能力

３．社会的責任・使命感，個人のアイデンティティ

４．各部局おける教育目標に沿った“海外を指向した能力・モチベーション”

５．課題探求・問題解決能力，自己学習力

（事務局資料）

② 現代 GP「医学英語と医学・看護学の統合的一貫教育」の実施プログラムを基盤として，「実践的な医学英語」能力の向上を図る教育カリキュラムを実施し，平成 24 年度から語学センターとの密な連携のもと，少人数型，習熟度別クラスを導入した（**資料 1-2-2-12, 13**）。

資料 1-2-2-12　医学科英語カリキュラム

医学科においては語学センターの協力のもと通常の英語講義（１年次）（３～５クラスでの実施）に加え，プレゼンテーション・スキルや医療面接などを含んだ専門性の高い医学英語「医学英語１～４」（３～４クラスで実施）（必修），医学リサーチと実践的医療面接に重点を置いた医学英語「医学英語５，実用医学英語」（選択）を開講している。

福井大学「競争的配分経費（教育評価に基づく競争的経費）」として英語教育（特に「実用医学英語」における模擬患者）の充実に配分を受けた（平成 22～26 年度プログラム名「様々な臨床場面に対応できる実践的英語運用能力の育成」）。

■ 医学科英語関連シラバス（一部抜粋）

科目名	開講時期	必修・選択	講師所属	学習目標（H27年度シラバス）
英語1	1年（前期）	必修	語学センター	This is an English language course. Hopefully, students will: (1) Develop skills for personal communication in English, by talking about themselves on a variety of familiar topics, using a personalized scrapbook. (2) Create a scrapbook during the course, to support English conversation and presentation practice. (3) Practice and gain confidence in speaking English on a variety of topics, for basic daily communication. (4) Gain confidence in their ability to use English in the “4 skills”: speaking, listening, reading and writing. (Reading brief texts and freewriting will be done in class.) (5) Develop ways to increase English vocabulary. (6) Become more confident and gain more accuracy with basic grammar for English communication.
英語2	1年（前期）	必修	語学センター	This is an English language course. Hopefully, students will: (1) Develop skills for personal communication in English, by talking about themselves on a variety of familiar topics, using a personalized scrapbook. (2) Create a scrapbook during the course, to support English conversation and presentation practice. (3) Practice and gain confidence in speaking English on a variety of topics, for basic daily communication. (4) Gain confidence in their ability to use English in the “4 skills”: speaking, listening, reading and writing. (Reading brief texts and freewriting will be done in class.) (5) Develop ways to increase English vocabulary. (6) Become more confident and gain more accuracy with basic grammar for English communication.
英語3	1年（後期）	必修	語学センター	This is an English language writing course. The primary objective of this course is for students to develop their EFL writing proficiency, including for academic purposes. Three main types of writing will be introduced: narrative, expository, and argumentative. Readings and discussion will help students recognize the distinctions among various purposes of writing as seen in these “types.” Students will write multiple-draft papers on topics related to the readings. Each student will end the course having written three complete papers (average: 300-400 words). Students will then choose one of their own essays to revise, finally completing one longer paper (average: 700-750 words). Through in-class activities and discussion, peer-review, and instructor feedback, students will raise their confidence and improve their ability to write in English.
英語4	1年（後期）	必修	語学センター	This is an English language course. Hopefully, students will: (1) Gain confidence in and build their ability to read and understand English texts on a variety of topics. (2) Become familiar with foreign language reading strategies, and increase reading speed. (3) Gain confidence in their ability to use English in the “4 skills”: reading, writing, speaking and listening. (4) Increase familiarity with the TOEIC test, and learn strategies to improve TOEIC scores.
医学英語1	2年（前期）	必修	語学センター	Medical English 1-2 is an English course that uses medical English as its content. The major purpose of the course is for students to develop communication skills in medical settings, and learn medical terms in English that they are currently learning, or will learn, in Japanese in their medical courses. Beginning with bilingual vocabulary given in the textbook, or provided by the instructor, students will increase their English medical terminology. Medical English 1-2 involves reading, an intensive emphasis on vocabulary—in both English and Japanese—as well as the use of certain audio materials. There is also a presentation component of the course in which students will make presentations in class about specific medical-related topics from the various materials used in the class, for example, the textbook, other instructor handouts, DVDs, and online videos. All four language skills—reading, writing, speaking, and listening—will be used to understand content, discuss materials, and complete various activities. Note: This is not a translation course. Students are expected to be familiar with terminology in both English and Japanese, however.
医学英語2	2年（前期）	必修	語学センター	Medical English 1-2 is an English course that uses medical English as its content. The major purpose of the course is for students to develop communication skills in medical settings, and learn medical terms in English that they are currently learning, or will learn, in Japanese in their medical courses. Beginning with bilingual vocabulary given in the textbook, or provided by the instructor, students will increase their English medical terminology. Medical English 1-2 involves reading, an intensive emphasis on vocabulary—in both English and Japanese—as well as the use of certain audio materials. There is also a presentation component of the course in which students will make presentations in class about specific medical-related topics from the various materials used in the class, for example, the textbook, other instructor handouts, DVDs, and online videos. All four language skills—reading, writing, speaking, and listening—will be used to understand content, discuss materials, and complete various activities.
医学英語3	3年（前期）	必修	応用言語学	(1)医療面接に関するリスニング教材を用いて、臨床医学における実践的な英語表現の習得と英語リスニング力の強化を目指す。 (2)臨床医学に関する英単語・英語表現を習得する。
医学英語4	3年（後期）	必修	分子病理学、腫瘍病理学、ゲノム科学・微生物学、総合診療部、応用言語学	(1) Cecil Textbook of Medicineの読解を通じ、英文医学書を正確に読み取る力を習得する。なお、本科目で扱うテーマは全てコアカリ科目（循環器系、呼吸器系、消化器系、腎臓内科、内分泌・栄養・代謝）で同時期に学習中のものとし、双方の科目の理解を促進したい。 (2) 内科学の基本語の定義を英語で学ぶことにより、専門的・学術的な語彙力を養う。
医学英語5	4年（前期）	選択	ゲノム科学・微生物学、薬理学、子どものこころの発達研究センター、腫瘍病理学、分子遺伝学、内科学(1)	医学研究論文の読解と、英語による発表、英作文についての実践的内容を学ぶ。
実用医学英語	4年（後期）	選択	総合診療部、応用言語学、脳脊髄神経外科学、内科学(1)、救急部、福井	外国人模擬患者(SP)との医療面接演習を通じ、英語で外国人患者を安全かつ効果的に診察する能力を養う。

（事務局資料）

資料 1-2-2-13　看護学科英語カリキュラム

「英語Ⅰ～Ⅳ」を各科目２クラスに分けて 実施し，社会からの要請(医療現場で活用できる英語力を持った医療人の育成による医療の国際化)に応える英語教育を実践している。

■ 看護学科英語関連シラバス（一部抜粋）

科目名	開講時期	必修・選択	講師所属	学習目標(H27年度シラバス)
英語Ⅰ	1年 （前期）	必修	語学センター	This is an English language course. Hopefully, students will: (1) Develop skills for personal communication in English, by talking about themselves on a variety of familiar topics, using a personalized scrapbook. (2) Create a scrapbook during the course, to support English conversation and presentation practice. (3) Gain confidence in their ability to use English in the "4 skills": speaking, listening, reading and writing (4) Practice and gain confidence in speaking English on a variety of topics, for basic daily communication. (5) Develop ways to increase English vocabulary. (6) Become more confident and gain more accuracy with basic grammar for English communication.
英語Ⅱ	1年 （前期）	必修	語学センター	This is an English language course. Hopefully, students will: (1) Develop skills for personal communication in English, by talking about themselves on a variety of familiar topics, using a personalized scrapbook. (2) Create a scrapbook during the course, to support English conversation and presentation practice. (3) Gain confidence in their ability to use English in the "4 skills": speaking, listening, reading and writing (4) Practice and gain confidence in speaking English on a variety of topics, for basic daily communication. (5) Develop ways to increase English vocabulary. (6) Become more confident and gain more accuracy with basic grammar for English communication.
英語Ⅲ	2年 （後期）	必修	語学センター	This is an English language course. (1) Gain confidence in one's ability to use English, in the four key skills: Reading, Writing, Speaking and Listening. (2) Gain confidence in using English and build on current ability to communicate, by speaking more and with greater complexity on a variety of topics, for basic daily communication. (3) Develop ways to increase English vocabulary. (4) Become more familiar with the TOEIC test and test-taking skills.
英語Ⅳ	2年 （後期）	必修	語学センター	This is an English language course. (1) Gain confidence in one's ability to use English, in the four key skills: Reading, Writing, Speaking and Listening. (2) Gain confidence in using English and build on current ability to communicate, by speaking more and with greater complexity on a variety of topics, for basic daily communication. (3) Develop ways to increase English vocabulary. (4) Become more familiar with the TOEIC test and test-taking skills.

＊ 平成 28 年度よりグローバル化をより進めるため、英語Ⅲ・Ⅳを１年次に履修し、更に３・４年次には看護英語Ⅰ・Ⅱ（選択）を開講することとしている。

（事務局資料）

③　GGJ 事業により海外留学・研修の機会を積極的に設け（**資料 1-2-2-14**），留学する学生が増加した（**P4-26 前掲資料 1-1-1-27**）。留学した学生及び受け入れ施設から高い評価を得ている（**資料 1-2-2-15, 16**）。

資料 1-2-2-14　GGJ 事業における海外留学・研修プログラム（医学部）

GGJ 事業（平成 24～28 年度）により海外留学・研修の機会を設け，海外の大学附属病院での実習や大学・研究所での研究実習などを実施している。プログラムには内容により全学生対象の語学研修型・分化体験型等及び医学部対象の専門分野型があり，毎年 20 件程度のプログラムが実施され，留学生数が増加している（P4-26 前掲資料 1-1-1-27）。

■ 平成 24～27 年度プログラム（医学部実施）

類型	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
語学研修型，文化体験型等（全学対象）	7 件	9 件	13 件	13 件
専門分野型（医学部対象）	0 件	10 件	7 件	9 件

■ 平成 27 年度プログラム（専門分野型・医学部対象）

類型	対象	プログラム名	国名・派遣連携機関	期間	プログラム写真	プログラム概要	参加予定人数	単位付与
専門分野型（医学）	医学科	オンドグズマユス大学医学部派遣	【トルコ】オンドクズマユス大学	8/2-8/14 8/25-9/10		午前中は、トルコでも有数の充実した医療設備と高度医療を提供する大学附属病院にて病院見学・実習を行い、午後はトルコ語基礎講座を受講する。プログラムを通して、ヨーロッパの医療教育システムやトルコの地域医療システムの理解を目指す。また、非英語圏にて英語を使用して現地医学生や医師と交流することで、高度なコミュニケーション能力を涵養する。	3	2
専門分野型（医学）	医学科（U3）	海外研究機関における基礎医学実習	【アメリカ】サンフォード・バーナム医学研究所	8/18-9/14		PCRやサブクローニング、ウェスタンブロッティング、免疫組織化学染色、マウス実験動物の手技を身につけ、分子生物学的手法や科学的な研究アプローチのノウハウを習得する。分子生物学研究と神経科学の最先端研究を英語圏で体験することで、新しい科学的発見に貢献できる医学研究者を養成する。滞在中は、一般家庭でのホームステイにより、英語コミュニケーション力と異文化理解力を強化する。	1	144h
専門分野型（医学）	医学科（U3）	発達障害モデルとしてのCD38KOマウスの脳組織形態学的検討	【オランダ】ユトレヒト大学医学センター	8/20-9/13		設備面等の研究環境が充実しているユトレヒト大学医学センターのMartien Kas&Peter Burbach研究室に滞在し、CD38KOマウス脳組織の形態学実験に従事する。研修を通じて海外の研究者及び学生との交流を深め、異文化交流に十分なコミュニケーション力を身につけるとともに、将来国際的に活躍できる医療人・医学研究者に必要とされる科学的問題解決能力を養う。	1	2
専門分野型（医学）	医学科（U3）	海外研究機関における基礎医学実習	【アメリカ】ノースウェスタン大学	8/22-9/9		アレルギー、免疫学の分野で世界的に有名なノースウェスタン大学耳鼻咽喉科研究室にて、気道上皮細胞におけるtissue plasminogen activatorの発現メカニズムに関する研究を行う。現地教員が行う基礎研究の見学及び毎日実施されている英語プレゼンテーションへの参加を通して、世界中から基礎研究を行うために集まる現役医師達の熱意を身近に感じ、各人が持つ研究者への将来像をより明確なものにする。	2	144h
専門分野型（医学）	医学科（U1-4）	チェンマイ大学との医学研修交流	【タイ】チェンマイ大学	8/23-8/31 8/24-8/31 8/28-9/3 9/1-9/9		国内トップレベルの規模を誇るチェンマイ大学医学部での授業聴講、同大学附属病院・関連医療機関での見学ならびに医療実習等を通して、熱帯地域の特異な感染症や疫学について実地で学ぶことにより、現地の状況をより深く理解・習得する。また、プログラムの計画・実施を学生が主体的に行うことにより、自己学習力や問題解決能力を養成する。	4	1
専門分野型（医学）	医学科（U3）	海外研究機関における基礎医学実習	【アメリカ】クリーブランド・クリニック	8/28-9/18		クリーブランド・クリニックのDepartment of Translational Hematology and Oncology Researchにおいて、血液悪性腫瘍の疾患関連因子（ゲノムの異常、標的遺伝子の発現変化）と発症・進展・転帰等の関連を探る基礎研究を行う。生命医科学分野における米国の最先端の研究及び研究室を体験し、日本の現状及び医科学分野の発展のために必要な基礎知識、人間関係、研究費獲得のための取組み等を理解する。	1	144h
専門分野型（医学）	IFMSA会員学生	IFMSA Research 交換留学プログラム	【クロアチア】ザグレブ大学	8/27-9/27		ザグレブ大学医学部の研究室にて約1か月間、興味を持つテーマについて基礎医学研究・発表を行い、日本と異なる医療現場の実態について理解を深める。また、研究面においても、現地医学生や医師らとの交流の中で、異なる見識を交えた意見交換を行うことにより、新たな知見を得て、多角的に研究を行うための素養やコミュニケーション能力を身に付ける。	1	2
専門分野型（医学）	看護学科（U3）	英国の医療と高度実践看護師研修	【イギリス】 -バーミンガム市立大学 -レスター大学グレンフィールド病院 -セントクリストファーズホスピス	9/18-9/29		大学病院、がん専門病院、ホスピスにて見学実習や授業参加を行う。それぞれの領域における専門的医療・看護の実践について学ぶとともに、現地学生との交流を通して学習に対する姿勢や意欲に触れ、今後のモチベーション向上に繋げる。特にイギリスと日本における健康保険制度と医療サービスの特徴を理解し、両国の制度を踏まえた上で各々のシステムにおける最高・最善の医療の提供について考察する。	9	1
専門分野型（医学）	医学科（U3）	海外研究機関における基礎医学実習	【インド】国立結核医学研究所	2-3月		公害病にあたるじん肺のレントゲン読影の技術について、独自のデータと技術を有する国立結核医学研究所で学ぶ。講義及び実技を通して、フィールド疫学調査法、医学生物学の分析、計測技術を習得し、受け入れ先のプロジェクトに貢献するほか、専門性を活かして世界の発展に貢献するモチベーションを高める。	1	144h

（事務局資料）

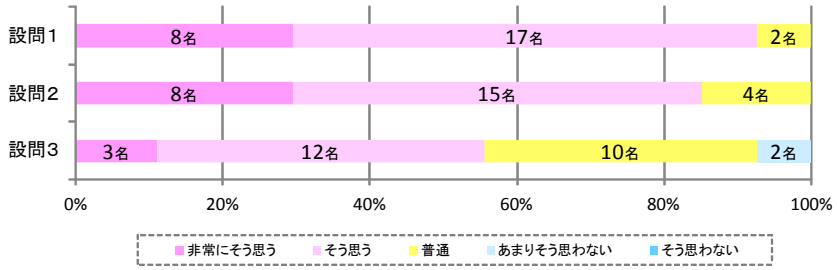
資料 1-2-2-15　留学した学生の自己評価

留学した学生は概ね海外を志向するモチベーション及びコミュニケーション能力を身につけたとしている。

設問１_これまで以上に海外を志向するモチベーションを身につけましたか

設問２_異文化（海外）でのコミュニケーション能力を学びましたか

設問３_使える「英語力」を身につけましたか



（平成 27 年度「医学部留学生対象アンケート」結果より抜粋）

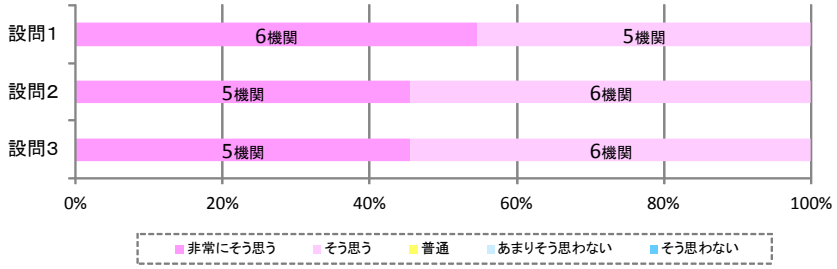
資料 1-2-2-16　留学派遣先からの評価

本学からの留学生を受け入れた施設・研究室等からの留学生評価によると，留学生は積極的に知識・技術・チーム協調性・社会的責任・使命感等を学んだとされる。

設問１_新しい知識・技術を積極的に修得しましたか？

設問２_医療チーム，もしくは研究チーム内での協調性を学びましたか？

設問３_社会的責任，使命感，医療倫理観を学びましたか？



■ 留学派遣先からのコメント

・学部３年生には非常に高いレベルでの研究をさせてしまいましたが，本人はとてもよく頑張りました。３週間と短い期間でしたので，語学力に関してはこれからと感じますが，積極性や技術向上は目を見張るものがあったと思います。今後は１ヵ月以上の海外派遣を推進していくべきかと個人的には思います。

・He was very active in exchange program and participated both learning and student activities.

・We observed his nice behavior and active learning.

・She worked really hard to learn how to design research experiments, understand obtained results as well as acquire experimental skills, such as molecular biology, biochemistry and cell culture. Also, she frequently joined lab meeting and seminars at our and other institutes.

・She asked many questions to our project and discussed a lot.

・She was very curious and active for learning subjects.

（平成 27 年度医学部留学受入れ機関アンケート結果より抜粋）

④　看護学科では４年次後期に海外キャリアアップ実習を開講し(**資料 1-2-2-17**)，グローバル能力の育成を行い，履修者から好評を得ている（**資料 1-2-2-18**）。

資料 1-2-2-17　看護学科キャリアアップ実習シラバス

キャリアアップ実習

科　目　名		単位数又はコマ数	開　講　時　期
キャリアアップ実習(選択)		1 単位	3−4 年次生
担当教員名	職名／所属	E メールアドレス	オフィスアワー
長谷川　智子 他	教授／基礎看護学	hasekatz@u-fukui.ac.jp	金曜日　15-17 時

1　実習目的

国際的な看護活動や，専門分野における看護実践について理解を深め，将来高度実践看護師として専門分野で活躍するための，キャリアアップする能力を養う。

2　実習目標

1)　国内外において高度実践看護師（認定看護師，専門看護師等）によりケアが提供されている専門分野を理解する。

2)　看護における専門分野での高度実践看護師（認定看護師，専門看護師等）の役割を理解する。

3)　高度実践看護師（認定看護師，専門看護師等）の専門性の高い看護の実践について理解する。

4)　将来，専門性の高い高度実践看護師となるための基礎的知識と態度を修得する。

3　実習内容

以下のうちどれかを選択し，それぞれの目標達成のための実習を行う。

（中略）

《国外における高度実践看護体験実習》

1)　看護活動を見学実習することで，日本以外の国における看護実践と国際的看護活動を学ぶ。

2)　実習場所における高度看護師の活動と，看護専門領域の活動について見学実習することで，高度実践看護師の看護実践能力と看護の成果について学ぶ。

4　実習方法

以下のうちどれかを選択し，それぞれの目標達成のための実習を行う。

（中略）

《国外における高度実践看護体験実習》

1)　実習期間：1 週間

2)　実習場所：

- イギリス，バーミンガム市立大学，大学病院コベントリー＆ワーウィック
- イギリス，レスター大学附属グレンフィールド病院（University of Leicester Hospitals,　Glenfield Hospital, Leicester, UK)
- イギリス，セント・クリストファー・ホスピス（St. Christopher Hospice, London, UK)

3)　実習指導体制

担当教員は，実習指導者との連絡・調整を行い，実習の内容と支援体制について打ち合わせを行う。また，担当教員と学生グループは，実習指導者引率のもと，実習施設における看護ケアの実際を見学実習する。また，看護専門領域における高度実践看護師より，活動内容の説明を受け，実際の活動を見学実習する。

実習の総括として，学生は実習指導者，高度実践看護師，担当教員とともにカンファレンスを行い，個人の学びを深める。なお，担当教員は必要に応じて通訳を行う。

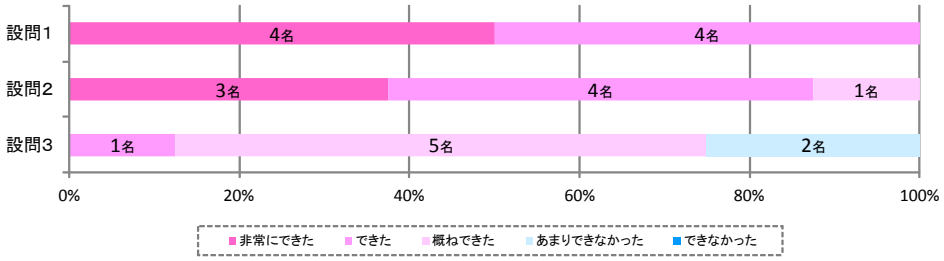
（2015 年度看護学科授業要項より抜粋）

資料 1-2-2-18　看護学科キャリアアップ実習（海外）に対する学生の評価

平成 26 年度より国外における高度実践看護体験実習として１週間のイギリスにおける実習を実施し（選択），参加学生は海外における看護専門分野の理解や国際的視点からの医療について理解を深めることができ，語学力については過半の学生が向上させることができたとしている。

■ 実習に参加した学生のアンケート

設問１_海外における高度実践看護師によりケアが提供されている専門分野を理解することができましたか
設問２_海外における医療制度を理解し，国際的視点から医療のあり方を理解することができましたか
設問３_自己の語学力（英語）を向上させることができましたか



設問４_今回の経験が，今後の学生生活・キャリアアップにどのように活かせるでしょうか（一部抜粋）

- イギリスの看護学生は，日本の看護学生よりも実習期間が長く，実習では先輩看護師に技術チェックを行ってもらうなど，次のステップに進むためにクリアすべきことがたくさんあり，ほとんどの学生が自分の興味のある分野でスペシャリストになりたいと思っていると聞きました。イギリスの看護学生の意識の高さを実感し，今後の実習を通して自分の興味ある分野を見つけ出していきたいと思いました。
- 世界最高レベルの医療体制を知ったことで，今まで当たり前に感じていた日本の医療体制をもう一度見つめ直し，学ぶことができる。
- 日本の医療の少し先を進むと言われているイギリスの医療を学んだことで，今後日本での実習で多面的に考えることが可能になると思います。

設問５_「キャリアアップ実習」は全体を通していかがでしたか（一部抜粋）

- 他国の医療体制や職場環境，看護師への道のりなどを学び，看護について今までとは違った視点からも捉えられるようになり，もっと学びたいと意識を高めることができてとてもよい経験となりました。
- 日本だけを見ていては分からない看護の現場を見ることで，今後もっと勉強を頑張っていきたいと自分を奮い立たせるよい機会となった。また，イギリスの文化にも触れることができて良い思い出になった。
- 海外で実際に現地に行き学ぶことで，学びが吸収されやすく日本だけにとらわれない視野の広がりを感じることができた。様々な国の看護についても学びたいと感じた。
- 日本のキャリアを高める意識作りができた良い実習になりました。今までとは違う視点で日本の医療制度を見ることができるようになり，よかったです。





（平成 27 年度キャリアアップ実習アンケート結果より抜粋）

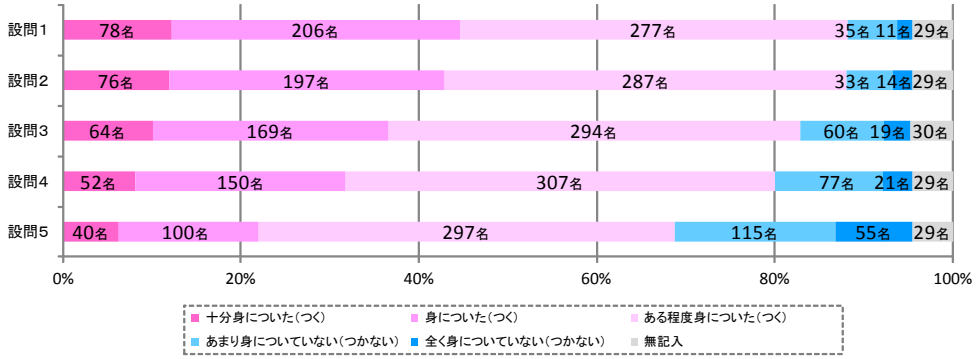
⑤　グローバル人材育成による能力の涵養状況は良好である（**資料 1-2-2-19**）。

資料 1-2-2-19 「卒業時にグローバルな視野を有する人材として備えるべき能力等」の涵養状況

「グローバルな視野を有する人材として備えるべき能力等」についての意見聴取の結果，医学部学生は概ね本学で設定した能力の涵養がなされている。「使える語学力」については過半の学生が身についた（身につく）としているが，身についていないとする学生も一定数おり，今後語学センター教員による小クラス講義，英語科目増加や新設した LDC を活用して，語学力の向上に努めることとしている。

本学では，皆さんが“グローバルな視野を持った高度専門職業人”となることを教育の大きな目標としています。福井大学の学習をとおして，以下の力などがどの程度身についた，あるいは卒業・終了時までに身につくと思いますか？

設問１_職業人として備えるべき社会的責任感
設問２_課題探究・問題解決能力，自己学習能力
設問３_コミュニケーション能力
設問４_グローバル化社会での活躍を志向する態度
設問５_使える英語力（語学力）



（平成 27 年度「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」結果より抜粋）

●養成しようとする人材像に応じた効果的な教育方法の工夫

【教育方法の組み合わせ】

医学・看護学の知識･技能を習得するため，様々な指導法等の工夫を行い（**資料 1-2-3-1**），一連の取組は学生から高い評価を得ている（**資料 1-2-3-2**）。

資料 1-2-3-1　授業における学習指導法の工夫状況

それぞれの学科において平成26年度開講科目を対象に調査し教員から回答のあった科目の総数とその科目数に対する割合を示す。

授業区分では，医学科では科目の半数近くが「講義」中心であるが，他は「実習」や「演習」を組み合わせて実施している。看護学科では約半数が「講義」のみのであるが，他は「演習」「講義と演習」「実験実習」による科目である。

学習指導法の工夫としては,メディアを利用した科目が非常に多いが,「対話・討論型授業」や「フィールド型授業」あるいは「少人数教育」を取り入れている科目も多数見られる。

■ 授業区分

学科	授業区分 ※										合計
	講義		演習		実験・実習		講義と演習		講義と実習		
	科目数	割合	科目数	割合	科目数	割合	科目数	割合	科目数	割合	
医学科	45科目	43.7%	18科目	17.5%	8科目	7.8%	9科目	8.7%	23科目	22.3%	103科目
看護学科	49科目	48.5%	26科目	25.7%	17科目	16.8%	9科目	8.9%	－	－	101科目

※ 教養教育科目を含む

■ 学習指導法の工夫

学科	授業区分	科目数	学習指導法上の工夫									
			少人数教育		対話・討論型		フィールド型		メディア型		TA活用	
			科目数	割合	科目数	割合	科目数	割合	科目数	割合	科目数	割合
医学科	講義	77科目	1科目	1.3%	11科目	14.3%	8科目	10.4%	77科目	100.0%	7科目	9.1%
	演習	18科目	13科目	72.2%	17科目	94.4%	0科目	0.0%	18科目	100.0%	0科目	0.0%
	実験・実習	8科目	4科目	50.0%	5科目	62.5%	4科目	50.0%	1科目	12.5%	2科目	25.0%
	(計)	(103科目)	(18科目)	(17.5%)	(33科目)	(32.0%)	(12科目)	(11.7%)	(96科目)	(93.2%)	(9科目)	(8.7%)
看護学科	講義	49科目	3科目	6.1%	22科目	44.9%	0科目	0.0%	49科目	100.0%	0科目	0.0%
	演習	35科目	12科目	34.3%	22科目	62.9%	3科目	8.6%	34科目	97.1%	0科目	0.0%
	実験・実習	17科目	13科目	76.5%	13科目	76.5%	13科目	76.5%	0科目	0.0%	0科目	0.0%
	(計)	(101科目)	(28科目)	(27.7%)	(57科目)	(56.4%)	(16科目)	(15.8%)	(83科目)	(82.2%)	(0科目)	(0.0%)

■ 医学科における教育方法の工夫（例）

・課題探究・解決能力形成のため，少人数グループで学習を進める「テュートリアル教育」を取り入れている（P4-124 **後掲資料** 1-2-3-13）。
・英語教育担当教員と医学専門教育担当教員が連携した「医学英語科目」を専門教育科目として２年次～４年次に展開している（P4-106 **前掲資料** 1-2-2-12, 13）。
・研究マインドを涵養するため，「アドバンストコース」による先端医学講義と実習，研究室で教員と共に研究を行う「研究室配属」を行っている（P4-88 **前掲資料** 1-2-1-20～22）。
・臨床前教育課程において，科目内容に最も相応しい研究・診療活動を実施している教員が領域の枠を超えて横断的に担当する「統合型」講義形式を導入している（P4-130 **後掲資料** 1-2-3-19）。
・臨床系科目では，講義形式にテュートリアル教育を組み合わせた統合型科目を配し，学生が将来実際に体験する臨床的な課題にテュートリアル形式で取り組んでいる（P4-124 **後掲資料** 1-2-3-13）。
・「画像医学」を自学自習できるシステムを整備し，画像診断能力の向上を行っている（P4-129 **後掲資料** 1-2-3-18）。
・実践的な臨床能力を身につける臨床参加型学習（クリニカルクラークシップ）を実施している（P4-115, 116 **後掲資料** 1-2-3-3, 4）。

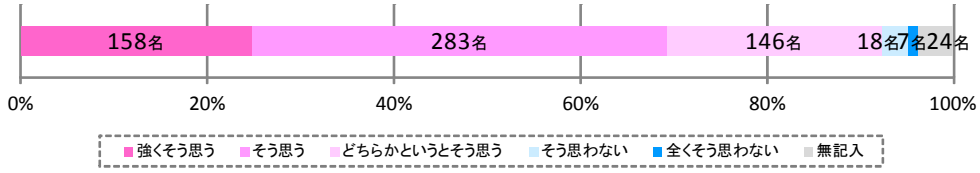
■ 看護学科における教育方法の工夫（例）

・「看護基本技術の記録」による自己評価システムの導入によって，自己評価に基づき実践的看護能力が習得できるようにしている（P4-122 **後掲資料** 1-2-3-10）。
・課題・解決能力形成のため，「自己主導型学習」を専門基礎科目や専門科目に導入し，グループワークや学生参加型教育を展開している。
・国際的な看護活動や専門分野における看護実践活動に触れることができるよう「キャリアアップ実習」を実施している（P4-111 **前掲資料** 1-2-2-18）。
・多職種チーム医療の基礎となる「医看合同講義」を導入している（P4-93 **前掲資料** 1-2-1-26）。
・「卒業研究」において「看護研究方法論」を学んだ上で，学生自らが実習を通して見いだした課題について教員と共に課題解決研究を遂行している（P4-92 **前掲資料** 1-2-1-25）。

（事務局資料）

資料 1-2-3-2　教育方法に対する学生の評価

設問_医学部では，さまざまな教育方法・履修形態（チュートリアル，少人数教育，統合型講習，実習など）を取り入れていますが，これらは医師あるいは看護師として備えるべき能力を育成するうえで役立った（役立つ）と思いますか？



（平成 27 年度「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」結果より抜粋）

【臨床実習の工夫】

①　医学科臨床実習委員会の統括のもと，５年次生はスチューデントドクターとして診療参加型臨床実習を附属病院にて行い，病棟での診療録作成，カンファレンス参加など学生の積極的参加を促す実習に改善している（**資料 1-2-3-3，4**）。６年次生は卒前臨床医学研修として附属病院と教育関連病院での実習を行っている（**P4-13 前掲資料 1-1-1-9，10**）。全ての実習に対して学生からの評価は高く，第１期に比して向上した（**資料 1-2-3-5**）。

資料 1-2-3-3　臨床実習の概要

■　臨床実習

① ５年次生による 40 週間の福井大学附属病院で実施する「臨床実習」

② ６年次生による附属病院での前期・後期４週間と教育関連病院で実施する中期５週間の「卒前臨床医学研修」

■ 臨床実習の教育目標

実際の患者に接することで，患者の有する身体的・精神的・社会的問題点を的確に把握し，その各々について患者に適切な処置及び指導を与えることができるようになるための医学知識・技能・患者に接する態度を身に付けること。

■ **福井大学医学部クリニカルクラークシップにおける医行為の範囲**

診療参加型臨床実習において各診療科（部）では定められた範囲に従い医行為を実施している。多くの医行為において学生は実際に患者に施行あるいは学生同士又はシミュレーターによる体験を実施している。指導医が行うことを見学している行為を含めると，クリニカルクラークシップにおいて大多数の医行為を学んでいる。

また，平成 28 年度に始まる新カリキュラムにおいては，医行為水準としてレベル１（学生が施行可能）とレベル２（見学）を設定，目標として「卒業時に上級医監視下で診療業務を実施できるレベル，侵襲的あるいは恥辱的医行為については模擬診療を実施できること」とし，卒業時 OSCE により診療参加型臨床実習の成果を測ることとしている。

■「福井大学医学部クリニカルクラークシップにおける医行為の範囲」（例）

福井大学医学部クリニカルクラークシップにおける医行為の範囲

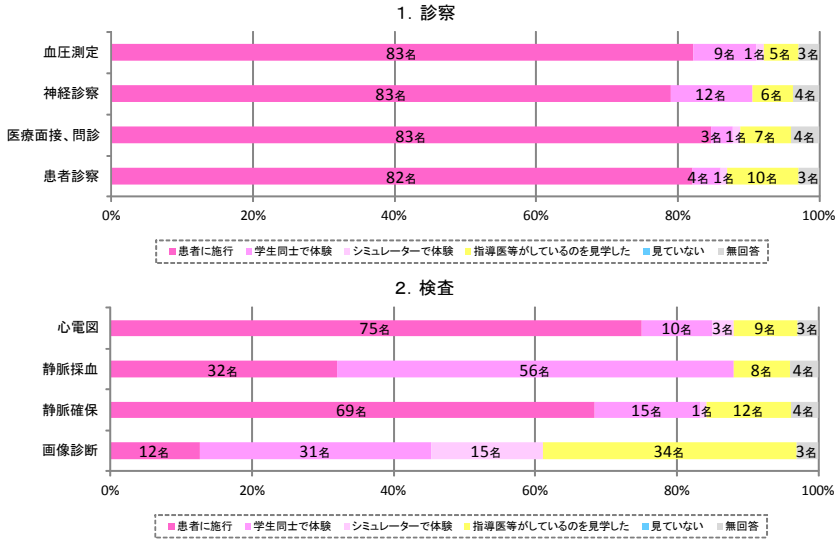
（平成１９年12月20日　医学科会議承認）

【指導医の指導・監督のもとに実施が許容されるもの】

項　　目	内科系	小児	精神	皮膚	放射	一外	二外	整形	脳外	麻酔	産科	泌尿	眼科	耳鼻	歯科	腎内	病理	薬剤	救急	総合診療
1. 診察																				
・全身の視診、打診、触診	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				○	○
・簡単な器具（聴診器、打腱器、血圧計など）を用いる全身の診察	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○		○				○	○
・耳鏡、鼻鏡、検眼鏡による診察（学生同士の実習を中心とする）	○	○							○	○				○					○	○
2. 検査																				
（生理学的検査）																			○	○
・心電図、心音図、心機図	○	○		○		○	○			○									○	○
・脳波	○	○							○	○									○	○
・呼吸機能（肺活量など）	○	○				○	○			○									○	○
・聴力、平衡、味覚、臭覚	○	○							○	○				○					○	○
・視野、視力	○	○							○	○			○							
（画像診断）																				
・超音波	○	○				○	○			○	○	○		○					○	○
・MRI（介助）	○	○	○					○	○	○	○								○	○
（放射線学的検査）																				
・単純×線撮影（介助）	○	○					○	○	○	○									○	○
・RI（介助）	○	○					○	○	○	○		○							○	○
（採血）																				
・耳朶・指先など動脈血採血、静脈（末梢）（学生同士の実習を中心とする）	○			○				○	○	○				○					○	○
（その他）																				

■ 医学科学生の医行為

設問_以下の診療手技の実施状況について教えてください。



（平成 27 年度臨床実習後アンケート結果より抜粋）

資料 1-2-3-4　診療参加型実習の工夫

■ スチューデントドクター

学生は CBT, OSCE（**P4-157 後掲資料 2-1-2-5, 6**）及び４年次科目を合格したものがスチューデントドクターとして臨床実習上の注意（個人情報の取り扱いを含む）を遵守する事を前提に実習に臨んでいる。なお学生は「Student Doctor 認定証授与式」にて認定証の授与を受けスチューデントドクターとしての誓いのことばを述べている。



■ 学生用診療録作成

学生は各自アカウントを持ち病院情報システムを利用して患者の個人情報を閲覧し，学生用診療録を作成し担当医と共に臨床実習を行っている。

ID	イニシャル	歳	男・女
現病歴			
Problem List Active　　Inactive			
Weekly Summary			
意識 血圧　/　mmHg　脈拍　/分 呼吸数　/分 体温　℃ 酸素飽和度（SpO_2）　% 1日尿量　ml			
S			
O 身体所見 検査所見			
A/P			
学生氏名			

■ iPad による実習

各学生が iPad を用い，指導医の開いている電子カルテを同時に見つつ，診療に参加出来る体制としている。



■ カンファレンス等への参加

各診療科ではカンファレンス参加と学生による症例報告等を取り入れ，学生用診療録をもとに教員による評価フィードバックを行うなど，学生の積極的参加を促す内容としている。



（事務局資料）

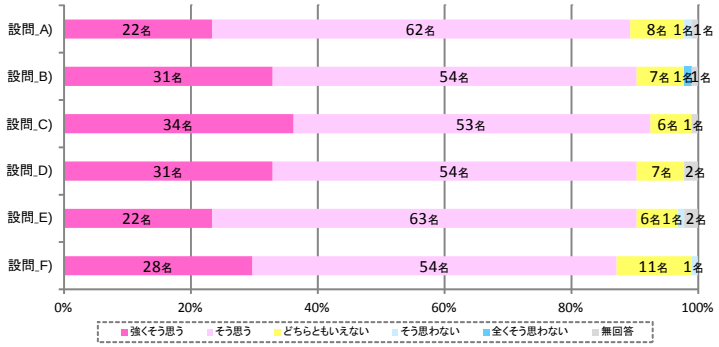
資料 1-2-3-5　臨床実習に対する評価

臨床実習に対する学生の評価によると，大方の学生は臨床実習に積極的に取り組み，専門知識・意欲態度・自己の適性・学ぶ態度・医療人としての能力等の涵養ができたとしている。学内実習及び学外実習を適切と判断する割合は 80%以上であり，その割合は第１より増加している。学外実習を担当した医療機関への意見聴取の結果も，学生の理解が増したと 80%以上が回答している。

■ 臨床実習に対する学生の評価

設問_臨床実習では，業務経験を通じ，①専門知識の有用性や職種自体についての具体的理解，②医療への意欲・態度の涵養・向上，③自己の適性や志向に照らし進路を考える機会として活用，④主体的な学習態度の育成や学習への動機づけ，⑤ディプロマポリシー等で明示した高度専門職業人として備えるべき能力等の育成を目的としています。そこで，実習を経験して，

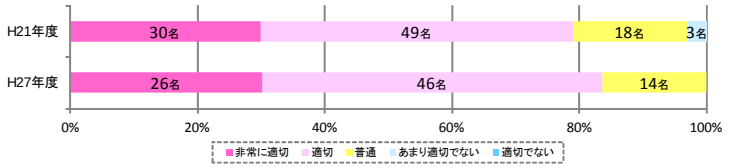
A) あなたの専門知識が有用で，職種自体についての理解が増したと思いますか
B) 医療への意欲・態度が向上したと思いますか
C) 今回の臨床実習は自己の適性や志向に照らし進路を考える機会になったと思いますか
D) 学修への動機づけを含めて進んで学習する態度を養うことができたと思いますか
E) 医療人としての知識・技能・コミュニケーション能力・倫理観・向上する意欲や学ぶ習慣などを養うことができたと思いますか
F) あなたは今回の臨床実習に積極的に取り組んだと思いますか



（平成 27 年度カリキュラム評価アンケート（６年次生用）結果より抜粋）

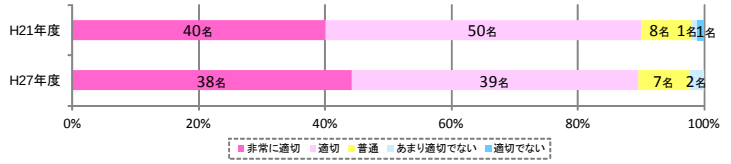
■ 卒前臨床医学研修に対する学生の評価

設問_卒前臨床医学研修（前期２週：学内）は知識・技能・態度を修得する上で全般的に適切なものでしたか



＊ 第１期末と比較して，第２期末では学生の評価（非常に適切～適切とした割合）は，4.7%向上している。

設問_卒前臨床医学研修（中期５週：学外）は知識・技能・態度を修得する上で全般的に適切なものでしたか

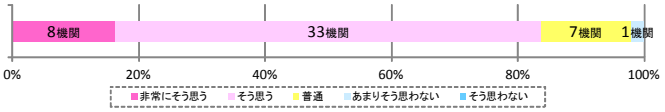


＊ 第１期末と比較して，第２期末では学生の高い評価（非常に適切とした割合）は，4.2%向上している。

（平成 27 年度卒前臨床研修アンケート結果より抜粋）

■ 学外医療機関による学生の臨床実習評価

設問_今回の臨床実習を通して，医師の病院業務について学生の理解が増したと思われますか



＊ 学生の知識や能力などへの効果について，学生の理解が増したと回答した学外実習担当機関が 83.7%と大多数を占める。

（平成 26 年度臨床実習受け入れ先機関に対するアンケート調査結果より抜粋）

（事務局資料）

② 診療技能の実習では，平成 26 年度に新設された福井メディカルシミュレーションセンターを活用している（**資料 1-2-3-6～7**）。

資料 1-2-3-6　福井メディカルシミュレーションセンターの概要

平成26年度に福井県の支援によって医学部臨床教育研修センターに併設して新設された福井メディカルシミュレーションセンターは，県内全体の医療のレベルアップと質の高い医療サービスの提供を目的に整備され，超音波診断や血管内治療等を想定した各種シミュレーターを備える。シミュレーターを用いた教育は，新人の医療従事者の慣れない実技によるリスクの軽減や多くの医療従事者に対して均一な診療技術を効果的に習得できる。そのため福井県内のすべての医療従事者を対象としたシミュレーションセンターを開設し，医療従事者の技術向上や医学生・研修医・看護学生・新人看護師の臨床研修の充実を図るとともに，県内の医療従事者の確保を図っている。

シミュレーションセンターを利用した学生対象の実習等として「基本的診療技能」「臨床実習」における内視鏡やダビンチ利用，救命救急処置実習（医と看），福井県奨学生交流会，学生自主サークル活動など多方面において利用されている。またシミュレーションセンターを使用した専門的かつ高度な教育プログラムや研修医向けプログラムなども開催している。



■ 施設の概要

施設名	用途
シミュレーションルーム（８室）	シミュレーターを用いた災害による外傷や緊急被ばくの初期診断，循環器や脳血管疾患等の血管内治療，消化器・気管支の内視鏡や腹腔鏡手術等のトレーニング
ウエットラボ	手術室をイメージしながらの縫合実習等の外科系手技のトレーニング
トレーニングルーム	心肺蘇生・AED 講習会等の講習会開催，およびシミュレーターを用いた実習

（事務局資料）

資料 1-2-3-7　シミュレーションセンターの学生利用状況

平成 26 年度に新設されたシミュレーションセンターは，臨床実習・講義，医看合同授業，AED 講習会などに利用されており，平成 27 年度は延 1,000 人以上の学生が利用している。

■ 利用状況

年度	講座／部局	利用目的	実施回数	参加者数
平成26年度	外科学(1)	学生実習 【内視鏡外科手術用ﾄﾚｰﾆﾝｸﾞﾎﾞｯｸｽ使用しての縫合等実習】	2回	10名
	外科学(2)	ﾚﾝﾄｹﾞﾝ読影会(学生講義)	1回	10名
	泌尿器科学	学生指導 【ﾀﾞ･ｳﾞｨﾝﾁ指導】	1回	5名
	救急医学・総合診療部	診断学実習 【医療面接・心肺蘇生】	12回	120名
		BLS教育 【一次救命処置勉強】	4回	10名
		医学部1回生心肺蘇生評価【ﾚｻｼｱﾝｼﾐｭﾚｰﾀｰ、AED】	1回	110名
		ｴｺｰ勉強会 【肺ｴｺｰ】	1回	4名
		ｼﾐｭﾚｰﾀｰ教育【多発外傷ｼﾐｭﾚｰﾀｰを使用しての教育】	1回	1名
	地域医療推進講座	福井県奨学生交流会2014 in Autumn【情報交換会】	1回	47名
	松岡キャンパス学務室	医学科4年次「(基本的診療技能」 医療面接・診断学実習	1回	120名
(計)			(25回)	(437名)
平成27年度	外科学(1)	学生実習 【内視鏡外科手術用ﾄﾚｰﾆﾝｸﾞﾎﾞｯｸｽ、ﾀﾞ･ｳﾞｨﾝﾁ、腹腔鏡下手術ｼﾐｭﾚｰﾀを使用しての縫合等実習】	13回	87名
	外科学(2)	学生教育 【血管内治療ｼﾐｭﾚｰﾀｰによるﾄﾚｰﾆﾝｸﾞ】	10回	49名
		ﾚﾝﾄｹﾞﾝ読影会(学生講義)	10回	100名
	泌尿器科学	学生指導 【ﾀﾞ･ｳﾞｨﾝﾁ指導】	9回	47名
	脳脊髄神経外科学	ﾎﾟﾘｸﾘ学生向け勉強会 【脳血管内手術ﾄﾚｰﾆﾝｸﾞ】	5回	33名
	救急医学・総合診療部	学生教育 【多発外傷ｼﾐｭﾚｰﾀｰを使用しての教育(心肺蘇生)】	23回	68名
		4年生 ｼﾐｭﾚｰｼｮﾝｺｰｽ(4年生講義)	1回	120名
		救急勉強会(緊急時の対応)	1回	10名
	地域医療推進講座	医学科・看護学科合同授業	1回	183名
	内科学(2)	消化器内視鏡ﾄﾚｰﾆﾝｸﾞ	1回	8名
	内科学(3)	学生・研修医の修練 【内視鏡、ﾀﾞ･ｳﾞｨﾝﾁの修練】	1回	8名
	母子看護学	小児看護活動論にて小児ﾌｨｼﾞｶﾙｱｾｽﾒﾝﾄ・救急救命処置	4回	236名
	松岡キャンパス学務室	医学科1年次生 AED講習会	1回	60名
		医学科4年次「(基本的診療技能」 医療面接・診断学実習	1回	150名
(計)			(81回)	(1,159名)

＊ シミュレーションセンターでは「基本的診療技能」における「診断学実習」を実施し医学科４年次生全員がシミュレーターによる実習を実施している。

■ シミュレーター機器の例

【内視鏡外科手術用トレーニングボックス】



【血管内治療シミュレーター】



■ シミュレーションセンターを利用して学習している学生の声

・ 臨床研修センターはプロジェクターや電子黒板など，学生が勉強を行う上でも活躍する機材が充実しており，自発的な学習をする上で大変役に立っています。
・ 救急医療における手技・知識を習得・学習する上では，リトルアン・トレーニング用 AED・ハートシムなどの機材を無料で貸し出していただけるため，より実践的な学習会ができています。

（事務局資料）

③　看護学科においては，臨地実習を「看護学実習要項」に従って附属病院を含め地域の医療施設や介護老人保健施設などで実施し（**資料 1-2-3-8, P4-13 前掲資料 1-1-1-9**），学生からの評価は高い（**資料 1-2-3-9**）。

資料 1-2-3-8　看護学実習

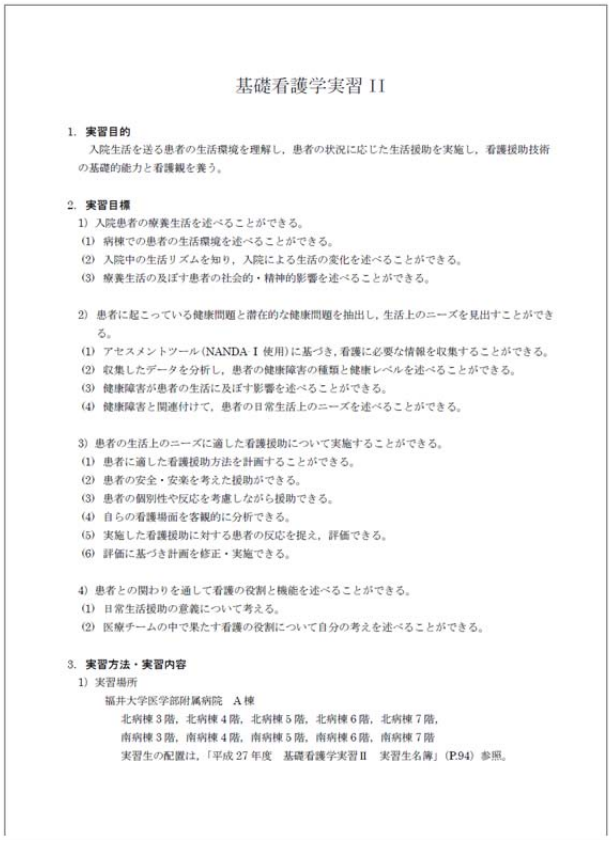
■ 臨地実習の概要

効果的に実践能力を身に付けるため主に本学附属病院において，１年次，２年次の基礎看護学実習では看護理解・看護観の涵養と基礎的看護技術を修得し，３年次後期からの臨地実習では各看護専門領域の能力を養う。老年看護学や在宅看護学実習では学外施設での実習を組み合わせて行う。さらに３年次でも看護技術実習を配することにより基本的能力の向上を図る。これらのシステムにより，看護能力の向上について学生から実習に対する高い評価を得た（**P4-123 後掲資料 1-2-3-11**）。

また，保健師および助産師受験資格の取得を希望する学生のための公衆衛生看護学実習（学外 13 施設）および助産学実習（学外５施設），国際的な活動を含めた高度実践看護師としての能力開発のためのキャリアアップ実習（附属病院及び学外病院，英国病院等３施設）を選択科目に配している。

<table>
<tr><th colspan="2"></th><th>1年次前期</th><th>2年次後期</th><th>3年次後期</th><th>4年次前期</th><th>4年次後期</th></tr>
<tr><td rowspan="2">必修</td><td>科目名</td><td>基礎看護学実習Ⅰ</td><td>基礎看護学実習Ⅱ</td><td colspan="2">成人看護学Ⅰ～Ⅲ、老年看護学、小児看護学、
母性看護学、精神看護学、在宅看護学、看護技術実習</td><td rowspan="2"></td></tr>
<tr><td>目的</td><td>患者を中心とした医療の機能と役割を知り、入院生活を送っている患者の病院環境を理解する。医療と看護の実際を知り、保健・医療・福祉の中での看護を理解する。</td><td>入院生活を送る患者の生活環境を理解し、患者の状況に応じた生活援助を実施し、看護援助技術の基礎的能力と看護観を養う。</td><td colspan="2">【例：成人看護学Ⅰ】
急性期にある対象（周手術期）の身体的、精神的、社会的特性を理解し、健康回復に向けて適切な看護が実践できる基礎的能力を養う。
【例：看護技術実習】
対象となる人の状況を的確に把握した上で、根拠のある判断のもとに、対象者のニーズに配慮し、創造的に看護技術を提供するための基本能力を養う。</td></tr>
<tr><td rowspan="3">選択</td><td>科目名</td><td rowspan="3"></td><td colspan="2">公衆衛生看護学</td><td>助産学実習</td></tr>
<tr><td colspan="3">キャリアアップ実習</td></tr>
<tr><td>目的</td><td colspan="2">【公衆衛生看護学】
地域で活躍する個人と家族、集団を対象に、顕在化・潜在化している健康課題を明らかにし、健康の保持・増進・疾病の予防と健康回復、より質の高い生活を営むことを援助するために、社会資源の開発・施策化および看護職が他の職種と協働して果たす役割を、実践活動および体験することにより理解する。</td><td>【助産学】
妊産褥婦および新生児の助産課程を展開し、助産診断および助産技術を実践する能力を修得する。正常分娩の介助を主として行うなかで、母子の生命尊重、権利擁護ができる能力、倫理的対応能力を修得する。</td></tr>
<tr><td colspan="4">【キャリアアップ実習】
国際的な看護活動や、専門分野における看護実践について理解を深め、将来高度実践看護師として専門分野で活躍するための、キャリアアップする能力を養う。</td></tr>
</table>

■ 看護学実習要項の例



基礎看護学実習 II

1. 実習目的
入院生活を送る患者の生活環境を理解し，患者の状況に応じた生活援助を実施し，看護援助技術の基礎的能力と看護観を養う。

2. 実習目標
1) 入院患者の療養生活を述べることができる。
(1) 病棟での患者の生活環境を述べることができる。
(2) 入院中の生活リズムを知り，入院による生活の変化を述べることができる。
(3) 療養生活の及ぼす患者の社会的・精神的影響を述べることができる。

2) 患者に起こっている健康問題と潜在的な健康問題を抽出し，生活上のニーズを見出すことができる。
(1) アセスメントツール（NANDA Ⅰ 使用）に基づき，看護に必要な情報を収集することができる。
(2) 収集したデータを分析し，患者の健康障害の種類と健康レベルを述べることができる。
(3) 健康障害が患者の生活に及ぼす影響を述べることができる。
(4) 健康障害と関連付けて，患者の日常生活上のニーズを述べることができる。

3) 患者の生活上のニーズに適した看護援助について実施することができる。
(1) 患者に適した看護援助方法を計画することができる。
(2) 患者の安全・安楽を考えた援助ができる。
(3) 患者の個別性や反応を考慮しながら援助できる。
(4) 自らの看護場面を客観的に分析できる。
(5) 実施した看護援助に対する患者の反応を捉え，評価できる。
(6) 評価に基づき計画を修正・実施できる。

4) 患者との関わりを通して看護の役割と機能を述べることができる。
(1) 日常生活援助の意義について考える。
(2) 医療チームの中で果たす看護の役割について自分の考えを述べることができる。

3. 実習方法・実習内容
1) 実習場所
福井大学医学部附属病院　A 棟
北病棟 3 階，北病棟 4 階，北病棟 5 階，北病棟 6 階，北病棟 7 階，
南病棟 3 階，南病棟 4 階，南病棟 5 階，南病棟 6 階，南病棟 7 階
実習生の配置は，「平成 27 年度　基礎看護学実習 II　実習生名簿」（P.94）参照。

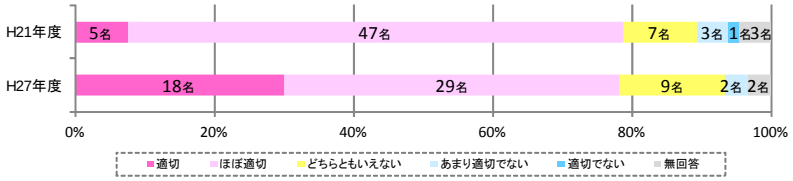
（事務局資料）

資料 1-2-3-9　臨地実習に対する評価

臨地実習に対する学生からの評価によると，大方の学生は適切と考え，かつ高く評価する学生の割合が第２期では増加している。臨地実習を通して，大方の学生は積極的に取り組み将来の自立に有意義であると考え，専門知識・医療への意欲態度・自己の適性・学ぶ態度・医療人としての能力等を涵養できたとしている。加えて学外実習機関からも理解が増加したとされる。

■ 臨地実習に対する学生の評価

設問_看護学的知識及び技術を十分に修得するために実習教育は必須です。本学の実習教育（実習の内容や時期など）は全般的に適切に行われていましたか

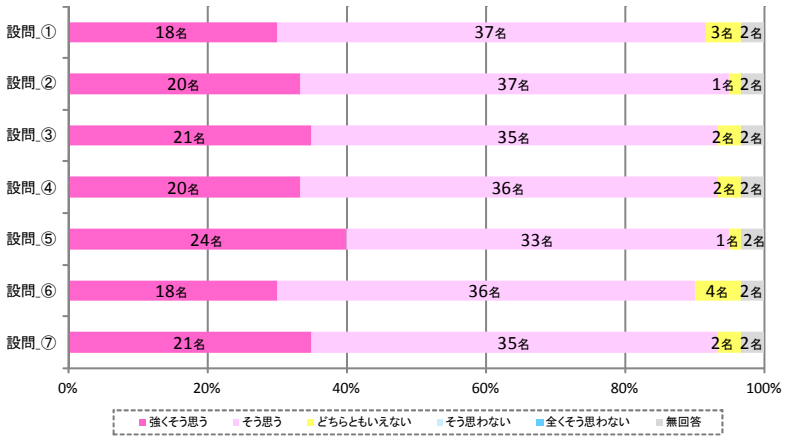


＊ 第１期末と比較して，第２期末では実習に対して高評価をする学生の割合が 22.4%増えている。

（平成 21 年度および平成 27 年度カリキュラム評価アンケート（４年次生用）結果より抜粋）

設問_臨地実習では，業務を経験することを通じて，①専門知識の有用性や職種自体についての具体的理解，②医療への意欲・態度の涵養・向上，③自己の適性や志向に照らし進路を考える機会として活用，④主体的な学習態度の育成や学習への動機づけ，⑤ディプロマ・ポリシー等で明示した高度専門職業人として備えるべき能力等，を育成することを目的としています。そこで，臨地実習を経験して，

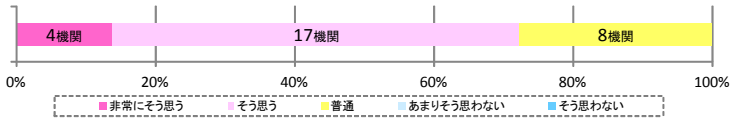
① あなたの専門知識が有用で，職種自体についての理解が増したと思いますか
② 医療への意欲・態度が向上したと思いますか
③ 今回の臨地実習は自己の適性や志向に照らし進路を考える機会になったと思いますか
④ 学修への動機づけを含め進んで学習する態度を養うことができたと思いますか
⑤ 医療人としての知識・技能・コミュニケーション能力・倫理観・向上する意欲や学ぶ習慣などを養うことができたと思いますか
⑥ あなたは今回の臨地実習に積極的に取り組んだと思いますか
⑦ 将来高度専門職業人として自立する上で，有意義なものであったと思いますか



（平成 27 年度カリキュラム評価アンケート（４年次生用）結果より抜粋）

■ 学外医療機関・施設等による学生の臨地実習評価

設問_今回の臨地実習を経験して，学生は職種（看護師・保健師・助産師）についての理解が増したと思われますか



＊ 学生の知識や能力などへの効果について，学生の理解が増したと回答した学外実習機関が 72.4%と多数を占める。

（平成 26 年度臨地実習受け入れ先機関に対するアンケート調査結果より抜粋）

（事務局資料）

④　看護学科においては，平成 24 年度より臨地実習における「看護技術実習」を必修とし，基本技術の自己評価システムに工夫を行い（**資料 1-2-3-10**），看護実践能力向上に努めた。取り組みに対する評価は高く，基本技術の到達度は第 1 期より高い（**資料 1-2-3-11～12**）。

資料 1-2-3-10　「看護基本技術の記録」による自己評価システムの工夫

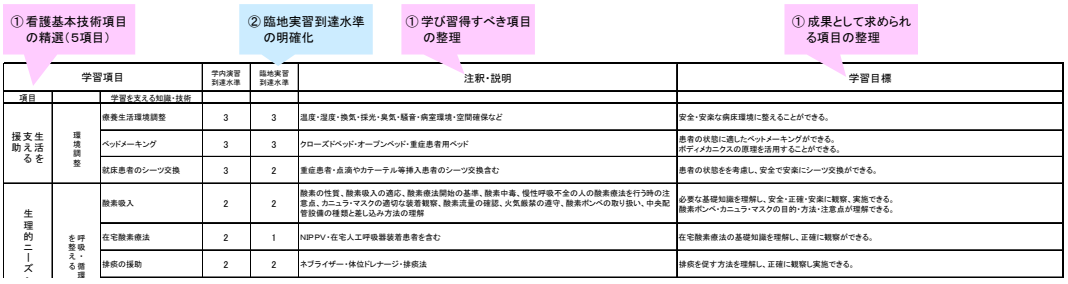
「看護基本技術の記録」は学内演習及び臨地実習時における看護基本技術の習得状況や成果を整理するためのファイルであり，各実習を通して看護基本技術がどのように積み重ねられているかを知るために技術の習得状況や成果を自ら記録するものである。「学士課程においてコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標（平成 23 年，文科省）」に基づき，実習施設である本学附属病院看護部と密な意見交換のもと，「看護基本技術の記録」の改良を行っている。

① コアとなる看護基本技術項目の精選

「生活を支える援助」「生理的ニーズへの援助」「治療に関する看護」「ヘルスアセスメント技術」「医療環境の整備」の５項目からなり，それぞれに学習を支える知識・技術として学び習得すべき項目や成果として求められる項目の整理を行った。

② 学生の到達水準の見直し

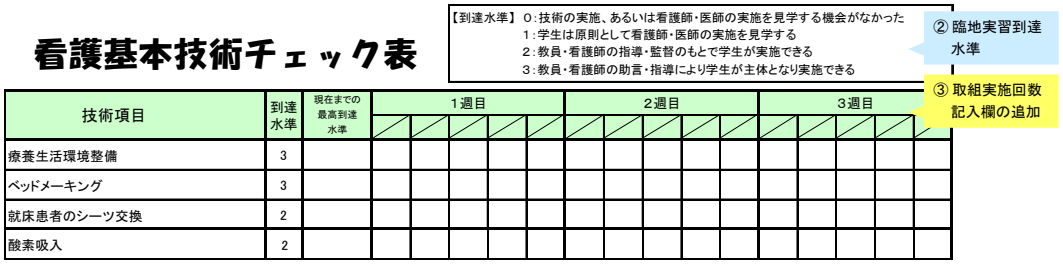
臨地実習における到達水準として，「学内演習の到達水準」（学内演習で実施した技術の到達水準，３年次生前期終了時点での到達水準）と「臨地実習の到達水準」（臨地実習において各実習が終了した時点での到達水準）を明記し，学生が自己評価すると共に，「最終到達水準」として全ての実習を終了した時点での最高の到達水準を全ての項目について学生自身が評価記録することとした。



学習項目			学内演習到達水準	臨地実習到達水準	注釈・説明	学習目標
項目		学習を支える知識・技術				
生活を支える援助	環境調整	療養生活環境調整	3	3	温度・湿度・換気・採光・臭気・騒音・病室環境・空間確保など	安全・安楽な病床環境に整えることができる。
		ベッドメーキング	3	3	クローズドベッド・オープンベッド・重症患者用ベッド	患者の状態に適したベットメーキングができる。 ボディメカニクスの原理を活用することができる。
		就床患者のシーツ交換	3	2	重症患者・点滴やカテーテル等挿入患者のシーツ交換含む	患者の状態をを考慮し、安全で安楽にシーツ交換ができる。
生理的ニーズ	呼吸を整える・循環	酸素吸入	2	2	酸素の性質、酸素吸入の適応、酸素療法開始の基準、酸素中毒、慢性呼吸不全の人の酸素療法を行う時の注意点、カニュラ・マスクの適切な装着観察、酸素流量の確認、火気厳禁の遵守、酸素ボンベの取り扱い、中央配管設備の種類と差し込み方法の理解	必要な基礎知識を理解し、安全・正確・安楽に観察、実施できる。 酸素ボンベ・カニュラ・マスクの目的・方法・注意点が理解できる。
		在宅酸素療法	2	1	NIPPV・在宅人工呼吸器装着患者を含む	在宅酸素療法の基礎知識を理解し、正確に観察ができる。
		排痰の援助	2	2	ネブライザー・体位ドレナージ・排痰法	排痰を促す方法を理解し、正確に観察し実施できる。

③ 看護基本技術チェック表の改良

実際に実習で学んだ技術項目の一覧表において，取組実施回数記入欄を新設し，学生が取り組んだ看護技術が一目でわかるように改変した。



技術項目	到達水準	現在までの最高到達水準	1週目					2週目					3週目				
療養生活環境整備	3																
ベッドメーキング	3																
就床患者のシーツ交換	2																
酸素吸入	2																

④ 未経験技術減少に向けた臨地実習指導者との連携強化

附属病院において臨地実習で取り組むべき看護基本技術項目を全ての学生が学ぶことができるよう看護学科教員と附属病院看護師等の指導者が連携して教育に当たる体制を強化した。

⑤ 公衆衛生看護学実習の工夫

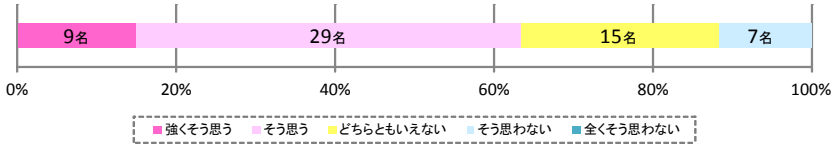
保健師教育課程の選択制導入（平成 24 年度）に対応し，新たに『公衆衛生看護基本技術の記録』『公衆衛生看護学実習評価シート』導入し，専門的実習への取り組み強化を行った。

（事務局資料）

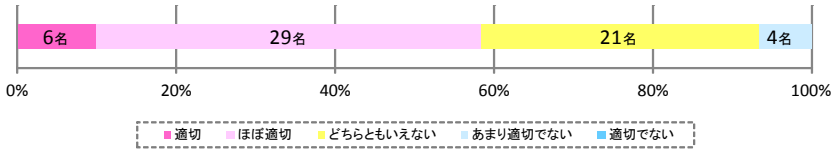
資料 1-2-3-11　「看護基本技術実習」と「看護基本技術の記録」に対する学生の評価

過半の学生は「基本技術実習」と「看護基本技術の記録」により，基本的能力を養い看護実践能力の取得に有用であったとしている。

設問_３年次後期～４年次前期の「看護基本技術実習」によって，あなたの看護技術を提供するための基本的能力を養うことができたと思いますか



設問_臨地実習では，看護実践能力の向上を目的に，「看護基本技術の記録」による自己評価を行っています。これは看護実践能力の修得状況を確認する上で有用であったと思いますか



（平成 27 年度カリキュラム評価アンケート（４年次生用）結果より抜粋）

資料 1-2-3-12　看護基本技術の到達度評価

臨地実習委員会による「臨地実習における看護基本技術の卒業前到達度調査」（平成 27 年度）において，各看護基本技術の到達度評価における学生の自己評価の平均値と本学到達度水準値を比較し，学生平均レベルが到達度水準の６割以上に達した場合，「到達」できたとした。その結果，「生活を整える援助」「生理的ニーズへの看護」「治療に関する看護」「ヘルスアセスメント技術」「医療環境の整備」の分野全 87 項目について分析し，74 項目が「到達」と判断された。特に，「生活を整える援助」「生理的ニーズへの看護」「ヘルスアセスメント技術」「医療環境の整備」に関する項目の「到達」状況が高かった。

これら看護基本技術を第１期（平成 21 年度調査）と比較すると到達度評価は上昇していた。

■「臨地実習における看護基本技術の卒業前到達度調査」（平成 27 年度）結果より抜粋

臨地実習における基本看護技術の卒業前到達度調査

臨地実習委員会

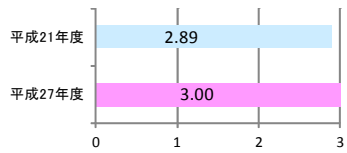
対象:看護学科４年学生 60 名
調査日:平成 27 年 11 月５日
方法:基礎実習Ⅱおよび領域別実習終了時の基本看護技術 87 項目について到達度評価４段階での学生の自己評価の平均値と本学到達度水準値を単純比較し、学生平均レベルが到達度水準の８割に達した場合、到達できたとし、到達水準の６割以下場合は到達できていないとした。
また、記述統計（SPSS 統計ソフト）により見学する機会がないレベル０の割合が 25%を超える技術を抽出した。
レベル０：技術の実施、あるいは看護師・医師の実施を見学する機会がなかった。
レベル１：学生は原則として看護師・医師の実施を見学する。
レベル２：教員・看護師の指導・監督のもとで学生が実施できる。
レベル３：教員・看護師の助言・指導により学生が主体となり実施できる。

1. 生活を整える援助

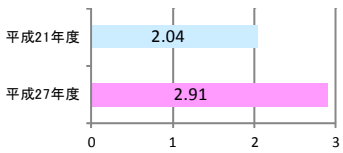
1）「生活を支える援助」での到達水準レベルとの学生平均レベル比較
「環境調整」としての「療養生活環境調整」「ベットメーキング」は到達水準レベル３、学生平均レベルは３および 2.91 であり、学生が主体でできていた。
「臥床患者のシーツ交換」は到達水準レベル２、学生平均レベルは 1.8 であり、指導を受けて実施できていたが、「臥床患者のシーツ交換」での０レベル:見学する機会がなかったは 15 件(25%)であった。生活を整える援助は到達水準レベルにあった。

■ 生活を支える援助の到達水準比較（「臨地実習における看護基本技術の卒業前到達度調査」より）

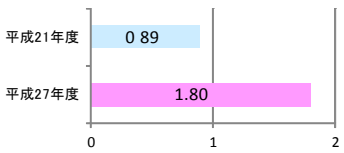
【療養生活環境調整】（到達水準３）



【ベッドメーキング】（到達水準３）



【就床患者のシーツ交換】（到達水準２）



（事務局資料）

【多様な教育方法】

① 学生の課題探求・解決能力形成のためテュートリアル教育を実施し，１年次に医学入門と地域医療に関する課題，３～４年次に臨床課題に取り組んでいる(**資料 1-2-3-13**)。テュートリアル教育に対する評価は学生・教員共に高く，向上した(**資料 1-2-3-14, 15**)。

資料 1-2-3-13　テュートリアル教育

医学科「テュートリアル教育」の実施に際しては以下のごとく進めている。まず１年次生にテュートリアルの歴史や意義，実施方法について講義形式で説明を行う。ついで学生と教員（大学院生や医員も含む）が参加する合同説明会を開催し，そこでは指導講師のもと学生代表が模擬テュートリアルを行い，他の学生と教員がそこから実際を学ぶ。その後教員のみによるテュートリアル教育の意義等の講演と質疑応答を行い，全体としてテューター養成 FD としている。テューターは FD の参加者から選ばれ，教員だけでなく大学院生や医員もその任を担っている。

テュートリアルとして，１年次には医学入門的な内容を共通教養教育担当者，地域医療課題を地域医療推進講座担当者，３年次には基礎医学担当者（なお３年次基礎医学テュートリアルは研究室配属充実のため平成 26 年度より中止された），３年次後期～４年次には臨床課題を消化器系，循環器系，神経系それぞれの担当者が毎年作製している。それぞれの課題を担当するテューターはテューター会議において課題の意義や取り組み方について課題作製担当者との打ち合わせを行う。

本取り組みに対しては福井大学「競争的配分経費（教育評価に基づく競争的経費）」として平成 22～26 年度に「福井大学における探求的課題解決型テュートリアル教育手法の医学教育への実践」として配分を受けテューター養成 FD や教育資料の充実を図った。

■ 課題一覧

年度	区分	年次	テーマ	担当講座
H22年度	入門テュートリアル	1年次	症例から学ぶ	応用言語学
		1年次	インフルエンザ	微生物学
	テュートリアルⅠ(基礎系)	3年次	心臓のふしぎ	分子病理学
	テュートリアルⅡ(臨床系)	3年次	心臓(循環器系)	外科学(2)、内科学(1)、内科学(3)
		3年次	結腸癌(消化器系)	外科学(1)
		4年次	パーキンソン病(神経系)	内科学(2)、脳脊髄神経外科学
H23年度	入門テュートリアル	1年次	最後まで家にいたい	地域医療推進講座
		1年次	水についてかんがえてみよう	医用統計学・数学
	テュートリアルⅠ(基礎系)	3年次	心臓の発生と先天性心奇形	人体解剖学・神経学
	テュートリアルⅡ(臨床系)	3年次	急性心筋梗塞(循環器系)	外科学(2)、内科学(1)、内科学(3)
		3年次	直腸癌(消化器系)	外科学(1)
		4年次	中枢神経系原発悪性リンパ腫(神経系)	内科学(2)、脳脊髄神経外科学
H24年度	入門テュートリアル	1年次	家で暮らしたい	地域医療推進講座
		1年次	飲酒の功罪	病態遺伝生化学
	テュートリアルⅠ(基礎系)	3年次	バングラデシュから来日した女性のヒ素中毒疑いと不安	環境保健学
	テュートリアルⅡ(臨床系)	3年次	心筋梗塞(循環器系)	外科学(2)、内科学(1)、内科学(3)
		3年次	結腸癌(消化器系)	外科学(1)
		4年次	脳梗塞(神経系)	内科学(2)、脳脊髄神経外科学
H25年度	入門テュートリアル	1年次	最後まで家にいたい	地域医療推進講座
		1年次	血液型性格判断	医療人文学
	テュートリアルⅠ(基礎系)	3年次	ひとの生きかたと死	法医学・人類遺伝学
	テュートリアルⅡ(臨床系)	3年次	心臓(循環器系)	外科学(2)、循環器内科学
		3年次	結腸癌(消化器系)	内科学(2)、光学医療診療部
		4年次	中枢神経系原発悪性リンパ腫(神経系)	内科学(2)、脳脊髄神経外科学
H26年度	入門テュートリアル	1年次	家で暮らしたい	地域医療推進講座
		1年次	医療事故 －病院は安全か？－	医療倫理・医療安全学
	テュートリアル(臨床系)	3年次	心臓(循環器系)	外科学(2)、循環器内科学
		3年次	潰瘍性大腸癌(消化器系)	内科学(2)、光学医療診療部
		4年次	パーキンソン病(神経系)	内科学(2)、脳脊髄神経外科学
H27年度	入門テュートリアル	1年次	まちで暮らしたい	地域医療推進講座
		1年次	食	応用言語学
	テュートリアル(臨床系)	3年次	心臓(循環器系)	外科学(2)、循環器内科学
		3年次	潰瘍性大腸炎(消化器系)	内科学(2)、光学医療診療部
		4年次	重症筋無力症(神経系)	内科学(2)、脳脊髄神経外科学

（事務局資料）

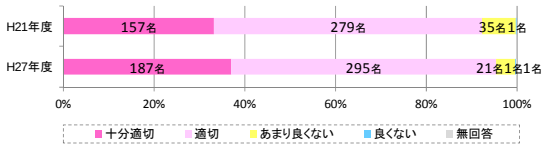
資料 1-2-3-14　「テュートリアル」に対する学生の評価

■ アンケート結果（平成 21 年度，平成 27 年度比較）

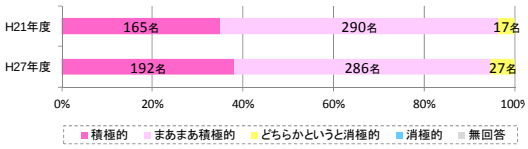
平成 21 年度及び平成 27 年度に実施したテュートリアル教育に対する学生の評価をアンケート調査した。学生の評価は常に高いが，平成 27 年度では最も高い評価（十分適切，非常に良い等）を行った学生の割合がそれぞれ，3.7%，3.0%，5.0%，10.8%増加した。

設問１_今回の課題は適切でしたか
設問２_今回の課題についてあなたは積極的に学習に取り組めましたか
設問３_今回の課題についてあなたのグループは十分に学習できましたか
設問４_今回の課題に対する学習を総合的に評価してください

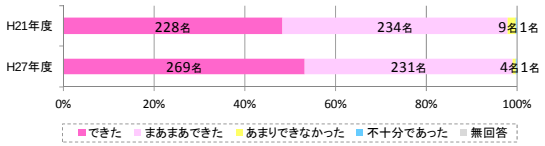
設問１



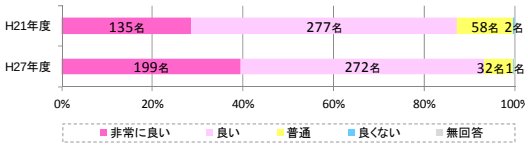
設問２



設問３



設問４



■ 学生の意見（平成 27 年度のみ・一部抜粋）

入門テュートリアル（１年次生）

・食についての課題でしたが，大学生となり自炊を始めた身としては，とても身近な話題であり，調べる意欲も上がりました。
・「食」という身近な健康に関する課題は単純で深く調べるほど疑問がわいた。意欲的になれる課題だった。
・それぞれ具体的なデータを基に議論することで説得力のある結論を提示できたと思う。
・課題学習について，インターネットを使うことは便利だが，本当に正しい情報なのか疑問に思うものもあった。信頼性の高いサイトを見ることが大切だと思いました。

臨床系テュートリアル（３～４年次生）

・授業の進度と同じところだったので，自分の復習にもなり良かった。（循環器系）
・リアリティあるシナリオで，自分が医師になったかのうように取り組めました。（循環器系）
・考える項目がいろいろあり，心筋梗塞に対する多面的な勉強ができて適切であったと思います。（循環器系）
・潰瘍性大腸炎という割とまだ解明されていないテーマが課題だったので，興味がわいた。（消化器系）
・最近増加している疾患についてだったので，理解が深まり良かった。（消化器系）
・検査項目や画像診断に興味を持って調べる良いきっかけになった。（消化器系）
・追加の課題項目の出し具合が丁寧で良かったと感じます。（神経系）
・たいへん取り組みやすく，焦点を絞ってしっかり勉強できた。今回でてきた症例や鑑別疾患についてしっかり頭に入ったと感じる。（神経系）
・インターネットや教科書だけでなく，様々な文献を探さないといけないと思いました。（神経系）

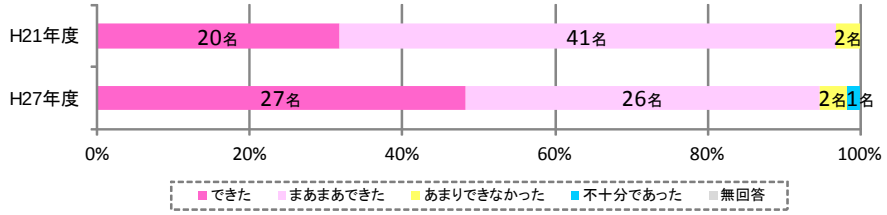
（平成 21 年度および平成 27 年度入門・神経系・循環器系・消化器系テュートリアルアンケート結果より抜粋）

資料 1-2-3-15　「テュートリアル」に対するテューターの評価

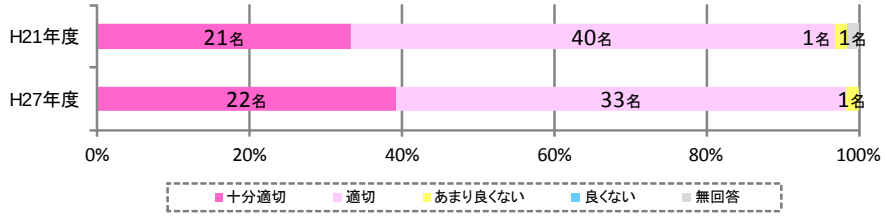
平成 21 年度及び平成 27 年度に実施したテュートリアル教育に対する教員の評価をアンケート調査した。評価は常に高いが，平成 27 年度では最も高い評価（十分適切，非常に良い等）を行った教員の割合がそれぞれ，16.5%，6.0%，9.2%，13.7%増加した。

■ アンケート結果（平成 27 年度）

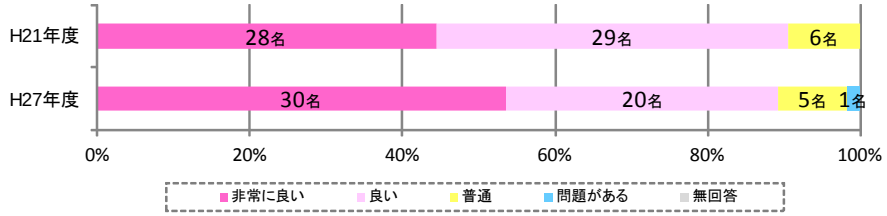
設問１_今回の課題について，グループは十分な学習ができましたか？



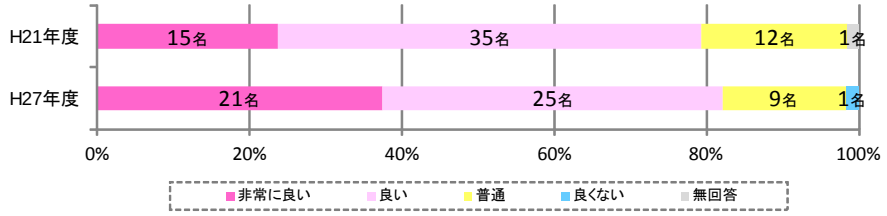
設問２_今回の課題は適切でしたか？



設問３_今回の課題で，学生はまじめに取り組んでくれましたか？



設問４_今回のテュートリアル教育を総合的に評価してください。



（平成 21 年度および平成 27 年度テューターアンケート結果より抜粋）

②　初年次教育を工夫し，新入生への「動機付け」教育や早期体験学習として外来患者のエスコート実習を実施している。これらは学生の大学教育への円滑な移行，履修意欲増加に繋がっている（**資料 1-2-3-16～17**）。

資料 1-2-3-16　初年次教育の工夫

■ 医学科

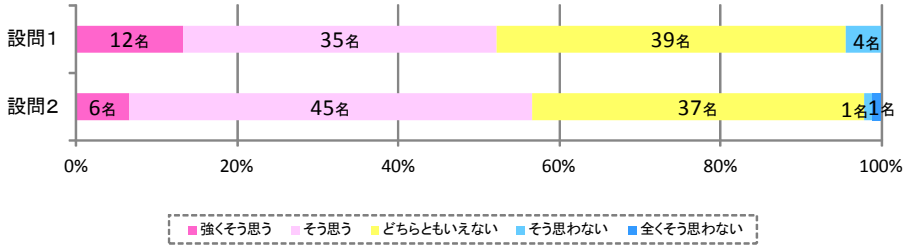
①「医学入門と医学概論」：医学部を構成する各領域の主任が担当する教育・研究・診療等を概説する。それにより，医学を学ぶに当たっての心構えを学び，医学教育・研究の全体像を鳥瞰する。さらに，病院見学および看護体験により医療現場の現状を理解するとともに，地域医療の概要等を学ぶ。

②「入門テュートリアル」：PBL テュートリアル形式により，医療一般および地域医療に関する課題に取り組む。地域医療課題は平成 23 年度より実施している。

これらにより過半の学生が大学教育への移行や履修意欲増加に役立ったとしている。

設問１_初年次教育として実施している「医学入門」や「入門テュートリアル」は大学教育への円滑な移行に役立ちましたか？

設問２_「医学入門」や「入門テュートリアル」を受講して，これから履修する大学教育に対する履修意欲が増しましたか？



■ 看護学科

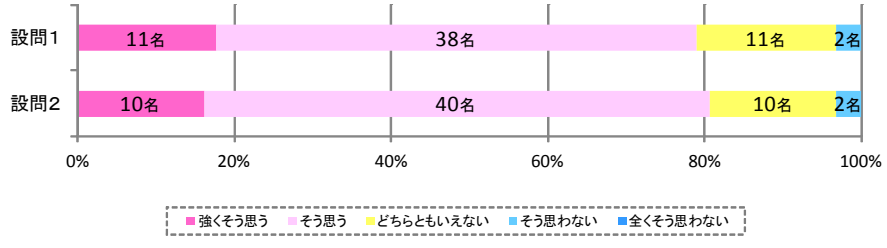
①「看護学入門」：大学生活の初期段階で，看護学を学ぶにあたって必要な基本的態度・知識・技法を習得する。平成 22 年度より開講している。

②「看護学概論」：看護の概念およびその本質を追究し，自己の看護観の確立の基礎的能力を養う。また，あらゆる健康レベルにある個人，集団，地域社会の人々に看護を創造的，発展的に行えるように人間の本質を看護の視点からその基礎を学修する。平成 22 年度より開講している。

これらにより大方の学生が大学教育への移行や履修意欲増加に役立ったとしている。

設問１_初年次教育として実施している「看護学入門」は大学教育への円滑な移行に役立ちましたか？

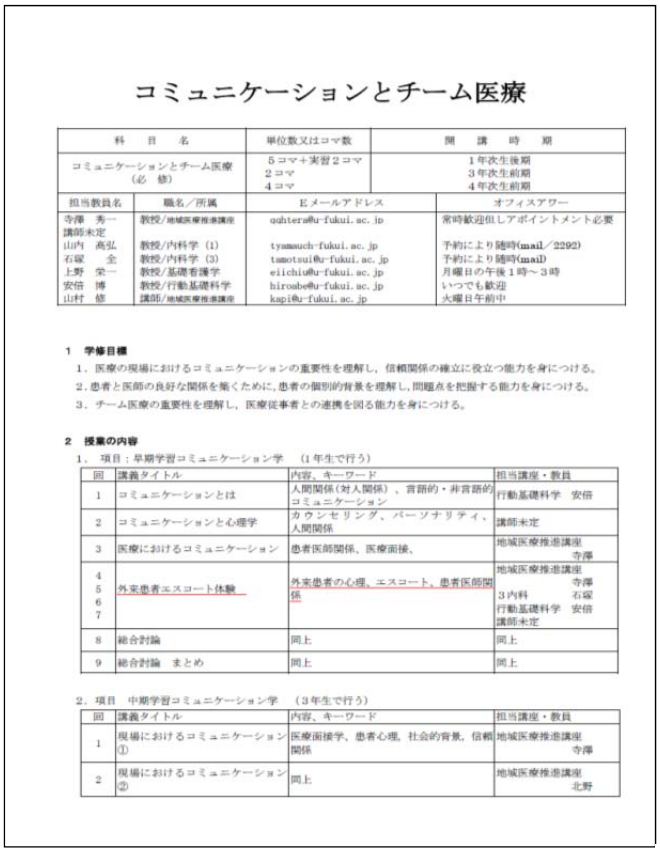
設問２_「看護学入門」を受講して，これから履修する大学教育に対する履修意欲が増しましたか？



（平成 27 年度カリキュラム評価アンケート（１年次生用）結果より抜粋）

資料 1-2-3-17　早期体験学習

■ 実施概要



コミュニケーションとチーム医療

科　目　名	単位数又はコマ数	開　講　時　期
コミュニケーションとチーム医療（必　修）	５コマ＋実習２コマ ２コマ ４コマ	１年次生後期 ３年次生前期 ４年次生前期

担当教員名	職名／所属	Eメールアドレス	オフィスアワー
寺澤　秀一	教授/地域医療推進講座	qahtera@u-fukui.ac.jp	常時歓迎但しアポイントメント必要
講師未定			
山内　高弘	教授/内科学（1）	tyamauch-fukui.ac.jp	予約により随時(mail／2292)
石窪　全	教授/内科学（3）	tamotsui@u-fukui.ac.jp	予約により随時(mail)
上野　栄一	教授/基礎看護学	eiichiu@u-fukui.ac.jp	月曜日の午後１時～３時
安倍　博	教授/行動基礎科学	hiroabe@u-fukui.ac.jp	いつでも歓迎
山村　修	講師/地域医療推進講座	kapi@u-fukui.ac.jp	火曜日午前中

1　学修目標

1．医療の現場におけるコミュニケーションの重要性を理解し，信頼関係の確立に役立つ能力を身につける。
2．患者と医師の良好な関係を築くために，患者の個別的背景を理解し，問題点を把握する能力を身につける。
3．チーム医療の重要性を理解し，医療従事者との連携を図る能力を身につける。

2　授業の内容

1．項目：早期学習コミュニケーション学　（1年生で行う）

回	講義タイトル	内容，キーワード	担当講座・教員
1	コミュニケーションとは	人間関係（対人関係），言語的・非言語的コミュニケーション	行動基礎科学　安倍
2	コミュニケーションと心理学	カウンセリング，パーソナリティ，人間関係	講師未定
3	医療におけるコミュニケーション	患者医師関係，医療面接，	地域医療推進講座 寺澤
4 5 6 7	外来患者エスコート体験	外来患者の心理，エスコート，患者医師関係	地域医療推進講座 寺澤 3内科　石窪 行動基礎科学　安倍 講師未定
8	総合討論	同上	同上
9	総合討論　まとめ	同上	同上

2．項目　中期学習コミュニケーション学　（3年生で行う）

回	講義タイトル	内容，キーワード	担当講座・教員
1	現場におけるコミュニケーション①	医療面接学，患者心理，社会的背景，信頼関係	地域医療推進講座 寺澤
2	現場におけるコミュニケーション②	同上	地域医療推進講座 北野



福井大学医学部附属病院外来受付

■ 学生の感想

・今回自分がエスコートさせて頂いた患者さんは腎臓に病気を抱えていらっしゃった。今回の検査で入院することになってしまい，気分が沈んでいるご様子でした。自分は患者さんご本人の気持ちは分からずとも，寄り添い共に最もよい治療法を探していくことが大事だと以前から思っていましたが，いざ目の前の状況に対して何と声をお掛けして良いのかわからなくなり，非常にコミュニケーションの難しさを感じました。
・患者さん視点の医師の様子や，医師が患者さんと話すときに注意していること等がわかってよかったです。将来に向けていい経験になったので，忘れず将来に生かせるようにしたいです。
・年代の異なる人との会話は大変だと感じた。
・待ち時間にお話ししている間に，患者さんの様々なことを聞くことができた。家族のこと，昔の職業のこと，ご自身の病気のこと。やはり医師になってからは問診の時間も限られるし，今回のように多くは聞けないかも知れない。だが，できるだけ患者さんのことを知ろうとする姿勢，そして聞き出せなくても背景に存在する人生を想像する力が必要だろう。

（事務局資料）

③　平成20年度概算要求事業として始まった「統合的先進イメージングシステムによる革新的医学教育の展開」プログラムは平成23年設置の附属先進イメージング教育研究センター統括のもと，学内ネットワークを基盤とする画像教育システムとして整備された。教育用コンテンツは6,000以上と本邦随一であり，講義・課題・画像実習・自学自習に利用されている。学生は医学の知識・技能を深めることができたと評価している（**資料1-2-3-18**）。

資料 1-2-3-18　画像医学教育の工夫

基礎医学から臨床医学まで学生が画像を中心とした学習が可能となる画像教育システム ideata2（本学で開発した画像教育システム）が整備され，様々な画像データを中心とするコンテンツは本邦随一の 6,000 以上が学内教育サーバに蓄積されネットワークを介して講義・実習・レポート・自学自習等で利用されている。学内ネットワークより中心となる放射線医学領域・放射線科に加え，解剖学・組織学・病理学・法医学・産婦人科学の各研究室，解剖学実習室・組織病理学実習室など広くシステムを教育に用いる環境が整えられている。過半の学生はこれらシステムを利用した教育により，医学の知識・技能を深めることができたとしている。

■ 利用例

①人体解剖学における「Ai-CT 撮影と解剖時 CT 画像教育活用」　②組織学実習における「デジタル組織標本＋組織学実習手引き」　③放射線科における「e-レポート 2015」　（核医学領域課題，乳腺領域課題，CNS 領域課題，腹部領域課題など）　④放射線科における「e-ポリクリ 2015」（小脳橋角部，中枢神経課題，多発病変，血腫など）　⑤産婦人科講義における「産婦人科病理」・「研修医向けコアレクチャー」（正常子宮，子宮頸がん，子宮筋腫，内膜症性，胞状奇胎など）



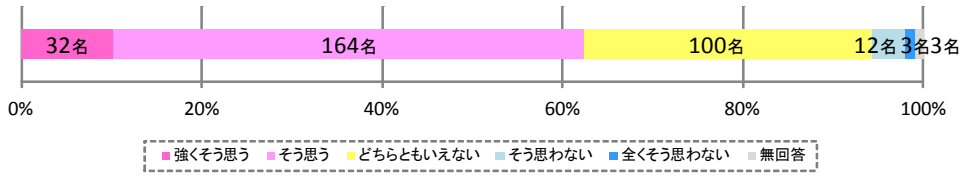


■ 臨床教員，病理学教員，放射線医学教員による連携講義

呼吸器 RAP-C（Radiology-Anatomy-Pathology Correlation）授業」（H19 より）として，「呼吸器内科学教授＋病理学教授＋放射線科学名誉教授」が同じ症例を横断的に RAP-C という枠組みを使って「解析・診断・治療」を講義する，他には類を見ない連携授業である。病態の本質に迫ると共に，良い医療を行うために診療科を跨いだコラボレーションの重要さを学べる貴重な授業として学生にも好評である。

■ 画像医学教育に対する学生の評価

設問_福井大学では，組織学，解剖学，病理学および放射線医学関連の講義実習において，皆さんの画像診断能力が向上するように，画像医学教育（通常の講義実習に加え PC システムを用いた実習等）を推進しています。そこで，これらの画像シミュレーション教育で医学の知識・技能を更に深めることができましたか？



（平成 27 年度カリキュラム評価アンケート（3，4，6 年次生用）結果より抜粋）

設問_自由感想

- MRI を使って診断を体験できたのは初めてだったのでとても楽しかった。分かり易く意欲がわいたので，受け身にならずとても良い授業でした。
- 科ごとのまとめとしてこのシステムを使うのはとても良いと思いました。超音波の画像もあるともっと良いと思いました。
- 受身ではない参加型の講義でとても良かったです。頭を使って考えられたと思います。
- 画像を見てみんなで考えるのが楽しかったです。勉強の吸収の仕方が授業よりも効率的でたくさんの知恵を絞って身についたと思います。

（産婦人科講義「アクティブラーニングの試み」アンケート・一部抜粋）

（事務局資料）

④　統合型講義として臓器分野別臨床講義等を取り入れ，コーディネーターによる統括のもと一貫性のある教育体制とし，学生から好評を得ている（**資料 1-2-3-19**）。

資料 1-2-3-19　統合型講義と学生による評価

統合型講義は臓器分野別にコーディネーター教員による統括のもと，基礎系および臨床系教員からなる正常から病態，診断，治療を縦断的に学ぶ講義形式をとっている。講義や実習は分野別に集中的に実施されている。過半の学生はこのような統合型講義を良いとしている。

■ 統合型講義シラバス（循環器系）

循 環 器 系

科　目　名	単位数又はコマ数	開　講　時　期
循環器系 （必　修）	４６コマ	３年次生後期

担当教員名	職名／所属	Ｅメールアドレス	オフィスアワー
李　　鍾大	教授／保健管理センター	jdlee@u-fukui.ac.jp	事前にメール等で都合を確認
腰地　孝昭	教授／外科学(2)	koshiji@u-fukui.ac.jp	事前にメール等で都合を確認
内木　宏延	教授／分子病理学	naiki@u-fukui.ac.jp	毎週火曜日 16:30～18:00
夛田　　浩	教授／循環器内科学	htada@u-fukui.ac.jp	事前にメール等で都合を確認
此下　忠志	准教授／内科学(3)	konosita@u-fukui.ac.jp	予約により随時（メール／内 2305）
宇隨　弘泰	准教授／循環器内科学	huzui@u-fukui.ac.jp	事前にメール等で都合を確認
		（中略）	

1　学修目標
循環器系の構造と機能を理解し、主な循環器疾患の病態生理、原因、症候、診断と治療を学ぶ。

2　授業の内容
すべての医学生が臨床実習前に修得すべき必須の学習内容を精選し、かつ国家試験出題基準との整合性も考慮して作成されたコアカリキュラムにもとづいた授業内容である。すなわち従来の講座単位で行われていた授業内容を再構成し、循環器系を正常構造と機能、病態、診断そして治療へと効率的に学習することができるように基礎医学と臨床医学を関連づけた統合的なカリキュラムを編成した。さらに生涯にわたり自ら課題を探求し、問題を解決してゆく能力を身につけることを目的としてテュートリアル教育をとりいれる。

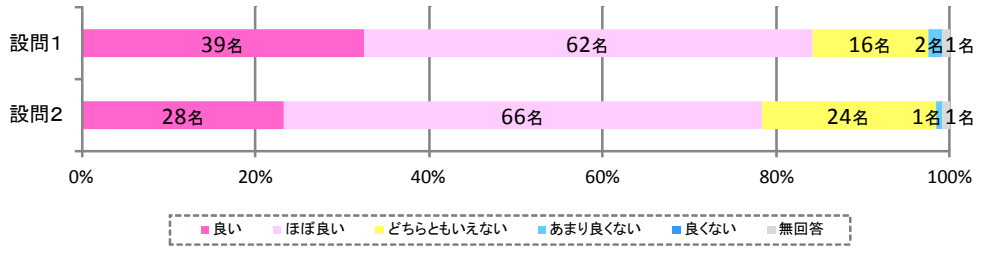
3　授業の形式
循環器における診断と検査の基本にはじまり、心不全、狭心症と心筋梗塞、不整脈、弁膜症、心筋・心膜疾患、先天性心疾患、動脈疾患、静脈・リンパ管疾患、高血圧症の各項目について、病理学、薬理学、循環器内科学、小児循環器学、心臓血管外科学の各教員が上記カリキュラムに沿って講義３０コマ、実習（病理学）４コマを担当する。さらに重要な臨床医学的な課題を選んでテュートリアル（１２コマ）が実施されるが、課題を探求し、問題を解決してゆく過程を通じて、講義で修得した知識を有機的に活用するとともに、これをさらに発展させる能力を養い、来るべき臨床実習に備える。

（以下省略）

■ 統合型講義に対する学生の評価

設問１_臨床医学の講義は臓器別に短期間の間で集中して行いました（以前は，数週ずつ通年で行っていました）が，このように集中して履修するのはいかがでしたか？

設問２_臓器別の講義では，関連する解剖・生理・薬理・病理に関する講義・実習も行われ，病態・疾患を総合的に理解できるようなカリキュラムとしました（以前は，関連する基礎医学の講義は行われていませんでした）が，このようなカリキュラム構成はいかがでしたか？



（平成 27 年度カリキュラム評価アンケート（４年次生用）結果および 2015 年度医学科授業要項より抜粋）

●学生の主体的な学習を促すための取り組み

【アクティブラーニング】

① 「単位の実質化」に取組み，授業時間外の学習時間の確保，能動的学習の積極的導入，自主学習環境の整備を行った（**資料 1-2-4-1**）。

資料 1-2-4-1　単位の実質化への全学的取組方針

■「単位の実質化」に向けた具体的な方策を本学高等教育推進センター運営委員会において定め，第２期において，医学部ではこれらに沿って，様々な取組みを推進した。

(1) 履修単位数の上限（CAP 制）導入の検討
(2) 授業時間外の学習時間の確保
(3) 能動的学習の積極的導入
(4) 自主学習環境の整備
(5) 授業外学習時間の調査

※ 必修専門科目が大半を占める医学部では CAP 制の導入を見送ることとした。

（事務局資料）

② テュートリアル教育（P4-124 **前掲資料 1-2-3-13**）や卒業研究（P4-159 **後掲資料 2-1-2-7**）などの能動的学習や研究室配属（P4-88 **前掲資料 1-2-1-20**）等を通して課題探求･解決型能力の涵養を進め，学生の評価は良好である（**資料 1-2-4-2**，P4-92 **前掲資料 1-2-1-25**）。

資料 1-2-4-2　課題探求・解決型能力の涵養

■「課題探求・解決能力涵養科目」

【医学科】

入門テュートリアル（１年次），個体の調節機構とホメオスターシス（２年次 TBL），研究室配属（３年次），臨床課題テュートリアル（４年次）

アンケートによると，過半の学生は「課題探求・解決能力」を修得できたとしている。

【看護学科】

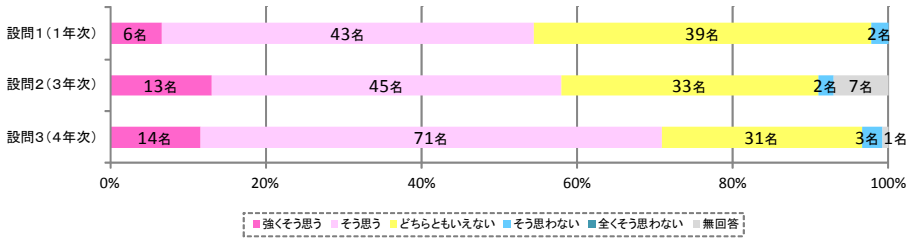
卒業研究（４年次）に加え，専門科目の多くはグループワーク，ロールプレイ，討論，発表を取り入れている。アンケートによると，大方の学生は「課題探求・解決能力」を修得できたとしている。

■ 医学科生の「課題探求・解決能力涵養科目」に対する評価

設問１_「入門テュートリアル」の科目は，皆さんに“問題を見つけ，それを自ら解決する能力，いわゆる課題探究・解決能力”を養ってもらうことを目的としています。そこで“課題探究・解決能力”を養うことができたと思いますか？（１年次生）

設問２_研究室配属についてお尋ねします。この科目では皆さんに“問題を見つけ，それを自ら解決する能力いわゆる課題探究・解決能力”を養ってもらうことを目的としています。そこで“課題探究・解決能力”を修得できたと思いますか？（３年次生）

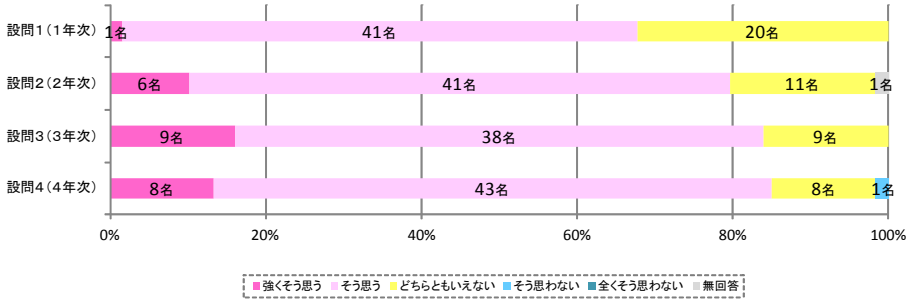
設問３_本学では，「循環器系」「消化器系」などで導入されているテュートリアル教育によって皆さんに“問題を見つけ，それを自ら解決する能力いわゆる課題探究・解決能力”を養ってもらうことを目的としています。そこで“課題探究・解決能力”を修得できたと思いますか？（４年次生）



■ 看護学科生の「課題探求・解決能力涵養科目」に対する評価

設問１～３_実習を取り入れた科目全般は，皆さんに“問題を見つけ，それを自ら解決する能力いわゆる課題探究・解決能力”を養ってもらうことを目的としています。そこで“課題探究・解決能力”を修得できたと思いますか？（１～３年次生）

設問４_卒業研究は皆さんに“問題を見つけ，それを自ら解決する能力いわゆる課題探究・解決能力”を養ってもらうことを目的としています。そこで“課題探究・解決能力”を修得できたと思いますか？（４年次生）

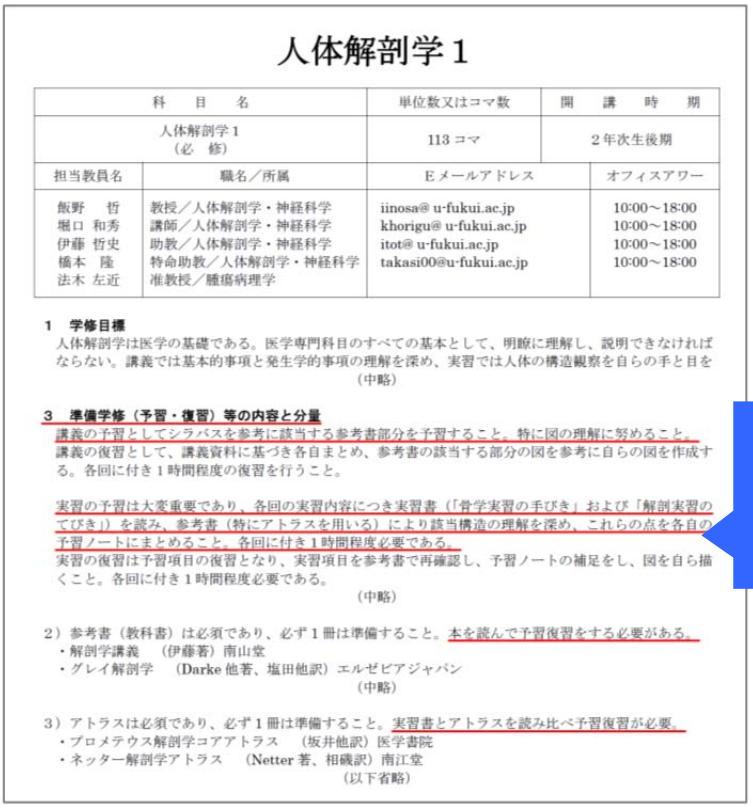


（平成 27 年度カリキュラム評価アンケート結果より抜粋）

③　準備学習に関する具体的内容をシラバスに明記するなど，様々な工夫によって時間外学習を促している（**資料 1-2-4-3**）。

資料 1-2-4-3　時間外学習を促す取組

■ シラバスへの準備学習の記載例



人体解剖学１

科　目　名	単位数又はコマ数	開　講　時　期
人体解剖学１（必　修）	113 コマ	２年次生後期

担当教員名	職名／所属	Ｅメールアドレス	オフィスアワー
飯野　哲	教授／人体解剖学・神経科学	iinosa@ u-fukui.ac.jp	10:00～18:00
堀口 和秀	講師／人体解剖学・神経科学	khorigu@ u-fukui.ac.jp	10:00～18:00
伊藤 哲史	助教／人体解剖学・神経科学	itot@ u-fukui.ac.jp	10:00～18:00
橋本　隆	特命助教／人体解剖学・神経科学	takasi00@u-fukui.ac.jp	10:00～18:00
法本 左近	准教授／腫瘍病理学		

1　学修目標
人体解剖学は医学の基礎である。医学専門科目のすべての基本として、明瞭に理解し、説明できなければならない。講義では基本的事項と発生学的事項の理解を深め、実習では人体の構造観察を自らの手と目を
（中略）

3　準備学修（予習・復習）等の内容と分量
講義の予習としてシラバスを参考に該当する参考書部分を予習すること。特に図の理解に努めること。
講義の復習として、講義資料に基づき各自まとめ、参考書の該当する部分の図を参考に自らの図を作成する。各回に付き１時間程度の復習を行うこと。

実習の予習は大変重要であり、各回の実習内容につき実習書（「骨学実習の手びき」および「解剖実習のてびき」）を読み、参考書（特にアトラスを用いる）により該当構造の理解を深め、これらの点を各自の予習ノートにまとめること。各回に付き１時間程度必要である。
実習の復習は予習項目の復習となり、実習項目を参考書で再確認し、予習ノートの補足をし、図を自ら描くこと。各回に付き１時間程度必要である。
（中略）

2）参考書（教科書）は必須であり、必ず１冊は準備すること。本を読んで予習復習をする必要がある。
・解剖学講義　（伊藤著）南山堂
・グレイ解剖学　（Darke 他著、塩田他訳）エルゼビアジャパン
（中略）

3）アトラスは必須であり、必ず１冊は準備すること。実習書とアトラスを読み比べ予習復習が必要。
・プロメテウス解剖学コアアトラス　（坂井他訳）医学書院
・ネッター解剖学アトラス　（Netter 著、相磯訳）南江堂
（以下省略）

シラバスに予習・復習の内容と分量等を記載し，自主学習に必要な情報を提供

＊シラバスは冊子体を配布するとともに，大学ホームページにおいて電子版シラバスを常時参照する事ができる。

■ 時間外学習を促す工夫

時間外学習を促すものとして，授業外学習指示（シラバス明記など），レポート作成提出を取り入れている科目が多く，さらにミニテストや中間テストによる学習内容の定着などの工夫を行っている。

	科目数	レポート		ミニテスト		中間テスト		授業外の学習指示		その他	
		科目数	割合	科目数	割合	科目数	割合	科目数	割合	科目数	割合
医学科	103科目	48科目	46.6%	26科目	25.2%	18科目	17.5%	75科目	72.8%	30科目	29.1%
看護学科	101科目	40科目	39.6%	15科目	14.9%	5科目	5.0%	48科目	47.5%	11科目	10.9%

※ 科目数は，平成 26 年度開講科目を対象に調査し教員から回答のあった科目の総数

■ 取組の実例

・講義用プリントに採用した図や表については全ての出典を一覧として配布し，授業時間外の学習に便宜をはかっている。
・ライティングの講義ですので，Kuzuryu Memoir の作成にむけて個人的に添削指導を行うので，書いたものを持参してくださいといった指導を行っている。
・読解用の教材に関する英語による質問を配布し，それに英語で解答したものを毎週提出させる。
・ガイダンスの際，学生に予習，復習の必要性を強く指導している。さらに，各担当教員はあらかじめ講義資料を授業予定とともに学生に配布し，予習を促している。
・授業終了時に学習すべき課題を提示するなど，復習・自主学習を促している。
・５～６人を１グループとして，科目に関連し，自分達で興味のあるテーマ(健康問題)を決め，発表(プレゼン)は講義時間の中で実施するが，そのためのデータ収集，学習は時間外の有効活用を説明している。
・復習としてシミュレーターや診察器具による実技練習を奨励し，ER の診察室や器具を貸している。
・課題について調べさせ，発表させている。

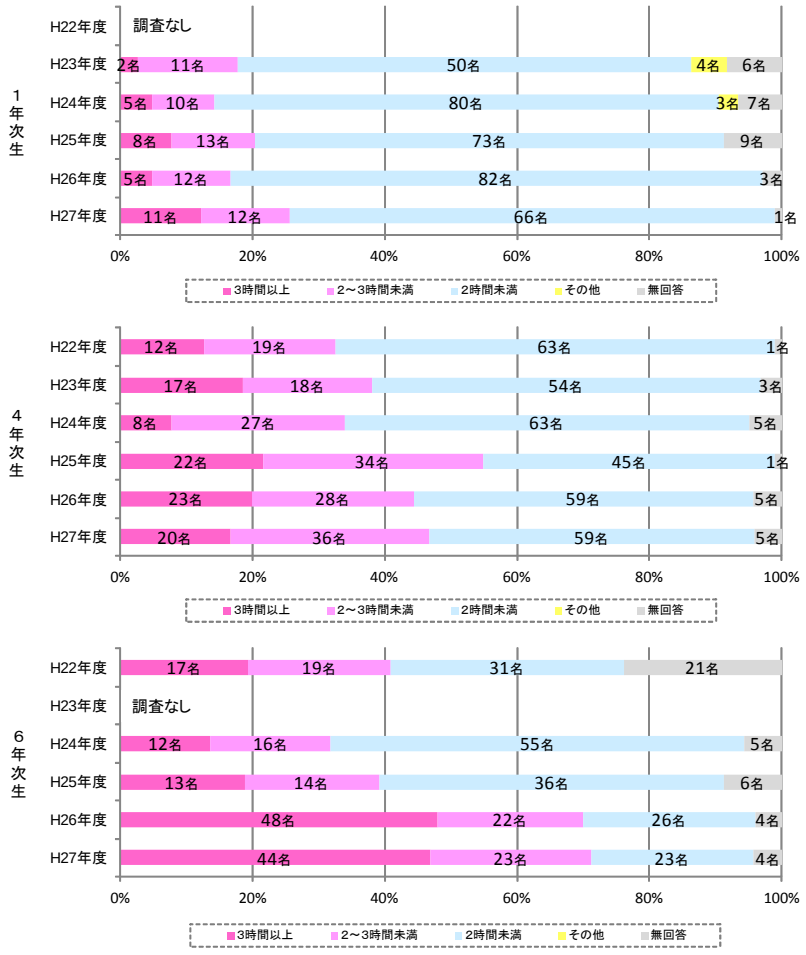
（事務局資料）

④　学生の授業外学習時間は第２期において増加し，それは全国平均を大きく上回り，主体的学習がなされている証左である（**資料 1-2-4-4，5**）。

資料 1-2-4-4　学生の授業外学習時間（医学科）

「単位の実質化への全学的取り組み方針」に基づき，授業外学習時間を学年別にカリキュラム評価アンケートにより調査している。普段の学習時間の調査結果，第２期当初より学習時間が長くなる傾向が見られ，特に６年次生は平成 26～27 年度での学習時間が長くなっている。医学科１年次についてはカリキュラム改訂により専門教育（解剖学など）を取り入れること及びカリキュラム中に自学自修時間を設けることで，授業外学習時間の増加を図ることとしている。

設問_授業以外の学習時間について，普段の講義の予習・復習，さらに自主的な学習（必ずしも講義とは直接関連しない自発的な課題への取り組みなども含めてください）に１日当たりどのくらいの時間数を使っていますか？休日も含め平均した，１日の学習時間を具体期に（時間単位で）お答えください。



■ 平成 27 年度調査による医学科学生の授業外学習時間（１日あたり）

	医学科			
	1年次生（88名回答）	4年次生（115名回答）	6年次生（90名回答）	1～6年次生（計293名回答）
普段	1.32 時間	1.66 時間	3.09 時間	2.00 時間
試験期間	4.47 時間	4.70 時間	6.72 時間	5.25 時間

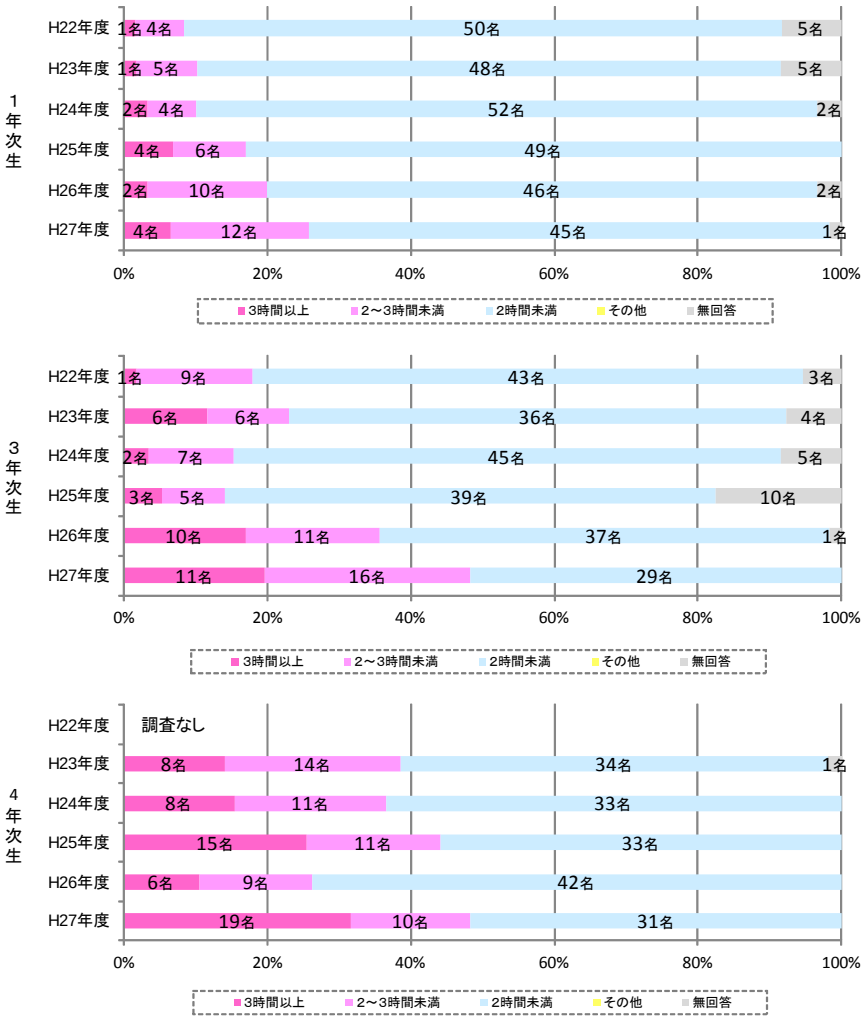
2012 年（平成 24 年度）全国調査によると医歯薬大学生は全国平均 6.08 時間（１週間あたり）（全国大学生活協同組合連合会による全国の国公立及び私立大学の学部学生調査（2012 年 10 月～11 月，回収数 8,609）による医歯薬系の平均）となっており，１日あたりに換算すると 0.87 時間であり，本学医学科学生の普段の学習時間は全国平均の２倍以上である。特に６年次生の学習時間は長い。

（平成 22～27 年度カリキュラム評価アンケート結果より抜粋）

資料 1-2-4-5　学生の授業外学習時間（看護学科）

「単位の実質化への全学的取り組み方針」に基づき，授業外学習時間を学年別にカリキュラム評価アンケートにより調査している。普段の学習時間の調査結果，看護学科１～４年次ともに第２期当初の平成 22 年度より平成 27 年度になるにつれ学習時間の増加傾向が見られる。

設問_授業以外の学習時間について，普段の講義の予習・復習，さらに自主的な学習（必ずしも講義とは直接関連しない自発的な課題への取り組みなども含めてください）に１日当たりどのくらいの時間数を使っていますか？休日も含め平均した，１日の学習時間を具体期に（時間単位で）お答えください。



■ 平成 27 年度調査による看護学科学生の授業外学習時間（１日あたり）

	看護学科				
	1年次生（61名回答）	2年次生（59名回答）	3年次生（54名回答）	4年次生（60名回答）	1～4年次生（計234名回答）
普段	1.17 時間	1.69 時間	1.91 時間	1.82 時間	1.63 時間
試験期間	4.98 時間	4.72 時間	4.57 時間	4.70 時間	4.75 時間

2012 年（平成 24 年度）全国調査によると医歯薬大学生は全国平均 6.08 時間（１週間あたり）（全国大学生活協同組合連合会による全国の国公立及び私立大学の学部学生調査（2012 年 10 月～11 月，回収数 8,609）による医歯薬系の平均）となっており，１日あたりに換算すると 0.87 時間であり，本学看護学科学生の普段の学習時間は全国平均を大きく上回る。特に高学年では学習時間が長い。

（平成 22～27 年度カリキュラム評価アンケート結果より抜粋）

【学習意欲向上方策】

①　学業成績が優れた学生に対しては「優秀学生表彰制度」として学長表彰及び学部長表彰を行っている（**資料 1-2-4-6**）。

資料 1-2-4-6　優秀学生表彰制度

医学部において特に優秀な学業成績を修めた学生に対しては，成績上位の医学科学生３名及び看護学科学生３名を表彰し，それぞれ最優秀の者「学長賞」，他の者を「医学部長賞」としている。

福井大学医学部優秀学生表彰制度要項

平成 17 年 3 月 18 日医学部教授会
平成 20 年 2 月 21 日改正
平成 27 年 2 月 19 日改正

福井大学医学部において特に優秀な学業成績を修めた学生に対し，その栄誉を称えるため，卒業時において下記の基準により表彰を行う。

1．表彰する学生は，原則として成績上位の医学科３名及び看護学科３名とし，それぞれ最優秀の者を「成績優秀者」として学長に推薦することとする。

2．成績の判定は，次により行うこととする。
（1）医学科　　卒業試験における成績
（2）看護学科　　基礎科目，専門基礎科目及び専門科目の総合成績
ただし，既修得科目，単位互換科目等の認定科目の成績は対象外とする。

3．表彰の対象は全学生とするが，卒業までの各期の進級（卒業）判定において，成績不良のため留年となった者及び懲戒処分等を受けた者は対象外とする。

4．表彰は，「医学部長賞」と称し，表彰状及び記念品を授与することとする。

5．本制度による優秀学生の選考は，医学部教務学生委員会が行う。ただし，必要に応じて学年主任又は助言教員等の意見を聴くものとする。

6．本制度の運用に関し必要な事項は，医学部教務学生委員会が定める。

附　則
この要項は，平成１６年度卒業生から実施する。

附　則
この要項は，平成１９年度卒業生から実施する。

附　則
この要項は，平成２６年度卒業生から実施する。



（事務局資料）

②　学生の学習意欲向上及び主体的学習環境整備として講義棟改修，マルチラーニングスペース新設，グループ学習用の情報工房グループラボの新設，語学学習のための言語開発センター新設，医学図書館の 24 時間利用化，無線 LAN 整備等を行った（**資料 1-2-4-7～11**）。

学習環境に対する満足度は向上した（**P4-64 前掲資料 1-1-5-12**）。

資料 1-2-4-7　学生の自習スペース

講義棟・実習棟改修と新設備増設（平成 23～24 年度），図書館改修・増築と新設備増設（平成 23～26 年度），言語開発センター新設（平成 25 年度），メディカルシミュレーションセンター新設（平成 25 年度）等を行い学生の自学自習できるスペース・設備の整備・拡大を行った。

施設名1	施設名2	座席数	利用時間	摘要（設置設備等）
総合研究棟（講義棟）	情報処理演習室	126席	24時間（講義時間除く）	（H24改修）ﾊﾟｿｺﾝ126台、ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾀｰ等視聴覚装置
	ﾏﾙﾁﾗｰﾆﾝｸﾞｽﾍﾟｰｽ	約30席	平日8:30-21:00	（H24新設）ﾃｰﾌﾞﾙ16台、ﾎﾜｲﾄﾎﾞｰﾄﾞ6台、ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾀｰ等視聴覚装置
	教育支援ｾﾝﾀｰ	約20席	平日8:30-21:00（講義時間除く）	（H24新設）ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾀｰ等視聴覚装置
	第1小講義室	40席	同上	（H24改修）ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾀｰ等視聴覚装置
	第2小講義室	40席	同上	（H24改修）ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾀｰ等視聴覚装置
	第3小講義室	40席	同上	（H24改修）ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾀｰ等視聴覚装置
	第1中講義室	144席	同上	（H24改修）ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾀｰ等視聴覚装置
	第2中講義室	144席	同上	（H24改修）ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾀｰ等視聴覚装置
	第3中講義室	144席	同上	（H22改修）ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾀｰ等視聴覚装置
実習棟	多目的講義室	135席	同上	（H23新設）ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾀｰ等視聴覚装置
看護学科棟	統計情報処理演習室	71席	同上	ﾊﾟｿｺﾝ71台、ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾀｰ等視聴覚装置
	第1講義室	80席	同上	ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾀｰ等視聴覚装置
	第2講義室	80席	同上	ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾀｰ等視聴覚装置
	看護大講義室	170席	同上	ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾀｰ等視聴覚装置
	セミナー室1～4	40席	同上	4室（各10席）、電子黒板4台等
言語開発ｾﾝﾀｰ（LDC）	ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙ演習室	44席	平日9-24:00、休日10-24:00	（H25新設）
	個人学習室	25席	平日17-19:50	（H25新設）ﾊﾟｿｺﾝ25台、語学学習教材等
医学図書館	雑誌閲覧室1	84席	24時間	4人用机
	雑誌閲覧室2	33席	同上	個人机
	福井県医学資料室	3席	同上	
	ﾒﾃﾞｨｱﾙｰﾑ	23席	同上	ﾊﾟｿｺﾝ15台等
	ﾗｳﾝｼﾞ	9席	同上	ﾊﾟｿｺﾝ4台等
	図書閲覧室1	31席	同上	個人机、2人用机、ﾊﾟｿｺﾝ1台等
	図書閲覧室2	54席	同上	個人机
	図書閲覧室3	40席	同上	（H26改修）個人机、2人用机
	ﾌﾞﾗｳｼﾞﾝｸﾞｺｰﾅｰ	10席	同上	
	ｸﾞﾙｰﾌﾟ学習室（情報工房）	140席	平日9-24:00、休日10-24:00	（H23新設）14室（各10席）、ﾊﾟｿｺﾝ及び電子黒板14台ﾟ等
福井ﾒﾃﾞｨｶﾙｼﾐｭﾚｰｼｮﾝｾﾝﾀｰ	ｼﾐｭﾚｰｼｮﾝﾙｰﾑ1～8	190席	24時間（事前申請）	（H25新設）8室（各20～40席）、各種ｼﾐｭﾚｰﾀｰ
	ｳｴｯﾄﾗﾎﾞ	30席	同上	（H25新設）各種ｼﾐｭﾚｰﾀｰ
	ﾄﾚｰﾆﾝｸﾞﾙｰﾑ	50席	同上	（H25新設）各種ｼﾐｭﾚｰﾀｰ

【マルチラーニングスペース】



【第１～３小講義室】



【第１～３中講義室】



【ｼﾐｭﾚｰｼｮﾝﾙｰﾑ（福井ﾒﾃﾞｨｶﾙｼﾐｭﾚｰｼｮﾝｾﾝﾀｰ）



（事務局資料）

資料 1-2-4-8　総合研究棟（講義棟）改修

平成 24 年に全面改修を行い，ゆとりを持って講義を受講することが可能となるよう講義室の改修・空調やプロジェクター等の更新，学生同士のコミュニケーションを図るスペースとしてのコミュニケーションスペース新設，自習や勉強会を行う事が出来るマルチラーニングスペース新設，障がい者に配慮したエレベータやトイレの設置改修を行った。

これらの改修等には学生の要望を取り入れ（**P4-63 前掲資料 1-1-5-11**），講義室拡張，講義室の学習スペースとしての机椅子の変更（９人掛けから３人掛け），自習室等（コミュニケーションスペース，マルチラーニングスペース）の設置を行った。

【外観】



【合併講義室】



【コミュニケーションスペース】





（事務局資料）

資料 1-2-4-9　医学図書館改修

医学図書館の増改築を行うとともに自動入退出設備による24時間利用化やシラバス掲載教科書および学生希望図書等の積極的購入により学生の図書館利用環境を整備した。

1. 平成 23 年度の増築により少人数グループ学習室（情報工房）14 室を新設し，140 座席を増設した。各室はテュートリアルや小規模ゼミ，グループ学習などで使用されており，年間 5,000 回ほどの利用が見られる。
2. 平成 25 年度の増築・改修により言語開発センター（LDC）を新設し，個別ブース，多目的演習室，DVD ステーションなど自主的語学学習に適した教材や設備を備えた。また図書閲覧室の改修整備により開架用書架を増設した。

【医学図書館外観】



【２階 図書閲覧室（個人机）】



【２階 グループ学習室（情報工房）】



【１階 言語開発センター（ＬＤＣ）】



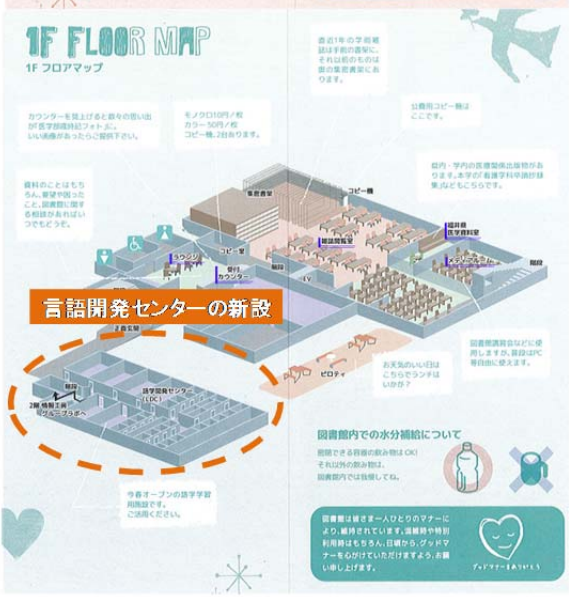
【１階 言語開発センター個別ブース】



【学生の利用状況】

年度（開館日数）	学生入館者数	（うち時間外利用）	学生貸出冊数	グループ学習室利用回数
平成22年度（361日）	164,859名	（71,031名）	14,719冊	―
平成23年度（352日）	161,786名	（69,851名）	14,201冊	825回
平成24年度（354日）	170,835名	（68,589名）	14,786冊	5,390回
平成25年度（361日）	163,480名	（65,799名）	17,252冊	4,870回
平成26年度（360日）	159,943名	（60,759名）	17,704冊	5,371回
平成27年度（362日）	151,519名	（59,835名）	17,263冊	4,850回





（事務局資料）

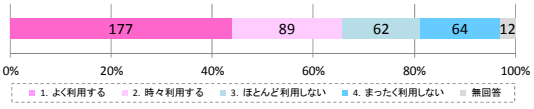
資料 1-2-4-10　学生による医学図書館使用実績

学生が普段の学習を行っている場所についてアンケート調査を行った所，自宅で学習するものも多いが大学施設としては医学図書館の個人机（個人学習スペース）とグループ学習室を利用するものが多く図書館整備が学生の学習環境整備に役立っている。

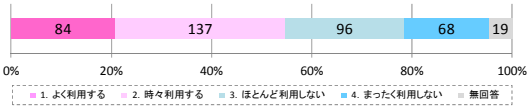
設問_「普段の講義以外の学習（試験期間中を含む）」を，あなたはどの場所で行っていますか。次の場所について，どの程度利用しているか教えてください。

【医学科】

		1年	3年	4年	6年	(計)
医学図書館（個人机）	1. よく利用する	40名	32名	44名	61名	177名
	2. 時々利用する	26名	25名	27名	11名	89名
	3. ほとんど利用しない	11名	23名	17名	11名	62名
	4. まったく利用しない	9名	16名	30名	9名	64名
	無回答	4名	4名	2名	2名	12名
(計)		90名	100名	120名	94名	404名

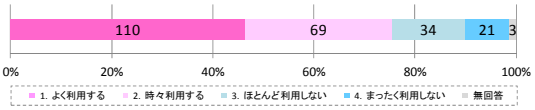


		1年	3年	4年	6年	(計)
医学図書館（グループ学習室）	1. よく利用する	22名	22名	13名	27名	84名
	2. 時々利用する	34名	19名	34名	50名	137名
	3. ほとんど利用しない	14名	34名	42名	6名	96名
	4. まったく利用しない	14名	20名	28名	6名	68名
	無回答	6名	5名	3名	5名	19名
(計)		90名	100名	120名	94名	404名

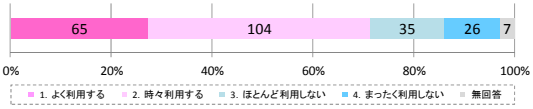


【看護学科】

		1年	2年	3年	4年	(計)
医学図書館（個人机）	1. よく利用する	26名	35名	18名	31名	110名
	2. 時々利用する	21名	13名	21名	14名	69名
	3. ほとんど利用しない	9名	8名	9名	8名	34名
	4. まったく利用しない	6名	3名	7名	5名	21名
	無回答	0名	0名	1名	2名	3名
(計)		62名	59名	56名	60名	237名



		1年	2年	3年	4年	(計)
医学図書館（グループ学習室）	1. よく利用する	22名	13名	10名	20名	65名
	2. 時々利用する	21名	30名	27名	26名	104名
	3. ほとんど利用しない	5名	10名	11名	9名	35名
	4. まったく利用しない	13名	4名	6名	3名	26名
	無回答	1名	2名	2名	2名	7名
(計)		62名	59名	56名	60名	237名



（平成 27 年度医学科・看護学科カリキュラム評価アンケート結果より抜粋）

資料 1-2-4-11　ICT 環境の整備

■ 学生の PC 利用スペース

学生用パソコンは 24 時間使用可能に整備されており，講義演習「情報の科学１」「情報科学」や CBT，自学自習及び講義レポート作成に利用されている。

【情報（統計情報）処理演習室】



【医学図書館】



	情報処理	統計情報処理	(計)
端末数	126 台	71 台	197 台
利用時間	24 時間	8:30-21:00	

	ﾒﾃﾞｨｱﾙｰﾑ	ｸﾞﾙｰﾌﾟ学習室	ラウンジ	(計)
端末数	15 台	14 台	4 台	33 台
利用時間	24 時間	24 時間	24 時間	

■ 学生無線 LAN 登録状況（平成 27 年度）

学生の要望を受け（前掲資料）学内ネットワークを改善し，登録により各自無線 LAN の使用（無料）を可能とした。

	１年次生	２年次生	３年次生	４年次生	５年次生	６年次生
医学科	95 名	51 名	63 名	91 名	82 名	96 名
看護学科	25 名	23 名	6 名	4 名		

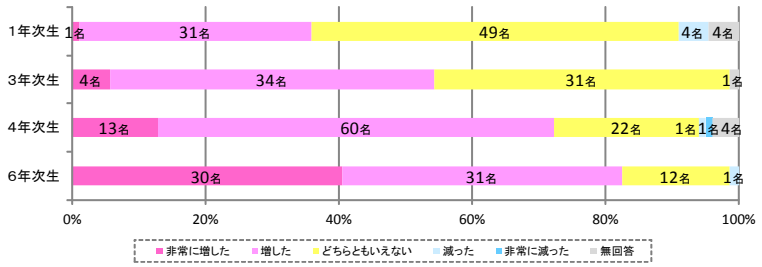
（事務局資料）

③　過半の学生に医学･医療に対する学習意欲が喚起されており，その割合は向上しており（**資料 1-2-4-12**），学生の主体的学習が促されていることの証左である。

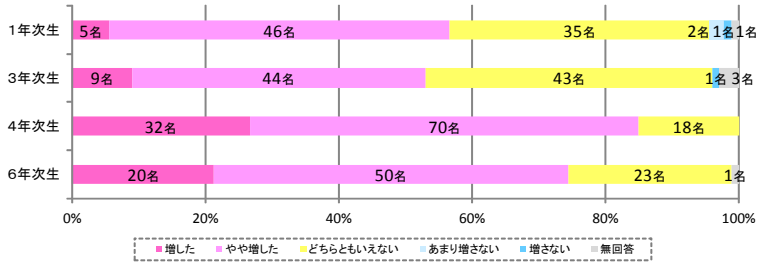
資料 1-2-4-12　学生の主体的学習意欲

■ **医学科**

平成 21 年度設問_この学年のカリキュラムを履修して，医学・医療に対する興味，（次年度以降のカリキュラムに対する）履修意欲が増しましたか？



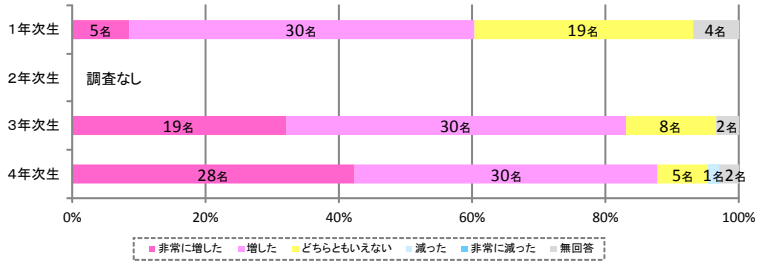
平成 27 年度設問_これまでのカリキュラムを履修して，医療（医学）に対する興味や履修意欲が増しましたか？



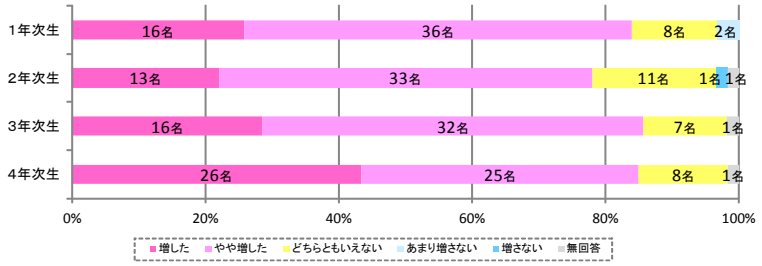
＊ 全学年の累計により，肯定的評価（増した）をする学生の割合が第 1 期末の 61.1%から第 2 期末の 68.3%へと 7.2%増加した。

■ **看護学科**

平成 21 年度設問_この学年のカリキュラムを履修して，看護学・医療に対する興味，（次年度以降のカリキュラムに対する）履修意欲が増しましたか？



平成 27 年度設問_これまでのカリキュラムを履修して，医療（看護学）に対する興味や履修意欲が増しましたか？



＊ 全学年の累計により，肯定的評価（増した）をする学生の割合が第 1 期末の 77.6%から第 2 期末の 83.1%へと 5.5%増加した。

（平成 21 年度および平成 27 年度カリキュラム評価アンケート結果より抜粋）

（水準）　期待される水準を上回る

（判断理由）

①　本邦における医学･看護学教育内容･指導に準拠した教育課程を整備しており[1)]，新たに策定したディプロマ・ポリシー，カリキュラム・ポリシー[2)]に沿ったカリキュラムマップを提示し[3)]，その体系性を明確化した。これら教育課程に対して，学生は第１期よりも高く評価している[4)]。

[1)] 資料 1-2-1-5　：医学科における教育の特徴　P4-74
資料 1-2-1-6　：医学科カリキュラム　P4-75
資料 1-2-1-10　：看護学科における教育の特徴　P4-79
資料 1-2-1-11　：看護学科カリキュラム　P4-80
[2)] 資料 1-2-1-1　：医学科ディプロマ・ポリシー　P4-70
資料 1-2-1-2　：看護学科ディプロマ・ポリシー　P4-71
資料 1-2-1-4　：医学科カリキュラム・ポリシー　P4-73
資料 1-2-1-9　：看護学科カリキュラム・ポリシー　P4-78
[3)] 資料 1-2-1-7　：医学科カリキュラムマップ　P4-76
資料 1-2-1-8　：医学科カリキュラムツリー　P4-77
資料 1-2-1-12　：看護学科カリキュラムマップ　P4-81
資料 1-2-1-13　：看護学科カリキュラムツリー　P4-82
[4)] 資料 1-2-1-14　：カリキュラムに対する学生の評価（医学科）　P4-83
資料 1-2-1-15　：カリキュラムに対する学生の評価（看護学科）　P4-84

②　研究マインド醸成プログラム[5)]，チーム医療の基盤となる本邦初の医看合同プログラム[6)]やグローバル人材育成に向けた教育・留学推進[7)]等を取り入れ，医療人・研究者としての能力涵養を図り，其々の取り組みに対する学生の評価や能力涵養状況は概ね良好であり[8)]，学生の期待に応えている。

[5)] 資料 1-2-1-20　：研究室配属（医学科３年次）　P4-88
資料 1-2-1-22　：アドバンストコース　P4-89
資料 1-2-1-23　：ATM プログラムによる早期大学院教育受講　P4-90
資料 1-2-1-24　：４大学コンソーシアムリトリートにおける他大学学生との交流　P4-91
資料 1-2-1-25　：研究に必要な知識・方法の修得（看護学科）　P4-92
[6)] 資料 1-2-1-26　：医学科・看護学科合同講義　P4-93
[7)] 資料 1-1-1-27　：海外留学する学生数の大幅な増加　P4-26
資料 1-2-2-12　：医学科英語カリキュラム　P4-106
資料 1-2-2-13　：看護学科英語カリキュラム　P4-107
資料 1-2-2-14　：「グローバル人材育成支援事業」海外留学・研修プログラム（医学部）　P4-108
資料 1-2-2-17　：看護学科キャリアアップ実習シラバス　P4-110
[8)] 資料 1-2-1-21　：研究室配属の学生による評価　P4-89
資料 1-2-1-27　：医学科・看護学科合同講義に対する学生の評価　P4-94
資料 1-2-2-15　：留学した学生の自己評価　P4-109
資料 1-2-2-18　：看護学科キャリアアップ実習（海外）に対する学生の評価　P4-111
資料 1-2-2-19　：「卒業時にグローバルな視野を有する人材として備えるべき能力等」の涵養状況　P4-112

③ 地域医療への理解を深める地域医療人育成プログラムの構築・実施[9]も一助となり，福井県内就職率が第１期より向上する等[10]，地域医療機関で働く医療者を多数輩出していることは，地域社会の期待に応えるものである。

[9] 資料 1-2-2-2　：地域医療人育成プログラムの概要（医学科）　P4-96
資料 1-2-2-3　：入門テュートリアル「地域医療」（１年次）　P4-97
資料 1-2-2-4　：地域医療学講義（２年次および４年次）　P4-98
資料 1-2-2-5　：地域医療に関する臨床実習　P4-99
資料 1-2-2-6　：地域医療へ参加を促す取組（医学科）　P4-100
資料 1-2-2-7　：看護学科における地域医療教育　P4-101
[10] 資料 2-2-1-3　：卒業者の地域別就職状況　P4-170
資料 2-2-1-4　：福井県内就職状況　P4-171

④　医学・看護学の知識･技能習得のための教育方法の工夫[11]及びクリニカルクラークシップや看護実践能力を高める取組は学生から概ね高い評価を得ており[12]，関係者の期待に応えている。福井メディカルシミュレーションセンターの新設と臨床実習での活用[13]，医学部附属先進イメージング教育研究センターによる画像医学教育の推進[14]は学生の能力涵養に寄与するものとして特記できる。

[11] 資料 1-2-3-1　：授業における学習指導法の工夫状況　P4-113
資料 1-2-3-2　：教育方法に対する学生の評価　P4-114
[12] 資料 1-2-3-3　：臨床実習の概要　P4-115
資料 1-2-3-4　：診療参加型実習の工夫　P4-116
資料 1-2-3-5　：臨床実習に対する評価　P4-117
資料 1-2-3-8　：看護学実習　P4-120
資料 1-2-3-9　：臨地実習に対する評価　P4-121
資料 1-2-3-10　：「看護基本技術の記録」による自己評価システムの工夫　P4-122
資料 1-2-3-11　：「看護基本技術実習」と「看護基本技術の記録」に対する学生の評価　P4-123
資料 1-2-3-12　：看護基本技術の到達度評価　P4-123
資料 1-2-3-19　：統合型講義と学生による評価　P4-130
資料 2-1-1-3　：臨床実習の手引（医学科５年次）　P4-147
資料 2-1-1-4　：卒前臨床医学研修（医学科６年次）での評価　P4-148
[13] 資料 1-2-3-6　：福井メディカルシミュレーションセンターの概要　P4-118
資料 1-2-3-7　：シミュレーションセンターの学生利用状況　P4-119
[14] 資料 1-2-3-18　：画像医学教育の工夫　P4-129

⑤　「単位の実質化」や「主体的な学習の促進」への適切な対応として[15]，学生の授業外学習を促す取組み[16]，学習意欲向上や課題探求・解決能力を涵養する科目の開講[17]，主体的学習環境の整備[18]等を積極的に進め，その結果，全国平均を大きく上回る授業外学習時間の確保[19]や医学・医療への興味・学習意欲の涵養状況の向上[20]がなされ，学生の期待に応えている。

[15] 資料 1-2-4-1　：単位の実質化への全学的取組方針　P4-131
[16] 資料 1-2-4-3　：時間外学習を促す取組　P4-133
[17] 資料 1-2-3-13　：テュートリアル教育　P4-124
資料 1-2-3-14　：「テュートリアル」に対する学生の評価　P4-125
資料 1-2-3-15　：「テュートリアル」に対するテューターの評価　P4-126

資料 1-2-3-18　：画像医学教育の工夫　P4-129
[18] 資料 1-2-4-7　：学生の自習スペース　P4-137
資料 1-2-4-8　：総合研究棟（講義棟）改修　P4-138
資料 1-2-4-9　：医学図書館改修　P4-139
資料 1-2-4-11　：ICT 環境の整備　P4-140
[19] 資料 1-2-4-4　：学生の授業外学習時間（医学科）　P4-134
資料 1-2-4-5　：学生の授業外学習時間（看護学科）　P4-135
[20] 資料 1-2-4-2　：課題探求・解決型能力の涵養　P4-132
資料 1-2-4-12　：学生の主体的学習意欲　P4-141

以上のように，教育内容・方法の適切な工夫は学生の期待「医療人として備えるべき学力や資質・能力の涵養」等に極めてよく応えるものであり，期待される水準を上回る。

分析項目Ⅱ　教育成果の状況

観点　学業の成果

（観点に係る状況）

●履修･修了状況から判断される学習成果の状況

【成果測定手法】

①　学習成果は，学科試験，医学科卒業試験，看護学科卒業論文，医学科 CBT と OSCE，医師・看護師・保健師・助産師国家試験結果により直接的に測定している。学生は CBT・OSCE による全国比較，看護師・保健師国家試験全国模擬試験や「看護基本技術の記録」（P4-122 **前掲資料 1-2-3-10**）により自己評価を行っている。学内外の試験の関連検証は教学 IR 担当者及び関連委員会が行っている（**資料 2-1-1-1**）。

資料 2-1-1-1　CBT と学内学科試験との関連性検証

■　医学部では，松岡キャンパス学務室に教育評価担当の専門職員を平成 25 年度に配置し，外部試験結果と学内の成績分布との相関性の検証を進めている。

医学科の学生は，４年次末に，医学教育モデル・コア・カリキュラム（以下の A～F の６つの学習区分にまとめられた全国標準カリキュラム，以下「コア・カリ」）の学習成果として共用試験医学系 CBT（以下「CBT」）を受験し，その結果は客観性ある評価として本学の進級判定（５年次臨床実習参加の可否）にも用いている。

A…基本事項（授業科目：「コミュニケーションとチーム医療」，「入門チュートリアル」等），**B**…医学・医療と社会（授業科目：「医学・医療と社会１～３」，「死と法」等），**C**…医学一般（授業科目：「人体解剖学１～２」，「生体と微生物」等），**D**…人体器官の正常構造と機能，病態，診断，治療（授業科目：「人体各器官の正常構造と機能」，「神経系」，「循環器系」等）），**E**…全身におよぶ生理的変化，病態，診断，治療（授業科目：「感染症」，「腫瘍」等）」），**F**…診断の基本（授業科目：「基礎医科学」，「診療の基本」）

平成 22～24 年度入学者（第２期以降）の CBT 受験者 336 名を対象に，本学の各授業科目をコア・カリ区分にまとめて平均点を算出し，区分間で相関をみると，すべてにおいて中程度以上の関連がみられる。この結果から，学生全体としての良好な学修状況，および本学カリキュラム編成の妥当性が確認できる。

【学内学科試験結果の学習区分間関連】

	A平均点（学内）	B平均点（学内）	C平均点（学内）	D平均点（学内）	E平均点（学内）	F平均点（学内）
A平均点（学内）	1					
B平均点（学内）	0.51	1				
C平均点（学内）	0.74	0.50	1			
D平均点（学内）	0.81	0.46	0.80	1		
E平均点（学内）	0.72	0.59	0.72	0.74	1	
F平均点（学内）	0.65	0.49	0.75	0.79	0.70	1

相関あり（強）　相関あり（中）　相関あり（弱）　相関なし

さらに，本学の成績判定の妥当性検証のため，本学のコア・カリ区分ごとの平均点と，それに対応する CBT 試験正答率の相関をみると，概ね中程度の相関がみられ，本学の成績評価ついても妥当性が確認できる。

これらの分析結果は，教育成果およびその仕組み等の妥当性の証左となっている。

【学内学科試験結果と全国試験との関連】

	A平均点（学内）	B平均点（学内）	C平均点（学内）	D平均点（学内）	E平均点（学内）	F平均点（学内）
A正答率（CBT）	0.12	0.14	0.12	0.13	0.15	0.10
B正答率（CBT）	0.46	0.40	0.48	0.53	0.46	0.50
C正答率（CBT）	0.45	0.31	0.54	0.61	0.49	0.50
D正答率（CBT）	0.55	0.33	0.57	0.61	0.52	0.51
E正答率（CBT）	0.50	0.32	0.47	0.49	0.46	0.43
F正答率（CBT）	0.36	0.21	0.37	0.42	0.37	0.37

相関あり（強）　相関あり（中）　相関あり（弱）　相関なし

（事務局資料）

【臨床能力の評価】

①　医学科において，４年次に全員が CBT 及び OSCE を受験し，合格者のみが臨床実習を行っている。OSCE では模擬患者の標準化等工夫を行っている（**資料 2-1-1-2**）。

資料 2-1-1-2　OSCE 実施の工夫

OSCE 実施に当たり，教職員等は「OSCE 評価者研修会」や「OSCE 医療面接模擬患者標準化に関するワークショップ」に参加し新たな情報を得ると共に，平成 25 年度から正確な成績評価を目的とした外部協力者の技術向上等のため「模擬患者事前説明会」を開催し，さらに平成 27 年度からは実施後に模擬患者・学外評価者を含む関係者全体での「振り返り研修会」も追加した。これらの実施のため，福井大学「競争的配分経費（教育評価に基づく競争的経費）」としてプログラム「クリニカルクラークシップの充実・推進のための体制整備」（平成 22～26 年度）の配分を受けた。

■ 模擬患者事前説明会

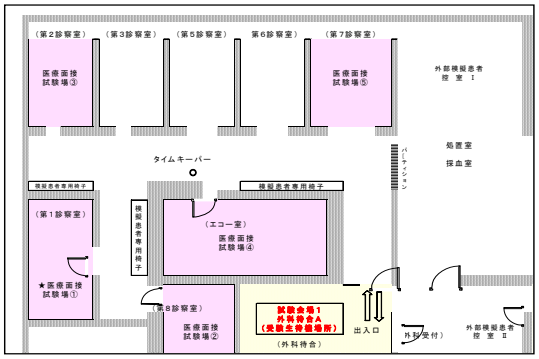


外部の OSCE 運営協力者（模擬患者）に対し，OSCE の意義や重要性を説明すると共に，ロールプレイによる標準化，技術向上を行う場を設定した。

■ 実施体制

実施会場として休診日の診察室（医学部附属病院）を使い，実際の臨床実習に近い環境で試験を行っている。





（事務局資料）

②　医学科臨床実習の到達目標は「臨床実習の手引」（**資料 2-1-1-3**），「卒前臨床医学研修手引」（**資料 2-1-1-4**）に明記し，各診療科（部）の実習評価と臨床実習委員会による総合判定を行っている。

資料 2-1-1-3　臨床実習の手引（医学科５年次）

■ 臨床実習の評価

実習の評価は，各診療科（部）の方針により，教育目標を達成しているかどうか評価し，医学科臨床実習委員会で合否を判定します。（「臨床実習の手引」より）

■ 臨床実習の手引

臨床実習は全 23 診療科（部）において実習内容と到達目標を定め，定められた「医行為」によるクリニカルクラークシップを実施している。「臨床実習の手引」には各診療科（部）実習スケジュールとともに「実習内容」「到達目標」が明記されている

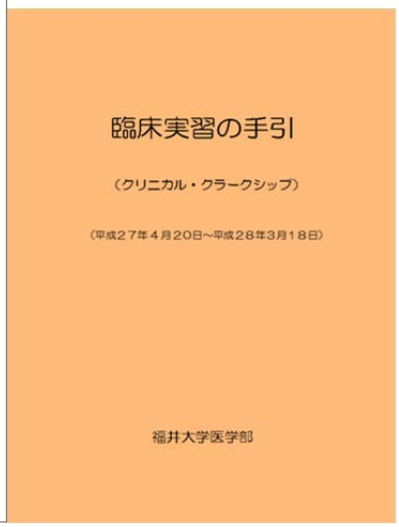
第 二 内 科

1 集合時刻　午前 8 時 30 分

2 実習場所　(1) 月曜日：北３Ｆ病棟
(2) 火曜部：北３Ｆ病棟
(3) 水曜日：北３Ｆ病棟
(4) 木曜日：北５Ｆカンファレンスルーム
(5) 金曜日：北３Ｆ病棟

3 実習内容　(1) 消化器・神経疾患診断法の習得
(2) 病棟入院患者（受持患者）の担当
(3) 患者の検査見学
(4) 受持ち患者の検討（1 日目に man to man 指導の医師を割り当てる。）

4 到達目標　外来患者および担当入院患者に対して
(1) 医療面接ができる。
(2) 一般内科的・神経学的診察ができる。
(3) 検査結果の意味が理解でき，説明できる。
(4) 患者の効果的プレゼンテーションができる。
(5) デイケアを体験し，内容と問題点が説明できる。
(6) 重症心身障害病棟を体験し，内容と問題点が説明できる。



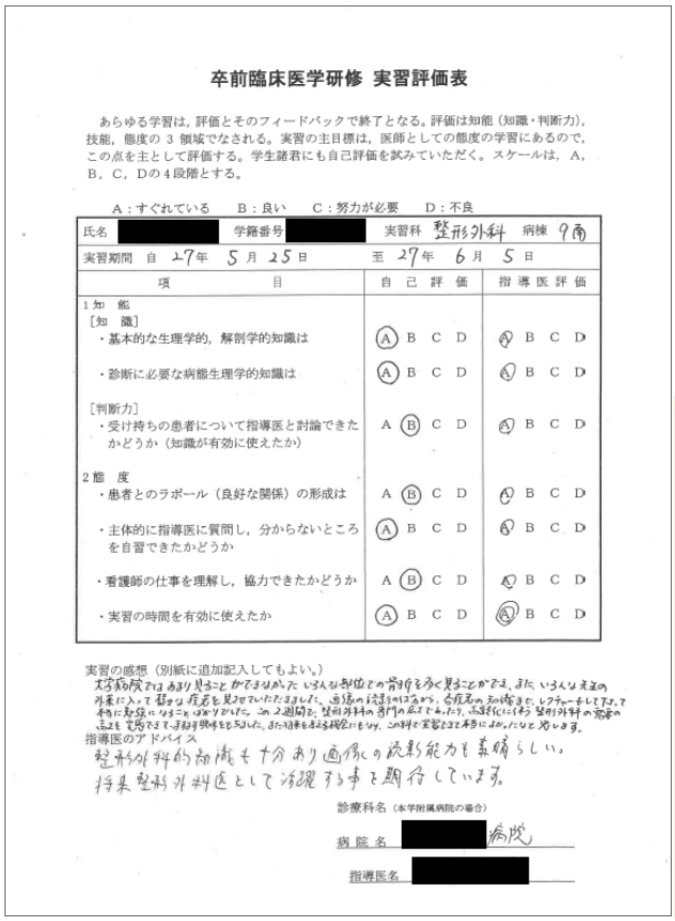
（平成 27 年度臨床実習の手引より抜粋）

資料 2-1-1-4　卒前臨床医学研修（医学科６年次）での評価

卒前臨床医学研修の評価として「研修評価表」を用いている。評価項目は１．知能（基本的知識及び病態生理学的知識，判断力），２．態度（患者とのラポール形成，主治医との討論・自習，看護師への理解，実習の有効度）を設定し，学生の自己評価ついで指導医の評価（ともに A～D 評価）によるフィードバックを行っている。

平成 28 年度からの新カリキュラム実施に合わせ，臨床実習評価として教員と学生による双方向性評価を導入することとし，教員からの共通項目ルーブリック評価および各診療科（部）特性に応じた独自評価（実技や態度を含む）と学生からの診療科評価（ルーブリック評価）を合わせて実施する。最終的には統一型卒業試験および卒業時 OSCE（Post-cc OSCE）を実施することで臨床能力の多面的評価を行うこととしている。

■ 学外研修病院による学生臨床実習評価



卒前臨床医学研修 実習評価表

あらゆる学習は，評価とそのフィードバックで終了となる。評価は知能（知識・判断力），技能，態度の 3 領域でなされる。実習の主目標は，医師としての態度の学習にあるので，この点を主として評価する。学生諸君にも自己評価を試みていただく。スケールは，A，B，C，Dの 4 段階とする。

A：すぐれている　B：良い　C：努力が必要　D：不良

氏名 [redacted]　学籍番号 [redacted]　実習科 整形外科　病棟 9南

実習期間　自 27年 5月 25日　至 27年 6月 5日

項目	自己評価	指導医評価
1 知　能		
[知　識]		
・基本的な生理学的，解剖学的知識は	(A) B C D	(A) B C D
・診断に必要な病態生理学的知識は	(A) B C D	(A) B C D
[判断力]		
・受け持ちの患者について指導医と討論できたかどうか（知識が有効に使えたか）	A (B) C D	(A) B C D
2 態　度		
・患者とのラポール（良好な関係）の形成は	A (B) C D	(A) B C D
・主体的に指導医に質問し，分からないところを自習できたかどうか	(A) B C D	(A) B C D
・看護師の仕事を理解し，協力できたかどうか	A (B) C D	(A) B C D
・実習の時間を有効に使えたか	(A) B C D	(A) B C D

実習の感想（別紙に追加記入してもよい。）

大学病院ではあまり見ることができなかった いろんな部位での骨折を多く見ることができ、また いろんなえんの外来に入って 様々な疾患を見ることができました。当法の説明からは、合併症の知識まで レクチャーをしてくださって 勉強になることばかりでした。この2週間で、整形外科の専門の広さであったり、治療法にも(も) 整形外科の奥深さも 実感できて 非常に興味をもち勉強になりました。この科で実習できてよかったと思います。

指導医のアドバイス

整形外科的知識も十分あり画像の読影能力も素晴らしい。
将来整形外科医として活躍する事を期待しています。

診療科名（本学附属病院の場合）

病院名 [redacted] 病院

指導医名 [redacted]



卒前臨床医学研修手引

前期：本学附属病院
平成27年4月6日～平成27年4月17日

中期：教育関連病院
平成27年5月25日～平成27年6月26日

後期：本学附属病院
平成27年7月6日～平成27年7月17日

福井大学医学部

（事務局資料）

③　看護学科では，臨地実習の到達目標をシラバス，看護学実習要項，実習オリエンテーション時に示し，学生，臨地実習指導者，教員間で共有したうえで，評価についても三者による総合的評価を行っている（**資料 2-1-1-5**）。

資料 2-1-1-5　臨地実習における臨床能力評価

■ 学生による自己評価

看護基本技術の記録，看護基本技術チェック表を自ら記載する（P4-122 **前掲資料 1-2-3-10**）。

■ 教員による評価

各実習分野担当教員により，実習評価シートを用いて学生の評価がなされている。

公衆衛生看護学実習　評価シート

実習期間：

実習施設：

実習区分	評価項目（配点）	評価基準（配点）	点数
市町	地域診断（10）	・具体的で必要な量的データが網羅されている、選択し収集されているか。（3）	
		・地区踏査の内容をわかりやすく図示できているか。（3）	
		・地域住民・関係者からの聞き取りができたか。（2）	
		・保健計画や行政事業との反映があるか。（1）	
		・地域の健康課題を的確に表現できたか。（対象を絞ったか、統計、聞き取り、地区踏査にあったものか）（1）	
	記録（15）	・事前学習：法的根拠、対象者の把握、市町村データと全国データとの比較、実施上の留意点、発達課題まで網羅されているか。（3）	
		・目標：実習目標を絞って明確に表現したか。 ・ピラミッド：対策・施策・事業の関係が理解できたか。（4）	
		・学び：目標に対する学びとなっているか。 ・出来事、出来事に対するアセスメント、学びまでわかりやすく表現できていたか。（5）	
		・家庭訪問記録：アセスメント、次回計画が適切か。（3）	
	健康教育（10）	・企画（大きなねらい、小さなねらい）は適切か。（3） ・媒体（みやすい、わかりやすい）は適切か。（3） ・発表（憶えている、わかりやすい）は適切か。（4）	
	ｶﾝﾌｧﾚﾝｽ資料（10）	・個別だけでなく、集団や地域全体にも視野を広げた内容となったか。（3）	
		・オリジナルの対策を計画として具体的に提案できたか。（3）	
		・データを適切に選び活用できたか。（2）	
		・テーマ～まとめ　までの一連に一貫性があるか。（2）	
市町　実習小計（45 点満点）			①
県	ﾐﾆｶﾝﾌｧﾚﾝｽ（5）	・テーマ設定ができたか。（2） ・議論として深まったか。（3）	
	記録（10）	・事前学習：法的根拠、対象者の把握、市町村データと全国データとの比較、実施上の留意点、発達課題まで網羅されているか。（2）	
		・目標：実習目標を絞って明確に表現したか。 ピラミッド：対策・施策・事業の関係が理解できたか。（3）	
		・学び：目標に対する学びとなっているか。 ・出来事、出来事に対するアセスメント、学びまでわかりやすく表現できていたか。（3）	
		・家庭訪問記録：アセスメント、次回計画が適切か。（2）	
	地域ｹｱｼｽﾃﾑ（15）	・企画（大きなねらい、小さなねらい）は適切か。（5） ・媒体（見やすい、分かりやすい）は適切か。（5） ・発表（憶えている、わかりやすい）、会の運営（ディスカッションへの参加、受け答え）は適切か。（5）	
県　実習小計（30 点満点）			②
総合	事前学習（5）	・空白なく記入できていたか。 ・誤字や間違いはないか。	
	出席	・1 日欠席につきマイナス 5 点、遅刻マイナス 3 点	
	実習態度（10）	・自発的に指導者や住民にかかわれていたか。（3）	
		・リーダーや司会進行等役割を果たしたか（連絡や相談はできたか）。 GW 等でメンバーの一員として発言等できたか。（3）	
		・実習の成果物作成に対する取り組み姿勢が熱心であったか。（3）	
		・発表資料やレポートなど期限を守って提出ができたか。（1）	
	実習ﾚﾎﾟｰﾄ（10）	・自身の言葉で表現したか。 ・行政保健師の役割に内容が絞れていたか。	
総合 小計（25 点満点）			③
合計点（100 点満点）①+②+③			

■ 臨地実習指導者と教員による総合評価

病棟等において学生を直接指導する実習指導者と看護学科教員の討議を踏まえて，学生の総合的評価を行っている。

（事務局資料）

【単位取得・成績・学位授与状況】

① 成績評価の明確化に取り組み，評価法をシラバスに明示するとともに（P4-72 **前掲資料 1-2-1-3**），平成 24 年度より４段階成績評価を秀，優，良，可，不可の５段階評価とした。さらに平成 28 年度より GPA 制度の導入を決定した。

② 成績評価基準及び成績判定会議の結果に基づき単位認定を行い，単位修得率はほぼ 100%，秀・優・良の判定が過半と学生は各科目において相応な学力や資質・能力を身に付けており，単位取得状況は第１期より向上した（**資料 2-1-1-6**）。

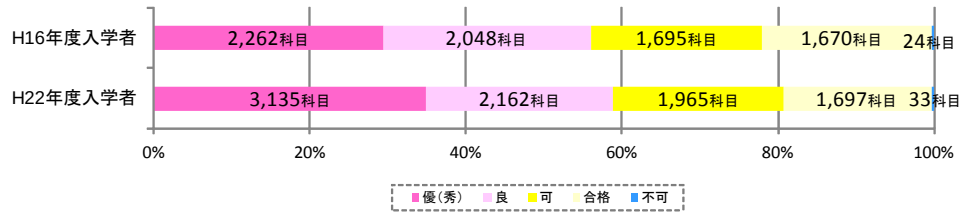
資料 2-1-1-6　学士課程における成績分布及び単位取得状況

第１期と第２期における学生の取得した単位の成績分布を比較すると，両学科とも優（秀）と評価される科目の割合が増加（医学科で 5.5%，看護学科で 1.9%）しており，また「合格」評価のみの科目を除いた「優（秀）・良・可・不可」と評価される科目の中で優（秀）または良と評価される割合は医学科では第１期 71.5%から第２期 72.6%，看護学科では第１期 83.2%から第２期 83.5%へと増加しており，各科目における教育効果が見られる。

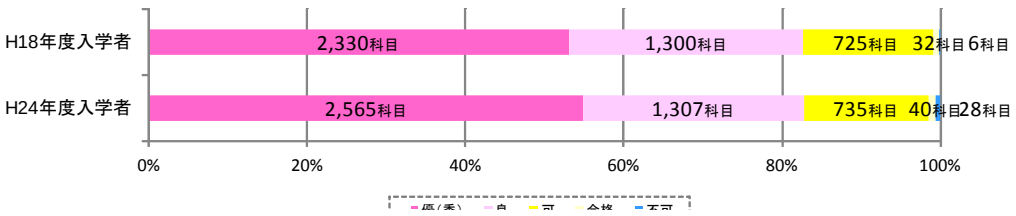
対象 ※1、※2			開講年度	成績評価 区分	優（秀） 100～80	良 79～70	可 69～60	合格 優良可の区別なし	不可 ※3 59以下	単位修得率
医学部	医学科	H16年度入学者（95名）	H16～21	共通教育	687科目	452科目	261科目	0科目	24科目	98.3%
				専門教育	1,575科目	1,596科目	1,434科目	1,670科目	0科目	100.0%
				（計）	（2,262科目）	（2,048科目）	（1,695科目）	（1,670科目）	（24科目）	99.7%
		H22年度入学者（110名）	H22～27	共通教育	829科目	505科目	301科目	18科目	18科目	98.9%
				専門教育	2,306科目	1,657科目	1,664科目	1,679科目	15科目	99.8%
				（計）	（3,135科目）	（2,162科目）	（1,965科目）	（1,697科目）	（33科目）	99.6%
	看護学科	H18年度入学者（60名）	H18～21	共通教育	272科目	276科目	119科目	0科目	0科目	100.0%
				専門教育	2,058科目	1,024科目	606科目	32科目	6科目	99.8%
				（計）	（2,330科目）	（1,300科目）	（725科目）	（32科目）	（6科目）	99.9%
		H24年度入学者（60名）	H24～27	共通教育	477科目	312科目	198科目	11科目	16科目	98.4%
				専門教育	2,088科目	995科目	537科目	29科目	12科目	99.7%
				（計）	（2,565科目）	（1,307科目）	（735科目）	（40科目）	（28科目）	99.4%

※1 留年者（医学科平成 16 年度入学者には８名の平成 22 年度まで，看護学科平成 18 年度入学者には１名の平成 22 年度までの成績評価）・退学者・除籍者を含む
※2 編入学者（医学科２年次後期，看護学科３年次）を除く
※3 不受科目を除く

■ 医学科成績分布（単位取得科目数）



■ 看護学科成績分布（単位取得科目数）



（事務局資料）

③　DP に基づいた厳格な成績評価基準や進級・卒業判定により，修業年限内で修了する学生は医学科で８割以上（**資料 2-1-1-7**），看護学科で９割以上である（**資料 2-1-1-8**）。

資料 2-1-1-7　入学者の進級・卒業状況（医学科）

医学科において第２期中に卒業した学生の 87.2%（学士編入以外の学生は 87.4%，学士編入生は 82.8%）は６年間で卒業としており，留年率は 12.8%である。

６年間で卒業したストレート卒学生は，医師国家試験の高い合格率 97.0%（93.4～100%）を達成している。

■ 医学科（前期・後期・推薦）

入学年度	卒業年度	入学者数	次年度への進級者数						うち国試合格者数	標準修業年限内卒(%)	ストレート卒の国試合格(%)	留年・退学率(%)
			1→2年次	2→3年次	3→4年次	4→5年次	5→6年次	6年次→卒業				
H16年度	H21年度	95名	92名	86名	85名	85名	85名	84名	81名	88.4%	96.4%	11.6%
H17年度	H22年度	95名	91名	85名	85名	85名	85名	84名	84名	88.4%	100.0%	11.6%
H18年度	H23年度	95名	90名	87名	86名	85名	84名	83名	81名	87.4%	97.6%	12.6%
H19年度	H24年度	95名	93名	88名	85名	85名	85名	83名	81名	87.4%	97.6%	12.6%
H20年度	H25年度	95名	92名	81名	81名	81名	81名	81名	78名	85.3%	96.3%	14.7%
H21年度	H26年度	105名	104名	99名	99名	98名	98名	98名	96名	93.3%	98.0%	6.7%
（計）		(580名)	(562名)	(526名)	(521名)	(519名)	(518名)	(513名)	(501名)	(88.4%)	(97.7%)	(11.6%)
（進級率）			(96.9%)	(90.7%)	(89.8%)	(89.5%)	(89.3%)	(88.4%)				
H22年度	H27年度	110名	108名	94名	91名	91名	91名	91名	85名	82.7%	93.4%	17.3%
H23年度	在学中	110名	109名	99名	98名	98名	97名					
H24年度	在学中	110名	107名	104名	103名	100名						
H25年度	在学中	110名	109名	97名	97名							
H26年度	在学中	110名	108名	101名								
H27年度	在学中	110名	109名									
（計）		(660名)	(650名)	(495名)	(389名)	(289名)	(188名)	(91名)	(85名)	(82.7%)	(93.4%)	(17.3%)
（進級率）			(98.5%)	(90.0%)	(88.4%)	(87.6%)	(85.5%)	(82.7%)				

…H16-21年度（第1期中）に進級・卒業判定を行った学年
…H22-27年度（第2期中）に　〃

■ 医学科（学士編入学）

入学年度	卒業年度	入学者数	次年度への進級者数						うち国試合格者数	標準修業年限内卒(%)	ストレート卒の国試合格(%)	留年・退学率(%)
			1→2年次	2→3年次	3→4年次	4→5年次	5→6年次	6年次→卒業				
H16年度	H20年度	5名		5名	5名	5名	5名	5名	5名	100.0%	100.0%	0.0%
H17年度	H21年度	4名		4名	4名	4名	4名	4名	4名	100.0%	100.0%	0.0%
H18年度	H22年度	5名	2年次	4名	4名	4名	4名	4名	4名	80.0%	100.0%	20.0%
H19年度	H23年度	5名	後期入学	5名	5名	5名	5名	5名	5名	100.0%	100.0%	0.0%
H20年度	H24年度	5名		4名	4名	4名	4名	4名	4名	80.0%	100.0%	20.0%
H21年度	H25年度	5名		3名	3名	3名	3名	3名	3名	60.0%	100.0%	40.0%
（計）		(29名)		(25名)	(25名)	(25名)	(25名)	(25名)	(20名)	(86.2%)	(80.0%)	(13.8%)
（進級率）				(83.3%)	(83.3%)	(83.3%)	(83.3%)	(83.3%)				
H22年度	H26年度	5名		5名	5名	5名	5名	5名	5名	100.0%	100.0%	0.0%
H23年度	H27年度	4名		4名	3名	3名	3名	3名	3名	75.0%	100.0%	25.0%
H24年度	在学中	5名	2年次	5名	5名	5名	5名					
H25年度	在学中	5名	後期入学	5名	5名	5名						
H26年度	在学中	4名		4名	4名							
H27年度	在学中	5名		5名								
（計）		(28名)		(28名)	(22名)	(18名)	(13名)	(8名)	(8名)	(88.9%)	(100.0%)	(11.1%)
（進級率）				(100.0%)	(95.7%)	(94.7%)	(92.9%)	(88.9%)				

…H16-21年度（第1期中）に進級・卒業判定を行った学年
…H22-27年度（第2期中）に　〃

（事務局資料）

資料 2-1-1-8　入学者の進級・卒業状況（看護学科）

看護学科において第２期中に卒業した学生の 94.0%（編入以外の学生は 93.6%，編入生は 97.6%）は４年間で卒業しており，留年率は 6.0%である。

４年間で卒業したストレート卒学生は，看護師国家試験の非常に高い合格率 99.4%を示している。

■ 看護学科（前期・後期・推薦）

入学年度	卒業年度	入学者数	次年度への進級者数				うち国試合格者数	標準修業年限内卒(%)	ストレート卒の国試合格(%)	留年・退学率(%)
			1→2年次	2→3年次	3→4年次	4年次→卒業				
H16年度	H19年度	60名	58名	57名	56名	56名	56名	93.3%	100.0%	6.7%
H17年度	H20年度	60名	57名	54名	53名	51名	49名	85.0%	96.1%	15.0%
H18年度	H21年度	60名	60名	59名	58名	56名	56名	93.3%	100.0%	6.7%
H19年度	H22年度	60名	59名	58名	58名	56名	56名	93.3%	100.0%	6.7%
H20年度	H23年度	60名	60名	57名	57名	57名	57名	95.0%	100.0%	5.0%
H21年度	H24年度	60名	58名	56名	53名	52名	52名	86.7%	100.0%	13.3%
（計）		（360名）	（352名）	（341名）	（335名）	（328名）	（326名）	（91.1%）	（99.4%）	（8.9%）
（進級率）			（97.8%）	（94.7%）	（93.1%）	（91.1%）				
H22年度	H25年度	60名	59名	58名	58名	58名	58名	96.7%	100.0%	3.3%
H23年度	H26年度	60名	60名	60名	58名	56名	55名	93.3%	98.2%	6.7%
H24年度	H27年度	60名	60名	58名	58名	58名	58名	96.7%	100.0%	3.3%
H25年度	在学中	60名	60名	59名	59名					
H26年度	在学中	60名	60名	57名						
H27年度	在学中	62名	62名							
（計）		（362名）	（361名）	（292名）	（233名）	（172名）	（171名）	（95.6%）	（99.4%）	（4.4%）
（進級率）			（99.7%）	（97.3%）	（97.1%）	（95.6%）				

…H16-21年度（第1期中）の進級学年
…H22-27年度（第2期中）の　〃

■ 看護学科（３年次編入学）

入学年度	卒業年度	入学者数	次年度への進級者数				うち国試合格者数	標準修業年限内卒(%)	ストレート卒の国試合格(%)	留年・退学率(%)
			1→2年次	2→3年次	3→4年次	4年次→卒業				
H16年度	H17年度	7名	3年次前期入学		7名	7名	入学時に資格有	100.0%	入学時に資格有	0.0%
H17年度	H18年度	8名			8名	8名		100.0%		0.0%
H18年度	H19年度	8名			8名	7名		87.5%		12.5%
H19年度	H20年度	10名			10名	10名		100.0%		0.0%
H20年度	H21年度	8名			8名	8名		100.0%		0.0%
H21年度	H22年度	10名			10名	10名		100.0%		0.0%
（計）		（51名）			（51名）	（50名）		（98.0%）		（2.0%）
（進級率）					（100.0%）	（97.2%）				
H22年度	H23年度	6名	3年次前期入学		6名	5名	入学時に資格有	83.3%	入学時に資格有	16.7%
H23年度	H24年度	9名			9名	9名		100.0%		0.0%
H24年度	H25年度	6名			6名	6名		100.0%		0.0%
H25年度	H26年度	10名			10名	10名		100.0%		0.0%
H26年度	H27年度	0名			0名	0名		－		－
H27年度	制度廃止									
（計）		（31名）			（31名）	（30名）		（96.8%）		（3.2%）
（進級率）					（100.0%）	（96.8%）				

…H16-21年度（第1期中）の進級学年
…H22-27年度（第2期中）の　〃

（事務局資料）

●資格取得状況，学外の試験の結果，学生が受けた様々な賞の状況からの学習成果の状況

【資格取得】

①　医師国家試験の合格率（全受験者）は，全国平均合格率を上回るあるいは同等であり，新卒者の合格率は常に90%以上，平均ではともに第１期を上回り、過半の学生が卒業時点で相応な学力や資質・能力を身につけたことの証左である（**資料 2-1-2-1**）。

資料 2-1-2-1　医師国家試験の合格率

医師国家試験合格率をみると第１期と比べて第２期中の平均合格率は全受験者（第１期 88.8%から第２期 91.9%）および新卒受験者（第１期 93.9%から第２期 95.4%）ともに高くなっており，全国平均を上回るあるいは同等であることから当該期間中の学生がより相応な能力を身につけている。

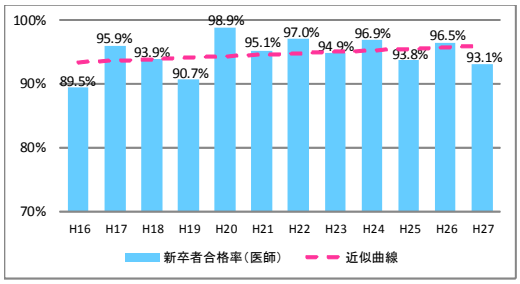
■ 受験状況（新卒・既卒別）

受験年度	回	新卒者			既卒者			合計			全国平均合格率
		受験者数	合格者数	合格率	受験者数	合格者数	合格率	受験者数	合格者数	合格率	
H16年度	第99回	95名	85名	89.5%	10名	2名	20.0%	105名	87名	82.9%	89.1%
H17年度	第100回	98名	94名	95.9%	15名	10名	66.7%	113名	104名	92.0%	90.0%
H18年度	第101回	114名	107名	93.9%	12名	6名	50.0%	126名	113名	89.7%	87.9%
H19年度	第102回	107名	97名	90.7%	12名	5名	41.7%	119名	102名	85.7%	90.6%
H20年度	第103回	88名	87名	98.9%	15名	8名	53.3%	103名	95名	92.2%	91.0%
H21年度	第104回	103名	98名	95.1%	8名	2名	25.0%	111名	100名	90.1%	89.2%
（計）		（605名）	（568名）	（93.9%）	（72名）	（33名）	（45.8%）	（677名）	（601名）	（88.8%）	
H22年度	第105回	101名	98名	97.0%	9名	5名	55.6%	110名	103名	93.6%	89.3%
H23年度	第106回	98名	93名	94.9%	7名	1名	14.3%	105名	94名	89.5%	90.2%
H24年度	第107回	97名	94名	96.9%	9名	5名	55.6%	106名	99名	93.4%	89.8%
H25年度	第108回	96名	90名	93.8%	8名	5名	62.5%	104名	95名	91.3%	90.6%
H26年度	第109回	113名	109名	96.5%	9名	5名	55.6%	122名	114名	93.4%	91.2%
H27年度	第110回	101名	94名	93.1%	8名	4名	50.0%	109名	98名	89.9%	91.5%
（計）		（606名）	（578名）	（95.4%）	（50名）	（25名）	（50.0%）	（656名）	（603名）	（91.9%）	

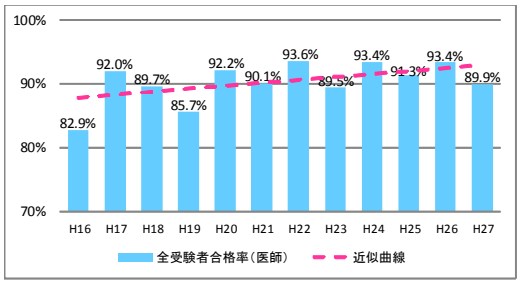
■ 合格率推移

第１期および第２期の合格率をもとに近似曲線を描くと，新卒受験者及び全受験者の合格率が上昇している。

【新卒のみ】



【新卒＋既卒】



（事務局資料）

② 看護師，保健師及び助産師国家試験の合格率において，常に全国平均合格率を上回り，平均すると第１期を上回り，学生が卒業時点で相応な学力や資質・能力を身につけたことの証左である（**資料 2-1-2-2～4**）。ほぼ全てにおいて合格率 100％であることは特筆できる。

資料 2-1-2-2　看護師国家試験の合格率

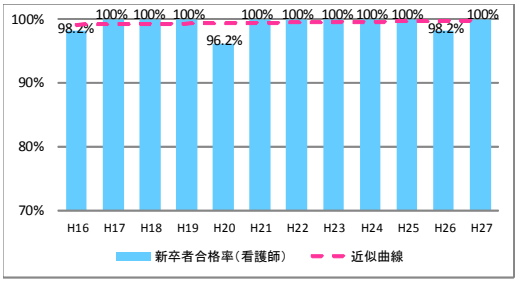
看護師国家試験合格率をみると第１期と比べて第２期中の平均合格率は高く（第１期 99.1％から第２期 99.4％），うち４回の合格率 100％と当該期間中の学生が十分な能力を身につけている。

■ 受験状況（新卒・既卒別）

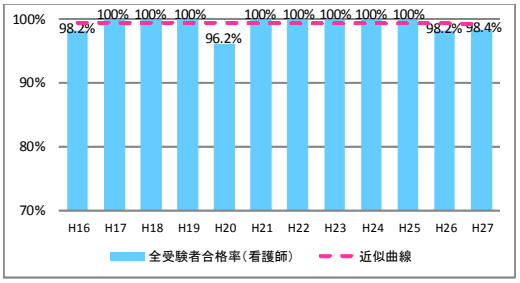
受験年度	回	新卒者			既卒者			合計			全国平均合格率
		受験者数	合格者数	合格率	受験者数	合格者数	合格率	受験者数	合格者数	合格率	
H16年度	第94回	55名	54名	98.2%	2名	2名	100.0%	57名	56名	98.2%	91.4%
H17年度	第95回	56名	56名	100.0%	1名	1名	100.0%	57名	57名	100.0%	88.3%
H18年度	第96回	56名	56名	100.0%	0名	0名	ー	56名	56名	100.0%	90.6%
H19年度	第97回	58名	58名	100.0%	2名	2名	100.0%	60名	60名	100.0%	90.3%
H20年度	第98回	52名	50名	96.2%	0名	0名	ー	52名	50名	96.2%	89.9%
H21年度	第99回	56名	56名	100.0%	2名	2名	100.0%	58名	58名	100.0%	89.5%
（計）		(333名)	(330名)	(99.1%)	(7名)	(7名)	(100.0%)	(340名)	(337名)	(99.1%)	
H22年度	第100回	56名	56名	100.0%	1名	1名	100.0%	57名	57名	100.0%	91.8%
H23年度	第101回	59名	59名	100.0%	1名	1名	100.0%	60名	60名	100.0%	90.1%
H24年度	第102回	52名	52名	100.0%	0名	0名	ー	52名	52名	100.0%	88.8%
H25年度	第103回	59名	59名	100.0%	0名	0名	ー	59名	59名	100.0%	89.8%
H26年度	第104回	57名	56名	98.2%	0名	0名	ー	57名	56名	98.2%	90.0%
H27年度	第105回	61名	61名	100.0%	1名	0名	0.0%	62名	61名	98.4%	89.4%
（計）		(344名)	(343名)	(99.7%)	(3名)	(2名)	(66.7%)	(347名)	(345名)	(99.4%)	

■ 合格率推移

【新卒のみ】



【新卒＋既卒】



（事務局資料）

資料 2-1-2-3　保健師国家試験の合格率

保健師国家試験合格率をみると第１期と比べて第２期中の平均合格率は高く（第１期 93.3%から第２期 98.3%），また平成 24 年以降では全ての受験者が合格していることから当該期間中の学生が十分な能力を身につけている。

■ 受験状況（新卒・既卒別）

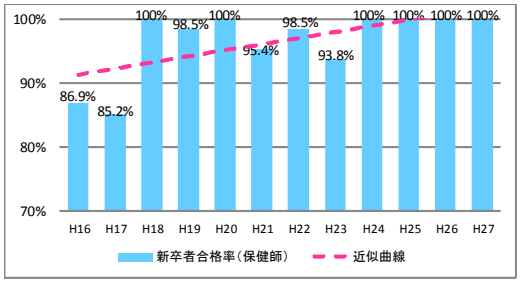
受験年度	回	新卒者			既卒者			合計			全国平均合格率
		受験者数	合格者数	合格率	受験者数	合格者数	合格率	受験者数	合格者数	合格率	
H16年度	第91回	61名	53名	86.9%	3名	0名	0.0%	64名	53名	82.8%	81.5%
H17年度	第92回	61名	52名	85.2%	9名	8名	88.9%	70名	60名	85.7%	78.7%
H18年度	第93回	64名	64名	100.0%	8名	7名	87.5%	72名	71名	98.6%	99.0%
H19年度	第94回	65名	64名	98.5%	1名	1名	100.0%	66名	65名	98.5%	91.1%
H20年度	第95回	62名	62名	100.0%	1名	1名	100.0%	63名	63名	100.0%	97.7%
H21年度	第96回	65名	62名	95.4%	1名	0名	0.0%	66名	62名	93.9%	86.6%
（計）		(378名)	(357名)	(94.4%)	(23名)	(17名)	(73.9%)	(401名)	(374名)	(93.3%)	
H22年度	第97回	66名	65名	98.5%	2名	1名	50.0%	68名	66名	97.1%	86.3%
H23年度	第98回	64名	60名	93.8%	1名	1名	100.0%	65名	61名	93.8%	86.0%
H24年度	第99回	62名	62名	100.0%	0名	0名	－	62名	62名	100.0%	96.0%
H25年度	第100回	65名	65名	100.0%	0名	0名	－	65名	65名	100.0%	86.5%
H26年度	第101回	67名	67名	100.0%	0名	0名	－	67名	67名	100.0%	99.4%
H27年度	第102回	28名	28名	100.0%	0名	0名	－	28名	28名	100.0%	89.8%
（計）		(352名)	(347名)	(98.6%)	(3名)	(2名)	(66.7%)	(355名)	(349名)	(98.3%)	

※ 平成 27 年度卒業者（平成 24 年度入学者）より，保健師国家試験受験資格取得に必要な科目を選択化している

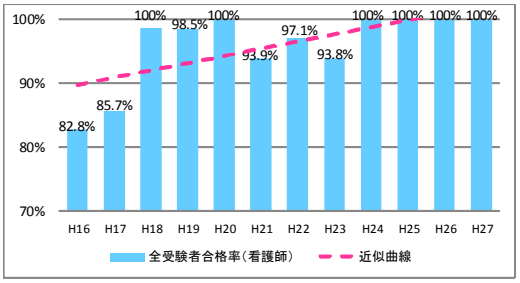
■ 合格率推移

第１期および第２期の合格率をもとに近似曲線を描くと，新卒受験者及び全受験者の合格率が上昇している。

【新卒のみ】



【新卒＋既卒】



（事務局資料）

資料 2-1-2-4　助産師国家試験の合格率

助産師国家試験合格率をみると第２期中の受験者は全員合格しており，学生は十分な能力を身につけている。

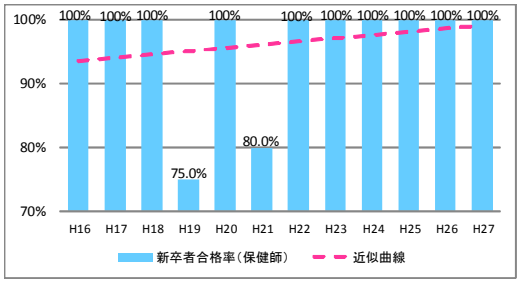
■ 受験状況（新卒・既卒別）

受験年度	回	新卒者			既卒者			合計			全国平均合格率
		受験者数	合格者数	合格率	受験者数	合格者数	合格率	受験者数	合格者数	合格率	
H16年度	第88回	4名	4名	100.0%	0名	0名	―	4名	4名	100.0%	99.7%
H17年度	第89回	3名	3名	100.0%	0名	0名	―	3名	3名	100.0%	98.1%
H18年度	第90回	3名	3名	100.0%	0名	0名	―	3名	3名	100.0%	94.3%
H19年度	第91回	4名	3名	75.0%	0名	0名	―	4名	3名	75.0%	98.1%
H20年度	第92回	2名	2名	100.0%	1名	1名	100.0%	3名	3名	100.0%	99.9%
H21年度	第93回	5名	4名	80.0%	0名	0名	―	5名	4名	80.0%	83.1%
（計）		(21名)	(19名)	(90.5%)	(1名)	(1名)	(100.0%)	(22名)	(20名)	(90.9%)	
H22年度	第94回	4名	4名	100.0%	1名	1名	100.0%	5名	5名	100.0%	97.2%
H23年度	第95回	4名	4名	100.0%	0名	0名	―	4名	4名	100.0%	95.0%
H24年度	第96回	5名	5名	100.0%	0名	0名	―	5名	5名	100.0%	98.1%
H25年度	第97回	6名	6名	100.0%	0名	0名	―	6名	6名	100.0%	96.9%
H26年度	第98回	5名	5名	100.0%	0名	0名	―	5名	5名	100.0%	99.9%
H27年度	第99回	6名	6名	100.0%	0名	0名	―	6名	6名	100.0%	99.8%
（計）		(30名)	(30名)	(100.0%)	(1名)	(1名)	(100.0%)	(31名)	(31名)	(100.0%)	

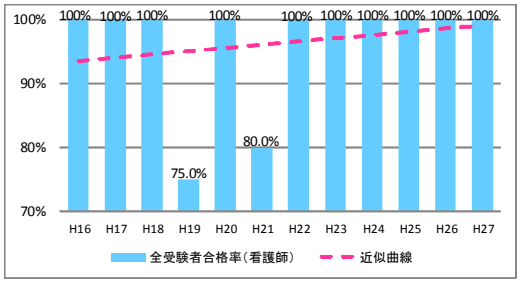
■ 合格率推移

第１期および第２期の合格率をもとに近似曲線を描くと，新卒受験者及び全受験者の合格率が上昇している。

【新卒のみ】



【新卒＋既卒】



（事務局資料）

【共用試験】

医学科において，CBT 及び OSCE の成績は全国平均を概ね上回り，学生が臨床実習前教育課程修了時に本邦で求められる相当な学力や資質・能力を身に付けたことの証左である（**資料 2-1-2-5，6**）。

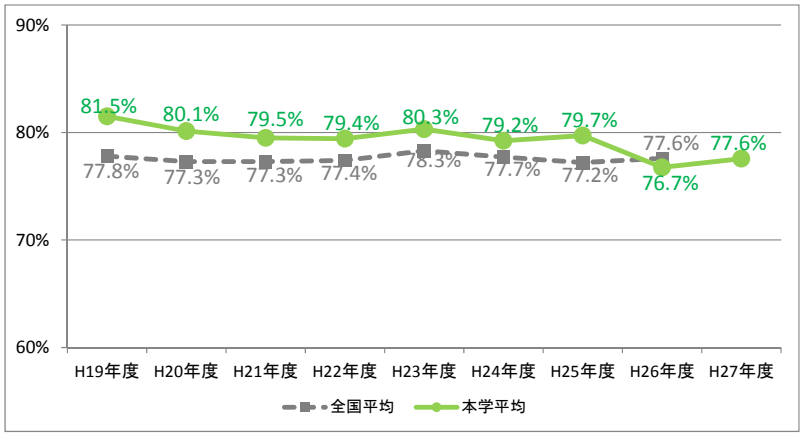
資料 2-1-2-5　医学科 CBT の得点状況

CBT の合格基準は「IRT 標準スコア 359 以上」（平成 26 年度までは 43 以上）と全国標準を設定している。本学での成績はほぼ全国平均を上回り，これまでに不合格となり進級できなかったものは３名である。

■ 年度別・問題タイプ別正答率

主な入学年度	CBT受験年度		IRT標準スコア※	全体	問題タイプ別正答率							
					五肢択一						多選択肢	順次回答4連問
					コアカリA	コアカリB	コアカリC	コアカリD	コアカリE	コアカリF		
H16年度	H19年度	本学平均	60.7	81.5%	89.5%	80.1%	83.2%	81.6%	75.5%	73.8%	90.2%	76.2%
		（全国平均）	(56.9)	(77.8%)	(87.4%)	(75.5%)	(78.2%)	(78.7%)	(73.3%)	(74.2%)	(86.6%)	(71.9%)
H17年度	H20年度	本学平均	62.3	80.1%	84.8%	77.2%	82.1%	81.7%	79.2%	75.3%	87.1%	72.2%
		（全国平均）	(59.2)	(77.3%)	(84.8%)	(74.8%)	(78.5%)	(79.3%)	(74.9%)	(75.0%)	(84.6%)	(67.9%)
H18年度	H21年度	本学平均	61.1	79.5%	89.3%	74.9%	81.3%	81.4%	76.9%	75.6%	86.4%	72.6%
		（全国平均）	(59.2)	(77.3%)	(88.3%)	(74.4%)	(78.6%)	(78.7%)	(73.8%)	(75.4%)	(84.3%)	(69.5%)
H19年度	H22年度	本学平均	60.6	79.4%	88.9%	76.6%	80.6%	80.2%	80.3%	76.5%	85.3%	71.8%
		（全国平均）	(58.9)	(77.4%)	(88.8%)	(74.4%)	(78.5%)	(78.7%)	(77.7%)	(76.0%)	(83.0%)	(69.0%)
H20年度	H23年度	本学平均	61.2	80.3%	86.5%	76.8%	81.8%	81.4%	78.8%	79.6%	87.5%	72.3%
		（全国平均）	(58.9)	(78.3%)	(86.4%)	(75.4%)	(79.2%)	(79.4%)	(76.9%)	(79.1%)	(84.2%)	(70.2%)
H21年度	H24年度	本学平均	60.9	79.2%	85.5%	75.9%	80.3%	81.0%	75.7%	76.2%	87.8%	72.2%
		（全国平均）	(58.9)	(77.7%)	(86.2%)	(74.6%)	(78.6%)	(79.7%)	(75.7%)	(76.4%)	(85.0%)	(69.2%)
H22年度	H25年度	本学平均	61.9	79.7%	85.3%	76.0%	81.6%	80.9%	74.2%	77.0%	87.6%	73.6%
		（全国平均）	(59.0)	(77.2%)	(85.2%)	(73.8%)	(78.2%)	(79.0%)	(75.1%)	(76.5%)	(84.2%)	(69.4%)
H23年度	H26年度	本学平均	58.1	76.7%	87.0%	73.7%	79.3%	77.1%	71.9%	73.0%	84.0%	68.9%
		（全国平均）	(59.5)	(77.6%)	(85.1%)	(74.5%)	(78.8%)	(79.3%)	(75.9%)	(76.3%)	(84.4%)	(69.1%)
H24年度	H27年度	本学平均	504.5	77.6%	85.5%	73.3%	73.9%	78.6%	78.7%	75.8%	84.8%	72.2%
		（全国平均）	未公表									

■ 正答率の推移



■ CBT 合格基準（共用試験の合格基準に関する申合せ）（抜粋）

(1) 共用試験 CBT は，実施評価機構で採点された IRT 標準スコア 359 以上を取得すること。

(2) 病気その他やむを得ない理由により共用試験 CBT を受験できなかった者は「追試験」を，本試験において IRT 標準スコア 359 未満の者で希望する者は「再試験」を受験することができる。

(3) 上記(1)及び(2)により合格した者で，４年次履修科目に不合格科目があり留年した場合は，次年度の共用試験 CBT を受験し，合格しなければならない。

（事務局資料）

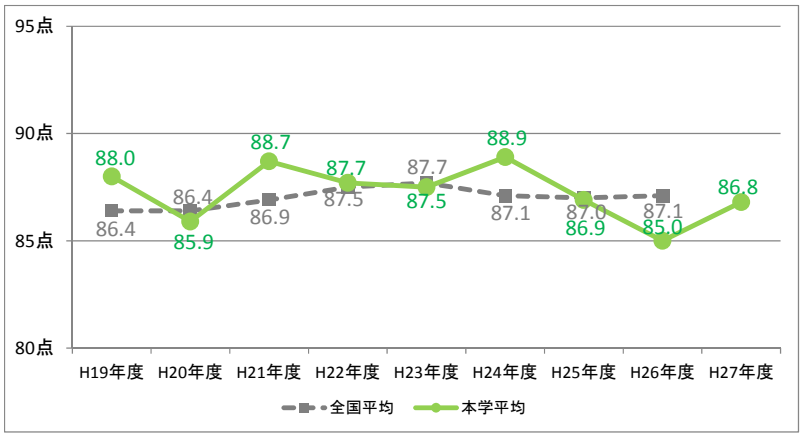
資料 2-1-2-6　医学科 OSCE の得点状況

OSCE の成績はほぼ全国平均と同程度であり，これまで全員が本学の合格基準に達している。

■ 年度別・診察区分別平均点

主な入学年度	OSCE受験年度		全体	診察区分（ステーション）別平均点 医療面接	頭頸部診察	胸部診察	バイタルサイン	腹部診察	神経診察	基本的手技	救急
H16年度	H19年度	本学平均	88.0点	85.1点	86.6点	86.3点	―	85.8点	90.1点	―	94.2点
		（全国平均）	(86.4点)	(80.7点)	(86.6点)	(87.2点)	(86.6点)	(87.6点)	(89.3点)	(82.8点)	(81.7点)
H17年度	H20年度	本学平均	85.9点	84.2点	85.2点	89.8点	―	85.8点	75.3点	―	94.9点
		（全国平均）	(86.4点)	(79.8点)	(87.8点)	(88.8点)	(86.4点)	(87.2点)	(87.1点)	(83.6点)	(92.1点)
H18年度	H21年度	本学平均	88.7点	82.9点	93.6点	90.9点	―	84.9点	89.1点	―	91.0点
		（全国平均）	(86.9点)	(80.7点)	(88.5点)	(89.6点)	(87.0点)	(87.1点)	(87.2点)	(84.5点)	(92.4点)
H19年度	H22年度	本学平均	87.7点	84.2点	85.7点	84.4点	―	90.2点	87.6点	―	94.2点
		（全国平均）	(87.5点)	(81.3点)	(87.9点)	(89.6点)	(87.1点)	(88.6点)	(89.6点)	(84.7点)	(92.3点)
H20年度	H23年度	本学平均	87.5点	85.8点	89.3点	85.7点	―	88.9点	88.4点	―	86.8点
		（全国平均）	(87.7点)	(81.8点)	(88.1点)	(89.4点)	(87.7点)	(89.0点)	(88.8点)	(84.4点)	(93.2点)
H21年度	H24年度	本学平均	88.9点	84.4点	91.2点	87.0点	―	89.8点	88.9点	―	92.1点
		（全国平均）	(87.1点)	(81.2点)	(89.0点)	(87.4点)	(85.7点)	(89.4点)	(86.6点)	(84.4点)	(94.0点)
H22年度	H25年度	本学平均	86.9点	79.3点	92.5点	―	81.5点	87.3点	87.4点	―	93.6点
		（全国平均）	(87.0点)	(81.5点)	(88.8点)	(87.4点)	(84.6点)	(88.8点)	(87.2点)	(84.5点)	(93.7点)
H23年度	H26年度	本学平均	85.0点	76.9点	88.0点	82.6点	―	83.3点	87.9点	―	91.3点
		（全国平均）	(87.1点)	(81.3点)	(89.4点)	(87.6点)	(85.3点)	(89.1点)	(87.1点)	(83.9点)	(94.1点)
H24年度	H27年度	本学平均	86.8点	80.1点	89.1点	87.9点	―	84.4点	85.5点	―	93.9点
		（全国平均）	未公表								

■ 平均点の推移



■ OSCE 合格基準（共用試験の合格基準に関する申合せ）（抜粋）

(1) 共用試験 OSCE は，「基本的診療技能」の成績として扱う。

(2) 共用試験 OSCE の成績を，100 点満点に換算し，60 点以上を取得すること。

(3)「再試験」は，原則として実施しない。

(4) 病気その他やむを得ない事由により共用試験 OSCE を受験できなかった者は「追試験」を受験することができる。

(5) 上記(2)及び(4)により合格した者で，４年次履修科目に不合格科目があり留年した場合は，次年度以降の共用試験 OSCE を受験し，合格しなければならない。

（事務局資料）

【学生の研究実績】

研究室配属や卒業研究において得られた研究成果は適宜学会や学術雑誌等で公表している（**資料 2-1-2-7**）。

資料 2-1-2-7　学生の研究成果

■ 論文発表

学科等	講座等	内容 ※ 赤字は医学部生を示す
医学科	分子生体情報学	Yazawa, T., Kawabe, S., Inaoka, Y., Okada, R., Mizutani, T., Imamichi, Y., Ju, Y., Yamazaki, Y., Usami, Y., *Kuribayashi, M*., Umezawa, A., Miyamoto, K.: Differentiation of mesenchymal stem cells and embryonic stem cells into steroidogenic cells using steroidogenic factor-1 and liver receptor homolog-1. Mol. Cell. Endocrinol. 336, 127-132, 2011.
		Yazawa, T., Kawabe, S., Kanno, M., Mizutani, T., Imamichi, Y., Ju, Y., Matsumura, T., Yamazaki, Y., Usami, Y., *Kuribayashi, M*., Shimada, M., Kitano, T., Umezawa, A., Miyamoto, K. : Androgen/Androgen receptor pathway regulates expression of the genes for cyclooxygenase-2 and amphiregulin in periovulatory granulosa cells. Molecular and Cellular Endocrinology 369, 42-51, 2013. DOI:10.1016/j.mce.2013.02.004
		Mizutani, T., Ju, Y., Imamichi, Y., Osaki, T., Yazawa, T., Kawabe, S., Ishikane, S., Matsumura, T., Kanno, M., *Kamiki, Y*., *Kimura, K*., Minamino, N., Miyamoto, K.: C/EBPβ (CCAAT/enhancer-binding protein β) mediates progesterone production through transcriptional regulation in co-operation with SF-1 (steroidogenic factor-1). Biochem. J. 460,459-471, 2014. DOI:10.1042/BJ20131522
	脳脊髄神経外科学	Measurement and cellular sources of the soluble interleukin-2 receptor in primary central nervous system lymphoma. Kitai R, *Sasaki H*, Matsuda K, Tsunetoshi K, Yamauchi T, Neishi H, Matsumura K, Tsunoda A, Takeuchi H, Sato K, Kikuta K. Brain Tumor Pathol. 2013 Jan;30(1):34-9. doi: 10.1007/s10014-012-0093-1. Epub 2012 Mar 8.
子どものこころの発達研究センター		Shiro Tochitani, *Takahiro Ikeno*, *Tatsuhito Ito*, *Asuka Sakurai*, *Tomoki Yamauchi*, Hideo Matsuzaki Administration of Non-Absorbable Antibiotics to Pregnant Mice to Perturb the Maternal Gut Microbiota Is Associated with Iterations in Offspring Behavior. PLoS One. <http://www.ncbi.nlm.nih.gov/pubmed/26789865> 1(1):e0138293. 2016年1月21日

■ 学会発表

学科等	講座等	内容 ※ 赤字は医学部生を示す
医学科	分子生体情報学	水谷哲也, 具 云峰, 今道力敬, 松村健大, 矢澤隆志, 河邉真也, 菅野真史, 松浦かおる, *上木康衣*, 梅澤明弘, 尾崎 司, 南野直人, 宮本 薫：SF-1によるクロマチン構造変換を介した新たな転写調節機構. 第84回日本内分泌学会学術集会. 2011, 4, 21-23, 神戸. 日本内分泌学会雑誌. 87(1), 282, 2011.
		水谷哲也, 具 云峰, 今道力敬, 松村健大, 矢澤隆志, 河邉真也, 菅野真史, 松浦かおる, *上木康衣*, 梅澤明弘, 尾崎 司, 南野直人, 宮本 薫：SF-1複合体C/EBPβによるHSD3B2の転写調節機構の解明. 第85回日本内分泌学会学術総会. 2012,4,19-21, 愛知. 日本内分泌学会雑誌 88(1),309,2012.
	内科学（2）	発表者：*佐々木 宏仁*, 濱野 忠則, 白藤 法道, 石田 智恵美, 岸谷 融, Yen S-H, 米田 誠, 栗山 勝, 中本 安成 発表タイトル：ドネペジルのタウ蛋白リン酸化に及ぼす影響　ー細胞モデルを用いた検討ー 発表学会：第54回日本神経化学会大会 発表年月日等：2011.9.26講演（口演）国内学会(全国レベル)
		発表者：*佐々木 宏仁*, 濱野 忠則, 白藤 法道, 上野 亜佐子, 石田 愛子, Shu-Hui Yen, 林 浩嗣, 山村 修, 栗山 勝, 中本 安成 発表タイトル：塩酸ドネペジルのタウ蛋白リン酸化におよぼす影響 発表学会：第33回日本神経治療学会総会 発表年月日等：2015.11.28　一般講演（ポスター）国内学会(全国レベル)
	脳脊髄神経外科学	抗生剤含有フィブリングルーについての基礎研究 福井大学 脳脊髄神経外科（医学部学生基礎配属プロジェクト） *楠 誓子*、*渡辺由佳* 荒井大志、山田真輔、多田愛弓、根石拡行、常俊顕三、磯崎 誠、有島英孝、小寺俊昭、北井隆平、竹内浩明、菊田健一郎 北陸間脳下垂体腫瘍研究会2012年、夏
		本邦健常老年者におけるEvans indexの年齢別推移 福井大学医学部 脳脊髄神経外科 *江森功一*、北井隆平、五十嵐篤、杉戸悠紀、菊田健一郎 日本正常圧水頭症学会、2014年 大阪
看護学科	母子看護学・助産学（卒後発表）	発表者：*下村房代*、*渡辺暁子* 演題名：3人目以上の子どもを妊娠中の高年経産婦における心身の負担と支援のあり方 学会名：第24回福井県母性衛生学会学術集会 発表年月：2011.06.19
		発表者：*黒川明可*、*林田真由美* 演題名：4人目の子どもを育児中の母親における現状と課題 学会名：第24回福井県母性衛生学会学術集会 発表年月：2011.06.19
		発表者：*久保田遥香* 演題名：看護系と教育系女子大生における子宮頸がん検診・HPVワクチンの接種に関する実態と認識 学会名：第24回福井県母性衛生学会学術集会 発表年月：2011.06.19
		発表者：*古屋汐梨* 演題名：HPVワクチン接種対象の娘を持つ母親の子宮頸がん検診及びワクチン接種に関する認識 学会名：第25回福井県母性衛生学会学術集会 発表年月：2011.06.19
		発表者：*久保田遥香* 演題名：Implementation and Evaluation of a Cervical and Breast Cancer Awareness Education Program for Non-Medical Female University Students 学会名：ICOWHI 19th International Congress on "Women's Health 発表年月：2012. 11 Thailand
		発表者：*田邉奈緒子*、*羽柴あぐり* 演題名：看護系女子大生の子宮頸がん予防行動および母親との会話の実態 学会名：第26回福井県母性衛生学会学術集会 発表年月：2013. 06.23
		発表者：*吉田仁美*、*堂埜未紗*、*岩田紗希*、*大竹口友香*、*谷口日香留* 演題名：経口避妊薬におけるピア・エデュケーションの効果に関する研究 学会名：第26回福井県母性衛生学会学術集会 発表年月：2013. 06.23
		発表者：*木下奈都美*、*大坂美菜* 演題名：女子大学生の初めての子宮頸部がん検診受診過程における体験 学会名：第27回福井県母性衛生学会学術集会 発表年月：2014. 06.22
		発表者：*林希*、*西畑恵莉加*、*寺井里奈*、*額見紘子*、*廣瀬千夏*、*野坂亜莉沙* 演題名：ファティリティ・アウェアネス教育プログラム効果の検討 学会名：第27回福井県母性衛生学会学術集会 発表年月：2014. 06.22
		発表者：*清水朋佳*、*山田祐規子*、*小谷奈緒佳*、*栗本ちほ*、*斎藤みか*、*中川知香* 演題名：看護系大学生に対する男女の付き合い方と性意識に関する健康教育プログラムの効果 学会名：第28回福井県母性衛生学会学術集会 発表年月：2015. 06.21
		発表者：*岩崎菜穂* 演題名：乳幼児との触れ合いが中学生の意識にもたらす効果についての検討 学会名：第28回福井県母性衛生学会学術集会 発表年月：2015. 06.21

（事務局資料）

●学生の成果の達成度や満足度に関する学生アンケート等の調査結果とその分析結果

【学生アンケートの内容】

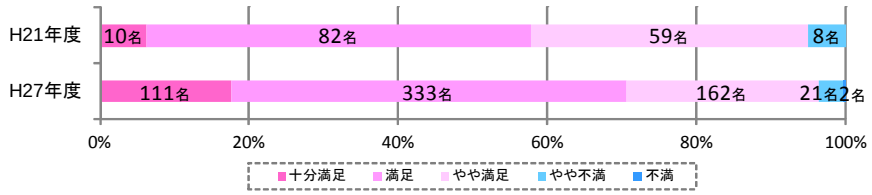
①　学生の成果についての各種アンケート調査を，医学部独自及び大学全体として行い，その回収率は概ね高く（P4-58 **前掲資料 1-1-5-4**），学生の声を聴取できている。第１期調査と比較すると多数の項目において満足度や能力の上昇が見られ，教育の成果が上がっている(**資料 2-1-3-1**)。

資料 2-1-3-1　医学部教育に対する学生の満足度

平成 21 年度及び平成 27 年度に実施した「教育・研究に対する意識・満足度調査」について，医学部学生（医学科・看護学科学生全体）の結果を取りまとめ比較した。

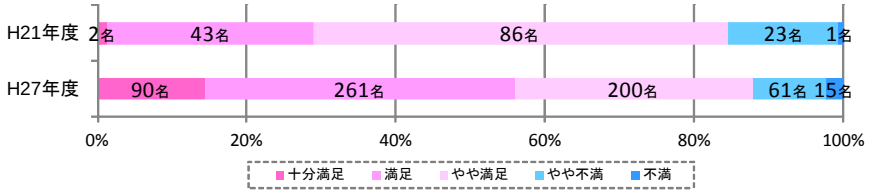
「教育全般」及び「教養・専門教育」において満足している割合は増加し，「基礎学力・専門知識技能・実践能力・考える力」が身についたとするものは非常に多い。「ディスカッション・ディベート力」「社会等の変化への対応する力」が身についたとするものも多く，「他学生と協調する力」はほとんどの学生が身につけたとしている。「外国語でのコミュニケーション力・想像力」は「十分～ある程度身についた」とするものの割合が第１期より 27.9%増加している。

設問_教育全般について，あなたはどの程度満足していますか



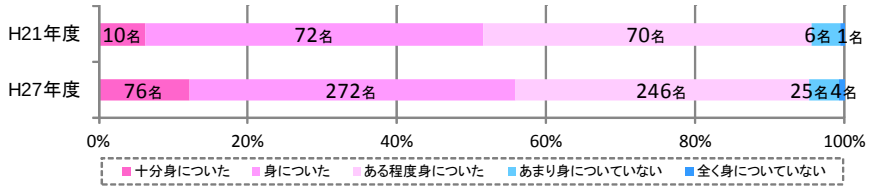
＊ 第１期末と比較して，第２期末では学生の評価（十分満足～やや満足とした割合）は，1.3%向上している。

設問_幅広い教養を身につけられる教育について，あなたはどの程度満足していますか



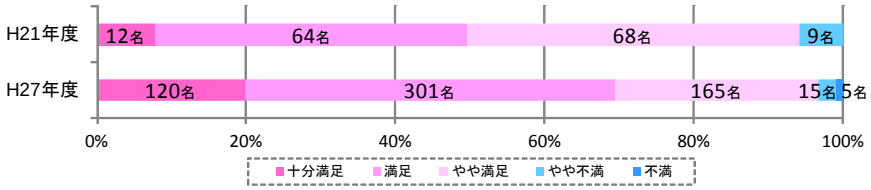
＊ 第１期末と比較して，第２期末では学生の評価（十分満足～やや満足とした割合）は，3.4%向上している。

設問_基礎学力がどの程度身についた（あるいは身につく）と思いますか



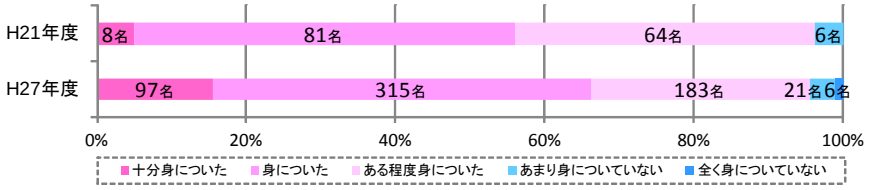
＊ 第１期末と比較して，第２期末では学生の評価（十分～ある程度身についたとした割合）は，0.3%減であるが，全体として身についたと考えるものは 95.3%と大多数を占める。

設問_専門の教育全般について，あなたはどの程度満足していますか



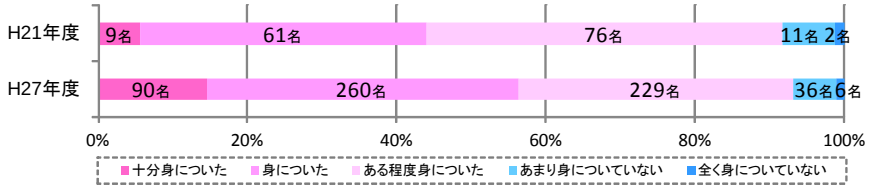
＊ 第１期末と比較して，第２期末では学生の評価（十分満足～やや満足とした割合）は，2.6%向上している。

設問_専門知識や技能がどの程度身についた（あるいは身につく）と思いますか



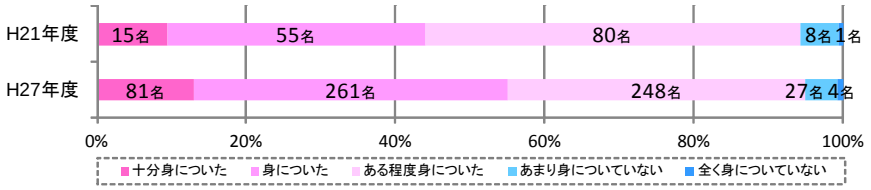
＊ 第１期末と比較して，第２期末では学生の評価（十分～ある程度身についたとした割合）は，0.5%減であるが，全体として身についたと考えるものは 95.7%と大多数を占める。

設問_実践的な能力がどの程度身についた（あるいは身につく）と思いますか



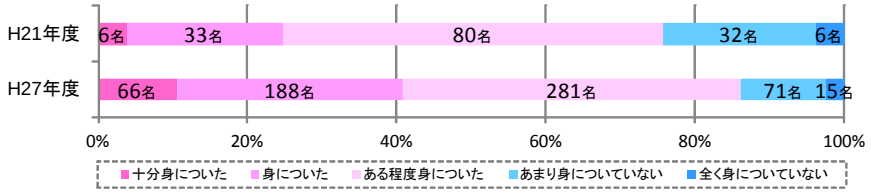
＊ 第１期末と比較して，第２期末では学生の評価（十分～ある程度身についたとした割合）は，1.4%向上している。

設問_論理や証拠を重視し，それらに基づいて考える力がどの程度身についた（あるいは身につく）と思いますか



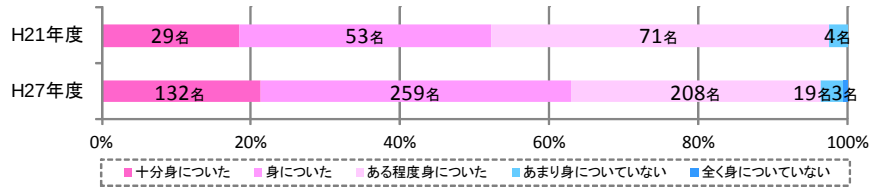
＊ 第１期末と比較して，第２期末では学生の評価（十分～ある程度身についたとした割合）は，0.7%向上している。

設問_ディスカッションやディベートをする力がどの程度身についた（あるいは身につく）と思いますか



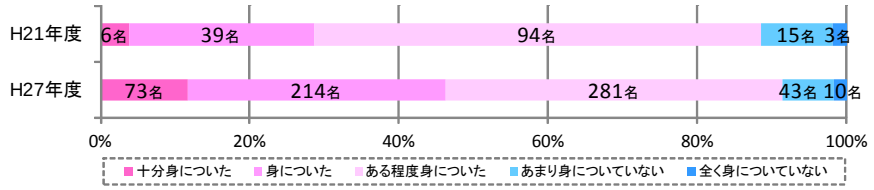
＊ 第１期末と比較して，第２期末では学生の評価（十分～ある程度身についたとした割合）は，10.4%向上している。

設問_他の学生と協調する力がどの程度身についた（あるいは身につく）と思いますか



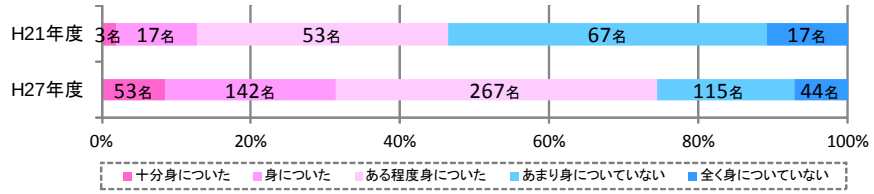
＊ 第１期末と比較して，第２期末では学生の評価（十分～ある程度身についたとした割合）は，1.0%減少しているが，全体として身についたと考えるものは 96.5%と大多数を占める。

設問_社会や技術の変化に対応する力がどの程度身についた（あるいは身につく）と思いますか



＊ 第１期末と比較して，第２期末では学生の評価（十分～ある程度身についたとした割合）は，2.9%向上している。

設問_外国語でコミュニケーションをする力，豊かな想像力がどの程度身についた（あるいは身につく）と思いますか



＊ 第１期末と比較して，第２期末では学生の評価（十分～ある程度身についたとした割合）は，27.9%と大きく向上している。

（平成 21 年度および平成 27 年度「教育・研究に対する意識・満足度調査」結果より抜粋）

② 医学科学生への意見聴取の結果，教育目標に関して修得が「できる／できた」と回答した学生は過半でありかつ高学年ほどその割合が高く，これは学生が相応な学力や資質･能力を身につけ，学業の成果に概ね満足していることの証左である（**資料 2-1-3-2**）。

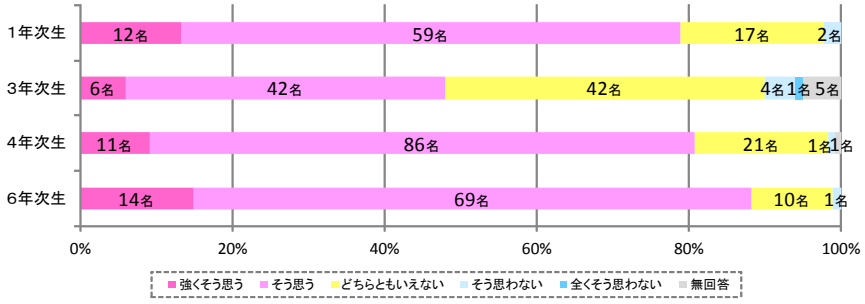
資料 2-1-3-2　教育目標に対する学生の評価（医学科）

医学科において達成しようとする基本的な成果である，医学知識，臨床能力，コミュニケーション能力，高い倫理観，学ぶ習慣，根拠に立脚した臨床能力の取得についてアンケート調査を行ったところ，過半の学生が肯定的な回答を行っている。３年次生は肯定的回答が他学年より少ないが４年，６年次生になると肯定的回答が増加しており，本学の教育が特に高学年においてより高い成果を上げている証左である。

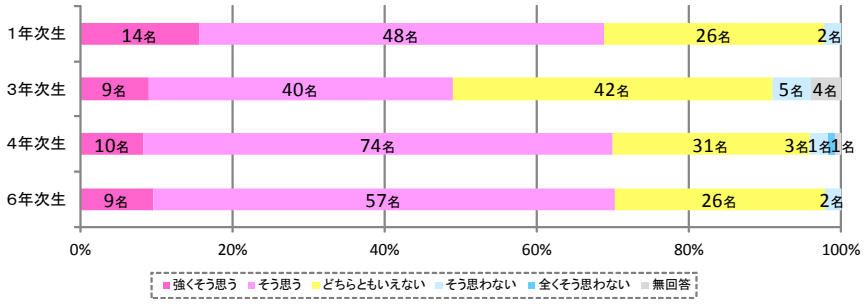
設問_医学科では，①幅広い医学知識を持ち，質の高い臨床能力を身に付け，②コミュニケーション能力に優れ，高い倫理観をもって患者中心の医療を実践でき，③日々進歩する医学知識・医療技術を生涯にわたり学ぶ習慣を身につけ，根拠に立脚した医療を実践できる医療人を育成し，④世界をリードする生命科学研究者や医学教育者となりうる人や，⑤個人と地域・国際社会の健康増進と疾病の予防・根絶に寄与し，国際的な視野でまたは地域に根ざした活動ができる人を育成することを教育目標としています。

そこで，これまでのカリキュラムの履修状況から考えて，今後のカリキュラムを適切に履修すればこれらに対応した以下の事項が卒業時に修得できる（６年次…できた）と思いますか？

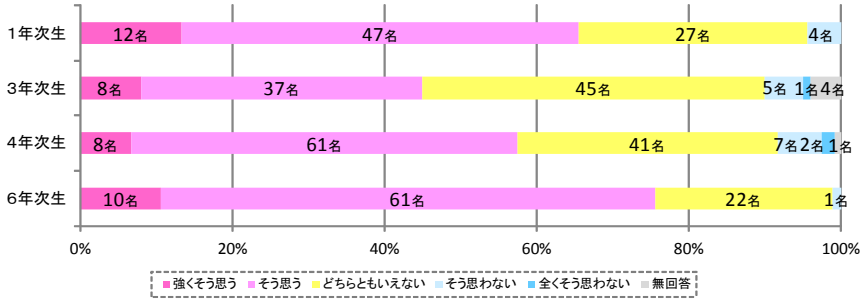
■ 医学知識



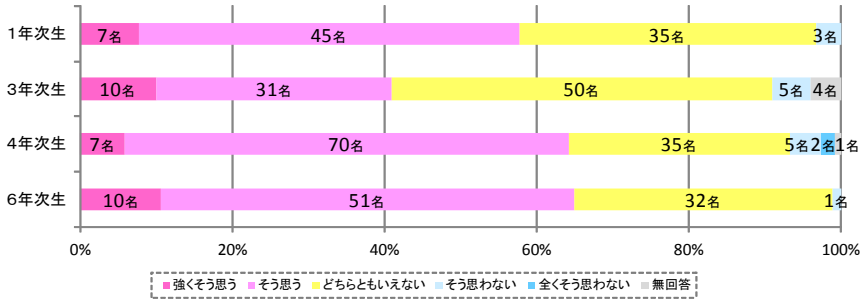
■ 臨床能力



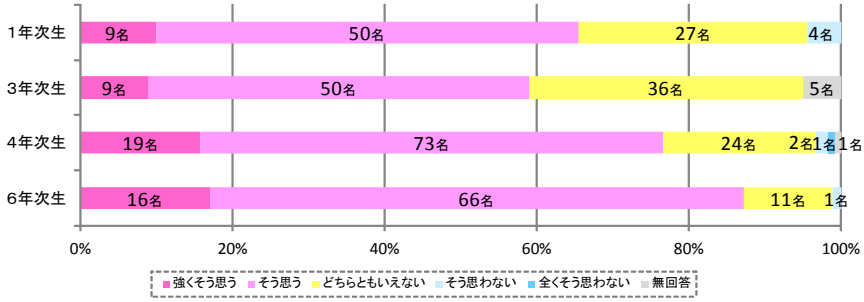
■ コミュニケーション能力



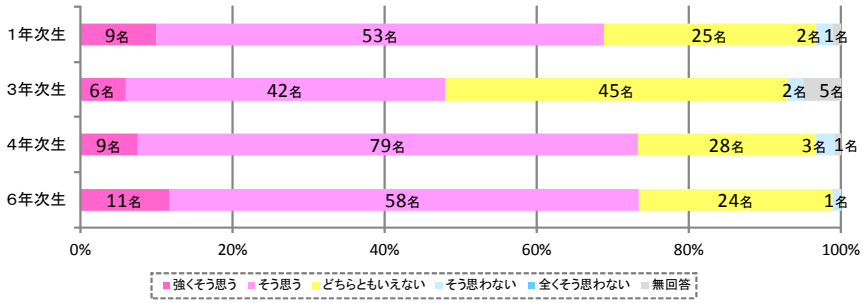
■ 高い倫理観



■ 学ぶ習慣



■ 根拠に立脚した臨床能力



（平成 27 年度カリキュラム評価アンケート結果より抜粋）

③　看護学科学生への意見聴取の結果，教育目標に関して修得が「できる／できた」と回答した学生が過半であり，これは学生が相応な学力や資質･能力を身につけ，学業の成果に概ね満足していることの証左である（**資料 2-1-3-3**）。

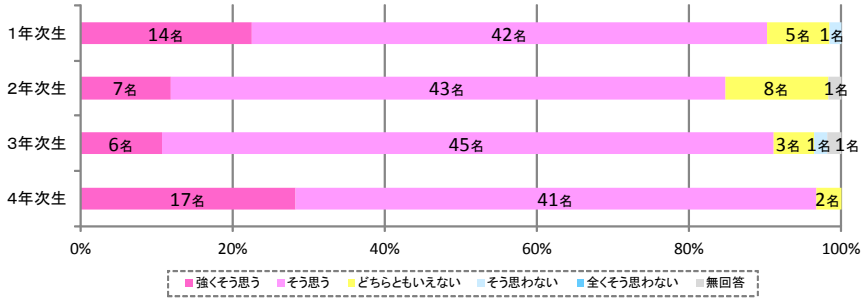
資料 2-1-3-3　教育目標に対する学生の評価（看護学科）

看護学科の達成しようとする基本的な成果である，看護の対象となる人間の総合的理解，高い倫理観，学ぶ習慣，コミュニケーション能力，看護業務を発展させる能力の取得についてアンケート調査を行った所，大方の学生が肯定的な回答を行っており，かつ４年次生はその割合が他学年よりも高い傾向にあり，本学における教育が成果を上げている証左である。

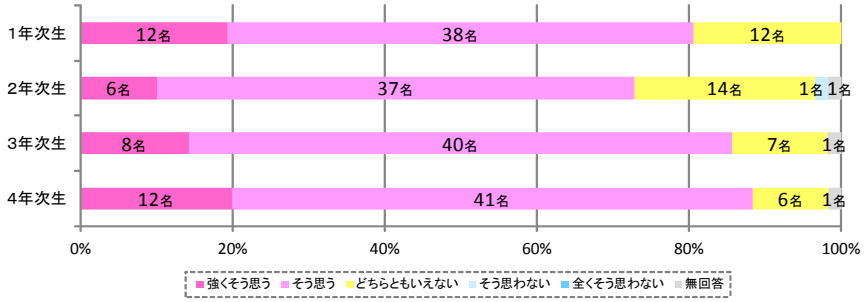
設問　看護学科では，①看護の対象となる人間を総合的に理解でき，②高い倫理観を持ち，看護の対象となる人間の権利を守ることのできる医療人，③健康に関わる諸問題の解決に必要な知識・技術を主体的に学び，創造する能力，④関連領域の専門家と協力し，必要に応じて調整的な役割を果たす能力，⑤看護を批判的に吟味し，建設的・創造的に発展させる能力を育成することを教育目標としています。

そこで，これまでのカリキュラムの履修状況から考えて，今後のカリキュラムを適切に履修すればこれらに対応した以下の事項が卒業時に修得できる（４年次…できた）と思いますか？

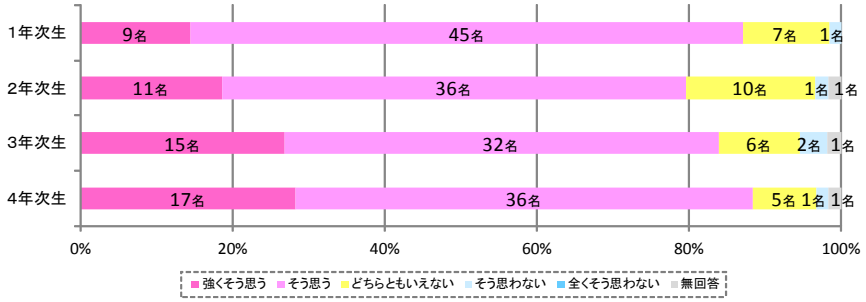
■ 看護の対象となる人間の総合的理解



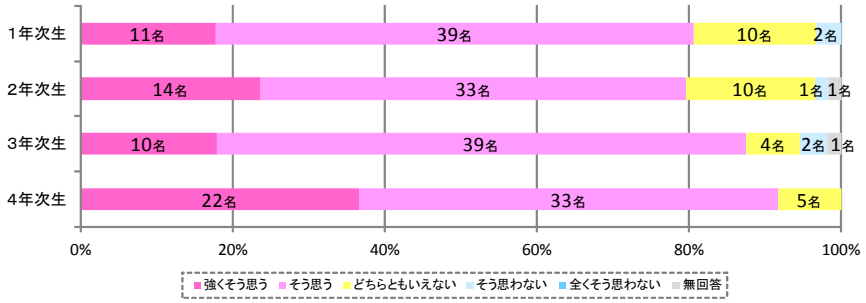
■ 高い倫理観



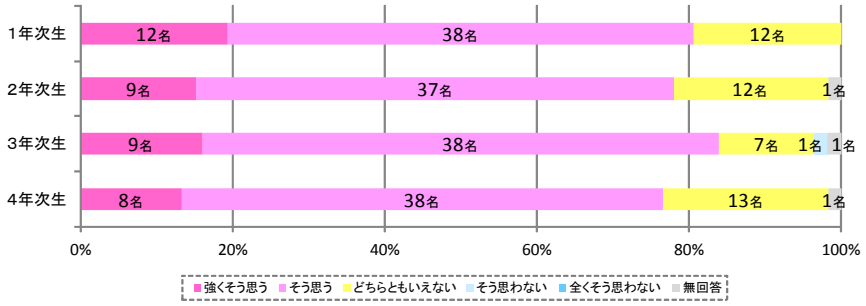
■ 学ぶ習慣



■ コミュニケーション能力



■ 看護業務を発展させる能力



（平成 27 年度カリキュラム評価アンケート結果より抜粋）

（水準）　期待される水準を上回る

（判断理由）

①　学生の単位取得状況はほぼ100％であり,優(秀)と評価された科目は医学科で72.6％,看護学科で83.5％と高く[1)]，かつ第１期より向上している。修業年限内で終了する学生は医学科 87.2％，看護学科 94.0％である[2)]。学生は各学年修了及び卒業時点で相応な学力や資質・能力を身に付けており，関係者の期待に応えている。

1)	資料 2-1-1-6　：学士課程における成績分布及び単位取得状況　P4-150
2)	資料 2-1-1-7　：入学者の進級・卒業状況（医学科）　P4-151
	資料 2-1-1-8　：入学者の進級・卒業状況（看護学科）　P4-152

②　医学科学生は共用試験結果において概ね全国平均を上回り[3)]，医師国家試験合格率は91.9％と高くかつ第１期を上回っている[4)]。看護学科学生の看護師・保健師・助産師国家試験合格率は常に全国平均を上回り概ね 100％であり，かつ第１期より高い[5)]。学生は卒業時点において相応な学力や資質･能力を修得しており,関係者の期待に応えている。

3)	資料 2-1-2-5　：医学科 CBT の得点状況　P4-157
	資料 2-1-2-6　：医学科 OSCE の得点状況　P4-158
4)	資料 2-1-2-1　：医師国家試験の合格率　P4-153
5)	資料 2-1-2-2　：看護師国家試験の合格率　P4-154
	資料 2-1-2-3　：保健師国家試験の合格率　P4-155
	資料 2-1-2-4　：助産師国家試験の合格率　P4-156

③　学生に対する意見聴取結果を鑑みると，医学部教育に対して満足あるいは能力が身についたとするものは第１期を上回り，概ね 80％以上である[6)]。また医学科・看護学科それぞれの教育目標に対して過半の学生が達成できた／できるとしており[7)]，本学部における教育により相応な学力や資質・能力が修得されたことが窺える。これは学生の期待に応えている証左である。

6)	資料 2-1-3-1　：医学部教育に対する学生の満足度　P4-160
7)	資料 2-1-3-2　：教育目標に対する学生の評価（医学科）　P4-163
	資料 2-1-3-3　：教育目標に対する学生の評価（看護学科）　P4-165

以上のように，学生の学業成果は関係者の期待である「医療人として備えるべき学力や資質・能力の涵養」が第１期以上に，かつ全国的に比較しても極めてよく達成されている証左であり，教育の成果や効果は期待される水準を上回る。

観点　進路・就職の状況

（観点に係る状況）

●進路･就職状況，その他の状況から判断される在学中の学業の成果の状況

【就職・進学率やキャリアパス】

①　医師国家試験合格者の全員，看護師国家試験，保健師国家試験及び助産師国家試験合格者のほぼ全員が医療人として医療機関等に就職しており（**資料 2-2-1-1**），本学部の教育理念「高度な医学・看護学知識を修得した，信頼しうる医療人を育成する」に合致し，関係者からの期待に応えている。

資料 2-2-1-1　卒業者の職種別就職状況

医学科卒業生（新卒国試合格者）は，第２期期間中において第１期期間中の 568 名に比べ若干多い 578 名全員が医療機関へ就職している。

看護学科卒業生（新卒国試合格者）は進学者を除くと，第１期より高い割合（第１期平均 98.3%，第２期平均 99.2%）で医療機関へ看護師，保健師あるいは助産師等として就職している。

■ 卒業年度別・職種別就職状況（新卒者・国試合格のみ）

【医学科】

就職先	職種	第1期							第2期						
		H16年度卒	H17年度卒	H18年度卒	H19年度卒	H20年度卒	H21年度卒	（計）	H22年度卒	H23年度卒	H24年度卒	H25年度卒	H26年度卒	H27年度卒	（計）
医療機関	臨床研修医 ※	85名	94名	107名	97名	87名	98名	(568名)	98名	93名	94名	90名	109名	94名	(578名)
（医療職への就職率）		(100.0%)	(100.0%)	(100.0%)	(100.0%)	(100.0%)	(100.0%)	(100.0%)	(100.0%)	(100.0%)	(100.0%)	(100.0%)	(100.0%)	(100.0%)	(100.0%)

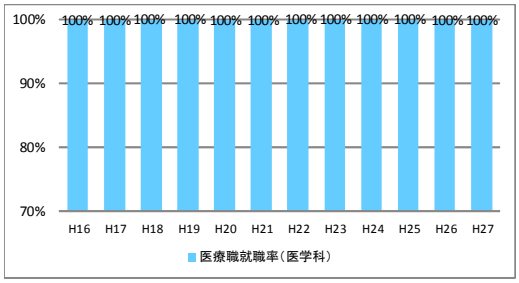
【看護学科】

就職先	職種	第1期							第2期						
		H16年度卒	H17年度卒	H18年度卒	H19年度卒	H20年度卒	H21年度卒	（計）	H22年度卒	H23年度卒	H24年度卒	H25年度卒	H26年度卒	H27年度卒	（計）
医療機関	看護師 ※	54名	50名	51名	52名	50名	59名	(316名)	60名	50名	50名	53名	60名	51名	(324名)
	保健師 ※	0名	0名	0名	1名	2名	0名	(3名)	1名	0名	1名	0名	0名	0名	(2名)
	助産師 ※	4名	2名	3名	3名	2名	4名	(18名)	4名	4名	5名	6名	5名	6名	(30名)
地方公共団体	保健師 ※	1名	3名	5名	5名	2名	0名	(16名)	0名	4名	2名	3名	0名	3名	(12名)
（医療機関除く）	その他	0名	0名	0名	0名	1名	0名	(1名)	0名	1名	0名	0名	0名	0名	(1名)
その他		0名	1名	0名	1名	0名	0名	(2名)	0名	0名	0名	0名	0名	0名	(0名)
不明		0名	0名	3名	0名	0名	0名	(3名)	1名	0名	1名	0名	0名	0名	(2名)
進学		4名	6名	4名	3名	3名	2名	(22名)	0名	5名	3名	3名	1名	1名	(13名)
（計）		63名	62名	66名	65名	60名	65名	(381名)	66名	64名	62名	65名	66名	61名	(384名)
（医療職への就職率）		(100.0%)	(98.2%)	(95.2%)	(98.4%)	(98.2%)	(100.0%)	(98.3%)	(98.5%)	(98.3%)	(98.3%)	(100.0%)	(100.0%)	(100.0%)	(99.2%)

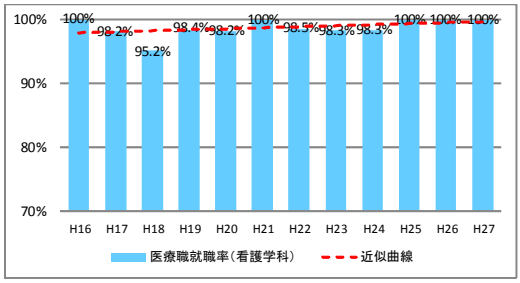
※ 医療職…医療職への就職率は進学者を除いて算出

■ 医療職への就職割合

【医学科】



【看護学科】



（事務局資料）

②　卒業生の一部はより高度な専門職医療人となるべく大学院へ進学している（**資料 2-2-1-2**）。

資料 2-2-1-2　医学部卒業者の本学医学系研究科（博士/修士課程）進学状況

医学科卒業生のうち本学医学系研究科（博士課程）に進学したものは，第２期期間中に 83 名（本学大学院への進学率 9.7%）である。

看護学科卒業生のうち本学医学系研究科（修士課程）に進学したものは，第２期期間中に 15 名（本学大学院への進学率 2.6%）である。

■ 医学科卒の本学医学系研究科（博士課程）進学者

入学年度	福井大学(福井医科大学)　医学部医学科卒業年度												
	H16年度 85名卒	H17年度 94名卒	H18年度 107名卒	H19年度 97名卒	H20年度 87名卒	H21年度 98名卒	H22年度 98名卒	H23年度 93名卒	H24年度 94名卒	H25年度 90名卒	H26年度 109名卒	H27年度 94名卒	(H16-24計) 853名卒
H22年度入学者	1名	3名	0名	2名	臨床研修中	臨床研修中	ー	ー	ー	ー	ー	ー	(11名)
H23年度　〃	1名	6名	3名	1名	1名	臨床研修中	臨床研修中	ー	ー	ー	ー	ー	(15名)
H24年度　〃	1名	2名	10名	5名	2名	0名	臨床研修中	臨床研修中	ー	ー	ー	ー	(23名)
H25年度　〃	0名	2名	2名	3名	2名	4名	1名	1名	臨床研修中	ー	ー	ー	(19名)
H26年度　〃	0名	1名	1名	2名	2名	4名	0名	2名	臨床研修中	臨床研修中	ー	ー	(13名)
H27年度　〃	0名	0名	2名	1名	0名	5名	4名	2名	4名	臨床研修中	臨床研修中	ー	(19名)
（計）	3名	14名	18名	14名	7名	13名	5名	5名	4名	ー	ー	ー	(83名)
本学大学院進学率	3.5%	14.9%	16.8%	14.4%	8.0%	13.3%	5.1%	5.4%	4.3%	ー	ー	ー	(9.7%)

※ 卒業者数は国家試験合格・新卒者のみ

※ 卒後２年間は臨床研修期間（平成 23 年度卒→平成 25 年度入学者１名は，ATM プログラム（初期研修同時履修コース）利用者）

■ 看護学科卒の本学医学系研究科（修士課程）進学者

入学年度	福井大学　医学部看護学科卒業年度												
	H16年度 63名卒	H17年度 62名卒	H18年度 66名卒	H19年度 65名卒	H20年度 60名卒	H21年度 65名卒	H22年度 66名卒	H23年度 64名卒	H24年度 62名卒	H25年度 65名卒	H26年度 66名卒	H27年度 61名卒	H16-24計 573名卒
H22年度入学者	0名	1名	0名	0名	実務2年未満	実務2年未満	ー	ー	ー	ー	ー	ー	(4名)
H23年度　〃	0名	1名	1名	0名	0名	実務2年未満	実務2年未満	ー	ー	ー	ー	ー	(3名)
H24年度　〃	0名	0名	0名	0名	0名	0名	実務2年未満	実務2年未満	ー	ー	ー	ー	(0名)
H25年度　〃	0名	0名	0名	0名	0名	1名	0名	実務2年未満	実務2年未満	ー	ー	ー	(1名)
H26年度　〃	0名	0名	0名	0名	0名	1名	0名	0名	実務2年未満	実務2年未満	ー	ー	(1名)
H27年度　〃	0名	1名	0名	0名	1名	0名	1名	0名	0名	実務2年未満	実務2年未満	ー	(6名)
（計）	0名	3名	1名	0名	1名	2名	1名	0名	0名	ー	ー	ー	(15名)
本学大学院進学率	0.0%	4.8%	1.5%	0.0%	1.7%	3.1%	1.5%	0.0%	0.0%	ー	ー	ー	(2.6%)

※ 卒業者数は国家試験合格・新卒者のみ

※ 医学系研究科（修士課程）は，入学前に２年程度の実務経験を推奨

（事務局資料）

【就職先の特徴】

① 医師国家試験合格者の３～４割が毎年，医師として福井県内の医療機関に就職しており，県内就職率は第１期より増加していることから地域医療に携わる医療人の育成は地域社会の期待に十分応えている（**資料 2-2-1-3**）。

② 看護師・保健師国家試験合格者の６～７割，助産師国家試験合格者の約９割が福井県内の医療機関に就職しており，県内就職率は第１期より増加していることから地域社会の期待に十分応えている（**資料 2-2-1-3**）。

資料 2-2-1-3　卒業者の地域別就職状況

第２期における医学科の県内就職率は第１期に比して増加しており（平均 33.1%→35.1%），入試の地域枠・福井健康推進枠の導入および地域医療に関連した教育の効果が現れている。
看護学科は看護学科奨学金の効果もあり，第１期と比べて卒業生の県内就職率は増加している（平均 57.2%→65.2%）。看護師としては 60.4%→65.4%，保健師としては 31.6%→78.6%と県内就職率は増加している。

■ 卒業年度別・地域別就職状況（新卒者・国試合格のみ）

【医学科】

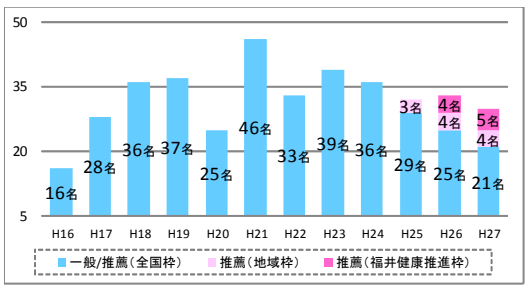
職種	就職地域	第1期 H16年度卒	H17年度卒	H18年度卒	H19年度卒	H20年度卒	H21年度卒	(計)	第2期 H22年度卒	H23年度卒	H24年度卒	H25年度卒	H26年度卒	H27年度卒	(計)
臨床研修医	福井県内	16名	28名	36名	37名	25名	46名	(188名)	33名	39名	36名	32名	33名	30名	(203名)
	（うち推薦／地域枠入学）											(3名)	(4名)	(4名)	(11名)
	（うち推薦／福井健康推進枠入学）												(4名)	(5名)	(9名)
	福井県外	69名	65名	70名	59名	62名	52名	(377名)	65名	53名	58名	58名	76名	64名	(374名)
	（うち推薦／地域枠入学）											(2名)	(1名)	(1名)	(4名)
	（うち推薦／福井健康推進枠入学）												(1名)		(1名)
	未定	0名	1名	1名	1名	0名	0名	(3名)	0名	1名	0名	0名	0名	0名	(1名)
（計）		85名	94名	107名	97名	87名	98名	(568名)	98名	93名	94名	90名	109名	94名	(578名)
（県内就職率）		18.8%	29.8%	33.6%	38.1%	28.7%	46.9%	(33.1%)	33.7%	41.9%	38.3%	35.6%	30.3%	31.9%	(35.1%)

【看護学科】

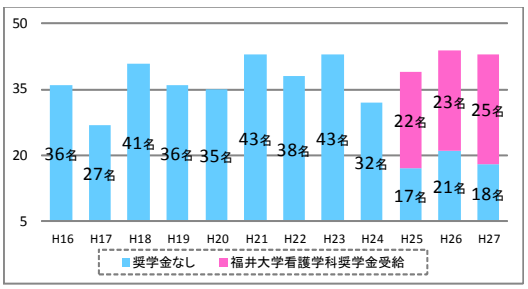
職種	就職地域	第1期 H16年度卒	H17年度卒	H18年度卒	H19年度卒	H20年度卒	H21年度卒	(計)	第2期 H22年度卒	H23年度卒	H24年度卒	H25年度卒	H26年度卒	H27年度卒	(計)
看護師	福井県内	31名	23名	36名	31名	31名	39名	(191名)	34名	35名	28名	33名	44名	38名	(212名)
	（うち看護学科奨学金受給者）											(22名)	(23名)	(25名)	(70名)
	福井県外	23名	27名	15名	21名	19名	20名	(125名)	26名	15名	22名	20名	16名	13名	(112名)
	（うち看護学科奨学金受給者）											(2名)	(1名)		(3名)
保健師	福井県内	1名	1名	2名	1名	1名	0名	(6名)	1名	3名	1名	3名	0名	3名	(11名)
	（うち看護学科奨学金受給者）											(2名)		(2名)	(4名)
	福井県外	0名	2名	3名	5名	3名	0名	(13名)	0名	1名	2名	0名	0名	0名	(3名)
助産師	福井県内	4名	2名	3名	3名	2名	4名	(18名)	3名	4名	3名	6名	5名	6名	(27名)
	（うち看護学科奨学金受給者）											(2名)	(3名)		(5名)
	福井県外	0名	0名	0名	0名	0名	0名	(0名)	1名	0名	2名	0名	0名	0名	(3名)
その他	福井県内	0名	1名	0名	1名	1名	0名	(3名)	0名	1名	0名	0名	0名	0名	(1名)
不明		0名	0名	3名	0名	0名	0名	(3名)	1名	0名	1名	0名	0名	0名	(2名)
進学		4名	6名	4名	3名	3名	2名	(22名)	0名	5名	3名	3名	1名	1名	(13名)
（うち看護学科奨学金受給者）												(1名)	(1名)		(2名)
（計）		63名	62名	66名	65名	60名	65名	(381名)	66名	64名	62名	65名	66名	61名	(384名)
（県内就職率）		57.1%	43.5%	62.1%	55.4%	58.3%	66.2%	(57.2%)	57.6%	67.2%	51.6%	64.6%	74.2%	77.0%	(65.4%)

■ 県内就職者数の推移

【医学科】



【看護学科】

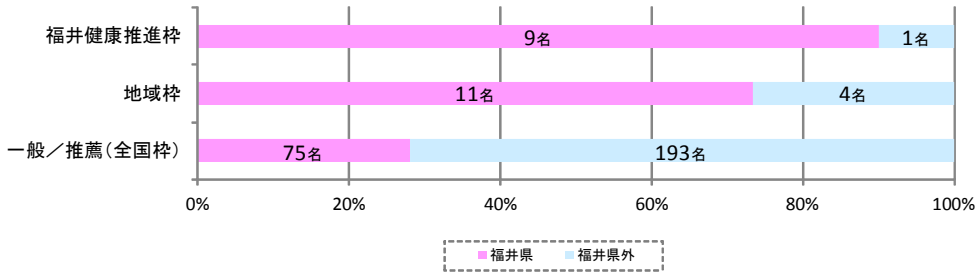


（事務局資料）

③　地域医療を指向する入学者選抜や地域医療人育成プログラム，奨学金制度により，対象となった学生は福井県内で医療職に従事するものの割合が非常に高く，関係者からの期待に応えている（**資料 2-2-1-4**）。

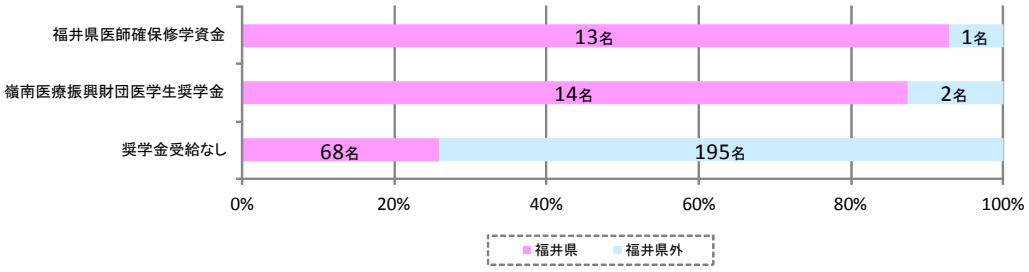
資料 2-2-1-4　福井県内就職状況

■ 医学科・入試区分別の県内就職（卒後臨床研修）状況（平成 25～27 年度新卒・国試合格者）



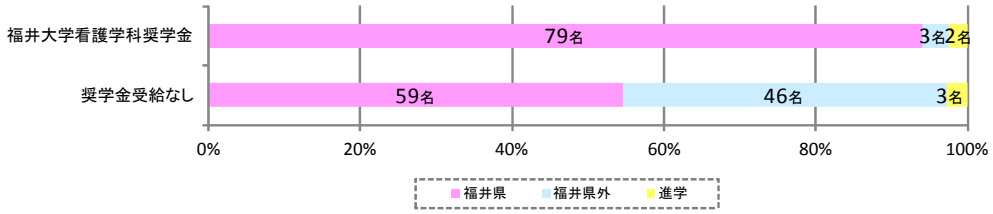
＊ 医学科における推薦入試のうち「福井健康推進枠」「地域枠」による入学者は，多く（80.0%）が福井県内に就職している。

■ 医学科・奨学金受給者の県内就職（卒後臨床研修）状況（平成 25～27 年度新卒・国試合格者）



＊ 医学科において奨学金「福井県医師確保修学金」「嶺南医療振興財団医学生奨学金」の受給者は，多く（90.0%）が福井県内に就職している

■ 看護学科・奨学金受給者の県内就職状況（平成 25～27 年度新卒・看護師国試合格者）



＊ 看護学科において奨学金「福井大学看護学科奨学金」の受給者は，多く（94.0%）が福井県内に就職している。

（事務局資料）

●在学中の学業の成果に関する卒業･修了生および進路先･就職先等の関係者への意見聴取等の結果とその分析結果

【卒業生調査内容】

①　医学科平成 20～22 年度卒業生への意見聴取において，過半の卒業生は教育目標に対応する諸資質･能力を身に付け，在学中のカリキュラムへの評価は高く，履修することで医学･医療に対する興味・履修意欲が増し，教員の指導のもと十分に内容を消化できたと回答している。これらは，医学科の教育が学生の期待に十分応えたものであることの証左であり，第１期の調査と比較すると肯定的意見の割合が増加していることから，本学の教育がより適切となっていることの証左でもある（**資料 2-2-2-1**）。

資料 2-2-2-1　卒業生による本学教育に対する評価（医学科）

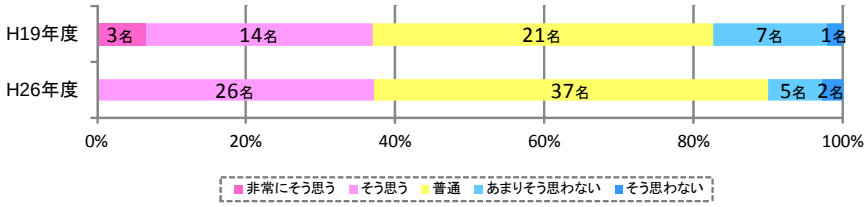
医学科卒業生に実施した平成 19 年度調査（卒業生 46 名回答　回収率 16.4%）と平成 26 年度調査（卒業生 70 名回答　回収率 27.7%）において同等の質問項目について比較した結果を示す。

■ **教育目標について**

H19 設問_医学部では，①幅広い医学知識を持ち，質の高い臨床能力を身に付け，②コミュニケーション能力に優れ，高い倫理観を持って患者様中心の医療を実践でき，③日々進歩する医学知識・医療技術を生涯にわたり学ぶ習慣を身に付け，根拠に立脚した医療を実践できる医療人を育成することを教育目標としています。そこで，本学のカリキュラム全般を履修してこれらに対応した以下の事項を修得することができましたかお聞きします。

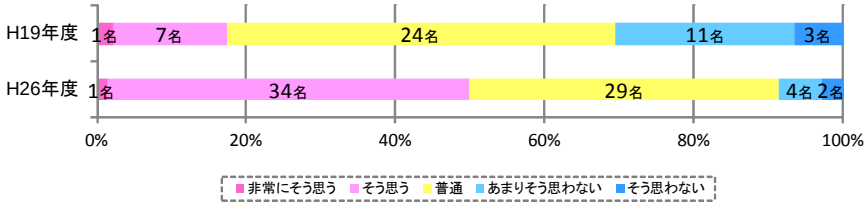
H26 設問_本学では，以下の能力を育成することを教育の目標としています。そこで，大学教育を土台として培われたあなたの知識や臨床を含むさまざまな能力についてご回答ください。

・臨床医として必要な医学知識を有していますか（H19…「医学知識」）



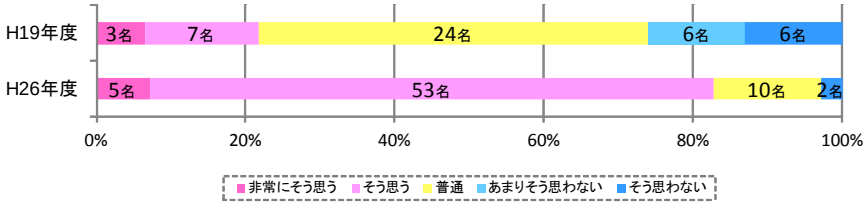
＊ 第１期と比較して，第２期では卒業生の否定的評価（あまりそう思わない～そう思わないとした割合）は，7.4%減少している。

・臨床医として必要な臨床能力を有していますか（H19…「臨床能力」）



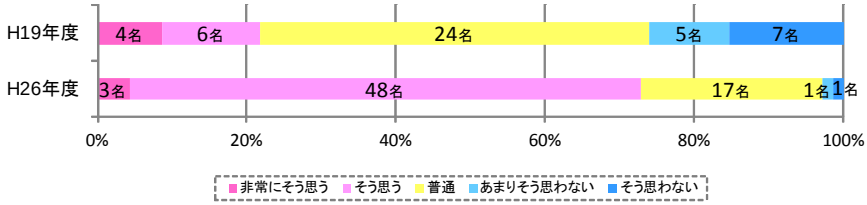
＊ 第１期と比較して，第２期では卒業生の評価（非常にそう思う～そう思うとした割合）は，32.6%向上している。

・患者様やご家族様への対応など，必要なコミュニケーション能力を有していますか（H19…コミュニケーション能力）



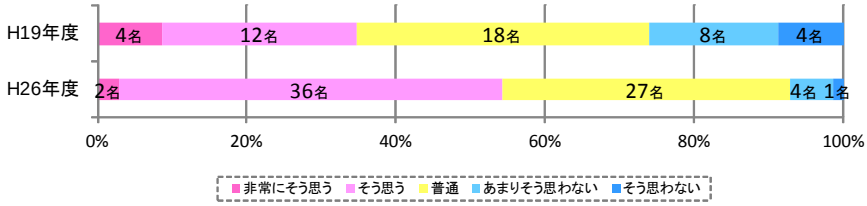
＊ 第１期と比較して，第２期では卒業生の評価（非常にそう思う～そう思うとした割合）は，61.2%と大きく向上している。

・患者様の尊厳や利益を重んじるなど，十分な医療倫理観を有していますか（H19…「高い倫理観」）



＊ 第１期と比較して，第２期では卒業生の評価（非常にそう思う～そう思うとした割合）は，51.2%と大きく向上している。

・新しい医学知識や医療技術の修得に対する積極性を有していますか（H19…「学ぶ習慣」）

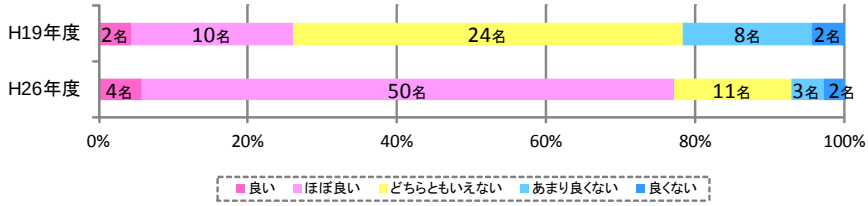


＊ 第１期と比較して，第２期では卒業生の評価（非常にそう思う～そう思うとした割合）は，19.5%向上している。

■ カリキュラムについて

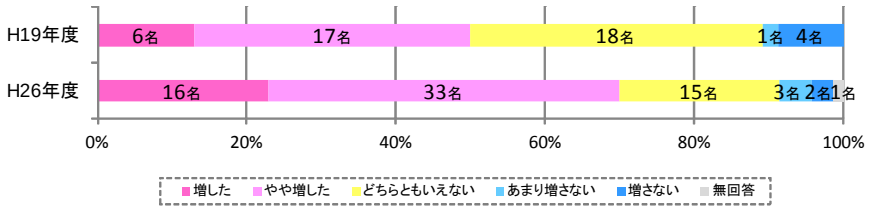
H19 設問_医学教育カリキュラム全体（科目構成，開講時期など）は適切なものでしたか

H26 設問_あなたが履修したカリキュラム全体の構成（科目構成，開講時期など）は，医師として備えるべき能力・技能を修得するうえで適切なものでしたか。



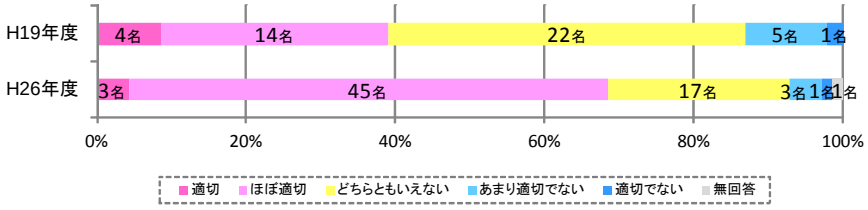
＊ 第１期と比較して，第２期では卒業生の評価（良い～ほぼ良い）は，51.0%と大きく向上している。

H19 設問_本学の医学教育カリキュラムを履修して，医学・医療に対する興味または履修意欲が増しましたか
H26 設問_本学のカリキュラムを履修して，医療に対する興味や履修意欲が増しましたか



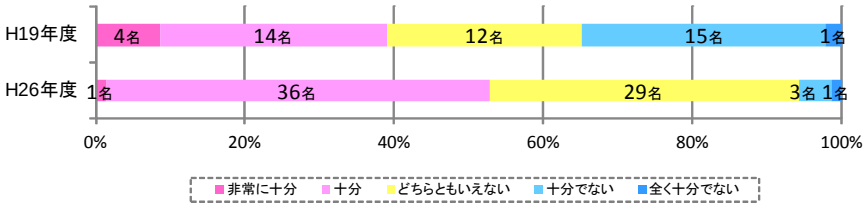
＊ 第１期と比較して，第２期では卒業生の評価（増した～やや増したとした割合）は，20.0%向上している。

H19 設問_臨床研修の前提となる基礎的な診断技術・知識を習得する上で，福井大学医学部教員の助言・指導は全般的に適切でしたか
H26 設問_カリキュラムや各科目等を履修する上で，教員の指導・助言は全般的に適切でしたか



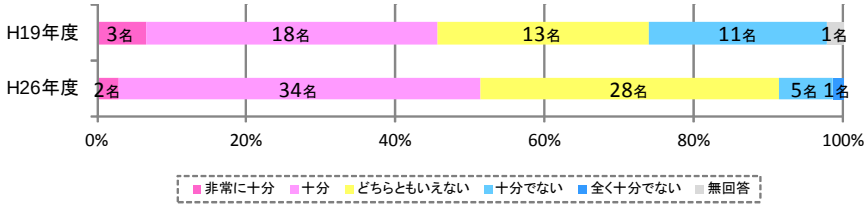
＊ 第１期と比較して，第２期では卒業生の評価（適切～ほぼ適切とした割合）は，29.5%向上している。

H19 設問_学習内容を消化・理解するための学習時間は十分に使いましたか
H26 設問_在学中，カリキュラム全体の学修内容を消化・理解するためにあなた自身が費やした学修時間は十分でしたか



＊ 第１期と比較して，第２期では卒業生の評価（非常に十分～十分とした割合）は，13.8%向上している。

H19 設問_カリキュラム全体の学習内容を十分に消化できましたか
H26 設問_あなたはカリキュラム全体の学修内容を十分に消化できましたか



＊ 第１期と比較して，第２期では卒業生の評価（非常に十分～十分とした割合）は，5.7%向上している。

（平成 19 年度卒業生対象福井大学医学部医学教育カリキュラムに関するアンケートおよび
平成 26 年度卒業生に対する大学教育の成果調査【医学部医学科卒業者対象】アンケート結果より抜粋）

② 看護学科平成 20～22 年度卒業生への意見聴取において，過半の卒業生は教育目標に対応する諸資質･能力を身に付け，在学中のカリキュラムへの評価は高く，履修することで医学･医療に対する興味･履修意欲が増し，教員の指導のもと学習内容を消化でき，人間的に成長できたと回答している。これらは，看護学科の教育が学生の期待に十分応えたものであることの証左である（**資料 2-2-2-2**）。

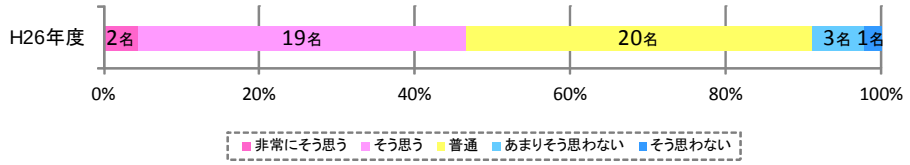
資料 2-2-2-2　卒業生による本学教育に対する評価（看護学科）

看護学科卒業生に実施した平成 26 年度調査（卒業生 45 名回答　回収率 31.3%）の結果を示す。

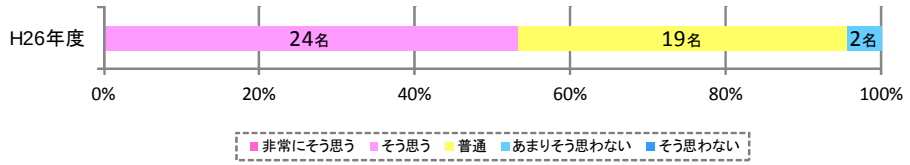
■ **教育目標について**

H26 設問_本学では，以下の能力を育成することを教育の目標としています。そこで，大学教育を土台として培われたあなたの知識や臨床を含むさまざまな能力についてご回答ください。

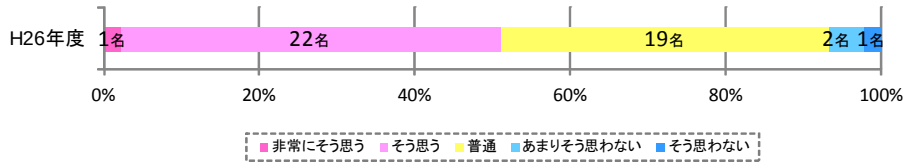
・看護師（保健師・助産師）として必要な知識を有していますか



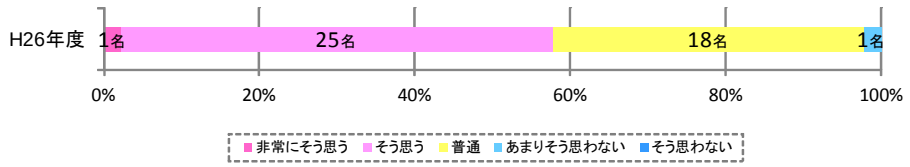
・患者様・利用者様やご家族様，住民への対応など，必要なコミュニケーション能力を有していますか？



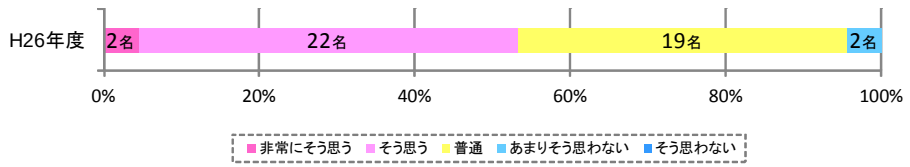
・患者様・利用者様やご家族様，住民から信頼される献身的な態度を有していますか



・福祉・医療チームに必要な協調性を有していますか

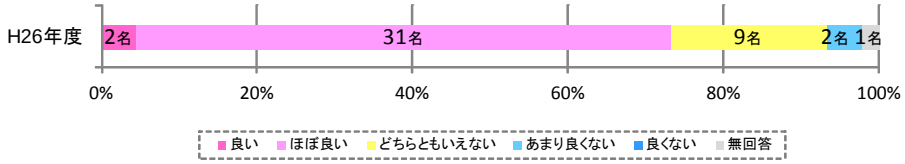


・患者様・利用者様，住民の尊厳や利益を重んじるなど，十分な医療倫理観を有していますか

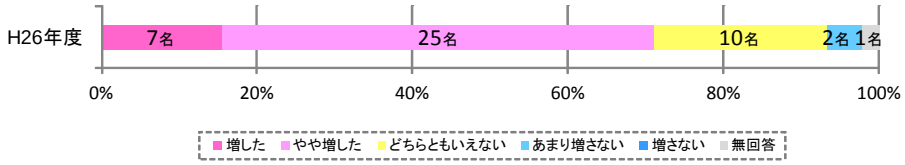


■ カリキュラムについて

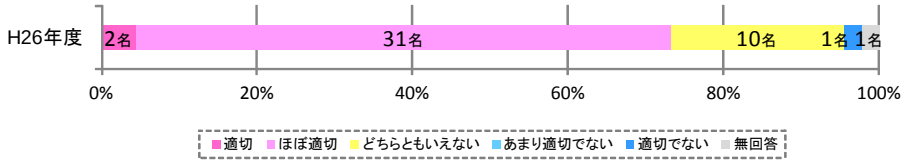
・H26 設問_あなたが履修したカリキュラム全体の構成（科目構成，開講時期など）は，看護師・保健師および助産師として備えるべき能力・技能を修得するうえで適切なものでしたか。



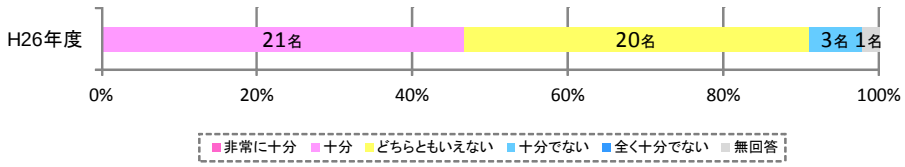
・H26 設問_本学のカリキュラムを履修して，医療に対する興味や履修意欲が増しましたか



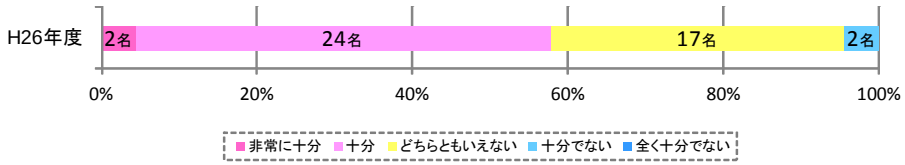
・H26 設問_カリキュラムや各科目等を履修する上で，教員の指導・助言は全般的に適切でしたか



・H26 設問_在学中，カリキュラム全体の学修内容を消化・理解するためにあなた自身が費やした学修時間は十分でしたか

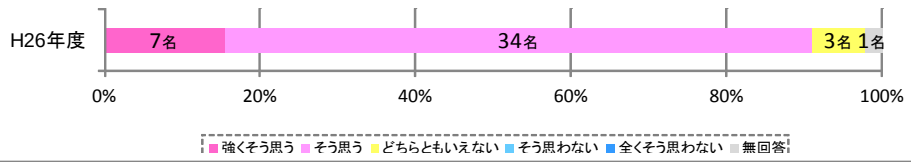


・H26 設問_あなたはカリキュラム全体の学修内容を十分に消化できましたか



■ 人間的成長について

H26 設問_本学の医学教育全体についてお聞きします。本学での学生生活の中で，自分自身は人間的に成長できたと思いますか



（平成 26 年度卒業生に対する大学教育の成果調査【医学部看護学科卒業者対象】アンケート結果より抜粋）

【就職先調査内容】

① 平成 21～23 年度医学科卒業生の就職(研修)先医療機関において，卒業生は教育目標に対応した諸資質･能力を概ね備えていると評価され本学教育への満足度は高く，卒業生を積極的に受け入れたいとする施設の割合は第１期より増加している。これらは医学科の教育が関係者の期待に十分応えたものであることの証左である（**資料 2-2-2-3**）。

資料 2-2-2-3　医学科卒業生の就職先による本学教育に対する評価

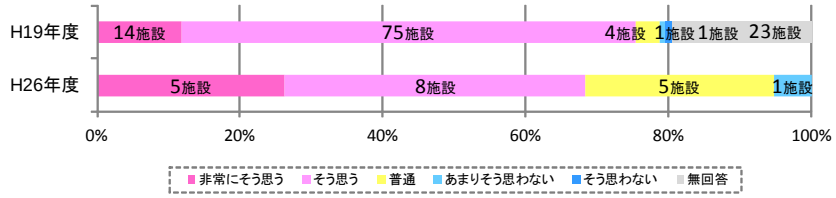
医学科卒業生の就職実績がある施設･診療科に実施した平成 19 年度調査(118 施設･診療科回答　回収率 55.9%)と平成 26 年度調査（平成 21～23 年度卒業生の就職先 19 施設・診療科回答　回収率 95.0%）において同等の質問項目について比較した結果を示す。なお調査は匿名アンケートによる。

■ 教育目標について

H19 設問_医学部では，①幅広い医学知識を持ち，質の高い臨床能力を身に付け，②コミュニケーション能力に優れ，高い倫理観を持って患者様中心の医療を実践でき，③日々進歩する医学知識・医療技術を生涯にわたり学ぶ習慣を身に付け，根拠に立脚した医療を実践できる医療人を育成することを教育目標としています。そこで，以下の観点における本学卒業生の全般的評価をお教えください。

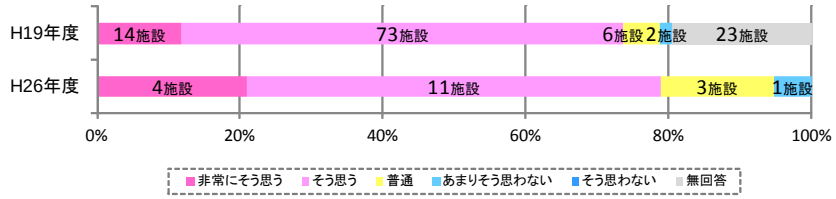
H26 設問_本学卒業生（医学科）の知識や臨床を含むさまざまな能力についてお尋ねします。

・臨床医として必要な医学知識を有していますか（H19…必要な知識を有している）



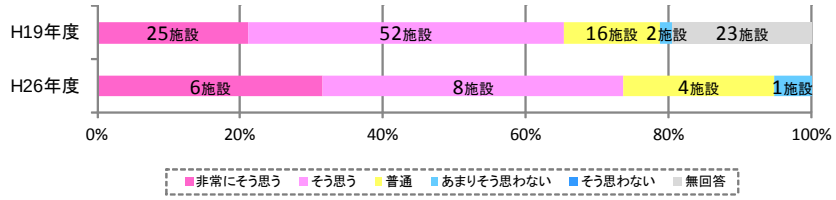
＊ 第１期と比較して，第２期では就職先の高評価（非常にそう思うとした割合）は 14.4%向上しているが，そう思うを含めると全体の評価はやや低下している。平成 28 年度からの新カリキュラム等により必要な医学知識を修得できるよう１年次より医学専門教育を実施するなど工夫を行うこととしている。

・臨床医として必要な臨床能力を有していますか（H19…必要な臨床能力を有している）



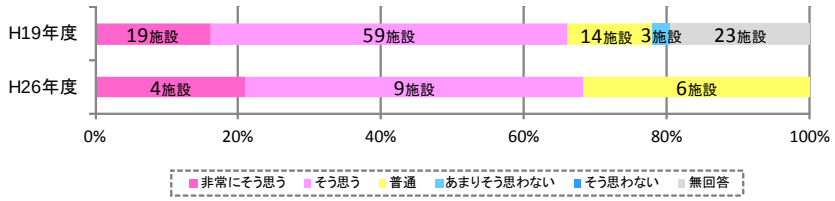
＊ 第１期と比較して，第２期では就職先の評価（非常にそう思う～そう思うとした割合）は，5.2%向上している。

・患者様やご家族様への対応など，必要なコミュニケーション能力を有していますか（H19…患者様やご家族様への対応など，必要なコミュニケーション能力を有している）



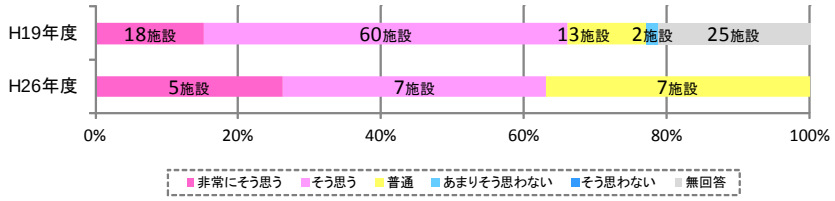
＊ 第１期と比較して，第２期では就職先の評価（非常にそう思う～そう思うとした割合）は，8.4%向上している。

・患者様の尊厳や利益を重んじるなど，十分な医療倫理観を有していますか（H19…患者様の尊厳や利益を重んじるなど，十分な医療倫理観を有している）



＊ 第１期と比較して，第２期では就職先の評価（非常にそう思う～そう思うとした割合）は，2.3%向上しており，加えて否定的評価をする施設が見られない。

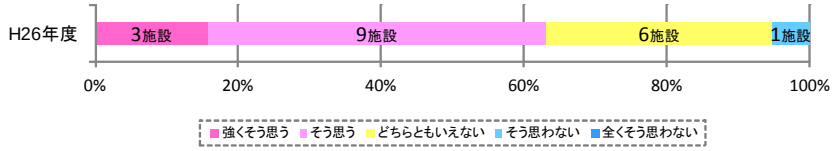
・新しい医学知識や医療技術の修得に対する積極性を有していますか（H19…新しい知識・技術の修得に対する積極性を有している）



＊ 第１期と比較して，第２期では就職先の高評価（非常にそう思う）は，11.0%向上しており，加えて否定的評価をする施設が見られない。

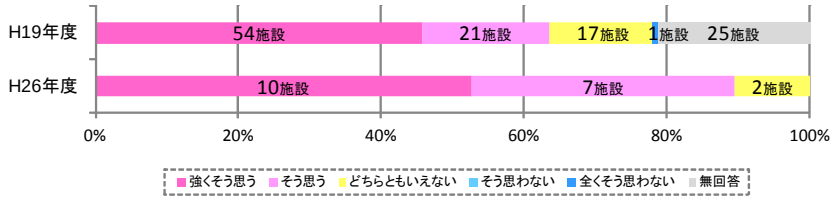
■ 本学教育への満足度

H26 設問_本学卒業生から判断して，本学の教育は満足できるものとお考えですか（平成 19 年度設問なし）



■ 本学卒業生への評価

H26 設問_本学卒業生を積極的に貴院（貴領域）に雇用しようとお思いですか（H19…本学卒業生を積極的に研修医として受け入れたいとお思いですか）



＊ 第１期と比較して，第２期では就職先の評価（強くそう思う～そう思うとした割合）は，25.9%向上し，ほとんどの施設（89.5%）において本学卒業生の雇用を希望している。

（平成 19 年度関連病院対象福井大学医学部卒業生に関するアンケートおよび平成 26 年度医学部医学科卒業生の就職先へのアンケート結果より抜粋）

②　平成 23-25 年度看護学科卒業生の就職先医療機関において，卒業生の有する教育目標に対応した諸資質･能力について，過半の機関が本学の教育に満足し，卒業生を積極的に受け入れたいとしている。これらは看護学科の教育が関係者の期待に十分応えたものであることの証左である（**資料 2-2-2-4**）。

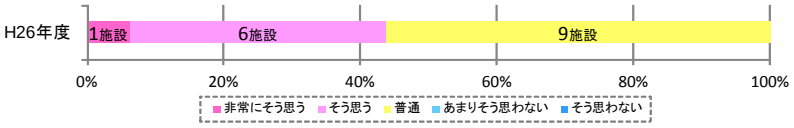
資料 2-2-2-4　看護学科卒業生の就職先による本学教育に対する評価

看護学科卒業生の就職実績がある施設・病棟に実施した平成 26 年度調査（平成 23～25 年度卒業生の就職先 16 施設・病棟回答　回収率 88.9%）の結果を示す。なお調査は匿名アンケートによる。

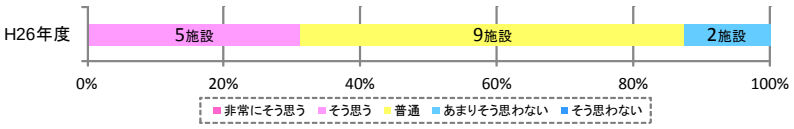
■ 教育目標について

設問_本学卒業生（看護学科）の知識や臨床を含むさまざまな能力についてお尋ねします。

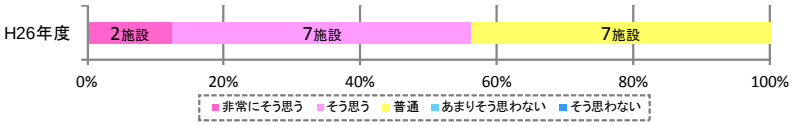
・看護師（助産師）として必要な医学知識を有していますか



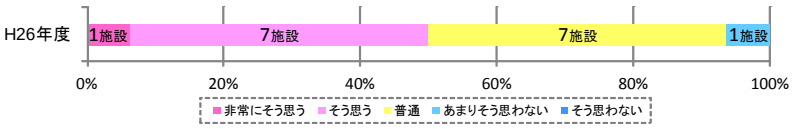
・患者様やご家族様への対応など，必要なコミュニケーション能力を有していますか



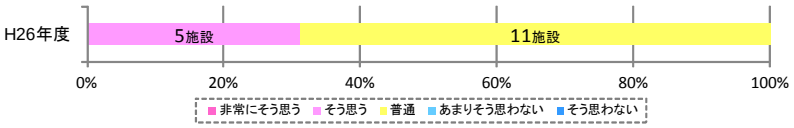
・患者様やご家族様から信頼される献身的な態度を有していますか



・医療チームに必要な協調性を有していますか

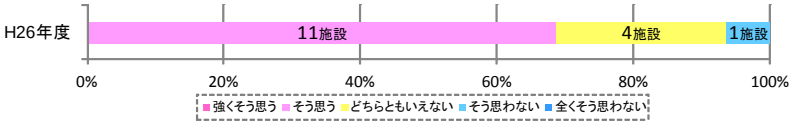


・患者様の尊厳や利益を重んじるなど，十分な医療倫理観を有していますか



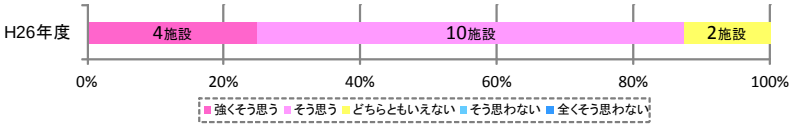
■ 本学教育の満足度

設問_本学卒業生から判断して，本学の教育は満足できるものとお考えですか



■ 本学卒業生の評価

設問_本学卒業生を積極的に貴院に雇用しようとお思いですか



＊ ほとんどの施設（87.5%）において本学卒業生の雇用を希望している。

（平成 26 年度医学部・看護学科卒業生の就職先へのアンケート結果より抜粋）

（水準）　期待される水準を上回る

（判断理由）

①　第２期期間中に関連国家試験に合格した卒業生のほぼ全員が医療職に従事しており[1)]，医療人養成機関として関係者の期待に十分応えている。県内医療機関への卒業生の就職率は医学科 35.1%，看護学科 65.2%とともに第１期より向上しており[2)]，地域医療に携わる医療人育成により関係者の期待に十分応えている。地域医療人の育成のための入試制度や奨学金制度，地域医療に特化した寄附講座設置は特記できる[3)]。

1)	資料 2-2-1-1	：卒業者の職種別就職状況　P4-168
2)	資料 2-2-1-3	：卒業者の地域別就職状況　P4-170
	資料 2-2-1-4	：福井県内就職状況　P4-171
3)	資料 1-1-1-7	：医学部寄附講座　P4-10
	資料 1-1-1-23	：医学部学生対象の奨学金一覧　P4-24
	資料 1-1-3-11	：地域枠を設けた入学者志願状況（医学科推薦入試Ⅱ）　P4-41

②　卒業生に対する意見聴取結果を鑑みると，在学中のカリキュラム等が適切であり教育目標に掲げる学力･能力を十分修得できたと回答しており，これらの達成度は第１期より向上している[4)]。このことは，本学部の教育が関係者の期待に第１期にも増して応えていることの証左である。

4)	資料 2-2-2-1	：卒業生による本学教育に対する評価（医学科）　P4-172
	資料 2-2-2-2	：卒業生による本学教育に対する評価（ 看護学科）　P4-175

③ 卒業生の就職先医療機関からは，本学卒業生が教育目標に掲げる学力･能力を概ね有しているとされ，それらの達成度の評価は第１期よりも向上し，かつ卒業生を積極的に雇用したいとしており[5)]，本学部の教育は関係者の期待に十分応えている。

5)	資料 2-2-2-3	：医学科卒業生の就職先による本学教育に対する評価　P4-177
	資料 2-2-2-4	：看護学科卒業生の就職先による本学教育に対する評価　P4-179

以上のように，進路・就職の状況は医療機関や地域社会の期待「人材育成」や「地域医療人育成」に極めてよく応えるものであり，期待される水準を上回る。

Ⅲ　「質の向上度」の分析

（１）分析項目Ⅰ　教育活動の状況

①　教育目的を達成するための組織・体制の整備に努め，医学部長統括による医学部教育委員会等[1)]と教育担当副医学部長統括による医学部教育支援センター[2)]の整備を行い，国際基準に則った医学科新カリキュラムを構築[3)]した。また教育の質保証・向上への体制や学生統合データベースによる教学 IR 体制[4)]を整備した。これらにより質の高い教育を実施するための体制が整備され，重要な質の変化があったと判断した。

1)	資料 1-1-1-1	：医学部教育実施体制　P4-4
	資料 1-1-1-2	：医学部教育委員会　P4-5
2)	資料 1-1-1-4	：医学部教育支援センターの概要　P4-7
3)	資料 1-2-2-1	：平成 28 年度医学科新カリキュラム　P4-95
4)	資料 1-1-5-1	：医学部学生統合データベース　P4-55
	資料 1-1-5-4	：教育評価アンケート一覧　P4-58

②　全学生に対するきめ細かな学生支援体制[5)]として，教員によるアドバイザー制度[6)]，専任カウンセラーを配した学生総合相談室による対応[7)]，リメディアル教育による学力補完教育等[8)]，５種類の独自奨学金制度等を整備した[9)]。学生の満足度は第１期に比べ第２期では向上しており[10)]，重要な質の変化があったと判断した。

5)	資料 1-1-1-11	：学生支援活動一覧　P4-15
6)	資料 1-1-1-12	：学習支援を含めた学生支援体制　P4-16
7)	資料 1-1-1-13	：保健管理センターおよび学生総合相談室　P4-17
8)	資料 1-1-1-20	：リメディアル教育実施状況　P4-22
	資料 1-1-1-21	：医学科国家試験への支援　P4-23
	資料 1-1-1-22	：看護学科国家試験対策システム　P4-23
9)	資料 1-1-1-23	：医学部学生対象の奨学金一覧　P4-24
10)	資料 1-1-1-16	：学生支援活動に対する学生の評価　P4-19
	資料 1-1-1-19	：看護学科学生支援活動（初年次学生グループ）に対する評価　P4-21
	資料 1-1-1-26	：経済的支援に対する学生の満足度　P4-25

③　カリキュラム・ポリシーに基づく体系的な教育課程を整備・明示[11)]するとともに，地域医療人育成プログラムやグローバル人材育成プログラムなど特徴的教育の整備を行い，各プログラムに対して学生の評価は高く，能力涵養状況は良好である[12)]。これらにより，第２期ではカリキュラムに対する満足度の向上や海外留学学生数増加が見られ[13)]，重要な質の変化があったと判断した。

11)	資料 1-2-1-4	：医学科カリキュラム・ポリシー　P4-73
	資料 1-2-1-7	：医学科カリキュラムマップ　P4-76
	資料 1-2-1-8	：医学科カリキュラムツリー　P4-77
	資料 1-2-1-9	：看護学科カリキュラム・ポリシー　P4-78
	資料 1-2-1-12	：看護学科カリキュラムマップ　P4-81
	資料 1-2-1-13	：看護学科カリキュラムツリー　P4-82
12)	資料 1-2-2-2	：地域医療人育成プログラムの概要（医学科）　P4-96
	資料 1-2-2-7	：看護学科における地域医療教育　P4-101
	資料 1-2-2-12	：医学科英語カリキュラム　P4-106

資料 1-2-2-13　：看護学科英語カリキュラム　P4-107
資料 1-2-2-14　：「グローバル人材育成事業」海外留学・研修プログラム（医学部）　P4-108
資料 1-2-2-17　：看護学科キャリアアップ実習シラバス　P4-110
資料 1-2-2-19　：「卒業時にグローバルな視野を有する人材として備えるべき能力等」の涵養状況　P4-112
[13] 資料 1-1-1-27　：海外留学する学生数の大幅な増加　P4-26
資料 1-2-1-14　：カリキュラムに対する学生の評価（医学科）　P4-83
資料 1-2-1-15　：カリキュラムに対する学生の評価（看護学科）　P4-84

④　ディプロマ・ポリシーに基づき学生の能力涵養に努め[14]，単位の実質化を目指した学生指導に取り組み[15]，課題探求・解決能力涵養科目など多様な教育方法・形態を取り入れ[16]，臨床能力・技術取得のための実習の工夫[17]や学生の自学自習環境の整備[18]を行った。一連の取り組みにより授業外学修時間の確保[19]や教育に対する満足度，良好な教育目標の涵養状況など顕著な成果が得られ[20]，重要な質の変化があったと判断した。

[14] 資料 1-2-1-1　：医学科ディプロマ・ポリシー　P4-70
資料 1-2-1-2　：看護学科ディプロマ・ポリシー　P4-71
[15] 資料 1-2-4-1　：単位の実質化への全学的取り組み方針　P4-131
資料 1-2-4-3　：時間外学習を促す取組　P4-133
[16] 資料 1-2-3-1　：授業における学習指導法の工夫状況　P4-113
資料 1-2-3-13　：テュートリアル教育　P4-124
[17] 資料 1-2-3-3　：臨床実習の概要　P4-115
資料 1-2-3-4　：診療参加型実習の工夫　P4-116
資料 1-2-3-8　：看護学実習　P4-120
資料 1-2-3-10　：「看護基本技術の記録」による自己評価システムの工夫　P4-122
[18] 資料 1-2-4-7　：学生の自習スペース　P4-137
資料 1-2-4-8　：総合研究棟（講義棟）改修　P4-138
資料 1-2-4-9　：医学図書館改修　P4-139
資料 1-2-4-11　：ICT 環境の整備　P4-140
[19] 資料 1-2-4-4　：学生の授業外学習時間（医学科）　P4-134
資料 1-2-4-5　：学生の授業外学習時間（看護学科）　P4-135
[20] 資料 1-2-3-14　：「テュートリアル」に対する学生の評価　P4-125
資料 1-2-4-12　：学生の主体的学習意欲　P4-141
資料 2-1-3-1　：医学部教育に対する学生の満足度　P4-160
資料 2-1-3-2　：教育目標に対する学生の評価（医学科）　P4-163
資料 2-1-3-3　：教育目標に対する学生の評価（看護学科）　P4-165
資料 1-2-4-2　：課題探求・解決型能力の涵養　P4-132

⑤　画像医学教育推進のため，医学部附属先進イメージング教育研究センターを設置し[21]本学独自の画像教育システムの整備を行った。教育コンテンツは 6,000 以上と本邦随一であり，学生の良好な能力涵養状況など成果が得られ[22]，重要な質の変化があったと判断した。

[21] 資料 1-1-1-8　：医学教育を支援する施設等　P4-11
[22] 資料 1-2-3-18　：画像医学教育の工夫　P4-129

（２）分析項目Ⅱ　教育成果の状況

①　教育目的である「高度な医学・看護学知識を修得した信頼しうる医療人」の育成に努め，医師・看護師・保健師・助産師国家試験における高い合格率[1)]が示すように医療人を順調に育成しており，卒業生の教育目標に対する能力涵養状況[2)]及び卒業生就職先からの卒業生評価[3)]が第２期において向上していることから，重要な質の変化があったと判断した。

1)	資料 2-1-2-1	：医師国家試験の合格率　P4-153
	資料 2-1-2-2	：看護師国家試験の合格率　P4-154
	資料 2-1-2-3	：保健師国家試験の合格率　P4-155
	資料 2-1-2-4	：助産師国家試験の合格率　P4-156
2)	資料 2-2-2-1	：卒業生による本学教育に対する評価（医学科）　P4-172
	資料 2-2-2-2	：卒業生による本学教育に対する評価（ 看護学科）　P4-175
3)	資料 2-2-2-3	：医学科卒業生の就職先による本学教育に対する評価　P4-177
	資料 2-2-2-4	：看護学科卒業生の就職先による本学教育に対する評価　P4-179

②　教育目的である「地域医療の向上に寄与すること」を目指し，入試改革，地域医療人育成プログラムや奨学金制度[4)]により卒業生の福井県内就職率は[5)]，第１期よりも向上し，重要な質の変化があったと判断した。

4)	資料 1-1-1-23	：医学部学生対象の奨学金一覧　P4-24
	資料 1-1-3-11	：地域枠を設けた入学者志願状況（医学科推薦入試Ⅱ）　P4-41
	資料 1-2-2-2	：地域医療人育成プログラムの概要（医学科）　P4-96
	資料 1-2-2-7	：看護学科における地域医療教育　P4-101
5)	資料 2-2-1-3	：卒業者の地域別就職状況　P4-170
	資料 2-2-1-4	：福井県内就職状況　P4-171

５．医学系研究科

Ⅰ　医学系研究科の教育目的と特徴　・・・・・５－　２
Ⅱ　「教育の水準」の分析・判定　・・・・・５－　４
分析項目Ⅰ　教育活動の状況　・・・・・５－　４
分析項目Ⅱ　教育成果の状況　・・・・・５－　97
Ⅲ　「質の向上度」の分析　・・・・・５－ 115

Ⅰ　医学系研究科の教育目的と特徴

１．教育目的

医学系研究科においては，人材の養成に関する目的を次のように定めている（医学系研究科規程第１条の２）。

医学系研究科：高度な医学及び看護学の知識を修得し，高い水準の医学研究を遂行できる研究能力や先端的で高度専門的な臨床技術を提供できる実践能力を身につけ，高い倫理観と豊かな人間性のもと，人類の健康福祉と社会福祉に貢献できる医療人を育成することを目的とする。

博士課程：医科学及び生命科学領域において，①高度な知識及び科学的・論理的思考に基づき，独創性に優れた研究を遂行し，国際的にも活躍できる自立した研究者，②各診療分野で優れた臨床研究能力と先端的で高度な医療技能を備え，高い医療倫理観と研究マインドを持った臨床医，並びに③地域に貢献できる臨床研究や教育的指導力を備えた質の高い総合診療医・ＥＲ救急医・家庭医（以下「ジェネラリスト」という）を養成することを目的とする。

修士課程：看護学領域において豊かな人間性と幅広く高度な看護理論・技術を有し，高度専門的看護ケア実践能力を備え，地域保健医療福祉に貢献できる看護職及び看護学を体系化・深化させる研究を遂行できる指導的役割を担う教育・研究者を養成することを目的とする。

上記の人材養成の目的を達成することにより，医学・看護学の進展，国民の健康増進，社会福祉及び国際社会に貢献することを教育理念としている。

２．組織の特徴

医学系研究科は本学の基本的目標でもあり，第２期の中期目標でもある「21 世紀の社会で活躍できる優れた人材，高度専門職業人を育成する」ことを目標として，福井医科大学医学部の創設理念である「原子力の平和的医学利用」と，現在の問題である「地域医療」の課題を総合的に解決するための教育課程を設定した。これらのコースを一体化して教育することによって，スペシャリストとジェネラリスト，グローバルとローカルという価値観の異なる学生の問題意識を共有させることができる体制が特徴である。

博士課程：平成 25 年度に「統合先進医学専攻」の１専攻に統一し，従来のコースとともに本邦初の「地域総合医療学コース」を新設した。「地域総合医療学コース」は福井県の地域性を鑑み，被ばく医療も視野に入れた地域に貢献できる臨床研究や教育的指導力を備えた質の高いジェネラリストの養成を目指すものである。

修士課程：看護に求められる社会のニーズを踏まえ，平成 26 年度には本邦初の災害看護専門看護師教育課程（以下「災害看護 CNS 課程」という），平成 27 年度にはがん看護専門看護師教育課程（以下「がん看護 CNS 課程」という）を開設し，卓越した看護実践能力の修得に向けたスペシャリスト教育を開始した。また，平成 23 年度より，医学系研究科附属地域医療高度化教育研究センター看護キャリアアップ部門　看護キャリアアップセンター（以下「看護キャリアアップセンター」という）を設置し，慢性呼吸器疾患看護課程，続いて平成 26 年度より手術看護課程を開講し，変動する社会環境の中で高度専門化する医療・看護の社会的ニーズに応えるべく看護基礎教育を終了した看護師のキャリアアップ支援を行い，地域の現任教育に貢献している。

３．入学者の状況

博士課程では，平成 25 年度の改組時に入学定員を 25 名に見直し，年間２回の学生募集を行い，改組前の平成 13 年度から引き続き秋季入学生も受け入れている。グローバル化に対応した秋季入学は，外国人留学生並びに日本人学生にとっても利便性があり十分に活用されている。設置以後平成 27 年度までに 604 名の大学院生を受入れ，平成 27 年３月までに 413 名の修了生を輩出している。なお，改組後の平成 25 年度から平成 27 年度においては，入学定員における充足率は 100％を維持している。

修士課程の入学定員は 12 名であり，年間２回の学生募集を一般選抜と社会人特別選抜とで実施している。設置以後平成 27 年度までに 169 名の大学院生を受入れ，平成 27 年

３月までには 120 名の修了生を輩出している。なお，第１期中期目標期間（以下「第１期」という）の入学定員充足率の平均は 76.4%であったが，第２期中期目標期間（以下「第２期」という）は 98.6%と大幅に改善された。

［想定する関係者とその期待］

・**大学院生**：スペシャリスト，ジェネラリストとして独り立ちできる科学的・論理的思考力，実践力の基本的能力の獲得

・**地域社会**：地域に貢献できる優れた医療人の養成と確保

・**医療・医学研究機関**：高度な医療技術・技能，研究能力を備え，将来教育的指導と臨床研究を担い，国際的に活躍し地域をリードする高度専門職業人の養成と確保

Ⅱ　「教育の水準」の分析・判定

分析項目Ⅰ　教育活動の状況

観点　教育実施体制

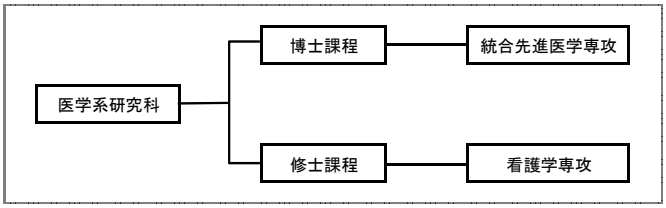
(観点に係る状況)

●教員組織編成や教育体制の工夫とその効果に関する例

【教育プログラムとしての実施体制】

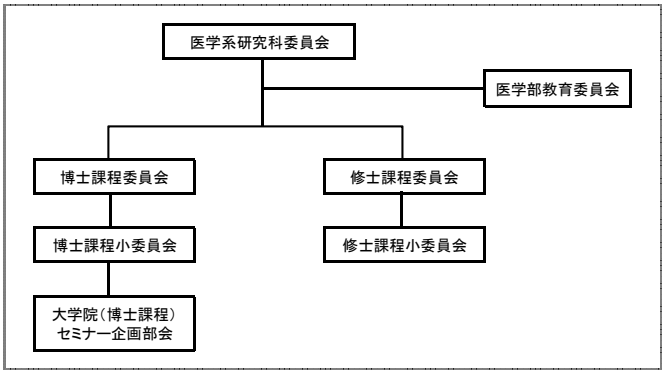
医学系研究科は博士課程及び修士課程から構成され，両課程の教育プログラムはそれぞれの課程委員会の統轄のもと一貫した運営がなされている。なお，平成 27 年度より医学教育分野別評価基準に沿った委員会改組が行われ，医学系研究科を含めた医学部全体において，プログラム実施体制が整備されている（**資料 1-1-1，2(1)，2(2)**）。

資料 1-1-1　医学系研究科の組織



（事務局資料）

資料 1-1-2(1)　医学系研究科の運営体制(1)



※研究科委員会及び教育委員会の委員長は医学部長（研究科長を兼務）をあてており，責任の所在が明白な教学ガバナンス体制となっている。

（事務局資料）

資料 1-1-2(2)　医学系研究科の運営体制(2)

各委員会等の審議事項等

●福井大学大学院医学系研究科委員会規程

（組織）

第２条 研究科委員会は，医学系研究科長及び医学系研究科担当の教授をもって構成する。

（審議事項）

第３条 研究科委員会は,次の各号に掲げる事項を審議する。

（１）重要な規則の制定又は改廃に関する事項
（２）専攻・課程等教育研究組織の設置又は改廃に関する事項
（３）大学院担当教員の選考に関する事項
（４）教育課程の編成及び研究指導に関する事項
（５）試験及び単位の認定に関する事項
（６）学位論文の審査及び最終試験に関する事項
（７）学生の入退学，修了，賞罰等その身分に関する事項
（８）学生の厚生及び補導に関する事項
（９）その他大学院の教育，研究及び管理運営に関する重要事項

（課程委員会）

第９条 研究科委員会に，博士課程及び修士課程に関する事項を調査審議するため，医学系研究科博士課程委員会及び医学系研究科修士課程委員会（以下「課程委員会」という。）を置く。

２　研究科委員会は，研究科委員会の議に基づき，第３条に規定する審議事項のうち，一部の審議を課程委員会に付託し，議決させることができる。

●福井大学大学院医学系研究科課程委員会規程

（組織）

第２条 医学系研究科博士課程委員会（以下「博士課程委員会」という。）の構成員は，医学系研究科博士課程担当の教授とする。

２　医学系研究科修士課程委員会（以下「修士課程委員会」という。）の構成員は，医学系研究科修士課程担当の教授とする。

（審議事項）

第３条 課程委員会は，次の各号に掲げる事項を審議する。

（１）医学系研究科委員会から付託された事項
（２）その他該当課程の運営に関し必要な事項

●医学系研究科博士課程小委員会規程 （趣旨） 第１条　この規程は，福井大学大学院医学系研究科課程委員会規程（平成 16 年福大院医規程第２号）第７条第２項の規定に基づき，大学院医学系研究科博士課程小委員会（以下「博士課程小委員会」という。）の組織及び運営に関し必要な事項を定めるものとする。 （組織） 第２条　博士課程小委員会は，次の各号に掲げる構成員をもって組織する。 （１）博士課程担当の教授のうちから，医学系研究科長が指名する教授１名 （２）博士課程担当の教授　　各専攻から２名	●医学系研究科修士課程小委員会規程 （趣旨） 第１条　この規程は，福井大学大学院医学系研究科課程委員会規程（平成 16 年福大院医規程第２号）第７条第２項の規定に基づき，大学院医学系研究科修士課程小委員会（以下「修士課程小委員会」という。）の組織及び運営に関し必要な事項を定めるものとする。 （組織） 第２条　修士課程小委員会は，次の各号に掲げる構成員をもって組織する。 （１）修士課程委員会委員長 （２）修士課程担当の教授

●福井大学医学部教育委員会規程

（目的）

第２条 委員会は，教育に関する医学部（大学院を含む）の委員会等を統括し，医学部教育の円滑な実施を図るとともに，教育改革を推進することを目的とする。

（協議事項）

第３条 委員会は，次の各号に掲げる事項について協議する。

（１）医学部（大学院を含む）における医学・看護学教育全般の統括，管理運営及び教育改革に関する事項
（２）教育に係る中期目標・中期計画に関する事項
（３）教育課程の編成に関する事項
（４）非常勤講師の任用計画，選考等に関する事項
（５）学生の退学，進級及び卒業，賞罰等その身分に関する事項
（６）その他医学部の教育に関する重要事項

（事務局資料）

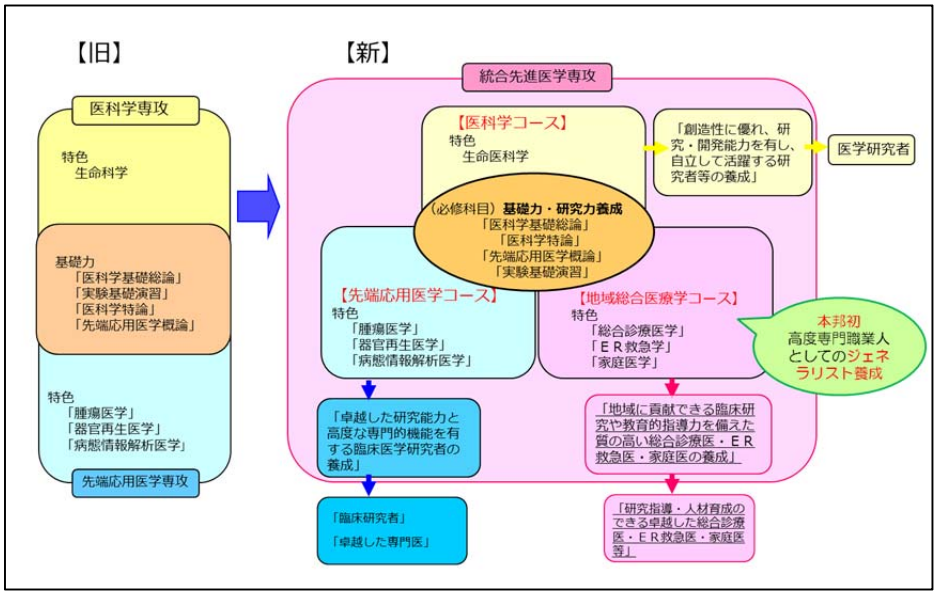
【組織体制】

博士課程では，平成 25 年度改組に伴い福井県の地域性，ジェネラリストの育成に対する社会的ニーズに応えるため，本邦初のコースとして「地域総合医療学コース」を設置し，「医科学コース」「先端応用医学コース」とともにコースの枠を越え有機的，横断的

に学ぶ体制を整えた（**資料 1-1-3，4**）。

修士課程では，災害の多い日本に必要とされる卓越した災害看護実践能力を有する専門看護師の育成を目指し，平成 26 年度に本邦初の災害看護 CNS 課程を開設した。更に，福井県におけるがん看護専門看護師不在という状況を受けて，平成 27 年度にがん看護 CNS 課程を開設した（**資料 1-1-5，6**）。

資料 1-1-3　医学系研究科博士課程改組後の組織構成



【医科学コース】（創造性に優れ，研究・開発能力を有し，自立して活躍する研究者等を養成）

医科学コースでは，医学科基礎系教員に加え，ライフサイエンスイノベーション推進機構（生命科学 複合研究教育センター，トランスレーショナルリサーチ推進センター，ライフサイエンス支援センター），高エネルギー医学研究センター及び子どものこころの発達研究センター（以下「関連施設」とする）所属教員も参画し，実績や特色を基にしたコースワークを設け，組織的な教育・研究指導を行う。

【先端応用医学コース】（卓越した研究能力と高度な専門的機能を有する臨床医学研究者を養成）

先端応用医学コースでは，次の３部門を設け，臨床系教員を中心に基礎系教員も参画した複数教員指導体制を採用して体系的に教育・研究指導を行う。

［腫瘍医学部門］

分子腫瘍学，腫瘍画像診断学，腫瘍病理診断学，腫瘍内視鏡診断学，腫瘍外科治療学，腫瘍薬物治療学，腫瘍放射線治療学等の科目を設定している。また，腫瘍の外科治療学，薬物治療学，放射線治療学では，外科手術や抗腫瘍薬治療，分子標的治療（遺伝子治療含），合併感染症対策等の教科内容を横断的に教育するとともに，疼痛緩和療法などの集学的教科内容をも含んだコースワークとする。

［器官再生医学部門］

各組織・臓器の再建・再生を軸に，成長発達，退行性変性や器官機能喪失，生体医工学に拠る再建などを加えた特色ある教科内容のコースワークとする。

［病態情報解析医学部門］

遺伝学や分子病理学的なミクロのレベル及び分子イメージングや高次脳機能画像診断学手法，灌流画像，薬物動態，医学疫学手法等によるマクロのレベルで，生体病態を新しい角度から解析できうる人材育成を目指した教科内容のコースワークとする。併せて病態情報解析に関わる新たな知見の発見，手法の開発を将来担える人材育成を目指した教科内容のコースワークとする。

【地域総合医療学コース】（地域に貢献できる臨床研究や教育的指導力を備えた質の高い総合診療医・ＥＲ救急医・家庭医を養成）

地域総合医療学コースでは，複数教員指導体制を採用し体系的に教育・研究指導行う。３つの柱である総合診療学・ＥＲ救急学・家庭医学は，診療を行う場（病院やＥＲ救急，診療所）における軸足の違いが存在するが，「患者を選ばない」コンセプトは共通である。

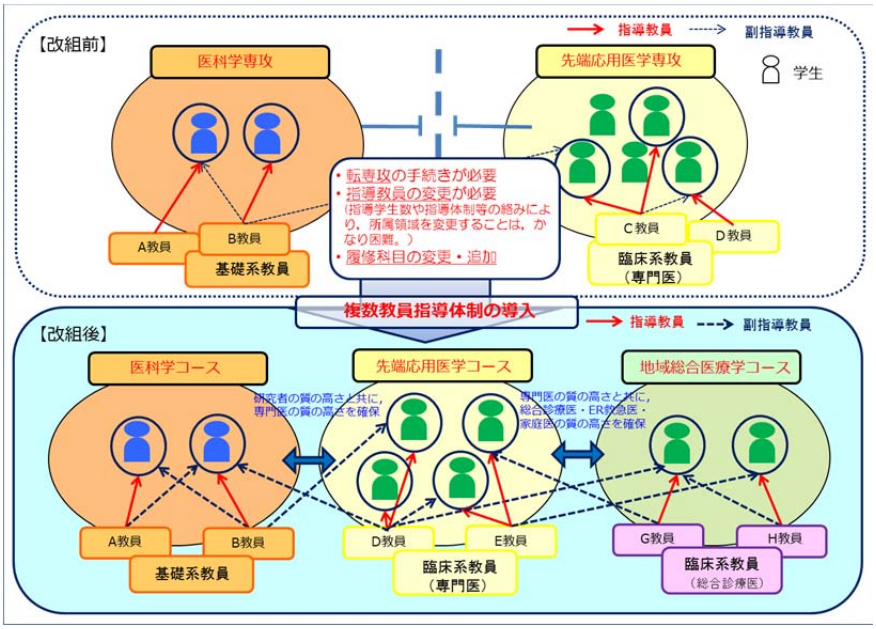
本コースでは，臨床研究に卓越し，地域医療のできる医師の人材養成を目的に，疫学倫理や臨床疫学等の統計手法や医学教育手法を学ぶ教科内容のコースワークとする。また，福井県の地域性を鑑み，被ばく医療についても実践的に学べるコースワークとする。

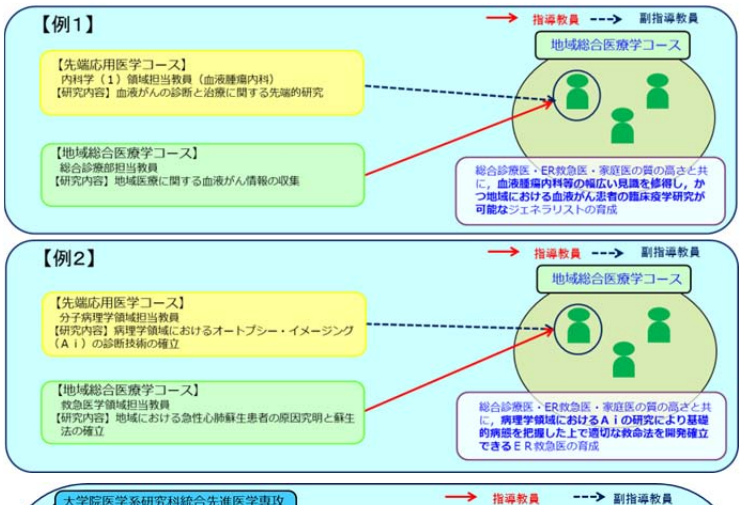
（事務局資料）

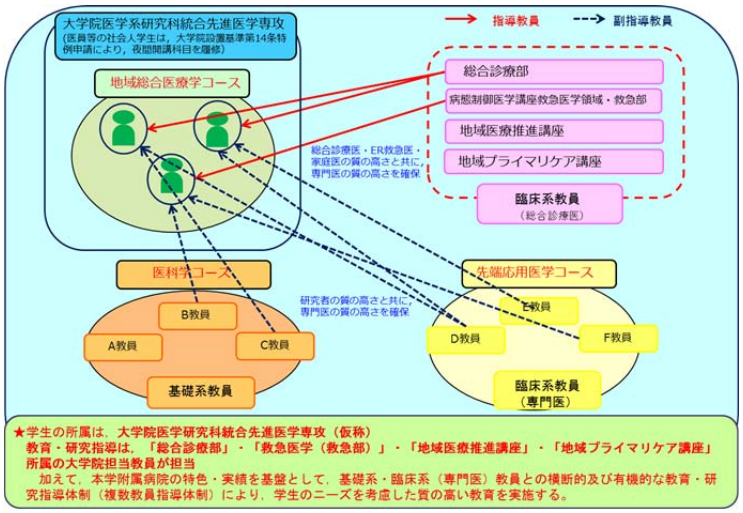
資料 1-1-4　博士課程改組後の指導体制

● コースを越えた横断的な指導体制の確立

平成 25 年度に「統合先進医学専攻」**１専攻**，「医科学コース」，「先端応用医学コース」，「地域総合医療学コース」の**３コースに改組**したことにより，３コース間で横断的に指導が受けられる体制としている。例えば，「地域総合医療学コース」の大学院生を「先端応用医学コース」内科学(1)領域担当教員（血液腫瘍内科）が協働して指導し，総合診療医・ER 救急医・家庭医の質の高さと共に，血液腫瘍内科等の幅広い見識を修得し，かつ地域における血液がん患者の臨床疫学研究が可能なジェネラリストの育成が期待できる。







（事務局資料）

資料 1-1-5　修士課程 CNS 課程開設検討経過

年度	検討内容等
平成24年度	・災害看護専門看護師教育課程の検討の必要性について修士課程委員会で承認 （中期目標・計画との関連） ・災害看護専門看護師ワーキンググループで検討開始 ・災害看護専門看護師シラバスの策定、科目担当者教員の決定、履修単位の確認（38単位）
平成25年度	・災害看護専門看護師教育課程設置に向けて講演会実施 ・災害看護専門看護師教育課程実習施設の決定 ・福井大学医学系研究科修士課程に災害看護領域を設置 ・日本看護系大学協議会に災害看護専門看護師課程教育機関設置申請書類提出 ・がん看護専門看護師教育課程の検討の必要性について修士課程委員会で承認 （中期目標・計画との関連）
平成26年度	・災害看護専門看護師教育機関認可 ・災害看護専門看護師課程教育開始（入学生5名） ・がん看護専門看護師教育課程設置に関するワーキンググループを設置 ・がん看護専門看護師教育課程設置大学院の事例調査 ・がん看護専門看護師教育課程修了者への情報収集および非常勤講師の打診 ・日本看護系大学協議会がん看護CNS認定委員会専門分科会副委員長との複数回の事前相談 ・がん看護専門看護師シラバスの策定・検討、科目担当教員・非常勤講師案の検討・策定 ・がん看護専門看護師実習施設・計画の情報収集及び検討・策定 ・がん看護専門看護師教育機関申請書類を日本看護系大学協議会に送付（H26年7月末） ・申請認可（H27年2月）
平成27年度	・がん看護専門看護師教育機関認可 ・がん看護専門専門看護師教育機関設置・教育開始（入学生4名）

（事務局資料）

資料 1-1-6　災害看護専門看護師（CNS）教育課程・がん看護専門看護師（CNS）教育課程募集ちらし



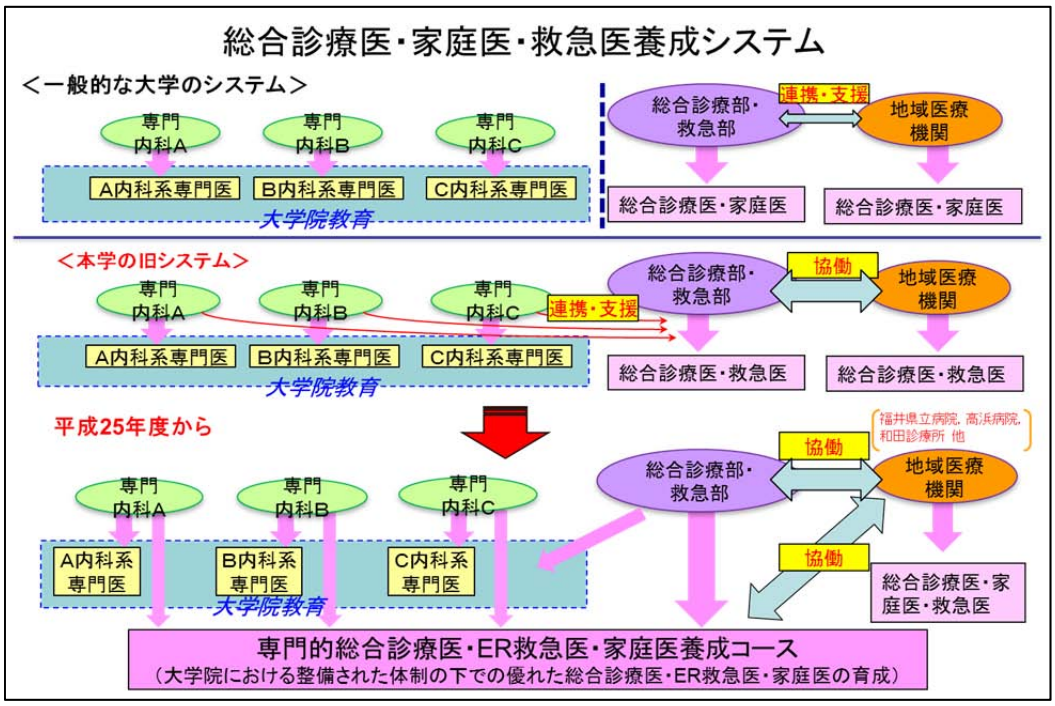


（事務局資料）

【外部組織との連携】

① 博士課程の「地域総合医療学コース」では，地域の中核病院や診療所等とより密接に連携した教育指導体制を導入し，ジェネラリスト養成のための教育・研究指導体制が整えられており，関係者の期待に応えるものとなっている（**資料 1-1-7**）。

資料 1-1-7　博士課程　地域総合医療学コース教育体制

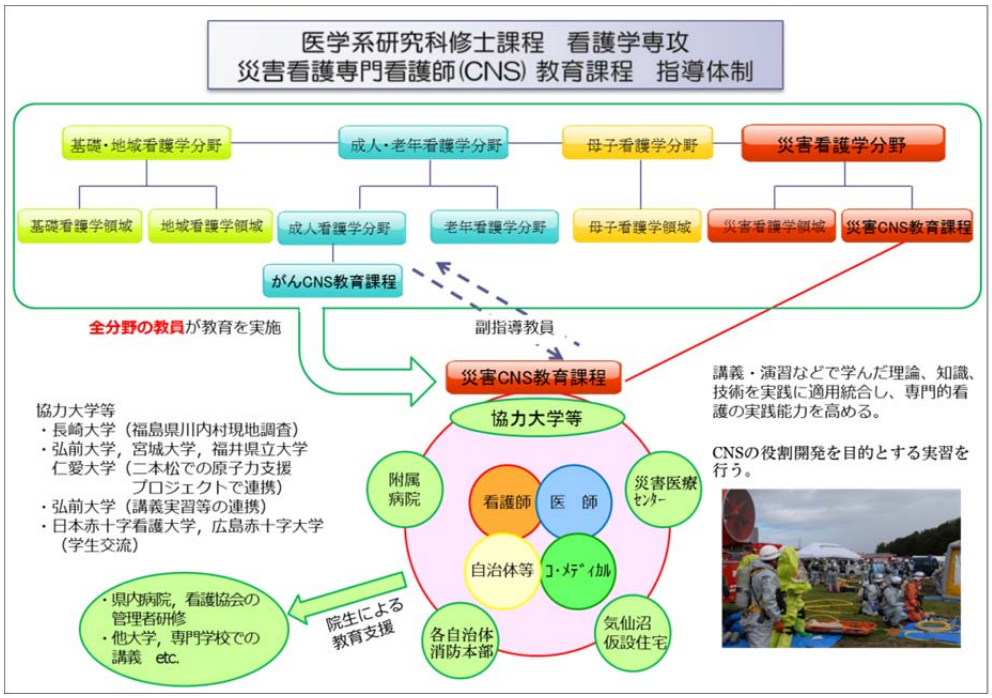


地域の医療機関として，地域の中核病院である丹南病院や高浜病院，高浜診療所など連携して，大学の教員が大学院生の勤務する病院で講義，指導を行うなど，大学院生が診療や教育に従事しながら，医師・看護師・コメディカルを含めた地域（家庭）医療を学び，ジェネラリストとして独り立ちできる実践能力の獲得を目指す。更に相乗効果として地域病院の医療レベルの向上を図る。

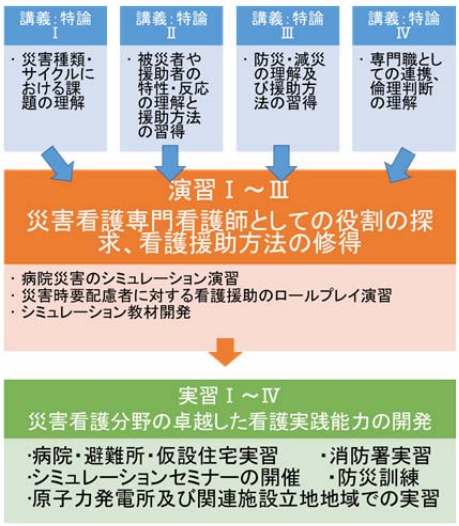
（事務局資料）

② 修士課程の「災害看護 CNS 課程」では，国立病院機構災害医療センター，宮城県仮設住宅等と協力した教育・研究指導体制を整えている。また，長崎大学と協働した現地調査や，原発事故による課題に対するプロジェクトに弘前大学や福井県内の大学と共に参画するなどの活動も積極的に行っている（**資料 1-1-8，9**）。

資料 1-1-8　修士課程　災害看護 CNS 課程の指導体制



CNS に必要な能力（実践・相談・調整・倫理・教育・研究）の涵養



図：災害看護専門看護師課程における学習目的及び内容

災害看護 CNS 課程は，被ばくに強い医療人養成を目指しているため，附属国際原子力工学研究所とも連携し，被災地活動を行っている。被災地活動においては，長崎大学・弘前大学・宮城大学など他大学との交流も広がり深まっている。

（事務局資料）

資料 1-1-9　修士課程　災害看護 CNS 課程活動一覧

年度	日程	内　　容
平成25年度	7月	愛知県看護協会セミナー　病院災害図上訓練
		弘前大学・宮城大学　仁愛大学連携　福島県二本松市放射線災害被災母子支援イベント 遊びとリラクゼーションの提供
	2月	東日本大震災仮設住宅支援・調査
	3月	COC事業　大学立地地域での備えのための講習会（三角巾・搬送法等）
		被ばく医療演習（基礎知識・養生等）
平成26年度	6月	東日本大震災　仮設住宅支援（健康相談、講話、イベント開催等）・調査
	7月	愛知県看護協会セミナー　病院災害図上訓練
	9月	国立病院機構との連携　病院における備え・防災訓練・教育研修の実施 福島支援室での看護活動
	10月	福井県立病院防災訓練
	11月	福井赤十字病院防災訓練
	12月	COC事業　大学立地地域での備えのための講習会（三角巾・搬送法等）
	1月	国立病院機構との連携　病院における備え・防災訓練・教育研修の実施 福島支援室での看護活動
	2月	東日本大震災　仮設住宅支援（健康相談、講話、イベント開催等）・調査
	3月	福井大学医学部附属病院　病院災害図上訓練
平成27年度	6月	日本災害看護学会教育活動委員会セミナーでの発表　災害看護専門看護師の視点から考える災害時のリーダーの役割
		原子力関連施設との連携（平時からの備え・発災時の対応等）
		県内消防との連携（平時からの備え・教育研修・搬送法等）
	7月	福島県二本松市放射線災害被災母子支援イベント 遊びとリラクゼーションの提供
		愛知県看護協会セミナー　病院災害図上訓練
	8月	日本災害看護学会年次大会　教育活動委員会企画　専門看護師の役割についての発表
		日本災害看護学会年次大会　ワークショップ 病院災害図上訓練
		国立病院機構との連携　病院における備え・防災訓練・教育研修の実施 福島支援室での看護活動
	9月	長崎大学連携　福島県川内村原子力災害被災地支援　現地消防・大学との交流、被災者宅訪問・放射線量測定等
	10月	公立丹南病院　病院災害図上訓練
		福井県看護協会　災害支援ナース向け研修　病院災害図上訓練
		嶺北丸岡消防署との連携　高速道路での事故・災害対応訓練（備え　搬送等）
		福井県看護協会管理者向け災害看護に関する講義
	11月	福井医療短期大学　災害看護論講義6コマ
		関東東北豪雨被災地支援　常総市避難所での看護活動
	12月	三重大学防災訓練
		COC事業　大学立地地域での備えのための講習会（三角巾・搬送法等）
	1月	国立病院機構との連携　病院における備え・防災訓練・教育研修の実施 福島支援室での看護活動
	2月	東日本大震災　仮設住宅支援（健康相談、講話、イベント開催等）・調査
	3月	福島県いわき市放射線災害被災母子支援イベント 遊びとリラクゼーションの提供
		中部地区COC事業採択校学生交流会での発表

（災害看護専門看護師教育課程資料より）

【学生支援】

博士・修士課程に入学する大学院生はほぼ社会人であり，両課程ともに授業の夜間開講（大学院設置基準第 14 条に基づく教育方法の特例適用），長期履修制度導入等，学びやすい環境を整備するとともに（**資料 1-1-10～14**），指導教員，保健センター，学生総合相談室及び事務局が連携し，身体・精神面からも修学をサポートしている（**資料 1-1-15, 16**）。また，医学図書館は 24 時間開館しており，個々の状況に合わせ利用可能となっている（**資料 1-1-17**）。これら支援に対する学生の満足度は良好で，第 1 期に比べ向上した（**資料 1-1-18**）。

資料 1-1-10　医学系研究科における社会人入学者の状況

（人）

区分		平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	計	備考
博士課程	社会人入学者数	16 (2)	26 (9)	27 (12)	24 (6)	26 (7)	25 (11)	144 (47)	
	全入学者数	16 (2)	27 (10)	27 (12)	25 (7)	26 (7)	25 (11)	146 (49)	
修士課程	社会人入学者数	12 (10)	11 (11)	10 (7)	12 (10)	14 (11)	12 (12)	71 (61)	
	全入学者数	12 (10)	11 (11)	10 (7)	12 (10)	14 (11)	12 (12)	71 (61)	
医学系研究科計	社会人入学者数	28 (12)	37 (20)	37 (19)	36 (16)	40 (18)	37 (23)	215 (108)	
	全入学者数	28 (12)	38 (21)	37 (19)	37 (17)	40 (18)	37 (23)	217 (110)	

＊（ ）内は女子で内数

（事務局資料）

資料 1-1-11　修士課程における夜間開講時間割

時限 / 曜日	1 8 45～10 15	2 10 30～12 00	3 13 00～14 30	4 14 45～16 15	5 16 30～18 00	6 18 00～19 30	7 19 40～21 10
月			看護研究 （長谷川智 他）	看護管理論 （上野 他）		※看護研究 （長谷川智 他）	※看護管理論 （上野 他）
火			成人看護学特論 （繁田 他） がん看護学特論Ⅰ （片山 他）	基礎看護学特論 （長谷川智 他）		※成人看護学特論 （繁田 他） がん看護学特論Ⅰ （片山 他）	※基礎看護学特論 （長谷川智 他）
水			地域看護学特論 （長谷川美 他） がん看護学特論Ⅱ （上野 他）	病態生理学 （重松 他）		※地域看護学特論 （長谷川美 他） ※がん看護学特論Ⅱ （上野 他）	※病態生理学 （重松 他）
木			老年看護学特論 （中村） がん看護学特論Ⅲ （繁田 他）	ｺﾝｻﾙﾃｰｼｮﾝ論 （長谷川智 他）		※老年看護学特論 （中村） ※がん看護学特論Ⅲ （繁田 他）	※ｺﾝｻﾙﾃｰｼｮﾝ論 （長谷川智 他）
金			看護理論 （上野 他）	母子看護学特論 （上澤 他）		※看護理論 （上野 他）	※母子看護学特論 （上澤 他）

＝

同じ授業科目を夜間にも開講
勤務のため，18:00からの授業に間に合わない場合を考慮し，次年度は6限目と7限目の授業を入れ替え，1年目で履修できなければ，2年目で履修できるよう時間割を組んでいる。

注）※印は，大学院設置基準第14条に基づく教育方法の特例適用者に係る授業を示す。

（事務局資料）

資料 1-1-12　長期履修学生規程

福井大学大学院長期履修学生規程（一部抜粋）

（趣旨）
第１条　この規程は，福井大学大学院学則（平成 16 年福大学則第２号。以下「大学院学則」という。）第 35 条の規定に基づき，長期履修学生について，必要な事項を定める。

（長期履修期間）
第２条　本学大学院が，長期履修学生に対し，その計画的な履修を認める期間（以下「長期履修期間」という。）は，教育学研究科修士課程・教職大学院の課程，医学系研究科修士課程及び工学研究科博士前期課程においては４年以下，医学系研究科博士課及び工学研究科博士後期課程においては６年以下とする。

（審査）
第５条　前２条の申請については，別に定めるところにより審査を行い，学長が許可する。
２　学長は，前項の規定により許可を与えるに当たり当該研究科の教授会の意見を聴くものとする。

（最長の在学期間）
第６条　長期履修学生が，長期履修期間を超える場合，在学できる最長の在学期間は，教育学研究科修士課程・教職大学院の課程，医学系研究科修士課程及び工学研究科博士前期課程においては５年，医学系研究科博士課程においては９年，工学研究科博士後期課程においては７年とする。

（事務局資料）

資料 1-1-13　長期履修学生に関する申合せ

医学系研究科長期履修学生に関する申合せ（一部抜粋）

医学系研究科の長期履修学生については，当分の間，次のとおりとする。

１　福井大学大学院学則第３５条における「職業を有している等」の者とは，次のとおりとする。
(1) 正規に雇用されている者又は自ら事業を行っている者
(2) アルバイト，パートタイム等の職業に就いている者で，その負担により修学に重大な影響がある者
(3) 出産，育児又は親族の介護を行う必要がある者
(4) その他やむを得ない事情があると認められる者

３　長期履修学生規程第３条の「申請」及び第４条の「長期履修期間の変更」にかかる審査は，当該課程小委員会において審査し，当該課程委員会において承認する。

（事務局資料）

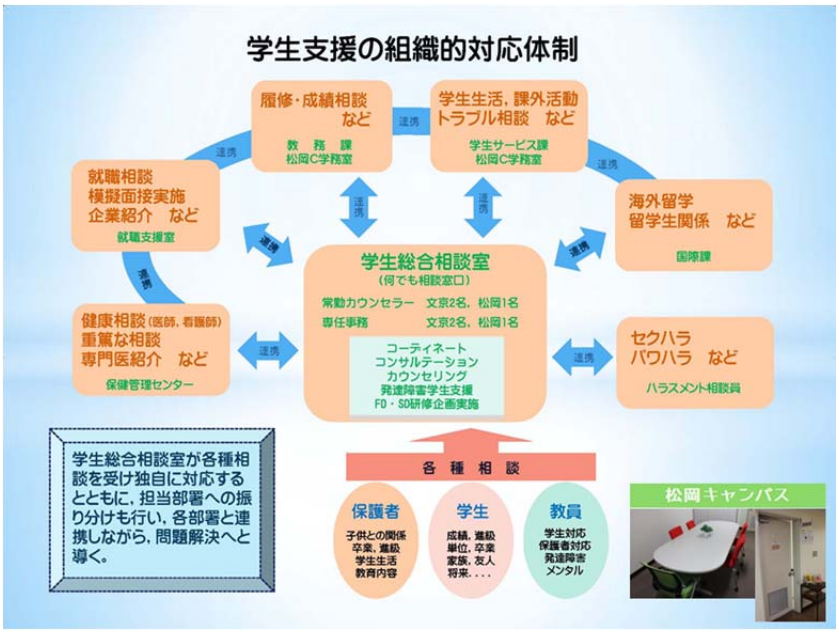
資料 1-1-14　医学系研究科における長期履修制度の適用状況

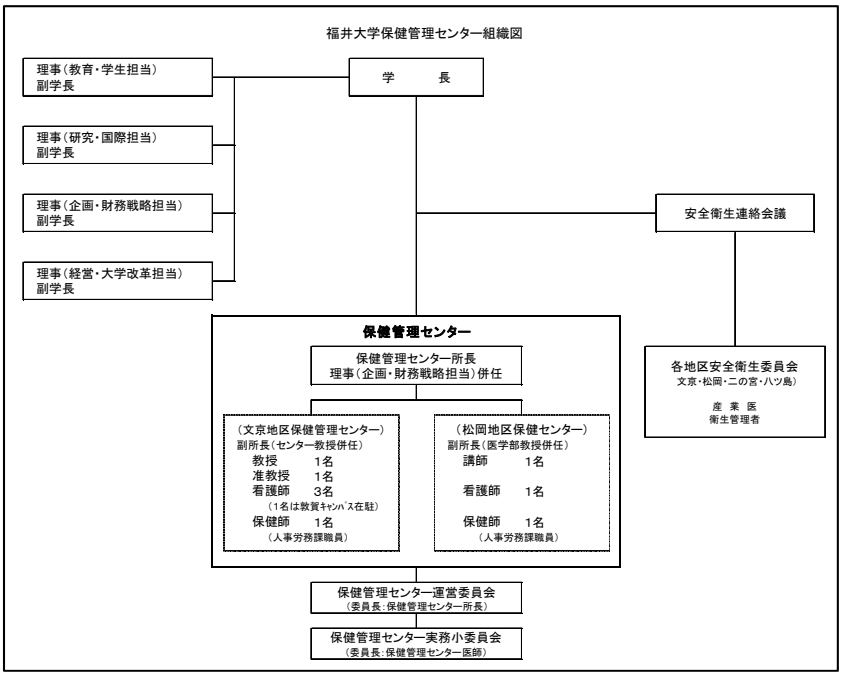
（人）

区分	平成22年度 長期履修者数（在学者数）	平成23年度 長期履修者数（在学者数）	平成24年度 長期履修者数（在学者数）	平成25年度 長期履修者数（在学者数）	平成26年度 長期履修者数（在学者数）	平成27年度 長期履修者数（在学者数）	計 長期履修者数（在学者数）	備考
博士課程	0 (93)	0 (102)	0 (111)	0 (111)	0 (117)	0 (128)	0 (662)	
修士課程	2 (22)	4 (27)	4 (28)	8 (30)	15 (30)	15 (32)	48 (169)	
医学系研究科　計	2 (115)	4 (129)	4 (139)	8 (141)	15 (147)	15 (160)	48 (831)	

（事務局資料）

資料 1-1-15　福井大学学生支援体制



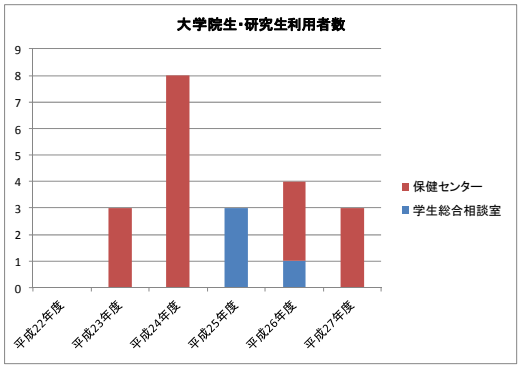


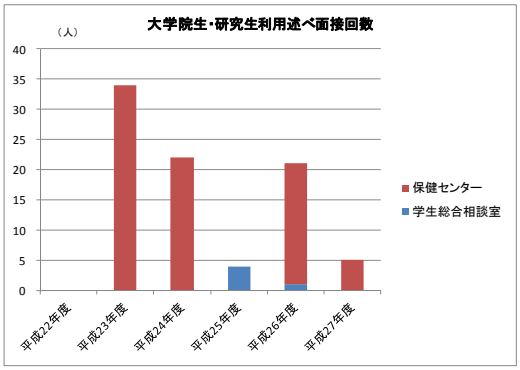
（事務局資料）

資料 1-1-16　松岡キャンパス学生総合相談室及び保健センター利用状況

年度	区　分	学生総合相談室						保健センター						計					
		実数(人)			延べ面接回数(回)			実数(人)			延べ面接回数(回)			実数(人)			延べ面接回数(回)		
		女	男	計	女	男	計	女	男	計	女	男	計	女	男	計	女	男	計
平成22年度(2010)	医学部生							45	22	67	272	255	527	45	22	67	272	255	527
	院生・研究生									0			0	0	0	0	0	0	0
	学　生　計							45	22	67	272	255	527	45	22	67	272	255	527
	コンサルテーション												97						97
	その他(卒業生等)												54						54
	総　　計							45	22	67	272	255	**678**	45	22	67	272	255	**678**
平成23年度(2011)	医学部生							74	22	96	382	165	547	74	22	96	382	165	547
	院生・研究生							1	2	3	12	22	34	1	2	3	12	22	34
	学　生　計							75	24	99	394	187	**581**	75	24	99	394	187	**581**
	コンサルテーション												117						117
	その他(卒業生等)												31						31
	総　　計							75	24	99	394	187	**729**	75	24	99	394	187	**729**
平成24年度(2012)	医学部生	35	9	44	98	46	144	45	29	74	327	76	403	80	38	118	425	122	547
	院生・研究生	0	0	0	0	0	0	3	5	8	13	9	22	3	5	8	13	9	22
	学　生　計	35	9	44	98	46	**144**	48	34	82	340	85	**425**	83	43	126	438	131	**569**
	コンサルテーション						0						187						187
	その他(卒業生等)						0						57						57
	総　　計	35	9	44	98	46	**144**	48	34	82	340	85	**669**	83	43	126	438	131	**813**
平成25年度(2013)	医学部生	12	10	22	36	25	61	69	34	103	301	66	367	81	44	125	337	91	428
	院生・研究生	0	3	3	0	4	4			0			0	0	3	3	0	4	4
	学　生　計	12	13	25	36	29	**65**	69	34	103	301	66	**367**	81	47	128	337	95	**432**
	コンサルテーション						14						126						140
	その他(卒業生等)						0						64						64
	総　　計	12	13	25	36	29	**79**	69	34	103	301	66	**557**	81	47	128	337	95	**636**
平成26年度(2014)	医学部生	28	23	51	111	75	186	42	9	51	307	20	327	70	32	102	418	95	513
	院生・研究生	0	1	1	0	1	1	2	1	3	19	1	20	2	2	4	19	2	21
	学　生　計	28	24	52	111	76	**187**	44	10	54	326	21	**347**	72	34	106	437	97	**534**
	コンサルテーション						56						69						125
	その他(卒業生等)						0						41						41
	出張相談	5	0	5	9	0	9							5	0	5	9	0	9
	総　　計	33	24	57	120	76	**252**	44	10	54	326	21	**457**	77	34	111	446	97	**709**
平成27年度(2015)	医学部生	39	42	81	202	102	304	24	8	32	186	39	225	63	50	113	388	141	529
	院生・研究生	0	0	0	0	0	0	2	1	3	4	1	5	2	1	3	4	1	5
	学　生　計	39	42	81	202	102	**304**	26	9	35	190	40	**230**	65	51	116	392	142	**534**
	コンサルテーション						92	15	9	24	72	9	81						173
	その他(卒業生等)	0	1	1	0	3	3	3	2	5	8	3	11	3	3	6	8	6	14
	出張相談	3	0	3	3	0	3							3	0	3	3	0	3
	総　　計	42	43	85	205	105	**402**	44	20	64	270	52	**322**	86	63	149	475	157	**724**

松岡キャンパス学生総合相談室：平成24年度開設





大学院生は社会人がほとんどであり，学部生と比して相談件数自体が少なく，利用者数は平成24年度以外はほぼ横ばいである（研究生の利用実績はない）。
述べ面接回数の減少については，大学院生の相談に対し，的確な支援を行った結果，利用の必要がなくなったためであり，有効な支援が行われていると言える（平成23，24年度利用者と平成26年度利用者は異なる大学院生である）。

（事務局資料）

資料 1-1-17　学生（大学院生含む）による図書館利用状況（平成 27 年度）

学生の医学図書館利用状況（平成27年度実績）　[24時間開館]

曜　日	学生数（人）	総利用者数（人）	学生利用率（%）[学生数/総利用者数]	1日当たりの学生利用者数（人）
平　日	115,647	123,729	93	479
土　曜	13,309	14,014	95	256
日　曜	16,997	17,166	99	316
祝　日	5,566	7,127	78	379
合　計	151,519	162,036	94	419

医学図書館蔵書状況

年　度	蔵書数（冊）			購入数（冊）
	和　書	洋　書	合　計	
平成22年度	60,770	62,497	123,267	3,188
平成23年度	62,900	63,257	126,157	2,763
平成24年度	63,993	63,842	127,835	2,582
平成25年度	65,614	64,465	130,079	2,132
平成26年度	66,315	64,629	130,944	1,744
平成27年度	66,573	64,552	131,125	2,013

＊電子ジャーナル，データベース，外国雑誌の毎年の度重なる高騰により，図書を購入する予算が圧迫されており，医学部，附属病院から補助金を受けている。
＊蔵書数に関しては，書架スペースの問題から随時重複図書等の廃棄を行っているため，若干の伸びにとどまっている。

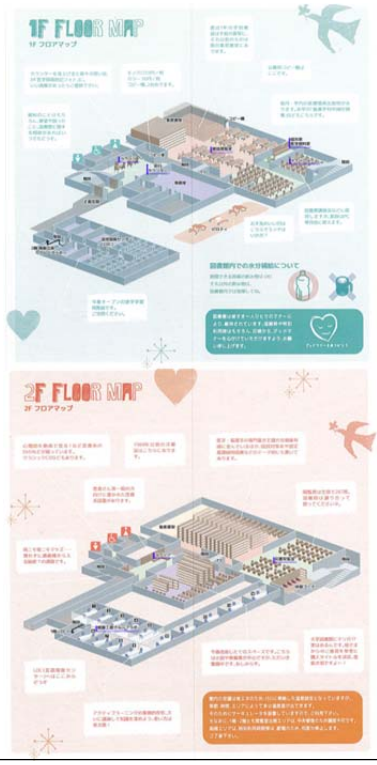
■　医学図書館の増改修状況

第１期に引き続き，学生の学修支援の基盤となるラーニングコモンズ機能を向上するため，医学図書館では学習スペース拡大のための増改築，言語開発センターの設置を行った。

●医学図書館

１．第２期増築（情報工房　14 室）
（開館）平成 23 年
（面積）3,015 ㎡　　（旧　2,484 ㎡）
（座席）427 席　　（旧　287 席）
14 室（各室　最大 10 名程度として，140 席を加算。実際の利用では各室３から６名程度で，チュートリアル授業時やゼミなどでは 10 名程度で利用。）
（特徴）少人数グループ学習室 14 室を増築し，小規模ゼミ・グループ学習などの環境改善

２．改築・改修
言語開発センター，２階閲覧室
（開設）平成 26 年
（面積）3,307 ㎡　　（旧　3,015 ㎡）
（特徴）・言語開発センターを開設し，個別ブース，多目的演習室，DVD ステーションなど自主的語学学習に適した教材や設備の提供
・２階閲覧室の参考図書室等を改修・整備し，開架用書架の増設



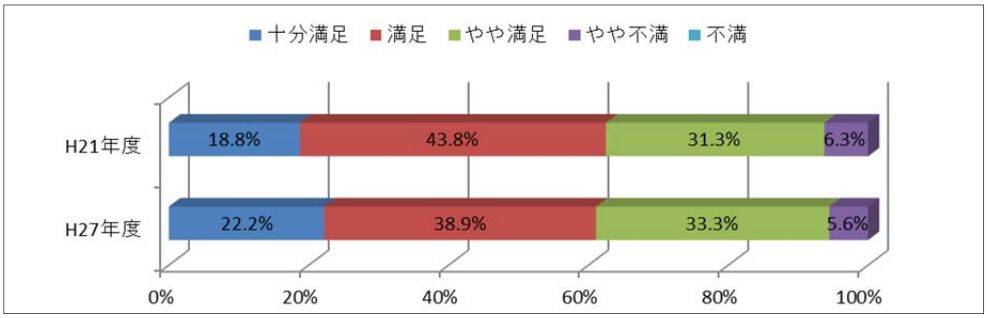
（事務局資料）

資料 1-1-18　平成 21 年度，平成 27 年度福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査（学生支援）

学生支援に対する満足度は第１期から高い水準にあったが，第２期の最終年度に当たる平成 27 年度の調査において，ほとんどの項目で満足度が上がっている[注)]。

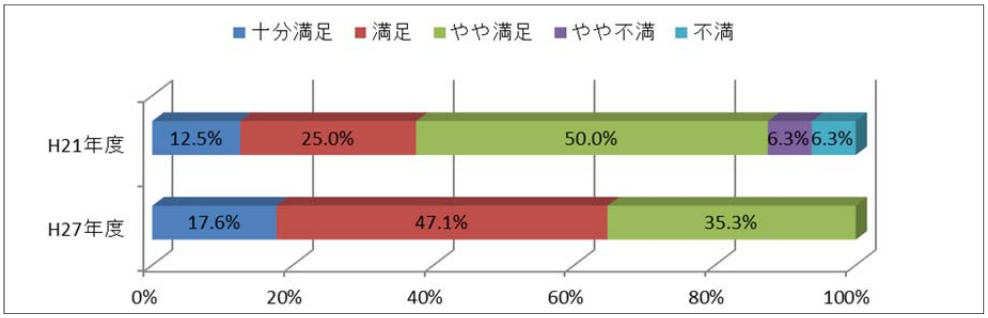
（注：全学対象調査より，医学系研究科大学院生を抽出）

■設問： 図書館サービスについて，あなたはどの程度満足していますか。



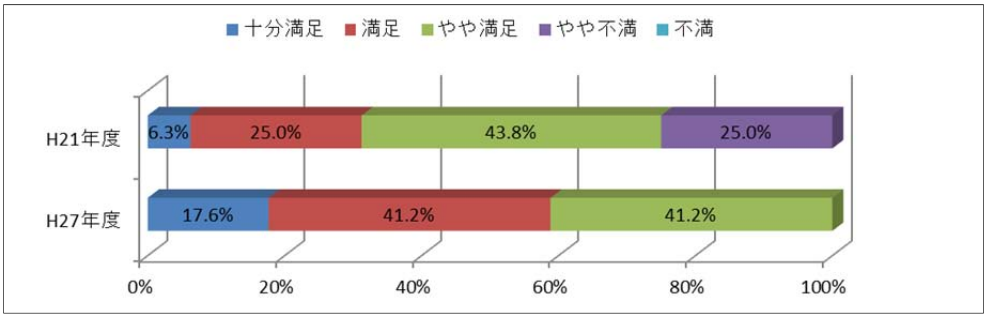
※ 第１期末と比較して第２期末では学生の満足度（十分～やや満足と回答した割合）は，0.7%向上している。

■設問： 教育支援（指導・助言教員，オフィスアワー等）について，あなたはどの程度満足していますか。



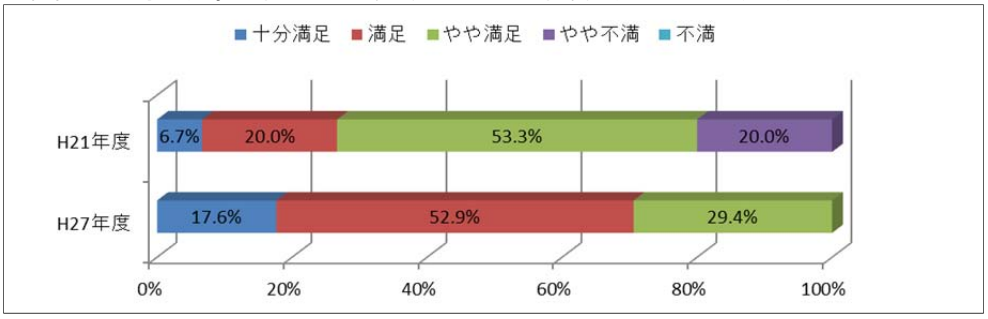
※ 第１期末と比較して第２期末では学生の満足度（十分～やや満足と回答した割合）は，12.5%向上している。特に十分満足および満足と回答した割合は 27.2%向上した。

■設問： 学生相談・ハラスメント対策について，あなたはどの程度満足していますか。



※ 第１期末と比較して第２期末では学生の満足度（十分～やや満足と回答した割合）は，25.0%向上している。やや不満および不満と回答した割合は０％となった。

■設問： 心身の健康対策について，あなたはどの程度満足していますか。



※ 第１期末と比較して第２期末では学生の満足度（十分～やや満足と回答した割合）は，20.0%向上している。やや不満および不満と回答した割合は０％となった。

（平成 21 年度および平成 27 年度「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」結果より抜粋）

【研究指導体制】

博士・修士課程ともに大学院生ごとに一人の主指導教員だけでなく副指導教員を置く指導体制となっている（**資料 1-1-19, 20**）。博士課程においては，改組により１専攻に統合したことにより，コースを越えた横断的指導がより効果的に行える体制となり，大学院生の満足度も良好である（**資料 1-1-21，P5-7 前掲資料 1-1-4，P5-10 前掲資料 1-1-8**）。

資料 1-1-19　副指導教員制度を定めた規則

大学院博士課程の指導教員の２人制に関する申合せ

大学院医学系研究科博士課程の学生は，学位論文作成に対する指導を受けるため、所属の主指導教員と相談の上１名の副指導教員を当教員了承のもと所属領域外より選ぶことが望ましい。

大学院学生は副指導教員を選んだ場合は、その教員名を学務室へ届け出る。

研究テーマの変更があれば、大学院学生と主指導教員の希望で副指導教員の変更は可能とする。

副指導教員は大学院博士課程の担当教員とし，少なくとも半年に一度は主指導教員とともに大学院学生の指導・相談にあたるものとする。

副指導教員は単なる半年に一度程度の指導・相談によって、当該論文の共著者たることを求めないことを原則とする。

福井大学大学院医学系研究科修士課程担当教員に関する申合せ（一部抜粋）

福井大学大学院医学系研究科修士課程（以下「修士課程」という。）の教育を担当する教員に関し、必要な事項を定めるものとする。

（副指導教員）
第３　研究指導を行う上で、指導教員が有益と認める場合は、副指導教員を置くことができる。
２　副指導教員は、「特別研究」を担当する教授，准教授，講師又は助教の中から、修士課程委員会の議を経て、学生ごとに定める。

（事務局資料）

資料 1-1-20　副指導教員制度適用状況

区　分	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度	計	備　考
博士課程	10	14	8	20	19	14	85	
	16	27	25	25	26	25	144	
修士課程	7	1	1	0	0	8	17	２年次に副指導教員を決定
	12	11	10	12	14	12	71	
医学系研究科計	17	15	9	20	19	22	102	
	28	38	35	37	40	37	215	

（注）各区分の下欄は、各年度の入学者数

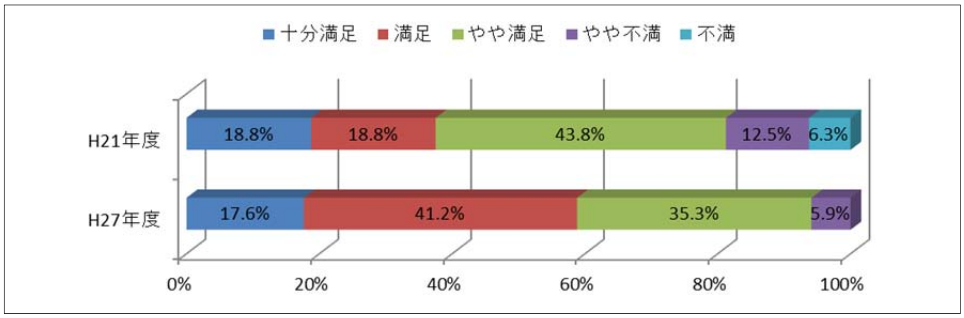
博士課程においては，主に臨床医学系領域に所属する学生が基礎医学系領域教員を副指導教員に選ぶことが多い。また，このようにして選ばれた副指導教員は学位論文の共著者にならないことで，自由な立場から意見が述べられることに特徴がある。

（事務局資料）

資料 1-1-21　平成 21 年度，平成 27 年度福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査（研究指導）

■設問：　大学院における研究指導について，あなたはどの程度満足していますか[注)]。

（注：全学対象調査より，医学系研究科大学院生を抽出）



※ 第１期末と比較して第２期末では学生の満足度（十分～やや満足と回答した割合）は，12.9%向上している。特に十分満足および満足と回答した割合は 21.3%向上した。

（平成 21 年度および平成 27 年度「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」結果より抜粋）

●多様な教員の確保の状況とその効果に関する例

【教育目的を実現するための教員構成】

医学系研究科の教員は医学部及び関連施設教員が兼務している。研究指導教員及び研究指導補助教員の配置数は，大学院設置基準第９条の規定に適合しており，大学院課程を遂行するために必要な教員が確保されている（**資料 1-1-22**）。また，博士・修士の両課程ともニーズに応じた最新の知見等を教授する必要があり，精選した内容に関して学外から非常勤講師を招聘している（**資料 1-1-23**）。

資料 1-1-22　医学系研究科における教員の配置状況

（人）　平成27年5月1日現在

区分	平成11年文部省告示第175号に定める教員数		研究指導教員数			研究指導補助教員数					合計	備考
	研究指導教員数	その他の教員組織	教授	准教授	計	教授	准教授	講師	助教	計		
博士課程 統合先進医学専攻	30	研究指導教員数と研究指導補助教員数を合わせて60以上とする。	41	12	53		21	5	33	59	112	
修士課程 看護学専攻	6	研究指導教員数と研究指導補助教員数を合わせて12以上とする。	8		8		6	4	1	11	19	

※ 関連施設教員（ライフサイエンスイノベーション推進機構（生命科学 複合研究教育センター，トランスレーショナルリサーチ推進センター，ライフサイエンス支援センター），高エネルギー医学研究センター及び子どものこころの発達研究センター教員）含む

※ 教授については，公募制であり大学院教育を担当するのに必要な教育研究業績を有する優秀な教員を採用している。

（事務局資料）

資料 1-1-23　医学系研究科（博士・修士）非常勤講師一覧

○ 博士課程

年度	授業科目	氏名	本務先	役職名	開設期間	担当時間
22	先端応用医学概論	田中　雅人	株式会社システムエッジ	代表取締役	後期	2
	先端応用医学概論	萩原　明人	九州大学大学院医学研究院	教授	後期	2
	先端応用医学概論	山口　功	学校法人物療学園	専任教員	後期	2
	医科学基礎総論	犬伏　正幸	放射線医学総合研究所	研究員	前期	2
	医科学基礎総論	佐賀　恒夫	放射線医学総合研究所	グループリーダー	前期	2
	医科学特論	黒瀬　等	九州大学大学院薬学研究院	教授	前期	2
	医科学特論	加藤　昌志	中部大学生命健康科学部	教授	後期	2
	先端応用医学概論	江川　清文	東京慈恵会医科大学	非常勤講師	後期	2
	医科学特論	笹原　正清	富山大学大学院医学薬学研究部	教授	後期	2
	医科学特論	成宮　周	京都大学大学院医学研究科	教授	後期	2
	先端応用医学概論	林　和子	公立南丹病院麻酔科 H2311～)	部長	後期	2
	医科学特論	大黒　徹	富山大学大学院医学薬学研究部	准教授	後期	2
			12			
23	先端応用医学概論	稲寺　秀邦	富山大学医学部	教授	後期	2
	先端応用医学概論	田中　雅人	株式会社システムエッジ	代表取締役	後期	2
	先端応用医学概論	玉城　英彦	北海道大学大学院医学研究科	教授	後期	2
	先端応用医学概論	中平　浩人	新潟青陵大学看護福祉心理学部	教授	後期	2
	先端応用医学概論	萩原　明人	九州大学大学院医学研究院	教授	後期	2
	先端応用医学概論	山口　功	学校法人物療学園	専任教員	後期	2
	医動物制御学特論, 医科学特論 医科学基礎総論	高田　伸弘	福井大学医学部	シニアフェロー	前期	計34
	医科学基礎総論	犬伏　正幸	放射線医学総合研究所	研究員	後期	2
	医科学基礎総論	工藤　崇	長崎大学大学院医歯薬学総合研究科	教授	後期	2
	医科学基礎総論	佐賀　恒夫	放射線医学総合研究所	グループリーダー	後期	2
	医科学基礎総論	藤林　康久	放射線医学総合研究所分子イメージング研究センター	センター長	後期	2
	医科学特論	柚崎　通介	慶應義塾大学医学部	教授	後期	2
	医科学特論	岡崎　仁	日本赤十字社血液事業本部中央血液研究所	研究開発部長	後期	2
	医科学特論	清水　重臣	東京医科歯科大学難治疾患研究所	教授	後期	2
	医科学特論	柳　茂	東京薬科大学生命科学部	教授	後期	2
			15			
24	医科学基礎総論	犬伏　正幸	放射線医学総合研究所	研究員	後期	2
	医科学基礎総論	佐賀　恒夫	放射線医学総合研究所	グループリーダー	後期	2
	医科学基礎総論	藤林　康久	放射線医学総合研究所分子イメージング研究センター	センター長	前期	2
	先端応用医学概論	稲寺　秀邦	富山大学医学部	教授	後期	2
	先端応用医学概論	河原　和夫	東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科	教授	後期	2
	先端応用医学概論	玉城　英彦	北海道大学大学院医学研究科	教授	後期	2
	先端応用医学概論	中平　浩人	新潟青陵大学看護福祉心理学部	教授	後期	2
	先端応用医学概論	萩原　明人	九州大学大学院医学研究院	教授	後期	2
	医動物制御学特論, 医科学基礎総論	高田　伸弘	福井大学医学部	シニアフェロー	前期	計32
	医科学基礎総論	八木　秀司	兵庫医科大学	准教授	前期	2
	先端応用医学概論	上原　雅隆	南原歯科医院	歯科医師	後期	2
	医科学特論	工藤　崇	長崎大学大学院医歯薬学総合研究科	教授	後期	2
	医科学特論	堀田　博	神戸大学医学部	教授	後期	2
	医科学特論	小室　輝昌	(元)早稲田大学人間科学部	教授	前期	2
	医科学特論	八木沼　洋行	福島県立医科大学	教授	前期	2
	機能画像医学特論Ⅰ	福島　和人	国立循環器病研究センター	医員	前期	2
	先端応用医学概論	大林　民典	東埼玉総合病院臨床検査科	部長	後期	2
	先端応用医学概論	佐多　徹太郎	富山県衛生研究所	所長	後期	2
	医科学特論	武田　宏司	北海道大学大学院薬学研究院	教授	後期	2
	医科学特論	田端　和仁	東京大学大学院工学系研究科	助教	後期	2
	医科学特論	野地　博行	東京大学大学院工学系研究科	教授	後期	2
	医科学特論	畑下　昌範	(財)若狭湾エネルギー研究センター	主任研究員	後期	2
			22			
25	医科学特論	倉光　成紀	大阪大学大学院理学研究科	教授	後期	2
	医科学特論	小湊　慶彦	群馬大学大学院医学系研究科	教授	後期	2
	医科学特論	関口　俊男	金沢大学理日本海域環境研究センター	臨海実験施設　助教	前期	2
	医科学特論	村松　郁延	福井大学子どものこころの発達研究センター	特命教授	後期	2
	医科学基礎総論	佐賀　恒夫	放射線医学総合研究所	グループリーダー	後期	2
	医科学基礎総論	藤林　康久	放射線医学総合研究所分子イメージング研究センター	センター長	後期	2
	医科学基礎総論	八木　秀司	兵庫医科大学医学部	准教授	前期	2
	先端応用医学概論	稲寺　秀邦	富山大学医学部	教授	前期	2
	先端応用医学概論	上原　雅隆	九州歯科大学	助教	後期	2
	先端応用医学概論	加藤　昌志	名古屋大学大学院医学系研究科	教授	前期	2
	先端応用医学概論	田中　雅人	(株)システムエッジ	代表取締役	後期	2
	先端応用医学概論	玉城　英彦	北海道大学医学部	特任教授	後期	2
	先端応用医学概論	中平　浩人	新潟青陵大学看護福祉心理学部	教授	前期	2
	先端応用医学概論	萩原　明人	九州大学大学院医学研究院	教授	後期	2
	先端応用医学概論	山口　功	大阪物療大学保健学	教授	後期	2
	地域総合医療学, 臨床疫学特論Ⅰ～Ⅲ	西山　慶	京都大学医学部附属病院	内科　講師	後期	2
	医科学基礎総論, 医科学特論	高田　伸弘	元福井大学医学部	准教授	前期	計4
	医科学特論	尾崎　博	東京大学大学院農学生命科学研究科	教授	前期	2
	医科学特論	中里　雅光	宮崎大学医学部	教授	後期	2
	医科学特論	村山　千恵子	東海大学医学部	講師	後期	2
	地域総合医療学	永田　高志	九州大学大学院医学研究院	学術研究員	前期 後期	4
	医科学特論	林　康紀	理化学研究所脳科学総合研究センター	チームリーダー	前期	2
	医科学特論	海老原　史樹文	名古屋大学大学院生命農学研究科	教授	後期	2
	医科学特論	秦　健一郎	国立成育医療研究センター研究所	周産期病態研究部長	後期	2
	医科学特論	野間　昭典	立命館大学生命科学部	教授	後期	2
	医科学特論	中村　桂一郎	久留米大学医学部	教授	後期	
			26			
26	医科学特論	工藤　崇	長崎大学大学院医歯薬学総合研究科	教授	前期	2
	医科学特論	小湊　慶彦	群馬大学大学院医学系研究科	教授	後期	2
	医科学特論	堀　正敏	東京大学大学院農学生命科学研究科	准教授	前期	2
	先端応用医学概論	稲寺　秀邦	富山大学医学部	教授	後期	2
	先端応用医学概論	河原　和夫	東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科	教授	後期	2
	先端応用医学概論	玉城　英彦	北海道大学医学部	特任教授	後期	2
	先端応用医学概論	中平　浩人	新潟青陵大学看護福祉心理学部	教授	後期	2
	先端応用医学概論	萩原　明人	九州大学大学院医学研究院	教授	後期	2
	地域総合医療学概論	永田　高志	九州大学大学院医学研究院	助教	前期 後期	4
	歯科口腔外科学特論演習	上原　雅隆	九州歯科大学	助教	後期	2
	地域総合医療学概論	西山　慶	京都大学医学部附属病院	内科　講師	後期	2
	医科学特論	菅井　学	京都大学医学部附属病院	講師	後期	2
	先端応用医学概論	川上　剛	国際労働機構本部	上級専門家	前期 後期	2
	地域総合医療学概論	渡瀬　博子	J p nese Emergency Medicine Network	ｽﾃｨｱﾘﾝｸﾞｺﾐｯﾃｨ	後期	2
	医科学特論	伊藤　誠二	関西医科大学	副学長	後期	2
	医科学特論	内橋　貴之	金沢大学理工学研究域	准教授	後期	2
	医科学特論	清川　悦子	金沢医科大学医学部	教授	後期	2
			17			
27	医科学特論	梶谷　宇	京都大学大学院医学研究科	特定准教授	後期	2
	医科学特論	高木　都	奈良県立医科大学	特任教授	前期	2
	医科学特論	西谷　友重	国立循環器病研究センター	分子生理部室長	前期	2
	先端応用医学概論	川上　剛	国際労働機構本部	労働衛生部長	後期	2
	先端応用医学概論	田中　雅人	(株)システムエッジ	代表取締役	後期	2
	先端応用医学概論	山口　功	大阪物療大学保健学	教授	後期	2
	地域総合医療学概論	永田　高志	九州大学大学院医学研究院	助教	前期 後期	4
	地域総合医療学概論	渡瀬　博子	J p nese Emergency Medicine Network	ｽﾃｨｱﾘﾝｸﾞｺﾐｯﾃｨ	後期	2
	歯科口腔外科学特論演習	上原　雅隆	九州歯科大学	講師	後期	2
	地域総合医療学概論	西山　慶	京都大学医学部附属病院	内科　講師	後期	2
	地域総合医療学概論	Robert D Abbott	滋賀医科大学アジア疫学研究センター	特任教授	前期	2
	先端応用医学概論	鈴木　一廣	順天堂大学医学部附属病院	助教	後期	2
	医科学特論	松浦　博	滋賀医科大学医学部	教授	後期	2
	医科学特論	新井　一郎	日本薬科大学薬学部	教授	後期	2
			14			

○ 修士課程

年度	授業科目	氏名	本務先	役職名	開設期間	担当時間
22	看護倫理, 看護教育論, コンサルテーション論	荒井　知子	杏林大学医学部附属病院	ｸﾘﾃｨｶﾙｹｱ専門看護師	後期 前期	計10
	看護教育論	白鳥　さつき	長野県看護大学	教授	後期	10
	看護管理政策論	森山　美知子	広島大学大学院	教授	後期	6
	コンサルテーション論	斎藤　清二	富山大学保健管理センター	教授	前期	8
	コンサルテーション論	山田　博夫	聖パウロ国際大学大学院	主任教授 副学長	前期	14
	がん病態論Ⅰ	谷　一彦	福井県済生会病院	ﾎｽﾋﾟｽ所長	前期	2
	基礎看護学特論	山内　豊明	名古屋大学医学部保健学科	教授	前期	6
	地域看護学特論	猫田　泰敏	首都大学東京健康福祉学部	教授	前期	4
	老人看護学特論	沼本　敦子	神戸市看護大学	教授	前期	6
	母子看護学特論	末原　紀美代	兵庫医療大学看護学部	教授	前期	3
			10			
23	看護教育論	白鳥　さつき	長野県看護大学	教授	後期	8
	看護管理政策論	森山　美知子	広島大学大学院	教授	後期	6
	コンサルテーション論	斎藤　清二	富山大学保健管理センター	教授	前期	8
	コンサルテーション論	河内　康恵	福井県済生会病院	認定看護師	前期	4
	コンサルテーション論	吉村　紀美枝	福井県済生会病院	認定看護師	前期	4
	基礎看護学特論	本田　育美	京都大学大学院医学研究科	准教授	前期	6
	地域看護学特論	猫田　泰敏	首都大学東京健康福祉学部	教授	前期	4
	老人看護学特論	沼本　敦子	神戸市看護大学	教授	前期	6
	母子看護学特論	長谷川　ともみ	富山大学医学部看護学科	教授	前期	3
			10			
24	看護教育論	白鳥　さつき	長野県看護大学	教授	後期	8
	看護管理政策論	森山　美知子	広島大学大学院	教授	後期	6
	コンサルテーション論	斎藤　清二	富山大学保健管理センター	教授	前期	8
	コンサルテーション論	河内　康恵	福井県済生会病院	認定看護師	前期	4
	基礎看護学特論	本田　育美	京都大学大学院医学研究科	准教授	前期	6
	地域看護学特論	猫田　泰敏	首都大学東京健康福祉学部	教授	前期	4
	老人看護学特論	沼本　敦子	神戸市看護大学	教授	前期	6
	母子看護学特論	中山　美由紀	大阪府立大学看護学部	教授	前期	2
			8			
25	看護研究	江本　リナ	日本赤十字看護大学大学院看護学研究科	准教授	前期	4
	看護倫理	米田　誠	福井県立大学看護福祉学部	教授	後期	2
	看護倫理, 看護教育論	比田井　理恵	千葉県救急医療センター	専門看護師	後期	計12
	看護理論	川嶋　みどり	日本赤十字看護大学	客員教授	前期	4
	看護理論	宮脇　美保子	慶應義塾大学大学院医療マネジメント研究科	教授	前期	4
	看護理論	山勢　博彰	山口大学大学院医学系研究科	教授	前期	4
	看護教育論	白鳥　さつき	長野県看護大学	教授	後期	8
	看護管理論	尾崎　フサ子	佐久大学看護学部	特任教授	前期	8
	看護政策論	井部　俊子	聖路加看護大学	学長	後期	4
	看護政策論	森山　美知子	広島大学医歯薬保健学研究院	教授	後期	6
	コンサルテーション論	斎藤　清二	富山大学保健管理センター	教授	前期	8
	コンサルテーション論	西端　若由	福井心臓血圧センター　福井循環器病院	看護師	前期	4
	コンサルテーション論	細田　清美	福井県済生会病院	認定看護師	前期	4
	コンサルテーション論	竹川　幸恵	大阪府立呼吸器・アレルギー医療センター	看護師	前期	4
	基礎看護学特論	本田　育美	京都大学大学院医学研究科	准教授	前期	4
	基礎看護学特論	吉岡　さおり	国際医療福祉大学小田原保健医療学部	准教授	前期	2
	地域看護学特論	猫田　泰敏	首都大学東京健康福祉学部	教授	前期	4
	災害看護学特論Ⅰ	野戸　結花	弘前大学大学院保健学研究科	教授	後期	4
	災害看護学特論Ⅰ・Ⅱ	山崎　加代子	福井県立大学看護福祉学部	講師	後期	計12
	災害看護学特論Ⅰ	上田　耕蔵	神戸協同病院	院長	後期	4
	災害看護学特論Ⅰ	永井　幸寿	アンサー法律事務所	所長(弁護士)	後期	4
	災害看護学特論Ⅱ	三澤　寿美	東北福祉大学健康科学部	教授	後期	4
	災害看護学特論Ⅱ	磯見　智恵	京都橘大学看護学部	准教授	後期	12
	災害看護学特論Ⅲ	小原　真理子	日本赤十字看護大学	教授	後期	4
	災害看護学特論Ⅲ	室崎　益輝	関西学院大学総合政策学部 ※退職	教授	後期	4
	災害看護学特論Ⅲ	渥美　公秀	大阪大学大学院人間科学研究科	教授	後期	4
	災害看護学特論Ⅲ	村井　雅清	CODE海外災害援助支援センター	理事・事務局長	後期	4
	災害看護学特論Ⅲ	福田　淑江	国立病院機構災害医療センター	看護部長	後期	4
			28			
26	看護研究	江本　リナ	日本赤十字看護大学大学院看護学研究科	准教授	前期	4
	看護倫理	米田　誠	福井県立大学看護福祉学部	教授	後期	2
	看護倫理, 看護教育論	比田井　理恵	千葉県救急医療センター	専門看護師	後期	計12
	看護理論	川嶋　みどり	日本赤十字看護大学	客員教授	前期	4
	看護理論	宮脇　美保子	慶應義塾大学大学院医療マネジメント研究科	教授	前期	4
	看護理論	山勢　博彰	山口大学大学院医学系研究科	教授	前期	4
	看護教育論	白鳥　さつき	愛知医科大学看護学部	教授	後期	8
	看護管理論	尾崎　フサ子	新潟青陵大学看護福祉心理学部	教授	前期	8
	看護政策論	井部　俊子	聖路加国際大学	学長	後期	4
	看護政策論	森山　美知子	広島大学医歯薬保健学研究院	教授	後期	6
	コンサルテーション論	斎藤　清二	富山大学保健管理センター	教授	前期	8
	コンサルテーション論	西端　若由	福井心臓血圧センター　福井循環器病院	看護師	前期	4
	コンサルテーション論	細田　清美	福井県済生会病院	認定看護師	前期	4
	コンサルテーション論	竹川　幸恵	大阪府立呼吸器・アレルギー医療センター	専門看護師	前期	4
	基礎看護学特論	本田　育美	名古屋大学大学院医学系研究科	教授	前期	4
	基礎看護学特論	吉岡　さおり	国際医療福祉大学小田原保健医療学部	准教授	前期	2
	地域看護学特論	猫田　泰敏	首都大学東京健康福祉学部	教授	前期	4
	災害看護学特論Ⅰ	野戸　結花	弘前大学大学院保健学研究科	教授	後期	4
	災害看護学特論Ⅰ・Ⅱ	山崎　加代子	福井県立大学看護福祉学部	講師	後期	計12
	災害看護学特論Ⅰ	上田　耕蔵	神戸協同病院	院長	後期	4
	災害看護学特論Ⅰ	永井　幸寿	アンサー法律事務所	所長(弁護士)	後期	4
	災害看護学特論Ⅱ	三澤　寿美	東北福祉大学健康科学部	教授	後期	4
	災害看護学特論Ⅱ	小林　明子	福井県立大学看護福祉学部	教授	後期	4
	災害看護学特論Ⅲ	小原　真理子	日本赤十字看護大学	教授	後期	4
	災害看護学特論Ⅲ	室崎　益輝	(元)関西学院大学総合政策学部	教授	後期	4
	災害看護学特論Ⅲ	渥美　公秀	大阪大学大学院人間科学研究科	教授	後期	4
	災害看護学特論Ⅲ	村井　雅清	CODE海外災害援助支援センター	理事・事務局長	後期	4
	災害看護学特論Ⅲ	福田　淑江	東京医療保健大学東が丘・立川看護学部	講師	後期	4
	災害看護学特論Ⅳ	山田　覚	高知県立大学看護学部	教授	前期	4
	災害看護学特論Ⅳ	黒田　裕子	NPO法人阪神高齢者・障害者支援ネットワーク	理事長	前期 後期	4
	災害看護学特論Ⅳ	菊池　志津子	(元)東京災害医療センター	看護部長	前期	4
	災害看護学特論Ⅳ	瀬戸　初江	東北薬科大学病院	看護局長	前期	4
			32			
27	看護管理論	尾崎　フサ子	新潟青陵大学　看護学科	教授	前期	8
	災害看護学特論Ⅳ	菊池　志津子	日本看護連盟	常任幹事	前期	4
	災害看護学特論Ⅳ	瀬戸　初江	東北薬科大学病院	看護局長	前期	4
	災害看護学特論Ⅳ	山田　覚	高知県立大学　看護学部	教授	前期	4
	災害看護学演習Ⅲ	北村　大樹	鯖江・丹生消防組合消防本部	参事	前期	28
	看護研究	江本　リナ	日本赤十字看護大学	教授	前期	4
	看護倫理	宮島　光志	富山大学大学院医学薬学研究部	教授	前期	4
	看護倫理	米田　誠	福井県立大学看護福祉学部	教授	後期	2
	看護倫理, 看護教育論	比田井　理恵	千葉県救急医療センター	専門看護師	後期	計12
	看護理論	川嶋　みどり	日本赤十字看護大学	名誉教授	前期	4
	看護理論	宮脇　美保子	慶應義塾大学大学院健康マネジメント研究科	教授	前期	4
	看護理論	山勢　博彰	山口大学大学院医学系研究科	教授	前期	4
	看護教育論	白鳥　さつき	愛知医科大学　看護学部	教授	後期	8
	看護政策論	井部　俊子	聖路加国際大学	学長	後期	4
	看護政策論	森山　美知子	広島大学大学院医歯薬保健学研究院	教授	後期	6
	コンサルテーション論	斎藤　清二	立命館大学 応用人間科学研究科	教授	前期	8
	コンサルテーション論	竹川　幸恵	大阪府立呼吸器・アレルギー医療センター	専門看護師	前期	4
	コンサルテーション論	西端　若由	福井心臓血圧センター福井循環器病院	認定看護師	前期	4
	コンサルテーション論	細田　清美	福井県済生会病院	認定看護師	前期	4
	基礎看護学特論	本田　育美	名古屋大学大学院医学系研究科	教授	前期	2
	基礎看護学特論	吉岡　さおり	京都府立医科大学 医学部看護学科	准教授	前期	2
	地域看護学特論	猫田　泰敏	首都大学東京健康福祉学部	教授	前期	4
	母子看護学特論	中山　美由紀	大阪府立大学　看護学部	教授	前期	2
	がん看護学演習Ⅰ	長　光代	富山県厚生連滑川病院	がん看護専門看護師	後期	18
	がん看護学演習Ⅱ	小板橋　喜久代	京都橘大学　看護学部	教授	後期	8
	がん看護学演習Ⅱ	佐久間　由美	聖隷三方原病院	がん看護専門看護師	後期	6
	がん看護学演習Ⅱ	紅谷　浩之	オレンジホームケアクリニック	院長	後期	12
	がん看護学特論Ⅳ, がん看護学演習Ⅰ	田墨　恵子	大阪大学医学部附属病院オンコロジーセンター	がん看護専門看護師	後期	計20
	がん看護学特論Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ　がん看護演習Ⅱ	我妻　孝則	金沢医科大学病院	がん看護専門看護師	前期 後期	計26
	がん看護学特論Ⅲ	高山　京子	聖隷クリストファー大学	看護師	前期	4
	がん看護学特論Ⅳ	内村　恵里子	石川県立中央病院	がん看護専門看護師	後期	4
	がん看護学特論Ⅴ	梅田　恵	昭和大学大学院保健医療学研究科	教授	後期	8
	がん看護学特論Ⅴ	小島　ひで子	北里大学看護学部	教授	後期	4
	がん看護学演習Ⅱ	橘　幸子	福井医療短期大学看護学科	教授	後期	2
	がん看護学演習Ⅱ	村上　真由美	富山赤十字病院	がん看護専門看護師	後期	10
			35			

（事務局資料）

●入学者選抜方法の工夫とその効果に関する例

【入学者募集方針】

博士・修士課程ともにアドミッション・ポリシー(AP)を設定し，大学ホームページ，学生募集要項，大学院案内に掲載し周知している（**資料 1-1-24(1)，24(2)**）。また，全ての試験に面接（口頭試問）を課し，AP に沿った入学者選抜に努めるとともに，適宜改善を図っている。特に修士課程では，一般選抜と社会人特別選抜を実施しており，個別学力検査，面接及び学業成績証明書の内容で総合的に選抜している（**資料 1-1-25，26**）。

なお，博士課程では，学修成果や社会ニーズに基づき平成 25 年度の改組時に定員を 30 名から 25 名に適正化した（**資料 1-1-27**）。

資料 1-1-24(1)　博士課程アドミッション・ポリシー（一部抜粋）

1　アドミッション・ポリシー

■求める学生像

理念・目標を達成するために，

博士課程では，

①　医学・生命科学領域において，科学的・論理的な思考で高い水準の研究の遂行・発信を目指す人

②　各医療分野で優れた臨床研究能力と先端的で高度な臨床技能を備えた医学研究者を目指す人

③　研究・教育指導の出来る卓越した総合診療医・ＥＲ救急医・家庭医を目指す人

を求めています。

■入学者選抜の基本方針

博士課程では，将来，医療ならびに関連分野の中核として活躍する多くの人材を育成するため，以下のように入学の門戸を広げています。

①　入学の時期：春季（4 月）と秋季（10 月）の年 2 回とし，それに合わせて入学試験を年 2 回行っています。

②　出願資格：大学の医学，歯学又は修業年限 6 年の薬学若しくは獣医学を履修する課程を卒業した者だけでなく，他学部卒業者及び短大や専修学校修了者に対しても，教育，研究又は診療に従事した期間の研究業績を持って，卒業と同等以上の学力があると審査した者には出願資格を認めています。

③　学力検査等：筆記試験(英語)と志望する専攻・部門（コース）についての口頭試問を行い，語学力及び専門的知識を評価します。

http://www.u-fukui.ac.jp/user_admission/examination/admi_policy/med03/

（事務局資料）

資料 1-1-24(2)　修士課程アドミッション・ポリシー(一部抜粋)

1　アドミッション・ポリシー

■求める学生像

理念・目標を達成するために,

修士課程では,

①　高度な専門性を有しかつ社会性に富み,

②　地域医療に貢献する志を持ち,

③　新たな課題に取り組み，研究能力を身につける意欲がある人を求めています。

■入学者選抜の基本方針

修士課程では,「求める学生像」にふさわしい者を選抜するため，多様な観点から受験者の学力や資質を評価します。また，全ての試験に面接を課し，アドミッション・ポリシーに沿った入学者選抜に努めています。

①　一般選抜

大学を卒業した者及び同等以上の学力があると認めた者に対し，個別学力検査及び面接並びに学業成績証明書の内容を総合して選抜します。

個別学力検査では，志望する研究領域における専門的知識，語学力を評価します。

②　社会人特別選抜

大学を卒業した者及び同等以上の学力があると認めた者で，看護師，保健師又は助産師の免許を有し，一定期間の看護実務経験を有する者に対し，個別学力検査及び面接並びに学業成績証明書の内容を総合して選抜します。

個別学力検査では，論理的思考力を評価します。

http://www.u-fukui.ac.jp/user_admission/examination/admi_policy/med02/

（事務局資料）

資料 1-1-25　大学院医学系研究科入学者選抜の種類と方法（平成 28 年度入学生）

課程	選抜の種類と方法	実施期日
修士課程	一般選抜（募集人員12名（社会人特別選抜を含む）） 【学力検査（専門科目，英語，面接），書類審査（成績証明書）】	第１回：平成27年9月1日 第２回：平成28年2月19日 第３回(２次募集)：平成28年3月3日
	社会人選抜（一般選抜と併せて募集人員12名） 【学力検査（小論文，面接），書類審査（成績証明書）】	
博士課程	一般選抜（募集人員：25名） 【学力検査（筆記試験，口頭試問），書類審査（成績証明書）】	第１回：平成27年9月1日 第２回：平成28年2月19日
	秋季（10月）入学（一般選抜と併せて募集人員25名） 【学力検査（筆記試験，口頭試問），書類審査（成績証明書）】	秋季入学：平成27年9月1日

（事務局資料）

資料 1-1-26　大学院医学系研究科入学者選抜方法等の改善について

年　度	博士課程	修士課程
平成22年度 (平成23年度入試)	・「初期研修同時履修コース」を開始	
平成23年度 (平成24年度入試)	・各専攻の募集定員を統一化	
平成24年度 (平成25年度入試)	・1専攻3コースに改組 ・募集人員の適正化（５名減） ・出願資格に修業年限６年の薬学を追加	
平成25年度 (平成26年度入試)		・災害看護学領域を追加 ・第１回，第２回入学試験とし，募集要項を年１冊合冊に変更
平成26年度 (平成27年度入試)	・募集要項を英文併記で作成，公表 ・出願資格審査及び出願様式の一部を大学ウェブサイトからダウンロード可能	・災害看護専門看護師（CNS）教育課程の募集を開始 ・出願資格審査及び出願様式の一部を大学ウェブサイトからダウンロード可能
平成27年度 (平成28年度入試)		・「がん看護専門看護師（CNS）教育課程」の募集を開始

（事務局資料）

資料 1-1-27　博士課程　入学定員の見直し・適正化状況

福井大学大学院医学系研究科（博士課程）の改組について（決定）

福井大学大学院医学系研究科の改組（平成 25 年４月から）について，平成 24 年８月 28 日に設置報告書が文部科学省に受理され，正式に決定した。

（博士課程）
現在の２専攻を下表のとおり１専攻に統合する。平成 25 年４月入学者は全員「統合先進医学専攻」に入学することとなる。

（旧）

専攻名	定員
医科学専攻	5
先端応用医学専攻	25

（新）

専攻名	定員
統合先進医学専攻	**25**

（事務局資料）

【入学者確保と選抜】

①　入学者を確保するために広報を積極的に行うとともに，修学及び経済的サポートを行った。第１期と比べ大学院生の経済的支援に対する満足度は向上している（**資料 1-1-28～39**）。

資料 1-1-28　大学院医学系研究科における入学者確保の工夫について

博士課程	修士課程
大学院案内：博士課程2013版発行＜英文併記＞ （平成22年度作成）（**資料1-1-29**）	
大学院案内：博士課程2014改定，修士課程版作成 大学ホームページにデジタルパンフレットとして公開（平成23年度作成） （**資料1-1-29，30**）	
平成26年度秋季（10月）入学・平成27年度第１回・第２回募集要項の英文併記 （**資料1-1-31**）（平成26年度作成）	
平成27年度募集要項（博士課程，修士課程）の出願書類様式のダウンロードサービス開始 （平成26年度） http://www.u-fukui.ac.jp/user_admission/examination/essential_point/med/med04/grad_guideline/ http://www.u-fukui.ac.jp/user_admission/examination/essential_point/med/med03/grad_guideline/	
秋季入学の実施 外国人留学希望者や勤務状況に合わせ，10月入学も実施している。 （**資料1-1-31，32**）	社会人特別選抜の実施 現役看護師のスキルアップ，地域医療現場のリーダーの輩出を目指す （**資料1-1-33**）
	県内外の総合病院等を訪問 （平成22年度入学生の確保のため平成21年度より実施） ・志願者の獲得のため，大学院への進学及び看護キャリアアップセンターの認定看護師課程，人材育成部門の看護実践能力開発講座について情報を提供 ・現場の声の聞き取り調査 （**資料1-1-34**）
	選抜方法の改正 学校教育を離れた社会人学生の受験を促すため，英文出題のみとしていた社会人特別選抜の小論文試験を，平成22年度入試より，和文でも出題 （**資料1-1-35**）

修学サポート
［長期履修制度］ 標準就業年限を越えて一定期間にわたり計画的に教育課程を履修 （**P5-13 前掲資料1-1-12～14**）
［夜間開講］大学院設置基準第14条に定める教育方法の特例 昼夜開講制による授業を実施。授業及び研究指導を夜間や特定の時間又は時期に履修することができる。 （**資料1-1-36**）
［医学図書館の24時間開館］ 閉館時の無人開館を実施。原則24時間利用可となっており，社会人大学院生が勤務後に利用しやすい環境が整えられている。 （**P5-16 前掲資料1-1-17**）

（事務局資料）

資料 1-1-29　大学院案内





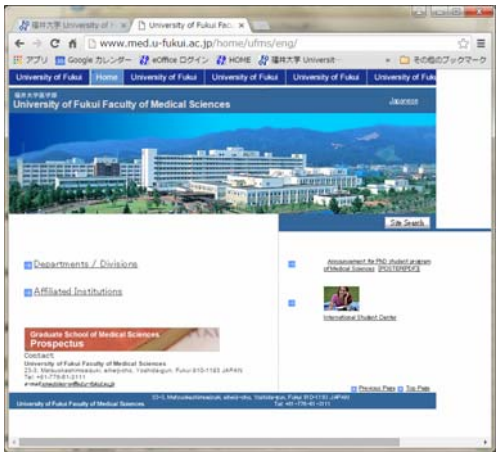
＜博士課程大学院案内＞英語を併記



（事務局資料）

資料 1-1-30　医学系研究科　大学院案内デジタルパンフレットホームページ掲載状況

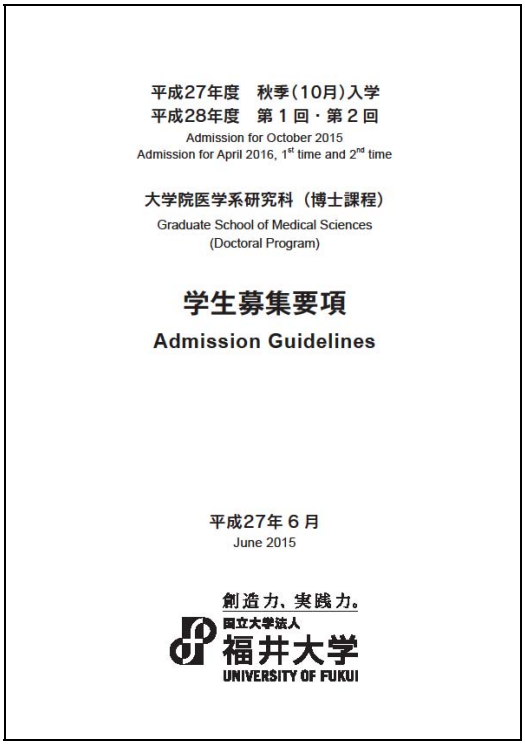




（事務局資料）

資料 1-1-31　博士課程募集要項（抜粋）

■平成 26 年度秋季（10 月）入学および平成 27 年度募集要項（平成 26 年度作成）より英文併記



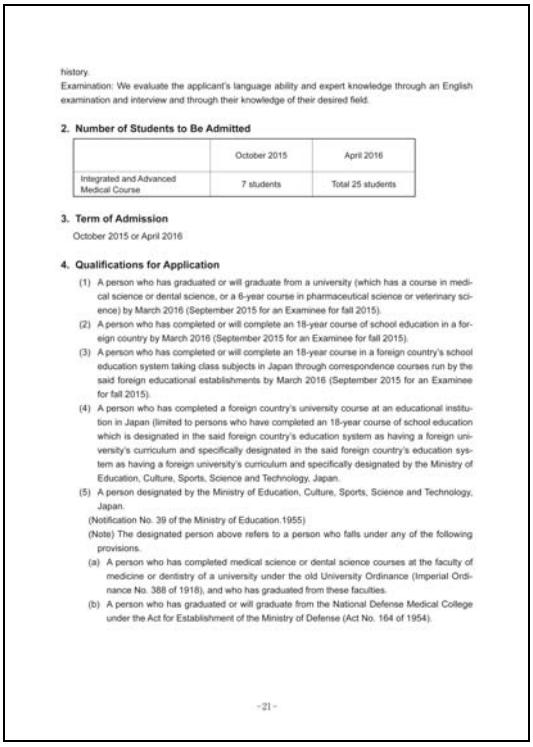
平成27年度　秋季(10月)入学
平成28年度　第１回・第２回
Admission for October 2015
Admission for April 2016, 1st time and 2nd time

大学院医学系研究科（博士課程）
Graduate School of Medical Sciences
(Doctoral Program)

学生募集要項
Admission Guidelines

平成27年６月
June 2015

創造力、実践力。
国立大学法人 福井大学
UNIVERSITY OF FUKUI



history.
Examination: We evaluate the applicant's language ability and expert knowledge through an English examination and interview and through their knowledge of their desired field.

2. Number of Students to Be Admitted

	October 2015	April 2016
Integrated and Advanced Medical Course	7 students	Total 25 students

3. Term of Admission
October 2015 or April 2016

4. Qualifications for Application
(1) A person who has graduated or will graduate from a university (which has a course in medical science or dental science, or a 6-year course in pharmaceutical science or veterinary science) by March 2016 (September 2015 for an Examinee for fall 2015).
(2) A person who has completed or will complete an 18-year course of school education in a foreign country by March 2016 (September 2015 for an Examinee for fall 2015).
(3) A person who has completed or will complete an 18-year course in a foreign country's school education system taking class subjects in Japan through correspondence courses run by the said foreign educational establishments by March 2016 (September 2015 for an Examinee for fall 2015).
(4) A person who has completed a foreign country's university course at an educational institution in Japan (limited to persons who have completed an 18-year course of school education which is designated in the said foreign country's education system as having a foreign university's curriculum and specifically designated in the said foreign country's education system as having a foreign university's curriculum and specifically designated by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology, Japan.
(5) A person designated by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology, Japan.
(Notification No. 39 of the Ministry of Education.1955)
(Note) The designated person above refers to a person who falls under any of the following provisions.
(a) A person who has completed medical science or dental science courses at the faculty of medicine or dentistry of a university under the old University Ordinance (Imperial Ordinance No. 388 of 1918), and who has graduated from these faculties.
(b) A person who has graduated or will graduate from the National Defense Medical College under the Act for Establishment of the Ministry of Defense (Act No. 164 of 1954).

-21-

（平成 27 年度秋季（10 月）入学および平成 28 年度募集要項より抜粋）

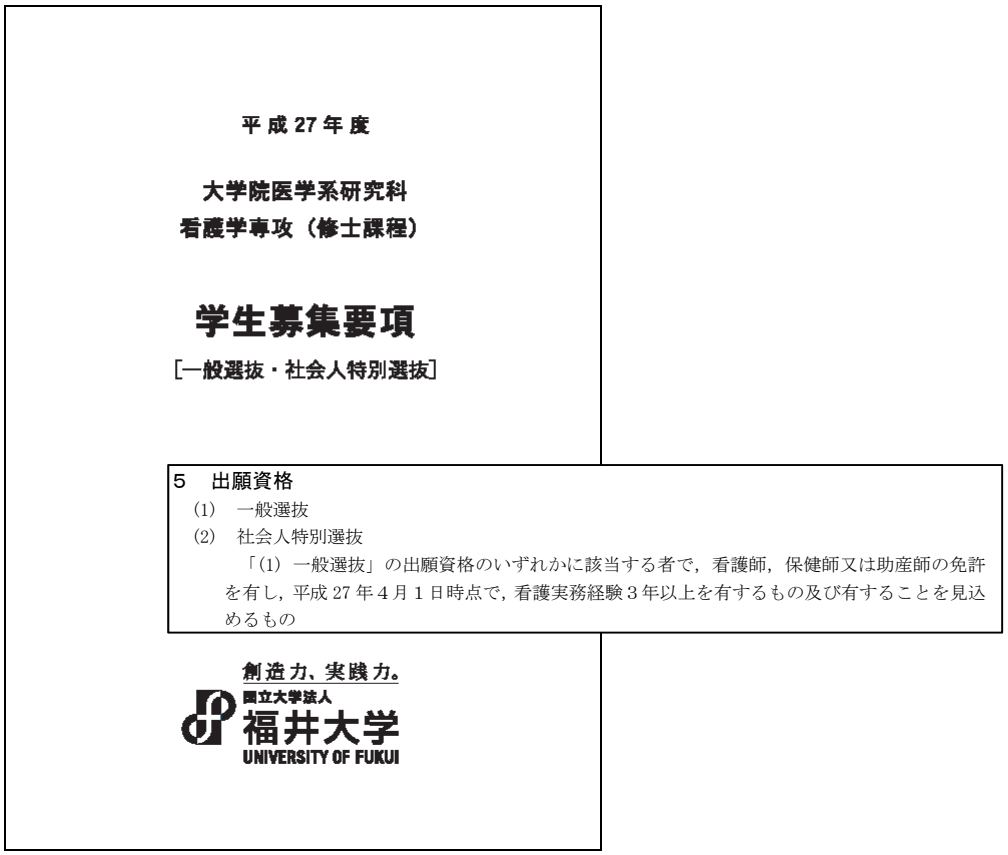
資料 1-1-32　博士課程における秋季入学の状況

（人）

区分	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	計	備考
	秋季入学者数	秋季入学者数	秋季入学者数	秋季入学者数	秋季入学者数	秋季入学者数	秋季入学者数	
	（全入学者数）	（全入学者数）	（全入学者数）	（全入学者数）	（全入学者数）	（全入学者数）	（全入学者数）	
博士課程	6	12	6	11	11	7	53	
	16	27	27	25	26	25	146	

（事務局資料）

資料 1-1-33　修士課程募集要項表紙及び出願資格



平成 27 年度

大学院医学系研究科
看護学専攻（修士課程）

学生募集要項

［一般選抜・社会人特別選抜］

5　出願資格
(1)　一般選抜
(2)　社会人特別選抜
「(1) 一般選抜」の出願資格のいずれかに該当する者で，看護師，保健師又は助産師の免許を有し，平成 27 年４月１日時点で，看護実務経験３年以上を有するもの及び有することを見込めるもの

創造力、実践力。
国立大学法人
福井大学
UNIVERSITY OF FUKUI

（事務局資料）

資料 1-1-34　修士課程病院等 PR 訪問実績及び出願状況

訪　問　先	21年度訪問	H22年度入試受験者数	22年度訪問	H23年度入試受験者数	23年度訪問	H24年度入試受験者数	24年度訪問	H25年度入試受験者数	25年度訪問	H26年度入試受験者数	26年度訪問	H27年度入試受験者数	27年度訪問	H28年度入試受験者数
国立病院機構 あわら病院	○	2	○		○	1	○		○		○		○	
杉田玄白記念　公立小浜病院	○		○		○				○		○		○	
公立丹南病院	○		○		○		○	1	○	1	○		○	
国立病院機構 敦賀医療センター（福井病院）	○		○		○		○		○				○	
市立敦賀病院（敦賀市立看護専門学校）	○		○		○		○	2	○		○		○	
福井愛育病院				1			○							
地域医療機能推進機構　福井勝山総合病院	○		○		○		○	1	○		○		○	
福井県済生会病院	○	1	○			2	○		○	4	○	1	○	
福井県立病院	○	1	○		○		○		○	1	○	2	○	1
医療法人 福井厚生病院	○	1	○		○		○		○		○		○	
医療法人 福井循環器病院	○		○	1	○		○		○		○		○	
福井赤十字病院	○	1	○		○	1	○	1	○	1	○	1	○	1
財団法人 福井総合病院（福井医療短期大学）	○	2	○	5	○	2	○	3	○	1	○		○	
加賀市民病院										1	○		○	
山中温泉医療センター											○			
県庁　健康福祉部地域医療課					○		○		○		○		○	
福井健康福祉センター					○		○		○		○		○	
丹南健康福祉センター（鯖江庁舎）					○		○		○		○		○	
坂井健康福祉センター					○		○		○					
奥越健康福祉センター					○									
北陸電力株式会社 福井健康管理センター							○							
訪問病院・施設数 *（ ）は内数で県外	12 (0)		12 (0)		16 (0)		17 (0)		16 (0)		16 (2)		16 (1)	
＜訪問施設以外の受験者数＞														
福井大学医学部附属病院		4		3		4		3		2		6		7
その他				1				1		2		2		3
職歴なし										1				
受験者数　計		12		11		10		12		14		12		12

（事務局資料）

資料 1-1-35　修士課程募集要項：入学者選抜方法

9　入学者選抜方法

入学者の選抜方法は，一般選抜，社会人特別選抜とも，提出された成績証明書，研究志願調書及び学力検査等（筆記試験，面接）の結果を総合して合格者を決定します。

⑴　学力検査等の期日

・平成28年度第１回入学試験　平成27年９月１日㈫

・平成28年度第２回入学試験　平成28年１月22日㈮

⑵　学力検査科目等及び時間

科　目　等	時　間	一般選抜	社会人特別選抜
専　門　科　目（基礎看護学，地域看護学，成人看護学，老年看護学，母子看護学，災害看護学）	9：00～10：30	○	
英　語	11：00～12：00	○	
小　論　文	11：00～12：00		○
面　接	13：00～	○	○

（備考）

①　一般選抜における専門科目は，「基礎看護学」，「地域看護学」，「成人看護学」，「老年看護学」，「母子看護学」，「災害看護学」から第１志望の教育・研究領域の１題を含め，２題を選択し，解答してください。がん看護専門看護師（CNS)教育過程を志望する場合は，「成人看護学」を含め，２題を選択し，解答してください。

②　小論文は，英文及び和文を用いて出題し，和文で解答を求めます。

③　英語及び小論文の試験については，英和辞書（電子辞書類を除く）１冊の持ち込みを許可します。ただし，医学辞書，参考書（単語帳を含む）等を辞書代わりに使用することは認めません。

④　社会人特別選抜における面接においては，看護に関する専門知識の口頭試問を行います。

（事務局資料）

資料 1-1-36　大学院設置基準第 14 条に定める教育方法の特例（[夜間開講] の適用状況）

○大学院設置基準第14条（教育方法の特例）

大学院の課程においては、教育上特別の必要があると認められる場合には、夜間その他特定の時間又は時期において授業又は研究指導を行う等の適当な方法により教育を行うことができる。

	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	合 計
博士課程	72	91	97	99	103	113	575
修士課程	22	25	27	30	30	32	166
小 計	94	116	124	129	133	145	741

（人）

（事務局資料）

資料 1-1-37　医学系研究科における入学者確保の工夫について（経済的サポート）

博士課程	修士課程
［大学院入学時成績優秀による授業料免除制度］ 現職教員等又は医療機関，企業等に勤務している社会人であって，大学院入学時の成績が優秀と認められる者 医学系研究科において，ＡＴＭプログラム等を利用し優秀な成績で合格したと認められる者 等を対象 （**別添資料１**）	
［福井大学大学院医学系研究科振興奨学金］ 医学系研究科の高度専門医療人育成を図ることを目的とし，医学領域又は看護領域における優れた研究・実践力を有する医療人を目指す社会人大学生（医師を除く）対象 （**別添資料２**）	
［福井大学大学院医学系研究科基礎医学振興奨学金］ 基礎医学系分野の研究者を目指す大学院生対象 （**別添資料３**）	
［福井大学大学院医学系研究科画像医学振興奨学金］ 画像診断分野の高度専門医療人育成を目的し，医科学コース機能画像医学に入学した大学院生を対象 （**別添資料４**）	
［福井大学大学院医学系研究科私費外国人留学生振興奨学金］ 私費外国人留学生の経済的支援を目的 （**別添資料５**）	

（事務局資料）

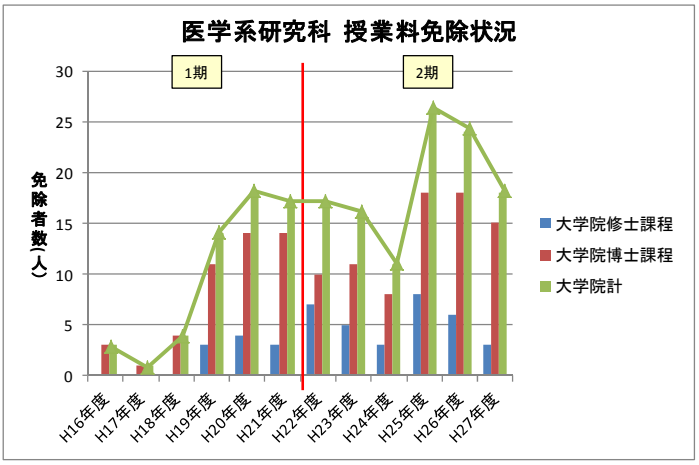
資料 1-1-38　授業料免除，奨学金等利用状況

授業料免除決定者数は第２期前半は第１期より若干減少していたが，第２期後半の平成 25 年度に ATM プログラム等を利用し優秀な成績で合格したと認められる者の推薦可能人数を増やし，より多くの大学院生が経済的サポートを受けられるよう申合せを改正したことにより，授業料免除者数が増え，大学院生の経済的支援の拡充となっている（**別添資料 1**）。

授業料免除者　決定者人数一覧（H16～27年度）

（人）

	H16年度	H17年度	H18年度	H19年度	H20年度	H21年度	H22年度	H23年度	H24年度	H25年度	H26年度	H27年度
大学院修士課程	0	0	0	3	4	3	7	5	3	8	6	3
大学院博士課程	3	1	4	11	14	14	10	11	8	18	18	15
大学院計	3	1	4	14	18	17	17	16	11	26	24	18



医学系研究科大学院生対象の奨学金は，第１期の平成 20 年度に「医学系研究科基礎医学振興奨学金」を導入。第２期に更に「医学系研究科振興奨学金」「医学系画像医学振興奨学金」を追加導入したことによって，大学院生の経済的支援が更に拡充された。

【医学系研究科基礎医学振興奨学金】 平成20年3月6日施行

内訳	平成20年度	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度
新規	1	0	0	0	0	0	0	0
継続	0	1	1	1	0	0	0	0
計	1	1	1	1	0	0	0	0

【医学系研究科振興奨学金】 平成22年4月1日施行

内訳			平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度
新規			2	1	0	0	3 (1)	1 (1)
継続			0	2	3	2	0	3 (1)
計			2 (0)	3 (0)	3 (0)	2 (0)	3 (1)	4 (2)

*( )修士課程学：内数

【医学系画像医学振興奨学金】 平成23年4月1日施行

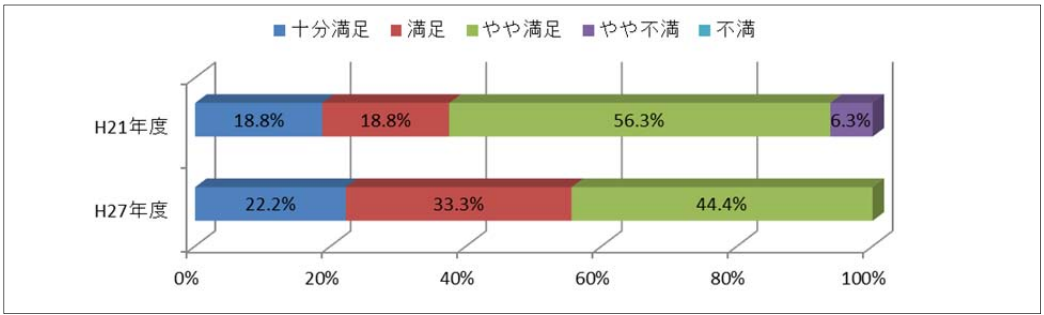
内訳				平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度
新規				2	0	0	0	0
継続				0	2	2	2	1
計				2	2	2	2	1

（事務局資料）

資料 1-1-39　平成 21 年度，平成 27 年度福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査（経済的支援）

■設問：奨学金・授業料免除等経済的支援について，あなたはどの程度満足していますか[注]。

（注：全学対象調査より，医学系研究科大学院生を抽出）



※ 第１期末と比較して第２期末では学生の満足度（十分～やや満足と回答した割合）は，
6.3%向上している。やや不満および不満と回答した割合は０％となった。

（平成 21 年度および平成 27 年度「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」結果より抜粋）

②　医学系研究科の第２期における入学定員充足率は，博士・修士課程とも第１期に比べ大幅に是正され，概ね適切である（**資料 1-1-40，41**）。

特に，修士課程では，長期履修制度を活用した社会人学生が増えてきている（**P5-13 前掲資料 1-1-14**）。また，看護キャリアアップセンターの認定看護師教育課程の収容定員充足率は，概ね 100%であり，適切である（**資料 1-1-42**）。

資料 1-1-40　入学定員充足率の適正化に向けた改善の実施とその成果

■入学定員充足率適正化に向けた取組

博士課程における取組

①組織見直し（平成 25 年度）

・日本初「地域総合医療学コース」の新設を含む，２専攻から１専攻３コースへの改組を行い，合わせて入学定員を 30 名から 25 名に適正化

②ATM（Advanced Training of Medico-research）プログラムの実施（平成 23 年度）

・卒後臨床研修を行いながらの大学院進学（大学院博士課程初期研修同時履修コース）

・学部学生による大学院講義の先取り履修（博士課程科目早期履修コース）

③留学生を対象とした私費外国人留学生振興奨学金制度の創設

④医博士課程を紹介するパンフレット（英文併記）の作成

■平成 25 年改組後の入学定員，実入学者数

研究科名	平成 25 年度		平成 26 年度		平成 27 年度		直近 3 年間の平均
	入学定員 入学者	入学定員充足率	入学定員 入学者	入学定員充足率	入学定員 入学者	入学定員充足率	
博士課程	25 25	1.00	25 26	1.04	25 25	1.00	1.01

修士課程における取組

①専門看護師（CNS）教育課程の開設

・社会ニーズを踏まえ，平成 26 年度に日本初の「災害看護 CNS 課程」を開設，翌年には「がん看護専 CNS 課程」を開設し，毎年学生の受け入れを行っている

②県内外総合病院等への PR 訪問

・志願者獲得のため，病院等を訪問し，大学院修士課程の入学試験及び大学院での学びについて説明し，PP を行っている

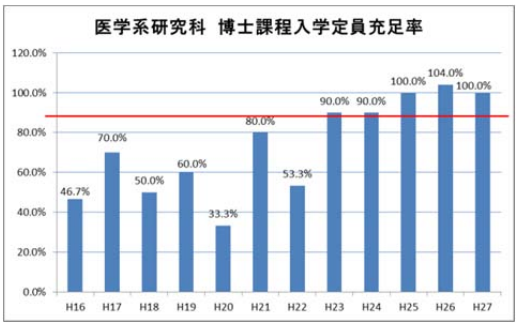
③修士課程を紹介するパンフレットの作成

■平成 25 年以降の入学定員，実入学者数

研究科名	平成 25 年度		平成 26 年度		平成 27 年度		直近 3 年間の平均
	入学定員 入学者	入学定員充足率	入学定員 入学者	入学定員充足率	入学定員 入学者	入学定員充足率	
修士課程	12 12	1.00	12 14	1.17	12 12	1.00	1.06

（事務局資料）

資料 1-1-41　医学系研究科における入学定員充足率





博士課程：平均充足率　第１期 56.7%　第２期 89.6%
修士課程：平均充足率　第１期 76.4%　第２期 98.6%
} 博士課程，修士課程ともに第２期に充足率は改善されている

（事務局資料）

資料 1-1-42　看護キャリアアップセンター　認定看護師教育課程　収容定員充足率

課程	年度	収容 定員数 (a)	学生数 (b)	収容定員充足率(%) (b)÷(a)×100	休学及び退学者
慢性呼吸器疾患看護分野	平成23年度	30	30	100.0	
	平成24年度		28	93.3	1（退学者）
	平成25年度		29	96.7	
	平成26年度		29	96.7	
	平成27年度		24	80.0	1（休学者）
手術看護分野	平成26年度	20	22	110.0	
	平成27年度		22	110.0	

（看護キャリアアップセンター資料から）

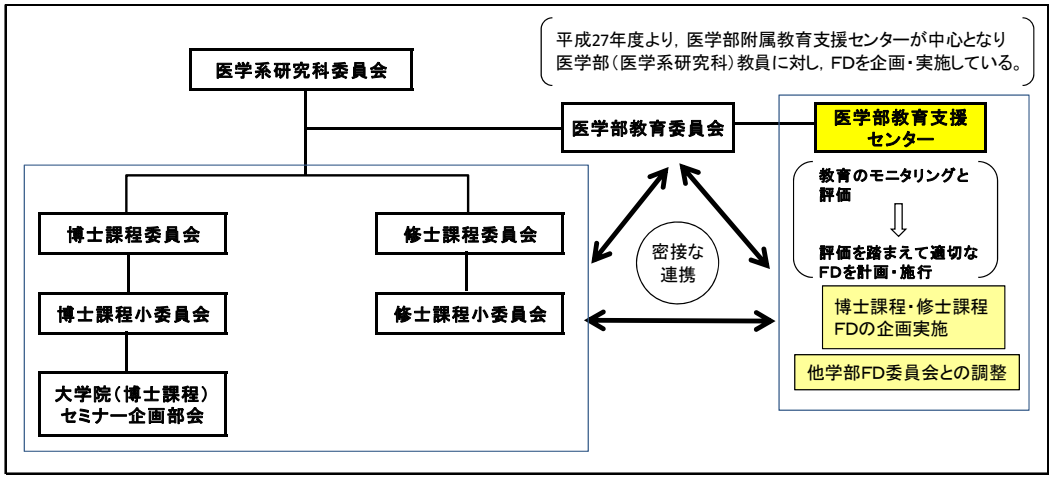
●教員の教育力向上や職員の専門性向上のための体制の整備とその効果に関する例

【FD・教員評価】

医学系研究科の担当は学部教員の兼務であり，ファカルティ・ディベロップメント(FD)は，大学院教育についても包括して実施している（**資料 1-1-43，44**）。更に，本学教員は FD 活動に対し高い意欲を有している（**資料 1-1-45(1)，45(2)**）。

第１期に引き続き，教育評価ともなる教員個人評価を実施し，その一環として，大学院教育に対する貢献を評価している（**資料 1-1-46，47**）。

資料 1-1-43　FD 体制図



（事務局資料）

資料 1-1-44　平成 27 年度　医学部・医学系研究科 FD 活動状況

内　　容	開催日	参加人数
		（人）
医学部テューター養成ワークショップ	H27.4.8	34
ＦＤ講演会（学習支援システム説明会）	H27.7.10	47
ＦＤ講演会（教育システム活用セミナー）	H27.9.25	37
ＦＤ講演会（専門領域を超えて専門領域を深める －育ちあい，響きあう学修環境を目指して－）	H28.3.8	31

（平成27年度より医学部教育支援センターにて企画・実施）

医学部教育支援センターを中心に，FDを企画：平成27年度においては，学生のための主体的学びに効果的なITCを利用した「教育システムの活用セミナー」や，「専門領域を超えたカリキュラムの検討」について等，医学部・医学研究科の現在の課題を考慮したＦＤを実施し，効果的であった。

（事務局資料）

資料 1-1-45(1)　教員の FD 活動に対するアンケート結果(1)

2015.9.25

平成２７年度福井大学医学部ＦＤ講演会
『教育システム活用セミナー』

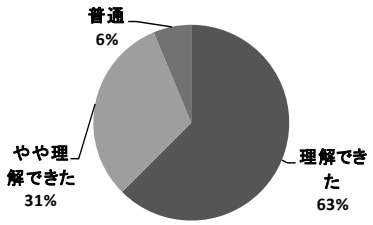
アンケート集計結果

（参加者37名／アンケート回収率86.5%）

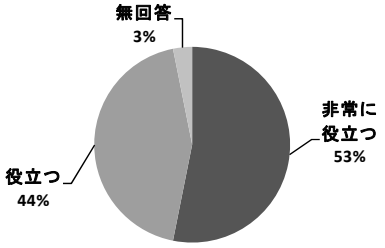
アンケート回答者

（教授６名，准教授４名，講師４名，助教５名，事務系職員３名，その他１０名）

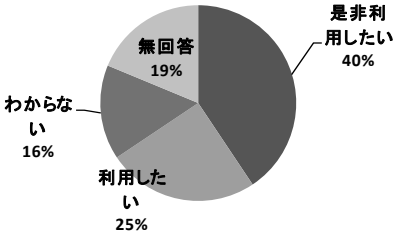
1．講演内容は理解できましたか。



2．このシステムは，医学教育に役立つと思いますか。



3．このシステムをご自分の講義実習で利用したいと思いますか。



「あまり利用したくない」「利用したくない」の場合は理由もお願いします。

- 準備に時間がかかりそうだけど，一度つくれば全国的に使えるかも。
- 自分の講義がないので。また，私の専門分野では，画像診断することがないですが，映像が十分活用できることが分かりよかったです。
- 使いこなせる自信がない。（「わからない」の回答でのコメント）

4．講演に関するご意見，ご感想などがございましたらご記入ください。

- 会議のため途中退出し，失礼しました。とても良いシステムと思います。
- 医学教育の現状も分かって良かったです。
- このようなシステムがあることを初めて知りました。
- 現状の進捗状況が良くわかりました。是非システムを使用させていただきたいです。
- 使用する人間の労力の軽減がポイントだと思いますが，大いなる可能性を感じました。
- 現状は教える側（教員）からの利用が中心であるが，学ぶ側（学生）からの使い方・機能を更に強化していただきたい。
- 出来れば大学からハード面での協力をお願いしたい。
- 学生個々の能力・理解度に応じた学習環境の構築の可能性を感じました。
- 学内でのシステムの周知が必要です。使用に関しては教員へサポート（スタッフ）があると現実的です。
- 拡散する方法を考えてください。
- 関連病院でも使用できるとよいと思いました。
- 学生に簡単に解を導いてしまいそうで，迷わせるには，それなりのダミー画像等も必要となるので，結構大変そうな気がします。自分でMacのiOSかiBooksで作れるか少し試してみます。
- ありがとうございました。
- システムの問題が目に付きました。改善できそうな内容もあると思いますので，徐々に良くしていきたいと思いました。
- 先生方も学生様もあるものを利用して学習している姿に感動しました。

（事務局資料）

資料 1-1-45(2)　教員の FD 活動に対するアンケート結果(2)

2015.2.2

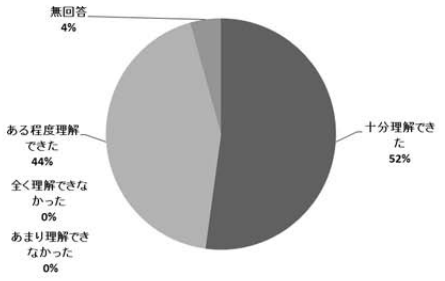
平成２６年度ライフサイエンスイノベーション推進機構セミナー
（医学部看護学科 FD 専門委員会共催研修事業）
『ヒーリングタッチと看護について』

アンケート集計結果

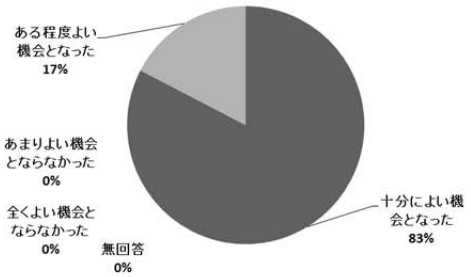
（参加者 24 名／アンケート回収率 95.8%）

アンケート回答者
（教授 5 名，准教授 2 名，講師 3 名，助教 6 名，医員 2 名，看護師 3 名，チェックなし 2 名）

1．講演内容は理解できましたか。



2．講演会は，今後の教育等に役立つ機会となりましたか。



3．講演に関するご意見，ご感想などがございましたらご記入ください。

- ヒーリングタッチ、もっと深く知りたいと思いました。リリースがとても勉強になりました。
- リリースという事を改めて考える機会になりました。ありがとうございました。
- 講演ありがとうございました。ミラー効果（センタリングとグラウンディング）とリリース、とても大事だと思いました。今後も意識していきたいと思います。
- CAM にもともと興味があったので、よかったです。がん PE さんの CAM について興味があります。
- NCCAM から NCCIH に変更された人が、位置づけが変わったことは素晴らしい。学生自身が「癒される体験」を持つことは、本当に大切だと思う。看護師が手を使う技術そのものがヒーリングタッチであり、元気のもとであると改めて考えました。
- ヒーリングタッチについて知り、今後の可能性が期待できる療法だと思いました。「リリース」は大切だと思いました。元気のもとになるご講義を頂き、ありがとうございました。
- とても勉強になりました。ヒーリングタッチは看護の基本ですね。有難うございました。
- ヒーリングタッチが具体的にどのようなことをするのかを、初めに VTR で見せてもらえるとより理解できたと思う。Cure から Care へと視点が動いている時代なんだと感じた。エビデンス（生理学的指標）の確立が必要だと思った。
- ヒーリングタッチが、いかに人間の根源的な係わりか学べました。治らない病気（incurable disease）へのアプローチにつながると思います。
- パワフルな先生で、とてもよい刺激になりました。
- ヒーリングタッチの話は初めてで新鮮でした。次は具体的な話を聞かせて頂きたいです。
- 看護師が元気になること、波及効果として周りが元気になっていくこと、とても実感しました。今日教えて頂いたことを実行していきたいと思いました。とても良い機会になりました。
- ヒーリングタッチについて学ぶ機会があまりなかったため、貴重な機会となり良かったです。GENKI を共通語にという考え方がとても素敵だと思いました。この考え方がもっと広がると良いなと感じました。

（事務局資料）

資料 1-1-46　教員個人評価における大学院教育に関する評価項目

平成 26 年度に，国立大学改革プラン等に適切に対応するため，規程等の改正など，従来の教員個人評価制度を全面的に改正した。学長は，中期目標達成への大きな貢献や卓越した教育研究等をなした教員を「SS」又は「S」として高く評価し，他方，活動状況に問題があり改善を要するものは「D」と評価することとした。

各評価領域の評価項目及び基準

1 教育活動領域

【評価項目】

A 一つの教育活動（授業科目等）ごとの項目

（中　略）

2 大学院教育の実績（科目毎に記入）

① 授業科目（等）名 （A：博士課程・B：修士課程の別，一般・社会人の別，必修・選択の別）
② 履修者数
③ 単位取得者数（優○名，良○名，可○名，不可○名）
④ 授業形式（A：講義 B：セミナー C：実験・演習・実習 F：その他）
⑤ 主な役割（A：全てを担当 B：分担 C：コーディネーター E：その他）
⑥ 担当時間数
⑦ 使用言語（A：日本語 B：英語 C：その他）
⑧ 学生による授業評価アンケート結果
⑨ 教育目標の達成状況（A：十分達成された B：大体達成された C：ある程度達成されたが不十分な点もある D：あまり達成されていない）
⑩ ⑨においてそう判断する理由を簡潔に記載
⑪ 特記事項（授業に対する取組や改善事項について，特記する事項があれば記載）

3 大学院学生の指導実績（学生毎に記入）

① 指導学生の氏名、学籍番号
② 学生種別（A：修士（主） B：修士（副） C：博士（主） D：博士（副）E：その他（特別研究学生など）
③ 指導法（A：実験の立案 B：実験技術の直接指導 C：実験技術の間接指導 D：論文作成の指導 E：その他）
④ 指導学位論文
⑤ その他の指導論文
⑥ 就職（ポスドク含む）、進学（博士課程）先
⑦ 教育目標の達成状況（A：十分達成された B：大体達成された C：ある程度達成されたが不十分な点もある D：あまり達成されていない）
⑧ ⑦においてそう判断する理由を簡潔に記載
⑨ 特記事項（指導に対する取組や改善事項について，特記する事項があれば記載）

（中　略）

【評価基準】

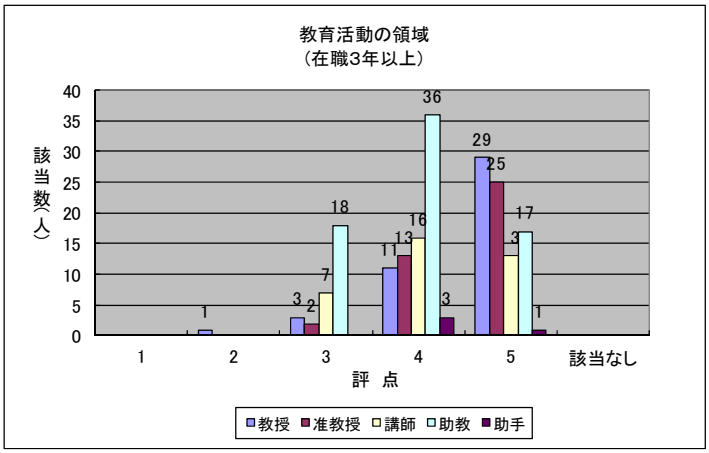
・ 上記の評価項目をデータ入力し，以下の５段階により自己評価する。
　５：特に優れている
　４：水準を上回っている
　３：水準に達している
　２：やや問題があり改善の余地がある
　１：問題があり改善を要する

（事務局資料）

資料 1-1-47　教員個人評価結果（教育活動領域）

（人）

職種／評価	教授	准教授	講師	助教	助手	計	該当者割合
5	29	25	13	17	1	85	43.6%
4	11	13	16	36	3	79	40.5%
3	3	2	7	18		30	15.4%
2	1					1	0.5%
1						0	0.0%
該当なし						0	0.0%
計	44	40	36	71	4	195	100.0%



在籍３年以上の教員に対する教育活動領域の評価結果より，一番高いポイント５を得た教員が全体の 43.6%，次のポイント４を得た教員を合わせると 84.1% となり，高い水準の教育活動が実施されている。

（事務局資料）

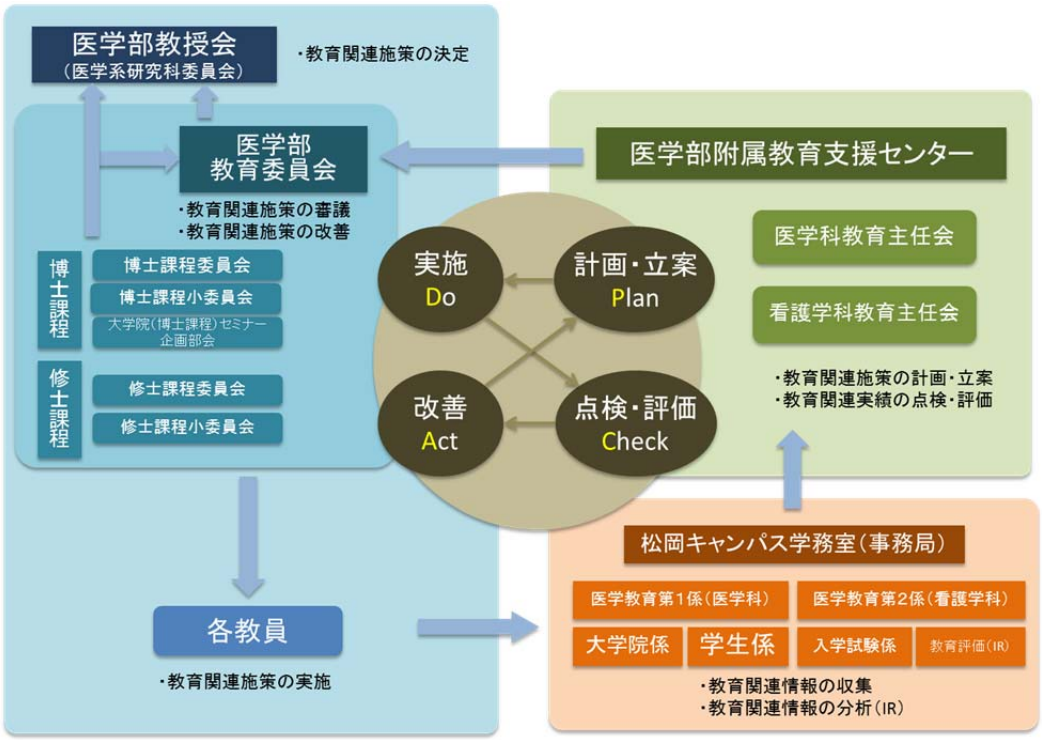
●教育プログラムの質の保証・質向上のための工夫とその効果に関する例

【教学マネジメント体制】

大学院生の修学状況等を把握し，改善につなげる体制を確立，機能させており（**資料 1-1-48**），例えば社会人学生の修学支援として，指定の時間に大学院講義に出席できないことを補うためにＥラーニングによる補習学習体制を整えた。

資料 1-1-48　教学マネジメント体制

博士課程小委員会，修士課程小委員会（修士課程委員会）を中心に改善に向けた検討，決定を行い，大学院教育に反映させていく体制を組織的に確立しており，充分に機能している。
　事務職員との教職協働による情報収集・分析体制を強化
　教育支援センターと協力し，学部・大学院を含めたＦＤ実施体制を整備



（改善事例）
- 平成 24 年度　大阪大学・金沢大学・浜松医科大学連合小児発達学研究科に千葉大学とともに福井大学が参加
- 平成 25 年度　博士課程: 2 専攻から 1 専攻への改組し,「地域総合医療学コース」を設置, 定員を 30 名から 25 名に見直しを行った。
- 平成 25 年度　剽窃チェック導入
- 平成 26 年度　博士課程：E ラーニング導入
- 平成 26 年度　修士課程：災害看護 CNS 課程開設
- 平成 27 年度　修士課程：がん看護 CNS 課程開設

（事務局資料）

【外部評価・第三者評価】

本学と大学の規模等が類似している山梨大学との相互評価を組織的に行っており，平成 27 年３月には本学医学部において医学部及び医学系研究科について意見交換と評価を行った。修士課程の専門看護師教育などについて高い評価を得た（**資料 1-1-49**）。

資料 1-1-49　平成 26 年度　山梨大学・福井大学相互評価報告書（一部抜粋）

平成 26 年度　山梨大学医学部・福井大学医学部相互評価報告書

日　時　平成 27 年３月９日（月）　15 時　～　17 時
　　平成 27 年３月 10 日（火）　９時　～　11 時

会　場　福井大学松岡キャンパス　管理棟３階　大会議室，中会議室　他

出席者　別紙のとおり

（山梨大学側報告書抜粋）
（全体を通しての福井大学における特徴等）

- 施設面：新病棟はもとより，講義棟の改修における学習意欲がわくような空間づくりや学生の意見を取り入れた椅子等の設置，シミュレーションセンター建設及び充実した設備の導入，言語教育センターの建設など，建物や設備等のハード面において優れている。
- 国際基準におけるカリキュラム及び関連の委員会について，整備が進んでいる。
- 入試改革に関する検討を始めるなど，改革に前向きに取り組んでいる。なお，入試における面接試験に関しては，面接基準についての社会的説明をいかに行うか，について問題意識をもち検討を行っている。
- 看護学科新卒者 55 人中，32 人が附属病院に就職するなど，安定的に看護師を供給できる体制が整っている。
- 看護学科３年次編入を廃止する取り組みを早くから始め，修士課程における専門看護師の養成コースを設置するなど，課題を見つけて改革に結びつけている。

平成 27 年３月 28 日
山梨大学医学部

（事務局資料）

【関係者の意見聴取】

医学系研究科では，修了生及び勤務機関へのアンケート，聴き取り調査を組織的に行っており，その結果を教育内容・方法の改善に反映させている（**資料 1-1-50，51**）。

特に，修士課程では，平成 16 年度から修了予定者を含む全大学院生に対してアンケートを継続実施しており，その結果を全て修士課程委員会で周知し，問題点を審議し改善につなげている（**資料 1-1-52，53**）。

資料 1-1-50　医学系研究科（博士課程・修士課程）修了生アンケート

卒業生に対する大学教育の成果調査 **【医学系研究科（博士課程）卒業者対象】**（一部抜粋）

福井大学では、卒業生の皆様に本学の教育についてのアンケート調査を実施し、その評価を明らかにすることで教育に随時修正・改善を加え、より良い医学教育カリキュラムを構築できるよう努めたいと考えております。
そこで、本学卒業生の皆様に以下の項目についてご回答をお願いいたします。
臨床業務等で大変お忙しいところのお願いで申し訳ありませんが、ご協力よろしくお願いいたします。
■ いただいた回答は統計的に処理しますので、個別の回答結果を外部に公開することはありません。
■ 回答に迷う場合には、最も近いものを選んで回答してください。

【問１】あなたについて教えてください。
性　別：　**1**. 男　　**2**. 女

----- 社会でご活躍の現時点で、あなたの知識や能力についてお聞きします。 -----
【問２】本学では以下の能力を育成することを教育の目標としています。そこで、大学院教育を土台として現在培われたあなたの知識や臨床を含むさまざまな能力について、該当する番号に○をつけてご回答ください。

----- 本学の大学院生であった時の、あなたの学修状況についてお聞きします。 -----

----- あなたの履修した大学院のカリキュラム等についてお聞きします。 -----

----- 大学院の医学教育全体についてお聞きします。 -----

＜全２７設問＞

卒業生に対する大学院教育の成果調査 **【医学系研究科（看護学専攻）卒業者対象】**（一部抜粋）

福井大学では、卒業生の皆様に本学の教育についてのアンケート調査を実施し、その評価を明らかにすることで教育に随時修正・改善を加え、より良い医学教育カリキュラムを構築できるよう努めたいと考えております。
そこで、本学卒業生の皆様に以下の項目についてご回答をお願いいたします。
臨床業務等で大変お忙しいところのお願いで申し訳ありませんが、ご協力よろしくお願いいたします。
■ いただいた回答は統計的に処理しますので、個別の回答結果を外部に公開することはありません。
■ 回答に迷う場合には、最も近いものを選んで回答してください。

【問１】あなたについて教えてください。
性　別：　**1**. 男　　**2**. 女

●社会でご活躍の現時点で、あなたの知識や能力についてお聞きいたします。
【問２】本学では以下の能力を育成することを教育の目標としています。そこで、大学院教育を土台として培われたあなたの知識や臨床を含むさまざまな能力について、該当する番号に○をつけてご回答ください。

●本学の大学院生であった時の、あなたの学修状況についてお聞きします。

●大学院の医学教育全体についてお聞きします。

＜全１０設問＞

（事務局資料）

資料 1-1-51　医学系研究科（博士課程・修士課程）修了生勤務先アンケート

「福井大学医学系研究科（博士課程）卒業生についてのアンケート調査」（一部抜粋）
［平成 22 年度～平成 26 年度修了者対象］

【問１】本学医学系研究科（博士課程）の知識や臨床を含むさまざまな能力についてお尋ねします。該当する番号に○をつけてご回答ください。

①　高度な医学知識を有していますか？
1. 非常に当てはまる　2. かなり当てはまる　3. 普通　4. あまり当てはまらない　5. 全く当てはまらない

②　高度な臨床能力・医療技能を有していますか？
1. 非常に当てはまる　2. かなり当てはまる　3. 普通　4. あまり当てはまらない　5. 全く当てはまらない

（略）

⑫　診療について、将来指導的な役割を担う能力を有していますか？
1. 非常に当てはまる　2. かなり当てはまる　3. 普通　4. あまり当てはまらない　5. 全く当てはまらない

【問２】本学卒業生から判断して、本学の教育は満足できるものとお考えですか？
1. 強くそう思う　2. そう思う　3. どちらともいえない　4. そう思わない　5. 全くそう思わない

「福井大学医学系研究科（修士課程）卒業生についてのアンケート調査」（一部抜粋）
［平成 22 年度～平成 26 年度修了者対象］

【問１】本学医学系研究科（修士課程）の知識や臨床を含むさまざまな能力についてお尋ねします。該当する番号に○をつけてご回答ください。

①　看護師（助産師・保健師）として高度な知識を有していますか？
1. 非常に当てはまる　2. かなり当てはまる　3. 普通　4. あまり当てはまらない　5. 全く当てはまらない

②　看護師（助産師・保健師）として高度な臨床能力・医療技能を有していますか？
1. 非常に当てはまる　2. かなり当てはまる　3. 普通　4. あまり当てはまらない　5. 全く当てはまらない

（略）

⑩　臨床業務について、将来指導的な役割を担う能力を有していますか？
1. 非常に当てはまる　2. かなり当てはまる　3. 普通　4. あまり当てはまらない　5. 全く当てはまらない

【問２】本学卒業生から判断して、本学の教育は満足できるものとお考えですか？
1. 強くそう思う　2. そう思う　3. どちらともいえない　4. そう思わない　5. 全くそう思わない

（事務局資料）

資料 1-1-52　修士課程在学生教育評価アンケート

大学院教育に関する調査(平成27年2月実施)(一部抜粋)

	非常に当てはまる	かなり当てはまる	どちらでもない	あまり当てはまらない	全く当てはまらない
● 学年　M1					
Ⅰ 大学院教育全体について					
1 大学院教育全体について満足している。	5	4	3	2	1
2 自分の学習目標は達成されている。	5	4	3	2	1
3 自分のキャリア形成、向上に役立っている。	5	4	3	2	1
Ⅱ カリキュラム（教育課程・時間割）・シラバスについて					
1 カリキュラムは学習しやすく編成されてる。	5	4	3	2	1
2 共通科目と専門科目の配置は満足している。	5	4	3	2	1
3 ２年間の学習過程（講義予定・研究に関する全体日程など）は問題がない。	5	4	3	2	1
4 シラバス内容（教育内容・方法・評価・ﾃｷｽﾄ他）はわかりやすい。	5	4	3	2	1
5 シラバスを活用している。	5	4	3	2	1
Ⅲ 講義を中心とした教育活動について					
A 共通科目					
A1**【看護研究】**					
1 教育内容・方法に関するオリエンテーションが充分である。	5	4	3	2	1
2 シラバス内容と教育内容が一致している。	5	4	3	2	1
3 教育内容は無駄がなく、順序だてて整理されている。	5	4	3	2	1
4 学習目標が達成できる内容である。	5	4	3	2	1
5 教育方法は教育内容に適している。	5	4	3	2	1
6 教育内容は満足している。	5	4	3	2	1
7 課題（レポートなど）は適切である。	5	4	3	2	1
8 教員は講義の準備を充分している。	5	4	3	2	1
9 講義中の雰囲気に満足している。	5	4	3	2	1
10 講義中の教員と学生の関係に満足している。	5	4	3	2	1
11 学習内容について、教員と学生間，学生相互間の意見交換がなされている。	5	4	3	2	1
A2**【看護倫理】**　履修(有 ・ 無)					
A3**【看護理論】**　履修(有 ・ 無)					
A4**【看護教育論】** 履修(有 ・ 無)					
A5**【看護管理論】** 履修(有 ・ 無)					
A6**【看護政策論】** 履修(有 ・ 無)					
A7**【コンサルテーション論】** 履修(有 ・ 無)					
A8**【ヘルスアセスメント】**　履修(有 ・ 無)					
A9**【病態生理学】** 履修(有 ・ 無)					
A10**【臨床薬理学】** 履修(有 ・ 無)					
B 特　論					
C 演　習					
Ⅳ 学習環境について					
1 講義室の環境は満足している。	5	4	3	2	1
2 院生室をよく使用している。	5	4	3	2	1
3 院生室の環境（備品、照明、広さ等）は満足している。	5	4	3	2	1
4 図書館は利用しやすい。	5	4	3	2	1
5 図書館をよく利用している。	5	4	3	2	1
6 図書館の蔵書に満足している。	5	4	3	2	1
7 図書館以外の学習資源に満足している。	5	4	3	2	1
8 パソコンの使用に満足している。	5	4	3	2	1
9 学習資源の印刷やコピーの機器に満足している。	5	4	3	2	1
10 学習環境に関して学生の意見が反映されている。	5	4	3	2	1
11 仕事と学業との両立ができている。	5	4	3	2	1
12 教員は学生の意見を反映して教育活動をしている。	5	4	3	2	1
13 履修や学生生活について相談できるシステムがある。	5	4	3	2	1
14 他領域の学生との交流や関係に満足している。	5	4	3	2	1
● 学年　M2【CNS学生用】					
Ⅰ 大学院教育全体について					
Ⅱ カリキュラム（教育課程・時間割）・シラバスについて					
Ⅲ 特　論					
Ⅳ 演　習					
Ⅴ 実　習					
Ⅵ 研究活動を中心とした教育活動について（課題研究）					
1 課題研究の指導は適切である。	5	4	3	2	1
2 研究準備の段階での支援は適切である。	5	4	3	2	1
3 データ収集の段階での支援は適切である。	5	4	3	2	1
4 データ分析の段階での支援は適切である。	5	4	3	2	1
5 論文作成の段階での支援は適切である。　回答可能な設問にのみ回答	5	4	3	2	1
6 口頭発表の段階での支援は適切である。	5	4	3	2	1
7 最終試験の段階での支援は適切である。	5	4	3	2	1
8 研究過程において主体的に学習した。	5	4	3	2	1
Ⅶ 学習環境について					
● 学年　M2【CNS学生以外用】					
Ⅰ 大学院教育全体について					
Ⅱ カリキュラム（教育課程・時間割）・シラバスについて					
Ⅲ 研究活動を中心とした教育活動について（特別研究）					
Ⅳ 学習環境について					

（事務局資料）

資料 1-1-53　修士課程在学生教育評価アンケート集計結果に対する[大学院生への回答]

大学院教育に関する調査集計[大学院生への回答]（平成26年度）

Ⅱ　カリキュラム（教育課程・時間割）・シラバスについて
（カリキュラムに関して意見がありましたら自由に書いてください。）

●領域の説明と、その領域の研究テーマや先生の教育テーマ等を表示してあれば、わかりやすいと思う。(M-1)

領域の説明は、履修要項中の「教育課程の構成・実施の方針（カリキュラムポリシー）」に記載してあり、また、毎年発行している修士課程看護学専攻の紹介パンフレットの中に、領域の研究テーマや先生の教育テーマ等を記載しており、ホームページ上でもデジタルパンフとしてご覧いただけます。
なお、疑問な点等は、先取的に指導教員等にお尋ねいただくなど、大学院生のみなさんには自発性をもって学習に取り組んでいただきたいと考えております。

Ⅲ　研究活動を中心とした教育活動について
（科目に関して意見・要望等がありましたら自由に書いてください。）

A1　看護研究

●分析方法や研究手法にもう少し重点をおいて授業を行ってほしかった。「はじめに」「結語」「結論」「おわりに」等の言葉の違いを教えてほしかった。(M-1)

●分析方法について、もう少し時間を多くとってほしい。文献クリティークの方法や文献カードの説明なく、ゼミの導入で困った。(M-1)

いずれの科目も、順を追って学んでいただき、学習が進むにつれ、理解いただけるようになっています。ご自分のペースで学習を進めていく上で、知り得たいこと等が生じた場合には、指導教員等にお尋ねください。

A4　看護教育論

●グループわけによるプレゼンテーションは内容が深く理解できてよかった。また外部講師のより専門的な内容が聞けて良かった。(M-1)

今後も、授業内容の工夫や外部講師による講義などにより、充実した授業となるよう、努力します。

A6　看護政策論

●講義の7割以上出席であれば、追加レポート不要では？と思いました。(M-1)

追加レポートについては、状況的に、担当教員が必要と判断すれば提出を課すことがあります。

A8　ヘルスアセスメント

●講義を行うＤｒが、講義内容をしっかり理解されていない方も多く、講師へのオリエンテーションをしっかり行ってほしい。（M-1）

この科目は、医学科の教員が多くの講義を担当しており、事前に教員への指導等を行いましたが、徹底されなかったようです。ご迷惑をお掛けして申し訳ありませんでした。今後、学生のみなさんに不信感を抱かれることのないよう、教員への指導等を徹底してまいります。

A9　病態生理学

●講師の欠席（ドタキャン）があった時は、すごく困りました。代替講義に出られなかったので、今後は事前にＤｒに確認しておいてほしいです。（M-1）
●講義を忘れて、来ない先生がおり、次の講義の先生に迷惑がかかった。（M-1）

この件に関しましては、学生のみなさんにご迷惑をお掛けし、誠に申し訳ありませんでした。その後の再発防止策として、講義日間近に看護学科事務担当より担当教員への確認を徹底するようにしました。また、担当教員との連絡を今まで以上に密にするようにしました。

A10　臨床薬理学

●教科書での授業は、とても分かりやすく理解できた。もう少し臨床薬剤師の講義も聞きたかった。（M-1）

今後も、より分かりやすく、興味を抱かれる授業となるよう、随時、授業内容等の改善を図ってまいります。

Ⅴ　その他ご意見がありましら自由に書いてください。

●院生室の使用方法等のオリエンテーションを入学時に行ってほしい。(M-1)

ご意見を踏まえ、次年度以降、入学時のオリエンテーションでご説明することにいたします。

●履修科目について、どれを履修すれば学び得る内容か、将来的な方向性について助言をほしかった。(M-1)

履修科目については履修届の提出前に、将来的な方向性についても事前に助言が必要であったのでしたら、いずれも指導教員にご相談いただきたかったと思います。今後も、学習に関することで不明な点などは、随時、指導教員、内容によっては大学院係にお気軽にご相談ください。

●院生講義室のプロジェクターを天井吊にしてほしい。(M-1)
●院生講義室の椅子の静電気がすごく、硬くて痛い。もう少しクッション性のあるものを購入してほしい。(M-1)
●照明を左右でなく前後でON/OFFできるようにしてほしい。(M-1)
●文献検索するのに、院生用のパソコンと、パソコンから印刷できるよう、印刷機（カラー）も一緒に購入してほしい(M-1)
●USBから印刷する機器を設置してほしい。(M-1)
●パソコン室のプリンターの操作方法が分からず使用できないので、院生専用の印刷機が講義室にあればありがたいと思います。(M-1)

設備については、予算の関係もありますが、学生のみなさんがより快適に学習できるよう、随時、改修・更新等を行ってまいります。ちなみに、講義室のプロジェクターは天井吊のものに更新しました。また、備品類についても、大学として備えるべきと考えられるものは、随時、購入していく考えです。

●院生室の冷暖房について考えてほしい。(M-1)

本学においても、国の政策に従い、省エネルギーに取り組んでおり、冷暖房についても設定温度を制限しております。このことを是非ともご理解のうえ、各自で衣服の調整等により対処いただきますよう、ご協力をお願いします。

平成 26 年度アンケートで要望のあったプレゼンテーション設備の充実として，プロジェクターを天井つりさげ型に更新した結果，教育方法の改善等にも繋がった。

（資料「在学生教育評価アンケート結果」より抜粋）

【教育改善の取組】

地域・在宅医療から先端医療まで様々なニーズに対応できる医療者の養成と，県全体の医療のレベルアップ及び質の高い医療サービスの提供を目的として，福井メディカルシミュレーションセンターを平成 26 年度に開設した。同センターでは，大学病院ならではの高度先進医療を繰り返し学ぶことができ，かつ地域の病院として在宅医療に関する学びや，多職種が連携してのトレーニングも可能であり，大学院生の学びに大きく貢献しており，関係者の期待に応えている（**資料 1-1-54，55**）。

資料 1-1-54　福井メディカルシミュレーションセンター学生利用状況（大学院生含む）

年度	月	学生利用(出席)者数		学生部屋貸出者数	
		学内	学外	学内	学外
平成26年度	4	14	2		
	5				
	6	220			
	7	347			
	8				
	9				
	10	47			
	11	10	6		
	12	5			
	1	365			
	2	35			
	3	35	40	51	40
計		1,078	48	51	40
平成27年度	4	77		40	
	5	302		10	
	6	50		80	
	7	345			
	8	52			
	9	27	88	6	
	10	162	186	10	
	11	39	110	8	
	12	166	34		
	1	140			
	2	449			
	3	20		65	240
計		1,829	418	219	240

（事務局資料）

資料 1-1-55　福井メディカルシミュレーションセンターを利用した演習風景

メディカルシミュレーションセンターには，14 室のシミュレーションブースが設置され，各部屋の用途に合わせた設備，シミュレーター等の機材が効率よく設置され，大学院生，医学部生の育成はもとより，研修医，県内医師などの研修に貢献している。（参照　シミュレーションセンターfacebook：https://www.facebook.com/福井メディカルシミュレーションセンター-1592231934372047/）





（博士課程　地域総合医療コース演習を兼ねた「緊急被ばく医療シミュレーション【スクリーニング演習】）



（認定看護師教育課程　慢性呼吸器疾患看護分野の演習）

（事務局資料）

【教育情報の発信】

大学院進学および研究者としてのキャリアパス情報は大学院案内に掲載するとともに（P5-25 **前掲資料 1-1-29**），研究者勧誘に係る説明会（リサーチ・マッチング）（**資料 1-1-56**），病院訪問による修士課程進学説明等により常時発信している（P5-27 **前掲資料 1-1-34**）。

資料 1-1-56　リサーチ・マッチング実施状況

リサーチマッチング（研究者勧誘に係る説明会）実施状況

【趣旨】
基礎系教室へのスタッフ獲得あるいは臨床系大学院からの基礎配属を促進するため，また，学生の基礎医学に対するモチベーション向上のため実施するもの。

【開催数・参加者数】
第 1 回（H21 年）対象：6 年生＋初期研修医
参加者：6 年生・研修医　計 25 名程度
第 2 回（H22 年）対象：6 年生＋初期研修医
参加者：5～6 年生・研修医　計 20 名程度
第 3 回（H23 年）対象：4～6 年生＋初期研修医
参加者：3～6 年生　計 25 名程度
第 4 回（H24 年）対象：3～6 年生＋初期研修医
参加者：4 年～6 年生・研修医　計 30 名程度
第 5 回（H25 年）対象：4～6 年生＋初期研修医　『4 年生「医の原則」の授業として実施』
参加者：4 年生 96/101 名，5 年生 1 名，6 年生 3 名　計 100 名
第 6 回（H26 年）対象：4～6 年生＋初期研修医　『4 年生「医の原則」の授業として実施』
参加者：4 年生 114/117 名，1 年生 2 名，2 年生 1 名，3 年生 2 名，
6 年生 6 名　計 125 名

第 7 回（H27 年）対象：4 年生＋初期研修医　『4 年生「医の原則」の授業として実施』
参加者：4 年生 120/120 名

平成27年6月29日現在

		件数
リサーチマッチング出席人数（4年生）		120人
アンケート 「もう少し詳しく話を聞きたい領域があれば、担当の教員名を記入して下さい」の欄への記入数		4件 （ 5名 ）
結果	マッチングできた件数	5件
	マッチングできなかった件数	0件
	まだ連絡が取れていない件数	0件

【リサーチ・マッチングに参加しての感想（平成 22 年度～平成 27 年度調査より抜粋)】
・臨床に味気なさを感じたら基礎医学に目を向けてくださいというメッセージが印象的でした。
・世界をかえるとか名を刻むとか，研究が身近に感じることができて良かったです。
・好きなことを話しているときの先生方はいつも以上に生き生きとされていて面白かった。
・大変面白いエピソードばかりでした。これからの進路選択に役立てたいと思います。
・ATM システムが非常に良いシステムだと思った
・こういう研究についての説明が聞ける機会があって良かったです。選択肢を広げることは大事だと思いました。
・それぞれの先生がなぜ研究に進んだのかが知れて良かった。
・病理学や解剖学など臨床に活かせることも学べる教室が思ったよりも多く，とても興味がわきました。
・考えたことがなかった研究者への道のりを知ることができて，道が増えた気がしました。
・それぞれの分野の先生たちが日々情熱を持って研究されていることがよく分かりました。

（事務局資料）

（水準）　期待される水準を上回る

（判断理由）

① 博士課程では，平成 25 年度の改組にあたり，全ての大学院担当教員による横断的及び有機的な教育・研究指導体制を整えている。また，本邦で初めて設置された「地域総合医療学コース」においては，リサーチマインドのあるジェネラリスト養成のために，地域の総合病院等とも連携し，大学院教育にあたる体制を整えられたことは，特筆される[1)]。

[1)] 資料 1-1-3　：医学系研究科博士課程改組後の組織構成　P5-6
資料 1-1-4　：博士課程改組後の指導体制　P5-7
資料 1-1-7　：博士課程　地域総合医療学コース教育体制　P5-9

② 夜間開講や長期履修制度等，社会人学生の学びやすい環境が整えられている。また，メンタル面や経済面のサポート体制も充実している。これらの支援に対する大学院生の満足度は第１期末に比べ大きく向上しており，入学者の確保にもつながっている[2)]。

[2)] 資料 1-1-12　：長期履修学生規程　P5-13
資料 1-1-13　：長期履修学生に関する申合せ　P5-13
資料 1-1-14　：医学系研究科における長期履修制度の適用状況　P5-13
資料 1-1-15　：福井大学学生支援体制　P5-14
資料 1-1-16　：松岡キャンパス学生総合相談室及び保健管理センター利用状況　P5-15
資料 1-1-17　：学生（大学院生含む）による図書館利用状況（平成 27 年度）　P5-16
資料 1-1-18　：平成 21 年度，平成 27 年度福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査（学生支援）　P5-17
資料 1-1-38　：授業料免除，奨学金等利用状況　P5-29
資料 1-1-39　：平成 21 年度，平成 27 年度福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査（経済的支援）　P5-30
資料 1-1-41　：医学系研究科における入学定員充足率　P5-31

③ 修士課程では，社会ニーズを踏まえ，第２期で二つの専門看護師課程（災害看護・がん看護）を開設し，以降，災害看護で 13 名，がん看護で４名の入学生を受け入れた。特に災害看護 CNS 課程は本邦初の開設であることと，各領域横断的な指導や他施設と協働した指導体制を構築したことは特筆される[3)]。また，入学者は全員が社会人であり，社会人の学び直しをサポートする体制ができており，関係者の期待に応えている[4)]。

[3)] 資料 1-1-5　：修士課程 CNS 課程開設検討経過　P5-8
資料 1-1-41　：医学系研究科における入学定員充足率　P5-31
資料 1-1-8　：修士課程　災害看護 CNS 課程の指導体制　P5-10
[4)] 資料 1-1-10　：医学系研究科における社会人入学者の状況　P5-12
資料 1-1-11　：修士課程における夜間開講時間割　P5-12
資料 1-1-12　：長期履修学生規程　P5-13
資料 1-1-13　：長期履修学生に関する申合せ　P5-13
資料 1-1-14　：医学系研究科における長期履修制度の適用状況　P5-13

以上のように，全ての関係者の期待に応えるための基盤となる適切な教育実施体制が極めて効果的，実質的に整備されており，期待される水準を上回ると判断した。

観点　教育内容・方法

（観点に係る状況）

●体系的な教育課程の編成状況に関する例

【養成する能力等の明示】

ディプロマ･ポリシー(DP)/カリキュラム･ポリシー(CP)/アドミッション･ポリシー(AP)を作成するとともに,社会ニーズの変化に合わせ,随時見直しを行い,関係者の期待に沿った大学院生の養成に努めている。これらはホームページやシラバス，募集要項に掲載し，周知を行っている（**資料 1-2-1～4，P5-21，22 前掲資料 1-1-24**）。

資料 1-2-1(1)　医学系研究科：カリキュラム・ポリシー(CP)（博士課程）

【博士課程】

教育方針

医科学および生命科学領域において、高度な知識および科学的・論理的思考に基づき、独創性・創造性に優れた研究を遂行し、国際的にも活躍できる自立した研究者、各診療分野で優れた臨床研究能力と先端的で高度な医療技能を備え、高い倫理観と研究マインドを持った臨床医および地域に貢献できる臨床研究や教育的指導力を備えた質の高い総合診療医･ＥＲ救急医・家庭医を養成することを目的としている。これらの目的を達成するため、「統合先進医学専攻」のもと、基礎医学領域を中心とする医科学コース、臨床医学領域を中心に各診療分野で優れた臨床研究能力と先端的で高度な医療技能を修得する先端応用医学コースと地域医療における臨床研究や教育的指導ができる医療技能を修得する地域総合医療学コースを設け、大学院担当教員による複数教員指導体制により体系的に教育・研究指導を行う。

１．教育課程の編成

教育方針を具現化するため、以下の教育課程を編成する。

①　４年以上在学し、共通科目（医科学基礎総論・実験基礎演習・医科学特論・先端応用医学概論）１８単位及び選択科目（コース・領域専門科目等）１２単位以上の計３０単位以上を修得させる。医科学コースでは、基礎医学領域を中心とした分子生命医科学、高次生命医科学、生体情報医科学、感染防御医科学、機能画像医学のコース科目、先端応用医学コースでは臨床医学領域を中心に３部門(腫瘍医学､器官再生医学､病態情報解析医学)６分野（生殖・周産期・腫瘍医学、腫瘍制御医学、重粒子線治療医学、成長発達病態学、器官病態解析・制御医学、病態情報・画像医学）のコース科目、地域総合医療学コースでは、総合診療部･救急部･地域医療推進講座等を中心とした総合診療医学･ＥＲ救急医学・家庭医療学のコース科目を、講義および演習により２－３年次に開講し、各コースに所属する大学院生に、関連する分野における高度な知識および技術を幅広く修得させる。

②　医科学コースでは基礎医学を中心とした各専門領域、先端応用医学コースでは臨床領域を中心とした各専門領域、地域総合医療学コースでは、地域医療に関連した臨床領域を中心とした各専門領域での専門科目（演習および実習）を３－４年次に開講し、専門分野における最先端の知識および技術を修得させる。

２．教育課程の実施

教育方針を具現化するため、以下の体制で教育課程を実施する。

①　大学院生ごとに指導教員および副指導教員を置くことで複数指導教員制とする。

②　共通科目および部門科目においては、各授業科目に教科主任となるコーディネーターを置き、授業内容に応じて複数の担当教員により実施される授業の一貫性を担保し、授業科目を統括する。

③　３年次修了前後に、大学院生による公開の研究発表会を義務付け、研究の進捗状況等を発表し、参加教員からの意見やアドバイスを受けて、最終年度での研究の取りまとめに資する。

④　本学の医学部医学科４－６年次生を対象に、博士課程授業科目を早期履修できる「博士課程授業科目早期履修制度」を導入し、卒後臨床研修終了後に入学するよりも早い博士号取得を可能とする。

⑤　本院の初期臨床研修医（医学部医学科卒業予定者を含む。）を対象に、本院初期研修と博士号取得を効率よく両立できる「初期研修同時履修制度」を導入し、卒後臨床研修終了後に入学するよりも早い博士号取得を可能とする。

⑥　社会人大学院生に対して教育方法の特例を適用した柔軟な授業形態による履修指導を行うとともに、学外非常勤講師による大学院セミナー等を活用し、もって教育目標を達成するための教育指導の工夫を行う。

（事務局資料）

資料 1-2-1(2)　医学系研究科：カリキュラム・ポリシー(CP)（修士課程）

【修士課程】

教育方針

医学系研究科修士課程では、教育理念・目標に基づき、豊かな人間性と倫理観、幅広い知識と理論に基づく根拠のある技術力を有し、高度専門的看護ケア実践能力を備えた看護職のリーダーとなる人材を育成すること、また、地域保健医療福祉に貢献できる看護職、及び看護学を体系化・深化させる研究を遂行できる指導的役割を担う教育・研究者を養成することを目的としている。これらの目的を達成するため、「看護学専攻」のもと、基礎・地域看護学、成人・老年看護学、母子看護学、災害看護学の各分野で、優れた看護学の知識と技能を修得する論文課程と、卓越した看護実践能力を修得する専門看護師（CNS）教育課程を設け、複数の大学院担当教員により体系的に教育・研究指導を行う。

１．教育課程の編成

教育方針を具現化するため、以下の教育課程を編成する。

① 論文課程では、2 年以上在学し、看護研究 2 単位、当該分野又は他分野科目 20 単位、共通科目又は他領域の特論科目から 8 単位以上、合計 30 単位以上を修得させる。
本課程では、４分野（基礎・地域看護学、成人・老年看護学、母子看護学、災害看護学）６領域（基礎看護学、地域看護学、成人看護学、老年看護学、母子看護学、災害看護学）の科目を設け、1 年次に講義・演習を開講し、2 年次には、演習と学位論文等の作成に必要な特別研究科目を開講し、各分野・領域における高度な知識および技術を幅広く修得させる。

② 専門看護師教育課程では、2 年以上在学し、共通科目 A（看護研究、看護倫理、看護理論、看護教育論、看護管理論、看護政策論、コンサルテーション論）から 8 単位以上、共通科目 B（ヘルスアセスメント、病態生理学、臨床薬理学）6 単位、領域科目（特論、演習、実習）24 単位、合計 38 単位以上を修得させる。また、併せて修士の学位取得のため、課題研究 2 単位あるいは特別研究 12 単位を修得させる。
本課程では、1 年次に講義・演習を開講し、各専門分野に必要な基礎的な知識・技術を修得させ、2 年次には、演習および実習を開講し、エビデンスに基づく的確な判断、卓越したケア技術とキュアの知識を修得させる。

２．教育課程の実施

教育方針を具現化するため、以下の体制で教育課程を実施する。

① 大学院生ごとに指導教員を置き、必要に応じて副指導教員を置くこととする。

② 共通科目および各領域科目においては、各授業科目に教科主任となる科目担当責任教員を置き、授業内容に応じて複数の担当教員により実施される授業の一貫性を担保し、授業科目を統括する。

③ 2 年次に、大学院生による公開の中間研究報告会を義務付け、研究の進捗状況等を発表し、参加教員等からの意見や助言を受ける。また、2 年次修了前に、研究の取りまとめを行い、修士論文公開発表会を行う。

④ 専門看護師教育課程の大学院生は、課題研究の論文をもって修士論文に代えることができる。

⑤ 社会人大学院生に対して教育方法の特例を適用した柔軟な授業形態による履修指導を行うとともに、学外非常勤講師による講義を活用し、教育目標を達成するための教育指導の工夫を行う。

（事務局資料）

資料 1-2-2　医学系研究科：ディプロマ・ポリシー(DP)

【博士課程】

各専攻の目的に照らして、大学院生が修得すべき学習成果の達成を学位授与の方針とする。具体的には、

① ４年以上在学し、共通科目１８単位、選択科目（コース・領域専門科目等）１２単位以上を修得し、国際的に活躍できる研究能力や、先端的で高度専門的な臨床研究を遂行できる高度医療に関する能力、もしくは地域に貢献できる質の高い総合医療に関する能力が十分培われていること。
② 査読のある、国際的に評価の定まっている欧文の学術誌もしくはそれと同等の学術的価値を有する学術誌に筆頭著者として原著論文を公表し、研究の着想、計画、実施、論文執筆等における自発性が十分に発揮されたかを判断する、学位審査に合格すること。
③ ただし、評価の高い国際的学術誌に論文発表し、上述の研究能力や高度医療に関する能力が十分に確立されていることが確認された場合は、３年次修了以降、学位審査により早期に学位授与することができること。

【修士課程】

各課程の目的に照らして、大学院生が修得すべき学習成果の達成を学位授与の方針とする。具体的には、

修了要件

① 論文課程では、2 年以上在学し、看護研究 2 単位、当該分野又は他分野科目 20 単位、共通科目又は他領域の特論科目から 8 単位、合計 30 単位以上を修得し、各領域で専門性の高い高度な看護ケアを実践する能力、自らの知識と技術を磨く自己研鑽能力、科学的・理論的に判断し説明する能力、医学・看護学の発展のために研究を計画・実行し、その成果を公表する能力を十分に有していること。
② 専門看護師教育課程では、2 年以上在学し、共通科目 A（看護研究、看護倫理、看護理論、看護教育論、看護管理論、看護政策論、コンサルテーション論）から 8 単位以上、共通科目 B（ヘルスアセスメント、病態生理学、臨床薬理学）6 単位、領域科目（特論、演習、実習）24 単位、合計 38 単位以上を修得し、個人、家族および集団に対して、キュアとケアの融合による高度な看護学の知識・技術を駆使して対象の治療・療養・生活過程の全般を統合・管理し、卓越した看護ケアを提供できる能力、高度な実践、教育、相談、研究、調整、倫理の６つの能力が高まり、看護活動を創意工夫して変革できる能力を十分に備えていること。
③ 医学系研究科修士課程に 2 年以上在学および上記の単位を修得し、かつ、必要な研究指導を受けたうえ、修士論文の審査および最終試験に合格すること。

（事務局資料）

資料 1-2-3　カリキュラム・ポリシー(CP)/ディプロマ・ポリシー(DP)/アドミッション・ポリシー(AP)公開状況

AP	http://www.u-fukui.ac.jp/user_admission/examination/admi_policy/
	（募集要項） http://www.u-fukui.ac.jp/user_admission/examination/essential_point/
CP DP	http://www.med.u-fukui.ac.jp/home/ufms/cont_faculty/policy.html

（事務局資料）

資料 1-2-4　医学系研究科（博士課程・修士課程）：カリキュラム・ポリシー(CP)/ディプロマ・ポリシー(DP)/アドミッション・ポリシー(AP)の改正について

	博士課程	修士課程
平成23年10月	医学部教授会において，AP/CP/DPが承認され，適用された。	
平成24年10月	博士課程委員会にてAPの改正について承認	
平成24年11月		修士「がん看護専門看護師（CNS）コース」「北陸がんプロフェッショナル」に関してアドミッションポリシーを変更
平成25年2月	博士課程の改組に伴い，博士課程委員会にてCP/DPの改正について承認	博士課程のAP改正に合わせ，修士課程についても見直し改正を行った。
平成25年4月	平成25年度に博士課程の改組及びそれに伴うAP/CP/DP改正	
平成26年6月		災害看護専門看護師(CNS)教育課程設置に伴い，APを改正
平成27年6月		がん看護専門看護師(CNS)教育課程設置に伴い，AP改正
平成28年1月		修士課程委員会にてCP/DPの改正について承認・適用
		＊修士課程のAP/CP/DPは先行して平成21年度に設定

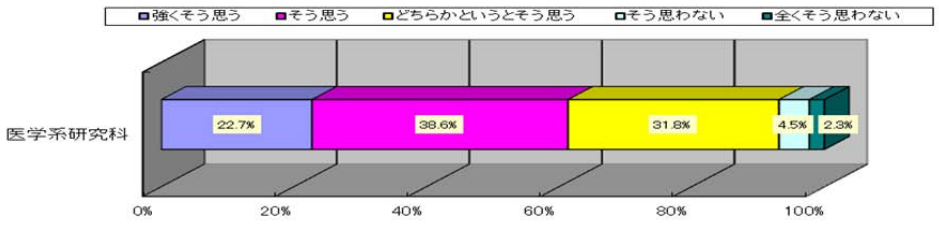
（事務局資料）

【カリキュラムの体系性】

博士課程・修士課程ともにCP/DPに基づいたカリキュラム編成を体系的に行っており（P5-47 **前掲資料 1-2-1，2，別添資料 6(1)～6(4)**），大学院生の期待も高い（**資料 1-2-5**）。

資料 1-2-5　医学系研究科 履修カリキュラムに対する期待

設問：カリキュラムは，医師あるいは看護職として備えるべき能力を修得するうえで役立つと思いますか？



（平成 27 年度「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」結果より抜粋）

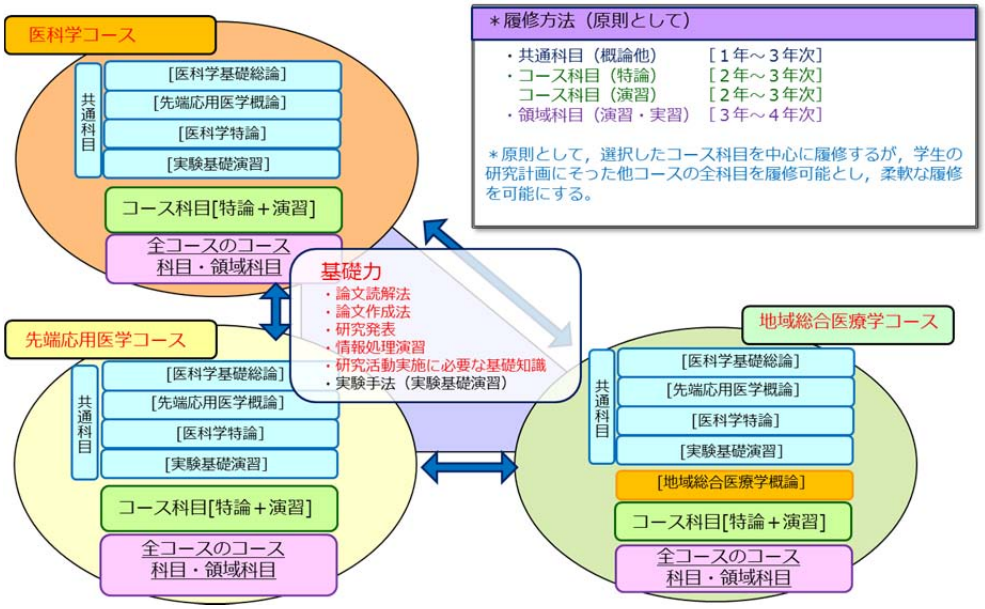
【大学院科目・コースワーク】

① 博士課程の教育課程では，３コースを統合的に展開することで，大学院生のキャリアパスの変更を容易にし，大学院生のニーズにも対応するカリキュラムとなっている（**資料 1-2-6，P5-7 前掲資料 1-1-4，別添資料 6(1)～(4)**）。授業科目のシラバスを作成し，授業の内容，到達目標，成績評価方法を明確にすることとしている（**資料 1-2-7**）。これらのカリキュラムに対する大学院生の満足度は第１期に比べ向上し良好であり，関係者の期待に応えている（**資料 1-2-8**）。

また，医学教育・研究の学際化に伴い，従来の枠組みにとらわれず，広く最新の情報を学ぶ目的で「共通科目」を必修科目として開設している（**資料 1-2-9，10**）。更に，本学の特色として，研究成果の発表・討論能力の涵養，他分野教員の助言指導による研究の促進のため，３年次には博士課程全体として「研究発表会」を定期的に開催している（**資料 1-2-11，12**）。これらの取組は大学院生から高い評価を得ており，関係者の期待に応えている（**資料 1-2-13，14**）。

資料 1-2-6　博士課程：カリキュラムの展開

３段階のコースワーク（共通科目（必修），コース科目，領域専門科目）から構成され，総合的・系統的に教育・研究能力を育成するカリキュラムが構築された。また，３コースを統合的に展開することで，大学院生のキャリアパスの変更を容易にしている。
・「共通科目」：必修科目，
・博士課程全体として「研究発表会」を定期的に開催：３年次生の出席，発表必修。



（修了要件）当該課程に４年以上在学し，所定の授業科目について 30 単位以上を修得し，かつ，必要な研究指導を受けた上，博士論文の審査及び最終試験に合格することとする。ただし，在学期間に関しては，優れた研究業績を上げた者については，当該課程に３年以上在学すれば足りるものとする。また，当該学生の個別の事情（介護・育児・職業を有している等）や　選択したコースに応じて，標準修了年限を超えて一定の期間にわたり計画的に教育課程を修了できる長期履修制度の活用を図り，修学上の負担の軽減措置を講ずるとともに，大学院教育の修業機会の拡大を推進する。

（事務局資料）

資料 1-2-7　博士課程　シラバス例（生体統御学特論）

医科学コース

授業科目名	教員名	職名／所属
生体統御学特論	飯野　　哲 堀口　和秀 深澤　有吾 菅井　　学 黒岡　尚徳	教　授／人体解剖学・神経科学 准教授／人体解剖学・神経科学 教　授／組織細胞形態学・神経科学 教　授／分子遺伝学 准教授／分子遺伝学
単位数　２単位		
コマ数　１５コマ		
開講時期　１～３年次		
キーワード　遺伝子発現、神経伝達、転写因子、細胞骨格	（コーディネーター） 飯野　　哲	教　授／人体解剖学・神経科学

学習目標

多細胞生物の生体維持・機能発現に関わる様々な制御システムとその分子基盤を理解する。

授業の内容

1．自律神経系における神経伝達１	（飯野・人体解剖学・神経科学領域・セミナー室）
2．自律神経系における神経伝達２	（飯野・同上）
3．消化管における神経支配と機能制御１	（飯野・同上）
4．消化管における神経支配と機能制御２	（堀口・同上）
5．臓器機能を支える間質細胞	（堀口・同上）
6．中枢神経系における神経伝達調節機構１	（深澤・組織細胞形態学・神経科学領域・セミナー室）
7．中枢神経系における神経伝達調節機構２	（深澤・同上）
8．神経回路論１	（深澤・同上）
9．神経回路論２	（深澤・同上）
10．神経回路論３	（深澤・同上）
11．ミトコンドリアと細胞分化	（菅井・分子遺伝学領域・セミナー室）
12．代謝と細胞分化	（菅井・同上）
13．活性酸素と細胞分化	（菅井・同上）
14．タンパク質の機能調節；タンパク質修飾、タンパク質分解、細胞内局在	（黒岡・同上）
15．転写因子のシグナル伝達；遺伝子発現、細胞増殖、細胞分化、ストレス応答	（黒岡・同上）

授業の形式

講義形式

到達目標

多細胞生物にみられる種々の生体制御システムの分子機序を理解するとともに、細胞・組織としての機能を理解する。

総合評価割合

出席・受講態度の良い学生に対し、理解到達度について評価する。

評価方法

出席および受講態度・理解度を各担当教員が評価の上、担当教員の合議により総合的に評価する。

教科書及び参考書

飯野、堀口：講義時に指示する。
深澤：講義時に指示する。
菅井、黒岡：分子細胞生物学　Lodish, Berk, Klieger, Matsudaira, Kaiser著
野田春彦、丸山工作、石川　統、須藤和夫、石浦章一　訳
第５版　2005 年　東京化学同人　8,400 円

その他履修上の注意点等

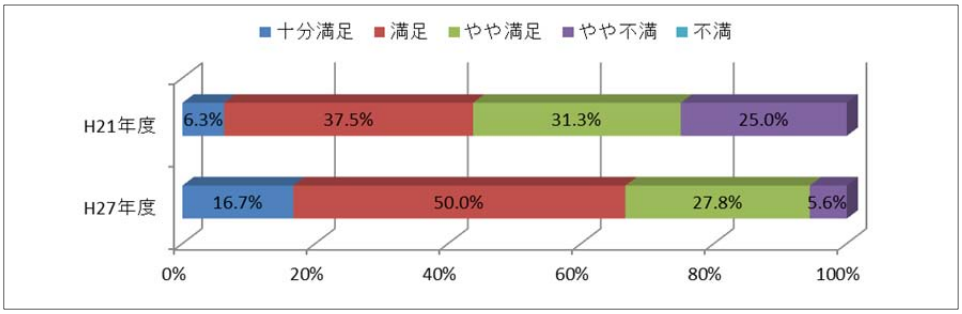
代表者 E-Mail	iinosa@u-fukui.ac.jp

（事務局資料）

資料 1-2-8　平成 21 年度，平成 27 年度福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査（教育全般）

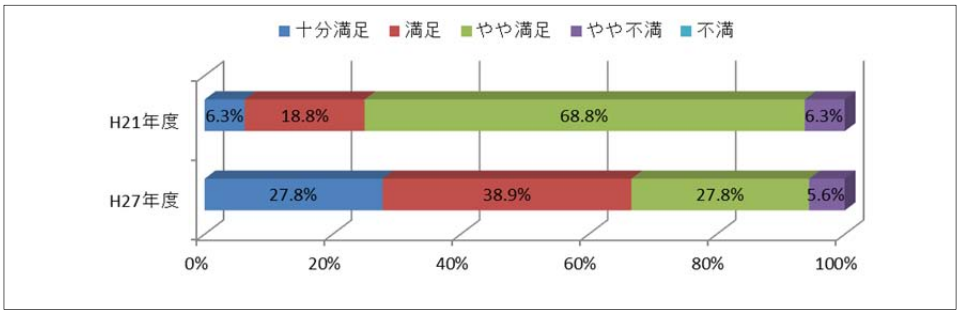
（注：全学対象調査より，医学系研究科大学院生を抽出）

■設問： 教育全般について，あなたはどの程度満足していますか。



※ 第１期末と比較して第２期末では学生の満足度（十分～やや満足と回答した割合）は，19.4%向上している。十分満足及び満足と回答した割合は 22.9%向上した。

■設問：専門の教育全般について，あなたはどの程度満足していますか。



※ 第１期末と比較して第２期末では学生の満足度（十分～やや満足と回答した割合）は，0.7%向上している。特に十分満足及び満足と回答した割合は 41.7%向上した。

（平成 21 年度および平成 27 年度「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」結果より抜粋）

資料 1-2-9　博士課程授業開設表「共通科目」（平成 27 年度）

専攻	コース	部門	授業科目	配当年次	開設単位 必修	開設単位 選択	履修時間数 講義	履修時間数 演習	履修時間数 実習	履修方法
医学統合先進専攻	共通科目		医科学基礎総論	1～2	4		60			指導教員の指導により下記のとおり履修しなければならない。
			実験基礎演習	1～2	2			30		
			医科学特論	1～2	6		90			
			先端応用医学概論	1～2	6		90			共通科目（必修）１８単位

「共通科目」は，各専門分野での問題点の抽出，研究テーマの立案，実験プランの作成，実験・調査結果の分析とデータの集積・整理，プレゼンテーション資料の作成，論文の書き方等の指導等を組み合わせた内容となっており，この中には昨今注目された研究倫理に関する E-ラーニングも含まれている。

（事務局資料）

資料 1-2-10　博士課程・平成 27 年度「共通科目」授業日程

月日	曜日	授業科目名	講義等内容 （タイトル）	担当領域等
4/6	月	医科学基礎総論	大学院授業ガイダンス・実験概説	医学科長
		医科学基礎総論	イオンチャネルに対する電気生理学研究：実験手技・研究の流れとその現状・展望	分子生理学
4/13	月	医科学基礎総論	実験倫理学・安全学	ライフサイエンス支援センター生物資源部門
4/20	月	医科学特論	子どもの心臓収縮と心肥大を調節する新しいCa2+制御因子	統合生理学
4/21	火	実験基礎演習	バイオ実験機器部門ガイダンス	ライフサイエンス支援センター
4/23,24	（木，金）	実験基礎演習	動物演習　Ⅰ　（動物取扱手技）	ライフサイエンス支援センター生物資源部門
		実験基礎演習	動物演習　Ⅱ　（動物実験手技）	
4/27	月	医科学特論	腸壁内神経の再生・新生	人体解剖学・神経科学
4/28	火	実験基礎演習	バイオデータベース演習	ゲノム科学・微生物学
5/11	月	医科学基礎総論	酵素化学実験法の概要	分子生命化学
5/18	月	先端応用医学概論	ヒトと環境生態（1）	環境保健学
		先端応用医学概論	ヒトと環境生態（2）	環境保健学
5/19	火	医科学特論	嗅覚研究からヒトの心を探る	高次脳機能
5/25	月	医科学基礎総論	組織細胞化学法による形態解析	人体解剖学・神経科学
6/2	火	医科学特論	転写因子活性調節による細胞分化・機能制御	分子遺伝学
6/8	月	医科学特論	脳内神経回路研究	組織細胞形態学・神経科学
6/9	火	先端応用医学概論	人工臓器（1）・人工腎臓	検査部
6/16	火	医科学特論	蛋白質凝集の理解のための諸側面	分子生理学
6/22	月	先端応用医学概論	難治性疾患（難病）・厚生医療（1）	非常勤講師
		先端応用医学概論	ヒトゲノム解析	
6/29	月	医科学基礎総論	定量的分子局在解析の基礎と応用	組織細胞形態学・神経科学
6/30	火	先端応用医学概論	難治性疾患対策事業	腎臓病態内科学
7/6	月	医科学基礎総論	医学研究における動物行動実験	子どものこころの発達研究センター
7/13	月	医科学基礎総論	遺伝子変異マウスを用いた腫瘍生物学研究	薬理学
7/14	火	医科学特論	形態研究の基礎	人体解剖学・神経科学
7/21	火	医科学特論	癌遺伝子と癌抑制遺伝子の最先端研究	薬理学
7/27	月	医科学基礎総論	遺伝医学概論：DNA多型の分子論的基盤	病態遺伝生化学
7/28	火	医科学特論	行動とホルモン	統合生理学
8/24	月	先端応用医学概論	低線量肺がんCT検診の国内外の状況と運用上の課題	非常勤講師
8/25	火	医科学基礎総論	コンピュータを駆使した生体機能の統合（Physiome研究）	統合生理学
8/31	月	先端応用医学概論	応用分子病理医学概論	分子病理学
9/1	火	先端応用医学概論	難治性疾患（難病）・小児慢性疾患（2）	小児科学
		先端応用医学概論	疾病構造解析医学概論（生活習慣病）	内科学（3）
9/7	月	医科学基礎総論	分子機能生物学：転写因子の機能調節による細胞増殖制御について	分子遺伝学
9/8	火	医科学基礎総論	免疫アレルギー反応における抗原受容体シグナル伝達	ゲノム科学・微生物学
		医科学特論	免疫アレルギー反応における細胞内シグナル伝達機構	
9/14	月	先端応用医学概論	同所移植実験モデルを用いた癌転移の解明の試み	産科婦人科学
9/15	火	医科学特論	節足動物介在性感染環の概念	非常勤講師
9/28	月	医科学基礎総論	大学院生研究発表会	大学院セミナー企画部会
9/29	火	実験基礎演習	PubMed　データベース演習	医学情報サービス係
10/5	月	医科学基礎総論	小児発達脳科学：初期経験がつくる「こころ」と「脳」の発達および感受性期	Age2企画
10/20	火	医科学特論	腫瘍性疾患の生体イメージング	高エネルギー医学研究センター
10/26	月	医科学基礎総論	内分泌学研究：研究の流れ	統合生理学
10/27	火	医科学基礎総論	論文作成法	分子生体情報学
11/2	月	先端応用医学概論	低侵襲性医療	泌尿器科学
11/9	月	医科学特論	細胞分化とクロマチン構造変化	分子生体情報学
		医科学基礎総論	分子内分泌学研究：内分泌に係る遺伝子発現解析等の概説	
11/16	月	先端応用医学概論	軟骨・椎間板組織の再生医療の現状	リハビリテーション部
		先端応用医学概論	腰痛性疾患に対する最小侵襲性手術の現状	
11/30	月	先端応用医学概論	アレルギー疾患のゲノム解析	耳鼻咽喉科・頭頸部外科学
		医科学基礎総論	感染免疫応答における細胞内シグナル伝達機構の基礎・分子標的治療薬	ゲノム科学・微生物学
12/1	火	医科学基礎総論	生体分子の構造・物性研究：分光法と熱力学的データ解析の基礎	分子生理学
12/7	月	医科学基礎総論	生命科学におけるRI利用法	高エネルギー医学研究センター
10/27	火	先端応用医学概論	バイオ・インフオーマテイクス	耳鼻咽喉科・頭頸部外科学
12/14	月	先端応用医学概論	神経科学と精神医学概論	精神医学
12/15	火	医科学特論	心筋イオンチャネルの機能解析	統合生理学
12/21	月	医科学特論	子宮内膜症を標的とした基礎-臨床-創薬の橋渡し研究	分子生体情報学
1/6	水	先端応用医学概論	グローバル化と産業保健	環境保健学
1/7	木	先端応用医学概論	温度環境に起因する家庭内事故　－入浴事故とトイレ事故の実態－	環境保健学
		先端応用医学概論	地域医療構想について	環境保健学
1/12	火	医科学特論	遺伝標識の応用：個人識別	病態遺伝生化学
1/18	月	医科学基礎総論	放射線の健康影響：福島原発事故を受けて	高次脳機能
1/22	金	医科学特論	漢方製剤のエビデンスの状況	分子生命化学
1/25	月	医科学基礎総論	PETを用いた生体イメージングと定量測定の基礎	高エネルギー医学研究センター
1/26	火	医科学特論	分子イメージング学	高エネルギー医学研究センター
1/29	金	医科学特論	アストロサイトによる神経信号のアナログ変調のメカニズム	脳形態機能学
2/1	月	医科学基礎総論	論文読解法	生命基礎科学
2/9	火	医科学特論	体内時計の振動メカニズム	行動基礎科学
2/16	火	先端応用医学概論	高度画像解析医学・基礎と先端応用(PET)	放射線医学
2/22	月	医科学基礎総論	大学院生研究発表会	大学院セミナー企画部会
2/23	火	先端応用医学概論	画像を中心とした教育システムについて	非常勤講師
2/29	月	医科学基礎総論	大学院生研究発表会	大学院セミナー企画部会
3/7	月	医科学基礎総論	大学院生研究発表会	大学院セミナー企画部会
3/14	月	先端応用医学概論	高度画像解析医学・基礎と先端応用(MR)	放射線医学
3/15	火	医科学特論	糖尿病性合併症の分子化学的基盤	分子生命化学

（事務局資料）

資料 1-2-11　医科学基礎総論に係る「大学院発表会（研究経過方向・検討会）」について

医学研究総論（医科学基礎総論）に係る「大学院生発表会
（研究経過報告・検討会）」について

平成１５年６月５日
博士課程委員会承認

【目的】

大学院教育の一環として、研究能力の一つとして不可欠である研究成果の発表と討論を遂行する能力の訓練を第一の目的として実施する。さらに研究内容・今後の方針について、広く議論する場を提供する。

併せて、本学の他の教室で行われている研究手法などの情報交換の場とし、学内研究者の交流を図る。

【方法】

学術公開討論会とは別に行う（学術公開討論会は博士課程修了の判定が目的である）。
大学院３年次生が現在取り組んでいる研究内容の概要・結果（場合により今後の展開も含む）を、大学院生（全学年）に対し発表する。
大学院３年次生全員が本年度中に一度は発表する。希望により、他年次生も発表できる。
発表時間 10 分、質問時間 5 分程度を目安とする（液晶プロジェクター使用可）。

【発表等】

発表会は公開とする。
一度は発表することを医学研究総論の履修要件とする。
出席者は、その発表方法、研究手法などについて、積極的にコメントする。

【その他】

大学院生（全学年）には出席し、発表者に対し積極的に質問・討論することを期待する。
大学院セミナー企画部会が運営にあたり、同部会長（もしくは同部会委員）が司会進行を行う。
教官（とりわけ、博士課程担当教員）も出席し、研究内容について積極的に議論・アドバイスを行う。
発表・討論の様子などは，リサーチアシスタント等選考の際の参考資料とする。

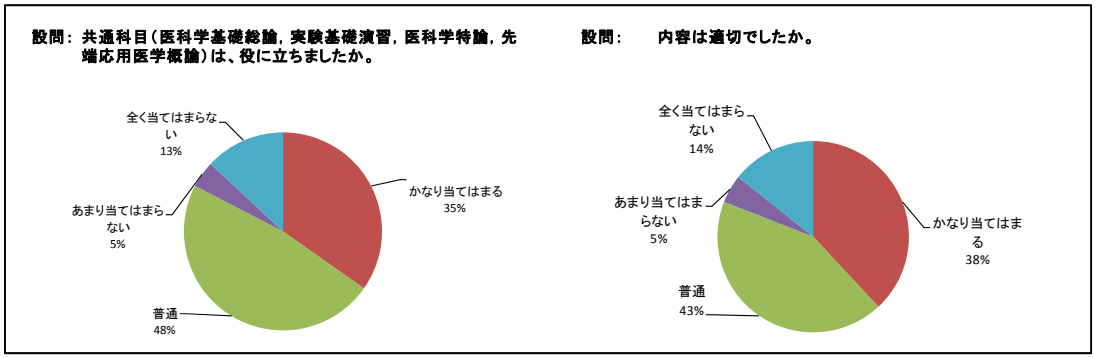
（事務局資料）

資料 1-2-12　博士課程　３年次生研究発表会実施状況（平成 27 年度）

月日（曜日）	発表時間(10分) 質疑応答(5分)	専　攻	発表テーマ
9月28日（月）	18:00～18:15	先端応用医学	脳主幹動脈閉塞・狭窄患者及びもやもや病患者のPETにおける血行力学的指標の比較
	18:15～18:30	先端応用医学	Magnetic resonance imaging(MRI)を用いたArterial spin labeling法による腎血流量の測定
	18:30～18:45	先端応用医学	マスト細胞におけるC型レクチンMincleの機能解析
2月22日（月）	18:00～18:15	先端応用医学	非アルコール性脂肪性肝炎(NASH)を背景とした肝細胞癌の臨床病理学的特徴の検討
	18:15～18:30	先端応用医学	Corticotropin – releasing factor の下部尿路機能に及ぼす影響について
	18:30～18:45	先端応用医学	慢性期脳卒中患者において機能的電気刺激(functional electrical stimulation : FES)が脳機能へ与える即時効果の研究
	18:45～19:00	先端応用医学	ミコナゾール硝酸塩含有石ケンによる外陰部カンジダ症の発症抑制効果に関する研究
	19:00～19:15	統合先進医学	自然発症高血圧ラットの排尿筋過活動におけるセロトニン受容体の関与について
2月29日（月）	18:00～18:15	統合先進医学	FIMを用いた脳卒中による食事の機能低下の予後予測の研究
	18:15～18:30	統合先進医学	有効な胸骨圧迫を30分間継続するのに必要なrescuer数の検討
	18:30～18:45	統合先進医学	ナノファイバー上の細胞遊走モデルを用いた悪性脳腫瘍浸潤抑制の検討
	18:45～19:00	統合先進医学	2次性変形性動物モデルに対する間葉系細胞移植を用いた変形性関節症予防効果と後根神経節における疼痛関連因子の免疫組織学的評価
3月7日（月）	18:00～18:15	統合先進医学	マウス脊髄損傷モデルにおけるCCL21が及ぼす疼痛関連評価およびmicroglia/macrophage phenotypeへの影響
	18:15～18:30	統合先進医学	ヒト頚椎椎間板変性に関与するタンパクの免疫組織化学的観察
	18:30～18:45	統合先進医学	Measurement of Precise CBF in H215O PET Study Considering the Delay in Every Pixel
	18:45～19:00	統合先進医学	Different prognostic implications of 18F-FDG PET between histological subtypes in patients with cervical cancer

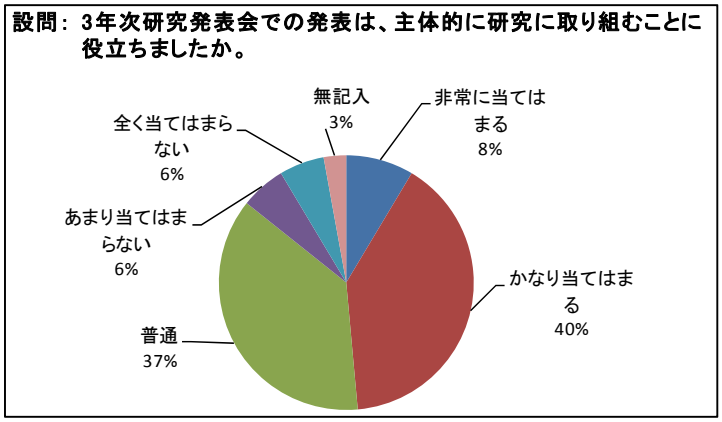
（事務局資料）

資料 1-2-13　博士課程「共通科目」に対する修了生アンケート結果（平成 27 年度実施）



（資料「修了生・大学院教育に関するアンケート集計結果・抜粋」から）

資料 1-2-14　博士課程　３年次研究発表会に対する修了生アンケート結果（平成 27 年度実施）



（資料「修了生・大学院教育に関するアンケート集計結果・抜粋」から）

② 修士課程では，教育目的を達成するために共通科目，専門科目を編成し，共通科目は専門的看護実践における課題探求能力，研究者・教育者としての基盤理論を教授する科目を配置，専門科目は，専攻領域の特論・演習・特別研究で構成されている。看護実践能力を高めるため演習や実習で体験型の教育を取り入れており，大学院生の満足度は高い（**資料 1-2-15，16**）。

特別研究では，領域ごとに看護学の基盤理論，最先端の専門的知見・事例検討・プレゼンテーション・文献クリティークなどを段階的に享受する科目を配している。また，シラバスを作成することにより，各授業の内容，到達目標，成績評価方法を明確にしており，大学院生の期待に応えている（**資料 1-2-17**）。

資料 1-2-15　修士課程授業開設表(平成 27 年度)

〔大学院教育の基盤としている共通科目については，専門看護師課程の開設に先立ち，平成25年度に専門看護師課程設置基準に沿って科目数を増加させ，内容を充実させた。〕

分野	教育・研究領域	授業科目	配当年次	開設単位	履修時間数 講義	履修時間数 演習	履修時間数 実習	履修方法
	共通科目	看護研究	1	2	30			指導教員の指導により下記のとおり履修しなければならない。
		看護倫理	1	2	30			
		看護理論	1	2	30			
		看護教育論	1	2	30			基礎看護学領域を専門とする学生 看護研究2単位 基礎看護学領域の3科目18単位 地域看護学特論2単位 共通科目又は他領域の特論科目から 8単位以上 計30単位以上を履修
		看護管理論	1	2	30			
		看護政策論	1	2	30			
		コンサルテーション論	1	2	30			
		ヘルスアセスメント	1	2	30			
		病態生理学	1	2	30			地域看護学領域を専門とする学生 看護研究2単位 地域看護学領域の3科目18単位 基礎看護学特論2単位 共通科目又は他領域の特論科目から 8単位以上 計30単位以上を履修
		臨床薬理学	1	2	30			
基礎・地域看護学	基礎看護学	基礎看護学特論	1	2	30			
		基礎看護学演習	1	4		120		
		基礎看護学特別研究	2	12		360		
	地域看護学	地域看護学特論	1	2	30			成人看護学領域を専門とする学生 看護研究2単位 成人看護学領域の3科目18単位 老年看護学特論2単位 共通科目又は他領域の特論科目から 8単位以上 計30単位以上を履修
		地域看護学演習	1	4		120		
		地域看護学特別研究	2	12		360		
成人・老年看護学	成人看護学	成人看護学特論	1	2	30			
		成人看護学演習	1	4		120		
		成人看護学特別研究	2	12		360		老年看護学領域を専門とする学生 看護研究2単位 老年看護学領域の3科目18単位 成人看護学特論2単位 共通科目又は他領域の特論科目から 8単位以上 計30単位以上を履修
	がん看護学	がん看護学特論Ⅰ	1	2	30			
		がん看護学特論Ⅱ	1	2	30			
		がん看護学特論Ⅲ	1	2	30			
		がん看護学特論Ⅳ	1	2	30			
		がん看護学特論Ⅴ	1	2	30			母子看護学領域を専門とする学生 看護研究2単位 母子看護学領域の3科目18単位 他分野の特論科目から2単位 共通科目又は他領域の特論科目から 8単位以上 計30単位以上を履修
		がん看護学演習Ⅰ	1	2		60		
		がん看護学演習Ⅱ	1	2		60		
		がん看護学実習Ⅰ	2	2			90	
		がん看護学実習Ⅱ	2	2			90	
		がん看護学実習Ⅲ	2	4			180	災害看護学領域を専門とする学生 看護研究2単位 災害看護学領域の特論科目及び 演習科目から6単位 災害看護学特別研究12単位 他分野の特論科目から2単位 共通科目又は他領域の特論科目から 8単位以上 計30単位以上を履修
		がん看護学実習Ⅳ	2	2			90	
		がん看護学課題研究	1・2	2		60		
	老年看護学	老年看護学特論	1	2	30			
		老年看護学演習	1	4		120		
		老年看護学特別研究	2	12		360		
母子看護学	母子看護学	母子看護学特論	1	2	30			
		母子看護学演習	1	4		120		
		母子看護学特別研究	2	12		360		
災害看護学	災害看護学	災害看護学特論Ⅰ	1	2	30			
		災害看護学特論Ⅱ	1	2	30			＊専門看護師教育課程を専門とする学生の履修に関しては別に定めるが，併せて修士の学位取得のため，課題研究2単位を履修
		災害看護学特論Ⅲ	1	2	30			
		災害看護学特論Ⅳ	2	2	30			
		災害看護学演習Ⅰ	1	2		60		
		災害看護学演習Ⅱ	2	2		60		
		災害看護学演習Ⅲ	2	2		60		
		災害看護学実習Ⅰ	2	2			90	
		災害看護学実習Ⅱ	2	3			135	
		災害看護学実習Ⅲ	2	2			90	
		災害看護学実習Ⅳ	2	3			135	
		災害看護学特別研究	2	12		360		
		災害看護学課題研究	1・2	2		60		

（注）教育上必要があるときは，大学院修士課程委員会の議を経て，授業科目又は単位数を変更することがある。

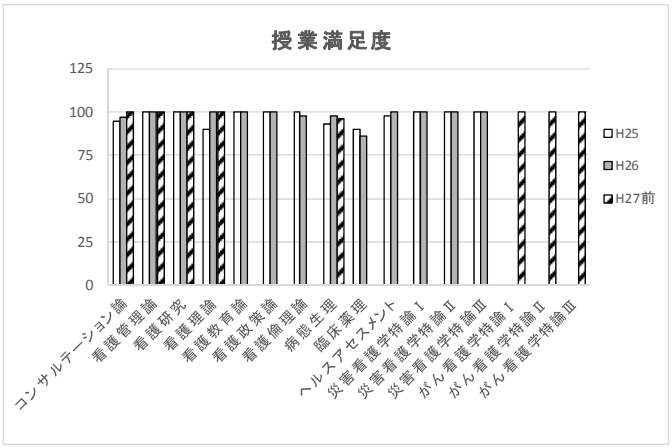
（事務局資料）

資料 1-2-16　修士課程　専門看護師教育課程　授業に対する総合的満足度調査結果

授業総合評価

	H25	H26	H27前
コンサルテーション論	95	97	100
看護管理論	100	100	100
看護研究	100	100	100
看護理論	90	100	100
看護教育論	100	100	
看護政策論	100	100	
看護倫理論	100	98	
病態生理	93	98	96
臨床薬理	90	86	
ヘルスアセスメント	98	100	
災害看護学特論Ⅰ	100	100	
災害看護学特論Ⅱ	100	100	
災害看護学特論Ⅲ	100	100	
がん看護学特論Ⅰ			100
がん看護学特論Ⅱ			100
がん看護学特論Ⅲ			100
平均	97.38	98.38	99.5

*そう思う+どちらかというとそう思うの合計点とする



・専門看護師教育課程における講義・演習などの満足度の各科目の平均値で97～100%とほとんどの院生が満足していた。

（事務局資料）

資料 1-2-17　修士課程　シラバス「基礎看護学特別研究」

【基礎看護学特別研究】

科　目　名	単位数	開　講　時　期
基礎看護学特別研究	１２単位	２年次通年

担当教員名	職名／所属	Eメールアドレス
○長谷川　智子	教　授／基礎看護学	hasekatz@u-fukui ac jp
上野　栄一	教　授／基礎看護学	eiichiu@u-fukui ac jp
上原　佳子	准教授／基礎看護学	uehara@u-fukui ac jp

【１　学習目標 】

1　修士論文のテーマに関する文献講読を通して研究課題を明確にし、研究の意義を見出す。
2　研究課題に応じた研究方法を選択し、研究計画を作成・実施する。
3　得られたデータを的確に分析・考察し、研究の臨床的応用を見出す。

【２　授業内容】

	（主題）	（学習内容）	（教員）
1)	研究課題の明確化	各自の研究課題、問題意識の明確化	長谷川・上野・上原
2)	研究課題の現状と意義の検討	文献クリティーク	〃
3)	研究方法の検討	研究の限界と研究デザインの検討	〃
4)	研究計画の立案	研究デザインの作成	〃
5)	研究計画の実施	計画の実施とデータ収集の実際	〃
6)	データ分析	データの分析とその解析方法	〃
7)	結果の評価	結果と考察の文章化	〃
8)	研究の文章化	修士論文の作成	〃
9)	研究内容の公開	効果的プレゼンテーション	〃

【３　授業形式】

ゼミナール形式と個別指導

【４　評価方法】

発表内容、討議への参加度

【５　教科書及び参考図書等】

適宜、提示する。

【６　その他】

（事務局資料）

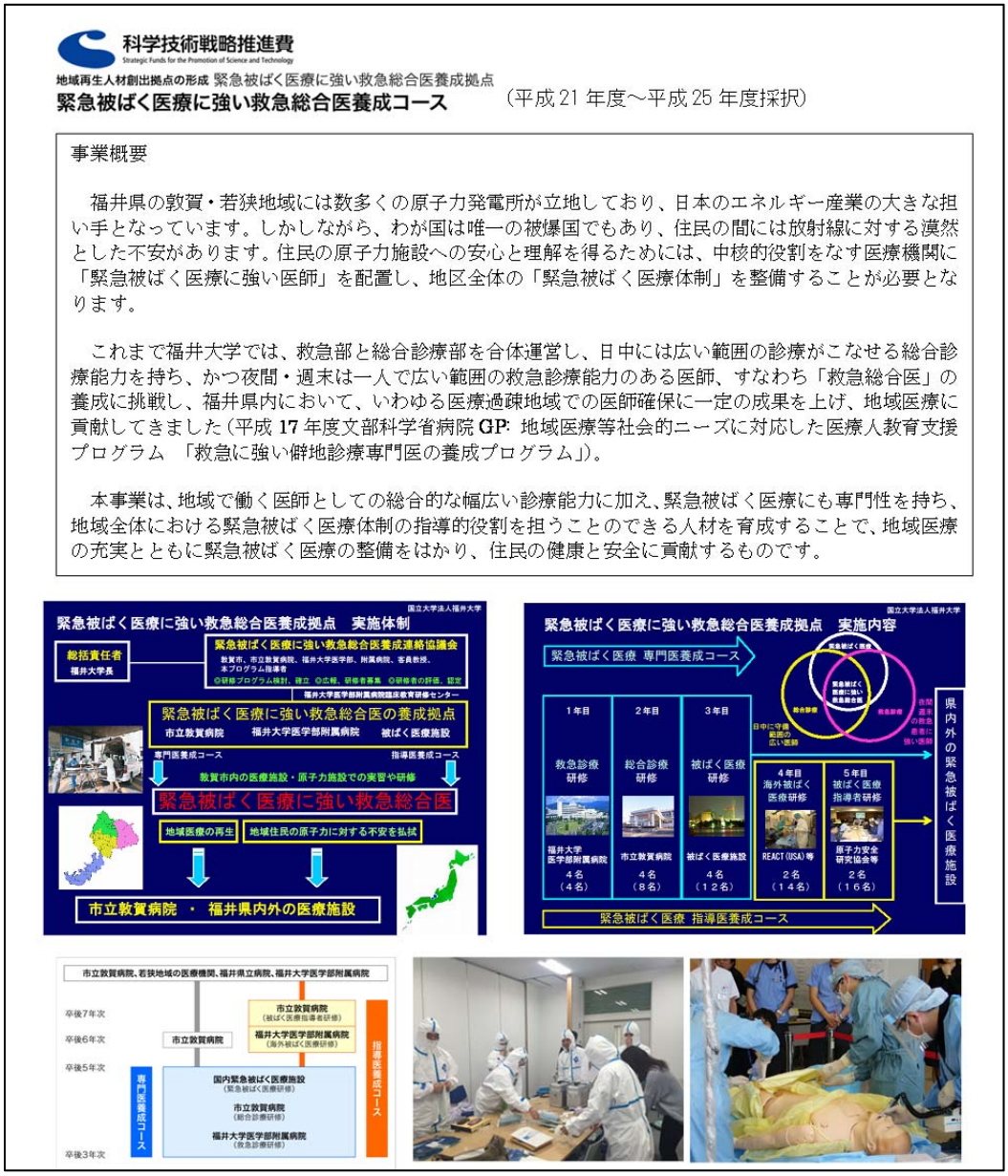
●社会のニーズに対応した教育課程の編成と実施上の工夫に関する例

【社会ニーズを踏まえたプログラム等】

① 原子力発電所の最多立地県である福井県においては，住民の不安を払拭するためにも，従来より被ばく医療に強い医師，災害看護専門看護師の養成には高いニーズがある。更に東日本大震災以降，緊急被ばく医療の充実が早急に求められている。本学は文部科学省科学技術戦略振興費「緊急被ばく医療に強い救急総合医養成拠点：緊急被ばく医療に強い救急総合医養成コース」に採択され（平成 21 年度～平成 25 年度），全国に先駆けて緊急被ばく医療専門医の育成を進め，高く評価された。福島原子力発電所事故では被ばく医療の最前線で活躍した（**資料 1-2-18～20**）。その実績を大学院教育にも生かし，「地域総合医療学コース」と「災害看護 CNS 課程」の講義と演習を同時開講している。

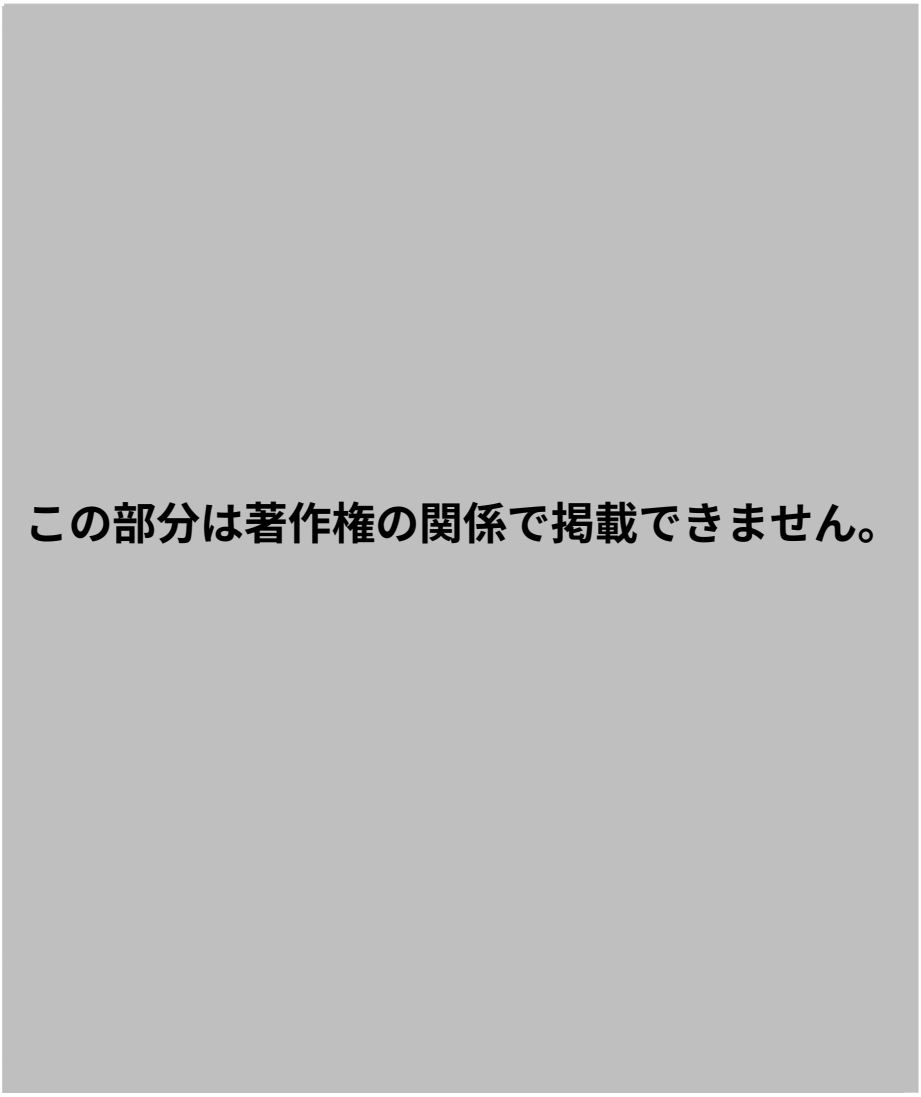
更に，大学院生が地域と協働して防災訓練や地域住民への啓蒙活動にも積極的に参加しており，多職種協働による取組は災害時の被ばく医療はもとより，地域医療の核となる人材を養成する全国のモデルケースとなり，関係者の期待に十分に応えるものである（**資料 1-2-21～23**）。

資料 1-2-18　緊急被ばく医療に強い救急総合医養成拠点概要



（緊急被ばく医療に強い救急総合医養成コース HP，福井大学救急部・総合診療部 HP より）

資料 1-2-19　被曝医療に強い救急医育成に関する記事



（朝日新聞記事フロントランナー平成 23 年 11 月 19 日より）

資料 1-2-20　「緊急被ばく医療に強い救急総合医養成拠点」最終評価

（事後評価）

緊急被ばく医療に強い救急総合医養成拠点

実施機関：福井大学（総括責任者：眞弓　光文）
実施期間：平成 21～25 年度

（1） 評価結果

総合評価	目標達成度	人材養成手法の妥当性	実施体制・自治体等との連携	人材養成ユニットの有効性	継続性・発展性の見通し	中間評価の反映
S	a	s	a	s	s	a

総合評価：S（所期の計画を超えた取組が行われている）

（2） 評価コメント

緊急被ばく医療は救急医療とともに福井県の地域医療の根幹をなすものであり、各種の医療専門職者の緊密な連携を必要とする領域である。本プロジェクトは、福島原発事故対応での研修生の活躍ばかりではなく、地元の救急医療体制の改善や緊急被ばく医療アドバイザーとして有事の際に地域行政へ参画する仕組の構築等に大きく貢献しているなど、高く評価できる。今後は、医療をチームワークによって支える各種の医療専門職者を継続的に養成しながら、多様な災害にも対応できるような波及努力を期待する。

・目標達成度：緊急被ばく医療に強い３年コースの専門医 12 名と５年コースの指導医２名という養成目標数の修了者を輩出した点は、修了者が養成目標に相応しい活躍をしていることとともに評価できる。

・人材養成手法の妥当性：シミュレーション実習を主体とする実践的人材養成手法は、豊富な臨床経験を通しての救急総合診療医としての診療能力の担保、原子力関連施設での外部研修、海外研修、福井県原子力防災訓練への参加、及び福島第一原子力発電所での実地研修等を伴い、さらに看護師、放射線技師等の医療専門職者を育成していることと併せ、妥当であり、高く評価できる。

・実施体制・自治体等との連携：市立敦賀病院との教育連携、修了者の就職を通しての他病院・他大学との密接な連携、福井大学福井メディカルシミュレーションセンター建設に対する福井県の補助など、地域自治体と大学との実効的な連携は評価できる。

・人材養成ユニットの有効性：受講者が実地研修を兼ねて福島第一原子力発電事故における緊急被ばく医療の初動体制の確立と現場での初期治療に関わった点、また、修了者が被ばく医療支援を継続していることを含めて、修了者の大部分が救急総合診療医として地元で活躍するだけではなく、緊急被ばく医療専門アドバイザーなど緊急被ばく医療に関わる啓蒙活動を行っていることなどは、高く評価できる。

・継続性・発展性の見通し：原子力事業者、自治体、各種団体との協力関係を構築し、医療専門職者への教育拡大を含めて引き続き本プロジェクトを継続していく方針の下、福井大学福井メディカルシミュレーションセンターを設立、活用し、「地（知）の拠点整備事業（大学 COC 事業）」での継続が決定していることは高く評価できる。今後は、地域の救急医療・総合医療にも対応できる人材層を一層拡充することとともに、弘前大学、福島県立医科大学等との連携を進めながら、緊急被ばく医療の全国的な拠点に成長することを期待する。

・中間評価の反映：被ばく医療に強い実践的な臨床医に加えて、看護師等の他職種の育成も重要という中間評価の指摘に応えて、福井大学大学院に災害看護専門看護師教育課程が開講された点などは評価できる。

（事務局資料）

資料 1-2-21　博士課程　シラバス「地域総合医療学・臨床疫学特論Ⅱ（ER 救急学）」

地域総合医療学コース

授業科目名	教員名	職名／所属
地域総合医療学・臨床疫学特論Ⅱ （ＥＲ救急学）	林　　寛之 寺澤　秀一 木村　哲也 嶋田　喜充 山村　　修 井階　友貴	教　授／総合診療部 教　授／地域医療推進講座（寄付講座） 准教授／救急部 講　師／救急部 講　師／地域医療推進講座（寄付講座） 講　師／地域プライマリケア講座 （寄付講座）
単 位 数　２単位		
コ マ 数　１５コマ		
開講時期　１～３年次		
キーワード　北米型 ER	（コーディネーター） 林　　寛之	教　授／総合診療部

学習目標

ER（北米型救急医療）の人材養成を目的とした、医学教育を修得する。地域ならではのすべての救急患者を受け入れるシステム構築手法、およびプロフェッショナリズムを修得する。臨床疫学を学び、実臨床に即した研究手法を学ぶ。

授業の内容

1．北米型 ER と ICU 型救急　日本の社会構造における位置づけと運営
2．IT 活用と文献収集・救急臨床疫学
3．高齢者救急と地域連携
4．Grieving care in ER
5．ER コミュニケーションスキルおよびプレゼンテーションスキル・ER の Faculty development とメディア力
6．ED overcrowding および社会のセーフティネットの構造
7．精神科救急（自殺、アルコール依存、薬物依存）
8．バーンアウト症候群と医療倫理
9．リスクマネージメント、医療安全、医療訴訟
10．小児虐待　配偶者虐待　老人虐待　社会的弱者（浮浪者、貧困、孤立など）と法整備
11．緊急放射線被ばくの実際、ALARA vs. SAHARA
12．災害医療と DMAT
13．プレホスピタルケアと社会リソース
14．各専門内科における地域医療学：初期診断・治療・連携のタイミング
15．各専門外科における地域医療学：初期診断・治療・連携のタイミング

授業の形式

講義形式を原則とする。

到達目標

社会のセーフティネットとしての北米型 ER の特殊性を理解し、地域や病院のリソースと協調しつつ、ER を効率よく効果的に運営できる

総合評価割合

出席を重視する。

評価方法

口頭試問、ミニテスト、レポートなど

教科書及び参考書

Thintinalli’s Emergency Medicine, Step Beyond Resident

その他履修上の注意点等

代表者 E-Mail	hhaya@u-fukui.ac.jp

（事務局資料）

資料 1-2-22(1)　修士課程　シラバス(1)「災害看護学特論Ⅰ」

【災害看護学特論Ⅰ】

科　目　名	単位数	開　講　時　期
災害看護学特論Ⅰ	２単位	１年次後期

担当教員名	職名／所属	Ｅメールアドレス
○酒井　明子	教　授／災害看護学	sakaiaki@u-fukui.ac.jp
野戸　結花	教　授／弘前大学	noto@cc.hirosaki-u.ac.jp
磯見　智恵	教　授／成人・老年看護学	ichie@u-fukui.ac.jp
木村　哲也	准教授／救急医学	tkimu@u-fukui.ac.jp
松本　英樹	准教授／高エネルギー医学研究センターがん病態制御・治療部門	hidekim@u-fukui.ac.jp
山崎　加代子	准教授／福井県立大学	yamazaki@fpu.ac.jp
高山　裕喜枝	救急認定看護師／看護部	yukie@u-fukui.ac.jp
清水　誉子	助　教／災害看護学	urutaka@u-fukui.ac.jp
上田　耕蔵	病院長／協同生協病院	ueda@kobe-iseikyo.or.jp
永井　幸寿	弁護士／アンサー法律事務所	koju-answer@bell.ocn.ne.jp

【１　学習目標 】

災害種類・災害サイクルにおける身体的・心理的・社会的課題を生活の側面や地域社会への影響の側面から理解する。災害発生時の生活の問題に関連した法律や制度を理解し、災害対応政策の現状と課題を検討し、考察する。

【２　授業内容】

	(主題)	(学習内容)	(教員)
1	*災害種類別による生活上の諸問題*	災害種類における身体的・心理的・社会的課題に対する生活上の問題	酒井・山崎・高山 磯見・清水
2	〃	〃	酒井・山崎・高山 磯見・清水
3	*災害サイクル別による生活上の諸問題*	災害サイクルにおける身体的・心理的・社会的課題に対する生活上の問題	酒井・山崎・高山 磯見・清水
4	〃	〃	酒井・山崎・高山 磯見・清水
5	*災害時に発生する健康課題*	災害に関連する疾患および災害関連死と発生要因	上田
6	〃	災害関連死に関する災害対応政策の現状と課題	上田
7	*災害が人体に及ぼす影響と社会的課題*	災害が人体に及ぼす影響―放射線による人体影響に関する対策	松本
8	〃	放射線による社会的課題	松本
9	〃	緊急被ばくに対する災害対応政策	松本
10	*災害事例と災害対策*	事例からみた各災害における災害対応政策の実際と課題	木村
11	〃	〃	木村
12	*災害事例と看護の課題*	事例からみた各災害における生活上の問題・地域社会への影響と看護	野戸
13	〃	〃	野戸
14	*災害に関連した法律や制度*	災害時の諸問題と法	永井
15	〃	法改正の背景と今後の課題	永井

【３　授業形式】

講義及びプレゼンテーションと討議

【４　評価方法】

授業への参加状況、プレゼンテーション内容及びレポート内容により総合的に評価する。

（事務局資料）

資料 1-2-22(2)　修士課程　シラバス(2)「災害看護学実習Ⅳ」

【災害看護学実習Ⅳ】

科　目　名	単位数	開　講　時　期
災害看護学実習Ⅳ	３単位	２年次後期

担当教員名	職名／所属	Ｅメールアドレス
○酒井　明子	教　授／災害看護学	sakaiaki@u-fukui.ac.jp
木村　哲也	准教授／救急医学	tkimu@u-fukui.ac.jp
磯見　智恵	教　授／成人・老年看護学	ichie@u-fukui.ac.jp
繁田　里美	准教授／成人・老年看護学	shigeta@u-fukui.ac.jp
月田　佳寿美	准教授／成人・老年看護学	tsuki@u-fukui.ac.jp
麻生　佳愛	講　師／成人・老人看護学	kawaia@u-fukui.ac.jp
川口めぐみ	講　師／精神看護学	senmegu@u-fukui.ac.jp
清水　誉子	助　教／災害看護学	urutaka@u-fukui.ac.jp
鈴木　勝博	救急救命士／永平寺町消防本部	katsukun900r2005@yahoo.co.jp

【１　学習目標 】

災害急性期から中長期、備えの時期（静穏期）における地域に根ざした看護活動の実際を学び、被災者を取り巻く他職種とのネットワークを活用した実践能力を養い、災害看護専門看護師の役割（実践、相談、調整、教育、研究、倫理調整）を分析し、専門看護師としての将来展望をもつ。

【２　授業内容】

	（主題）	（学習内容）	（教員）
1	地域における減災・防災に貢献する専門看護師の必要性と役割の開発	地域の歴史・文化・対象者の特性を把握し、地域全体の視点から、課題を探求し、減災・防災に貢献する災害看護専門看護師として、地域との連携を考慮した役割の必要性を分析する。	酒井・磯見 繁田・月田 麻生・川口 清水
2	地域における減災・防災に関する複雑で解決困難な問題に対して地域ネットワークを活用した解決方法を探究	地域のネットワークを活用し地域に寄り添う企画を実践し、複雑で解決困難な問題に対して地域の資源を活用した解決方法を探究する。 （地元消防との連携実習として、大規模災害に備えて、応急救護所および避難所活動のシミュレーションを企画し、永平寺町住民と協働し、大規模災害を想定した訓練を行う。永平寺消防職員と協働し住民への救急救命講習を行う。また、地元の消防との連携により救急車同乗実習を行い、災害医療初動体制における実践能力を学ぶ。）	酒井・川口 鈴木
3	原子力施設が立地する地域において減災・防災に関する複雑で解決困難な問題に対して地域ネットワークを活用した解決方法を探究	原子力施設が立地する地域において地域のネットワークを活用した企画を実践し、減災・防災に関する複雑で解決困難な問題に対して地域ネットワークを活用した解決方法を探究する。 （原子力施設と共存・共栄できるまちづくりとして原子力関連団体と協働し、原発立地県住民へのスクリーニング指導、放射線の絵本作りと地元小学校へのエネルギー環境教育、放射線による健康被害、地域被ばくフォーラムを実施）	酒井・木村
4	実践事例を通した課題探求と評価	地域に根ざした他職種とのネットワークにおける災害看護の実践能力を発揮するために必要な能力について議論し、課題を探求し評価する。	酒井

【３　授業形式】

実習及びプレゼンテーションと討議

（事務局資料）

資料 1-2-23(1)　修士課程 大学院生協力啓蒙活動(1)

平成 27 年 11 月 11 日

教職員　各位

看護学科長
酒　井　明　子

文部科学省「地（知）の拠点整備事業
「つながれ地域の絆
～楽しく学ぼう！災害時の応急手当～」について（ご案内）

本セミナーは，ＣＯＣ事業の一環として平成２５年度より本学と永平寺町消防本部が連携して開催していますが，今年度は，応急手当てをより身近に感じていただきたいと永平寺町消防署員や本学学生・大学院生による寸劇を交えたセミナーを予定しております。
一般向けには対象を永平寺町民，福井大学学生としていますが，本学教職員も積極的にご参加いただきたいと存じます。
参加のお申し込みは，下記申込窓口までお願いします。
ご多用とは存じますが，多数のご参加をお願い申し上げます。

記

日　　時：平成２７年１２月１２日（土）　９：００～１２：００
場　　所：福井大学松岡キャンパス体育館
内　　容：寸劇による心肺蘇生法・ＡＥＤ・三角巾講習など
持 ち 物：内履き
本学申込〆切：　平成２７年１１月３０日（月）
申込窓口：松岡キャンパス学務室 医学教育第二係
TEL　内線２１４２　E-mail　gmtigaku-2k@ad.u-fukui.ac.jp







（事務局資料）

資料 1-2-23(2)　修士課程 大学院生協力啓蒙活動(2)

つながれ地域の絆～楽しく学ぼう！災害時の応急手当～　参加者の感想

■　指導学生への感想
- ○ 1班ごとにサポートの方がついて下さったことで分かりやすく学べました。また，気軽に質問できたので助かりました。
- ○ グループスタッフの方々の対応がとても良かった。
- ○ スタッフの方がそばにいたので丁寧に教えてもらえて良かった。
- ○ グループの指導者の方の説明・指導がとってもわかりやすかった。感謝。
- ○ 学生さんのサポートが気さくで色々教えて下さった。ありがたかった。
- ○ 消防の人と，医大の人がグループに入っていて心強かった。
- ○ 一体感が感じられて，良かったです。

■　大学への感想
- ○ 福井大学のサポートがあって分からない点の質問が出来てとても良かった。
- ○ 大学からのサポートがあり理解しやすかった。
- ○ 大学が加わっていた事で地域の若い力を感じる事が出来心強い気持ちがした。
- ○ 福井大学のサポートが大変良かった。

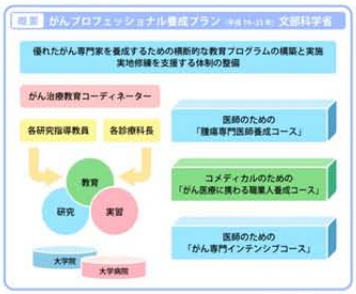
（事務局資料）

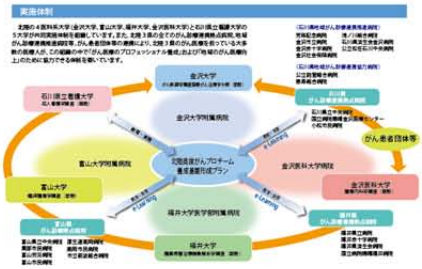
② 文部科学省「がんプロフェッショナル養成プラン」に採択（平成19年度）された「北陸がんプロフェッショナル養成プログラム(北陸がんプロ)」の実施機関の１つとして(**資料 1-2-24，25**)，本学のがん専門医やがん専門看護師養成の取組を更に進め，認定医も誕生しており，社会の要請であるがん専門職の育成促進に適切に対応している。

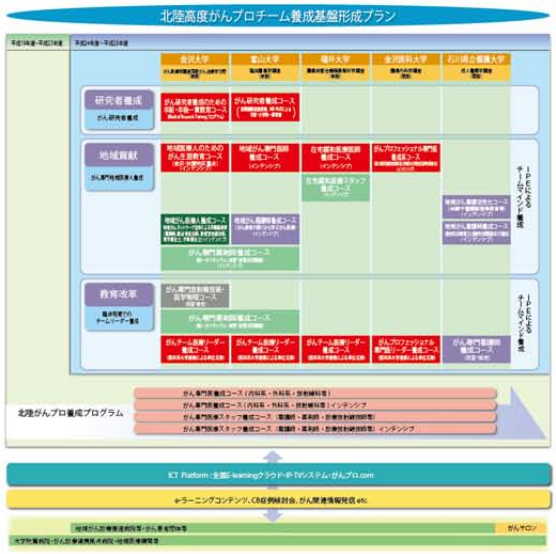
平成26年度から文部科学省の新規事業『課題解決型高度医療人材養成プログラム』として「北陸認知症プロフェッショナル医養成プラン事業（認プロ)」に採択され，平成27年度に１名が入学した（**資料 1-2-26，27**)。

資料 1-2-24　北陸がんプロの概要とコンセプト

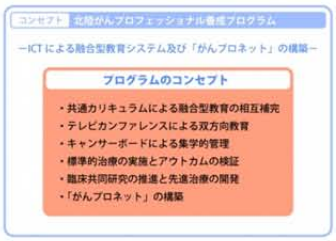
平成１９年４月から施行された「がん対策基本法」の第１４条には“国及び地方公共団体は、手術・放射線療法・化学療法その他のがん医療に携わる専門的な知識及び技能を有する医師その他の医療従事者の養成を図るために必要な施策を講ずるものとする”と記載されている。この趣旨に基づき、文部科学省が“がん医療の担い手となる高度な知識・技術を持つがん専門医師及びがんに携わるコメディカル等、がんに特化した医療人の養成を行うための大学（大学病院、大学院）の優れた取り組みを支援する”目的で平成１９年度から創設した計画が「がんプロフェッショナル養成プラン」です。







本プログラムには３つのコースが設定されています。①つ目は「北陸がんプロフェッショナル専門医養成コース」であり、高い臨床能力と研究能力を併せ持った臨床医を養成するために、大学院博士課程４年間の間に、がん臨床とがん研究との教育指導の両者をバランスよく按分することによって、効率的な環境下（充実した教育指導と高度な機器）で学位の取得とともに各科専門医資格、腫瘍専門医認定が得られることを目指す一石三鳥のプログラムです。②つ目はがん専門コメディカルの養成を目的とした「北陸がんプロフェッショナルがん専門薬剤師養成コース」、「北陸がんプロフェッショナルがん専門看護師養成コース」、「北陸がんプロフェッショナルがん専門診療放射線技師養成コース」で、がん医療に特化した実践的教育を、医師も含め職種を越えて高度な融合型教育を行い、学位の取得とともに、がんチーム医療に積極的に貢献できる職業人の養成を目指すプログラムです。③つ目は「北陸がんプロフェッショナル　インテンシブ医師コース」、「北陸がんプロフェッショナル　インテンシブコメディカルコース」です。対象は、すでに学位や学会の専門医、認定医を取得した医師や一定の実務経験を有するコメディカルで、科目等履修生等により一定期間の講義や臨床実習を受けることにより、がんの診断・治療・研究に必要な高度な知識・技術の修得を目指すコースです。



本プログラムの特色は、高い臨床能力と研究能力を併せ持つがん専門医師及びコメディカル養成のための融合型教育システムの構築で、教育ツールのICT(information & communication technology)を「がんプロネット」として北陸地域内外でのがん情報発信・交換にも活用することです。本プログラムに参加する４大学病院及びがん診療連携拠点病院は北陸地域のがん患者の７０％以上を診療しており、参加全病院に各種がん診療の標準化を求め、地域のがん診療の質的向上、均てん化を図る。集積されたがん診療のデータベースを用いて、アウトカムの検証を行い、診療向上のためにフィードバックするとともに、臨床共同研究に発展予定です。また、本プログラムで実践されるチームワークを重視した医師及びコメディカルの融合型教育システムは、わが国のがんプロフェッショナル養成システムのモデルとして期待されています。

（資料「北陸がんプロ HP 及び文部科学省 HP」から）

資料 1-2-25　北陸がんプロの実績

	H22		H23		H24		H25		H26		H27	
	受講者	修了者	受講者	修了者	受講者	修了者	受講者	修了者	受講者	修了者	受講者	修了者
インテンシブコース	4		10									
看護師インテンシブBコース	9	7	8	3	2	0	1	0				
在宅緩和医療医師養成コース							0	0	8	2	7	3
在宅緩和医療スタッフ養成コース							2	0	19	7	17	2

	開催数	参加者数	開催数	参加者数	開催数	参加者数	開催数	参加者数	開催数	参加者数	開催数	参加者数
キャンサーボード検討会	23	1,058	23	1,308	22	1,338	24	1,470	20	1,149	20	1,179
（福井大学関係者:内数）		(276)		(238)		(269)		(222)		(180)		(169)

対象者：各大学教職員、大学院生、がん診療連携拠点病院・地域がん診療推進病院等の医師、薬剤師、 診療放射線技師、臨床検査技師等医療スタッフ、基礎医学研究者、その他希望する者

チーム養成基盤形成プラン	開催数	参加者数	開催数	参加者数	開催数	参加者数	開催数	参加者数	開催数	参加者数	開催数	参加者数
看護セミナー			1	82	1	94	1	120	1	88	1	82
県民公開シンポジウム			1	444		334	1	339	1	304	1	225
看護事例検討会					10	83	8	46	8	52	8	58

平成27年度北陸高度がんプロチーム養成基盤形成プラン
看護セミナー「患者さんのその人らしい生活を支えるために」
H27．10．12実施

アンケート集計結果（83件） 回収率100%

当日参加人数

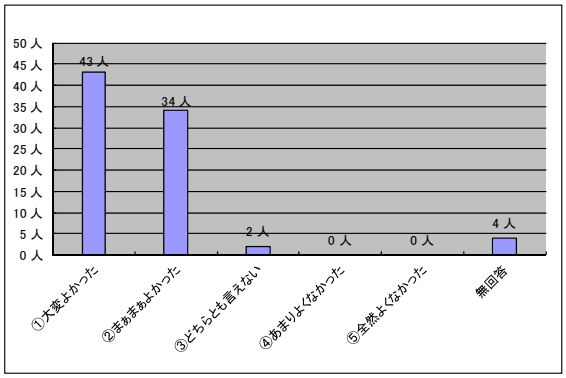
事前申込者	19名
当日参加者	4名
学生	59名
計	0

職業内訳

看護師	15 名
保健師	1 名
学生	60 名
その他	7 名
計	83 名

5．このセミナーはいかがでしたか

①大変よかった	43 人
②まぁまぁよかった	34 人
③どちらとも言えない	2 人
④あまりよくなかった	0 人
⑤全然よくなかった	0 人
無回答	4 人
計	83 人



＊主な感想

医師・看護師・患者の視点から意見を聞くことができてより理解することができた。

とても勉強になった。色々なことについて深く考えさせたれた。

認定看護師さんの話を聞く機会がなかなかないので、貴重な経験になったと思います。

がんという1つの病気に目を向けて、専門的な目線から学ぶことが出来てよかったです。

栄養について考える機会となった。最近の治療、大学で行われていることの理解ができた。事例について日々患者をしっかり観察することが大切。患者が選択したことによりそうこが大切で患者さんが選択したことをサポートしていく中で、患者さんが変化したことに一緒に考えていける余裕を持ちたいです。

患者の参加はとても良いと思います。ただ患者にはわかり易いように抽象的な表現は避けた方がいいとおもいました。

学校ではすることのできない体験ができました。すごく看護について考えさせられて、どうしたら患者にとって一番いいケアができるのかが難しく感じました。

我々にとって非常に有益なセミナーではあったが、参加された患者さんにとってどれほど得るものがあったのか疑問である。患者さんむけのセミナーを別に開催するべきだと思った。患者さんに事例紹介よりもっと分かりやすい学習会のかたちがあるのではないかと思う。

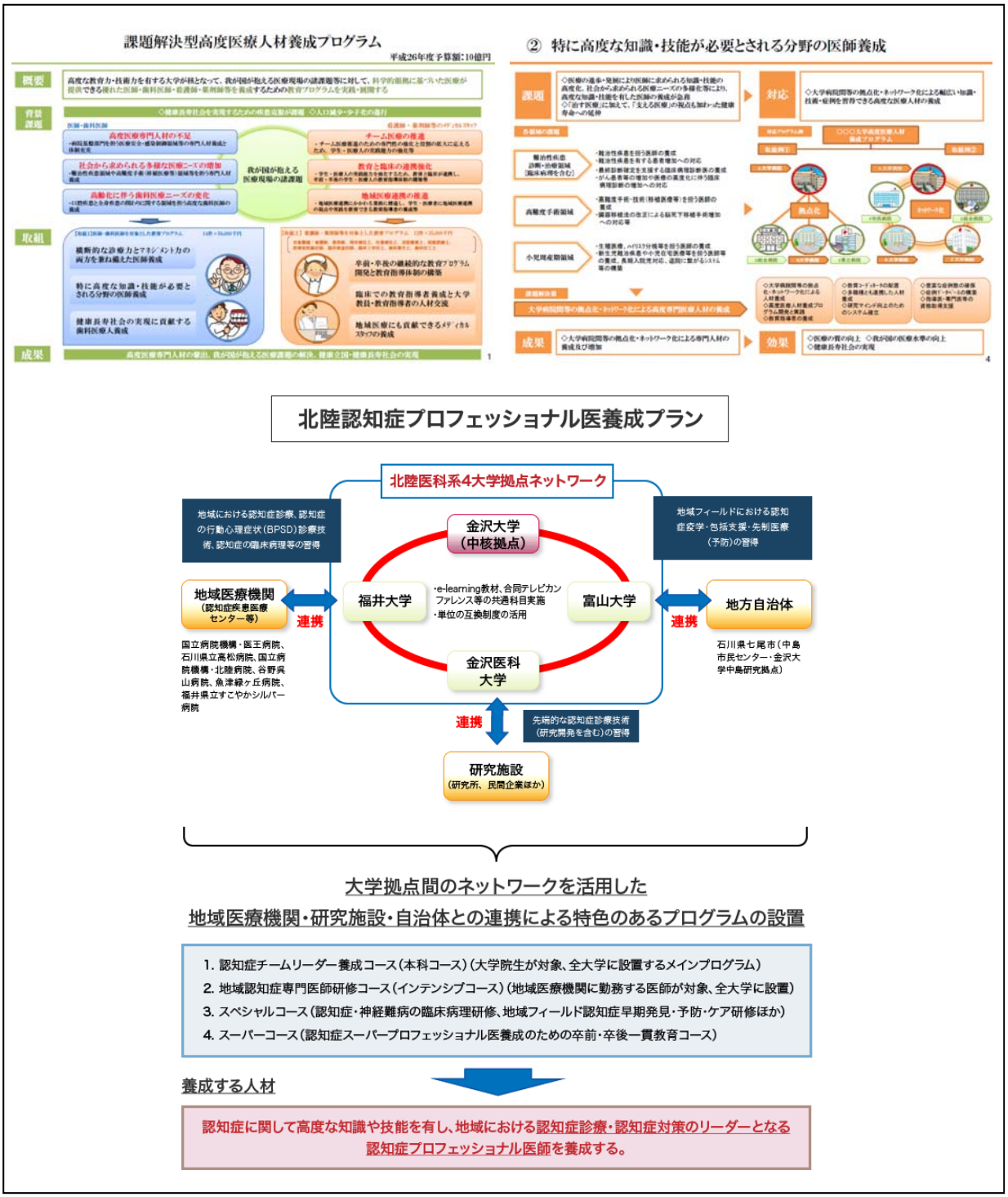
事例検討があって、具体的なイメージがしやすくてよかったです。患者さんの背景に気づき、多職種で連携して支えていくことが大切だということを改めて感じました。

学生にとって少し難しいと思いました。

一般人には専門的すぎてわかりにくい。次元がちがう。実施するならば、もっと理解できる言葉でお願いします。でも、とっても有意義な３時間でした。

（事務局資料）

資料 1-2-26　認プロの概要とコンセプト



（資料「認プロ HP 及び文部科学省 HP」から）

資料 1-2-27　認プロの実績）

26年度

市民公開講座

	2月22日	「認知症を知る・治す・防ぐ」	金沢大学	—

＊本学濵野准教授：パネリストとして参加

27年度

市民公開講座

	11月22日	「みんなで知ろう若年性アルツハイマー病」	福井大学	280名

デメンシアカンファレンス

	日時	タイトル	開催及び発信	参加者数
第1回	4月28日	小脳と脳幹の萎縮を伴った若年性認知症の一例	金沢大学　神経内科	9名
第2回	5月27日	長期間の経管栄養から離脱できたレビー小体病の一例	富山大学　神経精神医学	8名
第3回	6月23日	亜急性の経過をたどった記憶障害の一例	福井大学　内科学(2)	26名
第4回	7月30日	抑うつ症状で発症し認知障害を呈した一例	金沢医科大学　精神神経科学	15名
第5回	8月18日	近時記憶障害で発症した家族歴のある認知症の一例	金沢大学　神経内科	4名
第6回	9月17日	脳梗塞を繰り返し、認知機能低下が進行した一例	富山大学　神経内科	12名
第7回	10月27日	気分変動を伴うレビー小体病の一例	福井大学　精神医学	15名
第8回	11月20日	入院前の迷惑行動から対応困難とされたレビー小体型認知症の一例 地域支援事業者との連携により自宅療養が継続できている幻覚、妄想のある認知症の症例	石川県立高松病院 国立病院機構北陸病院	3名
第9回	12月4日	うつ病治療中に認知機能低下をきたした一例	金沢医科大学　高齢医学	7名
第10回	1月12日	進行性の認知機能障害を認めた若年男性の一例	金沢大学　神経内科	6名
第11回	2月23日	進行性失語症が疑われる一例	富山大学　神経精神医学	5名
第12回	3月15日	進行する認知機能低下を発症した炎症性脳アミロイド血管症の一例	福井大学　内科学(2)	11名

FD懇談会

	日時	タイトル	開催及び発信	参加者数
第1回	5月18日	アミドロイドに関するセミナー	金沢大学	13名
第2回	11月13日	認知症の治療―疾患別対応の重要性とその応用―	富山大学	1名
第3回	11月16日	アルツハイマー病の危険因子	金沢医科大学	1名
第4回	12月7日	認知症の先制医療：バイオマーカーによる診断技術の進歩と予防的介入	金沢医科大学	2名
第5回	12月15日	ヒトならびに動物モデルを用いたタウPETイメージング：創薬ツールとしての可能性	福井大学	20名
第6回	2月10日	認知症の患者・家族に対する多職種連携アプローチ	金沢医科大学	1名
第7回	2月17日	脳内脂質代謝変動とアルツハイマー病分子病態	金沢医科大学	2名

キャリアアップ支援セミナー

	日時	タイトル	開催及び発信	参加者数
第1回	10月13日	臨床医から製薬企業へのキャリアパス―抗認知症薬開発に携わって―	金沢大学	0名

認知症チーム医療・ケアセミナー　※第8回デメンシアカンファレンスと同時開催

	日時	タイトル	開催及び発信	参加者数
第1回	11月20日	地域包括ケアシステムにおける認知症ケアネットワークの役割	金沢大学	3名

27年度教育コース履修者状況

	教育コース名		履修者数
福井大学	認知症チーム医療リーダー養成コース（本科コース）　募集2名	4月受入1名	1名
	地域認知症専門医師研修コース（インテンシブコース）　募集5名	5月受入1名、11月受入1名	2名

認プロ参加施設テレビ会議システム設置場所

・福井大学　（院生棟4階セミナー室）
・金沢大学　（医薬保健学域医学類教育棟地下多目的室）
・富山大学　（付属病院2階カンファレンスルーム2）
・金沢医科大学　（基礎研究棟3階大学院セミナー室）
・国立病院機構医王病院　（臨床研究棟会議室）
・国立病院機構北陸病院　（特殊診療棟2階小会議室）
・福井県立すこやかシルバー病院　（管理棟2階応接室）
・石川県立高松病院　（医局会議室）
・谷野呉山病院　（共通棟1階ミーティング室）
・魚津緑ヶ丘病院（5階会議室）

（事務局資料）

【地域への教育サービス】

平成 22 年度には，社会人の学び直しと地域医療をリードする高度実践能力を有する看護師の養成のため，看護キャリアアップセンターを設置し，看護職のキャリアアップ支援に向けた教育活動の推進を図っている（**資料 1-2-28，29，別添資料 7**）。

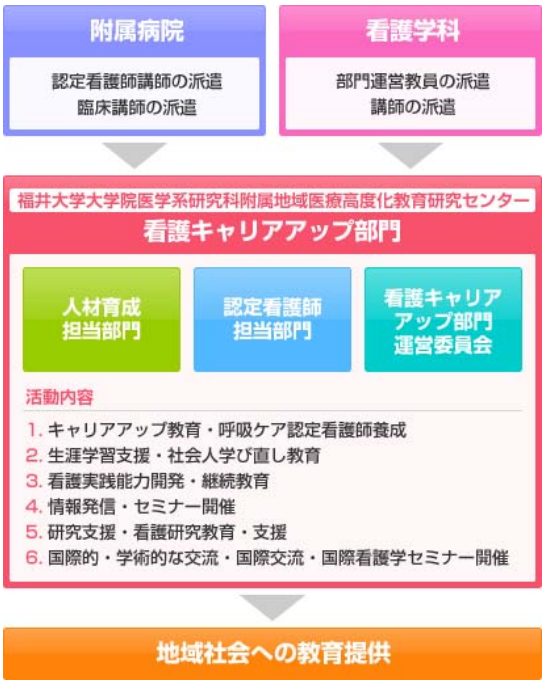
また，人材育成担当部門で，主に現場で働く看護師を対象に企画・開講している能力開発講座の参加者は年々増加傾向にあり，北陸を中心とする地域の看護師の現任教育に大きく貢献している（**資料 1-2-30～32**）。

資料 1-2-28　看護キャリアアップセンター・認定看護師教育課程設置検討経過

年度	検討内容等
平成22年度	・福井大学大学院医学系研究科附属看護キャリアアップセンター設置 ・呼吸ケアＣＮ分野認定審査（日本看護協会） ・カリキュラム検討ワーキングによる基準カリキュラム最終調整（日本看護協会） ・基準カリキュラム提出 ・「慢性呼吸器疾患看護」シラバスの策定・検討，科目担当教員・非常勤講師案の検討・策定 ・「慢性呼吸器疾患看護」認定看護師教育機関認定申請書提出 ・平成23年度受講生募集 ・機関認定審査，教育機関認定（日本看護協会） ・機関認定登録手続き ・「慢性呼吸器疾患看護分野」第1期生入学審査，入学者発表（入学者30名）
平成23年度	・大学院医学系研究科附属看護キャリアアップセンターを改組し，大学院医学系研究科附属地域医療高度化教育研究センター設置 ・認定看護師教育課程「慢性呼吸器疾患看護分野」開講 ・「慢性呼吸器疾患看護分野」第2期生入学審査，入学者発表（入学者28名）
平成24年度	・「慢性呼吸器疾患看護」教育機関認定確認（日本看護協会） ・「慢性呼吸器疾患看護分野」第3期生入学審査，入学者発表（入学者29名） ・「手術看護分野」開講の必要性について，看護キャリアアップ部門運営委員会で承認 ・「手術看護分野」シラバスの策定・検討，科目担当教員・非常勤講師案の検討・策定
平成25年度	・「手術看護分野」認定看護師教育機関認定申請書提出 ・「手術看護分野」平成26年度受講生募集 ・機関認定審査，教育機関認定（日本看護協会） ・機関認定登録手続き ・「慢性呼吸器疾患看護分野」第4期生入学審査，入学者発表（入学者29名） ・「手術看護分野」第1期生入学審査，入学者発表（入学者22名）
平成26年度	・認定看護師教育課程「手術看護分野」開講 ・「慢性呼吸器疾患看護分野」第5期生入学審査，入学者発表（入学者24名） ・「手術看護分野」第2期生入学審査，入学者発表（入学者22名）
平成27年度	・「手術看護分野」教育機関認定確認（日本看護協会） ・「慢性呼吸器疾患看護分野」第6期生入学審査，入学者発表（入学者25名） ・「手術看護分野」第3期生入学審査，入学者発表（入学者14名） ・新規認定看護師教育課程分野の開講にむけ，情報収集及び検討

（看護キャリアアップセンター資料から抜粋）

資料 1-2-29　看護キャリアアップセンター概要



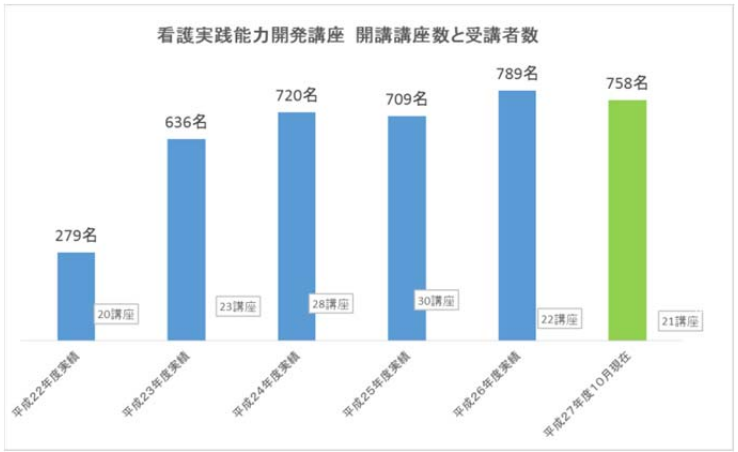
（看護キャリアアップセンター資料から抜粋）

資料 1-2-30　看護キャリアアップセンター　人材育成担当部門概要



（看護キャリアアップセンター資料から抜粋）

資料 1-2-31　看護キャリアアップセンター　能力開発講座参加者状況



平成 26 年度では 789 名が参加し，６年間で延べ 3,891 名の参加があった。参加者の多くは福井県内であったが，石川県や富山県からの参加も多く，静岡県や三重県からの参加もあった。

（看護キャリアアップセンター資料から抜粋）

資料 1-2-32　看護キャリアアップセンター　能力開発講座参加者からの主な意見

（全体意見）
・シリーズ化してほしい。
（講座参加者からの主な意見）
・講義の内容を実際にグループワークの中で考えることができた。（パワーポイントによるプレゼンテーション）
・患者家族対応のみでなく，スタッフ（医療者）のストレスについての講義もありよかった。今後活用したい。（悲嘆）
・解剖から呼吸音の種類まで実技を含んで分かりやすい講義でした。（胸部のヘルスアセスメント）
・これまでの急変時対応は BLS のような研修しか受けたことがなかったので，今回具体的な場面での救急対応を学べてすごくよかった。（急変看護のアセスメント）
・実際に震災を受けて今でもセシウムなど放射能の問題は残っています。安全に生活ができるよう，周りに正しい知識を広めていきたいと思っています。（緊急被ばく医療について）
・実際にスパイロ検査が体験し，息を吐く大変さが分かりました。患者さんの気持ちを配慮し関わっていきたいです。（COPD ってどんな病気？）
・PNS は関東でも注目されていてキャリアアップの研修で学び，自施設でも取り入れていこうと考えています。周りの人と協力して少しずつ進めていこうと思いました。（PNS で変わるあなたの病院）
・摂食嚥下や口腔ケアは，病棟に患者さんがいる限り，どの科に行っても必ず必要となる知識になるので，とても参考になりました。（学んでそして体験して，だから伝えられることがある「嚥下」とは）
・弾性ストッキングの使用法，参考になりありがとうございました。体位変換時，除圧，背抜きも体験し，とても心地よいもので明日から活かせていきます。（もう一度振り返りませんか？身近なスキンケア）
・医療技術の進行もさらに確認でき，情報提供の大切さもさらに大事になると思いました。

（看護キャリアアップセンター資料から抜粋）

●国際通用性のある教育課程の編成・実施上の工夫に関する例

【国際的な研究体験】

①　博士課程では，国外の地域医療・臨床教育の研究者も積極的に招聘し，大学院生に世界最新の知見を学ばせるとともに，英語を通じた研究者たちとの交流を重視したカリキュラムやセミナーなどを積極的に展開している（**資料 1-2-33**）。「地域総合医療学コース」は，北米型 ER を導入している本学附属病院の特性を踏まえ，海外でも活躍できるジェネラリストの育成も目的としている（**資料 1-2-34，35，P5-62 前掲資料 1-2-21**）。

資料 1-2-33　博士課程・大学院セミナー担当研究者数一覧

	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	計
実施回数	25	30	37	41	40	39	212
区　分							
外国の大学教員、研究機関等の研究員等	2	2	2	3	6	7	22
国内の大学教員	19	25	27	27	31	24	153
国内研究機関等の研究員等	4	3	4	9	3	6	29
本学教員等	0	0	4	2	0	2	8
計	25	30	37	41	40	39	212

主な担当研究者

研究者名	所　属	テーマ
Laurent Guerin	European Synchrotron Radiation Facility	100ps structural dynamics capabilities using synchrotron radiation x-ray sources : An application to the quaternary transition of Human Hemoglobin
小山　博史	東京大学大学院医学研究科臨床情報工学分野	Virtual Reality技術の医学応用
張　幸	中国浙江省医学科学院	中国浙江省におけるじん肺、石綿関連肺疾患の現状
岩井 一宏	大阪大学大学院生命機能研究科/医学系研究科	ユビキチン修飾系の多彩な機能
P. K.Sishodiya	インド国立鉱業医学研究所	Occupational Health Issues in Indian Mining Industry : Emerging Trends and Priority Areas
小山　博史	東京大学大学院医学系研究科医療科学講座 臨床情報工学分野	Rを用いた臨床薬物動態解析入門
玉城　英彦	北海道大学大学院医学研究科予防医学講座　国際保健医学分野	世界へ翔ぶ　-国連機関をめざすあなたへ -
Keiko Funa (鮒　恵子)	Professor of Medical Cell Biology Institute of Biomedicine, Department of Medical Chemistry and Cell Biology University of Gothenburg	神経幹細胞と神経芽腫瘍幹細胞の概論と再生におけるTLX の役割
古瀬　幹夫	神戸大学大学院医学研究科生理学・細胞生物学講座細胞生物学分野	上皮細胞同士の隙間をシールする仕組み
Benjamin K. Tsang	Director, Reproductive Biology Unit and Professor of Obstetrics & Gynecology and Cellular & Molecular Medicine, University of Ottawa, Canada	Life, Death and Immortality: New Insights on the Role of p53 in the Mechanism of Chemoresistance in Ovarian Cancer
Alexander A. Shtil	ロシア連邦国立がんセンター	がんのボロン中性子捕捉療法(BNCT)と光線力学療法 (PDT) の両用増感剤の開発戦略
高折　晃史	京都大学医学研究科	成人T細胞白血病　-その発見から現在-
Prof.Artin A.Shoukas	Johns Hopkins University School of Medicine	米国ジョンズホプキンス大学における工学部と医学部の連携の実際
林　康紀	理化学研究所脳科学総合研究センター	Role of cytoskeleton in hippocampal synaptic plasticity 「シナプス可塑性と細胞骨格」
Ru-Chi Shieh （謝如姬）	Institute of Biomedical Sciences, Academia Sinica, Taipei, Taiwan	Potassium Efflux through Kir2.1 Channels- A Matter of Life and Death
P.W.Grigsby	Washington　University	Evolution of PET for Gynecologic Oncology
Rafael Lujan	Castilla-La Mancha 大学（スペイン）	情報伝達分子の脳内超微局在解析
萩原 明人	九州大学大学院医学研究院 医療経営・管理学講座	Ambulance dispatches from non-affected areas after the Great East Japan Earthquake: impact on emergency care in the non-affected areas
Helen P. Batty	University of Toronto, Department of Family and Community Medicine	New Approaches to Scholarship in Medical Education
内匠　透	独立行政法人　理化学研究所 脳科学総合研究センター	概日リズムの機構と臨床医学への展開
重本 隆一	オーストリア国立科学技術研究所	入力側依存的な海馬シナプスの左右差:その形成メカニズムと生理的意義
斎藤　博英	京都大学iPS細胞研究所	人工RNAナノシステムを活用した細胞プログラミング技術の創出

（事務局資料）

資料 1-2-34　博士課程「地域総合医療学コース」招へい講師一覧

	教　官	所　属	テーマ
1	西山慶	京都大学	医学系研究の研究計画書の書き方～苦手意識を克服するために～
2	永田高志	九州大学	災害医療をテーマとした論文を書くためには？
3	Robert　D.　Abott	滋賀医科大学	Common Misconceptions about Data Analysis and Statistics
4	渡瀬博子	現ワシントン大学	MPH（Master of Public　Health）留学について

国外招へい講師

	教　官	所　属	期　間
1	Prof.Goldman	University of British Columbia	H26.5.12～5.16、H27.10.26～10.30
2	Prof.　Batty	University of Toronto	H24.10.25～10.31、H27.4.6～4.10
3	Dr.　Stein	University of Florida	H27.6.22～6.26、H27.11.2～11.6

受講生の声（授業アンケートより）

・medical research について，英語のシャワーを浴びて，殆どわからなかったが，スライドがシンプルで，どことなく意味が解った。
・英語は不得意で難しかったが，医学教育についての話しを聞く機会が少ないので，新鮮だった。教育について身近なものとして感じることができた。
・今の英語力では内容があまり理解できなかったので，これから努力しようと思う。

（事務局資料）

資料 1-2-35　博士課程　シラバス「地域総合医療学・臨床疫学演習Ⅰ」

地域総合医療学コース

授業科目名	教員名	職名／所属
地域総合医療学・臨床疫学演習Ⅰ	林　寛之 寺澤　秀一 木村　哲也 嶋田　喜充 山村　修 井階　友貴	教　授／総合診療部 教　授／地域医療推進講座（寄付講座） 准教授／救急部 講　師／救急部 講　師／地域医療推進講座（寄付講座） 講　師／地域プライマリケア講座（寄付講座）
単位数　４単位		
コマ数　３０コマ		
開講時期　２～４年次		
キーワード	（コーディネーター） 林　寛之	教　授／総合診療部

学習目標

臨床研究の基礎を築き、臨床研究の立案ができる。人材育成を目的とした教育コースの準備、運営ができる。医学教育の手法を理解し、患者、コメディカル、医師に対して教育を行い、Faculty 養成も視野に入れ教育できる

授業の内容

1．EBM 臨床統計学概論
2．医学論文の批判的吟味演習　その 1
3．医学論文の批判的吟味演習　その 2
4．Bias と confounding factor
5．診断・スクリーニングにおける医学論文の EBM
6．治療・予後における医学論文の EBM
7．検査における医学論文の EBM
8．観測値・観察研究における医学論文の EBM
9．OSCE と効果的教育法
10．ACLS、ICLS コースの到達目標と教育手法
11．JATEC、PTLS 外傷教育コース
12．ALSO、BLSO 産科救急コースとプライマリーケア
13．小児救急教育コース
14．Triage 教育コースとその応用
15．災害救急コースと地域医療の協力体制
16．メディカルラリーと病棟看護師教育
17．フレームワーク仕事術と Faculty development
18．海外の ER と Faculty development
19．海外の GIM・Hospitalist と Faculty development
20．海外の家庭医療学と Faculty development
21．海外の医学教育
22．Time management と医師のストレス
23．地域行政と医師不足対策
24．地域枠学生医学教育と地域医療
25．学会活動と臨床研究の発表
26．WEB、IT 活用のメディア力と情報発信
27．Facebook、Twitter、iTune-U の応用
28．アニメーション、AV 医学情報の視覚化
29．プレゼンテーションの IT 応用と情報のシェア
30．在宅医療、リハビリテーション演習

授業の形式

講義およびグループ形式の演習を中心に行う。学会発表、海外の大学院参加も授業と換算する。

到達目標

臨床研究立案を行う。コース運営を実際に行う。地域に出向いて患者、コメディカル、医師に対して教育を行う。

（事務局資料）

② 修士課程においては，海外で行う研究の指導も行っており，平成 24 年度には，社会人学生でありながら，インドネシアに滞在し調査を行い，１名が学位を取得した（**資料 1-2-36**）。

資料 1-2-36　修士論文審査結果報告書

別紙様式第５号（第９条関係）

審　査　結　果　報　告　書

※整理番号	8	（ふりがな） 氏　　名	[redacted]
修士論文題目	途上国看護職の清潔意識に関する研究 ～感染予防技術における清潔意識に着目して～		
論文審査委員会	主　査　　重　松　陽　介　　印 副　査　　上　原　佳　子　　印 副　査　　酒　井　明　子　　印		

1　修士論文審査結果

（合　格）　　不合格

修士論文審査結果の要旨

インドネシアでの病院看護支援事業の実効性を高めるための調査研究として、看護職者の感染予防技術における清潔意識に着目し、国際協力を受け入れている病院で指導的な職位にある６名の看護職者について、現場の参加観察と半構成的面接を実施し、重要な観察場面と有意義なカテゴリーを摘出することが出来た。すなわち、清潔操作において、手洗いの未実施や個人単位の滅菌セットを複数患者に使用する場面が観察され、標準感染予防策が必ずしも実施されていなかった。看護師の清潔意識については、宗教上の教えが背景として大である一方、院内感染から“自分の身を守ることを優先”し、“経験的によい情報は受け入れる”という点が特徴的であった。

これらの成果を踏まえ、途上国での看護支援においては、宗教的背景と親の代から受け継がれている日常生活での清潔感を適切にアセスメントし、またこれまでに受けてきた看護教育の内容を把握したうえで、“よい経験”となるよう看護支援を行うことが効果的であると提言出来た。修士論文として有意義な内容を有していると判定した。

（平成 25 年　3 月　1 日）

2　最終試験結果

（合　格）　　不合格

最終試験結果の要旨

所定の単位を修得し、また提出された論文を審査した結果、修士論文としての価値あるものと認め、更に最終試験の成績を総合して合格と認める。

（平成 25 年　3 月　1 日）

（事務局資料）

③　看護キャリアアップセンターでは，医学部と共同し，平成 23 年度より海外研修プログラムを行っている。研修先であるバーミンガム市立大学，コベントリー＆ワーウィック大学病院などでの講義・演習を通し，高度実践看護師の教育と活動，専門領域における高度医療の実際，在宅医療と終末医療の実際などを学ぶとともに，グローバルな視点を育成している。平成 23 年度から平成 27 年度まで，認定看護師課程学生述べ 40 名が参加しており，研修の目標は達成されている（**資料 1-2-37，38(1)，38(2)**）。

資料 1-2-37　高度実践看護師海外研修概要（抜粋）

2014 年 4 月

福井大学　英国の医療と高度実践看護師研修 2014

《グローバルな視点と専門性の高い知識を有する医療人育成のためのキャリアアップ研修》

【概要】

福井大学では、21 世紀のグローバル社会において、高度専門職業として活躍できる優れた人材の育成に努めている。その一環として、英国の医学部を有する大学とその附属病院、がん専門病院、ホスピスにおいて、医療専門職の教育の実際、高度実践看護師の実際、様々な領域における最先端のチーム医療、および近代ホスピスの実際について学ぶ目的で海外研修プログラムを実施している。

【研修施設】

1. バーミンガム市立大学看護学部
   - 英国における医療制度を理解する
   - 英国における看護教育の内容と実際について学ぶ
   - 看護技術修得のための教育の実際を知る
2. レスター大学医学部
   - 英国における医学教育の内容と実際について学ぶ
3. レスター大学附属グレンフィールド病院
   - 高度実践看護師（看護管理者、ナースプラクティショナー、ナースコンサルタント、CNS、マトロン等）の役割と実践活動について学ぶ
   - 呼吸器疾患患者のための様々なチーム医療について学ぶ
   - 呼吸器疾患患者のための地域医療について学ぶ
   - 英国の大学病院における呼吸器医療と看護について学ぶ
4. ロイヤル・マーズデン病院
   - 英国における高度実践看護師の教育の内容と実際について学ぶ
   - 英国における最先端のがん医療について学ぶ
5. セント・クリストファーホスピス
   - 近代ホスピスの概念と成り立ちを知る
   - 近代ホスピスにおけるケアの実際について学ぶ

【実施責任者】看護キャリアアップセンター　副センター長　長谷川智子





（事務局資料）

資料 1-2-38(1)　高度実践看護師海外研修参加者アンケート結果(1)

高度実践看護師に関する海外研修参加者アンケート

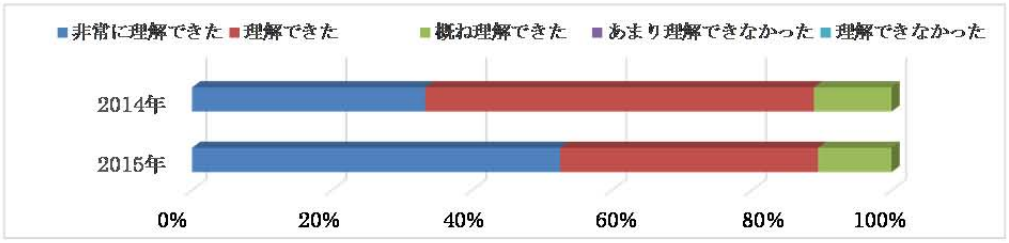
回答者：2014 年および 2015 年海外研修参加者計 35 名

学部生 12 名（2014 年 3 名　2015 年 9 名）

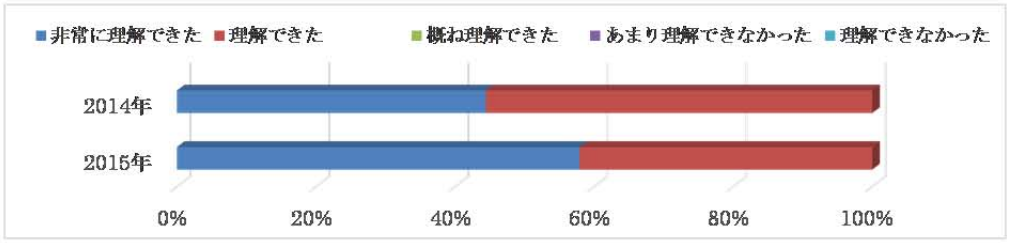
認定看護師教育課程研修生 23 名（2014 年 12 名　2015 年 11 名）

1，実習目標等の達成感について

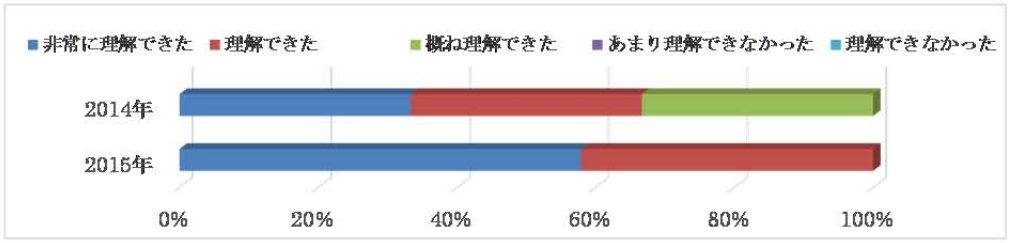
1）海外における医療制度と国際的視点での医療のあり方の理解



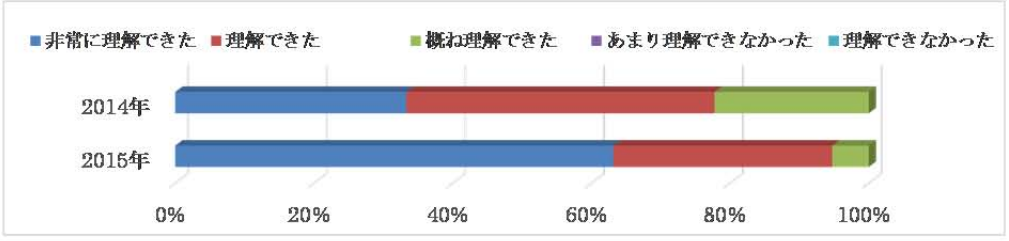
2）海外における高度実践看護師の活動の理解



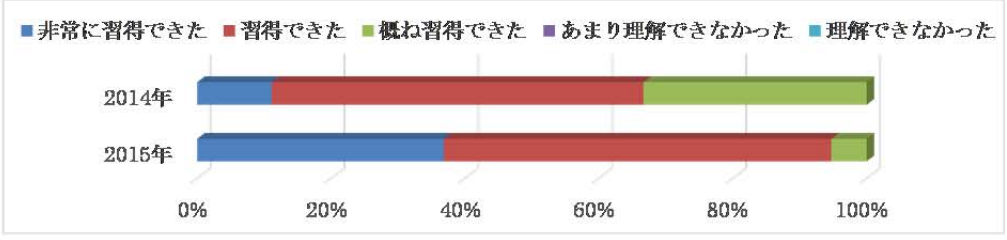
3）看護専門分野での高度実践看護師の役割の理解



4）高度専門看護師による専門性の高い看護実践の理解



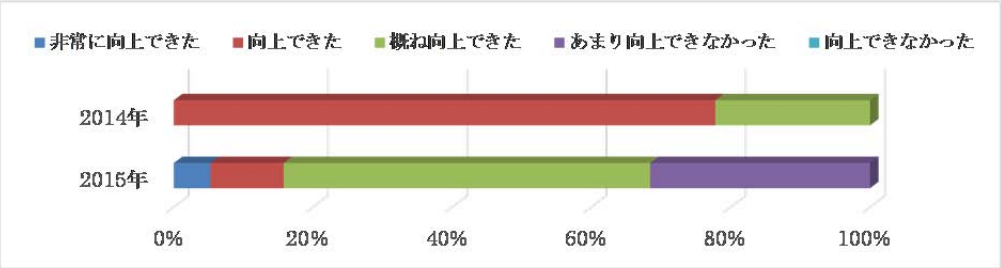
5）将来専門性の高い実践看護師となるための基礎的知識と態度の習得



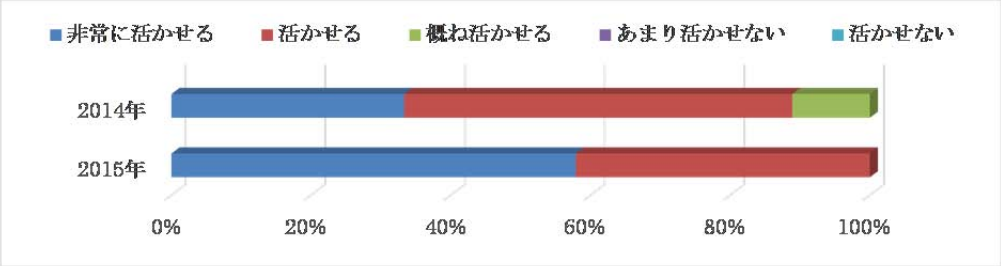
（資料「高度実践看護師海外研修参加者アンケート集計結果」より）

資料 1-2-38(2)　高度実践看護師海外研修参加者アンケート結果(2)

6) 自己の語学力（英語）の向上



7) 自己のキャリア形成への活用



《回答者コメント》

- 今後，看護でも日常生活においても英語というものは非常に必要になってくると感じ，よりいっそう勉強が必要だと感じた。
- 語学力をあげ，他国の方とコミュニケーションをもっと取りたいと思った。お互いに意見交換したいと感じた。
- 日本だけでなく海外の医療や看護の理解のためにも，英語力をつけなければならないと感じた。
- 勉強することの大切さ，楽しさを学べたので，今後は積極的に学び学生生活を送っていきたい。
- 英国の看護学生は，日本の看護学生よりも実習期間が長く，実習先では先輩看護師に技術チェックを行ってもらうなど，次のステップに進むためにクリアすべきことが沢山あり，ほとんどの学生が自分の興味のある分野でスペシャリストになりたいと思っていると聞いた。英国の看護学生の意識の高さを実感し，今後の実習を通して自分の興味のある分野を見つけ出したいと思った。
- 自分の目指す高度実践看護師像がさらに明確になった
- 現代のグローバル化に伴い，様々な分野において活かせる。
- 日本と英国の医療制度や国民の姿勢を知り，今後，日本にだけに目を向けるのではなく世界のケアにも目を向けていく必要がある。

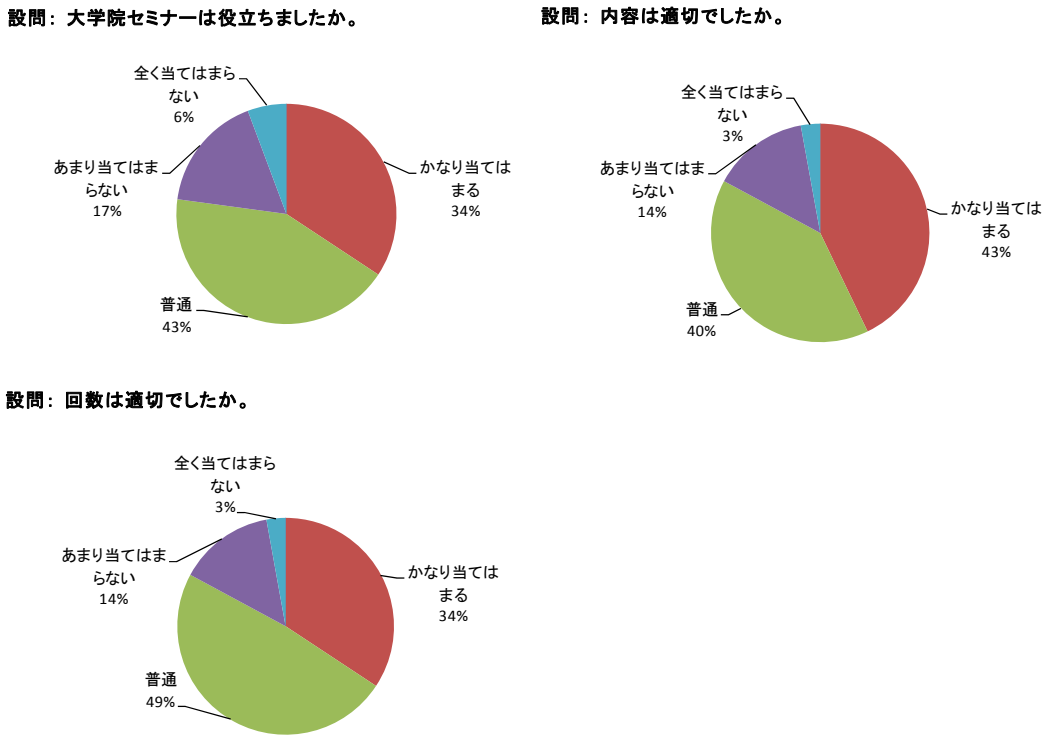
（資料「高度実践看護師海外研修参加者アンケート集計結果」より）

●養成しようとする人材像に応じた効果的な教育方法の工夫に関する例

【教育方法の組み合わせ】

① 博士課程では，正規カリキュラムのほかに大学院セミナーを年間 30 回以上開催し，最新かつ最高水準の研究に触れる機会を継続的に提供している。また最新の実験手技・機器の取扱いの実習を大学院生がテーマに合わせて選択できる機会を設けている。セミナーは大学院生からの評価も良好であり，研究活動への自主的，能動的アプローチを促すものとなっている（**資料 1-2-39，P5-74 前掲資料 1-2-33**）。更に，新しく設置された「地域総合医療学コース」では漢方薬や被ばく医療のコースなど地域の要請に応じた演習を中心にカリキュラムを組み，臨床研究につなげている（**資料 1-2-40**）。

資料 1-2-39　博士課程・大学院セミナーに対する修了生アンケート結果（平成 27 年度実施）



（資料「修了生・大学院教育に関するアンケート集計結果・抜粋」から）

資料 1-2-40　博士課程「地域総合医療学コース」の開催プログラム

「地域総合医療学コース」では，本学の総合診療部，救急部，地域医療推進講座，地域プライマリケア講座の専門医を始め臨床系教員を中心に基礎系教員も参画した教育･研究指導を行っている。

本コースでは，地域医療における医療技術等の基礎的知識や教育指導方法などを「地域総合医療学概論」で修得し，また，他のコース科目において，臓器横断的な知識を身につけ，患者診療に必要な包括的能力，コミュニケーション能力，身体診察能力，及び臨床推論の基本的技能を修得する。臨床研究に卓越し，地域医療のできる医師の人材養成を目的に，疫学倫理や臨床疫学等の統計手法や医学教育手法を学ぶ教科内容のコースワークとしている。

	コース名	内容	開催日
1	PECEP Pediatric Emergency Care and Evaluation for Physician	様々な小児救急の場面を想定したシミュレーションコース。小児科医以外の一般医を対象としている。	2014.1/13, 2015.1/11, 2016.1/10
2	ICLS Immediate Cardiac Life Support	院内や院外で，心筋梗塞や窒息などの急変事例が生じた際の初期対応を学習する。	2014. 12/6 2015. 6/21, 12/5 2015. 3/6
3	Triage コース	患者の症状・所見から，状態の緊急度を判別し，治療の優先順位をつける。	2014. 10/5
4	PTLS コース Primary Trauma Life Support	外傷の初期対応をシミュレーション手法で習得する。	2014.9/7 2015.9/12
5	超音波エコーコース	専門に特化せず，初期診療に必要な腹部・心臓・血管・骨・軟部のエコーを広く習得する。	2014. 10/29 2015. 11/21-22
6	漢方 Boot Camp	地域のニーズに合った漢方医療の知識・診療法を修得する。	2014.5/28, 7/23, 9/10, 12/3 2015.6/2, 7/15, 9/9, 12/2
7	被ばく医療コース		2014.3/15, 2015.3/14

（事務局資料）

② 修士課程では看護キャリアアップセンターと共催で，新しい知識と技術のための情報発信として著名な講師を招き，様々な講演会および国際看護学セミナーを開催しており，最新の知識と技術向上や国際的視点の育成を図っている（**資料 1-2-41**）。

資料 1-2-41　看護キャリアアップセンター　特別講演会および国際看護学セミナー

■看護キャリアアップセンター　特別講演会

日　時：平成 24 年 3 月 23 日（金）15：10-16：40
会　場：福井大学　松岡キャンパス　看護学科棟 2 階大講義室
テーマ：呼吸ケア・リハビリテーション　ー認定看護師に期待されることー
講　師：日本医科大学特任教授日本医科大学呼吸ケアクリニック　所長　木田　厚瑞　先生

日　時：平成 25 年 3 月 15 日(金)　15：00-16：00
会　場：福井大学　松岡キャンパス　看護学科棟 2 階大講義室
テーマ：喘息・COPD の病態と治療
講　師：福井大学　医学部医学科 病態制御医学講座　教授　石塚　全　先生

日　時：平成 25 年 8 月 7 日（水）　14：30-16：30
会　場：福井大学　松岡キャンパス　看護学科棟 2 階大講義室
テーマ：胸部手術周術期における呼吸・循環の病態生理と管理
講　師：静岡市立静岡病院副病院長兼呼吸器外科長　京都大学医学部臨床教授　千原 幸司　先生

日　時：平成 26 年 3 月 14 日（金）　15：00-16：30
会　場：福井大学　松岡キャンパス　看護学科棟 2 階大講義室
テーマ：呼吸ケア・リハビリテーション　―認定看護師に期待されること―
講　師：日本医科大学特任教授日本医科大学呼吸ケアクリニック　所長　木田　厚瑞　先生

日　時：平成 26 年 8 月 23 日（土）　14：00-15：30
会　場：福井大学　松岡キャンパス　臨床教育研修センター 2 階 白翁会ホール
テーマ：酸素療法の歴史と，今後の展望―HOT も含めて―
講　師：独立行政法人労働者健康福祉機構　北海道中央労災病院　院長　宮本顕二　先生

日　時：平成 26 年 9 月 2 日(火）18：00-20：30
会　場：福井大学　松岡キャンパス　臨床教育研修センター 2 階 白翁会ホール
テーマ：第 5 回　医学部生・研修医・スタッフのための呼吸器セミナー
講　師：福井大学　名誉教授・特命教授　伊藤　春海　先生

日　時：平成 26 年 9 月 6 日（土）　13：00-15：00
会　場：福井大学　松岡キャンパス　臨床教育研修センター 2 階　白翁会ホール
テーマ：胸部手術周術期における呼吸・循環の病態生理と管理
講　師：静岡市立静岡病院　副病院長・呼吸器外科長・手術室長・
　　リハビリテーション科長・シミュレーションラボラトリー室長　千原 幸司 先生

日　時：平成 27 年 3 月 9 日（月）　15：00-16：30
会　場：福井大学　松岡キャンパス　基礎実習棟 2 階　多目的講義室
テーマ：胸部手術周術期における呼吸・循環の病態生理と管理―ベッドサイド実践編―
講　師：静岡市立静岡病院　副病院長・呼吸器外科長・手術室長・
　　リハビリテーション科長・シミュレーションラボラトリー室長
　　京都大学医学部臨床教授　千原 幸司 先生

■国際看護学セミナー

日　時：平成 24 年 11 月 25 日（日）13：30-15：30
会　場：福井商工会議所ビル　コンベンションホール
テーマ：福井大学医学部国際看護学セミナー
　　第 6 回　イギリスにおけるチーム医療の実践と看護の役割－過去・現在・そして未来－
講　師：英国レスター大学グレンフィールド病院呼吸器科　ナース・コンサルタント
　　Jane E. Scullion　先生

日　時：平成 25 年 10 月 28 日（月）16:00-18:00
会　場：福井大学　松岡キャンパス　看護学科棟 2 階大講義室
テーマ：福井大学医学部国際看護学セミナー
　　第 7 回　デンマークの医療・看護と病院・大学間連携
講　師：The Regional Hospital of Horsens/Educational Responsible Nurse
　　Marianne Fock Feldt-Rasmussen　先生

（看護キャリアアップセンター資料から）

【博士のキャリア開発】

① 平成23年度より，Advanced Training of Medico-research（ATM）プログラム（博士課程授業科目早期履修制度）（以下「ATMプログラム」という）を開始し，医学部学生や初期研修医なども積極的に参加し始めている（**資料1-2-42～45**）。

資料1-2-42　福井大学大学院医学系研究科規程

福井大学大学院医学系研究科規程（抜粋）

（趣旨）
第１条　この規程は，福井大学大学院学則（平成16福大学則第２号。以下「大学院学則」という。）第４条第２項及び第29条の２第２項の規定に基づき，福井大学大学院医学系研究科（以下「医学系研究科」という。）における人材の養成に関する目的等及び授業科目，履修単位数その他履修方法等について必要な事項を定めるものとする。
（人材の養成に関する目的等）
第１条の２　医学系研究科における人材の養成に関する目的その他教育研究上の目的は，次のとおりである。
医学系研究科　高度な医学及び看護学の知識を修得し，高い水準の医学研究を遂行できる研究能力や先端的で高度専門的な臨床技術を提供できる実践能力を身に　つけ，高い倫理観と豊かな人間性のもと，人類の健康福祉と社会福祉に貢献できる医療人を育成することを目的とする。
博士課程
統合先進医学専攻　医科学および生命科学領域において，高度な知識および科学的・論理的思考に基づき，独創性・創造性に優れた研究を遂行し，国際的にも活躍できる自立した研究者の養成，各診療分野で優れた臨床研究能力と先端的で高度な医療技能を備え，高い倫理観と研究マインドを持った臨床医高度専門医療人の養成，並びに地域に貢献ができる臨床研究能力や教育的指導力を備えた質の高い総合診療医・ＥＲ救急医・家庭医を養成することを目的とする。
修士課程
看護学専攻　豊かな人間性と幅広く高度な看護理論・技術を有し，高度専門的看護ケア実践能力を備え，地域保健医療福祉に貢献できる看護職及び看護学を体系化・深化させる研究を遂行できる指導的役割を担う教育・研究者を養成することを目的とする。
（授業科目及び履修単位数等）
第２条　開設する授業科目，履修単位数及び履修年次等は，博士課程にあっては，別表１，修士課程にあっては，別表２のとおりとする。
（履修方法）
第３条　博士課程の学生は，別表１に定める授業科目を指導教員の指導により，同表の履修方法欄に定めるとおり30単位以上を履修しなければならない。
２　修士課程の学生は，別表２に定める授業科目を指導教員の指導により，同表の履修方法欄に定めるとおり30単位以上を履修しなければならない。また，修士課程に専門看護師教育課程を置き，専門看護師の資格取得に係る履修科目，履修方法等について，別に定める。
３　指導教員が必要と認めた場合は，医学系研究科委員会の議を経て，他の課程又は本学大学院の他の研究科の授業科目を履修させ，これを当該課程で修得した単位とすることができる。ただし，当該修得単位は，修了要件の単位には算入しないものとする。
４　博士課程授業科目早期履修制度を利用する者は，医学系研究科委員会の議を経て，大学院の授業科目を履修することができ，博士課程入学後に単位を認定することがある。
（履修の届出）
第４条　学生は，前条の規定により選択した授業科目を，当該授業科目担当教員及び指導教員の承認を経て，指定する期日までに所定の履修届により届け出なければならない。

（事務局資料）

資料 1-2-43　福井大学大学院医学系研究科博士課程授業科目早期履修制度実施要項

福井大学大学院医学系研究科博士課程授業科目早期履修制度実施要項（一部抜粋）

１．制度の趣旨

本学の医学部医学科生・研究生で，医学系研究科博士課程への進学を希望する熱意のある者について，その能力の高度な発展と進学熱意の維持を期し，早期に大学院教育に接する機会を提供するため，教育上の特例措置として，早期履修制度を実施するものである。

２．出願資格等

（１）本学の医学部医学科４～６年次在学生
（２）本学の医学部研究生で指導教員から推薦のあった者

３．早期履修可能な科目について

共通科目

医科学基礎総論　　（通年　４単位）
実験基礎演習　　（前期　２単位）
医科学特論　　（２年間　６単位）
先端応用医学概論（２年間　６単位）

（中略）

７．科目の履修について

履修した授業科目の出席回数は，通常の大学院医学研究科博士課程授業科目の出席回数とみなす。

８．履修科目の大学院医学研究科博士課程科目としての認定

履修した授業科目の出席回数は，博士課程に大学院生として入学後，本人の申請に基づき，医学系研究科委員会の議を経て，博士課程修了のための単位の一部として認定することがある。（大学院学則　第 34 条）

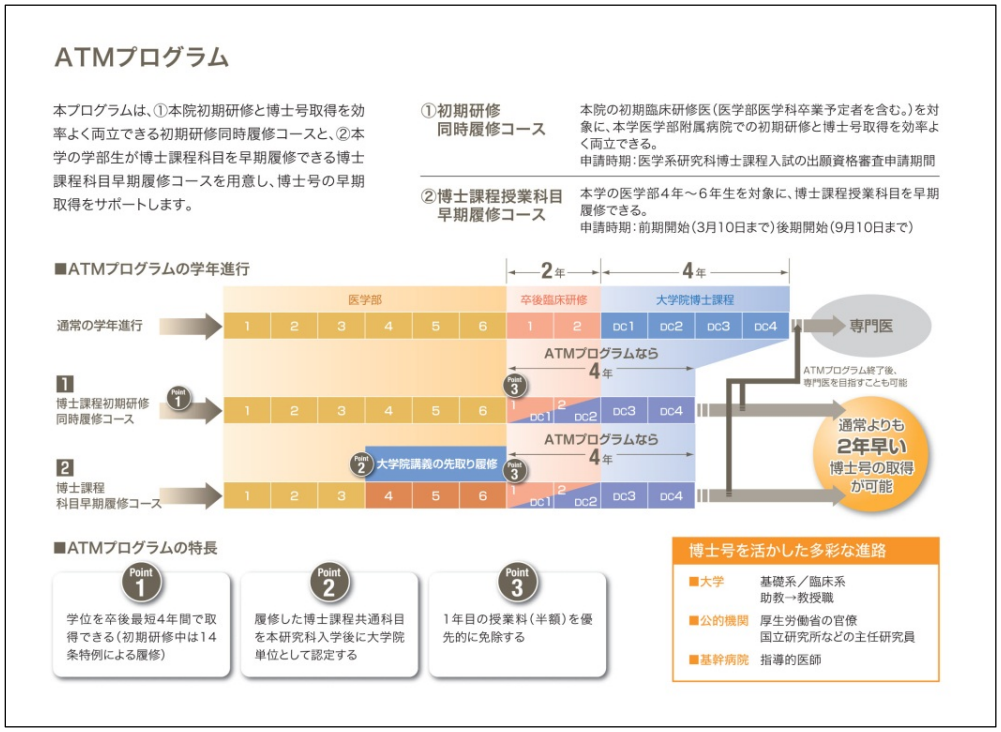
（１）単位認定申請の方法

１）単位認定願の申請時期

前期入学者は４月上旬、後期入学者は 10 月上旬

（事務局資料）

資料 1-2-44　ATM プログラム概要



（事務局資料）

資料 1-2-45　ATM プログラム利用者数

（人）

年度	H23	H24	H25	H26	H27
申請者数	2	3	9	2	0
ATM履修者数	2	5	11	5	3
大学院入学者数	0	0	0	0	1

（事務局資料）

②　TA・RA 制度を活用した能力の育成，教育的機能の訓練等を積極的に取入れ，多くの大学院生を TA・RA に採用し，これを通じた能力の育成を図り，大学院生より好評を得ている（**資料 1-2-46**）。

資料 1-2-46　TA・RA 実績一覧

			平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	計
博士課程	TA	採用者数(人)	10	13	11	7	8	6	55
		総時間数(H)	2,794	3,480	2,682	2,272	3,049	1,760	16,037
		一人あたり時間数(H)	279.4	267.7	243.8	324.6	381.1	293.3	291.6
	RA	採用者数(人)	9	9	6	2	3	3	32
		総時間数(H)	2,929	2,963	2,933	1,039	2,024	1,533	13,421
		一人あたり時間数(H)	325.4	329.2	488.8	519.5	674.7	511.0	419.4

TA:ティーチング・アシスタント　　RA:リサーチ・アシスタント

（TA，RAの採用者数の変動は，その年度の社会人学生の人数や勤務状況による希望者数の増減によるものである。）

○ TA 実施後学生の意見・感想例（各月の実施報告書から）

・実習の補助業務に貢献できた。
・慣れない作業のため手間取った部分もあるが，資料が参考になった。
・指導教員に資料作成に関する指示・教示を受け，大変勉強になった。
・学生チュートリアルは自分にとっても他分野の疾患を復習する良い機会になった。
・新しい学生や研修医が入ってこられ，活気があることはよいことですし，教育にもしっかり力を入れて相互に良い影響を与え合えればと思った。
・学生や研修医にとって，魅力ある血液内科とはどういったものかを考えながら日々過ごしている。
・文京キャンパスとの映像を介しての中継授業の準備・サポートを行い，大変興味深かった。
・学生が一生懸命取り組んでいる姿に，改めて刺激を受けた。
・臨床実習の準備を行い，適宜検討を行うことで，自分の身になった。
・カンファレンスにおいて，学生のプレゼン能力を高める教育ができるようになりたいと感じた。
・チュートリアル教育にチューターとして参加し，学生が熱心に話し合う姿を見て，自分も学ぶところがあり有意義だった。
・学生の真摯に取り組む姿に感銘を受けた。

○ RA 実施後学生の意見・感想例（各月の実施報告書から）

・やはり実験は確認一つとっても，一筋縄ではいかないことを再認識した。
・論文というものは如何に厳密で，かつ分かりやすく丁寧に書かなければならないかを痛感している。
・実験は固めてやりきってしまうことが非常に大事であることが良くわかる。
・実験補助や実験は，自分にとって非常に有意義である。
・これまでやったことのない実験だったので，非常に刺激になった。
・新しい業務に慣れるのに時間はかかるが，充実している。

（事務局資料）

【研究倫理教育の充実】

平成 26 年度には，社会的要請を受け，研究倫理教育の E-ラーニングを必修授業として導入した（**資料 1-2-47**）。また，平成 26 年９月以降に初回投稿する博士論文は剽窃チェックを受けることを義務付け，博士課程小委員会で個々の結果を検討する体制を確立した（**資料 1-2-48，49**）。

資料 1-2-47　博士課程　シラバス「医科学基礎総論」

統合先進医学専攻（共通科目）

授業科目名	授業科目名	授業科目名
医科学基礎総論	医科学コース全教員	
単位数　４単位		
コマ数　３０コマ		
開講時期　１～３年次		
キーワード	（コーディネーター） 宮本　薫	教　授／分子生体情報学

学習目標

「医科学基礎総論」では、医科学の研究活動実施に必要な事項を学ぶとともに、実験実施に必要な基礎的知識、機器使用法などをあわせて学ぶ。

授業の内容

１．大学院授業ガイダンス・実験概説	医学科長
２．実験倫理学・安全学	小泉
３．論文読解法	飯田
４．論文作成法	宮本
５．定量的分子局在解析の基礎と応用	深澤
６．遺伝医学概論：ＤＮＡ多型の分子論的基盤	安田
７．イオンチャネルに対する電気生理学研究：実験手技・研究の流れとその現状・展望	老木
８．生体分子の構造・物性研究：分光法と熱力学的データ解析の基礎	今野
９．酵素化学実験法の概要	藤井
10．組織細胞化学法による形態解析	飯野
11．コンピュータを駆使した生体機能の統合（Physiome 研究）	松岡
12．分子機能生物学：転写因子の機能調節による細胞増殖制御について	黒岡
13．遺伝子変異マウスを用いた腫瘍生物学研究	青木
14．小児発達脳科学：初期経験がつくる「こころ」と「脳」の発達および感受性期	友田
15．内分泌学研究：研究の流れ	村田
16．分子内分泌学研究：内分泌に係る遺伝子発現解析等の概説	水谷
17．感染免疫応答における細胞内シグナル伝達機構の基礎・分子標的治療薬	定
18．免疫アレルギー反応における抗原受容体シグナル伝達	千原
19．生命科学におけるＲＩ利用法	清野
20．放射線の健康影響：福島原発事故を受けて	松本
21．ＰＥＴを用いた生体イメージングと定量測定の基礎	岡沢
22．医学研究における動物行動実験	松崎

23～27　CITI Japan プロジェクト e-learning プログラム
（下記 15 科目の受講を必修とし、全て修了後、５回分の出席扱いとする。）

1．責任ある研究行為について　2．科学分野のミスコンダクト　3．データの扱い
4．盗用（Plagiarism）　5．利益相反　6．オーサーシップ
7．ピア・レビュー　8．共同研究のルール　9．メンタリング
10．公的研究費の取り扱い　11．生命倫理学の歴史と原則、そしてルール作りへ
12．IRB による審査　13．研究における個人情報の扱い
14．研究におけるインフォームド・コンセント　15．特別な配慮を要する研究対象者

28．大学院生研究発表会
29．大学院生研究発表会
30．大学院生研究発表会

講義室：院生棟１階セミナー室

授業の形式

講義形式および e-ラーニングにより行う。

到達目標

各担当教員の説明する医科学の研究活動実施に必要な基礎的知識を説明でき、主な研究機器を使用することができる。

総合評価割合

評価方法

出席重視

教科書及び参考書

各担当教員からの指示による。

その他履修上の注意点等

代表者 E-Mail	kmiyamot@u-fukui.ac.jp

（事務局資料）

資料 1-2-48　福井大学論文剽窃防止対策実施要項（一部抜粋）

福井大学論文剽窃防止対策実施要項（一部抜粋）

（趣旨）

第１　この要項は，福井大学における論文の剽窃防止対策について必要な事項を定める。

（対策内容）

第２　この要項において定める剽窃防止対策は，論文指導又は作成の際に，不適切な引用や剽窃の疑いがある文章を検出するソフト（以下「剽窃チェックソフト」という。）を利用し行うものとする。

（対象論文）

第３　この要項において対象とする論文は，当面の間，博士論文とする。ただし，博士の学位を受けようとする者（以下「学生等」という。）が，博士論文への申請を予定して学術雑誌に投稿しようとする論文がある場合は，当該論文も対象とする。

２　学生等の指導教員（以下「指導教員」という。）は，前項の博士論文を学内審査委員会へ提出又は学術雑誌へ投稿しようとする場合は，事前に第４に規定する手続きを経なければならない。

３　第１項に規定するもののほか，指導教員又は教員（以下「指導教員等」という。）から依頼があった論文についても，対象とすることができる。

（対策方法）

第４　指導教員等は，論文剽窃チェック依頼書（別紙様式１）に第３に規定する論文（電子媒体）を添えて，文京キャンパスにあっては総合戦略部門研究推進課（以下「研究推進課」という。），松岡キャンパスにあっては学務部松岡キャンパス学務室（以下「学務室」という。）に提出するものとする。

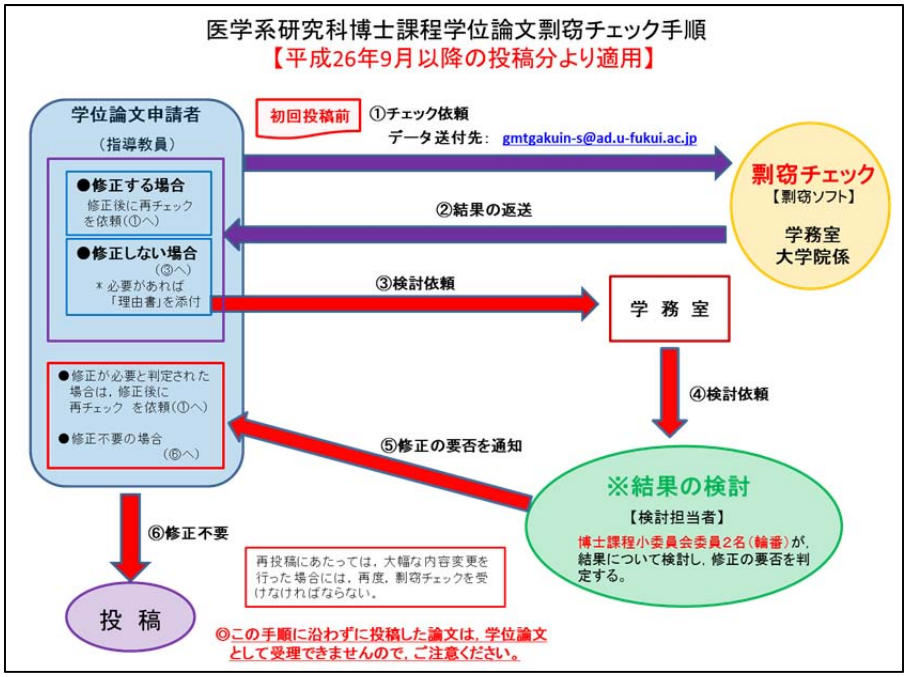
２　研究推進課及び学務室は，指導教員等からチェック依頼があった論文について速やかに剽窃チェックソフトにより検出作業を行い，検出結果を論文剽窃チェック報告書（別紙様式２）により指導教員等へ報告するものとする。

３　第３第１項に規定する論文の検出結果の対応は，各研究科内において行うものとする。

４　検出結果を受けて論文原稿内容を修正した場合においても，再度剽窃チェックを依頼できるものとする。

（事務局資料）

資料 1-2-49　医学系研究科博士課程学位論文剽窃チェック手順



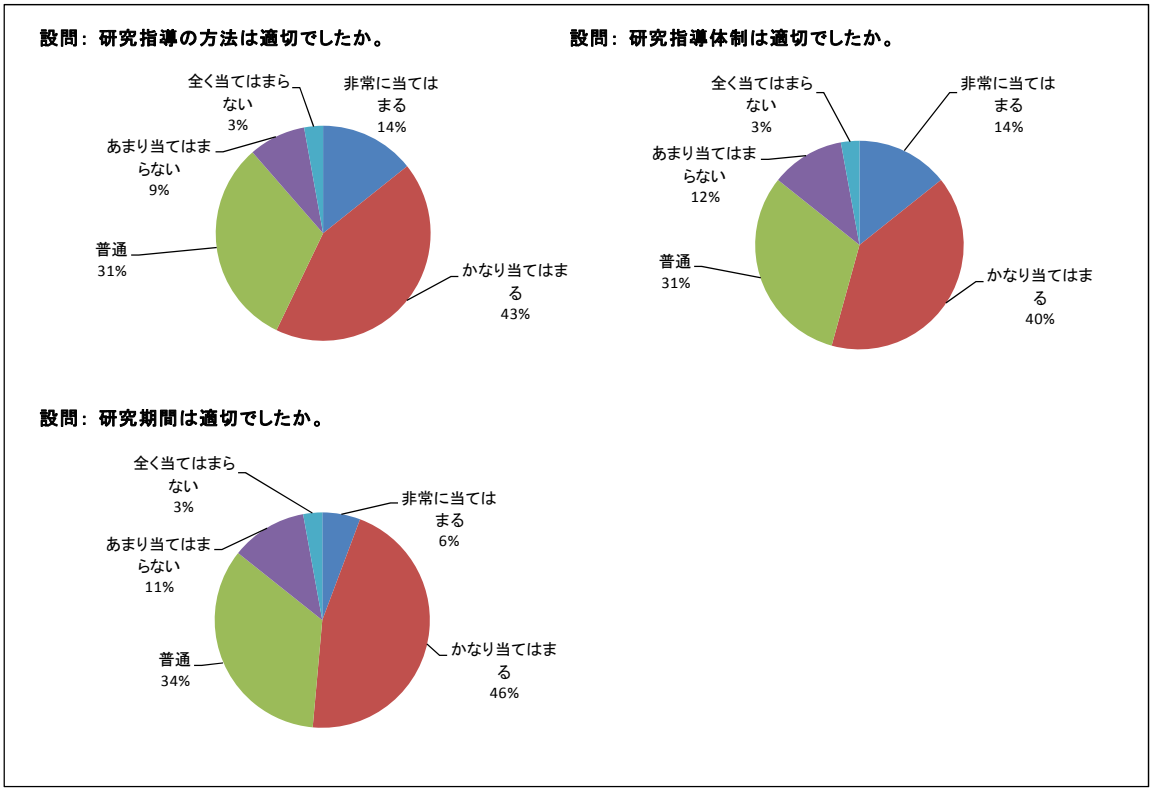
（事務局資料）

●学生の主体的な学習を促すための取組に関する例

【学習意欲向上方策】

①　博士・修士課程ともに，大学院生ごとに一人の主指導教員だけでなく副指導教員を置く指導体制となっている。このことによって横断的指導と交流を促進することになり，大学院生が広い視野を獲得する上で有効な方法である。これは，大学院生が学位論文作成にあたり，所属領域以外の教員からも指導を受けたいとの要望に対応している。このように大学院生の研究ニーズに即した研究指導を行っており，大学院生の評価は高い（**資料 1-2-50，P5-18 前掲資料 1-1-19，20**）。

資料 1-2-50　博士課程・研究指導に対する修了生アンケート結果（平成 27 年度実施）



（資料「修了生・大学院教育に関するアンケート集計結果・抜粋」から）

② 一定の研究成果を上げた大学院生には，研究・成果発表のための旅費助成も公募により行われている（**資料 1-2-51**）。

資料 1-2-51　学生の研究・成果発表のための旅費助成

生命科学複合研究教育センター
学生の研究・成果発表のための旅費助成《採択件数》

	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度
申請件数	13 件	12 件	7 件	8 件	9 件	11 件
採択件数	12 件	12 件	7 件	8 件	7 件	8 件
（内数） 医学系研究科採択件数	2 件	2 件	1 件	1 件	2 件	1 件

平成 27 年 7 月 1 日

生命科学複合研究教育センター参加教員　各位

生命科学複合研究教育センター長

平成 27 年度生命科学複合研究教育センター
学生の研究・成果発表のための旅費助成の募集について（通知）

この程、生命科学複合研究教育センターでは生命科学に関する研究を行っている学生が研究及び成果発表のために必要とする旅費の支援を図る目的で、下記のとおり研究費公募事業を実施することとなりましたのでご案内いたします。

記

Ⅰ　公募内容

■　対象となるもの

生命科学に関する研究を行っている学生が研究及び成果発表のために必要とする調査研究や成果発表のための旅費（本センターの特色を生かし、学部・学科・専攻等の枠を越え、生命科学に関する学内共同研究を優先します。ただし、平成 27 年 9 月 1 日（火）から平成 28 年 3 月 31 日（木）の期間の旅費を対象とします。）

■　採択件数及び申請額上限

採択件数：若干数　申請額の上限は、国際学会は 10 万円、国内学会は 5 万円とします。
（本事業総予算上限 30 万円）

■　対象者

(1) 申請者は、大学院生（医学部においては学部 4 年生以上）とします。
(2) 申請者の指導教員は、本センター参加者に限ります。

■　その他

(1) 指導教員は、研究指導されている学生より「学生の研究・成果発表のための旅費助成」への申し出があった場合には、指導教員としての推薦所見（別紙様式 2）を作成し提出して下さい。なお、指導されている学生が複数名申請する場合は、指導する学生の総数を記したうえで、学生の推薦順位を付してください。教員 1 名につき、募集に推薦できる学生は 2 名までです。
(2) 工業会等の他の助成事業との重複申請は不可とします。
(3) 採択された場合の研究費は、指導教員の研究費へ本センターから移算されます。
(4) 義務ではありませんが、申請者には平成 27 年 8 月 20 日（木）開催予定の本センター研究交流会において、申請に関わる研究内容について口頭発表を行っていただくことが望ましい。

（事務局資料）

③　博士課程では，優れた研究業績を上げた者には在学期間短縮による早期修了を認めている（**資料 1-2-52，53**）。

資料 1-2-52　博士課程・在学期間短縮に係る規程等

福井大学大学院学則（一部抜粋）

第８章　課程の修了及び学位の授与

（修士課程及び前期課程の修了要件）

第 36 条 修士課程及び前期課程の修了要件は，当該課程に２年以上在学し，研究科の定めるところにより 30 単位以上を修得し，かつ，必要な研究指導を受けた上，当該課程の目的に応じ，当該課程の行う修士論文又は特定の課題についての研究の成果の審査及び最終試験に合格することとする。ただし，在学期間に関しては，優れた業績を上げたものについては，当該課程に１年以上在学すれば足りるものとする。

（後期課程の修了要件）

第 37 条 後期課程の修了要件は，当該課程に３年（法科大学院の課程を修了した者にあっては，２年）以上在学し，16 単位以上を修得し，かつ，必要な研究指導を受けた上，博士論文の審査及び最終試験に合格することとする。ただし，在学期間に関しては，優れた研究業績を上げた者については，当該課程に１年（標準修業年限を１年以上２年未満とした修士課程，前期課程又は専門職学位課程を修了した者にあっては，３年から当該１年以上２年未満の期間を減じた期間とし，修士課程又は前期課程において，優れた業績を上げ，２年未満の在学期間をもって当該課程を修了した者にあっては，３年から当該課程における在学期間を減じた期間とする。）以上在学すれば足りるものとする。

（医学系研究科の博士課程の修了要件）

第 38 条 医学系研究科の博士課程の修了の要件は，当該課程に４年以上在学し，所定の授業科目について 30 単位以上を修得し，かつ，必要な研究指導を受けた上，博士論文の審査及び最終試験に合格することとする。ただし，在学期間に関しては，優れた研究業績を上げた者については，当該課程に３年以上在学すれば足りるものとする。

福井大学大学院医学系研究科博士課程における在学期間短縮等の
審査に関する取扱規程（一部抜粋）

（趣旨）

第１条　この規程は，福井大学大学院学則（平成 16 年４月１日制定。以下「大学院学則」という。）第 38 条ただし書きに規定する，大学院医学系研究科博士課程において優れた研究業績を上げた者の在学期間短縮等の審査に関する取扱いについて必要な事項を定めるものとする。

（審査の方法等）

第２条　在学期間短縮の審査にあたっては，学位論文の審査も兼ねて行うものとする。

２　在学期間の短縮は，月単位で認定するものとする。

（優れた研究業績を上げた者の要件）

第３条　優れた研究業績を上げた者の要件は，次の各号に該当するものとする。

(1) 学位論文（主論文）は，権威ある内外の学術誌（SCI.のインパクトファクターがジャーナルランキングの 1,000 位以内のもの，又は専門分野におけるジャーナルランキングの上位３分の１以上のもの）に掲載（受理されたものを含む。）されたものであり，かつ，その内容が極めて学問的に優れていること。

(2) 高度の研究能力及び豊かな学識を有していること。

(3) 大学院在学中の成績が極めて優秀であること。

(4) 指導教員の推薦があること。

２　前項第１号に規定するジャーナルランキングは，論文提出時における最新のものとする。

（事務局資料）

資料 1-2-53　博士課程における早期修了状況

区　分	平成22年度 早期修了者数 入学年度	平成23年度 早期修了者数 入学年度	平成24年度 早期修了者数 入学年度	平成25年度 早期修了者数 入学年度	平成26年度 早期修了者数 入学年度	計 早期修了者数 入学年度
博士課程	1 平成18年度	1 平成19年度＊	1 平成22年度	2 ①平成21年度＊ ②平成23年度	0	5
備　考	9月修了 (1年休学)	6月修了	3月修了	① 12月修了 (6ヶ月休学) ② 3月修了		

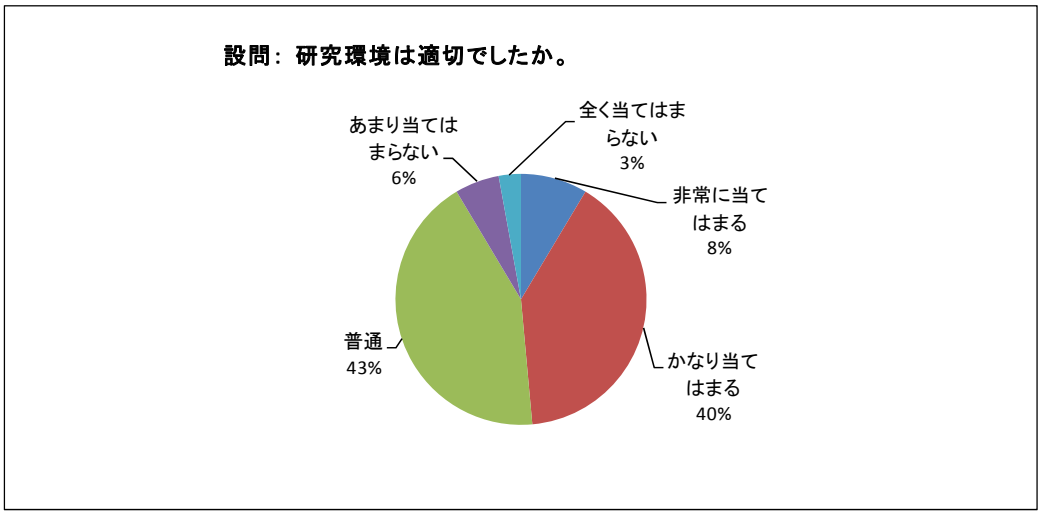
＊10月入学者

（事務局資料）

④　学習・研究環境については，医学部附属図書館の 24 時間開館やシラバス掲載資料の積極的購入等による大学院生の図書館利用の促進等，大学院生の主体的学習の基盤となるインフラを積極的に整備しており，大学院生の評価も高く適切である（**資料 1-2-54，55，P5-16 前掲資料 1-1-17**）。

更に博士課程では「共通科目」及び「大学院セミナー」において，授業ごとに毎回受講生によるアンケートを実施し，教育内容・方法の改善を図ることとしている。アンケート結果は，授業担当教員にフィードバックされ，講師の人選等に反映させるなど，次年度の授業の改善に活かされており，授業に対する大学院生の満足度は高い（**P5-20 前掲資料 1-1-23，P5-56 前掲資料 1-2-13，P5-81 前掲資料 1-2-39**）。

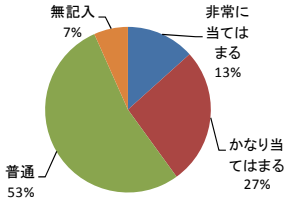
資料 1-2-54　博士課程・研究環境に対する修了生アンケート結果（平成 27 年度実施）



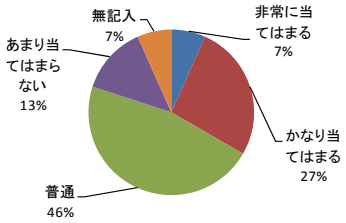
（資料「修了生・大学院教育に関するアンケート集計結果・抜粋」から）

資料 1-2-55　修士課程・学習環境に対する在学生アンケート結果（平成 27 年度実施）

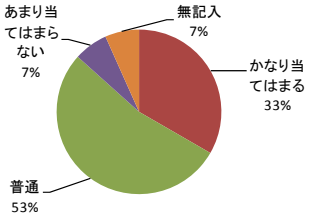
設問：図書館は利用しやすい。



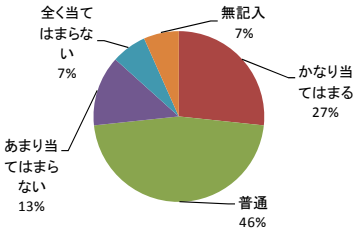
設問：図書館をよく利用している。



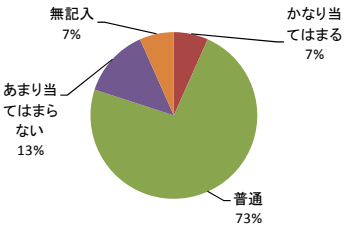
設問：講義室の環境は満足している。



設問：院生室の環境（備品、照明、広さ等）は満足している。



設問：学習環境に関して学生の意見が反映されている。



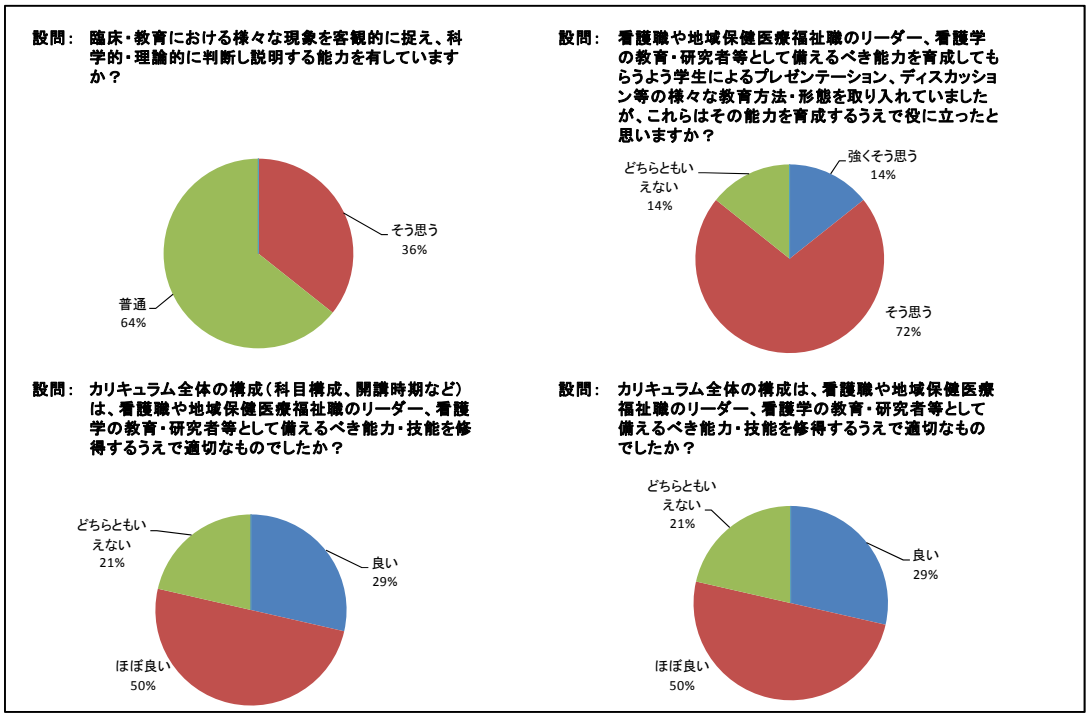
学習環境についての学生要望への対応例

学生の要望	対応
大学院講義室のプロジェクターを天井吊式にして欲しい。	天井吊式のものに更新【H26.8措置】

（資料「修了生・大学院教育に関するアンケート集計結果・抜粋」から）

⑤　修士課程では，論文完成のための特別研究でゼミ形式をとり，個別指導・集団指導を取り入れている。これにより大学院生の課題探求・解決能力を涵養するとともに，文献検索，統計処理能力，文章の論理構成能力等を伸ばすこととしており，大学院生からの評価も良好である（**資料 1-2-56**）。

資料 1-2-56　修士課程・特別研究に対する修了生アンケート結果（一部抜粋）（平成 27 年度実施）



（資料「修了生・大学院教育に関するアンケート集計結果・抜粋」から）

（水準）　期待される水準を上回る

（判断理由）

①　両課程で DP/CP/AP を定め，養成する人材等について明記し，ホームページ等で積極的に周知を行っている。また，それぞれのポリシーは，社会から求められる人材の養成を鑑み，常に見直しを行っており，適宜改正を行った[1)]。

[1)] 資料 1-2-1(1)　：医学系研究科：カリキュラム・ポリシー(CP)（博士課程）　P5-47
資料 1-2-1(2)　：医学系研究科：カリキュラム・ポリシー(CP)（修士課程）　P5-48
資料 1-2-2　：医学系研究科：ディプロマ・ポリシー(DP)　P5-49
資料 1-1-24(1)：博士課程アドミッション・ポリシー（一部抜粋）　P5-21
資料 1-1-24(2)：修士課程アドミッション・ポリシー（一部抜粋）　P5-22
資料 1-2-3　：カリキュラム・ポリシー(CP)/ディプロマ・ポリシー(DP)/アドミッション・ポリシー(AP)公開状況　P5-49
資料 1-2-4　：医学系研究科（博士課程・修士課程）：カリキュラム・ポリシー(CP)/ディプロマ・ポリシー(DP)/アドミッション・ポリシー(AP)の改正について　P5-50

②　博士課程・修士課程ともに CP/DP に基づいたカリキュラム編成を行っているが，定期的なアンケートの実施および各委員会での検討等により教育内容，教育方法の改善に取り組んでおり，全ての関係者の期待に応えるための基盤を形成するものである。とりわけ，平成 25 年度から博士課程の改組，及び修士課程に CNS 課程を開設したことは特筆できる[2)]。

[2)] 資料 1-1-3　：医学系研究科博士課程改組後の組織構成　P5-6
別添資料 6(2)　：改組後の博士課程授業開設表　P5-7
資料 1-2-15　：修士課程授業開設表（平成 27 年度）　P5-57
資料 1-2-13　：博士課程「共通科目」に対する修了生アンケート結果（平成 27 年度実施）　P5-56

③　大学院生の修学ニーズに対応するためにきめ細かな配慮がなされ，教育課程に対する大学院生の評価も高く，関係者の期待に十分応えるものである[3)]。

[3)] 資料 1-1-12　：長期履修学生規程　P5-13
資料 1-1-13　：長期履修学生に関する申合せ　P5-13
資料 1-1-14　：医学系研究科における長期履修制度の適用状況　P5-13
資料 1-1-15　：福井大学学生支援体制　P5-14
資料 1-1-16　：松岡キャンパス学生総合相談室及び保健管理センター利用状況　P5-15
別添資料 1　：大学院入学時成績優秀による授業料免除制度
別添資料 2　：医学系研究科振興奨学金取扱要項
資料 1-1-32　：博士課程における秋季入学の状況　P5-26
別添資料 3　：医学系研究科基礎医学振興奨学金取扱要項
別添資料 4　：医学系研究科画像医学振興奨学金取扱要項
別添資料 5　：医学系研究科私費外国人留学生振興奨学金取扱要項
資料 1-1-38　：授業料免除，奨学金等利用状況　P5-29
資料 1-1-10　：医学系研究科における社会人入学者の状況　P5-12
資料 1-1-36　：大学院設置基準第 14 条に定める教育方法の特例（[夜間開講] の適用状況）P5-28
資料 1-1-41　：医学系研究科における入学定員充足率　P5-31
資料 1-2-13　：博士課程「共通科目」に対する修了生アンケート結果（平成 27 年度実施）P5-56
資料 1-2-56　：修士課程・特別研究に対する修了生アンケート結果（一部抜粋）（平成 27 年度実施）　P5-94

④　社会ニーズに速やかに対応し，「がん」，「認知症」専門医及び「がん看護」専門看護師の養成を順次進め，社会の要請に的確に対応してきた。これは関係者の期待に応えるものである[4)]。

[4)] 資料 1-2-24　：北陸がんプロの概要とコンセプト　P5-67
別添資料 6(3)　：改組後の博士課程授業開設表(3)
資料 1-2-26　：認プロの概要とコンセプト　P5-69
別添資料 6(4)　：改組後の博士課程授業開設表(4)
資料 1-2-15　：修士課程授業開設表（平成 27 年度）　P5-57

⑤　看護キャリアアップセンターでは，認定看護師課程として平成 23 年度に大学初の「慢性呼吸器疾患看護」分野を開講，平成 26 年度には「手術看護」分野を開講し，二分野の受講生を受入れ，社会人の学び直しに寄与していることは，特筆される[5)]。

[5)] 資料 1-2-28　：看護キャリアアップセンター・認定看護師教育課程設置検討経過　P5-71
資料 1-2-29　：看護キャリアアップセンター概要　P5-71
資料 1-1-42　：看護キャリアアップセンター 認定看護師教育課程　収容定員充足率　P5-31

⑥　博士課程において，医科学・生命科学の国際化・学際化に対応し，また一方では地域医療を担うリーダーを養成する社会的要請に鑑み，教育課程を再編した。特に，総合専門医の指導医を養成することを視野に入れて演習を中心としたコースを展開してきたことは特筆すべき事項であり，関係者の期待に十分応えるものである[6)]。

[6)] 資料 1-1-3　：医学系研究科博士課程改組後の組織構成　P5-6
別添資料 6(2)　：改組後の博士課程授業開設表(2)
別添資料 6(3)　：改組後の博士課程授業開設表(3)

⑦　被ばく医療に強い医師，「災害看護」専門看護師等の災害医療に貢献できる人材の養成は，地震大国である日本においてニーズは高く，更に東日本大震災以降，緊急被ばく医療の充実は喫緊の課題である。本大学院のカリキュラムは関係者の期待に十分応えるものであり，特筆される[7)]。

[7)] 資料 1-2-18　：緊急被ばく医療に強い救急総合医養成拠点概要　P5-59
資料 1-2-19　：被曝医療に強い救急医育成に関する記事　P5-60
資料 1-2-21　：博士課程 シラバス「地域総合医療学・臨床疫学特論Ⅱ(ER 救急学)」　P5-62
資料 1-2-22(1)：修士課程　シラバス(1)「災害看護学特論Ⅰ」　P5-63
資料 1-2-22(2)：修士課程　シラバス(2)「災害看護学実習Ⅳ」　P5-64

⑧　博士課程では，教育目標達成のために，「共通科目」の開設，３年次研究発表会の実施，主・副の複数指導教員による研究指導の実施，TA・RA 制度の活用，大学院セミナーの開催など多様な授業形態，学習指導を実施しているほか，大学院生による学会発表・論文発表が活発に行われ，大学院生からも好評を得ており，「将来指導的役割を担うことが可能な教育・研究者の養成」に十分応えるものである[8)]。

[8)] 資料 1-2-13　：博士課程「共通科目」に対する修了生アンケート結果（平成 27 年度実施）P5-56
資料 1-2-14　：博士課程　３年次研究発表会に対する修了生アンケート結果（平成 27 年度実施）　P5-56
資料 1-1-20　：副指導教員制度適用状況　P5-18
資料 1-2-46　：TA・RA 実績一覧　P5-86
資料 1-2-39　：博士課程･大学院セミナーに対する修了生アンケート結果(平成 27 年度実施) P5-81
資料 1-2-50　：博士課程・研究指導に対する修了生アンケート結果（平成 27 年度実施）P5-89

⑨　学習環境について，県の助成金を基に福井メディカルシミュレーションセンターが設置され臨床研修の充実が図られる等，自己学習できる環境を整えており，大学院生の評価も高く，関係者の期待に十分応えるものである[9)]。

[9)] 資料 1-1-54　：福井メディカルシミュレーションセンター学生利用状況（大学院生含む）P5-43
資料 1-1-55　：福井メディカルシミュレーションセンターを利用した演習風景　P5-44
資料 1-2-54　：博士課程・研究環境に対する修了生アンケート結果（平成 27 年度実施）P5-92
資料 1-2-55　：修士課程・学習環境に対する在学生アンケート結果（平成 27 年度実施）P5-93

以上のように，教育目標達成のための適切な教育内容が十分に整備され，大学院生や社会からの要請に対応できており，全ての関係者の期待に十分応えるものであるため，期待される水準を上回ると判断した。

分析項目Ⅱ　教育成果の状況

観点　学業の成果

（観点に係る状況）

●履修・修了状況から判断される学習成果の状況に関する例

【成果測定手法】

①　全学的に統一した基準により成績評価を実施するため，評価基準点及び評価基準を定めた。特に，学修の到達度を一層明確化するため，４段階評価を５段階評価に変更した（**資料 2-1-1**）。大学院生からは評価の適切性について好評を得ている（**資料 2-1-2**）。

資料 2-1-1　福井大学大学院医学系研究科規程（一部抜粋）

福井大学大学院医学系研究科規程（一部抜粋）

（単位修得の認定）

第６条　授業科目の単位修得の認定については，試験その他の審査により授業科目担当教員が行う。

（試験）

第７条　試験は，定期試験，追試験及び再試験とする。

２　定期試験は，年１回行う。

３　追試験は，学生が，病気，災害等やむを得ない理由により定期試験を受験できなかったときに，願い出により行う。この場合において，当該願い出は，当該授業科目担当教員の承認を得て行わなければならない。

４　再試験は，定期試験又は追試験を受験し不合格となった学生に対して，願い出により行うことがある。

５　試験において不正行為を行った学生に対しては，当該試験を無効とし，大学院学則第 43 条の規定により懲戒する。

（成績の評価）

第８条　試験その他の審査による成績の評価については，評価点又は評価をもって表し，合否の認定は，次の表に掲げる基準により行う。ただし，再試験による評価は，60 点以下とする。

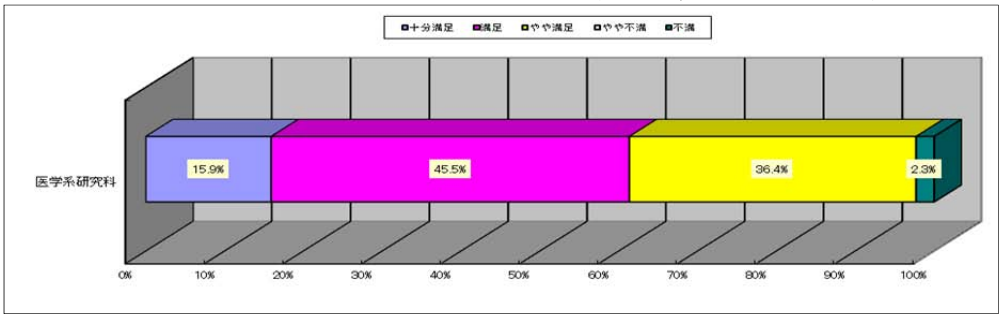
評　価　点	評　価	評　価　基　準	認　　定
100点 ～ 90点	秀	目標を十分に達成し，きわめて優秀な成果を挙げている	合格
89点 ～ 80点	優	目標を十分に達成している	
79点 ～ 70点	良	目標を概ね達成している	
69点 ～ 60点	可	目標を最低限達成している	
59点 ～ 0点	不　可	目標を達成していない	不合格

（事務局資料）

資料 2-1-2　平成 27 年度福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査（成績評価方法の適切性）

■設問：成績の評価方法の適切性について，あなたはどの程度満足していますか[注)]。

（注：全学対象調査より，医学系研究科大学院生を抽出）



（平成 27 年度「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」結果より抜粋）

② 博士・修士課程ともに，学位論文の作成にあたり，３年次（修士は２年次）に研究発表会を実施している。この時点で大学院生が到達している学力レベル及び獲得した研究者としての資質・能力を，主・副指導教員だけでなく他分野の教員を含め検証している（**資料 2-1-3，P5-55 前掲資料 1-2-11，12**）。

資料 2-1-3　看護学専攻修士論文審査　平成 27 年度公開発表会

福井大学大学院 医学系研究科看護学専攻
修士論文審査　平成２７年度公開発表会

１．日　時：　平成２８年２月３日（水）　８：４５～１３：４５

２．場　所：　看護学科棟　看護大講義室

３．スケジュール

８：４５～　８：５０	オリエンテーション	看護学科長
８：５０～　９：２０	発表者１　猪之詰　美香　（基礎看護学）	［進行：長谷川美　教授］
９：２０～　９：５０	発表者２　上田　真弓　（基礎看護学）	［進行：上澤　教授］
９：５０～１０：２０	発表者３　下前　めぐみ　（基礎看護学）	［進行：重松　教授］
（中休憩　１０分）		
１０：３０～１１：００	発表者４　西田　実紗子　（基礎看護学）	［進行：出口　教授］
１１：００～１１：３０	発表者５　鰐渕　佳絵　（基礎看護学）	［進行：磯見　教授］
１１：３０～１２：００	発表者６　井上　理恵　（災害看護学）	［進行：上澤　教授］
（昼休憩）		
１２：４５～１３：１５	発表者７　窪田　直美　（災害看護学）	［進行：長谷川智　教授］
１３：１５～１３：４５	発表者８　酒井　彰久　（災害看護学）	［進行：長谷川美　教授］

※発表時間は１５分，質疑応答時間は１５分となっています。
（交代時間も含めての進行をお願いいたします。）

※進行は審査委員会主査が行います。

（事務局資料）

【単位取得・成績・学位授与状況】

① 医学系研究科において，厳密な単位認定を行っており，大学院生の「秀」,「優」の成績の割合は高く，このことは学業の到達度が高いことの証左である（**資料 2-1-4**）。

資料 2-1-4　大学院修了生成績状況（修了年度別）

博士課程修了生成績状況(修了年度別)

	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	計
修了者数	14	20	13	18	16	20	101
秀						55	55
優	125	167	117	181	155	141	886
良	0	6	2	4	8	0	20
可	1	2	0	0	4	2	9

・各年度毎に修了者の「評価」の数を集計した。
・「秀」評価については，24 年度入学者より適用しており，修了者を 6 名輩出した。

修士課程修了生成績状況(修了年度別)

	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	計
修了者数	6	8	10	11	7	8	
秀				8	4	31	43
優	53	70	76	67	39	68	373
良	12	10	18	29	26	21	116
可	1	0	1	0	4	0	6

・各年度毎に修了者の「評価」の数を集計した。
・「秀」評価については，24 年度入学者より適用しており，修了者を 9 名輩出した。

（事務局資料）

② 医学系研究科大学院生の留年率，退学率は高いが，社会人として地域医療に貢献しながらの修学であり，長期的視野で計画的に学んでいる（**資料 2-1-5**）。

資料 2-1-5　医学系研究科　留年率・退学率

医学系研究科大学院生の留年率（標準修了年限を超える率），退学率ともに高い。留年率については，同大学院生は他の研究科とは異なり殆どが社会人であり，地域医療等社会貢献と学業を並行することから，計画を修正しながら研究を進めているためである。また，退学理由のほとんどが本務先での業務多忙のためである。

■留年率

年度	22年度			23年度			24年度			25年度			26年度			27年度			6年間平均
学部・研究科	学生数	留年者	留年率(%)	学生数	留年者	留年率(%)	学生数	留年者	留年率(%)	学生数	留年者	留年率(%)	学生数	留年者	留年率(%)	学生数	留年者	留年率(%)	留年率(%)
博士課程	99	33	33.3%	113	25	22.1%	111	24	21.6%	122	21	17.2%	128	20	15.6%	135	28	20.7%	21.3%
修士課程	22	1	4.5%	27	6	22.2%	28	5	17.9%	30	7	23.3%	30	4	13.3%	32	4	12.5%	16.0%

■退学率

年度	22年度			23年度			24年度			25年度			26年度			27年度			6年間平均
学部・研究科	学生数	退学者	退学率(%)	学生数	退学者	退学率(%)	学生数	退学者	退学率(%)	学生数	退学者	退学率(%)	学生数	退学者	退学率(%)	学生数	退学者	退学率(%)	退学率(%)
博士課程	99	4	4.0%	113	10	8.8%	111	8	7.2%	122	4	3.3%	128	3	2.3%	135	6	4.4%	4.9%
修士課程	22	0	0.0%	27	1	3.7%	28	0	0.0%	30	3	10.0%	30	3	10.0%	32	1	3.1%	4.7%

（事務局資料）

③ 博士課程の学位論文について,「査読のある，国際的に評価の定まっている欧文の学術誌もしくはそれと同等の学術的価値を有する学術誌に筆頭著者として公表した原著論文である」ことを DP に明確化した。このことにより，国際的な通用性・信頼性も確保され，その上で，研究の着想，計画，実施，論文執筆等における自発性が十分に発揮されたかを判断して学位授与候補者を決定している（**資料 2-1-6，7，P5-49 前掲資料 1-2-2**）。

資料 2-1-6　博士論文審査手順

博士論文の審査を願い出ることができる者は，福井大学大学院医学系研究科博士課程の最終学年に在学し，所定の単位を修得した者で，かつ，必要な研究指導を受けた者とする。
ただし，在学期間に関しては，優れた業績を上げた者については，当該課程に3年以上在学すれば足りるものとする。

論文提出
学位論文は原則として単著とする。
ただし，学位論文が共著の場合は，次に掲げる条件を満たしていること。
(1) 筆頭著者であること。
(2) 他の共著者から当該論文を学位論文として使用することの承諾を得ていること。
(3) 他の共著者が当該論文を学位論文として使用しない旨の承諾を得ていること。

↓

資格等審査
医学系研究科博士課程小委員会において申請資格等を審査する。

↓

論文受理
医学系研究科委員会の議を経て学位論文を受理する。

↓

審査委員会委員の選出
医学系研究科委員会において，連記無記名投票により選出された2名及び指導教員1名で構成する。
＊在学期間短縮による場合は，医学系研究科委員会委員3名からなる特別審査委員会を設置することとし，連記無記名投票により選出する。ただし，指導教員は除く。

↓

公開発表会
↓
最終試験
論文内容の独創性，先進性及び信頼性等の観点から博士の学位にふさわしいものであるかを審査する。

↓

審査結果の報告
審査委員会は，論文の審査結果を医学系研究科委員会に報告する。

↓

学位記授与の審議
医学系研究科委員会において，学位授与すべきか否かを審議、議決する。

↓

学位記授与の決定

（事務局資料）

資料 2-1-7　博士課程の修了状況（入学年度別）

修了年度＼入学年度	16年度以前	17年度	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度	計
平成22年度	5	1	4	4						14
平成23年度	4	3	1	9	3					20
平成24年度	2	1	3	2	1	3	1			13
平成25年度	3	1		1	2	8	2	1		18
平成26年度		2		1	2	1	6	4		16
平成27年度		1				2	1	10	6	20

（事務局資料）

④　修士課程では，大学院生の学位論文について，DP に示されている通り，複数の審査教員による口頭試問等を行った上で審査を行うという厳格な体制の下，学位授与候補者を決定している（**資料 2-1-8，9，P5-49 前掲資料 1-2-2**）。

資料 2-1-8　修士論文審査手順

修士論文の審査を願い出ることができる者は，福井大学大学院医学系研究科修士課程の最終学年に在学し，所定の単位を修得した者で，かつ，必要な研究指導を受けた者とする。
ただし，在学期間に関しては，優れた業績を上げた者については，当該課程に1年以上在学すれば足りるものとする。

論文提出	・修士論文は単著とする。 ・専門看護師の資格を取得しようとする学生は，課題研究の論文をもって修士論文に代えることができる。
⬇	
論文受理	医学系研究科委員会の議を経て修士論文を受理する。
⬇	
審査委員会委員の選出	医学系研究科委員会で協議のうえ選出した大学院担当教授2名及び指導教員1名で構成する。 ＊教授2名のうち1名は関連分野の准教授に代えることができる。
⬇	
公開発表会	論文内容の信頼性及び発展性等の観点から修士の学位にふさわしいものであるかを審査する。
⬇	
最終試験	
⬇	
審査結果の報告	審査委員会は，論文の審査結果を医学系研究科委員会に報告する。
⬇	
学位記授与の審議	医学系研究科委員会において，学位授与すべきか否かを審議、議決する。
⬇	
学位記授与の決定	

（事務局資料）

資料 2-1-9　修士課程の修了状況（入学年度別）

修了年度＼入学年度	19年度以前	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度	計
平成22年度			6						6
平成23年度	1			7					8
平成24年度				3	7				10
平成25年度					2	9			11
平成26年度			1				6		7
平成27年度							3	5	8

（事務局資料）

⑤　博士課程のすべての学位論文は欧文のレフェリー制度のある国際的な一流学術誌に掲載されている。全学位論文のインパクトファクターは第２期の平均で 3.107 と極めて高く，第１期の平均2.986を上回り，年々向上していることは特筆される（**資料 2-1-10(1)**）。
また，修士課程の学位論文は，その研究成果の多くが学会で発表されており，レフェリー制度のある一流の学会雑誌に掲載されているものもある（**資料 2-1-10(2)**）。
これらは大学院生が一定の研究能力を身に付けたことを示す証左である。

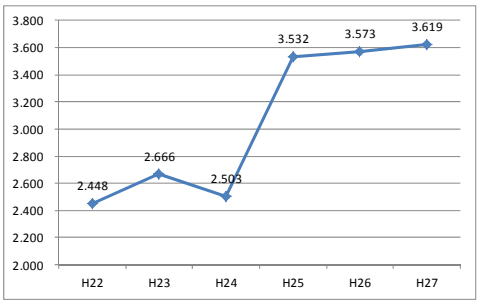
資料 2-1-10(1)　大学院生の学会発表数，論文発表数一覧（博士課程）

年度	論文掲載雑誌名	IF	備考
平成22年度	European Journal of Nuclear Medicine and Molecular Imaging	4.531	
	Clinical and Experimental Allergy	3.556	
	British Journal of Ophthalmology	2.917	
	Biochemical and Biophysical Research Communications	2.548	2件
	Nuclear Medicine and Biology	2.456	
	International Journal of Oncology	2.447	
	Urology	2.365	
	Artificial Organs	2.131	
	その他5誌	3.882	
	小計(14件)	**29.381**	
	平均(12件)	**2.448**	
平成23年度	International Journal of Cardiology	6.802	
	Journal of Neurotrauma	4.255	
	The Journal of Urology	4.016	
	Cancer Science	3.846	
	International Journal of Cardiology	3.469	
	Genes to Cells	2.952	
	The Journal of Steroid Biochemistry and Molecular Biology	2.886	
	Journal of Nuclear Cardiology	2.811	
	Pediatric Research	2.803	
	International JournInternational Journal of Oncologyal of Oncology	2.571	
	Nuclear Medicine And Biology	2.456	
	Journal of Atherosclerosis and Thrombosis	2.293	
	Journal of Pharmacological Sciences	2.260	
	その他7誌	9.908	
	小計(20件)	**53.328**	
	平均(20件)	**2.666**	
平成24年度	Endocrinology	4.459	
	The Prostate	3.485	
	Clinical and Experimental Immunology	3.360	
	Cancer Science	3.325	
	Nuclear Medicine and Biology	3.023	
	Translational Research	2.986	
	Clinica Chimica Acta	2.535	
	International Journal of Oncology	2.399	
	その他5誌	4.461	
	小計(13件)	**30.033**	
	平均(12件)	**2.503**	
平成25年度	Oncotarget	6.636	
	Allergy	5.883	
	FASEB Journal	5.704	
	European Journal of Nuclear Medicine and Molecular Imaging	5.114	
	British Journal of Pharmacology	5.067	
	Journal of Neuroinflammation	4.351	
	Journal of Clinical Microbiology	4.068	
	PLOS One	3.730	2件
	British Journal of Urology International	2.844	
	Hypertension Research	2.791	
	Nuclear Medicine and Biology	2.517	
	その他6誌	7.601	
	小計(18件)	**60.036**	
	平均(17件)	**3.532**	
平成26年度	Journal of Neuroscience	6.747	
	Allergy	5.995	
	Pain	5.836	
	Biochimica et Biophysica Acta(BBA)-Gene Regulatory Mechanisms	5.440	
	Annals of Surgical Oncology	3.943	
	Cancer Science	3.534	
	Behavioural Brain Research	3.391	
	Clinical Neurophysiology	3.144	
	BioMed Research International	2.880	
	International Journal of Oncology	2.773	
	Gerontology	2.681	
	American Journal of Rhinology and Allergy	2.178	
	Urology	2.132	
	その他2誌	2.917	
	小計(15件)	**53.591**	
	平均(15件)	**3.573**	
平成27年度	STEM CELLS	6.523	
	Oncotarget	6.359	
	Cancer Letters	5.621	
	Scientific Reports	5.578	
	Journal of Nuclear Medicine	5.563	
	Journal of Biological Chemistry	4.600	
	PLOS ONE	3.534	
	PLOS ONE	3.234	2件
	Journal of Magnetic Resonance Imaging	3.210	
	Clinical Nuclear Medicine	2.857	
	Acta Ophthalmologica	2.844	
	Diabetes & Vascular Disease Research	2.829	
	International Journal of Oncology	2.773	
	Urologic Oncology - Seminars and Original Investigations	2.768	
	Life Science	2.702	
	その他5誌	4.534	
	小計(21件)	**68.763**	
	平均(19件)	**3.619**	
合計(101件)		**295.132**	
平均(95件)		**3.107**	

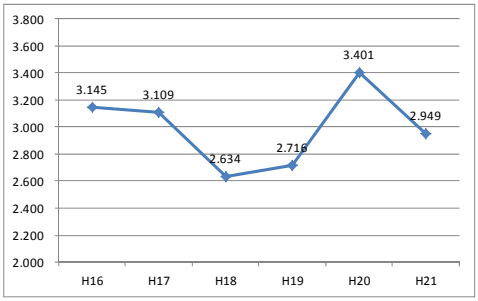
＊ IF値については，学位論文提出時のものである。
＊ 各年度の平均値算出にあたり，IF値のない論文は件数から除外した。

第２期中期目標期間における各年度のIFの平均値は年々高くなってきており，22年度～27年度の平均値は3.107となり，第１期の16年度～21年度の平均2.986を更に上回っている。

＜第2期＞



＜参考：第1期＞



（事務局資料）

資料 2-1-10(2)　大学院生の学会発表数，論文発表数一覧（修士課程）

年度	発表雑誌名	発表者数
平成24年度	日本看護研究学会	1
平成25年度	日本臨床医学リクスマネージメント学会	1
	日本看護学会（看護管理）	1
平成26年度	日本科学看護会誌	1
	富山大学看護学雑誌	1
	日本看護学会（成人看護）	1
	家族看護学研究	1
平成27年度	福井県小児保健協会	1

＊修士課程看護学専攻では、学位論文関連業績は翌年度以降の学術雑誌に発表することになる。

年度	発表学会名	発表者数
平成24年度	第32回日本看護科学学会学術集会	2
	第38回日本看護研究学会	4
	日本看護学会（地域看護）	1
	3rd International Confenrence on Violence in the Health Sector	1
	第25回日本がん看護学会学術集会	1
	第12回日本災害看護学会学術集会	1
	第22回日本看護学教育学会学術集会	1
平成25年度	心理教育・家族教室ネットワーク	1
	18th International Conference & Summit on Violence, Abuse & Trauma	1
	福井県小児保健協会	1
	第49回日本循環器病予防学会	1
	第39回日本看護医療学会学術集会	3
	第39回日本看護研究学会学術集会	2
	日本臨床医学リスクマネージメント学会：第6回北陸地方会	1
	第27回日本がん看護学会学術集会	1
	第17回日本看護管理学会学術集会	3
	第20回ヘルスカウンセリング学会	1
	日本看護研究学会：第26回近畿北陸地方会学術集会	2
平成26年度	日本看護学会（ヘルスプロモーション）	1
	19th International Conference & Summit on Violence, Abuse & Trauma	1
	日本看護研究学会：第27回近畿北陸地方会学術集会	1
	日本看護研究学会：第28回近畿北陸地方会学術集会	1
	第40回日本看護研究学会学術集会	3
	第17回日本災害看護学会学術集会	1
	北陸公衆衛生学会	2
	福井県看護学会	1
	第45回日本看護学会（看護管理）	1
	第18回日本看護管理学会学術集会	1
	日本看護学会（精神看護）	1
	第36回日本生物学的精神医学会	1
	第27回福井県母性衛生学会	1
	第21回ヘルスカウンセリング学会学術大会	1
平成27年度	日本精神保健看護学会学術集会	1
	第29回日本助産学会学術集会	1
	第17回日本看護医療学会学術集会	1
	第46回日本看護学会（看護管理）	1
	日本家族学会学術集会	1
	日本看護学会学術集会	1
	第27回福井県母性衛生学会	1
	第17回日本災害看護学会学術集会	7
	日本精神神経学会学術集会	1

＊修士課程看護学専攻では、学位論文関連業績は翌年度の学会で発表することになる。1名の修了者が、複数の学会発表を行う場合がある。

（事務局資料）

⑥　大学院生の中には科学研究費補助金に採択される者もおり，大学院生の研究を行う一定の資質・能力を証明するものである。また，第１期と比べ，採択数が大きく増加していることは大学院生の能力の向上を示している（**資料 2-1-11**）。

資料 2-1-11　大学院生が獲得した科学研究費補助金一覧

		平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	計
博士課程	若手(B)・代表	3	7	10	10	8	38
	萌芽・代表		1	1	2	3	7
	基盤(C)・代表			2	2	3	7
	基盤(A)・分担						0
	基盤(B)・分担	3	3	3	2		11
	基盤(C)・分担	4	4	3	5	3	19
	萌芽・分担	1	1	3	4	3	12
修士課程	若手(B)・代表		1	2	2	2	7
	基盤(C)・分担	1			1	1	3
計		12	17	24	28	23	104

第 1 期（平成 16 年度～平成 19 年度）の年度平均採択数 10.3 件と比べ，第 2 期（平成 23 年度～平成 27 年度）の平均は 20.8 件と大きく増加している。

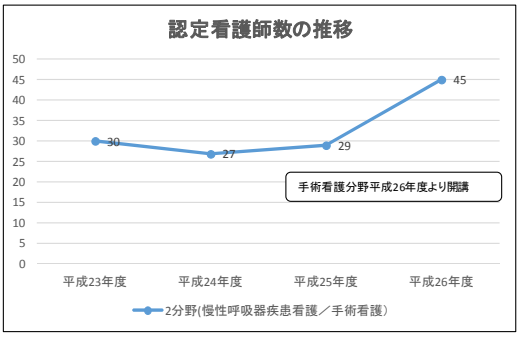
（事務局資料）

⑦　看護キャリアアップセンターでは，多くの認定看護師を輩出している（**資料 2-1-12**）。

資料 2-1-12　認定看護師教育課程実績

平成28年3月現在

課程	年度	収容定員数(a)	学生数(b)	収容定員充足率(%)(b)÷(a)×100	休学及び退学者	修了生人数	認定審査合格者
慢性呼吸器疾患看護分野	平成23年度	30	30	100.0		30	30(100%)
	平成24年度		28	93.3	1（退学者）	27	27(100%)
	平成25年度		29	96.7		29	29(100%)
	平成26年度		29	96.7		29	26(90%)
	平成27年度		24	80.0	1（休学者）	23	平成28年5月審査予定
手術看護分野	平成26年度	20	22	110.0		22	19(86%)
	平成27年度		22	110.0		22	平成28年5月審査予定



平成 27 年度末までに「慢性呼吸器疾患看護」及び「手術看護」の 2 つの分野から 182 人が修了し，平成 26 年度修了生までの認定審査合格率は 95.6%となっており，修了生のほとんどが認定看護師として活躍している。

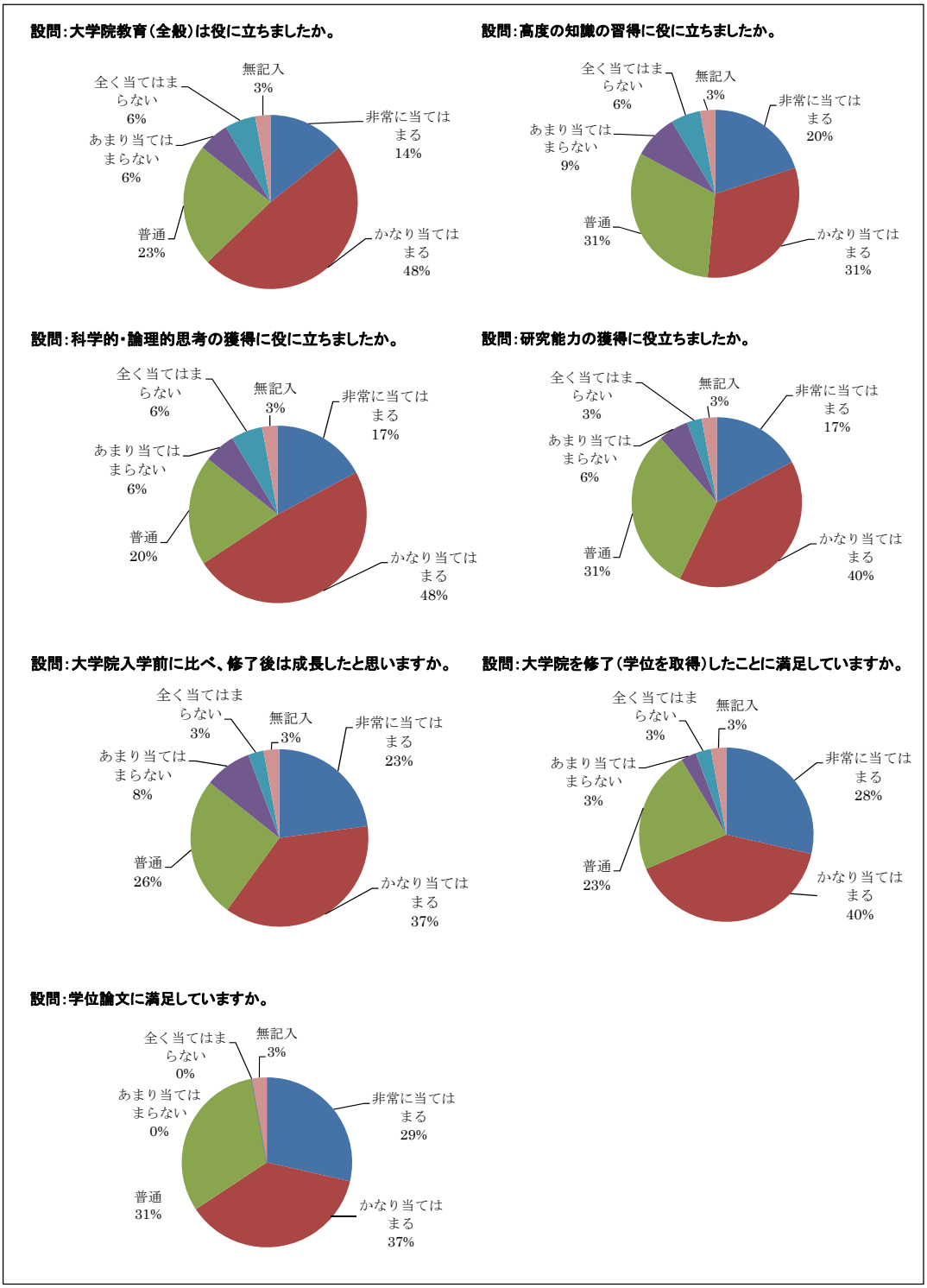
（キャリアアップセンター資料から）

●学業の成果の達成度や満足度に関する学生アンケート等の調査結果とその分析結果に関する例

【学生アンケートの内容】

①　博士課程では，授業及び研究指導等の大学院教育に対する大学院生の評価は高く，また，大学院教育により得られた修了時の資質・能力及び学位論文の満足度に対する大学院生の評価も良好であり，学業の最終成果の満足度は高く，適切である（**資料 2-1-13**）。

資料 2-1-13　博士課程・学業の成果に対する修了生アンケート結果（平成 27 年度実施）



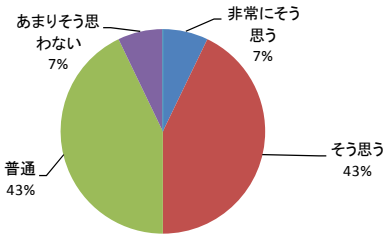
（資料「修了生・大学院教育に関するアンケート集計結果・抜粋」から）

② 修士課程では，授業（共通科目，特論，演習），研究活動及びキャリア形成・向上に関する評価は高く，適切である。また，大学院で身に付けた学力や能力が修了後に活用されていると評価する修了生が多く，適切である（**資料 2-1-14**）。

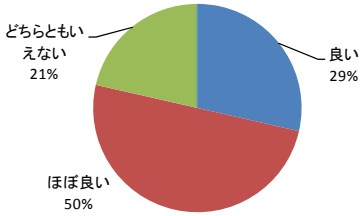
また，看護キャリアアップセンターにおいても，認定看護師課程の修了生に対して実施したカリキュラムアンケート結果によると，すべての科目において，満足度の高い結果が得られており，適切である（**資料 2-1-15**）。

資料 2-1-14　修士課程・学業の成果に対する修了生アンケート結果（平成 27 年度実施）

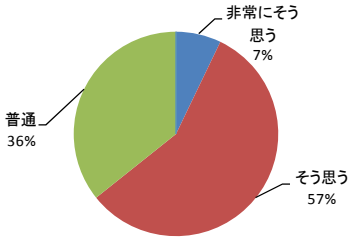
設問：　専門の領域で高度な看護ケアを実践するための専門的知識を有していますか？



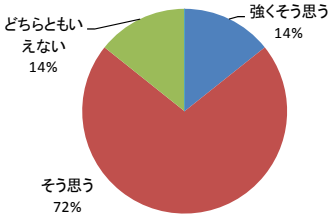
設問：　カリキュラム全体の構成（科目構成、開講時期など）は、看護職や地域保健医療福祉職のリーダー、看護学の教育・研究者等として備えるべき能力・技能を修得するうえで適切なものでしたか？



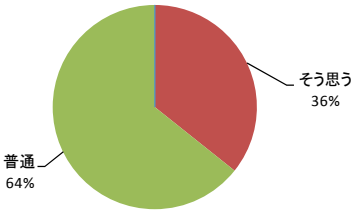
設問：　自らの知識と技術を磨く自己研鑽能力を有していますか？



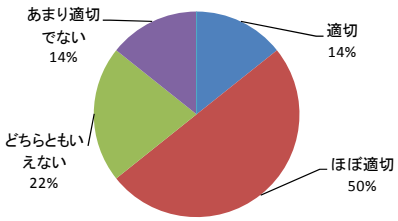
設問：　看護職や地域保健医療福祉職のリーダー、看護学の教育・研究者等として備えるべき能力を育成してもらうよう学生によるプレゼンテーション、ディスカッション等の様々な教育方法・形態を取り入れていましたが、これらはその能力を育成するうえで役に立ったと思いますか？



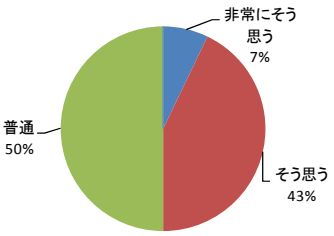
設問：　臨床・教育における様々な現象を客観的に捉え、科学的・理論的に判断し説明する能力を有していますか？



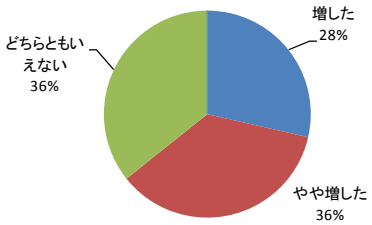
設問：　カリキュラムや各科目等を履修する上で、教員の指導・助言は全般的に適切でしたか？



設問：　医学・看護学における研究の重要性を理解し、その発展のために研究を計画・実行し、成果を公表する能力を有していますか？



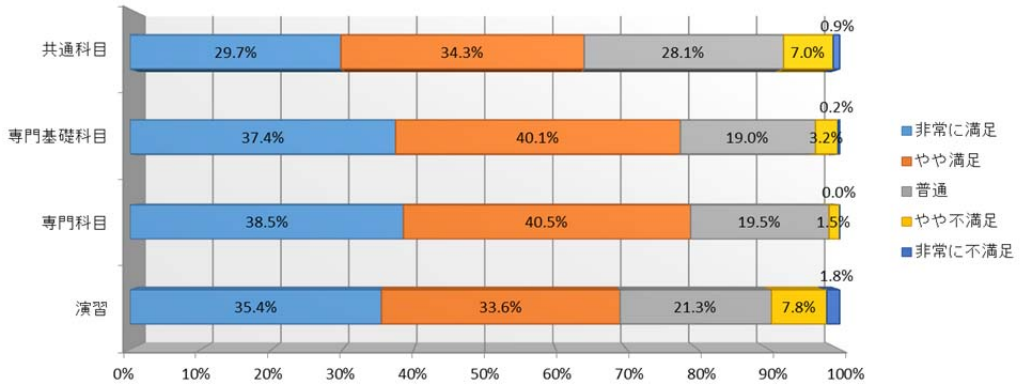
設問：　本学のカリキュラムを履修して、医療に対する興味や履修意欲がさらに増しましたか？



（資料「修了生・大学院教育に関するアンケート集計結果・抜粋」から）

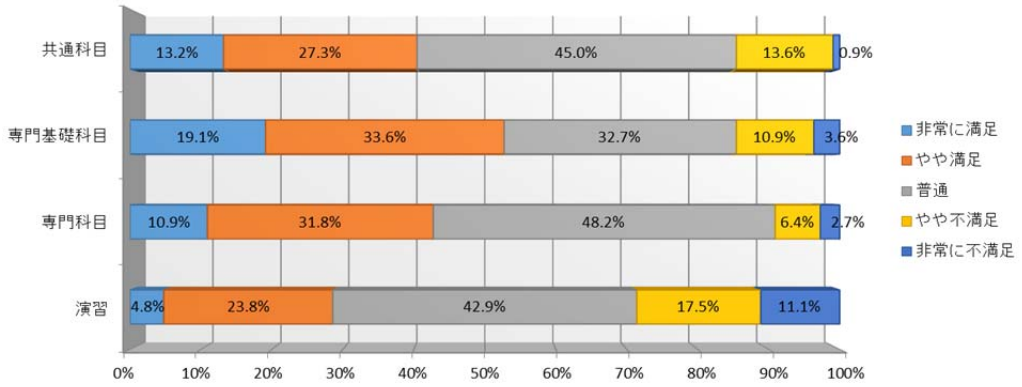
資料 2-1-15　看護キャリアアップセンター認定看護師教育課程　カリキュラムアンケート結果

（慢性呼吸器疾患看護分野）（平成 23 年度～平成 26 年度平均値）



全ての科目群において，非常に満足，やや満足が 64%以上となっており，受講生のカリキュラムに対する満足度は高い。

（手術看護分野）（平成 26 年度）



全ての科目群において，普通以上の評価が 71%以上となっており，カリキュラムについて受講生はおおむね満足している。

（修了生からのカリキュラムアンケートからのコメント）

≪共通科目≫
- 今後認定として活躍していく際のあるべき姿，自身が身につけて行かなければならない態度について考えることができた
- 色々な分野の認定看護師の話が聞ける機会のなので，継続してほしい
- 大変内容が充実しており，カリキュラム上の問題がなければ，コマ数を増やしてほしい
- 医療安全に対する病院としての取り組みや多職種者との連携の仕組みを理解することができた

≪専門基礎科目≫
- 各分野の専門とする先生に講義をしていただき，疾患についてあらためて深めることができた
- 全体的，統合的に患者を診る方法が学べた
- 災害の対応の授業で，実際に被災した病院の師長など具体的な話が決めたことは貴重であった
- ｸﾞﾙｰﾌﾟﾜｰｸを通して，自分では気づくことのできなかった倫理的問題に気づかされた

≪専門科目≫
- 内容に関しては，どうしたら対象にわかりやすく伝えられるか，この教育プログラムから何をもって帰ってもらうかに関して工夫することができたと思う
- 倫理について深く考えることが出来た。今後の自分の考えを深くしていきたいと思う
- 看護診断について十分な時間をとってもらえたのはよかった
- 看護観の発表は改めて，自分の看護を見つめ直すきっかけになったのでよかった

（資料「看護キャリアアップセンター認定看護師教育課程・カリキュラムアンケート集計結果抜粋」から）

（水準）　期待される水準を上回る

（判断理由）

①　博士・修士課程ともに，修了に際しては厳格な学位論文審査体制が整備されており，国際的な一流雑誌に公表されるなど学位論文の水準は高い。また，科学研究費補助金の採択数が第１期と比べ大きく増加していることも大学院生の研究能力の向上を示している。これらは修了生が十分な学力や資質・能力を身に付けている証左であり，全ての関係者の期待に十分応えるものである。また，博士課程における学位論文のインパクトファクター値が第１期よりも高くなっていることも大学院生の科学的・論理的思考力を備えた高い研究能力の証左となり，特筆できる[1)]。

[1)] 資料 2-1-6	：博士論文審査手順　P5-100
資料 2-1-8	：修士論文審査手順　P5-101
資料 2-1-10(1)	：大学院生の学会発表数，論文発表数一覧（博士課程）　P5-102
資料 2-1-10(2)	：大学院生の学会発表数，論文発表数一覧（修士課程）　P5-103
資料 2-1-11	：大学院生が獲得した科学研究費補助金一覧　P5-104

②　博士・修士課程ともに，在学時点及び修了時点におけるアンケート結果から，大学院生は十分な学力や資質・能力を身に付けており，更に学業成果に対する満足度も高く，全ての関係者の期待に十分応えるものである[2)]。

[2)] 資料 2-1-13	：博士課程・学業の成果に対する修了生アンケート結果（平成 27 年度実施）P5-105
資料 2-1-14	：修士課程・学業の成果に対する修了生アンケート結果（平成 27 年度実施）P5-106

以上のように，大学院生・修了生の学業成果は良好であり，全ての関係者の期待に極めてよく応えるものであるため，期待される水準を上回ると判断した。

観点　進路・就職の状況

（観点に係る状況）

●進路・就職状況，その他の状況から判断される在学中の学業の成果の状況に関する例
【就職・進学率やキャリアパス】

①　博士課程修了者の進路は，本学教員，県内医療機関医師（本学医学部附属病院を含む）及び県外医療機関等となっており，就職率はほぼ100%である。また，福井県内への就職率は平均で79.2%となっており，関係者の期待に十分応えている（**資料2-2-1**）。

資料2-2-1　博士課程修了者の進路状況

【第2期】

修了年度	修了者数	福井県内							県外							就職者数	就職率
		福井大学			医療機関医師	教育機関教員等	計	県内就職率	大学			医療機関医師	その他	国外大学等	計		
		教員	医員	その他					教員	医師	その他						
平成22年度	14	3	1		4		8	57.1%				2		4	6	14	100.0%
平成23年度	20	4	4	2	5		15	75.0%			1	2	1	1	5	20	100.0%
平成24年度	13	2	3	2	3		10	76.9%				3			3	13	100.0%
平成25年度	18	4	3	2	6		15	83.3%	1			1		1	3	18	100.0%
平成26年度	16	6	2	3	3	1	15	93.8%					1		1	16	100.0%
平成27年度	20	5	6		6		17	85.0%				2			2	19	95.0%
計	101	24	19	9	27	1	80	79.2%	1	0	1	10	2	6	20	100	99.0%

※ 平成27年度修了者1名は外国人留学生であり，就職希望なし。

【第1期】

修了年度	修了者数	福井県内							県外							就職者数	就職率
		福井大学			医療機関医師	教育機関教員等	計	県内就職率	大学			医療機関医師	その他	国外大学等	計		
		教員	医員	その他					教員	医師	その他						
第1期（平成16年度～21年度）	97	25	21	2	37	0	85	87.6%	0	1	0	5	2	4	12	97	100.0%

第1期に比べ，第2期においても平均就職率はほぼ100%（H27の未就職者1名は就職希望なし）を維持，県内就職率も若干下がったとはいえ，79.2%と福井県の医療への高い貢献度を保っている。

（事務局資料）

②　修士課程修了者の進路は，本学教員，県内医療機関（本学医学部附属病院を含む），看護職等となっており，就職率は100%である。また，福井県内への就職率は平均で95.9%となっており，関係者の期待に十分応えている（**資料2-2-2**）。

資料 2-2-2　修士課程修了者の進路状況

【第２期】

修了年度	修了者数	福井県内						県外						就職者数	就職率
		福井大学		教育機関教員	医療機関看護師等	計	県内就職率	大学		教育機関教員	医療機関看護師等	計			
		教員	看護師等					教員	看護師等						
平成22年度	6	1	1	1	3	6	100.0%					0		6	100.0%
平成23年度	8	1	1		6	8	100.0%					0		8	100.0%
平成24年度	9	1	2	3	3	9	100.0%					0		9	100.0%
平成25年度	11		5		6	11	100.0%					0		11	100.0%
平成26年度	7		1	1	4	6	85.7%			1		1		7	100.0%
平成27年度	8	1	2		4	7	87.5%				1	1		8	100.0%
計	49	4	12	5	26	47	95.9%	0	0	1	1	2		49	100.0%

【第１期】

修了年度	修了者数	福井県内						県外						就職者数	就職率
		福井大学		教育機関教員	医療機関看護師等	計	県内就職率	大学		教育機関教員	医療機関看護師等	計			
		教員	看護師等					教員	看護師等						
第１期（平成16年度～21年度）	48	7	15	4	21	47	97.9%	0	0	1	0	1		48	100.0%

平成 27 年度に初めて災害看護専門看護師教育課程の大学院生３名が修了
就職先：福井大学医学部附属病院福看護師長，公立丹南病院看護師長，
福井大学医学部看護学科助教

第１期に比べ，第２期においても平均就職率は 100％を維持，県内就職率も 95.9％と第１期とほぼ同じ水準を維持しており福井県の医療への高い貢献度を保っている。

（事務局資料）

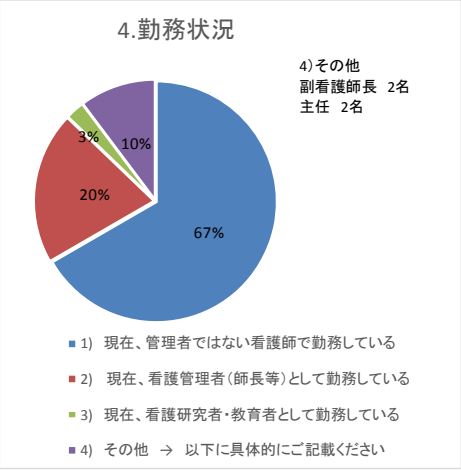
③　看護キャリアアップセンター認定看護師教育課程では，平成 27 年度末までに 182 名が修了し活躍している（**資料 2-2-3，P5-104 前掲資料 2-1-12**）。

また，人材育成担当部門の看護実践能力開発講座の参加者からも高評価を得ており，就業看護師への生涯学習支援として，社会に大きく貢献していると言える（**P5-72，73 前掲資料 1-2-30～32**）。

資料 2-2-3　看護キャリアアップセンター認定看護師教育課程　卒業生に対する成果調査結果

【認定看護師教育課程】卒業生に対する大学院教育の成果調査

【実施期間】平成27年10月14日～10月23日
【回答方法】メールにて添付
【回答率】



修了生の約７割は看護師として勤務し，約３割は看護管理者や看護教育・研修職等に就いている。

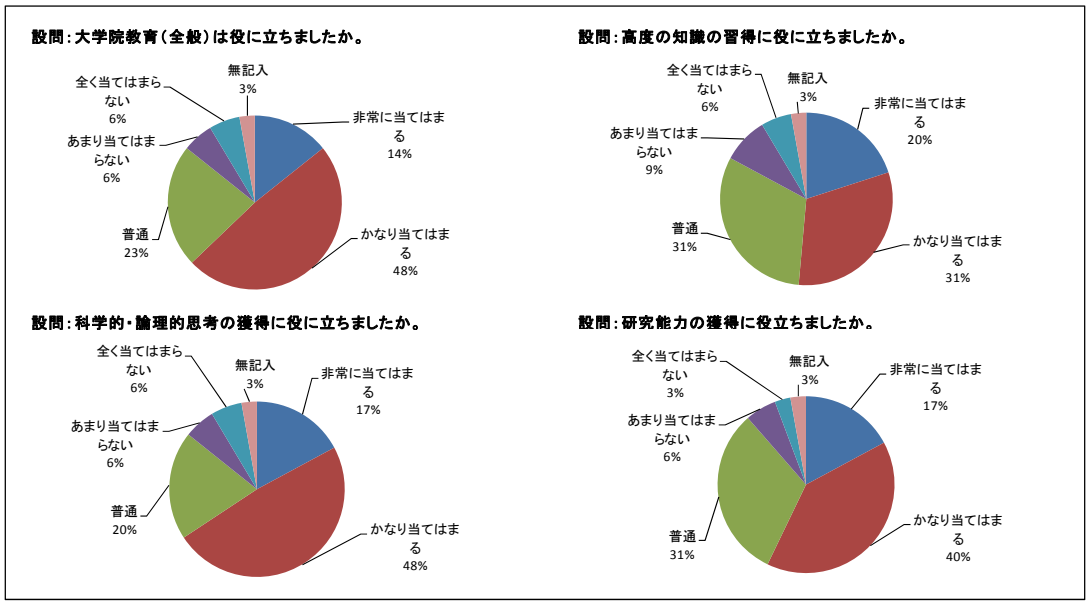
（看護キャリアアップセンター資料から）

●在学中の学業の成果に関する修了生及び進路先・就職先等の関係者への意見聴取等の結果とその分析結果に関する例

【卒業生調査内容】

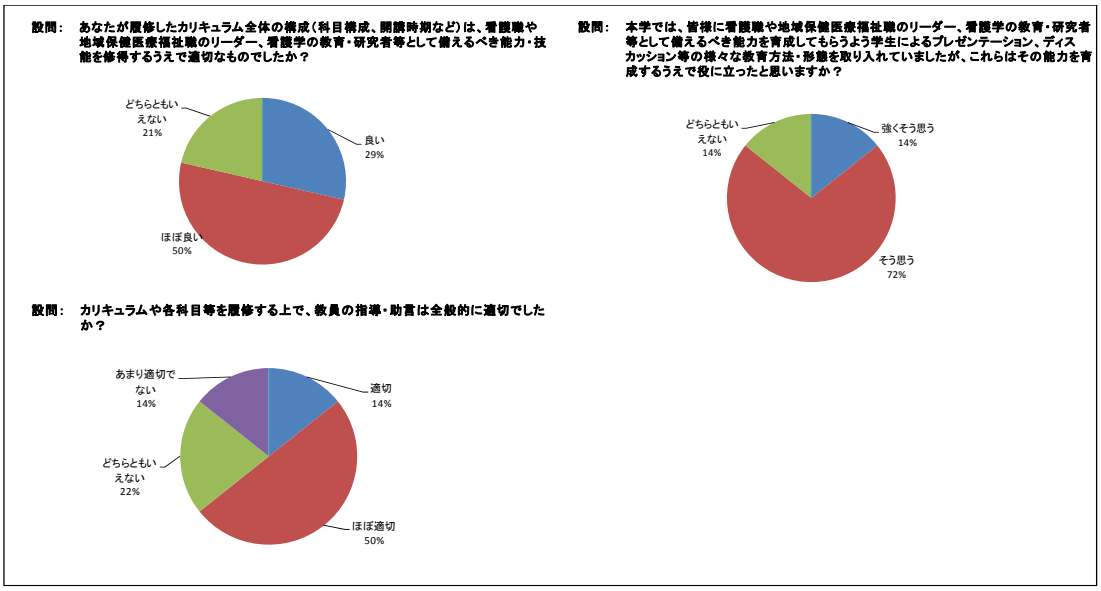
博士・修士課程ともに就職についての修了者の満足度は高い。特に修士課程では，大学院で学んだことが現職に活かされていると評価するものが多く適切である（**資料 2-2-4，5**）。

資料 2-2-4　博士課程修了者・仕事と教育内容についてのアンケート結果（平成 27 年度実施）



（資料「修了生・大学院教育に関するアンケート集計結果・抜粋」から）

資料 2-2-5　修士課程修了者・仕事と教育内容についてのアンケート結果（平成 27 年度実施）



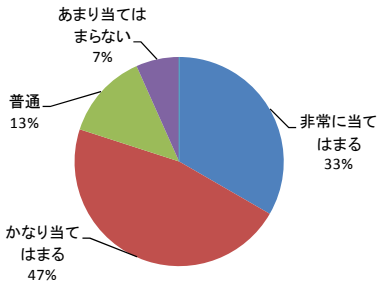
（資料「修了生・大学院教育に関するアンケート集計結果・抜粋」から）

【就職先調査内容】

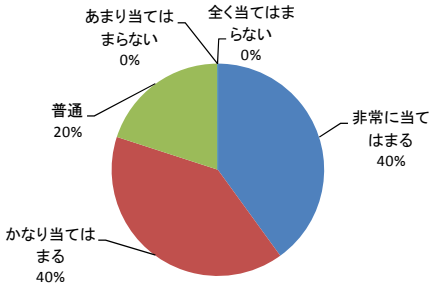
博士・修士課程ともに修了者の就職先機関からの評価も高く，大学院教育で得た資質・能力が適切であるといえる（**資料 2-2-6，7**）。

資料 2-2-6博士課程　勤務機関へのアンケート結果（平成 27 年度実施）

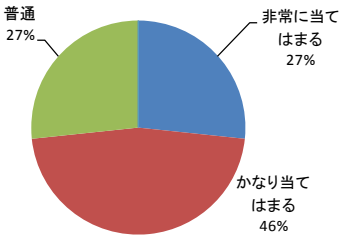
設問：高度な医学知識を有している。



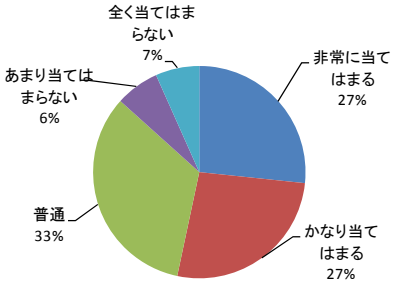
設問：十分な医療倫理観を有している。



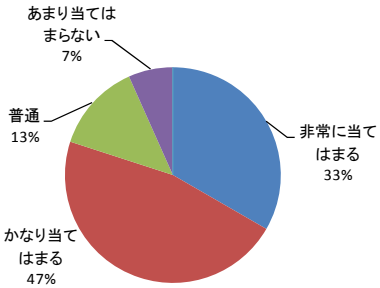
設問：高度な臨床能力・医療技能を有している。



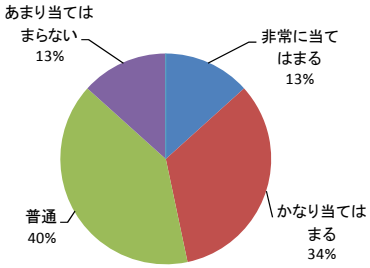
設問：医療チーム内での指導力を有している。



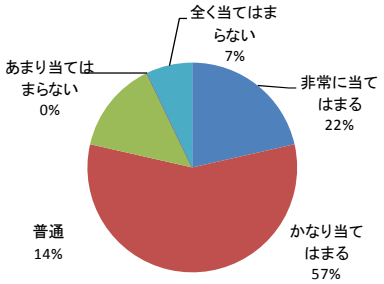
設問：高度な臨床能力・医療技能を有している。



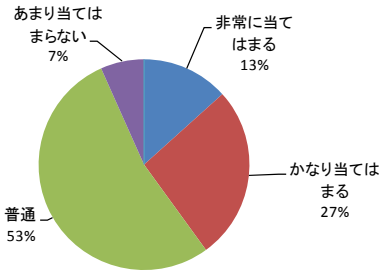
設問：独創的な研究を遂行する能力を有している。



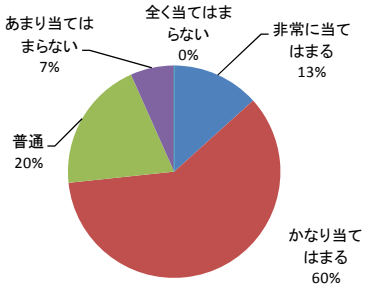
設問：医学知識・臨床能力を応用する能力を有している。



設問：国際的な水準の研究を遂行する能力を有している。



設問：科学的・論理的思考の能力を有している。



（勤務機関に対する博士課程修了者に関するアンケート結果より）

資料 2-2-7　修士課程　勤務機関へのアンケート結果（平成 27 年度実施）

○　就業先，意見聴取者：　A病院　看護部長

1.　本学修了生の全体的評価

現在の勤務では、新人の教育担当である。自己学習意欲は高く、そのような姿勢が新人の良いモデルになっている。看護実践上のリーダーシップ能力には課題がある。

2.　本学修了生の活用

看護協会の災害看護委員でありDMAT隊員として災害看護のリーダーとして活躍している。修士課程修了していることで、看護部倫理委員会で倫理審査委員、看護研究の査読委員のリーダー的役割をとって活躍している。

○　就業先，意見聴取者：　B病院　看護部長

1.　本学修了生の全体的印象

認定看護師でもあり、看護師特定行為・業務試行に参加中で、12月からの日本看護協会での2か月間の研修が予定されている。自分の専門性を生かして地域で自律した看護ケアを実施できる人材となると思われる。

2.　本学修了生の活用

つい最近まで病院唯一の認定看護師でもあったことから管理監査を担当し、病院全体の医師、地域保健所からの相談など周囲からの信頼が非常に高い。特に地域連携においては訪問看護師や地域のクリニックからの相談、要望を受けての指導や講演活動も意欲的に行っている。これらの周囲からの期待というモチベーションと修士課程を修了していることも自信になっていると考える。さらに、英国での研究発表も実施している。

○　就業先，意見聴取者：　C病院　看護部長 ，D病院　看護部長の共通意見

1.本学修了生の全体的印象

認定看護師でもあるが、看護管理役割を担ってもらいたいと外科病棟の管理師長に任命した。元気でメリハリのある性格であり、ＣＮとしての実践力も高いために、本部の管理研修も受けつつ、看護管理者としてスタッフの信頼も厚く頑張っている。

2. 本学修了生の全体的評価

・ 修了後の仕事の仕方に着目するような活躍ぶりであり、本学の修士課程で学ぶ意欲をもつ看護師に良い影響を与えている。
・ 個人レベルで学ぶのではあるが、院内の研究指導や査読委員としての役割を担当し、積極的な研究の取り組みが推進されてきた。
・ 院内の他職種との協働する機会が増えてきているが、看護部の意見を明確に発言し、将来への展望や幅広い視野をもっているので将来を期待したい。

3.　本学修了生の活用

看護研究委員を務め、研究のアドバイスや根拠のあるデータの示し方など、自信を持って意欲的な取り組みができている。

（資料「修士課程修了者の勤務先機関へのアンケート結果」より）

（水準）　期待される水準にある

（判断理由）

① 博士・修士課程ともに修了者は卒業後の進路について満足しており，大学院生等の期待に十分応えるものである[1)]。

[1)]	資料 2-2-1	：博士課程修了者の進路状況　P5-109
	資料 2-2-4	：博士課程修了者・仕事と教育内容についてのアンケート結果（平成 27 年度実施）　P5-111
	資料 2-2-2	：修士課程修了者の進路状況　P5-110
	資料 2-2-5	：修士課程修了者・仕事と教育内容についてのアンケート結果（平成 27 年度実施）　P5-111

② 博士・修士課程ともにそれぞれの教育目的に応じた人材の養成ができており，相応の機関に就職し，指導的役割を果たしていることは，関係者の期待に十分応えるものである[2)]。

[2)]	資料 2-2-6	：博士課程　勤務機関へのアンケート結果（平成 27 年度実施）　P5-112
	資料 2-2-7	：修士課程　勤務機関へのアンケート結果（平成 27 年度実施）　P5-113

③ 博士・修士課程ともに修了者の県内医療機関等への就職率は高く，地域医療・保健に貢献していることは特筆できる。また，就職先機関からは，修了生は教育目的に対応した学力・能力・資質を十分有していることが高く評価されており，関係者の期待に十分応えるものである[3)]。

[3)]	資料 2-2-1	：博士課程修了者の進路状況　P5-109
	資料 2-2-2	：修士課程修了者の進路状況　P5-110
	資料 2-2-6	：博士課程　勤務機関へのアンケート結果（平成 27 年度実施）　P5-112
	資料 2-2-7	：修士課程　勤務機関へのアンケート結果（平成 27 年度実施）　P5-113

以上のように，進路・就職の状況は全ての関係者の期待に十分応えたものであり，期待される水準にあると判断した。

Ⅲ　「質の向上度」の分析

（１）分析項目Ⅰ　教育活動の状況

①　博士課程の改組

平成 25 年度に２専攻体制から「統合先進医学専攻」の１専攻体制に統一し，従来のコースとともに本邦初の「地域総合医療学コース」を新設した。このことにより，高度な研究と地域医療を相補的に学ぶ機会を提供できる体制となった。「地域総合医療学コース」は福井の地域性を生かし，現代の社会情勢のニーズにこたえる改組となっている。改組後，専攻の１本化とともに複数教員指導体制が導入され，基礎・臨床間の相互指導体制がより有機的に行えるようになった。

このような体制の構築によって，入学希望者が増え，第２期の平均入学定員充足率は第１期より大きく向上し，改組後は 100％を維持している。大学院生の研究指導についての満足度も第１期に比べ高くなっているなど，関係者の期待に応えるものであり，重要な質の変化があったと判断した[1)]。

[1)] 資料 1-1-3　：医学系研究科博士課程改組後の組織構成　P5-6
資料 1-1-4　：博士課程改組後の指導体制　P5-7
資料 1-1-7　：博士課程　地域総合医療学コース教育体制　P5-9
資料 1-1-19　：副指導教員制度を定めた規則　P5-18
資料 1-1-20　：副指導教員制度適用状況　P5-18
資料 1-1-21　：平成 21 年度，平成 27 年度福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査（研究指導）　P5-19
資料 1-2-6　：博士課程：カリキュラムの展開　P5-51
資料 1-2-11　：医科学基礎総論に係る「大学院発表会（研究経過方向・検討会)」について　P5-55
資料 1-2-12　：博士課程　３年次生研究発表会実施状況（平成 27 年度）　P5-55
資料 1-1-40　：入学定員充足率の適正化に向けた改善の実施とその成果　P5-30
資料 1-1-41　：医学系研究科における入学定員充足率　P5-31

②　修士課程の専門看護師教育課程の開設

災害による被害が累進傾向にある時代に対応し，平成 25 年に災害看護学分野を設置して修士課程は６領域へと拡大した。また，平成 26 年からは，グローバル水準の高度実践看護師教育として専門看護師(CNS)教育課程をスタートさせた。特に被ばく医療に強い災害看護 CNS 課程は，国内初である。また，がん看護 CNS 課程では，がん薬物療法や緩和ケアの専門家を育成している。CNS 課程設置に伴う共通科目の増加と演習や実習を含めた専門科目の充実は，大学院全体の教育内容とエビデンスに基づく的確な判断による看護ケアの質の向上に寄与し，学生の履修に関する満足度は高い。この改革により，平均入学定員充足率は第１期に比べ，第２期は 98.6％と大幅に改善されており，重要な質の変化があったと判断した[2)]。

[2)] 資料 1-1-5　：修士課程 CNS 課程開設検討経過　P5-8
資料 1-1-8　：修士課程　災害看護 CNS 課程の指導体制　P5-10
資料 1-2-15　：修士課程授業開設表(平成 27 年度)　P5-57
資料 1-2-22(1)　：修士課程　シラバス(1)「災害看護学特論Ⅰ」　P5-63
資料 1-2-22(2)　：修士課程　シラバス(2)「災害看護学実習Ⅳ」　P5-64
資料 1-1-40　：入学定員充足率の適正化に向けた改善の実施とその成果　P5-30
資料 1-1-41　：医学系研究科における入学定員充足率　P5-31

（２）分析項目Ⅱ　教育成果の状況

① 博士課程学位論文の質の向上

社会人の大学院入学への門戸を広げるため，単位取得の融通性が高い体制となった。例えば大学院講義に出席できないことを補うために E ラーニングによる補習学習体制を整えた。研究倫理教育の E ラーニングを義務化し，論文執筆などの国際ルールを習得する機会を与えている。さらに，博士論文の投稿前に剽窃チェックを行い，その結果を委員会で詳細に検討し，助言などを大学院生にフィードバックする体制を確立した。

このようなサポートの結果，第２期における学位論文のインパクトファクターの平均値が 3.107 と，第１期にくらべ 0.121 ポイント向上し，さらに高い水準となり，重要な質の変化があったと判断した[3)]。

[3)] 資料 1-1-3　：医学系研究科博士課程改組後の組織構成　P5-6
資料 1-1-4　：博士課程改組後の指導体制　P5-7
資料 1-1-19　：副指導教員制度を定めた規則　P5-18
資料 1-2-6　：博士課程：カリキュラムの展開　P5-51
資料 1-2-9　：博士課程授業開設表「共通科目」（平成 27 年度）　P5-53
資料 1-2-33　：博士課程・大学院セミナー担当研究者数一覧　P5-74
資料 1-2-34　：博士課程「地域総合医療学コース」招へい講師一覧　P5-75
資料 1-2-47　：博士課程　シラバス「医科学基礎総論」　P5-87
資料 1-2-48　：福井大学論文剽窃防止対策実施要項（一部抜粋）　P5-88
資料 1-2-49　：医学系研究科博士課程学位論文剽窃チェック手順　P5-88
資料 2-1-10(1)：大学院生の学会発表数，論文発表数一覧（博士課程）　P5-102

② 被ばく医療に強い医療人の養成

被ばく医療に強い医療人の養成は，地震大国である日本においてニーズは高く，喫緊の課題である。本大学院では日本で初めて博士課程に「地域医療学コース」を，修士課程に「災害看護 CNS 課程」を開設し，福島原子力発電所事故の教訓を生かし，実習を通して現場から学ぶなど，実践的に被ばく医療を学ぶカリキュラムを組み，被ばく医療の指導的な立場を担う人材の育成を行っている。博士・修士課程の両方に被ばく医療を学ぶカリキュラムを置いたことは，他にない特筆すべき取組であり，相補的な学習は医療現場での有機的なチーム医療につながることが大きく期待される。また，双方の学びを生かし，両課程の大学院生が協働して，地域での講演や啓もう活動に積極的に取り組んでおり，地域に大きく貢献している[4)]。これらのことから重要な質の変化があったと判断した。

[4)] 資料 1-1-3　：医学系研究科博士課程改組後の組織構成　P5-6
資料 1-1-5　：修士課程 CNS 課程開設検討経過　P5-8
資料 1-1-7　：博士課程　地域総合医療学コース教育体制　P5-9
資料 1-1-8　：修士課程　災害看護 CNS 課程の指導体制　P5-10
資料 1-1-54　：福井メディカルシミュレーションセンター学生利用状況（大学院生含む）P5-43
資料 1-1-55　：福井メディカルシミュレーションセンターを利用した演習風景　P5-44
資料 1-2-18　：緊急被ばく医療に強い救急総合医養成拠点概要　P5-59
資料 1-2-20　：「緊急被ばく医療に強い救急総合医養成拠点」最終評価　P5-61
資料 1-2-21　：博士課程　シラバス「地域総合医療学・臨床疫学特論Ⅱ（ER 救急学）」P5-62
資料 1-2-22(1)：修士課程　シラバス(1)「災害看護学特論Ⅰ」　P5-63
資料 1-2-22(2)：修士課程　シラバス(2)「災害看護学実習Ⅳ」　P5-64
資料 1-2-40　：博士課程「地域総合医療学コース」の開催プログラム　P5-81
資料 1-2-23(1)：修士課程　大学院生協力啓蒙活動(1)　P5-65
資料 1-2-23(2)：修士課程　大学院生協力啓蒙活動(2)　P5-66

③　修士課程　災害看護 CNS 課程の状況

災害看護 CNS 課程は，平成 27 年度に日本で初めて３名の修了生を輩出し，平成 29 年度に専門看護師認定審査を受ける予定である。

１期生は,CNS に必要な能力を高めるため,地域と連携した災害医療に関する講演会,訓練等でも中心メンバーとして活躍しており,後輩の指導も積極的に行っている。今後,地域における災害看護のチームリーダーとして充分な活躍が期待できる本学独自の教材開発やセミナー開講により，今後も地域防災・病院防災に貢献できるとともに，広範な活動実績により，県内はもとより，全国的なネットワークができ，緊急的，長期的協力体制の構築が期待できるものであり，重要な質の変化があったと判断した[5)]。

[5)] 資料 2-2-2　：修士課程修了者の進路状況　P5-110
資料 1-1-8　：修士課程　災害看護 CNS 課程の指導体制　P5-10
資料 1-1-9　：修士課程　災害看護 CNS 課程活動一覧　P5-11
資料 1-2-22(1)：修士課程　シラバス(1)「災害看護学特論Ⅰ」　P5-63
資料 1-2-22(2)：修士課程　シラバス(2)「災害看護学実習Ⅳ」　P5-64
資料 2-2-5　：修士課程修了者・仕事と教育内容についてのアンケート結果（平成 27 年度実施）　P5-111
資料 2-2-7　：修士課程　勤務機関へのアンケート結果（平成 27 年度実施）　P5-113

６．工学部

Ⅰ　工学部の教育目的と特徴　・・・・・・・・６－２

Ⅱ　「教育の水準」の分析・判定　・・・・・・６－４

分析項目Ⅰ　教育活動の状況　・・・・・・６－４

分析項目Ⅱ　教育成果の状況　・・・・・・６－127

Ⅲ　「質の向上度」の分析　・・・・・・・・・６－159

Ⅰ　工学部の教育目的と特徴

１．教育目的

（１）教育活動を実施する上での基本方針

本学部の教育理念は，高度な専門能力に加えて，創造力，批判力，自己学習力および伝達力を併せた総合能力，すなわち，人間力を持つ高度専門技術者を育成し，もって地域社会および国際社会の持続的発展に寄与することである。この理念に沿って教育活動を実施する。

（２）達成しようとする基本的な成果

教育活動の基本方針に従い，①基礎的な知識・教養，および専門的知識・能力を身につけ，②創造力，自己学習力，問題解決能力，およびコミュニケーション能力を有し，③高度専門技術者として守るべき倫理や負うべき社会的責任を理解して，幅広い視野をもって社会の発展に貢献できる人材を育成することを基本的な成果とする。

（３）大学の基本的な目標との関連

①本学の理念のうち「人々が健やかに暮らせるための科学と技術に関する世界的水準での教育・研究を推進し，地域，国及び国際社会に貢献し得る人材の育成と，独創的でかつ地域の特色に鑑みた教育科学研究，先端科学技術研究」に関連している。

② 福井大学の長期目標のうち，長期目標１「21 世紀のグローバル社会において，高度専門職業人として活躍できる優れた人材を育成」，及び長期目標３「優れた教育，研究，医療を通して地域発展をリードし，豊かな社会づくりに貢献」に関連している。

（４）教育研究等の質の向上に関する目標との関連

①中期目標（教育内容及び教育の成果等に関する目標）の「基本目標「21 世紀のグローバル社会において，高度専門職業人として活躍できる優れた人材を育成」を目指して，国際的にも通用する質の高い教育を実施する」と関連している。

②中期目標（教育の実施体制等に関する目標）の「質の高い教育を実現するため，教育内容・方法や成果を点検・評価するシステムを構築し，不断に改善を行う教育実施体制を整備する」と関連している。

２．組織の特徴

福井大学工学部は，昭和 24 年に新制大学の小規模工学部として発足した。その後，時代的・社会的要請を受けて拡充を続け，現在は工学のほぼ全ての分野を網羅する，全国でも有数規模の工学部になっている。平成 18 年に教員の所属を工学研究科とする組織改組を行ったが，運営は学科・専攻を単位とし，教育の責任体制を明確にしている。また，学内には附属国際原子力工学研究所や遠赤外領域開発研究センター等，工学部に関連性の強い組織があり，これらに所属する教員も工学教育を担当している。平成 11 年の改組で現在の８学科体制となったが，社会の求める「幅広い知識を持った専門技術者」育成に向け，平成 28 年度から５学科 11 コースへの改組を予定している。

３．入学者の状況

一般選抜，特別選抜，AO 入試，および３年次への編入学選抜を行っている。第２期中期目標期間（以下「第２期」という。）を通し，入学定員は 525 名に保ったが，編入学定員は平成 27 年度から 10 名増えて 40 名となった。また，平成 26 年度入試からマレーシア・ツイニング・プログラム入試を開始した。志願倍率は，前期日程で３倍前後，後期日程で約６倍～10 倍である（**資料 1**）。前期日程では，名古屋会場に加え，

平成 27 年度入試から京都会場を設けた。平成 27 年度入試では，前期日程受験者の約 49%が名古屋会場，約 14%が京都会場で受験した。

平成 27 年度の入学者・編入学者選抜の状況は**資料 2**，**資料 3** の通りである。全入学者のうち福井県出身の者は 31.9%である（第２期の平均）。マレーシア・ツイニング・プログラム入試による入学者は，平成 26 年度に４名，平成 27 年度に２名である。

資料 1　平成 22 年度から平成 27 年度の志願倍率

	第１期（平均）	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
前期日程	2.7	2.7	2.8	3.2	3.3	3.0	2.7
後期日程	8.1	5.9	6.8	10.2	7.9	6.8	7.5
AOⅠ	2.5	2.7	2.4	2.8	2.8	3.3	2.2
AOⅡ	2.4	2.5	2.4	2.2	3.1	1.9	2.4

（事務局資料）

資料 2　平成 27 年度入学者選抜の入学定員，入学者数，直近６年間の平均入学定員充足率等

学科	入学定員	志願者数	受験者数	入学者数	直近６年間の平均入学定員充足率（平成22～27年度）
機械工学科	75	420	246	80	1.06
電気・電子工学科	64	237	110	68	1.08
情報・メディア工学科	65	292	167	66	1.05
建築建設工学科	65	354	249	69	1.07
材料開発工学科	75	288	157	79	1.08
生物応用化学科	65	153	107	65	1.04
物理工学科	51	259	121	57	1.09
知能システム工学科	65	292	213	65	1.05
計	525	2295	1370	549	1.06

（事務局資料）

資料 3　平成 27 年度編入学者選抜の入学定員，入学者数，直近６年間の平均入学定員充足率

学科	入学定員	入学者数	直近５年間の平均入学定員充足率
全学科	40	50	1.29

（事務局資料）

４．想定する関係者とその期待

- **学生･保護者**：基礎的な知識・教養，専門的知識・能力，および汎用的技能など，高度専門技術者として備えるべき学力や資質・能力の涵養
- **就職先企業等**：基礎的な知識・教養，専門的知識・能力，および汎用的技能など，高度専門技術者として備えるべき学力や資質・能力を有した人材の育成
- **地域社会**：出身地域を一つの柱とする広い地域において社会の発展に貢献できる人材の育成

Ⅱ　「教育の水準」の分析・判定

分析項目Ⅰ　教育活動の状況

観点　教育実施体制

（観点に係る状況）

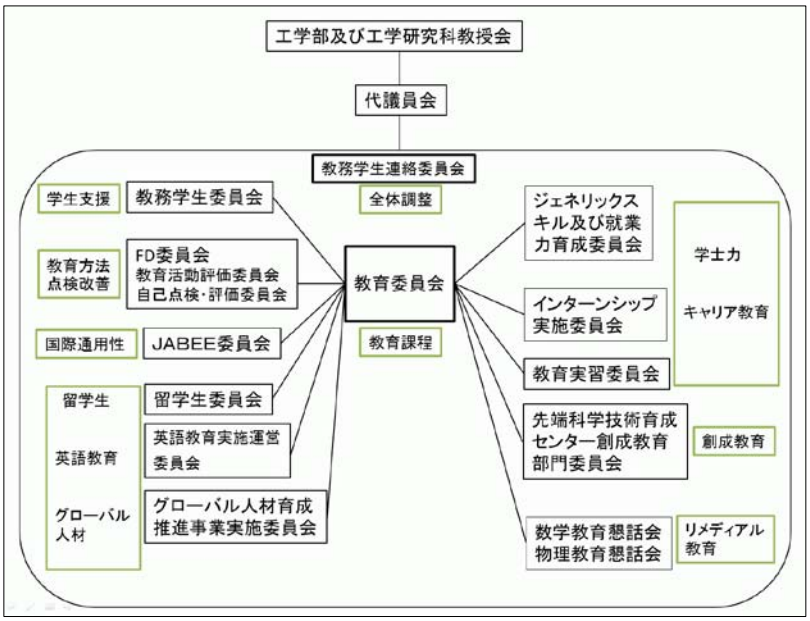
●教員組織編成や教育体制の工夫とその効果に対する例

【教育プログラムとしての実施体制】

①　工学部長のマネジメントのもと，教育関連の委員会，代議員会，教授会等が運営され，「工学部及び工学研究科教育委員会」が，関連委員会等との連携のもと，教育プログラムの実施を統括している。委員会等の長により構成される教務学生連絡委員会が全体調整や達成度管理を行っている（**資料 1-1-1**）。

資料 1-1-1　教育プログラム実施体制

■　連携体制



■　各委員会の役割

委員会名	所掌事項
教務学生連絡委員会	教務・教育関係委員会の連携（全体調整，情報共有，達成度管理など）。学務担当副研究科長が委員長となり，研究科長，教育・学務関係の委員会の長がメンバー。
教務学生委員会	教務，学生生活に係る事項
教育委員会	工学部の専門科目の改廃に関する事項／専門基礎科目のうち数学・物理に関する事項／工学部の留学生教育の改善に関する事項／共通教育に関する事項／工学部の共通科目に関する事項／その他委員会が必要と認めた教育に関する事項
数学教育懇話会	専門基礎科目の数学に関する事項／数学ステップアップに関する事項／数学プレースメントテストに関する事項／その他懇話会が必要と認めた数学教育に関する事項
物理教育懇話会	専門基礎科目の物理に関する事項
留学生委員会	留学生の受け入れ，履修指導，生活指導，進路指導，その他必要と認められる事項
FD 委員会	教育の理念，目的，目標の周知と，それらを達成するための教育方法の研究・改善と教育の資質の向上

JABEE 委員会	JABEE 対応プログラムの作成，公開，認定申請，継続的改善に関する事項
教育実習委員会	教員免許および教育実習に関する事項
英語教育実施運営委員会	工学部・工学研究科における英語教育に関すること／大学院留学生のための英語による特別コース運営に関すること／外国人英語教師の充足に関すること／その他英語教育の実施に関する事項
インターンシップ実施委員会	インターンシップへの参加に関すること／インターンシップの履修指導に関すること／インターンシップの単位認定に関すること／その他インターンシップに関すること
ジェネリックスキル及び就業力育成委員会	ジェネリックスキル及び就業力育成教育の実施，評価・点検に関する事項
グローバル人材育成推進事業実施委員会	学生の海外派遣およびそれに伴う単位認定に関すること／その他グローバル人材育成推進事業のプログラム実施に関すること
先端科学技術育成センター創成教育部門委員会	創成教育の企画・立案・実施に関する事項／学際実験・実習の立案・実施・成績に関すること／創成教育を通じた地域との連携に関する事項
教育技法評価委員会	教員の新規採用，昇格における模擬授業等による教育技法評価に関すること

（事務局資料）

【全学目的に即した連携体制】

①　共通教育では，全学目的（**資料 1-1-2**）に沿って多様な科目を体系的に配置している（**資料 1-1-3**）。全学出動体制のもと，工学部も多数の科目を担当し，共通教育の実施に責任を負っている（**資料 1-1-4～6**）。

資料 1-1-2　共通教育の理念・目的

全学共通・教養教育の理念

『広く学問の知識や方法を学び，社会のグローバル化や知識基盤社会に対応できる総合的な判断力と行動力を持った，人間性豊かな社会人となるための「教養」を身につける。さらに，円滑なコミュニケーションの基盤となる高い語学力や専門科目の履修に必要な知識等を修得する。』

（2015 年 3 月 4 日　全学教育改革推進機構長裁定）

共通教育の理念・目的

特定の分野に偏ることなく，広く学問の知識や方法を学ぶことを通じて，総合的な判断力と行動力をそなえた良識ある社会人として自己を陶冶するとともに，専門教育を通して学んだ知識や技能及び学術等の成果を生かし広く社会に貢献できるような人間の育成をめざす。

（1993 年制定，2005 年改正）

（平成 27 年度共通教育科目履修の手引きより抜粋）

資料 1-1-3　共通教育科目の体系と内容の概要

■　特色

特色 GP で高く評価された枠組みを基本に，GGJ 事業による充実した英語教育を取入れた体系である。

第１期の特色 GP で高く評価された枠組

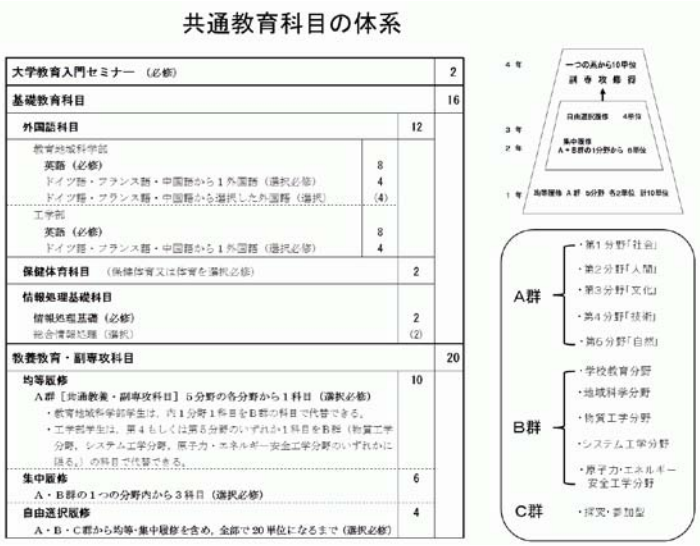
１．新入生全員の必修科目として大学教育入門セミナーを開設し，助言教員制度等と連携しながら学生の多様化に配慮し，学生が大学の勉学・生活へスムーズに入るための支援を行う。
２．現代的に編成された豊富な教養教育科目の履修を，均等履修，集中履修，自由選択履修に分け，低学年で広く学問に触れ，学年進行とともに，自分の専門と異なる分野への関心が高まるよう工夫されている。
３．更に高度な教養教育として，副専攻を修得できる制度を設けている。

＋

第２期の GGJ 事業による充実した英語教育

少人数習熟度別クラスによる実践的英語教育。授業時間の倍増。

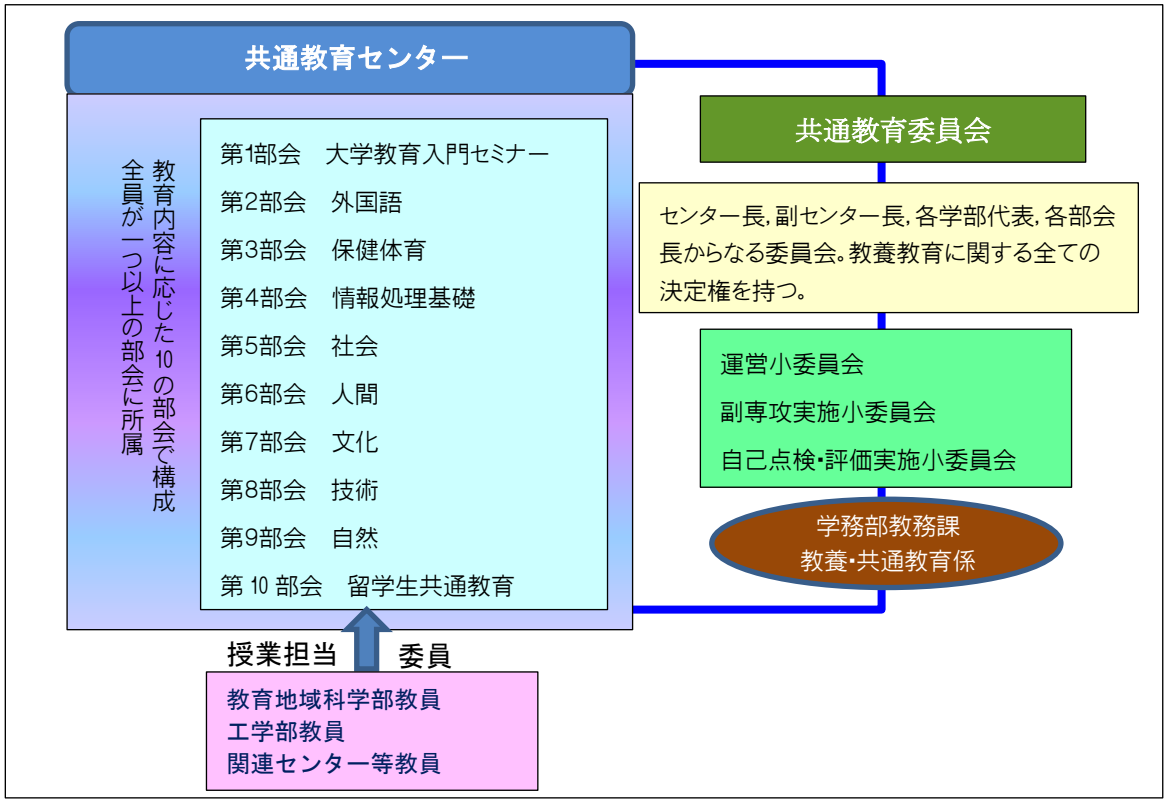
共通教育科目の体系



区　分		内　容	単位数	工学部教育の担当
大学教育入門セミナー		高校から大学への勉学方法の転換を助け，大学生活を健康かつ有意義に過ごすことのできるよう，自ら考え行動するためのヒントを与えると共に，大学生活の初期の段階で，所属する学科の教員による指導を受け，自らの専門分野を自覚し，また，より広い視野をもって大学での勉学ができるようになることを目的とする。	2	全体講義（前半６回）：工学研究科長講話，キャリアデザインなど。 後半９回：学科教員が担当
基礎教育科目	外国語科目	英語， 第二外国語（独仏中のうち 1）	8 4	
	保健体育科目	保健体育または体育を選択必修	2	
	情報処理基礎	情報処理に関する基礎的知識と技術を習得する。ネットワークに接続された PC を使い，メール，文書作成，描画，表計算などのアプリケーションソフトの利用を学ぶ。また，Web による受講登録・図書館蔵書検索・就職情報閲覧など学内外で必要な基礎技術の習得も目指す。	2	各学科の教員が担当
教養教育・副専攻科目		自分の専門にとらわれず，広く学問の知識や方法を身につける。 A 群（共通教育科目として開講）と B 群（専門科目を他学科学生に開放）があり，５つの分野を均等に履修する「均等履修」と一分野を集中して履修する「集中履修」を含め規定単位数を履修。	均等履修 ≥ 10 集中履修 ≥ 6 合計 ≥ 20	工学部教員が A 群の約２割，B 群の約８割を担当

（事務局資料）

資料 1-1-4　文京キャンパスの共通教育実施体制



（事務局資料）

資料 1-1-5　工学部教員の共通教育・副専攻科目担当状況（平成 27 年度）

所属		全教員数	A 群のみ	A 群＋B 群	B 群のみ	担当者計
機械工学科		18	2	3	6	11
電気・電子工学科		14	2	1	5	8
情報・メディア工学科		15	1	0	5	9
建築建設工学科		17	4	8	3	15
材料開発工学科		11	0	9	2	11
生物応用化学科		11	3	8	0	11
物理工学科		17	4	1	9	14
知能システム工学科		13	2	1	5	8
繊維先端工学専攻		9	4	5	0	9
原子力・エネルギー安全工学専攻		11	0	3	5	8
遠赤外領域開発研究センター		7	1	3	2	6
附属国際原子力工学研究所		9	0	1	8	9
産学官連携本部		3	2	0	1	3
アドミッションセンター		1	1	0	0	1
総合情報基盤センター		1	0	0	0	0
合計担当者数	工学部	136	22	39	40	104
	センター等	21	4	4	11	19
	合計	157	26	43	51	123
担当割合（%）	工学部		16.2	28.7	29.4	76.5
	センター等		19.0	19.0	52.4	90.5
	合計		16.6	27.4	32.5	78.3

＊オムニバス含む

（事務局資料）

資料 1-1-6　共通教育（副専攻科目）の工学部担当科目数

	A 群（共通教養・副専攻科目）	B 群（専門教育・副専攻科目）
工学部担当科目数	31	130
全科目数	160	155
工学部担当割合（%）	19.3	83.9

（事務局資料）

②　平成 22 年度から，工学部 JABEE 委員会と共通教育センターが協力して組織的に JABEE 受審に対応している（**資料 1-1-7**）。

資料 1-1-7　工学部の JABEE 受審への対応に係る申合せ

工学部の JABEE 受審への対応に係る申合せ

（平成 21 年４月１日制定）

福井大学工学部の各学科・専攻における JABEE 受審に対応するため，共通教育科目のエビデンス提出に関して，共通教育センターは以下のように取り扱うこととする。

１．対象とする科目

工学部の学生が受講した「A群（共通教養・副専攻科目）」「B群（物質工学分野，システム工学分野，原子力・エネルギー安全工学分野）の科目」「外国語科目」「保健体育科目」「情報処理基礎科目」とする。

２．必要エビデンス

(1)シラバス（共通教育科目シラバス集のコピー）
(2)教科書（表紙と目次のコピー）
(3)授業で配付した全ての資料
(4)期末試験の問題用紙
(5)期末試験の答案
(6)期末試験以外の中間試験・宿題・演習等の問題用紙・課題等一覧
(7)成績評価表（上記(5)(6)の成績一覧／様式自由）
(8)最終成績一覧（教務課の成績確認表コピー）
※　(5)(7)(8)については工学部受講生分のみで良いこととする。また，学生の個人名を伏せても良いこととする。
※　上記エビデンスについては工学部 JABEE 委員会がコピー後すぐに返却することとする。

３．事前手続き

工学部 JABEE 委員会は毎学期初めに，上記の対象科目を担当する全ての教員（非常勤を含む）に対して，依頼書・趣旨説明書・提出要領を個別に配布することとする。
その際，「問い合わせ先（JABEE 委員長の内線，メールアドレス）」を明記すること。
※　受審学科の個別の依頼に対しては共通教育センターとして対応しかねるため，必ず JABEE 委員会として一本化すること。

４．提出方法

当該授業担当教員は，上記のエビデンス一式を，各学期の成績提出後１ヶ月以内に工学部支援室（JABEE 委員会担当）に提出することとする。
※　工学部 JABEE 委員会は，提出されたエビデンス資料を科目ごとにファイルに綴じて保管し，個人情報の管理を厳格に行うこととする。
※　JABEE 受審に必要なその後の作業は，工学部 JABEE 委員会および受審学科・専攻が責任を持って行うこととする（共通教育センターは関与しない）。

附　則
この申合せは，平成 22 年４月１日から施行する。
附　則
この申合せは，平成 23 年４月１日から施行する。
附　則
この申合せは，平成 24 年４月１日から施行する。

（平成 27 年度共通教育センター規程集より抜粋）

③　平成 25 年度から，語学センターと連携して，英語の授業に習熟度別少人数クラスを導入し（**P6-14 後掲資料 1-1-14**），TOEIC スコアが大きく上昇するなど，成果があがった（**P6-133　後掲資料 2-1-7**）。

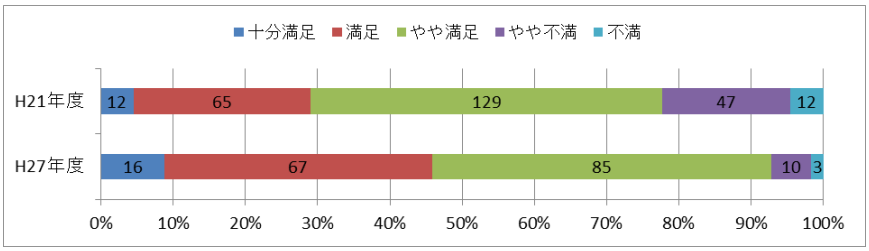
④　共通教育について学生の満足度は高く，かつ第 1 期より向上し，連携体制のもと実施している共通教育の質が向上した（**資料 1-1-8**）。

資料 1-1-8　共通教育に対する学生の満足度

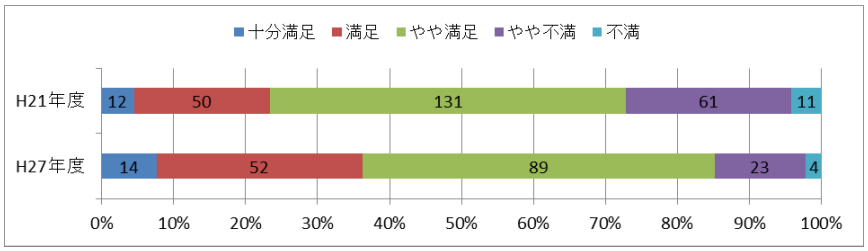
平成 21 年度と平成 27 年度に「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」を実施した。その結果から共通教育に対する卒業予定者の回答を抽出して以下に示す。「教養・共通教育の授業全般」，「教養・共通教育の語学系授業」，「幅広い教養を身につけられる教育」に対し，平成 27 年度には 85%～93%程度の回答者が「十分～やや満足」と答え，その割合は平成 21 年度より 1 割以上向上した。これは，工学部，共通教育センター，語学センターが連携して実施している共通教育の質が高くかつ第 1 期よりも質が向上したことの証左である。

※グラフ中の数値は回答者の人数である。

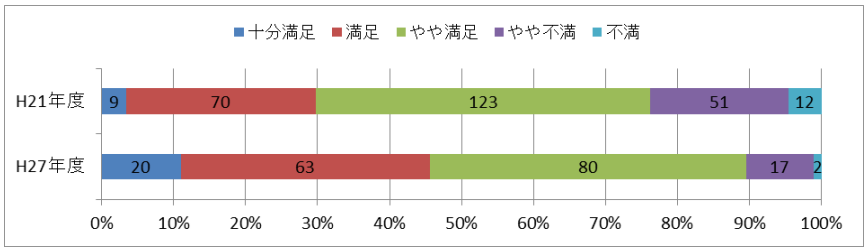
設問　教養・共通教育の授業全般について，あなたはどの程度満足していますか。
⇒“「十分～ある程度」満足”は平成 27 年度に 92.8%で，平成 21 年度より 15.1%増加。



設問　教養・共通教育の語学系授業について，あなたはどの程度満足していますか。
⇒“「十分～ある程度」満足”は平成 27 年度に 85.2%で，平成 21 年度より 12.3%増加。



設問　幅広い教養を身につけられる教育の提供について，あなたはどの程度満足していますか。
⇒“「十分～ある程度」満足”は平成 27 年度に 89.6%で，平成 21 年度より 13.3%増加。



（平成 21 年度および平成 27 年度「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」結果より抜粋）

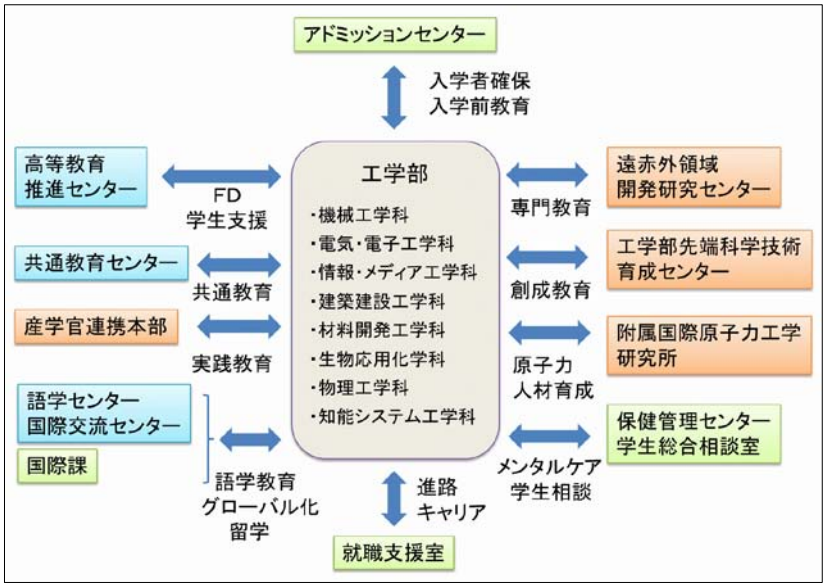
（事務局資料）

【組織体制】

①　教務学生連絡委員会が教育に係る委員会を統括している（P6-4 **前掲資料 1-1-1**）。学内のセンター等と，入学から卒業までの各段階で連携し，第２期には，グローバル人材育成や学生支援等について連携を強化した（**資料 1-1-9**）。

資料 1-1-9　学内のセンター等との連携

■　体制図



■　第２期に強化した連携の例

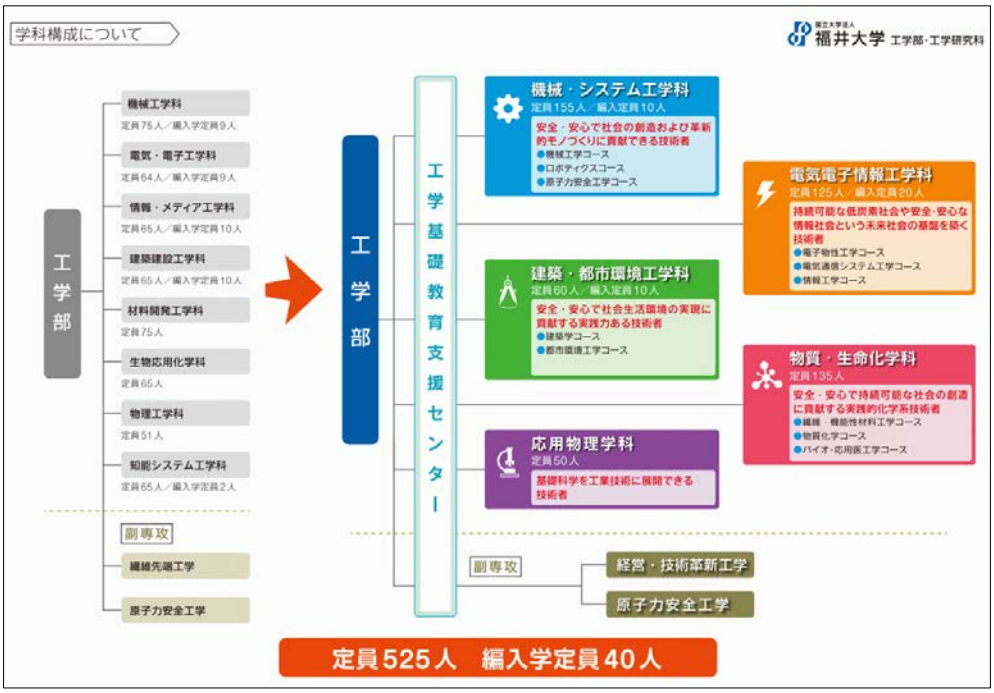
連携先	連携内容
語学センター （平成 23 年度設置）	平成 25 年度から工学部１年生を対象に，英語科目数を４科目から８科目（英語１～英語８）に倍増させ，授業時間を週１コマから２コマに増やし，１クラス約 20～25 名の習熟度別少人数教育にて講義を実施するなど語学教育を充実した。また，習熟度別クラス編成を行うため，平成 25 年度から，新入生を対象に，TOEIC および GSL（語彙テスト）を実施した。
国際課	平成 24 年度の「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」事業採択によって新設された各種の国際交流プログラム（海外研修，海外短期インターンシップなど）への工学部生の参加。
就職支援室	平成 26 年度からキャリアサポートシステムに全新入生が登録するよう工学部として組織的に協力。
学生総合相談室	工学部 FD 委員会と FD 研修会を共同企画（平成 26 年７月 11 日「学生支援の現状と課題」）。
教務課，学生サービス課，学生総合相談室，保健管理センター	平成 25 年度から，問題を抱えた学生（長期欠席や成績不振の学生）への支援体制を一新し，工学部，教務課，学生サービス課，学生総合相談室，保健管理センターが有機的に連携した組織的な取組を開始。
附属国際原子力工学研究所	東日本大震災以降の社会的状況の変化の中で原子力に係る学部教育を進めていくため，附属国際原子力工学研究所と様々な面で協力。例えば，工学部生が原子力・環境・エネルギー・技術者倫理などを体系的に学ぶための副専攻である「原子力・エネルギー安全工学コース」のカリキュラムを見直し，工学部の教員と同研究所の教員が共同で担当する「原子力安全・防災論」を新設（平成 26 年度）。副専攻の他の科目の多くも，同研究所との連携のもとで実施。平成 27 年度には，「原子力教育研究推進会議」を発足させ，教育と研究に渡る包括的な連携体制を強化。

（事務局資料）

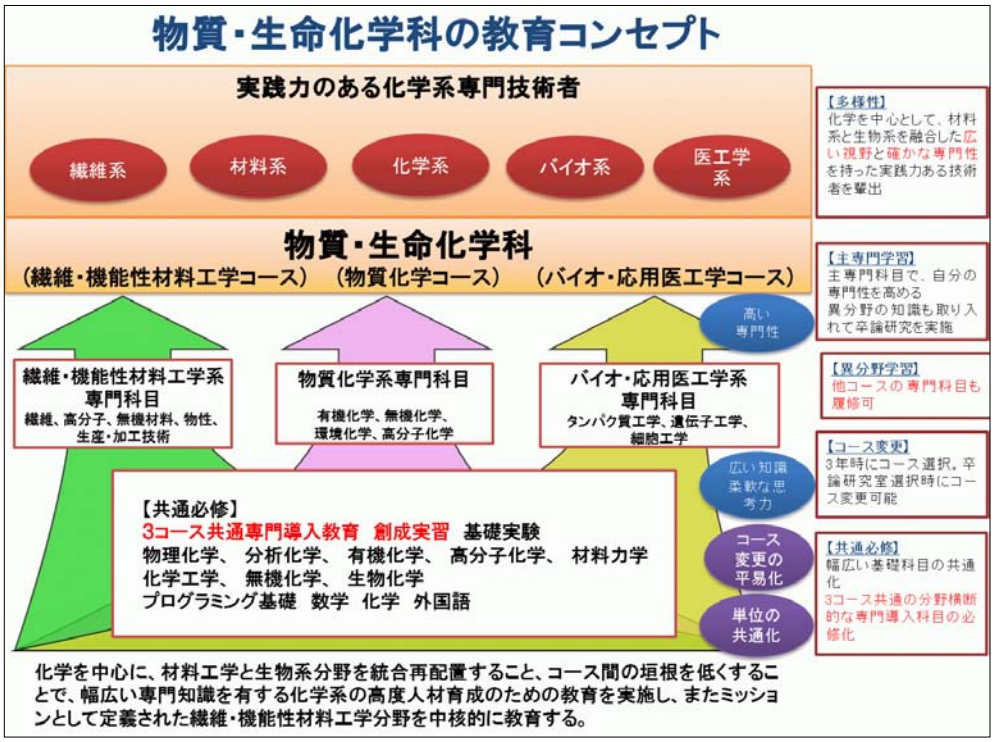
②　「将来計画検討ワーキング」を設置し，外部評価結果や社会ニーズ等を踏まえ，平成28年度の工学部改組（８学科から５学科へ）が決定され，認可された（**資料 1-1-10, 11**）。

資料 1-1-10　平成 28 年度工学部改組

■　学科構成



■　late specialization の考えを取り入れたコース制（全学科で導入。図は物質・生命化学科の例）



（事務局資料）

資料 1-1-11　「将来計画検討ワーキング」（平成 25 年度設置）の議事メモ（抜粋）

第 13 回将来計画検討 WG 議事メモ

日　時　　平成 26 年 12 月３日（水）１８：１０～２１：１５
場　所　　工学部多目的会議室
出席者　　永井座長，森眞，菊地，徳永，熊倉，浪花，久田，桑水流の各委員
　　小野田研究科長，葛生，松下，岩井，小嶋，福井，明石，米沢の拡大執行部メンバー
欠席者　　廣瀬，沖の各委員，末拡大執行部メンバー

１．工学部改組にかかる文科省事前相談の報告

小野田研究科長から，別紙資料に基づき，12 月 1 日の工学部改組に関する文科省との事前相談について説明があり，基本的な構想は了承されたとの報告があった。

ただ，文科省との意見交換の中で３点（資料：文科省との意見交換記録内の赤字部分）について宿題がでたため，まずは早急にカリキュラムを作成し，年内に文科省に回答する必要があるとの付言があった。

○電気電子・情報工学の・（中ポツ）が必要かどうかは検討させてほしい。（E，I）
○コンセプトは了承されたが，中身が伴っていない（定員の割り振り，入口出口の問題，人材育成のためのカリキュラム等）。今後教員が減っていく厳しい時代の中で，新しい体制のしくみを作る理由を全員で理解した上で考える必要がある。（執行部）

２．各学科のカリキュラム作成について

小野田研究科長から，カリキュラムについては，まずは物質・生命化学コースのフローを参考に各学科のカリキュラムフローを作成の上，12 月 12 日（金）までに工学部支援室宛に送付願いたいとの依頼があった。

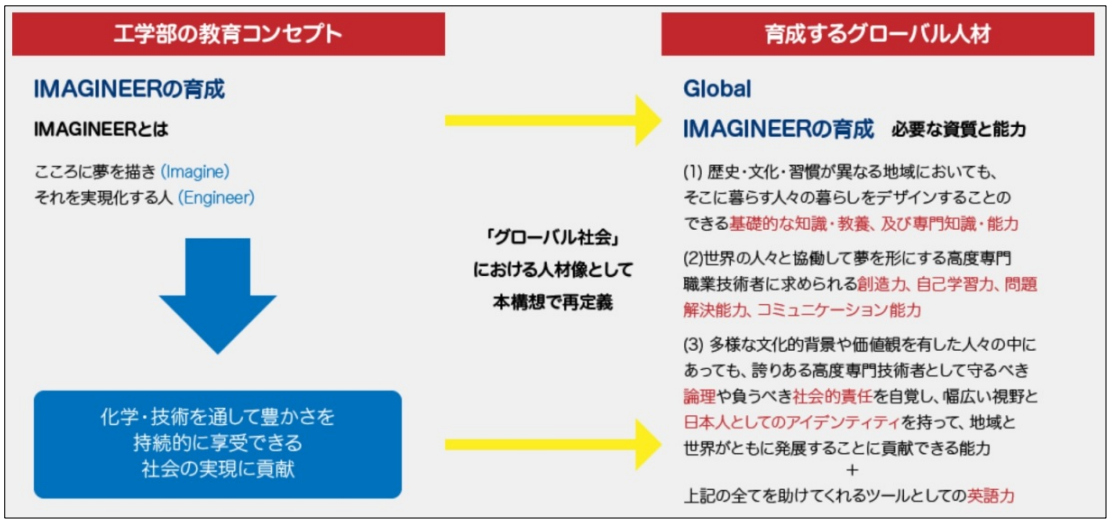
なお，カリキュラムはできるだけ文科省への説明資料に沿ったものにしていただき，併せて，改組後は教育内容がどのように変わるのかを文章で説明してもらいたいとの依頼があった。

（事務局資料）

【国際性】

① 工学部の育成人材像を Global IMAGINEER として再定義し，内外に周知した（**資料 1-1-12**）。

資料 1-1-12　工学部で育成するグローバル人材像 Global IMAGINEER



（福井大学ウェブサイトより抜粋）

② 工学部を取組の中心部局として，平成 24 年度「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」事業（以下「GGJ 事業」という。）に東海・北陸地区の国立大学で唯一採択され（**資料 1-1-13**），英語教育を充実させるとともに単位化された海外派遣プログラムを多数実施し（**資料 1-1-14, 15**），TOEIC スコアの上昇，多数の学生の海外派遣，派遣学生のコンピテンシー向上など，グローバル人材育成の成果があがった（**P6-133 後掲資料 2-1-7**，**P6-134 後掲資料 2-1-8**）。

資料 1-1-13　「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」事業への採択



（http://www.u-fukui.ac.jp/wp-content/uploads/kousou_ja.pd）

（事務局資料）

資料 1-1-14　工学部の英語教育

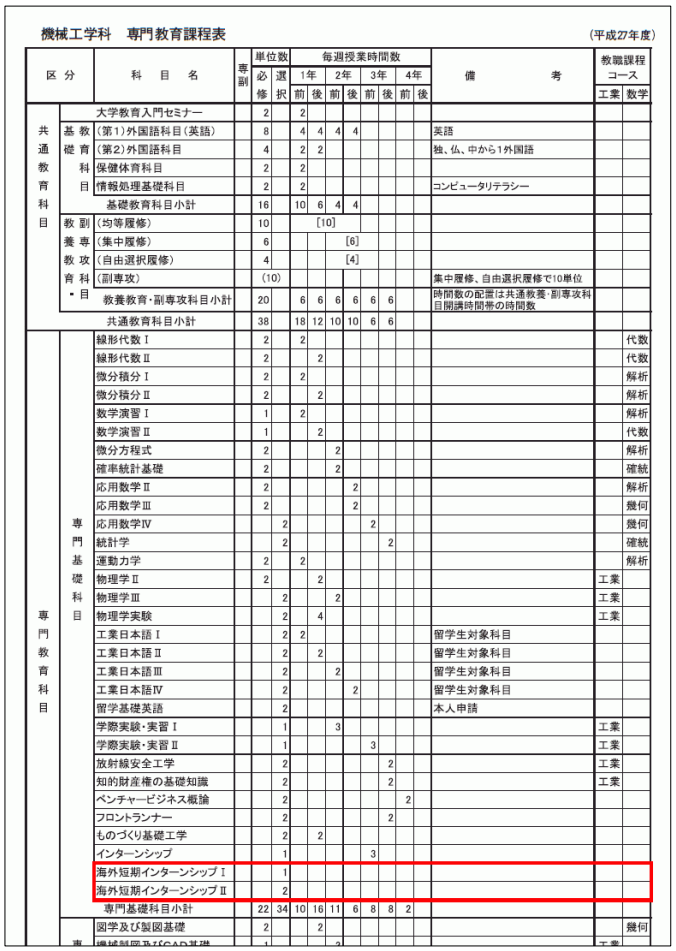
共通教育	GGJ 事業により，語学センターとの連携のもと，平成 25 年度から工学部１年生を対象に，英語科目数を４科目から８科目（英語１～英語８）に倍増，授業時間を週１コマから２コマに増やし，１クラス約 20 名～25 名の習熟度別少人数教育にて講義を実施するなど語学教育を充実した（工学部の取組を踏まえ，平成 26 年度からは全学部で英語教育を週２コマとした）。英語１～８の授業は習熟度別クラス編成で行う。英語１～４ではリスニングとスピーキングを中心としたコミュニカティブな授業を行い，英語５～８ではリスニングとスピーキングも行うものの，焦点はリーディングとライティングに移し，適宜 ESP も導入する。クラスワークだけでなく，授業外で行う e-learning 学習又は多読も取り入れる。			
専門教育	機械工学科	機械英語	２年次	必修
		機械技術英語特別講義	４年次	選択
	電気・電子工学科	技術英語	２年次	必修
	情報・メディア工学科	情報技術英語	３年次	必修
	材料開発工学科	技術英語演習	４年次	必修
		科学技術英語特別講義	４年次	選択
	生物応用化学科	科学技術英語演習	３年次	選択
		科学技術英語特別演習	４年次	選択
	物理工学科	科学技術英語	３年次	必修
	知能システム工学科	科学英語基礎	３年次	選択
	全学科	留学基礎英語	全学年	選択

（事務局資料）

資料 1-1-15　海外短期インターンシップ

■　概要

平成 24 年度に海外短期インターンシップに係る自由科目を開講，翌年度には規模を拡大して選択科目として工学部の全学科で６科目（「海外短期インターンシップⅠ～Ⅵ」）を開講した。平成 27 年度から科目を整理して海外短期インターンシップⅠ（１単位）とⅡ（２単位）を重複履修可能な科目として開講している。海外派遣プログラムの単位認定は海外短期インターンシップとして行う。



機械工学科　専門教育課程表　（平成27年度）

区分		科目名	専副	単位数 必修	単位数 選択	毎週授業時間数 1年 前	1年 後	2年 前	2年 後	3年 前	3年 後	4年 前	4年 後	備考	教職課程コース 工業	教職課程コース 数学
共通教育科目	基礎教育科目	大学教育入門セミナー		2		2										
		(第1)外国語科目(英語)		8		4	4	4	4					英語		
		(第2)外国語科目		4		2	2							独、仏、中から1外国語		
		保健体育科目		2		2										
		情報処理基礎科目		2		2								コンピュータリテラシー		
		基礎教育科目小計		16		10	6	4	4							
	教養教育	(均等履修)		10				[10]								
	副専攻・専攻科目	(集中履修)		6					[6]							
		(自由選択履修)		4					[4]							
		(副専攻)		(10)										集中履修、自由選択履修で10単位		
		教養教育・副専攻科目小計		20		6	6	6	6	6	6			時間数の配置は共通教養・副専攻科目開講時間帯の時間数		
		共通教育科目小計		38		18	12	10	10	6	6					
専門教育科目	専門基礎科目	線形代数Ⅰ		2		2										代数
		線形代数Ⅱ		2			2									代数
		微分積分Ⅰ		2		2										解析
		微分積分Ⅱ		2			2									解析
		数学演習Ⅰ		1		2										解析
		数学演習Ⅱ		1			2									代数
		微分方程式		2				2								解析
		確率統計基礎		2				2								確統
		応用数学Ⅱ		2					2							解析
		応用数学Ⅲ		2					2							幾何
		応用数学Ⅳ			2					2						幾何
		統計学			2						2					確統
		運動力学		2		2										解析
		物理学Ⅱ		2			2								工業	
		物理学Ⅲ			2			2							工業	
		物理学実験			2		4								工業	
		工業日本語Ⅰ			2	2								留学生対象科目		
		工業日本語Ⅱ			2		2							留学生対象科目		
		工業日本語Ⅲ			2			2						留学生対象科目		
		工業日本語Ⅳ			2				2					留学生対象科目		
		留学基礎英語			2									本人申請		
		学際実験・実習Ⅰ			1			3							工業	
		学際実験・実習Ⅱ			1					3					工業	
		放射線安全工学			2						2				工業	
		知的財産権の基礎知識			2						2				工業	
		ベンチャービジネス概論			2							2				
		フロントランナー			2						2					
		ものづくり基礎工学			2		2									
		インターンシップ			1					3						
		海外短期インターンシップⅠ			1											
		海外短期インターンシップⅡ			2											
		専門基礎科目小計		22	34	10	16	11	6	8	8	2				
		図学及び製図基礎		2			2									幾何

（学生便覧 2015 より抜粋）

■　語学センターとの連携

海外派遣プログラムへの参加を希望する学生に，授業外の英語のコースとして，国際英語コミュニケーションプログラム（平成 23 年度以前 留学準備コース）を，工学部・工学研究科と語学センターが連携して設け，留学に向けた語学面のサポートを行った（**P6-102 後掲資料 1-2-20**）。

■　海外短期インターンシップ単位修得者数

科目名	単位数	取扱い	単位修得者数（人） 平成24年度 前期	平成24年度 後期	平成25年度 前期	平成25年度 後期	平成26年度 前期	平成26年度 後期	平成27年度 前期	平成27年度 後期
海外短期インターンシップ i	1	自由科目		86						
海外短期インターンシップ ii	2			2						
海外短期インターンシップⅠ～Ⅳ	1	専門教育科目			41	3	16	6	6	0
海外短期インターンシップⅤ～Ⅵ	2				24	17	37	34	47	28
海外短期インターンシップⅠ	1								0	0
海外短期インターンシップⅡ	2								0	4

■　海外短期インターンシップ参加者の声（平成 27 年度）

所属・学年 派遣先 派遣期間・プログラム類型	参加学生の声
機械工学科・４年 トゥンク・アブドゥル・ラーマン大学（マレーシア） 7/15～8/2　　研究・発表型	グローバルな視点で社会に貢献することの重要さを感じた。クアラルンプールの景観を見て，急速に開発やインフラの整備が進んでいることを感じた。しかしそれと同時に，環境に対する配慮はあまりなされていないとも感じた。将来技術者になったときに，環境と調和した開発や製品を作ることが重要であると実感した。
機械工学科・４年 トゥンク・アブドゥル・ラーマン大学（マレーシア） 7/15～8/2　　専門分野型	自分の持っている専門的な知識がまだまだ少ないことが分かった。いっそう大学院に進学したい気持ちが強くなった。大学院では英語の勉強にも力を入れていきたいと思う。広い知識を持つことで自分の研究に活かせることができるので，進学後もいろんな分野に興味を持って勉強していく必要があると感じた。
生物応用化学科・４年 国立成功大学（台湾） 9/6～9/20　　研究・発表型	一番の目標である研究に関する知識・能力は向上については isCPT の参加および交換留学先の大学で教授の授業を受けたり学生から研究内容について教えてもらったり実験したりすることにより達成することができた。今回の留学は英語のコミュニケーションをとるためのよいきっかけになった。不格好ではあるが，留学前よりは英語で会話できるようになったし，しようという気持ちが高まった。
知能システム工学科・４年 上海理工大学（中国） 3/6～3/19　　専門分野型	とても有意義な２週間を過ごすことができた。留学は初めての経験であったが，様々な人との交流，授業，企業見学などを通して，様々な知識を吸収することが出来，また新しい考え方，広い視野を身に付けることができた。この経験を今後の人生に生かしていきたいと思う。
知能システム工学科・４年 上海理工大学（中国） 3/6～3/19　　専門分野型	四つのことを経験できた。一つ目は語学。二つ目は文化。三つ目は工学知識理解。四つ目は海外企業思考の構築。普段日本にいるだけでは聞くことの出来ないような話を聞くことができ，自身の海外企業就労に関する考えを再構築させられた。単純にひとつの目的を達成するためだけの内容ではなく，参加者がそれぞれの感性から多様な経験を得ることが出来た短期留学だったと感じている。
生物応用化学科・２年 ポートランド州立大学（アメリカ） 8/20～9/13　　語学研修型	初めての海外で，今まで実際に会話に使ったことのなかった英語を用いて様々な人と接することで，コミュニケーション能力を磨くことが出来たかなと思います。全然なじみのない環境で生活をして，環境に適応する能力や，困ったとき自分で解決する能力などを試すこともできたと思います。日本にいるときは知ることが出来なかったアメリカの文化や生活習慣に触れ，実際に体験して日本との違いを感じ，自分の価値観や変わったし，世界も広がりました。
機械工学科・1 年 サザンクロス大学（オーストラリア） 8/15～9/13　　語学研修型	同じクラスにインドネシア人がいたため，英語で会話していくうちにとても仲良くなることが出来た。他大学の生徒との交流もあり，日本では決してできないような体験が出来た。今まで人と話すことは得意ではなかったが，このプログラムで積極的に話すことができ，自信を持つことが出来た。

■　海外派遣学生への経済的支援

海外派遣学生のうち，成績が一定の要件を満たした者（家計状況などの要件も満たす必要がある）には，JASSO 奨学金や福井大学学生海外派遣支援金が支給される。JASSO 奨学金の成績要件は GPA が 2.3 以上，福井大学学生海外派遣支援金の成績要件は GPA が 2.0 以上である。工学部生に対する支給状況は以下の通りであり，派遣学生の大部分はいずれかの支援を受けている。これら奨学金を受給しないで海外派遣プログラムに参加した学生の割合は１割程度であることから，奨学金へのニーズは高く，海外派遣に不可欠な支援となっていることがわかる。

（人）

	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
海外派遣学生数	38	105	106	116	107
JASSO 奨学金受給者数	32	85 (27 名は支援金も受給)	33	41	59
福井大学学生海外派遣支援金受給者数	0	38	60	60	39

（事務局資料）

③　学科単位の国際交流を継続・新設した（**資料 1-1-16**）。

資料 1-1-16　学科の国際交流活動

国際交流事業等	概　要
日中韓三大学交流機械・エネルギー工学シンポジウム（ISAMPE）	福井大学が国際学術交流協定を結んでいる中国上海理工大学および韓国釜慶大学との共催で平成 13 年から毎年開催（開催地輪番）。福井大学では工学部機械工学科・工学研究科機械工学専攻が中心となり，学部生・大学院生が参加。平成 25 年の福井大学開催時には，ISAMPE に加え，JASSO の奨学金を得て International Collaboration Seminar を同時開催し，中国・韓国の学生 20 名が来学して各研究室に配属され，研究や実習を通して学生間の交流を計る共学セミナーを実施。日中韓三大学の学生各１名で１グループを構成し，小型エンジンの分解組立のコンテストとして３カ国の学生が共同で作業を考案・競争するイベントも開催した。 **＜機械工学科からの参加者数＞** 平成 25 年（福井開催）　６名 平成 26 年（釜山開催）　１名 （平成 27 年は大学院生のみの参加） **＜学生の声＞** ・英語での研究発表は不安であったが，経験して良かった。 ・ますます英語を勉強しなければいけない，と感じた。 ・中国や韓国の学生達の positive な態勢に刺激を受けて，研究への取り組み方が変わった。 ・中国や韓国の学生や教員と交流し，ものの考え方（文化）の違いを感じ取ることができた。 **＜特筆すべき学生＞** 平成 26 年（釜山開催）に唯一学部生で参加した学生は，ISAMPE で優秀講演発表賞を受賞。それを契機に博士前期課程１年の途中から約１年間海外に留学。  平成 25 年度福井大学で開催した ISAMPE2013
シーナカリンウィロート大学（SWU）との双方向インターンシッププログラムによる学生交流事業	第２期中に始まった画像処理プロジェクト課題遂行を含むインターンシッププログラム。福井大学側の実施主体は工学部情報・メディア工学科。平成 25 年５月に SWU から４名の学部生を受け入れ，平成 27 年には６月に SWU 工学部との間で学術交流協定を締結した上で９月に４名の学生（うち２名は学部生）を派遣。平成 28 年６～７月頃に再び SWU から４名の学生を受け入れることが決定しており，交流が定着しつつある。



平成 27 年 9 月　シーナカリンウィロート大学での交流

（事務局資料）

④　語学センターの教員と工学部教員が協働して英語 PBL を実施し（P6-88 **後掲資料 1-2-12**），学修成果があがった。

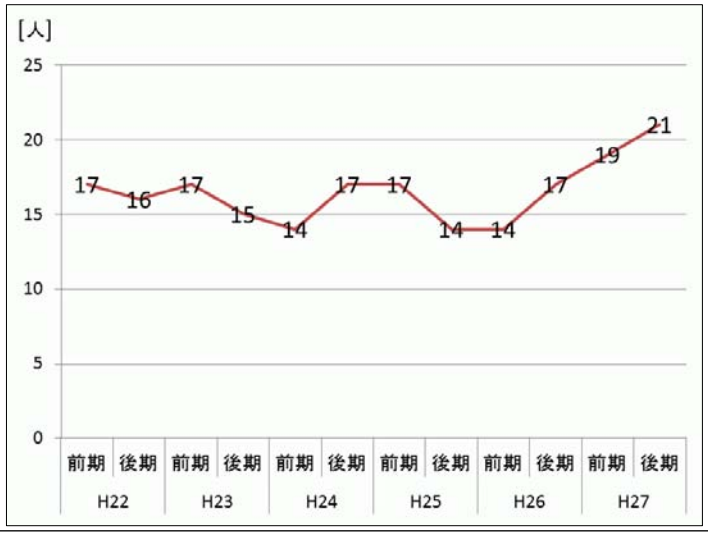
⑤　受入方法の改善により，海外からの交換留学生の数が近年増加した（**資料 1-1-17**）。海外との協定等に基づく留学生の受入れも行った（**資料 1-1-18**）。

資料 1-1-17　工学部が受入れた交換留学生数の推移

従来，交換留学生の受入れは，基本的に学生交流覚書に基づき授業料不徴収で枠数までの人数を受け入れてきたが，それ以上に学生が希望する場合は，授業料を納入することで受入が可能であることを平成 26 年 4 月受入の募集要項から明記したところ，枠数を超える学生を派遣する協定校が増加した。

さらに，本学に留学した際の情報を充実させたこと，受入手続き等の透明性と簡素化を行ったこと等から，本学の受入体制への信頼が高まり短期留学生の増加に繋がった。

工学部が受け入れた交換留学生の数



（事務局資料）

資料 1-1-18　海外との協定や事業に基づく留学生（学部生）の受入れ

協定	受入実績	事業	受入実績
マラ教育財団（マレーシア）と日本国際教育大学連合とのツイニングプログラム（MJHEP）	平成 26 年度 ４人（正規生） 平成 27 年度 ２人（正規生）	さくらサイエンスプラン	平成 26 年度 10 名（短期間の受入れ）

（事務局資料）

⑥　留学生の送出しや受入れは，国際交流センター（平成 25 年度設置）や国際課との連携体制を整備して実施し，支援に対し学生から好評を得ている（**資料 1-1-19**）。

資料 1-1-19　国際交流センターや国際課と連携した支援体制

国際交流センターは，日本語・日本事情等に関する授業の実施や教材開発・研究活動，外国人留学生の相談・指導，地域交流活動，留学生同窓会活動の推進，本学学生の海外留学支援等を行っている。

国際課は，同センターの理念のもと，本学学生の海外派遣及び留学生受入れに関する事務全般，並びにそれに伴う学生・教職員への支援を行っている。

■　外国人留学生受入支援の例

支援項目（事業）等	支　援　内　容　等
渡日前の情報提供の充実	・HPに渡日に必要な情報や，提出の必要な書類とその記入要領を掲載し，自国で確認・作成できる体制を整備した。これにより，時間の短縮と書類の記入ミスを防げる。 ・本学のアカデミックカレンダー，各種プログラム，交換留学制度，教務システム，評価制度，単位制度，宿舎，コストなどをまとめたファクトシートを作成し情報の一元化を進めると同時に，紙媒体での送付や，ウェブ掲載を通じて，学術交流協定校担当者や留学生と最新の情報を共有できる体制を整備した。
生活・安全に関するガイダンス及び生活ガイドブック類の配布	・渡日後のオリエンテーション時に，住民登録等行政手続きの一括代理申請の他，生活に関するガイダンス，および警察による安全に関するガイダンスを実施し，説明資料，生活ガイドブック，災害・緊急時ハンドブックを配布し，生活情報を提供している。
留学生の相談・事故・事件等対応チームの設置（随時）	・留学生に関する事故・問題が発生した際は，国際交流センター専任教員，国際課職員で随時迅速な対応を行っている。
チューター手引き等の配布	・チューター学生には，マニュアルを事前に配布し，チューターのオリエンテーションを開いて，説明を実施している。 ・チューター学生には，新入留学生オリエンテーションにもできるだけ同席させ，役割等を説明して留学生へのサポートを積極的に促している。 ＜留学生に対するチューター配置状況（平成27年度）＞ ：留学生（正規生・非正規生合計）64名 ：チューター（延べ）23名
国民健康保険料の一部補助	・福井県留学生交流推進協議会が，県内の高等教育機関に在籍する留学生に対し，国民健康保険料を一部補助する情報を周知し，該当者に対し，本人からの申請により保険料の一部を助成している。
民間奨学金対策	・民間奨学金の募集要項等に基づき，小論文や面接試験に対する傾向と対策を検討し，留学生へのアドバイスを実施している。また，礼状の作成等についても指導を実施している。
外国人留学生支援会活動	・福井大学外国人留学生支援会（平成18年度発足）では，教職員等の寄附金による支援金総額約300万円から，留学生の不慮の怪我・疾病，不測の事態に対する支援を行っている。 ・外国人留学生支援会では留学生のアパート入居の際の連帯保証人を行っており，対象となるほとんどの留学生が利用している。

留学生会館・国際交流会館	・宿舎の提供 留学生会館　　29戸（単身用25戸，世帯用４戸） 国際交流会館　16戸（単身用10戸，世帯用６戸）
国際交流学生宿舎	・宿舎の提供 日本人学生との混住方式により，平成27年度は35人の留学生が入居。留学生の便を図って，第１期中期目標期間末より留学生用の部屋数を増やしている。

■　海外派遣支援に対する学生の声（抜粋）

・グローバルコンピテンシーなどで自分のやりたいことをしっかりと確かめることができた。
・（オリエンテーションにより）ただただ，留学に行った経験で終わらせるだけでなく，行く意味や得るべきものなどを考えるきっかけになりよかった。
・留学に関してこまめにメールがきたのでとても親切だった。
・帰国後もオリエンテーションを開いてくれて，これからの成長を意識することができた。
・丁寧に説明してくださり，可能な限り安全に留学できるようにサポートしてくださった。
・留学中もメールなどでサポートしてくれた。
・“留学のしおり”に有効な情報がたくさんあったのでよかった。
・非常に柔軟な対応で忙しい生活の中でも助かった。
・事前に情報をたくさん得ることができたのでよかった。

（事務局資料）

【外部組織との連携】

①　福井県経営者協会と連携してインターンシップを実施し，県内への就職意識が高まるなど，連携の成果があがった（**資料 1-1-20**）。

日本化学繊維協会と連携して寄附講義「テキスタイル工学」を実施し，地域の主要産業である繊維産業への関心が高まるなど，連携の成果が上がった（**資料 1-1-21**）。

新たな連携として単位互換等を開始した（**資料 1-1-22**）。

資料 1-1-20　インターンシップ実施状況

■　インターンシップ修了者数

部局等	平成22年度	平成23年度	平成24年度		平成25年度		平成26年度		平成27年度	
			（長期）	（一般）	（長期）	（一般）	（長期）	（一般）	（長期）	（一般）
工学部	65	87	7	40	3	38	10	37	12	51

（福井県経営者協会を通してのインターンシップ参加状況）

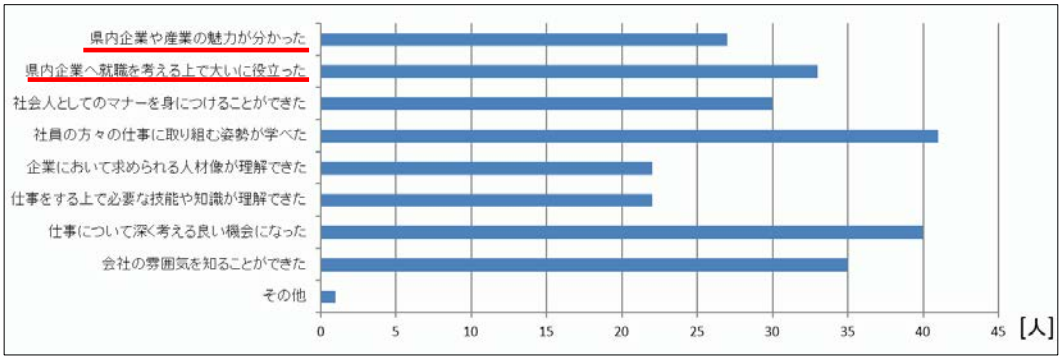
＜県外＞

部局等	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度
工学部	7	6	2	15	27	20

※平成 24 年度を境に修了生が減った理由は，派遣先企業等からの意見聴取結果に基づき，平成 24 年度から，志望理由書の提出，インターンシップに係る企業情報のホームページでの周知等によって学生に対してインターンシップの参加目的を認識させ，明確な目的意識を有した意欲的な学生に絞って実施したためである。なお，大学で事前・事後研修を実施している。

■　インターンシップに参加した学生の声

（1）分かったこと・学べたこと



（2）自由記述（抜粋）

・インターンシップで私に起きた一番大きな変化は，地元に就職したいという思いがすごく高まったことである。以前は地元企業に魅力はほとんど感じることはなかったが，インターンシップを通じて地域密着型の業務を見学し，働いている人ひとりひとりの地元に対する思いを聞いているうちに，なかなか地元も悪くないなと思うようになった。いつも不便だと思う地元であるが，地元をよりよくするためにも，私も地元に残って町おこしをするのも楽しいのではないかと思う。

・大学で C 言語でのみプログラムを書いたことがあるが，他の言語でもプログラムの構成や考え方を応用できることがわかった。普段学んでいることが業界で活かされていることがわかったので，安心して残りの学期の勉学に励んでいきたい。元々プログラミングの作業は好きではなかったが，システム開発の体験はとても楽しかったので，就職活動では IT 業界も視野に入れていきたい。

・疑問を疑問のままにしない事の大切さを学んだ。社員の方から染色や加工について教えてもらう中で，自分は今まで浅い部分でしか理解できていないのにわかったつもりになっていた部分があることを痛感した。始めは恥ずかしくて聞くことができなかったことも質問すると非常に親切に丁寧に教えてもらい理解することができた。今後の大学での研究や就職活動でも，一時の恥を恐れることなく疑問点を解決するために質問したり調べたりしたい。

・自分の学生生活を考え直す機会ができた。現在の私は，与えられた課題をするといった受け身の姿勢である。与えられたことをするのではなく，今自分に必要なことを考え自分から行動することが大事なのだと思う。まずは，授業を聞く姿勢を工夫していこうと思う。

・研究するとはどのようなものか少しわかった。研究は常にうまく行くものではなく，失敗もたくさんあると思うが，今回体験したように，様々な試料を変えて試し成功するよう粘り強く研究をしていきたいと思う。

・（インターンシップ先に）ABC という標語があった。これは「当たり前のことを，馬鹿にせず，ちゃんとやる」の頭文字であり，人間当たり前のことは次第におろそかになっていくため，ABC をしっかり守るのは意外に難しく，ABC さえできていればほとんど文句のつけようがないのだろうなと感じた。実際私は ABC ができていない。社会人として第一歩を踏み出す準備期間の今だからこそ，学生の当たり前である勉学，課題，遊びを，スケジュール管理を含めてしっかりやっていこうと改めて思った。

・自分はまだまだ学生気分で働く準備ができていないことを痛感した。礼儀やマナー，常識などを自分が余りにも知らな過ぎることに気付くことができて大変勉強になった。社会人になるまでにしっかりと礼儀などを身に付けていきたい。

・企業では朝，必ず服装直しやヘルメットの着用を義務付けていた。ここまでする必要があるのかと思っていたが，回転する機械に小さな突起があり，その突起に布が巻き込まれると人間の力では戻ってくることはできず死亡事故につながることや，たった 300 グラムのスパナが３メートル上から落ちてきただけで頭蓋骨が陥没するということを安全講習で知り，考えが改まった。設計業に就くことができたら，工場で作業する人をリスペクトし，常にリスクを背負って仕事をしているということを忘れないことが大切であると感じ，学生生活では物事の確認を怠らず細部に気を配れる人間になりたいと思った。

（平成 27 年度「福井県インターンシップ」研修活動報告書より抜粋）

（事務局資料）

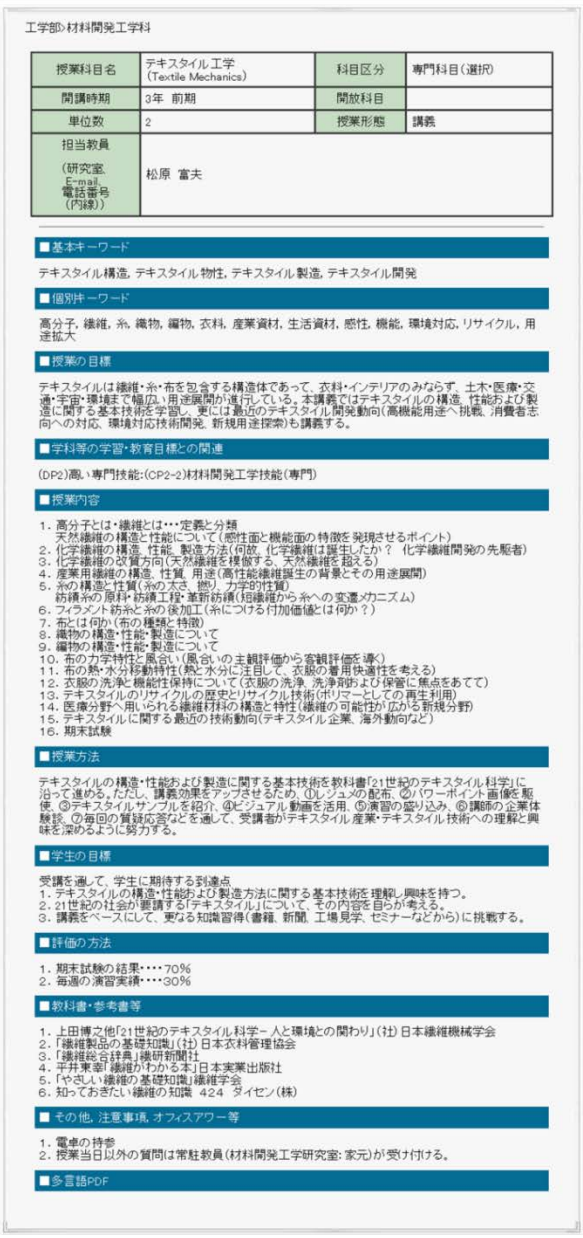
資料 1-1-21　日本化学繊維協会による寄附講義「テキスタイル工学」

■　概要

「テキスタイル工学」は日本化学繊維協会から寄附を頂いて平成 19 年度より始まり，３年前期に材料開発工学科，生物応用化学科で開講している選択の専門科目である。

講師は，日本繊維技術士センターの松原富夫氏（元帝人）であり，講師手当，旅費，資料の印刷代は日本化学繊維協会からの奨学寄附金を充てている。

この寄附講義は開設期間が３年であり，３年目に継続開設願いを出すことにより，平成 22 年度から３年間，平成 25 年度から３年間，継続開設が認められ，現在に至っている。平成 28 年度からさらに３年間の継続開設も認められており，平成 30 年度からは新学科（物質・生命化学科）の科目として，名称も「テキスタイルサイエンス」と変えて実施することにしている。



工学部>材料開発工学科

授業科目名	テキスタイル工学 (Textile Mechanics)	科目区分	専門科目(選択)
開講時期	3年 前期	開放科目	
単位数	2	授業形態	講義
担当教員 (研究室, E-mail, 電話番号 (内線))	松原 富夫		

■基本キーワード

テキスタイル構造, テキスタイル物性, テキスタイル製造, テキスタイル開発

■個別キーワード

高分子, 繊維, 糸, 織物, 編物, 衣料, 産業資材, 生活資材, 感性, 機能, 環境対応, リサイクル, 用途拡大

■授業の目標

テキスタイルは繊維・糸・布を包含する構造体であって、衣料・インテリアのみならず、土木・医療・交通・宇宙・環境まで幅広い用途展開が進行している。本講義ではテキスタイルの構造、性能および製造に関する基本技術を学習し、更には最近のテキスタイル開発動向(高機能用途へ挑戦、消費者志向への対応、環境対応技術開発、新規用途探索)も講義する。

■学科等の学習・教育目標との関連

(DP2)高い専門技能:(CP2-2)材料開発工学技能(専門)

■授業内容

1. 高分子とは・繊維とは…定義と分類
天然繊維の構造と性能について(感性面と機能面の特徴を発現させるポイント)
2. 化学繊維の構造、性能、製造方法(何故、化学繊維は誕生したか？ 化学繊維開発の先駆者)
3. 化学繊維の改質方向(天然繊維を模倣する、天然繊維を超える)
4. 産業用繊維の構造、性質、用途(高性能繊維誕生の背景とその用途展開)
5. 糸の構造と性質(糸の太さ、撚り、力学的性質)
紡績糸の原料・紡績工程・革新紡績(短繊維から糸への変遷メカニズム)
6. フィラメント紡糸と糸の後加工(糸につける付加価値とは何か？)
7. 布とは何か(布の種類と特徴)
8. 織物の構造・性能・製造について
9. 編物の構造・性能・製造について
10. 布の力学特性と風合い(風合いの主観評価から客観評価を導く)
11. 布の熱・水分移動特性(熱と水分に注目して、衣服の着用快適性を考える)
12. 衣服の洗浄と機能性保持について(衣服の洗浄、洗浄前および保管に焦点をあてて)
13. テキスタイルのリサイクルの歴史とリサイクル技術(ポリマーとしての再生利用)
14. 医療分野へ用いられる繊維材料の構造と特性(繊維の可能性が広がる新規分野)
15. テキスタイルに関する最近の技術動向(テキスタイル企業、海外動向など)
16. 期末試験

■授業方法

テキスタイルの構造・性能および製造に関する基本技術を教科書「21世紀のテキスタイル科学」に沿って進める。ただし、講義効果をアップさせるため、①レジュメの配布、②パワーポイント画像を駆使、③テキスタイルサンプルを紹介、④ビジュアル動画を活用、⑤演習の盛り込み、⑥講師の企業体験談、⑦毎回の質疑応答などを通して、受講者がテキスタイル産業・テキスタイル技術への理解と興味を深めるように努力する。

■学生の目標

受講を通して、学生に期待する到達点
1. テキスタイルの構造・性能および製造方法に関する基本技術を理解し興味を持つ。
2. 21世紀の社会が要請する「テキスタイル」について、その内容を自らが考える。
3. 講義をベースにして、更なる知識習得(書籍、新聞、工場見学、セミナーなどから)に挑戦する。

■評価の方法

1. 期末試験の結果・・・・70%
2. 毎週の演習実績・・・・30%

■教科書・参考書等

1. 上田博之他「21世紀のテキスタイル科学－人と環境との関わり」(社)日本繊維機械学会
2. 「繊維製品の基礎知識」(社)日本衣料管理協会
3. 「繊維総合辞典」繊研新聞社
4. 平井東幸「繊維がわかる本」日本実業出版社
5. 「やさしい繊維の基礎知識」繊維学会
6. 知っておきたい繊維の知識 424 ダイセン(株)

■ その他, 注意事項, オフィスアワー等

1. 電卓の持参
2. 授業当日以外の質問は常駐教員(材料開発工学研究室: 家元)が受け付ける。

■多言語PDF

■　学生の声（抜粋）

今までテキスタイルに全く興味が無かったのですが，講義の中でテキスタイルの開発・発展の歴史を知り，発明者の経験・理論が知れて良かった！
受講するまでは繊維に関心が無かったが，講義を受けて興味を持てるようになった。
繊維産業が直面している課題（環境・資源など）が知れ，私達若い世代が頑張っていかねばと感じた。
繊維産業は自分の興味ある分野とは全く関係が無いと思っていたが，環境や医療の分野でも重要な技術が多くあることを知り，将来の仕事の選択肢を増やすことが出来た。
就職・人生・社会など幅広い知識を教えてもらった。

（福井大学・寄附講義「テキスタイル工学」実施報告書（平成 24 年度～平成 27 年度）より抜粋）

学生から高い評価を受けている。地域の主要産業の一つである繊維産業に興味を持つようになったことに加え，企業出身者である講師の体験談を交えた講義であったためか，将来への考え方にも影響を与えた講義であったことがうかがえる。

■　受講者，単位修得者の推移

年度	受講登録者数	単位修得者数	受講登録者内訳
2010（平成 22 年度）	157	152	材料開発 88，生物応用 69
2011（平成 23 年度）	156	148	材料開発 83，生物応用 71，機械２
2012（平成 24 年度）	148	140	材料開発 86，生物応用 61，知能システム１
2013（平成 25 年度）	155	150	材料開発 86，生物応用 61，知能システム４
2014（平成 26 年度）	150	143	材料開発 76，生物応用 74
2015（平成 27 年度）	149	144	材料開発 80，生物応用 66，情報メディア２，知能システム１

※この講義は，材料開発工学科と生物応用化学科の専門科目であるにもかかわらず，他学科からの受講生もあり，地域の主要産業である繊維産業への関心を専門の枠を超えて喚起している。

（事務局資料）

資料 1-1-22　外部組織との連携（第２期開始分）

連携の内容	連携先	連携開始時期 （協定の締結時期など）
教育研究交流	福井工業高等専門学校	平成 25 年４月　１日
単位互換	信州大学，京都工芸繊維大学	平成 25 年４月　１日
単位互換	福井県内大学・短大・高専	平成 23 年３月 31 日

（事務局資料）

●多様な教員の確保状況とその効果

【教育目的を実現するための教員構成】

①　教員採用は公募を原則とし，教員選考規程（**資料 1-1-23**）により教育研究業績に優れた人材を公平に採用している。配置人数は大学設置基準を満たし（**資料 1-1-24**），専門科目は一部を除き専任教員が担当している（**資料 1-1-25**）。教員の採用・昇格にあたり，模擬授業による評価を行っている（**資料 1-1-26**）。

資料 1-1-23　教員選考規程

福井大学大学院工学研究科教員選考規程

（平成16年４月１日　福大工規程第７号
平成19年４月５日　第一教授会）

（趣旨）

第１条　福井大学大学院工学研究科に勤務する教授，准教授，講師，助教及び助手（以下「教員」という。）の国立大学法人福井大学職員人事規程（平成16年福大規程第５号）第５条及び第12条の規定に基づく採用及び昇格の選考手続については，福井大学大学院工学研究科教授会規程（平成16年福大工規程第２号）（以下「教授会規程」という。）によるほか，この規程の定めるところによる。

（選考基準）

第２条　教員は，教育研究者としての能力を有し，別記「教員選考基準」（以下「選考基準」という。）を満たすものとする。

（候補者の推薦）

第３条　博士前期課程専攻（以下「専攻」という。）で教員を採用し又は昇格させようとするときは，当該専攻において候補者を選定し，当該専攻の長は，工学研究科長に候補者を推薦するものとする。

２　候補者の推薦に当たっては，当該専攻において，選考基準に基づき厳正に選考を行うものとする。

第４条　工学研究科長は，前条の推薦があった場合は，教授会規程第２条第１項に定める教授会（以下「教授会」という。）を招集し，当該専攻における選考過程及び推薦理由の詳細な説明を行うものとする。

（選考委員会）

第５条　教員の採用及び昇格に関する審査を行うため，教授会のもとに選考委員会（以下「委員会」という。）を設ける。

第６条　委員会は，専任の教授４名をもって構成する。

２　前項の委員は，その都度教授会において選任する。

３　委員会に委員長を置き，委員が互選する。

第７条　委員長は，委員会を招集し，その議長となる。

第８条　委員会は，選考基準に従って審査し，その結果を教授会に報告しなければならない。

第９条　委員会は，審査の必要に応じ，委員以外の本大学院工学研究科の教員又他学部若しくは他大学の教授から２名以上を選び，その意見を聴くことができる。

（候補者の決定及び報告）

第10条　教授会は，委員会の報告に基づき，候補者の適否を決定する。

２　工学研究科長は，前条の決定により適任と認めた候補者を学長に報告する。

第11条　工学研究科長は，前条第１項の決定が行われた場合は，その結果を教授会規程第２条第２項に定める教授会に報告する。

（否決された候補者の選考）

第12条　教授会において否決された候補者は，その日から１年を経過した後でなければ選考することはできない。

（雑則）
第13条　退職又は転出を予定されている者の後任の選考は，事前に行うことができる。
第14条　非常勤講師の採用については，委員会による審査を省くことができる。
第15条　この規程に定めるもののほか，この規程の実施に関し，必要な事項は，教授会が別に定める。

附　則
この規程は，平成16年４月１日から施行する。
附　則
この規程は，平成18年４月１日から施行する。
附　則
この規程は，平成19年４月５日から施行し，平成19年４月１日から適用する。

別記

教員選考基準
１　教授
（１）博士の学位（日本における博士の学位と同等と認められる外国の学位を含む。以下同じ。）を有し，研究上の業績があり，教育上の経験又は識見を持っている者
（２）公刊された著書，学術論文，作品，報告等により博士の学位を有する者に匹敵する研究上の業績があると判断され，教育上の経験又は識見を持っている者
（３）専攻分野において特に優れた知識及び経験を有する者

２　准教授
教授の資格に準ずる。ただし，場合によっては所要の年限又は経歴を軽減して考慮することができる。

３　講師
准教授の資格に準ずる。ただし，場合によっては所要の年限又は経歴を軽減して考慮することができる。

４　助教
講師の資格に準ずる。ただし，場合によっては所要の年限又は経歴を軽減して考慮することができる。また，博士の学位取得見込者を含むことができるものとする。

（事務局資料）

資料 1-1-24　工学部専任教員の配置

（平成 27 年５月１日現在）

学科及び課程名	教員数					大学設置基準必要教員数		助手
	教授	准教授	講師	助教	計	専任教員数	内教授数	
機械工学科	7	6	3	1	17	8	4	0
電気・電子工学科	6	6	0	1	13	8	4	0
情報・メディア工学科	7	7	0	0	14	8	4	0
建築建設工学科	9	5	3	0	17	8	4	0
材料開発工学科	5	7	0	0	12	8	4	0
生物応用化学科	4	7	0	0	11	8	4	0
物理工学科	8	8	1	0	17	8	4	0
知能システム工学科	4	9	0	1	14	8	4	0
合　　計	50	55	7	3	115	64	32	0

（事務局資料）

資料 1-1-25　工学部主要科目の専任教員による担当状況（平成 26 年度）

学 科	総科目数	必修科目					選択科目				
		科目数	専任教員担当の科目数			専任教員以外が担当の科目数（非常勤含む）	科目数	専任教員担当の科目数			専任教員以外が担当の科目数（非常勤含む）
機械工学科	77	41	39	教授	19	2	36	31	教授	20	5
				准教授	19				准教授	9	
				講師	1				講師	2	
電気･電子工学科	82	19	18	教授	11	1	63	57	教授	33	6
				准教授	7				准教授	21	
				講師	0				講師	3	
情報･メディア工学科	62	24	22	教授	16	2	38	34	教授	23	4
				准教授	6				准教授	11	
				講師	0				講師	0	
建築建設工学科	89	32	30	教授	11	2	57	51	教授	29	6
				准教授	11				准教授	14	
				講師	8				講師	8	
材料開発工学科	69	32	32	教授	15	0	37	29	教授	17	8
				准教授	12				准教授	9	
				講師	5				講師	3	
生物応用化学科	72	39	38	教授	19	1	33	29	教授	20	4
				准教授	19				准教授	9	
				講師	0				講師	0	
物理工学科	68	42	41	教授	25	1	26	24	教授	16	2
				准教授	13				准教授	8	
				講師	3				講師	0	
知能システム工学科	74	22	19	教授	7	3	52	47	教授	21	5
				准教授	10				准教授	24	
				講師	2				講師	2	
合計	593	251	239			12	342	302			40
専任教員担当率%	91.2	95.2					88.3				

（事務局資料）

資料 1-1-26　採用・昇格人事における模擬授業評価

■　福井大学大学院工学研究科教員選考基準に関する内規（抜粋）

第５条　教授，准教授，専任講師又は助教に係る被選考者は，教員選考委員会及び教育技法評価委員会が行う模擬授業による教育技法評価を受けなければならない。
２　被選考者は，前項の教育技法評価の結果に合格しなければ，教授，准教授，専任講師又は助教になることができない。

■　模擬授業評価表

教育技法評価委員会の委員が以下の項目について評価する。

授業目標・準備	
明確性	授業の目標は明確に示されたか（授業全体と今回の講義について）
総合性	他の授業科目との関連等，総合的な観点からの位置付けや把握方法が示されたか

授業内容	
難易度	適切な難易度で，必要な内容が講義されたか
基礎学力考慮	学生の基礎学力を考慮し，必要に応じた基礎事項の補足説明があったか

学習方法	
授業記録	十分な余裕をもって学生が授業内容の記録をとることができるように配慮がなされたか
自己学習指導	学生の自己学習（予習・復習・自己調査）のための適切な指導がなされたか

講義技法	
可聴性	声は十分聞き取れたか，言葉は明瞭であったか，言っている内容は理解できたか
明快性	講義内容が明快で基礎的原理を分りやすく解き明かすものであったか
熱意	主題についての講師の熱意が現れている講義になっていたか

（事務局資料）

② 企業経験者の採用，任期制，「科学技術人材育成補助事業　テニュアトラック普及・定着事業」によるテニュアトラック制度，および平成 24 年度科学技術人材育成費補助事業「女性研究者研究活動支援事業」による男女共同参画推進により，教員組織の活性化を図り，任期付教員，女性教員，外国人教員の数が増加した（女性教員の数は第１期の 2.3 倍に増加）（**資料 1-1-27～29**）。

資料 1-1-27　多様な教員の在籍状況や採用実績

■　企業経験者（カッコ内は総数）

	機械工学	電気・電子工学	情報・メディア工学	建築建設工学	材料開発工学	生物応用化学	物理工学	知能システム工学	繊維先端工学	原子力・エネルギー安全工学	計
教　授	1（7）	3（6）	2（7）	2（9）	3（4）	3（4）	1（8）	1（4）	1（4）	2（5）	19（58）
准教授	0（6）	1（6）	0（7）	1（5）	0（7）	0（7）	2*（8）	0（9）	1（3）	0（4）	5（62）
講　師	0（3）	0（1）	0（1）	0（3）	0（0）	0（0）	0（1）	0（0）	0（1）	1（2）	1（12）
助　教	0（1）	0（1）	0（0）	0（0）	0（0）	0（0）	0（0）	0（1）	0（1）	0（0）	0（4）
計	1（17）	4（14）	2（15）	3（17）	3（11）	3（11）	3（17）	1（14）	2（9）	3（11）	25（136）
割合%	5.9	28.6	13.3	17.6	27.3	27.3	17.6	7.1	22.2	27.3	18.4

※物理工学の企業経験者の准教授２名のうち１名は外国人の女性，その他は全て日本人男性

※※上の表は，学部と一体的に運用されている博士前期課程の専攻の区分で整理されている。

（福井大学研究者総覧をもとに算出（平成 27 年度末時点））

■　任期付教員（各年度の５月１日現在の人数）

テニュアトラック制度の活用などにより，第２期に任期付教員の数は増加している。

任期付教員数：第２期初年度　８名　⇒　第２期最終年度　11 名　（約 1.4 倍）

	平成 22 年度		平成 23 年度		平成 24 年度		平成 25 年度		平成 26 年度		平成 27 年度	
	任期付教員	特任・特命教員	任期付教員	特任・特命教員	任期付教員	特任・特命教員	任期付教員	特任・特命教員	任期付教員	特任・特命教員	任期付教員	特任・特命教員
工学部，工学研究科	8	10	8	8	6	17	2	16	3	10	3	9
産学官連携本部		2	1	4	2	5	1	2	1	4	1	5
附属国際原子力工学研究所		2		5	1	9	1	8	1	8	1	7
遠赤外領域開発研究センター		1		2		2		2		2		4
総合情報基盤センター					1	1	1	1	1	1	1	1
テニュアトラック推進本部							2		4		5	
博士人材キャリア開発支援センター								3		2		2
計	8	15	9	19	10	34	7	32	10	27	11	28

■　若手教員及び女性教員採用実績

テニュアトラック制度の活用などにより，第２期に若手教員及び女性教員の数は増加した。
女性教員：第１期最終年度　３名　⇒　第２期最終年度　７名　（約 2.3 倍）

年度	制度名	採用若手教員総数（女性：内数）	工学系女性教員総数
平成 21 年度	―	―	3
平成 22 年度	―	―	3
平成 23 年度	―	―	2
平成 24 年度	テニュアトラック普及・定着事業（アメニティ工学女性若手リーダー育成特区）	1(1)	3
平成 25 年度	テニュアトラック普及・定着事業（アメニティ工学女性若手リーダー育成特区及び重点研究若手リーダー育成特区）	2(1)	4
平成 26 年度	テニュアトラック普及・定着事業（重点研究若手リーダー育成特区）	2(1)	5
平成 27 年度	国立大学改革強化推進補助金特定支援型「優れた若手研究者」	3(1)	7

2.3 倍

■　外国人教員の数，出身国（平成 27 年５月１日現在）

第２期に外国人教員の数は増加した。
外国人教員：第１期最終年度　４名　⇒　第２期最終年度　６名　（1.5 倍）

職種	教授	准教授	講師	助教	合　計
平成 21 年度人数	0	3	0	1	4
平成 27 年度人数	0	4	1	1	6

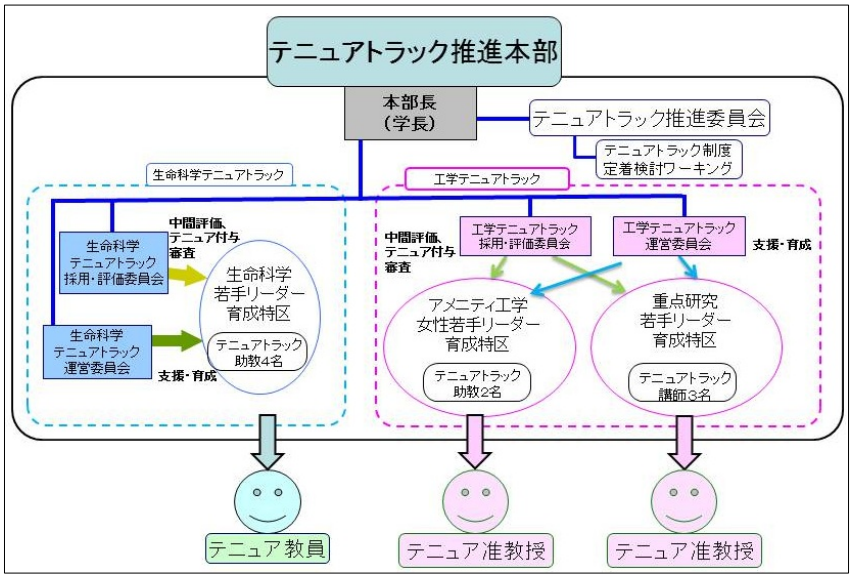
外国人教員の国籍も，第２期に多様化が進んだ。
第１期最終年度　２か国　⇒　第２期最終年度　４か国

国名	韓国	中国	フィリピン	オランダ	合計
平成 21 年度人数	1	3	0	0	4
平成 27 年度人数	1	2	2	1	6

（事務局資料）

資料 1-1-28　テニュアトラック制度とその運用状況

■ 教員の選考例（工学テニュアトラック）



特区	アメニティ工学女性若手リーダー育成特区		重点研究若手リーダー育成特区		
選考年度	H24年度選考	H25年度選考	H25年度選考	H26年度選考	
国際公募（JREC-INによる国際公募）	H24.8～10	H24.8～12	H25.8～10	H25.8～12	追加公募 H26.5～6
選考基準（評価の主眼点）	・これまでの研究の成果 ・採用後の研究の発展性 ・工学研究との関連性				
選考方法	書面審査及びインタビュー審査		書面審査、インタビュー審査及び模擬授業		
選考結果	応募者　7名 （うち外国人3名、女性7名） 採用者　1名	応募者　15名 （うち外国人6名、女性15名） 採用者　1名	応募者　7名 （うち外国人2名、女性0名） 採用者　1名	応募者　16名 （うち外国人3名、女性3名） 採用者　1名 【1名辞退】	応募者　14名 （うち外国人6名、女性2名） 採用者　1名

（事務局資料）

資料 1-1-29　男女共同参画推進功労等表彰式における女性教員の表彰

男女共同参画推進功労等表彰式を実施しました。

本学における男女共同参画に対する一層の意識向上を図り、また、男女共同参画の促進及び将来の学術研究を担う優秀な女性研究者の育成に資するため、男女共同参画推進功労者表彰制度を平成26年度より制定し、表彰式を行っています。

平成27年度表彰式を3月31日に行いました。男女共同参画推進功労賞に医学部　長谷川美香教授、研究者奨励賞（男女共同参画）に大学院工学研究科　陳競鳶准教授が選ばれ、表彰状が授与されました。

眞弓光文学長は祝辞を述べ、ダイバーシティ研究環境実現に向けた継続的な取組の重要性を再確認しました。

（http://danjyo.ad.u-fukui.ac.jp/newscat03/）

（福井大学ウェブサイトより抜粋）

●入学者選抜方法の工夫とその効果に対する例

【入学者確保と選抜・多様な学生の入学促進】

① アドミッション・ポリシー（AP）を設定・周知し（**資料 1-1-30**），AP に則り多様な入学者選抜を実施して入学者を確保した（**資料 1-1-31**）。志願倍率，充足率等は良好である（**P6-3　前掲資料 1，2**）。

資料 1-1-30　工学部のアドミッション・ポリシー（平成 27 年度）

■　人材の養成に関する目的その他の教育研究上の目的

工学は，人間社会の持続的発展を可能にするための学問体系である。工学部では，基礎的な知識・教養と高度な専門能力に加えて，創造力，評価力，自己学習力およびコミュニケーション能力を併せた総合能力を持つ技術者・研究者を養成する。また，地域社会と国際社会の豊かな発展に寄与することを目的に，広く工学全般にわたって教育研究を行い，その成果を社会に還元する。

工学部各学科の目的は，以下のとおりとする。

機械工学科	機械工学分野の専門教育と先進的研究を通して，人が環境と調和した快適な社会生活を過ごすためのモノづくりに寄与する，基礎学力と応用力を有し，未知の問題に対応する能力を備え，倫理観を持って国際社会において活躍できる機械技術者を養成する。
電気・電子工学科	物性・デバイス工学，エネルギー工学，システム工学の分野において，高度な専門知識を有し，科学技術の発展と変遷に対応できる能力と倫理観を備えた専門技術者を養成すると共に，豊かな暮らしを支える社会基盤の構築に寄与する知識と技術を創出する研究を行う。
情報・メディア工学科	情報，通信，メディア工学に関する専門知識の体系的な理解を基に，実世界の多様な問題を理解し，多角的なアプローチで問題解決に取り組むと共に，種々の製品やシステムの開発を推進し，また開発成果を的確かつ効果的に発信する能力を持つ専門技術者を養成する。
建築建設工学科	建築学と土木工学の両専門分野の蓄積を基礎におき，両者を融合・総合化させることによって，新しい視野で社会環境，自然環境の中での生活空間の本質を理解し，国土・地域の持続的発展に貢献しえる総合的な生活空間構築のための教育を行い，次に掲げる技術者を養成する。すなわち，自然，歴史，文化等あらゆる面から生活空間の本質を見極め，そこに潜む問題とあるべき方向を探り出そうとする指向性と探究心，その上で問題の解決と望ましい生活空間の創造や自然環境の保全に関わる幅広い専門知識，加えて実社会の中で実践力等を備えた人材を養成する。
材料開発工学科	化学と物理を基礎とし環境に調和した高性能・高機能材料の創製に取り組むことを通して，創造性豊かな人材育成を目指すと共に，地域社会や国際社会で活躍できる高い倫理観とチャレンジ精神を備えた専門技術者および研究者を育成する。
生物応用化学科	物質科学の基礎となる「化学」と生命科学の基盤である「生物化学」は互いに深く関わっている。これら「化学」と「生物化学」の境界に広がる学際的領域における学術と研究の拠点として，人類の健やかな生活と持続可能で豊かな社会の実現に貢献するための教育を推進し，高い倫理観と知識・技術を身に付けた研究者および専門技術者を養成する。
物理工学科	物理学・数学・工学に関する広範な知識を有し，職業人に求められる自己学習能力・問題解決能力・表現能力を身につけ，それらを総合して創造性のある研究・開発を行うことのできる専門技術者を養成する。また，他学科の専門基礎科目の担当を通して，工学部全体の人材養成に寄与する。
知能システム工学科	機械・電子・情報などのハードな工学から生命科学・認知科学・複雑系科学などのソフトな科学まで至る学際的科学技術に精通し，総合的なシステム提案・構築能力と創造性豊かな優れた研究・開発能力並びに実務能力を身に着けた技術者，および，あらゆる分野で活躍することができ，知識基盤社会を多様に支える知的な素養ある人物を養成する。

■　求める学生像

学部共通

1．基礎学力があり，チャレンジ精神にあふれる人

2．科学技術を通して国際社会で活躍したい人

各学科

機械工学科	**「未来のものづくりをリードするのは君だ」** 1．ものの形や動く仕組みに強い興味を持つ人　　2．広い視野と柔軟で豊かな思考力を持つ人 3．自分の考えを相手に正しく伝えられる人
電気・電子工学科	**「光り輝くエレクトロニクス社会の挑戦者になってみないか」** 1．物理や数学が大好きな人　　2．電気や電子に興味と好奇心を持っている人 3．エレクトロニクス分野でチャレンジ精神を持って将来活躍したい人
情報・メディア工学科	**「これからの高度 ICT 社会を担うのは君だ」** 1．ICTで社会に貢献したい人　　2．コンピュータのハードウェア／ソフトウェアに興味のある人 3．情報通信，マルチメディア情報処理に興味のある人
建築建設工学科	**「いえをつくる。まちをつくる。くにをつくる。」** 1．建築あるいは建設分野に強い興味を持ち，意欲旺盛な人 2．独創的な発想が期待できる人　　3．自分で目標設定ができ，それに向かって努力する人

材料開発工学科	**「未来材料の開発にチャレンジしょう!」** 1．自主性に富み，何事にも積極的で，リーダーシップのある人 2．日常の物事や現象に常に疑問をもち，それについて深く考える人 3．物理や化学が好きで，環境にやさしい材料の開発に強い興味と意欲を持つ人
生物応用化学科	**「化学と生体機能の接点をめざして」** 1．物質や生体機能を分子のレベルで考える化学の分野に興味を持つ人 2．化学やバイオテクノロジーの技術を通して社会に貢献したい人 3．はっきりとした目的意識をもち，その実現のために努力する人
物理工学科	**「先端科学技術を支える物理学の世界へ」** 1．物理や数学が得意で，将来，先端科学技術分野で活躍したい人 2．ものごとを基本に返って考えることが好きな人 3．手を動かしてものを作ったり実験をするのが好きな人
知能システム工学科	**「人の知能と行動生成メカニズムを究明し知能システムを創造しよう」** 1．数学や物理などの基礎的能力があり，数学Ⅲ・数学Cを基盤とした大学での高度な数学（線形代数，微分・積分，解析学等）を勉学する意欲のある人 2．プログラミング，機械工作，電子工作などが好きな人 3．問題解決にあたって，個性的，独創的な主張を行い，指導性のある人

■　**入学者選抜の基本方針**

【一般入試（前期日程）】

機械工，電気・電子工，情報・メディア工，物理工，知能システム工　各学科	大学入試センター試験（5教科7科目）により基礎的学力を総合的に判定する。さらに個別学力試験（数学，物理）により，数学と物理に関する標準的な知識と理解に基づいて論理的な思考を展開し，それを記述する能力を判定する。
建築建設工学科 材料開発工学科 生物応用化学科	大学入試センター試験（5教科7科目）により基礎的学力を総合的に判定する。さらに個別学力試験（数学，物理又は化学）により，数学と物理又は化学に関する標準的な知識と理解に基づいて論理的な思考を展開し，それを記述する能力を判定する。

【一般入試（後期日程）】

機械工，電気・電子工，情報・メディア工，物理工　　各学科	大学入試センター試験（5教科7科目）により基礎的学力を総合的に判定する。さらに個別学力試験（物理）により，物理に関する標準的な知識と理解に基づいて論理的な思考を展開し，それを記述する能力を判定する。
建築建設工学科	大学入試センター試験（5教科7科目）により基礎的学力を総合的に判定し，さらに小論文により独創性，自主性，自己表現力等を判定する。
材料開発工学科 生物応用化学科	大学入試センター試験（5教科7科目）により基礎的学力を総合的に判定し，さらに面接（口述試験を含む）により，学習意欲，チャレンジ精神，論理的思考力等を判定する。
知能システム工学科	大学入試センター試験（5教科7科目）により基礎的学力を総合的に判定し，さらに面接（口述試験を含む）により，勉学意欲，文章構成力，表現力，論理的思考力等を判定する。

【AO入試Ⅰ】

電気・電子工学科	大学入試センター試験は免除するが，第1次選考では書類審査により，文章力や自己アピール力等の判定及び提出された調査書等に基づく基礎的学力の判定を行う。最終選考では面接（口述試験を含む）により，目的意識・意欲，表現力等の判定及び理数系科目の学力判定を行う。
建築建設工学科	大学入試センター試験は免除するが，第1次選考では書類審査により，文章力や自己アピール力等の判定及び調査書等に基づく基礎的学力の判定を行う。最終選考ではプレゼンテーション，ディスカッション及び面接（口述試験を含む）により，目的意識・意欲，表現力等の判定及び理数系科目の学力判定を行う。
知能システム工学科	大学入試センター試験は免除するが，第1次選考では書類審査により，文章力や自己アピール力等の判定及び提出された調査書等に基づく基礎的学力の判定を行う。最終選考では面接（口述試験を含む）により，目的意識・意欲，表現力等の判定及び理数系科目の学力判定を行う。

【AO入試Ⅱ】

機械工，電気・電子工，情報・メディア工，建築建設工，材料開発工，生物応用化，物理工　各学科	第1次選考では書類審査により，文章力や自己アピール力等の判定及び調査書等に基づく基礎的学力の判定を行う。最終選考では，大学入試センター試験により基礎的学力を総合的に判定し，さらに面接（口述試験を含む）により，目的意識・意欲，表現力等の判定及び理数系科目の学力判定を行う。

【私費外国人留学生入試】

全学科共通	日本留学試験及びTOEFLの成績，並びに，面接，口述試験（簡単な筆記試験を行う場合もある。）及び出願書類により，日本語能力と理数系科目の学力判定を行う。

【編入学（推薦）】

全学科共通	面接（口述試験を含む）及び出願書類により理数系科目の学力，学習意欲，チャレンジ精神等を判定する。

【編入学（一般）】

機械工，電気・電子工， 情報・メディア工， 建築建設工， 知能システム工　各学科	学力検査，面接（口述試験を含む）及び出願書類により，理数系科目の学力，学習意欲，チャレンジ精神等を判定する。
材料開発工学科 生物応用化学科 物理工学科	面接(口述試験を含む)及び出願書類により，理数系科目の学力，学習意欲，チャレンジ精神等を判定する。

（事務局資料）

資料 1-1-31　工学部の入学者選別方法と募集定員（平成 27 年度）

学 科	選抜の種類，方法等	募集 人員	志願 者数
機械工学科	○一般入試・前期日程：センター試験と個別学力試験	34 名	80 名
	・後期日程：センター試験と個別学力試験	34 名	311 名
	○AO 入試Ⅱ：センター試験の成績，調査書，自己推薦書，志望理由書，面接（口述試験を含む）を総合判定	7 名	28 名
	○私費外国人留学生特別選抜：面接，口述試験（又は簡単な筆記試験），日本留学試験，TOEFL の結果を総合判定	若干名	1 名
	○編入学（３年次）・推薦選抜：面接（口述試験を含む），出願書類を総合判定	5 名	4 名
	・一般選抜：個別学力試験，面接（口述試験を含む），出願書類を総合判定	4 名	19 名
	:マレーシア･ツイニング･プログラム：面接（口述試験を含む）及び出願書類を総合判定	若干名	3 名
電気・電子工学科	○一般入試・前期日程：センター試験と個別学力試験	29 名	54 名
	・後期日程：センター試験と個別学力試験	22 名	162 名
	○AO 入試Ⅰ：調査書，自己推薦書，志望理由書，面接（口述試験を含む）を総合判定	3 名	9 名
	○AO 入試Ⅱ：センター試験の成績，調査書，自己推薦書，志望理由書，面接（口述試験を含む）を総合判定	10 名	10 名
	○私費外国人留学生特別選抜：面接，口述試験（又は簡単な筆記試験），日本留学試験，TOEFL の結果を総合判定	若干名	1 名
	○編入学（３年次）・推薦選抜：面接（口述試験を含む），出願書類を総合判定	5 名	3 名
	・一般選抜：個別学力試験，面接（口述試験を含む），出願書類を総合判定	4 名	21 名
	･マレーシア･ツイニング･プログラム:面接(口述試験を含む)，出願書類を総合判定	若干名	6 名
情報・メディア工学科	○一般入試・前期日程：センター試験と個別学力試験	30 名	81 名
	後期日程：センター試験と個別学力試験	20 名	173 名
	○AO 入試Ⅱ：センター試験の成績，調査書，自己推薦書，志望理由書，面接（口述試験を含む）を総合判定	15 名	37 名
	○私費外国人留学生特別選抜：面接，口述試験（又は簡単な筆記試験），日本留学試験，TOEFL の結果を総合判定	若干名	1 名
	○編入学（３年次）・推薦選抜：面接（口述試験を含む），出願書類を総合判定	5 名	5 名
	・一般選抜：個別学力試験，面接（口述試験を含む），出願書類を総合判定	5 名	18 名

建築建設工学科	○一般入試・前期日程：センター試験と個別学力試験	30名	130名
	後期日程：センター試験と小論文	25名	179名
	○AO入試Ⅰ：調査書，自己推薦書，志望理由書，ﾌﾟﾚｾﾞﾝﾃｰｼｮﾝとﾃﾞｨｽｶｯｼｮﾝ，面接（口述試験を含む）を総合判定	5名	9名
	○AO入試Ⅱ：センター試験の成績，調査書，自己推薦書，志望理由書，面接（口述試験を含む）を総合判定	5名	35名
	○私費外国人留学生特別選抜：面接，口述試験（又は簡単な筆記試験），日本留学試験，TOEFLの結果を総合判定	若干名	0名
	○編入学（３年次）・推薦選抜：面接（口述試験を含む），出願書類を総合判定	3名	7名
	・一般選抜：個別学力試験，面接（口述試験を含む），出願書類を総合判定	7名	22名
材料開発工学科	○一般入試・前期日程：センター試験と個別学力試験	50名	118名
	・後期日程：センター試験と面接	15名	163名
	○AO入試Ⅱ：センター試験の成績，調査書，自己推薦書，志望理由書，面接（口述試験を含む）を総合判定	10名	6名
	○私費外国人留学生特別選抜：面接，口述試験（又は簡単な筆記試験），日本留学試験，TOEFLの結果を総合判定	若干名	0名
	○編入学（３年次）・推薦選抜：面接（口述試験を含む），出願書類を総合判定	若干名	0名
	・一般選抜：面接（口述試験を含む），出願書類を総合判定	若干名	3名
生物応用化学科	○一般入試・前期日程：センター試験と個別学力試験	42名	76名
	・後期日程：センター試験と面接	18名	65名
	○AO入試Ⅱ：センター試験の成績，調査書，自己推薦書，志望理由書，面接（口述試験を含む）を総合判定	5名	8名
	○私費外国人留学生特別選抜：面接，口述試験（又は簡単な筆記試験），日本留学試験，TOEFLの結果を総合判定	若干名	4名
	○編入学（３年次）・推薦選抜：面接（口述試験を含む），出願書類を総合判定	若干名	1名
	・一般選抜：面接（口述試験を含む），出願書類を総合判定	若干名	3名
物理工学科	○一般入試・前期日程：センター試験と個別学力試験	20名	32名
	後期日程：センター試験と個別学力試験	31名	224名
	○AO入試Ⅱ：センター試験の成績，調査書，自己推薦書，志望理由書，面接（口述試験を含む）を総合判定	若干名	3名
	○私費外国人留学生特別選抜：面接，口述試験（又は簡単な筆記試験），日本留学試験，TOEFLの結果を総合判定	若干名	0名
	○編入学（３年次）・推薦選抜：面接（口述試験を含む），出願書類を総合判定	若干名	0名
	・一般選抜：面接（口述試験を含む），出願書類を総合判定	若干名	3名
知能システム工学科	○一般入試・前期日程：センター試験と個別学力試験	37名	152名
	後期日程：センター試験と面接	23名	130名
	○AO入試Ⅰ：調査書，自己推薦書，志望理由書，面接（口述試験を含む）を総合判定	5名	10名
	○私費外国人留学生特別選抜：面接，口述試験（又は簡単な筆記試験），日本留学試験，TOEFLの結果を総合判定	若干名	0名
	○編入学（３年次）・推薦選抜：面接（口述試験を含む），出願書類を総合判定	若干名	2名
	・一般選抜：個別学力試験，面接（口述試験を含む），出願書類を総合判定	2名	15名

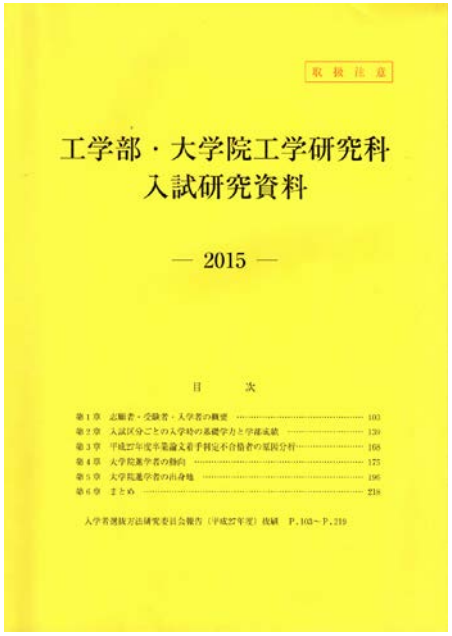
※従来から実施されていた工学部の「中国引揚者等子女特別選抜」はニーズの変化等に対応し，平成24年度に募集停止とした。

（事務局資料）

②　APと選抜方法は，検証に基づいて常に見直している（**資料 1-1-32～34**）。

資料 1-1-32　入学者の状況の検証

入学者選抜方法研究委員会が全入学者の成績状況の追跡調査を行い，入試区分ごとの特徴を精査し，アドミッション・ポリシーに，より合致した学生の確保などに向けた提言を行っている。


取扱注意

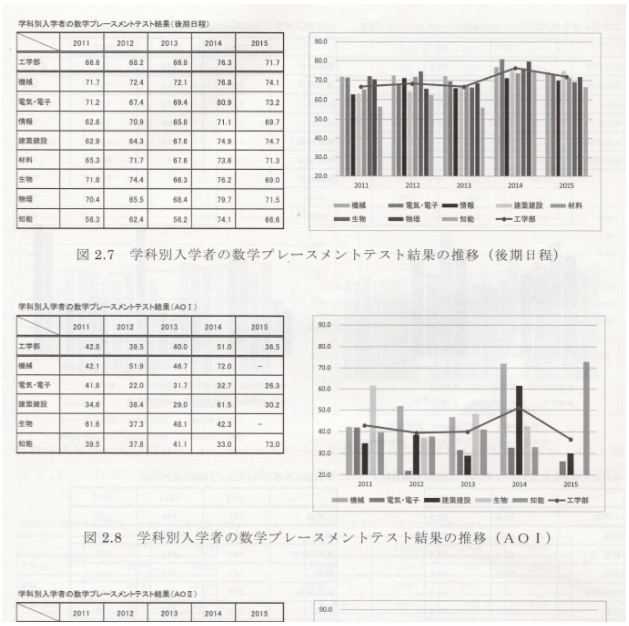
工学部・大学院工学研究科
入試研究資料

— 2015 —

目　次

第1章　志願者・受験者・入学者の概要 …… 103
第2章　入試区分ごとの入学時の基礎学力と学様成績 …… 139
第3章　平成27年度卒業論文着手判定不合格者の原因分析 …… 168
第4章　大学院進学者の動向 …… 175
第5章　大学院進学者の出身地 …… 196
第6章　まとめ …… 218

入学者選抜方法研究委員会報告（平成27年度）抜刷　P.103～P.219


学科別入学者の数学プレースメントテスト結果（後期日程）

	2011	2012	2013	2014	2015
工学部	66.8	68.2	66.8	76.3	71.7
機械	71.7	72.4	72.1	76.8	74.1
電気・電子	71.2	67.4	69.4	80.9	73.2
情報	62.6	70.9	65.8	71.1	69.7
建築建設	62.9	64.3	67.6	74.9	74.7
材料	65.3	71.7	67.6	73.6	71.3
生物	71.8	74.4	66.3	76.2	69.0
物理	70.4	65.5	68.4	79.7	71.5
知能	56.3	62.4	56.2	74.1	66.6

図 2.7　学科別入学者の数学プレースメントテスト結果の推移（後期日程）

学科別入学者の数学プレースメントテスト結果（AO I）

	2011	2012	2013	2014	2015
工学部	42.8	39.5	40.0	51.0	36.5
機械	42.1	51.9	46.7	72.0	–
電気・電子	41.8	22.0	31.7	32.7	26.3
建築建設	34.6	38.4	29.0	61.5	30.2
生物	61.6	37.3	48.1	42.3	–
知能	39.5	37.8	41.1	33.0	73.0

図 2.8　学科別入学者の数学プレースメントテスト結果の推移（AO I）

学科別入学者の数学プレースメントテスト結果（AO II）

	2011	2012	2013	2014	2015

90.0

直近の検証の例

“平成 26 年度と比較して，京都試験場を設置した平成 27 年度の志願者割合は３ポイント上昇しており，京都出身者の合格率が高いとの結果が得られた。このことは，人口が多くアクセスで有利なはずの関西圏において，潜在的志望者の掘り起こしが可能であることを示していると判断できる。”

（事務局資料）

資料 1-1-33　アドミッション・ポリシーや選抜方法の見直し

求める学力をより明確にすることや AO 入試での学力重視の姿勢を示すことにより，マッチングの取れた質の高い学生の確保につとめた。

（1）アドミッション・ポリシーの「求める学生像」見直しの例（知能システム工学科）

平成 26 年度 入学者選抜	**「人の知能と行動生成メカニズムを究明し知能システムを創造しよう」** 1．数学や物理などの基礎的能力のある人 2．プログラミング，機械工作，電子工作などが好きな人 3．問題解決にあたって，個性的，独創的な主張を行い，指導性のある人
平成 27 年度 入学者選抜	**「人の知能と行動生成メカニズムを究明し知能システムを創造しよう」** 1．数学や物理などの基礎的能力があり，**数学Ⅲを基礎とした大学での高度な数学（線形代数，微分・積分，解析学等）を勉学する意欲のある人** 2．プログラミング，機械工作，電子工作などが好きな人 3．問題解決にあたって，個性的，独創的な主張を行い，指導性のある人

（学生募集要項より抜粋）

（2）選抜方法見直しの例（生物応用化学科 AO 入試Ⅰ）

平成 23 年度 入学者選抜	大学入試センター試験は免除するが，第１次選考では書類審査及び小テストにより，文章力や自己アピール力等の判定及び調査書等に基づく基礎的学力の判定を行う。最終選考では面接（口述試験を含む。）により，目的意識・意欲，表現力等の判定及び理数系科目の学力判定を行う。
平成 24 年度 入学者選抜	大学入試センター試験は免除するが，第１次選考では書類審査及び小テストにより，文章力や自己アピール力等の判定及び調査書等に基づく基礎的学力の判定を行う。最終選考では面接（口述試験を含む。）により，目的意識・意欲，表現力等の判定，理数系科目の学力及び英語力の判定を行う。
平成 26 年度 入学者選抜	大学入試センター試験は免除するが，第１次選考では書類審査により，文章力や自己アピール力等の判定及び調査書等に基づく基礎的学力の判定を行う。最終選考では小テスト及び面接（口述試験を含む）により，目的意識・意欲，表現力等の判定，理数系科目の学力及び英語力の判定を行う。

（学生募集要項より抜粋）

（事務局資料）

資料 1-1-34　工学部入試の見直し事例

第２期を通して前期日程，後期日程，AO 入試Ⅰ，AO 入試 II を合わせた募集人数に変化はないが，その内訳は随時見直してきた。入学後の成績等の追跡調査の結果，職業系高等学校出身の学生が伸びる傾向にあったことから，AO 入試Ⅰ（センター試験を課さない）は職業系高等学校の学生を主な対象として募集人数を絞り，AO 入試Ⅱ（センター試験を課す）では募集人数を増やすなど，入試全体で質の高い学生が確保されるようバランスを取った。また，平成 27 年度入試から編入学の定員を 10 名増やした（**資料 1-1-36**）。これは，編入学定員の充足率が 130%程度で推移していたことや，ミッションの再定義を踏まえ，グローバルな視野をもつ高度専門技術者の育成を一層すすめるためである。

	工　学　部
平成 21 年度 （平成 22 年度入試）	・募集人員の内訳変更
平成 22 年度 （平成 23 年度入試）	・募集人員のの内訳変更 ・AO 入試の出願要件に数学，理科，英語の履修要件を追加，アドミッション・ポリシーの求める学生像等に履修要件を追加
平成 23 年度 （平成 24 年度入試）	・募集人員の内訳変更 ・帰国子女特別選抜の廃止 ・AOⅠ（生物応用化学科）：入学者選抜方針に英語力を追加 ・AOⅡ（電気・電子）：センター科目に国語・英語科目を課し語学力重視（文理融合） ・３年次編入学試験（推薦）で自己推薦制を導入
平成 24 年度 （平成 25 年度入試）	・募集人員の内訳変更 ・３年次編入学（一般）の出願資格で出身学科の制限を削除 ・AOⅠ（知能システム）：出願要件に理数系科目の評定平均値による出願制限を追加
平成 25 年度 （平成 26 年度入試）	・募集人員の内訳変更 ・AOⅡ（材料開発）：センター科目に英語科目を課す ・３年次編入学試験でマレーシア政府との協定に基づくにﾏﾚｰｼｱ・ﾂｲﾆﾝｸﾞ・ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ入試を導入
平成 26 年度 （平成 27 年度入試）	・募集人員の内訳変更 ・３年次編入学試験の入学定員の増加（30 名から 40 名へ） ・３年次編入学試験（一般）の学力検査科目（数学）の追加（情報・ﾒﾃﾞｨｱ） ・AO 入試の募集人員を見直し，センター試験を課さない AOⅠの普通科・理数科等からの募集を廃止し，センター試験を課す AOⅡに募集人員を変更（機械工学，建築建設，生物応用） ・前期日程で，名古屋試験場に加え，京都試験場を新設

（事務局資料）

③　関西圏からの志願者を確保するため，平成 27 年度入試（前期日程）から京都会場を設け，100 名を超える志願者を得るとともに（**資料 1-1-35**），関西地区からの志願者の割合が前年より 2.3%増加した。

資料 1-1-35　京都会場の新設と会場別受験者数

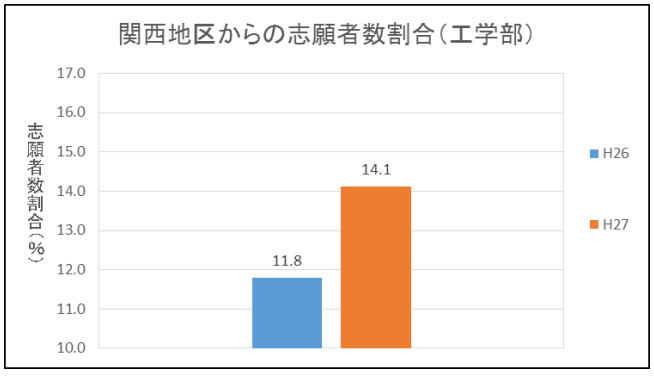


■　会場別の入学試験志願者数（前期日程）

年度	会場	機械工学科	電気・電子工学科	情報・メディア工学科	建築建設工学科	材料開発工学科	生物応用化学科	物理工学科	知能システム工学科	工学部計
	定　員	35	29	30	30	50	40	30	37	271
平成25年度	福　井	56	51	51	3045	70	80	59	61	473
	名古屋	65	91	32	32	27	76	43	63	429
	計	121	142	83	77	97	156	102	124	902
平成26年度	福　井	49	40	43	42	60	50	28	60	372
	名古屋	35	91	22	39	158	51	31	19	446
	計	84	131	65	81	218	101	59	79	818
平成27年度	福　井	19	23	36	51	43	29	13	52	266
	名古屋	47	27	32	55	58	43	12	80	354
	京　都	14	4	13	24	17	4	7	20	103
	計	80	54	81	130	118	76	32	152	723

■　関西地区（京都，滋賀，大阪，兵庫，奈良，和歌山）からの志願者の全志願者に対する割合

京都会場を設けた平成 27 年度入試では，関西圏からの志願者の割合が，平成 26 年度入試より 2.3%上昇した。



（事務局資料）

④　マレーシア・ツイニング・プログラム入試の導入や編入定員の増員など，多様な学生の入学促進の取組を行い，多数の志願者を得て質の高い学生を確保した（**資料 1-1-36**）。

資料 1-1-36　多様な学生の入学促進のための取組

■　取組一覧

実施年度	実施内容	目的
平成 24 年度 （平成 25 年度入試）	編入学試験の出願資格における出身学科の制限の削除	幅広い知見をもった学生の確保
平成 25 年度 （平成 26 年度入試）	マレーシア政府との協定に基づくマレーシア・ツイニング・プログラム入試の導入	マレーシアで２年間日本語で学習したのち編入。質のよい留学生の確保
平成 26 年度 （平成 27 年度入試）	センター試験を課さない AO Ⅰについて普通科・理数科等からの募集を廃止して工業系からの募集に絞るとともに，センター試験を課す AO Ⅱの募集人員を増やした（機械工学科，建築建設工学科，生物応用化学科）	学習基礎力のしっかりした学生の確保
	編入学定員の 10 名増（30 名→40 名）	高専でものづくり教育をしっかり受けた学生の確保
	前期日程で，名古屋試験場に加え，京都試験場を新設	関西圏からの志願者の確保

■　マレーシア・ツイニング・プログラム入試の実績　　（人）

年　度	受験者数	入学者数
平成 26 年度入試	4	4
平成 27 年度入試	9	2

■　工学部編入学定員と志願者数，入学者数の推移　　（人）

年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
定員	30	30	30	30	40
志願者数	150	110	119	115	135
入学者数	31	41	37	40（13）	50（6）

※（）内は留学生数で内数

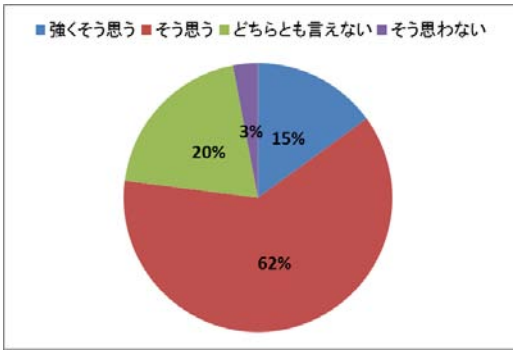
（事務局資料）

⑤　取組の結果，AP に合った学生が確保できている（**資料 1-1-37，38**）。

資料 1-1-37　新入生に関する教員へのアンケートとその結果

設問：

１年生（入学生）は，アドミッション・ポリシーに明記された“求める能力，資質等”を有している，あるいは，アドミッション・ポリシーにおいて求める学生像に適していると思いますか。（助言教員等が１年次生を対象に面談を行い，その結果を踏まえて教員が回答。）



結果：

「強くそう思う」と「そう思う」が回答の約 77%を占めている。

（事務局資料）

資料 1-1-38　入学後半年の学生の GPA

平成 27 年度入学生の入学後半年の時点（前期終了時）での GPA の平均値を以下の表に示す。選抜方法による若干の違いはみられるものの，極端な差はなく，アドミッション・ポリシーに沿った学生が確保できている。

選抜方法	前期日程	後期日程	AO Ⅰ	AO Ⅱ
入学半年後の GPA の平均値	2.21	2.31	2.18	2.17

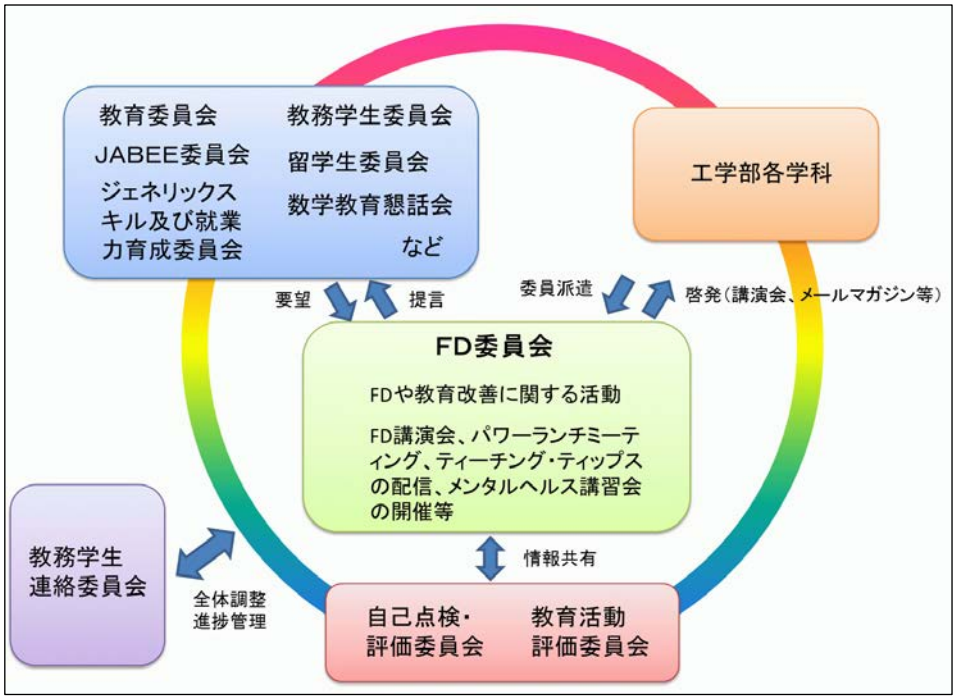
（事務局資料）

●教員の教育力向上や職員の専門性向上のための体制の整備とその効果

【FD，教員評価】

①　FD 委員会を中心に様々な FD 活動が企画･実施され，教員の好評を得ている（資料 1-1-39～41）。

資料 1-1-39　FD 体制



（事務局資料）

資料 1-1-40　FD 活動の例

■　第２期に開始した取組

パワーランチ・ミーティング（平成 24 年度～平成 26 年度），ランチタイムしゃべり場（平成 27 年度～），ティーチング・ティップス（平成 24 年度～），アクティブ・ラーニング通信（平成 27 年度～）

■　活動例

年度	内容	参加人数
平成 22 年度	FD 研修会「心理相談から見える問題点と対応」	105
平成 23 年度	FD 研修会「メンタルヘルス講習会-2010 年度集計を中心に－」	133
平成 24 年度	FD 講習会「２年次（数学）達成度調査アンケートの結果について」	133
	FD パワーランチ・ミーティング（全４回）	36
	ティーチング・ティップス（全８回）　（メール配信）	－
	FD 後援会「ｴﾝｼﾞﾆｱﾘﾝｸﾞ･ﾌｧｼﾘﾃｰｼｮﾝと大学教育への応用」	60
平成 25 年度	FD パワーランチ・ミーティング（全７回）	56
	FD 後援会「ﾌｧｼﾘﾃｰｼｮﾝを活かした問題解決の基本を学ぶ」	65
	ティーチング・ティップス（全 19 号）　（メール配信）	－
平成 26 年度	FD 研修会「学生支援の現状と課題」	124
	FD 研修会「学生支援に役立つリラクゼーションの体験」	105
	FD パワーランチ・ミーティング（全６回）	48
	ティーチング・ティップス（全 23 号）　（メール配信）	－
平成 27 年度	FD 研修会「大学における合理的配慮」	122
	アクティブ・ラーニング通信（全 12 号）　（メール配信）	－
	【FD】ランチタイムしゃべり場（全６回）	53

■　工学部全教員にメール配信された「ティーチング・ティップス」

（１）平成 26 年度配信タイトル

配信したティーチング・ティップスのタイトル

(1) 反転授業、やってます！
(2) 双方向性を持った授業：ガンバってはいますが・・・
(3) 授業アンケート
(4) ５つの手抜き、やってます！
(5)「あーしてもこうならない」から学ぶこと
(6)「講義ノート」から学ぶこと
(7) Potluck Teaching Tips #1
(8)「反転授業」結果報告
(9) e-learning 実施結果に見る学生像
(10) 数学プレースメントテスト：舞台裏のティップス
(11) ティーチング・ティップス
(12) 教育ツールの開発をお勧めします
(13)「授業外学修時間増大法」の体験談、大募集！
(14) 生活時間見直しによる学修時間増大
(15)「青鬼さん」してみた
(16) 魔法のとけたあと
(17) 尋ねるだけ学修時間増大法
(18) 学習時間増大法
(19) 授業外学習時間増大を考える
(20) 良い授業（授業で対話を増やす）をするための試み
(21) 学修時間増大法
(22) 教員のコミュニケーション能力
(23) アクティブ・ラーニングを考える

（２）平成 27 年 7 月 22 日配信内容

＊＊＊　「反転授業」を通じた授業のアクティブ化　＊＊＊

昨年度の「今週のティーチング・ティップス」でも報告しましたが，昨年度より「自宅でビデオ視聴して授業を受け，大学でそのつづきと演習を行うという反転授業」を始めました。反転授業を実施している科目は「反応工学」という科目で，数式を用いて化学反応を定量的に理解し，所望の生成物を生産できる反応器をデザインするという内容です。化学系の学生にとっては不得意科目の一つで，下手をすると過年度生で教室が一杯になります。過去には，３クラス作って週に３回授業したこともあります。ハイ。

【アクティブ化　その１】　学生によるミニ・レクチャー
学生は，自宅で授業ビデオを視聴し，授業ノートを作成します。ビデオだと，途中で止めて考えながらノートがつくれるので，学生たちには好評です。大学での授業の冒頭，そのノートを使って，概要を隣の人にミニ・レクチャーします。聞き役の学生は，必ず２つ以上質問するとともに，５点満点でレクチャーを採点します。冒頭からワイワイガヤガヤと，授業中とは思えない賑やかさになります。なお，座席は学生を８つのグループに分け，グループごとに毎回，列を指定します。学生は来室した順に（１限目の授業です！）前から順に詰めて座りますので，「隣の人」は毎回，変わります。

【アクティブ化　その２】　クリッカーによるアクティブ化
今年からクリッカーの番号をすべて登録し，学生を特定した形でクリッカーを利用しています。ということで，毎回クイズ形式で質問しますので，その結果だけでも成績評価可能なデータが集まります。集計が容易ですので毎回，授業終了後１時間半以内に（すなわち，次の授業が終わるまでに）教員からのコメントを掲示板に張り出して学生との意思疎通を図っています。
　クリッカーは，各種のアンケートにも大活躍。今年は，この授業についての授業外学修時間を毎回，尋ねました。学生各人の学修外学習時間を把握すると，クイズや演習の出来具合との相関も観察できます。現在のところ，本科目に対する週あたりの授業外学修時間の平均値は，２．６８時間です。この値は，当学科でこれまでに実施した調査結果の中では最高レベルですので，反転授業は，授業外学修時間の増大にも繋がっているようです。

【アクティブ化　その３】　演習によるアクティブ化
反転授業の最大のメリットは，授業中の演習に十分な時間が割けることだと思っています。脳が何事かを理解することはきわめて個人的な営みですが，知識を運用し，その知識に修正を加えていくには他人の脳を活用するのが近道です。演習では，一定時間１人で考えたあとは，まわりの学生と相談や教え合いをさせます。解答は，時間が無ければ教員がやってしまいますが，できるだけ学生を指名して黒板で解答させます。指名は，「ひえー」「ラッキー」「なんでやねん！」などのコメントと氏名が表示される自作のランダム指名プログラムを用いています。学生が黒板で解答する際，隣の学生を「後見人」として連れてきても良いことにしており，「後見人」も分からないと，さらに「道連れ」を指名できるルールにしています。とにかく１人でも多くの学生の頭を活性化するよう試行錯誤を続けています。

でも，こうした授業方法を好まない学生もいます。ですから，すべての授業をこんな形式にするのは学生にとって迷惑です。多様性こそが大学の「命」。個性豊かな教員の多様な教育こそが，生徒から学生，そして次世代を託す大人へと育て上げることに繋がると信じています。まー，飛田の場合，あと前期９回，後期１０回「試行」したら授業の愉しみも味わえなくなります。工夫するのも，今のうちです。ハイ！

****
困ったアナタも，悩めるアナタも，つないで作ろう満点授業！
～つながるＦＤ委員会～
****

■　工学部全教員にメール配信された「アクティブ・ラーニング通信」の例（平成 27 年６月 20 日）

＊＊＊　クリッカーと反転授業を導入してみた　＊＊＊

1. はじめに
　過去のティーチング・ティップスやアクティブ・ラーニング通信で紹介されていたクリッカーと反転授業を，私の担当講義でも導入してみましたので，少し紹介させて頂きます．大した内容ではなく恐縮ですが，一部でも皆様の参考（反面教師）になればと思います．

2. 対象講義
　クリッカーと反転授業を導入してみたのは，プログラミングに関する講義です．この講義は，プログラムを説明する講義コマとプログラムを書く演習コマがあり，本講義を担当した初年度には，講義コマで学生がつまらなさそうにしているのを見る機会が多々ありました．
　そのため次年度からは，講義コマでも数十分ごとに講義を中断して，学生にプログラムを書かせるようにしました．これで問題は解決したと思ったのですが，「学生のタイピング速度がバラバラでプログラムの進捗状況がわからない」という新たな問題が発生しました．

3. クリッカーの導入 -成功編-
　そこで，プログラムの進捗を把握するためにクリッカーを導入しました．クリッカーではクイズ

やアンケートの回答結果をリアルタイムで表示できるので，「プログラムが出来ましたか？」という問いを提示して，プログラムを完成させた学生に「はい」と回答させるようにしました．これにより，学生の進捗状況を正確に把握できるようになり，さらには，学生自身も自分のプログラミング速度を他人と比較できるという効果が生まれました．

4．クリッカーの導入 -失敗編-

しかしながら，良いことばかりではありませんでした．前述の利用方法は，講義の理解度に直接は関係がないので，以下に示したようなすごく些細な理由で，クリッカーへのモチベーションが徐々に低下していきました（個人的な感想です）．

・数が多いと意外に重くて持ち運びが面倒
・収納ケースが持ち運びに適していない
・配布に時間がかかるし，返却し忘れる学生がいる

これらの解決策はいろいろとあると思いますが，対策を考える前に，今年はクリッカーの利用を断念してしまいました．．．

5．反転授業の導入 -手探り編-

クリッカーの使用を断念したこともあり，新たに反転授業を導入してみました．反転授業といっても，ランダムで選ばれた学生が，予習してきたサンプルプログラムを教員に代わって説明するという非常に単純なものです．この程度なら簡単にできるだろうと高をくくっていましたが，いざ導入してみると，以下のようになかなかうまくいきませんでした（個人的な感想です）．

・学生の説明をきっちり評価できず徐々にグダグダになる
・結局は教員が説明を補足しないといけない
・思った以上に時間がかかる
・効果が良くわからない

あまり深く考えずに導入した結果，手探り状態のまま今年の講義を終えてしまいました．．．

6．最後に

これまでの自分の取組を振り返ってみて，どんなに良い道具や良い教育方法があっても，使う人のやる気や能力によって効果が全く違うという当たり前のことを痛感しました．一方で，失敗を恐れていては成功することはないという話もありますので，今後も出来る範囲で新しいことを試していきたいと思っています．ということで，これからアクティブ・ラーニング通信で紹介される内容を楽しみにしています．また何かの機会に，新たな失敗談を（できれば成功話も）ご報告できればと思います．

■　パワーランチ・ミーティングにおいて，教員間で議論された問題（平成 26 年度）

・組織改編問題
・教員数減少の問題
・受験生獲得法
・大学院定員確保問題
・新年度の新入生合宿研修について
・初年次教育
・共通教育について
・英語教育・第２外国語教育の問題
・教職科目への対応
・欠席学生や精神的問題を抱える学生への対応
・教育負担の問題
・読書教育
・電子ブックの教育への活用について
・学生の各種大会への参加について
・創成教育・デザイン教育について
・適切な授業科目数について
・学期制・キャップ制について
・建物・教室・実験設備等の問題
・会議時間の問題
・ＦＤへの参画について
・宿舎の問題

など

（事務局資料）

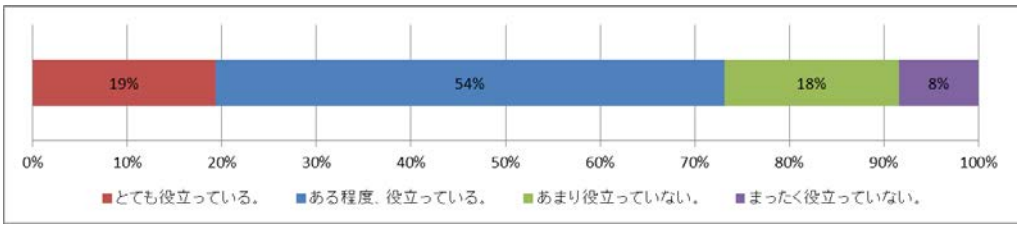
資料 1-1-41　FD 活動に対する教員の評価

（1）FD 活動全般についての教員へのアンケート結果

工学部の教育にかかわる教員に対して実施したアンケートの結果は，FD 活動が有意義であり，第２期に授業改善が進んだことを示している。

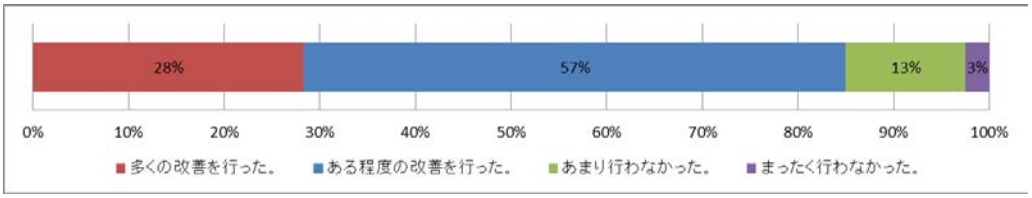
設問　FD 委員会の活動が役に立っていますか？

回答者 119 名の 73%が「とてもあるいはある程度役立っている」と回答。



設問　平成 25 年度から 27 年度の間に授業改善を行いましたか？

回答者 120 名の 85%が「多くのあるいはある程度の授業改善を行った」と回答。

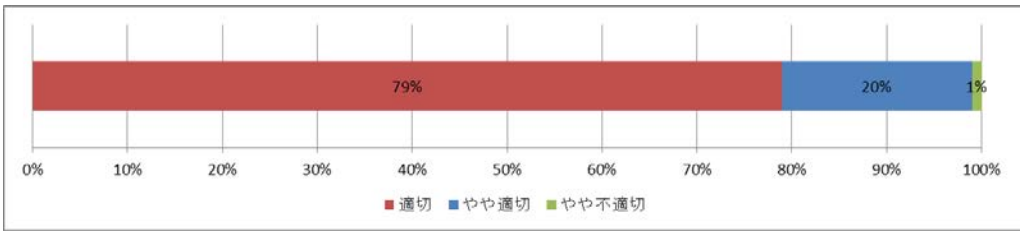


（2）FD 研修会参加者に対するアンケート結果の例

以下は，平成 26 年 7 月 11 日開催の FD 研修会「学生支援の現状と課題」（参加者数 124 名）における参加者アンケートの結果の抜粋。ほとんどの参加者が研修内容は適切であり，分かりやすい説明であったと回答している。

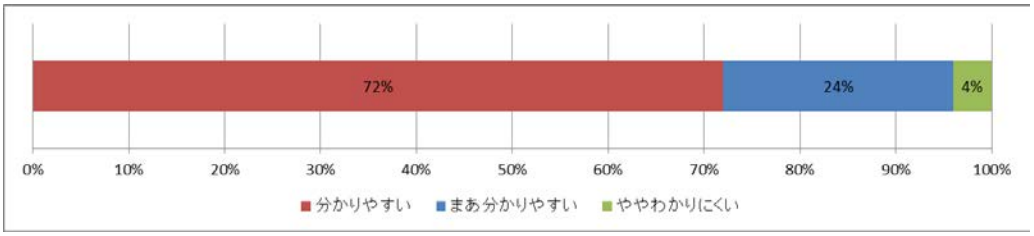
設問　研修内容は適切でしたか。

99%の回答者が「適切」又は「やや適切」と回答している。



設問　研修内容はわかりやすかったですか。

96%の回答者が「適切」又は「やや適切」と回答している。



（事務局資料）

② 「授業改善のためのアンケート」を毎年実施し，授業改善に結び付いている（**資料 1-1-42**）。

資料 1-1-42 「授業改善のためのアンケート」に基づく授業改善

（1）授業改善のためのアンケート（用紙）

授業改善のためのアンケート

工学部及び工学研究科
自己点検・評価委員会

このアンケートは皆さんが受講した授業をより良いものに改善するため，授業の中間と期末に実施します。このアンケート結果と，それに対する教員の取組を可能な範囲で公開し，皆さんの意見を授業の改善に大いに役立てることを目指しています。

教員名	授業科目名

● **この授業について，どのように思いますか。当てはまる項目を○で囲んでください。**

A．十分満足している　B．ある程度満足している　C．多少不満がある　D．大いに不満がある

● **この授業に関して，特に改善して欲しいと思う項目があれば×，大変良いので今後も続けて欲しいと思う項目があれば○を記入してください。**

1．（　　）シラバスに沿った授業の進行（授業計画，休講・補講，開始・終了時間など）
2．（　　）説明の分かりやすさ
3．（　　）学生の質問への対応
4．（　　）板書の見やすさ
5．（　　）視聴覚教材の使い方
6．（　　）教科書やプリントなどの授業資料
7．（　　）
8．（　　）
9．（　　）

● **教員から別の質問が示された場合には，各質問について当てはまる項目を○で囲んでください。**

10.　A　B　C　D
11.　A　B　C　D
12.　A　B　C　D

● **この授業に対する意見・要望などについて，具体的に記述してください。**

○この授業で良かった点

○この授業で改善してほしい点
（どのように改善すれば，どれだけ授業の成果があがりそうか，建設的な意見も書いてください。）

○その他 意見・要望等

ご協力ありがとうございました。差し支えなければ，所属，氏名を記入してください。
このアンケートは，授業の成績には影響しません。

学科・専攻　　氏名

※15 回の授業の半分程度が終了した段階で「授業改善のためのアンケート」を実施し，その結果を受けて行った改善を以下の「授業改善のためのアンケート対応報告書」によって報告することが義務付けられている。授業の最終段階で再び「授業改善のためのアンケート」を実施し，改善の効果を含めて最終評価を行う（以下に改善例）。

（２）授業改善のためのアンケート対応報告書（用紙）

平成２７年度（後期）　授業改善のためのアンケート対応報告書

（提出期限　月　　日（　））

所属専攻	氏名
授業科目名	
受講学生の所属学科	M　E　I　A　S　B　P　H　F　N

① 学生からの意見・要望等の中で，学部運営の改善に役立つと思われるもの（施設設備・カリキュラムの改善など）がありましたら，ご記入下さい。（関連委員会等への報告事項とします。）

② 教員同士で情報を共有することにより，授業改善の参考になることがありましたら，ご記入下さい。（この欄への記入内容のみ，原則としてそのまま V-desk に掲示して教員同士で情報を共有できるようにします。）

③ アンケート結果等に対して,どのような工夫・改善・学生へのフィードバックを行ったか，あるいは次年度に行いたいか，具体的にご記入ください。また，学生の意見に対する返答やメッセージをご記入ください。（この欄への記入内容のみ，原則として全文を学生に対して公開します。）

（３）「授業改善のためのアンケート」を受けて行った授業改善の報告例

・後半は，学生を指名して質問に答えさせたり，演習問題の解答を板書させて，解答方法や正答を解説する回数を増やした。指名時に不在の学生は，カードリーダー記録が出席でも欠席扱いにした。その結果，前年度と比較して期末試験受験者数が減少，不合格者数が減少，合格者の成績は向上した。
・第１回目のアンケートでは，演習問題を増やして欲しいとの要望が多く見られたので，授業の後半では特にこの意見に留意した。

・授業内容がわかりづらいとの意見に対し，内容も具体的な例を示し，理解に手助けとなるように工夫した。
・以前より，この科目に対して“難易度が高い”との感想が幾分多く，また，期間半ばの中間試験の結果で以降の受講を欠席する受講生が増えていた。そこで今年度は本科目の授業内容をやや減らすと共に実施順序を再編し，期間前半になるべく易しい内容がくるようにした。その結果，今年度１回目アンケートでは“難しい”との感想はほとんどなく出席率も低下しなかった。しかし，２回目では依然，難しいとの回答が幾らかあった（最終合格率も前年度からあまり改善されなかった）。次年度は授業内容後半部について，（内容のレベルを大幅に落とすことは好ましくないので，）説明方法等を再度吟味し，より分かり易くなるよう検討したい。
・スライドの速度が速いとの指摘を受け，学生に声をかけ，筆記速度を確かめて頁送りを行った。
・パソコン画面をスクリーンに映写したものも，ノートに取らせていましたが，学生さんから「プリントとして配布してほしい」との要望がありました。また，「板書の量が多くて内容が理解できない」「板書していないときの説明をノートに書くのが大変」という苦情もありました。ノートに書くことは，読んで（または聞いて），認識して，書くということであり，この３つのプロセスで，より理解し覚えてもらえると思っています。ただし，早く書き取ることに必死だと，かえって理解の妨げになるかもしれません。そこで，パソコン画面をスクリーンに映写したものの一部を印刷して配布するようにしました。また，黒板に書いていた，正確に書き取りにくい図の一部は，印刷して配布しました。
・「色で重要なところを表していただけるとわかりやすい」という学生さんからの意見がありました。次の年度からは，数種類の色で分けて記すようにしました。
・「導出の過程のプリント（丸うめとか）があったら助かる・・・」「スライドを 使う授業なら穴うめプリントで内容を進めていくといい・・・」という学生さんからの意見がありました。一部の配布資料をそのような空欄に追記するようなものにしました。

（事務局資料）

③　教員個人の教育活動評価を定期的に実施している。平成 26 年度には全学方針に沿った新基準で評価を行い（**資料 1-1-43**），結果は教員の処遇にも反映された。これは，大学機関別認証評価（平成 27 年度受審）の結果で，「主な優れている点」として高く評価された。

資料 1-1-43　全学方針に基づく新基準により実施した教育活動評価

■　福井大学教員評価規程（抜粋）

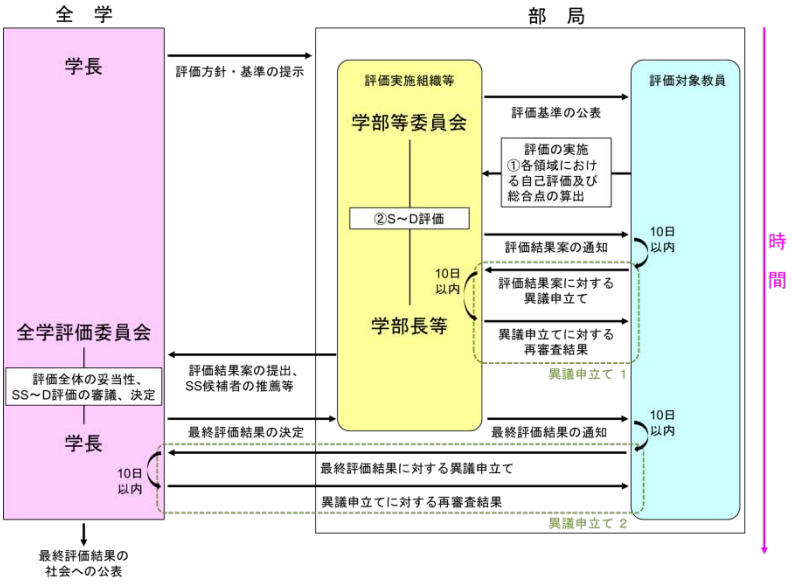
（評価の目的）
第２条　教員評価は，次の各号に掲げる目的のために実施する。
(1) 教員が自己の教育，研究，社会貢献・国際交流等諸活動を点検し，評価することにより，自己の意識改革を促すとともに，本学の教育研究活動等の活性化を促進する。
(2) 本学が進むべき方向性を掲げた長期目標や中期目標・中期計画に関する取組に携わる教員を積極的に評価することにより，各目標の円滑な達成を目指す。
(3) 評価結果を公表することにより，本学が広く国民の理解と支持を得られるよう努め，もって社会への説明責任を果たす。
(4) 教員の実績等を客観的かつ公正に評価し，評価結果を人事評価へ適切に反映させる。
（対象者）
第３条　教員評価の対象は，国立大学法人福井大学職員就業規則（平成 16 年福大規則第 7 号）第２条第２項に定める教育職員のうち，教授，准教授，講師，助教及び助手であって，評価対象期間中に１年以上在籍している者とする。ただし，テニュアトラック推進本部に所属する教員は除く。

（対象期間等）
第４条　教員評価は，３年ごとに実施し，評価を実施する年度の前年度以前の３年間（本学における在籍期間が３年未満の場合は，当該期間）を対象とする。
第７条　評価は，教育活動，研究活動，社会貢献・国際交流活動及び管理運営活動の４領域で評価を行う。ただし，医学部に所属し診療活動に従事する教員は，診療活動を加えた５領域で評価を行うものとする。
２　センター等の教員に対する評価は，前項に掲げる領域に「センター等の設置目的に合致した活動（以下「特定活動」という。）」を加えることができるものとし，その内容は各センター等が別に定める。
（評価基準等）
第８条　各評価領域の活動状況の評価は，次に掲げる評点及び標語に基づき行う。
SS　活動状況が極めて優れている
S　活動状況が優れている
A　活動状況が良好である
B　活動状況が適切である
C　活動状況に一部改善を要する
D　活動状況に問題があり大幅な改善を要する
２　前項に定める評価の目安とするための評価指針及び評価基準（以下「評価基準等」という。）を，別表のとおり定める。
３　部局の長は，評価に際し，所属する教員に対し評価基準等を公表するものとする。

（中　略）

第 12 条　学長は,最終評価結果を次の各号に掲げる方法により,人事評価に反映させることができる。
(1) SS 及び S の教員に対する昇給
(2) C の教員に対する指導
(3) D の教員に対する改善勧告又は号給の調整等

■　評価のフローチャート



■　評価結果

	SS	S	A	B	C	合計
教育活動		6	105	23		134
研究活動		22	82	27	3	134
社会貢献・国際交流活動		5	98	24	7	134
管理運営活動		12	109	13		134
総合評価	2	5	88	39		134

■　教員個人評価結果の公表（一部抜粋）

SS 評価を受けた教員の氏名，評価理由は WEB 上で公開される。

教員名：葛原　正明	所属：大学院工学研究科電気・電子工学専攻	職：教授
教育面において，教育評価に基づく教育努力奨励体制の構築を目的として工学部で設けた年度優秀教員称号を平成 21 年度に授与され，また，海外の教育機関（オーストリア，スイス，台湾，香港など）から複数回にわたり招聘されている。さらに，工学研究科博士後期課程においては計 7 名（内 3 名は学位取得修了，4 名：在学中，1 名：留学生，3 名：社会人）の学生を指導しており本学の教育活動の円滑な実施に多大なる貢献をしている。 研究面では，文部科学省，経済産業省等から総額 3 億円以上の外部資金を獲得し，間接経費（約 4 千万円）の確保に貢献している。さらに，研究に取り組んでいる窒化物半導体分野において極めて優れた成果を上げており，平成 25 年度には応用物理学会から最高会員の称号であるフェローの称号を授与された。また，応用物理学会の欧文誌である JJAP/APEX 編集委員として編集貢献賞を受賞している。その他，社会貢献，国際交流活動，管理運営活動も良好である。 以上の理由から SS と判定した。		

教員名：沖　　昌也	所属：大学院工学研究科生物応用化学専攻	職：准教授
教育面においては，教育評価に基づく教育努力奨励体制の構築を目的として工学部で設けた年度優秀教員称号を平成 24 年度に授与され，また，工学研究科博士後期課程の学生確保に多大な貢献をしている。研究面においては，学長奨励賞を受賞し，先端医工連携研究推進特区の特区研究者に選ばれている。また，戦略的創造研究推進事業個人型研究（さきがけタイプ）に採択され，高額の外部資金を獲得している。社会貢献・国際交流活動，管理運営活動も良好である。 以上の理由から SS と判定した。		

(www.u-fukui.ac.jp/wp-content/uploads/h26evaluation.pdf)

（事務局資料）

④　学生の評価に基づく優秀教員称号授与を行っている（**資料 1-1-44**）。優秀教員には教育研究費が追加支給され，その優れた取組はウェブ上で公開される。

資料 1-1-44　工学部優秀教員称号授与制度

■　制度の概要

顕彰制度	制度の概要
優秀教員，The teacher of the year	1．教育評価に基づく教育努力奨励体制の構築を目的とするため，工学部に年度優秀教員称号授与制度を設ける。 2．優秀教員は，各学科から当該学科学生（３年生）の投票により，毎年度各学科２名の計 16 名を選出する。なお，非常勤教員は対象者から除外する。 3．各学科第１位の優秀教員には，THE TEACHER OF THE YEAR の称号を授与する。 4．各学科第１位の優秀教員については学部長より表彰状を授与し，次年度の夏と冬の勤勉手当に係る成績率Ａ該当候補者とするとともに，奨学寄附金から教育研究費（15 万円）の使用権利を付与する。第２位の優秀教員については奨学寄附金から教育研究費（10 万円）の使用権利を付与する。

（「優秀教員の称号授与について」より抜粋）

■　優秀教員レポートのインターネット上での公開



（http://www.eng.u-fukui.ac.jp/education/staff/index.html）

（事務局資料）

⑤　複数の調査は，第２期に教員の教育力が向上していることを裏付けている（**資料 1-1-45，P6-141 後掲資料 2-1-16**）。これは，FD 活動が成果をあげていることの証左である。

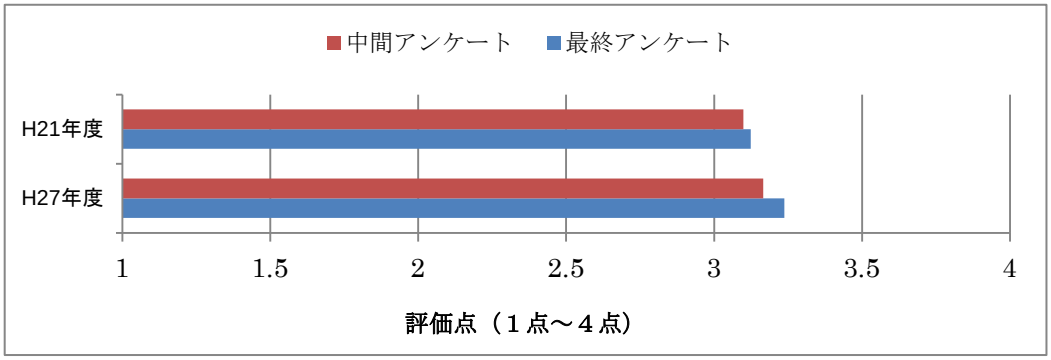
資料 1-1-45　教員の教育力向上を裏付ける学生アンケート結果

個々の科目（専門科目）において受講生対象に行っている「授業改善のためのアンケート」，毎年実施している「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」，３年ごとに実施している「学生生活実態調査」の結果を分析した結果，個々の授業科目に対する満足度と教育全般に関する満足度のいずれについても第２期の最終年度（平成 27 年度）の方が第１期期間の最終年度（平成 21 年度）よりも高く，さらに第２期中において授業の理解度の向上が見られることがわかった。これらの結果，および多くの教員が FD 活動を評価し授業改善を実践しているという調査結果（**P6-43 前掲資料 1-1-41**）から，教員の教育力は向上していると考えられる。

■　**「授業改善のためのアンケート」における学生の評価**

平成 21 年度と平成 27 年度に実施した「授業改善のためのアンケート」で設けた設問「この授業について，どのように思いますか。」に対する学生の回答について，十分満足している＝４点，ある程度満足している＝３点，多少不満がある＝２点，大いに不満がある＝１点，として点数化した結果を示す。対象科目は工学部専門科目，対象学年は全学年である。「中間アンケート」は授業の中間段階で，「最終アンケート」は授業の最終段階で行うアンケートである。以下のように，平成 27 年度の方が，平成 21 年度よりも良い結果が得られている。

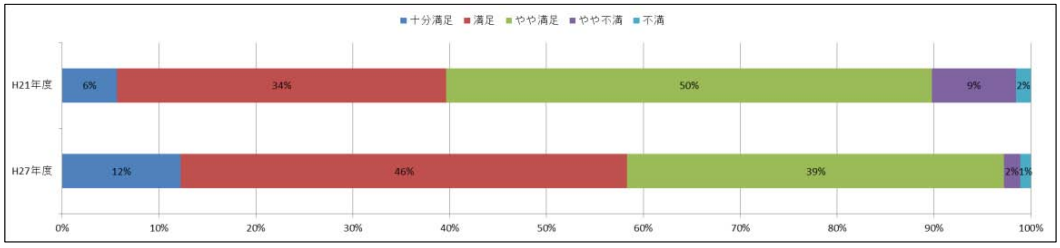
・中間アンケートと最終アンケートのいずれについても，平成 27 年度の評価点の方が高い。
・最終アンケートの評価点と中間アンケートの評価点の差も，平成 27 年度の方が大きい（中間アンケートの結果が授業の改善により活かされている）。



（「授業改善のためのアンケート」集計結果より）

■　**教育全般に関する満足度**

・共通教育満足度：平成 27 年度の方が平成 21 年度より満足度が高い（**P6-9 前掲資料 1-1-8**）。
・専門教育満足度：平成 27 年度の方が平成 21 年度より満足度が高い（下図）。

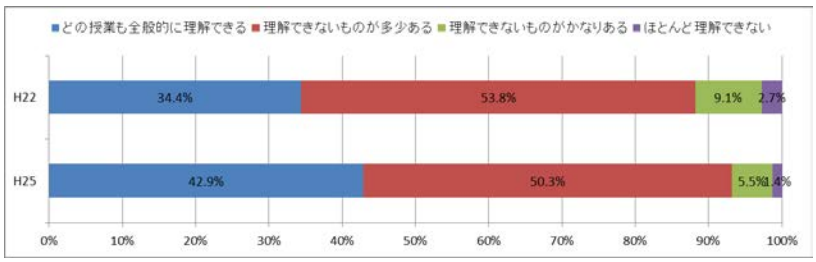


※平成 21 年度および平成 27 年度「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」の結果から工学部卒業予定者の回答を抽出（平成 21 年度のアンケート対象者は卒業予定者のみを対象としているため，全学生対象に実施した平成 27 年度の結果から工学部卒業予定者の回答のみを抽出し比較した。）

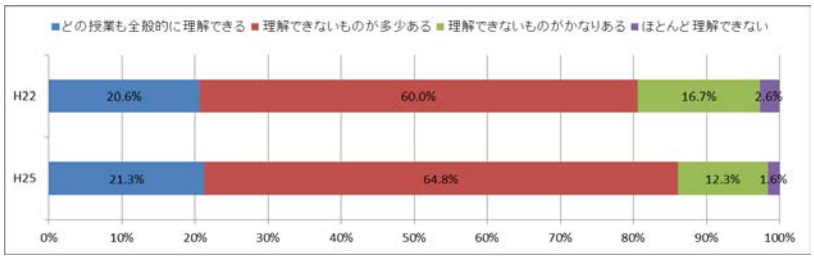
■　授業内容の理解度

共通教育，専門教育とも，授業内容の理解度が第２期中に向上した。

共通教育
理解度



専門教育
理解度



※平成 22 年度および平成 25 年度「学生生活実態調査」より抜粋。

（事務局資料）

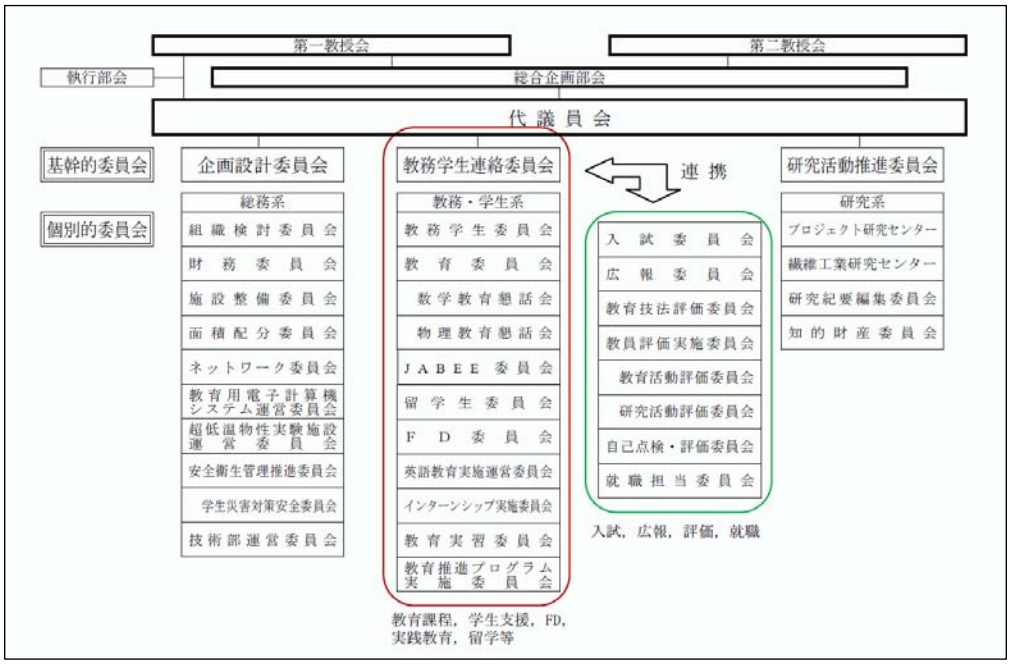
●教育プログラムの質保証・質向上のための工夫とその効果

【教学マネジメント体制】

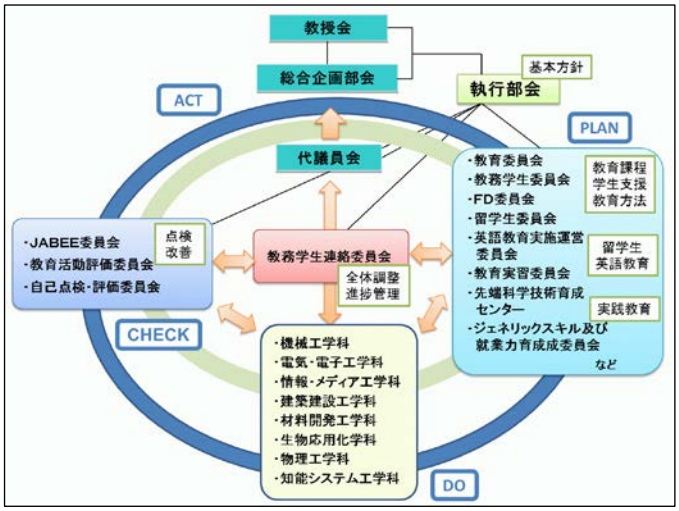
①　教育に係る基幹的委員会として教務学生連絡委員会を置き，工学部長のマネジメントのもと，教育課程の改善，評価，FD 等を担う個別的委員会が連携して PDCA サイクルを回している（**資料 1-1-46～48**）。

資料 1-1-46　教学マネジメント体制

■　委員会組織



■　教務学生連絡委員会を中心としたPDCAサイクル



（事務局資料）

資料 1-1-47　教務学生連絡委員会要項（抜粋）

福井大学工学部及び大学院工学研究科教務学生連絡委員会要項

（設置）

第１　福井大学大学院工学研究科に，福井大学工学部及び大学院工学研究科教務学生連絡委員会（以下「委員会」という。）を置く。

（目的）

第２　委員会は，次ぎに掲げる事項を協議するとともに，企画及び調整に当たる。

（１）工学部及び大学院工学研究科の教務，学生生活及び教育改善に係る中期目標，中期計画に関する事項

（２）工学部及び大学院工学研究科の教務，学生生活及び教育改善に係る各委員会等の活動に関する事項

（３）その他工学部及び大学院工学研究科の教務，学生生活及び教育改善に関し，協議会が必要と認めた事項

（組織）

第３　委員会は，次の各号に掲げる委員をもって組織する。

（１）学務担当副研究科長

（２）共通教育センター長又は副センター長（工学研究科所属教員に限る）

（３）工学部及び大学院工学研究科教務学生委員会委員長

（４）工学部及び大学院工学研究科留学生委員会委員長

（５）工学部及び大学院工学研究科教育委員会委員長

（６）工学部ＪＡＢＥＥ委員会委員長

（７）工学部ＦＤ委員会委員長

（８）工学部及び大学院工学研究科教育活動評価委員会委員長

（９）工学部及び大学院工学研究科自己点検・評価委員会委員長

（10）先端科学技術育成センター長

（11）高度人材育成センター長

（12）実践大学院工学教育実施委員会委員長

（13）派遣型大学院工学教育実施委員会委員長

（14）博士人材キャリア開発支援副センター長

（15）その他委員会が必要と認めた者

（委員長及び委員長）

第４　委員会に，委員長及び副委員長を置く。

２　委員長は，学務担当副研究科長をもって充て，副委員長は，委員の互選によって選出する。

（事務局資料）

資料 1-1-48　委員会の活動例

■　教務学生連絡委員会

基幹的委員会である教務学生連絡委員会は，各委員会の活動を掌握し，調整し，必要な指示を行う。

教務学生連絡委員会議事要旨

日　　時　　平成２５年４月１２日（金）　１７時００分から１７時５０分まで
場　　所　　工学部多目的会議室

議　　題
１．各委員会報告について
●橋本明留学生委員会委員長から、グローバル人材育成推進事業での留学について、授業期間等と重なる場合の対応が今後の検討課題になっている旨の報告があった。なお、この件については、今後グローバル人材育成推進事業実施委員会で原案を作成し、随時、本委員会で報告していくこととした。
●田岡高度人材育成センター部門長から、昨年度の成果発表会を踏まえ、今年度から海外インターンシップについては、企業での実践ではなく研究に近いので長期インターンシップ事業からはずす方針とし、今後海外インターンシップを希望する学生がいた場合には、グローバル人材育成事業に参加するよう勧めることとした旨、また４月１７日に今年度の説明会を開催し、参加人数をみてから予算配分等を検討する予定である旨報告があった。
●山田徳教育委員会委員長から、原子力・エネルギー安全工学専攻の早期履修について機械、電気、建築、生物の学生が履修できるようになったこと、前期課程の学部とのシームレス接続や実践力育成強化について全専攻で実施内容が決定したこと、また前期課程の研究指導計画については一部修正した旨の報告があった。
　また、博士後期課程設置審で提出した科目名について一部間違いがあった旨の報告があり、文科省へ届けることとした。（電子制御特論→電力制御特論）
●飛田ＦＤ委員会委員長から、ＦＤ委員会を４月２６日１３時～１６時で、グループディスカッションのやり方について、ワークショップ形式で開催するので参加いただきたい旨の依頼があった。
●堀博士人材キャリア開発支援副センター長から４月１８日開催のＣＤＰＩＴ交流会について案内があった。
２．その他
●小野田研究科長から、資料に基づき、第２期中期目標・中期計画の達成状況に関する学内ヒアリングにおける教育関係の指摘事項や今後のスケジュールについて説明があり、今年度は成果や効果に係るデータ、エビデンスを収集いただきたい旨の依頼があった。
●児嶋工学部支援室長から、資料に基づき、平成２５年度「教育評価に基づく競争的経費」に係る公募について説明があり、なるべく応募いただき、工学部の予算負担を少しでも減らすよう努力いただきたい旨の依頼があった。また、教育改革推進経費としてJABBE の新規審査料や認定維持料に係る予算がついた旨の報告があった。

以　上

■　教育委員会

個別的委員会である教育委員会は教育課程の改善や教育に係る事項などを扱う。

工学部及び大学院工学研究科教育委員会議事日程

日　時　　平成 25 年 12 月 20 日（金）　13：30　～　15：00

場　所　　学生支援センター会議室

議　題
1　大学院授業科目早期履修制度の実施学科確認について
2　工学部専門教育課程表の一部改正（案）について　…… 資料 No. 1
3　工学部履修要項の一部改正（案）について　…… 資料 No. 2
4　平成 26 年度大学院工学研究科等の教育課程表の改正（案）について　… 資料 No. 3
5　平成 25 年度中期計画（工学部・工学研究科）
　　教育委員会担当部分について　…… 資料 No. 4
6　平成 26 年度に係る年度計画（工学部・工学研究科）
　　教育委員会担当部分について　…… 資料 No. 5
7　第 2 期中期計画（教育）の到達目標等の設定について　…… 資料 No. 6
8　その他
・　早期履修可能な科目について
・　次回定例委員会の開催について

（事務局資料）

② 教学マネジメント体制のもと，海外大学ベンチマーキングの実施，平成 28 年度の学部改組の決定などを行った（**資料 1-1-49**）。

資料 1-1-49　教学マネジメント体制のもとでの活動事例

項　　目	内　　容	時　期
中期目標・中期計画の達成度管理 （**P6-51 前掲資料 1-1-46**）	毎年度，教務学生連絡委員会の主導で工学部内の次年度計画を策定するとともに，当該年度の進捗状況を把握し，目標達成のための対応を取っている。	随時
キャリア教育計画ワーキング	工学部長の主導でワーキングを設置し，キャリア教育プログラム「みらい協育プログラム」を設置した。（平成 23 年度に試行，平成 24 年度から実施）	平成 22 年 ～平成 23 年
DP と CP の策定 （**P6-80 後掲資料 1-2-2**）	工学部長の指示により，教育委員会の下にディプロマポリシー・カリキュラムポリシーWG を設置し，工学部および各学科の DP と CP の策定を行った。	平成 23 年
外部評価の実施 （**P6-55 後掲資料 1-1-50**）	外部評価準備・実施特別委員会を設置し，外部評価に向けた準備を行い，平成 24 年度に外部評価を実施して学科構成などについて課題を抽出し，平成 28 年度改組に活かされた。	平成 24 年度
海外大学ベンチマーキングの実施	大学の方針のもと，工学部長を長とし，教育・教務関連委員会の委員長等をメンバーとする視察団を米国に派遣した。複数の大学等で調査を行い，教育課程の国際性や教学ガバナンス等について工学部の抱える課題を整理し，平成 28 年度改組に活かされた。  	平成 24 年度
CP と DP の見直し	教育委員会において，GGJ 事業によるグローバル人材育成を踏まえ，DP と CP の見直しを行った。	平成 26 年度
カリキュラムマップ，カリキュラムツリーの作成 （**P6-83 後掲資料 1-2-6**）	全学方針を受け，工学部長の指示のもと，FD 委員会と各学科が協力してカリキュラムマップ，カリキュラムツリーが作成・公開された。 平成 24 年度：全学科のカリキュラムマップ作成。 平成 26 年度：カリキュラムマップを見直すとともに，カリキュラムツリーも作成し，公開（全学科）。	平成 24 年度～ 平成 26 年度
学部改組 （**P6-11 前掲資料 1-1-10, 11**）	工学部長のイニシアチブにより，将来計画検討ワーキングを設置し，外部評価や海外ベンチマーキングの結果，および社会的要請などを踏まえて工学部の課題を整理して学部改組の計画立案を行い，平成 28 年度改組を実現させた。late specialization の考え方に基づく新学科体制や，工学基礎教育支援センターの設置など，改組後の基本的な枠組みは，本ワーキングが中心となり，執行部や各学科と連携しながら構想し実現させた。	平成 26 年度 ～平成 27 年度
学生 FD 活動 （**P6-60 後掲資料 1-1-53**）	平成 25 年度に全学で実施した「ブラウン大学 Kathy M. Takayama FD センター長による国際的視野からの教育活動に対する外部評価」において，「学生を大学改革の輪に入れていくこと」の重要性が指摘され，それを受け工学部では FD 委員会が「学生 FD」の取組を開始した。	平成 27 年度

（事務局資料）

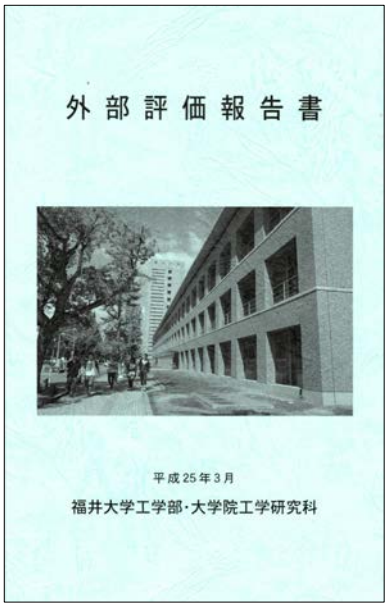
【外部評価・第三者評価】

① 平成 24 年度の外部評価では，教育 GP 等の特色ある教育活動に対し高い評価を得た。指摘された課題に対しては機敏に対応するとともに，平成 28 年度学部改組に適切に生かした(**資料 1-1-50**)。

資料 1-1-50　外部評価の概要と結果

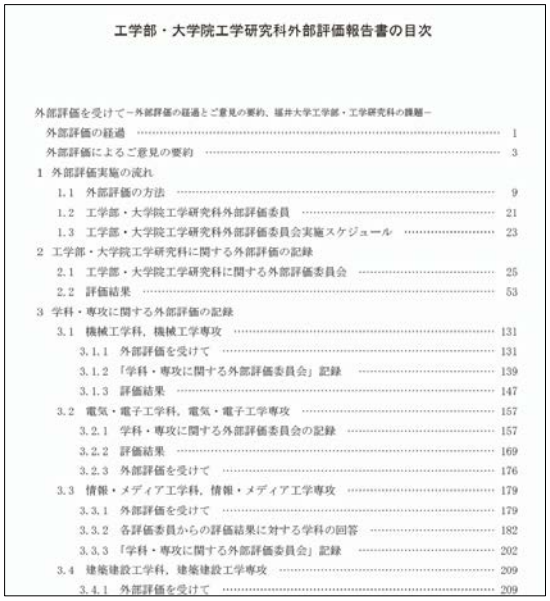
平成 24 年 11 月に組織・管理運営，教育活動，研究活動，学協会・社会活動と国際交流に加えて，第１期中期目標・中期計画に沿った活動および工学研究科改組への取組等に対し，前回の外部評価（平成 17 年 12 月）以降の７年間（平成 17 年度～平成 23 年度）の活動とそれら成果を対象として，42 名の委員による外部評価を実施した。教育 GP の採択をはじめとする特色ある教育の取組が高く評価された。一方で，学部の８学科体制や学部と大学院（前期課程）の関係，改善の取組の共有体制などについて課題が指摘され，第２期中に改善を行った。

■　外部評価報告書（表紙と目次（抜粋））


外部評価報告書

平成 25 年 3 月

福井大学工学部・大学院工学研究科


工学部・大学院工学研究科外部評価報告書の目次

外部評価を受けて－外部評価の経過とご意見の要約，福井大学工学部・工学研究科の課題－
外部評価の経過 …… 1
外部評価によるご意見の要約 …… 3
1 外部評価実施の流れ
1.1 外部評価の方法 …… 9
1.2 工学部・大学院工学研究科外部評価委員 …… 21
1.3 工学部・大学院工学研究科外部評価委員会実施スケジュール …… 23
2 工学部・大学院工学研究科に関する外部評価の記録
2.1 工学部・大学院工学研究科に関する外部評価委員会 …… 25
2.2 評価結果 …… 53
3 学科・専攻に関する外部評価の記録
3.1 機械工学科，機械工学専攻 …… 131
3.1.1 外部評価を受けて …… 131
3.1.2 「学科・専攻に関する外部評価委員会」記録 …… 139
3.1.3 評価結果 …… 147
3.2 電気・電子工学科，電気・電子工学専攻 …… 157
3.2.1 学科・専攻に関する外部評価委員会の記録 …… 157
3.2.2 評価結果 …… 169
3.2.3 外部評価を受けて …… 176
3.3 情報・メディア工学科，情報・メディア工学専攻 …… 179
3.3.1 外部評価を受けて …… 179
3.3.2 各評価委員からの評価結果に対する学科の回答 …… 182
3.3.3 「学科・専攻に関する外部評価委員会」記録 …… 202
3.4 建築建設工学科，建築建設工学専攻 …… 209
3.4.1 外部評価を受けて …… 209

■　外部評価の様子





■　評価結果

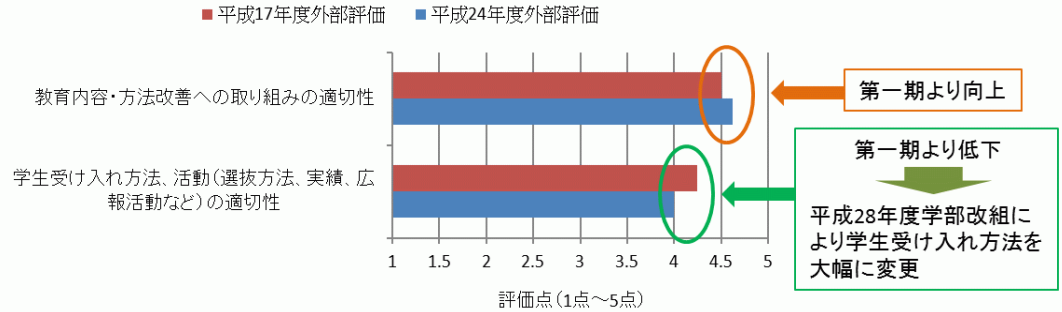
学科と専攻を合わせて評点（５点満点）を付ける方式であったが，８学科と独立専攻以外の８専攻はほぼ対応しており，学科に対する評価の目安と考えることができる。(M：機械，E：電気・電子，I：情報・メディア，A：建築建設，S：材料開発，B：生物応用化学，P：物理，H：知能システム)

評価項目		M	E	I	A	S	B	P	H	平均
教育活動	学位授与方針（DP），教育課程編成方針（CP）の適切性	5	4	3	4	3	5	5	3	4.0
	学生の受け入れ方法，活動の適切性	4	5	3	4	4	4	4	4	4.0
	教育内容・方法改善への取り組みの適切性	5	5	5	4	4	4	5	5	4.6
	学生指導支援体制の適切性	4	5	4	4	4	5	5	5	4.5
	教育環境・設備の充実度	4	4	3	4	3	3	3	4	3.5
	教育の国際的競争力の充実度	4	4	4	4	3	4	4	4	3.9
	就職支援への取り組みの適切性	5	5	5	4	5	5	5	4	4.8

（福井大学工学部・大学院工学研究科 外部評価結果報告書（平成 25 年３月）より抜粋）

■　第１期との比較

第１期の外部評価（平成 17 年度）と共通な評価項目について，第２期との比較を行った結果，教育の内容や改善については第２期の方が高評価であった。第１期より低い評価となった学生受入れ方法については，平成 28 年度学部改組により改善の対応を行った。



■　指摘された個別の事項への対応

指摘された事項	指摘を踏まえた改善等
学科が多く，細分化されているが，全体として大括りにして，後はコース制のような緩い形のほうがこれからの技術者の養成にはよいのではないか。	工学部・工学研究科に将来計画検討 WG を設置し，外部評価や地域産業界への意見聴取の結果やミッションの再定義等を踏まえ，８学科を改組して５学科 11 コースに再編することを決定した（平成 28 年度から実施（**P6-11 前掲資料 1-1-10**））。教育課程は全面的に見直し，養成人材像→DP・CP→カリキュラム・マップ→科目設定，の手順を踏んで質と体系性を確保するとともに，late specialization の考えを取り入れて柔軟で学修者主体のカリキュラムとした。また，単位の実質化の観点から卒業要件の単位数の見直しを行った（130 単位から 124 単位へ）。以上により，指摘を踏まえ社会の期待に応えた。
「ファイバーアメニティ工学」※，「原子力・エネルギー安全工学」という独立した専攻を，８つの学科が支えている。２専	上記改組の一環として，物質・生命化学科の中に繊維・機能性材料工学コースを置き，機械・システム工学科の中に原子力安全工学コースを置いた。これにより，平成 28 年度から繊維と原子力に係る人材育成が学部から体系的に行われることとなり，両分野

攻の学部との関係と相互の連携の状況が捉えにくい。 ※平成25年度より繊維先端工学専攻に改組	の教育プログラムの質と体系性が大きく改善された。
DPやCPについて，工学部の理念・目的との整合性IMAGINEERとの関連の明確化の観点から，再検討が望ましい。	DPやCPについては，指摘を踏まえ，平成26年度に教育委員会を通して，全学科が改正，見直しに取り組んだ。 さらに,平成27年度にはカリキュラムマップを見直し,カリキュラムツリーを作成した。
学部と大学院の専門教育のシームレス化も検討課題である。	平成25年度から，大学院授業科目の早期履修制度に参加する学科を５学科から７学科に拡大し，シームレス化を進めた。大学院生の研究発表を学部学生が聞く機会や大学院の特別講義の４年生の聴講なども推奨している。平成28年度の改組により，原子力と繊維に関わるコースが学部に設けられることになり， 両分野の教育について大学院の専門教育と接続する学部教育が整備された。
各種GP等で成果を上げた取組の継続のためには，取組の整理・統合などによる効率化が必要ではないか。	各種GP等で導入し窓口が分かれていた複数のインターンシップを高度人材育成センターで扱うようにした。また，ジェネリック・スキル及び就業力育成委員会を立ち上げ，学士力・社会人基礎力・就業力の育成にかかわる取組の効率化を目指している。
学生の海外留学促進のための環境整備ならびに留学生の受入れ地域の多様化が望ましい。	海外留学促進には，GGJ事業（**P6-14 前掲資料1-1-13**）で対応している。海外留学（送り出し）促進の一環として英語授業の週２回開講やTOEIC等による語学力向上に取り組んでいる。また，平成25年度（平成26年度入試）からマレーシア政府との協定に基づくマレーシア・ツイニング・プログラム入試の導入を行った。
独自の改善の取組には 興味深いものがいろいろあるが，これらを学部内で紹介しあい共有する仕組みはどうか。	平成24年度から，(i)個々の教員の教育改善の取組事例を全員で共有することを目的に，「ティーチング・ティップス」が定期的にメール配信され（**P6-40 前掲資料1-1-40**），(ii)工学部執行部と各教員の率直な意見交換の場として「パワーランチ・ミーティング」が設けられている。これらはFD委員会が企画している。左の指摘によりこうした日常的なFD活動の重要性が改めて認識され，現在まで継続されて教育の質の改善に資している。
留年率の精査と対策が必要。	教務学生委員会を中心に長期欠席者の調査等を行うとともに，学生総合相談室と連携して対応にあたっている。クォーター制の一部導入により，通過率を向上させた学科もある（建築建設工学科）。 平成25年10月から，半年ごとに保護者に成績表を送付し，保護者とも協力して学生サポートに取り組んでいる。また，長期欠席学生，未履修登録学生については，教職員が連携してサポートする体制を整えた。 こうした取組により，第２期の留年率は低下傾向を示した（**P6-138 後掲資料2-1-12**）。
学生のメンタルケア等の更なる充実が望ましい。	教務学生委員会を中心に長期欠席者の調査等を行うとともに，学生総合相談室と連携して対応にあたっている。工学部執行部，学生総合相談室，保健管理センターが定期的に懇談を持つことによる，相互の協力体制をつくった。また，教授会においてメンタルヘルスに関する定例的な講演会を開催するようにした。

※「指摘された事項」は，福井大学工学部・大学院工学研究科 外部評価結果報告書（平成25年３月）より抜粋

（事務局資料）

② JABEE 認証プログラム数が第１期から倍増し（１学科２プログラムから３学科４プログラムへ），教育課程の国際通用性が向上した（**資料 1-1-51**）。

資料 1-1-51　JABEE 認証の取得

第１期	第２期
●建築建設工学科 ・建築学コース （平成 19 年４月１日～平成 25 年３月 31 日） ・建設工学コース （平成 19 年４月１日～平成 25 年３月 31 日）	●建築建設工学科 ・建築学コース （平成 25 年４月１日～平成 31 年３月 31 日） ・建設工学コース （平成 25 年４月１日～平成 31 年３月 31 日） ●機械工学科 （平成 24 年４月１日～平成 27 年３月 31 日） ●電気・電子工学科 （平成 25 年４月１日～平成 28 年３月 31 日）  JABEE 認　定　証 第 00474 号 福井大学工学部 プログラム名　電気・電子工学科 電気・電子及び関連の工学分野 頭書の教育プログラムは日本技術者教育認定基準に適合していることを認定します 認定開始年度　2013 年度 2014 年３月３日 一般社団法人 日本技術者教育認定機構 会長　有信睦弘

※括弧内の期間は，認定の有効期間を示す。

（事務局資料）

③　平成25年度に山梨大学と相互評価を行い，学士力GPや教育GPに続くGGJ事業採択，創成活動の取組などが評価された（**資料1-1-52**）。

資料 1-1-52　山梨大学との相互評価報告書（抜粋）

福井大学と山梨大学との相互評価報告書

日　時　　平成 26 年３月 17 日（月）　１５：００～１７：３０
　　平成 26 年３月 18 日（火）　　９：００～１１：３０
場　所　　山梨大学工学部　Ｔ１号館８０４号室
出席者　　福井大学　岩井善郎理事（国際・研究担当）
　　小野田信春工学研究科長
　　松下聡工学研究科副研究科長（企画担当）
　　福井一俊教授（学長特別補佐，電気・電子工学科）
　　児嶋晴則総務部工学部支援室長
　　山梨大学　川村隆明理事（教学・国際交流担当）
　　杉山俊幸工学部長
　　熊田伸弘評議員
　　柴田正実評議員
　　豊木博泰前工学部長
　　石原義和工学部支援課長
　　志田正仁工学部支援課補佐

（以下，山梨大学からの指摘・評価を抜粋。★印は第２期の新たな事項）

★グローバル人材育成推進事業が獲得できたのは，平成 20 年度採択の「夢を形にする技術者育成プログラム」，平成 21 年度採択の「学士力涵養の礎となる初年次教育の充実」という２つの GP による成果があったためである。

★福井大学では，女性を対象としたテニュアトラック制度支援事業が採択されたため２名採用している。

・グローバルな教育水準を証明するため，JABEE を受審する方針を採っている。JABEE を受審しない学科は，国際水準と同等の教育を実施していることの証明をするように指示が出されている。

・学生の就職率 100%のみでなく，就職後３年以内の離職率は 8%で全国平均の 30%を大きく下回っている。離職率に関するデータ収集を精力的に実施している。

・夢を形にする IMAGINEER＝Imagine（心に描く）＋Engineer（技術者）の育成を目的として，学科・学年の枠を越えた学生グループで学際的かつ具体的な課題解決(創成活動)に取り組ませている。

・学生に JIBUN ポートフォリオを作成させ，達成度を確認させている。

・補習授業を開講し，入学時に基礎学力の低い学生をケアしている。

・グループワークの採用によりジェネリック・スキル(汎用的能力)の向上に努めている。

・学部改組後は，討論形式の科目を増やす予定である。

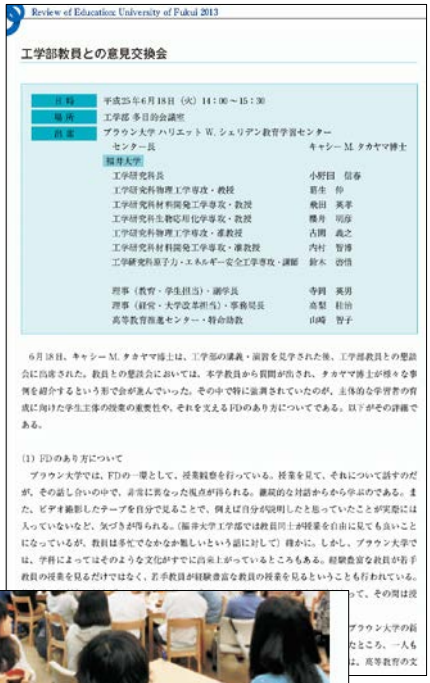
（「福井大学と山梨大学との相互評価報告書」より抜粋）

④　初めて実施された教育に関する全学的な国際外部評価において，「学生を大学改革の輪に入れていくことの重要性」が指摘され，工学部では「学生 FD」を開始した(**資料 1-1-53**)。

資料 1-1-53　教育に関する全学的な国際外部評価を受けて開始した学生 FD 活動

米国アイビーリーグ校の中でも学部教育に定評あるブラウン大学の Kathy M. Takayama FD センター長（１週間招聘）による，国際的視野からの外部教育評価を平成 25 年度に受審した。




Review of Education: University of Fukui 2013

工学部教員との意見交換会

6月18日，キャシー M. タカヤマ博士は，工学部の講義・演習を見学された後，工学部教員との懇談会に出席された。教員との懇談会においては，本学教員から質問が出され，タカヤマ博士が様々な事例を紹介するという形で会が進んでいった。その中で特に強調されていたのが，主体的な学習者の育成に向けた学生主体の授業の重要性や，それを支える FD のあり方についてである。以下がその詳細である。

(1) FD のあり方について

ブラウン大学では，FD の一環として，授業観察を行っている。授業を見て，それについて話すのだが，その話し合いの中で，非常に斬新な視点が得られる。継続的な対話から学ぶのである。また，ビデオ撮影したテープを自分で見ることで，例えば自分が気付いたと思っていたことが実際には入っていないなど，気づきが得られる。（福井大学工学部では教員同士が授業を自由に見てもよいことになっているが，教員は多忙でなかなか難しいという話に対して）確かに，しかし，ブラウン大学では，学科によってはそのような文化がすでに出来上がっているところもある。経験豊富な教員が若手教員の授業を見るだけではなく，若手教員が経験豊富な教員の授業を見るということも行われている。

文京キャンパスの学生との懇談会

点やゴールがはっきりしており証拠に基づいたものであるように見受けたが，これは重要なことであると考える。

他方で，福井大学での改革は初期にあり，学生は，受信側にいると考えられているため，大学改革の輪にまだ入っていないと思うが，学生の声は重要であると考える。学生との対話の中で，彼らが興味を持っている様子が非常に印象的だった。というのは，ランチトークのイベントが終わっても私のところに残って話をし続けた学生達がいて，彼らは，自分たちの声が反映されるかもしれないという可能性について非常に興奮していた。彼らは自分たちのフィードバックに何らかのインパクトがあるのか，あるとすればどのように対策が講ぜられるのかを知りたがっていて，それがとても興味深かった。その中で私が気付いたのは，彼らのフィードバックがカリキュラムにどう影響を与えているのか，彼ら自身がよくわかっていない点である。学生が授業評価を行いコースや教育（teaching）についてフィードバックをするのなら，評価やフィードバックの内容がどのような授業の変更や改善に役立っているのかについて，大学が一定のレベルで学生との双方向のコミュニケーションを持つことが重要だと思う。

（「福井大学　教育評価報告書 2013」より抜粋）

全学の課題として「学生を大学改革の輪に入れていくこと」の重要性が指摘され，工学部では「学生 FD」の取組を開始した。

キラキラSchool Life: 大学を変える、学生が変える！（学生FD）

目的：大学を学生がイキイキと学ぶ快適な居場所にする。

H27年度の活動例

- 学習意欲向上を目指した新入生へのプレゼン (6/2)
- 教員と学生のしゃべり場の企画・実施 (6/12)
- カンニングについてのアンケート及び防止法の提案 (7月)
- 教員を招いてのテスト前勉強会の開催 (7/22)
- 工学研究科長・副研究科長と話し合う会 (8/6)
- 全国学生FDサミットへの参加 (9月・3月)
- きてみてフェアでの活動紹介とイベント開催 (10/18)
- 学生の自主企画による工場見学会の実施 (11/24)



学生と教職員が連携した大学改革

■　学生 FD 活動例

（1）カンニング抑止法を教員に提案した。何人かの教員が提案にしたがって試験を実施し，不正行為の抑止に役立てた。

（2）学生の希望調査に基づいて学生自身で工場見学を企画・実施した。学生自身の視点による見学会であるため，参加者の満足度は高く，参加者のほぼ全員が感想文を自発的に記したことから，学習効果も高かったことが窺える。

（3）「学生FDサミット2016春」への参加
全国68大学，556名の学生，教職員が参加して日本大学にて開催された「学生FDサミット2016春」に参加（平成28年３月12日，13日）。



参加学生の声：

・他大学の学生 FD 活動への熱い思いが感動的で大いに刺激を受けました。自分たちも　頑張らなければという気持ちがいっそう強くなりました。

・学生・教員・職員という立場の違いから大きな誤解が生じていること，でも，そんな誤解は立場を越えて話し合うことで解消できることが経験できました。

（FD 委員会まとめ）

（事務局資料）

【関係者の意見聴取】

① 外部評価（P6-55 **前掲資料 1-1-50**）に加え，各関係者に対するアンケート調査を組織的に実施し（**資料 1-1-54**），結果を教育改善に活かした（P6-156 **後掲資料 2-2-11**）。

資料 1-1-54　関係者の意見聴取のための主な取組一覧

対象・アンケート等の名称	目的・趣旨	実施方法，直近の実施状況等
在学生対象 「学生生活実態調査」 （様式：**資料 1-1-55**）	本学学生の生活実態を把握するとともに，大学に対する学生の意見や要望等を聴取し，今後の学生生活や修学環境の改善を図る。	高等教育推進センターが各部局と協力して定期的に実施。 直近 H25.10 実施 結果の一例：P6-113 **後掲資料 1-2-29**
在学生対象 「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」 （様式：**資料 1-1-56**）	本学の教育・研究に対してどのような意識や満足感をもっているかを尋ね，今後の福井大学に必要な教育・研究環境等を整備・充実する。	全学の教務学生委員会が各部局と協力して実施。 直近 H27.12 実施 結果の一例：P6-9 **前掲資料 1-1-8**
在学生対象 「カリキュラムアンケート」 （様式：**資料 1-1-57**） 第２期に開始	授業等を受講するにあたって理解していること，考えていること等について調査する。	高等教育推進センターFD・教育企画部門が実施（毎年度）。 直近 H27．9 実施 結果（H26）の一例：P6-84 **後掲資料 1-2-7**
卒業生（社会人）対象 「卒業生に対する大学教育に関するアンケート」 （様式：**資料 1-1-58**）	工学部・工学研究科における教育の改善の効果の検証および社会の要望の変化による改善目標を調査する。	工学部及び工学研究科自己点検・評価実施委員会が定期的に実施。 直近 H26.11 実施 結果の一例：P6-154 **後掲資料 2-2-9**
卒業生勤務先企業等対象 「福井大学の教育と卒業生についてのアンケート調査」 （様式：**資料 1-1-59**）	福井大学を卒業（修了）し企業等へと就職した人材が，どのように受け入れられているのかを調査し，その結果に基づいて教育の改善・向上を図る。	就職支援室が 3 年ごとに実施。 直近 H25．8 実施 工学部卒業生が勤務する 84 の企業等から回答 結果の一例：P6-157 **後掲資料 2-2-12**

（事務局資料）

資料 1-1-55　在学生に対する「学生生活実態調査」（調査票・回答票）

項目	質問内容	回答欄	
A 基本事項	A1　性別　a 男　b 女	A1	
	A2　年齢（2013年10月1日現在）	A2	才
	A3　出身県 a 福井県　b 福井県以外の北陸地域（石川、富山） c 東海地域（静岡、愛知、岐阜、三重） d 関西地域（滋賀、京都、奈良、大阪、和歌山、兵庫） e その他の日本国内　f 外国	A3	
	A4　所属学部・大学院／課程・学科・専攻 教育地域科学部　11 学校教育課程　12 地域科学課程 13 地域社会課程 医学部　21 医学科　22 看護学科 工学部　31 機械工学科　32 電気・電子工学科　33 情報・メディア工学科 34 建築建設工学科　35 材料開発工学科　36 生物応用化学科 37 物理工学科　38 知能システム工学科 教育学研究科　41 学校教育専攻　45 教科教育専攻　46 教職開発専攻 医学系研究科　51 博士課程　52 修士課程 工学研究科・博士前期　61 機械工学専攻　62 電気・電子工学専攻　63 情報・メディア工学専攻 64 建築建設工学専攻　65 材料開発工学専攻　66 生物応用化学専攻 67 物理工学専攻　68 知能システム工学専攻 69 ファイバーアメニティ工学専攻　70 繊維先端工学専攻 工学研究科・博士後期　71 原子力・エネルギー安全工学専攻 81 物質工学専攻　82 システム設計工学専攻 83 ファイバーアメニティ工学専攻　84 原子力・エネルギー安全工学専攻 85 総合創成工学専攻	A4	
	A5　学年	A5	年
	A6　入学時の試験（学部生のみ） a 前期日程　b 後期日程　c AO入試　d 推薦入試 e 編入学　f その他（　　）	A6	
	A7　入学年度 a 平成25　b 平成24　c 平成23　d 平成22 e 平成21　f 平成20　g 平成19　h 平成18以前	A7	
	A8　卒業後の進路希望 a 企業に就職　b 公務員　c 教員　d 医師　e 看護師 f 保健師　g 助産師　h 本学の大学院（修士・前期）に進学 k 本学の大学院（博士・後期）に進学　m 他大学の大学院に進学 o その他（　　）	A8	
B 家族	B1　家族人数（あなた本人を含む生計を一つにしている家族の人数） a 1人　b 2人　c 3人　d 4人　e 5人　f 6人　g 7人 h 8人以上 ※例えば、ご両親は名古屋在住で、あなたと、あなたの兄弟が大学の関係で別居していても、ご両親から生活費等を送金してもらっていれば、4人は家族として回答してください。	B1	
	B2　家族の合計年収（あなたの家庭の最近1年間の所得総額（税込額）を記入してください） a 200万円未満　b 200万円～　c 300万円～　d 400万円～ e 500万円～　f 600万円～　g 700万円～　h 800万円～ k 900万円～　m 1000万円～　o 1100万円～　p 1200万円～ ※この項目は、皆さんへの支援を検討する上で重要な最後を持つものです。家族と連絡をとって、できるだけ正確な数字を回答しください。	B2	
C 住居と通学	C1　現在の住居 a 自宅（親と同居）　b 食事つき下宿（民家の間借り） c 食事なし下宿（民家の間借り） d アパート・マンション　e 国際交流学生寮舎・留学生会館 f その他（　　）	C1	
	C2-1　通学方法（複数回答可） a 徒歩　b 自転車　c バイク　d バス　e 電車　f 自動車 g その他（　　）	C2-1	
	C2-2　【fと回答した人】駐車場所 a 学内　b 近くの路上　c 近くの空き地　d 近くの駐車場（借用） e 知人の家・駐車場　f その他（　　）	C2-2	
D 日頃の生活費	D1　あなたの1ヶ月の収入（今年4月～9月の平均月額を千円単位でご記入ください） a 家庭から b 親戚・知人から c アルバイト d 奨学金 e その他 f 合計	D1 a b c d e f	千円
	D2　あなたの1ヶ月の支出（今年4月～9月の平均月額を千円単位でご記入ください） a 食費（自宅通学者は外食費） b 住居費・光熱水料（自宅通学者は記入不要） c 交通費 d 修学費（図書・文具・学会等） e 課外活動費（学外も含む） f 日常生活費（衣服・交際・娯楽等） g その他 h 合計	D2 a b c d e f g h	千円
	D3-1　アルバイト a ほぼ定期的に行っている　b 不定期に行っている c 過去に行っていたが今はしていない　d 今は行っていないが将来したい e するつもりはない	D3-1	
	D3-2　【a、bと回答した人】アルバイト日数 a 週5日以上　b 週3～4日　c 週1～2日　d 月2～3日程度 e 月1日程度　f 長期休暇中　g その他（　　）	D3-2	
	D3-3　【D3-1でa、bと回答した人】アルバイトの目的（複数回答可） a 生活費捻出のため　b 修学費捻出のため　c 課外活動費捻出のため d 高額消費財購入費捻出のため　e 余暇娯楽費捻出のため　f 将来の就職に有利 g 社会勉強のため　h 預貯金のため　k その他（　　）	D3-3	
E 日頃の生活実態	E1　睡眠 a 毎日よく眠れる　b 時々不眠になる　c ほとんど毎日不眠状態である	E1	
	E2　1日の睡眠時間（週平均）	E2	約　時間
	E3　飲酒の回数 a ほぼ毎日　b 週3～4日程度　c 週1～2日程度　d 月2～3日程度 e 月1日程度　f 年数回程度　g 全く飲まない	E3	
	E4　喫煙 a 吸わない　b 過去に吸ったが今は吸わない c 吸っている（1日1箱未満）　d 吸っている（1日1箱以上）	E4	
	E5　学習のためのインターネット利用時間（1週間あたり） a 2時間未満　b 2～3時間程度　c 4～5時間程度　d 6～7時間程度 e 8～9時間程度　f 10時間以上［具体的な時間を記入してください（　）時間程度］ ※レポート作成のために情報収集に利用した時間など	E5	
	E6　一般的なインターネット利用時間（1週間あたり）※ネットゲームを除く a 2時間未満　b 2～3時間程度　c 4～5時間程度　d 6～7時間程度 e 8～9時間程度　f 10時間以上［具体的な時間を記入してください（　）時間程度］	E6	
	E7　自分で所有している情報機器（複数回答可） a 携帯電話　b スマートホン　c ノートPC　d デスクトップPC e 携帯端末（タブレットPC、PadA など）　f ゲーム機 g その他（　　）	E7	
	E8　学習以外の時間の過ごし方（主なものを2つ選択） a 課外活動　b アルバイト　c 読書 d インターネット（ネットゲームを除く）　e ゲーム f テレビ　g 特に何もしていない　h その他（　　）	E8	

G 大学の授業等について	G1-1　卒業・修了までの単位の取り方（現時点） a 理解している　b 理解していない部分がある c 理解していない	G1-1
	G1-2　【b、cと回答した人】理解できない部分の解決法（複数回答可） a 助言教員クラス担任・学科等教員に相談する　b 学務部の職員に相談する c 先輩・友人に相談する　d 自分で履修手引きなどで調べる e 何もしない　f その他（　　）	G1-2
	共通・教養と専門、それぞれについて回答してください（G2～4）】	
	G2-1　授業の出席状況（今年度） a どの授業もほとんど出席している b 一部の授業を除いてほとんど出席している c どの授業も出たり出なかったり d 一部の授業を除いてあまり出席していない e どの授業もあまり出席していない	G2-1　共通・教養　専門
	G2-2　【d、eと回答した人】出席しない理由（複数回答可） a 授業が理解できない　b 授業に魅力がない　c 出席をとらない d 健康上の理由　e 課外活動が忙しい　f アルバイトが忙しい g 分野・進路に迷いがある　h 大学が面白くない　k 何となく m その他（　　）	G2-2　共通・教養　専門
	G3-1　授業の理解度 a どの授業も全般的に理解できる　b 理解できないものが多少ある c 理解できないものがかなりある　d ほとんど理解できない	G3-1　共通・教養　専門
	G3-2　【b、c、dと回答した人】理解できない時の対応 a 授業担当教員に相談する　b 助言教員クラス担任・学科等教員に相談する c 先輩・友人に相談する　d 何もしない　e その他（　　）	G3-2　共通・教養　専門
	G4-1　授業の満足度 a どの授業も満足している b 満足できないものが多少ある c 満足できないものがかなりある d 満足できないものがほとんどである	G4-1　共通・教養　専門
	G4-2　b、c、dと回答した人】満足できない理由（複数回答可） a 内容が難しい　b 内容がつまらない　c 授業内容のレベルが低い d 教え方に工夫が足りない　e 受講者が多すぎて集中できない f 休講が多い　g 試験・レポートなどが多い　h 単位の認定が厳しい k その他（　　）	G4-2　共通・教養　専門
	G5　大学の授業を除く学習時間（授業期間中の平均的な学習時間・1週間あたり） a 2時間未満　b 2～3時間程度　c 4～5時間程度　d 6～7時間程度 e 8～9時間程度　f 10～12時間程度　g 13～15時間程度 h 16～19時間程度　k 20～25時間程度　m 26～30時間程度 o 30時間以上［具体的な時間を記入してください（　　）時間程度］ ※予習復習、レポート・卒業論文作成、グループでの相談や準備活動（探求ネット・創成活動等）、実験等を授業時間終了後も行った場合や、レポート作成のために資料を調べた場合などの時間も含めてください。 ※講義単位の計算は15時間の予習と、15時間の講義、15時間の復習をもって1単位が標準です。よって1コマの授業に対して、2倍の予習・復習時間が必要です。	G5
	G6　一般的な読書の時間（1週間あたり）　※学術的な雑誌を含む a 2時間未満　b 2～3時間程度　c 4～5時間程度　d 6～7時間程度 e 8～9時間程度　f 10時間以上［具体的な時間を記入してください（　）時間程度］	G6
	G7　語学力（英語）向上の必要性 a 必要である　b 将来の進路によって必要である　c 特に必要と思わない	G7
	G8-1　在学中又は卒業後の海外留学（語学研修も含む）希望 a ある　b 可能ならば留学したい　c 特に考えていない	G8-1
	G8-2　【a、bと回答した人】希望する留学先 a アジア・中東　b アメリカ　c カナダ　d オーストラリア e 欧州　f その他（　　）	G8-2
	G9　海外留学にどのような支援を希望しますか a 留学に必要な経費の補助・支援　b 単位の互換　c 広報・情報提供 d 特に必要ない　e その他（　　）	G9
	G10　教員との関係　授業の内容や方法について担当教員と話し合うことがありますか a 話し合うことがある b 話し合いたいと思うことがあるが出来ない c 話し合おうとしたが受入れられなかった d 話し合おうと思ったことがない e その他（　　）	G10
	G11　教員との話し合う時間等について a 教員と話し合う時間は現状で十分である b 教員と話し合う時間がもう少しほしい c 教員と話し合うことは考えたことがない	G11
	G12　オフィスアワー制度を知っていますか、また利用したことがありますか a 知っていて利用したことがある b 知っているが利用したことがない c 知らない	G12
	G13-1　助言教員・学年主任制度の利用について a 助言教員・学年主任と良く話す　b ときどき話す　c ほとんど話さない d 助言教員・学年主任が誰か分からない	G13-1
	G13-2　【a、bと回答した人】話し合いの内容 a 学業（取得単位など）について　b 進路　c 授業内容 d 友人・生活について　e 個人的な悩み・相談　f 世間話 g その他（　　）	G13-2
	G14　教員への期待（複数回答可） a 現状のままでよい b 学問の厳しさや楽しさを教えてほしい c 授業内容を充実してほしい d 授業方法を工夫して欲しい e 研究内容を教育（授業）に生かしてほしい f 休講をなくしてほしい g 気軽に話（相談など）ができる雰囲気がほしい h あまり期待しない k その他（　　）	G14
	G15　就職支援室や松岡キャンパス学務室で行っている支援で知っているもの（複数回答可） a キャリアサポートシステム b 企業及び団体等の求人情報 c 公務員に関する試験情報 d 教員に関する試験情報 e 医師、看護師、保健師、助産師の国家試験に関する情報 f 臨床研修病院の情報 g 病院等医療機関の求人、採用情報 h 就職ガイダンス、進路説明会などの実施 k キャリアカウンセラーによる面接指導やエントリーシートの添削指導 m その他（　　） o 支援内容を全く知らない p 就職支援室があることを知らない	G15

H 課外活動について

H1-1　学内の課外活動
a 参加している　b 過去に参加したが今は参加していない
c 全く参加したことがない　　H1-1

H1-2　【a、bと回答した人】課外活動に参加した動機（複数回答可）
a 高校時代からの継続　b 教員・特技の向上のため　c 趣味と一致している
d 活動内容に魅力がある　e 友人を得たい　f 体力向上のため
g 大学生活を楽しみたい　h 就職に有利と考えて　k 団体生活に魅力を感じた
m 指導力を身につけるため　o その他（　　）　　H1-2

H1-3　【H1-1で、aと回答した人】課外活動の日数
a 週5日以上　b 週3～4日　c 週1～2日　d 不定期　　H1-3

H1-4　【H1-1で、aと回答した人】 1週間当たりの課外活動の時間
（　　）時間程度　　H1-4

K 安全について

K1-1　キャンパス内（国際交流学生宿舎、留学生会館を含む）で被害に遭った（遭いそうになった）ことがありますか（該当するものすべて選択）

a 被害に遭ったことはない　b 財布・現金等の盗難被害
c 鞄・服・靴等の盗難被害　d 自動車・バイク・自転車の盗難、損壊被害
e 性的被害（痴漢・のぞき等）
f 不審者（一見して学生・大学関係者でない人物等）による声かけ
g セクハラ・パワハラ・アカハラの被害　h ストーカー被害
k 暴行・傷害被害　m 飲酒の強要
o 薬物の購入・使用の勧誘、強要の被害
p カルト宗教等の勧誘　s インターネットに関する被害
t 携帯電話に関するトラブル・被害
w 悪徳商法（キャッチセールスやマルチ商法など）
x その他（　　）　　K1-1

K1-2　キャンパス内でK1-1のb～wを目撃したことがある場合、K1-1から選んでください
（複数回答可）　　K1-2

K2　大学構内で身の危険を感じる（不安を覚える）場所があればお書きください
（　　）

K3　キャンパス外で被害に遭った（遭いそうになった）ことがありますか（複数回答可）
a 被害に遭ったことはない　b 財布・現金等の盗難被害
c 鞄・服・靴等の盗難被害　d 自動車・バイク・自転車の盗難、損壊被害
e 性的被害（痴漢・のぞき等）　f 不審者による声かけ
g ストーカー被害　h 暴行・傷害被害
k 交通事故　m 飲酒の強要
o 薬物の購入・使用の勧誘、強要の被害　p カルト宗教等の勧誘
s インターネットに関する被害　t 携帯電話に関するトラブル・被害
w 悪徳商法（キャッチセールスやマルチ商法など）
x その他（　　）　　K3

L 前回の調査後の改善事項

L1　学生総合相談室が設置されたことについて
a よかった　b まあよかった　c 特に関係がない　d 相談室のことを知らない　　L1

L2　スチューデント・アシスタント（S・A）（ピア・サポート、キャンパス・クリーンアップ・スタッフ、総合図書館ラーニング・アドバイザー、就活サポーター、オープンキャンパス実施補助作業、入試広報業務補助等のことで、時給800～1000円で大学が学内で学生を雇用する制度）について

a 学外でアルバイトをするより学習時間の確保ができ、よい制度だと思うので利用したい
b よい制度だと思うが利用のタイミングが合わないことが多い
c S・Aのことを知らなかったが、機会があれば利用したい
d 学外でのアルバイトの方が収入が多いので、S・Aは利用しない
e 制度を知らないし、利用する予定もない　　L2

L3　ユニバーサル・パスポートで、休講情報などを一斉にメール配信していることについて
a よかった　b まあよかった　c ふつう　d なくてもよかった　　L3

L4　履修登録がWeb上で、学外（自宅など）からもできるようになったことについて
a よかった　b まあよかった　c ふつう　d なくてもよかった　　L4

L5　改修や新規設置された学内の施設でよかったと思うもの（複数回答可）
【文京キャンパス】
1 工学部情報工学科棟
2 学生支援センター（教務課、学生サービス課）
3 学生総合相談室
4 生協学生食堂
5 語学センター（グローバル・ハブ）
6 言語開発センター（総合図書館2階　LDC）
7 多目的ホール（北門カーゲート横）
8 第一体育館・第二体育館の更衣室、トイレ、シャワー室、玄関スロープ
9 国際交流学生宿舎（寮）の　Hクッキングヒーター（全室）
【松岡キャンパス】
10 医学図書館ー情報工房ー
11 講義棟（講義室、ロビー等）
12 講義棟1階コミュニケーションスペース
13 講義棟2階マルチラーニングスペース
14 講義棟2階ミーティングスペース
15 課外活動施設の整備
16 国際交流会館壁面クロス、網戸、椅子
17 売店（拡充）
18 駐車場の拡張
19 街灯（増設）
【敦賀キャンパス】
20 敦賀キャンパス建物　　L5

M 大学への意見・要望

M1　大学施設等に関する要望（優先的に改善を希望する事項5つを選択回答）
1 講義室の設備の充実
2 実習室・実験室などの整備・充実
3 学生インフォメーションシステム（PC端末・携帯電話等からの講義・成績情報へのアクセス等）の整備充実
4 個人で自由に学習などができる部屋の確保
5 少人数のグループ等で自由に学習できる部屋や設備の充実
6 各講座や研究室の学生スペースの拡大、設備の充実
7 講義の合間に自由に休憩・交流のできる部屋・コーナーや設備の充実
8 附属図書館の蔵書・設備の充実
9 情報処理基盤センター等、IT関連センター等の機能・設備の充実
10 無線LAN環境の整備・利用環境の充実
11 大学会館（学生会館）の拡充と設備の充実
12 生協食堂（文京）の営業時間を早める
13 生協・食堂・購買部の拡張・充実
14 コンビニエンスストアの誘致
15 保健管理センター（保健センター）の拡充と設備の充実
16 サークル関連施設の拡充・施設の充実
17 日常のスポーツ・レクリエーション活動のための施設・設備の充実
18 長期休暇中にグループ学習やレクリエーション活動のできる施設の拡充
19 学内全体の冷暖房システムの拡充整備
20 駐車場・駐輪場など学内交通環境の整備
21 植樹や広場・美観など快適な学内環境の整備
22 その他（　　）　　M1

M2　大学教職員への要望があればご記入ください
（　　）

M3　自由記述（その他、大学への意見・要望などがあれば自由に記述してください）
（　　）
※スペースが足りない場合は、続きを裏表紙に記入してください。

（事務局資料）

資料 1-1-56　在学生に対する「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」（項目抜粋）

福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査

この調査は，学生の皆さんが，在学中および卒業・修了にあたって，本学の教育・研究に対してどのような意識や満足感をもっているかをお聞きし，今後の福井大学に必要な教育・研究環境等を整備・充実していくための重要な基礎資料として収集させていただくものです。それぞれの質問に対して，あなたの感じているお気持ちをありのまま回答してください。

なお，この調査結果は，在学生および今後福井大学に入学して学ぶ後輩たちの学修・学生生活支援および環境づくりや大学評価のために活用するもので，それ以外の目的には使用しないとともに，回答者のプライバシーを保護します。ご協力よろしくお願いいたします。

2015 年 11 月

【基本情報】　該当する番号に○を付けてください。

□学部・大学院／課程・学科・専攻

工学部（31 機械　32 電気　33 情メ　34 建築　35 材料　36 生化　37 物理　38 知能）

工学研究科・博士前期（　61 機械　62 電気　63 情メ　64 建築　65 材料　66 生化
67 物理　68 知能　69 繊維　70 原ｴﾈ　）

工学研究科・博士後期（ 71 総合創成）

□性別　　（　1 男　　2 女　）

□在校区分（　1 在校生（本年度卒業・修了年度でない学生）
2 卒業・修了予定学生（本年度卒業・修了予定学生））

□出身地　（　1 福井県　　2 福井県以外の北陸地域（石川，富山）　3 東海地域（静岡，愛知，岐阜，三重）　4 関西地域（滋賀，京都，奈良，大阪，和歌山，兵庫）
5 その他　）

【アンケート】

３．自己分析

あなたは福井大学で学修や研究をすることによって以下に示す力がどの程度身についた（あるいは身につく）と思いますか。

＜回答＞　5 十分身についた　4 身についた　3 ある程度身についた　2 あまり身についていない　1 全く身についていない

３－１　一般常識	5	4	3	2	1
３－２　基礎学力	5	4	3	2	1
３－３　専門知識や技能	5	4	3	2	1
３－４　実践的な能力	5	4	3	2	1
３－５　広い視野で物事を多面的に考える力	5	4	3	2	1
３－６　論理や証拠を重視し，それらに基づいて考える力	5	4	3	2	1
３－７　問題のポイントを素早く押さえ，まとめる力	5	4	3	2	1
３－８　豊かな想像力，新しいアイディアや発想を生み出す力	5	4	3	2	1
３－９　事実や他者に対する誠実さ	5	4	3	2	1
３－10 日常的にコミュニケーションをする力	5	4	3	2	1
３－11 外国語でコミュニケーションをする力	5	4	3	2	1
３－12 プレゼンテーションをする力	5	4	3	2	1

３－13 ディスカッションやディベートをする力　5　4　3　2　1
３－14 文章作成や文章表現の力　5　4　3　2　1
３－15 情報を収集して適切に利用する力　5　4　3　2　1
３－16 情報機器を活用する力　5　4　3　2　1
３－17 社会や技術の変化に対応する力　5　4　3　2　1
３－18 ねばり強く仕事に取組む力　5　4　3　2　1
３－19 他の学生と協調する力　5　4　3　2　1

４－７　奨学金，TA/RA/SA 経費などの経済的支援は，学修研究に専念出来るうえで役に立ったと思いますか？（支援を受けた方のみお答えください）

5　4　3　2　1

４―８　指導・助言教員による修学指導・研究指導は，学修や研究に専念するうえで有益だったと思いますか？

5　4　3　2　1

４―９　図書館(文献複写サービス，メディアコモンの設置，ラーニングアシスタントの配置等)や語学センター（スチューデントコーディネーターの配置）での修学支援は，学修や研究に専念するうえで役立ったと思いますか？

5　4　3　2　1

４－13　企業等に在職のまま大学院で学ぶ社会人が夜間や休日等に授業を受けることができる措置（大学院設置基準第 14 条に定められた教育方法の特例措置），および長期履修制度などの修学上の制度は，学修や研究に専念するうえで役立ったと思いますか？

これらの該当者の皆さんにお聞きします。（特定の院生対象）

5　4　3　2　1

（事務局資料）

資料 1-1-57　在学生に対する「カリキュラムアンケート」（項目抜粋）

2014 カリキュラム評価アンケート

●共通項目

１．学部の理念や目標を理解していますか。
・理解している　・だいたい理解している　・あまり理解していない　・理解していない
２．学科の教育理念や目標を理解していますか。
・理解している　・だいたい理解している　・あまり理解していない　・理解していない
３．４年間を通じ各学年でどのような科目を履修しなければならないか理解していますか。
・理解している　・だいたい理解している　・あまり理解していない　・理解していない
４．シラバスを活用していますか。
・活用している　・ときどき活用している　・あまり活用していない　・全く活用していない
５．卒業要件を理解していますか。
・理解している　・だいたい理解している　・あまり理解していない　・理解していない

●工学部質問項目

１２．卒業研究着手要件を理解していますか。
・理解している　・だいたい理解している　・あまり理解していない　・理解していない

１３．各学期において履修できる専門教育科目の単位数に上限があることを知っていますか。
・知っている　・知らない
１４．学科の学習・教育目標を理解していますか。
・理解している　・だいたい理解している　・あまり理解していない　・理解していない
１５．学科で開講されている科目と学科の学習・教育目標との対応を理解していますか。
・理解している　・だいたい理解している　・あまり理解していない　・理解していない
１６．学科の学習・教育目標と照らして，授業の内容は適切でしたか。
・適切であった　・だいたい適切であった　・あまり適切でなかった　・適切でなかった

（事務局資料）

資料 1-1-58　卒業生（社会人）に対する「卒業生に対する大学教育に関するアンケート」（項目抜粋）

卒業生アンケート　［福井大学工学部（平成 26 年 11 月実施）］

（該当箇所に○をつけてください。）

●学部について
卒業年度 ①平成 20 年度（H21 年 3 月卒）　②平成 21 年度（H22 年 3 月卒）
③平成 22 年度（H23 年 3 月卒）
卒業学科　①機械工学科　②電気・電子工学科　③情報・メディア工学科
④建築建設工学科　⑤材料開発工学科　⑥生物応用化学科
⑦物理工学科　⑧知能システム工学科

〔問２〕あなたの職種を選択してください。2 つ以上にわたる場合は，すべてに○をつけてください。
① 研究・開発 ② 教育・研究 ③ 技術（ハード） ④ 技術（ソフト） ⑤ 技術営業
⑥ その他の営業⑦事務 ⑧ 技術管理・企画 ⑨ その他の管理・企画
⑩ その他（具体的：）

〔問４〕大学学部（大学院で受けた教育を除く）で学んだ「自然科学と工学の基礎知識およびそれを応用する能力」は業務を遂行する上で十分ですか？
① 充分 ② どちらとも言えない ③ 不足 ④ 問とは無関係

〔問５〕大学の科目で業務を遂行する上で有意義たったと思う科目の種類に○をつけてください？（複数選択可）
①数学などの専門基礎科目 ②専門科目の講義・演習　③実験　④卒業研究
⑤ その他（具体的：）

〔問６〕「課題の提案・報告などを効率的に記述し，説明する能力」に関して大学で受けた教育は，業務を遂行する上で十分でしたか？
① 充分 ② どちらとも言えない ③ 不足 ④ 問とは無関係な業務
⑤ その他（具体的：）

〔問７〕大学で身につけた「英語の会話力をはじめとする国際的に活躍するコミュニケーション能力」は業務を遂行する上で充分ですか？
① 充分 ② どちらとも言えない ③ 不足 ④ 英語を使わない
⑤ その他（具体的：）

〔問８〕「コンピュータ利用技術」に関して大学で受けた教育は業務を遂行する上で充分ですか？
① 充分 ② どちらとも言えない ③ 不足 ④ コンピュータを利用しない
⑤ その他（具体的：）

（事務局資料）

資料 1-1-59　卒業生の勤務先に対する「福井大学の教育と卒業生についてのアンケート調査」（項目抜粋）

UNIVERSITY OF FUKUI

平成25年 8月

人事ご担当者 様

国立大学法人　福井大学
理事(副学長)　寺岡 英男

福井大学の教育と卒業生についてのアンケート調査

平素より，本学の教育・研究活動につきましては格別のご高配を賜り，厚くお礼申し上げます。
さて，本学では学部・研究科の卒業生・修了生の就職先からご意見を賜り，教育の改善に反映いたしたくアンケートを実施することと致しました。なお，このアンケートは，教育の改善・向上の目的以外に使用したり，貴社が特定される形で公表したりすることはいたしません。
お忙しいところ恐縮ですが，9月25日(水)までに，E-mail又はFAXにて回答いただきますようお願い申し上げます。

貴社名:

設問1　「福井大学卒業生の印象」と「新卒採用者全体の印象」の2つの視点からお答え下さい。
以下の1～20について，それぞれあてはまる番号1つに○をつけて下さい。

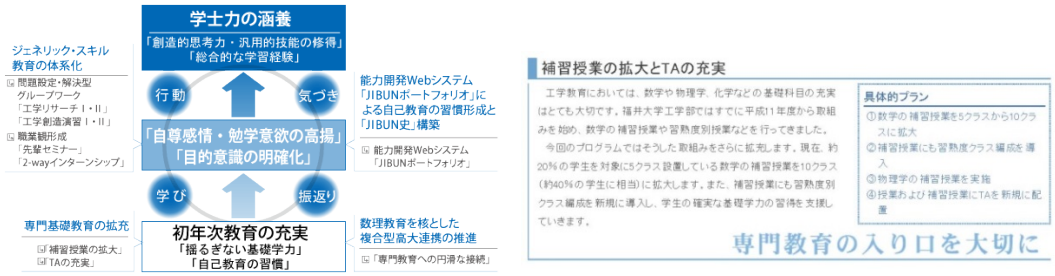
	「福井大学卒業生の印象」				「新卒採用者全体の印象」			
	充分	おおむね充分	やや不十分	不十分	充分	おおむね充分	やや不十分	不十分
1 仕事に対する熱意・意欲がある	4	3	2	1	4	3	2	1
2 責任感がある	4	3	2	1	4	3	2	1
3 誠実である	4	3	2	1	4	3	2	1
4 積極的で実行力がある	4	3	2	1	4	3	2	1
5 コミュニケーション能力がある	4	3	2	1	4	3	2	1
6 表現力・プレゼンテーション能力がある	4	3	2	1	4	3	2	1
7 協調性・チームで仕事をする能力がある	4	3	2	1	4	3	2	1
8 リーダーシップがある	4	3	2	1	4	3	2	1
9 一般知識・教養がある	4	3	2	1	4	3	2	1
10 論理的思考力がある	4	3	2	1	4	3	2	1
11 創造性・企画力がある	4	3	2	1	4	3	2	1
12 問題解決力がある	4	3	2	1	4	3	2	1
13 課題発見力がある	4	3	2	1	4	3	2	1
14 専門分野の基礎知識・技術がある	4	3	2	1	4	3	2	1
15 専門分野の応用知識・技術がある	4	3	2	1	4	3	2	1
16 常に新しい知識・能力を身につけようとする力がある	4	3	2	1	4	3	2	1
17 語学力がある	4	3	2	1	4	3	2	1
18 ストレスコントロール力がある	4	3	2	1	4	3	2	1
19 マナーがある	4	3	2	1	4	3	2	1
20 規律性、倫理観がある	4	3	2	1	4	3	2	1
21 総合的に判断して，福井大学卒業生の採用に満足している	4	3	2	1	4	3	2	1

（事務局資料）

【教育改善の取組】

①　学士力 GP の取組「学士力涵養のための初年次教育の充実」（平成 21～23 年度。平成 24 年度以降自主財源で継続）により学士力教育や初年次教育を強化し，成果があがった（**資料 1-1-60**）。

資料 1-1-60　工学部における基礎学力不足学生への対応「学士力涵養の礎となる初年次教育の充実」



■　１年生対象の数学補習クラスの開講

・１年生を対象に数学の補習クラス「数学ステップアップ」を開講し，入学時に実施する「数学プレースメントテスト」の成績の低い学生に受講を義務付けている。
・数学ステップアップは第１期に開始したが，学士力 GP 採択により，平成 22 年度からクラス数を倍増させた（５クラス（前期３クラス，後期２クラス）から１０クラス（前期６クラス，後期４クラス）へ）。
・学士力 GP 財政支援終了後の取組（平成 24 年度～）：学生の成績状況の検証を踏まえ，「数学ステップアップ」を９クラス（前期６クラス，後期に３クラス）開講するとともに，後期に補習クラス「微分積分ステップアップ演習」を新設して３クラス開講し，１年前期開講科目の「微分積分Ⅰ」不合格者に受講を義務付けている。

■　「数学学習支援室」の設置

・学士力 GP 採択により，平成 22 年度から，補習クラスとは別に「数学学習支援室」を週 4 コマ開いている。
・「数学学習支援室」には，学生が自由に訪れて数学に関する質問ができる。質問には教員３名と TA の大学院生数名が対応し，学生への個別指導を行っている。
・数学学習支援室利用状況

	平成22年度		平成23年年度		平成24年度		平成25年度		平成26年度		平成27年度	
	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
延利用者数	234	237	254	155	303	154	263	161	204	104	184	271

■　２年生対象の「達成度調査アンケート」の実施

・補習クラスや数学学習支援室の効果を測る目的で，２年生を対象とした「達成度調査アンケート」を毎年実施している。
・アンケートは，微分積分の内容に関する「無記名の試験」の形式で実施し，比較のため，毎年同じ問題を使っている。
・「数学ステップアップ」の規模拡大の翌年度（平成 23 年度），「微分積分ステップアップ演習」開始の翌年度（平成 25 年度）には，前年度よりも高い正答率が得られ（**P6-132 後掲資料 2-1-6**），１年次の取組の成果が，２年次に実施した試験の結果に明確に現れている。
・こうした取組の結果，第２期の方が第１期よりも正答率の上昇傾向が明確である（**P6-132 後掲資料 2-1-6**）。

■　物理補習クラスの開講

・数学に加え，高校で物理を履修できなかった学生を対象に，物理の補習クラス「物理ステップアップ」を開講している。
・平成 23 年度までは，建築建設工学科・材料開発工学科・生物応用化学科の希望者を対象に実施した。
・学士力 GP 財政支援終了後の取組（平成 24 年度～）：対象を全学科に拡大した。

（事務局資料）

② 共通教育と専門教育が組み合わされた体系的キャリア教育として，「みらい協育プログラム」を開始した（**資料 1-1-61**）。

資料 1-1-61　みらい協育プログラム

1. みらい協育プログラムの目的
学生が各自の将来像をもつとともに，社会にでてから「生きていく力」をつけるための手がかりを得る。
キャッチフレーズ：きみと世界の“みらい”を創ろう ― 未来を魅来に!!

2. みらい協育プログラムについて
全員が受けるものと，修了認定希望者のみが受けるものに分かれます。別表を参照してください。予めコース履修を申請した者が 1)，2)の要件を全て満たした場合，卒業時に修了証が授与されます。
1) 全員が受けるもの
① 助言教員との面談
成績受領時に，将来の希望について，簡単に助言教員に説明してください。あらかじめ将来の進路（大学院進学，就きたい職業など）を考えておいてください。
② みらい協育ガイダンス
１，２，３年生対象に年一回ガイダンスが開かれます。これを受けること。
みらい協育ガイダンスⅠ
１年次を対象に実施。平成 24 年度は大学教育入門セミナー（共通講義）の中で行います。
みらい協育ガイダンスⅡ
２年次を対象に実施。秋の成績配付時期に講話を聞きます。
みらい協育ガイダンスⅢ
３年次対象に各学科で就職担当教授からの説明を聞きます。

別表 「みらい協育プログラム」の科目等

1. 全員を対象とするもの

NO.	項　　目	時　　期	備　　考
1	助言教員との面談		※成績配付時に将来の希望について話す
2	みらい協育ガイダンスⅠ	1 年次 5 月	大学教育入門セミナーの 1 コマを充てる
3	みらい協育ガイダンスⅡ	2 年次 9 月	2 年次 9 月成績配付時期に実施
4	みらい協育ガイダンスⅢ	3 年次	従来の 3 年次対象の就職ガイダンス

※建築建設工学科については，履修登録期間中の面談時に将来の希望について話す。

2.プログラム修了認定希望者のみ受けるもの

2.1 選択科目群（人間理解系の科目 2 単位を含め 8 単位以上履修）

NO.	科　目　名	種　別	時期	単位数	備　　考
1	知的財産権の基礎知識	専門基礎	3 後	2	工学部共通専門基礎科目
2	ベンチャービジネス概論	専門基礎	4 前	2	工学部共通専門基礎科目
3	フロントランナー	専門基礎	3 後	2	工学部共通専門基礎科目
4	ものづくり基礎工学	専門基礎	1 後	2	工学部共通専門基礎科目
5	学際実験・実習Ⅰ	専門基礎	2 前	1	工学部共通専門基礎科目
6	学際実験・実習Ⅱ	専門基礎	3 前	1	工学部共通専門基礎科目
7	職業指導	教職科目	4 前	2	「工業」教員免許取得希望者のみ
8	教育学研究Ⅰ	教職科目	3 後	2	理科または数学の教員免許取得希望者のみ
9	教育課程研究	教職科目	4 前	2	理科または数学の教員免許取得希望者のみ
人間理解系科目(2 単位以上履修)					
10	「人間の科学」系科目	共通 A 群		2	
11	教育心理学	教職科目	4 後	2	理科または数学の教員免許取得希望者のみ

2.2.　実践・学習報告会

NO.	科　　目　　名	時　　期	備　　考
1	実践・学習報告	4 年次末	本プログラムの履修者対象

■　「みらい協育プログラム」履修状況及び単位修得状況

2.プログラム終了認定希望者のみ受けるもの

2.1 選択科目群（人間理解系の科目2単位を含め8単位以上履修）

No	科　目　名	H24年度		H25年度		H26年度		H27年度	
		履修者数	単位修得者数	履修者数	単位修得者数	履修者数	単位修得者数	履修者数	単位修得者数
1	知的財産権の基礎知識	39	24	33	24	27(14)	22(11)	36(32)	27(25)
2	ベンチャービジネス概論	14	9	9	8	55	41	15(11)	13(9)
3	フロントランナー	125	85	101	77	53(37)	34(22)	50(45)	40(36)
4	ものづくり基礎工学	59(55)	51(50)	60	58	60	51	60(59)	59(58)
5	学際実験・実習Ⅰ	54(18)	52(18)	82(53)	74(52)	81(68)	79(66)	58(57)	58(57)
6	学際実験・実習Ⅱ	17	17	13(5)	12(5)	19(15)	19(15)	14(11)	14(11)
7	職業指導	11	9	22	18	9	7	17(13)	12(9)
8	教育学研究Ⅰ	25	22	20	19	22(20)	22(20)	12(12)	11(11)
9	教育課程研究	10	10	19	17	19	19	20(18)	18(16)

人間理解系科目(2単位以上履修)

10	「人間の科学」系科目	H24年度		H25年度		H26年度		H27年度	
	心理学研究入門	110(98)	85	110(89)	83	110(95)	78		
	批判的思考を伸ばす	35(26)	22	36(26)	31	34(26)	28	35(21)	30
	こころの成長Ⅰ	30(28)	29	30(27)	25	30(29)	30	30(29)	28
	心を探る（人間関係論）	89(60)	66	90(61)	72	92(51)	63	82(54)	62
	こころの発達と健康	90(74)	64	91(76)	59	88(75)	45	74(62)	74
	脳と心	115(87)	106	113(86)	99	110(75)	104	100(68)	100
	「社会がわかる」とは？	49(40)	35	49(46)	33	48(48)	34	48(43)	37
	認知発達障害	73(70)	63						
	人間の科学特別演習Ａ(教育学)	0	0	0	0	0	0	1(1)	1
	人間の科学特別演習Ｂ(心理学)	4(4)	4	3(3)	3	5(4)	5	2(2)	2
	人間の科学特別演習Ｃ(障害児)	0	0	0	0	0	0	1(0)	1
	こころの成長Ⅱ	30(23)	28	30(22)	27	30(23)	27	30(17)	29
	健康科学・医科学概論	100(90)	78	100(85)	84	100(87)	86	100(89)	88
	「想定読者」を意識した説明法・自己教育法	98(90)	48	99(87)	51	98(87)	55		
	子どもと学校	16(1)	14	16(8)	14	15(4)	15	16(6)	15
11	教育心理学	8	7	19	19	18	18	20	19

※専門教育科目及び教職科目の履修者数及び単位修得者数については，工学部学生数。
※「みらい協育ガイダンスⅢ」は就職ガイダンス形式で,履修者数集約せず。
※「人間の科学」系科目の履修者数について，括弧内は工学部学生数。□
　単位修得者数については，教育地域科学部・工学部全体での数字。

③　GGJ 事業により，英語教育の充実や海外派遣プログラムの創設と単位化を行い，TOEIC スコアの上昇，コンピテンシーの向上など，成果があがった（**P6-14 前掲資料 1-1-13～15，P6-133 後掲資料 2-1-7，P6-134 後掲資料 2-1-8**）。

④　支援期間が終了した GP 等の取組も自主財源で継続実施し，数学基礎力が第１期より向上するなど，成果があがった（**資料 1-1-62，P6-132 後掲資料 2-1-6**）。

資料 1-1-62　外部資金による教育プログラム（支援期間後の継続実施分も含む）

支援期間が終了したプログラムについては，それぞれの評価結果を踏まえ，効果の高い取組を大学や工学部の財源で継続実施している。★★は第２期採択。★は第１期～第２期にまたがる財政支援。

事業名	プログラム名	概要	支援期間	主な成果
文部科学省「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」（GGJ）	★★ グローバル人材育成推進事業	実践的グローバル人材育成プログラムの開発・実施，語学センターによる実践的語学教育，国際的水準での教育課程の実現	H24～H28	多数の海外派遣プログラムの創設，海外派遣学生数の大幅増加，TOEIC スコアの向上，海外大学ベンチマーキングを踏まえた改善，教室外学習時間向上 グローバル化の進展
文部科学省「大学教育推進プログラム」（学士力 GP）	★ 学士力涵養の礎となる初年次教育の充実	ジェネリック・スキル教育の体系化，専門基礎教育の充実，理数教育を核とした複合型高大連携，Jibun ポートフォリオによる自己教育の習慣形成	H21～H23	ジェネリック・スキル教育科目群の指定，数学の習熟度別クラス編成の拡大，数学補習クラスの倍増，高大連携数理教育研究会の設置 初年次教育，ジェネリックスキル，高大連携の進展
文部科学省「質の高い大学教育推進プログラム」（教育 GP）	★ 夢を形にする技術者育成プログラム）	工学部共通科目「学際実験・実習」および「ものづくり基礎工学」の開講，創成活動の実施，活動成果発表の場「元気プロジェクトまつり」の開催	H20～H22	「学際実験・実習」や「ものづくり基礎工学」の定着，各学科における創成教育科目の導入，学生の受賞増加など自主活動の活発化，能力測定結果の向上 創成活動の活性化
文部科学省「特色ある大学教育支援．プログラム」（特色ＧＰ）	より高い現代的な教養教育をめざして	「大学教育入門セミナー」の開設，教養教育科目の現代的な編成，副専攻制度，市民開放プログラム	H17～H20	大学の勉学・生活へのスムーズな適応，全国に先駆けて導入された副専攻制度による高度で幅広い視野の獲得，市民開放プログラムによる社会人と席を並べた学習 質の高い教養教育の提供
文部科学省「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」（現代 GP）	「地域教育活動の場の持続的形成プログラム」	学際的な地域連携教育を行う体制を整え，学外の地域社会に地域教育活動の受け皿を作り，学際的な地域連携教育活動を推進	H17～H19	大学に隣接する田原町で，①学生常駐の地域との交流拠点としての「たわら屋」の開設，②地域住民と学生との交流組織「雑木林を楽しむ会」の結成，③商店街全体を巻き込む「打ち水大作戦」の学生による実施，④老人会・公民館・自治体・公共交通を考える市民の会と学生との連携など 地域連携教育の活性化

（http://www.u-fukui.ac.jp/user_admission/education/project/）

（事務局資料）

⑤　PDCA による授業改善が進み（**P6-44 前掲資料 1-1-42，P6-111 後掲資料 1-2-28**），①～④とあわせ，教育プログラムの質が第１期より向上し，関係者の期待に応えた。

【教育情報の発信】

①　ホームページ，想定する関係者ごとに編集した冊子，名古屋と京都で毎年開催する進学説明会，随時実施する高校・高専訪問など，多様な方法・機会で教育情報を発信している（**資料 1-1-63～65**）。

　オープンキャンパスに加え，平成 25 年度からミニ・オープンキャンパスを開催した（**資料 1-1-66**）。

資料 1-1-63　ホームページによる情報提供

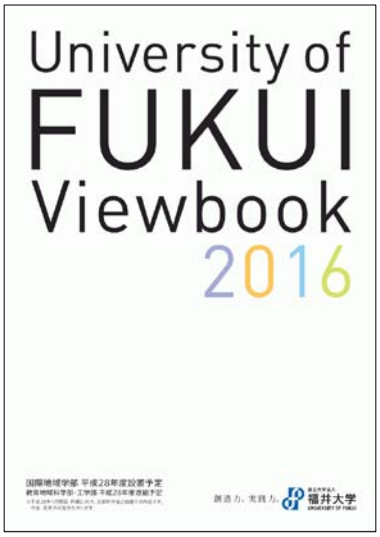


（http://www.eng.u-fukui.ac.jp/）

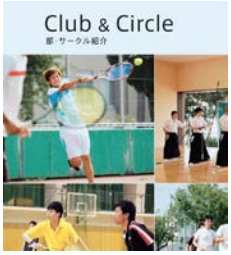
（工学部・工学研究科ウェブサイトより）

資料 1-1-64　冊子による情報提供

2015 年度発行の University of Fukui Viewbook（主に高校生や高校教員対象の大学案内）





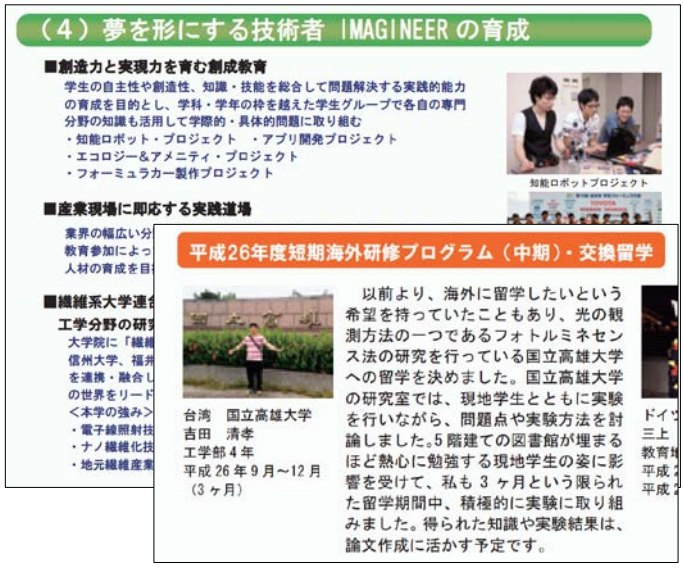






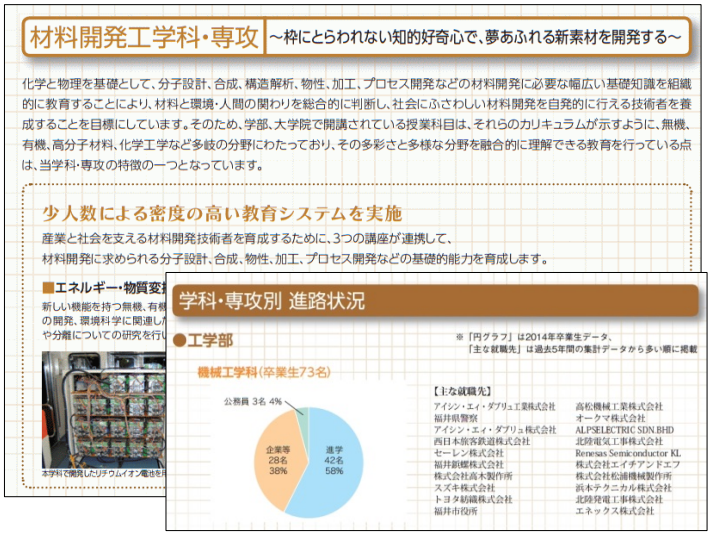
福井大学の特色ある取組（広く社会一般向け）　平成 24 年度から発行（年２回）





福井大学紹介（企業等の求人担当向け）





（事務局資料）

資料 1-1-65　工学部入試説明会（平成 27 年度）

場所	日時	参加者（高校生）人数
武生工業高校	6 月 25 日	2
科学技術高校	6 月 29 日	10
金津高校	7 月 1 日	31
武生高校	7 月 6 日	31
若狭高校	7 月 6 日	14
羽水高校	7 月 7 日	35
美方高校	7 月 7 日	9
丸岡高校	7 月 8 日	14
武生東高校	7 月 8 日	14
敦賀気比高校	7 月 10 日	24
三国高校	7 月 13 日	8
藤島高校	7 月 14 日	10
北陸高校	7 月 21 日	20
仁愛女子高校	7 月 22 日	18
鯖江高校	7 月 22 日	8
高志高校	7 月 27 日	25
福井高校	7 月 29 日	21
勝山高校	7 月 31 日	8
敦賀高校	10 月 16 日	24

（事務局資料）

資料 1-1-66　ミニ・オープンキャンパス

従前より実施してきたオープンキャンパス（８月）に加え，平成 25 年度から，大学祭にあわせて，工学部の高い水準の専門教育に触れてもらう模擬授業を柱とするミニ・オープンキャンパス（５月下旬）を実施している。平成 25 年度の実施結果が以下のように良好であったことからその後も継続している。AO 入試への出願前に適性のある学科を見極めてもらう機会でもある。



（平成 27 年度の案内）

【理解度】
今回の模擬授業では，大学の普段の授業を体験していただきました。授業は理解できましたか？

	人数	構成比
非常に難しく，内容がほとんど理解できなかった	2	6.7%
難しかったが，内容はある程度理解できた	**26**	**86.7%**
簡単であり，内容は十分理解できた	1	3.3%
簡単すぎて，もの足りなかった	1	3.3%
合　計	30	100.0%

【希望する進路への興味】
今回の模擬授業を体験して，希望する進路（学科・学部等）への興味は変わりましたか？

	人数	構成比
期待以上授業内容であり，より興味が増した	**21**	**70.0%**
期待どおりの授業内容であり，興味に変化はない	8	26.7%
期待とは違う授業内容であり，これまでとは違う学科に興味を持った	1	3.3%
期待とは違う授業内容であり，工学部への進学に興味がなくなった	0	0.0%
その他	0	0.0%
合　計	30	100.0%

【受験勉強に取り組む気持ちの変化】
今回の模擬授業を体験して，高校の勉強や受験勉強に取り組む気持ちに変化がありましたか？

	人数	構成比
今まで以上に勉強を頑張ろうと思った	**29**	**96.7%**
頑張る気持ちがなくなった	0	0.0%
変化はない	1	3.3%
合　計	30	100.0%

（参加者アンケート結果（平成 25 年度，抜粋））

（事務局資料）

（水準）　期待される水準を上回る

（判断理由）

① 教育・教務関連の委員会を束ねる教務学生連絡委員会が設置され，教育プログラムを組織的に実施している[1)]。工学部を取組の中心部局として採択されたGGJ事業によるグローバル人材育成のため語学センター等との連携体制を整備[2)]するとともに，東日本大震災以降の原子力教育への対応のため附属国際原子力工学研究所との連携を強化[3)]するなど，学内外と適切に連携している[4)]。これらの体制のもと教育の成果があがり，さらなる改善のため平成28年度学部改組を決定した[5)]。

1)	資料1-1-1	：教育プログラム実施体制　P6-4
	資料1-1-4	：文京キャンパスの共通教育実施体制　P6-7
2)	資料1-1-13	：「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」事業への採択　P6-14
	資料1-1-14	：工学部の英語教育　P6-14
	資料1-1-15	：海外短期インターンシップ　P6-15
	資料1-1-9	：学内のセンター等との連携体制　P6-10
3)	資料1-2-14	：原子力・エネルギー安全工学コース＜副専攻＞
	資料1-1-9	：学内のセンター等との連携体制　P6-10
4)	資料1-1-19	：国際交流センターや国際課と連携した留学生に対する支援体制　P6-20
	資料1-1-21	：日本化学繊維協会による寄附講義「テキスタイル工学」　P6-24
	資料1-1-9	：学内のセンター等との連携体制　P6-10
	資料1-1-22	：外部組織との連携（第２期開始分）P6-25
5)	資料1-1-10	：平成28年度工学部改組　P6-11

② 工学部教育に係る教員のうち，18.4%が企業経験を有し，６名が外国籍である。平成24年度に採択された「テニュアトラック普及・定着事業」や男女共同参画の推進により，女性教員の数が第１期の約2.3倍となり任期付教員の数も増えるなど，質の高い多様な教員の確保が進んだ[6)]。

6)	資料1-1-27	多様な教員の在籍状況や採用実績　P6-28

③ 入学者状況の検証に基づき，APや募集人員の見直し，京都会場新設など[7)]を行った。平成25年度に開始したミニ・オープンキャンパスをはじめ，様々な志願者確保の取組を行った[8)]。平成26年度入試からマレーシアとの協定に基づく学生の受入れも開始した。良好な志願倍率[9)]や充足率[10)]等を維持し，APに合致した学生を確保した[11)]。

7)	資料1-1-32	：入学者の状況の検証　P6-35
	資料1-1-34	：工学部入試の見直し事例　P6-36
	資料1-1-35	：京都会場の新設と会場別受験者数　P6-37
8)	資料1-1-36	：多様な学生の入学促進のための取組　P6-38
	資料1-1-66	：ミニ・オープンキャンパス　P6-75
9)	資料１	：平成22年度から平成27年度の志願倍率　P6-3
10)	資料２	：平成27年度入学者選抜の入学定員，入学者数，直近６年間の平均入学定員充足率等　P6-3
11)	資料1-1-37	：新入生に関する教員へのアンケートとその結果　P6-38
	資料1-1-38	：入学後半年の学生のGPA　P6-39

④ FD体制が整備され，第２期に始めた活動を含め，活発なFD活動が全教員を巻き込んで組織的に行われ[12)]，教員の好評を得ている[13)]。さらに，「授業改善のためのアンケート」

の実施とフィードバック[14]，優秀教員の表彰[15]と優れた取組の web 公開などが行われている。平成 26 年度には新基準での教員評価も実施され[16]，大学機関別認証評価で「主な優れている点」として高く評価された。これらの取組により教員の教育力は向上した[17]。

[12] 資料 1-1-40　：FD 活動の例　P6-40
[13] 資料 1-1-41　：FD 活動に対する教員の評価　P6-43
[14] 資料 1-1-42　：「授業改善のためのアンケート」に基づく授業改善　P6-44
[15] 資料 1-1-44　：工学部優秀教員称号授与制度　P6-49
[16] 資料 1-1-43　：全学方針に基づく新基準により実施した教育活動評価　P6-46
[17] 資料 1-1-45　：教員の教育力向上を裏付ける学生アンケート結果　P6-50

⑤　教育の PDCA サイクルが整備されて機能している[18]。平成 24 年度の外部評価で指摘された課題に機敏に対応するとともに，平成 25 年度の全学的国際外部評価の結果を受け，学生 FD を開始した[19]。GP 等により開始したプログラムを支援期間終了後も学内資金で継続するとともに，GGJ 採択によりグローバル人材育成のためのカリキュラムを整備した[20]。独自のキャリアプログラムも開始した[21]。３学科４プログラムが JABEE 認証を取得し，他学科も JABEE の基準に沿って教育を実施するなど，教育プログラムの質保証を進めた[22]。以上の結果，教育内容・方法改善に対する外部評価結果，JABEE 認証を取得した学科の数，GP 等を踏まえたプログラム等の数，が第１期より向上し，さらに卒業生の就職先からも高い評価を得た[23]。

[18] 資料 1-1-46　：教学マネジメント体制　P6-51
　　資料 1-1-49　：教学マネジメント体制のもとでの活動事例　P6-54
[19] 資料 1-1-40　：FD 活動の例　P6-40
　　資料 1-1-53　：教育に関する全学的な国際外部評価を受けて開始した学生 FD 活動　P6-60
[20] 資料 1-1-62　：外部資金による教育プログラム（支援期間後の継続実施分も含む）　P6-72
　　資料 1-1-13　：「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」事業への採択　P6-14
　　資料 1-1-14　：工学部の英語教育　P6-14
[21] 資料 1-1-61　：みらい協育プログラム　P6-70
[22] 資料 1-1-51　：JABEE 認証の取得　P6-58
　　資料 2-1-4　：JABEE 未受審学科における JABEE 対応（例）　P6-131
[23] 資料 2-2-12　：本学工学部卒業生に関する就職先関係者からの評価　P6-157

以上のように，教育実施体制が適切に整備され，教育の内容・質が第１期より向上し，社会の要請に応えて平成 28 年度改組を決定するなど，十分な取組がなされ成果があがっており，期待される水準を上回る。

観点　教育内容・方法

(観点に係る状況)

●体系的な教育課程の編成状況

【養成する能力等の明示】

① 平成 23 年度にディプロマ・ポリシー（DP）とカリキュラム・ポリシー（CP）を策定し（**資料 1-2-1**），後に社会ニーズの変化に合わせた見直しも行った（**P6-54 前掲資料 1-1-49**）。

各ポリシーは，アドミッション・ポリシー，学士力の要件，JABEE の学習・教育到達目標などと整合性を有するよう定められている（**資料 1-2-2**）。

資料 1-2-1　工学部のディプロマ・ポリシー，カリキュラム・ポリシー

■　工学部全体の DP と CP

工学部ＤＰ

工学部では以下のような卒業生を社会に送り出します。

1. 基礎的な知識・教養、および専門的知識・能力を有している。
2. 創造力、自己学習力、問題解決能力、およびコミュニケーション能力を有している。
3. 高度専門技術者として守るべき倫理や負うべき社会的責任を理解し、幅広い視野をもって社会の発展に貢献できる

工学部ＣＰ

専門的知識・能力に加え、工学で求められる総合力と資質を有する高度専門技術者を育成するため、以下の方針に沿って教育を行います。

1. 工学の基礎となる数学や自然科学にかかわる知識を身に付けさせる。
2. 工学の各分野における専門的知識・能力を身に付けさせる。
3. 多様な学問分野にかかわる幅広い視野を獲得させる。
4. 創造力、自己学習力、問題解決能力、およびコミュニケーション能力を併せた総合力を身に付けさせる。
5. 技術者として守るべき倫理や負うべき社会的責任を理解させる。

■　各学科の DP と CP（機械工学科，電気・電子工学科の例）

機械工学科ＤＰ

機械工学分野の専門教育と先進的研究を通して、以下の知識、能力、資質を備えた機械技術者になりえる者に学士の学位を授与する。

1. 人が環境と調和した快適な社会生活を過ごすためのモノづくりに倫理観を持って寄与できる。
2. 基礎学力と応用力を有している。
3. 未知の問題に対応する能力を備えている。
4. 国際社会において活躍できる。

機械工学科ＣＰ

1. 資源、エネルギー、環境、文化、経済、政治などを地球的な視点でとらえ、「環境と調和した快適な社会生活」とは何かについて考える能力を身につけさせる。
2. 技術が自然や社会におよぼす影響を理解し、技術と技術者が社会で果たすべき役割と責任を自覚する能力を身につけさせる。
3. 数学（線形代数、微分積分学、確率・統計）、物理（力学・電磁気学）および情報技術に関する基礎知識を有し、それらを機械工学に関連する専門技術分野に応用できる能 力を身につけさせる。
4. 機械工学の主要分野（材料と構造、運動と振動、エネルギーと流れ、情報と計測・制御、設計と生産・管理、機械とシステム）に関する基礎知識を有し、それらを諸問題の設定・解決に応用できる能力を身につけさせる。
5. 環境と調和したモノづくりの構想・設計・実行・評価を行う能力を身につけさせる。
6. 「環境と調和した快適な社会生活」を実現するための課題を設定し、その解決のために実験等を自主的かつ継続的に計画・遂行し、その結果を総合的に評価・論述、発表・討議する能力を身につけさせる。
7. 日本語でコミュニケーションする能力及び機械工学に関する内容を英語でコミュニケーションする基礎能力を身につけさせる。
8. 自己と他者が適切に協働しグループとしての目標を達成する能力を身につけさせる。

電気・電子工学科ＤＰ

電気・電子工学の各分野において、高度な専門知識を有し、科学技術の発展と変遷に対応できる能力と高い倫理観を備えた専門技術者になり得る者に学士の学位を授与する。

1. 基礎的な知識・教養、および専門的知識・能力を有している。
2. 創造力、自己学習力、問題解決能力、およびコミュニケーション能力を有している。
3. 高度専門技術者として守るべき倫理や追うべき社会的責任を理解し、幅広い視野をもって社会の発展に貢献できる。

電気・電子工学科ＣＰ

電気・電子工学分野の急速な発展に対応して社会で十分に活躍するためには、基礎学力を身に付けるとともに、さらに意欲的に専門分野の勉学を行うことが必要である。本学科の教育課程は、広範囲にわたる電気・電子工学分野の基礎を確実に身につけさせ、さらに、広い教養と深い洞察力を持たせることを編成方針とし、その方針のもとに講義、演習、実験及びゼミナールが体系的に実施されるように構成されている。電気・電子工学科におけるカリキュラムの学習・教育目標は次の（A）から（H）に分類される。

A. 技術を人間生活、社会及び自然との関わりなど、地球的視点で捉えることができる能力
B. 数学、物理学及び情報技術に関する基礎知識を有し、それらを電気・電子工学に関する専門技術分野に応用できる能力
C. 電気・電子工学の主要分野（物性・デバイス工学、エネルギー工学、システム工学）に関する基礎知識を有し、それらを諸問題の解決に応用できる能力
D. コンピュータやネットワークの実践的な取り扱いや、基礎的なプログラミングができる能力
E. 与えられた課題に対し、主体的、継続的に取り組み、問題を解決する能力
F. 社会の要求に対して、種々の技術・情報を総合して解決策を構想、設計、実行、評価できる能力
G. 日本語及び英語を用いて、ものごとを論理的にまとめ、記述し、討議・コミュニケーションできる能力
H. 技術者として社会に対する倫理・モラルを自覚し研鑽できる能力

（http://www.eng.u-fukui.ac.jp/education/de_policy.html）

（大学ウェブサイトより）

資料 1-2-2　社会的要請等を踏まえたディプロマ・ポリシー，カリキュラム・ポリシーの策定

ディプロマ・ポリシー，カリキュラム・ポリシーの策定にあたっては，教育委員会の下にワーキングを，設置し，大学の理念・長期目標や中央教育審議会の議論等を十分踏まえ，社会の要請に応えた。

工学部・工学研究科のディプロマポリシー、カリキュラムポリシーの案について

平成２３年８月２３日
ディプロマポリシー・カリキュラムポリシーWG
座長　山田 徳史

ディプロマポリシー・カリキュラムポリシーWG（以下WG）では、工学部および工学研究科教育委員会の依頼を受け、工学部・工学研究科のディプロマポリシー（ＤＰ）ならびにカリキュラムポリシー（ＣＰ）の案の作成を行ってきた。この度、ＤＰ案とＣＰ案の取り纏めを終了し、教育委員会に対し、WGの審議の概略とその結果について、以下の通り報告する。

（１）WGのメンバー（敬称略）
小野田、飛田、本田、黒岩、高嶋、橋本(貴)、山田(徳)

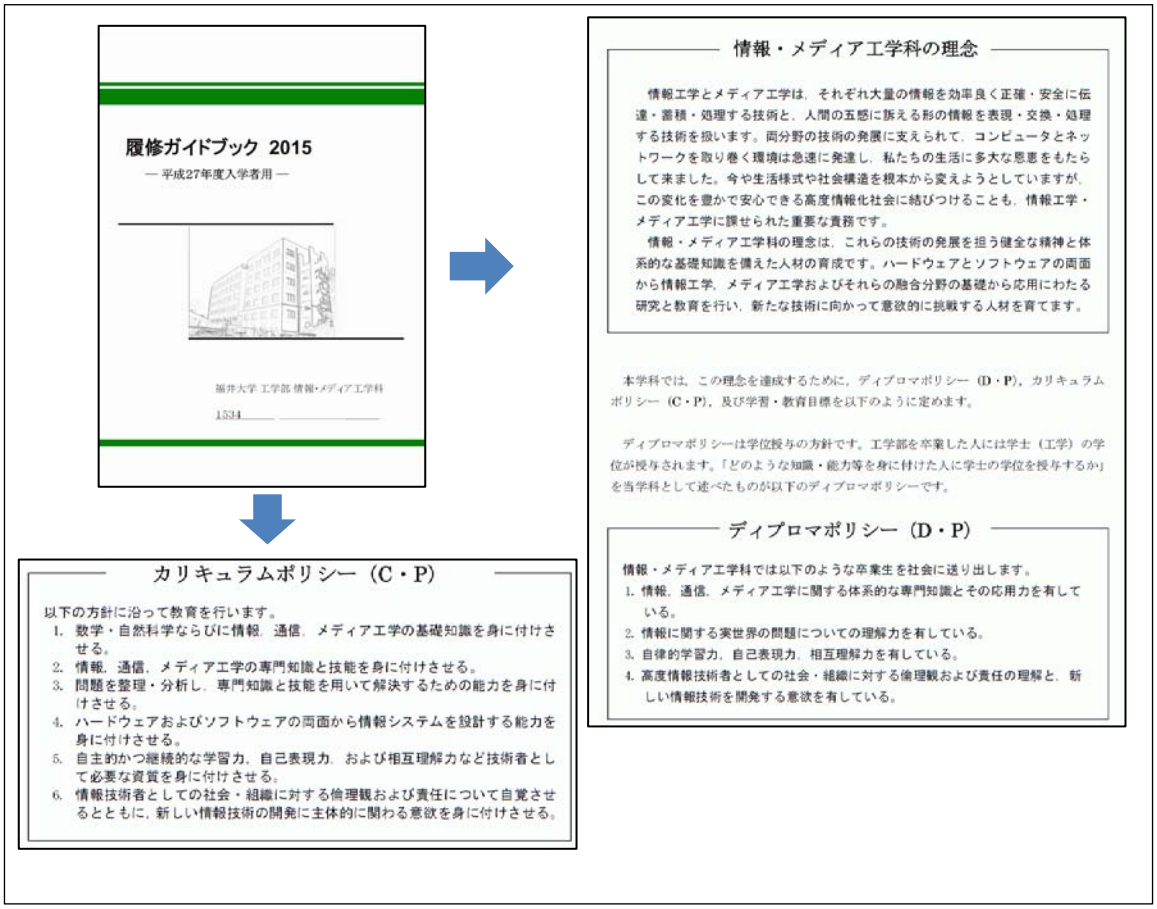
（２）WGの開催状況
第１回　６月１７日　　９：００～１０：００
小野田、飛田、本田、黒岩、高嶋、橋本(貴)、山田(徳)
第２回　６月３０日　　８：４５～９：５５
小野田、飛田、本田、高嶋、橋本(貴)、山田(徳)
第３回　７月１３日　１５：００～１６：１５
黒岩、橋本(貴)、山田(徳)
第４回　７月２９日　１３：００～１４：３０
小野田、飛田、本田、黒岩、橋本(貴)、山田(徳)
第５回　８月３日　　１４：４５～１６：１５

（４）参考にした資料等
・工学部・工学研究科の中期計画とその２３年度計画（教育委員会担当部分）
・３つのポリシーが求められる背景（山田メモ）
・福井大学の理念・長期目標
・夢を形にする技術者、ＩＭＡＧＩＮＥＥＲをめざして（工学部・工学研究科の理念と目的）
・全学教務学生委員会で提示されたＤＰ・ＣＰの「ひな形」（医学部作成）
・他大学・大学院のＤＰ・ＣＰの例
・進研アド発行の"Between"の記事
・福井大学・大学院の学則や工学部・工学研究科の規則（教育課程の編成の方針や卒業・修了要件にかかわる部分の内容）
・Jabee の学習・教育到達目標
・中教審答申「学士課程教育の構築に向けて」、「新時代の大学院教育」（教育課程の編成の方針や学位授与の方針にかかわる部分の内容）
・中教審大学院部会「大学院教育の実質化の検証を踏まえた更なる改善について　中間まとめ」（教育課程の編成の方針や学位授与の方針にかかわる部分の内容）
・第２次大学院教育振興施策要領（Ｈ２３．８．５）
・大学設置基準及び短期大学設置基準の一部を改正する省令（Ｈ２２．２．２５）

（事務局資料）

②　各ポリシーはウェブサイトや学生便覧などで公開され（**資料 1-2-3**），周知状況は良好である（**資料 1-2-4**）。

資料 1-2-3　学科履修ガイドブックでのポリシーの公開例



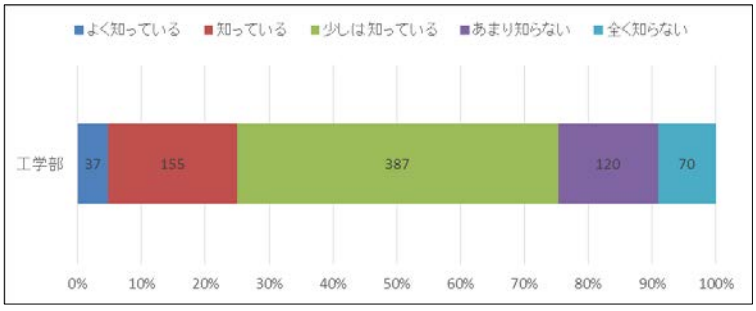
（情報・メディア工学科「履修ガイドブック」より抜粋）

資料 1-2-4　ディプロマ・ポリシーやカリキュラム・ポリシーの周知状況

設問：カリキュラム・ポリシー（教育課程の編成・実施の方針）とディプロマ・ポリシー（学位授与の方針）は，それぞれカリキュラムの目的・内容・編成方針と卒業までに皆さんが達成すべき学修目標を明示したものです。これらはホームページ，シラバス，学生便覧などに掲載されています。あなたはカリキュラム・ポリシーやディプロマ・ポリシーを知っていますか？

⇒　工学部生の回答者の約 75%が，DP や CP を「よく～少しは知っている」と答えている。

※グラフ中の数値は回答者の人数である。



（平成 27 年度「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」より抜粋）

【カリキュラムの体系性】

① 教育課程はCPに基づいて編成され，共通教育と専門教育に大別される。前者は語学や情報などの「基礎教育科目」と幅広い分野の「教養教育・副専攻科目」から成り，後者は数学や物理などの「専門基礎科目」と専門分野の「専門科目」から成る。これらの科目は，相互の関連や年次配分のバランス等を考慮して，配置されている（**資料 1-2-5**）。

資料 1-2-5　専門教育課程表（材料開発工学科の例）

材料開発工学科　専門教育課程表　（平成27年度）

区分		科目名	単前	単位数 必修	単位数 選択	毎週授業時間数 1年 前	1年 後	2年 前	2年 後	3年 前	3年 後	4年 前	4年 後	備考	教職課程 コース 工業	教職課程 コース 理科
共通教育科目	基礎教育科目	大学教育入門セミナー		2		2										
		(第1)外国語科目(英語)		8		4	4	4	4					英語		
		(第2)外国語科目		4		2	2							独，仏，中から1外国語		
		保健体育科目		2		2										
		情報処理基礎科目		2		2								コンピュータリテラシー		
		基礎教育科目小計		16		10	6	4	4							
	教養教育・副専攻科目	(均等履修)		10			(10)									
		(集中履修)		6					(6)							
		(自由選択履修)		4					(4)							
		(副専攻)			(10)									集中履修，自由選択履修で10単位		
		教養教育・副専攻科目小計		20		6	6	6	6	6	6	6		時間数の配置は共通教養・副専攻科目開講時間等の時間数		
	共通教育科目小計			38		18	12	10	10	6	6					
専門教育科目	専門基礎科目	化学概論			2	2										化学
		物理概論			2	2										物理
		線形代数Ⅰ		2		2									工業	
		線形代数Ⅱ		2			2								工業	
		微分積分Ⅰ		2		2									工業	
		微分積分Ⅱ		2			2								工業	
		応用数学Ⅰ		2				2							工業	
		応用数学Ⅱ			2				2						工業	
		応用数学Ⅲ			2				2							物理
		確率・統計			2				2						工業	
		力学	☆	2			2									物理
		材料力学	☆	2				2								物理
		物理学Ⅱ		2			2									物理
		波動・光学		1				1								物理
		熱力学Ⅰ	☆	2		2										物理
		熱力学Ⅱ	☆	2			2									物理
		分析化学	☆	2		2										化学
		有機化学Ⅰ	☆	2			2									化学
		有機化学Ⅱ	☆	2				2								化学
		無機化学Ⅰ	☆	2			2									化学
		無機化学Ⅱ	☆	2				2								化学
		基礎科学実験		2				4						物理学実験と化学実験		化実
		工業日本語Ⅰ			2	2								留学生対象科目		
		工業日本語Ⅱ			2		2							留学生対象科目		
		工業日本語Ⅲ			2			2						留学生対象科目		
		工業日本語Ⅳ			2				2					留学生対象科目		
		留学基礎英語			2									本人申請		
		学際実験・実習Ⅰ			1			3							工業	
		学際実験・実習Ⅱ			1					3					工業	
		放射線安全工学			2						2				工業	
		知的財産権の基礎知識			2						2				工業	
		ベンチャービジネス概論			2							2				
		フロントランナー			2						2					
		ものづくり基礎工学			2		2									
		インターンシップ			1					3						
		海外短期インターンシップⅠ			1											
		海外短期インターンシップⅡ			2											
	専門基礎科目小計			33	36	14	18	18	8	6	6	2				
	専門科目	環境と材料開発の科学			2				2						工業	
		社会と技術者			2						2				工業	
		環境化学	☆	2						2						化学
		溶液科学Ⅰ	☆	2				2							工業	
		溶液科学Ⅱ	☆	2					2						工業	
		反応工学	☆	2						2					工業	
		高分子化学	☆	2					2						工業	
		高分子物理	☆	2					2						工業	
		流体力学	☆	2				2							工業	
		移動現象論	☆	2					2						工業	
		技術英語演習			1							2			工業	
		材料化学実験			3					9						化実
		材料物理実験			3						9					物実
		無機材料化学	☆		2						2				工業	
		応用電気化学	☆		2					2					工業	
		電子セラミックス	☆		2						2				工業	
		機器分析化学	☆		1				1						工業	
		有機反応	☆		2				2							化学
		有機合成化学	☆		2					2						化学
		高分子合成	☆		2					2					工業	
		機能性高分子	☆		2						2				工業	
		分子相互作用論	☆		2					2					工業	
		レオロジー	☆		2						2				工業	
		固体物理学	☆		2					2					工業	
		固体力学	☆		2					2						物理
		複合材料	☆		2						2				工業	
		シミュレーション工学	☆		1						1				工業	
		材料加工工学	☆		2						2				工業	
		化学工学	☆		2						2				工業	
		テキスタイル工学			2					2					工業	
		繊維科学概論			1						1					物理
		材料開発工学特別講義及び演習			1						2				工業	
		情報処理演習			1		2									物理
		科学技術英語特別講義			2									4年次に履修		
	専門科目小計			21	37		2	4	13	27	29	2				
	卒業論文				8											
	専門教育科目小計			68	73	14	20	22	21	33	35	4				
総計				106	73	32	32	32	31	39	41	4				

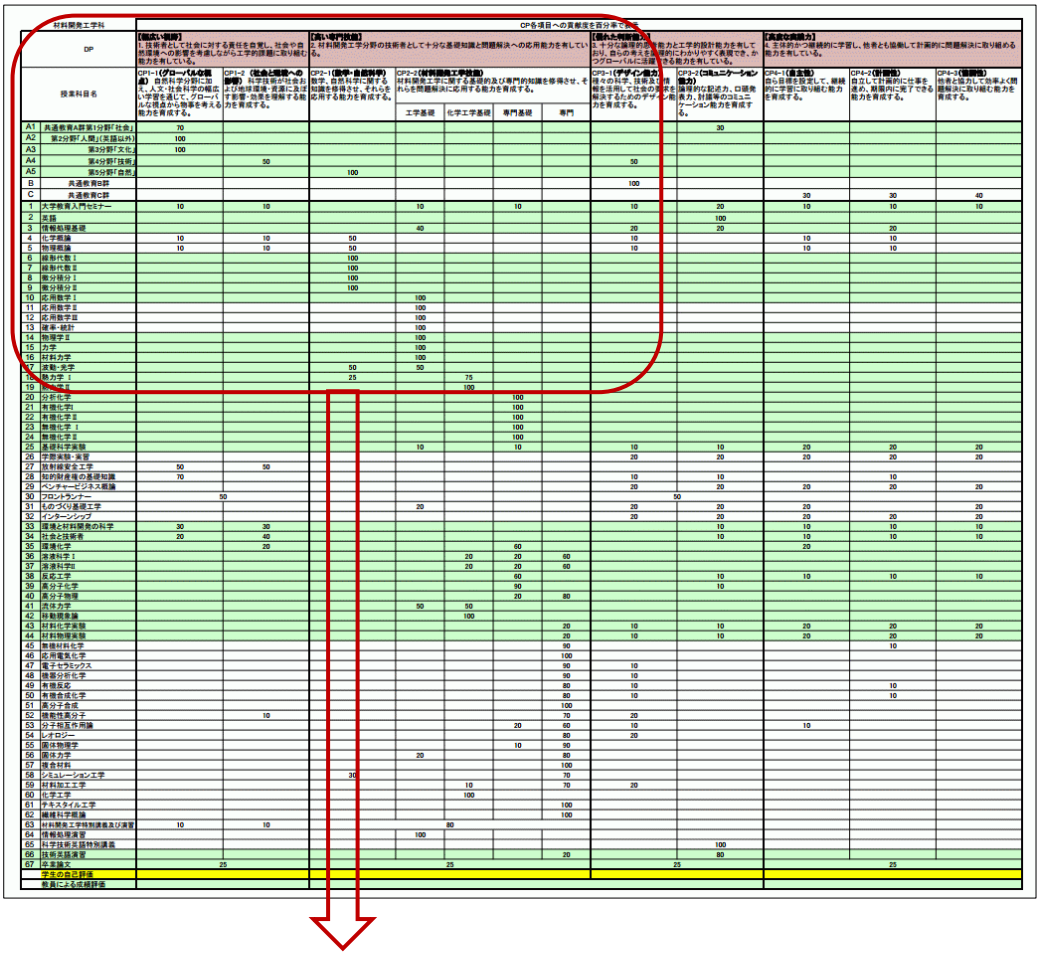
☆ 材料開発工学副専攻

（福井大学HANDBOOK 2015 学生便覧より抜粋）

② カリキュラムマップとカリキュラムツリーを作成・公開した（**資料 1-2-6**）。科目配置等に対する学生の満足度は良好である（**資料 1-2-7**）。

資料 1-2-6　カリキュラムマップとカリキュラムツリー（材料開発工学科の例）

（1）カリキュラムマップ

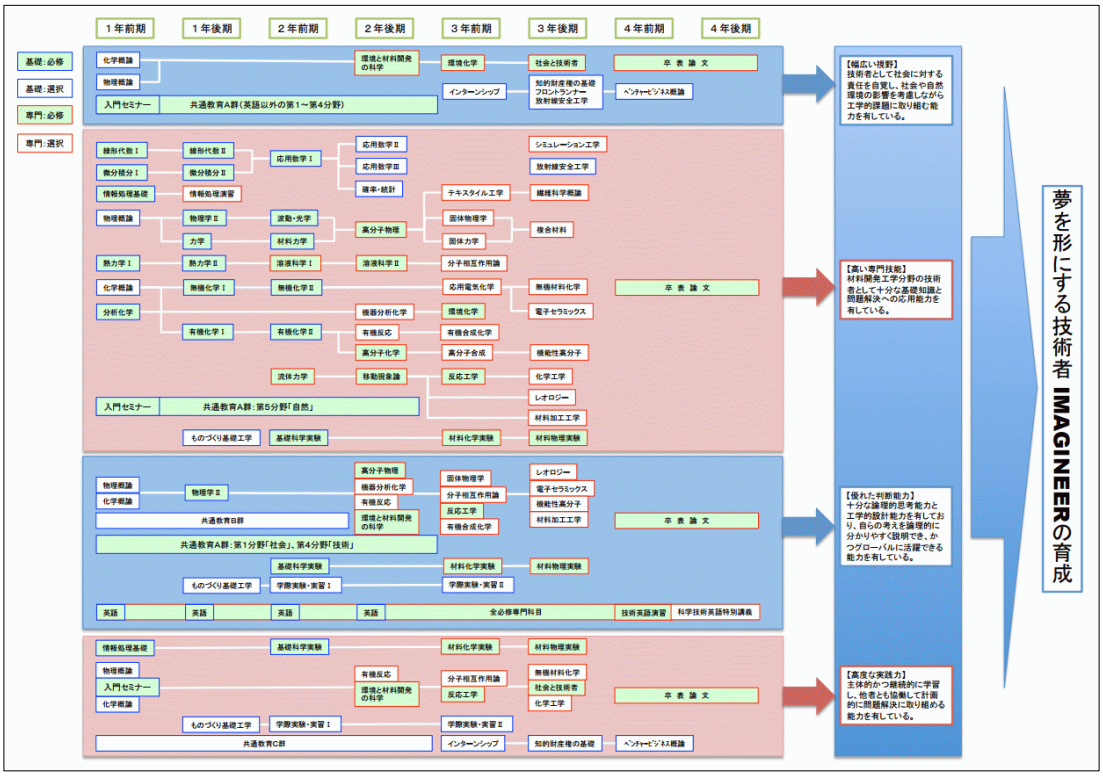


材料開発工学科		CP各項目への貢献度を百分率で表示											
DP		【幅広い視野】1. 技術者として社会に対する責任を自覚し、社会や自然環境への影響を考慮しながら工学的課題に取り組む能力を有している。		【高い専門技能】2. 材料開発工学分野の技術者として十分な基礎知識と問題解決への応用能力を有している。					【優れた判断能力】3. 十分な論理的思考能力と工学的設計能力を有しており、自らの考えを論理的にわかりやすく表現でき、かつグローバルに活躍できる能力を有している。		【高度な実践力】4. 主体的かつ継続的に学習し、他者とも協働して計画的に問題解決に取り組める能力を有している。		
授業科目名		CP1-1（グローバルな視点）自然科学分野に加え、人文・社会科学の幅広い学習を通じて、グローバルな視点から物事を考える能力を育成する。	CP1-2（社会と環境への影響）科学技術が社会および地球環境・資源に及ぼす影響・効果を理解する能力を育成する。	CP2-1（数学・自然科学）数学、自然科学に関する知識を修得させ、それらを応用する能力を育成する。	CP2-2（材料開発工学技能）材料開発工学に関する基礎的及び専門的知識を修得させ、それらを問題解決に応用する能力を育成する。				CP3-1（デザイン能力）種々の科学、技術及び情報を活用して社会の要求を解決するためのデザイン能力を育成する。	CP3-2（コミュニケーション能力）論理的な記述力、口頭発表力、討議等のコミュニケーション能力を育成する。	CP4-1（自主性）自ら目標を設定して、継続的に学習に取り組む能力を育成する。	CP4-2（計画性）自立して計画的に仕事を進め、期限内に完了できる能力を育成する。	CP4-3（倫理性）社会と協力して効率よく問題解決に取り組む能力を育成する。
						工学基礎	化学工学基礎	専門基礎	専門					
A1	共通教育A群第1分野「社会」	70									30			
A2	第2分野「人間」(英語以外)	100												
A3	第3分野「文化」	100												
A4	第4分野「技術」		50							50				
A5	第5分野「自然」			100										
B	共通教育B群									100				
C	共通教育C群											30	30	40
1	大学教育入門セミナー	10	10		10		10		10		20	10	10	10
2	英語										100			
3	情報処理基礎				40				20		20		20	
4	化学概論	10	10	50					10			10	10	
5	物理概論	10	10	50					10			10	10	
6	線形代数 I			100										
7	線形代数 II			100										
8	微分積分 I			100										
9	微分積分 II			100										
10	応用数学 I				100									
11	応用数学 II				100									
12	応用数学 III				100									
13	確率・統計				100									
14	物理学 II				100									
15	力学				100									
16	材料力学				100									
17	波動・光学			50	50									
18	熱力学 I			25		75								
19	熱力学 II					100								
20	分析化学							100						
21	有機化学I							100						
22	有機化学 II							100						
23	無機化学 I							100						
24	無機化学 II							100						
25	基礎科学実験				10			10		10	10	20	20	20
26	学際実験・実習									20	20	20	20	20
27	放射線安全工学	50	50											
28	知的財産権の基礎知識	70								10	10		10	
29	ベンチャービジネス概論									20	20	20	20	20
30	フロントランナー		50								50			
31	ものづくり基礎工学				20					20	20	20		20
32	インターンシップ									20	20	20	20	20
33	環境と材料開発の科学	30	30								10	10	10	10
34	社会と技術者	20	40								10	10	10	10
35	環境化学		20					60				20		
36	溶液科学 I					20	20	60						
37	溶液科学II					20	20	60						
38	反応工学						60				10	10	10	10
39	高分子化学						90				10			
40	高分子物理						20	80						
41	流体力学				50	50								
42	移動現象論					100								
43	材料化学実験							20		10	10	20	20	20
44	材料物理実験							20		10	10	20	20	20
45	無機材料化学							90					10	
46	応用電気化学							100						
47	電子セラミックス							90		10				
48	機器分析化学							90		10				
49	有機反応							80		10			10	
50	有機合成化学							80		10			10	
51	高分子合成							100						
52	機能性高分子		10					70		20				
53	分子相互作用論						20	60		10		10		
54	レオロジー							80		20				
55	固体物理学						10	90						
56	固体力学				20			80						
57	複合材料							100						
58	シミュレーション工学			30				70						
59	材料加工工学					10		70		20				
60	化学工学					100								
61	テキスタイル工学							100						
62	繊維科学概論							100						
63	材料開発工学特別講義及び演習	10	10			80								
64	情報処理演習				100									
65	科学技術英語特別講義										100			
66	技術英語演習							20			80			
67	卒業論文		25			25				25			25	
	学生の自己評価													
	教員による成績評価													



材料開発工学科		CP各項目への貢献度を百分率で表示										
DP		【幅広い視野】1. 技術者として社会に対する責任を自覚し、社会や自然環境への影響を考慮しながら工学的課題に取り組む能力を有している。		【高い専門技能】2. 材料開発工学分野の技術者として十分な基礎知識と問題解決への応用能力を有している。					【優れた判断能力】3. 十分な論理的思考能力と工学的設計能力を有しており、自らの考えを論理的にわかりやすく表現でき、かつグローバルに活躍できる能力を有している。		【高度な実践力】4. 主体的かつ継続的に学習し、他者とも協働して計画的に問題解決に取り組める能力を有している。	
授業科目名		CP1-1（グローバルな視点）自然科学分野に加え、人文・社会科学の幅広い学習を通じて、グローバルな視点から物事を考える能力を育成する。	CP1-2（社会と環境への影響）科学技術が社会および地球環境・資源に及ぼす影響・効果を理解する能力を育成する。	CP2-1（数学・自然科学）数学、自然科学に関する知識を修得させ、それらを応用する能力を育成する。	CP2-2（材料開発工学技能）材料開発工学に関する基礎的及び専門的知識を修得させ、それらを問題解決に応用する能力を育成する。				CP3-1（デザイン能力）種々の科学、技術及び情報を活用して社会の要求を解決するためのデザイン能力を育成する。	CP3-2（コミュニケーション能力）論理的な記述力、口頭発表力、討議等のコミュニケーション能力を育成する。	CP4-1（自主性）自ら目標を設定して、継続的に学習に取り組む能力を育成する。	
						工学基礎	化学工学基礎	専門基礎	専門				
A1	共通教育A群第1分野「社会」	70									30		
A2	第2分野「人間」(英語以外)	100											
A3	第3分野「文化」	100											
A4	第4分野「技術」		50							50			
A5	第5分野「自然」			100									
B	共通教育B群									100			
C	共通教育C群												30
1	大学教育入門セミナー	10	10		10		10		10		20	10	
2	英語										100		
3	情報処理基礎				40				20		20		
4	化学概論	10	10	50					10				10
5	物理概論	10	10	50					10				10
6	線形代数 I			100									
7	線形代数 II			100									
8	微分積分 I			100									
9	微分積分 II			100									
10	応用数学 I				100								
11	応用数学 II				100								
12	応用数学 III				100								
13	確率・統計				100								
14	物理学 II				100								
15	力学				100								
16	材料力学				100								
17	波動・光学			50	50								
18	熱力学 I			25		75							
19	熱力学 II					100							

（2）カリキュラムツリー



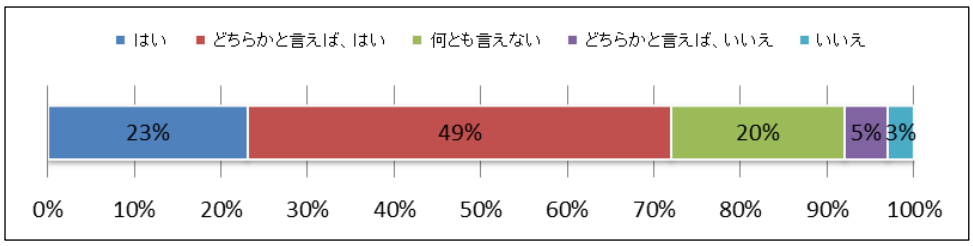
（http://u105003-l2011.labos.ac/ja/page/p5.html）

（高等教育推進センター FD・教育企画部門ウェブサイトより）

資料 1-2-7　科目配置に対する評価や履修すべき科目についての理解

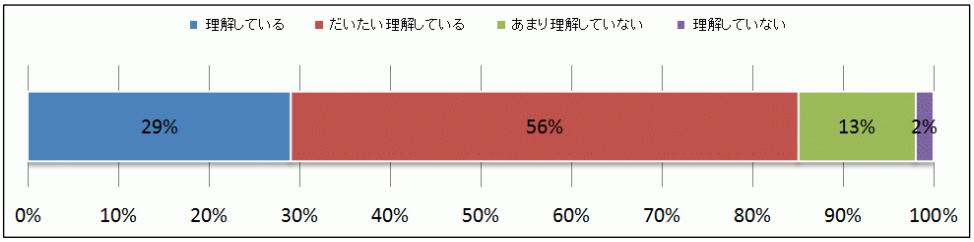
設問　工学部のカリキュラムでは，科目の種類や開講時期などが適切に考慮されていると思うか？

⇒　回答者（818 名）の 72%が「はい」あるいは「どちらかと言えば，はい」と答えている。



設問　4 年間を通じ各学年でどのような科目を履修しなければならないか理解しているか？

⇒　回答者（819 名）の 85%が「理解している」あるいは「だいたい理解している」と答えている。



（平成 26 年度カリキュラムアンケートより抜粋）

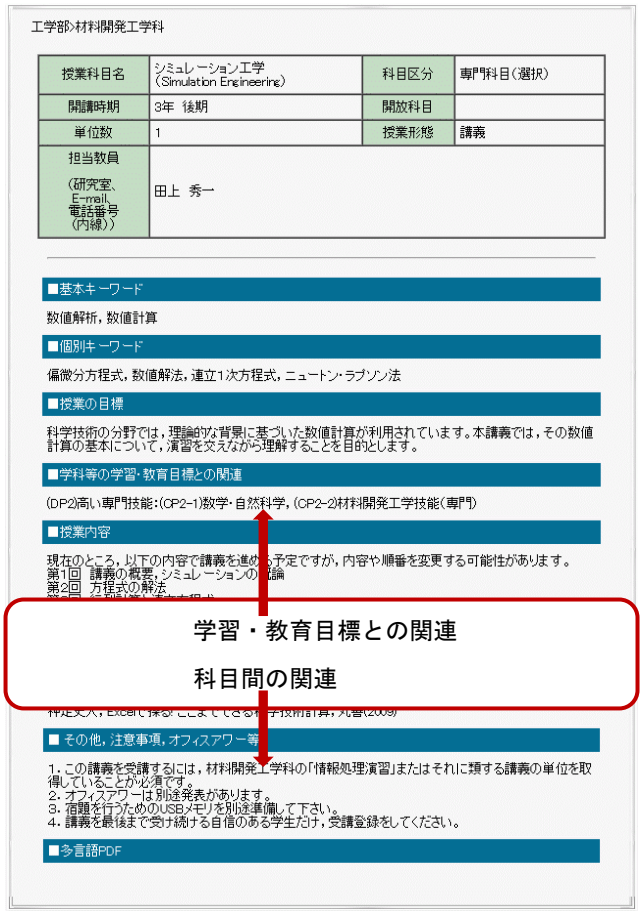
③　学習・教育目標に対する科目の貢献度や，履修の前提となる科目などはシラバスに掲載している。シラバスはホームページで公開され，利用状況は良好である（**資料 1-2-8**）。

資料 1-2-8　シラバス



（https://nsyllabus1.sao.u-fukui.ac.jp/）

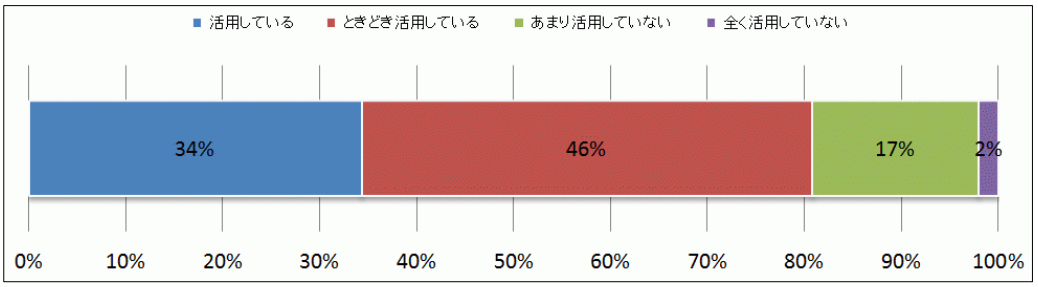




（「シラバス検索システム」ウェブサイトより）

■　**シラバスの利用状況**

「シラバスを活用していますか？」という設問に対し，回答学生の８割がシラバスを「活用している」あるいは「ときどき活用している」と答えており，シラバスは多くの学生に利用されていることがわかる。



（平成 26 年度カリキュラムアンケートより抜粋）

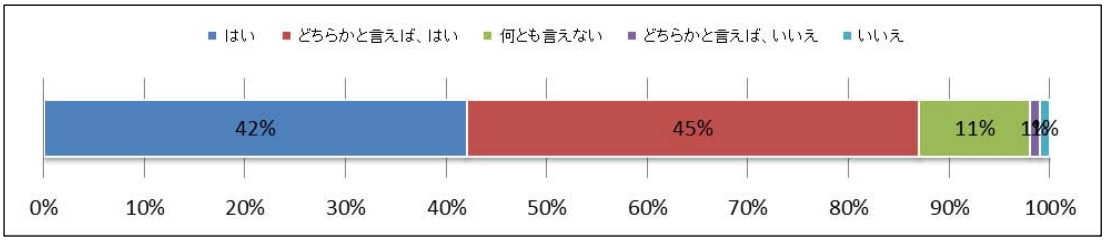
（事務局資料）

④　体系的に整備されたカリキュラムに対する学生の期待と満足度は高い（**資料 1-2-9, P6-50 前掲資料 1-1-45**）。

資料 1-2-9　カリキュラムに対する学生の期待

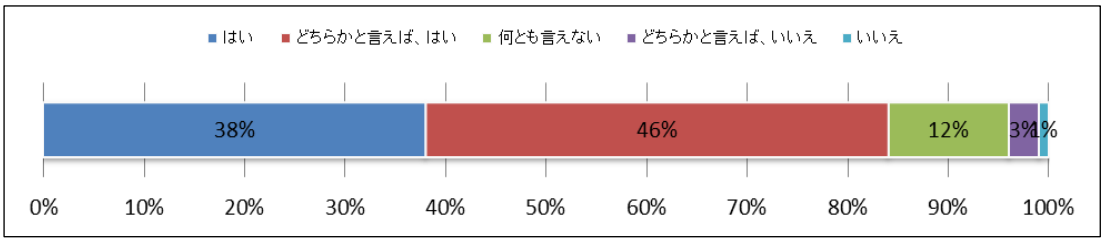
設問　工学部のカリキュラムに沿って真摯に学習を続けていくことにより，卒業時までに「基礎的な知識・教養」を修得できると思いますか？

⇒回答者（818 名）の 87%が「はい」あるいは「どちらかと言えば，はい」と答えている。



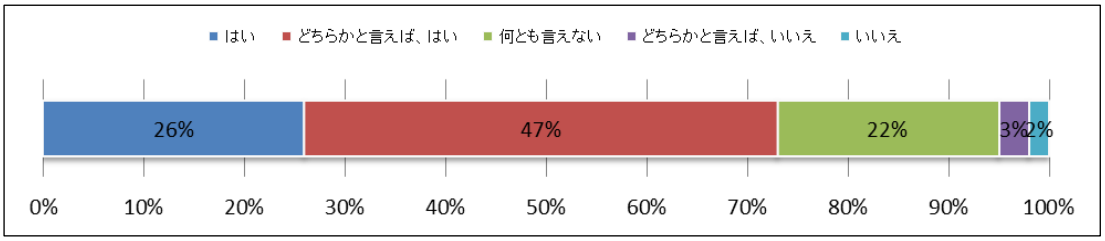
設問　工学部のカリキュラムに沿って真摯に学習を続けていくことにより，卒業時までに「専門的知識・能力」を修得できると思いますか？

⇒回答者（818 名）の 84%が「はい」あるいは「どちらかと言えば，はい」と答えている。



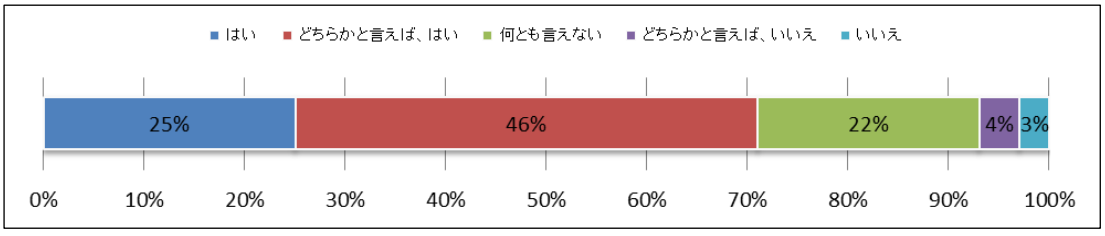
設問　工学部のカリキュラムに沿って真摯に学習を続けていくことにより，卒業時までに「創造力，自己学習力，問題解決能力」を修得できると思いますか？

⇒回答者（818 名）の 73%が「はい」あるいは「どちらかと言えば，はい」と答えている。



設問　工学部のカリキュラムに沿って真摯に学習を続けていくことにより，卒業時までに「幅広い視野」を修得できると思いますか？

⇒回答者（818 名）の 71%が「はい」あるいは「どちらかと言えば，はい」と答えている。



（事務局資料）

【教養教育と専門教育の関わり】

① 習熟度別少人数クラスの導入など，英語教育を充実させ（**P6-14 前掲資料 1-1-14**），特色 GP（第１期採択）で高く評価された共通教育（**P6-6 前掲資料 1-1-3**）の質を，GGJ 事業によりさらに向上させた。

② 共通教育科目「大学教育入門セミナー」の後半を学科が担当し，少人数教育で専門分野の学修に対する自覚を促し，学生から好評を得ている（**資料 1-2-10，11**）。

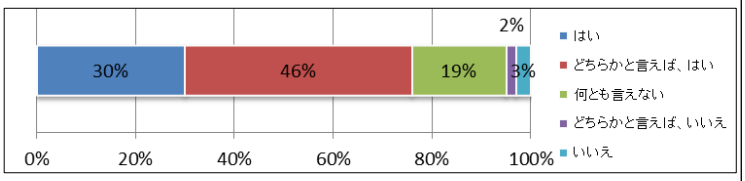
資料 1-2-10　共通教育科目「大学教育入門セミナー」で専門に触れる取組

学科	学科別カリキュラムの内容
機械工学科	学科の教育理念・目的と学習・教育目標の説明。知的財産に関する特別講演とグループ討議，口頭で発表・討論（合宿研修時）。研究室訪問（５回に分ける）。学科の教育プログラム（JABEE 対応）の説明。
電気・電子工学科	電気・電子工学および各分野の概要。レポート作成の心得，調査・探求の心得の講義。グループにワーク： 調査・探求し，レポートを作成し，グループ内で発表。
情報・メディア工学科	グループワークで必要となる基礎技術・基礎知識を修得するための実習形式授業（３回）グループに分かれ映像作品の企画立案作成し，発表。PC 組立て。
建築建設工学科	ガイダンス，講演，現場見学，グループディスカッションを行う（新入生合宿研修時［３回分］）。少人数グループで各分野およびの個別授業。技術者に期待される社会貢献，技術者倫理についての実務者等による講義。
材料開発工学科	助言教員による個別授業。
生物応用化学科	「情報調査・統合」のためのレクチャー（３回）：GLP（Green Leaves Project）の図書を推薦した理由や背景，新入生に期待すること，その他，新入生に話しておきたいこと．各専門分野の概要を説明。合宿研修で新入生４～５名と助言教員研究室の修士，または４年生が一つのグループを作り，推薦図書を宣伝するポスター作り，発表。GLPとして，「推薦図書を読む→PCを用いてA4判１ページ程度のレポート作成 → 推薦教員に提出→ 教員がコメントを書いて返却」を５回実施。まとめのレポート作成。
物理工学科	物理学の基礎を学ぶ講義（５回）。先輩セミナー（２回）。助言教員による個別指導（２回）。
知能システム工学科	ライントレースを行うロボットをレゴマインドストーム(TM)を用いて４～６名の実験グループで目標を立て実験を行い，準備や計画の段階から，実験を行って結果を得て，最終的にレポートを提出。

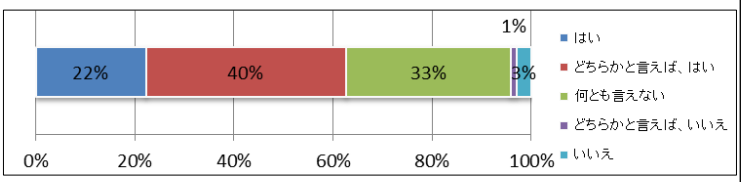
（事務局資料）

資料 1-2-11　大学教育入門セミナーを中心とした初年次教育に対する学生の評価

設問
入学時オリエンテーション，新入生合宿研修，大学教育入門セミナーなどの初年次教育を受けたことにより，大学教育に円滑に移行できたか。



設問
入学時オリエンテーション，新入生合宿研修，大学教育入門セミナーなどの初年次教育を受けたことにより，学修意欲は増したか。



※回答数　818 名　（平成 26 年度カリキュラムアンケートの結果より抜粋）

（事務局資料）

③　平成 26 年度から，語学センターの教員と学科の教員が協力して「英語で創成活動を行う英語 PBL」を開講し，好評を得ている（**資料 1-2-12**）。

資料 1-2-12　共通教育と専門教育の協働で実施した英語 PBL

■　概要

専門分野の研究開発に活用できる実践的なコミュニケーション力をつけるため，共通教育の英語クラスのうち最もレベルの高いアドバンスクラスにおいて，英語による Project Based Learning（英語 PBL）を実施した。学生が所属する各学科の教員と語学センターの教員（２名）が実践的な課題を与え，４名ずつの６グループに分かれた学生は，英語でのディスカッションを経て課題を解決し，最後にその成果をプレゼンテーションするという他大学にはないユニークな内容であった。各クラスにおいて２～３課題が与えられ，各課題について課題提示からプレゼンテーションまで５週間をあてた。各クラスでは学科の教員１名～２名と語学センターの教員２名が指導にあたった。

■　受講学生数

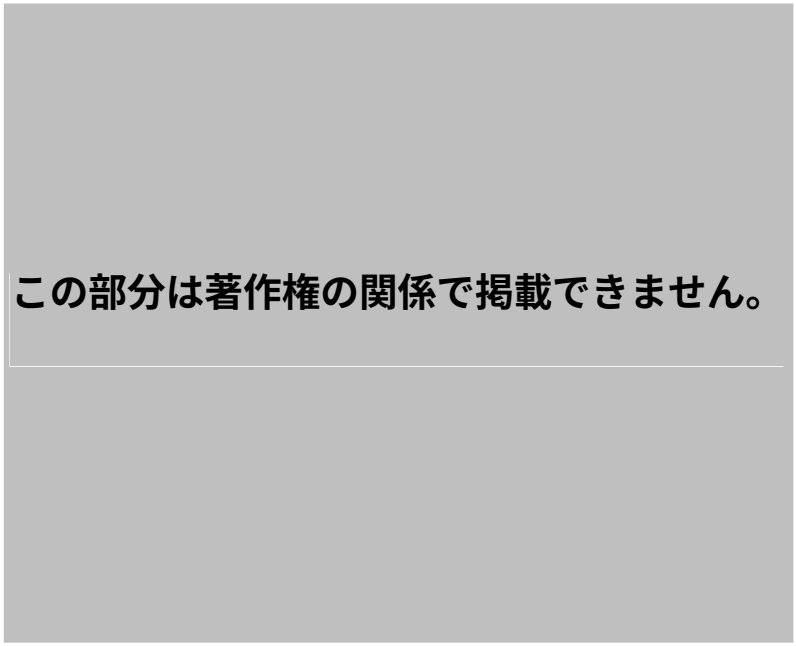
年度・学期	機械工学科	建築建設工学科	材料開発工学科	生物応用化学科
平成 26 年度前期	12	12	－	－
平成 26 年度後期	－	－	12	12
平成 27 年度前期	12	12	－	－
平成 27 年度後期	－	－	12	12

■　受講学生へのアンケート結果

平成 27 年度の機械工学科と建築建設工学科のクラスの総合評価（「総合的に判断してこの授業はよかったですか」という設問に対して５点満点で学生が評価）では，4.65 点が得られた。また，学生は，教員がそれぞれの専門分野を生かした的確なアドバイスを与えていたこと，実践的場面で活かせる英語教育ができたことなどをコメントした。

■　地元企業の方をお招きして実施した英語 PBL 発表会の様子

地元眼鏡メーカーの社長から高く評価されたことが報道された。



（平成 26 年 7 月 26 日　福井新聞３面）

（事務局資料）

【科目群】

①　専門基礎科目の中に，実践力育成やグローバル人材育成にかかわる科目群を設け（**資料 1-2-13**），学生の好評を得て，学修成果があがっている（**P6-134 後掲資料 2-1-8**）。

資料 1-2-13　専門基礎科目の中に配置された実践力育成やグローバル人材育成にかかわる科目群

	科目名	概要	単位修得者数（平成 27 年度）
実践力を鍛え視野を広げる	学際実験・実習Ⅰ・Ⅱ （**P6-94 後掲資料 1-2-16**）	学生主体のグループ活動を通じて以下の能力などを修得する。自主性，創造力，問題発見・解決能力，実践力，コミュニケーション能力，プレゼンテーション能力，情報スキル，倫理的判断能力	72
	ものづくり基礎工学	創造力と実践力を育成する活動を行うための学習支援科目として開講。先進国の技術者に求められるイノベーション能力獲得の基礎的素養を修得する。	59
	知的財産権の基礎知識	知財とは何かという基本的なところから，企業や国家の知財戦略までを，実習を含めて理解する。	27
	ベンチャービジネス概論	社会に新しい価値や活力をもたらすベンチャービジネスについての基本知識（ベンチャービジネスの概要，イノベーション，マーケティング，マネジメントなど）ビジネスに関する基本スキル（ビジネスの着眼・構築力，プレゼンテーション力）の修得を目的とし，技術シーズや市場ニーズをビジネスに展開していくための考え方を事例をもとに学ぶ。個人あるいはグループでベンチャー的なビジネスを考え，ビジネスアイデアにまとめ，発表する。	13
	フロントランナー	企業の最先端で活躍している経営者や研究者が，仕事の内容や MOT の紹介を行うとともに仕事に対する考えや将来の夢を熱く語る。学生が社会の第一線の方々と触れ合うことにより，自分の将来と社会に対する期待感を内面から高めることを目的とする。	40
	放射線安全工学	東日本大震災以降，放射線に関する正しい知識を修得する必要性がますます高まっており，実習を含めて以下を学ぶ。 ① 放射能・放射線の基礎知識及び放射線の線量概念 ② 線量測定などの放射線の安全な取り扱いと放射線防護に関する基礎的事項	64
	インターンシップ （**P6-22 前掲資料 1-1-20**）	企業などで就業体験を行い，実社会における技術者の役割や仕事などを理解し，社会人として働く場合の自己意識を確立する。福井県経営者協会と連携して実施。事前・事後研修を大学で実施。	83 （経営者協会経由が 63）

グローバル人材の基盤となる	留学基礎英語	留学促進のため，TOEIC や TOEFL で一定以上のスコアを得た者に単位認定を行う。	3
	海外短期インターンシップⅠ～Ⅵ （27 年度からは整理して海外短期インターンシップⅠ・Ⅱ） 第２期に開始 （P6-15 前掲資料 1-1-15）	GGJ 事業の一環として実施する海外研修プログラムに参加し，歴史・文化・習慣が異なる地域においても，そこに暮らす人々の暮らしをデザインすることのできる基礎的な知識・教養及び専門的知識・能力を養う。さらに，様々な国の暮らしを形作る社会システムを参考に，日本や福井県などの地域社会や暮らしをデザインできるようになるためのきっかけを得る。	85

（事務局資料）

② 東日本大震災以降に「原子力・エネルギー安全工学コース」の科目を一部見直して継続し，全学科から受講生が集まり好評を得ている（**資料 1-2-14**）。

資料 1-2-14　原子力・エネルギー安全工学コース＜副専攻＞

■　概要

「原子力・エネルギー安全工学コース（副専攻）」は，独立専攻である原子力・エネルギー安全工学専攻の導入教育となるコースである。このコースでは，工学部の学生が，原子力・環境・エネルギー・技術者倫理などを体系的に学ぶ事ができ，本コースを履修することにより，原子力・エネルギー安全工学専攻での専門的学習に備えた十分な基盤を作ることができる。本カリキュラムの修了要件を満たした者には，「原子力・エネルギー安全工学コース（副専攻）修了証」が学長名で授与される。

■　特徴

・附属国際原子力工学研究所と連携して実施している。

・東日本大震災以降の状況を踏まえて科目の見直しを進め，上記連携のもと，平成 26 年度から「地球環境とエネルギーセキュリティ」，「放射線の生物影響と防護」，「原子力安全・防災論」を開始した。

区　分		授　業　科　目	単位数	毎週授業時間数			備　考
				2年次	3年次	4年次	
コース専用科目	☆	原子力システム概論	2	2			2～4年次に履修
	☆	技術者倫理と社会的責任	2	2			
	☆	放射線の化学	2	2			
	☆	量子ビーム工学	2	2			
	☆	核燃料サイクル工学	2	2			
	☆	地球環境とエネルギーセキュリティ	2	2			
	☆	原子炉物理学・原子炉工学基礎	2	2			
	☆	原子炉材料・核燃料工学	2	2			
	☆	原子炉構造工学概論	2	2			
	☆	原子力・エネルギー安全工学実習	2	2			
	☆	放射線の生物影響と防護	2	2			
	☆	原子力関連法令と国際基準	2	2			
	☆	原子力安全・防災論	2	2			
全学科共通科目	○	放射線安全工学	2	／	2		3、4年次に履修
合　計			28	／			

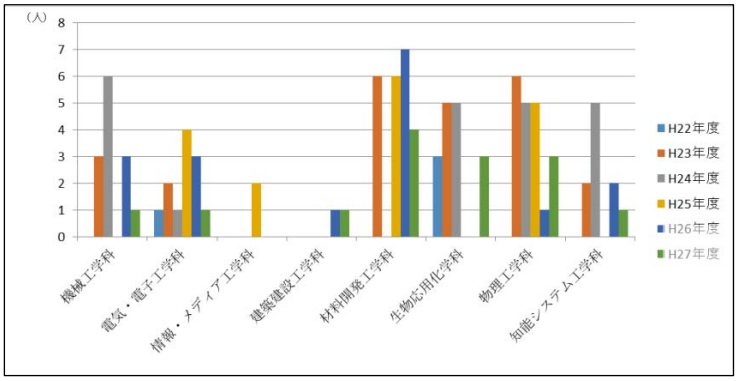
上記カリキュラム表から合計20単位以上を履修すること。

(http://eng.eng.u-fukui.ac.jp/wpes/course2/)

■　修了者数

	H22 年度	H23 年度	H24 年度	H25 年度	H26 年度	H27 年度	計
副専攻修了者数	4	24	22	17	17	14	98

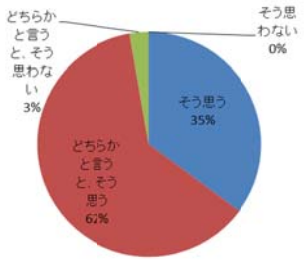
学科別修了者数は以下のようであり，全ての学科から修了生が出ている。



■　受講生からの評価

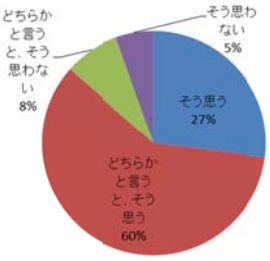
設問１　副専攻コースの講義は充実していました か。

そう思う	10
どちらかと言うと、そう思う	22
どちらかと言うと、そう思わない	3
そう思わない	2
合計	37



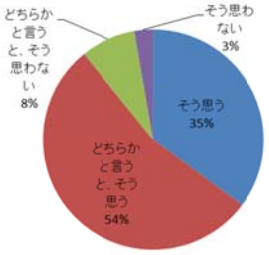
設問２　副専攻コース において専攻と研究所の教員の連携はスムーズでしたか。

そう思う	13
どちらかと言うと、そう思う	23
どちらかと言うと、そう思わない	1
そう思わない	0
合計	37



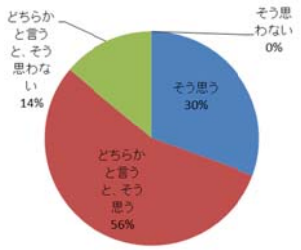
設問３　副専攻コース の講義は，大学の基礎教育として有益でしたか。

そう思う	13
どちらかと言うと、そう思う	20
どちらかと言うと、そう思わない	3
そう思わない	1
合計	37



設問４　副専攻コース の講義は，大学院教育への 橋渡しとして 役に立つと思いますか。

そう思う	11
どちらかと言うと、そう思う	20
どちらかと言うと、そう思わない	5
そう思わない	0
合計	36



（事務局資料）

③　繊維先端工学専攻（独立専攻）への導入教育として，「先端繊維科学コース」を設け（**資料 1-2-15**），学生の好評を得るとともに，繊維教育の充実として地元産業界の期待に応えた。

資料 1-2-15　先端繊維科学コース＜副専攻＞

■　概要

「先端繊維科学コース（副専攻）」は，独立専攻である繊維先端工学専攻の導入教育となるコースであり，材料開発工学科及び生物応用化学科の学生を対象としている。所属する学科で基礎となる化学や物理を学びながら，繊維とは何かその魅力に始まり繊維科学の基礎から応用までを体系的に学ぶことができる。本コースを履修すると，繊維系技術者に必要な知識を習得すると共に，博士前期課程繊維先端工学専攻での専門的な学習に備えた十分な基盤を作ることができる。カリキュラムの修了要件を満たした者には，副専攻として「先端繊維科学コース（副専攻）修了証」が学長名で発行される。

■　特徴

・コース科目のうち「テキスタイル工学」は日本化学繊維協会からの寄附による講義であり，地域の主要産業である繊維産業への学生の関心が高まるなど，学生から好評を得ている（**P6-24 前掲資料 1-1-21**）。

・平成 25 年度に開始した副専攻であり，平成 29 年３月に最初の修了者が出る予定。

区分		授業科目	単位数	毎週授業時間数 1年次	2年次	3年次	4年次	備考
全学科共通科目	●	ものづくり基礎工学	2	2				1～4年次履修
	●	知的財産権の基礎知識	2			2		3，4年次履修
	●	ベンチャービジネス概論	2				2	4年次履修
共通教育科目	☆	進化する繊維の技術	2	2				1～4年次履修
	☆	繊維の世界	2	2				
コース専門科目A	○	材料力学	2		2			2～4年次履修
	○	固体力学	2			2		3，4年次履修
	○	材料加工工学	2			2		
	○	分子相互作用論	2			2		
	○	複合材料	2			2		
コース専門科目B	○	機能分子化学	2			2		
	○	ナノ材料化学	2			2		
	○	微生物工学	2			2		
	○	繊維加工学概論	2			2		
コース専門科目共通	○	テキスタイル工学	2			2		
	◎	繊維産業フロンティア	2			2		3，4年次履修 定員15名
	◎	国際交流演習	2				2	4年次履修
合計			34					

履修上の注意

1　本カリキュラム修了要件

上記カリキュラム表から合計20単位以上を修得すること。

コース専門科目Ａ及びコース専門科目Ｂから各4単位以上を修得すること。

（福井大学 HANDBOOK2015 学生便覧より抜粋）

【学際的教育】

①　教育 GP「夢を形にする技術者育成プログラム」が平成 22 年度に終了した後も，学際的創成科目「学際実験・実習Ⅰ，Ⅱ」を自主財源で継続し，全学科から受講生を得て，能力等の涵養状況は良好である（**資料 1-2-16**）。

資料 1-2-16　学際実験・実習の概要，実施状況，学生の評価

夢を形にする技術者育成プログラム

（目的）工学部・工学研究科がかかげる理念である「夢を形にする技術者，IMAGINEER」の育成を具現化するための中心的プロジェクトとして，創造性，企画力，リーダーシップ，説明能力などの現代の高度専門技術者に求められる能力育成を行い，その学習成果を把握する評価方法を開発する。統合型体験学習とし，工学部共通科目「学際実験・実習」（選択１単位）と課外教育活動である「創成活動」を用意し，活動を知識面でサポートする学習支援科目，活動の意欲を高め，意欲と知識と体験のホップ，ステップ，ジャンプでフットワークの良い技術者を育成していくプログラム。

■　学際実験・実習（専門基礎科目）

学際実験・実習Ⅰ，Ⅱの科目構成で，３つのテーマが設定されている。

①知能ロボット・プロジェクト

LegoMindstormsNXT による自律ロボット，迷路を探索する自律ロボット，人の動作で操縦するロボット（Kinect を使用）の３種類のロボットの中から１つ選択して開発を行い，最終回にロボットコンテストを実施。

②アプリ開発プロジェクト

Web アプリ，スマートフォンアプリのどちらかを複数名のグループで開発し，最終回に開発したアプリの紹介プレゼン・デモを行う。

③エコロジー&アメニティ・プロジェクト

快適性の高い社会づくりを目指して，地域や環境の問題，あるいは創造性に富んだものづくりに取り組み，その成果を発表する。

履修者数　（人）

区　　分	H22	H23	H24	H25	H26	H27	計
知能ロボット・プロジェクト	37	25	32	28	19	15	156
アプリ開発プロジェクト（H25 以前：デジタルクリエータ・プロジェクト）	9	3	4	4	29	8	57
IMAGINEER プロジェクト福井（H26 以前：エコロジー&アメニティー・プロジェクト）	49	41	35	63	52	49	289
合　　計	95	69	71	95	100	72	502

■　創成活動（授業の外の活動）

マイクロマウス・プロジェクト，サッカーロボット製作プロジェクト，フォーミュラ・カー製作プロジェクト，実践サイエンス寺子屋，相撲ロボット・プロジェクト，ロボトレース，灯りプロジェクト，遊房，メカトロ工房，ものづくり工房，雑木林を楽しむ会，本を楽しむ会，スチールブリッジ製作，楽器演奏ロボット・プロジェクトを実施し，多くのグループが全国大会等の学外での大会に出場，あるいは，学内でのイベントを開催した。

スチールブリッジ製作グループは，ジャパンスチールブリッジコンペティションで３位，マイクロマウスでは，全国大会エキスパートクラスでの初の決勝進出，ロボトレースでは北信越大会準優勝などといった活躍を見せた。フォーミュラ・カー製作プロジェクトでは，９月に開催された全日本学生フォーミュラ大会において，スポーツマンシップ賞を獲得した。また，本を楽しむ会は福井県立図書館で企画展を開催するなど地域と密着した活動も行っている。

■　学際実験・実習受講者の手引き（例）

能力向上のためのガイド（ｉmagineer プロジェクト Fukui）

imagineer・プロジェクト・Fukui では，地域や環境問題の解決やものづくりに主眼を置き，自主性，環境と社会に対する知識，問題解決能力，実践力，コミュニケーション能力，情報スキル，多元的・学際的な評価能力，創造力，情報スキル，倫理的判断能力，プレゼンテーション能力を養うことを目標とします。

期待できる能力	留意する項目	手法，ツール例
自主性	□ 一人一人の目的を出し合い，グループ共有の目的を決める □ リーダーシップを発揮し役割分担を決める □ 自分たちで考え，自ら行動する	・ブレインストーミング ・ワークショップ ・KJ法　など
環境と社会に対する知識	□ 環境問題の動向，法律や制度を把握する □ テーマを取り巻く状況を把握する □ 学内やまちの問題・課題を把握する	・文献・インターネットの活用 ・教員や協力者からのレクチャー
問題解決能力	□ グループでテーマと問題を議論し，共有する □ 現況調査を行い，課題を抽出する □ 課題を踏まえた解決策を提案する	・グループワーク ・文献・インターネットの活用 ・統計データ ・ヒアリング調査
実践力	□ 問題解決に向け，あらゆる視点に立った調査を実施する □ 五感・計測器を駆使したフィールドワーク・実験を行う □ 現地で得られた結果を記録し，グループで共有する	・現地踏査 ・ヒアリング調査 ・写真撮影の了解 ・計測器の活用
コミュニケーション能力	□ グループでしっかり議論する □ 他のグループと積極的に連携し，共有・協力し合う □ 学生，住民，商業者，行政，専門家，教員，協力者など，様々な立場の人の意見を聞く	・インタビュー ・ヒアリング調査 ・住民会議やNPO団体の会議への出席
多元的・学際的な評価能力	□ 計測，実測を実施する □ 専門分野や各種調査を踏まえた分析・解析を行う □ 多分野の連携による解決策を提案する	・計測器の活用 ・自分と専門の異なる他者との意見交換，結果の考察
創造力	□ 調査の手法，過程において創意工夫を行う □ 現状の既成概念や法制度を改善する提案を行う □ 多様な主体（利用者，住民，商業者，行政等）が連携した提案を行う	・ブレインストーミング ・ワークショップ ・KJ法　など
情報スキル	□ 情報媒体の活用，記録，管理をする（文献名，HP） □ 科学的根拠見極める □ 個人情報を保護する（個人と特定できる情報を流出させない）	・統計データ ・文献データ ・インターネットの活用 ・各種ソフトの活用
プレゼンテーション能力	□ 視覚的でわかりやすい発表資料を作成する □ 第3者にも理解できるように説明する □ ポイントを明確にした発表を行う	・公開プレゼンテーション ・第3者評価
倫理的判断能力	□ 調査や実験が，誰か（何か）に迷惑をかけていないか考える □ 判断した事が，社会や環境の中で，どう役立つのか意識する □ 自分と異なる立場の人が，どのように考えるか想像をする	・第3者への相談 ・技術者倫理 ・グループワーク

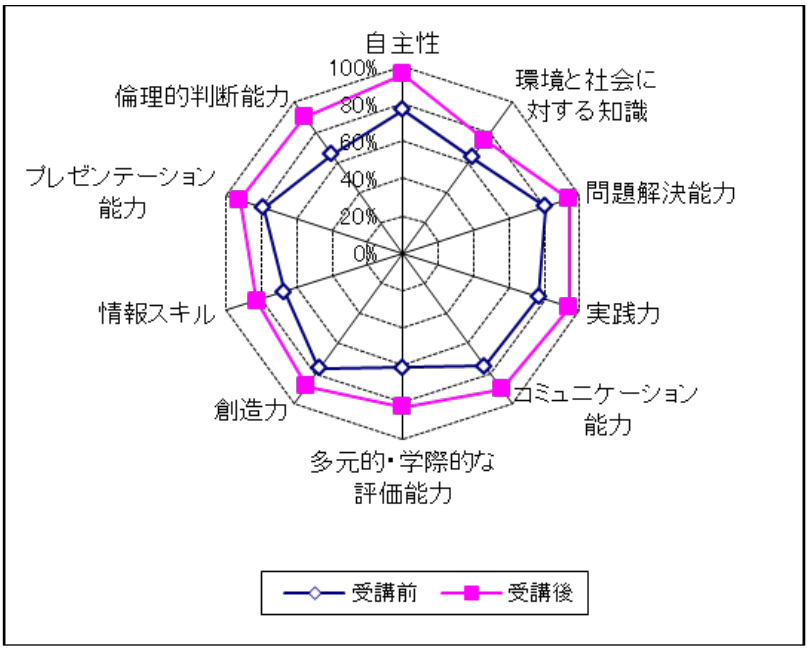
■　平成 26 年度 学際実験・実習アンケート調査（抜粋）

（１）「身に付けたい能力」と「身に付いた能力」の比較

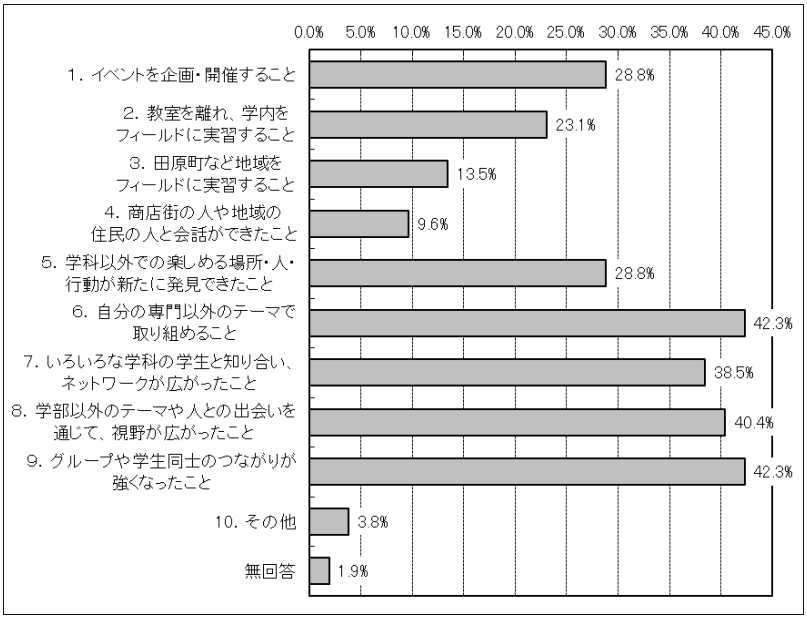
受講前アンケートにおいて，「①ぜひ身に付けたい」「②身に付けたい」を「身に付けたい能力」と設定し，能力別に比較したところ，『問題解決能力』が最も高く，80.8%を占めている。次いで，『プレゼンテーション能力』が 78.8%，『自主性』『実践力』『創造力』が 76.9%となっている

受講後アンケートにおいて，「①非常に身に付いた」「②身に付いた」「③少しは身に付いた」を「身に付いた能力」と設定し，能力別に比較したところ，『自主性』が最も高く，96.2%となっている。次いで『問題解決能力』『実践力』が 94.2%，『プレゼンテーション能力』が 92.3%となっている。

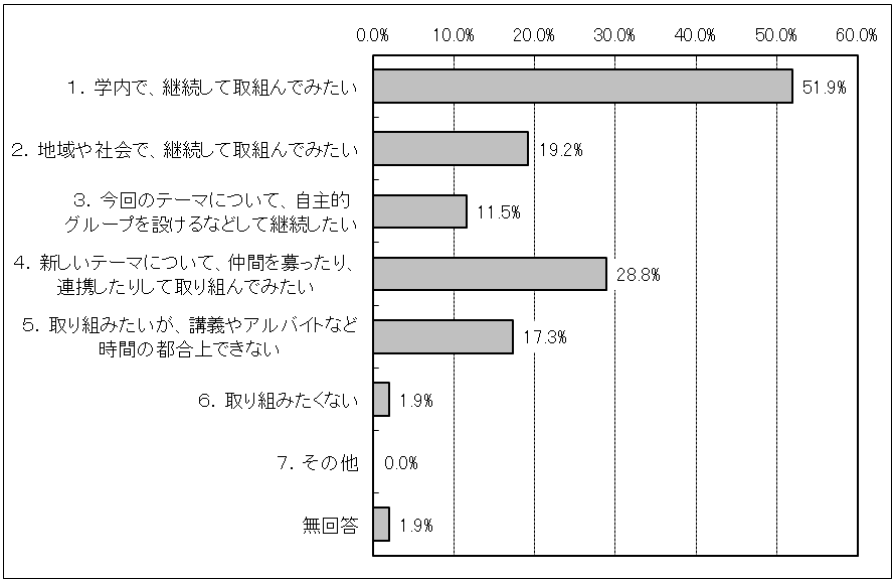
「身に付けたい能力」と「身に付いた能力」の回答者数を比較すると，すべての能力において，身に付いた能力が上回った。特に達成度が高かったのは『自主性』『問題解決能力』『実践力』となっている。全ての能力において達成度が高かった。



（２）学際実験・実習を通じて，よかったと思うこと（複数回答）



（３）今後の実践研究や活動について（複数回答）



（事務局資料）

②　２つの副専攻「原子力・エネルギー安全工学コース」（P6-91 **前掲資料 1-2-14**），「先端繊維科学コース」（P6-93 **前掲資料 1-2-15**）には，学科の壁を越えて受講生が集まり，地域の主要産業にかかわる人材育成の充実として関係者の期待に応えている。

●社会のニーズに対応した教育課程の編成と実施上の工夫

【産業ニーズに対応した人材養成】

① ３学科４プログラムがJABEE認証を取得し，他学科の教育プログラムもJABEEの基準に沿っている（P6-58 **前掲資料1-1-51**，P6-131 **後掲資料2-1-4**）。

② 地域の主要産業である原子力や繊維にかかわる副専攻を設置した（P6-91～93 **前掲資料1-2-14，15**）。

③ 産業現場にかかわる授業を産業界の協力を得て実施している（**資料1-2-17**）。

資料1-2-17　産業界の協力のもとで実施している科目の例

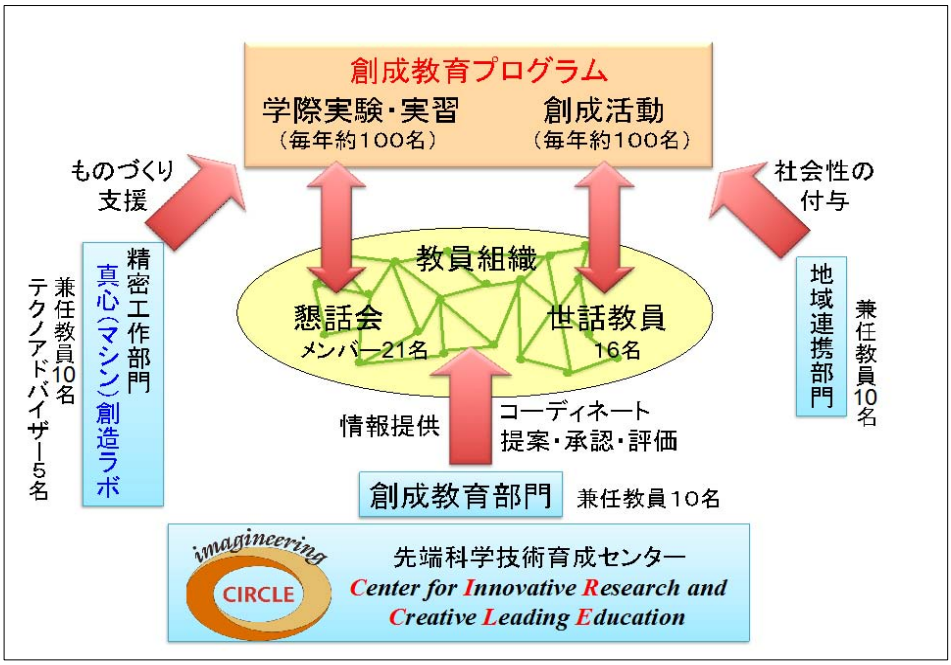
<table>
<tr><td>インターンシップ</td><td>福井県経営者協会の協力を得て実施（P6-22 前掲資料1-1-20）。
事前・事後研修は大学で実施。</td></tr>
<tr><td>フロントランナー</td><td>地元企業から非常勤講師を招いて実施。（以下は平成25年度の例）
<table>
<tr><th>企業名</th><th>非常勤講師の役職</th></tr>
<tr><td>アイテック（株）</td><td>開発部長</td></tr>
<tr><td>アイテック（株）</td><td>研究開発部</td></tr>
<tr><td>フクビ化学工業（株）</td><td>生産統括本部　取締役本部長</td></tr>
<tr><td>サカイオーベックス（株）</td><td>テクニカルセンター所長代理兼複合部材開発グループ長</td></tr>
<tr><td>セーレン（株）</td><td>研究開発センター企画業務部チームリーダー</td></tr>
<tr><td>（株）田中化学研究所</td><td>技術開発部先行技術開発４チームサブリーダー</td></tr>
<tr><td>日華化学（株）</td><td>デミコスメティクスカンパニー化粧品研究部商品開発グループ</td></tr>
<tr><td>福井県産業労働部</td><td>プロジェクトマネージャー</td></tr>
<tr><td>発創デザイン研究室</td><td>代表</td></tr>
<tr><td>（株）カワムラモータース</td><td>代表取締役社長</td></tr>
</table></td></tr>
<tr><td>テキスタイル工学</td><td>日本化学繊維協会による寄附講義として実施（P6-24 前掲資料1-1-21）。</td></tr>
<tr><td>英語PBL</td><td>平成26年度前期の英語PBLにおいて，地元の眼鏡企業の協力を得て，海外販売を戦略的に見据えた眼鏡デザインプロジェクトの最終発表会を実施した（P6-88 前掲資料1-2-12）。</td></tr>
<tr><td>機械創造演習Ⅰ，Ⅱ</td><td>プロジェクト課題に対するマシーンの発案・設計・製図・製作・発表を実施。最終発表会（チャレンジマッチ）では企業の方から講評を頂く（P6-108 後掲資料1-2-25）。</td></tr>
</table>

（事務局資料）

④ 創成教育や実験・演習などで「物に触れる経験，応用力・創造力・企画力・チャレンジ意欲・プレゼン能力」等を重視した教育を行っている（P6-94 **前掲資料1-2-16**，P6-108 **後掲資料1-2-25**）。創成教育は，産業現場に詳しい先端科学技術育成センターや技術部職員の協力を得て，内容も見直しつつ，実施している（**資料1-2-18，19**）。

資料 1-2-18　創成教育への工学部先端科学技術育成センターや技術職員の協力

■　先端科学技術育成センターによる創成教育のサポート




福井大学工学部先端科学技術育成センター
Center for Innovative Research and Creative Leading Education (CIRCLE)

CIRCLE News サークル ニュース

2013.3［第14号］

創成活動のススメ

大学での生活を満喫していますか？大学には、学べる機会や設備があり、色々知ってる先生がいっぱい居ます。これを使わない手は無い！学ぶと言っても、先生の話を聞いているだけの講義ばかりではありません。授業を受けているだけでは面白くないですよね。せっかく身につけた能力を実際に活かしてみませんか？皆さんが主人公になって、自分の夢・希望を叶えるべく頑張ることも、素晴らしい学びです。先端科学技術育成センターでは、そんな皆さんの“真面目な”頑張りを支えるべく、色々なメニューをご用意しています。例えば…

1）学際実験・実習

以下の3部門があります。

知能ロボットプロジェクト：複数グループで、レゴで創った自律的に動き回るロボット、センサーでライン上を自律的に走るロボット、二足歩行ロボットの構想・設計・製作を行い、コンテストを実施！

デジタルクリエータプロジェクト：マルチメディア技法を用いてオリジナル・ビデオの企画・制作を行います。皆さんに観てもらったときの反応が楽しみ！

エコロジー&アメニティ・プロジェクト：地域や環境、快適性の問題について調査・検討／解決策の試行・提案を行い、その結果を発表します。

2）創成活動

みなさんの“真面目な”活動をサポートします。助言教員を割り当てたり、金銭的サポートも行っています。教員提案型と学生提案型があります。

現在行われているものには、例えば、以下のようなものがあります。

・フォーミュラカーを製作して、全日本学生大会に出場。
・ライントレースロボットを製作し、全日本レースに出場。
・遊房：子供の遊びのあり方を考え試行しています。例えば、街での暮らしでは体験できない様な遊びの機会・空間を提供（休耕田での泥遊びなどを実行）。
・雑木林を楽しむ会：文京キャンパス南側の雑木林を楽しむイベントなどを実施しています。

他にも、色々な活動があります。自分の企画したものが成功すると嬉しいですよ。楽しくなります。でも失敗は付き物です。社会人になったら失敗すると手痛いです。大学生のうちに色々と試行して、失敗もしておいて、対処法・事前策を身につけておきましょう。

興味を持ったあなたは、次のページからを読んでみてください。やってみたいとちょっとでも思ったあなたは、センターまでご相談ください！

フォーミュラカー

遊房

相撲ロボコンテスト

PCリユース

川ゴミ対策

金星太陽面通過観測

（先端科学技術育成センター CIRCLE News 第 14 号（2013．3）より）

■　技術職員による創成教育のサポート（ものづくり工房）



ものづくり工房

電子クラフト　USB-DACの製作

一般的な日本国内の大学における電気･電子系や情報系学科では、半導体デバイスや電子回路の講義および実験はしているものの設計教育にまで踏み込んでいるところは少なく、

学生にとってこれらは単なる抽象的知識となり、回路に対して苦手意識を持ったまま卒業する学生は少なくない。

一方で、半導体や電子機器メーカーに就職した学生の多くは、デバイス設計や回路設計に従事することが多く、入社直後はこの大学教育が目指す方向（研究者育成）と産業界が求めているスキル（設計技術力）習得との差異にかなり戸惑うことになる。卒業後も実社会で通用するスキルを身につけてもらうため、大学教育の中だけでは触れることの少ない設計力･ものづくり力を養うべく、参加学生の将来に少しでも良い影響を与えるきっかけに

回路設計　基板製作　動作検証　部品実装

1日目（机上検討、回路および基板設計）

午後から始めて、最初の一時間程度は、基本的な説明とフリーの回路シミュレーターLTspiceの演習を実施し、設計前段階における机上検討の必要性を説明した。

残り17:00までの時間は全てフリーの基板パターン設計ソフトEAGLEの説明と演習に充てた。各自ノートPC持参となったため、PCによっては画面が小さく見辛い等の問題があった。演習課題は2日目に製作するUSB　DACの回路図および基板パターンの設計であり、1日目で見事設計できた暁には2日目は自身で設計したオリジナルのパターンで基板製作（露光･エッチング）を実施できる。作業量としては経験者でも3時間以上は掛かり、初心者には無理難題であったと思うが、何人かの学生は19時頃と20時頃に設計データの提出があった。

2日目（基板製作、部品実装、動作確認）

10:40に開始して、いよいよ現物に向かい合っての物づくりの本番がスタートしました。午前中は前日に自身で設計したオリジナルの回路基板パターンを感光基板に露光し、エッチング処理によりプリント基板を作ります。と書くと簡単なようですが、実際はエッチング過多が起きて基板がだめになったり、文章を読んだだけでは分からない問題に気づくことも、しばしば。知識を持っているということと、スキルがあるということの違いに気づいてくれたかもしれません。

午後はいよいよ部品の実装。最初に説明があり、部品の仕分けを行い、はんだづけによる組み立てです。4時間の時間をとっていたにもかかわらず、その日のうちには完成できず、後日修正して完成した学生も出た。しかし、いづれもPCに接続して無事に音声出力が得られると歓喜または安堵の何れかの表情を見ることができた。

企画当初は8月と9月の夏休み期間中に、第1期～第3期まで各4名ずつの定員12名としていたが、日程は合わないけれどぜひ参加したいという要望が複数寄せられ、急遽4期目を追加する等、盛況であった。少人数で習得意欲の高い学生を相手にしたため、飲み込みが早く、手取り足取り指示する場面はなく、一部の学生からは丁寧な喜びの感想を貰った。事前準備は大変で当日はとても疲れたが開催して本当に良かったと思う。また、正常動作した瞬間の達成感や充実感は何事にも代えがたい貴重な体験であろうと感じた。

本企画は技術職員の小林英一氏が企画担当して行われました。またサーモビーター熱伝導台の製作、ならびに筐体加工を快く引き受けて頂いた先端科学技術育成センター技術職員の青山直樹氏、内山裕二氏にも感謝致します。現在は2015年の企画に向けてコツコツ準備が進んでいます。ハイレゾになるのか?それとも別のものになるのか?教員も参加して作ってみたい企画です。

3

（先端科学技術育成センター CIRCLE News 第16号（2015.3）より）

（事務局資料）

資料 1-2-19　「学際実験・実習」の継続的改善

毎年，受講者にアンケート調査を行い，継続的な改善を行った。

<table>
<tr><th>プロジェクト名</th><th>平成 22 年度</th><th>平成 23 年度</th><th>平成 24 年度</th><th>平成 25 年度</th><th>平成 26 年度</th><th>平成 27 年度</th></tr>
<tr><td rowspan="4">知能ロボット・プロジェクト</td><td colspan="5">レゴマインドストーム NXT</td></tr>
<tr><td colspan="5">ロボットキット</td></tr>
<tr><td colspan="3">二足歩行ロボット</td><td colspan="2" rowspan="2">Kinect（モーションキャプチャー）を活用したロボット製作</td></tr>
<tr><td></td><td>ロボコンプロデュース</td><td>火星探査ロボット</td></tr>
<tr><td>アプリ開発プロジェクト</td><td colspan="4">プロジェクト名称：「デジタルクリエータ・プロジェクト」
ビデオ制作によるデジタルコンテンツの制作</td><td colspan="2">学生の要望と地域への関心の醸成のため，「アプリ開発プロジェクト」に変更。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">Imagineer プロジェクト福井 (iPF)</td><td colspan="5">プロジェクト名称：「エコロジー&アメニティ・プロジェクト」
環境と快適性についての調査・検討を中心としたプロジェクト。</td><td>「Imagineer プロジェクト福井 (iPF)」に変更</td></tr>
<tr><td colspan="3">学生の要望を受けてものづくり系のプロジェクトを徐々に強化</td><td colspan="3">ものづくり系のプロジェクトを一層強化するとともに，地域への関心の醸成のため地域連携プロジェクトを強化</td></tr>
</table>

・知能ロボット・プロジェクトでは，学科を横断してグループ分けする際に，(a)学生のロボット製作及びプログラミング経験に大きな差異が見られるようになったこと，(b)難度の高いロボット製作への希望が増加してきたことから，多様なプロジェクトを導入するなどプロジェクト内容に適宜変更を加えた。なお，平成 28 年度には小型ドローンを導入している。
・アプリ開発プロジェクトは，学生の要望と COC 採択に伴う地域への関心の醸成のため，従来のビデオ制作を平成 26 年度より「電子行政オープンデータ」を用いたアプリ開発プロジェクトに変更した。
・Imagineer プロジェクト福井では，従来，環境と快適性についての調査・検討を中心とした「エコロジー&アメニティ・プロジェクト」を行ってきたが，学生の要望によりものづくり系のプロジェクトを充実させるとともに，COC 採択に伴う地域への関心の醸成のため，平成 26 年度より「Imagineer プロジェクト福井」と名称変更し，プロジェクト内容も更新した。

（事務局資料）

⑤　就職先企業からの高い評価（**P6-157 後掲資料 2-2-12**），第 1 期を上回る外部評価結果（**P6-55 前掲資料 1-1-50**），授業に協力した企業関係者からの高い評価（**P6-88 前掲資料 1-2-12, P6-108 後掲資料 1-2-25**）などは，産業ニーズに対応した人材養成が行なわれ成果が上がっていることの証左である。

●国際通用性のある教育課程の編成・実施上の工夫

【グローバル人材養成】

① GGJ 事業により，実践的な英語教育を習熟度別少人数クラスで実施し，平成 26 年度入学生の TOEIC スコアの平均が入学後１年半で 60 点以上伸びるなど，英語力の顕著な向上が見られた（**P6-133 後掲資料 2-1-7**）。

② GGJ 事業により，単位化された海外派遣プログラムを新たに多数開始し，海外留学者が平成 24 年度以降毎年 80 名を超え（**P6-15 前掲資料 1-1-15**），留学者にはコンピテンシーの向上が確認されるなど，顕著な成果があがった（**P6-134 後掲資料 2-1-8**）。

③ 英語PBL(**P6-88 前掲資料1-2-12**),専門教育での英語の授業(**P6-14 前掲資料1-1-14**)，学科主体の国際交流活動（**P6-18 前掲資料 1-1-16**），留学希望者のための単位外の英語学習プログラム（**資料 1-2-20**）などを実施した。

資料 1-2-20　国際英語コミュニケーションプログラム（平成 23 年度以前 留学準備コース）

■ **概要**

グローバル化する国際社会の中で国際コミュニケーション力を重視し，また，海外留学等を目指す学生の英語学習，留学準備を支援することを目的として，工学部および大学院工学研究科学生を対象に，正規の授業の外に，「国際英語コミュニケーションプログラム」を開講する。外国人教員を含む４人の教員が以下のクラスを担当する。

クラス名	内容
英語コミュニケーションⅠ	主に初級から中級レベルの学生を対象とし，日常的なコミュニケーションに必要な能力をつけることを目指す。１コマは，英語に慣れ，英語での会話に自信を付けたい学生，１コマは，すでに身についている英語力をさらにブラッシュアップしたい学生向け。
英語コミュニケーションⅡ	日常会話を重視したスピーキングクラスである。１コマは会話練習が主で，学生は 100 回以上英語を話すチャンスがあり，文法等の修正もされる。２コマ目は，中上級者向けの グループディスカッションで，参加学生が主体となるクラスである。
英語コミュニケーションⅢ	TOEIC スコアの向上を目指して，文法，語彙，読解，リスニングの能力を総合的に強化する。 クラスは２コマあり，１コマでは長文読解に， １コマではリスニングに比重を置く。リスニングに役立つ発音練習等も同時に行う。
英語コミュニケーションⅣ	会話が苦手な初心者向けに，工学系の学生や社会人に必須であるプレゼンテーション能力を強化するためのクラスである。会話練習を中心に，日本人が苦手とする発音指導を交えながら，日本語ベースから英語ベースへの思考の変換を訓練していく。英語で話す機会に多く接することにより，英語での自己表現をスムーズにし，プレゼンテーション能力の向上を目指す。

（福井大学 HANDBOOK2014 より）



■　受講者数

年度	学期	１年生	２年生	３年生	４年生	計
平成22年度	前期	1	4	6	8	19
	後期	0	2	11	5	18
平成23年度	前期	2	4	7	18	31
	後期	5	1	2	5	13
平成24年度	前期	7	11	12	26	56
	後期	7	16	4	10	37
平成25年度	前期	17	5	24	17	63
	後期	2	1	8	15	26
平成26年度	前期	19	4	6	12	41
	後期	4	4	5	5	18

（事務局資料）

●養成しようとする人材像に応じた効果的な教育方法の工夫

【教育方法の組み合わせ，および多様な学修・研究機会】

①　講義，実験・実習，演習を組み合わせた科目を配置し（**資料 1-2-21**），さらに学習指導法の工夫を行っている（**資料 1-2-22**）。

資料 1-2-21　授業形態の状況（平成 26 年度開講科目）

学科名	授業区分										合計(総科目数)
	講義		演習		実験・実習		講義と演習		講義と実習		
	科目数	割合	科目数	割合	科目数	割合	科目数	割合	科目数	割合	
機械工学科	61	79%	11	14%	5	7%	0	0%	0	0%	77
電気・電子工学科	70	85%	8	10%	4	5%	0	0%	0	0%	82
情報・メディア工学科	49	79%	1	2%	4	6%	8	13%	0	0%	62
建築建設工学科	62	70%	11	12%	3	3%	12	14%	1	1%	89
材料開発工学科	61	88%	2	3%	5	7%	1	2%	0	0%	69
生物応用化学科	55	76%	7	10%	10	14%	0	0%	0	0%	72
物理工学科	52	76%	10	15%	6	9%	0	0%	0	0%	68
知能システム工学科	57	77%	7	10%	4	5%	5	7%	1	1%	74
共通教育	114	56%	71	35%	3	1%	11	5%	7	3%	206

※学則第 44 条「授業は，講義，演習，実験，実習若しくは実技のいずれかにより又はこれらの併用により行うものとし，併用により行う場合の単位数を計算するに当たっては，その組合せに応じ，大学設置基準第 21 条に規定する基準を考慮して各学部が定める時間の授業をもって１単位とする。」

※※「割合」は総科目数に占める其々の授業区分の割合を示している。

（事務局資料）

資料 1-2-22　授業における学習指導法上の工夫の状況

■　全体状況（平成 26 年度開講科目）

学科	授業区分	調査科目数	学習指導法上の工夫				
			少人数教育	対話・討論型	フィールド型	メディア活用	TA 活用
			割合	割合	割合	割合	割合
機械工学科	講義	43	2%	7%	0%	47%	9%
	演習	11	9%	18%	9%	0%	91%
	実験・実習	4	75%	75%	0%	75%	100%
電気・電子工学科	講義	26	0%	0%	0%	4%	0%
	演習	8	38%	13%	0%	0%	50%
	実験・実習	4	75%	75%	0%	0%	0%
情報・メディア工学科	講義	12	0%	0%	0%	25%	33%
	演習	5	0%	60%	20%	80%	100%
	実験・実習	2	50%	50%	0%	0%	100%
建築建設工学科	講義	30	10%	3%	7%	20%	30%
	演習	9	0%	22%	56%	22%	67%
	実験・実習	1	0%	0%	0%	0%	100%
	講義・演習	5	40%	0%	60%	0%	80%
材料開発工学科	講義	44	2%	16%	2%	18%	0%
	演習	2	50%	100%	0%	50%	50%
	実験・実習	3	0%	0%	0%	0%	100%
生物応用化学科	講義	28	11%	14%	0%	21%	0%
	演習	5	60%	80%	20%	20%	20%
	実験・実習	3	0%	33%	0%	0%	67%
物理工学科	講義	71	0%	3%	0%	13%	1%
	演習	3	0%	0%	0%	33%	67%
	実験・実習	6	100%	0%	0%	0%	100%

知能システム工学科	講義	39	5%	8%	0%	28%	13%
	演習	7	0%	0%	0%	71%	100%
	実験・実習	8	50%	38%	0%	38%	75%

※科目数は，平成 26 年度開講科目を対象に調査し教員から回答のあった科目の総数である。割合はその科目数に対する%で示す。

■　学習指導法の工夫の具体例（情報・メディア工学科「論理回路」（２年生必修科目））

論理回路は，90 分の講義パートと 90 分の演習パートからなる３単位科目である。講義と演習の組み合わせ効果が最大限に発揮されるよう，講義パートの時限の直後に演習の時限を設けるという時間割上の工夫を行っている。

受講生は講義パートの学修内容を直後の演習パートで実践することで，論理回路に関する知識や概念について理解を深め体で覚えることができる。演習パートは「演習問題」およびホームワークの「演習レポート」に分けて実施している。演習は初級から上級の問題で構成され，受講生個人の資質に幅広く対応できるよう工夫している。

演習パートでは，教員 2 名および TA が，学生の進度に応じ，問題を適宜採点している。これにより，学生全体の理解度をリアルタイムに把握することができ，不足部分の補足説明や巡回による対話を行っている。「演習レポート」は，次回講義の冒頭に回収し，講義中に教員およびＴＡを活用して採点を行い，演習パートの冒頭で答案を即日返却している。

演習レポートの解説はプロジェクタと書画カメラを活用して実施している。これにより，学生の記憶が確かなうちにフィードバックをかけている。

これらの工夫の結果，平成 26 年度の単位修得率は 97.3%となり，高い教育効果を得ている。「授業改善のためのアンケート」でも，講義と演習をセットで実施することで学んだ知識を実践を通してより深めることができた，と評価されている。

（事務局資料）

② 地元企業中心のインターンシップ，原子力や繊維に関する副専攻，地域企業の技術者等が参加する授業などにより，地域ニーズを踏まえた多様な学修機会を提供している（**P6-22 前掲資料 1-1-20，P6-91 前掲資料 1-2-14，15，P6-88 前掲資料 1-2-12，P6-108 後掲資料 1-2-25**）。

③　長期間計画的に課題に取り組んで成果を出すプロセスを体得させるため(**資料 1-2-23**)，卒業論文を必修としている。

資料 1-2-23　卒業論文シラバス（建築建設工学科の例）

授業科目名	(35499) 卒業論文又は卒業計画 ★マイシラバス	単位数	8
開講開始学期	通年(前→後)	曜日／限目	その他
授業区分	集中講義	科目授業種別	専門/工学部/建築建設工学科
担当教員（E-mail、電話番号（内線）、研究室、オフィスアワー）			
担当教員			

授業概要

これまで学んだことの集約段階として卒業研究・卒業計画に取り組ませて、専門知識を深化させ、各学習・教育目標を総合的に達成させる。
(A) − (B) − (C) − (D) ○ (E) ○ (F) ◎ (G) ○ (H) − (Ia) ◎ (Ic) ◎

到達目標

3年生までの授業で修得した知識・能力に基いて卒業研究・卒業計画において必要となる基礎知識を身につけること。
教員の個別指導のもとでテーマを定め、研究目的・目標の設定、実施計画の立案、実行、議論等をふまえて、結果をまとめあげていく能力を身につけること。
自らの考えを他者に論理的に整理・評価・論述し、明確に伝えることができるプレゼンテーション能力を身につけること。
各学習・教育目標に関与する知識・能力を身につけること。

授業内容

卒業研究・卒業計画の指導教員の助言のもとにテーマの設定、実施計画の立案、資料とデータの収集・分析、評価・解釈等を繰返し、フィードバックのプロセスを実践していき、設定した研究目標を達成していく。
また、収集した資料、習得した知識等を卒業研究・卒業計画の背景・必要性等に反映させながら途中の段階で発表及び議論し、最終成果としての卒業論文または卒業計画を完成させる。

授業形式

各指導教員ごとに個別の指導にしたがって卒業研究または卒業計画を進めていく。
自発的な資料収集・調査・実験・解析等に基づいて研究・計画を実施する。

成績評価の方法・基準

評価内容、評価実施方法（評価割合）①個別指導：卒業研究・卒業計画の内容、完成度等に基いた各学習・教育目標の達成度：指導教員による個別評価（４０%） ②中間発表：指導教員を含む関連専門教員複数による評価（２０%）③最終発表：各系全教員による評価（４０%） 総合点が６０点以上で、かつ最終審査における各学習教育目標について６０%以上の点数を取得した者をもって「合格」とする。

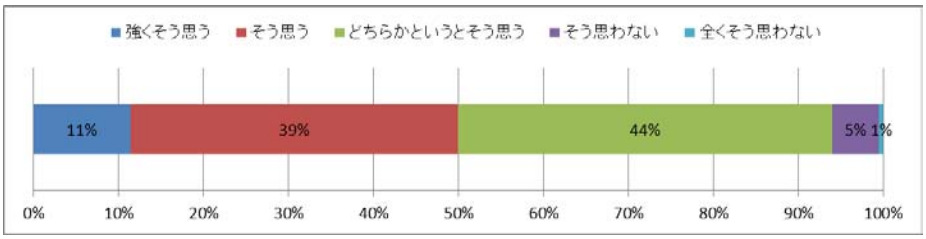
（事務局資料）

④　さまざまな教育方法・形態を取入れた教育に対して学生の満足度は高く，期待に応えている（**資料 1-2-24**）。

資料 1-2-24　様々な教育方法等に関する学生の評価

■　**総合的な評価**

設問　工学部では，さまざまな教育方法・教育形態（問題発見・解決型授業（PBL），少人数教育，専門分野の枠にとらわれない授業，実験，実習，演習など）を取り入れていますが，これらは専門技術者として備えるべき能力を育成するうえで役立った（役立つ）と思いますか？



※回答者：平成 27 年度卒業予定の工学部学生 184 名
（平成 27 年度「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」より抜粋）

■　**個別の取組に対する評価**

教育方法等	実績や学生の評価等	根拠資料
グローバル人材育成	海外派遣プログラムに参加した学生の声	P6-15 **前掲資料 1-1-15**
	海外短期インターンシップ単位修得者数	
	海外派遣プログラム参加によるコンピテンシー向上	P6-134 **後掲資料 2-1-8**
	機械工学科の国際交流活動（ISAMPE）に参加した学生の声	P6-18 **前掲資料 1-1-16**
	英語教育の成果としての TOEIC スコア向上	P6-133 **後掲資料 2-1-7**
地域企業とも連携したキャリア教育	地元企業等でのインターンシップ単位修得者数	P6-22 **前掲資料 1-1-20**
	地元企業等でのインターンシップの効果，参加学生の声	
	みらい協育プログラム実施状況	P6-70 **前掲資料 1-1-61**
学部段階での体系的原子力教育	原子力・エネルギー安全工学コース（副専攻）の修了者数と受講生の評価	P6-91 **前掲資料 1-2-14**
創成教育	学際実験・実習の実施状況，受講生の評価	P6-94 **前掲資料 1-2-16**

（事務局資料）

● 学生の主体的な学習を促すための取組

【アクティブ・ラーニング】

① 実験・実習や演習，および卒業論文（P6-106 **前掲資料 1-2-23**）はアクティブ・ラーニングが主体である。

② FD 活動を通し，クリッカーや反転授業などアクティブ・ラーニングの新しい手法も導入されている（P6-40 **前掲資料 1-1-40**）。

③ アクティブ・ラーニングについて学生や企業関係者の評価が高いこと（P6-107 **前掲資料 1-2-24，資料 1-2-25**），さらに課題解決能力等の涵養状況が良好（**資料 1-2-26**）であることは，アクティブ・ラーニングの成果があがっていることの証左である。

資料 1-2-25　アクティブ・ラーニングが多く取り入れられている科目と学生の満足度の例

■　**機械工学科「機械創造演習Ⅰ，Ⅱ」（３年前期・後期：必修各１単位）**

学士力 GP に採択された「学士力涵養の礎となる初年次教育の充実」に基づく「ジェネリック・スキル教育科目」の一つである（現在も継続）。いくつかのプロジェクトに分かれ，与えられた課題に対するマシーンの発案・設計・製図・製作・発表を実施。最終発表会（チャレンジマッチ）では企業の方から講評を頂く。受講終了後，受講者に対して行ったアンケート結果を以下に示す（1－1～1－3は５点満点。1－5は 100 点満点）。学生が機械創造演習を高く評価していることがわかる。

設問		H22	H23	H24	H25	H26	H27
1-1	機械創造演習を受講できてよかったか	4.70	4.58	4.64	4.69	4.43	4.51
1-3	機械創造演習のようなモノづくりを実体験する科目は必要だと思うか	4.85	4.81	4.80	4.76	4.69	4.77
1-4	機械創造演習で得た経験は社会に出てから役立つと思うか	4.49	4.36	4.39	4.58	4.28	4.58
1-5	機械創造演習に対する満足度（100点満点）	84.2	81.7	85.7	85.2	81.7	82.1

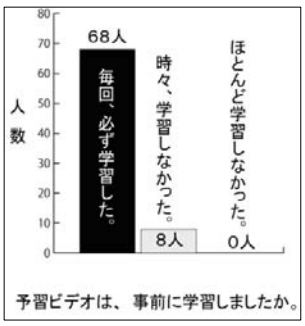
＜講評を頂いた企業の方からのコメント＞

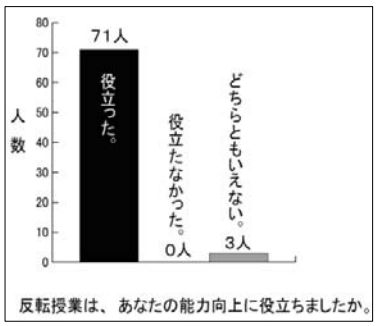
「企業，特に開発は常に教科書の無い，新たなものを作り出し，少しでも良いものを世に送り出すことが使命です。大学時代に，そうした経験を１度でもしているかどうかは大きな差になってきます。新しいものを自分で考え生み出すものづくりの経験は企業で仕事をしていく上でとてもプラスになることですので，この授業はまさにそのものズバリの教育だと考えます。非常にすばらしい教育だと思いますので，是非，さらに発展いただくよう願っております。」

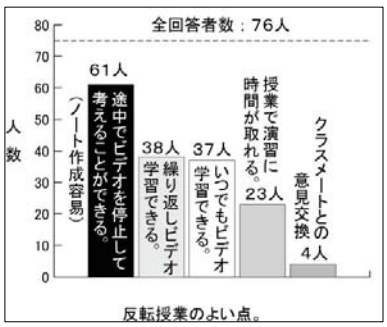
■　**材料開発工学科「反応工学」（３年前期：必修２単位）**

反転授業形式。事前にビデオ学習した内容をノートにまとめ，授業の最初に隣の席の学生とミニ授業をお互いに行ってから授業を実施。授業は，演習を中心に実施。

＜受講生に対するアンケート結果＞







＜本授業に対する受講生の満足度＞

満足度	中間評価　［%］	最終評価　［%］
十分に満足している	30	33
ある程度満足している	70	64
多少不満がある	0	3
大いに不満がある	0	0

＜本授業に対する学生のコメント＞

- 予習をビデオでやるのは分かりやすく，理解が深まった。
- ビデオで学習，授業で演習というのはとても学習しやすかった。
- 予習である程度まで理解した段階で授業を受けることができた。
- 動画がいつでも見られることで予習しやすく復習しやすかった。
- 予習が出来ていた分，授業の理解が深まった。
- 授業内で演習ができるので，問題が解けないということがなく，分かりやすかった。
- ノートが事前に作れるので，授業中に説明を聞く余力ができた。
- ビデオでは式変形，文の意味などをゆっくりと考える時間があった。

■　**知能システム工学科「知能システム工学実験Ⅲ，Ⅳ」（３年前期・後期：必修各１単位）**

本科目も学士力 GP に基づく「ジェネリック・スキル教育科目」の一つである（現在も継続）。仕様書作成から始まり，組立図，回路図，部品図，部品表，プログラミング，回路作成，切削，組立を行い，規定の動作を実現できた班のみが単位を認定される実践的なプロジェクト。平成 27 年度の場合，２階建てのコースの２階部分に設置された対象物をコース外に押し出す知能ロボットを設計・製作する課題で実施。最低審査基準は２階に上がる坂道を乗り越える事で「可」の判断となる 60 点が配分される。

＜受講生の感想の例＞

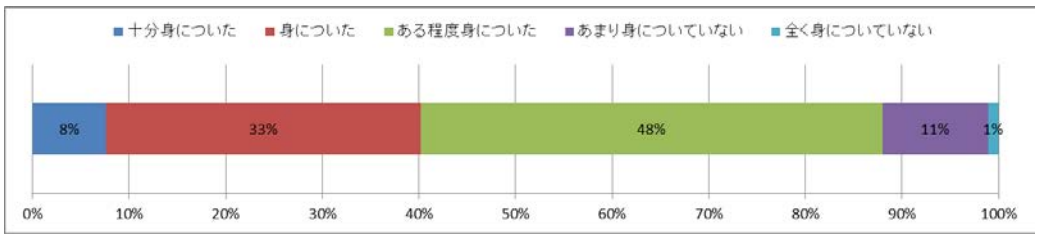
・今までなんとなく習ってきたテスターやオシロスコープの使い方だけでなく，その装置の意味も分かるようになった。
・想定通りに動作しなかったときにどのように考えるべきかといった事を経験できた。
・チームワークの大切さを学んだ。

（事務局資料）

資料 1-2-26　課題解決能力の涵養状況

設問　本学では，皆さんが“グローバルな視野を持った高度専門職業人”となることを教育の大きな目標としています。福井大学での学修をとおして，課題探究・問題解決能力，自己学習力がどの程度身についた思いますか？

⇒９割弱の学生が「十分～ある程度身に付いた」と答えており，大部分の回答者が課題解決能力等を修得できたと考えている。



※回答者：平成 27 年度卒業予定の工学部学生 184 名
（平成 27 年度「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」より抜粋）

（事務局資料）

【単位の実質化】

①　CAP 制（**資料 1-2-27**），授業時間外の学習時間の確保の工夫（**資料 1-2-28**），アクティブ・ラーニングの積極的な導入（**P6-94 前掲資料 1-2-16**，**P6-108 前掲資料 1-2-25**），自主学習環境の整備（**P6-121 後掲資料 1-2-38**），授業外学習時間の調査（**資料 1-2-29**）などの取組を行っている。

平成 25 年度の授業時間外学習時間は平成 22 年度の 1.66 倍に向上し全国平均を上回っており（**資料 1-2-29**），取組の成果があがった。

資料 1-2-27　各学期における履修単位数の制限（CAP 制）

学則第 47 条に則し，学期ごとの専門教育科目の履修単位数の上限を定めている。

（４）工学部学生の各学期における履修単位数の制限に関する取扱い

福井大学工学部履修要項第４に定める履修制限に関する取扱いについては，次のとおりとする。

(1)　各学期において履修する授業科目の単位数の制限は，専門教育科目を対象とする。
(2)　上記(1)の制限には，当該学期に受けることとなる再試験科目は，含まない。
(3)　１年次生が各学期において履修できる専門教育科目は，22単位以内とする。
(4)　２年次生が各学期において履修できる専門教育科目は，22単位以内とする。
(5)　３年次生が各学期において履修できる専門教育科目は，28単位以内とする。
(6)　特別な理由により，上記(3)，(4)又は(5)の単位数を超えて履修を希望する者は，学科長又は助言教員の承認を得るものとする。

附　則

この取扱いは，平成16年４月１日から施行する。

（福井大学 HANDBOOK2015 学生便覧　より）

資料 1-2-28　授業時間外の学習を促す取組の例

（1）レポート，ミニテスト，教員による指導等によって授業時間外の自主的学習を奨励しており，授業時間外の学習時間の確保を図っている。

学科	調査科目数	レポート		ミニテスト		中間テスト		授業外の学習指示		その他	
		科目数	割合	科目数	割合	科目数	割合	科目数	割合	科目数	割合
機械工学科	58	15	25.9	2	3.4	7	12.1	6	10.3	5	8.6
電気・電子工学科	38	19	50.0	4	10.5	9	23.7	18	47.4	0	0.0
情報・メディア工学科	43	32	74.4	14	32.6	25	58.1	22	51.1	9	20.9
建築建設工学科	45	26	57.8	14	31.1	16	35.6	25	55.6	0	0.0
材料開発工学科	49	17	34.7	20	40.8	10	20.4	11	22.4	1	2.0
生物応用化学科	36	20	55.6	15	41.7	13	36.1	9	25.0	3	8.3
物理工学科	80	54	67.5	14	17.5	41	51.3	26	32.5	0	0.0
知能システム工学科	54	36	66.7	20	37.0	22	40.7	32	59.3	9	16.7

※科目数は，平成 26 年度開講科目を対象に調査し教員から回答のあった科目の総数である。割合はその科目数に対する％で示す。

（2）各学科における学習時間の確保につながる取組

学科	取組
機械工学科	・研究室配属，推薦入試時の成績優秀者の優遇処置。 ・補習授業の実施。 ・毎回の宿題，宿題の提出をもって出席とする。 ・毎回，講義内容に沿った演習問題を宿題として課す。 ・毎回，講義の要点を記したプリントを１枚配布する。 ・学習内容が具体的に何に役立つのかを説明する。
電気・電子工学科	・レポート課題として，授業内容の理解を補助するような問題を出している。単位の認定に，レポートを加味している。 ・技術英語では，学生に配布したプリントを順番に音読と和訳をさせていますが，そのとき教員は学生のそばに居て，予習をしているかどうかを確認し，していない場合は，予習をするよう指導しています。これにより，少しは予習の学習時間が確保できるならばと考えています。 ・図書館で調べても参考文献などを調べても良いので「レポート演習課題の模範解答を作るくらいのつもりで時間をかけて取り組むこと」というレポートを課すことを始めました。レポート課題に取り組む上で行った自宅や図書館などでの時間外学習時間について尋ねると，本レポート課題のために費やした時間外学習時間は，レポート課題がない場合に比べて長くなったという答えが受講生から得られました。また，少なくない受講生から熟考や周到な調査の結果と思われる模範解答レベルの丁寧なレポート解答が得られました。 ・授業では，私の担当科目にかかわらず，予習を勧めています．事前に教科書を読んでおき，理解できなかった箇所を授業で確認すること，また理解できた箇所もその理解が正しかったかどうかを確認するよう説明しています．また，予習の助けとなるよう授業では教科書を指定しています．
情報・メディア工学科	・講義と演習がセットとなった科目では，例えばプログラミング Ⅰ や Ⅱ では，講義の内容と演習の内容を同期させ，さらに，講義のあと１コマ空けて，その時間に自習ができるようにカリキュラムを工夫してある。 ・ソフトウェア学習のため，100 台程度の端末（コンピュータ）が並ぶ演習室と，20 台弱の端末が並ぶ演習室を整備。講義や演習で大きな演習室がふさがっている場合も小演習室で自習ができるようにしている。 ・演習室を午前０時まで利用できるようにしている。

建築建設工学科	・建築建設工学科では，建築学コース，建設工学コースの双方の学習教育プログラム共にJABEEカリキュラムとして認定されており，工学分野として十分な学習時間を確保していることが認められている。 ・演習時間後に教室に残り学生の疑問・質問に対応するための「出前オフィスアワー」を実施することにより確実な学習時間の確保を支援している。 ・設計演習課題の複数回の再提出に基づく問題点の指摘と学習の促しを行うことにより確実な学習時間の確保を図っている。
材料開発工学科	・隔週ごとに小テストを行う。 ・授業外時間を各科目ごとに調査を行い，その結果から，どのような取組が効果的か議論した。 ・学生の成績順位をGPAに基づいて順位付けを行う。キャップ制の実質化。「計画的な履修」の指導。
生物応用化学科	・必修科目（高分子化学系）：講義に関連する演習問題を配布し，レポートとして提出させている。 ・必修科目（物理化学系）：学習内容の重要性を説く，宿題・演習の予習を課す，適正な評価。 ・必修科目（技術者倫理）：技術者倫理に関わる論説を10報用意し，まず，学籍番号に沿って均等に振り分ける。次いで，同じ論説を読む２人の学生を１組とし，ディベートさせ，得られた見解をレポートの形で報告させる。ディベートは当然，講義時間外に行うことになるので，２～３時間程度の自主学習が必要となる。 ・選択科目（有機化学系）：構造解析は，受講者全員に違う課題を与えて解かせている。評価も厳格。 ・卒業論文＆演習関連：毎朝１時間英語教科書・専門教科書の輪読を行わせている。この予習には１～２時間程度の自主学習を費やすことになる。
物理工学科	・数学の講義・演習で，成績不振な学生を数学学習支援室の数学オープンに行かせ，補充の課題を与えて取り組ませている。 ・平成24年度から，１年生前期の力学Ⅰと力学演習Ⅰの成績不振者に，１年生後期の物理補習授業(物理ステップアップ)の受講を義務化した。 ・学生実験では，各実験テーマのレポート締め切り後にレポート指導の時間を設けており，添削済みのレポートを返却し，授業時間内に疑問点の解消，レポートの修正をさせ，後日再提出させている。 ・ 計算機関連科目では，ホームページを充実し，学生が自宅学習をしやすい環境を整えている。自宅からでも24時間課題の提出が可能で，Webシステム上で課題添削のやりとりができる。 ・個人PCを用いたプログラミング環境の整え方の解説をしている。 ・計算機関連科目や演習形式の授業の多くでは，問題等を授業に先立って渡し，予習させている。 ・多くの授業で，提出されたレポートの出来が良くない場合は，再提出を指示することで，学生に十分な時間レポート作成に取り組ませている。
知能システム工学科	・ロボット製作のための装置，スペースおよび計算機演習室を開放。 ・実験Ⅰ，Ⅱにおいて，実験テーマに取り組む前に，実験計画書の提出を義務付け。 ・回路理論，エレクトロニクス，信号解析で，ほぼ毎週（10-12回）宿題を出し，翌週提出，翌々週に採点後返却している。 ・中間テストを２回＋定期試験，を行っている。 ・講義テーマの関心を高めるために１週間新聞を読んできてもらって，興味深い内容をレポートしてもらうために自宅でまとめてきてもらう宿

	題を課している。 ・予習用のプリントを専用のＷｅｂサイトで配布している。「講義用掲示板」という名称で，予習用プリントの事前配布の他，レポート課題の確認やレポート提出状況，試験の結果などの情報を掲載している。 ・「C 言語のコンソールプログラムだけではなく，Windows プログラムを作ってみたいという学生に対し，Microsoft Visual Studio などのフリーのコンパイラや入門書などを紹介している。」 ・総合数理学 I，電磁気学Ⅱ，信号処理，情報基礎論の担当科目で，その日の講義の内容の復習となる問題（30 分程度でできる問題）を，講義後に配布し，翌日までに提出させ，翌々週に採点し，模範回答をつけて返却している． ・講義中に，他の科目との関連を話し，またそのことについて何を勉強したら良いかも紹介し，他の科目との関連について興味を持ち，主体的に勉強するようになるように，意識して講義を行なっている． ・現代制御理論ではほぼ毎回宿題を出している。提出された宿題は内容を確認の上，評価を記入して次回の授業の際に返却している。 ・「ロボットの知能と学習」では２回目の授業以降，毎週その日に習ったトピックに関するレポートを提出させている。 ・学部 2 年後期「製図・CAD 演習」では毎回製図または CAD の課題を出し，翌週に回収し，その出来を成績に反映させていた。 ・計測工学（学部）において授業の半分ほどで宿題を出している。授業中に課題に取り組ませて，残った分を宿題にするという方法でおこなっている ・「計算機言語演習」と「データ構造とアルゴリズム論 I」で毎回，宿題を出し，その提出をもって出席としている。提出プログラムの可否は一定期間ごとに掲示している。

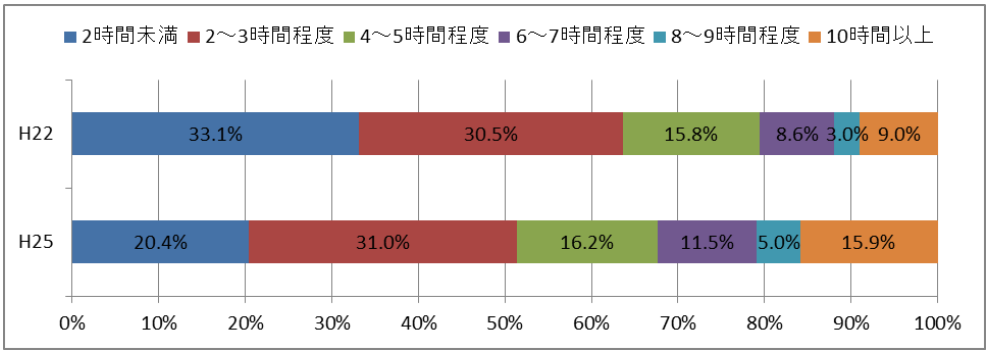
（教育委員会による調査結果（平成 25 年度）より）

資料 1-2-29　授業外学習時間の調査とその結果

■　学習時間ごとの学生の割合

平成 22 年度に実施した「学生生活実態調査 2010」と平成 25 年度に実施した「学生生活実態調査 2013」において，授業外学習時間（一週間当たり）を調査した結果を以下に示す。平成 25 年度の方が授業外学習時間の長い層の割合が明らかに多い。

（調査対象：両年度とも工学部学生。平成 22 度調査の回答者数は 1,313 名，平成 25 年度調査の回答者数は 1,373 名。）



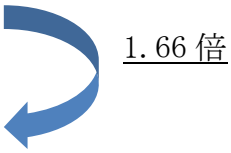
（学生生活実態調査 2010 報告書および同 2013 報告書から作成）

■　授業外学習時間の増加

平成 25 年度の授業外の平均の学習時間は，平成 22 年度の値の 1.66 倍に向上している。平成 25 年度は全国平均の値を上回っており（注），授業外学習の指導が効果をあげていることがうかがわれる。

（注）全国大学生活協同組合連合会による全国の国公立及び私立大学の学部学生調査（2012 年 10～11 月，回収数 8,609）によると，１週間の授業時間外学習時間の理系の平均は 5.63 時間である。

年度	平均時間
平成 22 年度	3.5 時間
平成 25 年度	5.8 時間



1.66 倍

（学生生活実態調査 2010 報告書および同 2013 報告書から作成）

（事務局資料）

【教室外学修プログラム等の提供】

①　創成活動，国内外へのインターンシップなど多様な教室外でのプログラムを提供し，多数の学生が参加し，成果があがった（**資料 1-2-30**）。

②　東日本大震災の被災地への専門知識を活かした支援活動にも学生の積極的な参加があった（**資料 1-2-31**）。

資料 1-2-30　教室外学修プログラムとその成果

教室外学修プログラム等	成果	プログラムの特徴
創成活動	自主性，環境と社会に対する知識，問題解決能力，実践力，コミュニケーション能力，多元的・学生的な評価能力，創造力，情報スキル，プレゼンテーション能力，倫理的判断能力などの涵養など（**P6-94 前掲資料 1-2-16**）。	文部科学省「質の高い大学教育推進プログラム（教育 GP）」に採択された「夢を形にする技術者育成プログラム」（平成 20 年度～平成 22 年度）によって充実が図られ，その後も内容を改善しながら実施。
地元の企業等へのインターンシップ	地元企業への理解の深まり，学業と仕事のつながりの認識，主体的・計画的行動の重要性，礼儀・マナーの重要性，細かな配慮の重要性の認識の深まりなど（**P6-22 前掲資料 1-1-20**）。	福井県経営者協会と協力して実施。
海外派遣プログラム	広い視野の獲得，異文化体験，グローバルマインドの醸成，コミュニケーション能力を含む語学力の向上，コンピテンシーの向上など（**P6-15 前掲資料 1-1-15**，**P6-134 後掲資料 2-1-8**）。	平成 24 年度に採択された「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」（GGJ）事業のもとで実施。単位認定は海外短期インターンシップとして行う。
国際交流活動（学科レベル）	研究活動への刺激，コミュニケーション能力を含む語学力の向上，異文化体験，教員交流も深化（**P6-18 前掲資料 1-1-16**）。	機械工学科の交流活動は第１期以前から継続しており，第２期に開始された情報・メディア工学科の交流活動も定着しつつある。

（事務局資料）

資料 1-2-31　専門知識を活かした被災地支援活動

■　参加状況

期　間	内　容
平成 24 年 2/27～3/2	工学研究科原子力・エネルギー安全工学専攻教授１名，准教授１名，物理工学科４年生３名が，フィールドワークを実施する分担地域を予め設定し，チームごとに分担地域において放射線測定を実施。
平成 24 年　5/20	名取市小塚原南農業復興組合の農家の方々を対象とした，塩害調査結果説明会を開催。 参加学生：工学部学生３名，工学研究科学生２名，工学研究科研究員１名
平成 24 年 5/20～5/22	土壌サンプリングとその分析（宮城県名取市，岩沼市，亘理町）参加学生：工学部学生３名，工学研究科学生２名，工学研究科研究員１名。
平成 24 年 10/5～10/7	工学研究科原子力・エネルギー安全工学専攻教授１名，准教授１名，講師１名，学生２名が福島県伊達市で，福島県伊達市，JAEA と共同で家屋内外の空間線量調査を実施
平成 24 年 7/26～7/27	土壌サンプリングとその分析（宮城県名取市，岩沼市，亘理町） 参加学生：工学部学生２名，工学研究科学生１名，工学研究科研究員１名
平成 24 年 7/26～7/27	土壌埋設センサーによる水田土壌の塩濃度モニタリング（宮城県名取市小塚原）現在も継続して塩分移動を調査中。 参加学生：工学部学生２名，工学研究科学生１名，工学研究科研究員１名
平成 24 年 8/26～8/28	土壌サンプリングとその分析（宮城県名取市，岩沼市，亘理町） 参加学生：工学部学生１名，工学研究科研究員１名
平成 25 年 2/18～2/20	工学研究科原子力・エネルギー安全工学専攻教授１名，准教授１名，学生３名が福島県伊達市で，福島県伊達市，JAEA と共同で除染後の家屋内外の空間線量調査を実施

■　参加学生（物理工学科４年生）の報告書（抜粋）

福島第１原子力発電所事故後の放射能分布と屋内外の放射線影響の調査を，2012 年 10 月に行った。今回は，福島県伊達市の山間の地区の除染の効果を確かめる目的もあった。現地でサーベイメーターで測定したところ，家の外はもちろん家の中でも窓際は 1μSv/h と高い値を示していた。また，一部では除染活動が進められて住民が戻りつつある地域もあるが，高線量地域は未だ手が付けられていない状況にある。

今後の除染活動によりより低線量の状態に復旧されることを強く望んでいます。

今回の調査にご協力いただいた伊達市と住民の方々，JAEA の方々に心より御礼申し上げます。

（事務局資料）

【学修意欲向上方策】

①　学長表彰制度（**資料 1-2-32**），優秀学生表彰制度（**資料 1-2-33**），授業料免除制度（**資料 1-2-34**），大学院推薦入学制度（**資料 1-2-35**），大学院授業科目早期履修制度（**資料 1-2-36**）などを設けている。

資料 1-2-32　学長表彰制度

（10）福井大学学生表彰要項

平成18年１月11日
学　長　裁　定

（趣旨）
第１　この要項は，福井大学学則第63条及び福井大学大学院学則第43条の規定に基づき，学長が行う学生の表彰（以下「表彰」という。）について，必要な事項を定める。
（表彰の基準）
第２　表彰は，次の各号の一に該当する本学の学生又は学生の団体（以下「学生等」という。）について行う。
(1)　学術研究活動において，特に顕著な業績を挙げたと認められる学生等
(2)　課外活動において，特に優秀な成績を収め，課外活動の振興に功績があったと認められる学生等
(3)　社会活動において，特に顕著な功績を残し，社会的に高い評価を受けたと認められる学生等
(4)　その他前３号と同等の表彰に値する行為等があったと認められる学生等
（表彰対象者の推薦）
第３　学部長又は研究科長は，前条の各号の一に該当すると認められる学生等（以下「表彰対象者」という。）を，学長に推薦することができる。
２　学部長又は研究科長は，前項の規定により推薦するに当たり当該学部又は研究科の教授会の意見を聴くものとする。
（被表彰者の選考及び決定）
第４　学長は，推薦された表彰対象者の選考について，全学教務学生委員会に諮り，教育研究評議会の議を経て表彰する学生等（以下「被表彰者」という。）を決定する。
（表彰の方法）
第５　表彰は，学長が表彰状を授与することにより行う。
２　前項の表彰状の授与に併せて，記念品等を贈呈することができる。
（表彰の時期）
第６　表彰は，原則として次の日に行う。
学位記授与式の日
２　前項の規定にかかわらず，表彰する必要があると判断されるときは，その都度行う。
（公表）
第７　被表彰者は，公表する。
（その他）
第８　表彰の実施に関し必要な事項は，別に定める。

附　則
この要項は，平成18年１月11日から実施する。
附　則
この要項は，平成27年４月１日から実施する。

（福井大学 HANDBOOK2015 学生便覧　より抜粋）

資料 1-2-33　工学部優秀学生表彰制度

工学部及び工学研究科博士前期課程優秀学生表彰制度について

（平成16年４月１日　制定）

１．工学部及び工学研究科博士前期課程学生の勉学意識を奨励するため，工学部及び工学研究科博士前期課程に「優秀学生表彰制度」を設ける。

２．優秀学生は，毎年度卒業見込みの学生のなかから，学科及び専攻の推薦に基づき，各学科２名以内及び各専攻１名を選出する。

３．優秀学生は，卒業祝賀会席上において表彰し，工学部長又は工学研究科長から表彰状及び記念品を授与する。

（平成26年度福井大学工学部・工学研究科規則集より抜粋）

資料 1-2-34　授業料免除制度（概要）

Ⅴ　福利厚生

1．授業料免除

経済的理由により授業料の納付が困難であり，かつ，学業優秀と認められる学生については，本人の申請に基づき審査機関で選考のうえ（成績と収入に基準があります），授業料の全額免除または半額免除が許可されます。

また，授業料の納付前６月以内において，学生の学資を主として負担している者（学資負担者）が死亡した場合，学生又は学資負担者が風水害等の災害を受けた場合等特別な事情により授業料の納付が著しく困難であると認められる学生にも適用されます。

※　上記の申請については，前期（２月上旬）・後期（８月上旬）ごとに説明会を開催しますので申請を希望する学生は必ず出席してください。

（福井大学 HANDBOOK2015 学生便覧より抜粋）

資料 1-2-35　大学院推薦入学制度

Ⅲ．推　薦　選　抜

学問・研究に意欲のある成績優秀な学生で，本学大学院工学研究科に入学を希望するものに対し，書類審査と口述試験及び面接による推薦選抜を実施します。

1．出願資格

次のいずれかに該当する者で学業成績が優秀で人物ともに優れ，在籍大学等の学長又は学部長あるいは指導教員が責任を持って推薦できる者で，合格した場合には入学を確約できる者

（１）学校教育法（昭和22年法律第26号）第83条に定める大学を平成28年３月に卒業見込みの者

（２）短期大学又は高等専門学校の専攻科を平成28年３月に修了見込みの者で，修了までに独立行政法人大学評価・学位授与機構から学士の学位を授与される見込みの者

2．志願専攻に関する事前相談等

志願専攻は，出身大学等において専攻している学科と同系列であること。

なお，同系列と判断し難い学科の場合，学業等に関することの質問がある場合は，出願前に問い合わせてください。

質問の受付及び回答は，本学入試課を通じて行いますので，次の連絡先に文書（FAX 可，電話不可）又は E-mail で問い合わせてください。

質問はできるだけ具体的に記述し，志願専攻及び連絡先を必ず明記してください。

【問い合わせ先】

〒910-8507　福井市文京３－９－１　　福井大学学務部入試課

FAX：0776-27-8010　　E-mail：g-nyusi@ad.u-fukui.ac.jp

（平成 28 年度福井大学大学院工学研究科博士前期課程学生募集要項より抜粋）

資料 1-2-36　大学院授業科目早期履修制度

■　概要

本学学部在学生で，本学大学院工学研究科への進学を希望する特に優秀な者について，大学院授業科目を学部在籍時に履修できる制度を設けている。

第２期に，制度を利用する学科が４学科から７学科に増加した。

（14）福井大学大学院工学研究科大学院授業科目早期履修制度実施要項

１．制度の趣旨

本学工学部生で，本学大学院工学研究科への進学を志望する特に優秀な者について，その能力の高度な発展を期し，早期に大学院教育に接する機会を提供するとともに，学部と大学院の一貫教育を確立するため，教育上の特例措置として，学部在学生の大学院授業科目の早期履修制度を実施するものである。

２．実施する学科

機械工学科，電気・電子工学科
情報・メディア工学科，建築建設工学科
材料開発工学科，生物応用化学科
物理工学科

３．出願資格

本学工学部４年次に在学し，卒業研究に着手している者で，早期履修をしようとする学期開始の前月末までに学部卒業に必要な単位（４年次で履修する必修単位は除く。）を全て修得した者

４．早期履修可能な科目

７．審査結果の発表及び早期履修手続

上記５の出願期間終了後１週間以内に，当該学科掲示板に掲示する。

８．成績評価

本制度のための特別な基準は設定せず，通常の大学院科目の基準で評価を行う。この単位は，学部卒業のための単位としては認定されないので，注意すること。

９．修得単位の大学院科目としての認定

修得した科目の単位は，翌年度に工学研究科博士前期課程の当該学科を基礎とする専攻に入学した場合に限り，本人の申請に基づき，入学後，大学院工学研究科博士前期課程修了のための単位として認定される。ただし，８単位を限度とする。

【単位認定申請の方法】

１）単位認定願の申請時期
４月上旬の所定日（当該専攻掲示板に掲示する。）

２）提出書類
単位認定願書（所定用紙）

３）提出先

（福井大学 HANDBOOK2015 学生便覧より一部抜粋）

■　早期履修を行った学生数

学　科	区　分	平成22年度		平成23年度		平成24年度		平成25年度		平成26年度		平成27年度	
		前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
機械工学科	履修者数	0	11	0	9	0	9	48	19	32	20	32	19
	科目数	0	20	0	17	0	13	2	9	4	10	4	7
電気･電子工学科	履修者数	10	17	14	19	11	17	18	18	15	12	13	11
	科目数	21	32	41	39	24	44	8	5	7	4	9	3
情報･メディア工学科	履修者数							8	18	13	15	4	8
	科目数							3	6	4	4	2	4
建築建設工学科	履修者数							5	3	3	1	4	2
	科目数							2	1	2	1	4	2
材料開発工学科	履修者数	18	20	30	32	9	23	22	27	18	36	16	34
	科目数	43	49	54	65	20	51	6	11	5	15	9	11
生物応用化学科	履修者数			0	4	0	0	0	0	0	0	0	0
	科目数			0	4	0	0	0	0	0	0	0	0
物理工学科	履修者数	10	5	7	11	6	6	7	12	4	10	4	12
	科目数	18	11	12	18	9	7	7	9	4	8	3	9
合　計	履修者数	38	53	51	75	26	55	108	97	85	94	73	86
	科目数	82	112	107	143	53	115	28	41	26	42	31	36

※生物応用化学科は，平成 23 年度より実施。
※※情報・メディア工学科，建築建設工学科は，平成 25 年度より実施。

（事務局資料）

② 支給型奨学金への推薦や研究室配属決定においてGPAを活用している。

③ 高学年での意欲向上策として，学会等での成果発表や各種賞への挑戦を奨励しており，成果があがっている（**P6-139 後掲資料 2-1-13**）。

④ 低学年での意欲向上策として，AO入試合格者に対する入学前教育，数学や英語の授業における達成度別･習熟度別クラス編成などを行い，成果があがっている（**資料 1-2-37**）。

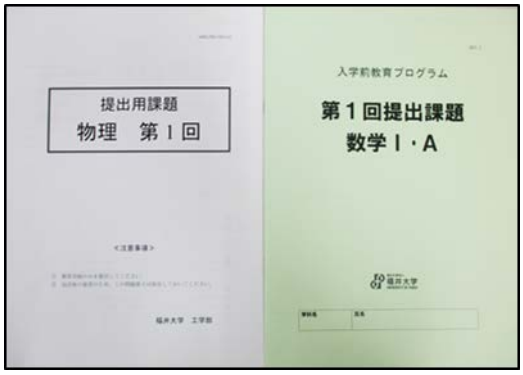
資料 1-2-37　低学年における学習意欲向上策とその効果

■ 共通教育の「大学教育入門セミナー」の後半９回を学科が担当し，入学直後から専門性に触れさせることで，学修意欲を高めている（**P6-87 前掲資料 1-2-10**）。

■ AO入試合格者に対する入学前教育

AO合格者に対して，入学後，専門基礎科目である物理・数学の学部教育がスムーズに行えるように，基礎学力を身につけることを目的に，合格から入学までの間に課題の添削指導を行っている。
入学前教育の必要性は年々合格者に浸透しており，入学前教育の取組も年々熱心さが増している。
入学前教育の必要性（アンケート結果）：平成26年度入学生：16%，　平成27年度入学生：23%





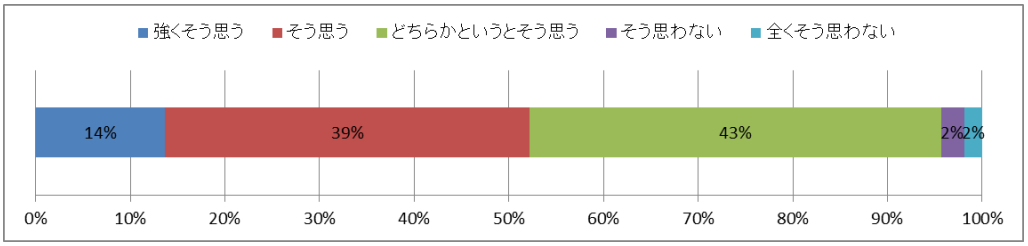
■ 達成度別・習熟度別クラス編成や補習授業の実施

科目	実施内容・効果等
共通教育における英語科目	新入生に対して入学時にTOEIC IP等を実施し，その結果に基づいて英語の習熟度別クラス編成（４段階）を行い，学生の英語力レベルに適合した授業内容を提供している（**P6-14 前掲資料 1-1-14**）。その結果，平成26年度入学生のTOEICスコアの平均が入学後１年半で60点以上伸びるなど学生の英語力が向上した（**P6-133 後掲資料 2-1-7**）。
専門基礎科目の数学や物理の科目	平成21年度教育GP「学士力涵養の礎となる初年次教育の充実」への採択により，基礎学力が十分ではない学生への対応を強化した（**P6-69 前掲資料 1-1-60**）。具体的には，平成22年度に数学の補習授業を５クラスから10クラスに倍増させるとともに物理補習授業を開始し，平成23年度に線形代数の習熟度別クラスを２クラスから３クラスに増加させた。また，平成26年度には「数学学習支援室」の利用環境の改善を行った。これらの取組の結果，２年生全員対象の数学達成度試験の結果は第１期よりも上昇傾向が明確である（**P6-132 後掲資料 2-1-6**）。

■初年次教育の履修意欲向上への効果

設問　「合宿研修」，「大学教育入門セミナー」，「ステップアップ授業」等の初年次教育は履修意欲の向上につながったと思うか？

⇒工学部学生の回答者 320 人の 96%が「強くそう思う～どちらかというとそう思う」と答えており，初年次教育が履修意欲の向上に役立っていることがわかる。



※「ステップアップ授業」は数学や英語の補習授業

（平成 27 年度「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」より抜粋）

（事務局資料）

【学習環境の整備】

① GGJ 事業により，留学生と日本人が交流できるグローバルハブや， e-Learning などの自習設備を有する「言語開発センター」（LDC）を整備し，全学の利用状況から推定してのべ約 190 人／月の工学部学生が LDC を利用するなど，活用された。

② 建物の耐震改修等にあわせ，学生が自主学習に利用できるスペース（WiFi 利用可）の整備を進め，好評である（**資料 1-2-38**）。

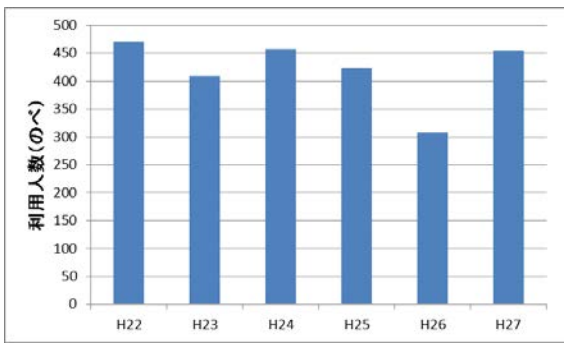
資料 1-2-38　第２期に整備した自習室等

建物名	部屋名	部屋数	整備年度	
工学系１号館１号棟１階	自習室１	1	平成 26 年度	
工学系１号館１号棟１階	自習室２	1	平成 26 年度	
工学系１号館１号棟１階	ｺﾐｭﾆﾃｨﾙｰﾑ	1	平成 26 年度	
工学系３号館１階	ﾘﾌﾚｯｼｭｺｰﾅｰ	1	平成 22 年度	

（事務局資料）

③ 平成 27 年度に「数学学習支援室」の利用環境を改善し，多くの学生が利用した（**資料 1-2-39**）。

資料 1-2-39　数学学習支援室の利用者数の推移



■　数学学習支援室の概要

学士力 GP 採択により，平成 22 年度から，補習クラスとは別に「数学学習支援室」を開いている。

月曜から木曜の５限目に教員３名と TA の大学院生数名が交替で，定期試験やレポート課題などの数学に関する質問対応や，授業内容の理解に困難を感じる学生への個別指導を行っている。平成 26 年度に実施場所の自習室１の学習環境を整備し，平成 27 年度は利用者数が増加した。

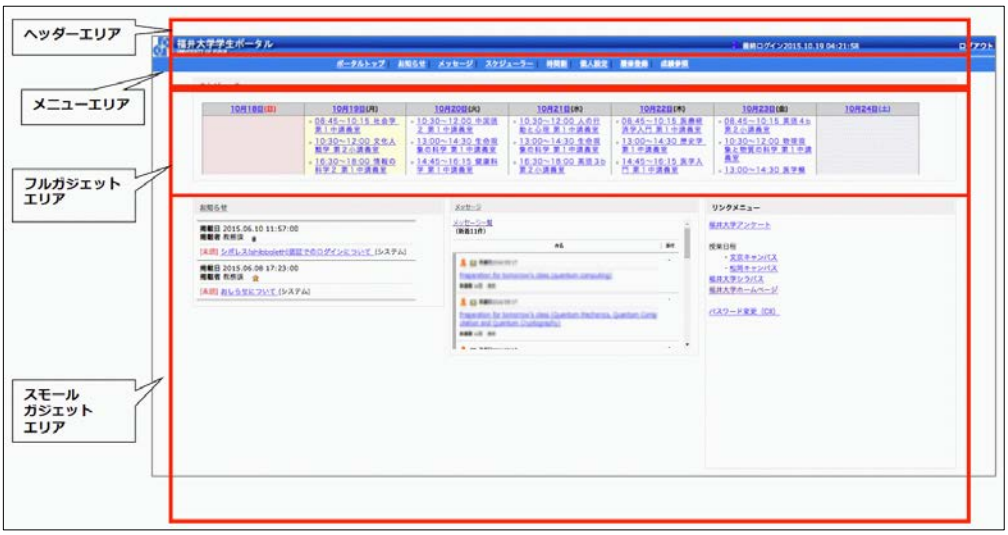
（事務局資料）

④　平成 27 年度に LMS（学習支援システム）および福井大学学生ポータルサイトを導入・構築し，オンライン学習環境が整った（**資料 1-2-40**）。

資料 1-2-40　オンライン学習環境の整備

（1）福井大学学生ポータル

履修登録，シラバスの確認，スケジュール管理，掲示等の確認，休講・補講の確認，授業担当教員，助言教員，教務課等からのメッセージの確認と返信，アンケートへの回答，LMS（学習支援システム）の利用などをここから行える。



（2）LMS（ラーニングマネジメント・システム）：学習支援システム

Web から，授業資料の入手，テストの受験，レポートの提出，学習履歴の確認などを行える。



（事務局資料）

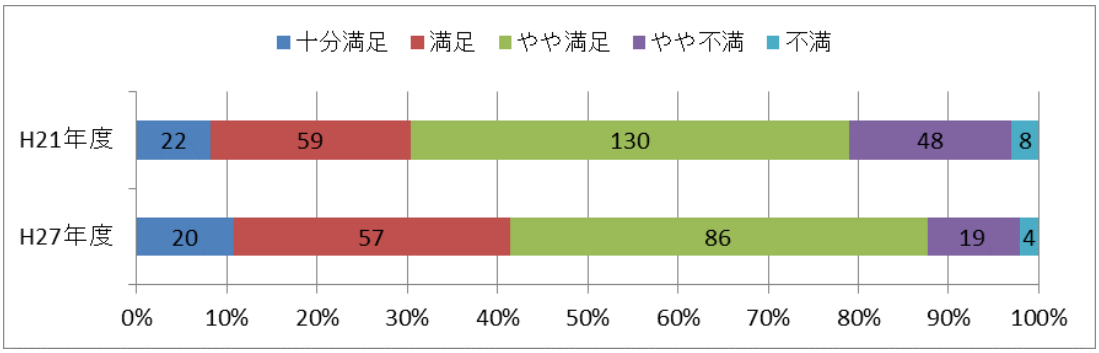
⑤　学習環境に対する学生の満足度が第１期から向上した（**資料 1-2-41**）。

資料 1-2-41　学習環境に対する満足度

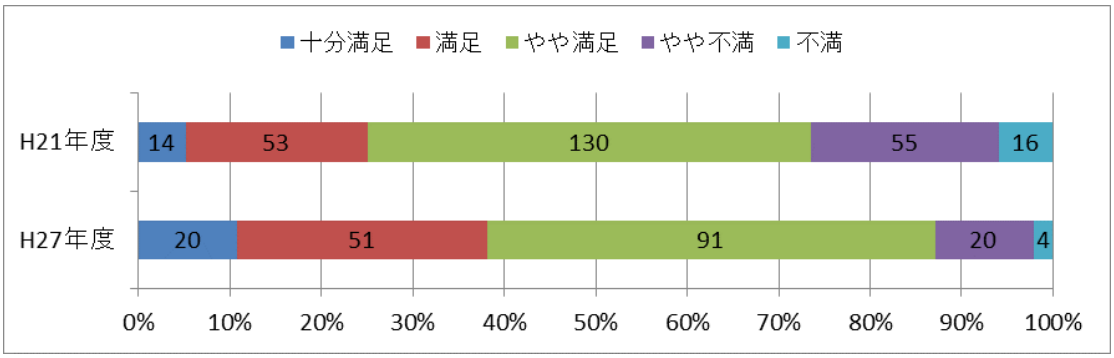
平成 21 年度と平成 27 年度に実施した「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」の結果から，学習環境についての学生の回答状況を以下に示す。平成 27 年度は，回答者の 80%以上が「十分満足～やや満足」と答えており，満足度は高く，かつ平成 21 年度より満足度が向上している。

※以下のグラフ中の数値は回答者の人数である。

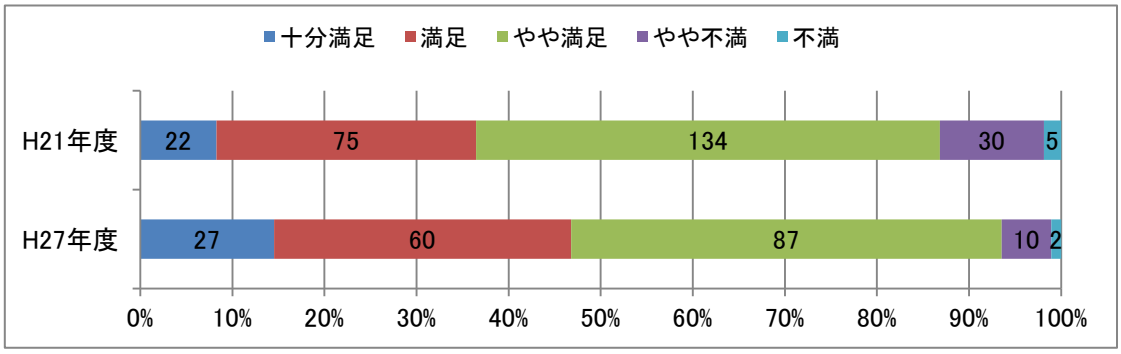
設問　講義室の広さについて，あなたはどの程度満足していますか。



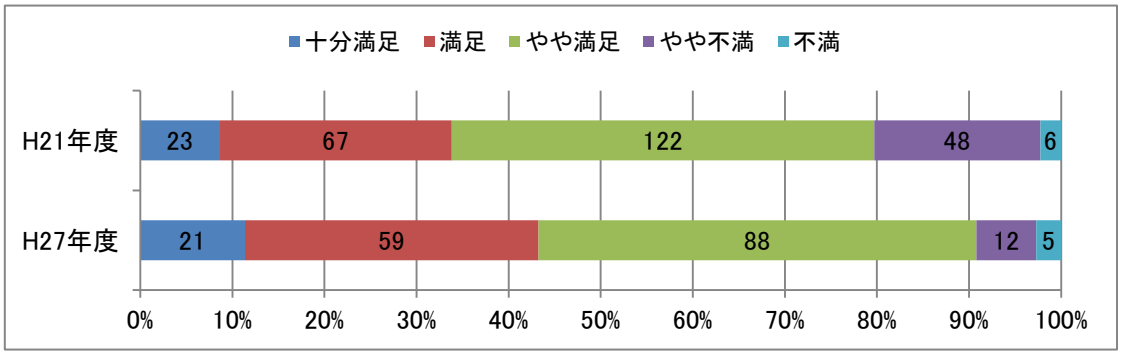
設問　講義室の机・椅子について，あなたはどの程度満足していますか。



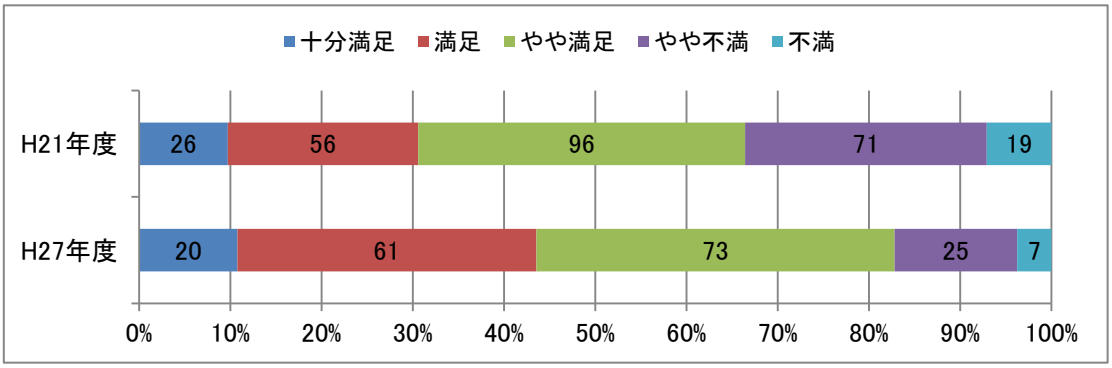
設問　講義室の設備（ＡＶ，プロジェクタ等）について，あなたはどの程度満足していますか。



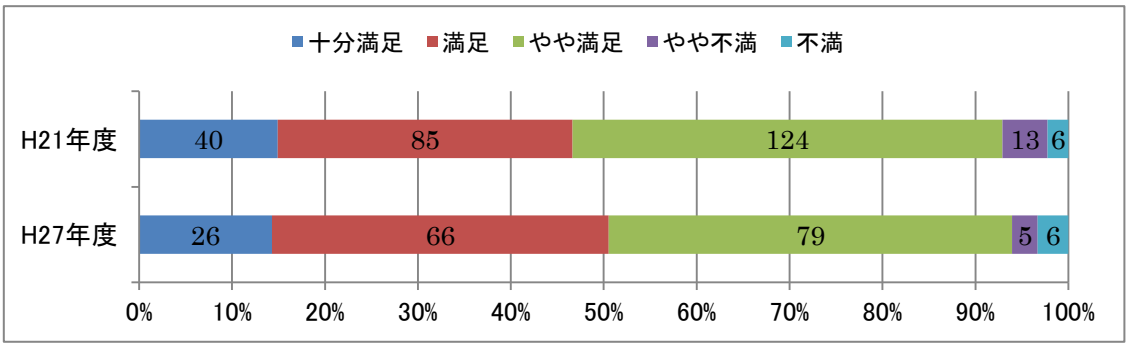
設問　実験室・実習室・演習室などの広さや設備について，あなたはどの程度満足していますか。



設問　大学で自由に使える学習スペース（研究室の個人スペースを含む）について，あなたはどの程度満足していますか。



設問　附属図書館について，あなたはどの程度満足していますか。



（平成 21 年度および平成 27 年度「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」の結果から抜粋）

（水準）　期待される水準を上回る

（判断理由）

① 各学科でDP，CPを定めて体系的な教育課程を編成している[1)]。体系性を可視化するカリキュラム・マップやカリキュラム・ツリーを作成・公開し，シラバスで履修順序等を指示している[2)]。社会や地域のニーズに応えた体系的な小規模科目群や副専攻を設け，GGJ等の外部資金や外部機関等との連携により学科の枠を超えて実施している[3)]。平成26年度から，共通教育と専門教育の枠を超えた英語PBLの授業[4)]を実施している。

[1)] 資料1-2-1	：工学部のディプロマ・ポリシー，カリキュラム・ポリシー　P6-78
資料1-2-3	：学科履修ガイドブックでのポリシーの公開例　P6-81
[2)] 資料1-2-6	：カリキュラムマップとカリキュラムツリー（材料開発工学科の例）　P6-83
資料1-2-8	：シラバス　P6-85
[3)] 資料1-2-13	：専門基礎科目の中に配置された実践力育成やグローバル人材育成にかかわる科目群　P6-89
資料1-2-14	：原子力・エネルギー安全工学コース＜副専攻＞　P6-91
資料1-2-15	：先端繊維科学コース＜副専攻＞　P6-93
[4)] 資料1-2-12	：共通教育と専門教育の協働で実施した英語PBL　P6-88

② 第２期に３学科４コースがJABEE認証を取得し，他の学科もJABEEの基準に沿って教育を実施している[5)]。企業等の協力を得て実施している科目，GGJ採択に伴う実践的英語教育，創成教育，アクティブ・ラーニングなどにより，教育課程の実効性を多角的に高めている[6)]。２つの副専攻により，地域の主要産業に係る体系的教育を実施し，地域社会のニーズに応えている[7)]。

[5)] 資料1-1-51	：JABEE認証の取得　P6-58
資料2-1-4	：JABEE未受審学科におけるJABEE対応（例）　P6-131
[6)] 資料1-2-17	：産業界の協力のもとで実施している科目の例　P6-98
資料1-1-14	：工学部の英語教育　P6-14
資料1-2-16	：学際実験・実習の概要，実施状況，学生の評価　P6-94
資料1-2-19	：「学際実験・実習」の継続的改善　P6-101
資料1-2-25	：アクティブ・ラーニングが多く取り入れられている科目と学生の満足度の例　P6-108
[7)] 資料1-2-14	：原子力・エネルギー安全工学コース＜副専攻＞　P6-91
資料1-2-15	：先端繊維科学コース＜副専攻＞　P6-93

③ GGJ事業により実践的英語教育や海外派遣プログラムを充実し，TOEIC平均スコアの上昇[8)]，多数の学生の海外留学[9)]，留学によるコンピテンシーの向上[10)]など，成果があがっている。また，学科単位の国際交流を継続・新設した[11)]。授業外の「国際英語コミュニケーションプログラム」[12)]も実施し，意識の高い多数の学生が参加した。

[8)] 資料2-1-7	：学生の英語力の向上　P6-133
[9)] 資料1-1-15	：海外短期インターンシップ　P6-15
[10)] 資料2-1-8	：海外派遣プログラムに参加した学生のコンピテンシー向上　P6-134
[11)] 資料1-1-16	：学科の国際交流活動　P6-18
[12)] 資料1-2-20	：国際英語コミュニケーションプログラム（平成23年度以前 留学準備コース）　P6-102

④ DP を踏まえて多様な形態の科目を配置し，習熟度別教育，少人数教育，TA 活用など学習指導法の工夫を行っている[13]。共通教育では，平成 25 年度から英語の４技能（読む，書く，聞く，話す）を重視して授業時間を倍増し[14]，専門教育では，問題解決能力などの涵養のため創成教育を実施している[15]。また，キャリア形成支援のため，平成 24 年度に「みらい協育プログラム」[16]を開始し，インターンシップも継続している[17]。卒業研究では，一つの課題に長期間計画的に取り組ませて総合的な能力を修得させている。

[13] 資料 1-2-21　：授業形態の状況（平成 26 年度開講科目）　P6-104
資料 1-2-22　：授業における学習指導法上の工夫の状況　P6-104
資料 1-2-37　：低学年における学習意欲向上策とその効果　P6-119
[14] 資料 1-1-14　：工学部の英語教育　P6-14
[15] 資料 1-2-16　：学際実験・実習の概要，実施状況，学生の評価　P6-94
資料 1-2-19　：「学際実験・実習」の継続的改善　P6-101
[16] 資料 1-1-61　：みらい協育プログラム　P6-70
[17] 資料 1-1-20　：インターンシップ実施状況　P6-22

⑤ CAP 制のもと，多くの授業が授業時間外の学修を課している[18]。創成活動などの教室外学修プログラムも実施し，好評を得ている[19]。アクティブ・ラーニングや反転授業も取り入れられ，学生の評価は高い[20]。この他，優秀学生表彰制度，習熟度別クラス編成，自主的学習スペースやオンライン学習環境の整備などにより学修意欲の喚起・向上を図っている[21]。これら取組の結果，授業外学修時間は向上し第１期の 1.66 倍となった[22]。

[18] 資料 1-2-27　：各学期における履修単位数の制限（CAP 制）　P6-110
資料 1-2-28　：授業時間外の学習を促す取組の例　P6-111
[19] 資料 1-2-16　：学際実験・実習の概要，実施状況，学生の評価　P6-94
[20] 資料 1-2-25　：アクティブ・ラーニングが多く取り入れられている科目と学生の満足度の例　P6-108
[21] 資料 1-2-32　：学長表彰制度　P6-116
資料 1-2-38　：第２期に整備した自習室等　P6-121
資料 1-2-40　：オンライン学習環境の整備　P6-122
資料 1-1-60　：工学部における基礎学力不足学生への対応「学士力涵養の礎となる初年次教育の充実」　P6-69
[22] 資料 1-2-29　：授業外学習時間の調査とその結果　P6-113

以上のように，国際通用性を有し社会ニーズに応えた体系的教育課程が第１期以上に整備されており，学生・保護者の期待「産業界等で活躍できる高度専門技術者育成のための教育内容・方法の整備」等に十分応えており，期待される水準を大きく上回る。

分析項目Ⅱ　教育成果の状況

観点　学業の成果

（観点に係る状況）

●履修・修了状況から判断される学習成果の状況に対する例

【学習成果の評価方法】

① 全学基準に基づき工学部の成績評価基準を定めている（**資料 2-1-1**）。学修到達度の一層の明確化のため，平成 24 年度から成績区分を４段階から「秀，優，良，可，不可」の５段階に変更した。各科目の成績評価は，多面的かつ厳格に行われ，詳細はシラバスに明記されている（**資料 2-1-2**）。

資料 2-1-1　福井大学工学部規程（抜粋）

（卒業研究の審査）

第９条　卒業研究は，所属学科の定める期日までにその報告を提出したものについて審査し，合否の判定を行う。

２　前項の審査を受けようとする者は，卒業研究の題目及び計画概要を所属学科の定める期日までに当該学科に申し出て担当教員の指導を受けなければならない。

３　卒業研究に着手しようとする者は，３年次終了時に卒業に必要な共通教育科目38単位のうち34単位以上及び当該学科所定の専門教育科目の単位を修得しておかなければならない。

（成績の評価）

第10条　学則第46条第２項に規定する成績評価は学科試験及びその他の審査により評価し，秀，優，良，可及び不可の５級でこれを表示する。

２　前項の成績評価は，別表２に掲げる基準により行う。

３　再試験による科目の成績は，可及び不可の２級で評価する。ただし，特に良の評価をすることがある。

（単位の修得）

第11条　成績評価が秀，優，良及び可の科目は，規定単位を修得したものとし，不可の科目は，修得しないものとする。

２　一授業科目の単位を分割して修得することはできない。

３　卒業研究の審査に合格した者は，当該学科所定の卒業研究の単位を修得したものとする。

（卒業及び学位の授与）

第12条　学則第27条に規定する修業年限以上在学し，共通教育規程及び本規程による所定の単位を修得することをもって，本学部の課程修了とする。

２　前項の課程修了者に福井大学学位規程（平成16年福大規程第30号）の定めるところにより，学士の学位が授与される。

別表２

（平成24年４月１日以降に入学した者）

評価	評価点	評　価　基　準
秀	100点～90点	目標を十分に達成し，きわめて優秀な成果をあげている。
優	89点～80点	目標を十分に達成している。
良	79点～70点	目標を概ね達成している。
可	69点～60点	目標を最低限達成している。
不可	59点～ 0点	目標を達成していない。

（平成24年３月31日以前に入学した者）

評価	評価点	評　価　基　準
優	100点～80点	目標を十分に達成している。
良	79点～70点	目標を概ね達成している。
可	69点～60点	目標を最低限達成している。
不可	59点～ 0点	目標を達成していない。

（福井大学HANDBOOK 2015 学生便覧より抜粋）

（事務局資料）

資料 2-1-2　シラバスへの成績評価方法の明記（例）

工学部>材料開発工学科

授業科目名	無機化学Ⅱ (Inorganic Chemistry Ⅱ)	科目区分	専門基礎科目(必修)
開講時期	2年　前期	開放科目	
単位数	2	授業形態	講義
担当教員 (研究室、E-mail、電話番号(内線))	金　在虎（無機材料化学、kim@matse.u-fukui.ac.jp、(0776) 27-8612(4513))		

■基本キーワード

溶液反応、配位化学、単体、結晶、化合物

■個別キーワード

酸化と還元、酸と塩基、元素、錯化合物、無機化合物、結晶化学

■授業の目標

無機化学1に引き続き、無機化学2では錯体を中心とした結晶形能、結晶場理論、配位子場理論など配位化学の全体像、周期表にある軽金属から希土類元素やアクチノイド元素に至る各種単体や無機化合物の構造、性質について基礎的なことを学ぶ。

■学科等の学習・教育目標との関連

本学科の理念、目的である新素材開発に取り組める技術者を育成するためには、その基礎となる学問の専門知識、技術的問題を解決する能力、応用能力を身に付けることが必要である。本授業ではこれらの基礎科目のうち無機化学に関連する分野を学ぶ。

■授業内容

第 1回 ガイダンス
第 2回 酸化と還元 (1): 酸化数、酸化・還元、酸化剤と還元剤
第 3回 酸化と還元 (2): 酸化剤と還元剤、酸化還元滴定
第 4回 酸化と還元 (3、4): イオン化傾向と電池
第 5回 酸化と還元 (5): 電気分解
第 6回 酸と塩基(1): 酸・塩基の定義と強弱、濃度とpH
第 7回 酸と塩基(2): 中和反応と中和滴定、塩の性質
第 8回 リチウム電池と燃料電池
第 9回 結晶の構造と性質(1): 結晶の分類、結晶状態における結合
第10回 結晶の構造と性質(2): 様々な結晶構造と結晶の性質
第11回 結晶の構造と性質(3): 格子エネルギー
第12回 錯体の構造
第13回 錯体の性質
第14回 水素とその化合物、希ガス
第15回 アルカリ金属, アルカリ土類金属
第16回 期末テスト

■授業方法

Power pointおよび黒板による講義。講義内容はプリントとして渡すが、数箇所に空欄があり、授業を聞いて、それらの答えを書く。毎回の授業後に演習問題を課し、次回の講義にその解答、解説を行い、前回の講義の確認と理解度を深める。

■学生の目標

1 酸化と還元、酸と塩基など溶液化学、電気化学反応の基礎を十分に理解する。
2 錯体の構造、性質、反応などを通じて、配位化学の理解度を高める。
3 周期表の各元素およびその代表的な無機化合物の構造やその性質を理解する。

■評価の方法

5回のクイズ、毎回の宿題、期末テスト、授業中での参加度、出席状況により，以下のような基準で評価する.
クイズと宿題: 50点、期末テスト: 40点、
授業中での参加度: 10点
計100点満点で60点以上で合格とする。

■教科書・参考書等

教科書などは特にない。
参考書: 平尾一之ら著「無機化学－その現代的アプローチー」化学同人，2002年
奥野久輝ら訳「ベル・ロット無機化学」東京化学同人，1976年
脇原将孝監訳「ミースラー・タール 無機化学Ⅰ」丸善，2003年
脇原将孝監訳「ミースラー・タール 無機化学Ⅱ」丸善，2003年

■

授業中に友達との雑談は禁止する。
オフィスアワーは
火曜日の5限 16:30～18:00とする。
なお、この時間帯以外でも質問は受け付ける。
Office:工学1号棟1号館の3階、1-3123

② 卒業研究着手要件および卒業要件は明確に定められ(**資料 2-1-3**), 判定は教授会が行っている。

資料2-1-3　卒業研究着手要件および卒業要件（平成27年度機械工学科の例）

機械工学科卒業要件，卒論着手要件を満たす単位の条件

１．卒業要件

次の要件イ，ロ，ハを併せて 130 単位以上を修得しなければ卒業できない。

イ．共通教育科目 38 単位

ロ．専門教育科目の必修科目 76 単位

ハ．専門教育科目の選択科目 16 単位以上

ただし，工学部他学科開講専門科目は，次の条件の下で専門教育科目の選択科目として 6 単位までは卒業に必要 な単位に算入できる。条件は，当学科の専門教育課程表にないこと，専門教育・副専攻科目として履修していない こと，担当教員の承認を得ること，及び同名の科目は１科目のみであることである。

２．卒業研究着手要件

次の要件イ，ロを併せて 111 単位以上を修得しなければ卒業研究に着手できない。

イ．卒業に必要な共通教育科目 38 単位のうち 34 単位以上

ロ．専門教育科目 77 単位以上（3 年次までの専門教育必修科目 67 単位を含む。）

なお，上記１のただし書きは，卒業研究着手要件においても同様に適用する。

３．その他

イ．教職免許のために開講されている科目（教育職員免許取得関係授業科目表（全学科対象）参照）の単位は 卒業単位数には算入しない。

ロ．留学生対象科目（工業日本語Ⅰ～Ⅳ）は，留学生にのみ開講される。

ハ．海外短期インターンシップⅠ・Ⅱについては，単位の累積を認める。ただし，卒業及び卒業研究着手に必要な単位に算入できるのは４単位までである。

なお，以下の場合は，卒業要件及び卒業研究着手要件の単位に含めることができない。

（１）卒業見込者（卒業判定に係る年度）の春季休業期間に実施する海外短期インターンシップ

（２）卒業研究着手見込者（卒業研究着手判定に係る年度）の春季休業期間に実施する海外短期インターンシップ

（福井大学 HANDBOOK 2015 学生便覧より抜粋）

（事務局資料）

③ ジェネリック・スキル等については，第２期より福井大学グローバル・コンピテンシー・モデルや外部テストを用いた検証・評価も行い，結果は良好であった（**P6-134 後掲資料 2-1-8，9**）。

④　JABEE 認証未取得の学科においても,JABEE の考え方に沿った評価方法を用いている(**資料 2-1-4**）。

資料 2-1-4　JABEE 未受審学科における JABEE 対応（例）

情報・メディア工学科（JABEE 未受審）は Computer Engineering 領域での JABEE 受審を想定した学習・教育目標を整備し，それに基づいた教育プログラムを整備・運用するとともに，学習・教育目標の達成状況を「点検シート」を用いて確認している。

■　Computer Engineering 領域での JABEE 受審を想定した学習・教育目標

また，当学科のカリキュラムで学んだ皆さんが，卒業時までに確実に身に付けておくべき知識・能力等を詳細に示したものが学習・教育目標です（ディプロマポリシーの内容を詳しく述べたものと考えて頂いて結構です)。

情報・メディア工学科の学習・教育目標

以下に示す知識や能力の修得を目標とします。

(A) 数学・自然科学ならびに情報工学・メディア工学の基礎知識，およびその応用能力
(B) 情報工学・メディア工学の専門知識，およびその応用能力
(C) 問題を発見・整理・分析し，専門知識を用いて解決する能力，および与えられた課題に対する設計・創造能力
(D) 情報工学・メディア工学が自然および社会に及ぼす影響・効果を多面的に理解し考察する能力
(E) 自分の考えを的確に記述・表現・発表し，討論を行うためのコミュニケーション能力
(F) 技術者としての社会および組織に対する責任を自覚する能力
(G) 自ら学習目標を立て，自主的・継続的に学習する能力
(H) 与えられた課題にチームで協力して取り組む能力

本学科の各授業科目には，上記（A）～（H）の学習・教育目標が割り当てられており，科目と目標に対応の詳細は，シラバスに明記されています。

■　学習・教育目標の達成状況を管理する点検シート B

点検シートB：学習・教育目標達成度自己点検表

学籍番号
氏名

学習・教育目標	寄与	1年前期	1年後期	2年前期	2年後期	3年前期	3年後期	4年	[　]	[　]	[　]	卒業時	目標達成の可否
(A)数学・自然科学ならびに情報工学・メディア工学の基礎知識，およびその応用能力	◎	/6	/11	/13	/14	/14	/14	/14	/14	/14	/14	/14	
	○			/1	/1	/1	/1	/1	/1	/1	/1	/1	
(B)情報工学・メディア工学の専門知識，およびその応用能力	◎		/1	/4	/7	/8	/9	/10	/10	/10	/10	/10	
	○	/2	/3	/3	/4	/4	/4	/4	/4	/4	/4	/4	
(C)問題を発見・整理・分析し，専門知識を用いて解決する能力，および与えられた課題に対する設計・創造能力	◎						/1	/2	/2	/2	/2	/2	
	○		/1	/3	/3	/4	/4	/4	/4	/4	/4	/4	
(D)情報工学・メディア工学が自然および社会に及ぼす影響・効果を多面的に理解し考察する能力	◎	/1	/1	/1	/2	/2	/2	/2	/2	/2	/2	/2	
	○	/1	/1	/1	/3	/3	/3	/3	/3	/3	/3	/3	
(E)自分の考えを的確に記述・表現・発表し，討論を行うためのコミュニケーション能力	◎						/2	/3	/3	/3	/3	/3	
	○	/2	/4	/5	/6	/6	/6	/6	/6	/6	/6	/6	
(F)技術者としての社会および組織に対する責任を自覚する能力	◎						/1	/1	/1	/1	/1	/1	
	○												
(G)自ら学習目標を立て，自主的・継続的に学習する能力	◎						/1	/3	/3	/3	/3	/3	
	○				/1	/2	/2	/2	/2	/2	/2	/2	
(H)与えられた課題にチームで協力して取り組む能力	◎	/1	/1	/1	/1	/1	/2	/2	/2	/2	/2	/2	
	○							/1	/1	/1	/1	/1	
助言教員による確認と指導		印	印	印	印	印	印	印	印	印	印	印	印
確認と指導の日付													

・点線より上の欄には，各学習・教育目標に◎の寄与をしている必修科目のうち，単位を修得できた科目の数（単位数ではない）の累積を記入
・点線より下の欄には，各学習・教育目標に○の寄与をしている必修科目のうち，単位を修得できた科目の数（単位数ではない）の累積を記入
対象となる必修科目は，「各科目の寄与度一覧表」に載っている必修科目のみ（大学教育入門セミナー，情報処理基礎，第1外国語，第2外国語，および専門教育科目の必修科目）

（情報・メディア工学科「履修ガイドブック 2014」より抜粋）

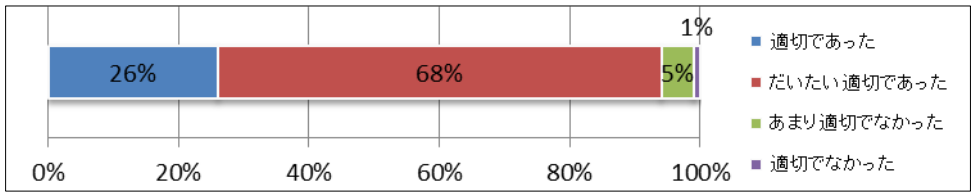
（事務局資料）

⑤　成績評価方法について学生の満足度は高く（**資料 2-1-5**），①～④とあわせ，学習成果の評価方法は関係者の期待に充分応えている。

資料 2-1-5　成績評価方法に対する学生の満足度

設問　成績の評価方法は適切であったか。

⇒回答者の９割以上が「適切～だいたい適切」と答えており，満足度は高い。



※回答者：工学部学生 818 名
（平成 26 年度「カリキュラムアンケート」結果より抜粋）

（事務局資料）

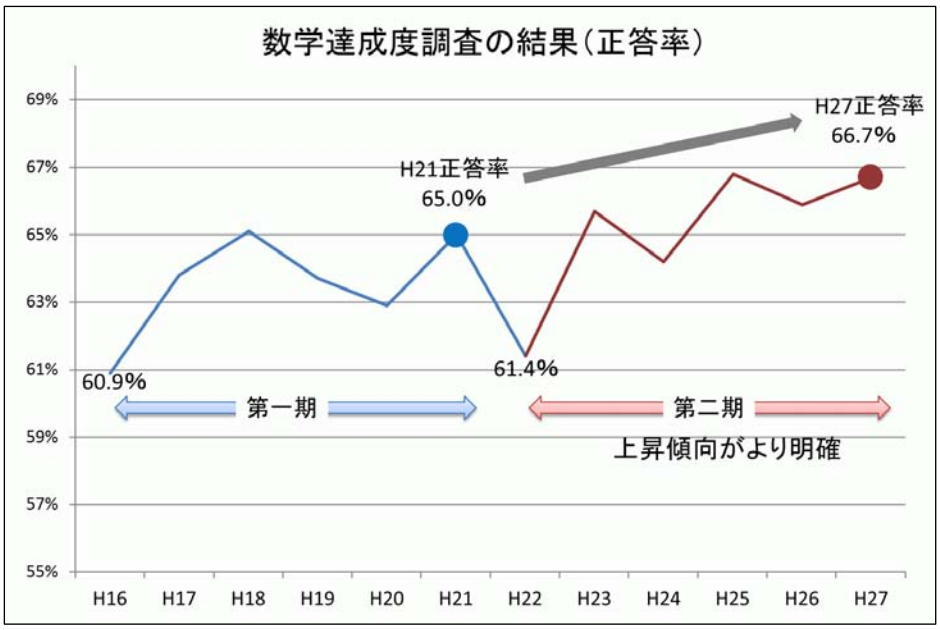
【学習成果】

①　数学基礎力が第１期より向上し，基礎学力向上の取組の成果があがった（**資料 2-1-6, P6-69 前掲資料 1-1-60**）。

資料 2-1-6　数学達成度調査の結果（正答率）

２年生を対象に実施している数学達成度調査の結果，以下のことがわかる。

・第２期最終年度での正答率は，第１期最終年度の正答率よりも 1.7%上昇している。
・第２期では，第１期よりも正答率の上昇傾向がより明確である。
・「数学ステップアップ」の規模拡大の翌年度（平成 23 年度），「微分積分ステップアップ演習」開始の翌年度（平成 25 年度）には，前年度よりも高い正答率が得られ，１年次の取組の成果が，２年次に実施した試験の結果に明確に現れている。



（数学教育懇話会の資料より作成）

（事務局資料）

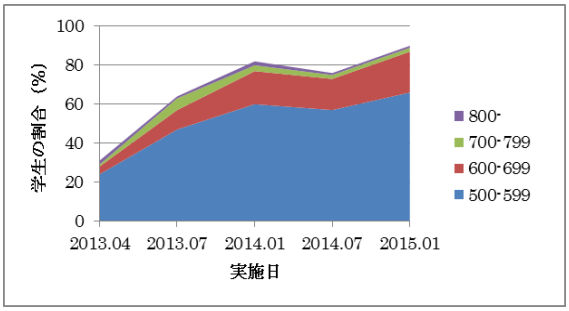
② 平成 26 年度入学生の TOEIC スコアの平均が入学後 1 年半で 60 点以上伸びるなど，英語力が第 1 期から向上し（**資料 2-1-7**），GGJ 事業による英語教育充実の成果があがった。

資料 2-1-7　学生の英語力の向上

■　TOEIC スコアの変化

・平成 25 年度工学部入学生の TOEIC スコアの伸び

工学部の平成 25 年度入学生は，TOEIC スコアが 300 点台の学生が最も多く，200 点台の学生がそれに続いていた。入学後の英語教育により，まず 200 点台の学生がほぼ半減し，400 点台の学生数が増加するという急速な変化がみられた。その後の教育により，英語初心者の第一目標とされる 500 点以上の学生が入学当初の 31 名から 2 年終了時に 90 名まで増加した。



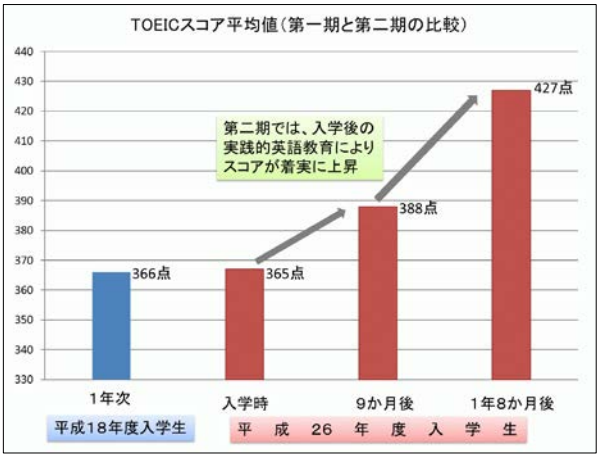
・平成 26 年度工学部入学生の TOEIC スコアの伸び

TOEIC スコアの平均が入学後 1 年半で 60 点以上伸びた。全体的な傾向は平成 25 年度工学部生と同様である。受験者数は回により若干異なるが 530 名程度である。

	平成 26 年 4 月	平成 26 年 7 月	平成 27 年 1 月	平成 27 年 7 月	平成 27 年 12 月
全体平均	365 点	385 点	388 点	404 点	427 点
リスニング平均	203 点	227 点	221 点	232 点	247 点
リーディング平均	161 点	158 点	166 点	173 点	180 点

■　TOEIC スコアの第 1 期との比較

右図の「平成 18 年度入学生」には工学部以外の学生も含まれるが，2 次試験で英語を課さない工学部学生の英語力は従来高いものではなく，従って平成 18 年度工学部入学生の TOEIC スコアの平均は下図の「平成 18 年度入学生」のスコアと同等あるいはそれ以下であったと考えられる。また，第 1 期では，入学後の学生の英語力は入学当時の学力が維持される程度であった。第 2 期では，入学後の実践的英語教育による英語力の上昇が明確である。



■　TOEIC スコア以外での学生の成長

ネイティブスピーカーと接することへの心理的抵抗の減少により海外留学者数が飛躍的に増加し，留学経験した学生が中心となってグローバル人材育成セミナーや春休み TOEIC 勉強会（Spring Challenge with us）を企画・運営するなど，GGJ 事業以前にはみられなかった意欲的な取組が行なわれた。

（事務局資料）

③　福井大学グローバル・コンピテンシー・モデルによる検証の結果，海外派遣プログラムに参加した学生のコンピテンシーが派遣前より向上し（**資料 2-1-8**），②とあわせ，GGJ 事業によるグローバル人材育成の成果があがった。

資料 2-1-8　海外派遣プログラムに参加した学生のコンピテンシー向上

■　概要

GGJ 事業による海外派遣には，二つのタイプがある。
タイプⅠ　「語学研修型」，「文化体験・交流型」，「グローバル教養型」
タイプⅡ　「専門分野型」，「実践・インターンシップ型」，「研究・発表型」

タイプⅠに参加した学生に対しては，ジェネリック・スキルが派遣前後でどの程度変化したのかを調査する。
タイプⅡに参加した学生に対しては，プロフェッショナル・スキルが派遣前後でどの程度変化したのかを調査する。

各スキルの調査には「福井大学グローバル・コンピテンシー・モデル」を用いる。

■　福井大学グローバル・コンピテンシー・モデル

ジェネリック・スキルを「グローバル化した知識基盤社会において，社会人として活躍できる能力」と捉え，プロフェッショナル・スキルを「ジェネリック・スキルを前提に，専門家としてグローバル社会に貢献するためのスキル」と捉える。
さらに，ジェネリック・スキルを「基礎的知識・教養」，「自己学習力・問題解決能力」，「コミュニケーション能力（語学力含む）」，「異文化に対する理解・自己アイデンティティの確立」の 4 つに分け，プロフェッショナル・スキルを「専門的知識・能力」，「創造力」，「社会的責任・使命感」の 3 つに分ける。これら 7 つの能力等をルーブリック方式で自己判定し，派遣による変化を検証する。

福井大学グローバル・コンピテンシー・モデル

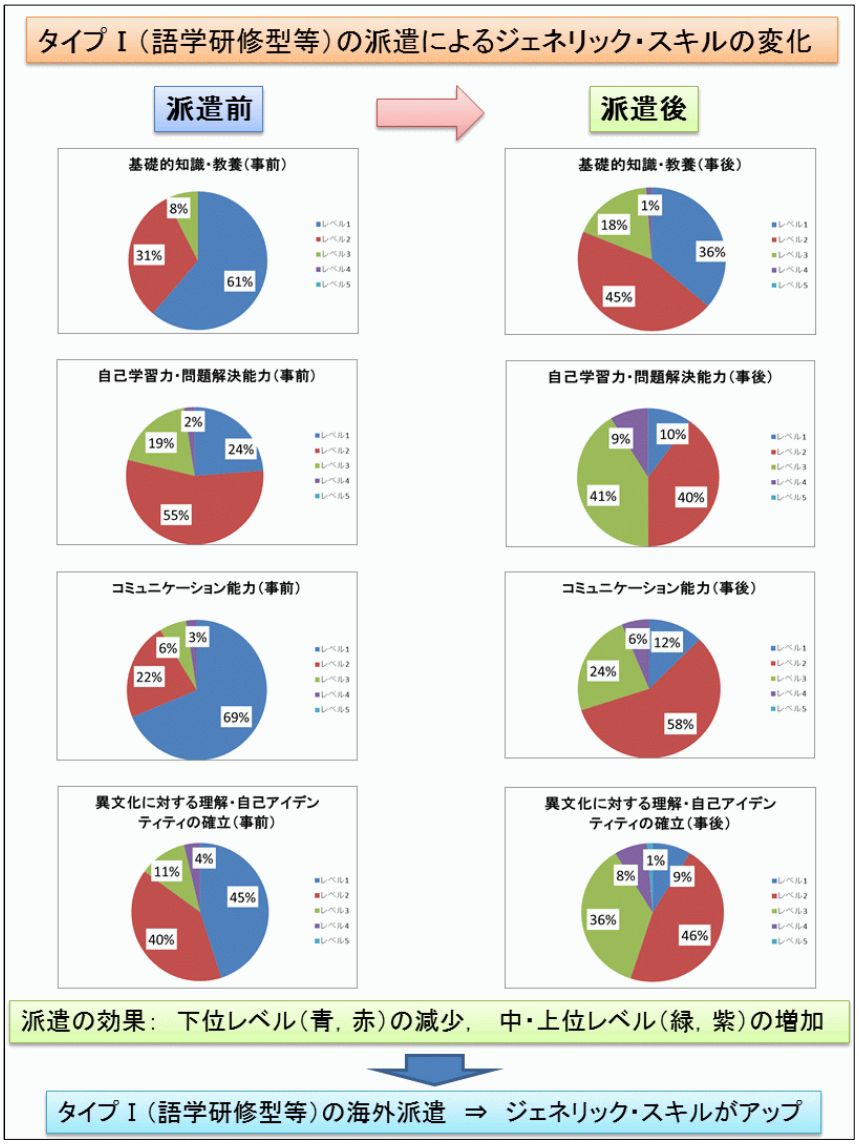
ジェネリックスキル	詳細	レベル1	レベル2	レベル3
基礎的知識・教養	グローバル社		国内の時事問題等がどのような背	自分の持つ知識教養・能力の現
自己学習力・問題解決能力	主体性・積極 働きかけ力： 課題発見力 計画力：課題 実行力：目的			
コミュニケーション能力	発信力：自分 傾聴力：相手 情況把握力			

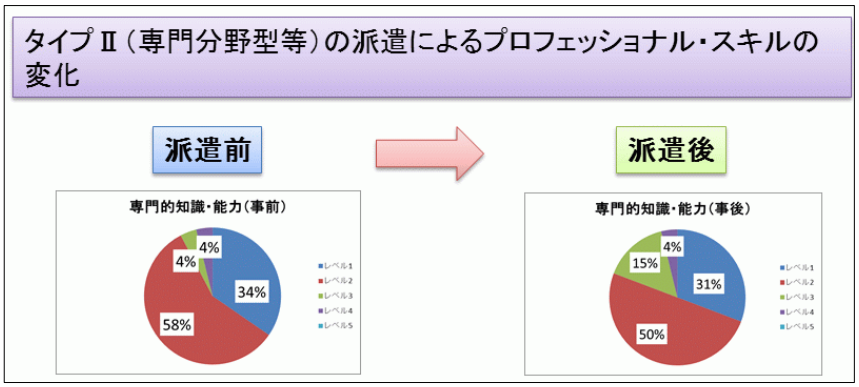
プロフェッショナルスキル	詳細	レベル1	レベル2	レベル3
専門的知識・能力	世界の人々と協働してグローバル社会に貢献できる高い専門能力	自分の専門分野の講義等を理解できる	自分の専門分野への興味、関心点を明確に知り、課題、問題点を把握して研究や実習を目的を持って行うことができる	専門分野にる知識・能力のため日々し、学会での や共同研究 強みを活かし活動に積極 携わる
創造力	新しい価値を生み出す力	ありたい自分像や成し遂げたいこと、理想の社会像について夢を描くことができる	現実をイメージに近づけるため、物事の問題点や自分の改善点を把握し、解決のために必要な行動や手立てを考えることができる	様々な事象いて、事実や来の方法を にして、自分 のアイディア 成することが る
社会的責任・使命感	専門家として世界に貢献しようとする強い気持ち	自分が社会の一部を担っていることを認識し、社会のルールや人と	自分が携わる分野がどのように人々の生活向上に繋がるかを日	自分が携わ 野において、 のプロフェッ ナルとして社 ら期待されて 使命や責任

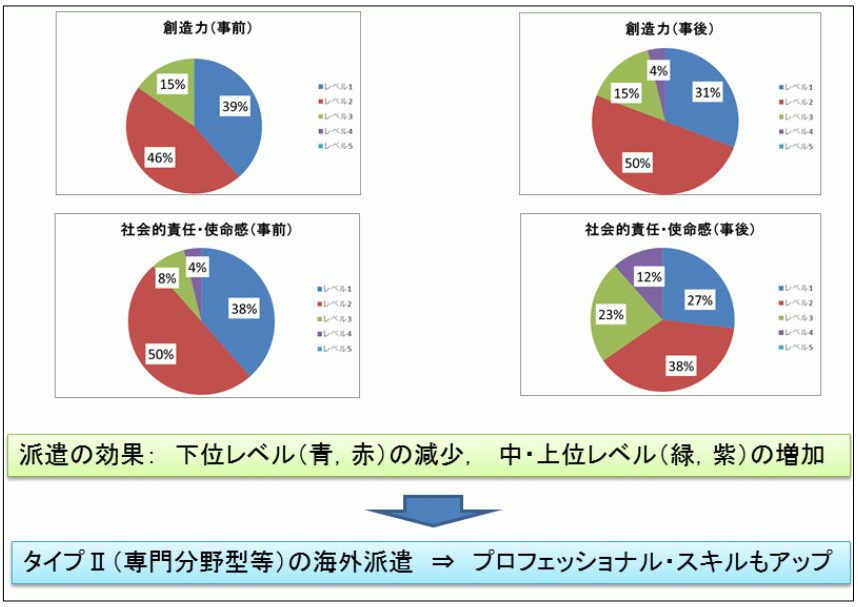
■　海外派遣された学生のコンピテンシーの変化

タイプⅠに参加した学生には，派遣によるジェネリック・スキルの向上が確認できた。タイプⅡに参加した学生には，ジェネリック・スキルとプロフェッショナル・スキルの両方について向上が確認できた。

回答者：ジェネリック・スキルについては，タイプⅠ又はタイプⅡに参加した 80 名，プロフェッショナル・スキルについてはタイプⅡに参加した 26 名。いずれも平成 27 年度派遣学生。







（事務局資料）

④　問題解決能力や実践力の涵養状況は良好であり（**P6-94 前掲資料 1-2-16，P6-108 前掲資料 1-2-25，26**），アクティブ・ラーニングの成果があがった。

⑤　外部テスト（PROG テスト）による客観的な検証の結果，ジェネリック・スキルの涵養状況は良好であり（**資料 2-1-9**），学士力 GP の成果に基づく教育の効果があがった。

資料 2-1-9　PROG テストによるジェネリック・スキル涵養状況の検証

■　概要

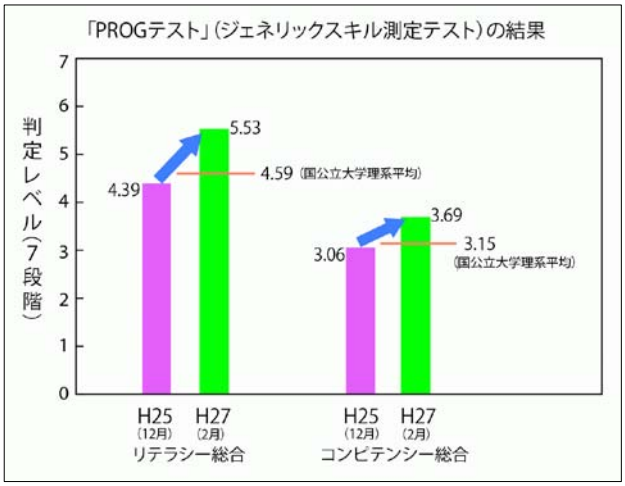
学校法人河合塾と株式会社リアセックが共同開発した「ジェネリック・スキル（汎用的技能）」の測定テスト。ジェネリック・スキルを「リテラシー」（新しい課題やこれまで経験のない問題に対して知識を活用して課題を解決する能力）と「コンピテンシー」（周囲の状況に上手に対応するために身に付けた意思決定・行動指針などの特性）に分けて測定する。工学部では，平成 25 年 12 月に 35 名の２年生が，また平成 27 年２月には 526 名の３年生が PROG テストを受検した（費用は大学負担）。

この部分は著作権の関係で掲載できません。

（株式会社リアセックホームページ（http://www.riasec.co.jp/prog_hp/））

■　同一学生に対するジェネリック・スキル涵養状況の追跡調査の結果

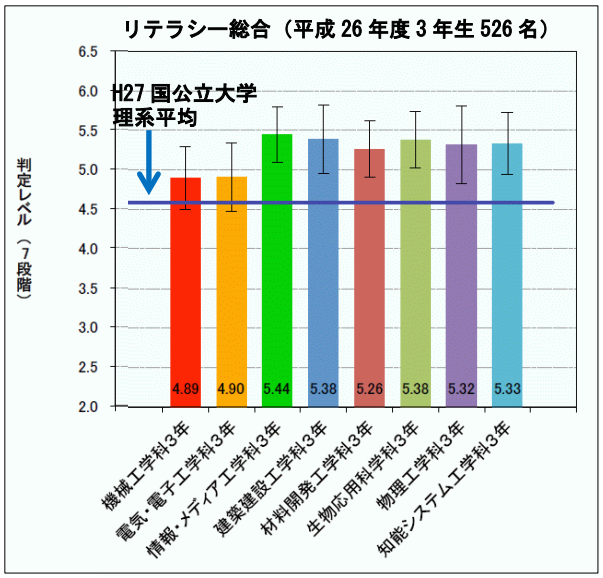
平成 25 年 12 月と平成 27 年２月に PROG テストを受けた同じ 30 名（初回受検時は２年生，２回目受検時は３年生）に対してジェネリック・スキルの涵養状況を比較した結果，１回目から２回目の間に，学生のリテラシーとコンピテンシーがいずれも向上し，２回目の結果は国公立大学理系平均（平成２年から平成 26 年５月までに受検した国公立大学理系学生の平均）を上回っていた。



（PROG 全体傾向報告書 2015（株式会社リアセック）より作成）

■　工学部生の特徴：高いリテラシー

リテラシーについて，２回目のテスト（H27.2）を受検した 526 名の結果を以下に示す。リテラシーは「学びの充実」による伸長が期待できるとされている（注）。全ての学科でリテラシーは平均値を上回っている。さらに詳細な分析によると，ほぼ全ての学科において「情報収集力」と「構想力」が，また全学科において「言語処理能力」と「非言語処理能力」が，平均値を上回っている。特に，言語処理能力と非言語処理能力については「国公立理系全体と比べ極めて高い」という判定を得た。



（PROG 全体傾向報告書 2015（株式会社リアセック）より作成）

（注）「リテラシーは，論理的思考力の程度を反映しており，問題解決には欠かせない要素。どのような仕事にも普遍的に求められる力なので，大学における探求活動，研究・リサーチ，本質理解といった「学びの充実」によって，その伸長が期待できます。」（株式会社リアセック）

（事務局資料）

⑥　卒業生は就職先から高く評価されており(P6-157 **後掲資料 2-2-12**),①～⑤とあわせ,関係者の期待に応えている。

【単位取得・成績・学位授与状況】

①　成績評価は厳格になされ，単位修得率は 85%程度，合格者のうち優・良の判定が 7 割程度である（**資料 2-1-10**）。これは学生が各科目において相応な学力や資質・能力を身につけた証左である。

資料 2-1-10　成績分布及び単位修得状況

区分	入学年度	開講年度	優 100～80	良 79～70	可 69～60	合格 （優良可の区別がないもの）	不可 59～0 （不受を含む）	単位修得率
共通教育科目	平成 22 年度	平成 22 年度 ～25 年度	413	4,976	2,167	1,317	1,681	84.1%
専門教育科目	平成 22 年度	平成 22 年度 ～25 年度	413	11,196	5,371	4,046	3,596	85.4%

※数値は各入学年度の学生が卒業（修了）するまでに履修登録した科目のうち，優～不可の各段階に評価された科目数及び単位を修得した科目の割合を示す。

（事務局資料）

②　標準修業年限での卒業率は 75%程度，最低修業年限の 1.5 倍以内の卒業率は 87%程度である（**資料 2-1-11**）。留年率，退学率，休学率は過去６年間の平均でそれぞれ 8.4%，2.1%，3.4%であり，第２期に留年率は概ね低下傾向を示した（**資料 2-1-12**）。

資料 2-1-11　工学部生の卒業率

入学 年度	入学者数(a)	標準修業年限 内卒業者数(b)	(b)の卒業率 (b/a)	標準修業年限 ×1.5 年内 卒業者数(c)	(c)の卒業率 (c/a)
平成 19 年度	571	445	77.9%	514	90.0%
平成 20 年度	585	432	73.8%	523	89.4%
平成 21 年度	571	420	73.6%	502	87.9%
平成 22 年度	565	414	73.3%	483	85.5%
平成 23 年度	573	422	73.6%	482	84.1%
平成 24 年度	554	436	78.7%		
平均	570	428	75.1%	501	87.4%

（事務局資料）

資料 2-1-12　工学部生の留年率，退学率，休学率

年度	平成22年度			平成23年度			平成24年度			平成25年度			平成26年度			平成27年度			6年間 平均
留年率	学生数	留年者	留年率	学生数	留年者	留年率	学生数	留年者	留年率	学生数	留年者	留年率	学生数	留年者	留年率	学生数	留年者	留年率	留年率
		218	8.7%		228	9.2%		208	8.5%		194	8.0%		193	8.0%		192	8.1%	8.4%
退学率		退学者	退学率		退学者	退学率		退学者	退学率		退学者	退学率		退学者	退学率		退学者	退学率	退学率
	2,494	48	1.9%	2,480	50	2.0%	2,455	53	2.2%	2,430	46	1.90%	2,406	65	2.7%	2,376	51	2.1%	2.1%
休学率		休学者	休学率		休学者	休学率		休学者	休学率		休学者	休学率		休学者	休学率		休学者	休学率	休学率
		99	4.0%		89	3.6%		97	4.0%		69	2.80%		85	3.5%		73	3.1%	3.5%

（事務局資料）

●資格取得状況，学外の語学など試験の結果，学生が受けた様々な賞の状況から判断され学習成果の状況

【学生の研究実績・資格取得】

① 全学科において，学会発表やコンテスト等での学生の受賞・入賞の実績があり（**資料 2-1-13，14**），高い能力や技能が涵養されていることの証左である。

資料 2-1-13　工学部学生の受賞や入賞

所属	年度	学年	受賞先	受賞名
生物応用化学科	H27	４年	第 33 回 YEAST WORKSHOP	学生ベスト発表賞
知能システム工学科	H27	４年	ふくいソフトウェアコンペティション 2015	福井県ソフトウェア大賞（一般部門）
知能システム工学科	H27	４年	全日本マイクロマウス大会	フレッシュマンクラス１位
物理工学科	H27	４年	マイクロマウス関西地区大会	ロボトレース競技３位
機械工学科	H26	４年	日本機械学会	学生賞
機械工学科	H26	４年	計測自動制御学会北陸支部	優秀学生賞
機械工学科	H26	４年	日本設計工学会武藤栄次賞	優秀学生賞
機械工学科	H26	４年	日本機械学会	畠山賞
機械工学科	H26	４年	日本設計工学会武藤栄次賞	優秀学生賞
知能システム工学科	H26	４年	情報処理学会北陸支部	優秀論文賞
情報・メディア工学科	H26	４年	G 空間×ICT 北陸まちづくりトライアルコンクール（北陸総合通信局・北陸情報通信協議会 G 空間×ICT 街づくり推進部会共催）	北陸総合通信局長賞
電気・電子工学科	H26	２年	マイクロマウス中部地区初級者大会	優勝
情報・メディア工学科	H25	４年	電子情報通信学会北陸支部	優秀論文発表賞
知能システム工学科	H25	４年	ふくいソフトウェアコンペティション 2013	福井県ソフトウェア大賞（一般部門）
機械工学科	H25	４年	日本設計工学会武藤栄次賞	優秀学生賞
材料開発工学科	H25	４年	一般社団法人福井県染色同業会	工夫考案懸賞
機械工学科	H24	４年	日本設計工学会武藤栄次賞	優秀学生賞
知能システム工学科	H24	４年	マイクロマウス北陸信越地区大会	マイクロマウス特別賞
情報・メディア工学科	H23	４年	映像情報メディア学会　メディア工学研究会	優秀発表賞
知能システム工学科	H23	４年	ふくいソフトウェアコンペティション 2011	福井県ソフトウェア大賞（一般部門）
機械工学科	H23	４年	日本設計工学会武藤栄次賞	優秀学生賞
情報・メディア工学科	H22	４年	映像情報メディア学会　メディア工学研究会	優秀発表賞
知能システム工学科	H22	４年	ふくいソフトウェアコンペティション 2010	福井県ソフトウェア優秀賞
知能システム工学科	H22	４年	情報処理学会北陸支部	優秀論文発表賞
建築建設工学科	H22	４年	越前和紙七夕吹き流しコンテスト	大賞

（事務局資料）

資料 2-1-14　創成活動を行う学生がコンテストで入賞した例



（先端科学技術育成センター CIRCLE News 第 16 号（2015.3）より）

② 122 名の学生が高等学校教諭１種免許状を取得した（**資料 2-1-15**）。

資料 2-1-15　高等学校教諭１種免許状取得状況

年度	数学	理科	工業	計
平成 22 年度	2	6	8	16
平成 23 年度	0	9	8	17
平成 24 年度	1	4	7	12
平成 25 年度	5	12	17	34
平成 26 年度	1	17	6	24
平成 27 年度	2	9	8	19

（事務局資料）

●学業の成果の達成度や満足度に関するアンケート等の調査結果とその分析結果

【学生アンケートの例】

①　平成 27 年度に実施した「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」の結果，学修成果について尋ねた項目の全てで第１期を上回る良好な結果が得られた（**資料 2-1-16**）。「外国語コミュニケーション能力」については「十分～ある程度身についた」との回答の割合が第１期より約 23%高く，伸びが顕著である。実践的能力などの 7 項目についても第１期から約 10%の向上が見られた。

資料 2-1-16　学修成果の学生へのアンケート結果

■　平成 27 年度調査結果の概要

・学修成果について尋ねた項目について，１項目を除き回答者の 80%～95%が「十分～ある程度身についた」と答えた。

・「外国語コミュニケーション能力」については，「十分～ある程度身についた」と回答した学生の割合は約 61%であるものの，第１期より約 23%と顕著に向上した。

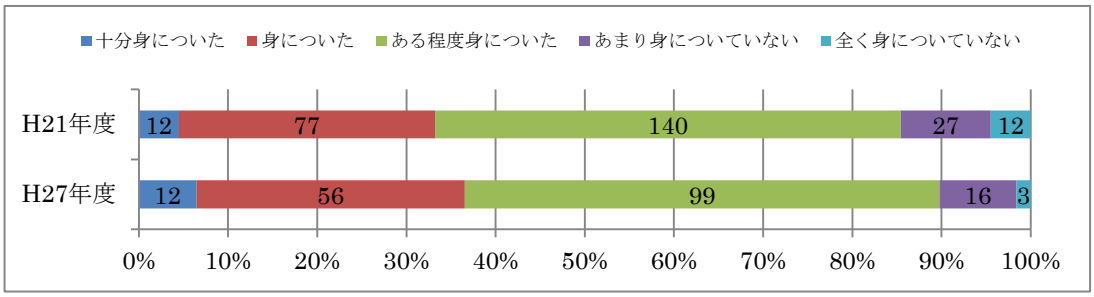
・基礎学力，実践的能力，要点を押さえてまとめる力，プレゼンテーション力，ディスカッション・ディベート力，文章作成・表現力，について「十分～ある程度身についた」と回答した学生の割合が第１期より約 10%向上している。

※以下のグラフ中の数値は回答者の人数である。

■　能力の修得状況に関する設問とその回答

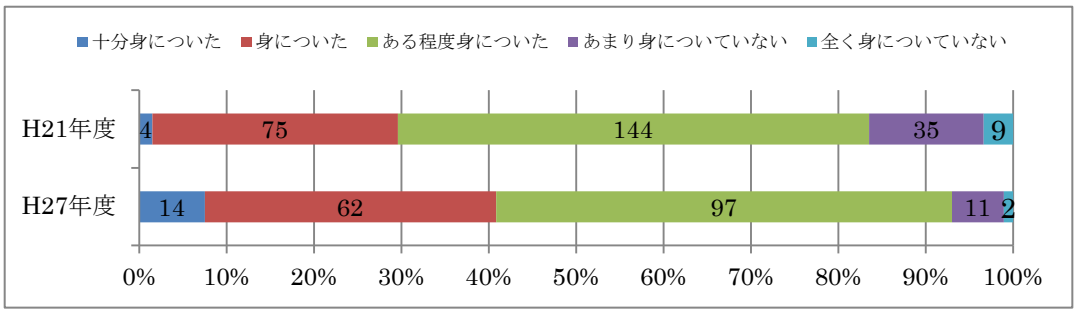
設問　福井大学で学習や研究をすることによって一般常識がどの程度身についたと思いますか？

⇒“「十分～ある程度」身についた”は平成 27 年度に 89.8%で，平成 21 年度より 4.3%増加。

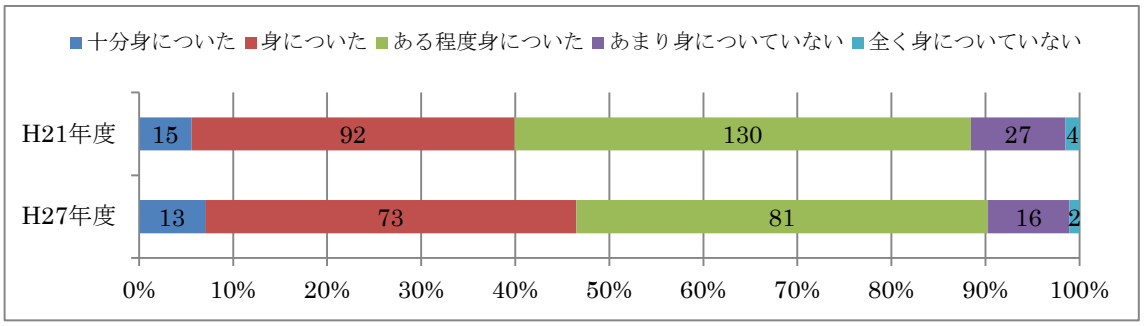


設問　福井大学で学習や研究をすることによって基礎学力がどの程度身についたと思いますか？

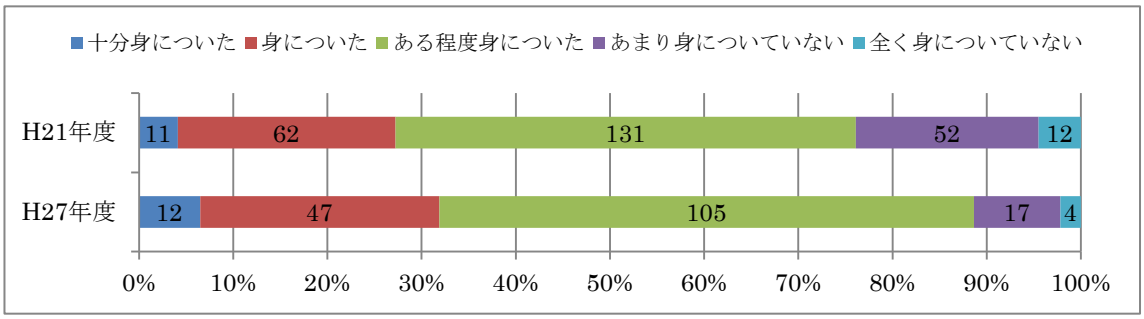
⇒“「十分～ある程度」身についた”は平成 27 年度に 93.0%で，平成 21 年度より 9.5%増加。



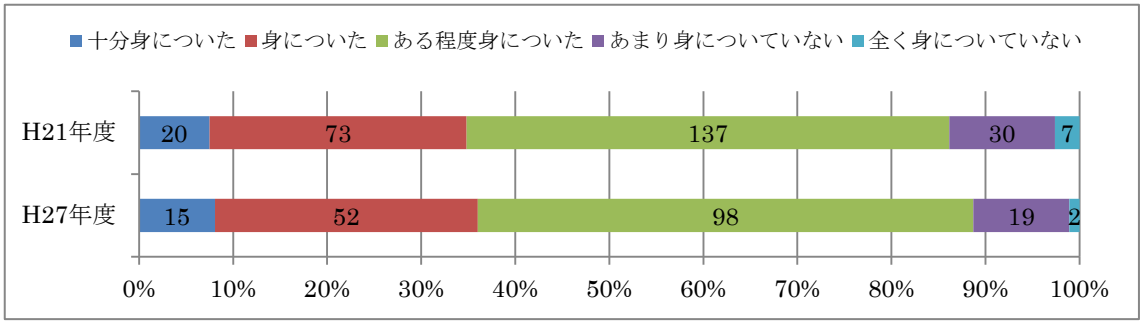
設問　福井大学で学習や研究をすることによって専門知識や技能がどの程度身についたと思いますか？
⇒“「十分～ある程度」身についた”は平成 27 年度に 90.3%で，平成 21 年度より 1.8%増加。



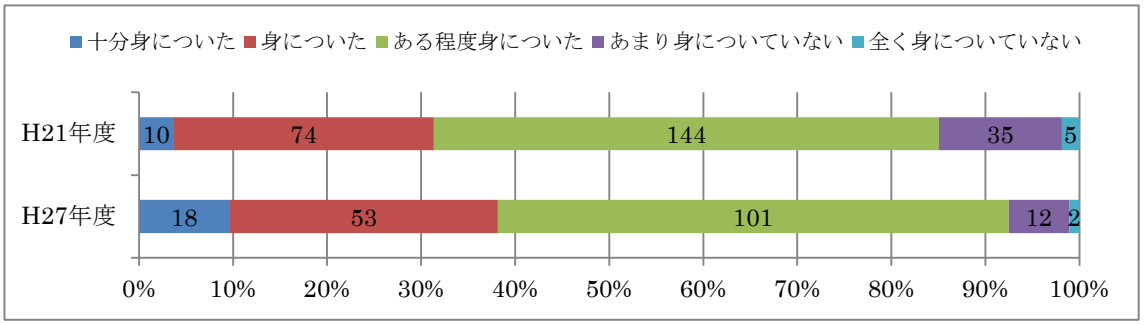
設問　福井大学で学習や研究をすることによって実践的な能力がどの程度身についたと思いますか？
⇒“「十分～ある程度」身についた”は平成 27 年度に 88.6%で，平成 21 年度より 12.5%増加。



設問　福井大学で学習や研究をすることによって広い視野で物事を多面的に考える力がどの程度身についたと思いますか？
⇒“「十分～ある程度」身についた”は平成 27 年度に 88.7%で，平成 21 年度より 2.6%増加。

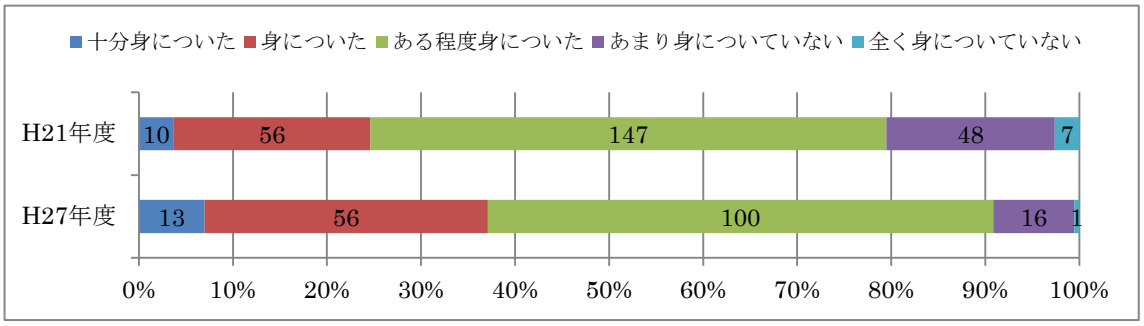


設問　福井大学で学習や研究をすることによって論理や証拠を重視し，それらに基づいて考える力がどの程度身についたと思いますか？
⇒“「十分～ある程度」身についた”は H27 年度に 92.5%で，H21 年度より 7.4%増加。



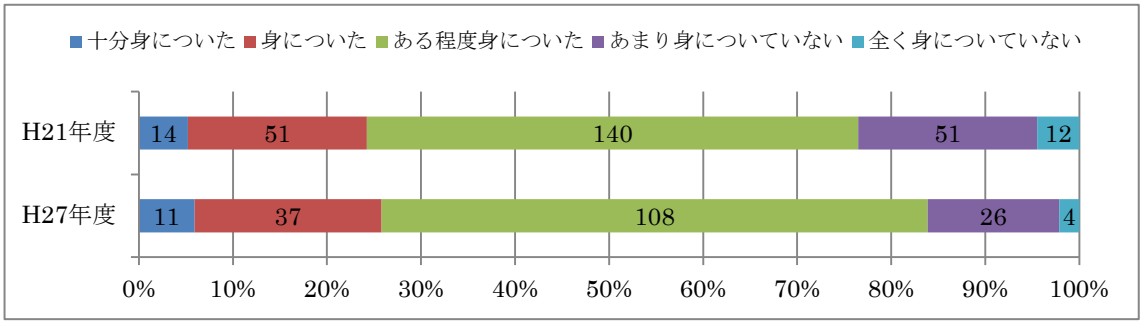
設問　福井大学で学習や研究をすることによって問題のポイントを素早く押さえ，まとめる力がどの程度身についたと思いますか？

⇒“「十分～ある程度」身についた”は平成 27 年度に 90.9%で，平成 21 年度より 11.4%増加。



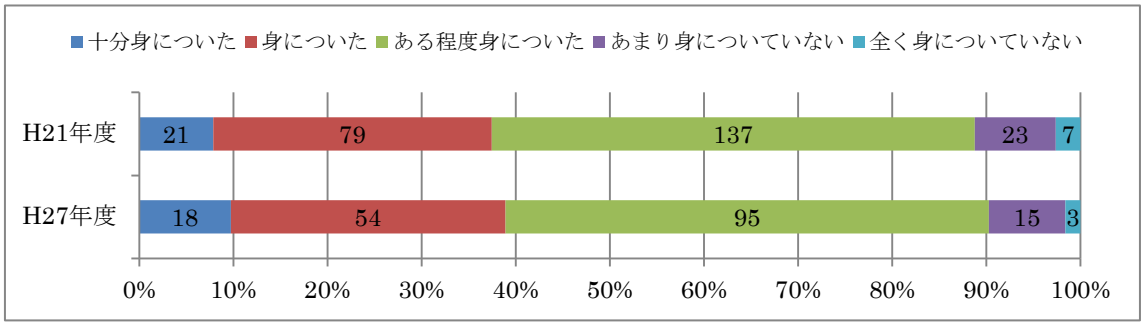
設問　福井大学で学習や研究をすることによって想像が豊かで，新しいアイデアや発想を生み出す力がどの程度身についたと思いますか？

⇒“「十分～ある程度」身についた”は平成 27 年度に 83.9%で，平成 21 年度より 7.4%増加。



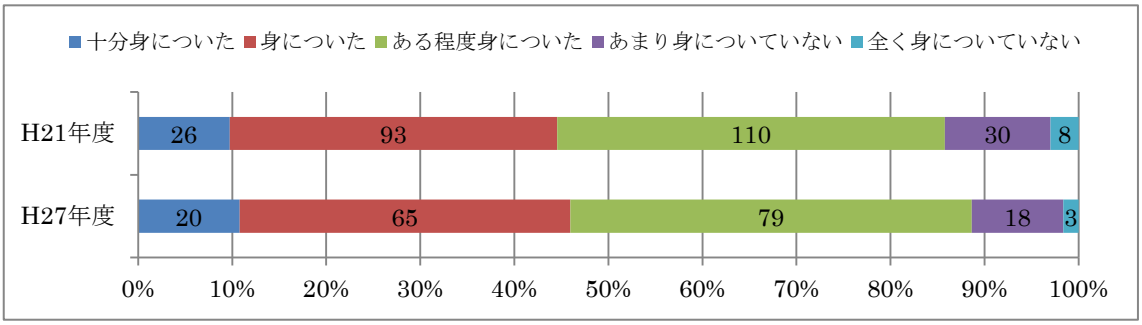
設問　福井大学で学習や研究をすることによって事実や他者に対する誠実さがどの程度身についたと思いますか？

⇒“「十分～ある程度」身についた”は平成 27 年度に 90.3%で，平成 21 年度より 1.5%増加。

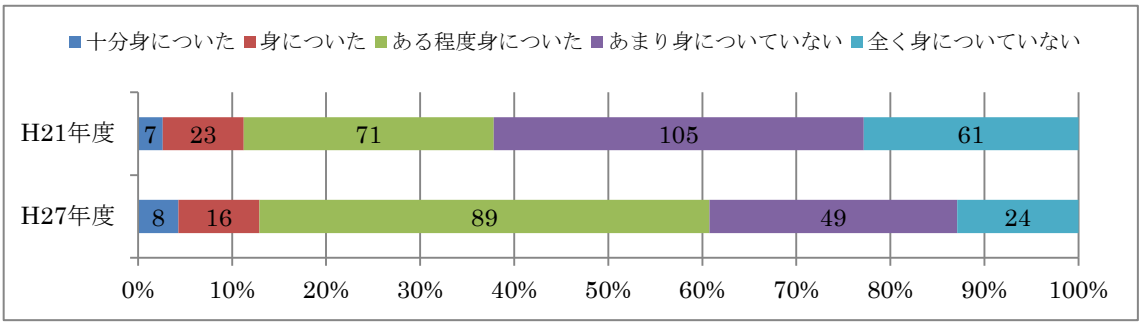


設問　福井大学で学習や研究をすることによって日常的にコミュニケーションをする力がどの程度身についたと思いますか？

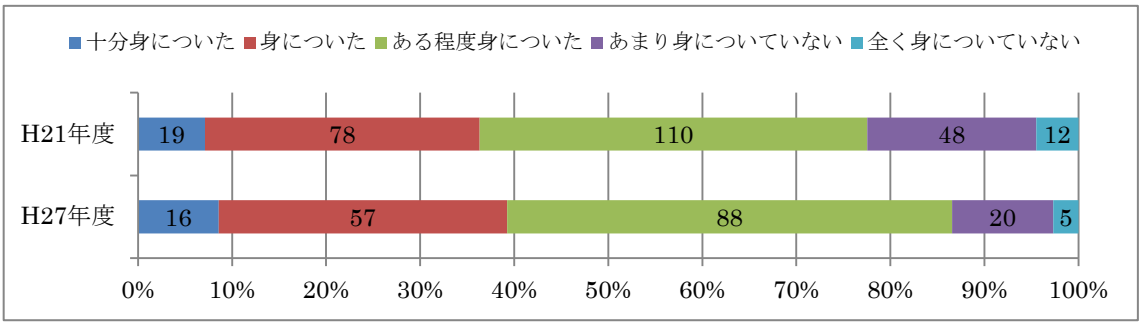
⇒“「十分～ある程度」身についた”は平成 27 年度に 88.6%で，平成 21 年度より 2.9%増加。



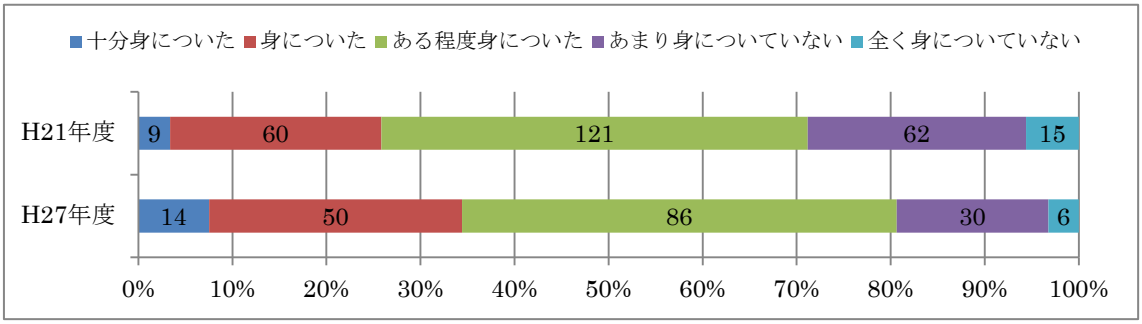
設問　福井大学で外国語でコミュニケーションをする力がどの程度身についたと思いますか？
⇒“「十分～ある程度」身についた”は H27 年度に 60.8%で，H21 年度より 22.9%増加。



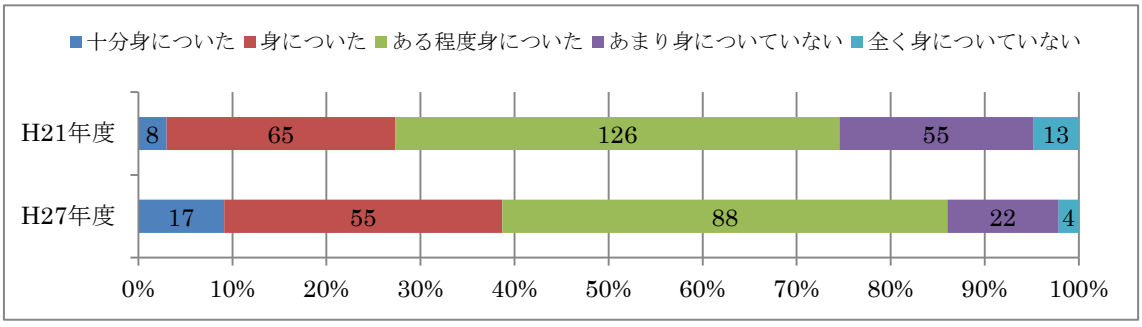
設問　福井大学で学習や研究をすることによってプレゼンテーションをする力がどの程度身についたと思いますか？
⇒“「十分～ある程度」身についた”は H27 年度に 86.6%で，H21 年度より 9.0%増加。



設問　福井大学で学習や研究をすることによってディスカッションやディベートをする力がどの程度身についたと思いますか？
⇒“「十分～ある程度」身についた”は H27 年度に 80.6%で，H21 年度より 9.5%増加。

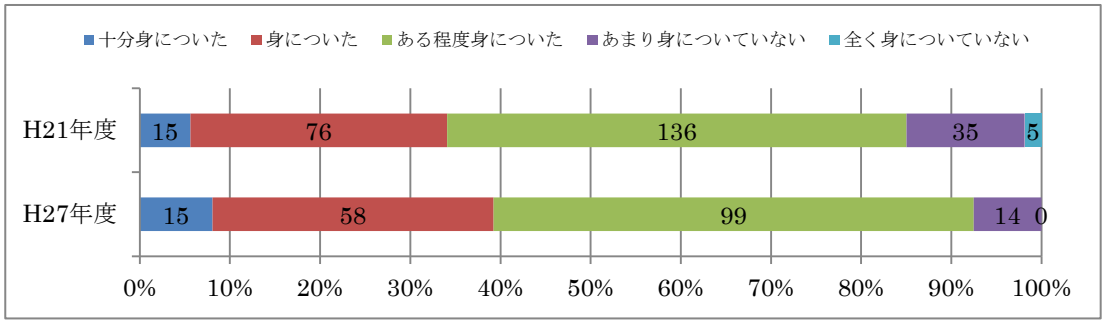


設問　福井大学で学習や研究をすることによって文章作成や文章表現の力がどの程度身についたと思いますか？
⇒“「十分～ある程度」身についた”は H27 年度に 86.0%で，H21 年度より 11.5%増加。



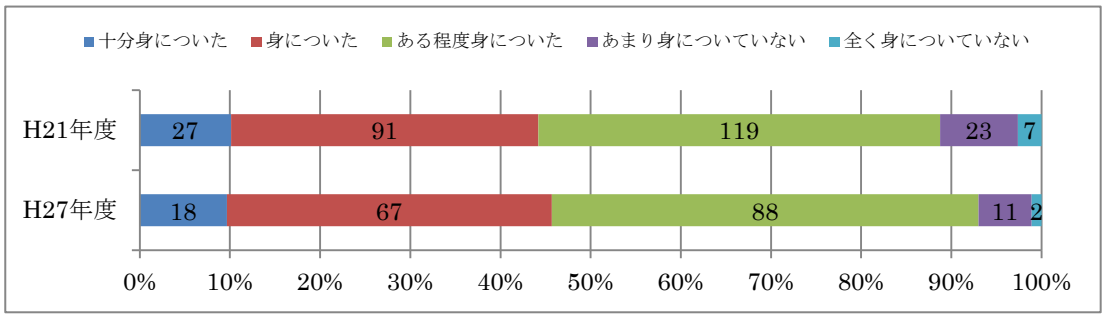
設問　福井大学で学習や研究をすることによって情報を収集して適切に利用する力がどの程度身についたと思いますか？

⇒“「十分～ある程度」身についた”は H27 年度に 92.5%で，H21 年度より 7.5%増加。



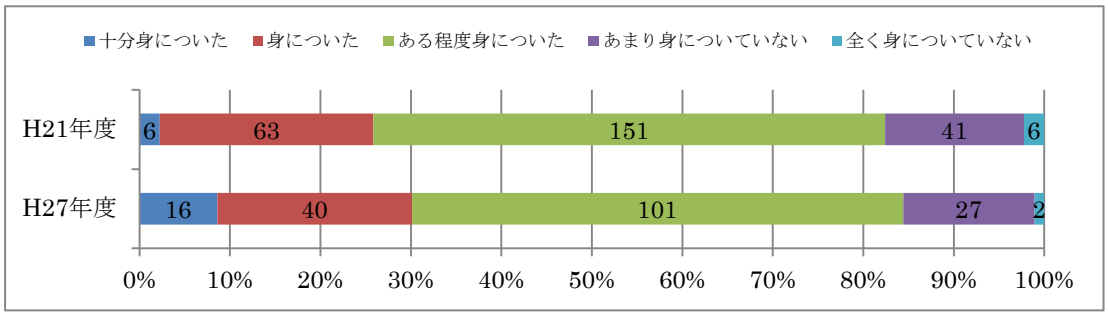
設問　福井大学で学習や研究をすることによって情報機器を活用する力がどの程度身についたと思いますか？

⇒“「十分～ある程度」身についた”は H27 年度に 90.3%で，H21 年度より 4.2%増加。



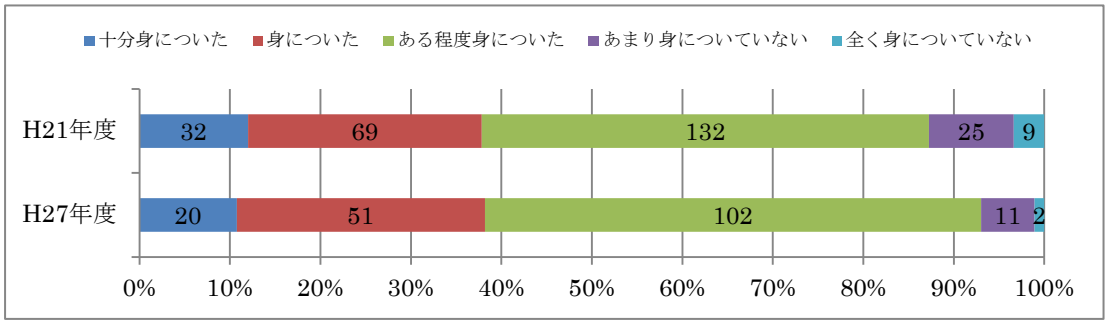
設問　福井大学で学習や研究をすることによって社会や技術の変化に対応する力がどの程度身についたと思いますか？

⇒“「十分～ある程度」身についた”は H27 年度に 84.4%で，H21 年度より 2.0%増加。



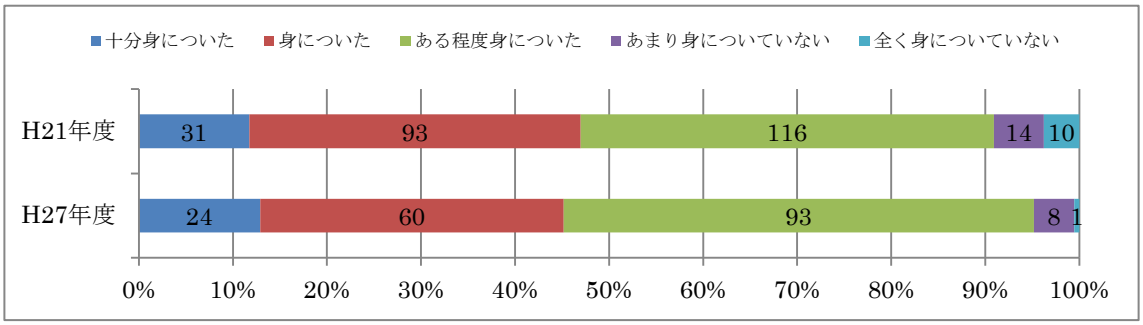
設問　福井大学で学習や研究をすることによってねばり強く仕事に取組む力がどの程度身についたと思いますか？

⇒“「十分～ある程度」身についた”は H27 年度に 93.0%で，H21 年度より 5.7%増加。



設問　福井大学で学習や研究をすることによって他の学生と協調する力がどの程度身についたと思いますか？

⇒“「十分～ある程度」身についた”は H27 年度に 95.2%で，H21 年度より 4.3%増加。



（平成 21 年度および平成 27 年度「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」結果より抜粋）

（事務局資料）

（水準）　期待される水準を上回る

（判断理由）

① 明確な成績評価基準のもと，厳格な成績評価が行われている[1)]。平成 26 年度から成績区分を４段階から５段階に変更した。JABEE 認証を取得した３学科以外でも JABEE の考え方に沿った評価を導入している[2)]。科目ごとの試験では測定が難しい能力等の修得状況を検証するため，福井大学グローバル・コンピテンシー・モデルや外部テスト（PROG テスト）を第２期に初めて実施し，海外派遣によるコンピテンシーの向上や，全国平均を上回るジェネリック・スキルの修得状況を確認した[3)]。これを含む様々な調査の結果や成績・進級・卒業状況を総合すると，学生は各学年修了及び卒業時点で相応な学力や資質・能力を身につけている[4)]。

[1)] 資料 2-1-2	：シラバスへの成績評価方法の明記（例）　P6-129
[2)] 資料 2-1-4	：JABEE 未受審学科における JABEE 対応（例）　P6-131
[3)] 資料 2-1-8	：海外派遣プログラムに参加した学生のコンピテンシー向上　P6-134
資料 2-1-9	：PROG テストによるジェネリック・スキル涵養状況の検証　P6-136
[4)] 資料 2-1-10	：成績分布及び単位修得状況　P6-138
資料 2-1-11	：工学部生の卒業率　P6-138
資料 2-1-12	：工学部生の留年率，退学率，休学率　P6-138
資料 2-1-16	：学修成果についての学生へのアンケート結果　P6-141

② 全学科において，学生の学会等での受賞実績があり，卒業研究指導，創成教育等によって学生は高い能力を修得している[5)]。また，122 名が高等学校教諭１種免許状を第２期に取得している[6)]。

[5)] 資料 2-1-13	：工学部学生の受賞や入賞　P6-139
資料 2-1-14	：創成活動を行う学生がコンテストで入賞した例　P6-140
[6)] 資料 2-1-15	：高等学校教諭１種免許状取得状況　P6-140

③ 平成 27 年度に，基礎知識，専門知識，汎用的技能などに関して卒業予定者にアンケート調査し，全項目において第１期を上回る良好な結果を得た。「外国語コミュニケーション能力」については第１期からの伸びが顕著であり，GGJ 事業の成果が現れている。それ以外の全ての項目について回答者の 80%～95%が「十分～ある程度身についた」と答えている。以上より学生は学業の成果に高く満足している[7)]。

[7)] 資料 2-1-16	：学修成果についての学生へのアンケート結果　P6-141

以上のように，学業の成果は十分に上がり学生の満足度は第１期よりも高い。これは，関係者の期待「産業界で活躍できる高度専門技術者に必要な能力の育成」等に十分応えるものであり，期待される水準を大きく上回る。

観点　進路・就職の状況

（観点に係る状況）

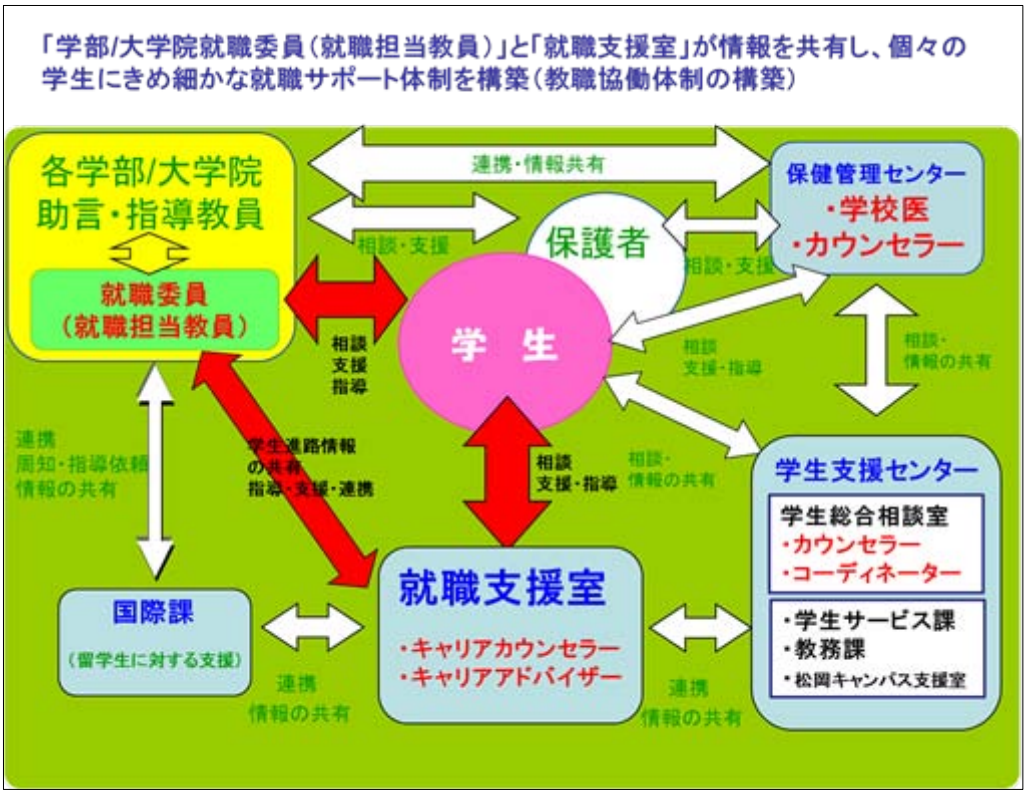
●進路就職状況，その他から判断される在学中の学業の成果の状況

【キャリア支援の例】

①　全国的に注目されている全学的な体制（**資料 2-2-1**）のもと，全学の就職支援室と工学部の就職担当委員会が連携して，細やかな支援を行っている（**資料 2-2-2**）。

　キャリア支援に対する学生の満足度は非常に高いだけでなく，第１期よりも１割程度向上している（**資料 2-2-3**）。

資料 2-2-1　総合的なキャリア支援体制



※この取組実績が注目・評価され，平成 26 年８月の首相官邸での「まち・ひと・しごと創生に関する有識者懇談会」において取組の報告が行われた。

（事務局資料）

資料 2-2-2　キャリア支援の例

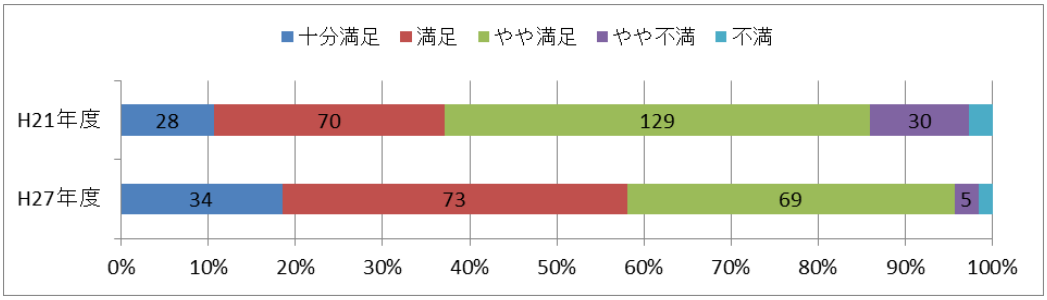


（事務局資料）

資料 2-2-3　キャリア支援に対する学生の満足度

平成 27 年度に実施した「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」に対し，回答した卒業予定者の 95.7%が，進学・就職支援（指導教員，就職支援室等）に「十分～やや満足」と答えており，キャリア支援に対する学生の満足度は高い。また，第 1 期の平成 21 年度に比べ，「十分～やや満足」と答えた学生の割合は 9.7%増加している。

設問　進学・就職支援（指導教員，就職支援室等）について，あなたはどの程度満足していますか。



（グラフ中の数値は回答者数を示す）

（平成 21 年度および平成 27 年度「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」結果より抜粋）

【就職・進学率】

① 第２期の平均の進学率は約 50%，進路決定率は約 98%である（**資料 2-2-4**）。平成 27 年度の就職率が全国の国立大学理工系学部の中で１位となったことは特筆できる（**資料 2-2-5**）。さらに特筆すべきこととして，離職率が全国平均より非常に低い（**資料 2-2-6**）。これらの実績は，学生・保護者の期待に充分応えるものである。

資料 2-2-4　卒業生の進学率・就職率・就職希望者就職率

年度	卒業者 (A)	進学者 (B)	進学率 (B/A)	就職希望者 (C)	就職者 (D)	帰国等 (E)	卒業者に対する就職率 (D/A)	就職希望者に対する就職率 (D/C)	卒業者に対する進路決定率 ((B+D+E)/A)
平成 22 年度	555	308	55.50%	246	230	2	41.40%	93.50%	97.30%
平成 23 年度	555	264	47.60%	290	283	0	51.00%	97.60%	98.60%
平成 24 年度	556	253	45.50%	300	286	0	51.40%	95.30%	96.90%
平成 25 年度	555	284	51.20%	263	258	0	46.50%	98.10%	97.70%
平成 26 年度	534	258	48.30%	274	269	2	50.40%	98.20%	99.10%
平成 27 年度	557	286	51.35%	270	266	0	47.76%	98.52%	99.10%
過去６年間平均			49.91%	過去６年間平均			48.08%	96.87%	98.12%

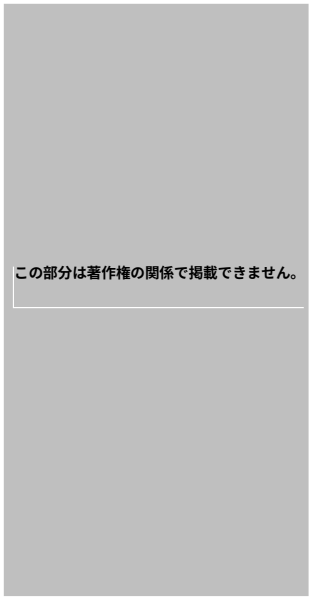
（事務局資料）

資料 2-2-5　就職率ランキング

「週刊東洋経済」によると，本学部は，平成 27 年度の就職率が，国公私立の理工系学部のなかで第４位，国立大学理工系学部の中では第１位である。「３年間就職率」は，国公私立の理工系学部のなかで第５位，国立大学理工系学部の中では第２位である。３年間就職率は，平成 25 年～平成 27 年の３年間の就職者数÷（３年間の卒業生数－３年間の大学院進学者数）で算出されている。

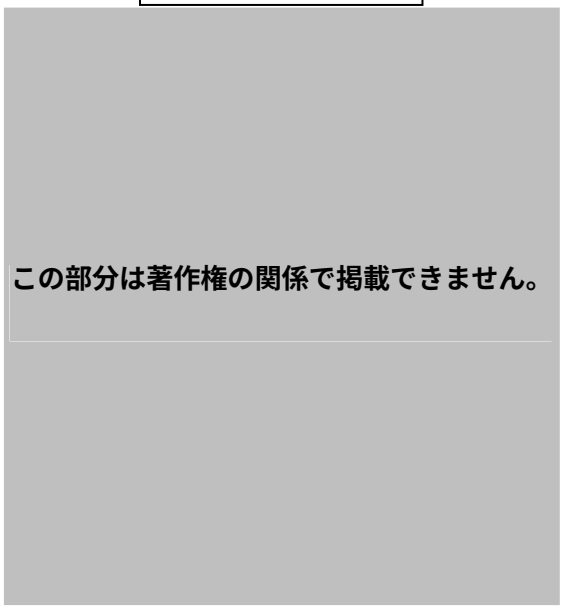
第１期と比べ，就職率ランキングの順位は大幅に向上した。

第１期最終年度（平成 21 年度）就職率



（http://toyokeizai.net/articles/-/5336）

第２期最終年度（平成 27 年度）就職率

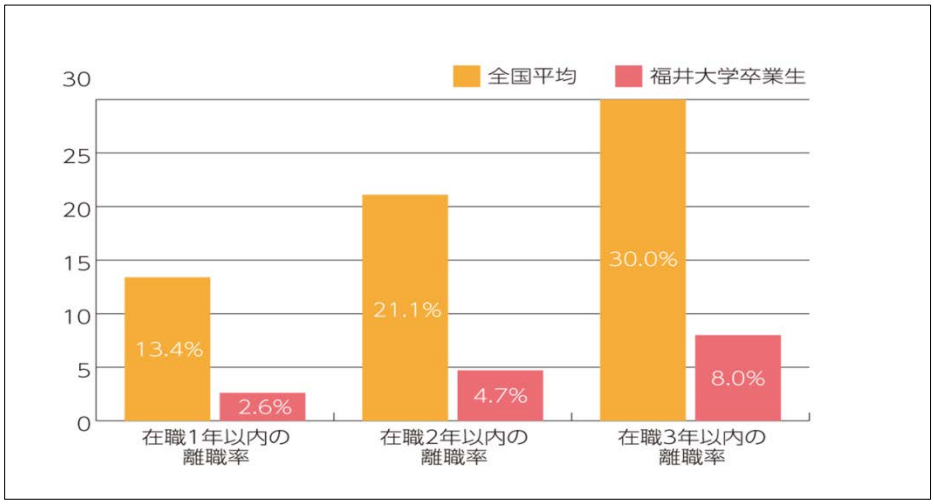


（週刊東洋経済「本当に強い大学 2016」（2016.5））

（事務局資料）

資料 2-2-6　就職後３年以内の離職率

福井大学卒業生の就職後３年以内の離職率は全国平均の約３分の１である。福井大学の卒業生の６割程度を工学部卒業生が占めるため，工学部卒業生の就職後３年以内の離職率も同様に低いと考えられる。



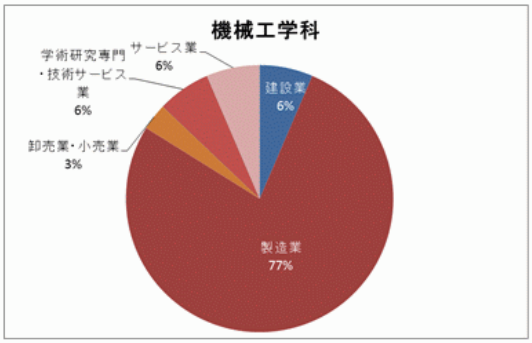
（「福井大学の教育と卒業生についてのアンケート調査（2013 年 11 月実施）」及び「新規学卒就職者の在職期間別離職率の推移（厚生労働省 HP）」から作成）

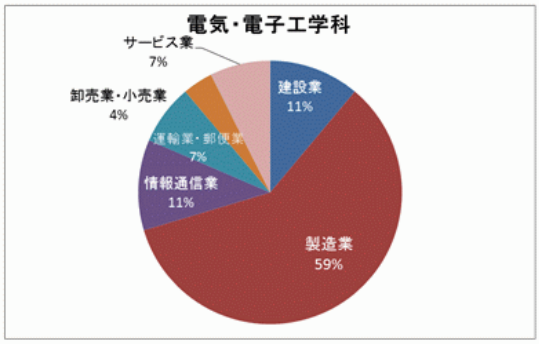
【就職先の特徴】

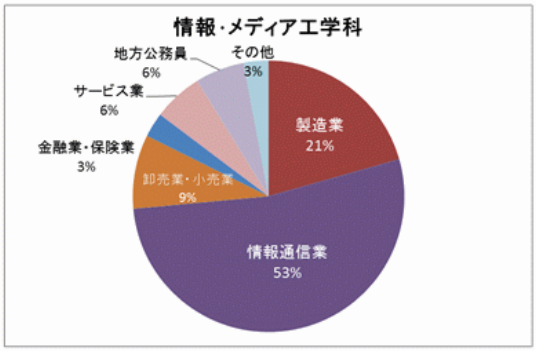
①　学科の人材養成目的と卒業生の就職先の業種・職種は整合している（**資料 2-2-7**）。県内就職率は第２期の平均で 34.4%（第１期平均より 2.2%上昇），福井県出身学生に限れば過去４年間の平均で 71.0%であり（**資料 2-2-8**），県内企業等への人材供給の使命を果たしている。

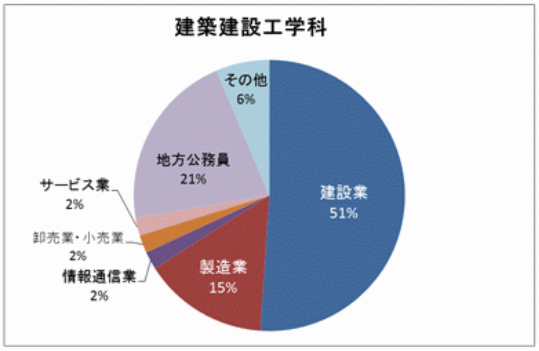
以上の実績は，専門性を活かし出身地域を中核とする広い地域で活躍できる高度専門技術者の育成を求める学生・保護者および県内企業を含む産業界等の期待に応えるものである。

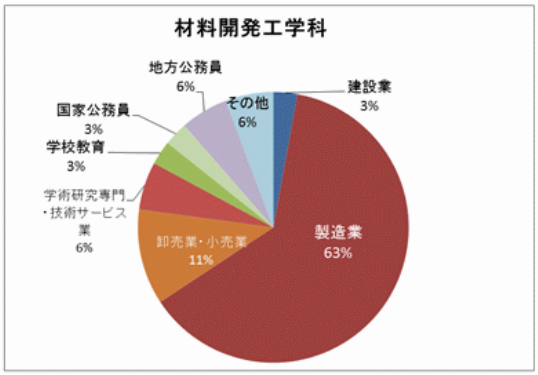
資料 2-2-7　平成 27 年度卒業生の就職先業種（学科別）

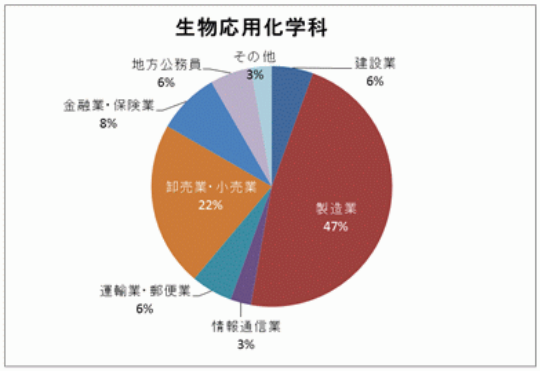


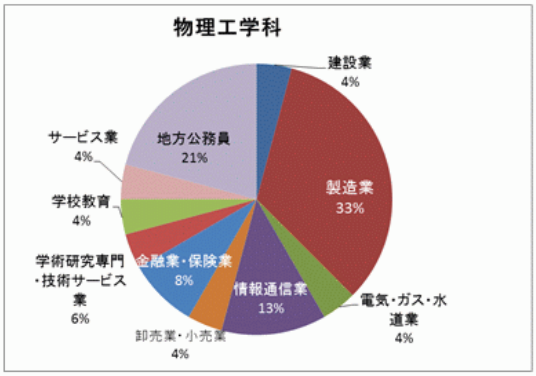


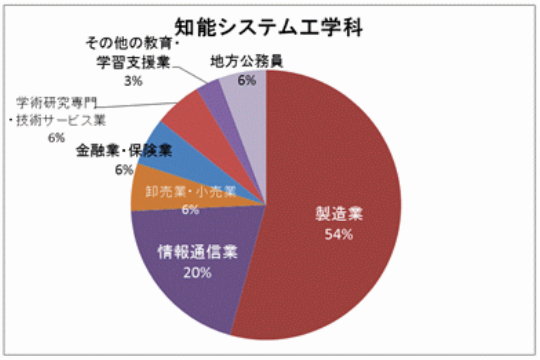












（福井大学基礎資料 2015 より作成）

（事務局資料）

資料 2-2-8　工学部学生の県内就職率

（1）工学部全学生について

年度	就職者	福井県内就職者数	福井県内への就職率
平成 22 年度	229	80	34.9%
平成 23 年度	283	108	38.2%
平成 24 年度	286	85	29.7%
平成 25 年度	258	90	34.9%
平成 26 年度	269	95	35.3%
平成 27 年度	266	90	33.8%
第２期の６年間の平均			34.4%
第１期の６年間の平均			32.2%

（2）福井県出身の工学部学生について

年度	福井県出身の就職者	福井県出身の県内就職者数	福井県出身者の県内への就職率
平成 24 年度	111	69	62.2%
平成 25 年度	100	77	77.0%
平成 26 年度	100	78	78.0%
平成 27 年度	110	75	68.2%
過去４年間平均			71.0%

（事務局資料）

●在学中の学業の成果に関する卒業・修了生及び進路先・就職先等の関係者への意見聴取等の結果とその分析結果

【工学部卒業生に対するアンケート】

①　「卒業生に対する大学教育に関するアンケート」を実施し，業務遂行上十分な水準の能力を身に付けさせるためには「英語の会話力をはじめとする国際的に活躍するコミュニケーション能力」などの教育を充実させるべきである，との結果を得た（**資料 2-2-9，資料 2-2-10**）。これは主に第１期に受けた教育に対する回答である。第２期には“入口から出口まで”の多岐にわたる改善を行い，外部評価，各種アンケート，PROG テスト，TOEIC 試験の結果などから判断して，指摘を受けた能力等について第１期を上回る教育成果があがっている（**資料 2-2-11**）。

資料 2-2-9　「卒業生に対する大学教育に関するアンケート」

平成 26 年 11 月に工学部及び工学研究科自己点検・評価委員会が「卒業生に対する大学教育に関するアンケート」を実施。平成 20 年度～平成 22 年度に工学部を卒業した者が対象。受けた教育内容が業務遂行上「十分か」を尋ねることにより，企業等において指導的な立場で活躍できる人材育成のためにさらに強化すべき教育の内容を探った。以下の回答結果は「業務上の十分性」から見た厳しい内容であるが，一方で PROG テストの結果（**P6-136 前掲資料 2-1-9，資料 2-2-10**）や就職先からの評価（**P6-157 後掲資料 2-2-12**）は良好であり，これらを総合的に踏まえ，第３期における一層の教育改善に取り組む。

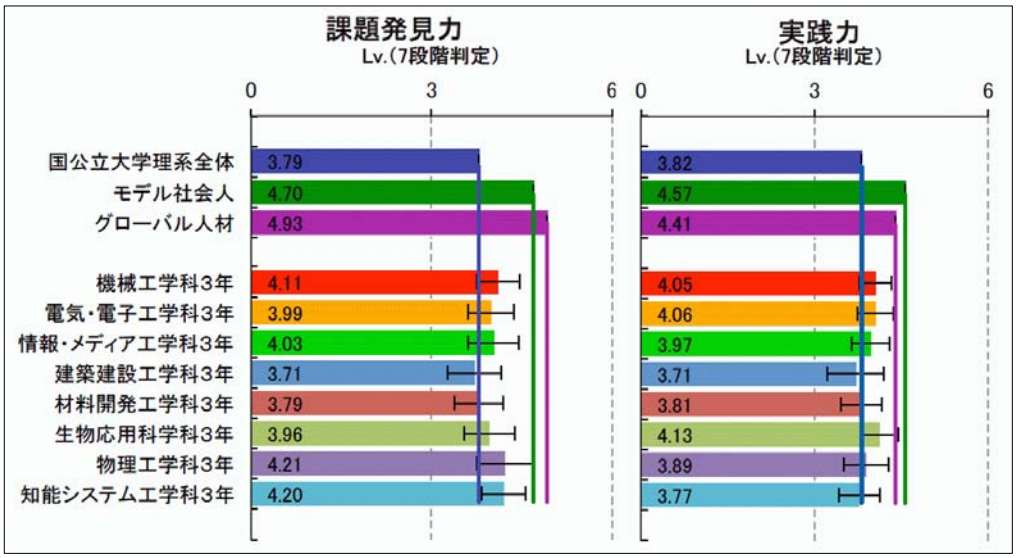
■　回答結果

	「十分」と回答した者の割合	「どちらとも言えない」と回答した者の割合	「不足」と回答した者の割合	（業務上の必要性が低いなどの理由により）「問とは無関係」あるいは「その他」と回答した者の割合
「課題の提案・報告などを効率的に記述し，説明する能力」に関して大学で受けた教育は，業務を遂行する上で十分でしたか？（回答者 179 名）	17.3%	31.3%	45.8%	5.6%
大学で身につけた「英語の会話力をはじめとする国際的に活躍するコミュニケーション能力」は，業務を遂行する上で十分ですか？（回答者 178 名）	3.4%	12.4%	51.1%	33.1%
「コンピュータ利用技術」に関して大学で受けた教育は，業務を遂行する上で十分ですか？（回答者 178 名）	28.7%	29.2%	39.3%	2.8%

（事務局資料）

資料 2-2-10　「卒業生に対するアンケート」の結果の検証

「卒業生に対するアンケート」の結果で５割弱が「不足」と回答した「課題の提案・報告などを効率的に記述し，説明する能力」と近い関係にあると考えられる「課題発見力」と「実践力」について，平成 27 年２月に実施した PROG テスト（**P6-136 前掲資料 2-1-9**）の結果を以下に示す。



（PROG 全体傾向報告書 2015（株式会社リアセック）より作成）

「モデル社会人」のスコアは，「日本で働く 35 歳までのビジネスパースンで，役職者あるいは複数の部下をマネジメントしている人，サンプル数 4000 人」（株式会社リアセックによる）のスコアであり，課題発見力や実践力は実務経験によって大きく伸びるため，現役大学生のスコアとの間に大きな開きがあると考えられる。「卒業生に対するアンケート」において「業務を遂行する上で十分か」を尋ねた結果，「不足」を指摘する回答が 46%程度を占めたことも同様な事情と考えられる。上図は，調査時点においては，工学部生の課題発見力や実践力はモデル社会人には及ばないものの，多くの学科で国立大学理系全体の平均を上回っていることを示している。

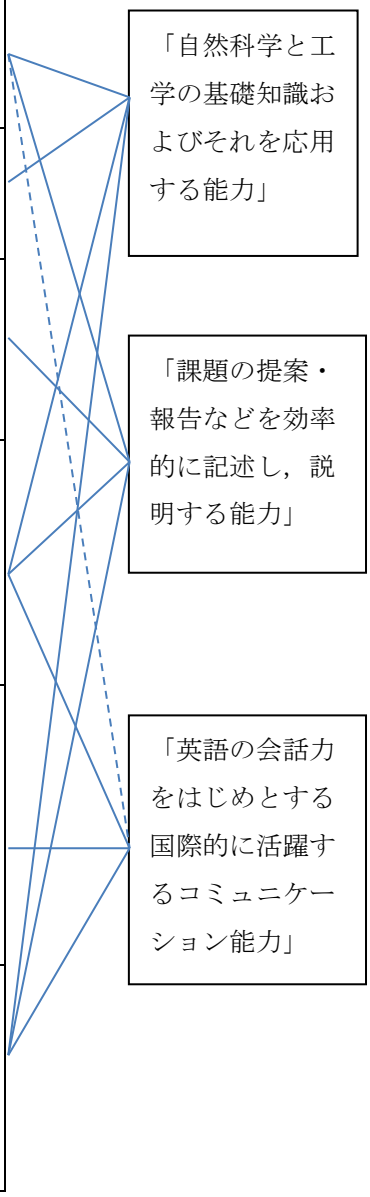
（工学部執行部分析）

（事務局資料）

資料 2-2-11　第２期に行った“入口から出口まで”の改善の取組とその成果，および向上が期待される能力

TOEIC スコアの上昇（**P6-133 前掲資料 2-1-7**），多数の海外留学者（**P6-15 前掲資料 1-1-15**），留学によるコンピテンシー向上（**P6-134 前掲資料 2-1-8**），ジェネリック・スキルの向上（**P6-108 前掲資料 1-2-25**），第１期より良好な能力等の涵養状況（**P6-141 前掲資料 2-1-16**），などのデータより，「卒業生に対する大学教育に関するアンケート」において充実を望む声が多かった事項について，第２期に改善が進み成果があがっている。

改善の取組	取組の成果
アドミッション・ポリシーや選抜方法の見直し（**P6-35～36 前掲資料 1-1-33, 34**）	アドミッション・ポリシーに合った学生の確保（**P6-38～39 前掲資料 1-1-37，38**）
基礎学力不足の学生への対応の充実（**P6-69 前掲資料 1-1-60**）	基礎学力の向上（**P6-69 前掲資料 1-1-60, P6-132 前掲資料 2-1-6，P6-141 前掲資料 2-1-16**）
創成教育の充実（**P6-94 前掲資料 1-2-16**）	問題解決能力，実践力などの向上（**P6-94 前掲資料 1-2-16, P6-141 前掲資料 2-1-16**）
アクティブ・ラーニングの導入（**P6-108 前掲資料 1-2-25**）	ジェネリック・スキルの向上（**P6-108 前掲資料 1-2-25, P6-136 前掲資料 2-1-9**）
単位の実質化（**P6-111 前掲資料 1-2-28**）	授業外学修時間の増加（第１期の 1.6 倍）（**P6-113 前掲資料 1-2-29**）
学修環境の整備（**P6-121 前掲資料 1-2-38, P6-122 前掲資料 1-2-40**）	第１期より良好な能力等の涵養状況（**P6-141 前掲資料 2-1-16**）
GGJ 採択に伴う実践的語学教育や海外派遣プログラムの充実（**P6-14～15 前掲資料 1-1-14, 15**）	TOEIC スコアの上昇（**P6-133 前掲資料 2-1-7**） 英語による実践的コミュニケーション能力，グローバルマインドの醸成，留学によるコンピテンシー向上（**P6-15 前掲資料 1-1-15, P6-134 前掲資料 2-1-8**）
キャリア教育・キャリア支援・の充実（**P6-22 前掲資料 1-1-20，P6-70 前掲資料 1-1-61，P6-148 前掲資料 2-2-1**）	ジェネリック・スキルの向上（**P6-136 前掲資料 2-1-9**） 就職率の上昇（**P6-150 前掲資料 2-2-5**） 就職先からの高い評価（**P6-157 後掲資料 2-2-12**）



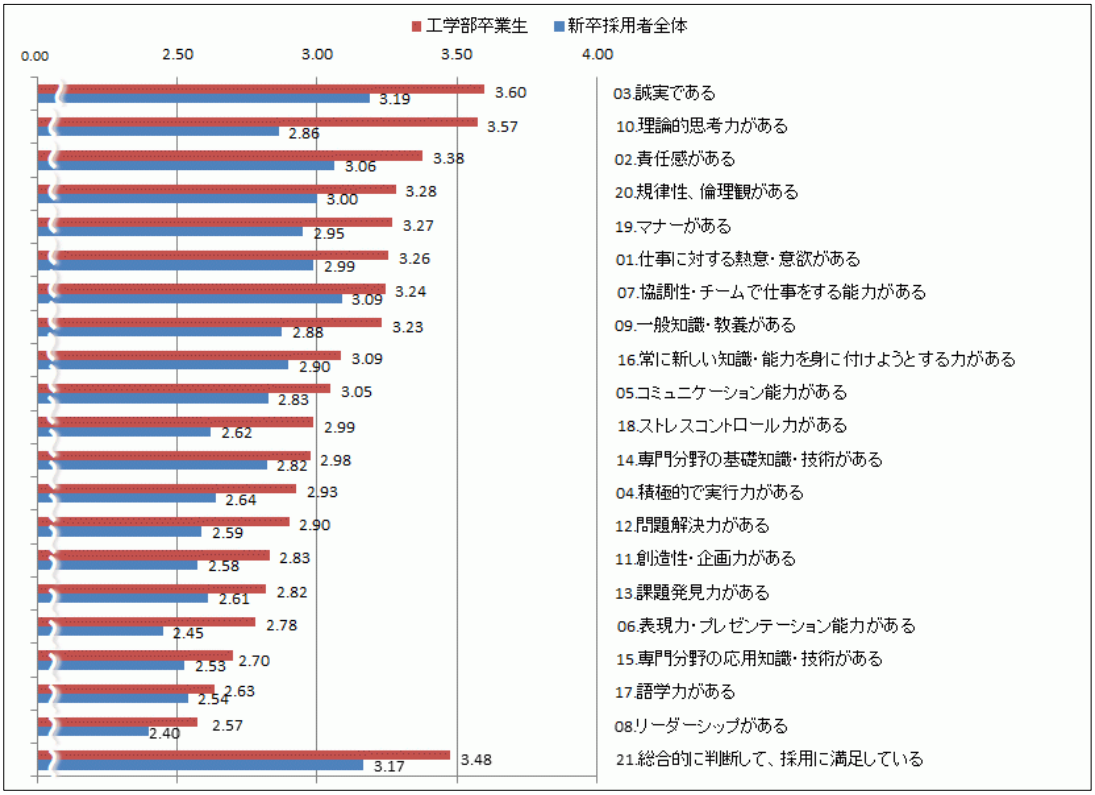
（事務局資料）

【就職先調査内容】

① 平成 25 年度に学生の就職先に対して行った調査では，社会人としての能力・資質が，新卒者全体の中で高く評価されている（**資料 2-2-12**）。

資料 2-2-12　本学工学部卒業生に関する就職先関係者からの評価

本学工学部卒業生を工学系学部卒業生一般と比較するため，本学卒業生の採用者（平成 21 年～平成 25 年）のうち本学卒業生の出身学部が工学部のみである企業からの回答を抽出した（それらの企業に就職する新卒者は工学系学部卒業生が多いと考えられる）。調査した全項目において本学工学部卒業生の評価が新卒者の平均を上回っており，教育の効果が上がって高度専門職業人の育成が進んでいることがわかる。これは就職状況が極めて良好なことと整合している。



（「福井大学の教育と卒業生についてのアンケート調査 2013」より抜粋）

（事務局資料）

（水準）　期待される水準を上回る

（判断理由）

① 全国的にも注目されている全学体制でのキャリア支援が行われ[1)]，学生の満足度は第１期より向上し非常に高い[2)]。就職率が第１期から大きく向上して平成 27 年度には国立大学理工系学部の中で１位になるなど，就職状況は非常に良好である[3)]。出身学科の人材養成目的と就職先の業種・職種は整合しており[4)]，離職率は低く[5)]，地域への人材供給の使命も果たしている[6)]。これらは，養成目的に沿った人材が育成できていること，および的確なキャリア支援が行われていることの証左である。

[1)] 資料 2-2-1	：総合的なキャリア支援体制　P6-148
[2)] 資料 2-2-3	：キャリア支援に対する学生の満足度　P6-149
[3)] 資料 2-2-4	：卒業生の進学率・就職率・就職希望者就職率　P6-150
資料 2-2-5	：就職率ランキング　P6-150
[4)] 資料 2-2-7	：平成 27 年度卒業生の就職先業種（学科別）　P6-152
[5)] 資料 2-2-6	：就職後３年以内の離職率　P6-151
[6)] 資料 2-2-8	：工学部学生の県内就職率　P6-153

② グローバル化への対応や課題の提案・説明能力等の育成をより図るべきだとする卒業生の声[7)]に応え，GGJ による実践的英語教育や海外派遣プログラムの実施[8)]，アクティブ・ラーニングの導入促進[9)]，授業外学修時間の確保[10)]などを行い，成果があがった[11)]。また，就職先企業から卒業生に対する高い評価を得た[12)]。これらは，PDCA に基づいて教育の改善が進み，第１期以上に社会の期待に応えた人材輩出が行なわれていることの証左である。

[7)] 資料 2-2-9	：「卒業生に対する大学教育に関するアンケート」　P6-154
[8)] 資料 1-1-14	：工学部の英語教育　P6-14
資料 1-1-15	：海外短期インターンシップ　P6-15
[9)] 資料 1-1-40	：FD 活動の例　P6-40
[10)] 資料 1-2-28	：授業時間外の学習を促す取組の例　P6-111
資料 1-2-38	：第２期に整備した自習室等　P6-121
資料 1-2-40	：オンライン学習環境の整備　P6-122
[11)] 資料 2-1-7	：学生の英語力の向上　P6-133
資料 2-1-8	：海外派遣プログラムに参加した学生のコンピテンシー向上　P6-134
資料 1-2-25	：アクティブ・ラーニングが多く取り入れられている科目と学生の満足度の例　P6-108
資料 1-2-29	：授業外学習時間の調査とその結果　P6-113
資料 2-1-9	：PROG テストによるジェネリック・スキル涵養状況の検証　P6-136
資料 2-1-16	：学修成果および教育への満足度についての学生へのアンケート結果　P6-141
[12)] 資料 2-2-12	：本学工学部卒業生に関する就職先関係者からの評価　P6-157

以上のように，本学部の教育内容・体制およびキャリア支援体制は，学生・保護者および企業等の期待に十分応えており，その程度は期待される水準を大きく上回る。

Ⅲ 「質の向上度」の分析

（1）分析項目Ⅰ 教育活動の状況

① 平成 24 年度採択の GGJ 事業により，実践的英語教育を充実させ，多数の海外派遣プログラムを実施した結果，平成 26 年度入学生の TOEIC スコアの平均が入学後１年半で 60 点以上伸びるなど，学生の英語力が第１期より大きく向上した[1)]。語学センターと工学部が協働して英語 PBL を開始し，好評を得ている[2)]。JABEE 認証を取得したプログラム数が第１期から倍増[3)]して教育課程の国際通用性が向上した。以上のように，グローバル化が一気に加速したことは，重要な質の変化である。

1) 資料 2-1-7	：学生の英語力の向上 P6-133
資料 1-1-13	：「経済社会の発展を索引するグローバル人材育成支援」事業への採択 P6-14
資料 1-1-14	：工学部の英語教育 P6-14
資料 1-1-15	：海外短期インターンシップ P6-15
2) 資料 1-2-12	：共通教育と専門教育の協働で実施した英語 PBL P6-88
3) 資料 1-1-51	：JABEE 認証の取得 P6-58

② GP 等により開始したプログラムを支援期間終了後も学内資金で継続し，数学の基礎力が第１期より向上するなどの成果を上げている[4)]。また，習熟度別クラス編成や補習授業の拡大，自主的学習スペースの増設やオンライン学習環境の整備などの取組の結果[5)]，授業外学修時間が第１期の 1.66 倍に向上した[6)]。以上のことは重要な質の変化である。

4) 資料 1-1-60	：工学部における基礎学力不足学生への対応「学士力涵養の礎となる初年次教育の充実」 P6-69
資料 2-1-6	：数学達成度調査の結果（正答率） P6-132
資料 1-2-37	：低学年における学習意欲向上策とその効果 P6-119
5) 資料 1-2-38	：第２期に新設した自習室等 P6-121
資料 1-2-39	：数学学習支援室の利用者数の推移 P6-121
資料 1-2-40	：オンライン学習環境の整備 P6-122
6) 資料 1-2-29	：授業外学習時間の調査とその結果 P6-113

③ 第２期中にパワーランチ・ミーティング等の新たな FD 活動を開始し[7)]，教員の好評を得ている[8)]。教員の教育力は第１期より向上している[9)]。さらに，学生 FD も開始した[10)]。このことは重要な質の変化である。

7) 資料 1-1-40	：FD 活動の例 P6-40
8) 資料 1-1-41	：FD 活動に対する教員の評価 P6-43
9) 資料 1-1-45	：教員の教育力向上を裏付ける学生アンケート結果 P6-50
10) 資料 1-1-53	：教育に関する全学的な国際外部評価を受けて開始した学生 FD 活動 P6-60

（２）分析項目Ⅱ　教育成果の状況

① 基礎知識，専門知識，汎用的技能などについて卒業予定者にアンケート調査を行い，第１期を上回る良好な結果を得た[1)]。特に「外国語コミュニケーション能力」は第１期から顕著に伸び，TOEIC スコアの向上[2)]，海外派遣によるコンピテンシーの向上[3)]と併せ GGJ 事業の成果が大きくあがった。また，ジェネリック・スキルを測定する外部テストを実施し，学年が上がることでリテラシーやコンピテンシーが上昇し，国公立大学の理系学生の平均を超えることを確認した[4)]。このことは重要な質の変化である。

[1)] 資料 2-1-16	：学修成果についての学生へのアンケート結果　P6-141
[2)] 資料 2-1-7	：学生の英語力の向上　P6-136
[3)] 資料 2-1-8	：海外派遣プログラムに参加した学生のコンピテンシー向上　P6-134
[4)] 資料 2-1-9	：PROG テストによるジェネリック・スキル涵養状況の検証　P6-136

② 全国的にも注目される充実したキャリア支援が行われ，学生の満足度は第１期より向上した[5)]。平成 24 年度より独自の体系的なキャリア教育プログラムが始まり[6)]，就職率が第１期から大幅に向上して平成 27 年度には国立大学理工系学部の中で１位になるなど，第２期を通して就職状況は非常に良好である[7)]。県内への就職率が第１期より 2.2%向上するなど，地域への人材供給の使命も一層果たしている[8)]。以上のことは重要な質の変化である。

[5)] 資料 2-2-3	：キャリア支援に対する学生の満足度　P6-149
[6)] 資料 1-1-61	：みらい協育プログラム　P6-70
[7)] 資料 2-2-4	：卒業生の進学率・就職率・就職希望者就職率　P6-150
資料 2-2-5	：就職率ランキング　P6-150
[8)] 資料 2-2-8	：工学部学生の県内就職率　P6-153

７．工学研究科

Ⅰ　工学研究科の教育目的と特徴　・・・・・７－　２

Ⅱ　「教育の水準」の分析・判定　・・・・・７－　４

分析項目Ⅰ　教育活動の状況　・・・・・７－　４

分析項目Ⅱ　教育成果の状況　・・・・・７－136

Ⅲ　「質の向上度」の分析　・・・・・・・・・７－162

Ⅰ　工学研究科の教育目的と特徴

１．教育の目的

（１）教育活動を実施する上での基本方針

本研究科の教育理念は，高度な専門能力に加えて，創造力，批判力，自己学習力および伝達力を併せた総合能力，すなわち，人間力を持つ高度専門技術者を育成し，もって地域社会および国際社会の持続的発展に寄与することである。この理念に沿って教育活動を実施する。

（２）達成しようとする基本的な成果

博士前期課程：確かな専門性と高い倫理観を有し，自然や環境と調和した人間社会の豊かな発展に貢献できる高度専門技術者を養成する。

博士後期課程：専門分野における深い知識とともに，守るべき倫理や社会的責任を理解し，起業の可能性を追求する意欲や事業の開拓などに取組む積極性をもった高度専門技術者・研究者を養成する。

（３）大学の基本的な目標との関連

① 本学の理念のうち「人々が健やかに暮らせるための科学と技術に関する世界的水準での教育・研究を推進し，地域，国及び国際社会に貢献し得る人材の育成と，独創的でかつ地域の特色に鑑みた教育科学研究，先端科学技術研究」に関連している。

② 福井大学の長期目標のうち，長期目標１「21 世紀のグローバル社会において，高度専門職業人として活躍できる優れた人材を育成」，及び長期目標３「優れた教育，研究，医療を通して地域発展をリードし，豊かな社会づくりに貢献」に関連している。

（４）教育研究等の質の向上に関する目標との関連

① 中期目標（教育内容及び教育の成果等に関する目標）の「基本目標「21 世紀のグローバル社会において，高度専門職業人として活躍できる優れた人材を育成」を目指して，国際的にも通用する質の高い教育を実施する」と関連している。

② 中期目標（教育の実施体制等に関する目標）の「質の高い教育を実現するため，教育内容・方法や成果を点検・評価するシステムを構築し，不断に改善を行う教育実施体制を整備する。」と関連している。

２．組織の特徴

工学研究科は昭和 40 年に修士課程６専攻で発足したが，時代と地域の要請に応じて改組・再編・拡充を重ね，現在では博士前期課程（以下「前期課程」という。）10 専攻（内２つは独立専攻），博士後期課程（以下「後期課程」という。）１専攻を有し，工学のほぼすべての分野を網羅した全国でも有数規模の工学研究科になっている。直近の改組は平成 25 年に行われ，定員を見直すとともに，後期課程４専攻を「総合創成工学専攻」1 専攻に再編し，さらに前期課程の独立専攻「ファイバーアメニティ工学専攻」を「繊維

先端工学専攻」に再編した。もうひとつの独立専攻「原子力・エネルギー安全工学専攻」と合わせ，これら２独立専攻は地域貢献の核となっている。平成 18 年には，教員の所属を工学研究科とする組織整備を行った。

学内には，附属国際原子力工学研究所や遠赤外領域開発研究センター等，工学研究科に関連性の強い組織があり，これらに所属する教員は，工学研究科兼任教員として研究指導も含めた大学院教育を分担している。

３．入学者の状況

入学試験は，社会人・外国人留学生特別選抜を含む一般入試の他に，前期課程では推薦入試も実施して多様な学生の修学機会を提供している。前期課程の入学定員は 253 名で，外国人留学生と社会人を除くと，志願者・入学生のほとんどは本学工学部出身者である。平成 27 年５月現在の在学者中，外国人留学生の割合は 6.8％である。後期課程の入学定員は 22 名で，外国人留学生と社会人を除くと，志願者・入学生のほとんどは本学工学研究科の前期課程出身者である。平成 27 年５月現在の在学者中，社会人は 53.5％，外国人留学生は 14.0％である。

［想定する関係者とその期待］

- **大学院生・保護者**：学卒者以上の専門知識・技術を修得し，高度専門技術者・研究者として社会に貢献する。後期課程学生については，特に深い専門性と実践力をもって研究開発等の現場で活躍する。
- **就職先企業等**：研究開発等の現場において，中核的あるいは指導的立場で活躍できる高度専門技術者等の人材を育成する。
- **地域社会**：出身地域を一つの柱とする広い地域において，高度な専門性を活かし社会の発展に貢献できる人材を育成する。

Ⅱ　「教育の水準」の分析・判定

分析項目Ⅰ　教育活動の状況

観点　教育実施体制

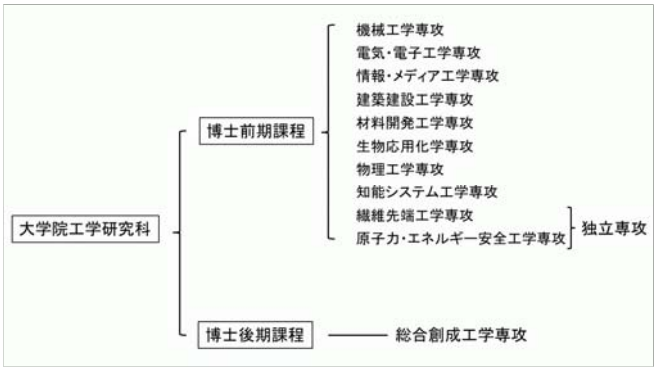
（観点に係る状況）

●教員組織や教育体制の工夫とその効果

【教育プログラムとしての実施体制】

①　大学院は前期課程 10 専攻と後期課程 1 専攻から構成され，「教育委員会」が関連委員会等と連携して両課程の教育プログラムの実施を統括しており，工学研究科長のマネジメントのもと，「教務学生連絡委員会」が全体調整や達成度管理を行っている（**資料 1-1-1, 2**）。

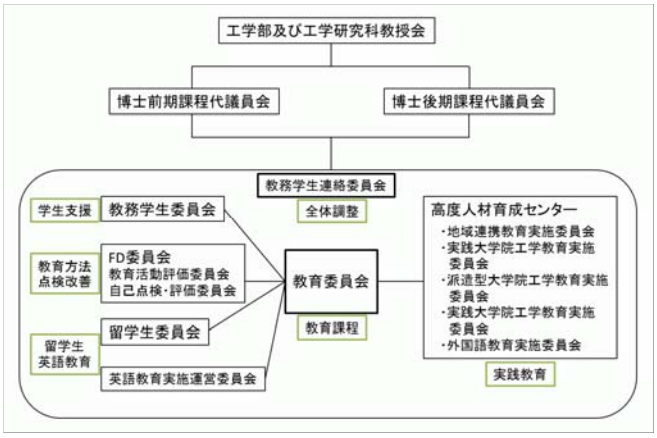
資料 1-1-1　工学研究科の構成



（事務局資料）

資料 1-1-2　教育プログラムの実施体制

工学研究科長が前期課程および後期課程の代議員会の長を務め，さらに学務担当の副工学研究科長が教務学生連絡委員会の長を務めることで，責任の所在が明白なガバナンス体制である。



委員会名	所掌事項
教務学生連絡委員会	教務・教育関係委員会の連携（全体調整，情報共有，達成度管理など）。学務担当副研究科長が委員長となり，研究科長，教育・学務関係の委員会の長がメンバー。
教務学生委員会	教務，学生生活に係る事項
教育委員会	専門科目の改廃／前期課程の共通科目／工学研究科の留学生の教育／その他委員会が必要と認めた教育に関する事項

留学生委員会	留学生の受入れ，履修指導，生活指導，進路指導，その他必要と認められる事項
FD 委員会	教育の理念，目的，目標の周知と，それらを達成するための教育方法の研究・改善と教育の質の向上
教育実習委員会	教員免許状および教育実習に関する事項
英語教育実施運営委員会	英語教育／大学院留学生のための英語による特別コース運営／外国人英語教師の充足／その他英語教育の実施に関する事項
インターンシップ実施委員会	インターンシップへの参加，インターンシップの履修指導，インターンシップの単位認定，その他インターンシップに関すること
グローバル人材育成推進事業実施委員会	学生の海外派遣およびそれに伴う単位認定，その他グローバル人材育成推進事業のプログラム実施に関すること
教育技法評価委員会	教員の採用，昇格における模擬授業による教育技法評価
高度人材育成センター ・地域連携教育実施委員会 ・修学・研究支援教育実施委員会 ・実践大学院工学研究実施委員会 ・派遣型大学院工学教育実施委員会	 PBL プロジェクトの選考，経費配分，事後評価 TA・RA の選考，経費配分，学生アンケート 創業型実践大学院工学教育，産業現場に即応する実践道場 長期インターンシップ

（事務局資料）

② 工学研究科に「高度人材育成センター」を設置し，GP 等の外部資金によって開始した優れた取組を，随時見直しながら，自主財源で全て継続実施している（**資料 1-1-3**）。

資料 1-1-3　高度人材育成センターと GP 事業等の継続実施

■ **概要**

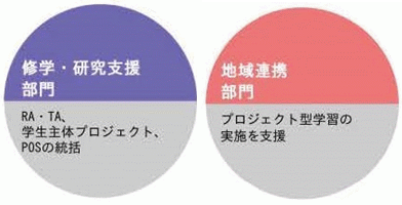
文部科学省「組織的な大学院教育改革推進プログラム」（大学院 GP）に採択され，平成 22 年度の事後審査において４段階中の最高評価を得た「学生の個性に応じた総合力を育む大学院教育」（平成 19～21 年度）の開始に伴い設置。他の外部資金で開始した教育プログラムの支援終了後の継続実施を担う部門も加え，大学院における履修指導から様々な実践的教育の実施までの重要な実務を担う。

■ **高度人材育成センターの部門と担当事業**

部門	担当する事業等
地域連携部門	プロジェクト型学習（PBL）の実施支援
修学・研究支援部門	TA･RA の選考，２年間を見通した履修計画である Program of Study (POS)の策定，複数教員による集団指導体制 Program of Study - Committee (POS-C)の構築，修了時の学生アンケートの実施と結果の集計・分析，などを支援
外国語教育部門	工学研究科の専門英語教育の実施支援
派遣型大学院工学教育部門	長期インターンシップの実施支援
実践大学院工学教育部門	本学「産学官連携本部」と連携して実施する「創業型実践大学院工学教育」(前期課程の MOT 教育プログラム）および「産業現場に即応する実践道場」(後期課程の実践教育プログラム)



■　GP 等の外部資金で開始した優れた取組の，高度人材育成センターによる継続実施

GP 等名称	内容
「学生の個性に応じた総合力を育む大学院教育」（平成 19～21 年度） ※文部科学省「組織的な大学院教育改革推進プログラム」（大学院 GP）に採択 ※平成 22 年度の事後審査で４段階中の最高評価 ※平成 22 年度以降は自主財源で継続実施（高度人材育成センター修学・研究支援部門および地域連携部門が担当） 	「多様な背景や目的を持つ学生に，その総合力（専門力・応用力・即戦力）を最大化する個性に応じた教育を行い，人間社会の豊かな発展に貢献する高度な人材を育成すること」ことを目的とする。 そのため，高度人材育成センターを設置し，主に以下の取組を行う。 ①　カリキュラムのオーダーメード化とその組織的検証： 主指導教員と２名以上の副指導教員からなる Program-of - Study Committee（POS-C）を各学生に設け，学生と共にその経歴や希望などに即した教育研究指導計画を立案し，その学生に相応しい履修を決定する集団指導を行う。途中段階と修了時に評価を行い，評価結果の検証およびその結果に基づいた改善を行う。 ②　プロジェクト型学習（PBL）等の実施： 設定されたテーマに関し学生が個人またはグループで自ら調べ，必要な実験や調査を行い，レポートにまとめプレゼンテーションを行う。PBL プロジェクトには，審査の上，予算を配分する。 ③　TA・RA の選考と予算配分
「地域産業との連携による派遣型高度人材育成」（平成 18 年度～平成 22 年度） ※派遣型高度人材育成共同プランに採択（平成 20 年度以降「産学連携による実践型高度人材育成事業」） ※平成 23 年度の最終審査で A 評価（４段階中の２番目） ※平成 23 年度以降は自主財源で継続実施（高度人材育成センター派遣	長期インターンシップを実施する。 目的： ・大学と産業が協同して行う大学院教育を通して，学生自らが，専門とする分野の社会的位置づけを知ると共に，現実的課題の中から問題を見つけ出し，取り組む能力のある高度専門人材を育成する。 ・大学や研究機関等において産業の現状を理解し，将来を見通せる指導的高度専門人材を育成する。 特徴： ・長期間のため企業が抱えている実践的な課題に挑戦できる。 ・大学と企業の連携プレーで実現し，大学院カリキュラムとして高度知識を修得できる。 ・専門分野の位置づけを社会的活動全体の中で体得できる。

型大学院工学教育部門が担当） 	・現実的課題の中から自主的に問題点を見つけ，取り組む能力を身につける。 ・カリキュラムの一つであり，単位を修得できる。 ・派遣先指導者と連携しながら，指導教員，実施委員の教員などがバックアップしてくれる。
文部科学省特別教育研究経費（概算要求）（平成 18 年度～平成 20 年度） ※平成 21 年度以降は自主財源で継続実施（高度人材育成センター実践大学院工学教育部門が担当） 	前期課程の MOT 教育プログラムとして「創業型実践大学院工学教育」を実施する。 目的： アントレプレナーシップ（起業家精神）を備え，ビジネス感覚や実践的スキルを有する視野の広い人材を育成する。 特徴： 研究シーズを基に技術移転を意識した「ものづくり」を実践する場として，インキュベーションラボファクトリー（ILF）を整備しており，その場を活用して教育を行う。 カリキュラム： 教育の核として提供する「技術経営カリキュラム」は，学外の企業経営者を講師に招いて行う MOT を基盤とした知的財産，マーケティング，マネジメントなどの講義と，ビジネスプラン作成や試作・試販売，中期インターンシップなどの実習で構成されており，講義科目６単位以上，実習４単位以上の，計 10 単位以上を修得した者には，副専攻修了者として「技術経営カリキュラム修了証」を学長名で授与する。
文部科学省特別教育研究経費（概算要求）（平成 22 年度～平成 24 年度） 第２期に採択 ※平成 25 年度以降は自主財源で継続実施（高度人材育成センター実践大学院工学教育部門が担当） 	後期課程の実践教育プログラムとして「産業現場に即応する実践道場」を実施する。 目的： 広い視野を持ち，自ら考え行動していく自律型産業人材を育成する。 特徴： 地域産業界の幅広い分野から課題解決型の実践現場の提供を受けるとともに，技術者や経営者の方々を教育現場に講師として迎えることで，技術経営とモノづくりが一体化したプログラムを実現している。 カリキュラム： 教育の核となる「実践道場カリキュラム」は講義６科目と実習４科目から構成されます。講義では，産業界の講師も迎え，講義と演習，グループ討議と発表を取り入れて，広い視野とコミュニケーション能力を養成する。実習では，企業現場での問題や課題を検討・解決する産学連携実践インターンシップや，起業の模擬経験およびコンサルテーションなどにより，自律型産業人材に求められる能力を産業現場あるいはそれに近い環境で養成する。カリキュラムの修了者（講義６単位以上，実習４単位以上の，計 10 単位以上を修得した者）には，副専攻として「産業技術エキスパート」の称号を学長名で授与する。

（事務局資料）

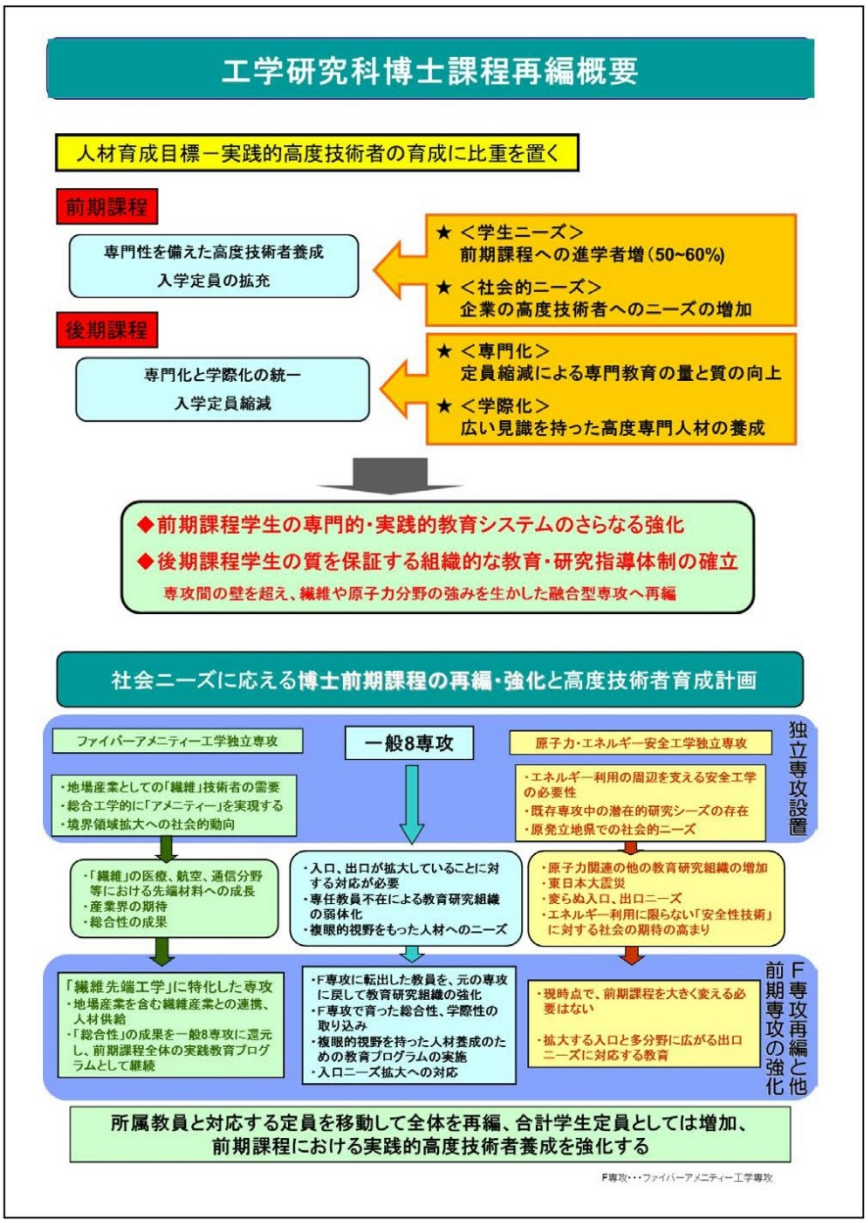
【組織体制】

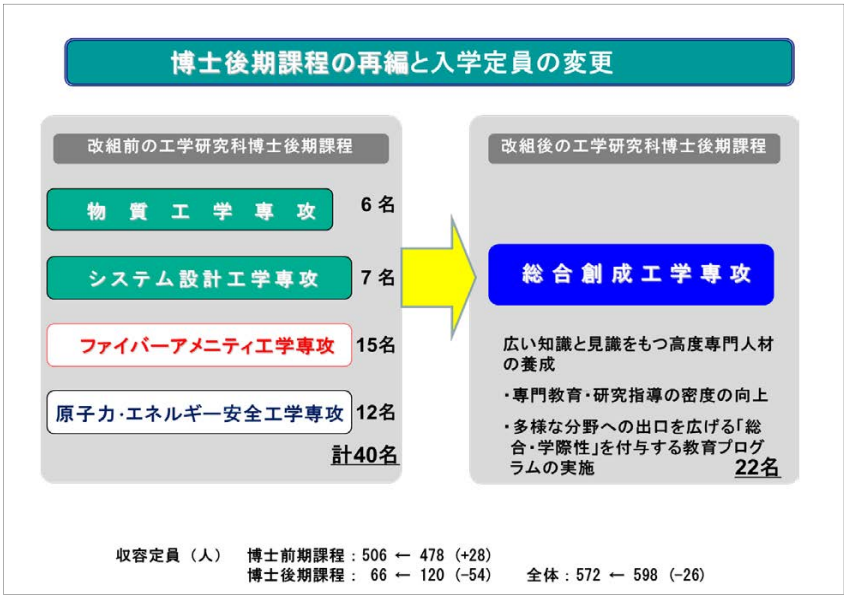
平成 25 年度に，前期課程，後期課程ともに社会ニーズを踏まえて改組を行った。

前期課程では，産業界の人材需要を踏まえ入学定員を 14 名増やすとともに，外部評価やニーズ調査等を踏まえ，ファイバーアメニティ工学専攻を繊維・材料系に特化した「繊維先端工学専攻」に改組した（**資料 1-1-4，P7-68 後掲資料 1-1-61**）。

後期課程では，企業で活躍できる博士人材のニーズに対し，教育・研究指導の密度を上げて対応するため，入学定員を 40 名から 22 名に減らし，４専攻を改組して「総合創成工学専攻」の１専攻に集約した（**資料 1-1-4**）。

資料 1-1-4　工学研究科改組の概要（平成 25 年度）




博士後期課程の再編と入学定員の変更
改組前の工学研究科博士後期課程
物 質 工 学 専 攻
6名
システム設計工学専攻
7名
ファイバーアメニティ工学専攻
15名
原子力･エネルギー安全工学専攻
12名
計40名
改組後の工学研究科博士後期課程
総 合 創 成 工 学 専 攻
広い知識と見識をもつ高度専門人材の養成
・専門教育・研究指導の密度の向上
・多様な分野への出口を広げる「総合・学際性」を付与する教育プログラムの実施
22名
収容定員（人）　博士前期課程：506 ← 478（+28）
博士後期課程：　66 ← 120（-54）　全体：572 ← 598（-26）

（事務局資料）

【国際性】

① 工学部・工学研究科の取組を中心として，平成 24 年度「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」事業（以下「GGJ 事業」という。）に東海・北陸地区の国立大学で唯一採択された（**資料 1-1-5**）。海外派遣プログラムを単位化し，多数の学生が参加して好評を得るとともに，コンピテンシーが向上するなど，成果があがった（**資料 1-1-6, P7-115 後掲資料 1-2-21**）。

資料 1-1-5　「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」事業への採択



グローバル人材育成推進事業　Type B

Project for Promotion of Global Human Resource Development

福井大学（学部入学定員：855人、大学院入学定員：388名）
［取組学部・研究科等：○工学部（555人），工学研究科（279人）］
【構想の目的・育成するグローバル人材像】
歴史や文化が異なる地域においても、世界の人々と協働して生き生きとした暮らしづくりに貢献できる高い専門能力と創造力・実践力を有した技術者「Global IMAGINEER」の育成を目的とする。
【構想の概要】
①「実践的グローバル人材育成プログラム」の開発と実施　②「語学センター」による実践的英語教育の実施　③国際的通用性を持つ教育課程の実現。この3本柱を核として、工学部・工学研究科を中心に21世紀グローバル社会において高度専門職業人として活躍できる優れた人材を育成し、国際的にも通用する質の高い教育の実施を目指す。

■ 教育課程の国際通用性の向上

○ 教育課程の国際通用性の向上のための取組
キャップ制や単位の実質化、そのための専門教育も含めた時間枠の見直しを行い、現代社会の抱える困難な課題に立ち向かうことができるような総合的な科目のコア・カリキュラム化を実施する。

○ 戦略的な国内外への教育情報の発信
大学のグローバル化の促進のため、公表が望まれる教育情報の選択と公表を行い、必要な項目の多言語化を進め、戦略的な国内外への発信について全学的体制づくりを行う。

○ 事務体制のグローバル化
国際戦略の推進のため、専門性を備えたコーディネーターを登用する。語学教育・研修に職員を参加させ、SD及びFD研修を実施、職員の国際化に対する意識啓発に繋げる。

〈実践的な海外研修プログラムを整備・拡充〉

■ グローバル人材として求められる能力の育成
－学生が修得すべき能力および実現方策－

○ 実践的グローバル人材育成プログラム
学術交流協定校、留学生同窓会海外支部、海外進出県内企業と連携して実施してきた海外研修プログラムの実績を発展させ、グローバルな環境でのアクティブラーニングを通じ、異文化の中で、各自の強みを活かしつつ協働、協業し、自己の存在価値を発揮できる力を獲得する。

○ 実践的英語教育
語学センターが中心となり、社会に出て実際に「使える」専門分野での英語力を向上させる。

○ 国際通用性を持つ教育課程
海外先進大学のベンチマーキングにより、国際的水準での教育課程を実現し、地方中小総合大学における国際的質保証モデルを構築する。

■ 語学力を向上させるための入学時から卒業時までの一体的な取組

○ 入試における中等教育段階までの外国語力・留学経験等の適切な評価
TOEFL等のスコアの入試への活用や、入学志願者の留学経験等の適切な評価については、実際に導入している大学を調査し先行事例を研究するとともに、活用することによって生じる利点や課題などを整理し、全学的な視点で検討する。

○ 効果的な語学教育及び教育体制
語学センターでは、現在のEFL研究の知見を基に、"Integrated Skills Based on Vocabulary Building"により英語プログラムを開発し、統一的、総合的で実践的な英語教育を共通教育において展開する。

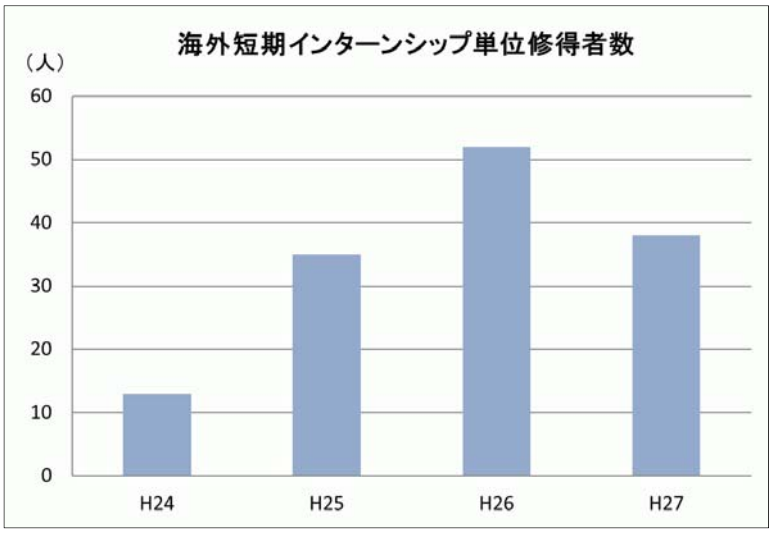
（http://www.u-fukui.ac.jp/wp-content/uploads/kousou_ja.pdf）

（福井大学ウェブサイト「国際交流」ページより）

資料 1-1-6　海外短期インターンシップ

GGJ 事業により，平成 24 年度に海外短期インターンシップに係る自由科目を開講，翌年度には規模を拡大して選択科目として前期課程で４科目（「大学院海外短期インターンシップⅠ～Ⅳ」），同後期課程で３科目（「大学院海外短期インターンシップ A,B,C」）を開講した。また，これらの科目の開講に合わせ，多数の海外プログラムを用意した。

■　大学院海外短期インターンシップ単位修得者数



■　大学院海外短期インターンシップ単位修得者の声（抜粋）

所属・学年 派遣先 派遣期間・プログラム類型	学生の声
システム設計工学専攻 後期課程３年 スィーパトゥム大学（タイ） 平成 25 年 9/5～9/19 語学研修型	異文化交流などを通して，たくさんのタイ人と交友関係を築くことができ，今後もこの関係を維持していこうと思う。中長期的ではあるが，将来的にタイへの就職を考えており，タイへ伺うごとにタイの面白さを感じさせられる。タイという国が，東南アジアの中心国の一国であり，今後の日本および東南アジアの発展のカギを握っている国であると考えているために，今回出会った学生や今回タイで体験したことを活かして，今後の進路・人生において活用したいと思う。
電気・電子工学専攻 前期課程２年 スタンフォード大学 （アメリカ） 平成 27 年 5/8～5/25 研究・発表型	今回の留学では，大規模な学会に参加したことや超一流と呼ばれる大学と交流したことで，先に進んでいる人たちがどのようなことを行っており，どのような技術開発をしているのかを知った。これにより，自分が世界に対してずいぶん遅れをとっていることが分かり，エンジニアとしての技術・知識を磨くことの必要性を強く感じた。そのためより一層エンジニアになろうという気持ちが強くなった。
電気・電子工学専攻 前期課程２年 ミュンヘン工科大学（ドイツ） 平成 27 年 6/19～7/5 研究・発表型	実際に，海外に行き，自分の目で世界情勢を感じることで，グローバルな視点を養った。現地で異文化を体験したことで，日本人としての誇りを持ち，且つ，グローバルな知識を身に付けた人材になろうと異文化に対する知識の向上を心掛けようと思う。交流前より，学生の間にできる社会貢献や社会人になった後でできる社会貢献について考え始めた。まずは，日本という恵まれた環境の中で過ごせている自分の現状を理解し，その中で自分のできることを考える。日本で伝えられている現地のことと，実際のことを自分の目で見て，世界問題に関心を持ち，

	社会貢献のことを少し考え始めている。また，留学中は自分を見つめ直す機会も多々あり，自分を持つことの大切さを知った。「自分を成長させるのに大切なことは，しっかりと目標を持って，それに向かって計画的にことを進めていくこと。短い人生，なんとなく生きていると，なんとなくの人生のまま，あっという間に終わってしまう」という話を聞いたことがあったので，そのことを今回プログラムを通して再確認した。
生物応用化学専攻 前期課程１年 マラヤ大学（マレーシア） 平成 27 年 9/4～9/19 研究・発表型	研究の面でも新しい技術を習得した点で成長できたと感じています。しかし，それよりも単身で外国で過ごしたという経験は自分にとってとても貴重な経験でした。全て自分で会話をし，自分で解決していくことが非常に良い体験でした。自分も日々研究しているつもりでしたが，海外の学生はプロ意識が高く，その上非常に学習意欲が高いのでとても刺激になりました。また，そのため研究職に進みたいという願望が強くなりました。そして，私の行ったマラヤ大学はマレーシアで就職というよりも自分を高く評価してくれるところであれば海外も視野に入れているという話を聞き，自分も海外での研究職も視野に入れたいと考えるようになりました。
材料開発工学専攻 前期課程１年 スィーパトゥム大学（タイ） 平成 27 年 9/15～9/29 語学研修型	今回のプログラムの課題の一つであるところの個人調査は，いろいろな能力の向上を導いてくれたように感じている。この調査というのは日本の産業等に対して役立つレポートを書くというものであり，言葉が通じないタイという外国において，どのように調査を進めていくかの計画性，調査のために聞き取りをする際のコミュニケーション能力，そして自分のレポートに何が足りないかやどう説明すればよいかを思考するための客観的視点など，さまざまな能力を磨くことができた。これは普段の学生生活ではなかなか鍛えることができず，されど社会人になるにあったって必要になる能力だと考えられる。これは，完全に英語が伝わるわけではないタイという国での調査だったことも手伝って，とても良い経験になったと感じている。またタイという国の文化，国民性などを調査中にさまざまな点で実感，体験することができた。
電気・電子工学専攻 前期課程１年 西安理工大学（中国） 平成 27 年 10/11～10/22 研究・発表型	私は学部 3 年生の時に就職活動を行っていた。しかし，その時は海外に出て仕事なんてするはずがないと考えていた。今ではドイツ，台湾，中国西安の留学を通して日本で閉じこもっているよりは仕事で海外を飛び回ってみるのもいいかなと思っている。今の時代やはり日本だけで活動している企業はこれからの企業成長に限りが見えると思う。日本だけにとどまっている会社にはいってその一生を日本で過ごすのは窮屈だと私は考える。そのため，私は海外展開している企業になるべく就職したいと考えている。

（事務局資料）

② 留学生同窓会と協働したスプリングプログラムや専攻単位での海外大学との定期的な交流活動を実施し，学生から好評を得ている（**資料 1-1-7，8**）。

資料 1-1-7　スプリングプログラム

大学院教育プログラムースプリングプログラム

１．プログラムの趣旨

国際性豊かな高度技術者，Global IMAGINEER 育成に向けた導入教育

大学院での Global IMAGINEER（歴史や文化が異なる地域においても，世界の人々と協働して生き生きとした暮らしづくりに貢献できる高い専門能力と創造力・実践力を有した技術者）育成に向けた導入教育を行います。

コミュニケーション力及び異文化理解力の向上

上海理工大学での中国語講座や英語による工学専門教育により，生きた外国語を学び，使う機会が得られます。また，中国文化に関する授業や上海での日常生活，現地学生との交流を通して，メディアでは知ることのできない中国を理解し，広い視野で世界を捉えるきっかけとします。

Global IMAGINEER としての実践的・国際的な思考力の育成

東アジア経済の中心である上海において，地元の国際企業等担当者による講義聴講や企業訪問を行うことにより，アジア経済のダイナミズムや世界市場で活躍する企業・企業人の仕事に対する理念等に触れ，より実践的・国際的な思考力を養います。

２．プログラム概要

所　管　　：福井大学工学部・工学研究科及び国際交流センター
実施期間　：３月中の２週間程度
滞在先　　：上海理工大学（中国・上海市）
対 象　　：
①本学大学院工学研究科博士前期課程への進学を予定する工学部４年生，博士前期課程１年生
②本学大学院工学研究科後期課程への進学を予定する博士前期課程２年生，後期課程１年生
③本学大学院工学研究科博士前期課程への進学を予定する短期留学プログラム修了生，
工学部研究生，科目等履修生等
定 員　　：20 名程度
引 率　　：大学院工学研究科及び国際交流センターの教員
参加費　　：約９～10 万円（往復航空運賃，宿泊費，国内・現地移動費（一部除く）を含む）
※海外旅行保険料，食事代，娯楽費，パスポート申請手数料等は参加者の負担。
奨学金　　：日本学生支援機構海外留学支援制度奨学金
　　福井大学学生海外派遣支援金
※併給不可

３．カリキュラム

授業名	単位数	内容
中国語・文化 （中国籍の者は履修不要）	1	初心者向け中国語・文化講義 中国語日常会話や中国文化の講義を通して，中国への理解を深めるとともに，日本文化との違いや共通点について理解する。
短期留学工学特別講義 （学部４年生及び博士前期課程１年生対象）	2	英語・日本語による工学系専門講義 上海理工大学教員による工学分野の講義（英語または日本語）を聴講し，専門分野に関する知識及び思考力を養う。
短期留学工学研究 特別講義・演習 （博士前期課程２年生及び後期課程１年生対象）	2	研究室配属 上海理工大学もしくは上海市内の他大学の研究室に配属され，多様な視点に触れることを通して自身の研究内容を発展させる。また，英語でのコミュニケーションを通し，専門分野の英語力向上を図る。
海外企業経営・技術論	2	企業関係者による経営・技術に関する講義 海外における企業経営及び技術戦略について学び，Global IMAGINEER としての幅広い視野や思考力を滋養するとともに，異文化理解力及び国際社会への適応力を身につける。
海外インターンシップ	1	現地企業や上海に進出している福井の企業等への訪問 福井大学留学生同窓生や福井の企業関係者が上海で展

		開する会社や工場を訪問し，国際ビジネスの現場に直接触れることで，将来の企業人・国際人としての社会的責任や使命感を学ぶ。

※上記カリキュラムに基づいて４科目６単位（中国籍の者は３科目５単位）を履修します。履修した授業科目は，研修参加における態度・姿勢や所定の課題レポート（様式指定）に基づく成績評価により，大学院工学研究科博士前期課程または後期課程の授業科目として単位を認定します。

■　平成 27 年度派遣学生の声（抜粋）

「中国語・文化」・・・初級中国語講座４コマを受講した。中国語の発音，簡単な文法や言い回しを学び,それを現地での日常生活の中で日々実践することにより,現地学生との交流や食事，買い物等の場面で活かすことができた。また，中国文化概論講義（日本語）５コマを受講し，様々な中国・上海文化の特徴や日本との違い等を学ぶ中で,「中国の文化や歴史を知ることは日本人としてのアイデンティティの確立にも繋がると感じた」との感想も見られた。

「短期留学工学特別講義」・・・上海理工大学教員による工学系専門講義（日本語・英語）６コマを通して，自身の専門分野や異なる分野について学び，新たな知識や専門分野を英語で学習する機会を得ると共に，自身の知識不足や英語力の不足を実感し，今後の学習に対するモチベーションの高まりを感じる学生が多かった。

「海外企業経営・技術論」・・・現地企業・事務所担当者による企業経営・技術論講義（日本語）６コマを通して，各企業の強みや企業活動概要を知るとともに，中国と日本のビジネス文化の違いや海外で働くことのやりがいや苦労，コミュニケーションや何事にも高い目標を持って取り組むことの重要性等を学んだ。

「海外インターンシップ」・・・現地企業・工場を４社見学し，日本で普段目にする製品が製造される現場に直に触れ，各企業の安全や品質管理，環境保全への取組について話を聞くことにより,将来技術者として社会に出て働く上での理念や目標設定について,より明確なイメージを持つことができた。その他，上海理工大学の授業参加（２コマ）及び現地学生との交流会（３回）への参加を通して，中国人学生の英語力や日本語学習者の知識や能力の高さを目の当たりにし，また現地学生や教職員の熱心かつ親切なサポートを受け，今後の英語や専門分野の学習に対する意欲の向上や，中国・中国人に対する意識の変化を感じる学生が非常に多かった。

■　修了生の人数

平成 24 年度の GGJ 採択を契機として，修了生は増加傾向にある。

年度	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
プログラム修了者数	12	12	26	26	27	25

（事務局資料）

資料 1-1-8　専攻・学科単位での海外大学との定期的な交流活動

日中韓三大学交流による「先端機械工学に関するシンポジウム（ISAMPE)」	福井大学が国際学術交流協定を結んでいる中国上海理工大学および韓国釜慶大学との共催で平成 13 年から毎年開催（開催地輪番)。福井大学では工学部機械工学科・工学研究科機械工学専攻が中心となり，学部生・大学院生が参加。平成 25 年の福井大学開催時には，ISAMPE に加え，JASSO の奨学金を得て International Collaboration Seminar を同時開催し，中国・韓国の学生 20 名が来学して各研究室に配属され，研究や実習を通して学生間の交流を計る共学セミナーを実施。日中韓三大学の学生各１名で１グループを構成し，小型エンジンの分解組立のコンテストとして三カ国の学生が共同で作業を考案・競争するイベントも開催した。 ＜機械工学専攻からの参加者数＞ 平成 25 年（福井開催）　69 名 平成 26 年（釜山開催）　 9 名 平成 27 年（上海開催）　14 名 ＜学生の声＞ ・英語での研究発表は不安であったが，経験して良かった。 ・ますます英語を勉強しなければいけない，と感じた。 ・中国や韓国の学生達の positive な態勢に刺激を受けて，研究への取り組み方が変わった。 ・中国や韓国の学生や教員と交流し，ものの考え方（文化）の違いを感じ取ることができた。  （平成 25 年度福井大学で開催した ISAMPE2013）
シーナカリンウィロート大学（SWU）との双方向インターンシッププログラムによる学生交流事業	第２期期間中に始まった画像処理プロジェクト課題遂行を含むインターンシッププログラム。福井大学側の実施主体は工学部情報・メディア工学科および工学研究科情報・メディア工学専攻。平成 25 年５月に SWU から４名の学部生を受け入れ，平成 27 年には６月に SWU 工学部との間で学術交流協定を締結した上で９月に２名の前期課程学生と２名の学部生を派遣。平成 28 年６月下旬～７月中旬に再び SWU から 5 名の学生を受け入れることが決定しており，交流が定着しつつある。



平成 27 年９月　シーナカリンウィロート大学での交流

（事務局資料）

③　学生の送出しや受入れは，国際交流センター（平成 25 年度設置）や国際課と連携して実施し，支援に対して学生から好評を得ている（**資料 1-1-9**）。

資料 1-1-9　国際課や国際交流センターと連携した留学生に対する支援

■　**支援体制**

国際交流センターは，日本語・日本事情等に関する授業の実施や教材開発・研究活動，外国人留学生の相談・指導，地域交流活動，留学生同窓会活動の推進，本学学生の海外留学支援等を行う。国際課は，同センターの理念のもと，本学学生の海外派遣及び留学生受入れに関する事務全般，並びにそれに伴う学生・教職員への支援を行う。

支援項目（事業）等	支　援　内　容　等
渡日前の情報提供の充実	・HPに渡日に必要な情報や，提出の必要な書類とその記入要領を掲載し，自国で確認・作成できる体制を整備した。これにより，時間の短縮と書類の記入ミスを防げる。 ・福井大学のアカデミックカレンダー，各種プログラム，交換留学制度，教務システム，評価制度，単位制度，宿舎，コストなどをまとめたファクトシートを作成し情報の一元化を進めると同時に，紙媒体での送付や，ウェブ掲載を通じて，学術交流協定校担当者や留学生と最新の情報を共有できる体制を整備した。
福井大学グローバル・コンピテンシー・モデルによる留学を通した自己成長のサポート	・「福井大学グローバル・コンピテンシー・モデル」（**P7-115 後掲資料1-2-21**）を用いた自己評価の実施により，自分の将来像を踏まえて留学前の「いま」の自分を客観的に捉え，留学を通して自己成長を図る取組を実施。目標と手段を意識して行動することにより，有意義な留学生活を送ることができる。
生活・安全に関するガイダンス及び生活ガイドブック類の配布	・渡日後オリエンテーション時に，住民登録等行政手続きの一括代理申請の他，生活に関するガイダンス，および警察による安全に関するガイダンスを実施し，説明資料，生活ガイドブック，災害・緊急時ハンドブックを配布し，生活情報を提供している。

留学生の相談・事故・事件等対応チームの設置（随時）	・留学生に関する事故・問題が発生した際は，国際交流センター専任教員，国際課職員でチーム体制を組み，随時迅速な対応を行っている。
チューター手引き等の配布	・チューター学生には，マニュアルを事前に配布し，チューターのオリエンテーションを開いて，説明を実施している。 ・チューター学生には，新入留学生オリエンテーションにもできるだけ同席させ，役割等を説明して留学生へのサポートを積極的に促している。
国民健康保険料の一部補助	・福井県留学生交流推進協議会が，県内の高等教育機関に在籍する留学生に対し，国民健康保険料を一部補助する情報を周知し，該当者に対し，本人からの申請により保険料の一部を助成している。
民間奨学金対策	・民間奨学金の募集要項等に基づき，小論文や面接試験に対する傾向と対策を検討し，留学生へのアドバイスを実施している。また，礼状の作成等についても指導を実施している。
外国人留学生支援会活動	・福井大学外国人留学生支援会（平成18年度発足）では，教職員等の寄附金による支援金総額約300万円から，留学生の不慮の怪我・疾病，不測の事態に対する支援を行っている。 ・外国人留学生支援会では留学生のアパート入居の際の連帯保証人を行っており，対象のほとんどの留学生が利用している。
留学生会館・国際交流会館	・宿舎の提供 留学生会館　29戸（単身用25戸，世帯用４戸） 国際交流会館　16戸（単身用10戸，世帯用６戸）
国際交流学生宿舎	・宿舎の提供 日本人学生との混住方式により，平成27年度は35人の留学生が入居。留学生の便を図って，第１期中期目標期間末より留学生用の部屋数を増やしている。

■　支援に対する学生の声（抜粋）

・グローバルコンピテンシーなどで自分のやりたいことをしっかりと確かめることができた。
・（オリエンテーションにより）ただただ，留学に行った経験で終わらせるだけでなく，行く意味や得るべきものなどを考えるきっかけになりよかった。
・留学に関してこまめにメールがきたのでとても親切だった。
・帰国後もオリエンテーションを開いてくれて，これからの成長を意識することができた。
・丁寧に説明してくださり，可能な限り安全に留学できるようにサポートしてくださった。
・留学中もメールなどでサポートしてくれた。
・“留学のしおり”に有効な情報がたくさんあったのでよかった。
・非常に柔軟な対応で忙しい生活の中でも助かった。
・事前に情報をたくさん得ることができたのでよかった。

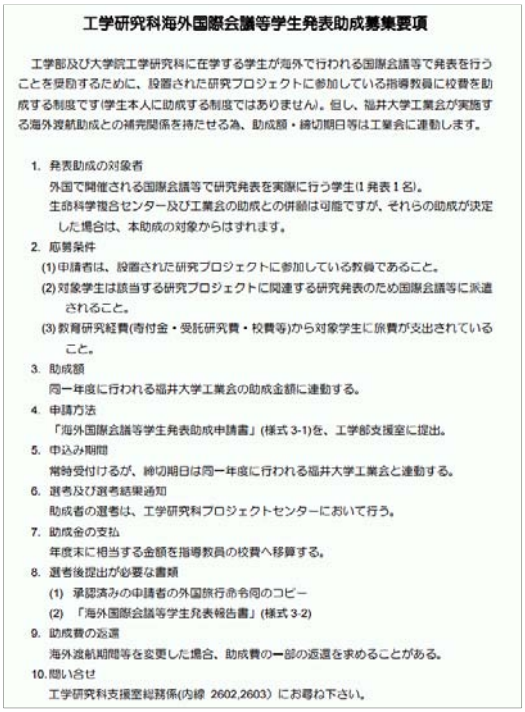
（事務局資料）

④　工学研究科及び同窓会は，海外で研究発表を行う学生の渡航費等の助成を行っている（**資料 1-1-10**）。

資料 1-1-10　海外の国際会議等で発表する学生に対する海外渡航助成

工学研究科プロジェクト研究センターでは，工学部及び大学院工学研究科に在学する学生が海外で行われる国際会議等で発表を行うことを奨励するために，設置された研究プロジェクトに参加している指導教員に校費を助成する（海外国際会議等学生発表助成）。また，福井大学工業会（工学部・工学研究科同窓会組織）は工学部及び工学研究科博士前期課程の学生が国際会議で研究発表を行う場合に海外渡航費用の一部を援助する。

年度	工学研究科からの助成（単位：人）		工業会からの助成（単位：人）	
	博士前期課程在籍	博士後期課程在籍	博士前期課程在籍	博士後期課程在籍
平成22年度	2	1	33	0
平成23年度	3	3	17	0
平成24年度	2	3	10	0
平成25年度	1	3	14	0
平成26年度	1	1	20	0
平成27年度	3	0	21	0

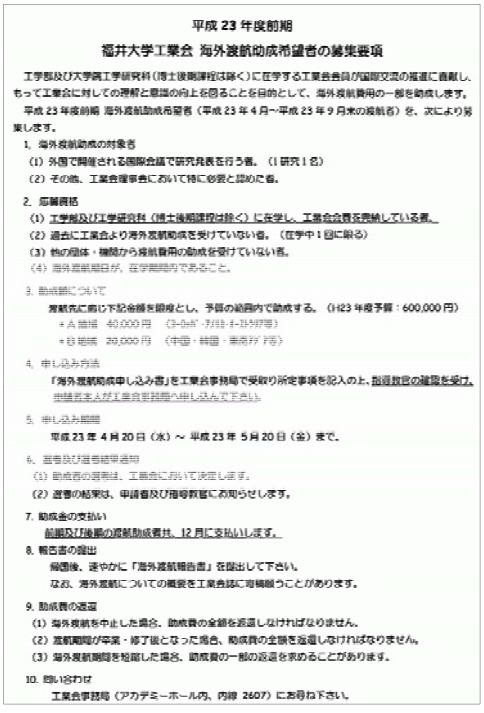


工学研究科海外国際会議等学生発表助成募集要項

工学部及び大学院工学研究科に在学する学生が海外で行われる国際会議等で発表を行うことを奨励するために、設置された研究プロジェクトに参加している指導教員に校費を助成する制度です(学生本人に助成する制度ではありません)。但し、福井大学工業会が実施する海外渡航助成との補完関係を持たせる為、助成額・締切期日等は工業会に連動します。

1. 発表助成の対象者
外国で開催される国際会議等で研究発表を実際に行う学生(1発表1名)。
生命科学複合センター及び工業会の助成との併願は可能ですが、それらの助成が決定した場合は、本助成の対象からはずれます。
2. 応募条件
(1) 申請者は、設置された研究プロジェクトに参加している教員であること。
(2) 対象学生は該当する研究プロジェクトに関連する研究発表のため国際会議等に派遣されること。
(3) 教育研究経費(寄付金・受託研究費・校費等)から対象学生に旅費が支出されていること。
3. 助成額
同一年度に行われる福井大学工業会の助成金額に連動する。
4. 申請方法
「海外国際会議等学生発表助成申請書」(様式3-1)を、工学部支援室に提出。
5. 申込み期間
常時受付けるが、締切期日は同一年度に行われる福井大学工業会と連動する。
6. 選考及び選考結果通知
助成者の選考は、工学研究科プロジェクトセンターにおいて行う。
7. 助成金の支払
年度末に相当する金額を指導教員の校費へ移算する。
8. 選考後提出が必要な書類
(1) 承認済みの申請者の外国旅行命令同のコピー
(2) 「海外国際会議等学生発表報告書」(様式3-2)
9. 助成費の返還
海外渡航期間等を変更した場合、助成費の一部の返還を求めることがある。
10. 問い合せ
工学研究科支援室総務係(内線 2602,2603) にお尋ね下さい。

（プロジェクト研究センター学生発表助成）



平成 23 年度前期

福井大学工業会 海外渡航助成希望者の募集要項

工学部及び大学院工学研究科（博士後期課程は除く）に在学する工業会会員が国際交流の推進に貢献し、もって工業会に対しての理解と意識の向上を図ることを目的として、海外渡航費用の一部を助成します。
平成 23 年度前期 海外渡航助成希望者（平成 23 年 4 月～平成 23 年 9 月末の渡航者）を、次により募集します。

1. 海外渡航助成の対象者
(1) 外国で開催される国際会議で研究発表を行う者。（1 研究 1 名）
(2) その他、工業会理事会において特に必要と認めた者。
2. 応募資格
(1) 工学部及び工学研究科（博士後期課程は除く）に在学し、工業会会費を完納している者。
(2) 過去に工業会より海外渡航助成を受けていない者。（在学中 1 回に限る）
(3) 他の団体・機関から渡航費用の助成を受けていない者。
(4) 海外渡航期日が、在学期間内であること。
3. 助成額について
渡航先に応じ下記金額を限度とし、予算の範囲内で助成する。（H23 年度予算：600,000 円）
・A 地域　40,000 円　（ヨーロッパ・アメリカ等）
・B 地域　20,000 円　（中国・韓国・東南アジア等）
4. 申し込み方法
「海外渡航助成申し込み書」を工業会事務局で受取り所定事項を記入の上、指導教官の確認を受け、申請者本人が工業会事務局へ申し込んで下さい。
5. 申し込み期間
平成 23 年 4 月 20 日（水）～ 平成 23 年 5 月 20 日（金）まで。
6. 選考及び選考結果通知
(1) 助成者の選考は、工業会において決定します。
(2) 選考の結果は、申請者及び指導教官にお知らせします。
7. 助成金の支払い
前期及び後期の渡航助成費共、12 月に支払いします。
8. 報告書の提出
帰国後、速やかに「海外渡航報告書」を提出して下さい。
なお、海外渡航についての概要を工業会誌に掲載することがあります。
9. 助成費の返還
(1) 海外渡航を中止した場合、助成費の全額を返還しなければなりません。
(2) 渡航期間が卒業・修了後となった場合、助成費の全額を返還しなければなりません。
(3) 海外渡航期間を短縮した場合、助成費の一部の返還を求めることがあります。
10. 問い合わせ
工業会事務局（アカデミーホール内、内線 2607）にお尋ね下さい。

（福井大学工業会海外渡航助成）

（事務局資料）

【指導体制】

① 前期課程では，専攻ごとに「研究指導計画」を定め（**資料 1-1-11**），複数の教員からなる POS コミティが，「カリキュラムのオーダーメード化」による体系的・計画的な履修を各学生に対して指導している（**資料 1-1-12**）。これは，大学院 GP での取組を支援期間終了後も継続・充実させているものであり（**P7-5 前掲資料 1-1-3**），学生からは第１期よりも高い評価を得ている（**資料 1-1-13**）。

資料 1-1-11　専攻ごとに定められた「研究指導計画」（建築建設工学専攻の例）

研究指導計画【建築建設工学専攻】

＜概要＞

卒業研究の経験と内容を踏まえ，指導教員，副指導教員とともに課題研究テーマを設定し，学生が主体的に研究を遂行し，得られた結果を考察させる。なお研究の進捗確認は修士論文中間発表会を通じて行い，そこでの質疑応答を踏まえて修士論文を作成させる。また修士論文の集大成として修士論文公聴会を行い，建築建設工学分野の工学技術者としての倫理を十分備えた人材育成をめざす。

＜指導計画＞

指導教員による研究指導（ゼミナール）を中心として，副指導教員による助言，また中間発表会での質疑応答を通して専攻全体としての研究・学習指導を行う。

○ ガイダンス（入学時）

修士論文研究着手，遂行にあたって必要と思われる事項について，指導教員より指示を受ける。

○ 修士論文中間発表会（２年前期，後期に各１回（具体的な日程は別途定める））

１．第１回発表会（２年前期）

【内容】

研究計画（背景や目的・関連研究との位置づけ・研究方法・進捗状況など）を中心とした討議を行い，研究計画の明確化や研究の進め方についての理解を深める。

【方法】

20 分／人程度の持ち時間での複数の教員出席によるゼミ形式で行う。なお構造系・計画系ともに，それぞれ教員と学生をグループに分けて並行で実施する。

【実施要領】

以下のようなプログラムで実施する。

・修士論文の研究計画についてのレジュメを作成し，当日は出席者分（教員＋学生）のコピーを持参すること（書式自由）。

・各グループの発表者は全員，指定された開始時間に割り当てられた場所に集合すること（発表者以外もオブザーバーとして一緒に参加すること）

２．第２回発表会（２年後期）

【内容】

第１回中間発表会での質疑応答を踏まえ，研究の目的，方法，作業仮説，構成，進捗状況，今後の見通し等々，研究内容を具体的に説明し，質疑応答を通じて研究をさらに洗練させる。

【方法】

１人当り８分（発表５分＋質疑３分）で進める。また発表はプロジェクタ等を使用して行う。

【実施要領】

発表内容の梗概（Ａ４用紙×２ページ：様式は自由）を作成し，指定された期日までに提出させる。

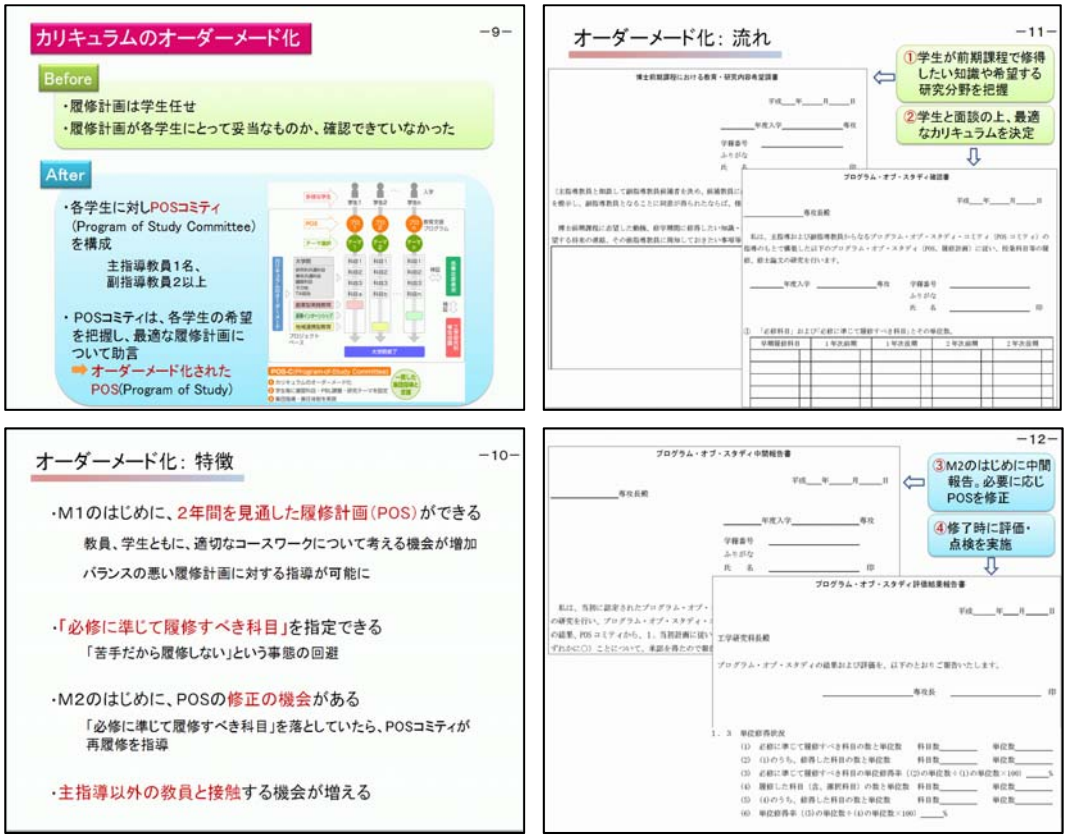
○ 修士論文公聴会（修士論文提出後）

修士論文作成の集大成として，専攻教員および学生に対する公聴会を行う。

（事務局資料）

資料 1-1-12　POS コミティとカリキュラムのオーダーメード化

学生ごとに，全期間に渡りその学生の教育・研究指導に責任を負う組織として，１名の主指導教員と２名以上の副指導教員からなる POS コミティを構成する。POS コミティは，身につけたい能力等について学生にヒアリングし，専攻の人材養成目的を踏まえた上で，最適な履修計画を指導する。専攻は，所属する全学生の研究テーマと履修計画について検討し，人材養成目的に照らし各 POS コミティの判断内容の妥当性を定期的に検証する。



（事務局資料）

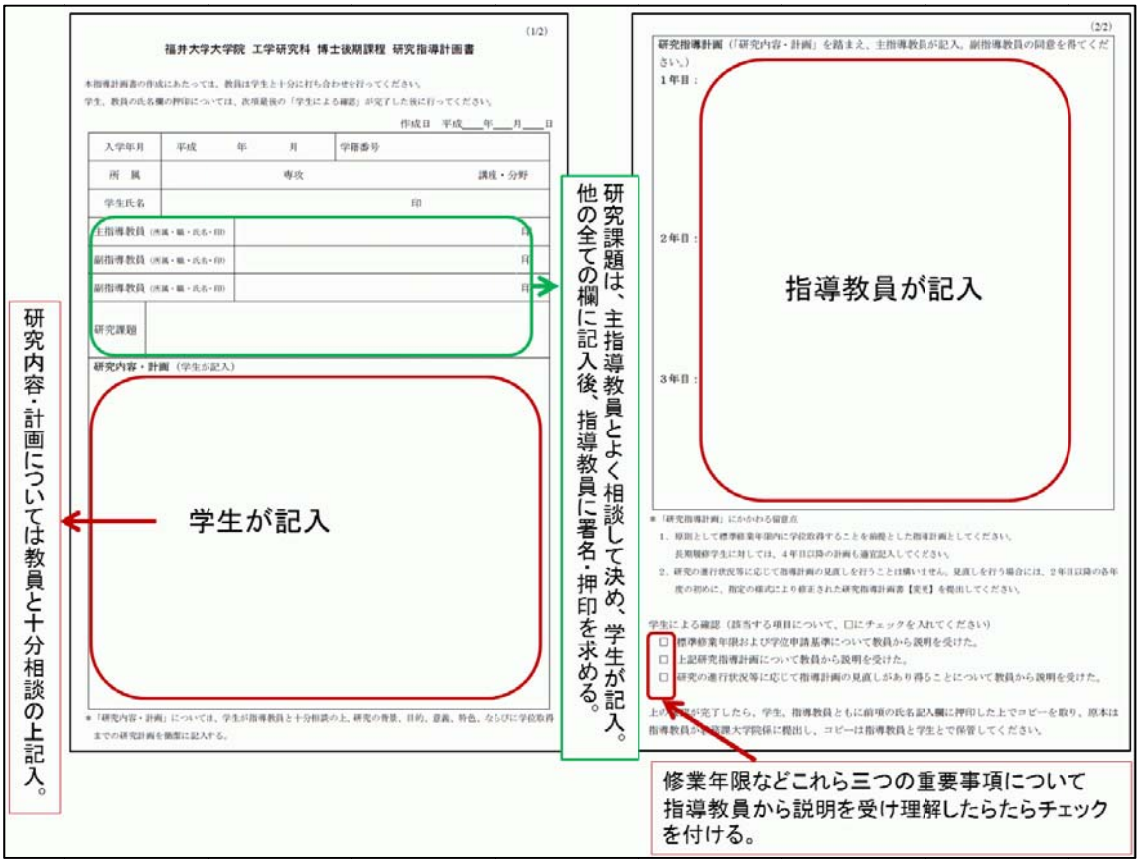
資料 1-1-13　POS コミティによる集団指導体制のもとで行われた教育研究に対する学生の評価

学生は修了時に「POS 評価結果報告書」を作成し，POS-C による集団指導体制のもとで行われた教育研究を５点満点で総合評価する。平成 20 年度～平成 22 年度修了生による評価の平均は 3.86 点，平成 25 年度～平成 27 年度修了生による評価の平均は 4.12 点と，第２期に入学した学生が行なった評価の方が 0.26 点評価が高くなっており（**P7-58 後掲資料 1-1-54**），制度の趣旨が浸透し，POS コミティによる指導がより充実したものになっていると判断できる。

（事務局資料）

② 後期課程でも複数教員による集団指導を行っている。前期課程での成果を踏まえて平成 22 年度から研究指導計画書を導入し学生と教員の間で認識の共有を徹底している（**資料 1-1-14**）。

資料 1-1-14　後期課程の「研究指導計画書」

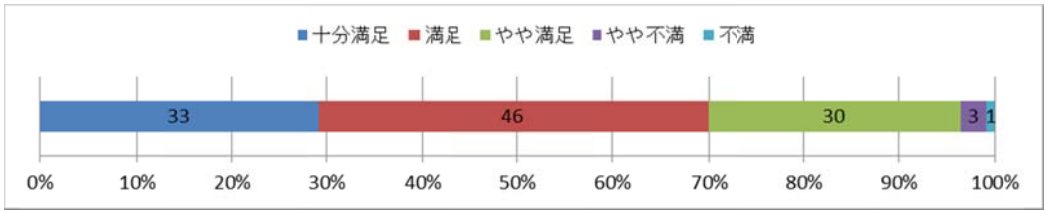


（事務局資料）

③　アンケート調査の結果，研究指導に対する大学院学生の満足度は高い（**資料 1-1-15**）。

資料 1-1-15　研究指導に関する大学院生の満足度

設問：卒業研究指導（大学院における研究指導を含む）について，あなたはどの程度満足していますか。



（グラフ中の数値は回答者数を示す）

（事務局資料）

【外部組織との連携】

① 第２期に開始したものを含め，学内外の教育研究施設・機関と教育面で連携している（**資料 1-1-16**）。海外大学等との学術交流協定を 24 件締結又は更新し，交流が実質化した（**資料 1-1-17**）。

資料 1-1-16　工学研究科が連携する学内・学外（国内）の施設・機関等

学内・学外の別	連　携　先	連携内容の概要等
連携する学内共同教育研究施設等	産学官連携本部	前期課程の MOT 教育プログラム「創業型実践大学院工学教育」の実施。
		★★後期課程の実践教育プログラム「産業現場に即応する実践道場」の実施。 ※第２期（平成 22 年度）に文部科学省特別教育研究費を受けて開始。
	附属国際原子力工学研究所	★原子力・エネルギー安全工学専攻の大学院生の専門教育や研究指導を行う。
	高エネルギー医学研究センター	材料開発工学専攻，原子力・エネルギー安全工学専攻の教員が連携教員となり，毎年学部学生，前期課程学生それぞれ４～５名ずつセンターで受け入れて教育研究指導をおこなっている。
	遠赤外領域開発研究センター	海外研修プログラム（前期課程学生対象，実例はフィリピン大学へ１ヶ月間派遣など），国際ワークショップ(IW-FIRT)におけるポスター発表の機会提供，外国人招聘教授のセミナーの公開等による国際化教育への貢献，物理工学専攻，電気・電子工学専攻における専門教育・研修指導への参画
	生命科学複合研究教育センター	工学研究科の学生を対象に，医学部を中心とした教員によるオムニバス形式の講義「生命複合科学特論」を実施。また，生命科学に関する研究を行っている学生を対象に，研究活動および研究成果の発表のために必要な旅費の支援を行う。
	地域環境研究教育センター	地域環境研究発表会の実施，地域研究に対する助成を実施している。
	博士人材キャリア開発支援センター	★★後期課程学生及びポストドクターのキャリア形成支援及び就職支援を推進。 ※第２期（平成 23 年度）に科学技術人材育成費補助事業（ポストドクター・インターンシップ推進事業）に採択されて開始。
連携する学外の教育研究機関等名	福井県立大学大学院	＜単位互換＞ 特別聴講学生の受け入れ。 （協定実施 H18.9.27）
	福井県経営者協会	＜インターンシップの実施＞ 協力してインターンシップを実施。 （H15～）

	独立行政法人産業技術 総合研究所	＜教育研究協力＞ 工学研究科における教育研究活動の一層の充実を図るとともに，研究所の研究活動の推進及びその成果の普及を促進することにより，我が国における学術及び科学技術の発展に寄与する。 （協定実施 H16.4.1）
	一般社団法人福井県繊維協会	★★＜連携講座設置＞ 繊維先端工学専攻の設置に伴い，工学研究科に連携講座を置く。 （協定発効 H25.4.1）
	国立研究開発法人日本原子力 研究開発機構	＜包括連携＞ 双方の有する研究施設，研究成果，人材等を連携活用し，相互の研究及び教育の充実を図る。 （協定発効 H18.10.3）
	株式会社原子力安全システム 研究所	＜連携講座設置＞ 原子力・エネルギー安全工学専攻の設置に伴い，工学研究科に連携講座を置く。 （協定発効 H16.4.1）
	核燃料サイクル開発機構	＜研究協力＞ 学術及び科学技術の発展に寄与し，人材育成の一層の充実を図るため，相互に緊密な研究協力を行う。 （協定締結 H12.11.21）
	京都大学原子炉実験所	＜学術協力・交流＞ 学術上の協力と交流を促進する（研究者，技術者，大学院学生の交流など） （覚書 H19.3.26）
	若狭湾エネルギー研究センター	原子力教育における連携，インターンシップ。
	信州大学 京都工芸繊維大学	★★＜単位互換協定＞ 文部科学省大学間連携共同教育推進事業に採択された「繊維系大学連合による次世代繊維・ファイバー工学分野の人材育成」のため相互に連携し，教育の充実を図る。 （協定締結 H25.4.1）
	名古屋大学 東京工業大学 金沢大学 茨城大学 岡山大学 大阪大学 国立研究開発法人日本原子力 研究開発機構	JNEN（原子力教育大学連携ネットワーク） 日本８機関で連携して原子力教育を行っている。 (遠隔教育システムを利用した共同授業，共同実習)

※　★★印は第２期に開始　★印は第２期に本格化　（事務局資料）

資料 1-1-17　海外大学などとの学術交流提携一覧（第２期中；工学研究科および関連部局）

機　関　名	国　名	締結・更新年月日 （）は当初の締結日	学生交流覚書	備　　考
ソウル国立大学テラヘルツバイオ応用システムセンター	韓国	平成 23 年 3 月 18 日	－	遠赤外領域開発研究センター
フィリピン大学物理学研究所	フィリピン	平成 23 年 4 月 11 日	-	遠赤外領域開発研究センター
西安交通大学核科学与技術学院	中国	平成 24 年 7 月 25 日	-	附属国際原子力工学研究所
ラジャマンガラ工科大学工科大学 イサン校工学・建築学部	タイ	平成 24 年 8 月 17 日	有	
タマサート大学東アジア研究センター	タイ	平成 24 年 10 月 26 日	-	産学官連携本部
ラトビア大学固体物理研究所	ラトビア	平成 24 年 11 月 26 日	-	遠赤外領域開発研究センター
蘭州交通大学電子与信息工程学院・自動化与電気工程学院	中国	平成 25 年 3 月 31 日	有	
ベトナム教育訓練省国際教育開発局	ベトナム	平成 26 年 2 月 20 日	-	大学間交流
サンマルコス大学地質・鉱業・冶金・地理工学部	ペルー	平成 26 年 2 月 28 日	－	産学官連携本部
デ・ラ・サール大学理学部	フィリピン	平成 26 年 3 月 31 日	-	遠赤外領域開発研究センター
電力大学	ベトナム	平成 26 年 5 月 28 日	-	大学間交流
スィーパトゥム大学	タイ	平成 26 年 9 月 10 日	-	産学官連携本部
マラヤ大学	マレーシア	平成 26 年 11 月 10 日	有	大学間交流
ロシア科学アカデミーカザン科学センター	ロシア	平成 27 年 2 月 27 日	-	
國立清華大学光電研究センター	台湾	平成 27 年 3 月 12 日	-	遠赤外領域開発研究センター
（欧州側コンソーシアム） 欧州原子力教育ネットワーク連合 フランス原子力科学技術機構 ルーマニア国立ブカレスト工科大学電力工学部 ベルギー国立原子力研究センター （日本側コンソーシアム） 東京工業大学大学院理工学研究科 京都大学大学院工学研究科	フランス ルーマニア ベルギー	平成 27 年 3 月 23 日	有	

京都大学大学院エネルギー科学研究科 日本原子力開発機構原子力人材育成センター				
中部電力短大	ベトナム	平成 27 年 6 月 8 日	-	
東亜大学校	韓国	平成 27 年 6 月 16 日 (平成 12 年 5 月 2 日)	有	部局間交流→ 大学間交流
チャンカセム・ラチャパット大学人文社会学部	タイ	平成 27 年 6 月 19 日	－	産学官連携本部
カレッジ・オブ・アジアン・スカラーズ	タイ	平成 27 年 6 月 20 日	－	産学官連携本部
ダナン大学	ベトナム	平成 27 年 6 月 22 日	-	大学間交流
キングモンクト工科大学トンブリ校	タイ	平成 27 年 6 月 26 日 (平成 12 年 8 月 1 日)	有	部局間交流→ 大学間交流
シーナカリンウィロート大学工学部	タイ	平成 27 年 7 月 9 日	有	

（事務局資料）

② 原子力・エネルギー安全工学専攻では，附属国際原子力工学研究所と協力して，原子力教育大学連携ネットワークに参画している（**資料 1-1-18，19**）。東日本大震災以降，外部機関との連携を一層強化し（**資料 1-1-20**），競争的外部資金を活用した実習重視の教育を行って学生の経験が深まるなど成果をあげた（**資料 1-1-21，22**）。また，第３期に繋がる新たな人材育成事業にも採択され（**資料 1-1-23**），社会の期待に応えた。

資料 1-1-18　原子力教育大学連携ネットワークの概要

原子力分野における大学連携ネットワークの主な活動

（概要）

原子力機構と金沢大学、東京工業大学、福井大学、茨城大学、岡山大学及び大阪大学の６大学とは、原子力分野の人材育成を推進するために、ネットワークを構築し、遠隔システムを活用した共通講座の実施、岡山大学及び福井大学で一堂に会して実施する集中講座、また、原子力機構の施設、設備を利用した学生実習プログラム等を実施しています。これに新たに名古屋大学が参画し、７大学と原子力機構の８機関で推進するものです。

（協議）

原子力分野における大学連携ネットワークでは、参画大学と原子力機構の緊密な連携協力を図るため、年度計画決定や実績のレビューを行う連携協力推進協議会、更に企画調整分科会を適宜開催することにより、協議を円滑に推進していきます。

（連携教育カリキュラムの実施）

・共通講座：遠隔教育システムを活用したライブ講義形式（期間中毎週金曜日午後開催）
　前期科目４月～７月：原子力工学基礎（Ⅰ）：放射線・原子核に係る科目
　後期科目10月～１月：原子力工学基礎（Ⅱ）：核燃料サイクルに係る科目
・集中講座：講師、学生が一堂に会して約一週間集中的に開催
　岡山大学科目：環境と人間活動：８月頃
　福井大学科目：原子力の安全性と地域共生：９月頃
・学生実習：原子力機構において放射線計測、核燃料サイクル技術に係る実習：８月頃

以上の取り組みは、参画大学の特徴や原子力機構の施設や人材を相互補完的に最大限活用し、原子力分野の専門知識や能力を有する人材の育成に大きく寄与するとともに、今後ネットワークの強化による原子力教育の充実化やネットワーク参画大学間の交流等が期待されます。



（事務局資料）

資料 1-1-19　原子力教育大学連携ネットワークの科目「原子力の安全性と地域共生」

本科目は，原子力教育大学連携ネットワーク（JNEN）の夏期集中講座として，本学で実施し，他大学の学生も多く受講する。

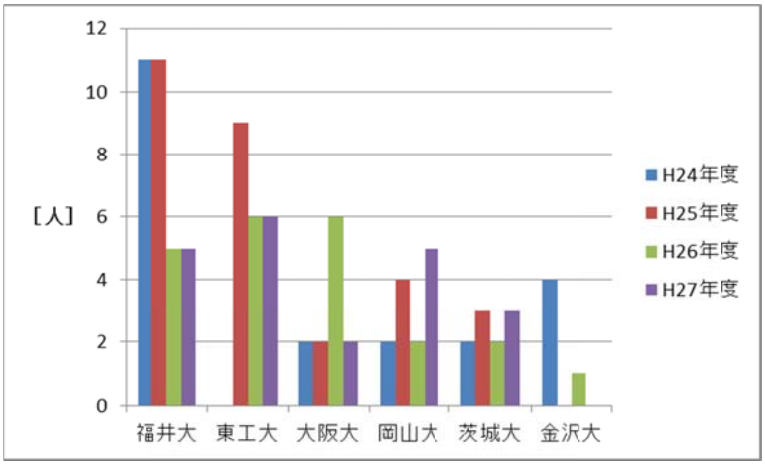
■　平成 27 年度実施スケジュール

科目名：原子力の安全性と地域共生(平成27年度)
Safety and Regional Symbiosis for Nuclear Energy

	9月 14日(月) (福井大文京キャンパス) 総合研究棟 総合小1講義室 原子力プラント転倒安全実習	9月 15日(火) (福井大文京キャンパス) 総合研究棟 総合小1講義室	9月 16日(水) (福井大文京キャンパス) 総合研究棟 総合小1＆総合小2	9月 17日(木) (JAEA敦賀＆原電敦賀原発) 見学	9月 18日(金) (福井大文京キャンパス) 総合研究棟 総合小1＆総合小2 将来の原子力と地域共生
8:00～9:00		8:8:11福井駅発(えちぜん鉄道) 8:30 集合 8:40～9:40（60分） ○核燃料サイクル概論 （東工大 小山先生）	8:8:11福井駅発(えちぜん鉄道) 8:30 集合 8:40 ～9:40(60分) ○原子力システム安全概論 （福井大 柳原先生）	○福井駅集合9:00 8:10～9:30 （ 移動 ）	8:8:11福井駅発(えちぜん鉄道) 8:30 集合 8:40～9:40（60分） ○福井の原子力安全と地域共生 （福井大 東晃先生）
9:00～10:00	8:9:10福井駅発(えちぜん鉄道) 9:30～10:00 ○受付	休憩(10分) 9:50～10:50（60分） ○放射性廃棄物の処理・処分 （金沢大 亀井先生）	休憩(10分) 9:50～10:50（60分） ○超水炉の安全性向上のための基盤研究 （福井大 横堀先生）	9:30～12:00 ○高速増殖原型炉もんじゅ見学	休憩(10分) 9:50～10:50（60分） ○地域の経済・財政と原子力 （福井大 井上先生）
10:00～11:00	10:00～10:10 ○開講式(集合写真撮影) 10:20～11:00 ○オリエンテーション・自己紹介	休憩(10分) 11:00～12:00（60分） ○高基年化対策概論 （茨城大 関東先生）	休憩(10分) 11:00～12:00（60分） ○福島第一事故の教訓からみる安全確保のあり方 （大阪大 中村秀生）		休憩(10分) 11:00～11:30（30分） ○ディスカッションの進め方 （福井大 H木先生） 11:30～12:30 （ 昼食 ）
11:00～12:00	11:00～12:00（60分） ○構造安全実習ガイダンス （福井大 桑木湊先生）				
12:00～13:00	12:00～13:00 （ 昼食 ）	12:00～13:00 （ 昼食 ）	12:00～13:00 （ 昼食 ）	12:00～13:00 （ 昼食 ） お弁当	12:30～14:00（90分） 地域共生についてフリーディスカッション （司会：川本先生，パネラー：桑晃先生，井上先生）
13:00～14:00	13:00～13:40（40分） ○歪増幅装置概論 （福井大 鈴木先生） 13:40～16:20（140分）	13:00～13:40（40分） ○構造健全性評価概論 （茨城大 関東先生） 14:40～16:20（160分）	13:00～15:50（170分）	13:00～13:30 （ 移動 ） 13:30～16:00	休憩(10分)
14:00～15:00	○構造安全実習(1) （福井大 鈴木先生）	○構造安全実習(2) （茨城大 関東先生）	○構造安全実習(2) （福井大 桑木湊先生）	○日本原子力発電敦賀発電所見学	14:00～14:30 ○アンケート記入 14:30～14:45 ○閉講式(全台写真撮影) 15:00 福井大解散
15:00～16:00					※15:19 福大前西福井着(えちぜん鉄道)
16:00～17:00	休憩(10分) 16:30～17:30（50分） ○報告会	休憩(10分) 16:30～18:00（90分） ○報告会	休憩(10分) 16:00～18:00（120分） ○集約報告会	16:00～18:00 （ 移動 ） 原子力緊急時支援・研修センター(東海) (途中南條PAにて休憩)	
17:00～18:00	報告会終了後 懇親会				
18:00～	終了後福井大解散	18:00～ ○補習 終了後福井大解散	終了後福井大解散	到着後福井駅解散	

※進捗状況により、終了時刻に前後します。

■　受講者数



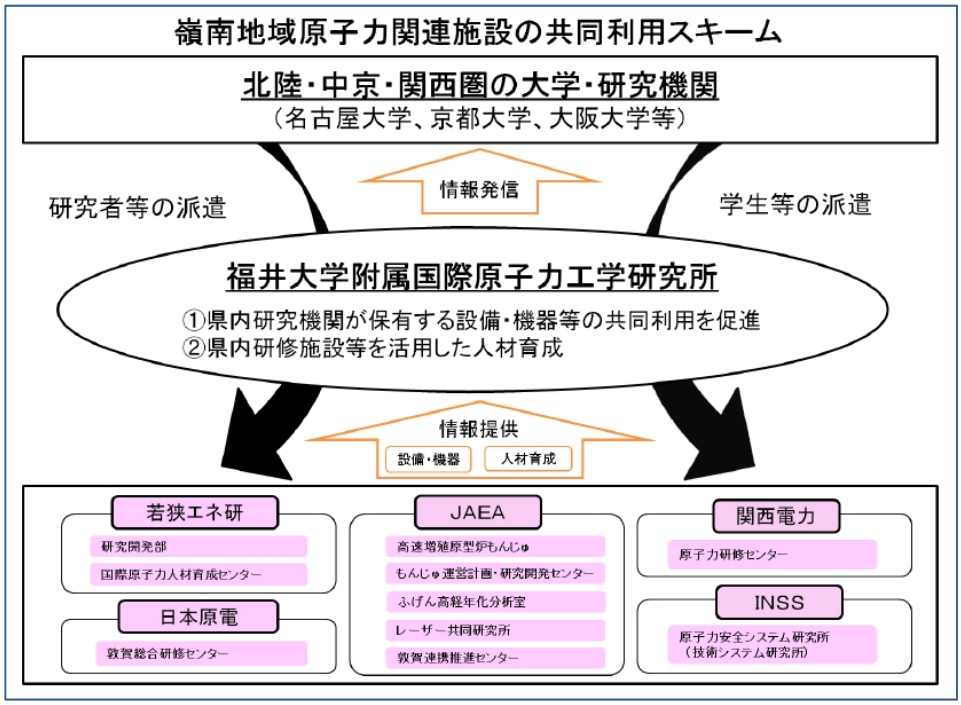
※他大学の学生も多数来学して受講している。

平成 24 年度～27 年度の受講学生 93 名のうち 61 名は他大学で原子力を学ぶ学生である。

（事務局資料）

資料 1-1-20　外部機関との覚書締結状況

嶺南地域の豊富な原子力関連施設を背景に，それらを保有する研究機関，電力事業者と連携協力して施設・設備，人材を相互に活用し，原子力に関する研究・教育，人材育成の一層の推進を図るため，福井大学と日本原子力研究開発機構，若狭湾エネルギー研究センター，日本原子力発電(株)，関西電力(株)，(株)原子力安全システム研究所(INSS)は覚書を締結している。



＜覚書の締結状況＞

・日本原子力発電(株)	平成 25 年 4 月 22 日（H25.5.1～発効）
・(株)原子力安全システム研究所	平成 25 年 6 月 6 日（H25.6.6～発効）
・関西電力(株)	平成 25 年 7 月 22 日（H25.7.22～発効）
・若狭湾エネルギー研究センター	平成 25 年 11 月 1 日（H25.11.1～発効）
・日本原子力研究開発機構	福井大学との包括連携協定の枠組みで実施

（事務局資料）

資料 1-1-21　実施にあたり外部資金を活用した教育

・経済産業省「平成 25 年度安全性向上原子力人材育成委託事業」（平成 26 年度からは文部科学省原子力人材育成事業）の一環として「敦賀原子力サマースクール」を実施し，大型原子炉シミュレーター体験学習，放射線計測，材料劣化の体験学習などを行い，学部学生に対する原子力教育を充実させた。
・平成 22～24 年度までは文部科学省「原子力人材育成等推進事業費補助金，平成 25 年度からは文部科学省「原子力人材育成等推進事業費補助金」により「原子力危機管理スクール」等を開催し，主に大学院生に対する原子力防災や危機管理の教育を充実させた。
・平成 25 年度に採択された地（知）の拠点整備事業（COC 事業）の一環として，「原子力プラントシミュレータ実習」（平成 26 年度～）を実施した。



※平成 25 年度　原子力危機管理スクール参加者 17 名

（福井大学 12 名，京都大学２名，神戸大学２名，東京理科大学１名）。

主催：国立大学法人 福井大学・日本原子力発電株式会社

「原子力プラントシミュレーター実習」

－プラントシステム及び事故時挙動の確認－

大学院から「原子力」の勉強を始めた方を対象に、原子力発電所のプラント主要設備の概要，プラント起動操作，事故時のプラント挙動確認，福島事故の概要等について原子力発電教育シミュレーターを用いて体験学習するとともに，敦賀発電所１，２号機の原子炉施設及び安全対策の実施状況等の見学を予定しています。



原子力発電教育シミュレーター学習の状況

＜原子力プラントシミュレーター実習日程＞

		研修内容		講　義　内　容
1日目	9:00～12:00	プラント主要設備・運転の概要	原子炉設備 工学的安全施設 プラント運転操作体験　等	講義：プラント主要設備の概要（BWR） 実習：プラント運転操作体験（原子炉臨界，原子炉の出力制御，原子炉緊急停止等）
	13:00～17:00	プラント事故の概要	冷却材喪失事故等	実習：事故時の挙動確認（原子炉緊急停止，冷却材喪失事故，外部電源喪失事故等）
2日目	9:00～12:00	福島事故の概要	福島事故の講義・実習	講義：東京電力福島原子力発電所事故の概要 実習：事故事象確認（全交流電源喪失／原子炉注水失敗）
	13:00～17:00	施設見学 (13:45～16:00)	敦賀発電所見学	１号機（非常用復水器，格納容器） ２号機（燃料プール，格納容器）　等

●実習日　2014年8月28日(木)～29日(金)
両日とも9:00～17:00

●会　場　日本原子力発電株式会社
敦賀総合研修センター
住所：敦賀市沓見165号9-6
（アクセスマップ参照）
TEL:0770-21-9700



敦賀総合研修センター

※平成 26 年度　原子力プラントシミュレータ実習参加学生７名（福井大学５名，大阪大学２名）

＜参加者のコメント＞

・PWR（加圧水型）と BWR（沸騰水型）のいずれについても実際の体験など参考になることが多く，満足です。
・PWR（加圧水型）と BWR（沸騰水型）の違いや同じ点などいろいろ知ることができました。
・細かいところまで説明されているテキストが大変参考になりました。
・後輩にもすすめたいと思います。

（事務局資料）

資料 1-1-22　他機関の有する教育資源や施設を利用した実習教育と参加学生の声



（専攻設置 10 周年記念報告会：「原子力・エネルギー安全工学専攻 10 年の教育研究と歩み」から抜粋）

＜実習に参加した学生のコメント＞

・東北大学金属材料研究所大洗センターの RI 管理区域内での原子力材料試験実習により，中性子により放射化した材料を使った各種機械的試験ができた。大学における放射性同位元素や原子炉照射材の取扱には制約が多いため，非常に貴重な経験であった。
・福井大学での放射線取扱教育，大洗センターでの原子力材料実習，京大原子炉実験所での RI 試料による各種材料試験，大阪大学における講義およびグループディスカッションを通して，原子力材料取扱時の被爆に関する必要以上の不安を払拭でき，取扱経験を積むことによって原子力材料研究の有効性を理解し，原子力が巨大複合科学技術であることを体感できた。
・教授，研究者，学生といった職位の隔たりなく意見が交換でき，後期課程への進学を希望している私には非常に有意義であった。

（プロジェクト型学習（PBL）活動報告書から抜粋）

（事務局資料）

資料 1-1-23 「福島第一原子力発電所の燃料デブリ分析・廃炉技術に関わる研究・人材育成」事業の概要

文部科学省「英知を結集した原子力科学技術・人材育成推進事業（廃止措置研究・人材育成等強化プログラム）」（平成 27 年度）に採択された，本学が中心となり西日本６大学・２機関の連携によるこの事業では，現場のニーズを踏まえた「廃止措置技術」，「燃料デブリ分析」及び「廃炉技術開発」に関する基盤研究と人材育成を行う。

各大学で行う研究指導に加えて，福島での実習・セミナーを全国の学生に提供し，原子力以外の幅広い分野から福島第一原子力発電所の廃止措置における課題解決に貢献できる高い知識と社会貢献意識を持った広い専門分野の若手人材を継続的に育成することを目指す。



（事務局資料）

③　平成 24 年度に文部科学省大学間連携共同教育推進事業に採択された「繊維・ファイバー工学コース」を前期課程に設置した（**資料 1-1-24，25**）。次世代繊維技術者育成を進め，成果があがり高い評価を得て（**資料 1-1-26**），地元産業界等からの期待に応えた。この取組は，大学機関別認証評価（平成 27 年度受審）結果で「優れた点」の１つとして高く評価された。

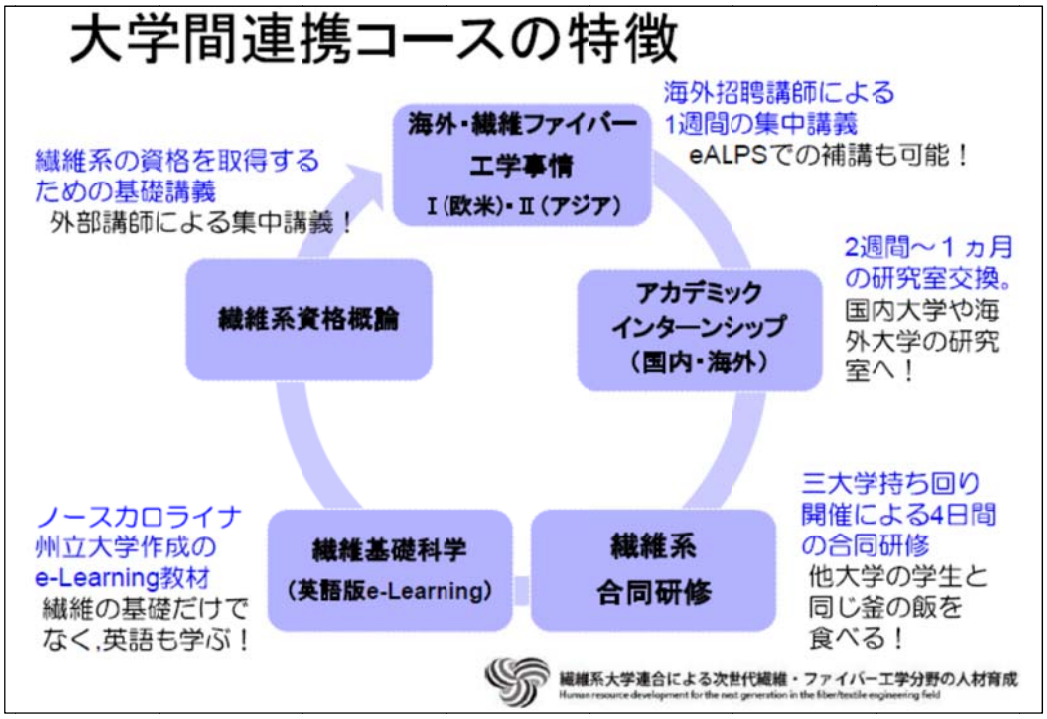
資料 1-1-24　繊維・ファイバー工学コースのカリキュラム



（事務局資料）

資料 1-1-25　繊維系大学連合による「繊維・ファイバー工学コース」の特徴





（事務局資料）

資料 1-1-26　繊維・ファイバー工学コース実施の成果と評価

■　繊維・ファイバー工学コース参加学生（コース生）

	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
福井大学	５名	７名	７名
信州大学	７名	６名	６名
京都工芸繊維大学	５名	５名	６名

※コースの受入人数の目安は各大学あたり５名であるが，志願者多数のため，予算上ぎりぎりの人数まで受け入れている。中でも本学（繊維先端工学専攻）学生の本コース志願率は際立って高く（平成 27 年度の志願率は他大学の５倍弱～６倍弱程度），他大学より多くのコース生が誕生している（平成 26 年度，平成 27 年度）。

■　コース生からのコメント（抜粋）

・課題に真剣に取り組んだ。企業の方も交えて意見をもらい，みんなでアイデアを出し合い，役割を分担し，納得いくまで相談してプレゼンを行った。実際に新製品を開発する気持で取り組んだが難しく，作業も深夜まで及んだ。これから働いていく中で非常に収穫の多い取組となった。
・ワールドカフェ，シェアドビジョン，20 行法など多くのグループワークの手法を学ぶことができた。
・発散の方法と収束の方法を場面に応じて使い分けることが重要であることを学んだ。
・川上から川下まで繊維の専門知識を得ることができ，サプライチェーンマネジメントなど企業の経営者視点からの考え方も身に付いた。
・海外の先生の講義を受け，英語のコミュニケーション力が向上し，英語に対する苦手意識がなくなった。
・講義，繊維系合同研修，アカデミックインターンシップを通して，様々な場面での発想の転換ができるようになった。他大学の学生との交流を通して新しい考え方や多角的な視野を身に付けることができた。
・大学卒業時よりも，飛躍的に知識面や思考面で深く追及することができるようになった。
・短い期間で失敗も成功も体験できた。この経験を今回だけで終わらせることなく，ここで得た「考え方のプロセス」を研究や学生生活に活かしていこうと思う。



■　外部評価結果（「大学間連携共同教育推進事業」進捗状況報告書（平成 27 年 2 月 18 日）より）

本取組の教育プログラムを評価するため、委員 13 名から構成される外部評価委員会を設置した。委員には、ステークホルダーから推薦された 12 名（産業界から６名、学界から６名）と経済産業省製造産業局繊維課長（官界１名）に就任いただいている。学界からの意見だけではなく、産業界や官界からの意見も取り入れることができる委員構成となっている。

外部評価は、初年度である平成 24 年度に教育プログラムについて意見をいただき、本取組開始３年目の平成 26 年度に中間評価を実施した。最終年度の平成 28 年度には最終評価を実施する予定である。

平成 24 年 12 月に開催した第１回運営委員会において、外部評価委員会を設置し、ステークホルダー委員 6 名から本取組の事業内容および教育プログラムについて、ほぼ適正であるとの意見を受けた。また、さらに充実した外部評価とするため、追加で６名の委員の推薦を依頼し、経済産業省製造産業局繊維課長１名にも委員をお願いすることとした。委員 13 名で構成された第１回外部評価委員会（平成 26 年９月開催）では、本取組の平成 24 年度～平成 26 年度前半までの実績について連携大学側から説明をし、その後、外部評価委員のみで評価を行った。

総合評価は、５段階中（A・B+・B・B−・C）の B+ であり、達成目標別評価は以下のとおりであった。

１．繊維・ファイバー工学コースの設置	A
２．コース生の募集・選抜・修了認定	B+
３．三大学が連携した教育カリキュラムの構築	A
４．産業界・関連学協会との連携性	B
５．事業運営体制について	B

※学界，産業界，官界からの多数の委員による外部評価を行い，高い評価を得た。

（事務局資料）

●多様な教員の確保状況とその効果

【教育目的を実現するための教員構成】

①　教員採用は公募によることを原則とし，教員選考規程（**資料 1-1-27**）により優れた人材を公平に採用している。配置人数は大学設置基準を満たしている。研究指導資格については，教授は全員が有し，准教授も前期課程においてはほぼ全員が，後期課程においても多くが有している（**資料 1-1-28**）。主要な専門科目は専任教員が担当している（**資料 1-1-29**）。教員の採用・昇格にあたっては，模擬授業による評価を行っている（**資料 1-1-30**）。

資料 1-1-27　福井大学大学院工学研究科教員選考規程

福井大学大学院工学研究科教員選考規程

（平成16年４月１日　福大工規程第７号
平成19年４月５日　第一教授会）

（趣旨）

第１条　福井大学大学院工学研究科に勤務する教授，准教授，講師，助教及び助手（以下「教員」という。）の国立大学法人福井大学職員人事規程（平成16年福大規程第５号）第５条及び第12条の規定に基づく採用及び昇格の選考手続については，福井大学大学院工学研究科教授会規程（平成16年福大工規程第２号）（以下「教授会規程」という。）によるほか，この規程の定めるところによる。

（選考基準）

第２条　教員は，教育研究者としての能力を有し，別記「教員選考基準」（以下「選考基準」という。）を満たすものとする。

（候補者の推薦）

第３条　博士前期課程専攻（以下「専攻」という。）で教員を採用し又は昇格させようとするときは，当該専攻において候補者を選定し，当該専攻の長は，工学研究科長に候補者を推薦するものとする。

２　候補者の推薦に当たっては，当該専攻において，選考基準に基づき厳正に選考を行うものとする。

第４条　工学研究科長は，前条の推薦があった場合は，教授会規程第２条第１項に定める教授会（以下「教授会」という。）を招集し，当該専攻における選考過程及び推薦理由の詳細な説明を行うものとする。

（選考委員会）

第５条　教員の採用及び昇格に関する審査を行うため，教授会のもとに選考委員会（以下「委員会」という。）を設ける。

第６条　委員会は，専任の教授４名をもって構成する。

２　前項の委員は，その都度教授会において選任する。

３　委員会に委員長を置き，委員が互選する。

第７条　委員長は，委員会を招集し，その議長となる。

第８条　委員会は，選考基準に従って審査し，その結果を教授会に報告しなければならない。

第９条　委員会は，審査の必要に応じ，委員以外の本大学院工学研究科の教員又他学部若しくは他大学の教授から２名以上を選び，その意見を聴くことができる。

（候補者の決定及び報告）

第10条　教授会は，委員会の報告に基づき，候補者の適否を決定する。

２　工学研究科長は，前条の決定により適任と認めた候補者を学長に報告する。

第11条　工学研究科長は，前条第１項の決定が行われた場合は，その結果を教授会規程第２条第２項に定める教授会に報告する。

（否決された候補者の選考）

第12条　教授会において否決された候補者は，その日から１年を経過した後でなければ選考することはできない。

（雑則）

第13条　退職又は転出を予定されている者の後任の選考は，事前に行うことができる。

第14条　非常勤講師の採用については，委員会による審査を省くことができる。

第15条　この規程に定めるもののほか，この規程の実施に関し，必要な事項は，教授会が別に定める。

附　則
この規程は，平成16年４月１日から施行する。
附　則
この規程は，平成18年４月１日から施行する。
附　則
この規程は，平成19年４月５日から施行し，平成19年４月１日から適用する。

別記
教員選考基準
１　教授
（１）博士の学位（日本における博士の学位と同等と認められる外国の学位を含む。以下同じ。）を有し，研究上の業績があり，教育上の経験又は識見を持っている者
（２）公刊された著書，学術論文，作品，報告等により博士の学位を有する者に匹敵する研究上の業績があると判断され，教育上の経験又は識見を持っている者
（３）専攻分野において特に優れた知識及び経験を有する者

２　准教授
教授の資格に準ずる。ただし，場合によっては所要の年限又は経歴を軽減して考慮することができる。

３　講師
准教授の資格に準ずる。ただし，場合によっては所要の年限又は経歴を軽減して考慮することができる。

４　助教
講師の資格に準ずる。ただし，場合によっては所要の年限又は経歴を軽減して考慮することができる。また，博士の学位取得見込者を含むことができるものとする。

５　助手
当分の間この職は置かないこととする。

（事務局資料）

資料 1-1-28　工学研究科の教員の配置（H27.5.1 現在）

課程・専攻等		教員数				大学院設置基準			
						必要教員数			
		研究指導教員	うち教授数	補助教員	計	研究指導教員	うち教授数	補助教員	計
前期課程	機械工学専攻	14	8	4	18	5	3	3	8
	電気・電子工学専攻	12	6	1	13	5	3	3	8
	情報・メディア工学専攻	14	7	0	14	5	3	3	8
	建築建設工学専攻	15	9	2	17	4	3	3	7
	材料開発工学専攻	12	5	0	12	4	3	3	7
	生物応用化学専攻	11	4	0	11	4	3	3	7
	物理工学専攻	17	8	0	17	4	3	3	7
	知能システム工学専攻	12	4	2	14	4	3	3	7
	繊維先端工学専攻	7	4	2	9	4	3	3	7
	原子力・ｴﾈﾙｷﾞｰ安全工学専攻	19	11	0	19	4	3	3	7
	小　計	133	66	11	144	43	30	30	73
後期課程	総合創成工学専攻	103	71	35	138	8	3	3	11
計		236	137	46	282	51	33	33	84
附属国際原子力工学研究所（敦賀キャンパス）※工学研究科博士前期及び後期課程を分担		8	6	0	8	—	—	—	—
合計		437	245	106	543	148	98	107	255

（事務局資料）

資料 1-1-29　授業科目の専任教員による担当状況（平成 26 年度）

授業数 (総時間数)	担当教員数と時間数														
	教授			准教授			講師			助教			非常勤		
	人数	時間数	総時間数に対する割合	人数	時間数	総時間数に対する割合	人数	時間数	総時間数に対する割合	人数	時間数	総時間数に対する割合	人数	時間数	総時間数に対する割合
416 (16,500)	124	10,095	61.2 %	83	4,440	26.9 %	7	450	2.7 %	1	30	0.2 %	31	1,485	9.0 %

（事務局資料）

資料 1-1-30　採用・昇格人事における模擬授業評価

■　福井大学大学院工学研究科教員選考基準に関する内規（抜粋）

第５条　教授，准教授，専任講師又は助教に係る被選考者は，教員選考委員会及び教育技法評価委員会が行う模擬授業による教育技法評価を受けなければならない。
２　被選考者は，前項の教育技法評価の結果に合格しなければ，教授，准教授，専任講師又は助教になることができない。

■　模擬授業評価表

教育技法評価委員会の委員が以下の項目について評価する。

授業目標・準備	
明確性	授業の目標は明確に示されたか（授業全体と今回の講義について）
総合性	他の授業科目との関連等，総合的な観点からの位置付けや把握方法が示されたか

授業内容	
難易度	適切な難易度で，必要な内容が講義されたか
基礎学力考慮	学生の基礎学力を考慮し，必要に応じた基礎事項の補足説明があったか

学習方法	
授業記録	十分な余裕をもって学生が授業内容の記録をとることができるように配慮がなされたか
自己学習指導	学生の自己学習（予習・復習・自己調査）のための適切な指導がなされたか

講義技法	
可聴性	声は十分聞き取れたか，言葉は明瞭であったか，言っている内容は理解できたか
明快性	講義内容が明快で基礎的原理を分りやすく解き明かすものであったか
熱意	主題についての講師の熱意が現れている講義になっていたか

（事務局資料）

②　企業経験者の採用，任期制，テニュアトラック制度，および男女共同参画推進により，教員組織の活性化を図り，任期付教員，女性教員，外国人教員の数が増加した（女性教員の数は第１期の 2.3 倍に増加）（**資料 1-1-31～33**）。質の高い多様な教員が確保され，関係者の期待に応えている。

資料 1-1-31　多様な教員の在籍状況や採用実績

■　企業経験者（カッコ内は総数）

	機械工学	電気・電子工学	情報・メディア工学	建築建設工学	材料開発工学	生物応用化学	物理工学	知能システム工学	繊維先端工学	原子力・エネルギー安全工学	計
教　授	1 (7)	3 (6)	2 (7)	2 (9)	3 (4)	3 (4)	1 (8)	1 (4)	1 (4)	2 (5)	19 (58)
准教授	0 (6)	1 (6)	0 (7)	1 (5)	0 (7)	0 (7)	2* (8)	0 (9)	1 (3)	0 (4)	5 (62)
講　師	0 (3)	0 (1)	0 (1)	0 (3)	0 (0)	0 (0)	0 (1)	0 (0)	0 (1)	1 (2)	1 (12)
助　教	0 (1)	0 (1)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (1)	0 (1)	0 (0)	0 (4)
計	1 (17)	4 (14)	2 (15)	3 (17)	3 (11)	3 (11)	3 (17)	1 (14)	2 (9)	3 (11)	25 (136)
割合%	5.9	28.6	13.3	17.6	27.3	27.3	17.6	7.1	22.2	27.3	18.4

*物理工学の企業経験者の准教授２名のうち１名は外国人の女性，その他は全て日本人男性

（福井大学研究者総覧をもとに算出（平成 27 年度末の時点））

■　任期付教員（各年度の５月１日現在の人数）

テニュアトラック制度の活用などにより，第２期に任期付教員の数は増加している。

任期付教員数：第２期初年度　８名　⇒　第２期最終年度　11 名　（約 1.4 倍）

	平成 22 年度		平成 23 年度		平成 24 年度		平成 25 年度		平成 26 年度		平成 27 年度	
	任期付教員	特任・特命教員	任期付教員	特任・特命教員	任期付教員	特任・特命教員	任期付教員	特任・特命教員	任期付教員	特任・特命教員	任期付教員	特任・特命教員
工学部，工学研究科	8	10	8	8	6	17	2	16	3	10	3	9
産学官連携本部		2	1	4	2	5	1	2	1	4	1	5
附属国際原子力工学研究所		2		5	1	9	1	8	1	8	1	7
遠赤外領域開発研究センター		1		2		2		2		2		4
総合情報基盤センター					1	1	1	1	1	1	1	1
テニュアトラック推進本部							2		4		5	
博士人材キャリア開発支援センター								3		2		2
計	8	15	9	19	10	34	7	32	10	27	11	28

■　若手教員及び女性教員採用実績

テニュアトラック制度の活用などにより，第２期に若手教員及び女性教員の数は増加した。
女性教員：第１期最終年度　３名　⇒　第２期最終年度　７名　（約２．３倍）

年度	制度名	採用若手教員総数（女性：内数）	工学系女性教員総数
平成 21 年度	―	―	3
平成 22 年度	―	―	3
平成 23 年度	―	―	2
平成 24 年度	テニュアトラック普及・定着事業（アメニティ工学女性若手リーダー育成特区）	1(1)	3
平成 25 年度	テニュアトラック普及・定着事業（アメニティ工学女性若手リーダー育成特区及び重点研究若手リーダー育成特区）	2(1)	4
平成 26 年度	テニュアトラック普及・定着事業（重点研究若手リーダー育成特区）	2(1)	5
平成 27 年度	国立大学改革強化推進補助金特定支援型「優れた若手研究者」	3(1)	7

2.3 倍

■　外国人教員の数，出身国（平成 27 年 5 月 1 日現在）

第２期に外国人教員の数は増加した。
外国人教員：第１期最終年度　４名　⇒　第２期最終年度　６名　（１．５倍）

職種	教授	准教授	講師	助教	合　計
平成 21 年度人数	0	3	0	1	4
平成 27 年度人数	0	4	1	1	6

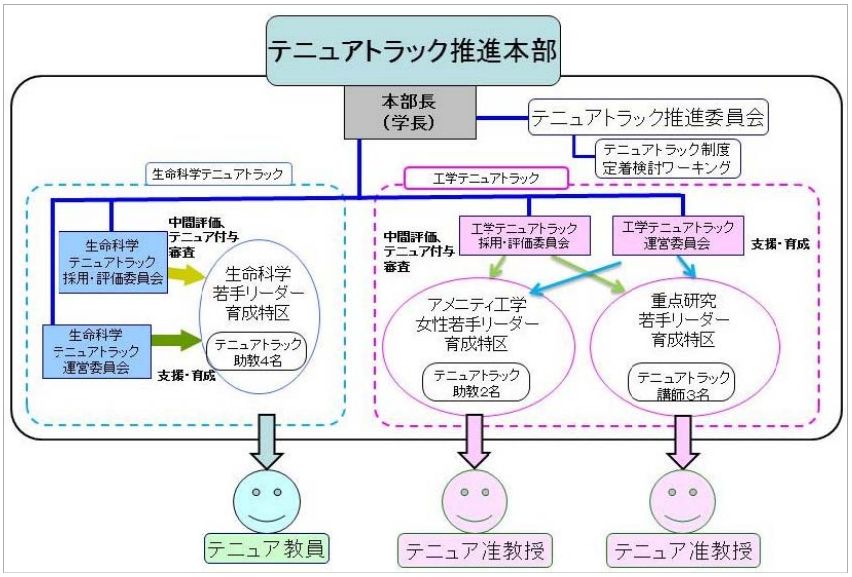
外国人教員の国籍も，第２期に多様化が進んだ。
第１期最終年度　２か国　⇒　第２期最終年度　４か国

国名	韓国	中国	フィリピン	オランダ	合計
平成 21 年度人数	1	3	0	0	4
平成 27 年度人数	1	2	2	1	6

（事務局資料）

資料 1-1-32　テニュアトラック制度とその運用状況

■ 教員の選考例（工学テニュアトラック）



特区	アメニティ工学女性若手リーダー育成特区		重点研究若手リーダー育成特区		
選考年度	H24年度選考	H25年度選考	H25年度選考	H26年度選考	
国際公募（JREC-INによる国際公募）	H24.8～10	H24.8～12	H25.8～10	H258～12	追加公募 H26.5～6
選考基準（評価の主眼点）	・これまでの研究の成果 ・採用後の研究の発展性 ・工学研究との関連性				
選考方法	書面審査及びインタビュー審査		書面審査、インタビュー審査及び模擬授業		
選考結果	応募者　7名 （うち外国人3名、女性7名） 採用者　1名	応募者　15名 （うち外国人6名、女性15名） 採用者　1名	応募者　7名 （うち外国人2名、女性0名） 採用者　1名	応募者　16名 （うち外国人3名、女性3名） 採用者　1名 【1名辞退】	応募者　14名 （うち外国人6名、女性2名） 採用者　1名

（事務局資料）

資料 1-1-33　男女共同参画推進功労等表彰式における工学研究科女性教員の表彰

男女共同参画推進功労等表彰式を実施しました。

本学における男女共同参画に対する一層の意識向上を図り、また、男女共同参画の促進及び将来の学術研究を担う優秀な女性研究者の育成に資するため、男女共同参画推進功労者表彰制度を平成26年度より制定し、表彰式を行っています。

平成27年度表彰式を3月31日に行いました。男女共同参画推進功労賞に医学部　長谷川美香教授、研究者奨励賞（男女共同参画）に大学院工学研究科　陳競鳶准教授が選ばれ、表彰状が授与されました。

眞弓光文学長は祝辞を述べ、ダイバーシティ研究環境実現に向けた継続的な取組の重要性を再確認しました。

（福井大学男女共同参画推進センターウェブサイトより）

●入学者選抜方法の工夫とその効果

【入学者確保と選抜】

① 前期課程,後期課程ともにアドミッション･ポリシー(AP)を設定･周知し(**資料 1-1-34, 35**)，AP に沿った入試を実施して入学者を確保している（**資料 1-1-36, 37**)。AP と選抜方法は継続的に改善を行い，入学者は AP に合致している（**資料 1-1-38, 39**)。

資料 1-1-34　前期課程のアドミッション・ポリシー（一部抜粋）

■　求める学生像

「フレッシュな感性と学問への強い情熱」

1．専門分野の高度な研究に主体的に取り組む人
2．未来社会を支える科学技術の創造と開発に意欲のある人
3．人間社会の持続的発展に寄与する研究開発をグローバルな視点から進める人

機械工学専　攻	「21 世紀の科学技術を創るのは君だ」 1．機械工学の幅広い知識を，社会に貢献する科学技術の創造に応用できる人 2．問題設定，解決にあたって独創性を発揮できる人 3．機械工学のより高度な専門知識を活かして，国際社会で活躍したい人
電気・電子工学専攻	「高機能電子材料・高度社会インフラシステム・先端情報技術など，ミクロからマクロまでの挑戦」 1．電気・電子工学分野の幅広い基礎学力を有する人 2．社会を支える科学技術の発展のため，創造的研究に取り組む意欲のある人 3．電気・電子工学分野の専門知識を国際社会の発展に役立てたい人
情報・メディア工学専攻	「人にやさしい高度 ICT 社会を支える技術者を目指せ」 1．自然科学および情報・メディア工学分野の基礎学力を有する人 2．夢と目標を持って情報・メディア工学分野の研究に意欲的に取り組む意志のある人 3．大学院生としての自覚と使命感を有し，地域社会・人類社会のために自らを磨くことのできる人
建築建設工学専攻	「社会基盤の安全性と快適性を担う技術者を目指して」 1．建築建設工学関連分野における基礎知識を有し，広い視野に立って研究に取り組むことができる人 2．地域や環境に対する建築建設工学技術者の役割を考えながら，熱意をもって勉学に取り組むことができる人 3．知識欲が旺盛で，学んだ知識を創造的に応用していく基礎能力を有する人
材料開発工学専攻	「先端材料開発を君の手で！」 1．化学と物理の知識を基にもの作りにチャレンジしたい人 2．グリーンケミストリー，超分子，新エネルギー，ソフトマテリアル，医用材料，ナノ材料，最先端物質に興味のある人 3．工学的センスを身に付け国際社会でグローバルに活躍したい人
生物応用化学専攻	「真理を究め技術を極めるー分子から生命までー」 1．化学やバイオテクノロジーの分野での研究や技術開発を通して社会に貢献したい人 2．社会の要請を踏まえて自ら研究・開発目標を設定し，その実現のために努力する人 3．深い洞察力と独創的な発想力をもつ人
物理工学専　攻	「最先端科学技術を支える物理学の世界へ」 1．微小世界の素粒子物理学から巨大世界の宇宙物理学まで，現代物理学の最先端を学びたい人 2．物理学を応用して 21 世紀の技術革新の牽引者になりたい人 3．物理学やその応用分野の研究者への道を歩みたい人

知能システム工学専攻	「人の知能と行動生成メカニズムを究明し知能システムを創造しよう」 1．数学や物理や工学一般などの基礎的能力および応用力のある人 2．プログラミング，機械工作，電子工作などが好きな人 3．未知なるテーマにチャレンジして，新しいことを開拓していこうと努力する人
繊維先端工学専攻	「先端的な繊維技術で，世の中の役に立とう！」 1．「繊維マインド」を持った高度な専門性をもつ技術者・研究者を目指したい人 2．繊維先端工学分野の研究で，社会や地域に貢献したい人 3．バイオや材料の知識と繊維の知識を兼ね備えた技術者・研究者になりたい人
原子力・エネルギー安全工学専攻	「目指せ，原子力・エネルギーのオールラウンドプレーヤー」 1．幅広い工学分野に関心を持ち，学部時代の専門分野について基礎学力が身に付いている人 2．原子力・エネルギーに関する関心を持ち，高度な専門性を有する技術者・研究者を目指したい人 3．安全，共生問題を通じて技術により社会へ貢献したいと考えている人

■　**入学者選抜の基本方針**

工学研究科博士前期課程の入学者選抜方法として，一般選抜，特別選抜（推薦），外国人留学生特別選抜，社会人特別選抜を行う。

一般選抜では，原則として，基礎科目，外国語科目（英語），専門科目の試験を課し，その結果と学部での成績，口述試験及び面接の結果を併せて総合的に判定する。

特別選抜（推薦）は，成績が優秀で人物ともに優れ，在籍する大学の学長又は学部長等が責任をもって推薦できる者を対象とし，口述試験及び面接，書類審査の結果を総合して判定する。

外国人留学生特別選抜は，国費外国人留学生又は私費外国人留学生として入学を希望する者で，成績優秀な者について，学力検査を免除し，口述試験及び面接，書類審査の結果を総合して判定する。

社会人特別選抜では，企業等に勤務している者を，所属長からの推薦に基づき，学力検査（英語又は専門科目），口述試験及び面接，書類審査の結果を総合して判定する。

（福井大学ウェブサイト（http://www.u-fukui.ac.jp/user_admission/examination/admi_policy/eng02/）より）

（福井大学ウェブサイトより）

資料 1-1-35　後期課程のアドミッション・ポリシー（一部抜粋）

■　**求める学生像**

「学際性・実践力を備えた高度専門技術者・研究者を目指して」

1．ものづくりを通して，社会や地域に貢献したい人
2．社会における技術者の使命と役割を理解し，自立的に勉学に取り組むことができる人
3．幅広い工学分野に関心を持ち，高度な専門性を有する技術者・研究者を目指したい人

■　**入学者選抜の基本方針**

工学研究科後期課程の入学者選抜方法として，一般選抜，外国人留学生特別選抜，社会人特別選抜を行う。

一般選抜では，筆記試験（英語），口述試験，書類審査の結果を総合して判定する。口述試験は，志望する研究分野に関連する科目，修士論文，研究計画書等の内容について行う。

外国人留学生特別選抜は，国費外国人留学生又は私費外国人留学生として入学を希望する者で，成績優秀な者について，学力検査を免除し，口述試験及び書類審査の結果を総合して判定する。口述試験は，修士論文，研究計画書等の内容及び外国語（英語，日本語のうちから母語を除く１か国語）について行う。

社会人特別選抜では，企業等に勤務している者を，所属長からの推薦に基づき，口述試験及び書類審査の結果を総合して判定する。口述試験は，修士論文，研究業績調書，研究計画書等の内容について行う。

（http://www.u-fukui.ac.jp/user_admission/examination/admi_policy/eng02/）

（福井大学ウェブサイトより）

資料 1-1-36　工学研究科の入学者選抜

課程	選抜の種類と方法
前期課程	推薦選抜（募集人員：約 121 名） 【面接及び口述試験，書類審査】
	一般選抜（募集人員：253 名　推薦，社会人，外国人留学生特別選抜を含む） 【学力検査（基礎科目，専門科目，英語），面接及び口述試験，書類審査】
	社会人特別選抜（募集人員：若干名） 【学力検査（専門科目，英語），面接及び口述試験，書類審査】
	外国人留学生特別選抜（募集人員：若干名） 【面接及び口述試験，書類審査】
	国際総合工学特別コース試験　４月入学・10 月入学（募集人員：若干名） （4 月入学は H27 から） 【書類審査】
後期課程	一般選抜（募集人員：22 名　社会人，外国人特別選抜を含む） 【学力検査（英語），面接及び口述試験，書類審査】
	社会人特別選抜（募集人員：若干名） 【面接及び口述試験，書類審査】
	外国人留学生特別選抜（募集人員：若干名） 【口述試験，面接及び書類審査（修士論文，研究計画書など）】
	10月入学（募集人員：若干名） 【学力検査（英語），口述試験，面接及び書類審査（修士論文，研究計画書など】
	国際技術研究者育成コース　４月入学・10 月入学（募集人員：若干名） （4 月入学は H27 から） 【書類選考】

（事務局資料）

資料 1-1-37 様々な選抜方法による入学者確保

■　前期課程

平成 25 年度大学院改組による入学定員の増加後も入学定員は継続して充足されている。

	平成 22 年度		平成 23 年度		平成 24 年度		平成 25 年度		平成 26 年度		平成 27 年度	
	4 月	10 月	4 月	10 月	4 月	10 月	4 月	10 月	4 月	10 月	4 月	10 月
一般選抜（含，推薦選抜）	281		293		243	0	240	0	267	0	259	0
社会人特別選抜	0		0		0	0	0	0	0	0	0	0
外国人留学生特別選抜	31		14		14	0	15	0	19	0	13	0
GEPIS		3		0		0		1		1	0	0
GEPIS（ABE ｲﾆｼｱﾃｨﾌﾞ）										3		0
GEPIS（JDS ﾐｬﾝﾏｰ）										0		2
合　計	315		307		257		256		290		274	
入学定員	239		239		239		253		253		253	
入学定員充足率	1.32		1.28		1.08		1.01		1.15		1.08	

■　後期課程

平成 25 年度の大学院改組よる定員適正化により，後期課程の入学定員は充足された。

	平成 22 年度		平成 23 年度		平成 24 年度		平成 25 年度		平成 26 年度		平成 27 年度	
	4 月	10 月	4 月	10 月	4 月	10 月	4 月	10 月	4 月	10 月	4 月	10 月
一般選抜	17	0	13	0	6	0	10	0	8	1	10	0
社会人特別選抜	7	2	4	1	4	0	17	1	13	1	16	1
外国人留学生特別選抜	3	1	4	0	6	0	1	0	4	1	1	0
GNEPIS（私費）		4		3		0						
GNEPIS（国費）		4		3		2						
GEP for R & D（私費）						2		1		0	1	0
合　計	38		28		20		30		28		29	
入学定員	40		40		40		22		22		22	
入学定員充足率	0.95		0.70		0.50		1.36		1.27		1.32	

※H27 年度の外国人留学生のうち 1 人が社会人特別選抜での入学者

（事務局資料）

資料 1-1-38　アドミッション・ポリシー「求める学生像」の見直しとアドミッション・ポリシーに沿った学生の確保

■　随時見直し（前期課程材料開発工学専攻）

平成 24 年度入学者選抜	「先端材料開発を君の手で！」 1．化学と工学の知識を基にもの作りにチャレンジしたい人 2．グリーンケミストリー，超分子，新エネルギー，ソフトマテリアル，医用材料，ナノ材料，最先端物質に興味のある人 3．工学的センスを身に付け国際社会でグローバルに活躍したい人
平成 25 年度入学者選抜	「先端材料開発を君の手で！」 1．化学と物理の知識を基にもの作りにチャレンジしたい人 2．グリーンケミストリー，超分子，新エネルギー，ソフトマテリアル，医用材料，ナノ材料，最先端物質に興味のある人 3．工学的センスを身に付け国際社会でグローバルに活躍したい人

（入試募集要項より）

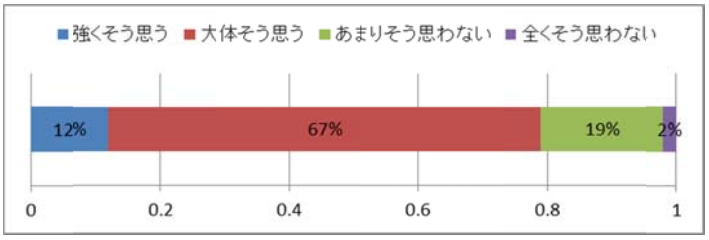
■　改組に伴う見直し（ファイバーアメニティ工学専攻→繊維先端工学専攻）

ファイバーアメニティ工学専攻	「革新的ファイバー技術で，循環型アメニティ社会を実現しよう」 1．「インテリジェントファイバー工学」の革新的分野の研究で，社会・地域貢献したい人 2．国際的・学際色豊かな研究環境で，高度な専門性を有する技術者・研究者を目指したい人 3．国際共同研究，地域貢献，産学連携の経験を通し，工学・自然科学の分野でリーダーシップ的役割を目指す人
繊維先端工学専攻	「先端的な繊維技術で，世の中の役に立とう！」 1．「繊維マインド」を持った高度な専門性をもつ技術者・研究者を目指したい人 2．繊維先端工学分野の研究で，社会や地域に貢献したい人 3．バイオや材料の知識と繊維の知識を兼ね備えた技術者・研究者になりたい人

（入試募集要項より）

■　教員に対するアンケート結果

設問　各専攻のアドミッション・ポリシーに合致した学生が入学していると思いますか？



※平成 27 年度前期課程入学生が AP に合致しているか調査し，工学研究科教員 118 名が回答。

（事務局資料）

資料 1-1-39　入学者選抜方法の改善事例

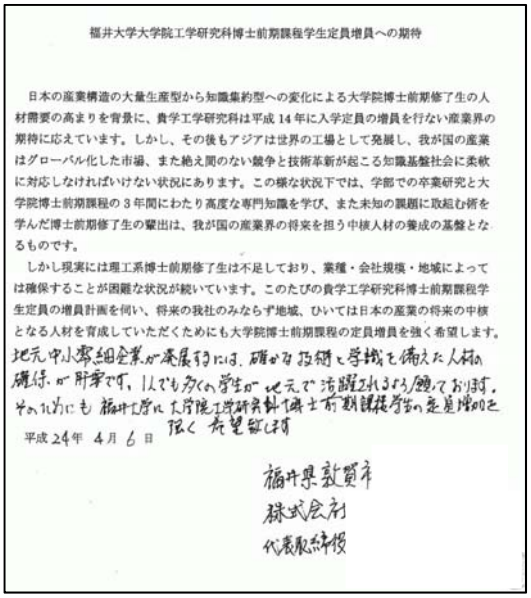
年　度	改善内容
平成 22 年度 (平成 23 年度入試)	【前期課程】 ・GNEPIS（国際共学ネットワーク特別コース）で出願書類に専門能力を示す研究業績を追加，さらに研究論文による書類選考を追加 ・ファイバーアメニティ工学専攻で専門科目に変えて外国語科目を追加，原子力・エネルギー安全工学専攻で試験科目を変更
平成 23 年度 (平成 24 年度入試)	【前期課程】 ・GEPIS で募集専攻を独立専攻の２専攻から全 10 専攻に拡大。 【後期課程】 ・GNEPIS（国際共学ネットワーク特別コース）にかわり，GEP for R&D（国際技術研究者育成コース）の募集開始
平成 24 年度 (平成 25 年度入試)	【前期課程】 ・ファイバーアメニティ工学専攻を繊維先端工学専攻に改組 ・改組に伴い募集定員の見直し（前期課程全体で 239 名から 253 名へ） 【後期課程】 ・４専攻から１専攻に改組 ・改組に伴い募集定員の見直し（40 名から 22 名へ）
平成 25 年度 (平成 26 年度入試)	【前期課程】 ・推薦で協定校推薦を実施（福井高専・石川高専との学術協定） ・推薦で募集定員を見直し ・一般の外国語科目で外部試験（TOEIC）を活用した選考を実施（原子力・エネルギー安全工学）
平成 26 年度 (平成 27 年度入試)	【前期課程】 ・一般の外国語科目で外部試験（TOEIC）を活用した選考を実施（機械工学），外国語科目を TOEFL,TOEIC スコアのみによる選考に変更（機械工学，原子力・エネルギー安全工学） ・推薦の協定校推薦に米子高専を加え３校に拡大 ・GEPIS で４月入学枠を新設 【後期課程】 ・GEP for R&D で４月入学枠を新設

（事務局資料）

② 平成 25 年度の大学院改組において，社会からの要請に応えて入学定員の適正化を行った（**資料 1-1-40，41**）。前期課程の入学定員は改組の前後を通して充足されており，後期課程の入学定員も改組により充足され，社会の期待に応えた（**資料 1-1-42**）。

資料 1-1-40　産業界からの前期課程入学定員増員の要望

平成 24 年度の外部評価結果や平成 24 年度策定の福井県「第９次職業能力開発計画」において指摘された若い研究人材の不足，および県内企業及び団体 27 機関から平成 24 年度に工学研究科に寄せられた前期課程入学定員の増員の要望を踏まえ，平成 25 年度に改組を行い前期課程の入学定員を 239 名から 253 名に増加させた。以下は，寄せられた増員要望の例である。



福井大学大学院工学研究科博士前期課程学生定員増員への期待

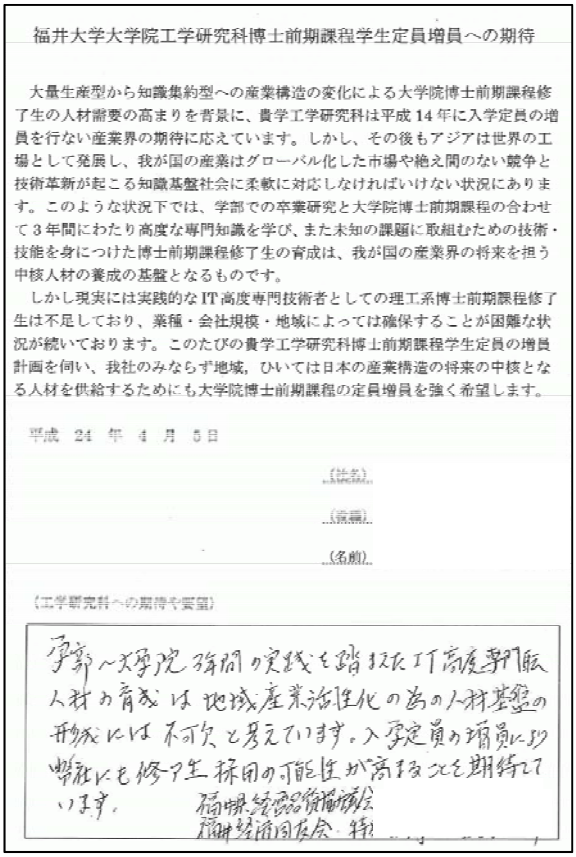
日本の産業構造の大量生産型から知識集約型への変化による大学院博士前期修了生の人材需要の高まりを背景に、貴学工学研究科は平成 14 年に入学定員の増員を行ない産業界の期待に応えています。しかし、その後もアジアは世界の工場として発展し、我が国の産業はグローバル化した市場、また絶え間のない競争と技術革新が起こる知識基盤社会に柔軟に対応しなければいけない状況にあります。この様な状況下では、学部での卒業研究と大学院博士前期課程の３年間にわたり高度な専門知識を学び、また未知の課題に取組む術を学んだ博士前期修了生の輩出は、我が国の産業界の将来を担う中核人材の養成の基盤となるものです。

しかし現実には理工系博士前期修了生は不足しており、業種・会社規模・地域によっては確保することが困難な状況が続いています。このたびの貴学工学研究科博士前期課程学生定員の増員計画を伺い、将来の我社のみならず地域、ひいては日本の産業の将来の中核となる人材を育成していただくためにも大学院博士前期課程の定員増員を強く希望します。

地元中小零細企業が発展するには、確かな技術と学識を備えた人材の確保が肝要です。以でも多くの学生が地元で活躍されるよう願っております。そのためにも福井大学に大学院工学研究科博士前期課程学生の定員増加を強く希望致します

平成 24 年 4 月 6 日

福井県敦賀市
株式会社
代表取締役



福井大学大学院工学研究科博士前期課程学生定員増員への期待

大量生産型から知識集約型への産業構造の変化による大学院博士前期課程修了生の人材需要の高まりを背景に、貴学工学研究科は平成 14 年に入学定員の増員を行ない産業界の期待に応えています。しかし、その後もアジアは世界の工場として発展し、我が国の産業はグローバル化した市場や絶え間のない競争と技術革新が起こる知識基盤社会に柔軟に対応しなければいけない状況にあります。このような状況下では、学部での卒業研究と大学院博士前期課程の合わせて３年間にわたり高度な専門知識を学び、また未知の課題に取組むための技術・技能を身につけた博士前期課程修了生の育成は、我が国の産業界の将来を担う中核人材の養成の基盤となるものです。

しかし現実には実践的な IT 高度専門技術者としての理工系博士前期課程修了生は不足しており、業種・会社規模・地域によっては確保することが困難な状況が続いております。このたびの貴学工学研究科博士前期課程学生定員の増員計画を伺い、我社のみならず地域，ひいては日本の産業構造の将来の中核となる人材を供給するためにも大学院博士前期課程の定員増員を強く希望します。

平成 24 年 4 月 5 日

（法名）

（会議）

（名前）

（工学研究科への期待や要望）

学部～大学院 3年間の実践を踏まえた IT 高度専門職人材の育成は地域産業活性化の為の人材基盤の形成には不可欠と考えています。入学定員の増員により弊社にも修了生採用の可能性が高まることを期待しています。

福井県経営品質協議会
福井経済同友会 特

（事務局資料）

資料 1-1-41　入学定員の見直し・適正化状況

福井大学大学院工学研究科（博士前期課程・博士後期課程）の改組について

福井大学大学院工学研究科の改組（平成 25 年４月から）について，平成 24 年７月 27 日に設置報告書が文部科学省に受理され，正式に決定した。

【前期課程】

前期課程では，「ファイバーアメニティ工学専攻」を「繊維先端工学専攻」に名称変更し，次のとおり一部の専攻で定員を変更した。

（旧）

専攻名	定員
機械工学専攻	25
電気・電子工学専攻	20
情報・メディア工学専攻	23
建築建設工学専攻	22
材料開発工学専攻	24
生物応用化学専攻	21
物理工学専攻	14
知能システム工学専攻	27
ファイバーアメニティ工学専攻	36
原子力・エネルギー安全工学専攻	27
計	239

（新）

専攻名	定員
機械工学専攻	**32**
電気・電子工学専攻	**30**
情報・メディア工学専攻	**31**
建築建設工学専攻	**28**
材料開発工学専攻	24
生物応用化学専攻	21
物理工学専攻	**18**
知能システム工学専攻	27
繊維先端工学専攻	**15**
原子力・エネルギー安全工学専攻	27
計	**253**

【後期課程】

後期課程では，これまでの４専攻を下表のとおり１専攻に統合し，定員を変更した。

（旧）

専攻名	定員
物質工学専攻	6
システム設計工学専攻	7
ファイバーアメニティ工学専攻	15
原子力・エネルギー安全工学専攻	12
計	40

（新）

専攻名	定員
総合創成工学専攻	**22**

（事務局資料）

資料 1-1-42　入学定員充足状況

■　前期課程

平成 25 年度改組により入学定員が増加（239 名から 253 名へ）した後も，入学定員は安定して充足されている。

年度	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
入学定員充足率	1.32	1.28	1.08	1.01	1.15	1.08

■　後期課程

平成 25 年度改組により入学定員が減少し（40 名から 22 名へ），その後入学定員は充足されている。

後期課程改組の趣旨

・入学定員を適正化して専門教育・研究指導の密度向上

・総合・学際性を付与する教育プログラム実施により，広い知識と見識を持ち合わせた高度専門職業人の養成強化



（事務局資料）

【多様な学生の入学促進】

① 社会人には，長期履修制度などの特例措置を設け，好評を得ている（**資料 1-1-43，44**）。留学生に対しては，英語のみで修了できるコースとして「国際技術研究者育成コース(GEP for R&D)」(後期課程,平成 24 年度～）と「国際総合工学特別コース(GEPIS)」(前期課程）を設けている（**資料 1-1-45**)。GEPIS では平成 24 年度にカリキュラムと募集方法の見直しを行った結果，4 年間の平均の入学者数が 2.3 倍に増加した（**資料 1-1-46**)。

資料 1-1-43　社会人・留学生選抜の実施状況（平成 27 年度）

対象	課程	選抜の種類	選　抜　方　法
社会人	前期課程	社会人特別選抜	学力検査，口述試験，面接，書類審査
	後期課程	社会人特別選抜	口述試験,書類審査
留学生	前期課程	外国人留学生特別選抜	口述試験，面接，書類審査
		国際総合工学特別コース(GEPIS)	書類審査
	後期課程	外国人留学生特別選抜	口述試験,書類審査
		国際技術研究者育成コース(GEP for R&D)	書類審査

（事務局資料）

資料 1-1-44　社会人学生に対する修学上の配慮

■　福井大学大学院長期履修学生規程（抜粋）

第２条　本学大学院が，長期履修学生に対し，その計画的な履修を認める期間（以下「長期履修期間」という。）は，教育学研究科修士課程・教職大学院の課程，医学系研究科修士課程及び工学研究科博士前期課程においては４年以下，医学系研究科博士課程及び工学研究科博士後期課程においては６年以下とする。

第５条　前２条の申請については，別に定めるところにより審査を行い，当該大学院研究科委員会（工学研究科においては，工学研究科教授会とする。以下同じ。）の議を経て，学長が許可する。

第６条　長期履修学生が，長期履修期間を超える場合，在学できる最長の在学期間は，教育学研究科修士課程・教職大学院の課程，医学系研究科修士課程及び工学研究科博士前期課程においては５年，医学系研究科博士課程においては９年，工学研究科博士後期課程においては７年とする。

■　14 条特例適用対象及び長期履修学生数（平成 26 年度）

課程	14 条特例適用者	長期履修生	合計
前期課程	1	0	1
後期課程	36	7	43

■　夜間・休日等開講

・工学研究科では，14 条特例適用者に係る授業を６・７限目に開講している。

・工学研究科では，夏季休業期間中等に個別の研究指導を行っている。

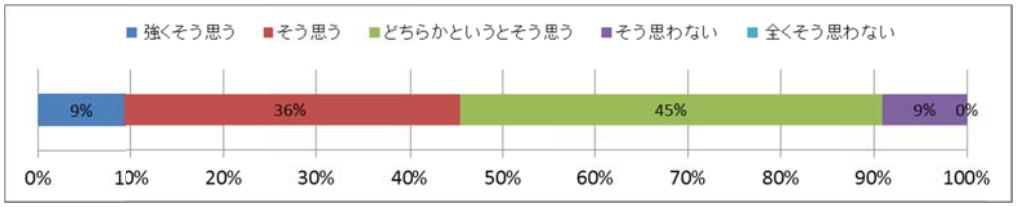
夜間・休日等開講科目数（平成 27 年度）

課程・専攻	科目数	夜間・休日等開講科目数	割合
前期課程	408	0	0.0%
後期課程	67	37	55.2%

■　14 条特例や長期履修制度に対する学生の評価

設問：企業等に在職のまま大学院で学ぶ社会人が夜間や休日等に授業を受けることができる措置（大学院設置基準第 14 条に定められた教育方法の特例措置），および長期履修制度などの修学上の制度は，学修や研修に専念するうえで役立ったと思いますか？これらの該当者の皆さんにお聞きします。

⇒　回答者の９割以上が「強く～どちらかというと役立った」と評価している。



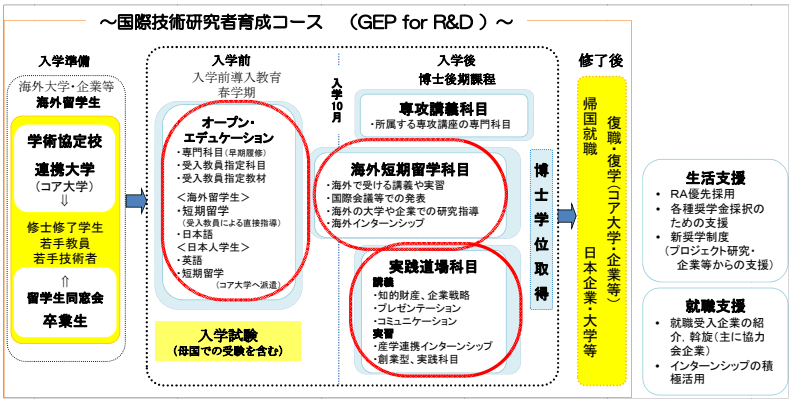
（平成 26 年度「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」結果より抜粋）

（事務局資料）

資料 1-1-45　英語のみで修了できるコース

■　国際技術研究者育成コース（GEP for R&D）（後期課程）

後期課程を英語だけで修了できるコースとして，平成 19 年度から平成 24 年度まで「国際共学ネットワーク特別コース（GNEPIS）」を設置し（国費枠，私費枠），研究者育成を中心とした人材育成を行ってきた。その後継として，「国際技術研究者育成コース（GEP for R&D）」を，産業界で活躍できる人材育成に重点を移し，平成 24 年度に設置した（私費枠のみ）。外国人留学生対象のプログラムとしてはあまり例のない，インターンシップの実施，「産業現場に即応する実践道場」の科目等，産業界に対する知識と理解を深めることができるプログラムとなっている。



■　国際総合工学特別コース（GEPIS）（前期課程）

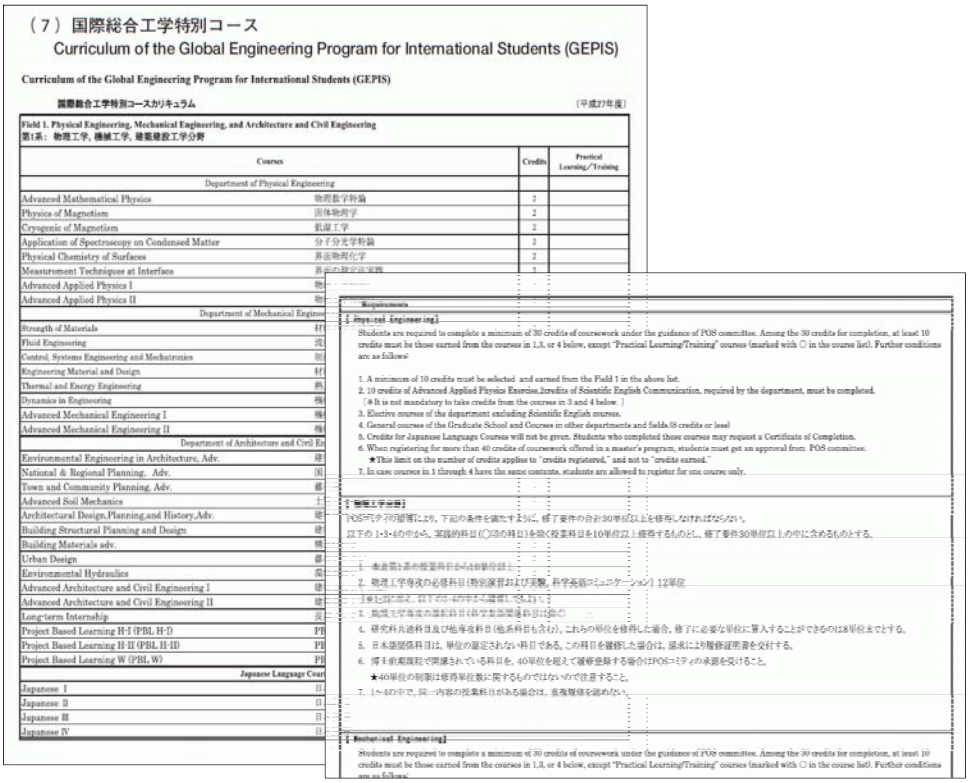
国際総合工学特別コース（GEPIS）は，外国人留学生が英語による授業科目及び研究指導を受けて，修士(工学)の学位を取得するためのものである。４つの系が設けられており，修了要件は系の中の「分野」ごとに定められている。

第１系「物理工学，機械工学，建築建設工学分野」

第２系「電気・電子工学，情報・メディア工学，知能システム工学分野」

第３系「材料開発工学，生物応用化学，繊維先端工学分野」

第４系「原子力・エネルギー安全工学分野」（附属国際原子力工学研究所との共同）


（７）国際総合工学特別コース
Curriculum of the Global Engineering Program for International Students (GEPIS)

Curriculum of the Global Engineering Program for International Students (GEPIS)

国際総合工学特別コースカリキュラム　（平成27年度）

Field 1. Physical Engineering, Mechanical Engineering, and Architecture and Civil Engineering
第1系：物理工学，機械工学，建築建設工学分野

Courses		Credits	Practical Learning/Training
Department of Physical Engineering			
Advanced Mathematical Physics	物理数学特論	2	
Physics of Magnetism	固体物理学	2	
Cryogenic of Magnetism	低温工学	2	
Application of Spectroscopy on Condensed Matter	分子分光学特論	2	
Physical Chemistry of Surfaces	界面物理化学	2	
Measurement Techniques at Interface	界面の測定法実践	1	
Advanced Applied Physics I	物		
Advanced Applied Physics II	物		
Department of Mechanical Engine			
Strength of Materials	材		
Fluid Engineering	流		
Control, Systems Engineering and Mechatronics	制		
Engineering Material and Design	材		
Thermal and Energy Engineering	熱		
Dynamics in Engineering	機		
Advanced Mechanical Engineering I	機		
Advanced Mechanical Engineering II	機		
Department of Architecture and Civil En			
Environmental Engineering in Architecture, Adv.	建		
National & Regional Planning, Adv.	国		
Town and Community Planning, Adv.	都		
Advanced Soil Mechanics	土		
Architectural Design,Planning,and History,Adv.	建		
Building Structural Planning and Design	建		
Building Materials adv.	構		
Urban Design	都		
Environmental Hydraulics	環		
Advanced Architecture and Civil Engineering I	建		
Advanced Architecture and Civil Engineering II	建		
Long-term Internship	長		
Project Based Learning H-I (PBL H-I)	PE		
Project Based Learning H-II (PBL H-II)	PE		
Project Based Learning W (PBL W)	PE		
Japanese Language Cour			
Japanese I	日		
Japanese II	日		
Japanese III	日		
Japanese IV	日		

Requirements

[Department of Mechanical Engineering]

Students are required to complete a minimum of 30 credits of coursework under the guidance of POS committee. Among the 30 credits for completion, at least 10 credits must be those earned from the courses in 1,3, or 4 below, except "Practical Learning/Training" courses (marked with ○ in the course list). Further conditions are as follows:

1. A minimum of 10 credits must be selected and earned from the Field 1 in the above list.
2. 10 credits of Advanced Applied Physics Exercise,2credits of Scientific English Communication, required by the department, must be completed.
（※It is not mandatory to take credits from the courses in 3 and 4 below. ）
3. Elective courses of the department excluding Scientific English courses.
4. General courses of the Graduate School and Courses in other departments and fields.(8 credits or less)
5. Credits for Japanese Language Courses will not be given. Students who completed these courses may request a Certificate of Completion.
6. When registering for more than 40 credits of coursework offered in a master's program, students must get an approval from POS committee.
★This limit on the number of credits applies to "credits registered," and not to "credits earned."
7. In case courses in 1 through 4 have the same contents, students are allowed to register for one course only.

[物理工学専攻]

POSでカリキュラムの指導により，下記の条件を満たすように，修了要件の合計30単位以上を修得しなければならない。

以下の 1・3・4 の中から，実践的科目（○印の科目）を除く授業科目を10単位以上修得するものとし，修了要件30単位以上の中に含めるものとする。

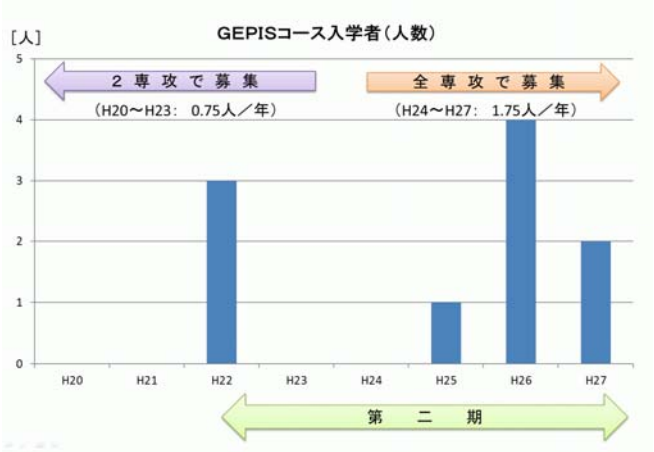
1. 本専攻と系の授業科目から10単位以上
2. 物理工学専攻の必修科目（特別演習および実験，科学英語コミュニケーション）12単位
（※1）同じ系は，以下の 4 つのうち 2 種類（1, 3, 4）。
3. 物理工学専攻の選択科目（自分の系以外の科目は除く）
4. 研究科共通科目及び他専攻科目（他系科目も含む）。これらの単位を修得した場合，修了に必要な単位に算入することができるのは8単位までとする。
5. 日本語関係科目は，単位の認定されない科目である。この科目を履修した場合は，請求により履修証明書を交付する。
6. 博士前期課程で開講されている科目を，40単位を超えて履修登録する場合はPOSコミティの承認を受けること。
★40単位の制限は修得単位数に関するものではないので注意すること。
7. 1～4の中で，同一内容の授業科目がある場合は，重複履修を認めない。

[Department of Engineering]

Students are required to complete a minimum of 30 credits of coursework under the guidance of POS committee. Among the 30 credits for completion, at least 10 credits must be those earned from the courses in 1,3, or 4 below, except "Practical Learning/Training" courses (marked with ○ in the course list). Further conditions are as follows:

（事務局資料）

資料 1-1-46　国際総合工学特別コース(GEPIS)の入学者状況



平成 24 年度選抜から，GEPIS で募集を行う専攻を独立専攻の２専攻から全専攻(10 専攻)に拡大した。これに伴い，各専攻が一定数の科目の開講に責任を持って系の数を３から４に増やし，広い分野が体系的にカバーされるようになった。

募集を全専攻に拡大した平成 24 年度から平成 27 年度までの４年間の入学者数は，それ以前の４年間（平成 20 年度～平成 23 年度）の入学者数の約 2.3 倍である。

（事務局資料）

② 海外との協定や政策事業等に基づく留学生等の受入れ（**資料 1-1-47**），協定に基づく高等専門学校専攻科等からの学生の受入れを行い（**資料 1-1-48，49**），多様な学生の入学が促進され，社会の期待に応えた。

資料 1-1-47　協定や事業に基づく留学生の受入れ

協定	受入実績	事業	受入実績
東京電力福島第一原子力発電所事故後の原子力に関する教育と訓練における欧州・日本交換プロジェクト（EUJEP2）	平成 27 年度 前期課程学生 １名（正規生）	ABE イニシアティブ（JICA）	平成 26 年度 前期課程学生 ３名（正規生）
		人材育成奨学計画（JDS）事業（JICA）	平成 27 年度 前期課程学生 ２名（正規生）
		さくらサイエンスプラン	平成 26 年度 大学院生 18 名 （短期間の受入れ）

（事務局資料）

資料 1-1-48　高等専門学校等との協定に基づく前期課程学生の受入れ

相　手　先	協定締結・発効年月日	受入実績
福井工業大学原子力応用技術工学科	平成 20 年１月 10 日	平成 26 年度：　１名
福井工業高等専門学校	平成 25 年４月１日	平成 26 年度：　１名

（事務局資料）

資料 1-1-49　福井大学大学院工学研究科と福井工業高等専門学校との推薦入学に関する覚書（抜粋）

福井大学大学院工学研究科と福井工業高等専門学校との推薦入学に関する覚書

福井大学大学院工学研究科（以下「甲」という。）と福井工業高等専門学校（以下「乙」という。）は，乙が推薦する優秀な学生に対して，甲における勉学の機会を提供することに関し，次のとおり覚書を締結する。

1　甲は，乙との教育研究交流に関する協定第１条第３号に基づき，有為な研究者及び技術者を育成するため，乙が人物及び学力ともに優秀と認め推薦する学生を，相互信頼の精神を持って受け入れる。
2　甲の受け入れる学生は，乙の専攻科に在学し，引き続き甲の博士前期課程に進学を希望する者に限り，毎年，若干名とする。
3　乙は，推薦した学生が合格した場合には入学を確約させるものとする。
4　出願等に関しては，甲が作成する「福井大学大学院工学研究科博士前期課程（協定校推薦入学）学生募集要項」によるものとする。
5　甲は，選考の結果について，乙の長と受験者に対し文書で通知するものとする。
6　入学手続き期間及び入学時の経費等については，甲が定めるものとし，合格者に対し所定の要項等で通知するものとする。
7　その他必要事項が生じた場合は，その都度協議するものとする。
8　本覚書は，平成25年４月１日より１年間をその有効期限とする。ただし，期間満了の１か月前までに甲又は乙のいずれかより申し出がない場合は，更に１年間延長するものとし，以降もまた同様とする。

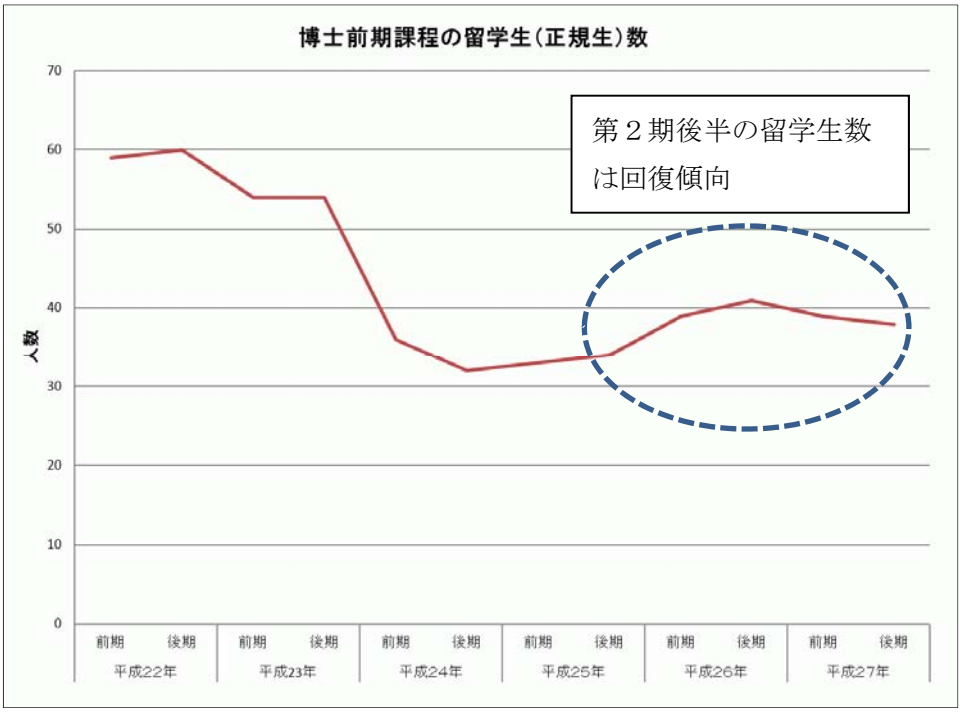
（事務局資料）

③　工学部に在籍する交換留学生に進学を促す取組を行った結果，東日本大震災以降減少した前期課程の外国人留学生（正規生）の数が回復傾向にある（**資料 1-1-50**）。

資料 1-1-50　前期課程の外国人留学生数（正規生）

平成 24 年度に外国人留学生（正規生）の数が大きく減少した。これは東日本大震災以降，全国的に外国人留学生が減少するなかで，原発立地県にある本学にはその影響がさらに強く現れたものと考えられる。

前期課程への留学生を増加させる取組として，工学部所属の交換留学生を対象に進学説明会を実施し，本学大学院工学研究科前期課程への進学をバックアップした。また，交換留学生の指導教員とのマッチングを丁寧に行い，交換留学後も研究継続を希望する留学生の発掘に努めた。この取組により，母国の在籍大学を卒業後に，本学に進学する留学生数も交換留学生数と連動して増加しており，前期課程の留学生数は回復傾向にある。



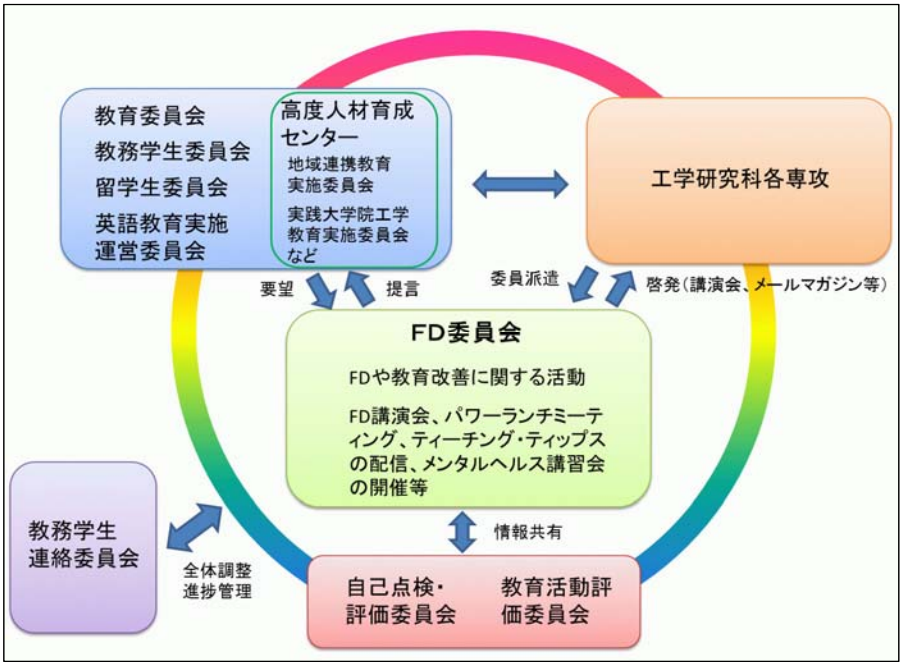
（事務局資料）

●教員の教育力向上や職員の専門性向上のための体制の整備とその効果

【FD，教員評価】

FD 委員会を中心とする FD 体制が整備され（**資料 1-1-51**），様々な FD 活動が実施され教員の好評を得ている（**資料 1-1-52，53**）。調査の結果は第２期における教員の教育力向上を裏付けており（**資料 1-1-54**），これは FD 活動が成果をあげていることの証左である。

資料 1-1-51　FD 委員会を中心とした FD 体制



（事務局資料）

資料 1-1-52　FD 活動の例

第２期に始まった FD 活動であるパワーランチ・ミーティング（平成 24 年度～平成 26 年度），ティーチング・ティップス（平成 24 年度～），アクティブ・ラーニング通信（平成 27 年度～），ランチタイムしゃべり場（平成 27 年度～）を含め，多くの FD 活動が行われた。

年度	内容	参加人数
平成 22 年度	FD 研修会「心理相談から見える問題点と対応」	105
平成 23 年度	FD 研修会「メンタルヘルス講習会-2010 年度集計を中心に－」	133
平成 24 年度	FD パワーランチ・ミーティング（全４回）	36
	ティーチング・ティップス（全８回）　（メール配信）	－
	FD 後援会「ｴﾝｼﾞﾆｱﾘﾝｸﾞ・ﾌｧｼﾘﾃｰｼｮﾝと大学教育への応用」	60
平成 25 年度	FD パワーランチ・ミーティング（全７回）	56
	FD 後援会「ﾌｧｼﾘﾃｰｼｮﾝを活かした問題解決の基本を学ぶ」	65
	ティーチング・ティップス（全 19 号）　（メール配信）	－
平成 26 年度	FD 研修会「学生支援の現状と課題」	124
	FD 研修会「学生支援に役立つリラクゼーションの体験」	105
	FD パワーランチ・ミーティング（全６回）	48
	ティーチング・ティップス（全 23 号）　（メール配信）	－
平成 27 年度	FD 研修会「大学における合理的配慮」	122
	アクティブ・ラーニング通信（全 12 号）　（メール配信）	－
	【FD】ランチタイムしゃべり場（全６回）	53

■　工学部・工学研究科の全教員に配信された「ティーチング・ティップス」のタイトル（平成 26 年度）

(10)以外は，学部と大学院の両方に係る内容である。

配信したティーチング・ティップスのタイトル

(1) 反転授業、やってます！	(13)「授業外学修時間増大法」の体験談、大募集！
(2) 双方向性を持った授業：ガンバってはいますが・・・	(14) 生活時間見直しによる学修時間増大
(3) 授業アンケート	(15)「青鬼さん」してみた
(4) ５つの手抜き、やってます！	(16) 魔法のとけたあと
(5)「あーしてもこうならない」から学ぶこと	(17) 尋ねるだけ学修時間増大法
(6)「講義ノート」から学ぶこと	(18) 学習時間増大法
(7) Potluck Teaching Tips #1	(19) 授業外学習時間増大を考える
(8)「反転授業」結果報告	(20) 良い授業(授業で対話を増やす)をするための試み
(9) e-learning 実施結果に見る学生像	(21) 学修時間増大法
(10) 数学プレースメントテスト：舞台裏のティップス	(22) 教員のコミュニケーション能力
(11) ティーチング・ティップス	(23) アクティブ・ラーニングを考える
(12) 教育ツールの開発をお勧めします	

■　パワーランチ・ミーティングにおいて教員間で議論された問題（平成 26 年度）

パワーランチ・ミーティングは，研究科長＋副研究科長と教員の意見交換昼食会であり，年に 10 回程度開催される。以下で（※）印が付された項目は学部と大学院の両方に係る内容である。

・組織改編問題　（※）	・読書教育
・教員数減少の問題　（※）	・電子ブックの教育への活用について（※）
・受験生獲得法　（※）	・学生の各種大会への参加について　（※）
・大学院定員確保問題（※）	・創成教育・デザイン教育について　（※）
・新年度の新入生合宿研修について	・適切な授業科目数について　（※）
・初年次教育	・学期制・キャップ制について
・共通教育について	・建物・教室・実験設備等の問題（※）
・英語教育・第２外国語教育の問題	・会議時間の問題
・教職科目への対応	・ＦＤへの参画について　（※）
・欠席学生や精神的問題を抱える学生への対応（※）	・宿舎の問題
・教育負担の問題　（※）	など

（事務局資料）

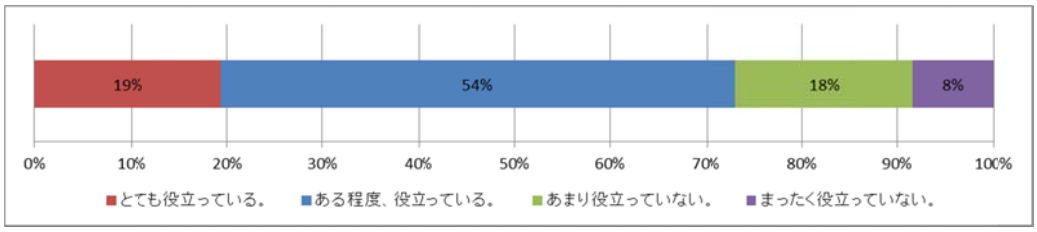
資料 1-1-53　FD 活動に対する評価

■　FD 活動全般についての教員へのアンケート結果

工学部・工学研究科の教育にかかわる教員に対して実施したアンケートの結果は，FD 活動が有意義であり，第２期期間中に授業改善が進んだことを示している。

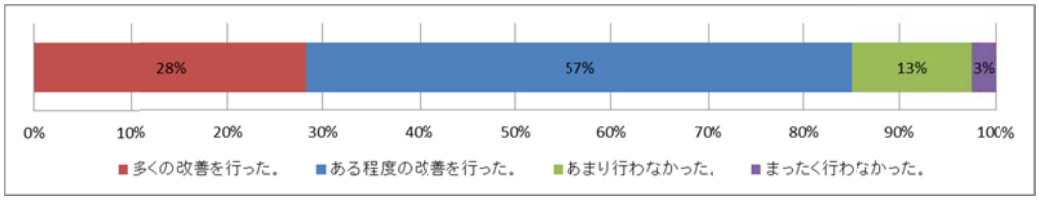
設問　FD 委員会の活動が役に立っていますか？

回答者 119 名の 73%が「とてもあるいはある程度役立っている」と回答。



設問　平成 25 年度から 27 年度の間に授業改善を行いましたか？

回答者 120 名の 85%が「多くのあるいはある程度の授業改善を行った」と回答。

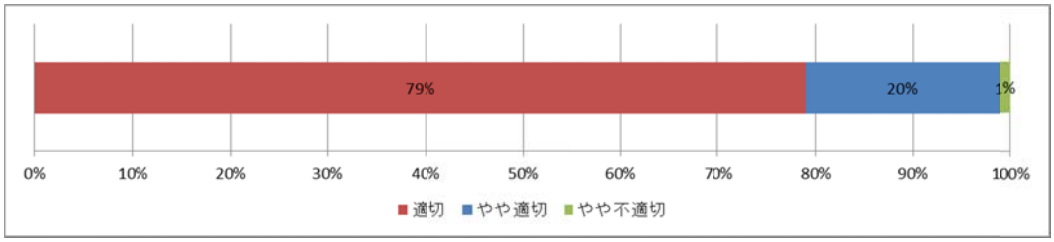


■　FD 研修会参加者に対するアンケート結果の例

以下は，平成 26 年 7 月 11 日開催の FD 研修会「学生支援の現状と課題」（参加者数 124 名）における参加者アンケートの結果の抜粋。ほとんどの参加者が研修内容は適切であり，分かりやすい説明であったと回答している。

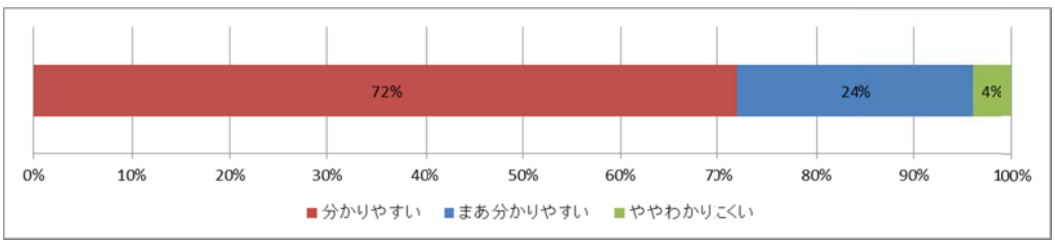
設問　研修内容は適切でしたか。

99%の回答者が「適切」又は「やや適切」と回答している。



設問　研修内容はわかりやすかったですか。

96%の回答者が「適切」又は「やや適切」と回答している。



（事務局資料）

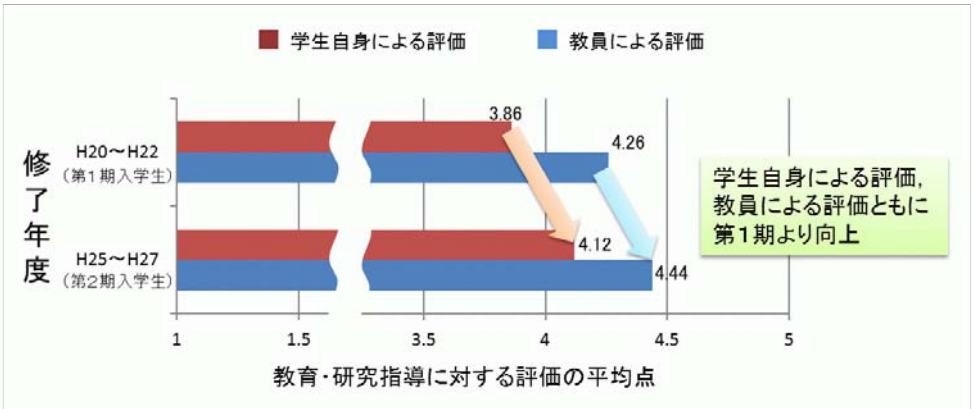
資料 1-1-54　教員の教育力の向上を裏付ける調査結果

■「福井大学の教育・研究に対する満足度調査」の結果

平成 21 年度と平成 27 年度に実施した「福井大学の教育・研究に対する満足度調査」を実施し，前期課程修了予定者に対して能力等の涵養状況を尋ねた結果，平成 25 年度には 19 項目中 17 項目について，回答者の 90%以上が「十分～ある程度身についた」と回答し，かつその割合は平成 21 年度よりも高かった（**P7-146 後掲資料 2-1-12**）。

■「プログラム・オブ・スタディ評価結果報告書」の結果

前期課程学生とその指導教員は，修了時に「プログラム・オブ・スタディ評価結果報告書」を専攻に提出する。その中で，学生は，POS コミティや POS の制度のもとで受けた教育・研究指導を５点満点で総合評価する。また，教員は，「多様な背景や目的を持って入学してくる大学院生に，それぞれの個性に応じた教育を施す」という視点から，本学生に行った教育・研究指導を５点満点で総合評価する。下の結果は，第１に比べ第２期のほうが質の高い教育・研究指導が行われていると学生も教員も評価していることを示しており，これは研究指導も含めた教員の総合的な教育力が第１期より向上していることの証左である。



（事務局資料）

② 平成 26 年度に新基準での教員の教育活動評価を実施し（**資料 1-1-55**），「活動状況が極めて優れている」等の評価を得た教員に特別昇給を付与した。これは，大学機関別認証評価（平成 27 年度受審）で「主な優れている点」として高く評価された。

資料 1-1-55　全学方針に基づく新たな基準により実施した教育活動評価

■　福井大学教員評価規程（抜粋）

（評価の目的）
第２条　教員評価は，次の各号に掲げる目的のために実施する。
(1) 教員が自己の教育，研究，社会貢献・国際交流等諸活動を点検し，評価することにより，自己の意識改革を促すとともに，本学の教育研究活動等の活性化を促進する。
(2) 本学が進むべき方向性を掲げた長期目標や中期目標・中期計画に関する取組に携わる教員を積極的に評価することにより，各目標の円滑な達成を目指す。
(3) 評価結果を公表することにより，本学が広く国民の理解と支持を得られるよう努め，もって社会への説明責任を果たす。
(4) 教員の実績等を客観的かつ公正に評価し，評価結果を人事評価へ適切に反映させる。
（対象者）

第３条　教員評価の対象は，国立大学法人福井大学職員就業規則（平成 16 年福大規則第７号）第２条第２項に定める教育職員のうち，教授，准教授，講師，助教及び助手であって，評価対象期間中に１年以上在籍している者とする。ただし，テニュアトラック推進本部に所属する教員は除く。

（対象期間等）

第４条　教員評価は，３年ごとに実施し，評価を実施する年度の前年度以前の３年間（本学における在籍期間が３年未満の場合は，当該期間）を対象とする。

第７条　評価は，教育活動，研究活動，社会貢献・国際交流活動及び管理運営活動の４領域で評価を行う。ただし，医学部に所属し診療活動に従事する教員は，診療活動を加えた５領域で評価を行うものとする。

２　センター等の教員に対する評価は，前項に掲げる領域に「センター等の設置目的に合致した活動（以下「特定活動」という。）」を加えることができるものとし，その内容は各センター等が別に定める。

（評価基準等）

第８条　各評価領域の活動状況の評価は，次に掲げる評点及び標語に基づき行う。

SS　活動状況が極めて優れている
S　活動状況が優れている
A　活動状況が良好である
B　活動状況が適切である
C　活動状況に一部改善を要する
D　活動状況に問題があり大幅な改善を要する

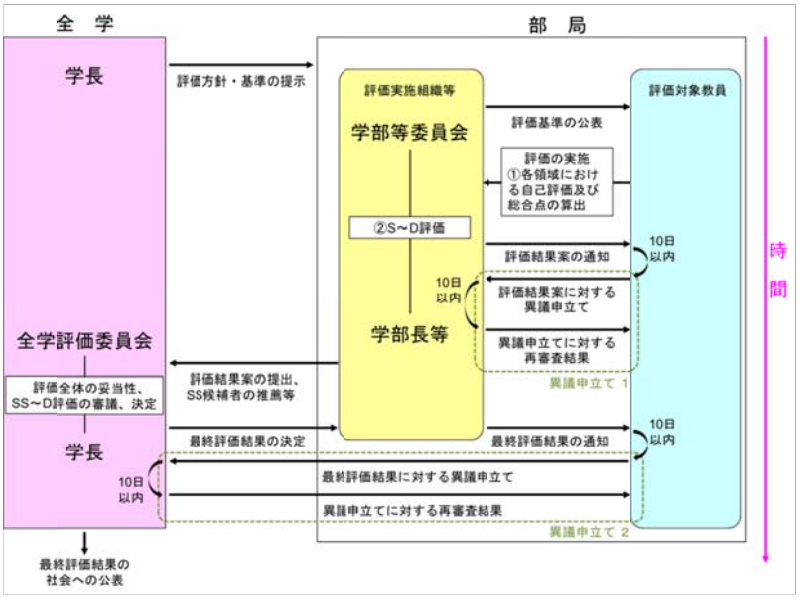
２　前項に定める評価の目安とするための評価指針及び評価基準（以下「評価基準等」という。）を，別表のとおり定める。

３　部局の長は，評価に際し，所属する教員に対し評価基準等を公表するものとする。

第 12 条　学長は，最終評価結果を次の各号に掲げる方法により，人事評価に反映させることができる。

(1) SS 及び S の教員に対する昇給
(2) C の教員に対する指導
(3) D の教員に対する改善勧告又は号給の調整等

■　評価のフローチャート



■　評価結果

	SS	S	A	B	C	合計
教育活動		6	105	23		134
研究活動		22	82	27	3	134
社会貢献・国際交流活動		5	98	24	7	134
管理運営活動		12	109	13		134
総合評価	2	5	88	39		134

■　教員個人評価結果の公表（一部抜粋）

SS 評価を受けた教員の氏名，評価理由は WEB 上で公開される。

教員名：葛原　正明	所属：大学院工学研究科電気・電子工学専攻	職：教授
教育面において，教育評価に基づく教育努力奨励体制の構築を目的として工学部で設けた年度優秀教員称号を平成 21 年度に授与され，また，海外の教育機関（オーストリア，スイス，台湾，香港など）から複数回にわたり招聘されている。さらに，工学研究科博士後期課程においては計 7 名（内 3 名は学位取得修了，4 名：在学中，1 名：留学生，3 名：社会人）の学生を指導しており本学の教育活動の円滑な実施に多大なる貢献をしている。 研究面では，文部科学省，経済産業省等から総額 3 億円以上の外部資金を獲得し，間接経費（約 4 千万円）の確保に貢献している。さらに，研究に取り組んでいる窒化物半導体分野において極めて優れた成果を上げており，平成 25 年度には応用物理学会から最高会員の称号であるフェローの称号を授与された。また，応用物理学会の欧文誌である JJAP/APEX 編集委員として編集貢献賞を受賞している。その他，社会貢献，国際交流活動，管理運営活動も良好である。 以上の理由から SS と判定した。		

教員名：沖　　昌也	所属：大学院工学研究科生物応用化学専攻	職：准教授
教育面においては，教育評価に基づく教育努力奨励体制の構築を目的として工学部で設けた年度優秀教員称号を平成 24 年度に授与され，また，工学研究科博士後期課程の学生確保に多大な貢献をしている。研究面においては，学長奨励賞を受賞し，先端医工連携研究推進特区の特区研究者に選ばれている。また，戦略的創造研究推進事業個人型研究（さきがけタイプ）に採択され，高額の外部資金を獲得している。社会貢献・国際交流活動，管理運営活動も良好である。 以上の理由から SS と判定した。		

（www.u-fukui.ac.jp/wp-content/uploads/h26evaluation.pdf）

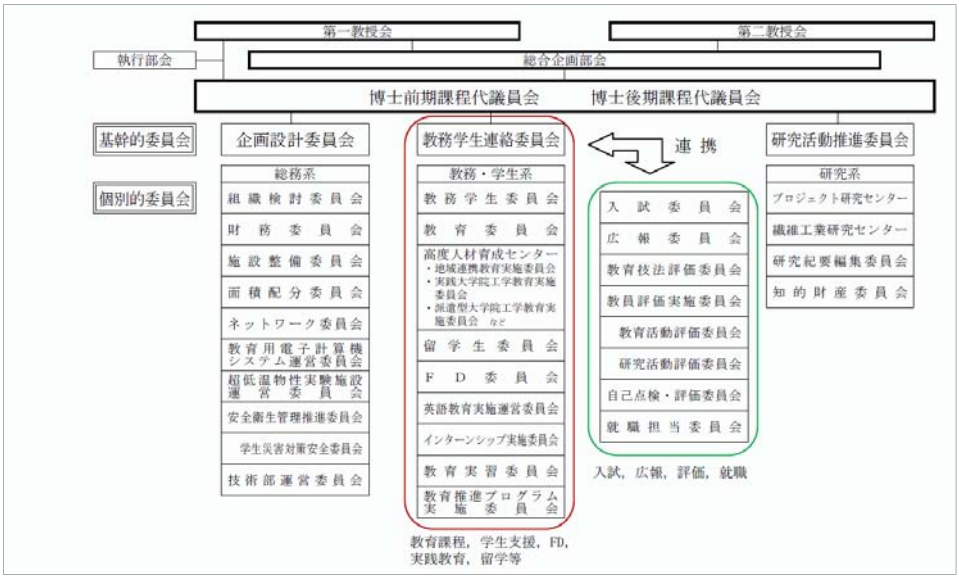
（事務局資料）

●教育プログラムの質保証・質向上のための工夫とその効果

【教学マネジメント体制】

基幹的委員会として教務学生連絡委員会を置き（**資料 1-1-56**），教育課程の改善，評価，FD 等を担う個別的委員会と連携して PDCA サイクルを回している（**資料 1-1-57～59**）。

資料 1-1-56　教学マネジメント体制を支える委員会組織



（事務局資料）

資料 1-1-57　教務学生連絡委員会

■　教務学生連絡委員会要項（抜粋）

福井大学工学部及び大学院工学研究科教務学生連絡委員会要項

（平成18年３月17日　第二教授会
平成25年４月24日　代 議 員 会）

（設置）

第１　福井大学大学院工学研究科に，福井大学工学部及び大学院工学研究科教務学生連絡委員会（以下「委員会」という。）を置く。

（目的）

第２　委員会は，次ぎに掲げる事項を協議するとともに，企画及び調整に当たる。

（１）工学部及び大学院工学研究科の教務，学生生活及び教育改善に係る中期目標，中期計画に関する事項

（２）工学部及び大学院工学研究科の教務，学生生活及び教育改善に係る各委員会等の活動に関する事項

（３）その他工学部及び大学院工学研究科の教務，学生生活及び教育改善に関し，協議会が必要と認めた事項

（組織）

第３　委員会は，次の各号に掲げる委員をもって組織する。

（１）学務担当副研究科長

（２）共通教育センター長又は副センター長（工学研究科所属教員に限る）

（３）工学部及び大学院工学研究科教務学生委員会委員長

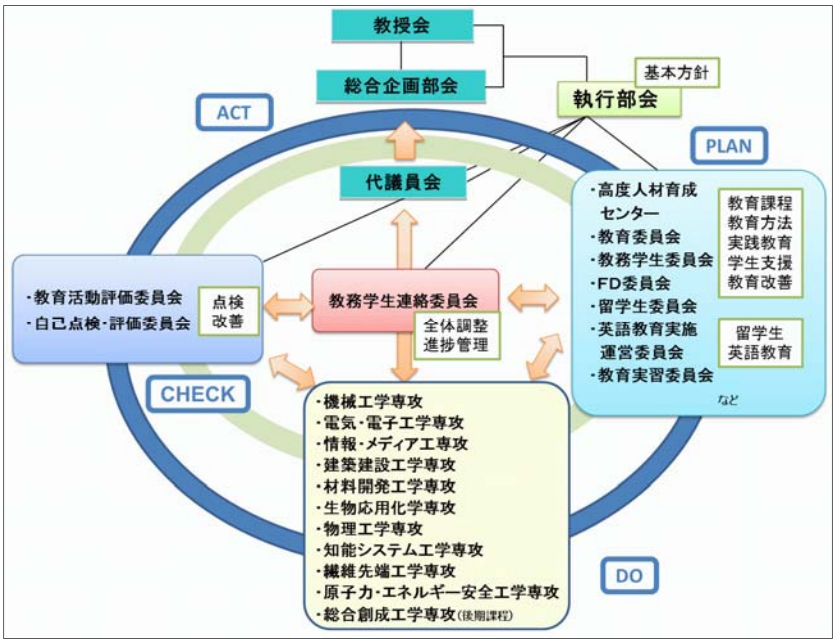
（４）工学部及び大学院工学研究科留学生委員会委員長

（５）工学部及び大学院工学研究科教育委員会委員長
（６）工学部ＪＡＢＥＥ委員会委員長
（７）工学部ＦＤ委員会委員長
（８）工学部及び大学院工学研究科教育活動評価委員会委員長
（９）工学部及び大学院工学研究科自己点検・評価委員会委員長
（10）先端科学技術育成センター長
（11）高度人材育成センター長
（12）実践大学院工学教育実施委員会委員長
（13）派遣型大学院工学教育実施委員会委員長
（14）博士人材キャリア開発支援副センター長
（15）その他委員会が必要と認めた者
（委員長及び委員長）

第４　委員会に，委員長及び副委員長を置く。

２　委員長は，学務担当副研究科長をもって充て，副委員長は，委員の互選によって選出する。

■　教務学生連絡委員会を中心とした PDCA サイクル



（事務局資料）

資料 1-1-58　教務学生連絡委員会および教育委員会の活動例

教務学生連絡委員会はマネジメントを行い，教育委員会などの個別的委員会は実務を行う。

■　教務学生連絡委員会の活動記録の例

基幹的委員会である教務学生委員会は，各委員会の活動を掌握し，調整し，必要な指示を行う。

教務学生連絡委員会議事要旨

日　　時　　平成２５年４月１２日（金）　１７時００分から１７時５０分まで
場　　所　　工学部多目的会議室

議　　題
１．各委員会報告について
●橋本明留学生委員会委員長から、グローバル人材育成推進事業での留学について、授業期間等と重なる場合の対応が今後の検討課題になっている旨の報告があった。なお、この件については、今後グローバル人材育成推進事業実施委員会で原案を作成し、随時、本委員会で報告していくこととした。
●田岡高度人材育成センター部門長から、昨年度の成果発表会を踏まえ、今年度から海外インターンシップについては、企業での実践ではなく研究に近いので長期インターンシップ事業からはずす方針とし、今後海外インターンシップを希望する学生がいた場合には、グローバル人材育成事業に参加するよう勧めることとした旨、また４月１７日に今年度の説明会を開催し、参加人数をみてから予算配分等を検討する予定である旨報告があった。
●山田徳教育委員会委員長から、原子力・エネルギー安全工学専攻の早期履修について機械、電気、建築、生物の学生が履修できるようになったこと、前期課程の学部とのシームレス接続や実践力育成強化について全専攻で実施内容が決定したこと、また前期課程の研究指導計画については一部修正した旨の報告があった。
　また、博士後期課程設置審で提出した科目名について一部間違いがあった旨の報告があり、文科省へ届けることとした。（電子制御特論→電力制御特論）
●飛田ＦＤ委員会委員長から、ＦＤ委員会を４月２６日１３時～１６時で、グループディスカッションのやり方について、ワークショップ形式で開催するので参加いただきたい旨の依頼があった。
●堀博士人材キャリア開発支援副センター長から４月１８日開催のＣＤＰＩＴ交流会について案内があった。
２．その他
●小野田研究科長から、資料に基づき、第２期中期目標・中期計画の達成状況に関する学内ヒアリングにおける教育関係の指摘事項や今後のスケジュールについて説明があり、今年度は成果や効果に係るデータ、エビデンスを収集いただきたい旨の依頼があった。
●児嶋工学部支援室長から、資料に基づき、平成２５年度「教育評価に基づく競争的経費」に係る公募について説明があり、なるべく応募いただき、工学部の予算負担を少しでも減らすよう努力いただきたい旨の依頼があった。また、教育改革推進経費としてJABBEの新規審査料や認定維持料に係る予算がついた旨の報告があった。

以　上

■　教育委員会（平成 25 年 12 月 20 日議事）

個別的委員会である教育委員会は教育課程の改善や教育に係る事項などを扱う。

工学部及び大学院工学研究科教育委員会議事日程

日　時　　平成 25 年 12 月 20 日（金）　13：30　～　15：00

場　所　　学生支援センター会議室

議　題
1　大学院授業科目早期履修制度の実施学科確認について
2　工学部専門教育課程表の一部改正（案）について …… 資料 No. 1
3　工学部履修要項の一部改正（案）について …… 資料 No. 2
4　平成 26 年度大学院工学研究科等の教育課程表の改正（案）について … 資料 No. 3
5　平成 25 年度中期計画（工学部・工学研究科）
　　教育委員会担当部分について …… 資料 No. 4
6　平成 26 年度に係る年度計画（工学部・工学研究科）
　　教育委員会担当部分について …… 資料 No. 5
7　第 2 期中期計画（教育）の到達目標等の設定について …… 資料 No. 6
8　その他
・　早期履修可能な科目について
・　次回定例委員会の開催について

（事務局資料）

資料 1-1-59　教学マネジメント体制のもとでの取組事例

項　　目	内　　容	時期
中期目標・中期計画の 達成度管理 （**資料 1-1-58**）	毎年度，教務学生連絡委員会の主導で工学部内の次年度計画を策定するとともに，当該年度の進捗状況を把握し，目標達成のための対応を取っている。	随時
DP と CP の策定 （**P7-88 後掲資料 1-2-3**）	工学研究科長の指示により，教育委員会の下にディプロマポリシー・カリキュラムポリシーWG を設置し，工学部および各学科の DP と CP の策定を行った。	平成 23 年度
外部評価の実施 （**P7-65 後掲資料 1-1-60**）	外部評価準備・実施特別委員会を設置し，外部評価に向けた準備を行い，平成 24 年度に外部評価を実施して学科構成などについて課題を抽出し，平成 25 年度大学院改組につなげた。	平成 24 年度
海外大学ベンチマーキングの実施 （**P7-70 後掲資料 1-1-62**）	大学の方針のもと，工学研究科長を長とし，教育・教務関連員会の委員長等をメンバーとする視察団を米国に派遣した。複数の大学等で調査を行い，教育課程の国際性や教学ガバナンス等について工学研究科の抱える課題を整理し，平成 25 年度大学院改組につなげた。	平成 24 年度
DP と CP の見直し	外部評価やニーズ調査等の結果を踏まえ，平成 25 年度にファイバーアメニティ工学専攻を，繊維・材料系に特化した「繊維先端工学専攻」に改組したことに伴い，繊維先端工学専攻の DP，CP，AP を策定した。 教育委員会において，GGJ 事業推進によるグローバル人材育成を踏まえた DP と CP の見直しを行った。	平成 25 年度 平成 26 年度
大学院改組 （**P7-8 前掲資料 1-1-4,** **P7-90 後掲資料 1-2-5**）	全専攻の委員からなる工学研究科改組特別委員会を設置し，前期課程及び後期課程の改組に向け対応を行った。 前期課程では，社会ニーズの高い分野では入学定員を増加させると共に，ファイバーアメニティ工学専攻を総合工学的位置付けから繊維・材料へ特化させた繊維先端工学専攻へ再編することを決定した。 また，後期課程では，専門性を維持しつつ広い知識と見識を持った学際的な実践的高度専門人材の育成をはかるため，４専攻を廃止して１専攻とすることを決定した	平成 24 年度

（事務局資料）

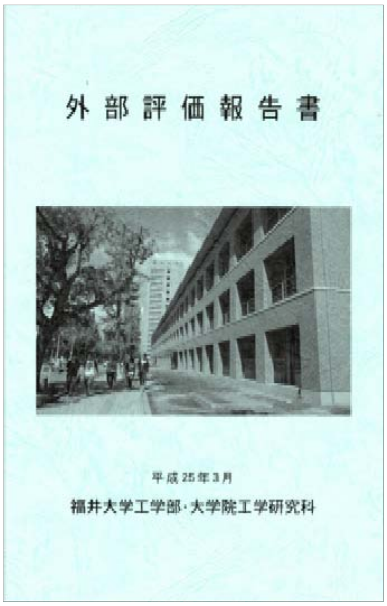
【外部評価・第三者評価】

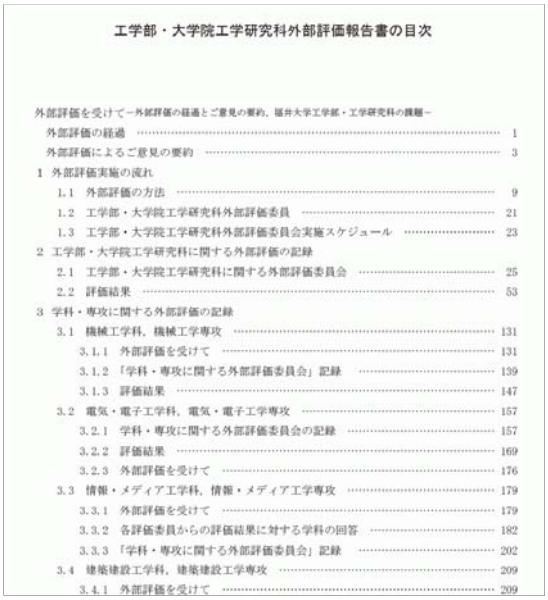
①　平成 24 年度に外部評価を受け，第１期よりも概ね高い評価を得た（**資料 1-1-60**）。指摘された課題に対しては，的確に対応し，社会の期待に応えた（**資料 1-1-61，P7-102 後掲資料 1-2-12**）。

資料 1-1-60　外部評価の概要と結果

平成 24 年 11 月に組織・管理運営，教育活動，研究活動，学協会・社会活動と国際交流に加えて，第１期中期目標・中期計画に沿った活動および工学研究科改組への取組等に対し，前回の外部評価（平成 17 年 12 月）以降の７年間（平成 17 年度～平成 23 年度）の活動とそれら成果を対象として，42 名の委員による外部評価を実施した。外部資金による特色ある教育の取組が高く評価された一方で，学部の８学科体制や学部と前期課程の関係などについて課題が指摘され，第２期中に改善を行った。

■　外部評価報告書（表紙と目次（抜粋）




工学部・大学院工学研究科外部評価報告書の目次

外部評価を受けて－外部評価の経過とご意見の要約，福井大学工学部・工学研究科の課題－
外部評価の経過 …… 1
外部評価によるご意見の要約 …… 3
1 外部評価実施の流れ
1.1 外部評価の方法 …… 9
1.2 工学部・大学院工学研究科外部評価委員 …… 21
1.3 工学部・大学院工学研究科外部評価委員会実施スケジュール …… 23
2 工学部・大学院工学研究科に関する外部評価の記録
2.1 工学部・大学院工学研究科に関する外部評価委員会 …… 25
2.2 評価結果 …… 53
3 学科・専攻に関する外部評価の記録
3.1 機械工学科，機械工学専攻 …… 131
3.1.1 外部評価を受けて …… 131
3.1.2 「学科・専攻に関する外部評価委員会」記録 …… 139
3.1.3 評価結果 …… 147
3.2 電気・電子工学科，電気・電子工学専攻 …… 157
3.2.1 学科・専攻に関する外部評価委員会の記録 …… 157
3.2.2 評価結果 …… 169
3.2.3 外部評価を受けて …… 176
3.3 情報・メディア工学科，情報・メディア工学専攻 …… 179
3.3.1 外部評価を受けて …… 179
3.3.2 各評価委員からの評価結果に対する学科の回答 …… 182
3.3.3 「学科・専攻に関する外部評価委員会」記録 …… 202
3.4 建築建設工学科，建築建設工学専攻 …… 209
3.4.1 外部評価を受けて …… 209

■　外部評価の様子





■　評価結果（前期課程）

各専攻とも，評価各項目について，概ね高い評価を得た。特に，「教育内容・方法改善への取り組み」については，10 専攻中 7 専攻が最高点である５点の評価を受けた。

なお，学科と専攻を合わせて評価する方式であったため，独立専攻である繊維先端工学専攻と原子力・エネルギー安全工学専攻以外の８専攻については厳密に専攻だけに対して付けられた評点ではないが，８学科と８専攻は対応関係が明確で一体的に運営されており，専攻に対する評価の目安と考えることができる。

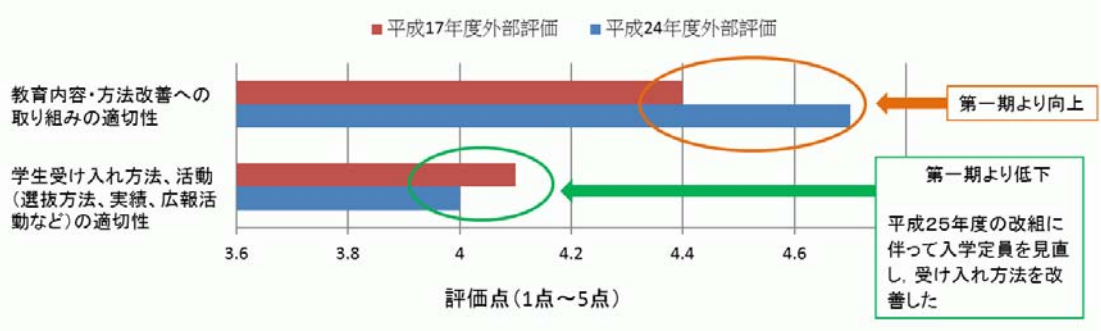
M：機械工学専攻，E：電気・電子工学専攻，I：情報・メディア工学専攻，A：建築建設工学専攻，S：材料開発工学専攻，B：生物応用化学専攻，P：物理工学専攻，H：知能システム工学専攻，F：繊維先端工学専攻，N：原子力・エネルギー安全工学専攻

	M	E	I	A	S	B	P	H	F	N	平均
学位授与方針(DP)，教育課程編成方針(CP)の適切性	5	4	3	4	3	5	5	3	5	4	4.1
学生の受け入れ方法，活動の適切性	4	5	3	4	4	4	4	4	5	3	4
教育内容・方法改善への取り組みの適切性	5	5	5	4	4	4	5	5	5	5	4.7
学生指導支援体制の適切性	4	5	4	4	4	5	5	5	4	4	4.4
教育環境・設備の充実度	4	4	3	4	3	3	3	4	5	4	3.7
教育の国際的競争力の充実度	4	4	4	4	3	4	4	4	4	3	3.8
就職支援への取り組みの適切性	5	5	5	4	5	5	5	4	5	5	4.8

（福井大学工学部・大学院工学研究科 外部評価結果報告書（平成 25 年３月）より抜粋）

■　第１期との比較（前期課程）

第１期の外部評価（平成 17 年度）と共通な評価項目について，第２期との比較を行った結果が以下である（全専攻の評点の平均値を比較）。教育の内容や改善については第２期の方が評価が高く，これは教育の質が第１期より向上したことの証左である。第１期より低い評価となった学生受け入れ方法については，平成 25 年度大学院改組により改善の対応（入学定員の見直し）を行った。



■　評価結果（後期課程）

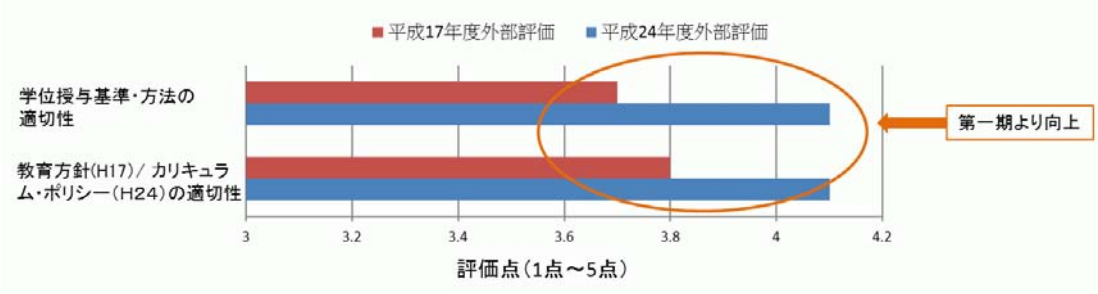
後期課程の教育に係る評価結果を以下に示す。後期課程の評価については，各前期課程専攻の代表評価委員（各専攻１名ずつ）が後期課程の全体に関して評価を行ったものである。教育に係る評価項目について高い評価を得ている。

特に，キャリア教育及び実践教育の適切性については非常に高い評価を得ている。第１期の外部評価（平成 17 年度）において「後期課程における実務知識教育強化」が課題として挙げられたが，平成 22 年度から文部科学省特別教育研究経費の支援を受けた「産業現場に即応する実践道場」（**P7-102 後掲資料 1-2-12**）により実践教育が推進され成果があがった点などが評価されたものと考える。

	M	E	I	A	S	B	P	H	F	N	平均
学位授与方針(DP)の適切性	3	5	5	4	3	5	5	3	5	3	4.1
教育課程編成方針(CP)の適切性	3	5	4	4	3	5	5	4	5	3	4.1
キャリア教育及び実践教育の適切性	4	5	5	5	4	5	5	5	5	4	4.7

■　第１期との比較（後期課程）

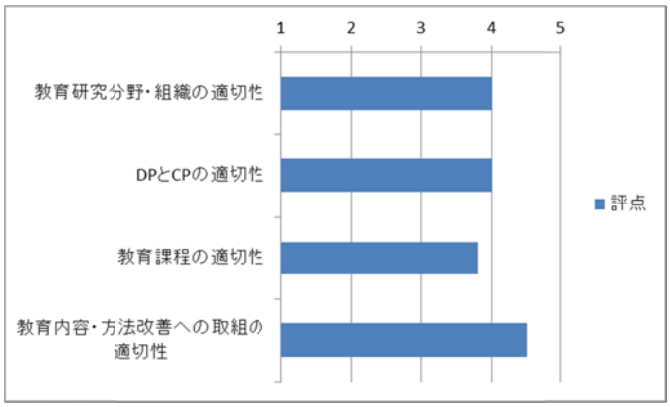
第１期の外部評価（平成 17 年度）と第２期の外部評価で共通なあるいはほぼ対応する評価項目は２つあり，それらについて両期の比較を行った結果を以下に示す（全専攻の評点の平均値を比較）。２項目とも，評価結果は第１期より向上している。これは，第２期にディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシーの策定を行い，学位授与基準や教育方法などが第１期よりも整備された結果であると考える。



（事務局資料）

資料 1-1-61　外部評価の結果を踏まえた改善

（１）ファイバーアメニティ工学専攻の例



（最低点１，最高点５として，複数委員による評価の平均）

■　外部委員からの評価コメント（抜粋）

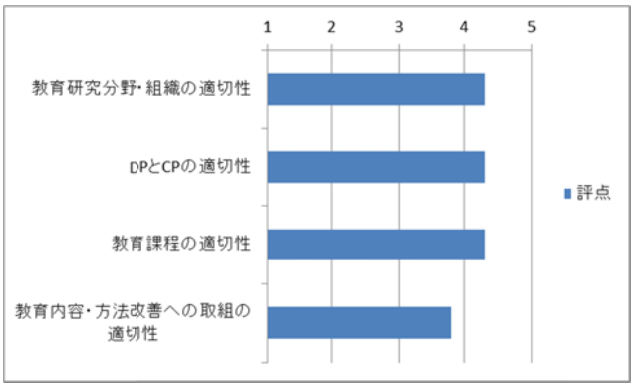
・地場産業・産業界との連携を意識し，「専門強化領域」と「発展的領域」の両面で教育課程を編成している面は適切であると思う。
・PBL「生産現場から学ぶ繊維技術の統合的学習」の工場見学などから，繊維を意識した取り組みを行っていることが分かり，頑張って貰っていると認識した。
・北陸の繊維産業を意識している点は評価できる。
・繊維産業の新分野へのリード役としての役割も期待したい。
・教育課程編成は学生の創造性や国際性を伸ばす工夫がなされ，その面について適切であると考える。

（福井大学工学部・大学院工学研究科 外部評価結果報告書（平成 25 年３月）より）

■　外部評価を受けた改善

「教育課程の適切性」に対する評価が４点を若干下回っているが，本外部評価結果および地元の繊維関係業界に対して行ったニーズ調査等の結果を踏まえ，平成 25 年度に「繊維先端工学専攻」への改組を行った。改組後は，アメニティ工学等の分野が解消され，「インテリジェントファイバー」を中心とした繊維・材料系に特化した分野構成となっている。本外部評価で高く評価された取組は，繊維先端工学専攻において発展して継承されている（地元繊維業界の協力により実現した連携講座の設置，繊維系３大学連合による連携コースの設置など）。

（２）原子力・エネルギー安全工学専攻の例



（最低点１，最高点５として，複数委員による評価の平均）

■　外部委員からの評価コメント（抜粋）

・立地地域に根ざし，安全性，地域共生を最重要視する研究教育理念はユニークなもので高く評価できる。原子力エネルギー利用の将来を考える上で，本専攻の理念はますます重要となってくることから，今後も揺るぎない姿勢での取組を期待したい。
・福井県における福井大学の置かれている状況は，今後さらに重要になると思う。
特に原子力・エネルギー安全工学専攻は，責任は重い。その状況に適切に対応できる研究者，技術者の育成は，この専攻の最重要課題と考えられる。そのための教育環境が整えられており，成果が期待できる。
・全体的にバランスよくカバーできていると思います。特に原子力利用の現場における実践的な教育研究に特徴があると思います。
・原子力危機管理工学といった従前の原子力教育では陽に取り扱われることが少なかったユニークな科目を含んでいること，英語教育に比重をおいていることが評価できる。

（福井大学工学部・大学院工学研究科 外部評価結果報告書（平成 25 年３月）より）

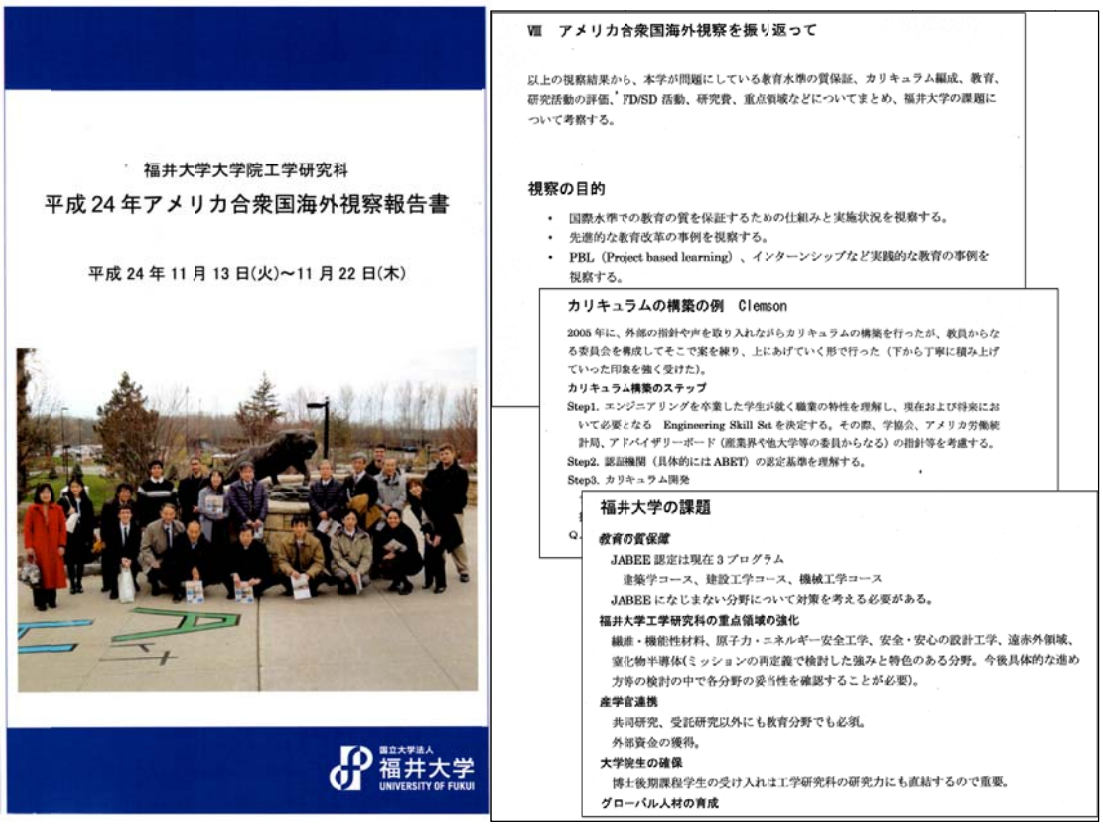
■　外部評価を受けた改善

「教育内容･方法改善への取組の適切性」に対する評価が４点を若干下回っていたことを受け，東日本大震災以降の原子力を取り巻く社会環境の大きな変化にも対応し，平成 25 年度以降に教育課程を大きく見直した。特に，平成 26 年度には，四つの必修科目を設けて技術者倫理や地震津波の防災技術，放射線防護などにかかわる教育を強化するとともに，原子炉の廃止措置にかかわる人材育成をすすめるため「廃止措置工学」を新たに開講した。これら教育改善に対する学生の評価は高い。

（事務局資料）

② 教職員 13 名からなる視察団を米国に派遣し，国際通用性をもつ教育体制の構築等に向けたベンチマーキングを行い，その結果を踏まえ学外機関・産業界との連携を強化し（**資料 1-1-62**），産業界等の期待に応えた。

資料 1-1-62　平成 24 年度に行った米国大学等のベンチマーキングおよびそれを踏まえた改善



■　**視察の結果を受けた教育面での取組・改善**

外部機関と連携して人材育成を進めることが教育プログラムの質を高めることに繋がることを強く認識し，以下の取組に繋がった。

・平成 25 年度に福井県繊維協会と協定書を交わし，繊維先端工学専攻に連携講座を設置し，産業現場に近い視点からの人材育成を開始した。

・平成 25 年度に繊維先端工学専攻に「繊維・ファイバー工学コース」を設置し，繊維系大学連合（京都工芸繊維大学，信州大学，福井大学）による共同人材育成を開始した。
この取組は，大学機関別認証評価（平成 27 年度受審）結果で「優れた点」の一つとして高く評価された。

・平成 25 年度には日本原電，関西電力，若狭湾エネルギー研究センター及び原子力安全システム研究所技術システム研究所との間で連携協力の覚書を締結し，原子力工学教　育の内容と質の一層の充実・向上を図った。

・文部科学省「英知を結集した原子力科学技術・人材育成推進事業（廃止措置研究・人材育成等強化プログラム）」（平成 27 年度）に採択された『福島第一原子力発電所の燃料デブリ分析・廃炉技術に関わる研究・人材育成』事業（本学が中心となり西日本６大学・２機関の連携による事業）により，人材育成を進めている。

（事務局資料）

【関係者の意見聴取】

外部評価での産学官関係者やOB等からの意見聴取に加え（**P7-65 前掲資料 1-1-60**），在学生，修了直前の前期課程学生，修了生（社会人），長期インターンシップの受け入れ先企業，修了生の勤務先に対するアンケート調査を組織的に実施し，その結果を教育内容・方法の改善に反映させ（**資料 1-1-63～69**），関係者の期待に応えた。

資料 1-1-63　関係者の意見聴取のための主な取組一覧

対象・アンケート等の名称	目的・趣旨	実施方法，直近の実施状況等
在学生対象 「学生生活実態調査」 （様式：**資料 1-1-64**）	本学学生の生活実態を把握するとともに，大学に対する学生の意見や要望等を聴取し，今後の学生生活や修学環境の改善を図る。	高等教育推進センターが各部局と協力して定期的に実施。 直近 H25.10 実施 結果の一例：**P7-125 後掲資料 1-2-30**
在学生対象 「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」 （様式：**資料 1-1-65**）	本学の教育・研究に対してどのような意識や満足感をもっているかを尋ね，今後の福井大学に必要な教育・研究環境等を整備・充実する。	全学の教務学生委員会が各部局と協力して実施。 直近 H27.12 実施 結果の一例：**P7-146 後掲資料 2-1-12**
修了直前の前期課程学生対象 「プログラム・オブ・スタディ評価結果報告書」 （様式：**資料 1-1-66**）	「カリキュラムのオーダーメード化」のもとで受けた前期課程における教育の効果に対する自己点検評価を行い，教育改善に活かす。	工学研究科高度人材育成センター修学・研究支援部門が実施（毎年度）。直近 H28.2 実施 結果の一例：**P7-58 前掲資料 1-1-54**
卒業生・修了生（社会人）対象 「卒業生に対する大学教育に関するアンケート」 （様式：**資料 1-1-67**）	工学部・工学研究科における教育の改善の効果の検証および社会の要望の変化による改善目標を調査する。	工学部及び工学研究科自己点検・評価実施委員会が定期的に実施。直近 H26.11 実施 結果の一例：**P7-157 後掲資料 2-2-8**
長期インターンシップ受入先企業等対象 「長期インターンシップに関するアンケート」 （様式：**資料 1-1-68**）	派遣学生の能力・資質等を尋ね，産学連携型の大学院教育の自律的発展に活かす。	工学研究科高度人材育成センター派遣型大学院工学教育部門が実施（毎年度）。 直近 H27.10 実施 3 社回答 （H23～H27 延べ 27 社回答） 結果の一例：**P7-160 後掲資料 2-2-11**
修了生勤務先企業等対象 「福井大学の教育と卒業生についてのアンケート調査」 （様式：**資料 1-1-69**）	福井大学を卒業（修了）し企業等へと就職した人材が，どのように受け入れられているのかを調査し，その結果に基づいて教育の改善・向上を図る。	就職支援室が 3 年ごとに実施。 直近 H25.8 実施 工学研究科修了生が勤務する 26 の企業等から回答 結果の一例：**P7-159 後掲資料 2-2-10**

（事務局資料）

資料 1-1-64　在学生に対する「学生生活実態調査」（調査票・回答票）

項目	質問内容	回答欄	
A 基本事項	A1　性別　a 男　b 女	A1	
	A2　年齢（2013年10月1日現在）	A2	才
	A3　出身県 a 福井県　b 福井県以外の北陸地域（石川、富山） c 東海地域（静岡、愛知、岐阜、三重） d 関西地域（滋賀、京都、奈良、大阪、和歌山、兵庫） e その他の日本国内　f 外国	A3	
	A4　所属学部・大学院／課程・学科・専攻 教育地域科学部　11 学校教育課程　12 地域科学課程 13 地域社会課程 医学部　21 医学科　22 看護学科 工学部　31 機械工学科　32 電気・電子工学科　33 情報・メディア工学科 34 建築建設工学科　35 材料開発工学科　36 生物応用化学科 37 物理工学科　38 知能システム工学科 教育学研究科　41 学校教育専攻　45 教科教育専攻　46 教職開発専攻 医学系研究科　51 博士課程　52 修士課程 工学研究科・博士前期　61 機械工学専攻　62 電気・電子工学専攻　63 情報・メディア工学専攻 64 建築建設工学専攻　65 材料開発工学専攻　66 生物応用化学専攻 67 物理工学専攻　68 知能システム工学専攻 69 ファイバーアメニティ工学専攻　70 繊維先端工学専攻 71 原子力・エネルギー安全工学専攻 工学研究科・博士後期　81 物質工学専攻　82 システム設計工学専攻 83 ファイバーアメニティ工学専攻　84 原子力・エネルギー安全工学専攻 85 総合繊維工学専攻	A4	
	A5　学年	A5	年
	A6　入学時の試験（学部生のみ） a 前期日程　b 後期日程　c AO入試　d 推薦入試 e 編入学　f その他（　　）	A6	
	A7　入学年度 a 平成25　b 平成24　c 平成23　d 平成22 e 平成21　f 平成20　g 平成19　h 平成18以前	A7	
	A8　卒業後の進路希望 a 企業に就職　b 公務員　c 教員　d 医師　e 看護師 f 保健師　g 助産師　h 本学の大学院（修士・前期）に進学 k 本学の大学院（博士・後期）に進学　m 他大学の大学院に進学 o その他（　　）	A8	
B 家族	B1　家族人数（あなた本人を含む生計を一つにしている家族の人数） a 1人　b 2人　c 3人　d 4人　e 5人　f 6人　g 7人 h 8人以上 ※例えば、ご母親は名古屋在住で、あなたと、あなたの兄弟が大学の関係で別居していても、ご母親から生活費等を送金してもらっていれば、4人は家族として回答してください。	B1	
	B2　家族の合計年収（あなたの家庭の最近1年間の所得総額（税込額）を記入してください） a 200万円未満　b 200万円～　c 300万円～　d 400万円～ e 500万円～　f 600万円～　g 700万円～　h 800万円～ k 900万円～　m 1,000万円～　o 1,100万円～　p 1,200万円～ ※この項目は、皆さんへの支援を検討する上で重要な意味を持つものです。家族と連絡をとって、できるだけ正確な数字を回答しください。	B2	
C 住居と通学	C1　現在の住居 a 自宅（親と同居）　b 食事つき下宿（民家の間借り） c 食事なし下宿（民家の間借り） d アパート・マンション　e 国際交流学生寄舎・留学生会館 f その他（　　）	C1	
	C2-1　通学方法（複数回答可） a 徒歩　b 自転車　c バイク　d バス　e 電車　f 自動車 g その他（　　）	C2-1	
	C2-2　【f と回答した人】駐車場所 a 学内　b 近くの路上　c 近くの空き地　d 近くの駐車場（借用） e 知人の家・駐車場　f その他（　　）	C2-2	
D 日頃の生活費	D1　あなたの1ヶ月の収入（今年4月～9月の平均月額を千円単位でご記入ください） a 家庭から b 親戚・知人から c アルバイト d 奨学金 e その他 f 合計	D1 a b c d e f	千円
	D2　あなたの1ヶ月の支出（今年4月～9月の平均月額を千円単位でご記入ください） a 食費（自宅通学者は外食費） b 住居費・光熱水料（自宅通学者は記入不要） c 交通費 d 修学費（図書・文具・学会等） e 課外活動費（学外も含む） f 日常生活費（衣服・交際・娯楽等） g その他 h 合計	D2 a b c d e f g h	千円
	D3-1　アルバイト a ほぼ定期的に行っている　b 不定期に行っている c 過去に行っていたが今はしていない　d 今は行っていないが将来したい e するつもりはない	D3-1	
	D3-2　【a、bと回答した人】アルバイト日数 a 週5日以上　b 週3～4日　c 週1～2日　d 月2～3日程度 e 月1日程度　f 長期休暇中　g その他（　　）	D3-2	
	D3-3　【D3-1でa、bと回答した人】アルバイトの目的（複数回答可） a 生活費捻出のため　b 修学費捻出のため　c 課外活動費捻出のため d 高額消費財購入費捻出のため　e 余暇娯楽費捻出のため　f 将来の就職に有利 g 社会勉強のため　h 預貯金のため　k その他（　　）	D3-3	
E 日頃の生活実態	E1　睡眠 a 毎日よく眠れる　b 時々不眠になる　c ほとんど毎日不眠状態である	E1	
	E2　1日の睡眠時間（週平均）	E2	約　時間
	E3　飲酒の回数 a ほぼ毎日　b 週3～4日程度　c 週1～2日程度　d 月2～3日程度 e 月1日程度　f 年数回程度　g 全く飲まない	E3	
	E4　喫煙 a 吸わない　b 過去に吸ったが今は吸わない c 吸っている（1日1箱未満）　d 吸っている（1日1箱以上）	E4	
	E5　学習のためのインターネット利用時間（1週間あたり） a 2時間未満　b 2～3時間程度　c 4～5時間程度　d 6～7時間程度 e 8～9時間程度　f 10時間以上［具体的な時間を記入してください（　）時間程度］ ※レポート作成のために情報収集に利用した時間など	E5	
	E6　一般的なインターネット利用時間（1週間あたり）※ネットゲームを除く a 2時間未満　b 2～3時間程度　c 4～5時間程度　d 6～7時間程度 e 8～9時間程度　f 10時間以上［具体的な時間を記入してください（　）時間程度］	E6	
	E7　自分で所有している情報機器（複数回答可） a 携帯電話　b スマートホン　c ノートPC　d デスクトップPC e 携帯端末（タブレットPC、iPad、など）　f ゲーム機 g その他（　　）	E7	
	E8　学習以外の時間の過ごし方（主なものを2つ選択） a 課外活動　b アルバイト　c 読書 d インターネット（ネットゲームを除く）　e ゲーム f テレビ　g 特に何もしていない　h その他（　　）	E8	

項目	質問内容	回答欄	
G 大学の授業等について	G1-1　卒業・修了までの単位の取り方（現時点） a 理解している　b 理解していない部分がある c 理解していない	G1-1	
	G1-2　【b、cと回答した人】理解できない部分の解決法（複数回答可） a 助言教員クラス担任・学科等教員に相談する　b 学部部の職員に相談する c 先輩・友人に相談する　d 自分で履修手引きなどで調べる e 何もしない　f その他（　　）	G1-2	
	【共通・教養と専門、それぞれについて回答してください（G2～4）】		
	G2-1　授業の出席状況（今年度） a どの授業もほとんど出席している b 一部の授業を除いてほとんど出席している c どの授業も出たり出なかったり d 一部の授業を除いてあまり出席していない e どの授業もあまり出席していない	G2-1	共通・教養　専門
	G2-2　【d、eと回答した人】出席しない理由（複数回答可） a 授業が理解できない　b 授業に魅力がない　c 出席をとらない d 健康上の理由　e 課外活動が忙しい　f アルバイトが忙しい g 分野・進路に迷いがある　h 大学が面白くない　k 何となく m その他（　　）	G2-2	共通・教養　専門
	G3-1　授業の理解度 a どの授業も全般的に理解できる　b 理解できないものが多少ある c 理解できないものがかなりある　d ほとんど理解できない	G3-1	共通・教養　専門
	G3-2　【b、c、dと回答した人】理解できない時の対応 a 授業担当教員に相談する　b 助言教員クラス担任・学科等教員に相談する c 先輩・友人に相談する　d 何もしない　e その他（　　）	G3-2	共通・教養　専門
	G4-1　授業の満足度 a どの授業も満足している b 満足できないものが多少ある c 満足できないものがかなりある d 満足できないものがほとんどである	G4-1	共通・教養　専門
	G4-2　【b、c、dと回答した人】満足できない理由（複数回答可） a 内容が難しい　b 内容がつまらない　c 授業内容のレベルが低い d 教え方に工夫が足りない　e 受講者が多すぎて集中できない f 休講が多い　g 試験・レポートなどが多い　h 単位の認定が厳しい k その他（　　）	G4-2	共通・教養　専門
	G5　大学の授業を除く学習時間（授業期間中の平均的な学習時間・1週間あたり） a 2時間未満　b 2～3時間程度　c 4～5時間程度　d 6～7時間程度 e 8～9時間程度　f 10～12時間程度　g 13～15時間程度 h 16～19時間程度　k 20～25時間程度　m 26～30時間程度 o 30時間以上［具体的な時間を記入してください（　）時間程度］ ※予習復習、レポート・卒業論文作成、グループでの相談や準備活動（授業ネット・創成活動等）、実験等を授業時間終了後も行った場合や、レポート作成のために資料を調べた場合などの時間も含めてください。 ※講義単位の計算は15時間の予習と、15時間の講義、15時間の復習をもって1単位が標準です。よって1コマの授業に対して、2倍の予習・復習時間が必要です。	G5	
	G6　一般的な読書の時間（1週間あたり）　※学術的な雑誌を含む a 2時間未満　b 2～3時間程度　c 4～5時間程度　d 6～7時間程度 e 8～9時間程度　f 10時間以上［具体的な時間を記入してください（　）時間程度］	G6	
	G7　語学力（英語）向上の必要性 a 必要である　b 将来の進路によって必要である　c 特に必要と思わない	G7	
	G8-1　在学中又は卒業後の海外留学（語学研修も含む）希望 a ある　b 可能ならば留学したい　c 特に考えていない	G8-1	
	G8-2　【a、bと回答した人】希望する留学先 a アジア・中東　b アメリカ　c カナダ　d オーストラリア e 欧州　f その他（　　）	G8-2	
	G9　海外留学にどのような支援を希望しますか a 留学に必要な経費の補助・支援　b 単位の互換　c 広報・情報提供 d 特に必要ない　e その他（　　）	G9	
	G10　教員との関係　授業の内容や方法について担当教員と話し合うことがありますか a 話し合うことがある b 話し合いたいと思うことがあるが出来ない c 話し合おうとしたが受入られなかった d 話し合おうと思ったことがない e その他（　　）	G10	
	G11　教員との話し合う時間等について a 教員と話し合う時間は現状で十分である b 教員と話し合う時間がもう少しほしい c 教員と話し合うことは考えたことがない	G11	
	G12　オフィスアワー制度を知っていますか、また利用したことがありますか a 知っていて利用したことがある b 知っているが利用したことがない c 知らない	G12	
	G13-1　助言教員・学年主任制度の利用について a 助言教員・学年主任と良く話す　b ときどき話す　c ほとんど話さない d 助言教員・学年主任が誰か分からない	G13-1	
	G13-2　【a、bと回答した人】話し合いの内容 a 学業（教育単位など）について　b 進路　c 授業内容 d 友人・生活について　e 個人的な悩み・相談　f 世間話 g その他（　　）	G13-2	
	G14　教員への期待（複数回答可） a 現状のままでよい b 学問の厳しさや楽しさを教えて欲しい c 授業内容を充実して欲しい d 授業方法を工夫して欲しい e 研究内容を教育（授業）に生かして欲しい f 休講をなくして欲しい g 気軽に話（相談など）ができる雰囲気がほしい h あまり期待しない k その他（　　）	G14	
	G15　就職支援室や松岡キャンパス学務室で行っている支援で知っているもの（複数回答可） a キャリアサポートシステム b 企業及び団体等の求人情報 c 公務員に関する試験情報 d 教員に関する試験情報 e 医師、看護師、保健師、助産師の国家試験に関する情報 f 臨床研修病院の情報 g 病院等医療機関の求人、採用情報 h 就職ガイダンス、進路説明会などの実施 k キャリアカウンセラーによる面接指導やエントリーシートの添削指導 m その他（　　） o 支援内容を全く知らない p 就職支援室があることを知らない	G15	

H 課外活動について

H1-1　学内の課外活動
a 参加している　b 過去に参加したが今は参加していない
c 全く参加したことがない　　H1-1

H1-2　【a、bと回答した人】課外活動に参加した動機（複数回答可）
a 高校時代からの継続　b 教養・特技の向上のため　c 趣味と一致している
d 活動内容に魅力がある　e 友人を得たい　f 体力向上のため
g 大学生活を楽しみたい　h 就職に有利と考えて　k 団体生活に魅力を感じた
m 指導力を身につけるため　o その他（　　）　　H1-2

H1-3　【H1-1で、aと回答した人】課外活動の日数
a 週5日以上　b 週3～4日　c 週1～2日　d 不定期　　H1-3

H1-4　【H1-1で、aと回答した人】１週間当たりの課外活動の時間
（　　）時間程度　　H1-4

K 安全について

K1-1　キャンパス内（国際交流学生宿舎、留学生会館を含む）で被害に遭った
（遭いそうになった）ことがありますか（該当するものすべて選択）

a 被害に遭ったことはない　b 財布・現金等の盗難被害
c 鞄・服・靴等の盗難被害　d 自動車・バイク・自転車の盗難、損壊被害
e 性的被害（痴漢・のぞき等）
f 不審者（一見して学生・大学関係者でない人物等）による声かけ
g セクハラ・パワハラ・アカハラの被害　h ストーカー被害
k 暴行・傷害被害　m 飲酒の強要
o 薬物の購入・使用の勧誘、強要の被害　p カルト宗教等の勧誘
t 携帯電話に関するトラブル・被害　s インターネットに関する被害
w 悪徳商法（キャッチセールスやマルチ商法など）
x その他（　　）　　K1-1

K1-2　キャンパス内でK1-1のb~wを目撃したことがある場合、K1-1から選んでください
（複数回答可）　　K1-2

K2　大学構内で身の危険を感じる（不安を覚える）場所があればお書きください
［　　］

K3　キャンパス外で被害に遭った（遭いそうになった）ことがありますか（複数回答可）
a 被害に遭ったことはない　b 財布・現金等の盗難被害
c 鞄・服・靴等の盗難被害　d 自動車・バイク・自転車の盗難、損壊被害
e 性的被害（痴漢・のぞき等）　f 不審者による声かけ
g ストーカー被害　h 暴行・傷害被害
k 交通事故　m 飲酒の強要
o 薬物の購入・使用の勧誘、強要の被害　p カルト宗教等の勧誘
s インターネットに関する被害　t 携帯電話に関するトラブル・被害
w 悪徳商法（キャッチセールスやマルチ商法など）
x その他（　　）　　K3

L 前回の調査後の改善事項

L1　学生総合相談室が設置されたことについて
a よかった　b まあよかった　c 特に関係がない　d 相談室のことを知らない　　L1

L2　スチューデント・アシスタント（S・A）（ピア・サポート、キャンパス・クリーンアップ・スタッフ、総合図書館ラーニング・アドバイザー、就活サポーター、オープンキャンパス実施補助作業、入試広報業務補助等のことで、時給800～1000円で大学が学内で学生を雇用する制度）について

a 学外でアルバイトをするより学習時間の確保ができ、よい制度だと思うので利用したい
b よい制度だと思うが利用のタイミングが合わないことが多い
c S・Aのことを知らなかったが、機会があれば利用したい
d 学外でのアルバイトの方が収入が多いので、S・Aは利用しない
e 制度を知らないし、利用する予定もない　　L2

L3　ユニバーサル・パスポートで、休講情報などを一斉にメール配信していることについて
a よかった　b まあよかった　c ふつう　d なくてもよかった　　L3

L4　履修登録がWeb上で、学外（自宅など）からもできるようになったことについて
a よかった　b まあよかった　c ふつう　d なくてもよかった　　L4

L5　改修や新規設置された学内の施設でよかったと思うもの（複数回答可）
【文京キャンパス】
1 工学部情報工学科棟
2 学生支援センター（教務課、学生サービス課）
3 学生総合相談室
4 生協学生食堂
5 語学センター（グローバル・ハブ）
6 言語開発センター（総合図書館2階　LDC）
7 多目的ホール（北門カーゲート横）
8 第一体育館・第二体育館の更衣室、トイレ、シャワー室、玄関スロープ
9 国際交流学生宿舎（寮）の IHクッキングヒーター（全室）
【松岡キャンパス】
10 医学図書館ー情報工房ー
11 講義棟（講義室、ロビー等）
12 講義棟１階コミュニケーションスペース
13 講義棟2階マルチラーニングスペース
14 講義棟2階ミーティングスペース
15 課外活動施設の整備
16 国際交流会館壁面クロス、網戸、椅子
17 売店（拡充）
18 駐車場の拡張
19 街灯（増設）
【敦賀キャンパス】
20 敦賀キャンパス建物　　L5

M 大学への意見・要望

M1　大学施設等に関する要望（優先的に改善を希望する事項5つを選択回答）
1 講義室の設備の充実
2 実習室・実験室などの整備・充実
3 学生インフォメーションシステム（PC端末・携帯電話等からの講義・成績情報へのアクセス等）の整備充実
4 個人で自由に学習などができる部屋の確保
5 少人数のグループ等で自由に学習できる部屋や設備の充実
6 各講座や研究室の学生スペースの拡大、設備の充実
7 講義の合間に自由に休憩・交流のできる部屋・コーナーや設備の充実
8 附属図書館の蔵書・設備の充実
9 情報処理基盤センター等、IT関連センター等の機能・設備の充実
10 無線LAN環境の整備・利用環境の充実
11 大学会館（学生会館）の拡充と設備の充実
12 生協食堂（文京）の朝食時間を早める
13 生協・食堂・購買部の拡張・充実
14 コンビニエンスストアの誘致
15 保健管理センター（保健センター）の拡充と設備の充実
16 サークル関連施設の拡充・施設の充実
17 日常のスポーツ・レクリエーション活動のための施設・設備の充実
18 長期休暇中にグループ学習やレクリエーション活動のできる施設の拡充
19 学内全体の冷暖房システムの拡充整備
20 駐車場・駐輪場など学内交通環境の整備
21 植樹や広場・美観など快適な学内環境の整備
22 その他（　　）　　M1

M2　大学教職員への要望があればご記入ください
［　　］

M3　自由記述（その他、大学への意見・要望などがあれば自由に記述してください）
［　　］

※スペースが足りない場合は、続きを裏表紙に記入してください。

（事務局資料）

資料 1-1-65　在学生に対する「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」（項目抜粋）

福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査

この調査は，学生の皆さんが，在学中および卒業・修了にあたって，本学の教育・研究に対してどのような意識や満足感をもっているかをお聞きし，今後の福井大学に必要な教育・研究環境等を整備・充実していくための重要な基礎資料として収集させていただくものです。それぞれの質問に対して，あなたの感じているお気持ちをありのまま回答してください。

なお，この調査結果は，在学生および今後福井大学に入学して学ぶ後輩たちの学修・学生生活支援および環境づくりや大学評価のために活用するもので，それ以外の目的には使用しないとともに，回答者のプライバシーを保護します。ご協力よろしくお願いいたします。

2015 年 11 月

【基本情報】　該当する番号に○を付けてください。

□学部・大学院／課程・学科・専攻

工学部（31 機械　32 電気　33 情メ　34 建築　35 材料　36 生化　37 物理　38 知能）

工学研究科・博士前期（　61 機械　62 電気　63 情メ　64 建築　65 材料　66 生化　67 物理　68 知能　69 繊維　70 原ｴﾈ　）

工学研究科・博士後期（ 71 総合創成）

□性別　　（　1 男　　2 女　）

□在校区分（　1 在校生（本年度卒業・修了年度でない学生）
2 卒業・修了予定学生（本年度卒業・修了予定学生））

□出身地　（　1 福井県　　2 福井県以外の北陸地域（石川，富山）　3 東海地域（静岡，愛知，岐阜，三重）　4 関西地域（滋賀，京都，奈良，大阪，和歌山，兵庫）
5 その他　）

【アンケート】

３．自己分析

あなたは福井大学で学修や研究をすることによって以下に示す力がどの程度身についた（あるいは身につく）と思いますか。

＜回答＞　5 十分身についた　4 身についた　3 ある程度身についた　2 あまり身についていない　1 全く身についていない

３－１　一般常識	5　4　3　2　1
３－２　基礎学力	5　4　3　2　1
３－３　専門知識や技能	5　4　3　2　1
３－４　実践的な能力	5　4　3　2　1
３－５　広い視野で物事を多面的に考える力	5　4　3　2　1
３－６　論理や証拠を重視し，それらに基づいて考える力	5　4　3　2　1
３－７　問題のポイントを素早く押さえ，まとめる力	5　4　3　2　1
３－８　豊かな想像力，新しいアイディアや発想を生み出す力	5　4　3　2　1
３－９　事実や他者に対する誠実さ	5　4　3　2　1
３－10 日常的にコミュニケーションをする力	5　4　3　2　1
３－11 外国語でコミュニケーションをする力	5　4　3　2　1
３－12 プレゼンテーションをする力	5　4　3　2　1

３－13 ディスカッションやディベートをする力	５　４　３　２　１
３－14 文章作成や文章表現の力	５　４　３　２　１
３－15 情報を収集して適切に利用する力	５　４　３　２　１
３－16 情報機器を活用する力	５　４　３　２　１
３－17 社会や技術の変化に対応する力	５　４　３　２　１
３－18 ねばり強く仕事に取組む力	５　４　３　２　１
３－19 他の学生と協調する力	５　４　３　２　１

４－７　奨学金，TA/RA/SA 経費などの経済的支援は，学修研究に専念出来るうえで役に立ったと思いますか？（支援を受けた方のみお答えください）

５　４　３　２　１

４―８　指導・助言教員による修学指導・研究指導は，学修や研究に専念するうえで有益だったと思いますか？

５　４　３　２　１

４―９　図書館(文献複写サービス，メディアコモンの設置，ラーニングアシスタントの配置等)や語学センター（スチューデントコーディネーターの配置）での修学支援は，学修や研究に専念するうえで役立ったと思いますか？

５　４　３　２　１

４－13　企業等に在職のまま大学院で学ぶ社会人が夜間や休日等に授業を受けることができる措置（大学院設置基準第 14 条に定められた教育方法の特例措置），および長期履修制度などの修学上の制度は，学修や研究に専念するうえで役立ったと思いますか？

これらの該当者の皆さんにお聞きします。(特定の院生対象)

５　４　３　２　１

（事務局資料）

資料 1-1-66　修了直前の前期課程学生に対する「プログラム・オブ・スタディ評価結果報告書」(項目抜粋)

様式４（１／４）

プログラム・オブ・スタディ評価結果報告書

【１】　学生による報告・評価

平成＿＿＿年＿＿＿月＿＿＿日

＿＿＿＿＿＿＿＿専攻　　学籍番号 ＿＿＿＿＿＿　　氏 名 ＿＿＿＿＿＿＿＿ 印

以下のとおり報告いたします。

１．１　POS コミティの構成（本報告書作成時）

主指導教員（所属・職・氏名）＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

副指導教員（所属・職・氏名）＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

副指導教員（所属・職・氏名）＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

副指導教員（所属・職・氏名）＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

副指導教員（所属・職・氏名）＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

１．６　オーダーメードのカリキュラム（各学生に用意されたPOS）によって，効率が向上したり，実行がよりスムーズになるなどした項目（番号に○をつける。複数回答可）

１．専門分野の知識の獲得
２．非専門分野の知識の獲得
３．計画的な履修
４．目的意識を持った履修
５．修士論文研究の遂行
６．その他（　　）

１．７　PBL科目の履修によって促進された，あるいは涵養されたこと（履修した場合のみ番号に○をつける。複数回答可）

１．自立的学習
２．計画的学習
３．地域と連携した活動
４．コミュニケーション能力・プレゼンテーション能力
５．その他（　　）

１．８　POSコミティやPOSの制度のもとで受けた教育・研究指導を５点満点で総合評価 ＿＿＿点

（事務局資料）

資料1-1-67　修了生（社会人）に対する「卒業生に対する大学教育に関するアンケート」（項目抜粋）

卒業生アンケート　　［福井大学工学部（平成26年11月実施）］

（該当箇所に○をつけてください。）

●学部について

卒業年度　①平成20年度（H21年3月卒）　②平成21年度（H22年3月卒）
③平成22年度（H23年3月卒）

卒業学科　①機械工学科　②電気・電子工学科　③情報・メディア工学科
④建築建設工学科　⑤材料開発工学科　⑥生物応用化学科
⑦物理工学科　⑧知能システム工学科

●大学院について

修了年度　①平成22年度（H23年3月卒）　②平成23年度（H24年3月卒）
③平成24年度（H25年3月卒）

修了専攻　①機械工学専攻　②電気・電子工学専攻　③情報・メディア工学専攻
④建築建設工学専攻　⑤材料開発工学専攻　⑥生物応用化学専攻
⑦物理工学専攻　⑧知能システム工学専攻
⑨ファイバーアメニティー工学専攻　⑩原子力・エネルギー安全工学専攻
⑪その他（　　）

〔問２〕あなたの職種を選択してください。２つ以上にわたる場合は，すべてに○をつけてください。
① 研究・開発　② 教育・研究　③ 技術（ハード）　④ 技術（ソフト）　⑤ 技術営業
⑥ その他の営業 ⑦事務　⑧ 技術管理・企画　⑨ その他の管理・企画
⑩ その他（具体的：　　）

〔問４〕大学学部（大学院で受けた教育を除く）で学んだ「自然科学と工学の基礎知識およびそれを応用する能力」は業務を遂行する上で十分ですか？
① 充分　② どちらとも言えない　③ 不足　④ 問とは無関係

〔問５〕大学の科目で業務を遂行する上で有意義たったと思う科目の種類に○をつけてください？（複数選択可）
①数学などの専門基礎科目 ②専門科目の講義・演習　③実験　④卒業研究
⑤ その他（具体的：　　）

〔問６〕「課題の提案・報告などを効率的に記述し，説明する能力」に関して大学で受けた教育は，業務を遂行する上で十分でしたか？
① 充分　② どちらとも言えない　③ 不足　④ 問とは無関係な業務
⑤ その他（具体的：　　）

〔問７〕大学で身につけた「英語の会話力をはじめとする国際的に活躍するコミュニケーション能力」は業務を遂行する上で充分ですか？
① 充分　② どちらとも言えない　③ 不足　④ 英語を使わない
⑤ その他（具体的：　　）

〔問８〕「コンピュータ利用技術」に関して大学で受けた教育は業務を遂行する上で充分ですか？
① 充分　② どちらとも言えない　③ 不足　④ コンピュータを利用しない
⑤ その他（具体的：　　）

（事務局資料）

資料 1-1-68　長期インターンシップ受入先に対する「長期インターンシップに関するアンケート」
（項目抜粋）

下記の問いに対し，該当する項目の□を■として回答してください。

1．長期インターンシップ生受入れの意義について

(1) 長期インターンシップ生受入れは貴機関にとって有意義でしたか。

□有意義であった　　□有意義でなかった

□その他（　　）

(2)長期インターンシップ生受入れの結果，貴機関にとって，直接的にはどのようなメリットがありましたか。(複数可)

□若手技術者のスキル向上が図れた　　□業務が進展した

□社会貢献になった　　□メリットはなかった

□その他（　　）

3．長期インターンシップ生の倫理感について

(8) 長期インターンシップ生の態度やマナーは，貴機関での研修生として適切でしたか。大学として反省すべき点があればご示唆ください。

□極めて良かった　　□普通

□不満を感じた　(不満点を具体的に以下にご記入ください)

〔　　〕

□その他（　　）

(10) 大学では学べない職場での，技術者としての倫理感を修得させる上で，大学として改善すべき点はないですか。

□特になかった

□改善すべき（どのような改善が必要でしょうか)

〔　　〕

4．長期インターンシップ生の研修業務への取り組みについて

(11) 貴機関での長期インターンシップ生は服務面で問題はありましたか。特に，勤務時間を遵守していましたか。

□良好であった

□問題があった（問題点を具体的に以下にご記入ください）

〔　　〕

(12) 長期インターンシップ生は，貴機関で想定されていた業務を滞りなく実行したでしょうか。

□目標以上の成果をあげた　　□目標を達成した　　□目標に到達しなかった

(13) 長期インターンシップ生は，研修内容について積極的に挑戦していたでしょうか。

□積極的だった　　□普通だった　　□積極性が見られなかった

(14) 貴機関で研修業務を遂行する上で，研修生の学力や能力は充分でしたか。

□充分であった　　□普通であった

□不十分であった（問題点を具体的に以下にご記入ください）

〔　　〕

（事務局資料）

資料 1-1-69　修了生の勤務先に対する「福井大学の教育と卒業生についてのアンケート調査」
（項目抜粋）

UNIVERSITY OF FUKUI

平成25年 8月

人事ご担当者 様

国立大学法人　福井大学
理事(副学長)　寺岡 英男

福井大学の教育と卒業生についてのアンケート調査

平素より，本学の教育・研究活動につきましては格別のご高配を賜り，厚くお礼申し上げます。
さて，本学では学部・研究科の卒業生・修了生の就職先からご意見を賜り，教育の改善に反映いたしたくアンケートを実施することと致しました。なお，このアンケートは，教育の改善・向上の目的以外に使用したり，貴社が特定される形で公表したりすることはいたしません。
お忙しいところ恐縮ですが，9月25日(水)までに，E-mail又はFAXにて回答いただきますようお願い申し上げます。

貴社名:

設問1　「福井大学卒業生の印象」と「新卒採用者全体の印象」の2つの視点からお答え下さい。
以下の1～20について，それぞれあてはまる番号1つに○をつけて下さい。

	「福井大学卒業生の印象」				「新卒採用者全体の印象」			
	充分	おおむね充分	やや不十分	不十分	充分	おおむね充分	やや不十分	不十分
1 仕事に対する熱意・意欲がある	4	3	2	1	4	3	2	1
2 責任感がある	4	3	2	1	4	3	2	1
3 誠実である	4	3	2	1	4	3	2	1
4 積極的で実行力がある	4	3	2	1	4	3	2	1
5 コミュニケーション能力がある	4	3	2	1	4	3	2	1
6 表現力・プレゼンテーション能力がある	4	3	2	1	4	3	2	1
7 協調性・チームで仕事をする能力がある	4	3	2	1	4	3	2	1
8 リーダーシップがある	4	3	2	1	4	3	2	1
9 一般知識・教養がある	4	3	2	1	4	3	2	1
10 論理的思考力がある	4	3	2	1	4	3	2	1
11 創造性・企画力がある	4	3	2	1	4	3	2	1
12 問題解決力がある	4	3	2	1	4	3	2	1
13 課題発見力がある	4	3	2	1	4	3	2	1
14 専門分野の基礎知識・技術がある	4	3	2	1	4	3	2	1
15 専門分野の応用知識・技術がある	4	3	2	1	4	3	2	1
16 常に新しい知識・能力を身につけようとする力がある	4	3	2	1	4	3	2	1
17 語学力がある	4	3	2	1	4	3	2	1
18 ストレスコントロール力がある	4	3	2	1	4	3	2	1
19 マナーがある	4	3	2	1	4	3	2	1
20 規律性、倫理観がある	4	3	2	1	4	3	2	1
21 総合的に判断して，福井大学卒業生の採用に満足している	4	3	2	1	4	3	2	1

（事務局資料）

【教育改善の取組】

① 平成 25 年度の大学院改組を機に，前期課程では専門的実践力を育成する PBL 科目等を新設し（**資料 1-1-70**），後期課程では学際性・実践力育成を強化する新カリキュラムによりコースワークを充実させた（**P7-90 後掲資料 1-2-5，P7-99 後掲資料 1-2-9**）。これにより，産業現場で活躍できる実践性と国際性を兼ね備えた人材への社会ニーズに対応した。

資料 1-1-70　平成 25 年度改組によって導入された実践力教育（前期課程）

専攻	改善内容
機械工学専攻	・新設の「CAE 基礎」（専攻共通の必修科目）により，機械工学分野においてコンピュータを利用した問題解決の手法について学ぶ。
電気・電子工学専攻	・新設の「電気・電子工学 PBL」（専攻共通の選択必修科目）により，課題に主体的に取り組み，実践力を身につける。
情報・メディア工学専攻	・外部講師を招いて産業界の先端技術を学ぶ「情報・メディア工学特別講義」を履修指導により事実上必修化した。
材料開発工学専攻	・新設の「材料開発工学 PBL」（専攻共通の必修科目）により，自らの研究を俯瞰的に捉え，その内容を広く社会に伝える科学技術コミュニケーション活動を企画・立案から発表まで行い，自主性，問題解決能力，コミュニケーション能力，多元的評価能力など，現代の技術者に求められる説明責任を担う能力を育成する。
生物応用化学専攻	・新設の「生物応用化学 PBL」（専攻共通の選択必修科目）により，化学，生命科学，工学の分野において行われている原子・分子レベルの解析についてのより実践的な知識を習得する。
物理工学専攻	・新設の「物理工学 PBL」（専攻共通の必修科目）により，物理工学に共通な講演に対して質疑応答することにより，判断能力とコミュニケーション能力を養う。
繊維先端工学専攻 ※平成 25 年度に，ファイバーアメニティ工学専攻が繊維先端工学専攻に改組された。	・新設の「繊維先端工学創成演習」（専攻共通の必修科目）により，修士論文研究についての基本的な知識および専門的知識を習得し，関連論文の紹介・研究報告・学会発表などを通じてプレゼンテーション能力や高い倫理観を養う。 ・新設の「繊維先端工学 PBL」（専攻共通科目の選択必修科目）により，繊維に関連した先端技術について，一貫した知識を実践的かつ多面的に学習し，実践力と応用力を鍛える。 ・学部と前期課程を通した教育を実施するため，学士課程に副専攻「先端繊維科学コース」を設置する（**資料 1-1-71**）
原子力・エネルギー安全工学専攻	・東日本大震災以降の社会的要請を踏まえ，平成 26 年度に「安全工学」（必修），「原子力の安全性と地域共生」および「環境と人間活動」（選択）を新設し，安全や環境の視点から原子力工学のあり方などを学ぶ体制を強化した。 ・平成 26 年度新設の「科学英語 PBL」（選択必修）により，e-learning 教材を利用して，技術英語の文章の構成，表現方法，専門用語を学び，国際会議論文の執筆，及び口頭発表に必要な英語基礎能力を身につける。また，海外で行われる授業，研修，インターンシップなどに参加，あるいは国際学会等において英語で発表することを通じて，実践的な英語能力を身につける。 ・平成 26 年度新設の「原子力工学 PBL」により，原子力工学に関する様々な要素技術について，現場・現物・実体験を通じて，講義等で得た知識をより深いものとする。 ・平成 26 年度新設の「エネルギー安全工学 PBL」（選択）により，原子

	力・エネルギー安全工学分野における共通な講演に対して積極的な質疑応答や議論を行うことで，自己表現力，相互理解力，討論力等の高度専門技術者として必要な資質を身につける。

（事務局資料）

② 後期課程では，企業の第一線で活躍できる博士人材へのニーズに対応するため，平成22年度から「産業現場に即応する実践道場」（文部科学省特別教育研究費）による自律型産業人材の体系的な育成を開始した(**P7-102 後掲資料1-2-12,P7-106 後掲資料1-2-14, P7-108 後掲資料1-2-16**)。

③ 繊維先端工学専攻では，地域の繊維産業界の期待に応え，平成25年度に前期課程の教育とシームレスに接続する「先端繊維科学コース」（副専攻）を学士課程に設けた（**資料1-1-71**)。原子力・エネルギー安全工学専攻では，東日本大震災以降の社会の要請に応え，安全や環境に係る科目を新設した（**資料1-1-70**)。これら２つの独立専攻では，外部資金を利用し外部機関・大学等と連携して行う教育を第２期に強化した（**P7-28 前掲資料1-1-21，P7-31 前掲資料1-1-22～26**)。

資料1-1-71　副専攻「先端繊維科学コース」

地域の主要産業である繊維にかかわる内容を体系的に扱い，繊維先端工学専攻（独立専攻）への導入教育を行う。平成25年度に学士課程に設置し，平成29年3月に最初の修了者が出る予定。コース科目のうち「テキスタイル工学」は日本化学繊維協会の寄附講義である。

先端繊維科学コース（副専攻）の履修について

本学大学院工学研究科には，「繊維先端工学専攻」が学部学科を持たない独立専攻として設置されています。

「先端繊維科学コース（副専攻）」は，繊維先端工学専攻の導入教育となるコースです。このコースは，材料開発工学科及び生物応用化学科の学生を対象としています。所属する学科で基礎となる化学や物理を学びながら，繊維とは何かその魅力に始まり繊維科学の基礎から応用までを体系的に学ぶことができます。本コースを履修すると，繊維系技術者に必要な知識を習得すると共に，博士前期課程　繊維先端工学専攻での専門的な学習に備えた十分な基盤を作ることができます。

所属する学科の卒業要件とは別に，次に示すカリキュラムの修了要件を満たした者には，副専攻として「先端繊維科学コース（副専攻）修了証」を学長名で発行します。

区分		授業科目	単位数	毎週授業時間数 1年次	2年次	3年次	4年次	備考
全学科共通科目	●	ものづくり基礎工学	2	2				1～4年次履修
	●	知的財産権の基礎知識	2			2		3，4年次履修
	●	ベンチャービジネス概論	2				2	4年次履修
共通教育科目	☆	進化する繊維の技術	2	2				1～4年次履修
	☆	繊維の世界	2	2				
コース専門科目A	○	材料力学	2		2			2～4年次履修
	○	固体力学	2			2		3，4年次履修
	○	材料加工工学	2			2		
	○	分子相互作用論	2			2		
	○	複合材料	2			2		
コース専門科目B	○	機能分子化学	2			2		
	○	ナノ材料化学	2			2		
	○	微生物工学	2			2		
	○	繊維加工学概論	2			2		
コース専門科目共通	○	テキスタイル工学	2			2		
	◎	繊維産業フロンティア	2			2		3，4年次履修 定員15名
	◎	国際交流演習	2				2	4年次履修
合計			34					

（事務局資料）

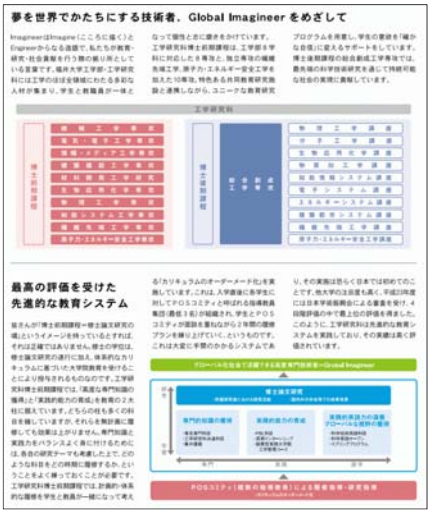
【教育情報の発信】

ホームページ，冊子などで教育情報を発信している（**資料 1-1-72**）。

資料 1-1-72　ホームページや冊子による教育情報の発信



（http://www.eng.u-fukui.ac.jp/）



（工学研究科博士前期課程の案内）

（事務局資料）

（水準）　期待される水準を上回る

（判断理由）

①　平成 25 年度に，社会ニーズを踏まえて，前期課程，後期課程ともに入学定員の適正化と学際性や実践力を重視したカリキュラム強化を柱とする改組を行った[1)]。前期課程では，「カリキュラムのオーダーメード化」による体系的・計画的な履修指導を集団指導体制で行っており，学生からの評価は第 1 期よりも高い[2)]。後期課程でもその成果を踏まえた履修指導を複数教員で行っている。

[1)] 資料 1-1-4	：工学研究科改組の概要（平成 25 年度）　P7-8
[2)] 資料 1-1-12	：POS コミティとカリキュラムのオーダーメード化　P7-20
資料 1-1-13	：POS コミティによる集団指導体制のもとで行われた教育研究に対する学生の評価　P7-20
資料 1-1-15	：研究指導に関する大学院生の満足度　P7-21

②　GGJ 事業によりグローバル化が進展し，学生の国際交流活動が活発化した[3)]。留学生に対しては，英語のみで修了できる「国際総合工学特別コース(GEPIS)」（前期課程）と「国際技術研究者育成コース(GEP for R&D)」（後期課程，平成 24 年度開始）を設けている[4)]。GEPIS ではカリキュラムと募集方法の見直しを行った結果，年平均入学者数が 2.3 倍に増加した[5)]。

[3] 資料 1-1-5　：「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」事業への採択　P7-10
[4] 資料 1-1-43　：社会人・留学生選抜の実施状況（平成 27 年度）　P7-50
資料 1-1-45　：英語のみで修了できるコース　P7-51
[5] 資料 1-1-46　：国際総合工学特別コース(GEPIS)の入学者状況　P7-52

③教員採用は公募を原則とし教員選考規程に基づき優れた人材を公平に採用している[6]。テニュアトラック制度の活用等により，任期付教員，女性教員，外国人教員の数が増加した（女性教員の数は第１期の 2.3 倍）[7]。FD 委員会を中心に様々な FD 活動が企画・実施され[8]，教員の好評を得ている[9]。調査結果は第２期における教員の教育力向上を裏付けている[10]。平成 26 年度には新基準での教員評価も実施され[11]，大学機関別認証評価で「主な優れている点」として高く評価された。

[6] 資料 1-1-27　：福井大学大学院工学研究科教員選考規程　P7-36
[7] 資料 1-1-31　：多様な教員の在籍状況や採用実績　P7-39
資料 1-1-32　：テニュアトラック制度とその運用状況　P7-41
資料 1-1-33　：男女共同参画推進功労等表彰式における工学研究科女性教員の表彰　P7-41
[8] 資料 1-1-51　：FD 委員会を中心とした FD 体制　P7-55
資料 1-1-52　：FD 活動の例　P7-55
[9] 資料 1-1-53　：FD 活動に対する評価　P7-57
[10] 資料 1-1-54　：教員の教育力の向上を裏付ける調査結果　P7-58
[11] 資料 1-1-55　：全学方針に基づく新たな基準により実施した教育活動評価　P7-58

④文部科学省大学間連携共同教育推進事業により「繊維・ファイバー工学コース」を設置し，地元産業界等からの期待に応えた[12]。これは，大学機関別認証評価で「優れた点」の１つとして高く評価された。また，原子力・エネルギー安全工学専攻では，東日本大震災以降，学外機関・産業界との連携を一層強化し，競争的外部資金を活用した実習重視の教育を充実させ[13]，さらに第３期に繋がる新たな人材育成事業にも採択されるなど[14]，社会の期待に応えた。

[12]資料 1-1-24　：繊維・ファイバー工学コースのカリキュラム　P7-33
資料 1-1-25　：繊維系大学連合による「繊維・ファイバー工学コース」の特徴　P7-34
資料 1-1-26　：繊維・ファイバー工学コース実施の成果と評価　P7-35
[13]資料 1-1-20　：外部機関との覚書締結状況　P7-28
資料 1-1-21　：実施にあたり外部資金を活用した教育　P7-28
資料 1-1-22　：他機関の有する教育資源や施設を利用した実習教育と参加学生の声　P7-31
[14]資料 1-1-23　：「福島第一原子力発電所の燃料デブリ分析・廃炉技術に関わる研究・人材育成」事業の概要　P7-32

以上のように適切な教育実施体制が整備・運用されており，さらに学生や産業界からの要請にも十分対応しており，期待の水準を上回る。

観点　教育内容・方法

（観点に係る状況）

●体系的な教育課程の編成状況

【養成する能力等の明示】

平成 23 年度に，ディプロマ・ポリシー（DP）とカリキュラム・ポリシー（CP）を，社会的要請および策定済みのアドミッション・ポリシー（AP）を踏まえ，策定した（**資料 1-2-1～3**）。社会ニーズの変化に合わせた見直しも恒常的に行っている（**P7-64 前掲資料 1-1-59**）。

各ポリシーは，工学研究科のウェブサイトや学生便覧などで公開され，その周知状況は良好である（**資料 1-2-4**）。

資料 1-2-1　工学研究科全体のディプロマ・ポリシー，カリキュラム・ポリシー

工学研究科（博士前期課程）ＤＰ

工学研究科では以下のような博士前期課程修了生を社会に送り出します。

1. 高度な専門的知識・能力、および専門に関連した幅広い基礎知識を有している。
2. 創造力、自己学習力、問題発見・解決能力、およびコミュニケーション能力を有している。
3. 高度専門技術者として守るべき倫理や負うべき社会的責任を自覚し、幅広い視野をもって社会の発展に貢献できる。

工学研究科（博士後期課程）ＤＰ

工学研究科では以下のような博士後期課程修了生を社会に送り出します。

1. 高度な専門的知識・能力、専門に関連した幅広い基礎知識、ならびに研究推進に必要な技法を有している。
2. 広い視野に立って課題を設定し、研究開発活動を独力で推進できる能力を有している。
3. 高度専門技術者・研究者として守るべき倫理や負うべき社会的責任を自覚し、幅広い視野をもって社会の発展をリードできる。

工学研究科（博士前期課程）ＣＰ

高度な専門的知識・能力に加え、工学の広い分野に対応できる総合力と資質を有する高度専門技術者を育成するため、以下の方針に沿って教育を行います。

1. 高度な専門的知識・能力、および専門に関連した幅広い基礎知識を身に付けさせる。
2. 専門分野を超えた幅広い視野を獲得させる。
3. 国際的にも通用する技術者として必要な、創造力、自己学習力、問題発見・解決能力、およびコミュニケーション能力を併せた総合力を身に付けさせる。
4. 技術者として守るべき倫理や負うべき社会的責任を自覚させる。

工学研究科（博士後期課程）ＣＰ

高度な専門的知識・能力や研究開発能力に加え、工学の広い分野で活躍できる総合力と資質を有する高度専門技術者や研究者を育成するため、以下の方針に沿って教育を行います。

1. 高度な専門的知識・能力、および専門に関連した幅広い基礎知識を身に付けさせる。
2. 国際的にも活躍できる技術者・研究者として必要な、実践的研究開発能力、幅広い視野、倫理、社会的責任感を身に付けさせる。
3. 高い専門性を有しながらも工学の広い分野に柔軟に対応し活躍できる能力を身に付けさせる。

（工学部・工学研究科ウェブサイト http://www.eng.u-fukui.ac.jp/education/de_policy.html より）

資料 1-2-2　前期課程各専攻のディプロマ・ポリシー，カリキュラム・ポリシー

ディプロマ・ポリシー	カリキュラム・ポリシー
●機械工学専攻	
機械工学分野の専門教育と先進的研究を通して，以下の知識，能力，資質を備えた機械技術者になりえる者に学士の学位を授与する。 1. 人が環境と調和した快適な社会生活を過ごすためのモノづくりに倫理観を持って寄与できる。 2. 基礎学力と応用力を有している。 3. 未知の問題に対応する能力を備えている。 4. 国際社会において活躍できる。	1. 人類の持続可能な発展に寄与できる科学技術の在り方を，科学技術と社会との関連を基軸にグローバルな視点で考える能力を身につけさせる。 2. 機械工学分野等の高度な専門知識を有し，それらを諸問題の設定・解決に応用できる能力を身につけさせる。 3. 物事に対して論理的に考え，展開し，表現できる能力を身につけさせる。 4. 幅広い知識と能力を持って国際社会で活躍できる能力を身につけさせる。
●電気・電子工学専攻	
電気・電子工学は，産業の基盤技術であり，高度情報化社会の実現をハードウエア，ソフトウエアの両面から牽引する中核技術として発展している。その主要な分野である，物性・デバイス工学，エネルギー工学，システム工学において，高度かつ複雑化する社会ニーズに柔軟に対応できる専門知識と応用能力を有し，社会に対する高い倫理観と地球的視点からの洞察に基づき，上記 3 分野の融合も実践できる能力を兼ね備えた高度専門技術者になり得る者に修士の学位を授与する。	電気・電子工学は現代産業の基盤技術であり，高度情報化社会の実現をハードウエア，ソフトウエアの両面から牽引する中核技術として発展している。本専攻では，（1）電子物性分野（先端材料・デバイス），（2）エネルギー工学分野（電気エネルギー発生・パワーエレクトロニクス・電力システム），（3）システム工学分野（システム科学・情報通信）を主要な教育研究分野として位置づけ，豊かな暮らしを支える社会基盤の構築に寄与する知識と技術を創出する研究を進める。同時に，高度かつ複雑化する社会的ニーズに的確に応えることができる能力と高い倫理観とを兼ね備えた高度専門技術者を育成することを目的としている。 電気・電子工学専攻では，電子物性，エネルギー工学，システム工学などの電気・電子工学の高度な専門科目について学ぶとともに，電気・電子工学特別講義では外部講師などによる講義を通して日々発展する電気・電子工学分野の最新成果について幅広く学ぶ。また，電子物性分野，エネルギー工学分野，システム工学分野から各自が目指す専門性にあわせて専門科目を学び，修士学位論文や将来の研究・開発に必要な専門知識を修得する。電気・電子工学特別演習及び実験では，所属研究室で行う研究についての基本的な知識および専門的知識を習得し，関連論文の紹介・研究報告・学会発表などを通じてプレゼンテーション能力や高い倫理観を養う。また，指導教員の下で行う研究をまとめて提出した学位論文とその研究発表が審査され，それが最終試験となる。
●情報・メディア工学専攻	
情報・メディア工学専攻では以下のような博士前期課程修了生を社会に送り出します。 1. 情報，通信，メディア工学に関する高度な専門知識と関連する幅広い基礎知識，およびその応用能力を有している。 2. 情報に関する実世界のなな問題に対する理解力・応用力・解決能力を有している。 3. 自律的学習力，自己表現力，相互理解力，討論力と国際性を有している。 4. 高度情報技術者としての社会・組織に対する倫理観および責任を自覚し，新しい技術の開発により社会の発展に貢献する意欲と実現力を有している。	以下の方針に沿って教育を行います。 1. 情報，通信，メディア工学の高度な専門知識とその応用能力，および関連した幅広い基礎知識を身に付けさせる。 2. 実世界における工学的問題を発見し，そのモデル化を行い解決するための幅広い工学的視野と創造性を身に付けさせる。 3. 自主的かつ継続的な学習力，自己表現力，相互理解力，討論力および英語力など国際的にも通用する情報技術者として必要な資質を身に付けさせる。 4. 情報技術者としての社会・組織に対する倫理観及び責任感を涵養するとともに，新しい情報技術の開発に主体的に関わることで，社会の発展に貢献する意欲とその実現力を身に付 けさせる。
●建築建設工学専攻	
以下の知識，能力，資質を備えた者が，建築建設工学専攻を修了したと認める。	建築建設工学専攻における高度な専門的能力に加え，建築から都市・国土におよぶ生活空間を工

1. 建築建設工学関連分野における高度な専門知識，および自然科学的・芸術的・技術的・人文社会学能力を有している。 2. 高度な技術を自ら解決・発展・展開できる専門的能力とコミュニケーション能力を有している。 3. 建築建設工学技術者の役割を考え，地域や環境に対する広い視野を持ち，社会に貢献できる倫理観を有している。	学の枠を越えて総合的に探求できる高度専門技術者を養成するため，以下の方針で教育課程を構成する。 1. 建築建設工学関連分野における高度な専門知識や能力，および自然科学的・芸術的・技術的・人文社会学的基礎知識を身に付けさせる。 2. 高度な技術を自ら解決・発展・展開できる専門的能力とコミュニケーション能力を身に付けさせる。 3. 建築建設工学技術者の役割を考え，地域や環境に対する広い視野を持ち，社会に貢献できる倫理観を身に付けさせる。
●材料開発工学専攻	
1. 材料開発分野に関する高度な専門知識と問題解決への応用能力を有している。 2. 主体的かつ継続的に学習し，研究課題に取り組む積極性を有している。 3. 論理的思考能力と経験的直感力に基づき，自らの考えを国際社会に対して表現・伝達できるコミュニケーション能力を有している。 4. 高度専門技術者として社会に対する責任を自覚し，自然環境への影響を考慮しながら，人間社会の発展に貢献する力を有している。	1. 材料開発分野に関する高度な専門知識と，問題の早期解決への応用能力を身に付けさせる。 2. 主体的かつ継続的に学習し，研究課題に取り組む能力を身に付けさせる。 3. 論理的思考能力と経験的直感力に基づき，自らの考えを国際社会に対して表現・伝達できるコミュニケーション能力を身に付けさせる。 4. 高度専門技術者として社会に対する責任を自覚し，社会や自然環境への影響を考慮しながら，材料開発を推進する能力を身に付けさせる。
●生物応用化学専攻	
1. 化学・生命科学・工学を連結する課題探求型技術者，研究者として育っていくための礎となる，問題発見・解決能力，自己学習力，創造性，柔軟な思考性，及びコミュニケーション能力を有している。 2. 技術者としての倫理観や社会的責任感を持ち，持続が可能で豊かな社会の実現を目指す使命感を持っている。 3. 専門以外の分野についても広い素養とグローバルな視点を有している。	1. 化学，生命科学，工学に関わる分野の知識をより深くさせる。 2. ある．特定の分野に関するより高度な知識を持たせる。この分野の知識を幹とし，他の分野の知識を枝となるよう結びつけて，広い視点から判断を下す能力を持たせる。 3. 自分と異なる判断の体系を持つ者に対する理解を深め，化学・生命科学・工学を連結する技術者としての倫理観や社会的責任について，具体的に理解させる。 4. 技術者として，持続が可能で豊かな社会の実現を目指す使命感を持たせる。 5. 国際的にも通用するように，グローバルな視点を身に付けさせる。
●物理工学専攻	
物理学を中心に自然科学，数理科学を深く学び，次のような資質を身に付けた者に修士の学位を授与する。 1. 高度な専門知識，技術を自主的・継続的に学ぶことができる。 2. 常に物事の本質を見極めようとする姿勢を持っている。 3. 問題を幅広い視野で多角的に捉えることができ，技術者としての倫理観に基づいて判断できる能力を持っている。 4. 幅広い基礎知識と高度な専門知識を用いて問題を解決し，新しいものやシステムを創り活用できる。 5. 国際社会において自らの考えを説明し，議論できるコミュニケーション能力を持っている。	本専攻で定める教育理念・目的を達成するため以下の方針に沿って教育を行う。 1. 自ら学んだ内容を自己評価し，更に高度な課題を学習する能力を育成する。 2. 高度で複雑な問題においても常にその本質を考える能力を育成する。 3. 学んだ知識を総合して幅広い視点で多角的に物事を捉え，技術者としての倫理に基づいて判断できる能力を育成する。 4. 物理学や数学の高度な知識を用い，長期的な視点で計画を立て問題を解決する能力を育成する。 5. 自らの考えを日本語や英語で説明し，議論できるコミュニケーション能力を育成する。
●知能システム工学専攻	
知能システム工学専攻では以下のような博士前期課程修了生を社会に送り出します。 1. 高度な専門的知識・能力，および専門に関連した幅広い基礎知識を有している。 2. 創造力，自己学習力，問題発見・解決能力，およびコミュニケーション能力を有している。 3. 高度専門技術者として守るべき倫理や負うべき社会的責任を自覚し，国際的で幅広い視野をもって社会の発展に貢献できる。	高度な専門的知識・能力に加え，工学の広い分野に対応できる総合力と資質を有する高度専門技術者を育成するため，以下の方針に沿って教育を行います。 1. 高度な専門的知識・能力，および専門に関連した幅広い基礎知識を身に付けさせる。 2. 専門分野を超えた幅広い視野を獲得させる。 3. 国際的にも通用する技術者として必要な，創造力，自己学習力，問題発見・解決能力，および

	コミュニケーション能力を併せた総合力を身に付けさせる。 4. 技術者として守るべき倫理や負うべき社会的責任を自覚させる。
●繊維先端工学専攻	
1. 繊維の化学・生物学的および物理的特徴を理解している。 2. 確固とした専門知識と倫理観を備え，繊維系・化学系企業や研究機関をはじめ，繊維材料を利用する様々な業種の研究開発に積極的に対応できる。 3. 問題解決のための専門知識を自ら継続的に修得する能力を持つ。 4. 専門分野について，国内外の公的な場で表現し議論することが可能なコミュニケーション能力を持つ。	1. 繊維科学の基礎から応用までの専門教育に加えて，繊維産業に対する理解を深める。 2. 繊維を核とした各分野における先端知識を習得し，「繊維マインド」を持った人材を育成する。 3. 世の中の未知の課題を発見し，繊維を核とした知識を駆使してその課題を解決する能力を育成する。 4. 専門分野での国際的なコミュニケーション能力を育成する
●原子力・エネルギー安全工学専攻	
原子力・エネルギー安全工学専攻の高度専門教育と先進的研究を通して，以下の知識，能力，資質を備えた者に，修士の学位を授与する。 1. 高度専門技術者として相応しい，高度な専門知識と自ら課題を解決する能力を有している。 2. 幅広い視野と高い倫理観，国際的なコミュニケーション能力を修得している。	1. 原子力の安全と共生をキーワードとして，原子力を取り巻く諸課題に関して，グローバルな視点で考える能力を身につけさせる。 2. 原子力工学，安全工学やエネルギー工学について，幅広い視野と高度な専門的知識を修得させる。 3. 柔軟な思考から議論し自ら行動して解決に至る能力，論理的な思考能力と豊かな自己表現能力を育成させる。

（工学部・工学研究科ウェブサイト http://www.eng.u-fukui.ac.jp/education/de_policy.html より）

資料 1-2-3　社会的要請等を踏まえたディプロマ・ポリシー，カリキュラム・ポリシーの策定

ディプロマ・ポリシー，カリキュラム・ポリシーの策定にあたっては，教育委員会の下にワーキングを設置し，大学の理念・長期目標や中央教育審議会の議論等を十分踏まえ，社会の要請に応えた。

工学部・工学研究科のディプロマポリシー、カリキュラムポリシーの案について

平成２３年８月２３日
ディプロマポリシー・カリキュラムポリシーWG
座長　山田 徳史

ディプロマポリシー・カリキュラムポリシーWG（以下WG）では、工学部および工学研究科教育委員会の依頼を受け、工学部・工学研究科のディプロマポリシー（ＤＰ）ならびにカリキュラムポリシー（ＣＰ）の案の作成を行ってきた。この度、ＤＰ案とＣＰ案の取り纏めを終了し、教育委員会に対し、WGの審議の概略とその結果について、以下の通り報告する。

（１）WGのメンバー（敬称略）
小野田、飛田、本田、黒岩、高嶋、橋本(貴)、山田(徳)

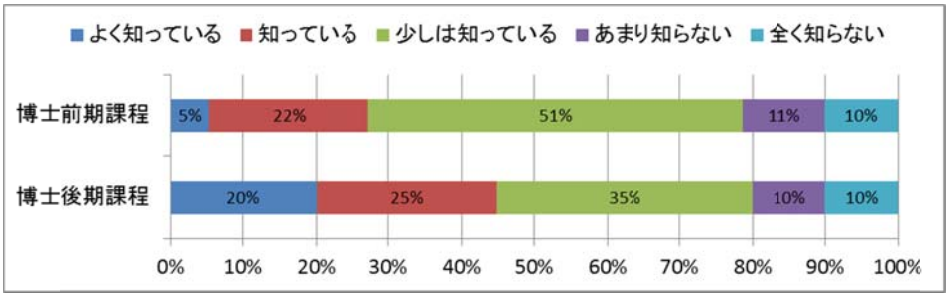
（２）WGの開催状況
第１回　６月１７日　　９：００～１０：００
小野田、飛田、本田、黒岩、高嶋、橋本(貴)、山田(徳)
第２回　６月３０日　　８：４５～９：５５
小野田、飛田、本田、高嶋、橋本(貴)、山田(徳)
第３回　７月１３日　１５：００～１６：１５
黒岩、橋本(貴)、山田(徳)
第４回　７月２９日　１３：００～１４：３０
小野田、飛田、本田、黒岩、橋本(貴)、山田(徳)
第５回　８月３日　　１４：４５～１６：１５

（４）参考にした資料等
・工学部・工学研究科の中期計画とその２３年度計画（教育委員会担当部分）
・３つのポリシーが求められる背景（山田メモ）
・福井大学の理念・長期目標
・夢を形にする技術者、ＩＭＡＧＩＮＥＥＲをめざして（工学部・工学研究科の理念と目的）
・全学教務学生委員会で提示されたＤＰ・ＣＰの「ひな形」(医学部作成)
・他大学・大学院のＤＰ・ＣＰの例
・進研アド発行の"Between"の記事
・福井大学・大学院の学則や工学部・工学研究科の規則（教育課程の編成の方針や卒業・修了要件にかかわる部分の内容）
・Jabee の学習・教育到達目標
・中教審答申「学士課程教育の構築に向けて」、「新時代の大学院教育」（教育課程の編成の方針や学位授与の方針にかかわる部分の内容）
・中教審大学院部会「大学院教育の実質化の検証を踏まえた更なる改善について　中間まとめ」（教育課程の編成の方針や学位授与の方針にかかわる部分の内容）
・第２次大学院教育振興施策要領（Ｈ２３．８．５）
・大学設置基準及び短期大学設置基準の一部を改正する省令（Ｈ２２．２．２５）

（事務局資料）

資料 1-2-4　ディプロマ・ポリシーやカリキュラム・ポリシーの周知状況

設問：カリキュラム・ポリシー（教育課程の編成・実施の方針）とディプロマ・ポリシー（学位授与の方針）は，それぞれカリキュラムの目的・内容・編成方針と卒業までに皆さんが達成すべき学修目標を明示したものです。これらはホームページ，シラバス，学生便覧などに掲載されています。あなたはカリキュラム・ポリシーやディプロマ・ポリシーを知っていますか？



（平成 27 年度「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」結果より抜粋）

【カリキュラムの体系性】

教育課程は CP に基づいて編成され，DP に規定された知識・能力等を修得するために必要な授業科目を，相互の関連や年次配分のバランス等を考慮して，配置している（**P7-94 後掲資料 1-2-7**）。平成 25 年度改組に伴い，社会ニーズを踏まえて，実践的能力の涵養をより重視したカリキュラム体系に移行した（**資料 1-2-5**）。カリキュラムに対する学生の期待は高い（**資料 1-2-6**）。

資料 1-2-5　平成 25 年度改組における教育課程の体系性の確保

○　工学研究科博士前期課程

１．研究科の目的及び専攻の設置

①　工学は，科学技術の創造を通して，人類の幸福に寄与する役割を担う。工学研究科では，確かな専門知識と高い倫理観を有し，自然や環境と調和した人間社会の豊かな発展に貢献できる高度専門技術者や研究者等を養成する。また，地域の研究拠点となることを目的に，基礎的研究から最先端技術の開発まで，工学に関わる幅広い学問分野の教育研究を推進する。

②　研究科の目的を達成するため，機械工学専攻，電気・電子工学専攻，情報・メディア工学専攻，建築建設工学専攻，材料開発工学専攻，生物応用化学専攻，物理工学専攻，知能システム工学専攻，繊維先端工学専攻，原子力・エネルギー安全工学専攻の 10 専攻を置いている。なお工学研究科博士前期課程において身に付けさせる知識・技能は以下のとおりである。

１．数学，物理等の工学系基礎知識科目の基本的知識
２．ベンチャービジネスや知的財産権，自然環境との調和や技術者倫理など，高度専門技術者・研究者として必要な基礎的素養
３．英語コミュニケーション能力
４．専攻分野に関する基礎的および高度な専門知識
５．長期インターンシップや製品開発等を通しての実践力，とくに表現力と交渉能力
６．プロジェクト型学習を通しての柔軟な発想力，プロジェクトをリードできる資質
７．修士論文研究を通しての研究遂行能力，問題解決能力

③　掲載　URL http://www.eng.u-fukui.ac.jp/

２．教育の体系性

現行の工学研究科博士前期課程の授業科目は，研究科共通科目，専攻共通科目および分野開講科目の３種類に分類される。

研究科共通科目では，数学や物理等に関する基礎的知識だけでなく，環境やエネルギーについての科目，技術経営やベンチャービジネスに関する科目等も開設し，自然環境との調和や技術者倫理，起業家精神や知的財産権など，高度専門技術者・研究者として必要な基礎的素養を身に付けさせる授業を行っている。専攻共通科目では，講義・実験・実習を組み合わせ，情報機器の活用も含め，専攻に共通する基礎的科目の授業を少人数教育で行っている。分野開講科目では，高度の専門的知識及び能力を習得させることを目的に，専門性の高い授業を数名程度の少人数教育で行っている。また，必要に応じてフィールドワークによる授業も行っている。さらに，学生に最適な教育を提供するため，以下のような工学研究科独自の取組も行っている。

(1) 英語コミュニケーション能力の向上を目的に，ネイティブスピーカーを中心とする英語教育の専門家による授業科目を全ての専攻で開設している。
(2) 学問と実践を組み合わせた教育を行うことを目的に，３ヶ月程度の長期に渡るインターンシップを実施する授業科目「長期インターンシップ」（４単位）を全ての専攻で開設している。
(3) 大学が保有するシーズをもとに，製品開発とビジネスプランの実践を通じた人材育成を，産・官・学・民が連携して行う「創業型実践大学院工学教育コース」（10 単位）を設置している。
(4) アジアを中心とする海外からの留学生も多いため，留学生を対象に英語で授業および研究指導を行う「国際総合工学特別コース」を設置している。
(5) 教育地域科学部，医学部と共同して生命科学複合研究教育センターを設立し，生命科学・医学・人間科学と工学との複合領域を学ぶコースを設置している。
(6) 学生の目的に向けて自ら学習すべき事項を見出し，教員の指導の下で学習を進めていく学習形態である PBL（Project-Based Learning）を開講している。PBL には特別な予算措置も行っている。
(7) 学生の主体的な取組を支援し，自由な発想や，研究を完遂することへの自覚を促すことを目的に「学生主体プロジェクト研究」を実施している。採択されたプロジェクト研究には研究経費が支給される。

以上のような多様な開講科目・コースの中から，学生各人の研究テーマに応じた体系的な履修を確保するために，学生ごとに主指導教員１名と副指導教員２名以上から成る POS コミティ（Program of Study Committee）を構成して，集団で履修指導・研究指導を行っている。

知能システム工学専攻の体系的履修の例を以下に示す。

年次	科目区分	単位数			授業科目
		必修	選択必修	選択	
1	専攻共通科目	5			知能システム工学特別演習及び実験Ⅰ
	専攻共通科目	5			知能システム工学特別演習及び実験Ⅱ
	専攻共通科目			2	科学英語コミュニケーションⅠ
	専攻共通科目			2	科学英語コミュニケーションⅡ
	専門科目		2		知能創成ゼミナールⅠ
	専門科目		2		知能創成ゼミナールⅡ
	専門科目			2	神経情報処理論
	専門科目			2	生物情報学
	専門科目			2	PBL H-1
	研究科共通科目			2	生命複合科学特論Ⅰ
2	専門科目			2	科学英語表現Ⅰ
	専門科目			2	科学英語表現Ⅱ

●　履修方法及び修了要件

1．履修方法　1年次：専攻共通科目（必修）10 単位，専攻共通科目・専門科目（選択）16 単位
計 26 単位
2年次：専門科目（選択）4単位　合計 30 単位

2．修了要件　当該課程に2年以上在学し，研究科の定めるところにより 30 単位以上を修得し，かつ，必要な研究指導を受けた上，当該課程の目的に応じ，当該課程の行う修士論文又は特定の課題についての研究の成果の審査及び最終試験に合格すること。ただし，在学期間に関しては，優れた研究業績を上げた者については，当該課程に1年以上在学すれば足りるものとする。

○　工学研究科博士後期課程

1．研究科の目的及び専攻・専修の設置

①　工学は，科学技術の創造を通して，人類の幸福に寄与する役割を担う。工学研究科では，確かな専門知識と高い倫理観を有し，自然や環境と調和した人間社会の豊かな発展に貢献できる高度専門技術者や研究者等を養成する。また，地域の研究拠点となることを目的に，基礎的研究から最先端技術の開発まで，工学に関わる幅広い学問分野の教育研究を推進する。

②　工学系大学院の博士後期課程には，狭い意味の研究者だけでなく，産業界等において指導的立場で活躍できる高度専門人材を養成することが求められている。本博士後期課程では，高度な専門的知識や研究開発能力に加え，工学の広い分野で活躍できる総合力と資質を有する高度専門技術者や研究者を育成する。

これまで，本博士後期課程では前期課程の 10 専攻の枠を外した4専攻体制で研究・教育を行ってきた。平成 25 年度よりこれを1専攻 10 講座の体制に再編し，学際的な研究や流動的で柔軟性に富んだ研究をこれまで以上に推進しやすい組織構成とした。同時に，教育課程も大幅に見直し，専門分野に関する高度な知識を教授し研究能力を育成する従来の柱に加え，学際性や実践力の育成をもう一つの柱とする新たなカリキュラムを導入した。

2．教育の体系性

博士後期課程のカリキュラムは，専門能力の育成を目的とする主専門系と，学際性・実践力の育成を目的とする副専門系の二本柱の構成となっており，それぞれ以下の科目群から構成されている。

【主専門系】所属する講座の専門科目，主専門研究ゼミナール

【副専門系】実践科目，討論形式科目，所属する講座以外の専門科目，副専門研究ゼミナール

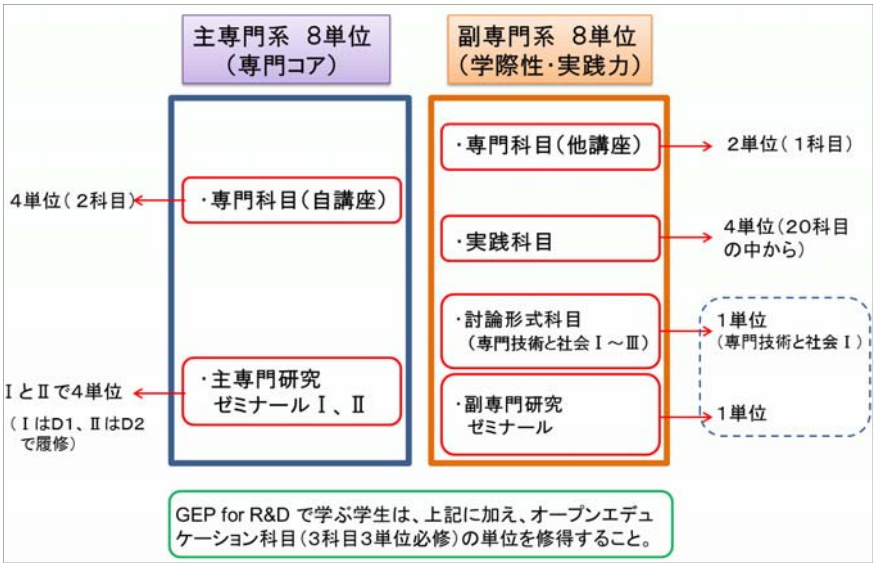
［専門科目］
　最先端の専門知識を修得させることを目的とする。各講座が，それぞれの専門分野にかかわる多彩な科目を開講する。
［主専門研究ゼミナール］
　専門分野における研究能力を向上させることを目的とし，専門分野に関する論文輪読，文献紹介，研究の進捗報告や進め方に関する検討などを行う。
［討論形式科目］
　学際性とともに，幅広い視野，倫理，社会的責任感を身に付けさせることを目的とする。学生同士の討論を主とする。
［実践科目］
　高度専門技術者にとって必要な実践力を身につけさせることを目的とする。インターンシップや産業界で活躍するために必要な知識や能力を涵養する科目など，多彩な科目が用意されている。
［副専門研究ゼミナール］
　学際性育成を主な目的とする。他の研究室のゼミや成果報告会などに参加して専門分野以外の動向を知るとともに，自分の研究内容を他分野の人に説明することを通して，プレゼンテーション力を向上させ，自分の専門性を深化させる。

以上のような多様な開講科目の中から，学生各人の研究テーマに応じた体系的な履修を確保するために，学生ごとに主指導教員１名と副指導教員２名から成る集団指導体制を構成して，履修指導・研究指導を行っている。

●　履修方法及び修了要件

１．履修方法
　必修科目（研究ゼミナール）５単位
　実践科目から４単位
　討論形式科目から１単位
　主専門の教育研究分野の専門科目４単位
　主専門の教育研究分野以外の専門科目２単位

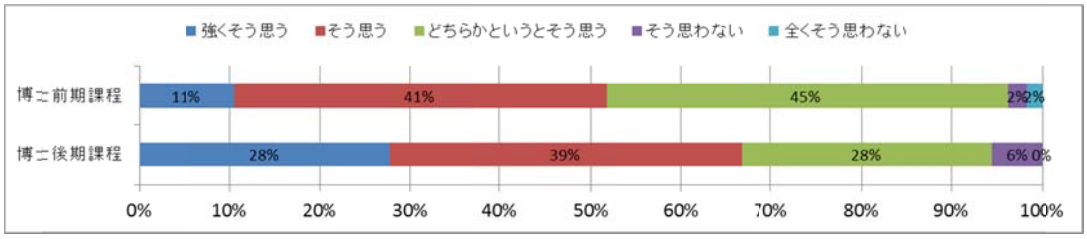
２．修了要件
　後期課程の修了要件は，当該課程に３年（法科大学院の課程を修了した者にあっては，２年）以上在学し，16 単位以上を修得し，かつ，必要な研究指導を受けた上，博士論文の審査及び最終試験に合格することとする。ただし，在学期間に関しては，優れた研究業績を上げた者については，当該課程に１年（標準修業年限を１年以上２年未満とした修士課程，前期課程又は専門職学位課程を修了した者にあっては，３年から当該１年以上２年未満の期間を減じた期間とし，修士課程又は前期課程において，優れた業績を上げ，２年未満の在学期間をもって当該課程を修了した者にあっては，３年から当該課程における在学期間を減じた期間とする。）以上在学すれば足りるものとする。



（事務局資料）

資料 1-2-6　体系的カリキュラムに対する学生の期待

設問：カリキュラムは，専門技術者として備えるべき能力を修得するうえで役立つと思いますか？



（平成 27 年度「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」結果より抜粋）

【大学院のコースワーク・多様な科目群】

前期課程では，専門科目に加え，外部の非常勤講師による「特別講義」，実践力を高める科学英語や PBL，修士論文研究につながる「特別演習および実験」，専攻の枠を超えて広い分野を学ぶ「工学研究科共通科目」などの多様な科目群から履修する（**資料 1-2-7**）。

コースワークの効果を高めるため，履修要件を細かく定めるとともに，集団指導体制による「カリキュラムのオーダーメード化」を行う（**資料 1-2-8**）。それに対する学生の評価は第 1 期より高い（**P7-58 前掲資料 1-1-54**）。

後期課程では，平成 25 年度改組により，修了要件の変更を含むコースワークの実質化を行った（**P7-90 前掲資料 1-2-5**）。前期課程の成果を踏まえ，平成 25 年度から「履修計画表」による 3 年間を見通したコースワークの管理を集団指導体制で行っている（**資料 1-2-9**）。

コースワークに対する学生の期待は高い（**資料 1-2-10**）。

資料 1-2-7　平成 27 年度教育課程表

■　前期課程共通科目

平成 25 年度の大学院改組に備え，平成 24 年 10 月の教育委員会において，前期課程共通科目を「学際的な分野への対応能力や俯瞰的なものの見方等の修得を目的とする」と位置付け，数学系，生命科学系など９つの区分を設定し，共通科目の体系化を行った。

区　分	授　業　科　目	単位数		毎週授業時間数			
				第１年		第２年	
		必修	選択	前期	後期	前期	後期
数学系科目	応用数理特論		2		2		
	解析学通論		2	2			
	代数学通論		2	2			
	幾何学通論		2		2		
生命科学系科目	生命複合科学特論Ⅰ*		2	2			
	生命複合科学特論Ⅱ*		2		2		
情報系科目	情報システム特論		2	2			
	コンピュータシミュレーション		2		2		
実践力創生系科目	経営学概論		2	2			
	技術経営のすすめ		2	2			
	技術系のマネジメント基礎		2		2		
	マーケティング論		2		2		
エネルギー・環境系科目	量子エネルギー応用論		2		2		
グローバル系科目	大学院海外短期インターンシップⅠ		1				
	大学院海外短期インターンシップⅡ		2				
留学生向科目	工業日本語特論Ⅰ**		2	2			
	工業日本語特論Ⅱ**		2		2		
合計			33	14	16		

備　考	
	＊　生命科学複合研究教育センター ＊＊　外国人留学生を対象とする 注）大学院海外短期インターンシップは，科目の単位の累積を認める。また，合計３単位まで修了に必要な単位に算入することができる。ただし，修了予定休業期間（９月修了予定者については夏季休業期間，３月修了予定者については春季休業期間）に実施するインターンシップについては，修了に必要な単位に算入することができない。なお，詳細については別途指示があるので注意すること。

■　前期課程各専攻科目（繊維先端工学専攻の例）

平成 25 年度に，ファイバーアメニティ工学専攻は繊維先端工学専攻に改組され，「インテリジェントファイバー」を中心とした分野構成となった。これに伴い，繊維・材料系に特化した体系的な教育課程が整備された。

繊維先端工学専攻　（平成27年度）

区　分	授　業　科　目
専攻共通	繊維科学概論　（必修）
	繊維先端工学特別講義Ⅰ
	繊維先端工学特別講義Ⅱ
	科学英語コミュニケーションⅠ（必修）
	科学英語コミュニケーションⅡ（必修）
	科学英語表現Ⅰ
	科学英語表現Ⅱ
	長期インターンシップ
	繊維先端工学創成演習　（必修）
	繊維先端工学特別実験　（必修）
	繊維先端工学PBL
	PBL Ⅰ-Ⅰ（Project Based Learning Ⅰ-Ⅰ）
	PBL Ⅰ-Ⅱ（Project Based Learning Ⅰ-Ⅱ）
	PBL Ⅴ（Project Based Learning Ⅴ）
繊維先端工学分野	材料力性
	繊維・高分子材料工学
	繊維材料科学ゼミナールⅠ
	繊維材料科学ゼミナールⅡ
	繊維・高分子加工工学
	繊維・高分子材料レオロジー特論
	繊維・成形加工ゼミナールⅠ
	繊維・成形加工ゼミナールⅡ
	分子相互作用特論
	テキスタイル工学ゼミナールⅠ
	テキスタイル工学ゼミナールⅡ
	界面コロイド化学
	カラーレーション工学
	繊維機能科学ゼミナールⅠ
	繊維機能科学ゼミナールⅡ
	生命機能工学
	生体材料化学
	バイオミメティック工学ゼミナールⅠ
	バイオミメティック工学ゼミナールⅡ
繊維産業工学分野	繊維産業工学
履修の方法 及　び 注意事項	ＰＯＳコミティの指導により，本表の科目から，次の条件を満たすように合計３０単位以上を修得しなければならない。 １．必修科目（繊維科学概論，創成演習，特別実験）８単位 ２．科学英語関係科目の必修　２単位 ３．選択必修科目（実践的科目）から２単位 ４．繊維先端工学分野及び繊維産業工学分野の科目から８単位 ５．１～４の他に，選択科目１０単位以上 ３については以下の創業型実践大学院工学教育コース科目を含む。 ・インターンシップ（企業派遣実習）（３単位） ・ケーススタディ・ビジネスプラン作成　（２単位） ・製品・サービスの試作及び試販売　（４単位） 注）１．単位数が○印で囲まれている科目は実践的科目である。 ２．長期インターンシップ，PBLについての詳細は別途指示がある。

基礎から応用までの一貫した繊維科学を学び、「繊維マインド」の基礎を習得

外部講師の講義を通して日々発展する繊維工学分野の最新成果を幅広く学ぶ

修士論文研究に関係した専門的知識の修得、関連論文の紹介・研究報告・学会発表などを通じてプレゼンテーション能力や高い倫理観を養う

繊維に関連した先端技術について、一貫した知識を実践的かつ多面的に学習し、実践力と応用力を鍛える

テキスタイル、繊維材料、繊維機能科学、繊維加工工学などからなる繊維科学における専門的な領域から、生命機能工学、生体材料工学などからなる繊維科学における発展的な領域を学ぶ

連携講座の教員による地域に密着した内容の講義を通じて、繊維産業への理解を深める

細かい履修要件を定め，バランスの取れた履修を担保

■　後期課程（総合創成工学専攻）

科目区分	授業科目	単位数 必修	単位数 選択	毎週授業時間数 前期	毎週授業時間数 後期
実践科目	長期インターンシップ		4		
	知的財産―特許コース特論―		2	2	
	企業戦略概論		2	2	
	リーダーシップ論		2	2	
	国際化戦略とオープンイノベーション		2		2
	技術開発のロードマップ		2		2
	On the Tutorial Training ※		2		
	産学連携実践インターンシップ ※		4		
	プロジェクトインキュベーション経験プログラム ※		2		
	On the Consultation Training ※		2		
	海外特別講義・演習		1	2	
	海外研究プレゼンテーション・討論		1		
	海外文化・生活・コミュニケーション		1		
	海外技術経営論		1	1	
	海外企業インターンシップ		1		
	創造システムデザイン		2		
	ＰＢＬ		2		
	大学院海外短期インターンシップＡ		1		
	大学院海外短期インターンシップＢ		2		
討論形式科目	専門技術と社会Ⅰ		1		
	専門技術と社会Ⅱ				
	専門技術と社会Ⅲ				
専門科目	数理物理学特論		2	2	
	量子物理学特論		2		2
	電磁物理学特論		2	2	
	凝縮系物理学特論		2		2
	無機ファイン材料特論		2	2	
	有機分子設計特論		2		2
	機能性高分子工学特論		2	2	
	高分子材料設計特論		2	2	
	機能高分子化学特論		2		2
	生命応用工学特論		2		2
	分子生物化学特論		2		2
	材料物性工学特論		2		2
	構造材料工学特論		2	2	
	最適設計工学特論		2		2
	生産加工学特論		2	2	

実践道場が提供する科目

海外系５科目

イマジニア養成キャリア開発プログラム提供科目

グローバル人材育成のための科目

学際性，幅広い視野，倫理，社会的責任感の涵養。
１つを選択必修

物理工学講座

分子工学講座

生物応用化学講座

物質加工学講座

科目区分	授業科目		単位数 必修	単位数 選択	毎週授業時間数 前期	毎週授業時間数 後期
専門科目	計算機構成・ソフトウェア科学工学特論Ⅰ	知識情報システム講座		2	2	
	計算機構成・ソフトウェア科学工学特論Ⅱ			2		2
	認知情報・ヒューマンインタフェース特論Ⅰ			2	2	
	認知情報・ヒューマンインタフェース特論Ⅱ			2		2
	光・電子デバイス特論	電子システム講座		2	2	
	電力制御特論			2		2
	電子システム工学特論			2	2	
	通信システム特論			2		2
	機械ダイナミクス特論	エネルギーシステム講座		2	2	
	流体システム特論			2		2
	熱システム特論			2	2	
	システム制御特論			2		2
	ロボット制御特論			2	2	
	建築構造システム論	建築都市システム講座		2		2
	住基盤防災特論			2	2	
	建築都市快適論			2	2	
	環境形成論特論			2		2
	生活空間計画特論			2		2
	テキスタイル工学特論	繊維先端工学講座		2		2
	バイオミメティック工学特論			2		2
	繊維機能科学特論			2		2
	繊維・高分子材料工学特論			2	2	
	繊維・高分子加工工学特論			2	2	
	エネルギー安全工学特論Ⅰ	原子力・エネルギー安全工学講座		2	2	
	エネルギー安全工学特論Ⅱ			2		2
	原子力工学特論Ⅰ			2	2	
	原子力工学特論Ⅱ			2		2
研究ゼミナール	主専門研究ゼミナールⅠ		2			
	主専門研究ゼミナールⅡ		2			
	副専門研究ゼミナール → 学際性の涵養（必修）		1			

履修の方法及び注意事項

本表の科目から，次の条件を満たすように合計１６単位以上を修得しなければならない。

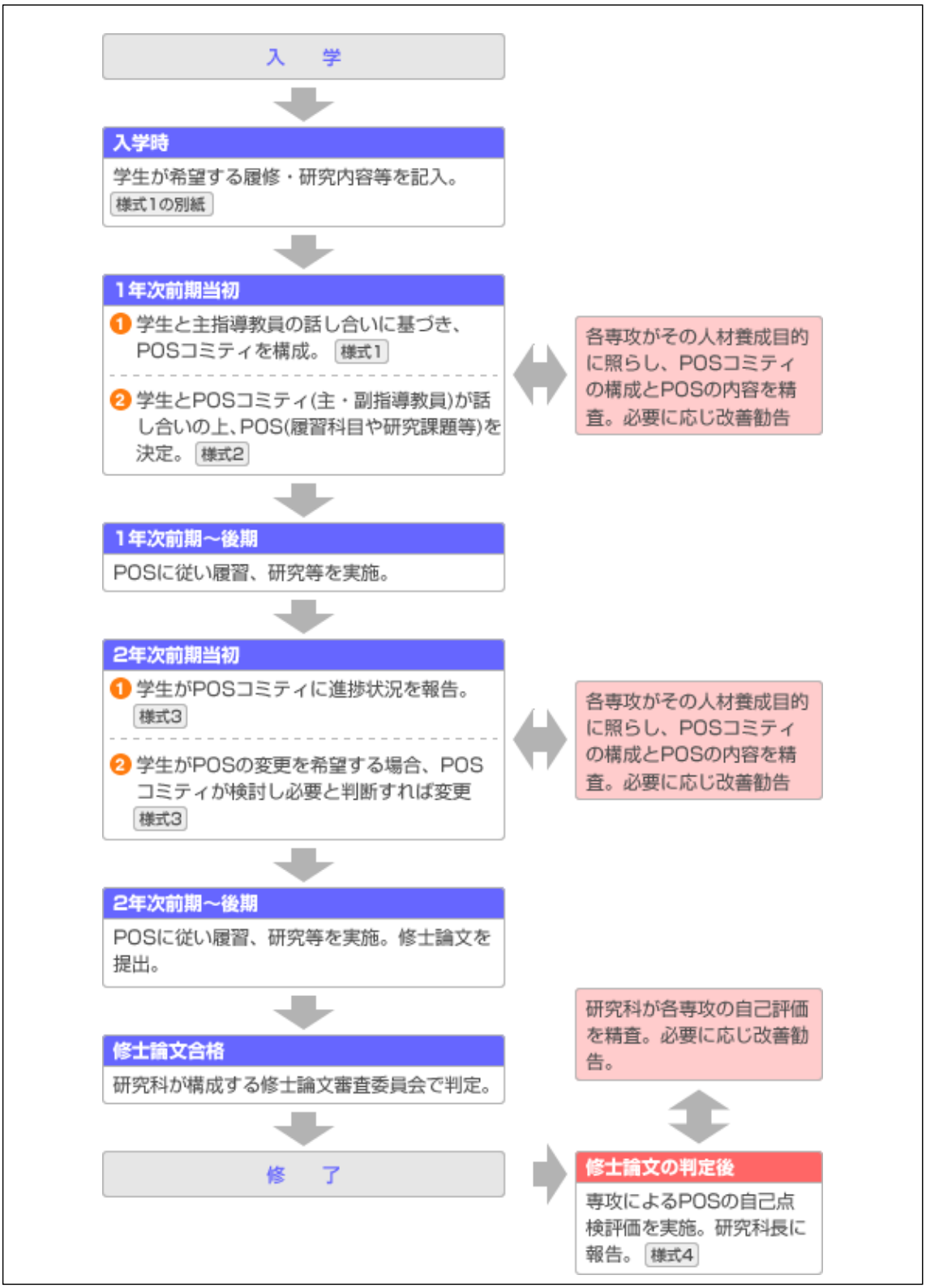
１．必修科目（研究ゼミナール）５単位
２．実践科目から４単位
３．討論形式科目から１単位
４．主専門の教育研究分野の専門科目４単位
５．主専門の教育研究分野以外の専門科目２単位

細かい履修要件を定め，バランスの取れた履修を担保

注）１．インターンシップ，PBLについての詳細は別途指示があるので注意すること。
２．※がついている科目の開講時期は，テーマによって異なる。
具体的内容は，担当教員と相談のうえ，決定する。
３．大学院海外短期インターンシップは，科目の単位の累積を認める。また，合計２単位まで修了に必要な単位に算入することができる。ただし，学位論文本審査申請以降の休業期間に実施するインターンシップについては，修了に必要な単位に算入することができない。
４．博士前期課程において単位修得した科目は再履修することはできない。

（事務局資料）

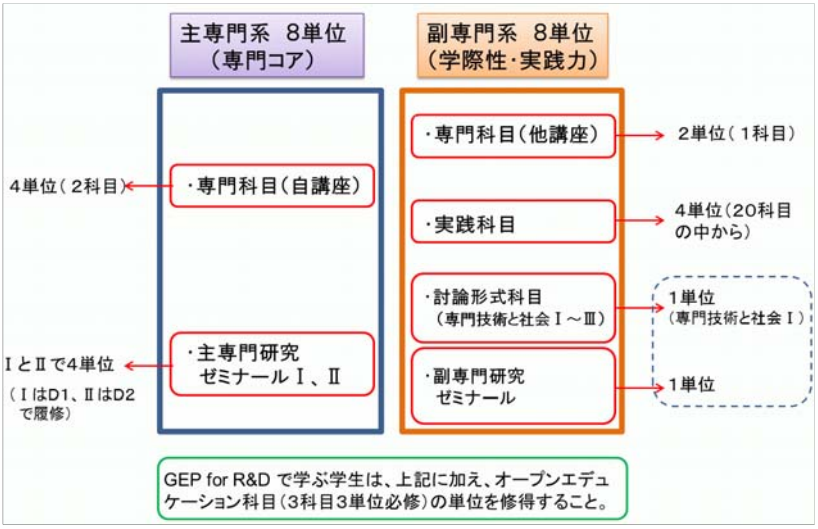
資料 1-2-8　コースワークの効果を高める「カリキュラムのオーダーメード化」



（事務局資料）

資料 1-2-9　履修計画表による後期課程のコースワークの管理

平成 25 年度の大学院改組に伴い，後期課程のコースワークが充実し，計画的な履修がより一層重要となった。従来の半期ごとの履修登録に加え，３年間を通した履修計画を作成してコースワークを管理することにより，履修状況を学生と教員が共有し，博士論文研究との両立を図っている。



３年間を通した見通したコースワークを「履修計画表」で管理

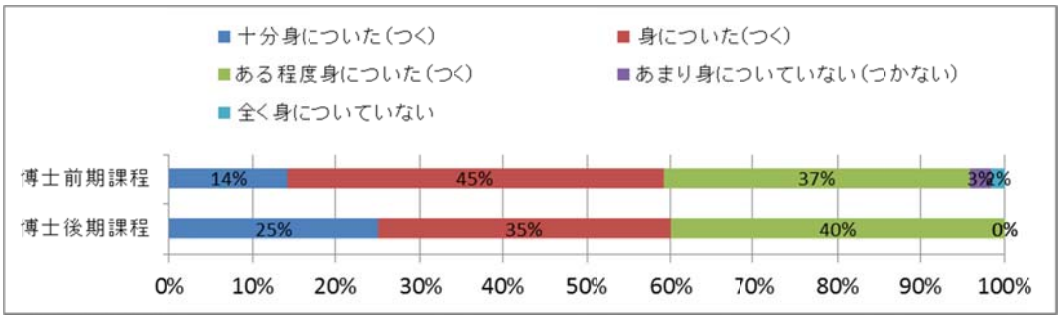

大学院工学研究科　博士後期課程　総合創成工学専攻（H26入学者）　履修計画表

（事務局資料）

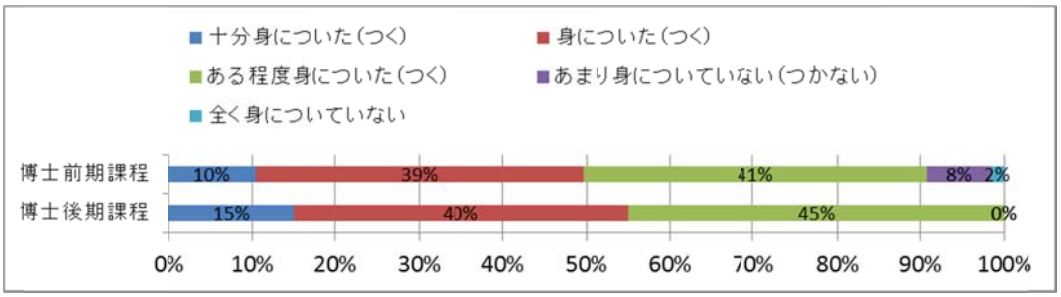
資料 1-2-10　学生の期待に応えたコースワーク

工学研究科のカリキュラムで学ぶことにより専門知識・技能と実践的能力の両方が「十分～ある程度身に付く」と９割以上の回答者が回答しており，さらに教育方法・教育形態についても９割以上の回答者が能力育成に有効であると回答している。これは，適切なコースワークが効果的に実施されていることの証左である。

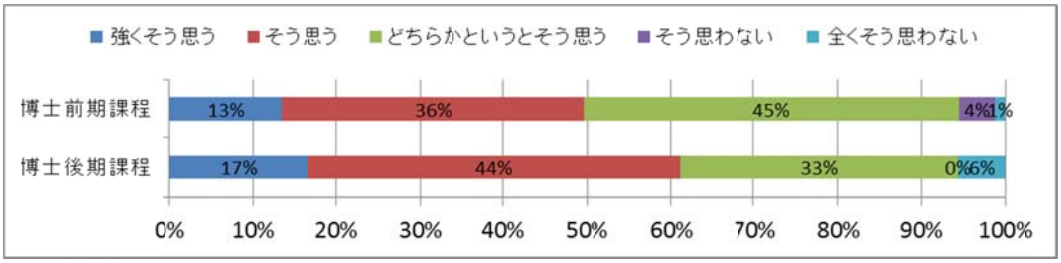
設問：専門知識や技能がどの程度身についた（あるいは身につく）と思いますか。



設問：実践的な能力がどの程度身についた（あるいは身につく）と思いますか。



設問：さまざまな教育方法・教育形態（問題発見・解決型授業（PBL），少人数教育，専門分野の枠にとらわれない授業，実験，実習，演習など）を取り入れていますが，これらは専門技術者として備えるべき能力を育成するうえで役立った（役立つ）と思いますか？



（平成 27 年度「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」結果より抜粋）

【学際的教育】

① 生命科学複合研究教育センターと協力して，医工連携の学際的教育を行い，生命科学複合特論Ⅰの単位修得者数が第１期のほぼ２倍になるなど，好評を得ている（**資料 1-2-11**）。

資料 1-2-11　生命科学複合研究教育センターによる医工連携教育（前期課程）

「生命科学複合研究教育センター」は，医学・生物学を含む生命科学や関連する広い分野（情報科学・生物応用科学や発達科学等）を専門とする教員が学部等の枠を超えて継続的に共同研究を進めるセンターであり，工学研究科の学生を対象に，医学部と工学部の教員による講義を行っている。第２期における生命科学複合特論Ⅰの年平均単位修得者数は，第１期のほぼ２倍であり，「医」と「工」をつなぐ学際的教育が拡大した。


生命科学複合研究教育センター　（平成27年度）

区分	授業科目	単位数 必修	単位数 選択	毎週授業時間数 第1年 前期	毎週授業時間数 第1年 後期	毎週授業時間数 第2年 前期	毎週授業時間数 第2年 後期
センター共通	生命複合科学特論Ⅰ		2	2			
	生命複合科学特論Ⅱ		2		2		
	生命複合科学特別演習及び実験Ⅰ	4		10			
	生命複合科学特別演習及び実験Ⅱ	4			10		
	生命複合科学特別演習及び実験Ⅲ	5		12			
	生命複合科学特別演習及び実験Ⅳ	5			12		
	生命複合科学特別演習及び実験ⅤA	4		9			
	生命複合科学特別演習及び実験ⅤB	4			9		
	生命複合科学特別演習及び実験ⅥA	2				5	
	生命複合科学特別演習及び実験ⅥB	2					5
	生命複合科学特別演習及び実験Ⅶ	2		5			
	生命複合科学特別演習及び実験Ⅷ	4			9		
	生命複合科学特別演習及び実験Ⅸ	4		9			
	生命複合科学特別演習及び実験Ⅹ	4			9		
	生命複合科学特別演習Ⅰ	4			8		
	生命複合科学特別実験Ⅰ	2				6	
	生命複合科学特別演習Ⅱ	6		12			
	生命複合科学特別実験Ⅱ	4			12		
バイオ画像・情報	映像情報科学化特論		2	2			
	映像情報処理論		2		2		
	機械システム論		2	2			
	生物情報学		2		2		
	非機械システム論		2	2			
	バイオメカニクス		2	2			
	高分子科学特論		2	2			
	生物システム特論						
バイオ技術・材料	計算科学特論						
	バイオナノテクノロジー						
高次生命機能・ネットワーク等	ホルモン作用学特論						
	分子細胞情報学特論						
	分子生物学特論						
	神経科学特論						
	細胞機構論学						
合計							
履修の方法及び注意事項	1．本表と工学研究科の教育課程表 2．必修科目は，生命科学複合研究 次のとおり履修して所属専攻の ・機械工学専攻及び電気・電子工 ・情報・メディア工学専攻，物理 及び実験Ⅲ・Ⅳ ・建築建設工学専攻は，生命複合 ・材料開発工学専攻は，生命複合 ・生物応用化学専攻は，生命複合 ・繊維先端工学専攻は，生命複合 ・原子力・エネルギー安全工学専						

（平成 27 年度学生便覧より抜粋）


授業科目名　(83051) 生命複合科学特論Ⅰ　キマイシラバス　単位数　2
開講期間学期　前期（1年、2年）　曜日／時日　金／3
授業区分　通常授業　科目授業種類　専門/大学院工学研究科/博士前期課程/専攻共通科目
担当教員（E-mail、電話番号（内線）、研究室、オフィスアワー）
末　信一郎 (suyeb10@u-fukui.ac.jp、工学部１号館　1-3152)

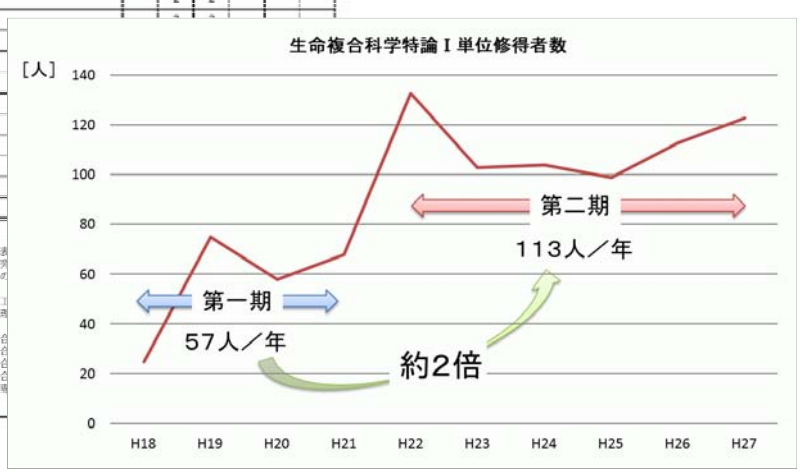
授業概要
将来、生命・医学分野などへ進出できるような複合的な視野を持った研究者・技術者の育成を目指す。
広く生命科学全体にわたる知見を学び、様々な工学の専門分野で活用することができるようになる。

到達目標
将来、生命・医学分野などへ進出できるような複合的な視野を持つこと。

授業内容
伊藤　哲史 聴覚神経回路の構築
松岡　達 心臓のエネルギー代謝-獲得書-収縮連関
前田　桃夫 Pasteur的景観
老木　成稔 生体電気信号とその分子機構
千原　一泰 アレルギー反応におけるマスト細胞の役割
東岡　尚徳 細胞分化の制御機構
藤井　豊 生物進化の地球史－人類とその未来－
法木　左近 種薄学概論
竹内　健司 ワクチンで予防できる病気
河邊　真也 性分化と転写調節
松本　英樹 低線量放射線に対する細胞応答～放射線適応応答と放射線誘発バイスタンダー効果～"
本田　信治 モデル生物としてのアカバンカビ
小澤　大作 蛋白質の異常凝集と関連疾患
青木　桃史 種薄生物学
寺田　彰 工業用細胞のための細胞工学／培養工学

授業形式

（平成 27 年度「生命科学複合特論Ⅰ」シラバス（抜粋））



（教務課集計）

（事務局資料）

② 産学官連携本部と協力して，「創業型実践大学院工学教育」（前期課程），「産業現場に即応する実践道場」（後期課程，平成 22 年度～）を学際的に実施し，多数の学生が専門の枠を超えて受講している（**資料 1-2-12**）。

資料 1-2-12　産学官連携本部と連携した学際的実践教育プログラム

■　創業型実践大学院工学教育「技術経営プログラム」（前期課程）

（10）創業型実践大学院工学教育コースの履修について

本学では，大学が保有するシーズ（特許，研究シーズ集型載等）を産・学・官・民が連携して育成研究を実施し，成果の技術移転を意識した「物づくり」を実践する場として，インキュベーションラボファクトリ（ILF）を整備して，この中で，創業型実践大学院工学教育を実施するものである。

工学研究科博士前期課程の学生が，このコースを履修する場合のカリキュラムを次に示す。所属する専攻の修了要件とは別に，本カリキュラムの修了要件を満たした者には，副専攻として『技術経営カリキュラム修了証』を学長名で発行する。製品開発と実践を目指す者は，大いなる励みとされたい。

技術経営カリキュラム

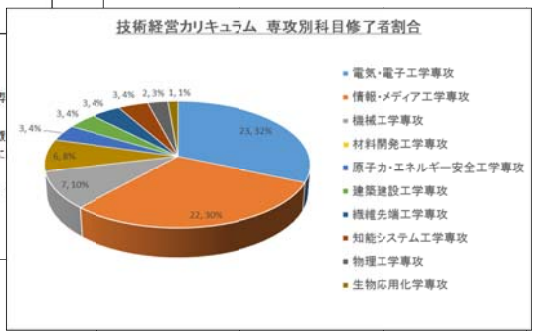
区　分	授　業　科　目	単位数	毎週授業時間数 1年次及び2年次 前期	毎週授業時間数 1年次及び2年次 後期	備　考
工学研究科共通	経営学概論	2	2		
	技術経営のすすめ	2	2		
	技術系のマネジメント基礎	2		2	
	マーケティング論	2		2	
工学部授業科目	知的財産権の基礎知識	2		2	
	ベンチャービジネス概論	2	2		
実践道場講義科目	リーダーシップ論 －決断力・人間力・創造力	2	2		
コース専用実習	インターンシップ（企業派遣実習）	③	6	（6）	
	ケーススタディ・ビジネスプラン作成	②	2		
	製品・サービスの試作及び試販売	④	4		
合　計		23	20	6	

《 履修上の注意 》
1．本カリキュラム修了要件
講義7科目計14単位中6単位以上，実習3コース9単位中4単位以上，合計10単位以上を修得
2．実践道場講義科目は，工学研究科共通科目として取扱う。
3．コース専用実習は，インキュベーションラボファクトリの指導の下に，企業との連携の中で履修単位は，工学研究科の履修科目としては，工学研究科共通として取扱う。実習科目の履修にコミティ及びILF担当者との充分な事前協議を行うこと。
4．工学部授業科目は，学部の時に履修したものも認める。新たに大学院の時に履修する場合は，単位扱いとし，大学院修了時の必要単位外とする。
5．単位数に○印がついている科目は実践的科目を示す。

（平成 27 年度学生便覧から抜粋）



（平成 27 年度「製品・サービスの試作及び試販売」シラバス（抜粋））



（産学官連携本部集計）

全専攻から学生が集まり
学際的に実施されている

「技術経営カリキュラム」各科目の受講者数・修了者数

科目	H24		H25		H26		H27	
	受講者数	修了者数	受講者数	修了者数	受講者数	修了者数	受講者数	修了者数
経営学概論	62	53	79	60	68	65	58	56
技術経営のすすめ	44	29	45	16	25	22	18	17
マーケティング論	23	20	22	19	13	12	13	13
技術系のマネジメント基礎		11	15	6	13	12	15	13
ベンチャービジネス概論		0	9	8	56	42	15	13
知的財産の基礎知識		1	33	－	29	24	36	27
インターンシップ		12	7	7	4	4	5	5
ケーススタディ・ビジネスプラン作成		13	6	3	2	2	2	2
試作・試販売		5	4	4	7	7	8	8
工学系の経営財務論		12						
合計		156	220	123	217	190	170	154

（産学官連携本部集計）

■　産業現場に即応する実践道場（後期課程）

（11）産業現場に即応する実践道場の履修について

本学では産業現場に柔軟に即応し，ものづくりの基盤技術や次世代の産業を支える技術開発力を有する人材の育成を目的として，大学院工学研究科博士後期課程学生・ポスドク・若手社会人を対象とした実践道場を構築する。技術者や経営者の参加のもと，産学が交流し，実践的な問題や課題を検討・解決する「道場」としてコンサルティング&ソリューションファクトリ（CSF）を確立し，課題解決・知財・マネジメントスキルを兼ね備えた現場に強い自律型産業人材を養成し，産業現場で研究開発をリードする人材を輩出していくことを目指すものである。

工学研究科博士後期課程の学生が，このコースを履修する場合のカリキュラムを次に示す。所属する専攻の修了要件とは別に，本カリキュラムの修了要件を満たした者には，副専攻として『産業技術エキスパート』を学長名で発行する。

実践道場カリキュラム

区　分	授　業　科　目	単位数	履修授業時期数 1年次～3年次 前期	後期	備　考
博士前期課程授業科目	技術系のマネジメント基礎	2		2	
実践道場講義	知的財産－設計コース特論	2	2		
	企業戦略概論	2	2		
	リーダーシップ論－決断力・人間力・創造力	2	2		
	国際化戦略とオープンイノベーション	2		2	
	技術開発のロードマップ	2		2	
実践道場実習	OTT（On the Tutorial Training）	2			（注１）
	産学連携実践インターンシップ（課題解決型）	4			（注１）
	プロジェクトインキュベーション経験プログラム	2			（注１）
	OCT（On the Consulting Training）プログラム	2			（注１）
合　計		32			

注１：履修時期は，テーマによって異なる。
具体的内容は，担当教員および課題提供企業と相談のうえ，決定する。

〈 履修上の注意 〉
下記については，在学者にも適用する。
1．本カリキュラム修了要件
講義６科目計12単位中６単位以上，実習４コース計10単位中４単位以上，合計10単位以上を修得すること。「技術系のマネジメント基礎」，「リーダーシップ論－決断力・人間力・創造力」，「産学連携実践インターンシップ（課題解決型）」の単位については，以下の２，３，４による読み替え等の措置を設ける。この措置は，それを用いることによって本カリキュラムを修了できる者のみを対象とする。なお，同措置の適用を受けても，工学研究科博士後期課程の修了に必要な単位を修得したことにはならない。
2．「技術系のマネジメント基礎」（博士前期課程授業科目）については，工学研究科博士前期課程において単位を修得したものも認める。
3．「リーダーシップ論－決断力・人間力・創造力」については，工学研究科博士前期課程において単位を修得したものも認める。
4．工学研究科博士前期課程または博士後期課程で修得した「長期インターンシップ」の単位を「産学連携実践インターンシップ（課題解決型）」の単位に読み替える場合がある。読み替えのためには，以下の二つの要件が満足されていなければならない。(ⅰ)長期インターンシップの派遣先が企業であること。(ⅱ)長期インターンシップ

（平成 27 年度学生便覧より抜粋）



（平成 27 年度「企業戦略概論」シラバス（抜粋））



学生，ポスドク，社会人が専門の枠を超えて一緒に学んでいる。

「産業現場に即応する実践道場」各科目の修了者数

科目名	修了者総計			H23 修了者数			H24 修了者数			H25 修了者数			H26 修了者数			H27 修了者数		
知的財産	58	ポスドク	5	ポスドク	3	7	ポスドク	1	9	ポスドク	0	9	ポスドク	1	18	ポスドク	0	15
		企業	33	企業	2		企業	7		企業	3		企業	12		企業	9	
		学生	20	学生	2		学生	1		学生	6		学生	5		学生	6	
企業戦略概論	55	ポスドク	24	ポスドク	4	8	ポスドク	7	11	ポスドク	7	16	ポスドク	6	15	ポスドク	0	5
		企業	15	企業	2		企業	1		企業	2		企業	7		企業	3	
		学生	16	学生	2		学生	3		学生	7		学生	2		学生	2	
リーダーシップ論	51	ポスドク	13	ポスドク	0	11	ポスドク	4	12	ポスドク	8	17	ポスドク	1	8	ポスドク	0	3
		企業	24	企業	9		企業	6		企業	3		企業	6		企業	0	
		学生	14	学生	2		学生	2		学生	6		学生	1		学生	3	
国際化戦略	32	ポスドク	18	ポスドク	3	12	ポスドク	6	8	ポスドク	7	10	ポスドク	2	2	ポスドク	0	0
		企業	11	企業	7		企業	1		企業	3		企業	0		企業	0	
		学生	3	学生	2		学生	1		学生	0		学生	0		学生	0	
技術開発のロードマップ	19	ポスドク	1	ポスドク			ポスドク	1	7	ポスドク	0	8	ポスドク	0	4	ポスドク	0	0
		企業	14	企業			企業	4		企業	6		企業	4		企業	0	
		学生	4	学生			学生	2		学生	2		学生	0		学生	0	
技術系のマネジメント基礎	4	ポスドク	1	ポスドク			ポスドク	0	2	ポスドク	0	0	ポスドク	0	0	ポスドク	1	2
		企業	3	企業			企業	2		企業	0		企業	0		企業	1	
		学生	0	学生			学生	0		学生	0		学生	0		学生	0	
OTT	7	ポスドク	3	ポスドク	3	5	ポスドク	0	2	ポスドク	0	0	ポスドク	0	0	ポスドク	0	0
		企業	0	企業	0		企業	0		企業	0		企業	0		企業	0	
		学生	4	学生	2		学生	2		学生	0		学生	0		学生	0	
インターンシップ	6	ポスドク	0	ポスドク	0	2	ポスドク	0	1	ポスドク	0	3	ポスドク	0	0	ポスドク	0	0
		企業	0	企業	0		企業	0		企業	0		企業	0		企業	0	
		学生	6	学生	2		学生	1		学生	3		学生	0		学生	0	
プロジェクトインキュベーション	6	ポスドク	3	ポスドク	2	4	ポスドク	1	2	ポスドク	0	0	ポスドク	0	0	ポスドク	0	0
		企業	0	企業	0		企業	0		企業	0		企業	0		企業	0	
		学生	3	学生	2		学生	1		学生	0		学生	0		学生	0	
OCT	3	ポスドク	2	ポスドク	1	1	ポスドク	1	2	ポスドク	0	0	ポスドク	0	0	ポスドク	0	0
		企業	0	企業	0		企業	0		企業	0		企業	0		企業	0	
		学生	1	学生	0		学生	1		学生	0		学生	0		学生	0	

（産学官連携本部集計）

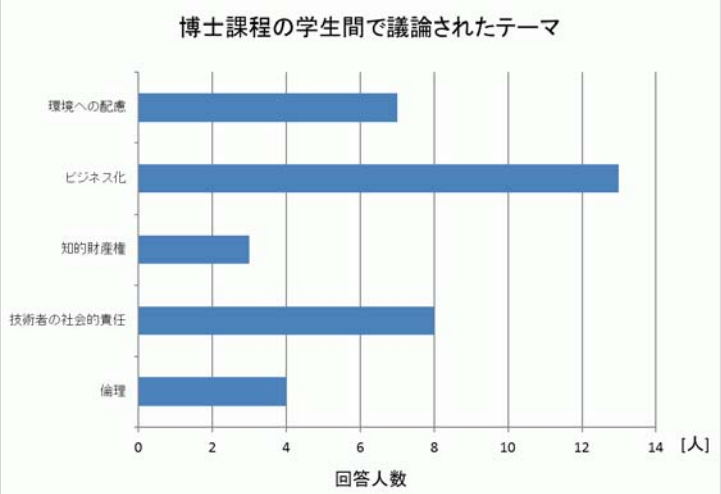
（事務局資料）

③　平成 25 年度改組により，学際性の育成を主な目的として，「専門技術と社会」（Ⅰ～Ⅲから１科目選択必修）と「副専門研究ゼミナール」（必修）を設け（**P7-90 前掲資料 1-2-5**），学生から高い評価を得ている（**資料 1-2-13**）。

資料 1-2-13　学際性を涵養する後期課程の新カリキュラムの実施状況

■　「工学研究科博士後期課程学生発表会」において議論されたテーマ

専門の異なる後期課程の学生が，研究課題のビジネス化，技術者の社会的責任，環境への配慮などの多彩なテーマについて議論を行い，学際性を深めた。



※「工学研究科博士後期課程学生発表会」は，「副専門研究ゼミナール」および「専門技術と社会Ⅰ（討論形式科目）」の主旨を踏まえた発表・討論により，学際性や広い視野を身につけるとともに，研究開発活動を知財，倫理，社会的責任，ビジネス，環境などの観点から捉え，認識を深めることを目的として毎年複数回開催される発表会。上図は，平成 25 年度の第１回発表会（５名の社会人学生を含む 13 名参加）と第２回発表会（1 名の社会人学生を含む８名の学生が参加）をあわせた結果であり，人数は延べ人数である。

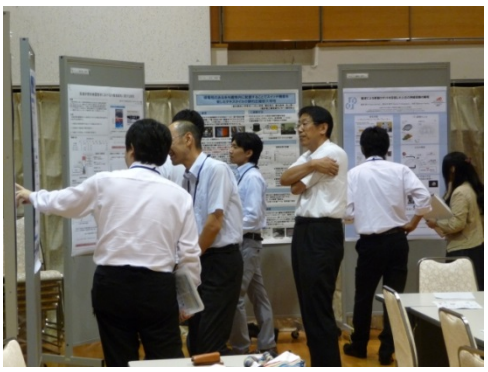
■　「工学研究科博士後期課程学生発表会」に参加した学生の声

後期課程にはあまり見られない学際的な取組に対し，学生からは非常に高く評価する声が寄せられた。否定的な声は皆無であった。

・分野の異なる同世代の人々との交流は有意義だった。自分の興味や関心の世界にこもらず，好意からの指摘や疑問は，それだけで自分の研究の推進剤として応用できるありがたい意見だった。他の方に対しては，無知な意見も，温かく答えていただけて良かった。博士後期という同世代が会う機会もあまりない中で，意見を交わしたり親睦を深められてとても良かった。
・他分野の研究者と交流できる場でもあり，非常に刺激を受け有意義であった。ここから新たなアイデアやビジネスが生まれる可能性すらあり，今後もこのような博士学生にとって有益な授業を期待します。
・他の分野の研究内容を知ることが面白いと感じた。また，わかりやすく説明することを趣旨としていたために，専門用語を使わない発表が多く楽しかった。発表のしかたやまとめ方など企業の方との違いを感じたのも刺激になった。
・先生方や他の学生と交流することで，研究や自分の人生に対するモチベーションが上がるきっかけになりました。
・いろんな研究分野の人と話をするのは面白い。物事を多角的に見るいい訓練になるような気がした。

・想像以上に刺激的でした。パネルディスカッションもはじめはぼんやり聞いていましたが，途中からメモをとりながら真剣に聞くようになりました。鼓舞される思いでした。良かったです。





（工学研究科博士後期課程学生発表会の様子（H25.8.7））

（事務局資料）

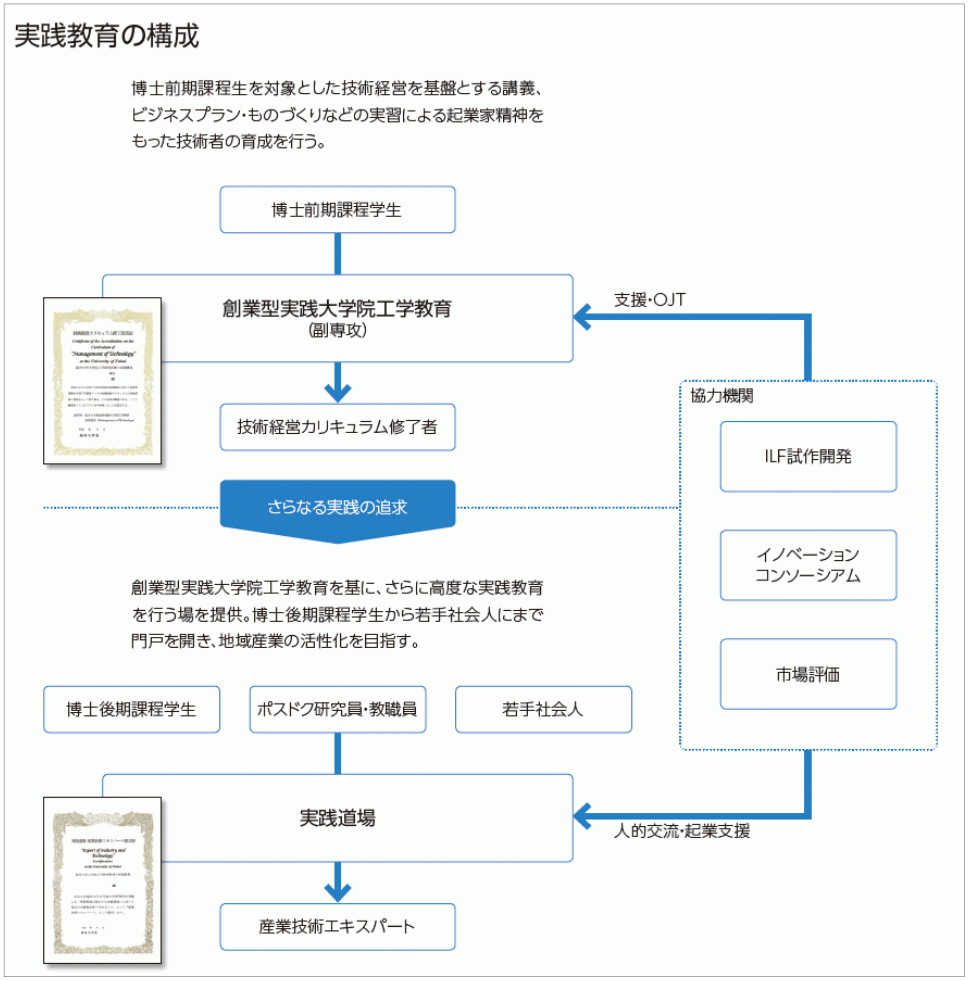
●社会のニーズに対応した教育課程の編成と実施上の工夫

【産業ニーズに対応した人材養成】

① 産学官連携本部と協力し，実践的なプログラムを産業界の声を取り入れて改善しながら実施し，多数の学生が学んだ（P7-102 **前掲資料 1-2-12，資料 1-2-14～16**）。要件を満たした場合に授与される「技術経営カリキュラム修了証」を 136 名の学生に，「産業技術エキスパート」の称号を２名の学生に学長名で授与した（**資料 1-2-17**）。これら実践教育は産業ニーズに対応した人材養成の期待に応えている。

資料 1-2-14　産業ニーズに対応した実践教育の構成

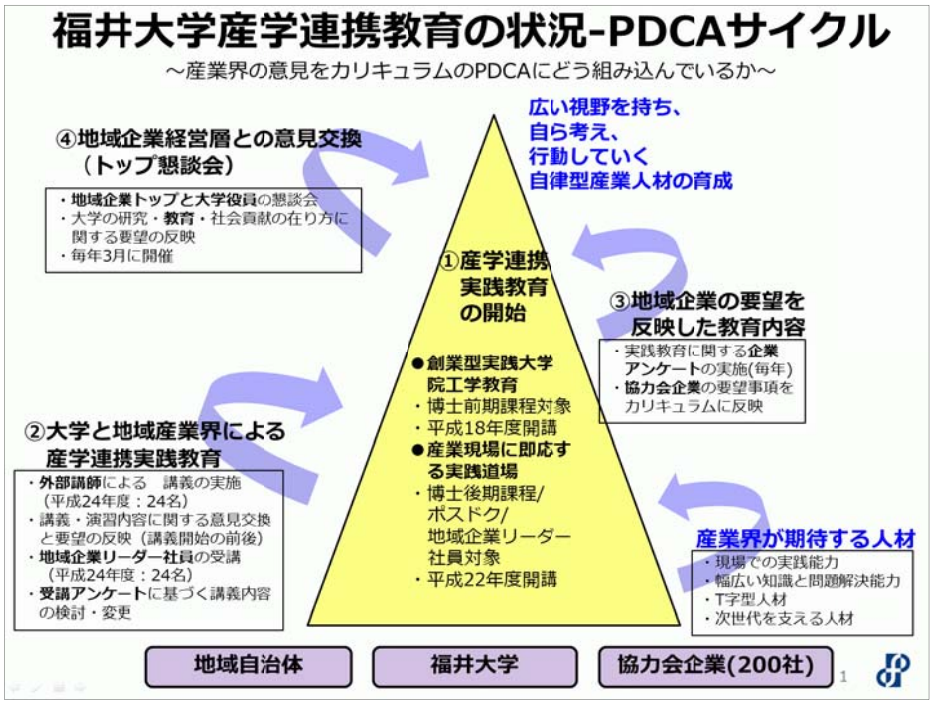
工学研究科と産学官連携本部が協力して，前期課程と後期課程に実践教育を体系的に行うコースを設けている。

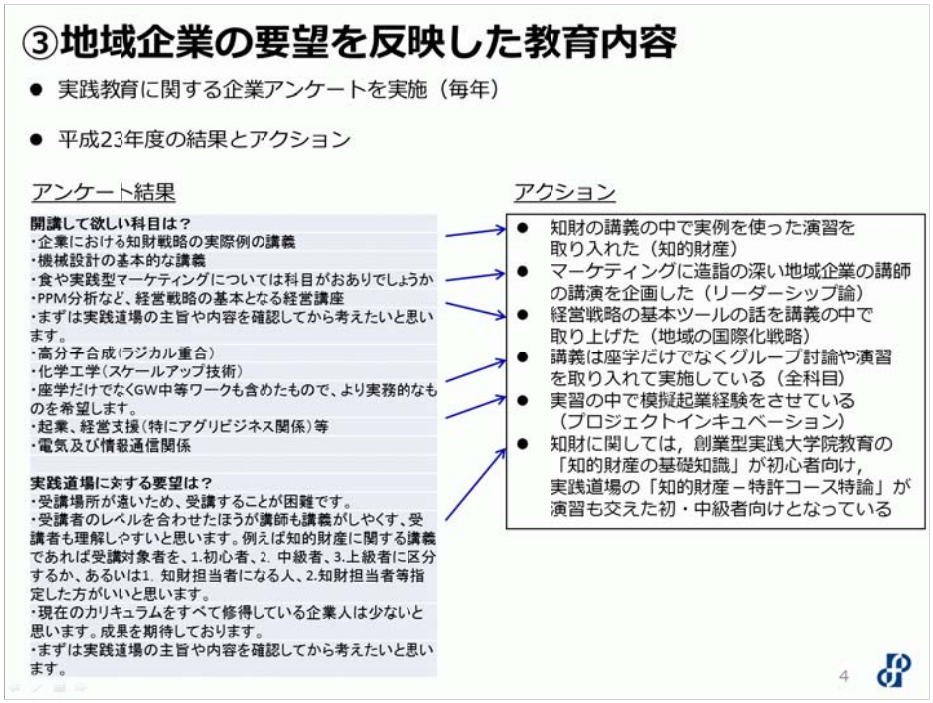


（事務局資料）

資料 1-2-15　産業界の声を反映する仕組みとそれによる改善の例

地域産業界の声を取り入れて実践教育を改善する PDCA サイクルが整備・運用されており，「創業型実践大学院工学教育」（前期課程）と「産業現場に即応する実践道場」（後期課程）の内容は随時見直され改善されている。

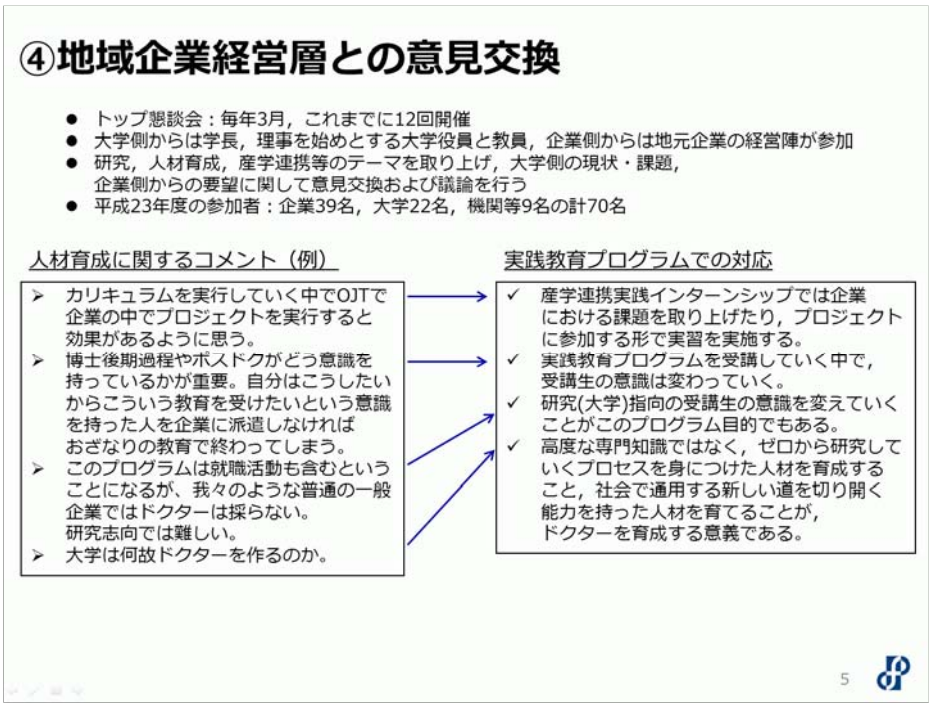






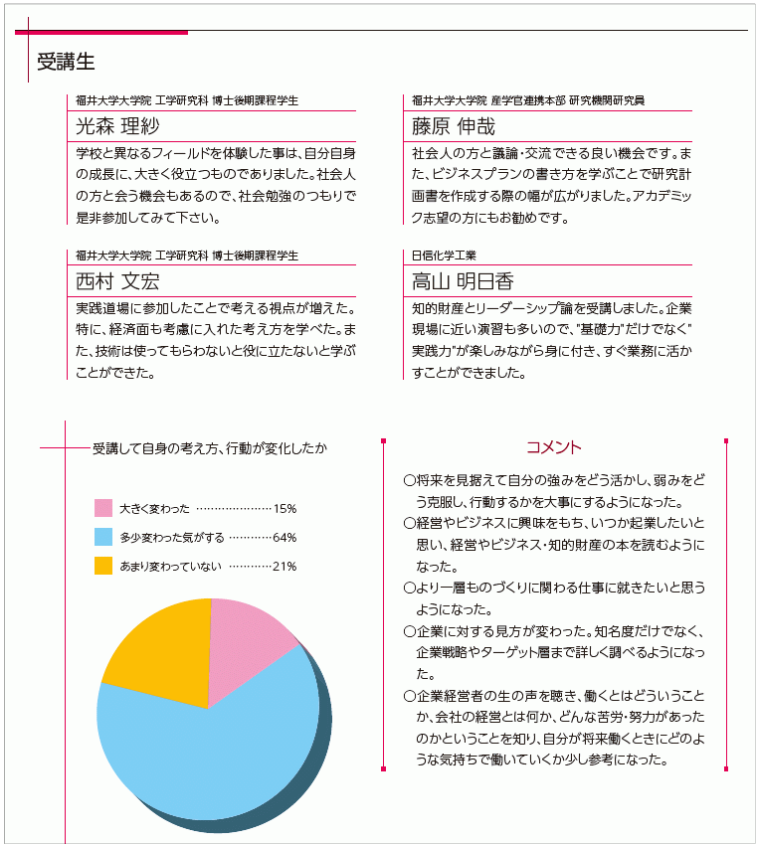






（事務局資料）

資料 1-2-16　実践道場受講生の声



注）後期課程学生と一緒に受講した社会人学生等の声も入っている。

（事務局資料）

資料 1-2-17　高い要件を満たした学生への修了証の発行

■　創業型実践大学院工学教育

「技術経営カリキュラム」の講義７科目計 14 単位中６単位以上，実習３コース９単位中４単位以上，合計 10 単位以上を修得した者に対し，『技術経営カリキュラム修了証』を学長名で発行する。平成 22 年度～平成 27 年度に 136 名の前期課程学生に授与された。


技術経営カリキュラム修了認定証

Certificate of the Accreditation on the Curriculum of

"Management of Technology"

at the University of Fukui

福井大学大学院 工学研究科博士前期課程

[redacted] 殿

■　産業現場に即応する実践道場

「実践道場カリキュラム」の講義６科目計 12 単位中６単位以上，実習４コース計 10 単位中４単位以上，合計 10 単位以上を修得した者に対し，『産業技術エキスパート』を学長名で発行する。平成 23 年度～平成 27 年度に２名の後期課程学生に授与された。

（事務局資料）

② 地元企業等の協力のもと，２か月程度の長期インターンシップを実施し，学生の好評を得ている（**資料 1-2-18，P7-5 前掲資料 1-1-3**）。

資料 1-2-18　長期インターンシップ（派遣先企業と学生の声）

■　派遣先企業等（平成 22 年度～平成 27 年度）

2010	(公財)若狭湾エネルギー研究センター、(独)産業技術総合研究所、(株)原子力安全システム研究所、(株)富士通研究所、(株)永和システムマネジメント、福井コンピュータ(株)、三菱電機先端技術総合研究所、アイシン精機(株)、(株)エコ・プランナー、(株)フランス・テレコム
2011	日本メディカルマテリアル(株)、(株)神戸工業試験場、(株)アイ・オー・データ機器、(公財)若狭湾エネルギー研究センター、NTT コミュニケーション科学基礎研究所、(株)ユーエヌアイ研究所
2012	(株)神戸工業試験場(2)、(株)永和システムマネジメント(2)、(株)富士通研究所(2)、(株)ネスティ、(株)富士通北陸システムズ、ＮＴＴコミュニケーション科学基礎研究所、(株) デジタルグリッド、三菱電機(株)先端技術総合研究所、ＣＥＡサクレー研究所、カリフォルニア大学サンタバーバラ校
2013	(株)富士通北陸システムズ、(株)NTT データ北陸、(株) デジタルグリッド、東京応化工業(株)、(株)富士通研究所
2014	(株)デジタルグリッド(2)、(共)自然科学研究機構分子科学研究所(2)、(株)イー・アイ・エル、(公財)若狭湾エネルギー研究センター、谷重義行＋建築像景研究室、(独)日本原子力研究開発機構、日本電気(株)
2015	(株)本田技術研究所、(公財)若狭湾エネルギー研究センター、日東シンコー(株)、国立研究開発法人産業技術総合研究所

■　平成 27 年度派遣学生の声（抜粋）

・仕事の期日からやるべきことを逆算して計画的に遂行することが大切で，このことに気付くことができたことが今回の研修での大きな収穫であった。
・開発は開発部署だけではできない。試作品の作製とその分析を含め生産・品質保証などの部署との連携をとることが開発には必要な能力である。また，日々の生産が行われる合間を狙っての試作等になるため，その計画性が必要とされることを理解できた。
・研修を通して技術を製品に生かすことが企業の中では大切で，新しい技術をどのように使っていくかとの考え方を学ばせていただきとても良い経験になりました。
・就業時間内にその日やるべきことをスケジューリングしてからから実験等をするということをしていたので上手に時間を使えるようになったと感じた。
・わからないことがあればその都度しっかりと聞き次に使用するときは聞かずにできるようにするということを心がけたので，そういう姿勢も研修できたと感じた。
・応用研究を進めるときに，社会問題やその背景，解決策を考えることを学んだ。特に，社会問題や解決策を，基礎的な部分まで落としこむことが，とても難しかった。
・長期インターンシップを通して，働くというイメージをしっかりと掴むことができた。
・今自分に何が足りないのか，自分の何を伸ばせばいいのかに関して課題を持つことができた。
・研究室で一緒に過ごした研究員の方たちに行っている研究や独自の実験方法等を聞きディスカッションすることで今までになかった知識が増え視野が広がったと思う。基礎研究を中心とした研究室に在籍しているため，応用研究までの道のりを体験することができて，とても有意義だった。多くの基礎研究が応用研究まで発展するケースは少ないことを良く耳にするが，それは，応用研究の社会的意義を見据えた上で，基礎研究の目的設定を行い，取り組むことが重要だと学んだ。

（事務局資料）

③　平成 23 年度に，「イマジニア養成キャリア開発プログラム」が科学技術人材育成費補助事業（ポストドクター・インターンシップ推進事業）に採択され，他大学での博士号取得者も含め，ポストドクターに対し産業界で即戦力として活躍できる能力の育成を行い（**資料 1-2-19**）高く評価された。また，大学機関別認証評価（平成 27 年度受審）結果で「主な優れた点」の一つとして高く評価された。

資料 1-2-19　博士人材キャリア開発支援センター(CCDS)とイマジニア養成キャリア開発プログラム(CDPIT)

■　博士人材キャリア開発支援センター（CCDS）

センターの目的

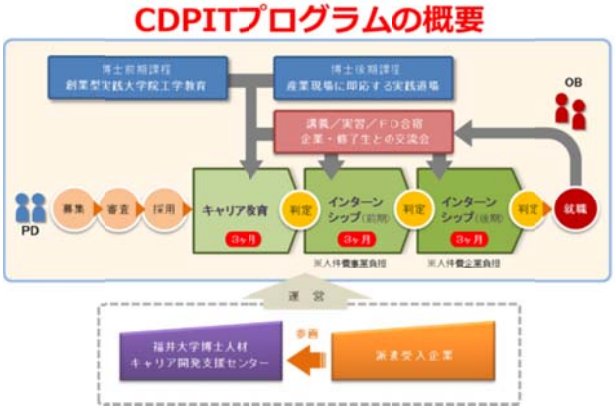
福井大学では、これまで博士前期課程から後期課程、ポスドクまで一貫したキャリア育成教育を実施してきました。そしてこのたび、平成23年度科学技術人材育成費補助事業（ポストドクター・インターンシップ推進事業）の実施機関として選定されたことを受けて、これまでの取り組みを基にキャリア開発支援センター（CCDS＝"Center of Career Development and Support"）を発足し、実践型キャリア育成システムとして、「イマジニア養成キャリア開発支援システム（CDPIT＝"Career Development Program for Imaginner Training"）」を構築しました。このシステムでは、PDを実践的人材として育成し、企業への就職に結びつけることを目的としています。センターでは産学協力体制のもと、実践教育の企画・運営や企業開拓、PDのキャリアカウンセリングや各種イベントの実施など、PDと企業の双方にとって実りあるシステムの運営を図っています。

組織体制

本センターは、本学の学外連携機関をはじめ、これまでインターンシップ実績のある産学官連携本部協力会（200社）や福井大学工業会、OBネットワークなどで構成され、産学の協力体制を構築しています。また、運営委員会には企業も参画し、企業ニーズを取り入れた運営を図っています。就職支援室ではPDの定期的ヒアリングや企業紹介などを行い、PDのサポート体制も充実しています。

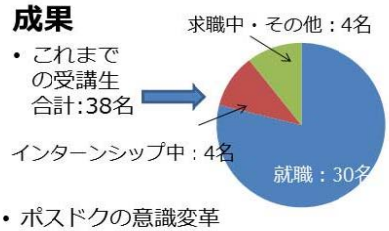


■イマジニア養成キャリア開発プログラム（CDPIT）



① 成果

- これまでの受講生 合計:38名



内訳

	平成23~24年度	平成25年度	平成26年度
県内企業	3	2	
県外企業	3	8	3
海外企業	1	2	
大学その他	3	2	3
合計	10	14	6

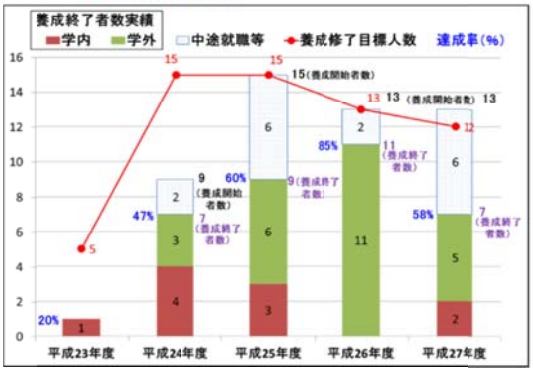
- ポスドクの意識変革
  - アカデミア指向 → 企業指向
  - 自律的行動パターンの定着と社会人基礎力の向上
- 教員・企業の認知度向上と意識改革



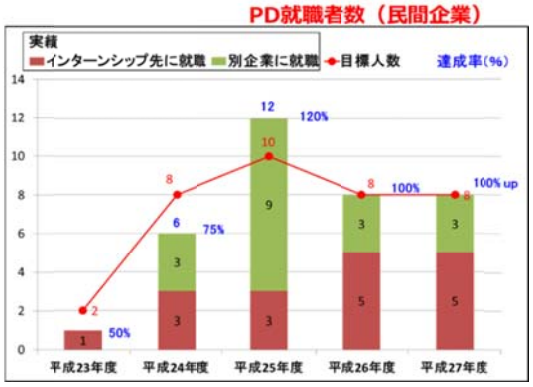
② 受講生の声

- 就職活動を一緒に乗り越える仲間に出会えた
- 他分野のPDやDCとの交流がキャリアや進路を考える上で非常に参考になり，いい刺激となった
- プレゼンテーションや対人コミュニケーションの方法は，現場でも大いに役に立った
- 私のように一人で就職活動に行き詰まっていた人には非常に有用な制度だと思う
- I studied much about Japanese language, culture and company manner that is useful for me

PD養成終了者数



PD就職者数（民間企業）



■中間評価結果　：　総合評価Ａ

システムの構築，運用：インターンシップの選考に企業も参画するなど，企業との連携を積極的に行っている。また，参加者の自主性を促す多彩なカリキュラムになっている。これらのことから，教員，ポストドクター，企業のニーズを見つつ進められているので三者間の意思疎通は順調であると評価できる。

（科学技術人材育成費補助事業（ポストドクター・キャリア開発事業）平成 25 年度中間評価結果より抜粋）

（事務局資料）

【社会人向けプログラム】

後期課程の「産業現場に即応する実践道場」は社会人やポスドク，若手教員にも開放されている。受講した社会人による評価は高い（**資料 1-2-20, P7-108 前掲資料 1-2-16**）。

資料 1-2-20　実践道場科目の社会人受講状況

■　**実践道場の科目を修了（単位修得に相当）した社会人の延べ人数**

実践道場の科目総数は 10（平成 23 年度は８）である。

年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
人数	20	21	17	29	13

（産学官連携本部集計）

■　**実践道場科目の受講者数と修了者数**

平成 26 年度に実践道場各科目を受講および修了した社会人の人数は以下のようである。授業の一部のみを受講する社会人もいるため，修了者数は受講者数より若干少ない。

学期	実践道場科目名	受講者数	修了者数
前期	知的財産-特許コース特論	12	12
	企業戦略概論	10	7
	リーダーシップ論	7	6
後期	国際化戦略	0	0
	技術開発のロードマップ	5	4
	技術系のマネジメント基礎	0	0

（産学官連携本部集計）

■　**実践道場の科目を受講した社会人の声**

P7-108 前掲資料 1-2-16 にある声に加え，「授業改善のためのアンケート」に対して以下のような声が寄せられた。

社会人の職業（業種）	実践道場科目に対する声
製造業	多様な立場の人と意見交換を通して柔軟な思考方法が身についた
製造業・知財担当	実践的な演習を多くこなすことができ，すぐに仕事に役立った
サービス業	経験的にやっていたことについて合理的に整理をすることができ，仕事をする上で人を指導するのに役立った。

（産学官連携本部集計）

（事務局資料）

【博士学生のノンアカデミック能力養成】

① 平成 25 年度改組で新設した必修科目等により学際性・広い視野の涵養を図っており，学生の好評を得ている（**P7-99 前掲資料 1-2-9，P7-104 前掲資料 1-2-13**）。

② 第２期に開始した「産業現場に即応する実践道場」により，後期課程学生のノンアカデミック能力を育成している。平成 23 年度～平成 27 年度に延べ 71 名の後期課程学生が実践道場の科目の単位を修得し，受講学生による評価は高い（**P7-102 前掲資料 1-2-12，P7-108 前掲資料 1-2-16**）。

③ 「長期インターンシップ」により企業現場での実践的能力の育成を行っており，学生の好評を得ている（**P7-110 前掲資料 1-2-18**）。

●国際通用性のある教育課程の編成・実施上の工夫

【国際的研究体験】

① GGJ 事業による海外派遣に，主に大学院生向けのプログラムを設け，多くの学生が参加して国際的研究体験を積んだ（P7-11 **前掲資料 1-1-6**）。福井大学グローバル・コンピテンシー・モデルによる検証の結果，参加学生は，ジェネリック・スキルだけでなくプロフェッショナル・スキルも向上したと回答し，取組の成果が大きくあがった（**資料 1-2-21**）。

資料 1-2-21　海外派遣プログラムに参加した学生のコンピテンシー向上

■　平成 27 年度の派遣先（一部）

・米国：スタンフォード大学（３名），マサチューセッツ大学（３名），ノースダコタ州立大学（１名）
・ドイツ：ミュンヘン工科大学（４名），ドイツ物理工学研究所（３名）
・マレーシア：トゥンク・アブドゥル・ラーマン大学（４名），プトラ大学（２名），マラヤ大学（１名），モナッシュ大学（１名）
・中国：中国医薬大学（３名），天津工業大学（２名），西安理工大学（９名）
・韓国：忠南大学校（２名）
・台湾：国立成功大学（３名）
・タイ：シーナカリンウィロート大学（４名）
・フィリピン：フィリピン大学（１名）

■　福井大学グローバル・コンピテンシー・モデル

ジェネリック・スキル（(グローバル化した「知識基盤社会」において社会人として活躍できる能力)）を，「基礎的知識・教養」，「自己学習力・問題解決能力」，「コミュニケーション能力（語学力含む）」，「異文化に対する理解・自己アイデンティティの確立」の４つに分ける。また，プロフェッショナル・スキル（ジェネリック・スキルを前提に，専門家としてグローバル社会に貢献するためのスキル）を，「専門的知識・能力」，「創造力」，「社会的責任・使命感」の３つに分ける。これら７つの能力等をルーブリック方式で自己判定し，派遣による変化を検証する。

福井大学グローバル・コンピテンシー・モデル

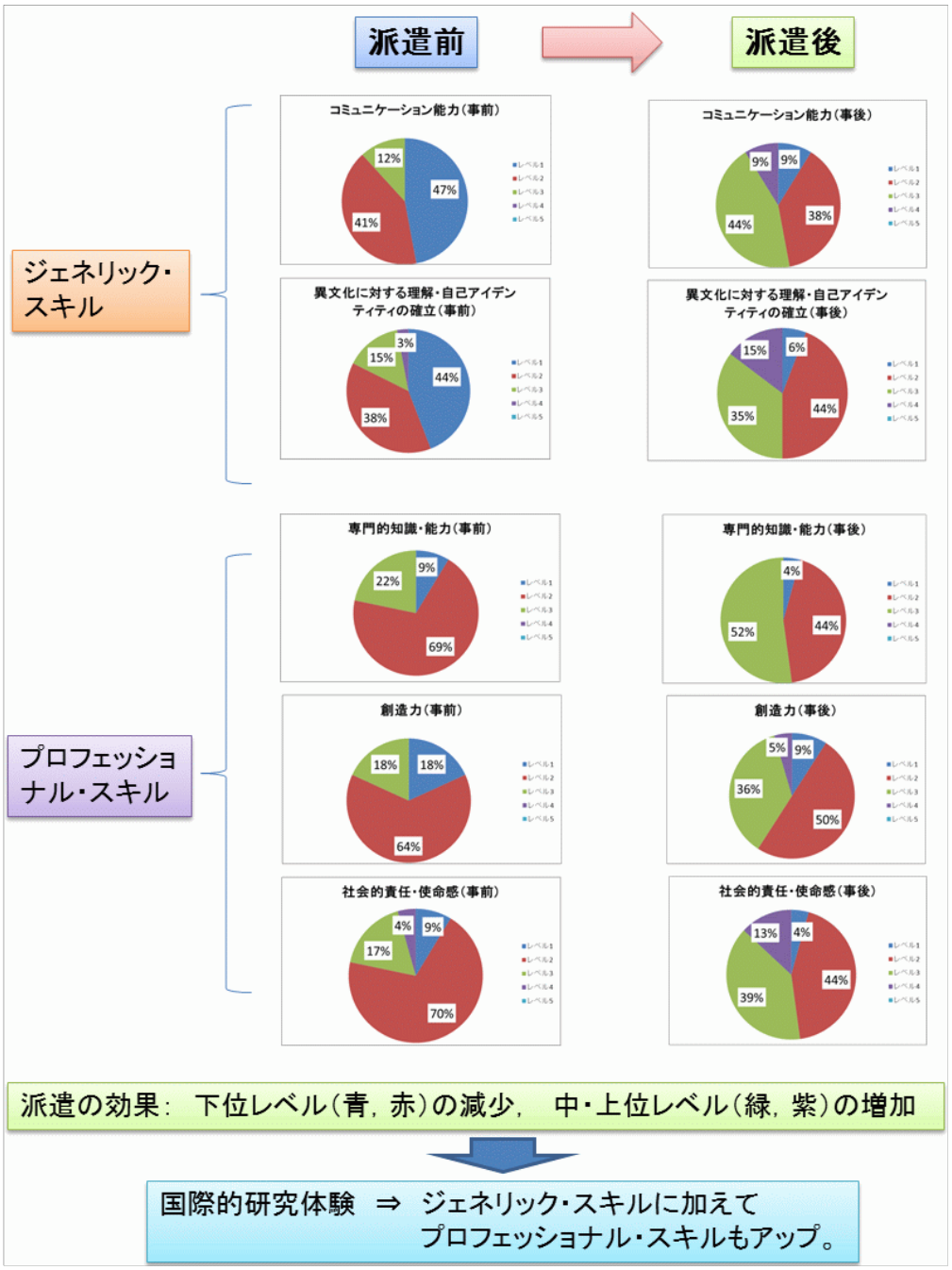
ジェネリックスキル	詳細	レベル1	レベル2	レベル3
基礎的知識・教養	グローバル社		国内の時事問題等がどのような背	自分の持つ知識教養・能力の現
自己学習力・問題解決能力	主体性・積極 働きかけ力： 課題発見力： 計画力：課題 実行力：目的			
コミュニケーション能力	発信力：自分 傾聴力：相手 情況把握力：			

プロフェッショナルスキル	詳細	レベル1	レベル2	レベル3
専門的知識・能力	世界の人々と協働してグローバル社会に貢献できる高い専門能力	自分の専門分野の講義等を理解できる	自分の専門分野への興味、関心点を明確に知り、課題、問題点を把握して研究や実習を目的を持って行うことができる	専門分野にる知識・能力のため日々し、学会での や共同研究 強みを活かし活動に積極携わる
創造力	新しい価値を生み出す力	ありたい自分像や成し遂げたいこと、理想の社会像について夢を描くことができる	現実をイメージに近づけるため、物事の問題点や自分の改善点を把握し、解決のために必要な行動や手立てを考えることができる	様々な事象について、事実や来の方法を にして、自分のアイディア 成することが る
社会的責任・使命感	専門家として世界に貢献しようとする強い気持ち	自分が社会の一部を担っていることを認識し、社会のルールや人と	自分が携わる分野がどのように人々の生活向上に繋がるかを日	自分が携わ 野において、 のプロフェッ ナルとして社 ら期待されて 使命や責任

■　国際的研究体験を積んだ学生のコンピテンシーの変化

「専門分野型」,「実践・インターンシップ型」,「研究・発表型」の海外派遣に参加した学生に対し，派遣前と派遣後のコンピテンシーを，福井大学グローバル・コンピテンシー・モデルを用いて検証した結果，派遣によりジェネリック・スキルのみならずプロフェッショナル・スキルも向上したと大多数の学生は回答した。(ジェネリック・スキルには以下の２つの他に，基礎的知識・教養と自己学習力・問題解決能力があるが，これらについても派遣後の方がレベルが高い傾向は同じである)。

回答者：ジェネリック・スキルについては，専門的要素のない語学研修等も含む全てのタイプの海外派遣に参加した工学研究科学生のうちの 34 名，プロフェッショナル・スキルについては，専門的要素の高い「専門分野型」,「実践・インターンシップ型」,「研究・発表型」の海外派遣に参加した工学研究科学生のうちの 23 名（創造力については 22 名)。いずれも平成 27 年度派遣学生。



（事務局資料）

② 繊維系大学連合による「繊維・ファイバー工学コース」(P7-33 **前掲資料 1-1-24**) には，海外大学で行うアカデミックインターンシップを設けている（**資料 1-2-22**)。

資料 1-2-22　アカデミックインターンシップ（平成 26 年度開始）

■　アカデミックインターンシップのシラバス（抜粋），インターンシップの様子

科目名	アカデミックインターンシップ（海外）
教員名 コーディネート教員	木村 裕和（信州大学） 田上 秀一（福井大学） 安永 秀計（京都工芸繊維大学）
単位数	2
開講学期	2年 通年

授業のねらいと概要

ねらい

海外の研究室で研究指導・教育指導を受けることにより、自分の専門に偏らず、グローバルで広範な知識・技術の習得を体験することを目的とし、英語によるコミュニケーション能力の向上も目的とする。

概要

海外の研究室で2週間以上1ヶ月以内の期間で研究活動などを行い、幅広い分野の知識を獲得し、グローバルで多角的な視野を得られるようにする。

授業計画

2年次に、2週間以上1ヶ月以内で、海外の研究室に入室し、研究活動などを通じて教育指導・研究指導を受ける。
手続きとしては、

1. 修了要件である基幹科目10単位を習得予定か確認する
2. 指導教員と相談し、コース事務局へ派遣希望の申請をする（4ヶ月前
3. 受入大学、研究室、受入期間の調整を行う
4. アカデミックインターンシップの実施
5. 実施後、報告書を提出する



成績評価方法

本人から提出される報告書、受け入れ教員の評価書、などにより総合的に評

履修上の注意

(1) この科目以外で基幹科目を10単位以上修得していること。
(2) 応募者多数の場合には選考があるので、注意されたい。
(3) 積極的にコミュニケーションを図りながら、自ら課題を設定し、教育・

質問、相談への対応

■　受講者

これまでに２名の学生がアカデミックインターンシップに参加した。

期間	平成 26 年 11 月 20 日～12 月 5 日	平成 27 年 11 月 16 日～12 月 4 日
学生	繊維先端工学専攻 前期課程２年（コース生）	繊維先端工学専攻 前期課程２年（コース生）
派遣先	中国　江南大学	タイ　ラジャマンガラ工科大学イサン校

（事務局資料）

③　原子力・エネルギー安全工学専攻では，様々な制度を活用して，学生が海外大学・機関等に滞在して国際的研究体験を積んでおり，学生の研究意欲向上などに繋がっている（**資料 1-2-23**）。

資料 1-2-23　学生海外派遣（原子力・エネルギー安全工学専攻）

■　派遣一覧

以下の各派遣において派遣された人数は 1 名である（合計 11 名）。

学生海外派遣

年度	派遣主体・制度名	派遣先	テーマ	期間 開始 ～ 終了
平成23年度	(公財)若狭湾エネルギー研究センター「国内原子力人材の国際性向上」事業	CEA Saclay（フランス）	高速増殖炉上部プレナムにおける自然循環時の伝熱流動解析手法の研究	H24.1.3 ～ H24.3.30
平成24年度	(公財)若狭湾エネルギー研究センター「国内原子力人材の国際性向上」事業	CEA Saclay（フランス）	TEM内引張りその場観察法によるBCC金属の転位とボイドの相互作用	H24.11.26 ～ H25.2.2
	(公財)若狭湾エネルギー研究センター「国内原子力人材の国際性向上」事業	カリフォルニア大学サンタバーバラ校(USA)	金属中水素の存在状態評価	H24.10.7 ～H24.12.28
平成25年度	(公財)若狭湾エネルギー研究センター「国内原子力人材の国際性向上」事業	チャルマース工科大学（スウェーデン）	放射線によるＤＮＡ損傷の測定と放射線防護材の効果	H25.9.29 ～ H25.12.2
	(公財)若狭湾エネルギー研究センター「国内原子力人材の国際性向上」事業	Ecole nationale superieure de chimie de paris（フランス）	フッ化化合物のレーザー分光解析	H25.10.26～H25.12.2
平成26年度	(公財)若狭湾エネルギー研究センター「国内原子力人材の国際性向上」事業	アルゴンヌ国立研究所(USA)	ナノ／マイクロ構造不均質材料のモデリング設計と不安定性に関する研究	H26.10.12～ H26.12.9
平成27年度	ICI-ECP EUJEP2プロジェクト 東京電力福島第一原子力発電所事故後の 原子力に関する教育と訓練における 欧州・日本交換プロジェクト	SCK-CEN（ベルギー国立原子力研究センター）（ベルギー）	"Advanced fuel performance for fast reactors" (新しい燃料の性能評価を高速炉に適用するための研究)	H27.10.1 ～ H28.2.29
	IAEAインターンシップ研修派遣学生 国際原子力教育ネットワークによる 戦略的原子力人材育成モデル事業	IAEA（オーストリア）	・Nuclear Communicator's Toolboxの改善に向けた作業 ・放射性廃棄物処分におけるcommunicationとstakeholder involvementに関する新しいガイダンス文書のドラフト作業 ・Disposal Teamが主催するIAEAでの会議の手伝い	H27.9.14 ～H27.12.11
	(公財)若狭湾エネルギー研究センター「国内原子力人材の国際性向上」事業	カールスルーエ工科大学（ドイツ）	廃止措置エンジニアリング技術	H27.10.1 ～H27.12.27
	(公財)若狭湾エネルギー研究センター「国内原子力人材の国際性向上」事業	中国科学院 上海応用物理研究所 トリウム溶融塩炉研究センター	フッ化物溶融塩におけるNi基合金の腐食挙動の解明	H27.11.1 ～ H28.1.9
	機関横断的な人材育成事業 「世界最高水準の安全性を実現するスーパーエンジニアの育成」	イリノイ大学シャンペーン校ほか	世界職業人被曝情報機構（ISOE）北米シンポジウムへの参加、イリノイ大学での講義、米国原子力発電所の見学	H28.1.10 H28.2.8

■　IAEA に派遣された学生の報告書から（抜粋）

知識量に関して、私は、業務内容が自分の研究分野に深く関係していたため、研究に関する知識は主として業務を通して仕入れていた。また、IAEA はさすが国際機関というだけあり、原子力の幅広い分野における世界各国の最新情報が入ってくる。それは、局内のメール配信からだったり、会議やミーティングからだったり、何気ないスタッフとの会話からだったりするのだが、自分の専門以外の分野にも興味をもつきっかけとなったし、それを自分の専門と関連付けてみることで、より俯瞰的かつ深い理解を得ることにもつながった。例えば、研究炉の部署のインターンから聞いたことなのだが、商業炉を導入したがっている国は多いが、

■　■　■

あることに劣等感を強く覚えていた(今も少なからず感じているが)。日本以外の国の人は、英語は当たり前のように話せる上に、何ヶ国語も操ることができるひとがほとんどであるのに、日本人は、その英語すらまともに使える人は非常に少ない。その他の言語なんてもってのほかである。だが、日本という国が世界の中で果たす役割が大きいうちは、世界における日本語の重要性は失われない。日本人が英語という共通語を身につけてしまえば、彼らの果たす役割も非常に大きい。こういった視点に気づくことができたのも大きな収穫だ。



IAEAの天野事務局長およびスタッフと

国際原子力機関（International Atomic Energy Agency）
部署名：Waste Technology Section, Division of Nuclear Fuel Cycle and Waste Technology, Department of Nuclear Energy
所在地：Vienna International Centre, PO Box 100, 1400 Vienna, Austria

3．　指導員
Mr Stefan Mayer

4．　インターンシップ課題
・Nuclear Communicator's Toolbox の改善に向けた作業
・放射性廃棄物処分における communication と stakeholder involvement に関するガイダンス文書のドラフト作業
・Disposal Team が主催する IAEA での会議支援
・福島の原発事故の社会的側面に関するプレゼン(@スロベニア)
・3 ヶ月間のインターンシップの総括プレゼン

5．　インターンシップ活動の概要

2007 年に IAEA が構築して以来、メンテナンスが滞っていたウェブサイト"Nuclear Communicator's Toolbox"が大幅にリニューアルされることとなり、加盟国から専門家を呼んで、コンサルタンシー会合が行われ

（事務局資料）

④　国際学会等での学生の発表を奨励しており，優秀な発表により受賞する者もいる（P7-143 **後掲資料 2-1-9～11**）。

●養成しようとする人材像に応じた効果的な教育方法の工夫

【教育方法の組合せと多様な学修・研究機会】

前期課程のカリキュラムには，通常の専門の講義に加え，特別講義（**資料 1-2-24**），PBL，長期インターンシップ，技術経営カリキュラム科目，科学技術英語，海外短期インターンシップなどの科目がある。これらは受講生に好評を得ており（**資料 1-2-25, P7-11 前掲資料 1-1-6, P7-102 前掲資料 1-2-12, P7-110 前掲資料 1-2-18**），また大部分の学生がカリキュラムにより多様な能力等を修得できると回答しており（**P7-146 後掲資料 2-1-12**），多様な学修研究機会を通した能力涵養を求める関係者の期待に応えている。後期課程についても同様に期待に応えている（**P7-90 前掲資料 1-2-5, P7-102 前掲資料 1-2-12, P7-104 前掲資料 1-2-13**）。

資料 1-2-24　非常勤講師による特別講義（平成 27 年度の例）

■外部の非常勤講師による「特別講義」により，専攻の関連分野や産業界の動向などについて広く学ぶ。

科目名	講師（所属）
機械工学特別講義	名古屋大学大学院工学研究科マイクロ・ナノシステム工学専攻教授
電気・電子工学特別講義第一	兵庫県立大学工学部 准教授 香川大学工学部 教授
電気・電子工学特別講義第二	分子科学研究所 准教授 滋賀県立大学工学部電子システム工学科 教授
情報･メディア工学特別講義第１	NTT メディアインテリジェンス研究所
情報･メディア工学特別講義第２	（株）日立製作所　主任研究員
生物応用化学特別講義	理化学研究所ライブセル分子イメージング研究チーム専任研究員 京都大学大学院工学研究科高分子化学専攻准教授
数理・量子特別講義	金沢大学理工研究域数物科学系教授
物性・電磁物理特別講義Ⅰ	静岡大学大学院理学研究科
知能システム特別講義一	岐阜大学工学部准教授
知能システム特別講義二	関西学院大学理工学部数理科学科准教授
知能システム特別講義三	中央大学理工学部応用化学科教授
繊維先端工学特別講義Ⅰ	東京工業大学大学院理工学研究科 教授
繊維先端工学特別講義Ⅱ	岐阜大学工学部　教授

（事務局資料）

資料 1-2-25　前期課程 PBL 科目

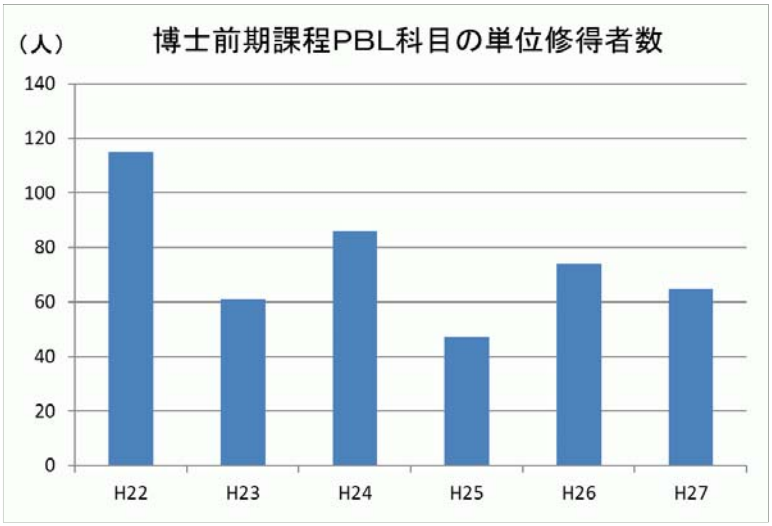
文部科学省「組織的な大学院教育改革推進プログラム」に採択され，GP 事後審査において４段階中の最高評価を得た「学生の個性に応じた総合力を育む大学院教育」（平成 19～21 年度）の支援により，前期課程に PBL 科目を設けた。支援期間後も，工学研究科の財源で PBL 科目を継続実施している。

■　PBL プロジェクト課題一覧（平成 27 年度）

1	メカトロニクス技術による生活改善プロジェクト
2	専攻横断型パワーアシストスーツの応用と Raspberry Pi 学習
3	エレクトロニクス・フォトニクス分野におけるものづくりの高度技術を有する起業家の育成
4	国際光学会の学生支部による競技会・展示会への参加及び開催
5	中山間地の活性化に向けた既存建築物活用方策の提案
6	福井の灯り発信のためのイルミネーションガイドブックの制作
7	たわら屋
8	バングラデシュに適した円筒型太陽熱淡水化装置の設計
9	国道８号福井県内区間における路面凍結・積雪ハザードマップの作成
10	公共及び商業施設のフィールド調査及び設計方法の研究
11	生体関連化合物の新機能開拓と解明を目指す有機化学合同セミナー
12	国際社会で必要な人材に関する調査
13	バイオテクノロジーの源流を学ぶ
14	脳神経研究のための基礎技術修得型プロジェクト
15	ロボカップ・人型ロボットリーグ参加チャレンジ・プロジェクト
16	原子力施設における原子力材料研究実習
17	シングルフォトンカウンティング実習
18	放射線計測のためのFADCプログラミング実習

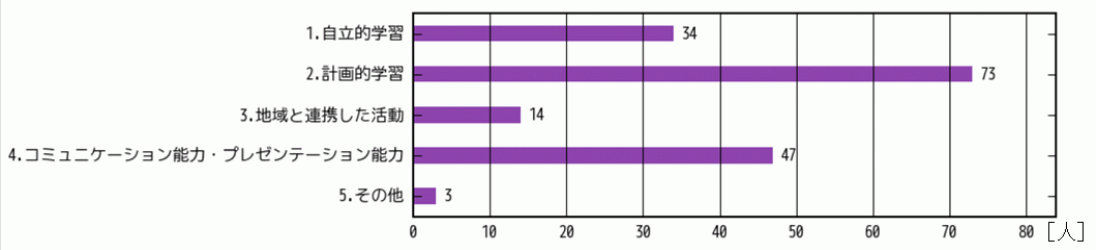
■　PBL 科目の単位修得者数

大学院 GP による支援期間終了後も工学研究科の財源で PBL 科目に対する支援を継続し，多くの学生が PBL 科目を受講している。



■　PBL 科目の効果

平成 27 年度 PBL 科目履修者に対し，「PBL 科目の履修によって促進された，あるいは涵養されたことは何か（複数回答）」を尋ねたところ，計画的学習，コミュニケーション能力・プレゼンテーション能力，計画的学習を挙げた学生が多かった。通常の「座学」では涵養することが難しい能力の育成に PBL 科目が役立っていることがわかる。なお，回答者の中には，PBL を履修したものの単位修得には至らなかった者も若干含まれている。



（平成 27 年度プログラム・オブ・スタディ評価結果報告書より抜粋）

■　PBL 科目受講者の声（抜粋）

以下は平成 26 年度に PBL を受講した学生の声である。座学では身につけることが難しい実践的な力を修得し，研究に対する意欲が向上するなど，教育の成果があがっている。

・ハードウェア記述言語をつかって回路設計を行いました。なれない CAD をつかっての設計作業だったので，手探りでツールの使い方を学びなんとか実装まで至ることができました。今まで私の研究は SW で完結しているものが多く，出てくる結果は数字ばかりでした。しかし，今回はいつもと違い，結果が様々か形（光や音）で表れてくれるのでとても充実感が得られました。今まで HW にあまり触れることがなかったが，今回の PBL を通じ組込システムについて深く学ぶことができたよかったと思います。
・広報や調査など多くの活動をする中で，地域住民の方々や様々な分野の専門家の方々と交流することができ，座学ではなく実践的な地域づくりを実感することができました。
・実際に海外に行って現地の環境を肌で感じ，現地の生の声を聴くことができた。PBL を通して私は自分の知らない文化や知識を知ることで自分の辞書を充実させるとともに，国際社会で必要とされる柔軟性や分野を超えた幅広い知識の大切さを身に染みて感じた。
・実験装置を組み立てるにあたり，問題に直面し対処しても新たな問題が浮上し対処するを繰り返すことで考える力を付けられた実験プロジェクトでした。
・普段の研究では扱うことのない中性子による放射化した材料の取扱いを体験でき非常に貴重な経験だった。また，他大学の生徒，メーカーに勤める人とともに実習を行い，話をすることで視野を広げることができた。
・東大神岡施設で地下という特別な環境に実際に行き，装置に直で触れたり，他大学の学生の研究の成果を見たりすることで，自分の研究に対するモチベーションを上げる刺激になり，研究に対する熱意が湧きました。

（事務局資料）

【博士のキャリア開発】

「産業現場に即応する実践道場」や「長期インターンシップ」などにより産業界で活躍できる能力を備えた人材の育成を行っている（**P7-102 前掲資料 1-2-12，P7-110 前掲資料 1-2-18**）。また，教育研究補助業務に TA や RA として学生を積極的に採用している（**資料 1-2-26，27**）。これらにより，キャリア開発を望む学生の期待に応えている。

資料 1-2-26　TA および RA の採用状況

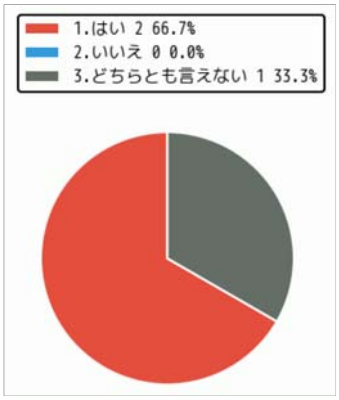
年度	TA 採用人数	RA 採用人数
平成 22 年度	408	56
平成 23 年度	448	50
平成 24 年度	388	50
平成 25 年度	343	37
平成 26 年度	389	35
平成 27 年度	389	33

（事務局資料）

資料 1-2-27　TA や RA に対するアンケート結果

■TA アンケート

平成 27 年度に TA 業務に従事した後期課程学生に対し，「TA 業務に従事することで，教育的力量や指導力などが向上しましたか？」と問うた結果，約 67%の回答者が「はい」と答えた（右図）。



■RA アンケート

平成 27 年度に RA 業務に従事した後期課程学生に対し，「RA 業務に従事することにより涵養された能力」を問うたところ，以下の回答が寄せられた。

・自分の主研究とは少し違うテーマの補助などをすることにより，物性に関する様々な知識や経験を積むことができた。
・実験に従事することで，機器の使用についての理解が深まったり，研究の効率の良い進め方などが涵養された。
・論理的な文章作成能力，研究計画立案行動能力
・新しい知識と技術，考え方を養うことができた。また，給料をいただけることで，責任感が一層強くなった。

（事務局資料）

● 学生の主体的な学習を促すための取組

【アクティブ・ラーニング】

① 研究室での研究活動をアクティブ・ラーニングとして実施している。ほとんどの学生が学位を取得していることや（P7-141 後掲資料 2-1-7），学生の発表・受賞の実績があることは（P7-143 後掲資料 2-1-9～11），アクティブ・ラーニングの成果があがっていることの証左である。

② アクティブ・ラーニングを主体とする技術経営カリキュラムや PBL などを設け，多くの学生が受講し成果があがっている（P7-102 前掲資料 1-2-12, P7-108 前掲資料 1-2-16, P7-121 前掲資料 1-2-25）。

【単位の実質化】

授業時間外の学習時間の確保（資料 1-2-28），アクティブ・ラーニングの積極的導入，「単位の大枠」による修得単位数の適正化（資料 1-2-29）を行った。平成 25 年度には，「授業時間外学習時間が週に 10 時間以上」である前期課程の学生の比率が，平成 22 年度より 11%程度増え（資料 1-2-30），単位の実質化が進んだ。

資料 1-2-28　時間外学習を促す工夫

■　授業時間外学習を促す工夫

専攻	調査科目数	レポート		中間テスト		最終試験		自主学習の指示	
		科目数	割合	科目数	割合	科目数	割合	科目数	割合
機械工学	27	16	59.3%	5	18.5%	12	44.4%	24	88.9%
電気・電子工学	25	19	76.0%	2	8.0%	6	24.0%	16	64.0%
建築建設	22	14	63.6%	1	4.5%	9	40.9%	19	86.4%
材料開発工学	28	17	60.7%	1	3.6%	4	14.3%	25	89.3%
生物応用化学	24	19	79.2%	1	4.2%	10	41.7%	19	79.2%
物理工学	31	23	74.2%	0	0.0%	4	12.9%	22	71.0%
知能システム工学	29	16	55.2%	1	3.4%	1	3.4%	25	86.2%
繊維先端工学	27	14	51.9%	1	3.7%	9	33.3%	21	77.8%
原子力・エネルギー安全工学	22	16	72.7%	0	0.0%	2	9.1%	14	63.6%
共通科目	54	37	68.5%	1	1.9%	11	20.4%	29	53.7%

※科目数は，平成 26 年度開講科目を対象に調査し教員から回答のあった科目の総数である。割合はその科目数に対する%で示す。

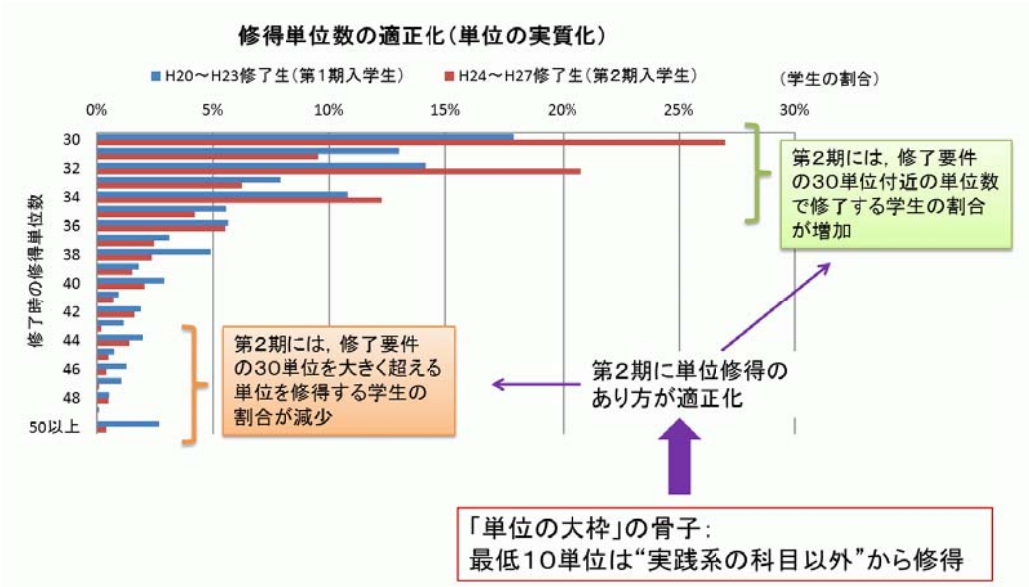
■　自主学習等を促す修学指導例

・工学研究科では，学生ごとに主指導教員１名と副指導教員２名から成る POS（Program of study committee）を構成し，学生本人の研究テーマや希望に沿ったカリキュラムのオーダーメード化を図り，教員の集団的指導体制を確立する一方，学生の自主学習・研究を促している。

（事務局資料）

資料 1-2-29　前期課程における修得単位数の適正化

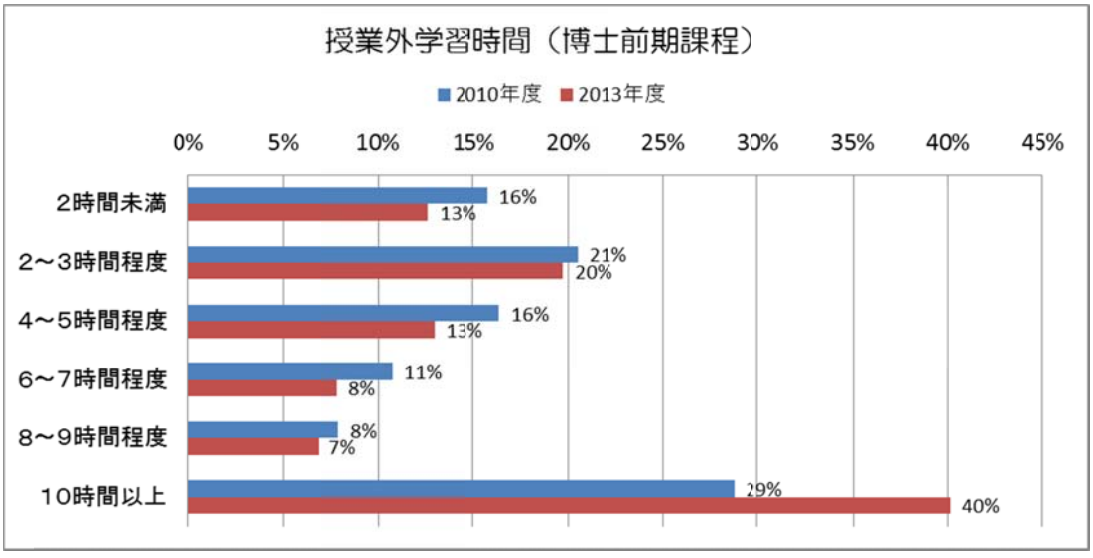
平成 23 年度から，前期課程では，座学の科目（多くは専門分野の科目）と非座学の科目（多くは実践力育成の科目）の履修の仕方に一定の枠をはめる「単位の大枠」の考えを導入し（履修のルールとして制度化），極端な履修形態を抑制している。これは，バランスの取れた履修を促すとともに，修了要件を大きく超える単位修得を抑えて単位の実質化を行うためである。以下より，第２期では修了要件の 30 単位を大きく超える単位修得が抑制され，第１期に比べ履修の仕方が是正されていることが分かる。（30 単位を大きく超える単位修得を完全に禁止しているわけではなく，POS コミティが承認すれば 40 単位を超える履修登録が可能。）



（事務局資料）

資料 1-2-30　授業時間外学習時間

以下は平成 22 年度と平成 25 年度に実施した学生生活実態調査の結果である。本調査項目に対する有効回答者数は，平成 22 年度には 317 名，平成 25 年度には 294 名であった。



（学生生活実態調査 2010，2013 から抜粋）

（事務局資料）

【教室外学修プログラム等の提供】

① 中・長期インターンシップ，海外短期インターンシップ，スプリングプログラム，専攻単位での海外との交流プログラムが実施されており，学生から好評を得ている（**資料 1-2-31，P7-11 前掲資料 1-1-6～8，P7-110 前掲資料 1-2-18**）。

資料 1-2-31　中期インターンシップと長期インターンシップ

種別	内　　容	外部資金等
中期インターンシップ	派遣期間は２週間～４週間。実社会において，企業・業務の仕組みや流れを理解し，技術や人材を基にどのように経営し収益につなげているのかを考える。 第２期の単位修得者　80 名	文部科学省特別教育研究費（平成 18 年度～平成 20 年度）の配分を受けた「創業型実践大学院工学教育」（技術経営カリキュラム）を，平成 21 年度以降も自主財源で継続しており，その中の１つの科目「インターンシップ（企業派遣実習）」として実施。
長期インターンシップ	企業に２カ月程度派遣することで，産業界の取組を理解し，自主的に問題を解決する能力のある高度専門人材を育成する。 第２期の単位修得者　47 名 **（P7-110 前掲資料 1-2-18）**	派遣型高度人材育成共同プラン（平成 20 年度以降「産学連携による実践型高度人材育成事業」）に採択された「地域産業との連携による派遣型高度人材育成」（平成 18 年度～平成 22 年度）。平成 23 年度以降は自主財源で継続。

（事務局資料）

② 学外の技術展示会への出品を取り入れた授業を実施しており，単位修得者は増加傾向にある（**資料 1-2-32**）。

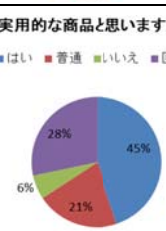
資料 1-2-32　製品・サービスの試作及び試販売

■　**試作・試販売のテーマ（一部）**

年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
試作･市販売のテーマ	高機能 PCS を有する HEMS エコハウスの提案	ほーこーくん～歩行リハビリの新時代へ～	スタンドアローン～立ち上がり補助車いす～	ENJOY YOUR LIFE ～階段昇降ベビーカー～
	ビジネスマン必見クールイス		『クローザー』～単三電池駆動の雨除けスクリーンの実現～	LED 和ろうそく～近代技術に和を感じる～
単位修得者数	5	4	7	8

■　**学外の技術展示会（北陸技術交流テクノフェア 2015）への出品**

授業で作成した「階段昇降ベビーカー」と「LED 和ろうそく」を出品して来場者の評価を受けた。

階段昇降ベビーカーへの評価	LED 和ろうそくへの評価
	
	
	
	



「階段昇降ベビーカー」への意見（抜粋）
- 子育て中の方の意見を聞いた方が良い。サイズが大きい。
- ワンタッチで車輪があげられると良い，軽量化，折りたたみが出来ると良い。

「LED 和ろうそく」への意見（抜粋）
- 和の雰囲気が出ていいなと思いました。部屋に欲しいです。
- ろうそくのゆれと同時にアロマ効果が出ると良い，緊急用（震災用）時での活用。

（事務局資料）

【学修意欲向上方策】

①　平成 24 年度から，成績等が一定の要件を満たせば，海外派遣プログラムへの参加者が日本学生支援機構の奨学金や福井大学独自の海外派遣支援金を受けられる制度を設けて好評を得ており，学修および海外体験の意欲の向上に資している（**資料 1-2-33，34**）。

資料 1-2-33　海外派遣プログラムに参加する学生に対する奨学金・支援金

JASSO 奨学金の GPA 要件は 2.3 以上，福井大学独自の海外派遣支援金の GPA 要件は 2.0 以上である。

海外派遣プログラム参加者のうち，奨学金や支援金を受けずに参加した学生は 13%程度であることから，これら助成へのニーズは高く，海外派遣に不可欠な支援となっていることがわかる。

年度	H23		H24		H25		H26		H27	
参加学生数	30名		32名		38名		54名		39名	
奨学金	JASSO	大学支援金	JASSO	大学支援金	JASSO	大学支援金	JASSO	大学支援金	JASSO	大学支援金
博士課程前期	22	2	22 （7名は支援金も受給）	16	25	4	40	10	21	10
博士課程後期	1	0	2 （1名は支援金も受給）	1	1	0	0	0	0	0

（事務局資料）

資料 1-2-34　海外派遣支援金受給学生の報告書

視野が広がり，主体的に行動するなど，支援金を受けて派遣された学生の成長が報告されている。

平成２４年度福井大学学生海外派遣支援金受給学生報告書

福 井 大 学 長 殿

在籍学部・研究科　工学研究科　建築建設工学専攻

氏　　名

（署名又は記名押印）

標記について，下記のとおり報告します。

記

派遣先大学等	ハムラニア農業試験場 イテハード大学	国・地域名	アラブ首長国連邦
派遣期間	平成 24 年 11 月 3 日　～　平成 24 年 11 月 13 日（10 日間）		
登録した授業科目名・取得単位数等	アラブ首長国連邦の環境問題を通じたグローバル研究教育と中東産業視察		
学習・研究の内容及び成果等	＜学習および研究成果＞ 日本とは環境が異なるため，日本では当たり前のことが，海外では通用しないことをとても実感できた．電気一つとっても出力が違うため変圧器を用いねばならず，また電源が不安定なため，停電に備えねばならず，日本とは全く異なる環境下で物事を考える力がついた．また，アラブ滞在中では諸問題が数多く発生する中で，より柔軟な考え方が必要であると十分に感じた．そんな中，節水灌漑プロジェクトに参加し，主体的に取り組むことが出来たことは大変良かった(写真１を参照)．		



写真１　試験の様子

＜その他＞

非常に短期間ではあったが，現地の住民または元福井大学交換留学生の自宅に招かれ，地元の料理を頂く機会を得られ，非常に嬉しかった．その際に，アラブが抱える問題（例えば環境問題や移民問題）を直接聞くことができ，色々なことを考えさせられた．また現地労働者との交流で母国での労働問題，環境問題等も知ることができ，世界の諸問題を実際に肌で感じることができた．



写真２　ドバイの町並み

さらに，世界一流のホテルが立ち並ぶドバイに行き，まだまだ産業発展途上中の現状をみて，今後も十分に産業展開の可能性があることを感じた(写真２を参照)．今回のプロジェクトの経験を活かし，今後の学生生活に活かしたいと思う．

（事務局資料）

② 学業が優れた学生を表彰する全学及び工学研究科の制度を設けている（**資料 1-2-35, 36**）。授業料免除や日本学生支援機構奨学金の返還免除についても，成績等により対象者を決定している。

資料 1-2-35 学長表彰制度

(10) 福井大学学生表彰要項

平成18年１月11日
学　長　裁　定

（趣旨）
第１　この要項は，福井大学学則第63条及び福井大学大学院学則第43条の規定に基づき，学長が行う学生の表彰（以下「表彰」という。）について，必要な事項を定める。
（表彰の基準）
第２　表彰は，次の各号の一に該当する本学の学生又は学生の団体（以下「学生等」という。）について行う。
(1) 学術研究活動において，特に顕著な業績を挙げたと認められる学生等
(2) 課外活動において，特に優秀な成績を収め，課外活動の振興に功績があったと認められる学生等
(3) 社会活動において，特に顕著な功績を残し，社会的に高い評価を受けたと認められる学生等
(4) その他前３号と同等の表彰に値する行為等があったと認められる学生等
（表彰対象者の推薦）
第３　学部長又は研究科長は，前条の各号の一に該当すると認められる学生等（以下「表彰対象者」という。）を，学長に推薦することができる。
２　学部長又は研究科長は，前項の規定により推薦するに当たり当該学部又は研究科の教授会の意見を聴くものとする。
（被表彰者の選考及び決定）
第４　学長は，推薦された表彰対象者の選考について，全学教務学生委員会に諮り，教育研究評議会の議を経て表彰する学生等（以下「被表彰者」という。）を決定する。
（表彰の方法）
第５　表彰は，学長が表彰状を授与することにより行う。
２　前項の表彰状の授与に併せて，記念品等を贈呈することができる。
（表彰の時期）
第６　表彰は，原則として次の日に行う。
学位記授与式の日
２　前項の規定にかかわらず，表彰する必要があると判断されるときは，その都度行う。
（公表）
第７　被表彰者は，公表する。
（その他）
第８　表彰の実施に関し必要な事項は，別に定める。

附　則
この要項は，平成18年１月11日から実施する。
附　則
この要項は，平成27年４月１日から実施する。

（福井大学 HANDBOOK2015 学生便覧　より抜粋）

資料 1-2-36　工学部及び工学研究科優秀学生表彰制度

工学部及び工学研究科博士前期課程優秀学生表彰制度について

（平成16年４月１日　制　　定）

１．工学部及び工学研究科博士前期課程学生の勉学意識を奨励するため，工学部及び工学研究科博士前期課程に「優秀学生表彰制度」を設ける。
２．優秀学生は，毎年度卒業見込みの学生のなかから，学科及び専攻の推薦に基づき，各学科２名以内及び各専攻１名を選出する。
３．優秀学生は，卒業祝賀会席上において表彰し，工学部長又は工学研究科長から表彰状及び記念品を授与する。

（平成 26 年度福井大学工学部・工学研究科規則集より抜粋）

【学習環境の整備】

①　大学院生は研究室に配属され適切なスペースが与えられているが，耐震改修に合わせて学生が共同利用できるスペースの整備も進め，活用されている（**資料 1-2-37**）。GGJ 事業により，留学生と日本人が交流できるグローバルハブや，e-Learning などの自習設備を有する「言語開発センター」が整備され（**資料 1-2-38**），多くの学生が活用している。

資料 1-2-37　第２期に整備した共同利用スペース

建物名	部屋名	部屋数	整備年度	
工学系３号館４階，５階	多機能教養エリア	5	平成 22 年度	
工学系１号館１号棟１階	自習室１	1	平成 26 年度	
工学系３号館１階	ﾘﾌﾚｯｼｭｺｰﾅｰ	1	平成 22 年度	

（事務局資料）

資料 1-2-38　言語開発センター

総合図書館に言語開発センター（Language Development Center: LDC)が開設され，E-learning システムや 2,500 冊以上の本，1,000 本以上の DVD 等の教材が備えられ，充実した自主学習環境が整った。全学の利用状況から推定すると，延べ約 54 人／月の工学研究科大学院生が LDC を利用した。



(http://www.lc.u-fukui.ac.jp/ja/page/p11.html)

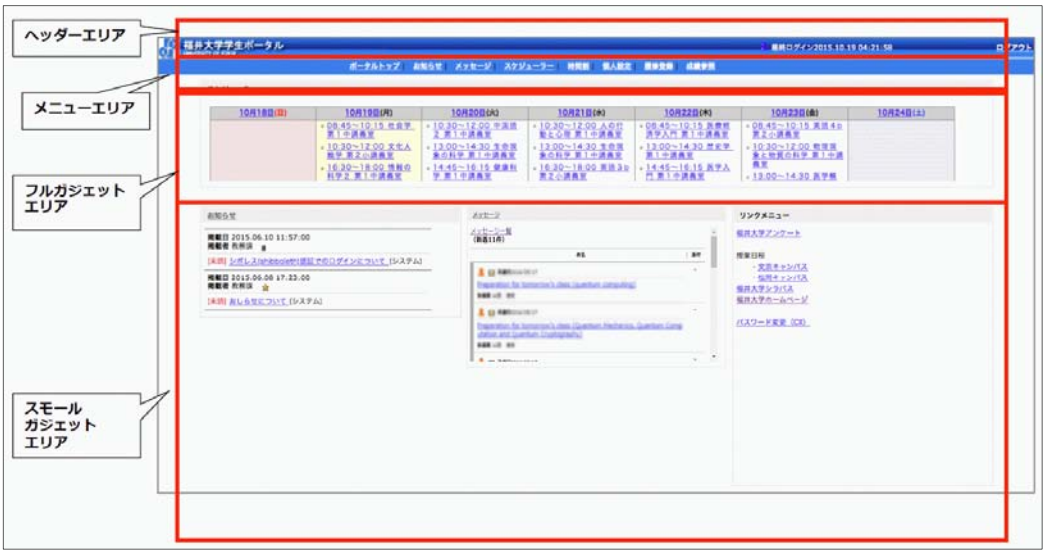
（事務局資料）

② 平成 27 年度に LMS（ラーニングマネジメント・システム）および福井大学ポータルサイトを導入し，オンライン学習環境が整備された（**資料 1-2-39**）。

資料 1-2-39　オンライン学習環境の整備

■ 福井大学学生ポータル

履修登録，シラバスの確認，スケジュール管理，掲示等の確認，休講・補講の確認，授業担当教員，助言教員，教務課等からのメッセージの確認と返信，アンケートへの回答，LMS（学習支援システム）の利用などをここから行える。



■　LMS（学習支援システム）

Web から，授業資料の入手，テストの受験，レポートの提出，学習履歴の確認などが行える。



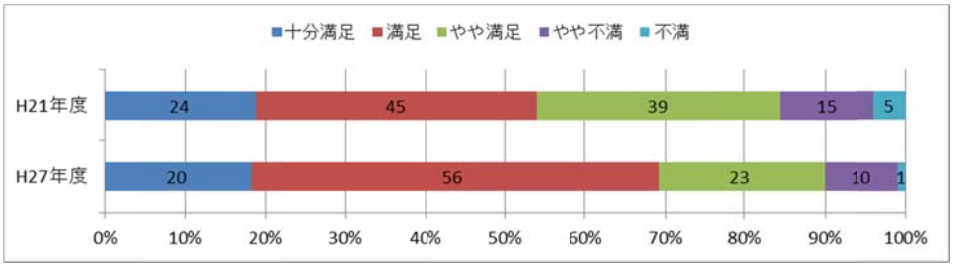
（事務局資料）

③　学習・研究環境に対する学生の満足度は第１期から向上しており，学生の期待に応えている（**資料 1-2-40**）。

資料 1-2-40　学習・研究環境等に関する満足度

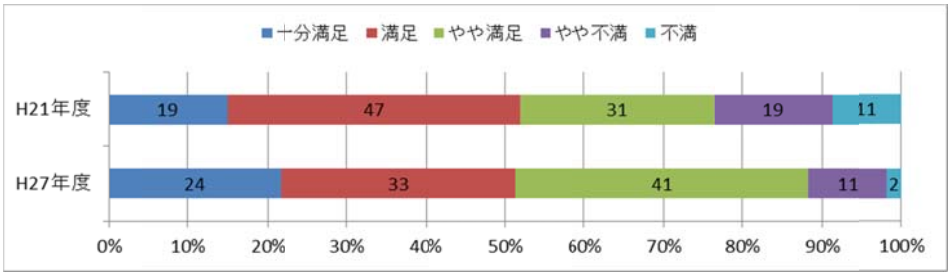
設問　学習・研究環境について，あなたはどの程度満足していますか。

⇒　平成 27 年度の方が「十分～やや満足」と答えた回答者の割合が約６％多い。



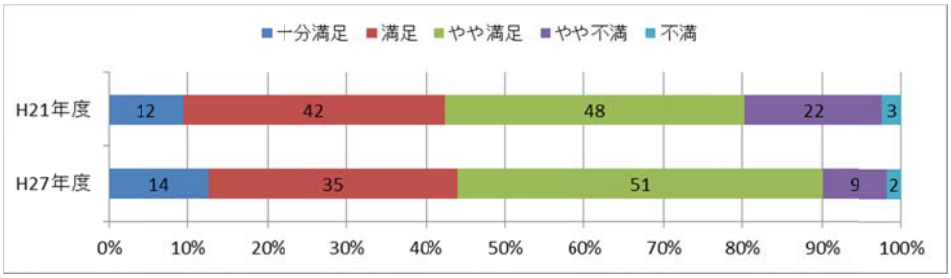
設問　大学で自由に使える学習スペース（研究室の個人スペースを含む）について，あなたはどの程度満足していますか。

⇒　平成 27 年度の方が「十分～やや満足」と答えた回答者の割合が約 12%多い。



設問　講義室の広さについて，あなたはどの程度満足していますか。

⇒　平成 27 年度の方が「十分～やや満足」と答えた回答者の割合が約 10%多い。



（グラフ中の数値は回答者数を示す）

※平成 21 年度および平成 27 年度「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」の結果から，修了予定の前期課程学生と後期課程学生の回答を抽出。

（事務局資料）

（水準）　期待される水準を上回る

（判断理由）

①　平成 23 年度に，DP と CP を社会的な要請および策定済みの AP を踏まえて策定した[1)]。社会ニーズの変化に合わせた見直しも行い関係者の期待に沿った人材育成に努めた[2)]。

[1)]	資料 1-2-1	：工学研究科全体のディプロマ・ポリシー，カリキュラム・ポリシー　P7-84
	資料 1-2-2	：前期課程各専攻のディプロマ・ポリシー，カリキュラム・ポリシー　P7-85
	資料 1-2-3	：社会的要請等を踏まえたディプロマ・ポリシー，カリキュラム・ポリシーの策定　P7-88
[2)]	資料 1-1-59	：教学マネジメント体制のもとでの取組事例　P7-64
	資料 1-2-5	：平成 25 年度改組における教育課程の体系性の確保　P7-90

② 医工連携科目「生命科学複合特論Ⅰ」の単位修得者数が第１期のほぼ２倍になるなど，学際的教育が進んだ[3]。後期課程では，平成 22 年度に文部科学省特別教育研究経費で開始した「産業現場に即応する実践道場」を多数の学生が専門の枠を超えて受講し好評を得た[4]。このプログラムは社会人やポスドク，若手教員にも開放されている。受講した社会人による評価は高い[5]。

[3]資料 1-2-11　：生命科学複合研究教育センターによる医工連携教育（前期課程）　P7-101
[4]資料 1-2-12　：産学官連携本部と連携した学際的実践教育プログラム　P7-102
[5]資料 1-2-16　：実践道場受講生の声　P7-108

③ 平成 23 年度に，「イマジニア養成キャリア開発プログラム」が科学技術人材育成費補助事業に採択され，博士号取得者に対して産業界で活躍できる能力の育成を行い，大学機関別認証評価（平成 27 年度受審）で「主な優れた点」の一つとして高く評価された[6]。

[6]資料 1-2-19　：**博士人材キャリア開発支援センター**（CCDS）とイマジニア育成キャリア開発事業（CDPIT）プログラム　P7-111

④ 平成 24 年度に採択された GGJ 事業による海外派遣に多数の学生が参加した。福井大学グローバル・コンピテンシー・モデルによる検証の結果，参加学生は，ジェネリック・スキルだけでなくプロフェッショナル・スキルも向上したと回答し，取組の成果が大きくあがった[7]。

[7]資料 1-2-21　：海外派遣プログラムに参加した学生のコンピテンシー向上　P7-115

⑤ 繊維系大学連合による「繊維・ファイバー工学コース」には，海外大学で行うアカデミックインターンシップを設けている[8]。また，原子力・エネルギー安全工学専攻では，様々な制度を活用して学生が国際的研究体験を積んでおり，学生の研究意欲向上などに繋がっている[9]。

[8]資料 1-2-22　：アカデミックインターンシップ（平成 26 年度開始）　P7-117
[9]資料 1-2-23　：学生海外派遣（原子力・エネルギー安全工学専攻）　P7-118

⑥ 授業時間外の学修時間の確保や修得単位数の適正化を行い[10]，平成 25 年度には，「授業時間外学修時間が週に 10 時間以上」である前期課程の学生の比率が，平成 22 年度より 11%程度増え，単位の実質化が進んだ[11]。

[10]資料 1-2-29　：前期課程における修得単位数の適正化　P7-125
[11]資料 1-2-30　：授業時間外学習時間　P7-125

⑦ GGJ 事業により e-Learning などの自習設備を有する「言語開発センター」を整備し[12]，多くの学生が利用している。平成 27 年度に LMS（ラーニングマネジメント・システム）

および福井大学ポータルサイトを導入し，オンライン学習環境が整備された[13]。学習・研究環境に対する学生の満足度は第１期から向上しており[14]，学生の期待に応えている。

[12]資料 1-2-38　：言語開発センター　P7-131
[13]資料 1-2-39　：オンライン学習環境の整備　P7-131
[14]資料 1-2-40　：学習・研究環境等に関する満足度　P7-132

⑧平成 25 年度改組により，繊維・材料系に特化した繊維先端工学専攻[15]を設置するとともに，同専攻に「繊維・ファイバー工学コース」を設け繊維系大学連合による共同人材育成を開始した[16]。これは，大学機関別認証評価結果で「優れた点」の一つとして高く評価された。また，原子力・エネルギー安全工学専攻では，東日本大震災以降，カリキュラムを見直す[17]とともに，外部機関との連携・外部資金の導入により実践的な教育を一層強化した[18]。これらにより，地域産業（繊維，原子力）の期待に応えた。

[15]資料 1-1-61　：外部評価の結果を踏まえた改善　P7-68
[16]資料 1-1-24　：繊維・ファイバー工学コースのカリキュラム　P7-33
資料 1-1-25　：繊維系大学連合による「繊維・ファイバー工学コース」の特徴　P7-34
資料 1-1-26　：繊維・ファイバー工学コース実施の成果と評価　P7-35
[17]資料 1-1-70　：平成 25 年度改組によって導入された実践力教育（前期課程）　P7-80
[18]資料 1-1-20　：外部機関との覚書締結状況　P7-28
資料 1-1-21　：実施にあたり外部資金を活用した教育　P7-28

以上のように，学際性・実践力を育成する教育を第１期以上に進展させるとともに，GGJ 事業によるグローバル人材育成や地元産業（繊維，原子力）にかかわる教育も充実させて成果をあげており，高度専門技術者の育成が大きく進み，期待される水準を上回る。

分析項目Ⅱ　教育成果の状況

観点　学業の成果

（観点に係る状況）

●履修・修了状況から判断される学習成果の状況

【学習成果の評価方法】

①　成績は４段階で評価しているが（**資料 2-1-1**），学修到達度を一層明確化するため，平成 28 年度より「秀」を加えた５段階にする。各科目の成績評価は，多面的かつ厳格に行われ，その詳細はシラバスに明記されている（**資料 2-1-2**）。学生から，評価の適切性について，好評を得ている（**資料 2-1-3**）。

資料 2-1-1　成績評価基準

（成績の評価）
第 14 条　各授業科目の成績は，試験及びその他の審査により，優・良・可及び不可の４級で評価し，優・良・可を合格とし，不可を不合格とする。
２　前項の成績評価は，別表に掲げる基準により行う。
（追試験）
第 15 条　病気その他やむを得ない事情のため，正規の試験を受けることができなかった者は，追試験を受けることができる。
（転入学者の単位換算）
第 16 条　他の大学院から工学研究科の転入学をした者の当該大学院で修得した単位については，教授会が別に定めるところにより，工学研究科で修得した単位として扱う。

別表

評価	評価点	評　価　基　準
優	100 点～80 点	目標を十分に達成している。
良	79 点～70 点	目標を概ね達成している。
可	69 点～60 点	目標を最低限達成している。
不可	59 点～ 0 点	目標を達成していない。

（工学科研究科規程から抜粋）

資料 2-1-2　シラバスの例（繊維・高分子加工工学）

授業科目名	(83931) 繊維・高分子加工工学 ★マイシラバス	単位数	2
開講開始学期	後期 (1年、2年)	曜日／限目	月／5
授業区分	遠隔授業	科目授業種別	専門/大学院工学研究科/博士前期課程/繊維先端工学専攻
担当教員（E-mail、電話番号（内線）、研究室、オフィスアワー）			
田上　秀一			

授業概要

本講義ではプラスチックから製品や繊維を作る工程である「高分子成形加工」に焦点を絞り、高分子成形加工で見られる基本的な熱・流動問題について、「移動現象」の立場から解説し、演習を交えながら関連事項の基礎知識を修得することを目的とする。
主に高機能性繊維材料の創成と開発を基盤とした研究を行う上で必要な周辺学問の修得を目指すこととプレゼンテーション演習により，科学技術の進展などに柔軟に対応できる問題解決型の実践力をもった人材養成の教育を行うという本専攻の教育目標の達成を目指す。

到達目標

（1）繊維・高分子成形加工で見られる熱・流動について，理解している
（2）移動現象論の基礎知識を用いて，繊維・高分子成形加工の諸問題を解決できる
（3）繊維・高分子流体の特徴を念頭におきながら，繊維・高分子成形加工の諸問題の検討ができる

授業内容

おおむね以下の内容を扱う。進度によっては，内容や順番の変更をする場合がある。
第１回：なぜ繊維・高分子加工に移動現象が必要か？
第２回：粘性とニュートン流体
第３回：流体の基礎方程式（１）連続の式，運動方程式
第４回：流体の基礎方程式（２）エネルギ方程式
第５回：二重円筒間を通る流体の流れの解析
第６回：多層成形，フィルム成形概説
第７回：平行平板間多層流れの解析
第８回：高分子流体の流動挙動の特徴
第９回：非ニュートン流体の円管内流れの解析
第１０回：スクリュ押出機内の流れの解析
第１１回：レオロジー測定装置の概説
第１２回：キャピラリーレオメータの解析
第１３回：せん断流れにおけるせん断発熱
第１４回：各種成形加工法および成形加工に関するトピックスについて，題目決定と調査を行う。
第１５回：各種成形加工法および成形加工に関するトピックスについて，調査内容を発表する。

授業形式

授業形態は，板書やスライドを用いた講義を主とし，講義の内容に関する演習を適宜行う。演習の回答は，授業中に抽選で当たった受講生が発表し，内容の補足を教員が行う。授業の最後には，高分子成形加工に関する与えられた課題について調査し，PowerPointを用いたプレゼンテーションを行う。

成績評価の方法・基準

授業内で行う演習の評点(約60%)，プレゼンテーションの評点(約40%)により評価する。評価の割合は変わることがある。なお，単位修得には，以下の点を必須とする。（1）すべての演習を回答すること。（2）演習の回答の発表を行うこと。（3）第15回目のプレゼンテーション発表をすること。

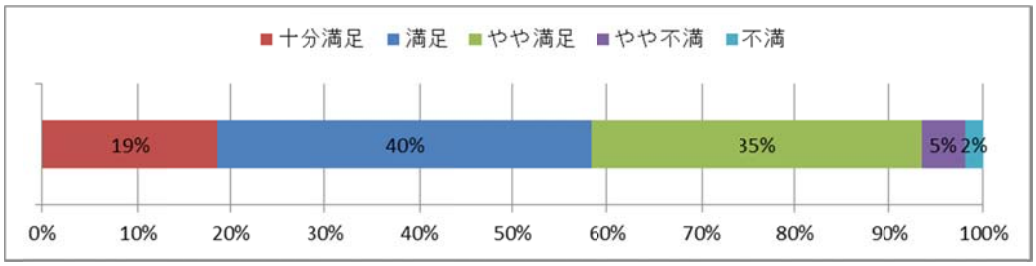
教科書・参考書等

参考書
・R. B. Bird, W. E. Stewart and E. N. Lightfoot, Transport Phenomena 2nd Ed., Wiley (2001)

（事務局資料）

資料 2-1-3　成績評価の適切性に対する学生の満足度

設問　成績の評価方法の適切性について，あなたはどの程度満足していますか。
⇒94%の回答者が「十分～やや満足」と答え，6 割近くは「十分満足～満足」と答えている。



※平成 27 年度福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査の結果から，前期課程修了予定者の回答を抽出（108 名）。

（事務局資料）

② 修士論文および博士論文の審査は厳格に行われ，合否が決定される（**資料 2-1-4，5**）。

資料 2-1-4　修士論文，博士論文の審査体制

■　修士論文

修士論文審査委員会を工学研究科前期課程の研究指導担当教員２名以上で構成し，この中には教授２名以上を含む。また，学位授与の審議を行うにあたり，各専攻は，審査委員会からの修士論文審査及び最終試験結果報告に基づき当該専攻学生の修士論文審査に係る確認を行うとともに，全専攻分は教務課において供閲し疑義の申し出を受け付けることにより，客観性，厳格生を確保している。なお，教授会での議決に先立ち代議員会において修了判定の実質審議が行われ，教授会にて最終的な合否を決定している。

■　博士論文

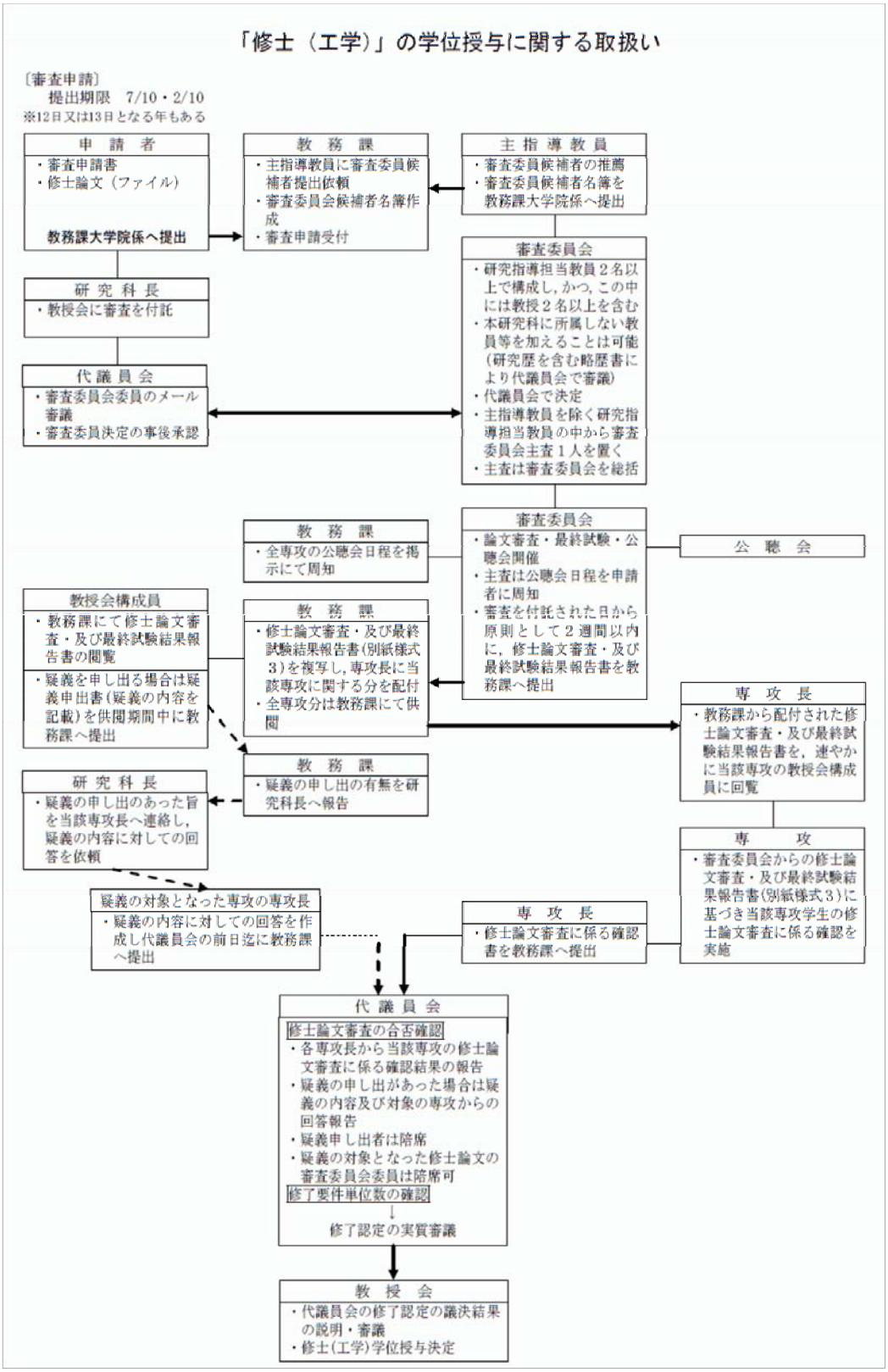
博士論文審査の申請に当たり，当該論文の内容が申請に値するか否かを事前に幅広い視点からチェックするために，当該講座において予備審査を行っている。さらに，博士論文の審査委員会を工学研究科博士後期課程の研究指導担当教員から主指導教員を含む３名以上，かつ，教授３名以上で構成し，審査委員会の主査は主指導教員を除く委員から選出することにより，客観性，厳格性を確保している。

また，審査委員会は公聴会を開催し博士論文の審査及び最終試験を行い，審査結果に基づき当該講座会議において実質審議を行っている。その後，「博士論文審査及び最終試験結果報告書」に基づき博士後期課程代議員会及び博士後期課程委員会において審議し，投票により最終的な合否を決定している。

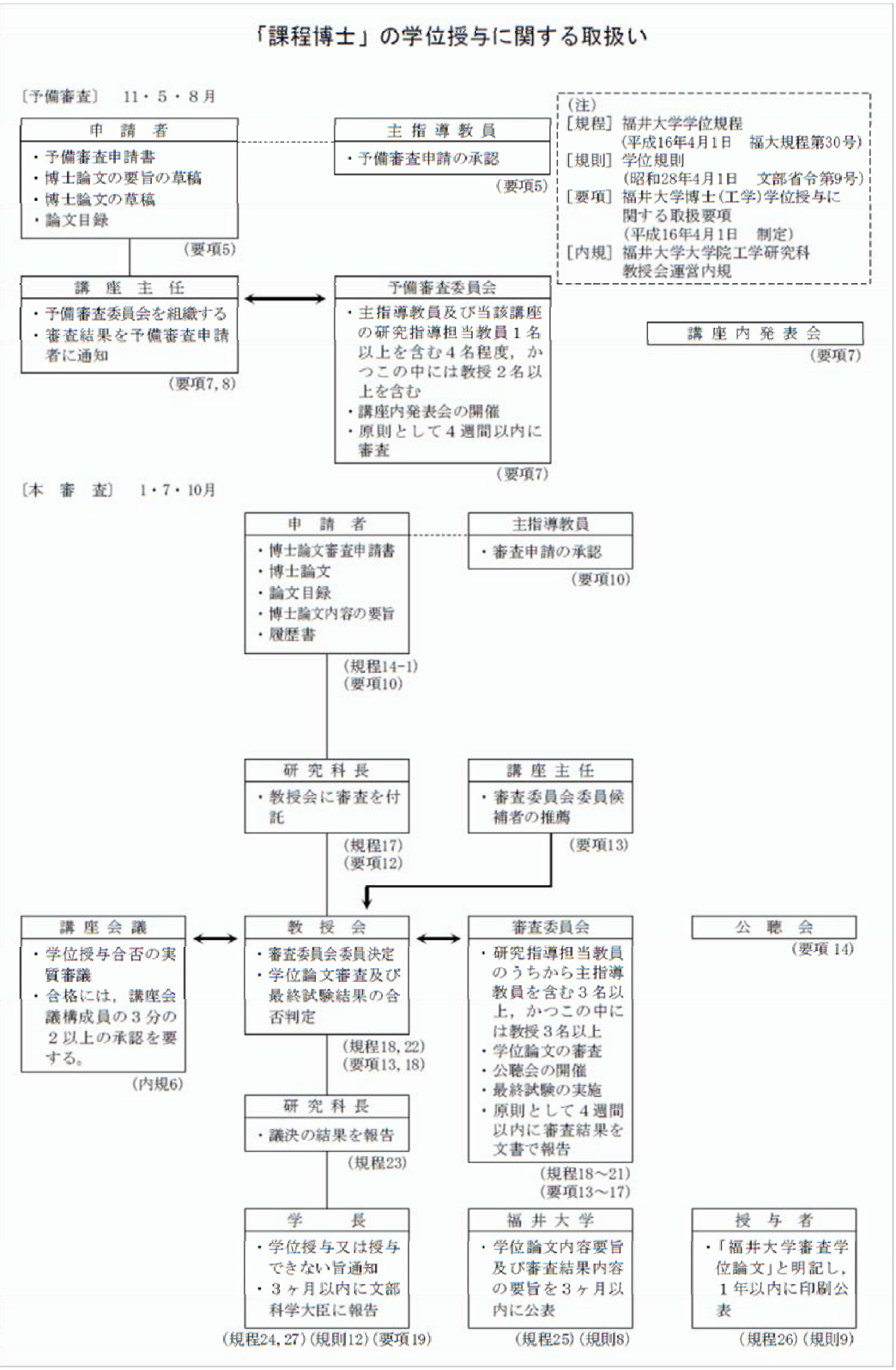
（事務局資料）

資料 2-1-5　学位授与までの流れ

■　修士（工学）



■　博士（工学）



（工学研究科規則集から抜粋）

【単位取得・成績・学位授与状況】

① 単位修得率は9割を超え，修得単位の多くは「優」である（**資料 2-1-6**）。これは学業の到達度が高いことの証左である。

資料 2-1-6　成績分布および単位修得状況

課程	入学年度	開講年度	優 100～80	良 79～70	可 69～60	不可 59～0 （不受を含む）	単位修得率
博士前期課程	平成 24 年度	H24～25	3,083	268	104	350	90.8%
博士後期課程	平成 23 年度	H23～25	33	0	0	1	97.1%

※数値は各入学年度の学生が卒業（修了）するまでに履修登録した科目のうち，優～不可の各段階に評価された科目数及び単位を修得した科目の割合を示す。

（事務局資料）

② 前期課程のほとんどの学生は標準修業年限内に修了して，修士（工学）の学位を取得している（**資料 2-1-7**）。後期課程では，社会人も在籍しているため，標準修業年限内での修了率は第２期の平均で約 44%であるが，退学率は 10%程度であり，入学者の多くは修了している（**資料 2-1-7，8**）。

資料 2-1-7　標準修業年限内の修了率及び標準修業年限×1.5 年内の修了状況

■　前期課程（標準修業年限２年）

入学年度	入学者数(a)	標準修業年限内 修了者数(b)	(b)の修了率 (b/a)	標準修業年限× 1.5 年内 修了者数(c)	(c)の修了率 (c/a)
平成 21 年度	241	209	86.7%	216	89.6%
平成 22 年度	315	285	90.5%	291	92.4%
平成 23 年度	307	262	85.3%	271	88.3%
平成 24 年度	257	227	88.3%	235	91.4%
平成 25 年度	256	216	84.4%	221	86.3%
平成 26 年度	290	258	89.0%		
平均	278	243	87.4%	247	89.8%

※長期履修制度適用者含む。 (c)および(c)の修了率は，平成 25 年度までの平均値。

■　後期課程（標準修業年限３年）

入学 年度	入学者数(a)	標準修業年限内 修了者数(b)	(b)の修了率 (b/a)	標準修業年限× 1.5 年内 修了者数(c)	(c)の修了率 (c/a)
平成 20 年度	21	12	57.1%	16	76.2%
平成 21 年度	25	15	60.0%	18	72.0%
平成 22 年度	38	15	39.5%	17	44.7%
平成 23 年度	28	11	39.3%	11	39.3%
平成 24 年度	20	7	35.0%	14	70.0%
平成 25 年度	30	9	30.0%		
平均	27	12	44.4%	15	57.7%

※長期履修制度適用者含む。(c)および(c)の修了率は，平成 25 年度までの平均値。

（事務局資料）

資料 2-1-8　留年率，退学率，休学率

■　留年率

年度	22 年度			23 年度			24 年度			25 年度			26 年度			27 年度			6 年間平均
課程	学生数	留年者	留年率	学生数	留年者	留年率	学生数	留年者	留年率	学生数	留年者	留年率	学生数	留年者	留年率	学生数	留年者	留年率	留年率
博士前期課程	567	22	3.9 %	637	23	3.6 %	571	27	4.7 %	536	24	4.5 %	557	21	3.8 %	575	20	3.5%	4.0 %
博士後期課程	87	7	8.0 %	85	7	8.2 %	75	9	12.0 %	79	6	7.6 %	99	19	19.2 %	115	29	25.2 %	14.3 %

■　退学率

年度	22 年度			23 年度			24 年度			25 年度			26 年度			27 年度			6 年間平均
課程	学生数	退学者	退学率	学生数	退学者	退学率	学生数	退学者	退学率	学生数	退学者	退学率	学生数	退学者	退学率	学生数	退学者	退学率	留年率
博士前期課程	567	10	1.8 %	637	28	4.4 %	571	17	3.0 %	536	31	6.2 %	557	23	4.1 %	575	22	3.8%	3.8 %
博士後期課程	87	12	13.8 %	85	5	5.9 %	75	8	10.7 %	79	11	13.9 %	99	7	7.1 %	115	10	8.7%	9.8 %

■　休学率

年度	22 年度			23 年度			24 年度			25 年度			26 年度			27 年度			6 年間平均
課程	学生数	休学者	休学率	学生数	休学者	休学率	学生数	休学者	休学率	学生数	休学者	休学率	学生数	休学者	休学率	学生数	休学者	休学率	休学率
博士前期課程	567	21	3.7 %	637	31	4.9 %	571	29	5.1 %	536	27	5.0 %	557	26	4.7 %	575	23	4.0 %	4.6 %
博士後期課程	87	15	17.2 %	85	18	21.2 %	75	16	21.3 %	79	21	26.6 %	99	15	15.2 %	115	17	14.8 %	18.9 %

（事務局資料）

【学修成果】

① 調査結果は，前期課程の修了予定者の多くが，目的とする能力等を修得できたことを裏付けている（**P7-146 後掲資料 2-1-12**）。学生，教員ともに大多数が教育・研究指導を高く評価している（**P7-58 前掲資料 1-1-54**）。

② 後期課程においては，平成 25 年度からの新しいコースワークにより学際性や広い視野が涵養されている（**P7-104 前掲資料 1-2-13**）。

③ GP 等の外部資金によって開始した優れた取組（**P7-5 前掲資料 1-1-3**）などにより，それぞれの目的に沿う学修成果があがった（**P7-11 前掲資料 1-1-6，7，P7-108 前掲資料 1-2-16，P7-110 前掲資料 1-2-18，P7-121 前掲資料 1-2-25**）。

④ 福井大学グローバル・コンピテンシー・モデルによる検証の結果，海外体験を積んだ学生のジェネリック・スキルが向上し，特に国際的研究体験を積んだ学生のプロフェッショナル・スキルが向上した（**P7-115 前掲資料 1-2-21**）。

●資格取得状況，学外の語学など試験の結果，学生が受けた様々な賞の状況から判断される学習成果の状況

【学生の研究実績】

多くの大学院生が論文発表等を行い，受賞者もいる（**資料2-1-9，10**）。大学院生が筆頭著者でインパクトファクターの高い雑誌に掲載された論文もある（**資料2-1-11**）。これらのことは，大学院生が十分な学力と高い研究能力を身につけた証左である。

資料2-1-9　大学院生の論文発表（平成27年度）

筆頭著者が学生		左記以外		国際学会での発表数	上記以外での発表数
査読付論文数	上記以外の論文数	査読付論文数	上記以外の論文数		
55	21	32	10	65	282

（事務局資料）

資料 2-1-10　大学院生の受賞（平成 27 年度）

専攻	学年	受賞内容
原子力・エネルギー安全工学専攻	博士前期課程２年	米国機械学会圧力容器配管強度に関する国際会議PVP2015学生セッション第１位 ASME Pressure Vessel & Piping Conference (PVP2015) (1st prize Rudy Scavuzzo student paper symposium and 23rd annual student paper competition)
建築建設工学専攻	博士前期課程２年	日本建築学会北陸支部若手優秀プレゼンテーション賞
材料開発工学専攻 総合創成工学専攻(分子工学講座)	博士前期課程１年, 博士後期課程１年	14th Symposium on chemical approaches to chirality, Best poster award
生物応用化学専攻	博士前期糧夫２年	日本生化学会北陸支部会「学生ベスト発表賞」
総合創成工学専攻(電子システム講座)	博士後期課程３年	IEEE PES Japan Chapter 2015年学生優秀論文賞
総合創成工学専攻(電子システム講座)	博士後期課程３年	IEEE Nagoya Chapter 2015年度国際会議研究発表賞
生物応用化学専攻	博士前期課程１年	平成 27 年度有機合成化学北陸セミナー 優秀発表賞
総合創成工学専攻(電子システム講座)	博士後期課程１年	平成27年度電子情報通信学会北陸支部優秀学生賞

情報・メディア工学専攻	博士前期課程２年	平成27年度映像情報メディア学会北陸支部優秀学生賞
情報・メディア工学専攻	博士前期課程１年	平成27年度電子情報通信学会北陸支部優秀論文発表賞
情報・メディア工学専攻	博士前期課程２年	平成27年度電子情報通信学会北陸支部優秀論文発表賞
総合創成工学専攻（物理工学講座）	博士後期課程２年	第 38 回（2015 年春季）応用物理学会「講演奨励賞」
原子力・エネルギー安全工学専攻	博士前期課程２年	情報処理学会北陸支部優秀学生賞
機械工学専攻	博士前期課程１年	Best poster award （4th Asian Symposium on Materials and Processing (ASMP2015)）



米国機械学会圧力容器配管強度に関する国際会議 PVP2015 学生セッション第１位で表彰された学生と表彰状，表彰式の様子。

（事務局資料）

資料 2-1-11　インパクトファクターの高い雑誌に掲載された大学院生が筆頭著者の論文の例

・Watanabe K, Kuwata N, SakamotoH, Amano Y, Satomura T, Suye S, “A smart DNA sensing system for detecting methicillin-resistant Staphylococcus aureus using modified nanoparticle probes.” Biosensors and Bioelectronics 67, 419-423 (2015).
筆頭著者（大学院生）の所属：繊維先端工学専攻，掲載雑誌のインパクトファクター：**7.476**

・Hou Y, Aoki K J, Chen J, Nishiumi T, “Solvent variables controlling electric double layer capacitance at the metal-solution interface.” The Journal of Physical Chemistry C 118(19), 10153-10158 (2014).
筆頭著者（大学院生）の所属：物質工学専攻，掲載雑誌のインパクトファクター：**4.772**

・Zhao X, Aoki K J, Chen J, Nishium T, “Examination of the Gouy-Chapman theory for double layer capacitance in deionized latex suspensions.” RSC Advances 4(108), 63171-63181 (2014).
筆頭著者（大学院生）の所属：物質工学専攻，掲載雑誌のインパクトファクター：**3.84**

・Mano Y, Kobayashi T, Nakayama J, Uchida H, Oki M, “Single cell visualization of yeast gene expression shows correlation of epigenetic switching between multiple heterochromatic regions through multiple generations.” PLOS Biology 11(7), e1001601 (2013).
筆頭著者（大学院生）の所属：物質工学専攻，掲載雑誌のインパクトファクター：**11.771**

・Kuraishi T, Uchimura T, “Resonance-enhanced multiphoton ionization/time-of-flight mass spectrometry for sensitive analysis of product ions formed by online concentration from analyte adsorption/laser desorption.” Analytical Chemistry 85(7), 3493-3496 (2013).
筆頭著者（大学院生）の所属：材料開発工学専攻，掲載雑誌のインパクトファクター：**5.825**

・Hasan M T,Asano T, Tokuda H, Kuzuhara M, “Current collapse suppression by gate field-plate in AlGaN/GaN HEMTs.” IEEE Electron Device Letters 34(11), 1379-1381 (2013).
筆頭著者（大学院生）の所属：システム設計工学専攻，掲載雑誌のインパクトファクター：**3.023**

・Zhang C, Aoki K J, Chen J, Nishiumi T, “Blocking of two-electron reduction of non-charged species in the absence of supporting electrolyte at nanoelectrodes.” Journal of Electroanalytical Chemistry 708, 101-107 (2013).
筆頭著者（大学院生）の所属：物質工学専攻，掲載雑誌のインパクトファクター：**2.871**

・Amin M F, Savitha R, Amin M I, Murase K, “Orthogonal least squares based complex-valued functional link network.” Neural Networks 32, 257-266 (2012).
筆頭著者（大学院生）の所属：システム設計工学専攻，掲載雑誌のインパクトファクター：**1.972**

（事務局資料）

●学業の成果の達成度や満足度に関する学生アンケート調査結果とその分析結果

【学生アンケートの内容】

平成 27 年度に学生を対象に満足度調査を実施した。能力等の修得状況を尋ねた 19 項目中 17 項目について，博士前期課程修了予定の回答者の 90%以上が「十分～ある程度身についた」と回答し，かつその割合は第１期より高い（**資料 2-1-12**)。「外国語コミュニケーション能力」に関しては第１期からの顕著な伸びが確認でき，GGJ 事業によるグローバル人材育成の成果があがった。発想力や文章作成・表現力についても「十分～ある程度身についた」と回答した学生の割合が第１期より８%程度高い。

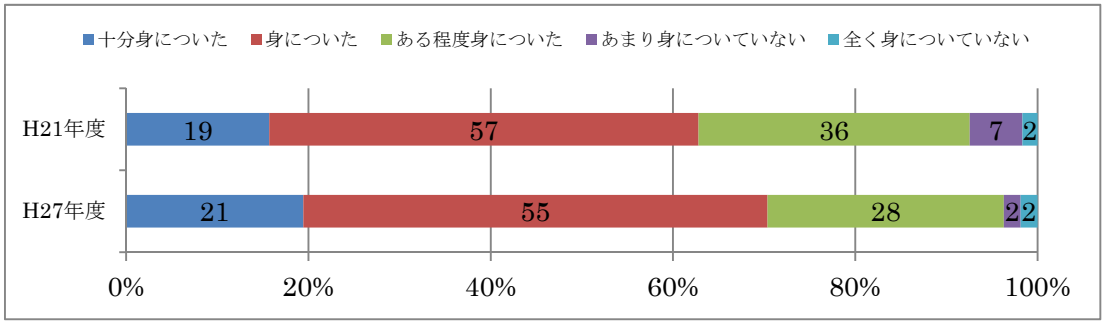
第１期の高い水準をさらに上回るこれらの結果は，学生・保護者の能力涵養の期待に充分に応えており，優れた大学院教育を行っていることの証左である。

資料 2-1-12　「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」の結果（抜粋）

平成 21 年度と平成 27 年度に実施した「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」の結果から，前期課程修了予定者の回答を抽出し，また能力等の涵養状況を尋ねた 19 項目のうち９項目に絞り，以下に示す。

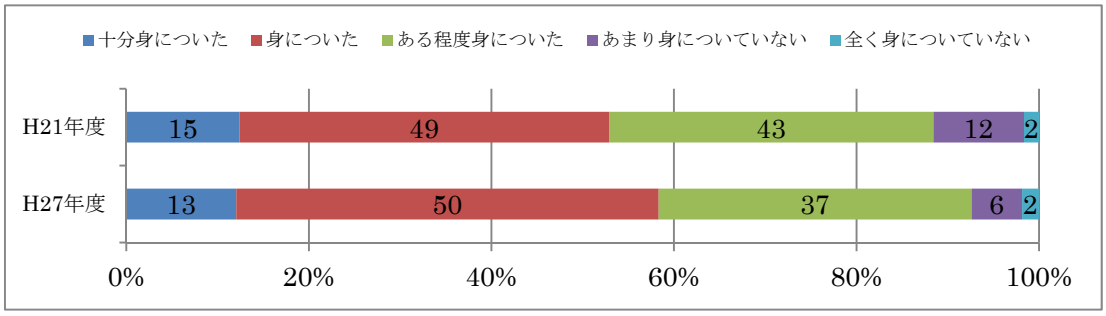
設問：あなたは福井大学で学習や研究をすることによって専門知識や技術がどの程度身についたと思いますか。

⇒“「ある程度～十分」身についた”は H27 年度に 96.3%で，H21 年度より 3.7%増加。



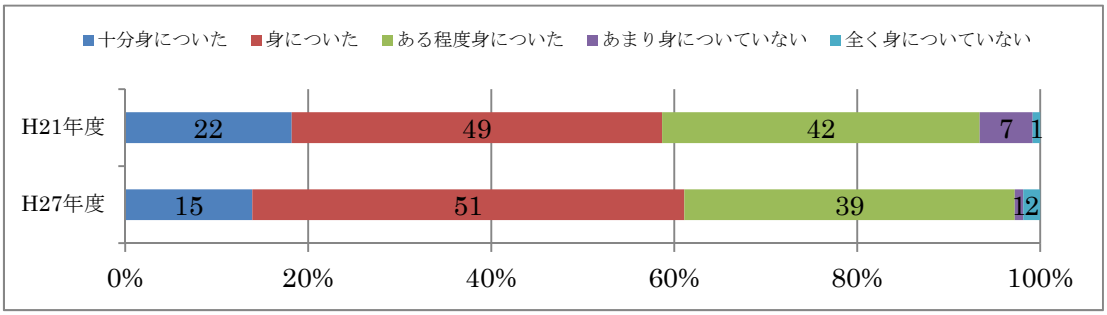
設問：あなたは福井大学で学習や研究をすることによって実践的な能力がどの程度身についたと思いますか。

⇒“「ある程度～十分」身についた”は H27 年度に 92.6%で，H21 年度より 4.2%増加。



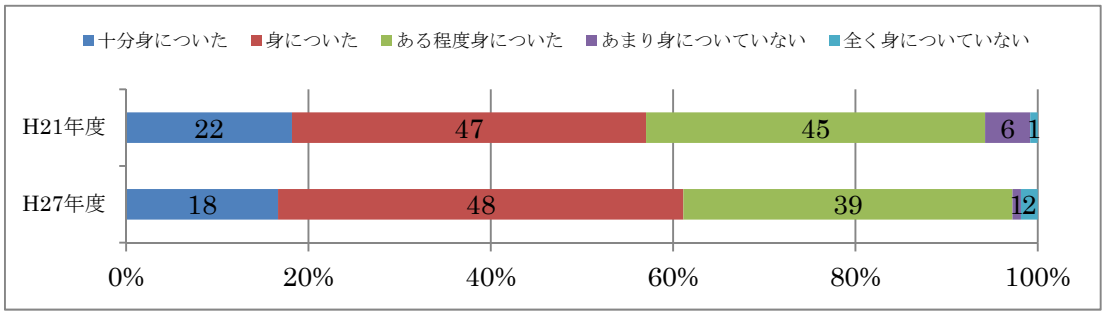
設問：あなたは福井大学で学習や研究をすることによって広い視野で物事を多面的に考える力がどの程度身についたと思いますか。

⇒“「ある程度～十分」身についた”は H27 年度に 97.2%で，H21 年度より 3.8%増加。



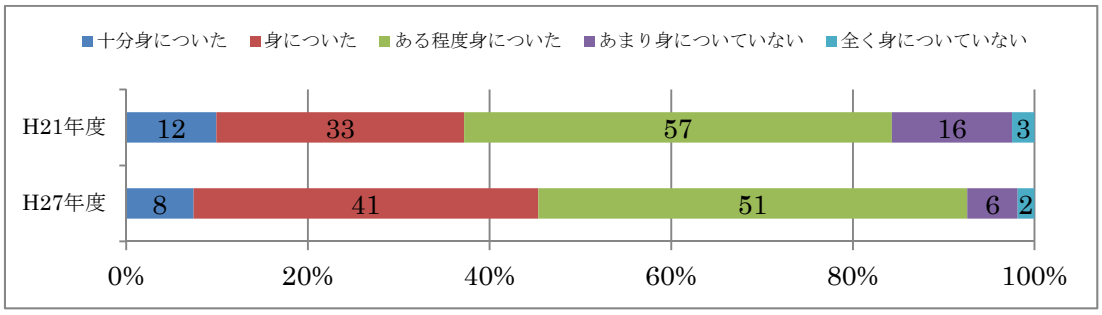
設問：あなたは福井大学で学習や研究をすることによって論理や証拠を重視し，それらに基づいて考える力がどの程度身についたと思いますか。

⇒“「ある程度～十分」身についた”は H27 年度に 97.2%で，H21 年度より 3.0%増加。



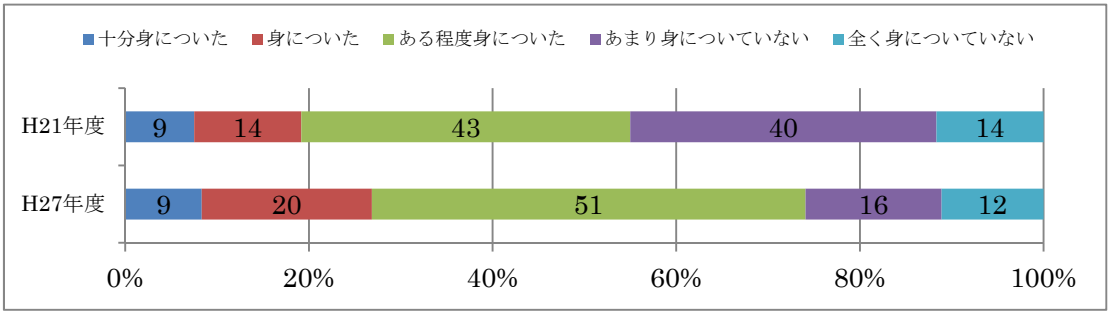
設問：あなたは福井大学で学習や研究をすることによって想像が豊かで，新しいアイデアや発想を生み出す力がどの程度身についたと思いますか。

⇒“「ある程度～十分」身についた”は H27 年度に 92.6%で，H21 年度より 8.3%増加。



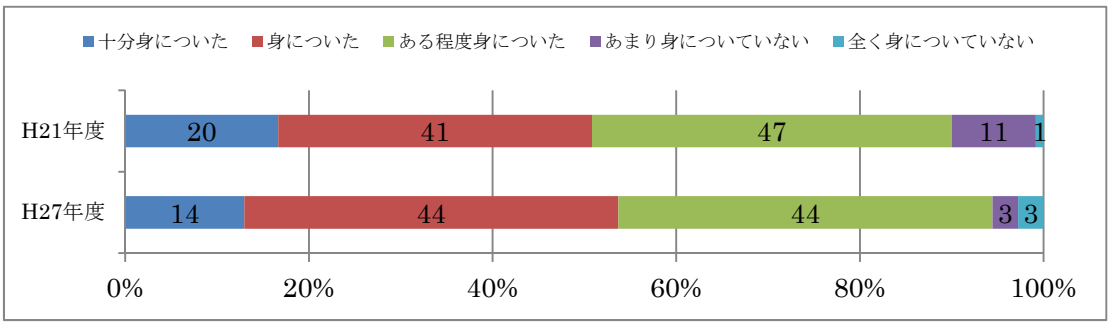
設問：あなたは福井大学で外国語でコミュニケーションをする力がどの程度身についたと思いますか。

⇒“「ある程度～十分」身についた”は H27 年度に 74.1%で，H21 年度より 19.1%増加。



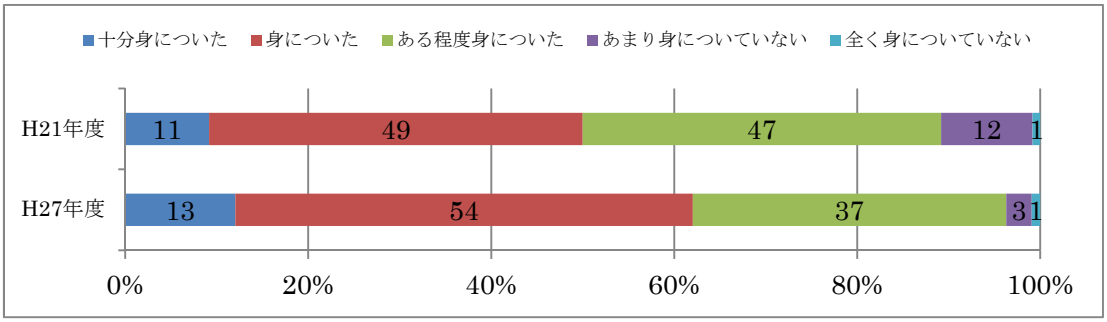
設問：あなたは福井大学で学習や研究をすることによってディスカッションやディベートをする力がどの程度身についたと思いますか。

⇒“「ある程度～十分」身についた”は H27 年度に 94.4%で，H21 年度より 4.4%増加。



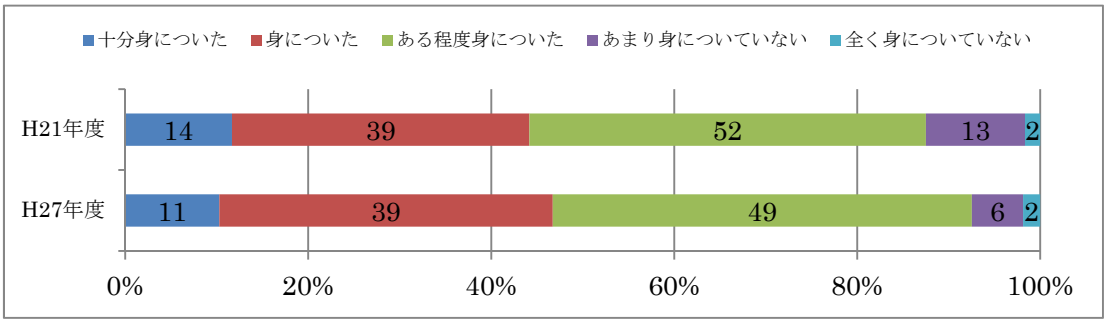
設問：あなたは福井大学で学習や研究をすることによって文章作成や文章表現の力がどの程度身についたと思いますか。

⇒“「ある程度～十分」身についた”は H27 年度に 96.3%で，H21 年度より 7.1%増加。



設問：あなたは福井大学で学習や研究をすることによって社会や技術の変化に対応する力がどの程度身についたと思いますか。

⇒“「ある程度～十分」身についた”は H27 年度に 92.5%で，H21 年度より 5.0%増加。



（グラフ中の数値は回答者数を示す）

（事務局資料）

（水準）　期待される水準を上回る

（判断理由）

①　修士・博士論文の審査や単位認定は厳格に行われている[1)]。単位修得率は 9 割を超え，評価の多くは「優」である[2)]。これは学業の到達度が高いことの証左である。前期課程のほとんどの学生は標準修業年限内に修了して，学位を取得している[3)]。後期課程での退学率は 10%程度であり，入学者の多くは修了している[4)]。

[1)] 資料 2-1-4　：修士論文，博士論文の審査体制　P7-138
資料 2-1-5　：学位授与までの流れ　P7-139
[2)] 資料 2-1-6　：成績分布および単位修得状況　P7-141
[3)] 資料 2-1-6　：成績分布および単位修得状況　P7-141
資料 2-1-7　：標準修業年限内の修了率及び標準修業年限×1.5 年内の修了状況　P7-141
[4)] 資料 2-1-8　：留年率，退学率，休学率　P7-142

②　多くの大学院生が論文発表等を行い，受賞者もいる[5)]。大学院生が筆頭著者でインパクトファクターの高い雑誌に掲載された論文もある[6)]。これらのことは，大学院生が十分な学力と高い研究能力を身につけた証左である。

[5)] 資料 2-1-9　：大学院生の論文発表（平成 27 年度）　P7-143
資料 2-1-10　：大学院生の受賞（平成 27 年度）　P7-143
[6)] 資料 2-1-11　：インパクトファクターの高い雑誌に掲載された大学院生が筆頭著者の論文　P7-145

③　平成 25 年度に学生を対象行った満足度調査で，能力等の涵養状況について，90%以上が「十分～ある程度身についた」と回答し，かつその割合は第１期より高い[7]。「外国語コミュニケーション能力」に関しては第１期から顕著に伸びた。第１期の高い水準をさらに上回るこれらの結果は，学生・保護者の期待に充分に応えており，優れた大学院教育を行っていることの証左である。

[7] 資料 2-1-12　:「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」の結果　P7-146

以上のように，大学院生の学業成果の状況は良好で，関係者の期待に十分応えており，期待される水準を上回る。

観点　進路・就職の状況

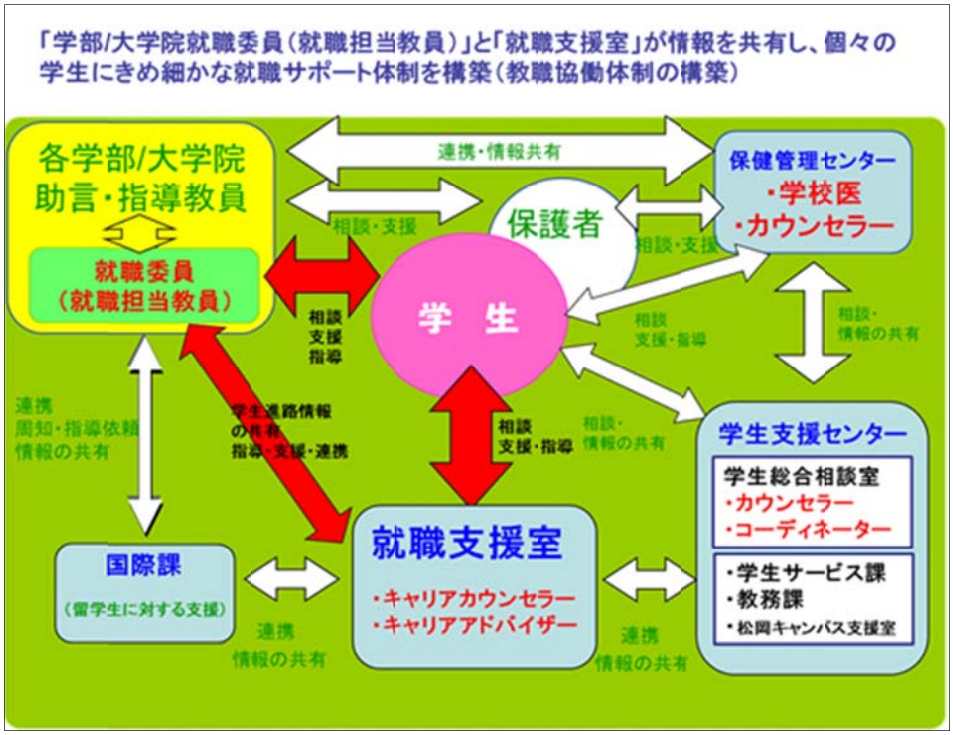
（観点に係る状況）

●進路就職状況，その他から判断される在学中の学業の成果の状況

【キャリア支援の例】

①　キャリア支援は，対外的にも高く評価されている全学的な体制（**資料 2-2-1**）のもとで行われ，携帯端末からも利用できる情報提供，就活サポーター（先輩学生）による相談・指導，地元企業の経営者との懇談会など多岐にわたっている（**資料 2-2-2**）。

資料 2-2-1　総合的なキャリア支援体制



※この取組実績が注目・評価され，平成 26 年８月の首相官邸での「まち・ひと・しごと創生に関する有識者懇談会」において取組の報告が行われた。

（事務局資料）

資料 2-2-2　就職支援室によるキャリア支援の例



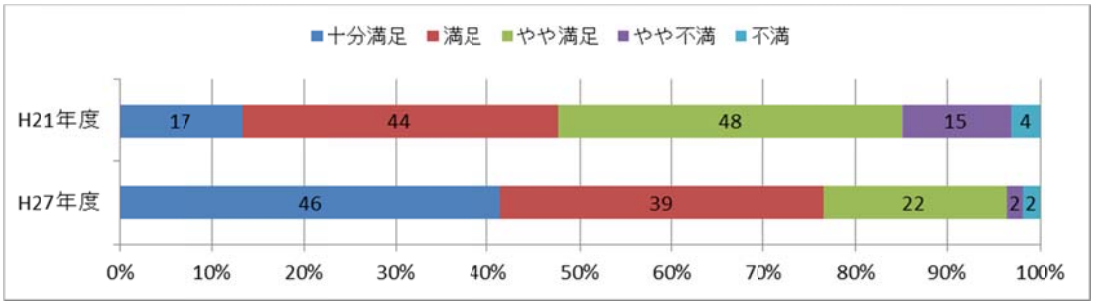
（事務局資料）

② 工学研究科には就職担当委員会が置かれ，就職支援室と連携して，進路相談，学内推薦状の決定，進路状況把握などの細やかな支援を行っている。キャリア支援に対する学生の満足度は高く，かつ第１期より向上した（**資料 2-2-3**）。

資料 2-2-3　就職支援に対する学生の満足度

設問：進学・就職支援（指導教員，就職支援室等）について，あなたはどの程度満足していますか。

⇒「十分～やや満足」と答えた回答者の割合は平成 27 年度には約 96%に達し，平成 21 年度より 11%高い。



（グラフ中の数値は回答者数を示す）

※平成 21 年度と平成 27 年度「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」の結果から，修了予定の前期課程学生と後期課程学生の回答を抽出（平成 21 年度 128 名，平成 27 年度 111 名）。

（事務局資料）

【就職率等】

前期課程では，第２期の平均就職率が第１期より 1.9%向上して 97.5%，平均進路決定率が第１期より 1.5%向上して 97.9%に達し，極めて良好である（**資料 2-2-4**）。

後期課程への進学率（第２期平均 4.5%）は，平成 25 年度に適正化された後期課程の定員(**P7-48 前掲資料 1-1-41**)および社会人･留学生等の入学実績(**P7-44 前掲資料 1-1-37**)を踏まえると，妥当である。

後期課程の第２期の平均就職率 96.5%は第１期とほぼ同じ高い水準である（**資料 2-2-5**）。

これら良好な進路状況は，高度専門技術者の育成に対する全ての関係者の期待に十分応えるものである。

資料 2-2-4　前期課程修了生の進学率・就職率・就職希望者就職率

年度	修了者 (A)	進学者 (B)	進学率 (B/A)	就職希望者 (C)	就職者 (D)	帰国等 (E)	修了者に対する就職率 (D/A)	就職希望者に対する就職率 (D/C)	修了者に対する進路決定率 ((B+D+E)/A)
平成 22 年度	224	17	7.6%	207	201	3	89.7%	97.1%	98.7%
平成 23 年度	290	10	3.4%	280	269	0	92.8%	96.1%	96.2%
平成 24 年度	271	10	3.7%	261	256	0	94.5%	98.1%	98.2%
平成 25 年度	237	12	5.1%	225	219	1	92.4%	97.3%	97.9%
平成 26 年度	225	9	4.0%	216	211	0	93.8%	97.7%	97.8%
平成 27 年度	265	9	3.4%	256	253	0	95.5%	98.8%	98.9%
第２期（H22～H27）平均			4.5%	第２期（H22～H27）平均			93.1%	97.5%	97.9%
第１期（H16～H21）平均			6.5%	第１期（H16～H21）平均			89.4%	95.6%	96.4%

（事務局資料）

資料 2-2-5　後期課程修了生の就職率・就職希望者就職率

年度	修了者 (A)	就職希望者 (B)	就職者 (C)	帰国等 (D)	修了者に対する就職率 (C/A)	就職希望者に対する就職率 (C/B)	修了者に対する進路決定率 ((C+ D)/A)
平成 22 年度	29	25	25	4	86.2%	100.0%	100.0%
平成 23 年度	25	25	25	0	100.0%	100.0%	100.0%
平成 24 年度	15	15	14	0	93.3%	93.3%	93.3%
平成 25 年度	14	14	14	0	100.0%	100.0%	100.0%
平成 26 年度	14	14	12	0	85.7%	85.7%	85.7%
平成 27 年度	18	18	18	0	100.0%	100.0%	100.0%
第２期（H22～H27）平均					94.2%	96.5%	96.5%
第１期（H16～H21）平均					95.7%	97.1%	97.7%

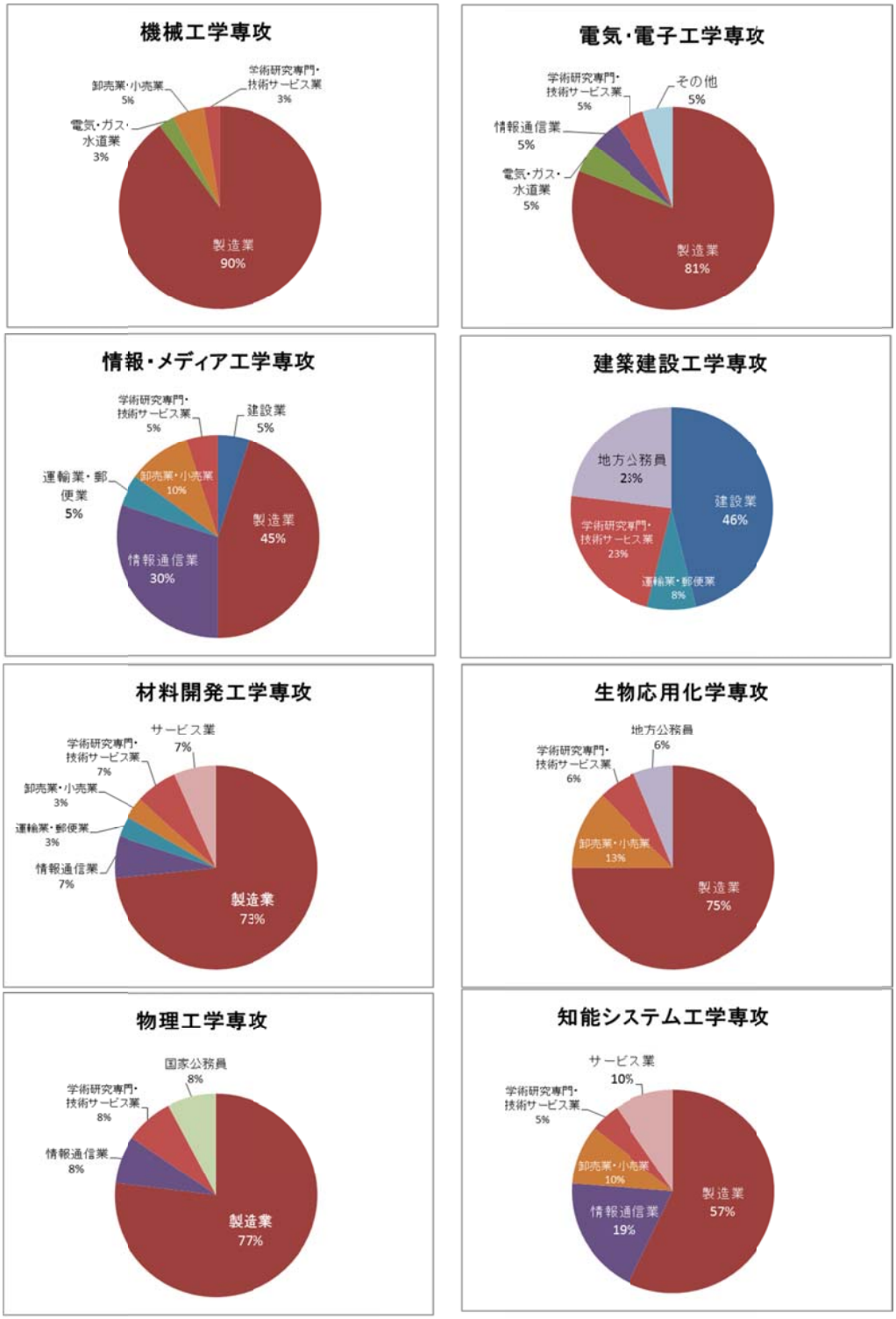
（事務局資料）

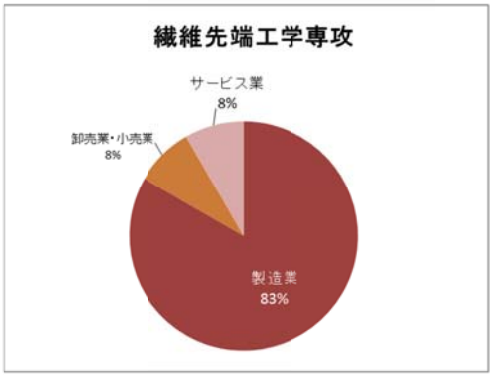
【就職先の特徴】

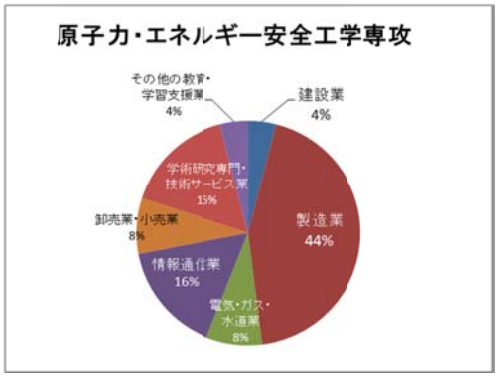
①　専攻の人材養成目的と就職先の業種・職種は整合している（**資料 2-2-6**）。

資料 2-2-6　大学院修了者の就職先（平成 27 年度）

■　前期課程







＜就職先企業の例＞

機械工学専攻：

アイシン・エィ・ダブリュ株式会社，日立造船株式会社，いすゞ自動車株式会社，福井鋲螺株式会社，株式会社福井村田製作所，ブラザー工業株式会社，前田工繊株式会社，マツダ株式会社，三菱重工業株式会社，村田機械株式会社

建築建設工学専攻：

株式会社伊藤工務店，大和ハウス工業株式会社，株式会社熊谷組，住友林業ホームテック株式会社，株式会社田村設計，東急リバブル株式会社，株式会社日立建設設計，三菱電気照明株式会社，福井市役所，株式会社サンワコン，株式会社ヒュージ，福井放送株式会社

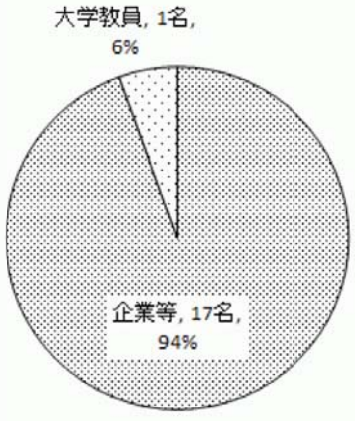
繊維先端工学専攻：

日信化学工業株式会社，サカエ理研工業株式会社，三和化工株式会社，株式会社島津製作所，トヨタ車体株式会社，ニチアス株式会社，日本毛織株式会社，ポリマー化成株式会社，ＹＫＫ株式会社

原子力・エネルギー安全工学専攻：

国立研究開発法人日本原子力研究開発機構，三菱電機株式会社，関西電力株式会社，東京電力株式会社，東芝プラントシステム株式会社，日本原子力発電株式会社，日本電産株式会社，株式会社福井村田製作所，株式会社シャルマン，株式会社ＴＡＳ，日本電産テクノモーター株式会社，株式会社松浦機械製作所，福井県庁，原子力規制庁

■　後期課程



企業等　福井県工業技術センター(2名)、京都大学ACT、国立大学法人東北大学、株式会社シー・シー・ユー、シャープ株式会社、大研化学製造販売株式会社、太平洋セメント株式会社、帝人ナカシマメディカル株式会社、National Center for Nuclear Safety and Radiation Control,Atomic Energy Authority,Egypt、国立研究開発法人日本原子力研究開発機構、日立電線株式会社、公益財団法人若狭湾エネルギー研究センター、社会人(2名)、帰国就職(2名)

教　員　大学教員（講師）

（事務局資料）

② 前期課程修了者の約 18%は県内企業等に就職しており，地元に対して第１期と同水準の安定した人材供給の役割を果たしている（**資料 2-2-7**）。後期課程修了者のほぼ全員が企業等に就職し（**資料 2-2-6**），その約３分の１は県内企業であり，地元産業の技術開発力の向上に貢献している（**資料 2-2-7**）。

以上の実績は，学生・保護者および県内企業を含む産業界等の期待に応えるものである。

資料 2-2-7　大学院生の福井県内への就職状況

■ 前期課程

年度	就職者	福井県内就職者数	福井県内への就職率
平成 22 年度	201	43	21.4%
平成 23 年度	270	43	15.9%
平成 24 年度	256	49	19.1%
平成 25 年度	219	37	16.9%
平成 26 年度	212	36	17.0%
平成 27 年度	253	42	16.6%
第２期６年間の平均			17.7%
第１期６年間の平均			17.8%

■ 後期課程

年度	就職者	福井県内就職者数	福井県内への就職率
平成 22 年度	25	9	36.0%
平成 23 年度	25	8	32.0%
平成 24 年度	14	7	50.0%
平成 25 年度	14	6	42.9%
平成 26 年度	12	2	16.7%
平成 27 年度	18	5	27.8%
第２期６年間の平均			34.3%
第１期６年間の平均			45.7%

（事務局資料）

●在学中の学業の成果に関する卒業・修了生及び進路先・就職先等の関係者への意見聴取等の結果とその分析結果

【工学研究科修了生に対するアンケート】

修了して数年経過した修了生に対してアンケート調査を行った結果，業務遂行上十分な水準の能力を身に付けさせるためには「英語の会話力をはじめとする国際的に活躍するコミュニケーション能力」等に関する教育を充実させることが必要との結果を得た（**資料 2-2-8**）。GGJ 事業および平成 25 年度改組よる新カリキュラムにより改善が図られ，成果があがった（**資料 2-2-9**）。

資料 2-2-8　「卒業生に対する大学教育に関するアンケート」

平成 26 年 11 月に工学部及び工学研究科自己点検・評価委員会が「卒業生に対する大学教育に関するアンケート」を実施した。工学研究科修了生の対象者は，平成 22 年度～平成 24 年度に修了した者。受けた教育内容が業務遂行上「十分か」を尋ねることにより，企業等において指導的な立場で活躍できる人材育成のためにさらに強化すべき教育の内容を探った。以下の回答結果は「業務上の十分性」から見た厳しい内容であるが，一方で就職先からの評価（**P7-159 後掲資料 2-2-10**）や長期インターンシップ先の評価（**P7-160 後掲資料 2-2-11**）は良好であり，これらを総合的に踏まえ，第３期における一層の教育改善に取り組む。

■　回答結果

	「十分」と回答した者の割合	「どちらとも言えない」と回答した者の割合	「不足」と回答した者の割合	（業務上の必要性が低いなどの理由により）「問とは無関係」あるいは「その他」と回答した者の割合
「課題の提案・報告などを効率的に記述し，説明する能力」に関して大学で受けた教育は，業務を遂行する上で十分でしたか？（回答者 81 名）	17.3%	34.6%	45.7%	2.5%
大学で身につけた「英語の会話力をはじめとする国際的に活躍するコミュニケーション能力」は，業務を遂行する上で十分ですか？（回答者 81 名）	3.7%	13.6%	54.3%	28.4%
「コンピュータ利用技術」に関して大学で受けた教育は，業務を遂行する上で十分ですか？（回答者 80 名）	26.3%	36.3%	35%	2.5%

（事務局資料）

資料 2-2-9　第２期に行った改善とその成果

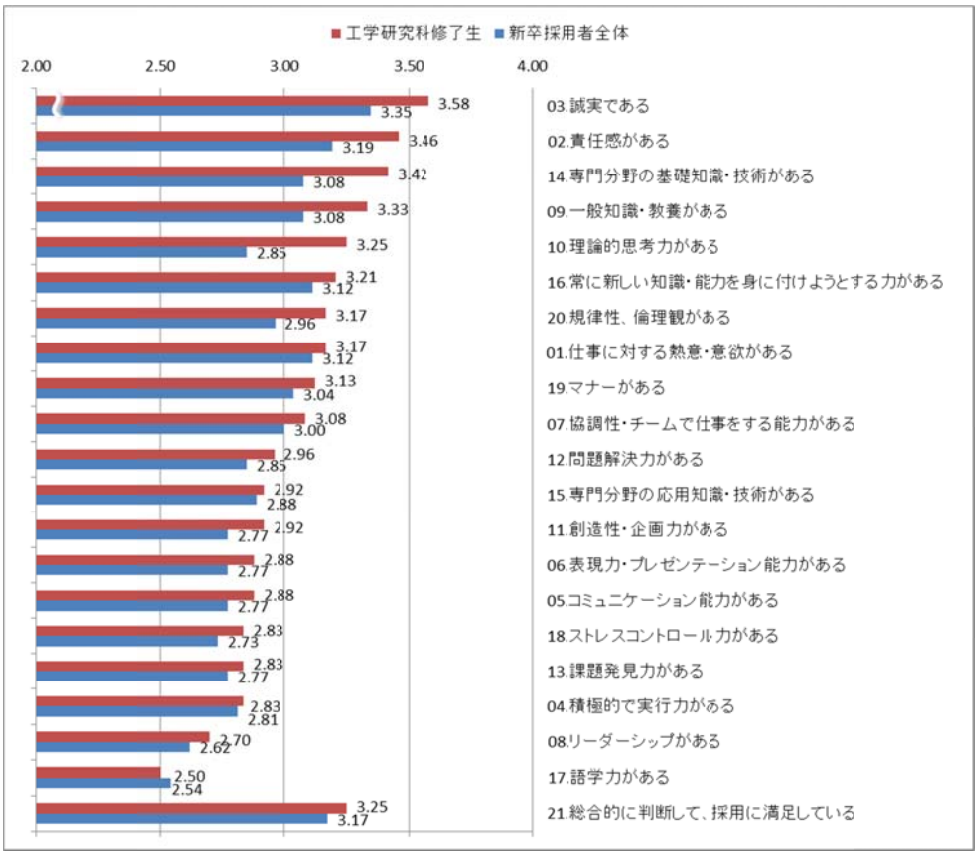
目的	改善の取組	成果
海外留学の促進によるグローバル人材育成および語学力の向上	GGJ 事業により，多数の海外派遣プログラムを開始し，グローバル人材育成を進めた（**P7-10 前掲資料 1-1-5**）。	多くの大学院生が海外派遣プログラムに参加し（**P7-11 前掲資料 1-1-6**），派遣によりコンピテシー（ジェネリックスキル，プロフェッショナルスキル）が向上（**P7-115 前掲資料 1-2-21**）。 外国語でコミュニケーションを行う能力が第１期より大幅に向上（学生の回答）（**P7-146 前掲資料 2-1-12**）。
学際性，幅広い視野，実践力などを備えた高度専門技術者の育成	平成 25 年度改組により，前期課程の各専攻に専門的内容の PBL 科目などを設置した（**P7-80 前掲資料 1-1-70**）。	実践的な能力などが第１期より向上（学生の回答）（**P7-146 前掲資料 2-1-12**）。
	文部科学省特別教育研究経費（平成 18 年度～平成 20 年度）の支援を受けた「創業型実践大学院工学教育」を自主財源で継続し，前期課程における MOT 教育を推進した（**P7-102 前掲資料 1-2-12**）。	全専攻から受講生が集まり，多くの学生が MOT 教育を受けた（**P7-102 前掲資料 1-2-12**）。 実践的な能力などが第１期より向上（学生の回答）（**P7-146 前掲資料 2-1-12**）。
	平成 25 年度改組において，後期課程のコースワークを見直し，学際性，広い視野，実践力にかかわる科目を全員に履修させ，産業界等で活躍できる博士人材の育成を進めた（**P7-90 前掲資料 1-2-5, P7-104 前掲資料 1-2-13**）。	実質化したコースワークにより，学際性，広い視野などの修得がすすみ，学生の好評を得た（**P7-104 前掲資料 1-2-13**）。
	平成 22 年度～平成 24 年度に，「産業現場に即応する実践道場」が文部科学省特別教育研究経費の支援を受け，その後も自主財源で継続し，技術経営とモノづくりが一体化したプログラムで後期課程における自律型産業人材の育成を進めた（**P7-102 前掲資料 1-2-12**）。	専門の壁を越えて受講生が集まり，社会人やポスドクとともに学ぶシステムのもと，現場に強い自律型産業人材が育成され，学生のみならず社会人からも好評を得た（**P7-102 前掲資料 1-2-12, P7-108 前掲資料 1-2-16, P7-113 前掲資料 1-2-20**）。

【就職先調査内容】

修了生の就職先に対して行った調査の結果，工学研究科修了生は採用者全体の中で高く評価されており（**資料 2-2-10**），高度専門技術者の育成に対する関係者の期待に十分応えている。

資料 2-2-10　「福井大学の教育と卒業生についてのアンケート調査」の結果

平成 25 年度に，「福井大学の教育と卒業生についてのアンケート調査」を行った。本学工学研究科修了生を工学系研究科修了生一般と比較するため，採用者（平成 21 年度～平成 25 年度）のうち本学修了生の出身が工学研究科のみである企業からの回答を抽出した（それらの企業に就職する院卒者は工学系研究科修了生が多いと考えられる）。調査した全項目において工学研究科修了生は採用者全体の中で高く評価されている。これは就職状況が極めて良好なことと整合している。



（事務局資料）

【長期インターンシップ先調査内容】

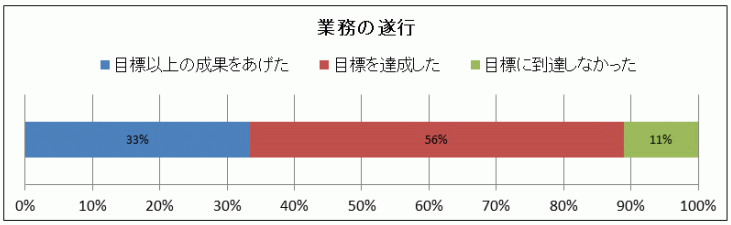
平成 23 年度～27 年度に長期インターンシップで 2 カ月程度学生を受け入れた企業は，学生の能力・資質等を高く評価している（**資料 2-2-11**）。

資料 2-2-11　長期インターンシップの受け入れ先企業に対して行ったアンケート

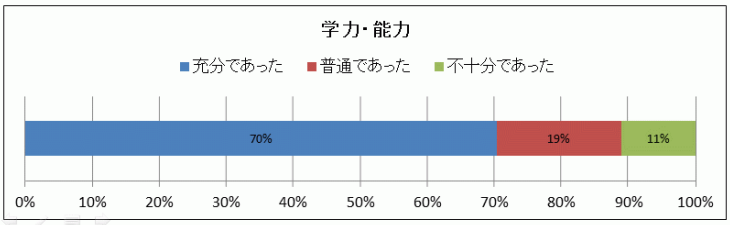
高度人材育成センター派遣型大学院工学教育部門は，長期インターンシップ（２カ月程度）で学生を受け入れた企業に対し，学生の能力・資質等についてアンケート調査を行っている。平成 23 年度～27 年度の受入れ企業等からの回答内容は総じて良好であり，業務の遂行（目標の達成），学力・能力，積極性，倫理感のいずれについても 7 割～ 9 割程度の回答が高い評価である。（回答総数 23）

■　アンケート結果

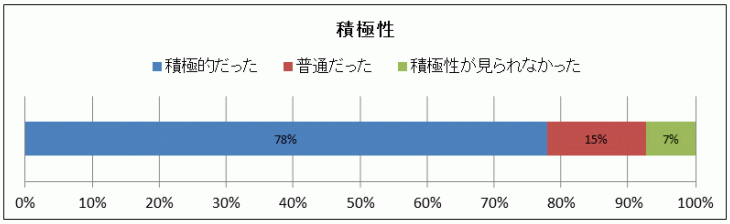
設問　長期インターンシップ生は，貴機関で想定されていた業務を滞りなく実行したでしょうか。



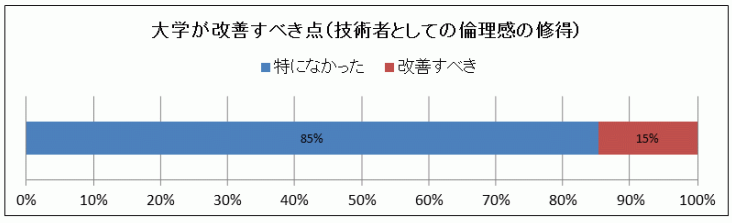
設問　貴機関で研修業務を遂行する上で，研修生の学力や能力は充分でしたか。



設問　長期インターンシップ生は，研修内容について積極的に挑戦していたでしょうか。



設問　大学では学べない職場での，技術者としての倫理感を修得させる上で，大学として改善すべき点はないですか。



（事務局資料）

（水準）　期待される水準を上回る

（判断理由）

①工学研究科には就職担当委員会が置かれ，就職支援室と連携して支援を行っている。キャリア支援に対する学生の満足度は高く，かつ第１期より向上した[1)]。

[1)] 資料 2-2-3　：就職支援に対する学生の満足度　P7-152

②前期課程では，平均就職率が第１期より 1.9%向上して 97.5%，平均進路決定率が第１期より 1.5%向上して 97.9%に達し極めて良好である[2)]。後期課程の第２期の平均就職率 96.5%は第１期とほぼ同じ高い水準である[3)]。

[2)] 資料 2-2-4　：前期課程修了生の進学率・就職率・就職希望者就職率　P7-153
[3)] 資料 2-2-5　：後期課程修了生の進学率・就職率・就職希望者就職率　P7-153

③専攻の人材養成目的と就職先の業種・職種は整合している[4)]。前期課程修了者の約 18%は県内企業等に就職しており[5)]，地元に対して人材供給の役割を果たしている。後期課程修了者は，ほぼ全員が企業等に就職して[4)]，その約３分の１は県内企業であり，地元産業の高度化に貢献している[5)]。以上の実績は，学生・保護者および県内企業を含む産業界等の期待に応えるものである。

[4)] 資料 2-2-6　：大学院修了者の就職先（平成 27 年度）　P7-154
[5)] 資料 2-2-7　：大学院生の福井県内への就職状況　P7-156

④平成 25 年度に修了生の就職先に対して行った調査の結果，専門知識や責任感等全ての調査項目において，工学研究科修了生は高く評価されている[6)]。また，平成 23 年度～27 年度に長期インターンシップで学生を受け入れた企業に対する調査でも，学生の能力・資質等が高く評価されており[7)]，高度専門技術者の育成に対する関係者の期待に十分応えている。

[6)] 資料 2-2-10　：「福井大学の教育と卒業生についてのアンケート調査」の結果　P 7-159
[7)] 資料 2-2-11　：インターンシップの受け入れ先企業に対して行ったアンケート　P7-160

以上のことから進路，進学状況は学生をはじめ全ての関係者の期待に十分応えるものであり，期待される水準を上回る。

Ⅲ 「質の向上度」の分析

（1）分析項目Ⅰ 教育活動の状況

① 平成 25 年度に大学院を改組し[1)]，学際性や実践力を重視したカリキュラムとした[2)]。特に後期課程では，企業で活躍できる高度専門人材育成にも十分に対応した教育課程が構築できた[3)]。このことは重要な質の変化である。

[1)] 資料 1-1-4	：工学研究科改組の概要（平成 25 年度） P7-8
[2)] 資料 1-2-5	：平成 25 年度改組における教育課程の体系性の確保 P7-90
資料 1-2-12	：産学官連携本部と連携した学際的実践教育プログラム P7-102
資料 1-2-14	：産業ニーズに対応した実践教育の構成 P7-106
資料 1-2-15	：産業界の声を反映する仕組みとそれによる改善の例 P7-107
[3)] 資料 1-2-7	：平成 27 年度教育課程表 P7-96

② GP 等の外部資金によって開始した取組を自主財源で継続実施[4)]して教育の基盤としつつ，平成 24 年度には，工学部・工学研究科を取組の中心部局として，GGJ 事業に東海・北陸地区の国立大学で唯一採択され[5)]，海外留学経験者が増大するなどグローバル化が一気に加速した[6)]。また，地域の主要産業である繊維と原子力に係る教育を，学内外の機関と協力して充実させた[7,8)]。このことは重要な質の変化である。

[4)] 資料 1-1-3	：高度人材育成センターと GP 事業等の継続実施 P7-5
[5)] 資料 1-1-5	：「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」事業への採択 P7-10
[6)] 資料 1-1-6	：海外短期インターンシップ P7-11
資料 1-1-7	：スプリングプログラム P7-13
資料 1-1-8	：専攻・学科単位での海外大学との定期的な交流活動 P7-15
[7)] 資料 1-1-20	：外部機関との覚書締結状況 P7-28
資料 1-1-21	：実施にあたり外部資金を活用した教育 P7-28
資料 1-1-22	：他機関の有する教育資源や施設を利用した実習教育と参加学生の声 P7-31
[8)] 資料 1-1-24	：繊維・ファイバー工学コースのカリキュラム P7-33
資料 1-1-25	：繊維系大学連合による「繊維・ファイバー工学コース」の特徴 P7-34
資料 1-1-26	：繊維・ファイバー工学コース実施の成果と評価 P7-35

（2）分析項目Ⅱ 教育成果の状況

① 多くの大学院生が論文発表等を行い[1)]，受賞者もいる[2)]。大学院生が筆頭著者でインパクトファクターの高い雑誌に掲載された論文もある[3)]。ほとんどの学生が能力等の涵養状況を肯定的に捉えており，その割合は第 1 期より高い[4)]。これらのことは，優れた大学院教育を行っていることの証左であるとともに，重要な質の変化である。

[1] 資料 2-1-9　：大学院生の論文発表（平成 27 年度）　P7-143
[2] 資料 2-1-10　：大学院生の受賞（平成 27 年度）　P7-143
[3] 資料 2-1-11　：インパクトファクターの高い雑誌に掲載された大学院生が筆頭著者の論文の例 P7-145
[4] 資料 2-1-12　：「福井大学の教育・研究に対する意識・満足度調査」の結果（抜粋）　P7-146

② 前期課程では，社会ニーズを踏まえて入学定員を増員した[5]平成 25 年度改組以降も良好な就職率・進路決定率が維持され，第２期の平均就職率・進路決定率が，良好であった第１期をさらに上回った[6]。後期課程では，養成する人材像の重点を“産業界等において指導的立場で活躍できる高度専門人材”へと移した[7]平成 25 年度改組を経て，第 1 期とほぼ同水準の平均就職率を維持した[8]。以上のことは，改組を経て，より社会ニーズに応えた人材育成が進んだことの証左であり，重要な質の変化である。

[5] 資料 1-1-40　：産業界からの前期課程入学定員増員の要望　P7-47
資料 1-1-41　：入学定員の見直し・適正化状況　P7-48
[6] 資料 2-2-4　：前期課程修了生の進学率・就職率・就職希望者就職率　P7-153
[7] 資料 1-2-5　：平成 25 年度改組における教育課程の体系性の確保　P7-90
[8] 資料 2-2-5　：博士後期課程修了生の就職率・就職希望者就職率　P7-153